

熊本県文化財調査報告 299 集

玉名平野条里跡 3
両迫間日渡遺跡 2
玉名の平城跡

県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査
県道 6 号（玉名立花線）拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査



熊本県教育委員会

2014

巻頭カラー 1
敷粗朶技法大哇畔

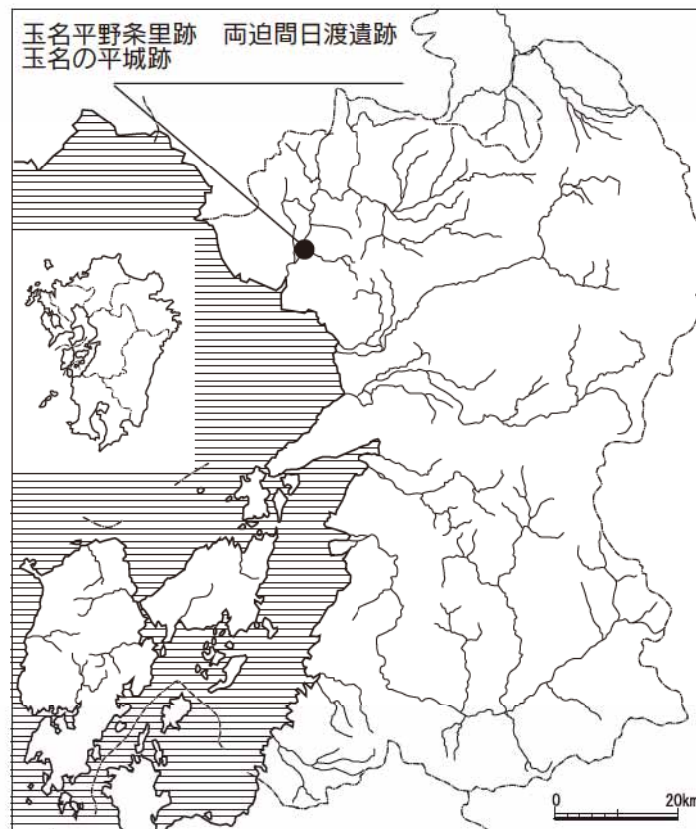


卷頭カラー 2
木樋



玉名平野条里跡 3 両迫間日渡遺跡 2 玉名の平城跡

－ 熊本県玉名市所在の埋蔵文化財 －



熊本県教育委員会

2014

序 文

熊本県教育委員会は、国道 208 号（玉名バイパス）の建設工事や九州新幹線の建設に伴い、玉名地域の調査を実施し、その結果、縄文時代の集落や弥生時代から古墳時代の集落、古代の集落、中世の区画溝や集落等を検出しました。

今回報告する玉名平野条里跡及び両迫間日渡遺跡は、木製短甲を出土し弥生時代の堰等が出土した柳町遺跡の北側に隣接する区域です。地形的には玉名平野でも低い地域ですが、調査の結果、各所の微高地から弥生時代から古墳時代の遺構を検出しました。特に西側の柳町遺跡に隣接する区域では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物や井戸等が重複して出土しています。玉名地域での古墳時代の始まりを解明する上で貴重な資料と云えます。

東側の玉杵名神社周辺では中世の墓地及び集落を検出しました。玉杵名神社周辺のやや高くなった隣接地には中世の集落がさらに広がっていることが解明できました。

様々な成果があった調査ですが、さらに特筆すべきは、玉名平野の開発の歴史の一端を紐解く弥生時代から中世までの各時代の水田面を検出したことです。その中でも特に弥生時代後期にさかのぼると推定できる水田面に伴う大畦畔や足跡等が見つかったことは、この地域の開発を考える上で貴重な発見と云えます。報告書が刊行されております玉名市教育委員会の調査の杭列や柳町遺跡の堰等は弥生時代中期以前の資料と併せて、弥生時代の水田技術の推移を考える資料であり、隣接地域に存在すると考えられる弥生時代前期の水田面の検出に迫るものと云えましょう。

記録保存という形ではありますが本報告が地域の発展とともに、将来、地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ、生かされていくことを望んでおります。

なお、本調査を実施するにあたり、御理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田崎 龍一

例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市両迫間・玉名に所在する玉名平野条里跡第3次・両迫間日渡遺跡第2次・玉名の平城跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県土木部道路整備課及び玉名地域振興局土木部の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部局が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成12年度から平成20年度まで実施し、整理報告作業を平成23年度から25年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の2万5千分の1地形図・玉名市教育委員会「両迫間日渡遺跡」掲載図面等をもとに作成した。
また遺跡の基準点測量及び水準測量は有明測量開発者・有限会社古家測量設計・坂井設計コンサルタント・株式会社パスコに委託して実施した。
- 6 現地での写真撮影は各調査員が行い、長谷部善一(参事)の協力を得た。遺構実測は現場作業員の

協力のもと各調査員が実施した。遺物の実測・製図は、坂本千恵・春川香子・出家麻里・濱崎清子・園田智子・山下義満が主に実施し、一部を(株)埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・(株)有明測量開発社の委託事業とした。遺物洗浄・接合・復元は、文化財資料室で行った。

遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・蓮池千恵が行い、一部、山下が行った。

- 7 自然科学分析(炭素同位体年代測定・花粉分析・樹種同定、種実同定等)は株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。
- 8 本書の執筆は第V章自然科学分析を、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム・株式会社パリノ・サーヴェイが行い、第II章遺跡の環境・第III章第3節基本土層・平成12・13年度(01-1～8区)の調査成果は亀田が、その他を山下が執筆した。
- 9 整理後の遺物・写真・図面等は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、坂本の援助を得て山下が担当した。

凡 例

- 1 方位/座標 国土座標第II系(日本測地系)を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区(第2・3図)の通りである。また玉名平野条里跡 THJ・両迫間日渡遺跡 RHH で簡略記号化した。
- 3 遺構名略号 次の通りである。SH SI; 住居・SA; 柵列・SB; 掘立柱建物・SK; 土墳墓; ST・土坑・SD; 溝・SE; 井戸・溝; SX; 不明遺構。
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海水面(Tokyo Peil [I.P.])による。
- 6 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。
- 7 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また攪乱および調査区範囲については一点破線で示した
- 8 遺構図版 木杭の断面については木目の方向で(斜線)で示している。これに該当しないものは各図

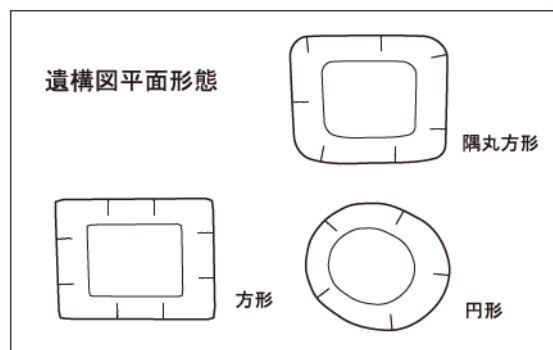
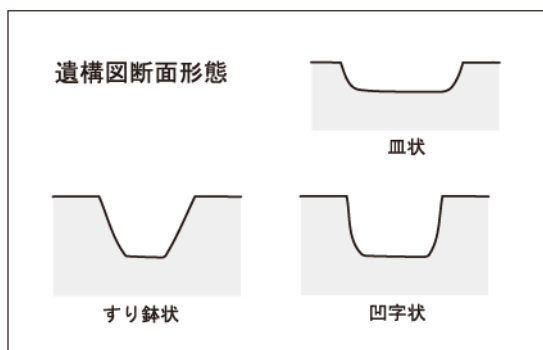
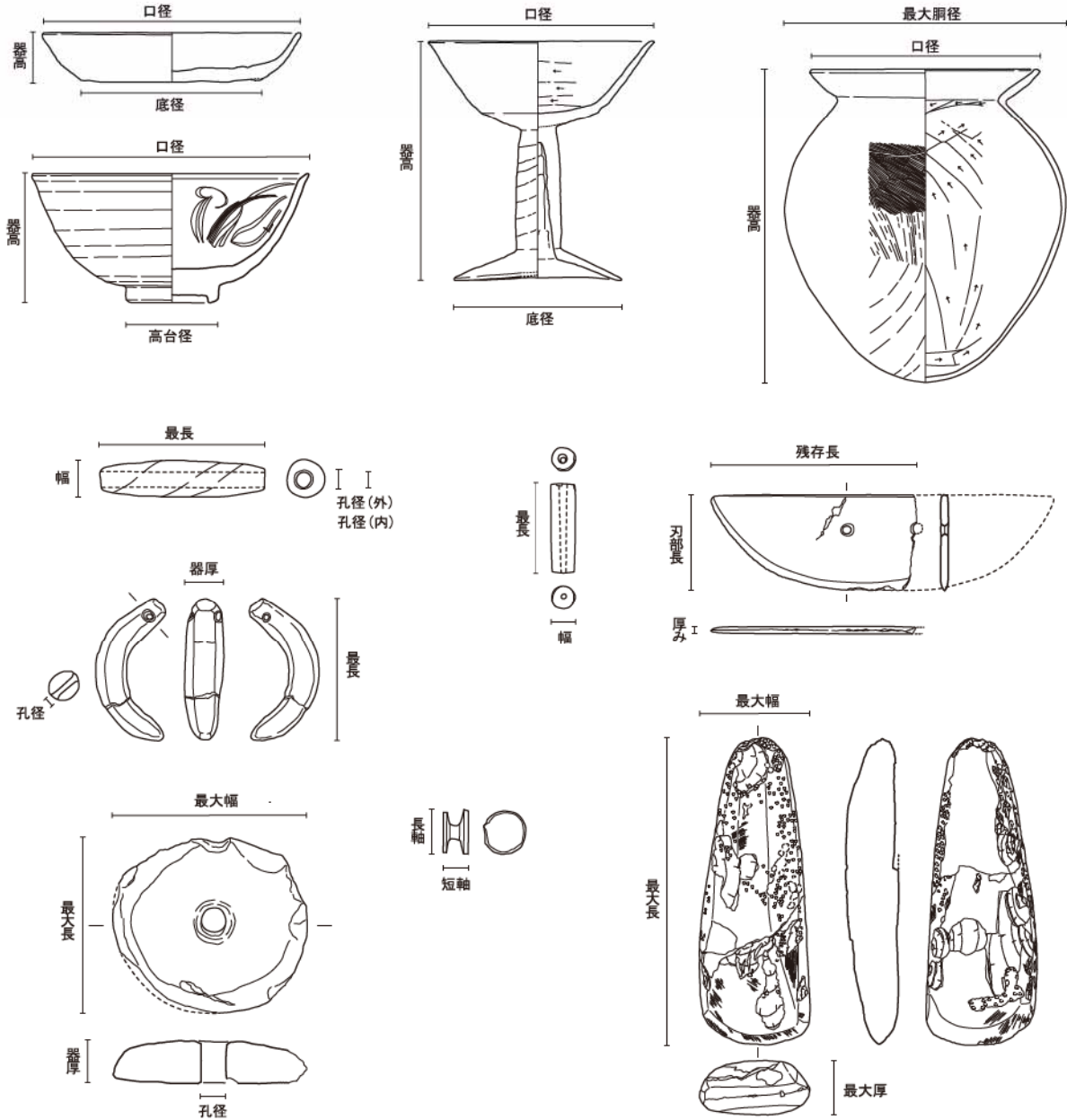
面上で凡例を示した。

- 9 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では — ラインの内側をポイントとしている。
- 10 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器は1/3、一部1/8で行い、石器は1/3、その他は1/2で掲載した。またこれに該当しないものは、その縮尺を図中に示した。
- 11 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。
- 12 遺物図版 土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。須恵器は断面を黒塗りしている。
- 13 接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。
- 14 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項

にて注記している。

15 色調 本書で用いた土壌・胎土色調名は、農林水産省技術事務局監修「新版 標準土色帳」を用いた。

陶磁器・玉類については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第2版（1986）を用いた。



本文目次

第I章 調査の経過	1	第VI章 遺物観察表・データ	402
第1節 調査に至る経緯と経過	1	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡	
第2節 調査の組織	1	遺物 1	
		(金属器・古銭・土錘・投石・種実) …	402
		遺物 2	
		(土器・石器 他) …	415
第II章 遺跡の環境	3	遺構 …	428
		玉名の平城跡	
		遺構・遺物 …	442
		植生 …	444
第III章 調査の概要	4		
第1節 調査区の位置	4	第VII章 総括	449
第2節 調査の概要	4	第1節 遺物	449
第3節 基本土層	5	第2節 結言	453
		1 本調査の調査法	453
第IV章 調査の成果	47	2 水田としての認識	453
第1節 縄文時代	47	3 弥生後期後半の水田概念	454
第2節 弥生時代	50	4 水田の広がり	459
第3節 古墳時代	70	5 条里制について	459
第4節 古代	71	6 地域の中での本遺跡	461
第5節 中世から近世	72		
第6節 時期不明	74		
第7節 玉名の平城跡	75		
第V章 自然科学分析	339		
第1節 人骨	339		
第2節 05- I -1 区 SX-03	344		
第3節 05- I -1 区・2 区	354		
第4節 05- I -1 区・2 区・05- II -2 区	366		
第5節 木樋 (SX-43)	375		
第6節 種実	392		

図 版 目 次

第 1 図	水田概念図及び擬似畦畔概念図…………… 8	第 34 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図及びコンタ図(縄文) …… 78
第 2 図	遺跡範囲図 1(熊本県遺跡地図) …… 9	第 35 図	玉名平野条里跡 01-3 区 3b 層遺構配置図(縄文) …… 79
第 3 図	遺跡範囲図 2(玉名市遺跡地図) 13～14	第 36 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-42・円形周溝状遺構実測図 …… 80
第 4 図	玉名平野条里跡 01-1～8 区 グリッド図…………… 16	第 37 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43 実測図 …… 81
第 5 図	玉名平野条里跡 01-2 区西壁土層柱状図・ 01-1 区トレンチ東壁土層断面図・SX-13・ 14 東壁土層断面図 …… 17	第 38 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 1 及び 出土遺物実測図…………… 82
第 6 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 柱状図・土層断面図…………… 18	第 39 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 2 …… 83
第 7 図	玉名平野条里跡 01-6 区土層柱状図・ トレンチ 1・2 土層図 …… 19	第 40 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-163 01-1・2 区 SD-07・08 実測図…………… 84
第 8 図	グリッド図 1 …… 20	第 41 図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 ST-01 実測図及び 出土遺物実測図(No. 3・4) 玉名平野条里 跡 07- III 区出土遺物実測図(No. 5) …… 85
第 9 図	グリッド図 2 …… 21	第 42 図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 北側流路土層断 面図及び出土遺物実測図…………… 86
第 10 図	グリッド図 3 …… 22	第 43 図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 11a 層 SD-13 実測図 …… 87
第 11 図	グリッド図 4 …… 23	第 44 図	調査区範囲図(S = 1/10000) …… 88
第 12 図	グリッド図 5 …… 24	第 45 図	玉名平野条里跡 01-1～8 区 遺構配置図(弥生) …… 89
第 13 図	グリッド図 6 …… 25	第 46 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図(弥生) …… 90
第 14 図	グリッド図 7 …… 26	第 47 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-34・SX-20 実測図及び出土遺物実測図…………… 91
第 15 図	グリッド図 8 …… 27	第 48 図	玉名平野条里跡 02- I 区 SH-01 実測図 …… 92
第 16 図	土層柱状図(2002～2008 年度) 1 …… 28	第 49 図	玉名平野条里跡 02- I 区 SH-02 実測図 …… 93
第 17 図	土層柱状図(2002～2008 年度) 2 …… 29	第 50 図	玉名平野条里跡 02- I 区 SH-01・02 遺物 出土状況及び出土遺物実測図…………… 94
第 18 図	基本土層図 1 …… 30	第 51 図	玉名平野条里跡 02- I 区 22 層遺構配置 図・SD-13・ST-03 実測図 …… 95
第 19 図	基本土層図 2 …… 31	第 52 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 SX-03～05 実 測図…………… 96
第 20 図	基本土層図 3 …… 32		
第 21 図	基本土層図 4 …… 33		
第 22 図	基本土層図 5 …… 34		
第 23 図	基本土層図 6 …… 35		
第 24 図	基本土層図 7 …… 36		
第 25 図	基本土層図 8 …… 37		
第 26 図	基本土層図 9 …… 38		
第 27 図	基本土層図 10 …… 39		
第 28 図	基本土層図 11 …… 40		
第 29 図	基本土層図 12 …… 41		
第 30 図	基本土層図 13 …… 42		
第 31 図	基本土層図 14 …… 43		
第 32 図	調査区範囲図(S = 1/10000) …… 76		
第 33 図	玉名平野条里跡 01-1～8 区 遺構配置図(縄文) …… 77		

第53図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 9 層・05- I -2 区 10b-1 層遺構配置図及 び出土遺物実測図…………… 97	第71図	玉名平野条里跡 06- III 区 SX-36・38・39・SK-06 実測図 …… 117
第54図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 9 層 05- I -2 区 10b 層コンタ図 … 98	第72図	玉名平野条里跡 07- III 区 遺構配置図及び SD-01 実測図…………… 118
第55図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03・小畦畔実測図 …… 99～100	第73図	玉名平野条里跡 07- IV 区 8 層コンタ図・SD-01 土層断面図及び出土 遺物実測図…………… 119
第56図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 拡張部実測図 …… 101	第74図	調査区範囲図 (S = 1/10000) …… 120
第57図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 水口・小畦畔実測図 …… 102	第75図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 古墳層…………… 121
第58図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 杭列出土状況及び出土遺物実測図 103～104	第76図	玉名平野条里跡 01-1～8 区 遺構配置図 (古墳上面) …… 122
第59図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 トレンチ土層断面図 …… 105	第77図	玉名平野条里跡 01-1～8 区 遺構配置図 (古墳下面) …… 123
第60図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 足跡位置図及び実測図…………… 106	第78図	玉名平野条里跡 01-2 区 SI-02・SK-18 実測図 …… 124
第61図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 足跡グループング図…………… 107	第79図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-103・104・107・141 実測図 …… 125
第62図	両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 10b 層 SX-01・02・SA-01 実測図及び出土 遺物実測図…………… 108	第80図	玉名平野条里跡 01-3 区 SX-136・161・SE-140 実測図 …… 126
第63図	玉名平野条里跡 05- III -1 区 8 層遺構配置図及び SD-01・02 実測図 109	第81図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 実測図 …… 127
第64図	玉名平野条里跡 05- III -2 区 6b 層遺構配 置図及び SD-03・04 実測図…………… 110	第82図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 上層遺物出土状況及び 出土遺物実測図…………… 128
第65図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 10a 層・10b 層 コンタ図及び出土遺物実測図…………… 111	第83図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 下層遺物出土状況 実測図…………… 129
第66図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 10b 層 SD-11・SX-21・22 実測図及び投石 出土位置実測図…………… 112	第84図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-53・SX-102 実測図及び出土遺物実測図…………… 130
第67図	玉名平野条里跡 06- II 区 7 層直上遺構配 置図及び SD-05 実測図…………… 113	第85図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-15・41 実測図 …… 131
第68図	玉名平野条里跡 06- II 区 SH-01・02・ SX-01 実測図 …… 114	第86図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-31・SK-27・SX-04-2 実測図及び出土遺 物実測図…………… 132
第69図	玉名平野条里跡 06- II 区 SH-01・02・SP-01～04・06・SK-01 実測 図及び出土遺物実測図…………… 115	第87図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-19・36 実 測図及び出土遺物実測図…………… 133
第70図	玉名平野条里跡 06- III 区 7a 層遺構配置図 …… 116	第88図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 実測図 …… 134

第 89 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 出土遺物実測図 …………… 135	第 105 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-153 実測図 …………… 151
第 90 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-115 実測図及び出土遺物実測図 … 136	第 106 図	玉名平野条里跡 01-7 区 SD-708 ～ 710・717・SK-713・715・716・ SX-718 実測図 …………… 152
第 91 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 実測図 …………… 137	第 107 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 2b 層遺構配置図及び SD-46・SX-47・61 実 測図…………… 153
第 92 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 1～6 層実測図 …………… 138	第 108 図	玉名平野条里跡 01-6 区 3a 層上面遺構配置図 …………… 154
第 93 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 8・9 層遺物出土状況及び出土遺物 実測図…………… 139	第 109 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-401～408・410 実測図 …………… 155
第 94 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 出土遺物実測図 …………… 140	第 110 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409・411～416・SP-418・420・421 実 測図…………… 156
第 95 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SK-101・SX-106・118・124～126・128・ 130・137 実測図 …………… 141	第 111 図	玉名平野条里跡 01-8 区 3 層上面遺構配置図 …………… 157
第 96 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (古墳) …………… 142	第 112 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SX-802・805・808・829・SD-823・SP-809 ～813・P-3 実測図 …………… 158
第 97 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SD-03・25・28・29・SX-06・38 実測図及 び出土遺物実測図…………… 143	第 113 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SX-801・803・804・806・807 実測図 159
第 98 図	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SK-37・44・45・SX-04-1・35・39・SP-46 実測図…………… 144	第 114 図	玉名平野条里跡 01-6 区 4 層上面遺構配置図 …………… 160
第 99 図	玉名平野条里跡 01-3 区 2b・2c 層遺構配置図 (古墳) …………… 145	第 115 図	玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409A・B・SX-422～425 実測図 … 161
第 100 図	玉名平野条里跡 01-3 区 SD-117・129・131～134 実測図及び出土 遺物実測図…………… 146	第 116 図	玉名平野条里跡 01-8 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図 …… 162
第 101 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 3a 層～3b 層遺 構配置図及びコンタ図…………… 147	第 117 図	玉名平野条里跡 01-8 区 SD-822・SK-832・SX-821・824・825・ 828・SI-831 実側図 …………… 163
第 102 図	玉名平野条里跡 01-4 区 SD-103・203～206・SX-202・206・207 実 測図…………… 148	第 118 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 5a 層上層遺構配置図・コンタ図及び出土 遺物実測図…………… 164
第 103 図	玉名平野条里跡 01-7 区 SD-701・702・SX-704・705・712・SP- 706・707 実測図 …………… 149	第 119 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 SX-01・02 実測図 …………… 165
第 104 図	玉名平野条里跡 01-4・7 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図 …… 150	第 120 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 5b 層上層遺構配置図 …………… 166
		第 121 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 SD-05・06 実測図 …………… 167

第 122 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 SD-05・SH-01・P8 実測図 ……………	168	第 139 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-01・02・SX-03 実測図 ……………	185
第 123 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 ST-03～10 実測図 ……………	169	第 140 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-03・04 実測図 ……………	186
第 124 図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 ST-11～14・16・17・P-1・9 実測図 ……	170	第 141 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-04 遺物出土 状況及び出土遺物実測図 ……………	187
第 125 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 4a層・5a層遺構配置図及び杭1～6・SX-06 実測図 ……………	171	第 142 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-04 出土遺物実測図 ……………	188
第 126 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 5b 層上面遺構配置図及び SD-07・P-19～ 22 実測図 ……………	172	第 143 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-05・06 実測図及び出土遺物実測図 ……	189
第 127 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 ST-18～20 実測図及び出土遺物実測図 ……………	173	第 144 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-07・09・SX-04 (燃烧土坑) 実測図及び 出土遺物実測図 ……………	190
第 128 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 SX-07 実測図及び出土遺物実測図 ……	174	第 145 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 実測図及び出土遺物実測図 ……	191
第 129 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 SX-07 杭群実測図 1 ……………	175	第 146 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 実測図 ……………	192
第 130 図	両迫間日渡遺跡 03- II 区 SX-07 杭群実測図 2 及び包 3b 層出土遺物 実測図 ……………	176	第 147 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 出土遺物実測図 ……………	193
第 131 図	両迫間日渡遺跡 04- I 区 5b 層遺構配置図及び SX-09 実測図 ……	177	第 148 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 自然流路実測図 ……………	194
第 132 図	両迫間日渡遺跡 04- I 区 SH-01 実測図 ……………	178	第 149 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 土器集中区出土遺物実測図 1 ……………	195
第 133 図	両迫間日渡遺跡 04- I 区 P-1・2 実測図及び出土遺物実測図 ……	179	第 150 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 土器集中区出土遺物実測図 2 ……………	196
第 134 図	玉名平野条里跡 04- I 区 6 層遺構配置図・SD-01・SX-01～03 実測 図及び出土遺物実測図 ……………	180	第 151 図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 7b 層遺構配置図及び出土遺物実測図 ……	197
第 135 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 5a 層・5c 層・5d 層上面遺構配置図 ……	181	第 152 図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SD-03 実測図 ……………	198
第 136 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 6b 層・6f 層・6h 層上面遺構配置図及び出 土遺物実測図 ……………	182	第 153 図	両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 7b 層直上遺構配置図 ……………	199
第 137 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-01 (溝 4～10・12) 実測図 ……	183	第 154 図	両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 8 層遺構配置図 ……………	200
第 138 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-02 (杭 1～11) 実測図 ……………	184	第 155 図	両迫間日渡遺跡 05- II -2 区 7a 層上面・7b 層遺構配置図及び出土遺物 実測図 ……………	201
			第 156 図	両迫間日渡遺跡 05- II -2 区 7a 層上面コンタ図 ……………	202
			第 157 図	両迫間日渡遺跡 05- II -2 区 SD-01・02 実測図 ……………	203

第158図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b 層・9a 層・9b 層遺構配置図 ……	204	第178図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a 層遺構配置図・足跡配置図 ……	224
第159図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 出土遺物実測図 06- I 区 7b 層・8 層・9b 層コンタ図 ……	205	第179図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4b 層遺構配置図及び出土遺物実測図 SK-01 実測図 ……	225
第160図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b 層 SX-04 ~ 06 実測図 ……	206	第180図	両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 出土遺物実測図 ……	226
第161図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9a 層遺構配置図 ……	207	第181図	調査区範囲図 (S = 1/10000) ……	227
第162図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9a 層 SX-16 ~ 20・SD-10・12・17 実測図 ……	208	第182図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 中世層 ……	228
第163図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-23 実測図 ……	209	第183図	玉名平野条里跡 01-1 ~ 8 区 遺構配置図 (中世) ……	229
第164図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-23 (杭 1 ~ 40) 実測図 ……	210	第184図	玉名平野条里跡 01-5 区 2a 層上面遺構配置 図・土層柱状図・SE-56 実測図 ……	230
第165図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 9b 層検出杭列実測図 ……	211	第185図	玉名平野条里跡 02- I 区 11 層遺構配置図 ……	231
第166図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SD-14・15・20 実測図 ……	212	第186図	玉名平野条里跡 02- I 区 SD-07・08 実測図 ……	232
第167図	両迫間日渡遺跡 06- I 区 SD-16 実測図 ……	213	第187図	玉名平野条里跡 02- I 区 13 層遺構配置図 及び SD-10・SX-03 実測図 ……	233
第168図	玉名平野条里跡 06- II 区 6a 層コンタ図及 び出土遺物実測図 ……	214	第188図	玉名平野条里跡 02- I 区 13 層コンタ図 ……	234
第169図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 6b 層遺構配置図及びコンタ図 ……	215	第189図	玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稲株痕実測図 ……	235
第170図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SD-31・37・SX-39・42 実測図 ……	216	第190図	玉名平野条里跡 02- III 区 7 層遺構配置図 ……	236
第171図	調査区範囲図 (S = 1/10000) ……	217	第191図	玉名平野条里跡 02- III 区 7 層水田面実測図 ……	237
第172図	玉名平野条里跡 02- I 区 18 層遺構配置図 ……	218	第192図	玉名平野条里跡 02- III 区 SD-11・SX-04 実測図 ……	238
第173図	玉名平野条里跡 02- I 区 SD-09・ST-02 実測図 ……	219	第193図	両迫間日渡遺跡 03- I 区 杭検出配置図 ……	239
第174図	玉名平野条里跡 02- III 区 9 層遺構配置図 ……	220	第194図	両迫間日渡遺跡 03- I 区杭 9・11 ~ 20 実 測図及び出土遺物実測図 ……	240
第175図	玉名平野条里跡 02- III 区 9 層水田面稲株痕実測図 ……	221	第195図	両迫間日渡遺跡 03- III 区遺構配置図及び出 土遺物実測図 ……	241
第176図	玉名平野条里跡 02- III 区 SD-12・15・SX-10 実測図及び出土遺物実測図 ……	222	第196図	両迫間日渡遺跡 03- III 区 杭検出位置図 ……	242
第177図	玉名平野条里跡 02- III 区 杭 3 ~ 14 実測図及び出土遺物実測図 ……	223	第197図	両迫間日渡遺跡 03- III 区杭列予想図 ……	243

第 198 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭 1 ～ 155 実測図 1 ……………	244	第 216 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 5 層遺構配置図及び出土遺物実測図 ……	262
第 199 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭 1 ～ 155 実測図 2 ……………	245	第 217 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 SD-01・02 実測図 ……………	263
第 200 図	両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 出土杭実測図 ……………	246	第 218 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-01 ～ 07・ 09 実測図及び出土遺物実測図 ……	264
第 201 図	玉名平野条里跡 04-Ⅰ区 3 層遺構配置図・ST-01 実測図及び出土遺 物実測図 ……………	247	第 219 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-08・10 ～ 14・16・17 実測図 ……	265
第 202 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 3 層遺構配置図 ……………	248	第 220 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-15・18 ～ 27 実測図 ……………	266
第 203 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 SD-01・SX-01 ～ 05・ST-01 実測図 ……	249	第 221 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-28 ～ 34 実測図 ……………	267
第 204 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 4b 層上面遺構配置図及びコンタ図 ……	250	第 222 図	玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-35 ～ 43 実測図 ……………	268
第 205 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 SD-02 実測図 ……………	251	第 223 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6a 層・6b 層・6c 層コンタ図 ……	269
第 206 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅰ区 SX-06 ～ 08・11 実測図 ……………	252	第 224 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6c-2 層・7a 層コ ンタ図・6c-2 層鉄分沈着範囲図 ……	270
第 207 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 4 層遺構配置図 ……………	253	第 225 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 SX-02・SP-01 実 測図・6a 層足跡検出範囲 ……	271
第 208 図	両迫間日渡遺跡 04-Ⅱ区 SX-01 (畦畔・溝 1 ～ 3) 実測図・05-Ⅰ -1 区 SX-01 (疑似畦畔) 実測図 ……	254	第 226 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6b-2 層 SD-09・SX-10・15 実測図 ……	272
第 209 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-1 区 5b 層遺構配置図 ……………	255	第 227 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 SX-03 実測図・ 6c-2 層足跡検出範囲 ……	273
第 210 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-1 区 6c 層遺構配置図・SD-01・02 実測図 ……	256	第 228 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6c-2 層遺構配置図 ……………	274
第 211 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-2 区 6b 層木杭 (1 ～ 20) 出土状況及び出土遺 物実測図 ……………	257	第 229 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6c-2 層 SX-08・09・ 11・13 ～ 14・SD-08 実測図 ……	275
第 212 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-2 区 6b 層杭出土状況及び実測図 ……	258	第 230 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6c-2 層 SD-05・ 18・SX-12 実測図・杭 1 ～ 23 検出位置図 ……………	276
第 213 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅰ-2 区 7a 層遺構配置図及びコンタ図 ……	259	第 231 図	両迫間日渡遺跡 06-Ⅰ区 6c-2 層 SD-19・ SX-24 実測図 ……………	277
第 214 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅱ-2 区 5 層遺構配置図及びコンタ図 ……	260	第 232 図	玉名平野条里跡 06-Ⅲ区・07-Ⅱ区 5 層遺 構配置図及び 5 層直上コンタ図 ……	278
第 215 図	両迫間日渡遺跡 05-Ⅱ-2 区 5 層コンタ図 及び SX-03・04 土層断面図 ……	261	第 233 図	玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 SD-02・05・SX-04・SP-03 実測図 ……	279
			第 234 図	玉名平野条里跡 07-Ⅱ区 SX-44 ～ 53 実測図 ……………	280

第 235 図	玉名平野条里跡 06- III 区 6a 層遺構配置図・6a 層直上コンタ図及び 出土遺物実測図……………	281	第 253 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01・02 実測図 及び出土遺物実測図……………	299
第 236 図	玉名平野条里跡 06- III 区 SX-30・SP-07～21 実測図及び出土遺物実 測図……………	282	第 254 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SE-03 実測図及び出土遺物実測図 ……	300
第 237 図	玉名平野条里跡 07- I 区 4 層遺構配置図及 び出土遺物実測図……………	283	第 255 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-01 実測図及び出土遺物実測図 ……	301
第 238 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SB-01・SK-02・SX-01 実測図 ……	284	第 256 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-02・05・22 実 測図及び出土遺物実測図……………	302
第 239 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SE-01・SD-02 実 測図及び出土遺物実測図……………	285	第 257 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-03・ST-10 実 測図及び出土遺物実測図……………	303
第 240 図	玉名平野条里跡 07- IV 区 5 層コンタ図 及び出土遺物実測図……………	286	第 258 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-04 実測図及び出土遺物実測図 ……	304
第 241 図	玉名平野条里跡 07- V 区 5 層遺構配置図・ コンタ図・SD-01・02 実測図及び出土遺物 実測図……………	287	第 259 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-06・07・10～12・20 実測図及び出土 遺物実測図……………	305
第 242 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図 ……	288	第 260 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-08・09・15 実 測図及び出土遺物実測図……………	306
第 243 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図 (SD のみ) ……	289	第 261 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-13・21 実測図 及び出土遺物実測図……………	307
第 244 図	玉名平野条里跡 08- I 区 5 層遺構配置図 (SA・SB のみ) 及びコンタ図 ……	290	第 262 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-14 実測図及び出土遺物実測図 ……	308
第 245 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SA-01～03 実測図 ……	291	第 263 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-14 出土遺物実測図 ……	309
第 246 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-01・03 実測図 ……	292	第 264 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SD-16～19 実測 図及び出土遺物実測図……………	310
第 247 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-02 実測図及び 出土遺物実測図……………	293	第 265 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図 ……	311
第 248 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SB-05 実測図 ……	294	第 266 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-02・03 実測図 及び出土遺物実測図……………	312
第 249 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 実測図及び出土遺物実測図 ……	295	第 267 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-04・05 実測図 及び出土遺物実測図……………	313
第 250 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 実測図 ……	296	第 268 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-06・09 実測図 及び出土遺物実測図……………	314
第 251 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 出土遺物実測図 ……	297	第 269 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-07・08・10 実 測図及び出土遺物実測図……………	315
第 252 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 実測図及び出土遺物実測図 ……	298	第 270 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-11～16 実測 図及び出土遺物実測図……………	316
			第 271 図	玉名平野条里跡 08- I 区 ST-17～21 実測 図及び出土遺物実測図……………	317

第 272 図	玉名平野条里跡 08- I 区 SX-01・02 実測図及び出土遺物実測図……………	318	第 290 図	玉名の平城跡出土遺物実測図……………	336
第 273 図	玉名平野条里跡 08- I 区包 4・5 層・調査区一括出土遺物実測図……………	319	第 291 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土金属製品実測図……………	402
第 274 図	玉名平野条里跡 02- II 区遺構配置図及び出土遺物実測図……………	320	第 292 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土銅銭一覧……………	403
第 275 図	玉名平野条里跡 07- I 区 5a 層遺構配置図及び 5 層コンタ図 ……	321	第 293 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡出土土錘実測図……………	405
第 276 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SD-03・04・SX-06 実測図及び出土遺物実測図……………	322	第 294 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石実測図……………	406
第 277 図	玉名平野条里跡 07- I 区 SX-02・SD-06 実測図及び出土遺物実測図……………	323	第 295 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図弥生 1 ……	408
第 278 図	玉名平野条里跡 07- V 区 8 層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図……………	324	第 296 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図弥生 2 ……	409
第 279 図	玉名平野条里跡 07- V 区 SX-01～08 (粘土採掘坑) 実測図 1 ……	325	第 297 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図古墳……………	410
第 280 図	玉名平野条里跡 07- V 区 SX-01～08 (粘土採掘坑) 実測図 2 ……	326	第 298 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図中世 1 ……	411
第 281 図	玉名平野条里跡 07- V 区 SX-07 土層断面図 ……	327	第 299 図	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土分布図中世 2 ……	412
第 282 図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 7b 層遺構配置図・7b 層直上コンタ図 ……	328	第 300 図	両迫間日渡遺跡 04- II 区・玉名平野条里跡 06- II 区種実 (桃) 層別出土範囲図 ……	413
第 283 図	玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SX-43 (木樋) 実測図 ……	329	第 301 図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区・05- I -2 区種実 (桃) 層別出土範囲図……………	414
第 284 図	玉名の平城跡区画……………	330	第 302 図	SK-02 出土遺物 (No. 241) と丸アバ ……	452
第 285 図	玉名の平城跡遺構配置図……………	331	第 303 図	農事暦……………	455
第 286 図	玉名の平城跡 SA-01～04・07 実測図 1……………	332	第 304 図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区・2 区における水田概念図……………	456
第 287 図	玉名の平城跡 SA-01～04・07 実測図 2……………	333	第 305 図	両迫間日渡遺跡 05- I -1 区・2 区及び両迫間日渡遺跡 1 (VIII 層) との整合性 ……	457
第 288 図	玉名の平城跡 SA-05・06・SB-01～03 実測図 ……	334	第 306 図	玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稲株痕実測図 ……	458
第 289 図	玉名の平城跡 S19 実測図及び出土遺物実測図 ……	335	第 307 図	時代ごとの水田の広がり……………	460

表 目 次

第 1 表	遺跡地名表 1 …………… 10	第 10 表	石器類観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 427
第 2 表	遺跡地名表 2 …………… 11	第 11 表	土製品観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 427
第 3 表	調査時期 …………… 15	第 12 表	木製品観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 428
第 4 表	金属製品観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 404	第 13 表	玉類観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 428
第 5 表	銅銭一覧表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 404	第 14 表	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 遺構データ表 …………… 429
第 6 表	土錘観察表・出土土錘分類表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 405	第 15 表	玉名の平城跡遺物観察表 …………… 442
第 7 表	投石サンプル一覧表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 406	第 16 表	玉名の平城跡遺構データ表 …………… 443
第 8 表	玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土 …………… 407	第 17 表	花粉分析・プラントオパール分析における 草木参考 …………… 444
第 9 表	土器観察表 (玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡) …… 415		

写真図版目次

Ph. 1	…………… 456	Ph. 4	…………… 468
	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-42 と円形周溝状遺構・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43・玉名平野条里跡 01-1・2 区円形周溝状遺構・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43・玉名平野条里跡 01-1・2 区縄文時代(SI-42・43 円形周溝状遺構ほか) 遺構検出		玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51 炭化物出土状況・玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51 下層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114・121 3 層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 5 層遺物出土状況全景・玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 5～7 層遺物出土状況
Ph. 2	…………… 466	Ph. 5	…………… 469
	玉名平野条里跡 01-3 区 SI-164 遺物出土状況 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-162 遺物出土状況 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166 竪穴建物 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166 石器出土状況 玉名平野条里跡 01-3 区東側遺構検出		玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 8 層 9 層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-15 埋土 1 層中央部遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-4 区溝検出状況 SD-203・204 (701) ほか・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SD-03・25・28・SI-02 竪穴建物・溝・遺物出土状況
Ph. 3	…………… 467	Ph. 6	…………… 470
	玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-02・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-15 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SD-03・25・28 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-31 3 層遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-31 4 層 NE→SW・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-31 4 層 S→N・玉名平野条里跡 01-1・2 区 SX-35 遺物出土状況・玉名平野条里跡 01-3 区 SI-52・153 全景		両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) 東側壁・両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔)
		Ph. 7	…………… 471
			両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) 検出状況

Ph. 8	…………… 472 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 人骨出土 状況 (NW → SE)・玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 人骨出土状況 (S → N)	Ph. 17	…………… 481 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (NW → SE) 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (SE → NW)
Ph. 9	…………… 473 玉名平野条里跡 04- I 区 SX-01 石埋納出 土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-07 遺物出土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 遺物出土状況・両迫間日渡遺跡 06- I 区 ST-01 縄文土器出土状況・玉名平野 条里跡 07- II 区木樋出土状況 (SE → NW)	Ph. 18	木杭・石包丁…………… 482
Ph. 10	…………… 474 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 遺物出土 状況・玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 遺 物出土状況・両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 検出状況時・参考水口まつり (天草 市河浦町今田)	Ph. 19	投石サンプル一覧・出土投石…………… 483
Ph. 11	…………… 475 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 8 層小畦畔検 出状況・両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-10 検出状況・両迫間日渡遺跡 05- II -1 区中 世水田足跡痕 (NW → SE)・玉名平野条里 跡 07- V 粘土採掘坑検出状況	Ph. 20	…………… 484 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 出土土器 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-115 出土土器 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 出土土器 両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 出土土器 両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 網代
Ph. 12	…………… 476 玉名の平城跡 (W → E)・玉名の平城跡 S19 遺物出土状況 (SE → NW)	Ph. 21	小型丸底土器・ミニチュア土器…………… 485
Ph. 13	…………… 477 両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03(大畦畔)	Ph. 22	…………… 486 両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 出土土器 玉名平野条里跡 01-2 区 SE-36 出土土器・ 両迫間日渡遺跡 05- I 区金属製品 (小柄)・ 両迫間日渡遺跡 04- II 区被熱塊
Ph. 14	…………… 478 両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03(大畦畔) 両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 10b 層	Ph. 23	…………… 487 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-02・SD-03 出 土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SE-03 出土土器 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 出土土器
Ph. 15	…………… 479 玉名平野条里跡 02- III 区 7 層稲株痕検出状況 玉名平野条里跡 02- III 区 9 層稲株痕検出状況	Ph. 24	土錘・浮子・生活用具・石碓・榿…………… 488
Ph. 16	…………… 480 玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稲株検出状況 (N → S)・両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a 層足跡・玉名平野条里跡 02- II 区溝(大型溝)	Ph. 25	小型丸ノミ・打製・磨製石斧・敲石…………… 489
		Ph. 26	…………… 490 玉名平野条里跡 08- I 区出土勾玉 (クロム 白雲母)・装飾品 (勾玉・ガラス玉・管玉)・ 円形装飾品・土製勾玉・石剣・土製管玉・ 土玉
		Ph. 27	…………… 491 玉名の平城跡出土遺物 巡方 (表・裏)・ミニチュア土器 玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SX-43 木樋 (処 理後)

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地は県道玉名山鹿線道路整備事業に伴う調査で、これまでの県道拡幅を行い、新玉名駅交通アクセスの利便性を高める目的とし、既存の道路県道玉名山鹿線の拡幅事業であり、工事箇所によっては路線を新設した。調査区は未買収地を多く抱え取得地からの調査となり、このため調査区年度の連続性がないのはこのためである。

この「玉名平野条里跡」は熊本県文化財報告第 25 集（昭和 52 年 3 月 31 日）で報告された周知の遺跡である。平成 11 年 4 月 28 日付け玉土第 361 号での依頼を受け、確認調査を実施した。この結果により、調査は平成 12 年 8 月 23 日から埋蔵文化財発掘調査を実施したことが、広義での「玉名平野条里跡」調査の嚆矢であった。平成 12 年 8 日から平成 21 年 3 月 24 日まで長期に亘る調査の為、その間、県道長洲玉名線単県橋梁改築事業に伴う文化財調査「玉名平野条里跡」（旧玉名郡岱明町所在 熊本県文化財調査報告 第 226 集）・玉名平野条里跡〔古閑前地区〕（熊本県文化財調査報告書 第 261 集）・両迫間日渡遺跡 1（熊本県文化財調査報告 第 268 集）の調査・報告がなされた。

第 2 節 調査の組織

玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡

発掘調査（平成 12 年度～平成 20 年度 2000～2008）

調査主体 熊本県教育委員会

田中力男（熊本県教育長 H12～15）
 柿塚純男（熊本県教育長 H16～19）
 山本隆生（熊本県教育長 H20～23）
 田崎龍一（熊本県教育長 H24・25）

調査責任者

阪井大文（文化課長 H12・13）
 成瀬烈大（文化課長 H14・15）
 島津義昭（文化課長 H16）
 梶野英二（文化課長 H17～19）
 米岡正治（文化課長 H20）

調査総括

島津義昭（課長補佐 H12・13）・吉田 恵（課長補佐 H15）江本 直（主幹兼文化財調査第 2 係長 H12・課長補佐 H19・20）・倉岡 博（課長補佐 H16・17）・木崎康弘（文化財調査第 2 係長 H13・14）・島津義昭（教育審議員兼課長補佐 H14・15）・小田信也（教育審議員兼課長補佐 H14）・西住欣一郎（文化財調査第 2 係長 H15～18）

調査事務局

川上康治（課長補佐 H12）・小田信也（課長補佐 H13）・吉田 恵（課長補佐 H15～18）・宗村士郎（教育審議員兼課長補佐 H19・20）・中村幸宏（主幹兼総務係長 H12～14）・欄杭正義（主幹兼総務係長 H15・16）・四元正明（主幹兼総務係長 H17）・高宮優美（主幹兼総務係長 H18・19）・川上勝美（主幹兼総務係長 H20）・廣瀬泰之（参事 H12・13）・上村修治（参事 H12）・塚原健一（参事 H17～19）・山田京子（参事 H20）・杉村輝彦（主事 H12～15）・天野寿久（主任主事 H14～16）・小谷仁志（主任主事 16～18）・高松克行（主任主事 H19）

調査担当

亀田 学（主任学芸員 H12・13）・山下義満（文化財保護主事 H14・15・参事 H16～20）・河野真理子（文化財保護主事 H14）・後藤克博

(文化財保護主事 H16・17)・高山直也(文化財保護主事 H17)・山中智恵(文化財保護主事 H17)・中川浩司(文化財保護主事 H18・19)・布田智久(文化財保護主事 H20)・水上 仁(非常勤職員 H13)・大倉千寿(非常勤職員 H12・13)・北原美和子(非常勤職員 H14)・西 慶喜(非常勤職員 H14)・宮崎 拓(非常勤職員 H14～16)・西口貴志(非常勤職員 H14)・野満彩子(非常勤職員 H15)・本多麻紀(非常勤職員 H16・17)・柿本 慈(非常勤職員 H16・17)・上土井朋美(非常勤職員 H16・17)・稲富陽子(非常勤職員 H16)・多賀晴司(非常勤職員 H17)・福田匡朗(非常勤職員 H17・18)・戸田英祐(非常勤職員 H18)・栞原 愛(非常勤職員 H18・19)・牛島晋二(非常勤職員 H18)・中尾健照(非常勤職員 H19・20)

玉名の平城跡

発掘調査(平成15年度2003)

調査責任者

成瀬烈大(文化課長)

調査総括

島津義昭(教育審議員兼課長補佐)・西住欣一郎(文化財調査第2係長)

調査事務局

吉田 恵(課長補佐)・欄杭正義(主幹兼総務係長)・天野寿久(主任主事)・杉村輝彦(主事)

調査担当

水野哲郎(参事)・米村俊治(非常勤職員)・松野直子(非常勤職員)

整理・報告書作成(平成22年度～平成25年度)

整理責任者

小田信也(文化課長 H22～25)

整理総括

木崎康弘(課長補佐 H22)・西住欣一郎(文

化財調査第2係長 H22・23 課長補佐 H24・25)・岡本真也(文化財調査第2係長兼主幹 H24・25)

整理事務局

宗村士郎(教育審議員兼課長補佐 H22)・元嶋 茂(高校教育課課長補佐兼総務係長 H22)・川上勝美(課長補佐 H23・24)・水元敬浩(高校教育課主幹兼総務係長 HH23)・中津幸三(課長補佐・総務・助成担当 H24)・馬場一也(課長補佐 H25)・廣石啓哉(主幹兼総務・文化係長 H25)・山田京子(参事 H22・23)・稲本尚子(参事 H24)・有馬綾子(参事 H25)・松島英樹(主任主事 H22)・天草英子(主任主事 H24・25)

整理担当

山下義満(参事 H22～25)・坂本千恵(非常勤職員 H22～25)・丸吉ゆかり(非常勤職員 H22・23)・春川香子(非常勤職員 H24・25)・出家麻里(非常勤職員 H25)

専門調査員

甲元眞之(熊本大学名誉教授)

山崎純男(福岡市教育委員会文化財部長)

高倉洋彰(西南学院大学教授)

西谷 正(九州大学名誉教授)

大坪志子(熊本大学助教)

調査指導・助言及び協力者(調査当時)

玉名市教育委員会 福岡県埋蔵文化財センター 広瀬雅信・川瀬貴子(大阪埋蔵文化財センター)・野田拓治(熊本県文化財資料室長)・岡本真也・坂田和弘・木村元治・廣田静学・坂井田端志郎・木村龍生・坂口圭太郎(熊本県文化課) 池田朋生(熊本県立装飾古墳館) 西田道世・末永 崇・兵谷有利・荒木隆宏・竹田宏司(玉名市教育委員会) 河合章行(鳥取県埋蔵文化財センター) 高木康博(熊本県立図書館) 宮縁育夫(森林総合研究所)

第Ⅱ章 遺跡の環境

両迫間日渡遺跡は、菊池川下流の右岸に位置する遺跡で山鹿地区から熊本県玉名市両迫間の字日渡・龍王田・御琴、阿弥陀田、上徳等に広がる遺跡群で東西約 300m、南北約 600m の範囲に広がる遺跡であるが、南側に柳町遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代及び古代にかけての遺跡であることが判明している。また両迫間日渡遺跡や柳町遺跡を包むように古代からの生産遺跡（水田跡）として玉名平野条里跡が広がっていると推定されている。

九州新幹線建設工事に伴い約 400m 南東の古閑前地区で、弥生時代後期の竪穴建物 15 軒、古墳時代の竪穴建物 13 軒やそれらに伴うであろう土坑が出土している。また、総柱の建物群も想定され、古墳時代から古代にかけて集落が存在していることが判明している。地形をみると当遺跡は菊池川右岸の自然堤防と西側から伸びる丘陵に挟まれた中央部分にあたり、いわゆる低湿地にあたり、古くから菊池川水系の氾濫していた箇所であり、水抜きに苦労したことが伺え、現在も玉名山鹿線沿いに北東から南西に灌漑水路が流れており、生産区域として重要な役割を果たし生産区域を取り囲むように微高地には井戸等を持つ集落が点々と営まれたと考えられる。すなわち、この区域は弥生時代から古墳時代及び古代の集落及び水田跡と推定され、集落と生産遺跡をセットとして考えられる遺跡である。

九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う玉名市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査では標高約 3.7m で弥生時代中期以前に遡る杭列が 4 群検出されており、方向等から大別して 2 列の杭列を検出している。杭列の木杭の放射性炭素年代推定（AMS 法）などや本報告の成果も合わせると、弥生時代の後期以前のものと考えられる。注目されるのは、杭列内から刻目凸帯文土器が出土しており、どこまで水田遺構が遡れるか注目される。

また、小田宮の前遺跡のボーリング調査の結果、菊池川の流路が東側に蛇行していることが推定される。そうすると小田宮の前遺跡も菊池川右岸の遺跡になり一連の遺跡と考えられる。

調査区の西側には熊本県及び玉名市教育委員会が調査を実施した柳町遺跡がある。平成 22 年度から平成 23 年度の玉名市の詳細分布調査により玉名市の遺跡地図が改訂され、柳町遺跡、布毛遺跡、田中遺跡等と遺跡の名称が変更されたが、遺跡の性格としては一連の遺跡と考えられ、「柳町遺跡群」との表記も可能かと考えられる。

柳町遺跡群に南側（布毛遺跡）では 6SX049（自然流路）に 6SX054 堰状遺構（杭列・矢板列）や網代等が出土しており、流路からは縄文時代晩期から弥生中期の土器が出土しており、それらの時期の集落が周辺に広がっていたことを示唆するものである。今回報告する 01-1～8 区（柳町遺跡）の隣接地は土坑群が検出し、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて堰状遺構が機能していれば、玉名平野における水田開発が弥生時代早期にさかのぼる可能性を示唆する遺跡でもある。

西側調査区（県調査区『柳町遺跡Ⅰ』報告分）の北端では弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴建物（7 基）や井戸（5 基）、土坑 8 基、さらに南東側には弥生時代終末期から古墳時代にかけての木器を多量に含む自然流路、また、南側 100 から 200m（県調査『柳町遺跡Ⅱ』報告分；布毛遺跡）には弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落（竪穴建物 11 基、井戸 6 基、土坑 17 基、溝 4 条以上を検出し、溝（SX049・040）は底面を区画して平坦にした特異な構造を持つものである。幅 7m 以上で検出できた所もあり、集落を囲む溝としての機能があると考えられる。その他この溝には他木製品も出土していることから貯木場や

水生生物の養い場や掘削単位の構造等様々な解釈がなされているものである。いずれの用途にも使われていた可能性があるものである。

01-1～3区の多くの遺構は柳町の様相3～5を中心とする時期の遺構が検出されていると考えられる。

小田宮の前遺跡では、古墳時代中期と推定される水辺の祭祀と推定できる遺物群が出土している。鏡を模造した土製品や滑石製の有孔円盤や剣形等が出土し、流路等からは古墳時代前期にさかのぼる遺物も出土している。

また、縄文時代後・晩期では野蒜が炭化して土器に付着している状況が観察された。さらに7世紀代の竪穴住居や中世の掘立柱建物群が検出されている。01-7区でも土坑が検出され、周辺に7世紀代の遺構群が広がっていたと考えられる。

奈良時代では、柳町遺跡群西側調査区（柳町遺跡）には敷粗朶技法を用いた互層積みの幅約20mの土塁状遺構や杭列が、南側調査区布遺跡（100～200m南西）には4間×2間の構造のものを主とする掘立柱建物で構成される集落や井戸6基等が出土しておりまた溝や灌漑施設等の遺構が出土している。

布毛遺跡では中世にも掘立柱建物などからなる集落、溝や灌漑のための遺構が出土している。また近世初期にも環濠の機能を持つ大溝で囲まれた集落を検出している。

第三章 調査の概要

第1節 調査区の位置（第3図 参照）

一般国道208号玉名バイパスに隣接する（交差する）旧県道玉名橋線（改良後県道玉名山鹿線）部分である。一般国道玉名バイパスへアクセス部分であり、柳町遺跡に隣接する調査区である。調査区は現道の県道玉名橋線を挟んで北西部分が01-1・2・3・4・7区、南東部分が01-5・6・8区である。玉名平野の幹線水路でも分断されている。

国道208号玉名バイパス交差点から北西側位置し、これから県道玉名山鹿線が玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡・玉名条里平野と存在し（02～08）、さらに北西の玉杵名大橋線左岸が玉名の平城である。05-1区北東に隣接するのが九州新幹線に伴う両迫間日渡遺跡1区（06-II・平成18年度調査）で、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が見つかり、古墳時代の塩を作った土器等の出土により注目された玉名市の玉名平野条里跡（古閑前地区 平成19年度調査）から西へ500mほど離れた地点である。

第2節 調査の概要

今回は、主に弥生時代終末から古墳時代後半にかけての水田跡を検出した。

弥生時代の水田跡についてはこの遺跡では県道玉名山鹿線改良工事（県文化課 平成17年度調査）や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う調査（平成19年度調査；玉名市文化財調査報告第19集2009）で見つかり、その広がり及び時代ごとの区画のあり方を調べ、玉名平野の開発の歴史を解明することが求められていた。

今回の調査では熊本日日新聞で、「弥生時代の水田跡」（平成17年11月7日教育長定例記者会見）にて

発表された。また根拠になった水田に伴う大畦畔の続きを検出している（両迫間日渡遺跡1 2012）。畦畔の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期であろうと現在のところ考えている。古墳時代初頭まで大畦畔に伴う区画は機能し、古墳時代後期には、西側の安定した区域を中心に水田は立地していると考えられる。

区画については、弥生時代終末から古墳時代初頭については、小区画水田で5～10m前後の区画と推定でき、明確な水路や水口や排水口を検出できなかったが、敷粗朶技法を用いて畦畔の補強している様子や畦畔内に直交して杭列が並ぶ等の様子が観察できたことは意義深い。

ただ、玉名市教育委員会が杭列で畦畔を推定したように畦やそれに伴う溝が検出するのは困難であった。畦畔自体は上層で水田の区画が変わると削平されており、下層の畦跡に影響された擬似畦畔等の認定など難しい面が多かった。さらに湧水地帯のため、十分に水が切れずに土層の観察は困難を伴った。

玉名市教育委員会調査「両迫間日渡遺跡」（平成17・18・19年度調査）1区の標高3.7mで弥生時代中期以前の杭列を検出している。下層にも水田面が存在した可能性が高いと推定できる。また、水田面の広がりも本調査区の北西に、後に南東にも広がっていることは確認できた。古墳時代中頃の祭祀遺構（ミニチュア土器や鏡や剣等の石製模造品の出土）が玉名市教育委員会の調査で検出されているが、その時期に対応できる水田面は明確にできなかったが、一方、丘陵上に位置する古墳時代の水田面は検出できた。古墳時代の玉名平野の開発の一端を解明できた意義は多い。

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財調査の報告や周辺は、今後、九州新幹線の新玉名駅に伴う開発が進む可能性も高い。開発事業とともに玉名平野の開発を支えてきた地域であるため、周辺の埋蔵文化財の分布を再考・検討し、町づくりに活かして欲しいと感じている。

第3節 基本土層

県道玉名山鹿線を挟んで調査を実施しており土層が分断されており、遺構のありかたも異なる事からそれぞれの土層を記載しておきたい。

1 (01-1・2・3・4・7区)の基本土層

基本的には中央が高く、西側及び東側が低くなっている地形である。

I a層は表土であり土質は灰色砂質土で現在の耕作土である。厚さは10～15cmのである。I b層は淡灰色粘質土である。床土と推定でき、その厚さは20～25cmである。II a層は黄灰褐色粘質土、厚さは30～40cmである。5区ではこの層で中世の井戸56-SEを検出している。II b層は淡灰色粘土で厚さは約20cmで、古代の杯が出土している。III a層は灰褐色粘質土混じりの茶褐色粘質土、厚さ約20cmで、この層から44-SKを検出している。III b層は黄褐色粘質土混茶褐色粘質土、III c層は灰褐色粘質土混暗茶褐色粘質土である。III a層からIII c層までは弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層。

IV a層は黄褐色粘質土で約10cmの厚さである。（縄文時代後晩期から弥生時代後期までの遺物包含層）IV b層は黄灰色粘質土（これが縄文時代後晩期の遺構検出面）、V層は青灰色粘質土である。

2 (5・6・8区)

2a層は（淡灰）黄褐色粘質土、5区の井戸はこの面の途中で検出しており、中世面であろう。2b層は灰粘質土から茶褐色粘質土系の土である。古代が存在するとすればこの層であろう。3a層は灰褐色粘質土か

ら黄褐色粘質土、部分的には3層に分層できそうな箇所がある。3b層は茶褐色から灰黒色粘質土系の土この層で堅穴建物らしきもの(SX-803・804等)を数軒検でできたが、1～3区のように明確なものでなく検討が必要である。4a層は黄褐色粘質土、4b層は茶褐色から黄緑色粘質土で、4b層でも堅穴建物らしきもの(SX-828・SX-831)を検出している。5層は灰色粘質土、6層は青灰色粘質土、7層も暗灰色粘質土混青灰色粘質土で一部締まる土で下層に有機物を含む土質である。8層は淡灰色粗砂、9層は淡灰色粘土、10層は灰色粗砂等とつづく。各層分層できる箇所があるが、基本的にはこのような堆積である。

[01- 1区の基本土層のまとめ]

1・2・3・4・7区と5・6・8区の調査区の土層をそれぞれ記載したのは、この地域の土層の堆積が黄色系の土と茶褐色系の土の交互の堆積を示し、層の堆積の認定が難しいことにある。谷地形が入り土層の堆積の比定が難しく、微地形が入り込んで質や色での認定は危険であるためである。さらに調査時は1層分ずれている可能性があると考えていたためである。

まとめるにあたり、ほぼ同一の基本土層と考えて良いと考えるに到ったが、周辺の調査により細かい対応関係を検証する必要があると思われる。

なお、明確に弥生時代後期から古墳時代前期の水田面を検出した調査区の基本土層を参考に記載した。

標高的には古墳時代前期の集落の立地する標高とあまり変わらないが、土層の違いは今回の調査区は高地を含む柳町遺跡から続く集落と耕作地にあたり、水田面を検出した所は周辺からすると緩やかな谷地形であることである。

九州新幹線両迫間日渡遺跡06-Ⅱ区のⅧ層下層からⅧb層と今回の3a～4層が時期的に対応していると考えている。

3 両迫間日渡遺跡1(2005年)の基本土層と両迫間日渡遺跡05-Ⅰ-1区の層位 (【 】にて表記)

I層は現代耕作土でオリーブ黒色(5YR3/2)、Ⅱa層は灰オリーブ(5Y4/1)細砂混シルト。若干斑鉄、

Ⅱb層灰色シルト(わずかに細砂(7.5Y2/1)最上部にマンガン班、全体的に斑鉄著しい。しまり良。

Ⅲa【3a】層灰色シルト(5Y4/1)細砂及び粗砂混上下の層に比較して暗色で砂質が強い。

Ⅲb【3b】層7.5Y4/1灰色細砂混シルト。粗砂が若干混じる。若干糸根状鉄あり。

Ⅳ層との境は不明瞭なところがある。また、細砂が埋土となる踏み込みが点々と見られる。

Ⅳ【4】層灰色細砂混シルト(7.5Y5/1)Ⅴa【5a】層暗灰黄色シルト。全体に斑鉄が著しい。上層よりシルト質が強い。

Ⅴb【5a】層オリーブ黒色細砂混シルト。しまり良好。

I層は現代耕作土、Ⅱ層は現代耕作土床土。Ⅲ層は近世から近代の耕作土及び床土近世後期以降の陶磁器を含む。Ⅳ層は近世の床土。木の葉猿や青銅製の煙管の吸い口等も出土している。Ⅴ層は中世の耕作面及び床土と推定できる。瓦器も出土。

Ⅵa【6a】層(淡)灰色シルト(10YR6/1)淡褐色細砂を含む。やや青みあり。

Ⅵb【6b】層灰色シルト(10YR5/1)。やや砂質が強い。

Ⅵc【6c】層灰色粘質土で砂粒を多く含む。マンガン、鉄分が多い。

この層までは一部県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う両迫間日渡遺跡2005年Ⅰ区の調査結果や出土遺物を参照している。

VI c 層は古代の耕作面の可能性がある。

VII a 【7a】層灰色粘質土（砂質土を顕著に含む）で、古墳時代後期の耕作面と考えられる。

VII b 【7b】層は灰色粘土でシルト質だが粘性強い。（砂質土を含む）。鉄分、マンガンを含む。古墳時代後の床土もしくは耕作土と推定できる。

VIII 【2a】層灰色粘土（10YR4/1）砂質を部分的に含む。ややシルト質。鉄分、マンガン多い。

VIII 【8】層下層オリーブ黒色シルト質土。ところどころに鉄分を含む。しまりが無い。粘性が強いシルト。古墳時代初頭（弥生終末カ）の耕作面と推定できる。

VIII b 層オリーブ黒色（5Y3/2）シルト質土。鉄分をとところどころに含む。

VIII b～IX層に伴う小畦畔より南側がやや砂混じりの土を含み、上下2層に分層できる。上層はところどころに鉄分を含み、しまりが無い粘性が強いシルト層。弥生時代終末の水田の耕作面と推定できる。下層は上層に比べ粘性が強く、鉄分がほとんど混じらない。細砂が斑に混じる。調査区の北側にいくほど層が安定し、調査区南側から2つ目の調査区の土層観察用アゼ（ベルト）付近B12付近で分層はできなくなる。洪水堆積にともなう水田区画を表す層と考えられる。敷き粗だ技法に伴う畦畔の形成もこの土を含む土で行われたと推定できる。

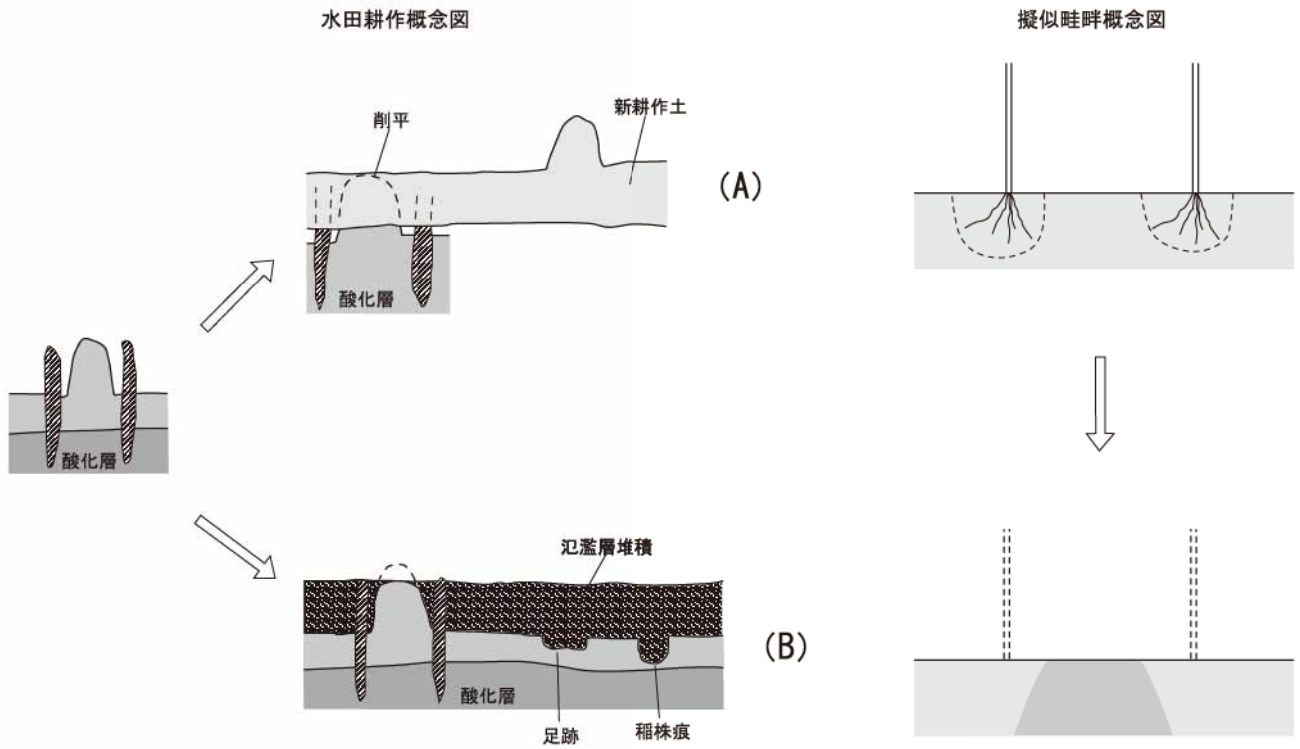
IX【9】層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土。ややシルト質。上層部はシルト質が強く、下層部ほど粘性が強い。上層では砂質が強いことから耕作面の可能性が高い。小畦畔もこの時期から存在していた可能性が高い。IX層上層は、部分的な調査にとどまったため、時期や区画に不明な点も多く、夏の湧水期に重なったため十分な分層ができなかったことも一因である。

X層はオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）。IX層より粘性が強く、やや暗い色調である。両迫間日渡遺跡 06-I 区は11a層から縄文中期の土坑が出土している。X層より下位層にあたり本遺跡の各調査区はこの層で調査を終えている。ただし05-I -1区は保存の為、【9層】の検出を行い埋め戻した。X層の標高は標高4.3mくらいと考えられ、玉名市教育委員会で平成19年に調査した調査I 弥生中期以前の杭列が3.7mの標高で見つかっている。70cm以上のことから、弥生後期の水田面が存在した可能性がある。

4 本遺跡における水田形成 概略

水田の土層は田起こし等の耕作で攪拌が見られる。いわゆる耕作地である。本遺跡では川氾濫による川砂が堆積したのであろう、川砂が斑状に顕著に入り込んでいた。耕作土下位は作土中に含まれる鉄分やマンガンが還元し下層に移動するため酸化する。この酸化層が水田層のキーワードであったし、耕作土と酸化層がセットで存在すると水田としての可能性が高く調査の中心とした。

上記した図は半湿田の性格を持つ本遺跡の水田形成の概念図で、畝を保護する杭を打ち込む傾向が見られ、自然土積の場合、上層が耕作地となり、畝及びそれに伴う杭まで耕作により削平されてしまう。従って本遺跡から多くの杭が検出されたが、杭検出面より深度を重視した。（A）また氾濫により土積の場合、従来の水田面は放棄し、畝はその状態で耕作に入るため氾濫層にパックされた状態で検出がされ、状況によっては足跡までの検出ができた。（B）



第 1 図 水田概念図及び擬似畦畔概念図

擬似畦畔

「稲の根が地中深く伸びるに従い、それを伝って地下水が下に浸透することや、地下水位の変動によって、その痕跡にマンガン等が沈着して褐色に変化する。しかし地上の畦畔の下方へは根が入りにくいから変色することなく、その部分はあたかも畦のように目立つというものである。」(水田の考古学)

このような土層が本遺跡でも見られ (06- I 区 東壁断面 第 225・229・230 図など)、この遺跡に慣れない当初は随分と難儀した。



第2図 遺跡範囲図1 (熊本県遺跡地図) S=1/25000

第三章 調査の概要

熊本県(43) 玉名市(206)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
028	上栗山	石貫 上栗山	古墳	包蔵地
048	玉名の平城跡	玉名 平城	中世	城
050	上小田宮の前	上小田 宮の前など	弥生	包蔵地
064	山田山口	山田 山口	古墳～平安	包蔵地
075	万葉坊跡	山田 上馬場	中世	寺社
079	地蔵の前古塔碑群	山田 地蔵前	中世	石造物
080	西林坊跡	山田 上馬場	中世	寺社
081	大力坊跡	山田 下馬場	中世	寺社
082	宝寿坊跡	山田 下馬場	中世	寺社
083	山田中島	山田 中島	弥生	包蔵地
084	山田松尾平	山田 平	弥生	包蔵地
085	乙船塚	山田 松尾	中世	墳墓
086	糠峯古墳	山田 糠峯	古墳	古墳
087	糠峯	山田 糠峯	中世	包蔵地
088	高頭	山田 高頭	古墳・古代	包蔵地
089	蛇が谷製鉄跡	立願寺 蛇が谷	古代・中世	生産
090	蛇が谷古墳群	立願寺 蛇が谷	古墳	古墳
091	玉名郡家跡	立願寺 石丸	古代	包蔵地
092	石丸丸塚	立願寺 石丸	古代	墳墓
093	松尾原	立願寺 松尾原ほか	弥生	埋葬
094	立願寺跡	立願寺 塔の尾	古代	寺社
095	大塚古墳	立願寺 大塚	古墳	古墳
096	小塚古墳	立願寺 大塚	古墳	古墳
097	玉名郡倉跡	立願寺 西の段	古代	包蔵地
098	下立願寺	立願寺 西の段	縄文～中世	集落
099	富尾いたび横穴群	富尾 居終	古墳	古墳
100	大塚・惣萩	立願寺 大塚など	弥生・古墳	包蔵地
101	冷水横穴群	富尾 冷水	古墳	古墳
102	冷水塚古墳	富尾 冷水	古墳	古墳
103	松尾	立願寺 松尾など	古墳	包蔵地
104	富尾原横穴群A	富尾 原	古墳	古墳
105	富尾浦谷横穴群	富尾 辻・浦谷	古墳	古墳
106	岩原	富尾 岩原	古墳	包蔵地
107	石貫の十字ある板石	石貫 六枝	石造物	石造物
108	西原古墳参考地	玉名 西原	古墳	古墳
109	大坊古墳	玉名 出口	古墳	古墳
110	大坊寺跡	玉名 東屋敷	中世	寺社
111	大坊五輪塔群	玉名 大坊	中世	石造物
112	小畑六地蔵塔	石貫 小畑	中世	石造物
113	富尾中尾横穴群	富尾 中尾	古墳	古墳
114	上立願寺石天神	立願寺 塔の尾		寺社
115	富尾磨崖阿弥陀	富尾 原	中世	石造物
116	岡箱式石棺群	玉名 上原	弥生	埋葬
117	永安寺西古墳	玉名 (通称永安寺)	古墳	古墳
118	永安寺東古墳	玉名 (通称永安寺)	古墳	古墳
119	永安寺跡・永安寺古塔碑群	玉名 (通称永安寺)	中世	寺社
120	伝玉依姫塚	玉名 釈迦		石造物
121	馬出古墳(1～2号)	玉名 馬出	古墳	古墳
122	小路古墳	玉名 小路	古墳	古墳
123	絵下経塚古墳	玉名 絵下	古墳	古墳
124	人永・弘治の板碑群	玉名 浦小路	中世	石造物
125	元玉名横穴群	玉名 実権田	古墳	古墳
126	上小田古屋敷	上小田 古屋敷	縄文～中世	包蔵地
127	下小田西丸塚	下小田 陣の浦	古墳	古墳
128	下小田養寺丸塚	下小田 養寺	中世	墳墓
129	小森田松	山部田 猿喰	古代	包蔵地
130	長建寺跡	山部田 瀬戸坂	中世	寺社
131	諏訪宮跡	山部田 出羽	中世	寺社
132	小森田七右衛門墓	山部田 新宮	近世	墓
133	山下古墳・山下古墳碑	山部田 山下	古墳	古墳
134	高城	下 高城	古墳	包蔵地
135	下村城跡	下 高城	中世	城
136	秋丸	下 秋丸	弥生	包蔵地
137	松村・永島兄弟墓地	下 井尻	近世	墓

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
138	両迫間日渡	両迫間 日渡	弥生・古墳	包蔵地
139	徳丸古墳群	上小田 下徳丸など	古墳	古墳
140	上小田下丸塚	上小田 堂の後	古代	墳墓
141	上小田城跡	上小田下 徳丸など	中世	城
142	大宝院跡	下 和田	中世	寺社
143	金光寺跡	川部田 東屋敷	中世	寺社
144	海福寺跡	下 白丸	中世	寺社
145	養音寺跡	下小田 養寺	中世	寺社
146	普門寺跡	下 田中	中世	寺社
147	長慶寺跡	両迫間 上川端	中世	寺社
162	東南大門	築地 南大門	弥生～中世	包蔵地
172	高岡城跡・高岡古墳	山田 高頭	古墳～中世	包蔵地
173	高岡古墳	山田 高頭	古墳	古墳
174	高岡原	山田 高岡原	弥生・古墳	包蔵地
175	高岡いっちょう畑箱式石棺	山田 高岡原	弥生	埋葬
176	馬場鉄冑出土地	中尾 馬場	古墳	古墳
177	中尾馬場古塔碑群	中尾 馬場	中世	石造物
178	玉名高校々庭	中 榎林	弥生・古墳	包蔵地
179	田島地下式横穴	中 田島	古墳	古墳
180	春出丸塚	中 寺畑	中世	包蔵地
181	田島	中 田島	古墳	包蔵地
182	春出	中 陣内	古墳	包蔵地
183	春日山伏塚	中 春日出	古墳～中世	墳墓
184	南出	中 内田	弥生	包蔵地
185	南出地下式横穴	中 内田	古墳	古墳
186	南出甕棺群	中 内田	弥生	埋葬
187	だいの島古墳	中 (通称だいの島)	古墳	古墳
188	肥後同田貫刀鍛冶跡	亀甲 上畑・内田	中世	生産
189	肥後同田貫歴代刀工の墓	亀甲 上畑	中世	墓地
190	玉名亀甲	亀甲	縄文～中世	包蔵地
191	上畑丸塚	亀甲 上畑	縄文～中世	包蔵地
192	円秀寺跡	亀甲 東	中世	寺社
193	坂下会所跡	繁根木 馬場	近世	包蔵地
194	豪潮宝篋印塔	繁根木 堂の後	中世	石造物
195	高瀬藩土墓	繁根木 堂の後	近世	墓地
196	伝左山古墳	繁根木 北	古墳	古墳
197	繁根木地下式横穴群(4基)	繁根木 馬場	古墳	古墳
198	繁根木山寿福寺跡	繁根木 馬場	中世	寺社
200	稲荷山古墳(他4石碑)	繁根木 馬場	古墳	古墳
201	繁根木遺跡群	繁根木	弥生	包蔵地
202	繁根木貝塚	繁根木 馬場	縄文	貝塚
203	繁根木箱式石棺(繁根木古墳)	繁根木 馬場	古墳	埋葬
204	宝成就寺跡(古塔碑群・石仏群)	高瀬 下町	中世	包蔵地
205	西郷小兵衛戦死地	永徳寺 平	近代	軍事
206	高瀬御蔵・御米山床跡	永徳寺 馬場など	近世	蔵跡
207	高瀬船着場跡(高瀬津跡)	永徳寺 東河原	近世	包蔵地
208	高瀬御茶屋跡	永徳寺 出口	近世	包蔵地
209	大倉山永徳寺跡	永徳寺 出口	中世	寺社
210	高瀬眼鏡橋	高瀬 下町	近世	建造物
211	高瀬本町通	高瀬 保田木町など	縄文～近世	包蔵地
212	保田木貝塚	高瀬 保田木町	縄文	貝塚
213	保田木城跡・高瀬町奉行所跡	高瀬 保田木町	中世～近世	城
214	高瀬山清源寺跡	高瀬 保田木町	中世	寺社
215	龍造寺隆信首塚	高瀬 横町	中世	墳墓
216	大覚寺豪潮宝篋印塔	高瀬 横町	中世	石造物
217	高瀬菊池川河床	菊池川河床	古代・中世	包蔵地
218	高瀬藩邸・藩丁跡	岩崎 中岩原	近世	包蔵地
219	岩崎原	岩崎 (通称岩崎原)	弥生～中世	包蔵地
220	岩崎A	岩崎 池田	弥生～中世	包蔵地
221	岩崎城跡	岩崎 池田	中世	城
222	伝岩崎城主の墓	岩崎 池田	中世	墓
223	岩崎古墳	岩崎 池田	古墳	古墳
224	岩崎古墳参考地	岩崎 池田	古墳	古墳
225	池田地下式横穴群	岩崎 池田	古墳	古墳

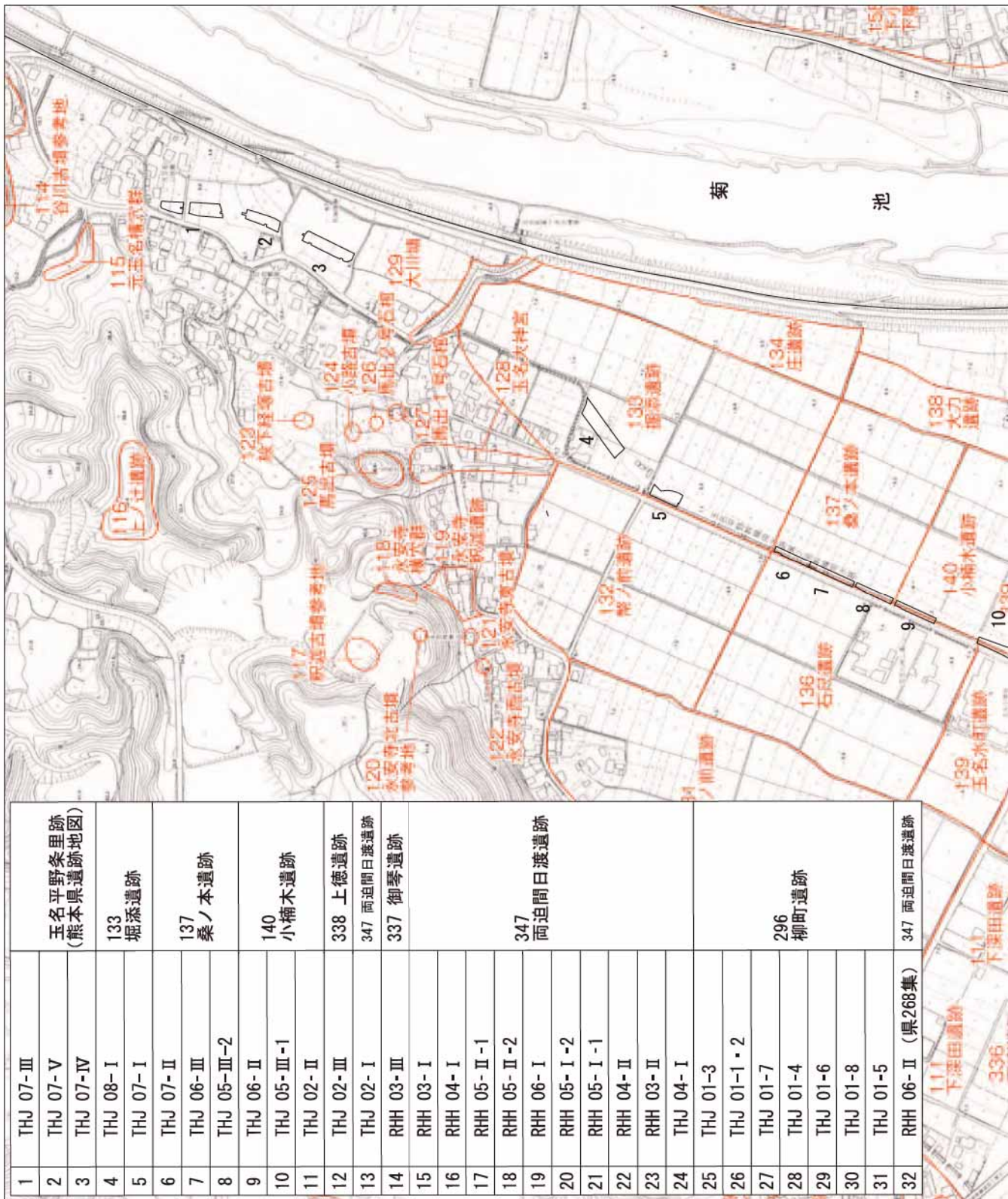
第1表 遺跡地名表1

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
226	松林寺山古墳	向津留 下	古墳	古墳
227	桃田貝塚	大倉 桃田原	縄文	貝塚
228	桃田古墳	大倉 桃田原	古墳	古墳
231	芭蕉句碑（秋風塚）	中 寺畑	近世	石造物
232	芭蕉句碑（時雨塚）	高瀬 横町	近世	石造物
233	金盆山玉飯寺跡	川崎 出の上	中世	寺社
234	池田支石墓参考地	岩崎 池田	弥生	埋葬
235	高瀬官塚墓地	高瀬 横町	近代	墓地
236	阿弥陀如来蹲立像	繁根木 馬場	中世	彫刻
237	長福寺跡	高瀬 八日町	中世	寺社
238	知忠院跡	中尾 馬場	中世	寺社
239	岩崎 B	岩崎 池田	縄文～中世	包蔵地
240	高瀬藩校自明堂跡	岩崎 中岩原	近世	包蔵地
241	玉名御郡所跡	繁根木 馬場	近世	包蔵地
242	飯塚古墳	向津留 飯塚	古墳	古墳
243	亀頭迫	大倉 亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地
244	木村鉄太の墓	大倉 亀頭迫	近代	墓
246	城が辻古墳群（1～5号）	寺田 城が辻	古墳	古墳
247	城が辻城跡	寺田 城が辻	中世	城
248	寺田古墳群（1～4号）	寺田 宇土	古墳	古墳
249	吉丸	寺田 吉丸	古代・中世	包蔵地
250	ナカント塚古墳	寺田 吉丸	古墳	古墳
251	吉丸西	寺田 吉丸	縄文～中世	包蔵地
252	久保地下式横穴	寺田 久保	古墳	古墳
253	寺田久保	寺田 久保	縄文～中世	包蔵地
254	世間部塚古墳	寺田 世間部	古墳	古墳
255	部田	津留 部田	弥生～中世	包蔵地
256	上津留古墳	津留 小部田	古墳	古墳
257	花群山吉祥寺跡	津留 堂園	中世	寺社
258	安楽寺跡	津留 太郎丸	中世	寺社
259	安楽寺居館跡	津留 太郎丸	中世	包蔵地
260	菅原神社の六地藏	津留 白柏子	中世	石造物
261	安楽寺	津留	中世	寺社
262	上津留	津留 部田	縄文～中世	包蔵地
263	朝日寺跡	安楽寺 生見	中世	寺社
265	随月古墳	安楽寺 随月	古墳	古墳
266	善心寺跡	下 平野	中世	寺社
267	賢長寺跡	下 桑迫	中世	寺社
268	金盆山玉飯寺跡	川崎 畑尾	中世	寺社
269	金地山松林寺跡	向津留 下	中世	寺社
270	津留中林	津留 中林	縄文～中世	包蔵地
278	中神久	安楽寺 中神久	古代・中世	包蔵地
388	名称不明			
390	名称不明			
391	名称不明			
392	名称不明			
393	名称不明			
394	名称不明			
395	名称不明			
396	名称不明			
397	名称不明			
398	名称不明			
399	大坊	玉名 大坊		
400	名称不明			
401	名称不明			
402	名称不明			
403	名称不明			
404	名称不明			
408	名称不明			
409	名称不明			
410	名称不明			
411	名称不明			
412	高岡原丁	山田 高岡原	縄文	包蔵地
413	名称不明			

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
414	両迫間西屋敷	両迫間字西屋敷		
415	川部田	川部田 下小田		
416	名称不明			
417	名称不明			
418	名称不明			
419	名称不明			
420	新官宮前	山部田	弥生・古代	包蔵地
421	名称不明			
422	名称不明			
423	名称不明			
427	名称不明			
429	名称不明			
430	名称不明			
431	名称不明			
432	名称不明			
433	名称不明			
434	瀬萩	安楽寺 瀬萩	古代～中世	包蔵地
435	祭田下	津留 祭田下	古代～近世	包蔵地
436	名称不明			
437	名称不明			
438	名称不明			
439	名称不明			
440	寺田山口	寺田 山口	縄文～近世	包蔵地
441	名称不明			
442	名称不明			
482	柳町	玉名市河崎柳町	縄文～平安	集落
483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産
484	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
486	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
487	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
488	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
489	玉名平野条里跡		古代・中世	生産
490	平嶋遺跡			
491	吉丸前	寺田 吉丸前	縄文～中世	包蔵地
493	群前	寺田 群前		
495	鋸技	安楽寺 船島ほか	弥生～古代	
496	小園	石貴 小園	中世	
497	西屋敷	玉名 西屋敷		
498	上ノ辻	玉名 上ノ辻		

熊本県（43） 岱明町（361）				
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
060	北尾崎	野口 北尾崎	弥生	包蔵地
062	貴船東	野口 貴船	弥生	包蔵地
063	尾崎	野口 尾崎	弥生後晩期	包蔵地
064	尾崎貝塚	野口 尾崎	縄文	貝塚
069	大原五輪塔	野口 大原	中世	石造物
073	狩塚	野口 北尾崎	中世	経塚

第2表 遺跡地名表2

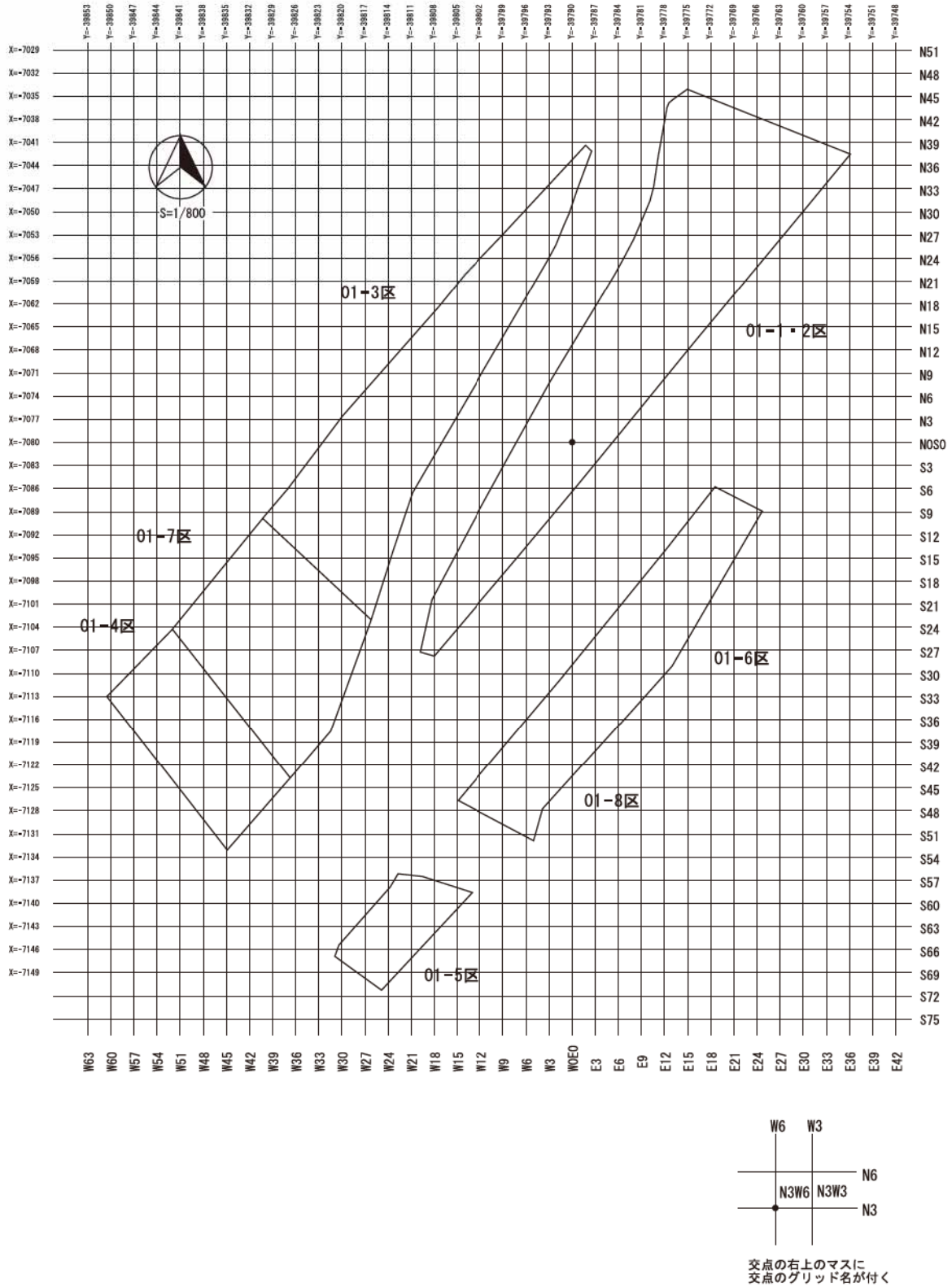


1	THJ 07-III	玉名平野条里跡 (熊本県遺跡地図)
2	THJ 07-V	
3	THJ 07-IV	
4	THJ 08-I	133 堀添遺跡
5	THJ 07-I	137 桑ノ本遺跡
6	THJ 07-II	
7	THJ 06-III	140 小楠木遺跡
8	THJ 05-III-2	
9	THJ 06-II	338 上徳遺跡
10	THJ 05-III-1	
11	THJ 02-II	347 両迫間日渡遺跡
12	THJ 02-III	
13	THJ 02-I	337 御琴遺跡
14	RHH 03-III	
15	RHH 03-I	347 両迫間日渡遺跡
16	RHH 04-I	
17	RHH 05-II-1	296 柳町遺跡
18	RHH 05-II-2	
19	RHH 06-I	347 両迫間日渡遺跡
20	RHH 05-I-2	
21	RHH 05-I-1	347 両迫間日渡遺跡
22	RHH 04-II	
23	RHH 03-II	347 両迫間日渡遺跡
24	THJ 04-I	
25	THJ 01-3	347 両迫間日渡遺跡
26	THJ 01-1・2	
27	THJ 01-7	347 両迫間日渡遺跡
28	THJ 01-4	
29	THJ 01-6	347 両迫間日渡遺跡
30	THJ 01-8	
31	THJ 01-5	347 両迫間日渡遺跡
32	RHH 06-II (県268集)	

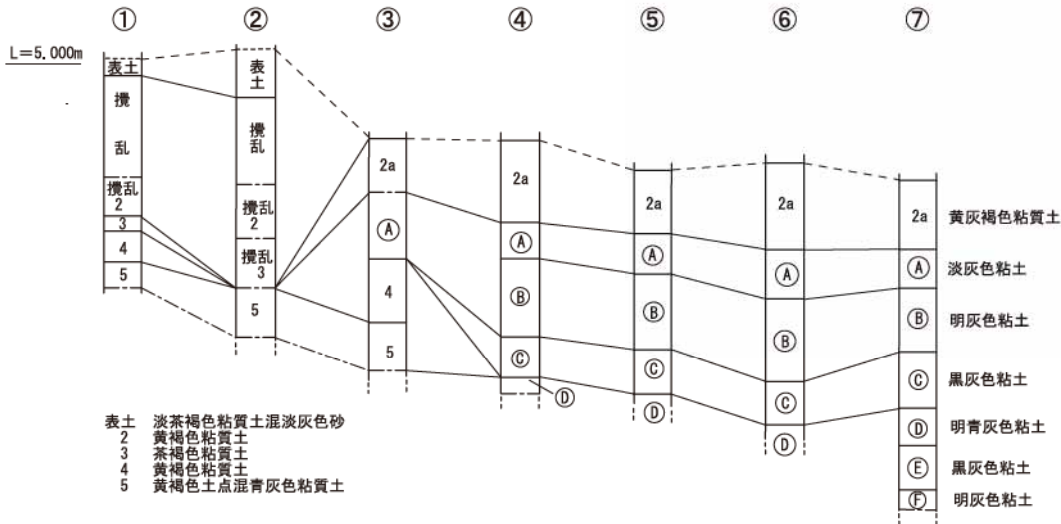
第3図 遺跡範囲図2 (玉名市遺跡地図)

年度 調査区	平成12 (2000)	平成13 (2001)	平成14 (2002)	平成15 (2003)	平成16 (2004)	平成17 (2005)	平成18 (2006)	平成19 (2007)	平成20 (2008)
07-Ⅲ								■	
07-Ⅴ								■	
07-Ⅳ								■	
08-Ⅰ									■
07-Ⅰ								■	
07-Ⅱ								■	
06-Ⅲ (07-Ⅱ)							■	■	
05-Ⅲ-2						■			
06-Ⅱ							■		
05-Ⅲ-1						■			
02-Ⅱ			■						
02-Ⅲ			■						
02-Ⅰ			■						
03-Ⅲ				■					
03-Ⅰ				■					
04-Ⅰ					■				
05-Ⅱ-1						■			
05-Ⅱ-2						■			
06-Ⅰ							■		
05-Ⅰ-2						■			
05-Ⅰ-1						■			
04-Ⅱ					■				
03-Ⅱ				■					
04-Ⅰ					■				
01-Ⅰ	■	■							
01-Ⅱ	■	■							
01-Ⅲ	■	■							
01-Ⅳ	■	■							
01-Ⅴ	■	■							
01-Ⅵ	■	■							
01-Ⅶ	■	■							
01-Ⅷ	■	■							
玉名の平城跡				■					

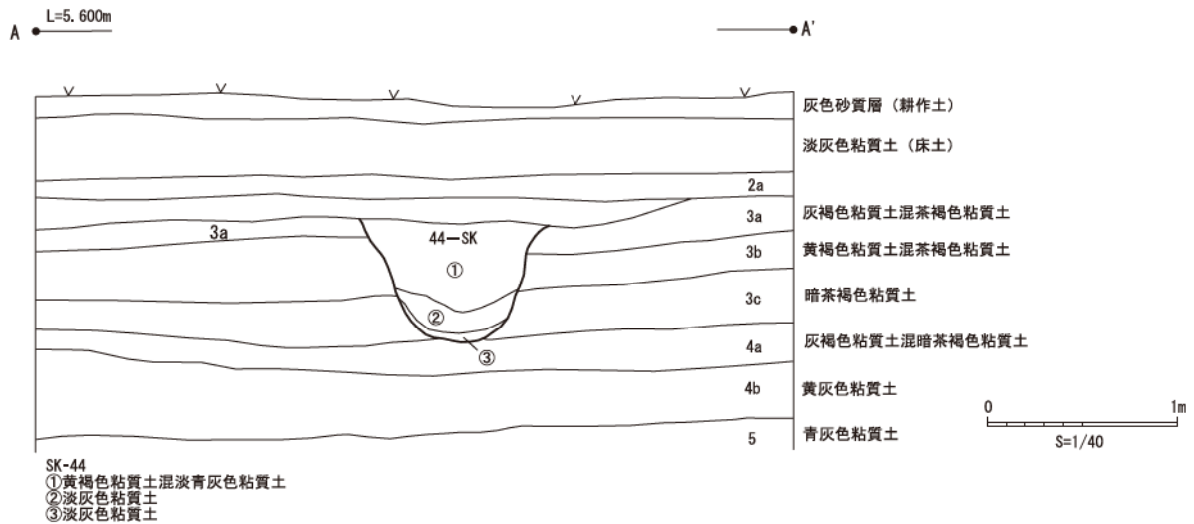
第3表 調査時期



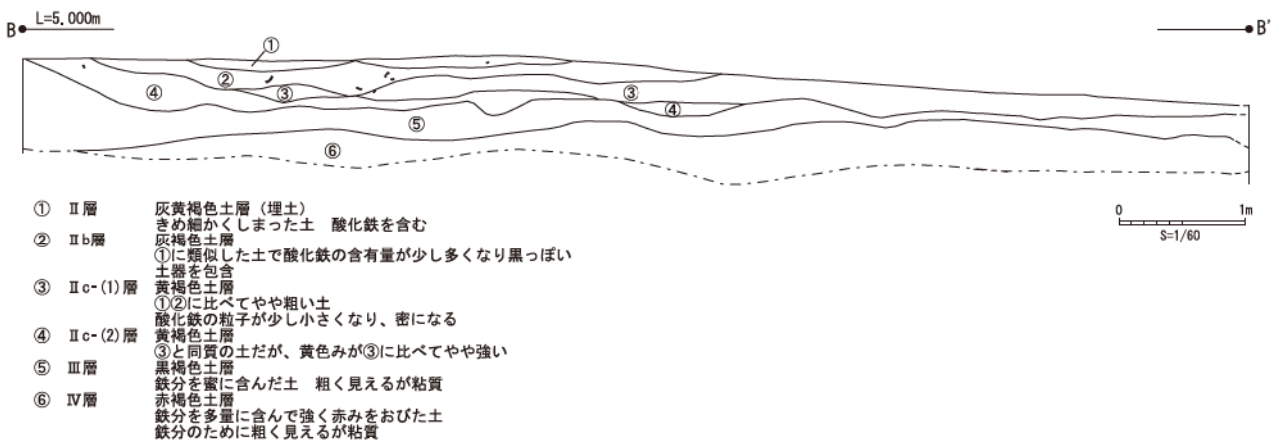
第 4 図 玉名平野条里跡 01-1～8 区 グリッド図



玉名平野条里跡01-2区 西壁土層柱状図



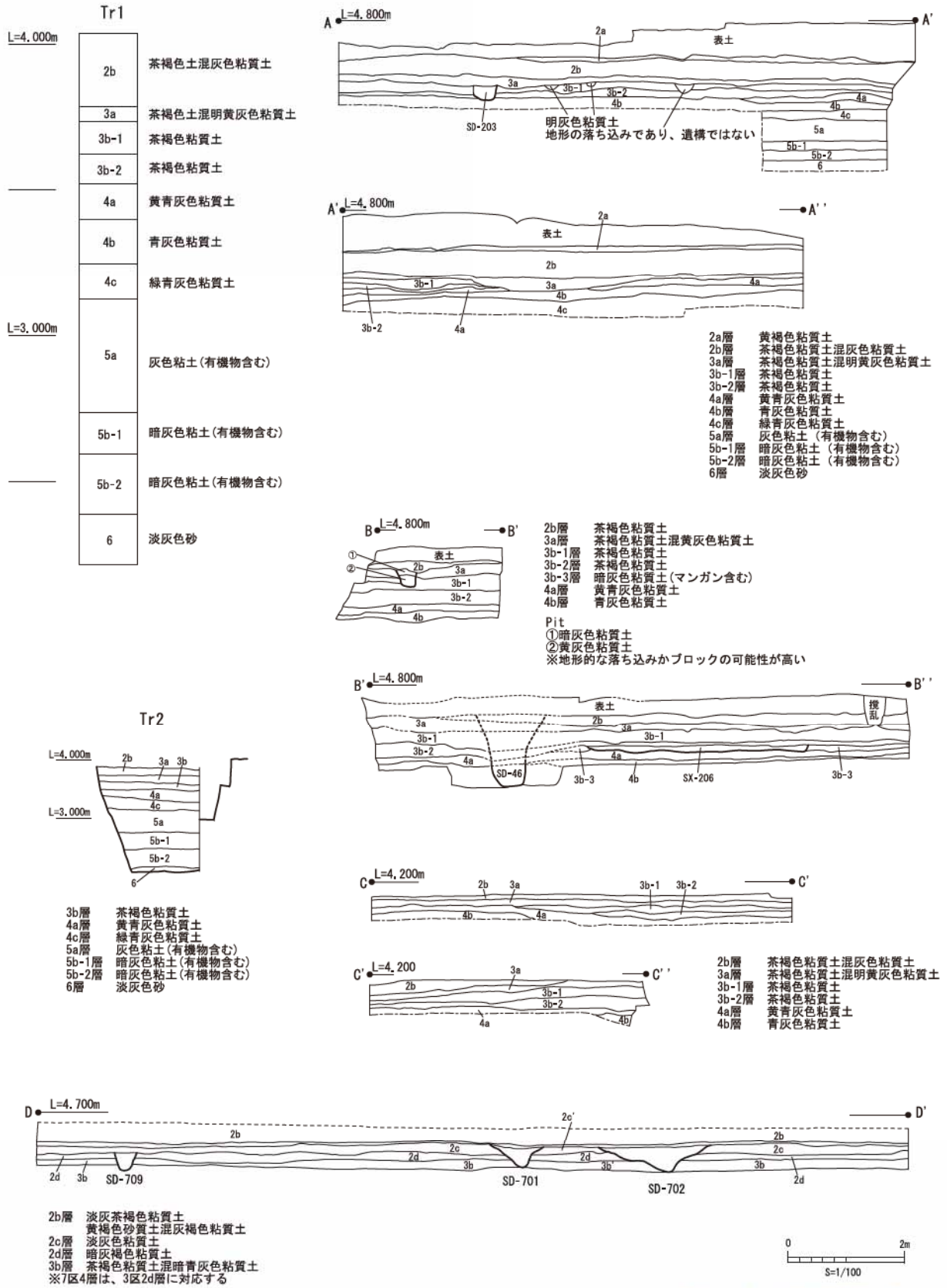
玉名平野条里跡01-1区 トレンチ東壁土層断面図



SX-13・14 東壁土層

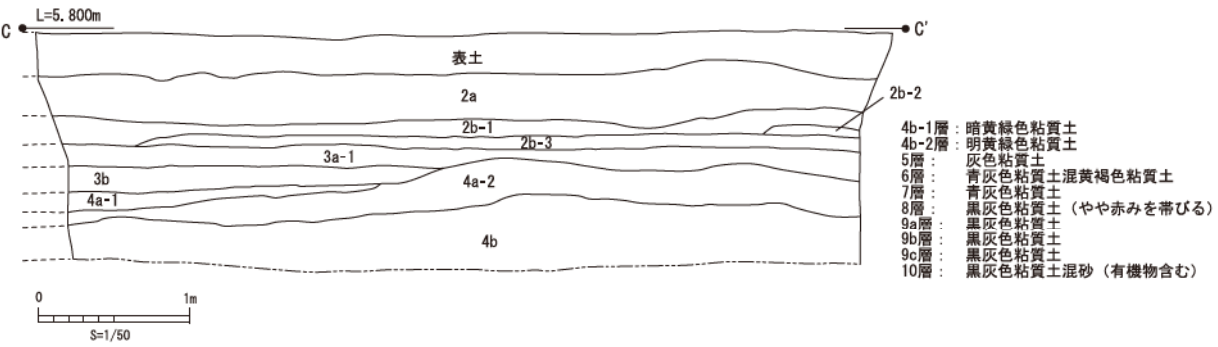
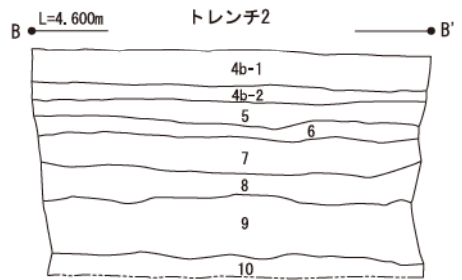
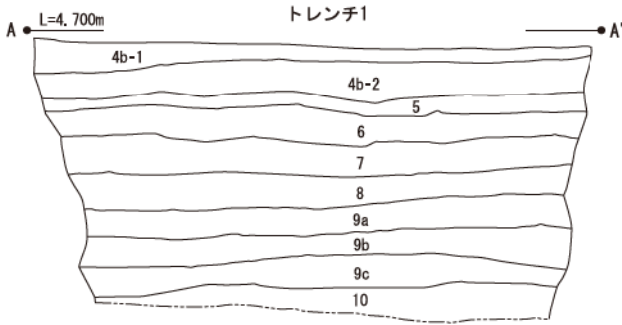
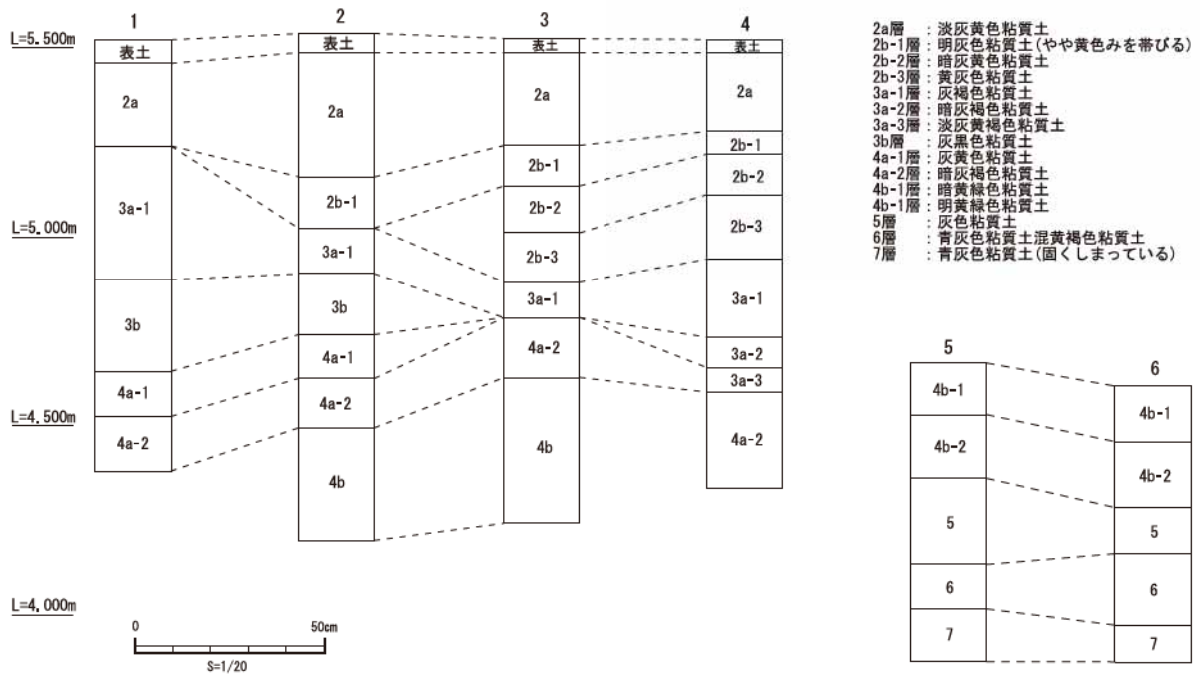
(①~⑦・A-A'・B-B' は第 34 図参照)

第 5 図 玉名平野条里跡 01-2 区 西壁土層柱状図
01-1 区 トレンチ東壁土層断面図・SX-13・14 東壁土層断面図

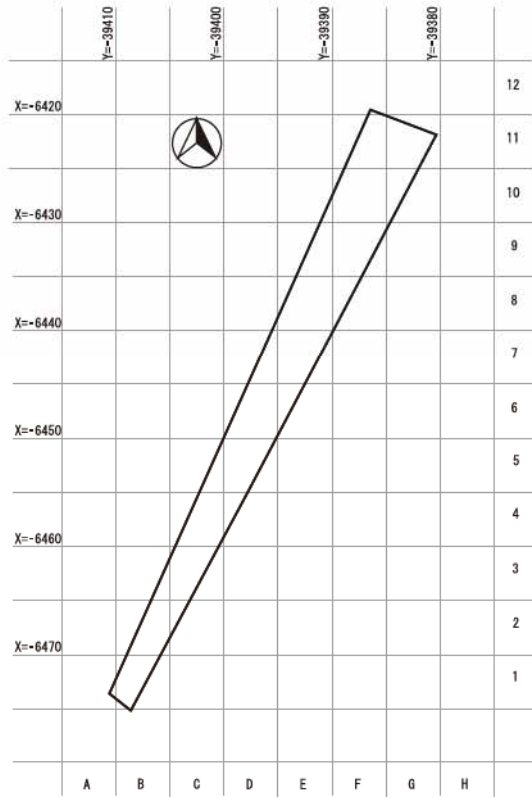


第6図 玉名平野条里跡 01・4・7区 柱状図・土層断面図

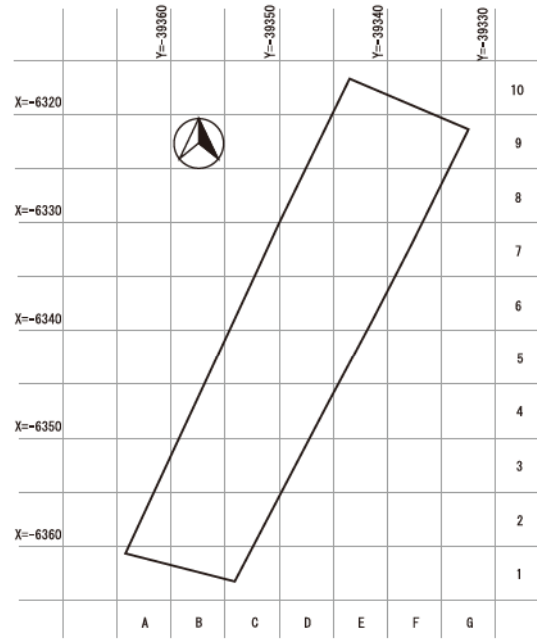
土層柱状図



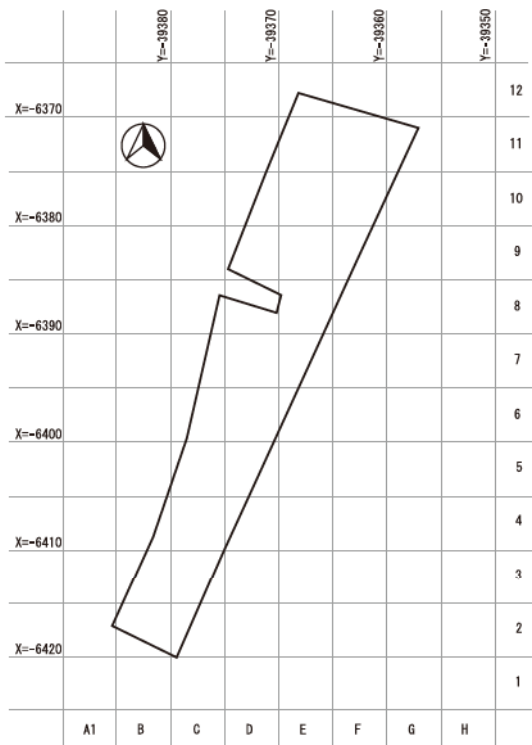
第 7 図 玉名平野条里跡 01-6 区 土層柱状図・トレンチ 1・2 土層図



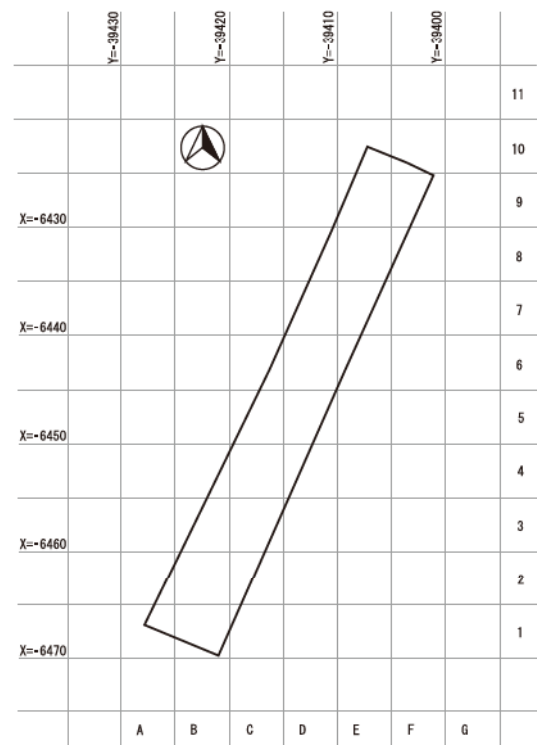
玉名平野条里跡 02- I 区



玉名平野条里跡 02- II 区

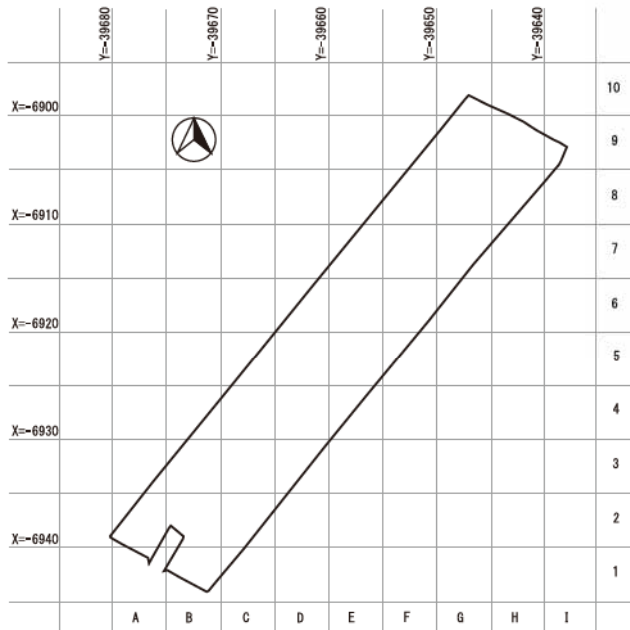


玉名平野条里跡 02- III 区

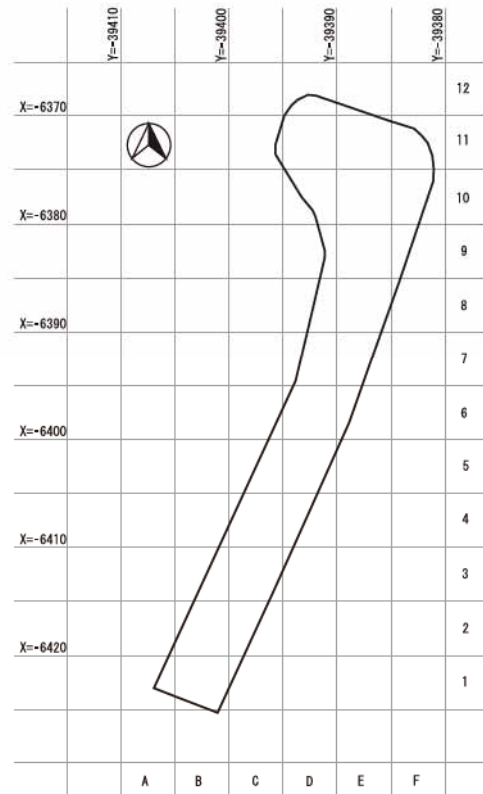


両迫間日渡遺跡 03- I 区

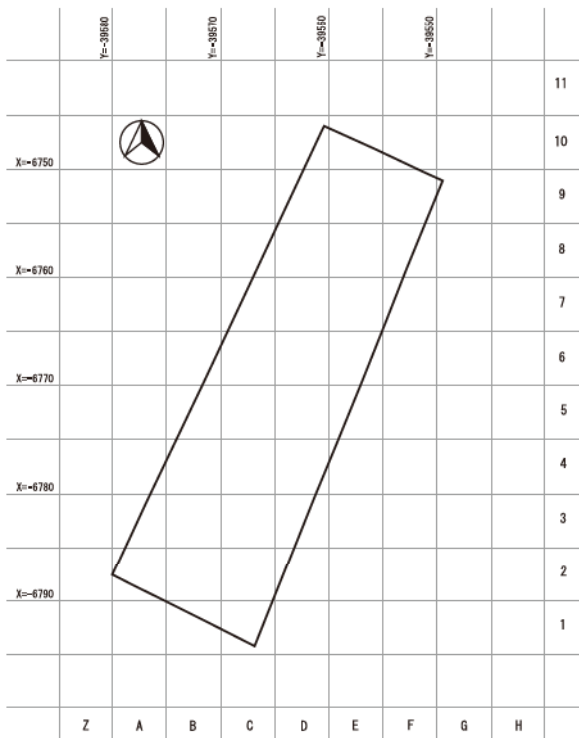
第 8 図 グリッド図 1 (S=1/700)



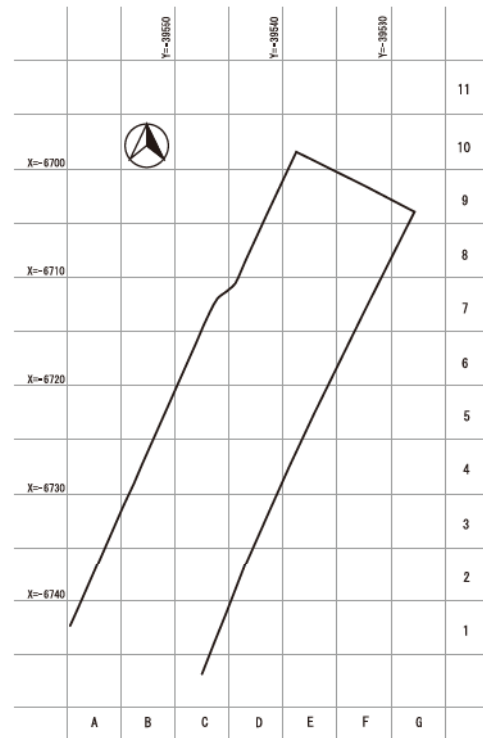
両迫間日渡遺跡 03-II区



両迫間日渡遺跡 03-III区

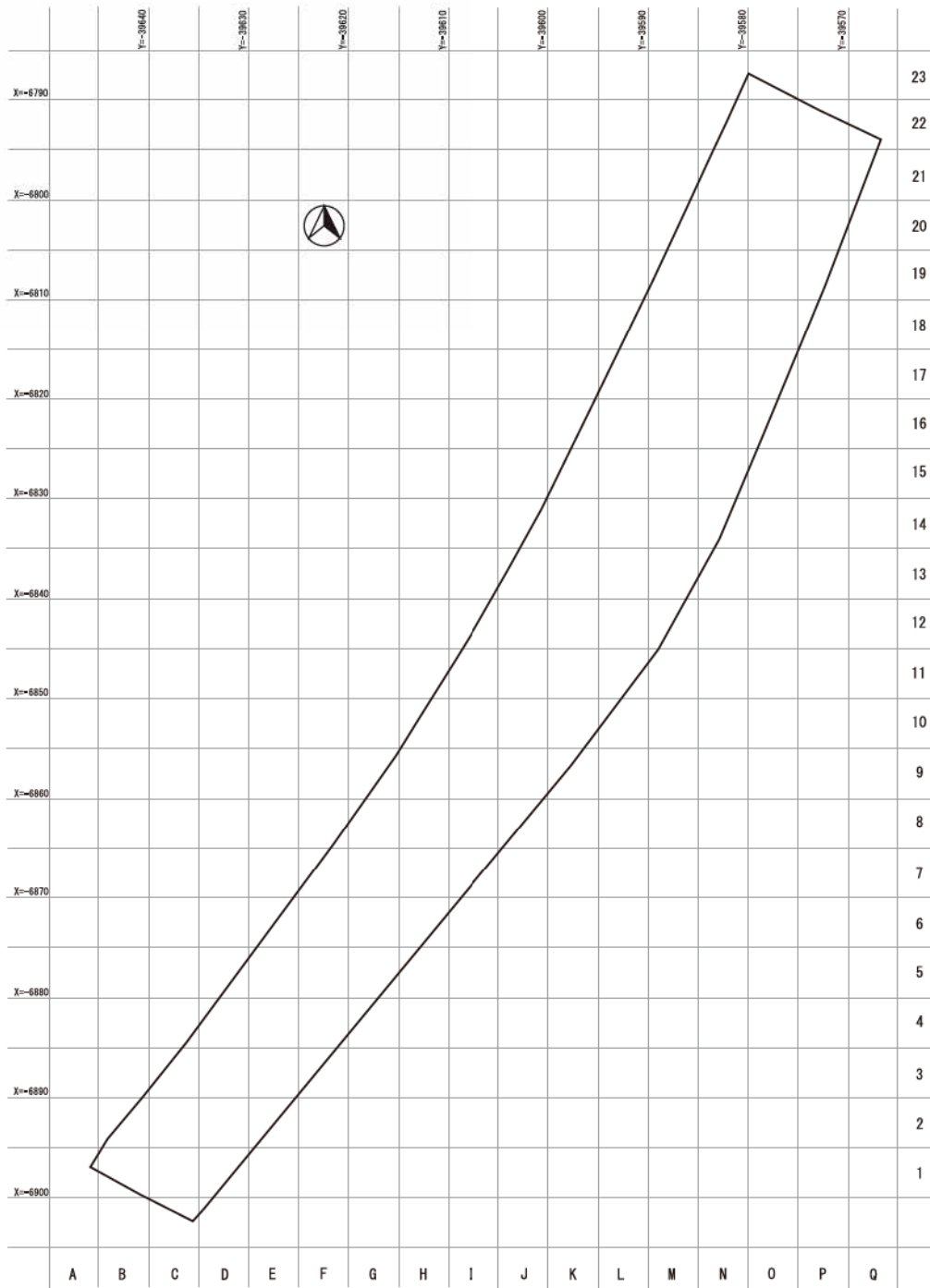


両迫間日渡遺跡 05-I-1区



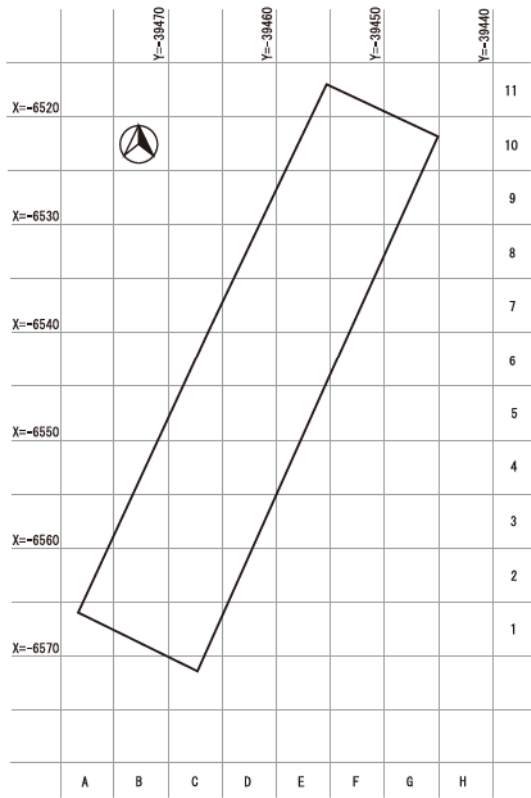
両迫間日渡遺跡 05-I-2区

第9図 グリッド図2 (S=1/700)

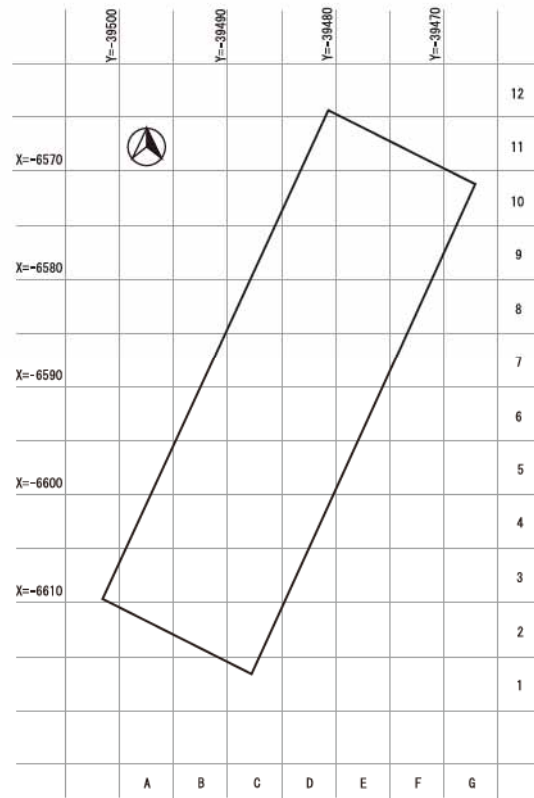


両迫間日渡遺跡 04-II 区

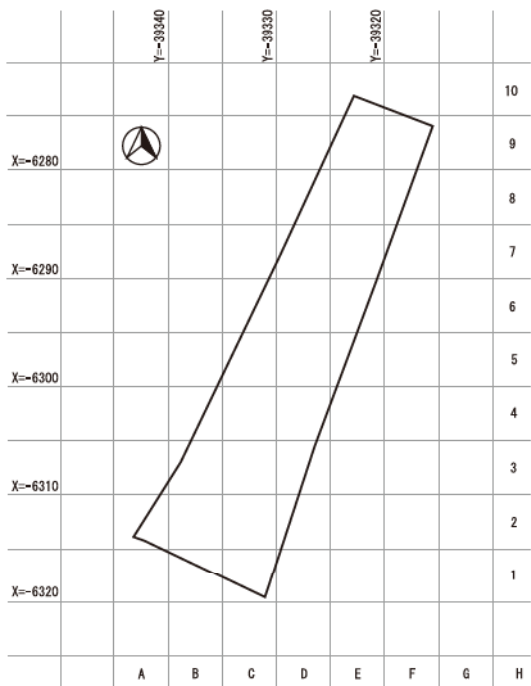
第 10 図 グリッド図 3 (S=1/700)



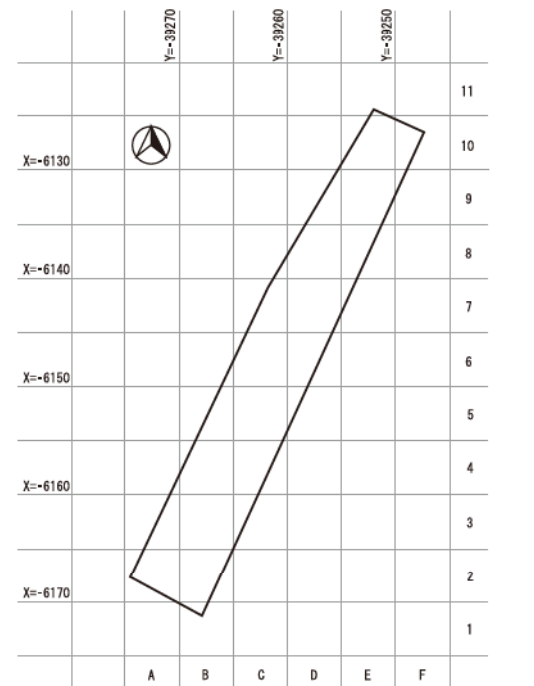
両迫間日渡遺跡 05-II-1区



両迫間日渡遺跡 05-II-2区

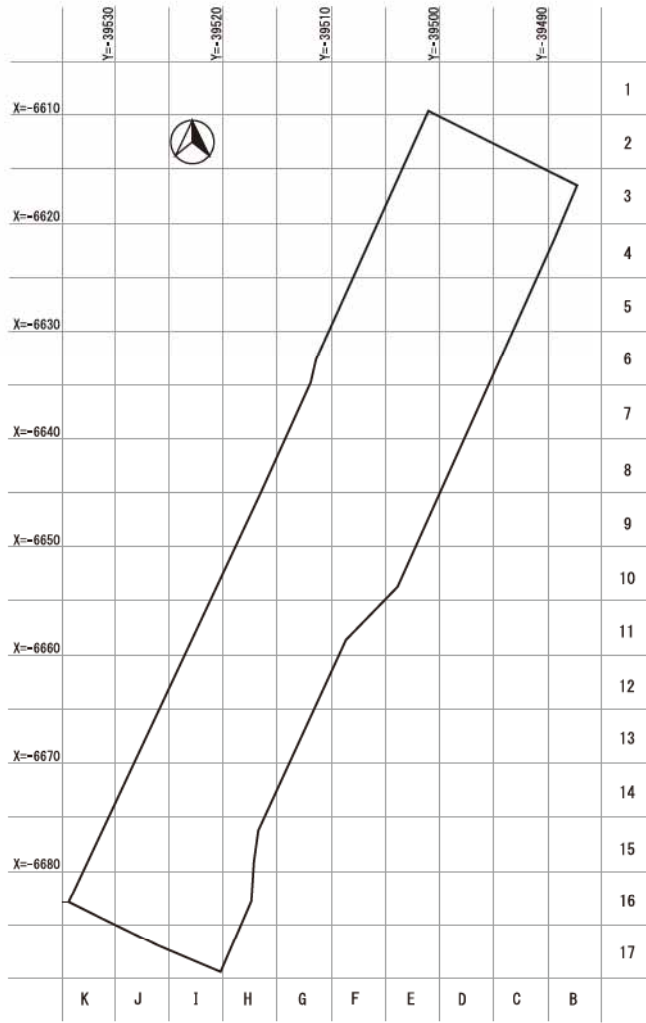


玉名平野条里跡 05-III-1区

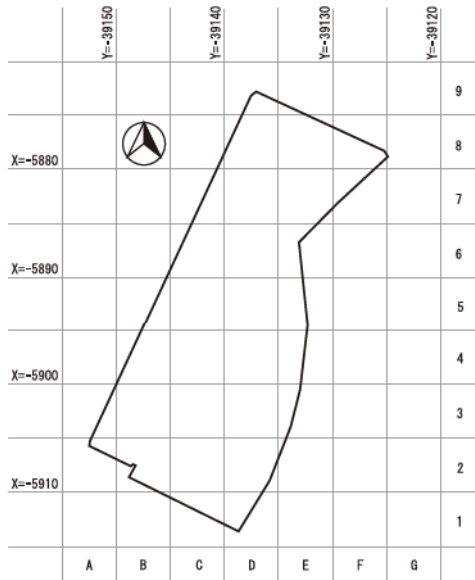


玉名平野条里跡 05-III-2区

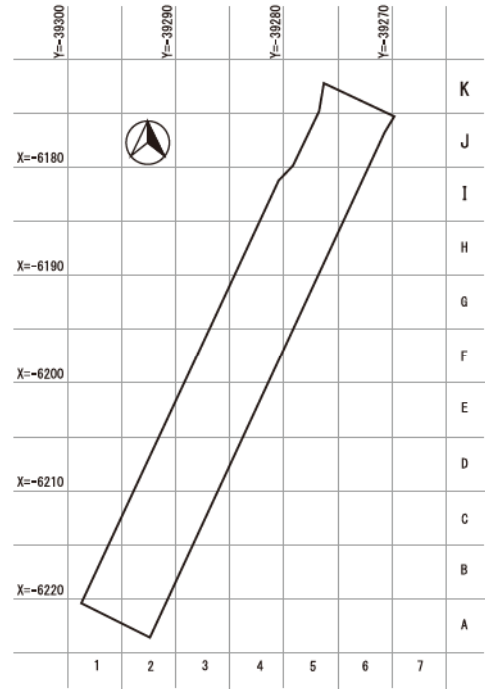
第 11 図 グリッド図 4 (S=1/700)



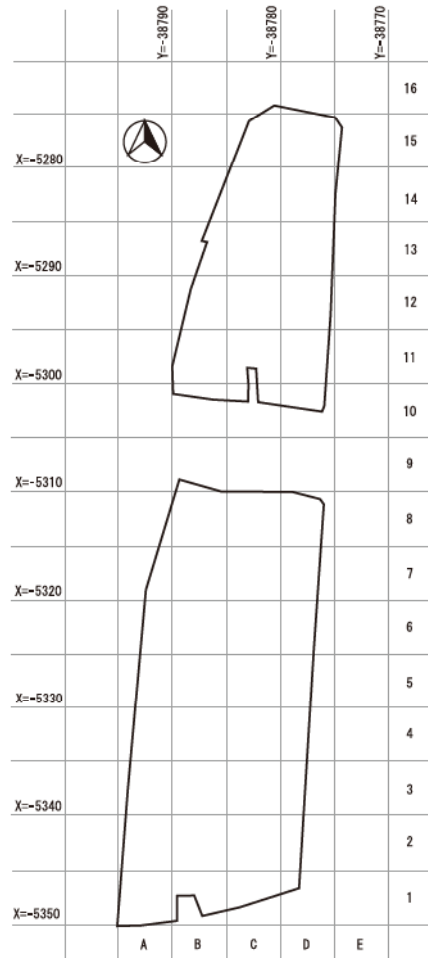
両迫間日渡遺跡 06- I 区



玉名平野条里跡 07- I 区

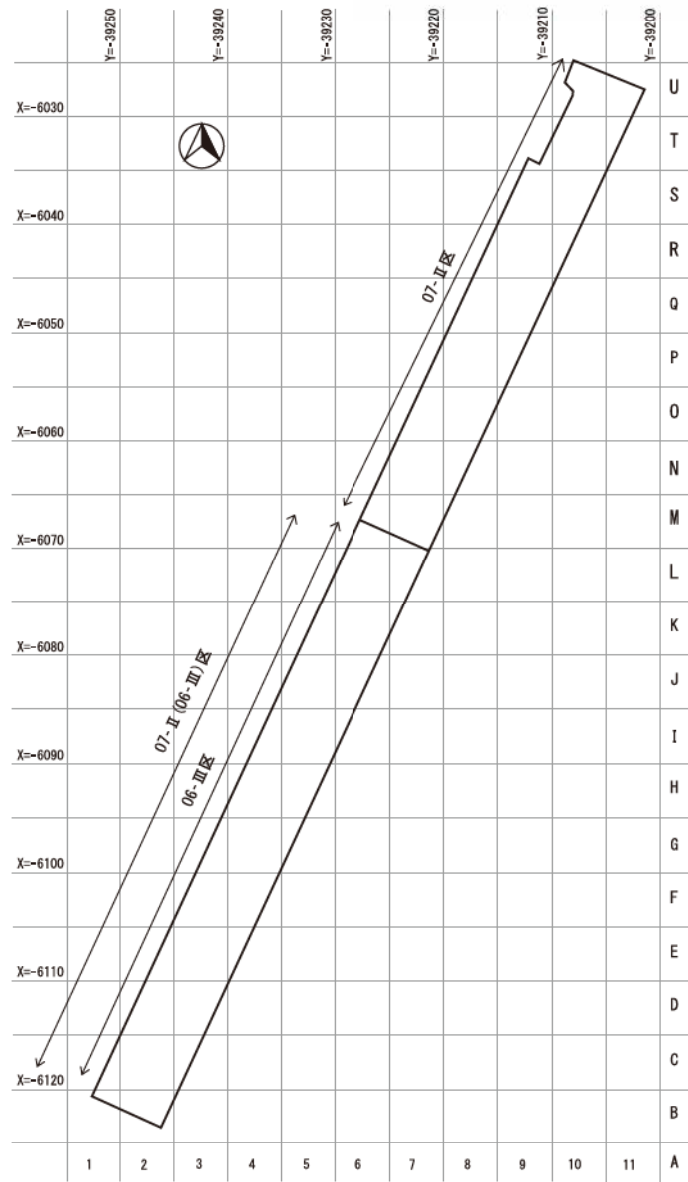


玉名平野条里跡 06- II 区



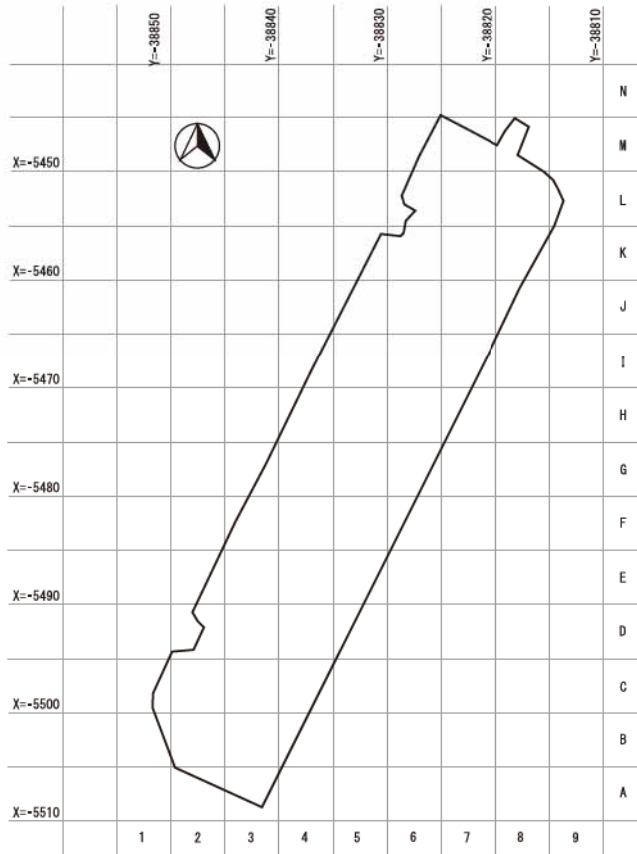
玉名平野条里跡 07- III 区

第 12 図 グリッド図 5 (S=1/700)

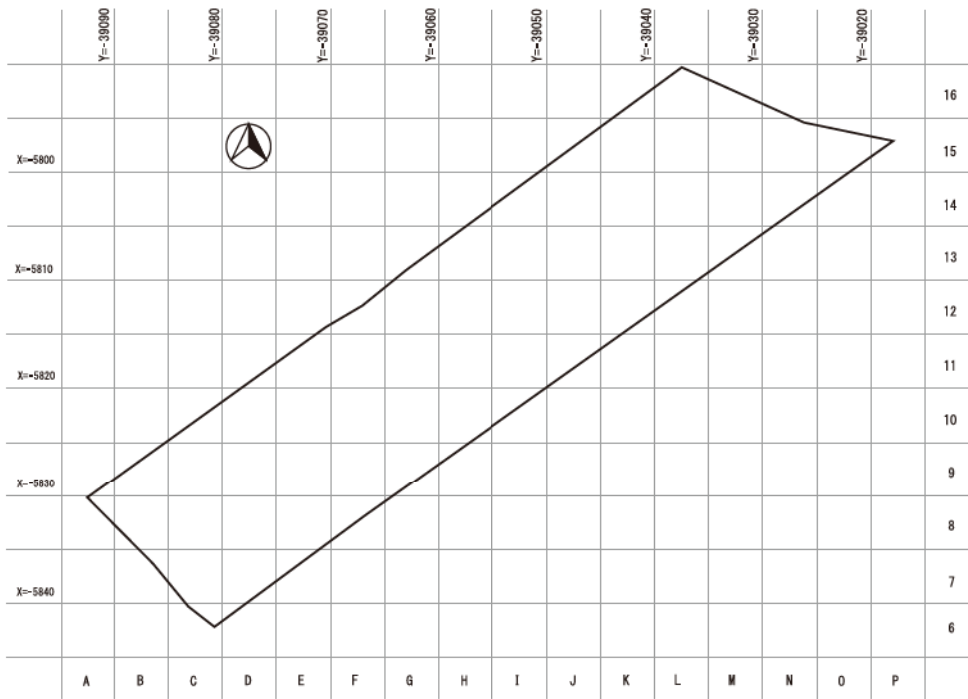


玉名平野条里跡 06-III・07-II

第13図 グリッド図6 (S=1/700)

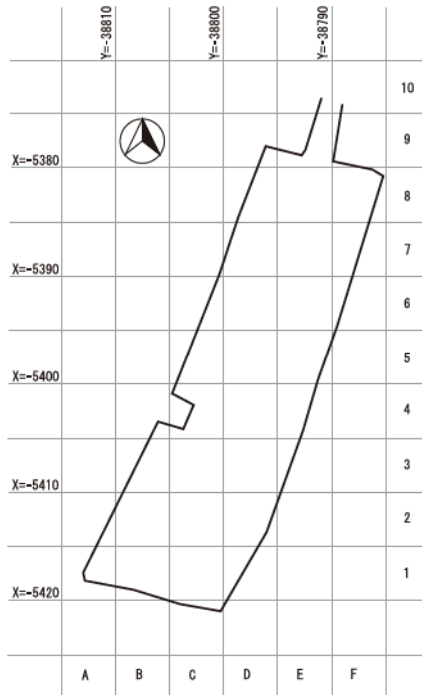


玉名平野条里跡 07-IV区

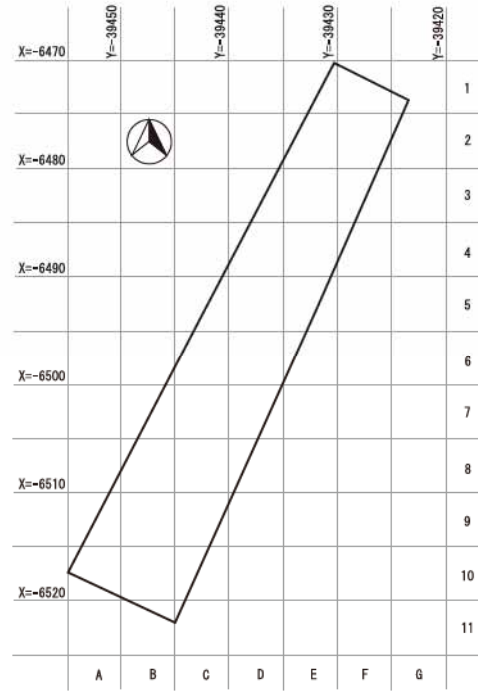


玉名平野条里跡 08- I 区

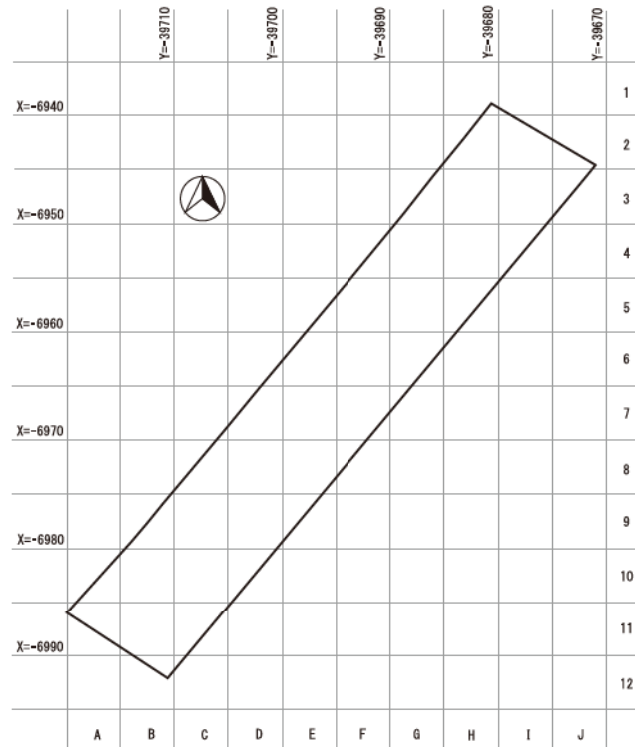
第 14 図 グリッド図 7 (S=1/700)



玉名平野条里跡 07-V区

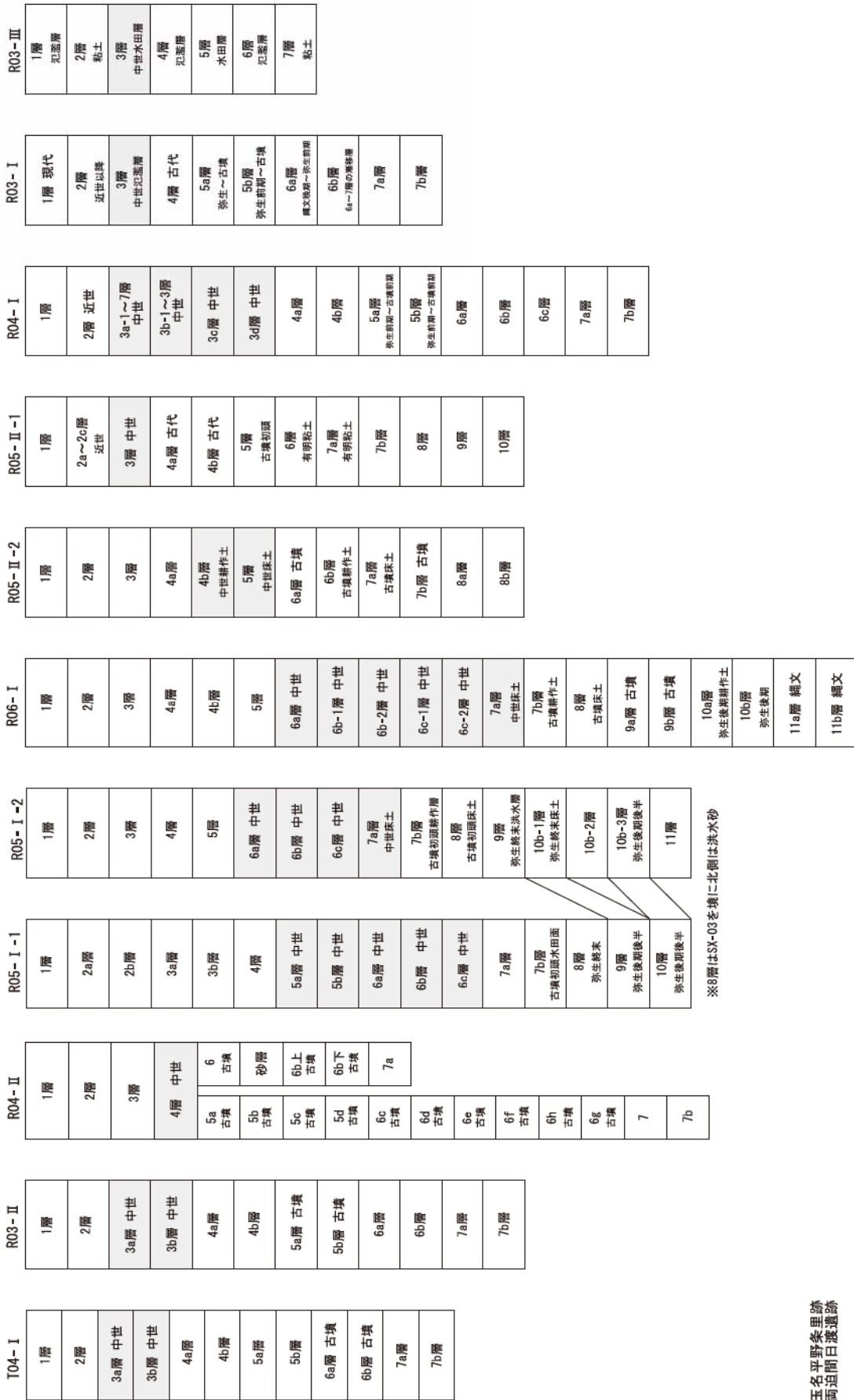


両迫間日渡遺跡 04-I区



玉名平野条里跡 04-I区

第 15 図 グリッド図 8 (S=1/700)



T = 玉名平野条里跡
R = 岡迫間日處遺跡

調査区の南から北の順に掲載

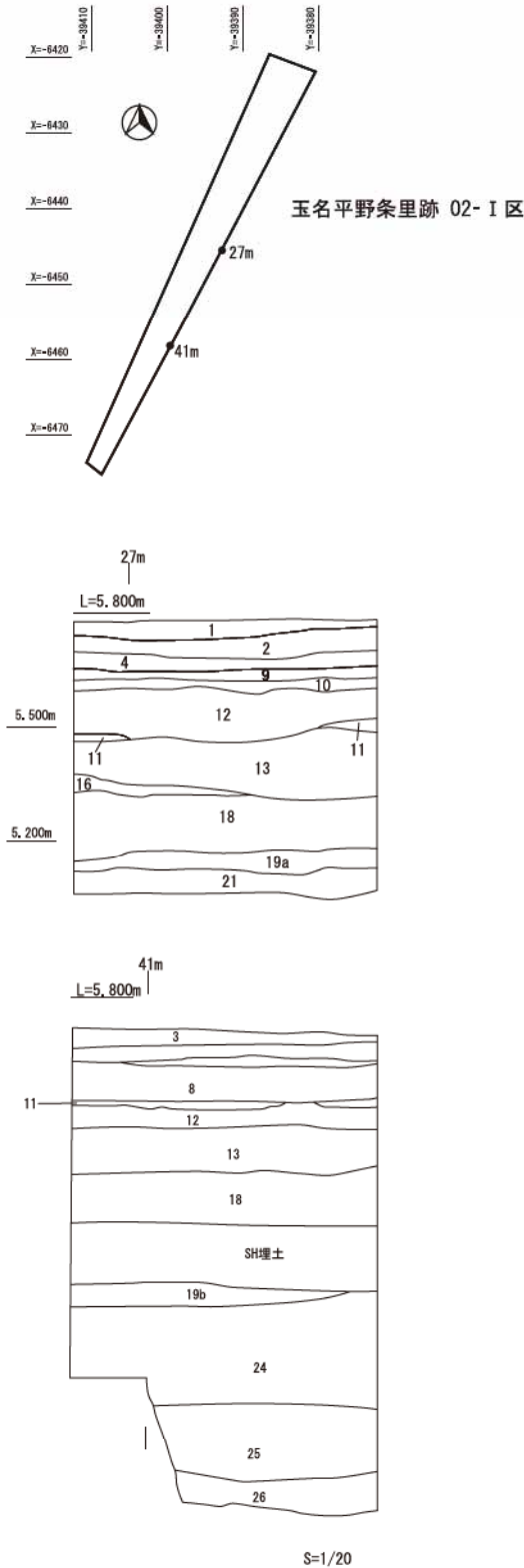
第 16 図 土層柱状図 (2002~2008 年度) 1



T = 玉名平野奈良里跡
R = 両迫間日渡遺跡

調査区の南から北の順に掲載

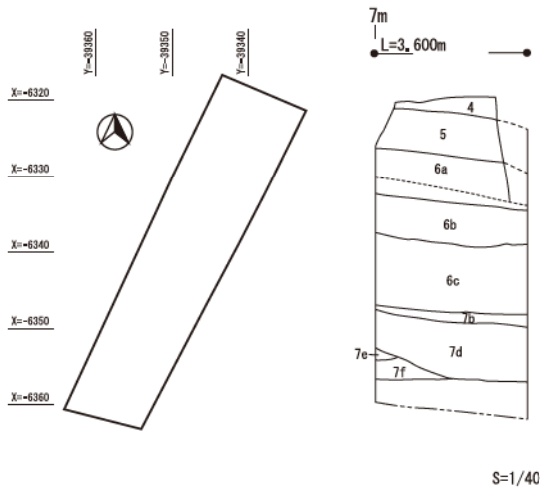
第17図 土層柱状図 (2002~2008年度) 2



- 1 10R6/2 灰赤色粘質土 現代の耕作土か
- 2 7.5YR6/1 褐灰色粘質土
灰白色砂を含む Mnを多少含む Feが一部帯状に入る耕作土
- 3 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
灰白色砂を多く含む
一部帯状に入り面的に広がる可能性もあるが検出不可
一部ラミナ状堆積。Mn含む Fe帯状に入る
- 4 7.5YR6/2 灰褐色粘質土 3層より粘質が強い
灰白色の砂層土を含み、一部帯状に入り面的に広がる可能性あり
3層と同程度Mnを含む Fe一部帯状に入る
- 5 10YR5/1 褐灰色粘質土
灰白色の砂質土を帯状又はラミナ堆積。
2層と同程度全体にFeを柱状に多く含み硬くしまる
- 6 2.5Y6/2 灰黄色粘質土
灰白色の砂質土が一部帯状に入る
Mnを3層と同程度含む Fe全体にまじりやや赤味
- 7 7.5YR7/3 にぶい橙粘質土
灰白色の砂を帯状に含む Mnを少量含む(2層より少ない)
Feを含む。
- 8 7.5YR7/3 にぶい橙粘質土
7層より粘質が強い 灰白色の砂が混じる 一部ラミナ堆積
Mnを7層と同程度含む(粒状)が7層より少量
- 9 10YR6/3 にぶい黄橙粘質土
灰褐色粘質土ブロックを含む 幅1cm弱のFeの沈澱層がみられる
4層との層理面に灰白色砂質土が混じる
Feの沈澱層が最も明確に見られる
灰褐色の粘質土床土のまきあげと思われる耕作土
- 10 10R7/1 明赤灰色粘質土
Mnを含む Feを粒状に含む 灰白色の砂質土が一部帯状に入る耕作土 第一次水田面(近世18c以後か?)
- 10b 10R7/1 明赤灰色粘質土 10層に似る粗い砂を含む
- 10c 10R7/1 明赤灰色粘質土 10層に似る
10bよりやや鉄分が少ない
- 11a 5YR5/1 褐灰色砂質土
細砂に粗砂を含む。Mn・Feを含む
- 11b 5YR5/1 褐灰色粘質土
粗砂を含む Mn・Feを含む(溝か?)
- 11 7.5YR5/1 褐灰色シルト
やや粘質 Mn・Feを含む 10層の床土か?
- 12 10YR5/1 褐灰色シルト
Mn・Feを多く含む
13層まきあげと思われる粘質土のブロックを含む
13層の覆土
- 13 N5/ 灰色粘質土
粗砂を含む Mn・Feを含む
第二次水田面(中世14c前~半ば)
- 14 N6/ 灰色粘質土
粗砂・細砂を多量に含む Feを含む 流路の一部
- 15 N6/ 灰色土
14層に似る ほとんど粗砂 流路の一部
- 16 10YR5/1 褐灰色粘質土
Mn・Feを含む 灰白色の粗砂をブロック状に含む
流路の一部
- 17 5YR5/1 褐灰色粘質土
灰白色の粗砂を含み、Feの1~2cm大に沈澱した塊を含む
- 18 10YR5/1 褐灰色粘質土
細砂含む Mn・Feを含む
南側にいくにしたがい、細砂を含まなくなる
- 19a 10YR4/4 褐色粘土 Mn・Feを多く含む
- 19b 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 Mn・Feを多く含む
- 20 10YR4/4 褐色粘土
19a層に似るが暗褐色のMnを多く含み、硬い
- 21 7.5YR4/1 褐灰色土
粘質土に粗い砂粒を多く含み、FeやMnの沈澱が多くみられる
- 22 5Y5/2 灰オリーブ色粘土
有明粘土への漸移層と考えられるが、
図中45m付近から南へ行くに従い、
Mnの量が多くなり黄褐色が強くなる
- 23 10YR4/4 褐色土 粘土だがMnを多量に含み硬い
- 24 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
しまり小・粘性大 鉄分が沈着する
- 25 5B4/1 暗青灰色粘土
しまり小・粘性大
- 26 10GY6/1 緑灰色粘土
しまり小・粘性大 植物の繊維状のものを含む

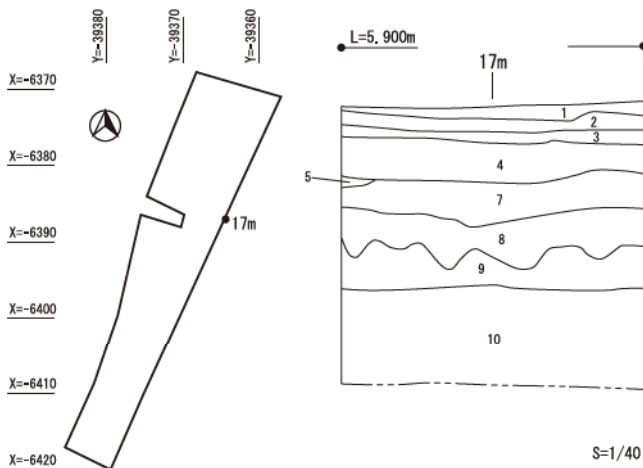
第 18 図 基本土層図 1

玉名平野条里跡 02-II 区



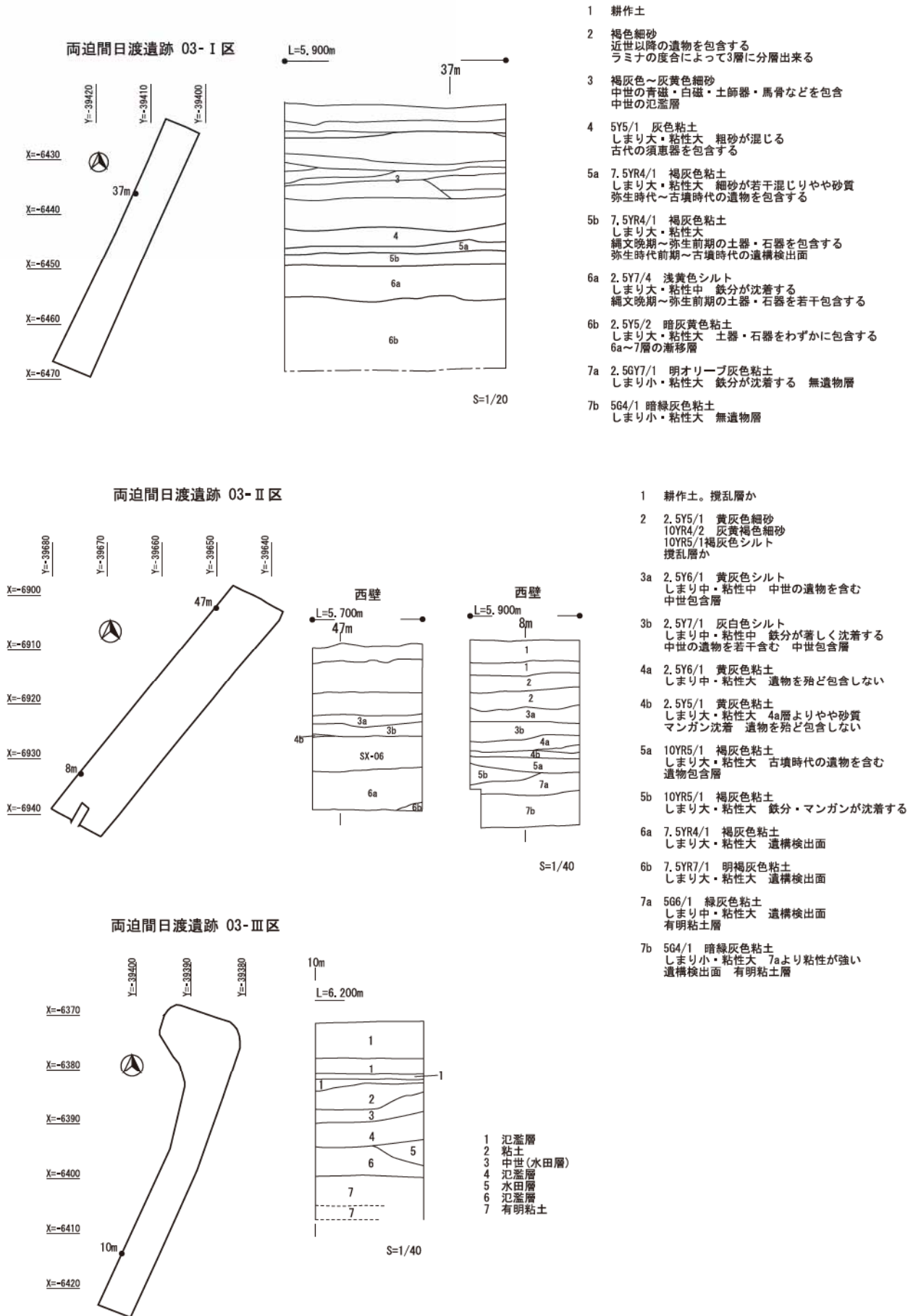
- 1 記載なし
- 2 記載なし
- 3 記載なし
- 4 2.5Y5/1 黄灰色粘質土
非常に細かい砂粒を含み、植物遺体をわずかに含む
植物を含む
- 5 2.5Y4/2 暗灰色土
おびただしい量の植物遺体を含む
木片・木葉・木実、ほとんど腐葉土状態である 遺物を含む
- 6a 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土
わずかに遺物を含む
- 6b 10Y4/1 灰色粘質土
時間とともに2.5Y6/4にぶい黄色に変化する
遺物を含まない
- 6c 5GY3/1 暗オリーブ灰色砂質土
きめ細かいが粘性はなく硬くしまった感じ
ザクザクッ、ガリガリッと掘れる
時間とともに、にぶい黄色に変化する
まだらに10G3/1暗緑灰色の色が入る
- 6d 5GY2/1 オリーブ黒色砂質土
きめ細かいが粘性はない
6c層ほど硬い感じはなくサクッとしている
- 6e 5GY3/1 暗オリーブ灰色土 6c層に似る
- 7a 2.5Y5/2 暗灰色粘質土
- 7b 10YR3/3 暗褐色土 7e層に似る
- 7c 10YR3/3 暗褐色土
7f層に似るが、7f層より砂が多く入る
- 7d 7.5YR2/1 黒褐色土
5層に似る。おびただしい量の植物遺体を含む
- 7e 10YR3/3 暗褐色土
わずかに粘性を帯び、植物遺体を多く含む
- 7f 10YR3/3 暗褐色土
わずかに粘性を帯び、植物遺体を多く含む
ラミナ構造状に砂層が入る
- 7g 7.5YR2/3 極暗褐色土
多量の植物遺体を含む ラミナ構造状に砂層が入る
- 8 2.5Y3/1 黒褐色土 砂層
- 9 砂礫層 水が湧く

玉名平野条里跡 02-III 区



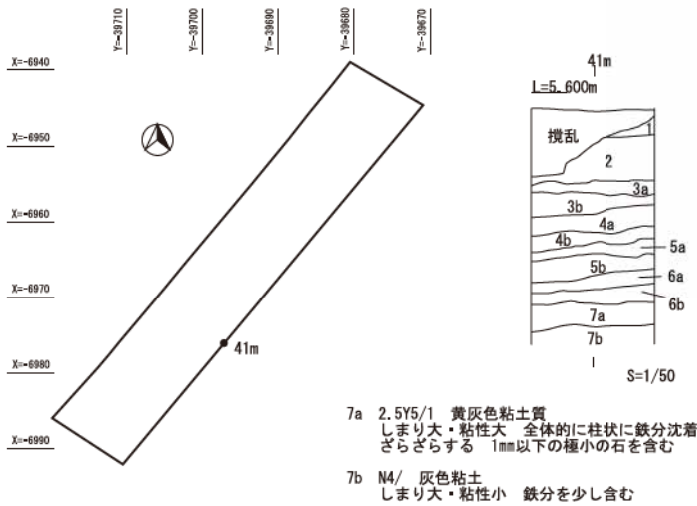
- 1 2.5Y5/3 黄褐色細砂
しまり大・粘性小 マンガンが沈着する
近世の包含層
- 2 2.5Y5/3 黄褐色細砂
しまり大・粘性中 灰色粘土が混じる
鉄分・マンガンが沈着するが1層より少ない
近世の包含層
- 3 2.5Y5/3 黄褐色細砂
しまり大・粘性小 灰色粘土が混じる
マンガンが1層と同様に沈着する
近世の包含層
- 4 2.5Y7/1 灰白色粘土
しまり大・粘性大 灰白色砂粒が混じる
鉄分・マンガンが若干沈着する
中世～近世の遺物包含層
- 5 10YR4/1 褐灰色細砂
しまり大・粘性中 褐灰色粘土が混じる
中世の遺物包含層
- 6 10YR8/1 灰白色細砂
しまり中・粘性小 灰白色粘土が若干混じる
鉄分・マンガンが沈着する
中世水田被覆層 中世の遺物包含層
- 7 10YR6/1 褐灰色粘土
しまり中・粘性大
0.5～2mmの灰白色粗砂もしくは小礫が混じる
マンガンが沈着する 中世水田層
- 8 7.5YR5/1 褐灰色粘土
しまり中・粘性大
古代の水田被覆層 古代の包含層
- 9 10YR5/1 褐灰色粘土
しまり中・粘性大 鉄分・マンガンが著しく沈着する
古代水田層
- 10 2.5Y7/2 灰黄色シルト
しまり小・粘性大 やや砂質
鉄分・マンガンの沈着が著しい
弥生時代～古代の遺物包含層
- 11 2.5Y7/6 明黄褐色粘土
しまり大・粘性大 褐灰色粘土のブロックが混じる
鉄分・マンガンが著しく沈着する
- 12 10GY6/1 緑灰色粘土
しまり小・粘性大 植物の繊維状のものを含む
縄文後期～弥生前期の包含層

第10図 其の上層図



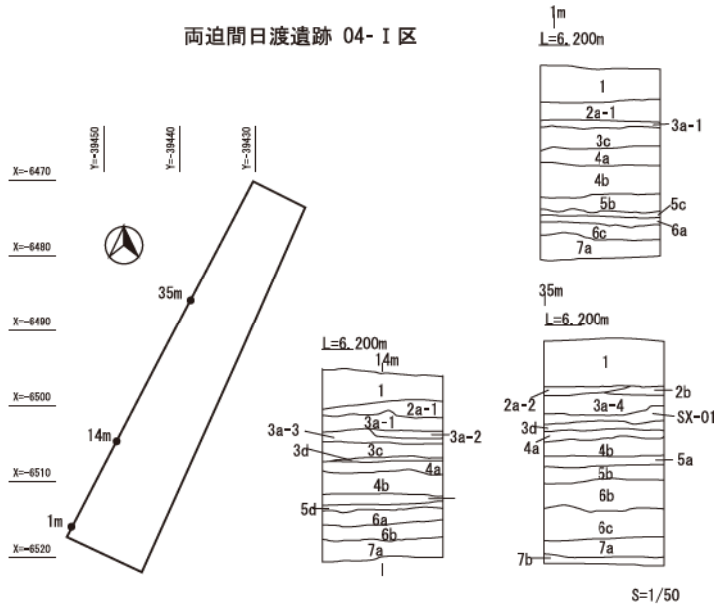
第 20 図 基本土層図 3

玉名平野条里跡 04- I 区



- 1 耕作土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
しまり中・粘性小 マンガンを少し含む 鉄分沈着
- 3a 10YR4/2 灰黄褐色細砂
しまり中・粘性中 マンガンを含む 2層より多い鉄分を含む
- 3b 2.5Y3/2 黒褐色粘土質
しまり小・粘性大 全体に鉄分を多く含む
- 4a 10YR4/2 灰黄褐色粘土質
しまり大・粘性小 全体に鉄分、少しマンガン含む
- 4b 2.5Y3/2 黒褐色粘土質
しまり大・粘性小 砂を含む
4a層より少ない鉄分沈着している
- 5a 10YR4/1 褐灰色粘土質
しまり中・粘性小 砂を含む ふかふかしている
鉄分沈着、マンガンを少し含む
- 5b 2.5Y4/2 暗灰黄粘土質
しまり中・粘性中 5a層より多く鉄分沈着している
マンガンを少し含む
- 6a 2.5Y4/1 黄灰色粘土質
しまり中・粘性中 全体に鉄分沈着
マンガンは5層より多く含む 砂を少し含む
- 6b 2.5Y3/2 黒褐色粘土質
しまり中・粘性大
鉄分は少し沈着し、全体にマンガンを含む ざらつく感じ

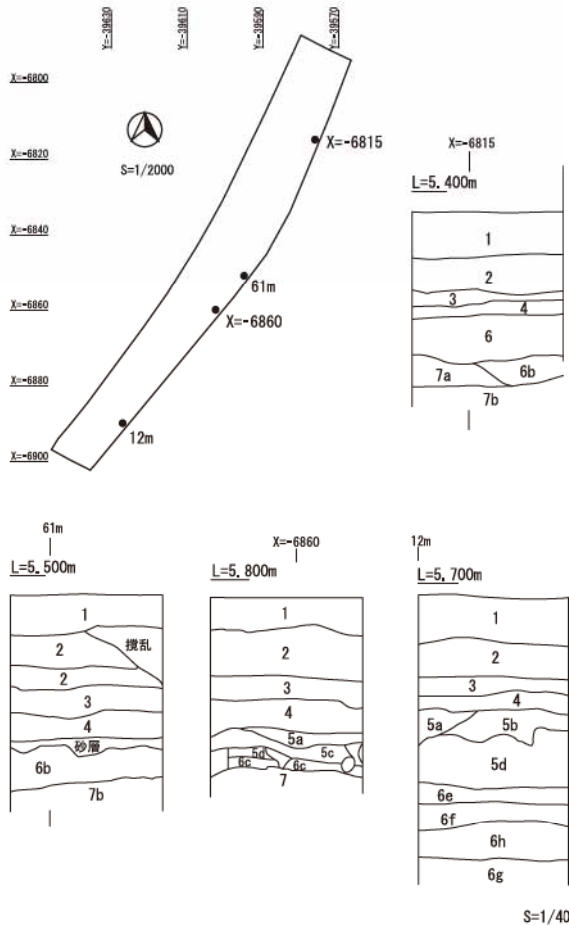
両迫間日渡遺跡 04- I 区



- 5b 7.5YR6/1 褐灰色粘土
しまり大・粘性大
細砂が若干混じる (5a層より少ない)
弥生時代前期～古墳時代前期遺構検出面
弥生時代前期～古墳時代前期の遺物を含む
- 5c 2.5Y6/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性中 褐灰色粘土のブロックが混じる
弥生時代前期～古墳時代前期の遺物を含む
- 5d 10YR6/1 褐灰色粘土
しまり大・粘性大 灰黄色細砂が混じる
遺物を含む 現場の時点では時期不明
- 6a 2.5Y6/1 黄灰色粘土
しまり中・粘性大 鉄分・マンガン沈着
遺物を若干含む
- 6b 2.5Y7/4 浅黄色シルト
しまり大・粘性中 鉄分が沈着する
03-I区 6a層に相当
縄文晩期～弥生前期の遺物を含む
- 6c 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
しまり中・粘性大 鉄分が沈着する
遺物を若干含む 03-I区 6b層に相当
- 7a 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土
しまり小・粘性大 鉄分沈着 無遺物層
- 7b 10GY4/1 暗緑灰色粘土
しまり小・粘性大 鉄分沈着 無遺物層
- 1 耕作土
- 2a-1 10YR5/2 灰黄褐色細砂
しまり大・粘性小 褐灰色粘土が混じる
鉄分・マンガン沈着
- 2a-2 2.5Y5/1 黄灰色細砂
しまり大・粘性小 下部に黄褐色細砂が混じる
鉄分・マンガン沈着
- 2b 10YR5/6 黄褐色細砂
しまり中・粘性小 褐灰色粘土が混じる
鉄分・マンガンが沈着する 近世の遺物包含する
- 3a-1 7.5YR5/2 灰褐色細砂
しまり小・粘性中 灰褐色粘土が混じる
鉄分・マンガンが沈着する 中世の遺物包含する
- 3a-2 10YR6/2 灰黄褐色細砂
しまり中・粘性小 灰褐色粘土・黄褐色細砂が混じる
マンガンが沈着する 中世の遺物包含する
- 3a-3 2.5Y5/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性小 灰褐色粘土が混じる
鉄分・マンガン沈着 中世の遺物包含する
- 3a-4 2.5Y5/1 黄灰色細砂
しまり中・粘性小 灰褐色粘土が⑥より多く混じる
鉄分・マンガン沈着 中世の遺物包含する
- 3a-5 10YR4/2 灰黄褐色細砂
しまり小・粘性小 鉄分・マンガン沈着
- 3a-6 10YR6/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性小 黄褐色細砂混じる
マンガン沈着 中世の遺物包含する
- 3a-7 2.5Y7/1 灰白色細砂
しまり中・粘性中 灰白色粘土混じる
下部に鉄分沈着 中世の遺物包含する
- 3b-1 2.5Y7/1 灰白色細砂
しまり中・粘性小 鉄分・マンガン沈着する
- 3b-2 10YR6/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性小 鉄分が混じる
- 3b-3 N6/ 灰色細砂
しまり中・粘性小 マンガン・鉄分が混じる
灰白色粘土混じる
- 3c 10YR6/1 褐灰色粘土
しまり中・粘性大 粗砂が若干混じる 鉄分若干沈着
炭化物を若干含む 水田層と考えられる
中世の遺物包含する
- 3d 10YR6/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性中 褐灰色粘土混じる
鉄分・マンガン沈着
- 4a 2.5Y6/2 灰黄褐色細砂
しまり中・粘性小 鉄分多く沈着する
4b水田層の破層と考えられる
- 4b 5Y5/1 灰色粘土
しまり中・粘性大 粗砂が混じる
水田層と考えられる 須恵器片等を含む
- 5a 10YR5/1 褐灰色粘土
しまり中・粘性大 細砂が混じりや砂質
弥生時代前期～古墳時代前期の遺物を含む

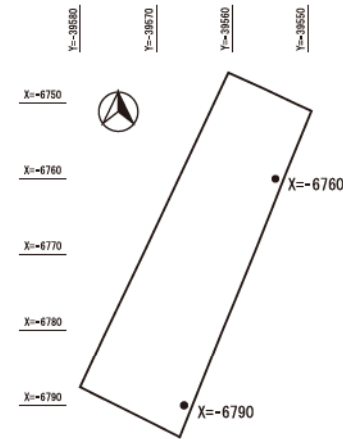
第 21 図 基本土層図 4

両迫間日渡遺跡 04-II 区

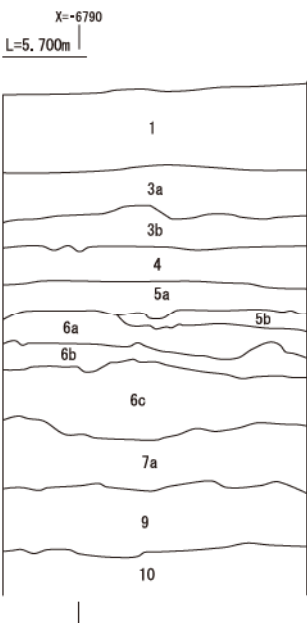
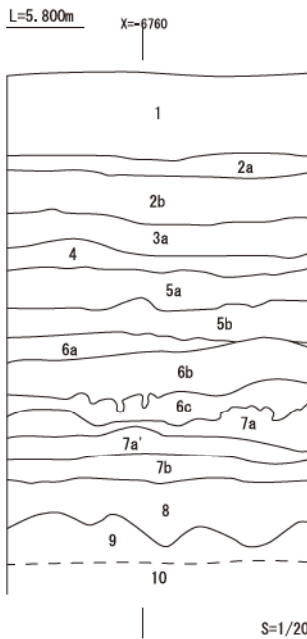


- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土
しまり小・粘性小 表土
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土
しまり小・粘性小 全体的に細砂とマンガン粒を含む
下部に粗砂を含み、1mm前後の礫を含む
鉄分が薄く沈着している
- 3 10YR5/1 褐色シルト
しまり中・粘性小
全体的に鉄分が薄く沈着し、黄色っぽく見える
1mm前後の礫がわずかに入っている
- 4 10YR5/1 褐色粘土
しまり中・粘性中
全体的に薄く鉄分が沈着し、部分的に5mm前後の鉄分の塊がある
マンガン粒も少し入っている
南側へ行く程土の粒が細くなり、粘土になっていく
- 5a 7.5YR4/1 褐色粘土
しまり大・粘性中
全体的に鉄分が沈着し、部分的に鉄分塊を含む
5mm前後のマンガン粒を全体的に含み、
全体的に黒っぽく見える
5a層の下部から生物痕があり、下層に伸びている
のが多くみられる 遺物の出土量が最も多い
土師器片が多いが、ローリングを受けている
- 5b 7.5YR5/1 褐色粘土
しまり中・粘性小
全体的に鉄分・マンガンが多く、土色が褐色に見える
遺物の出土量も5a層に次いで多い
5a層と同様に生物痕が多く、下層に伸びている
- 5c(北) 2.5Y5/1 黄灰色シルト
しまり中・粘性中
全体的に鉄分が非常に多く沈着しており、全体的に
橙色に見える 1cm前後の鉄分の塊も多い
4層の粘土もブロック状に混入している
4層に対して床土と思われる
- 5c(南) 2.5Y5/2 暗灰色シルト
しまり中・粘性中
全体的に鉄分が薄く沈着し、淡い橙色に見える
ブロック状に褐色粘土(10YR5/1)が混入している
5a層から伸びている生物痕が多い
下部は粘土が多くなっている マンガン粒が全体的に入っている
- 5d(北) 10YR5/1 褐色粘土
しまり小・粘性中
筋状に鉄分の沈着があり、まばらにマンガン粒が
チヨコチップ状に全体的に入っている
細砂を非常に多く含んでいる
- 5d(南) 7.5YR4/4 褐色土
しまり中・粘性中
全体的に鉄分が薄く沈着し、マンガン粒が非常に多い
ため、土色が褐色になっている
ブロック状に灰色(N6/)粘土が入っており、上部に
細砂を含んでいる
- 6c 7.5YR3/2 黒褐色粘土
しまり中・粘性大
全体にマンガン粒が非常に多く、土色を黒褐色に見せている
5mm前後のマンガンの塊も多い
元は5d層の褐色(10YR5/1)粘土にマンガンが沈着し、
変化したようである
細砂を非常に多く含んでいる
わずかに鉄分を筋状に含んでいる 床土
- 6d 5Y6/1 オリーブ灰色細砂
しまり中・粘性大
全体に鉄分が沈着し、土色が褐色(7.5YR6/8)にも見える
上の層の影響を受け上部に少しマンガンが沈着している
- 6e 10YR5/1 褐色粘土
しまり中・粘性大
全体に鉄分が沈着し、部分的に黄褐色(10YR5/6)に
見えるところもある
マンガン粒がチヨコチップ状に全体的に混入している
生物痕が多く見られる 南にいく程鉄分が少なくなる
- 6f 10YR5/1 褐色粘土
しまり中・粘性大
マンガンが非常に多く、土色が暗く見える
鉄分が沈着し、少し砂を含んでいる 生物痕が多い
- 6h 2.5Y6/2 灰黄色粘土
しまり中・粘性大
全体に鉄分が沈着し、灰黄色になっている
マンガン粒も多い 砂を少し含んでいる
6f層の褐色粘土をブロック状に含んでいる
生物痕が多い マンガンが非常に多い部分があり、
1cm前後の塊を含む
- 6g 5B6/1 明青灰色粘土
しまり大・粘性大
全体的に鉄分・マンガンが薄く沈着し、にぶい黄褐色
(10YR5/4)にも見える
7b層が下層になる部分は砂が非常に多い
マンガンが多い部分があり、塊を含むところがある
生物痕が多い
- 7(南) 5B5/1 青灰色有明粘土
しまり大・粘性大
下部の方が暗い色で、暗灰色(5PB4/1)になっており、
上部より水を含みベタツとする
- 7b 5G6/1 緑灰色細砂
しまり大・粘性小
全体に鉄分が沈着し、上部は特に鉄分が多く、
黄褐色(10YR5/8)に見える
上部にマンガンも多く、下部より固くなっている
下部になるほど鉄分・マンガンが薄くなり、緑灰色が
はっきりする

第 22 図 基本土層図 5



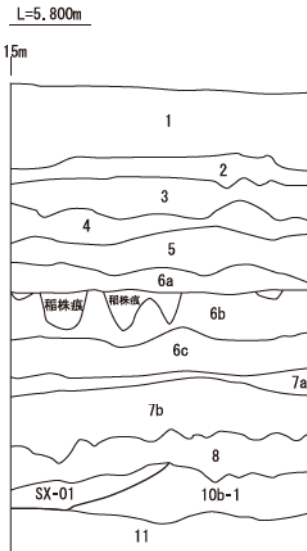
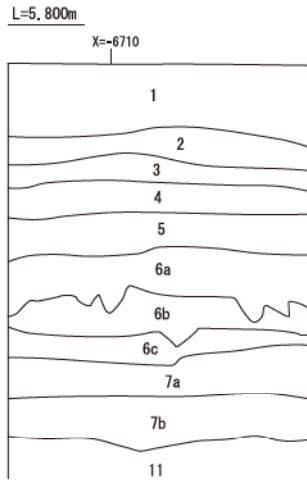
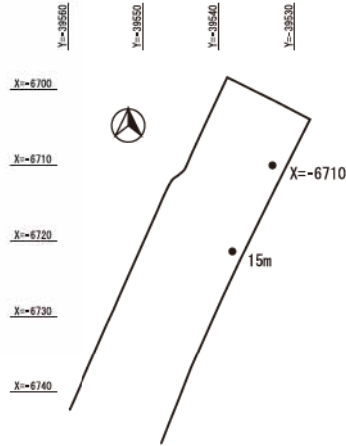
両迫間日渡遺跡 05- I -1区



- 1 5YR3/2 暗赤褐色
粗砂～中礫がこくわずかに混じる(上部にはほとんどなし)
中礫サイズは碎石のような感じ 下部にわずかに斑鉄
植物の根多い 現代耕作土
- 2a 5Y4/1 灰細砂混じりシルト
若干斑鉄 2b層との境に中礫がわずかに入る
- 2b 7.5Y4/1 灰色シルト
しまり良 わずかに細砂 最上部にMn斑
全体に斑鉄著しい
- 3a 5Y4/1 灰色細砂～粗砂混じりシルト
糸根状Fe 上・下層と比して砂質 しまりやや良
- 3b 7.5Y4/1 灰色細砂混じりシルト
粗砂若干混じる 若干糸根状Fe
4層との境は不明瞭の所あり
また細砂が埋土となる踏み込みが点々と見られる
上層よりシルト質 暗色弱
- 4 7.5Y5/1 灰色シルト
細砂混じる 南へ向かってわずかに粘質強まる
糸根状Fe わずかにMn斑
- 5a 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト
全体に斑鉄が著しい 上層とも比してシルト質
しまり良
- 5b 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混じりシルト
しまり良
- 6a 5Y5/1 灰色細砂混じりシルト
糸根状斑鉄 上部にわずかにマンガン斑
攪乱を受けている
- 6b 7.5Y4/1 灰色シルト細砂
細砂混じる 上面下面付近に酸化鉄のやわらかい
結核状5～20mm著しく多い 斑鉄 やや腐痕質
攪乱を受ける
中央氾濫堆積物(6c層上部砂)より東側では
2.5Y5/1灰シルト質
- 6c 7.5Y4/1 灰色細砂混じりシルト
糸根状斑鉄顕著(マンガン斑?)ゆるく攪乱
- 7a 2.5Y4/1 黄灰色シルト
斑鉄が顕著
- 7a' 10YR4/1 褐灰色シルト
土色の違いはあるが、おそらく7a層と同一層
- 7b 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性小 砂が混じる
- 8 7.5Y4/1 灰色シルト
細砂が混ざる しまり中・粘性小
上層から糸根状鉄が入り、斑鉄も見られる
南側へいくと5Y4/1灰色シルト 粗砂も混ざる
平面で見ると、北側は砂が強く、洪水による砂の堆積層と
思われる
- 9 N3/ 暗灰色シルト
しまり中・粘性中 酸化鉄が入る 細砂が混ざる
中央水溜から南側は鉄分が沈着し、N4/灰色粘土
(シルト)に変化していく
- 10 2.5Y2/1 黒色粘土
しまり中・粘性中 北側へいくと黒が薄くなり、
5Y3/1オリーブ黒色に変化していく
10層の下にはN3/暗灰色粘土の層が入るが、
北側はSX-03があった為深く掘り下げられず、
下の層は未確認

第 23 図 基本土層図 6

両迫間日渡遺跡 05-I-2区

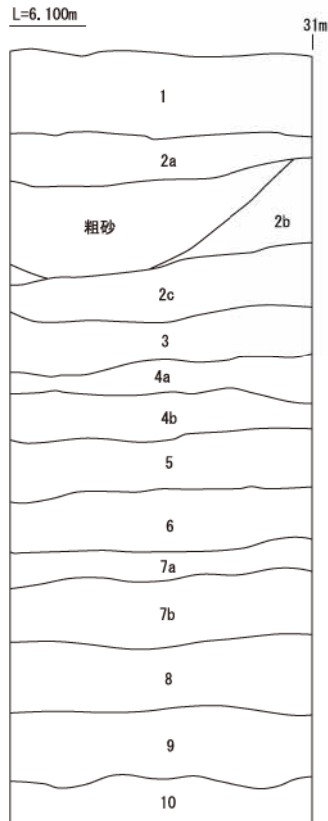
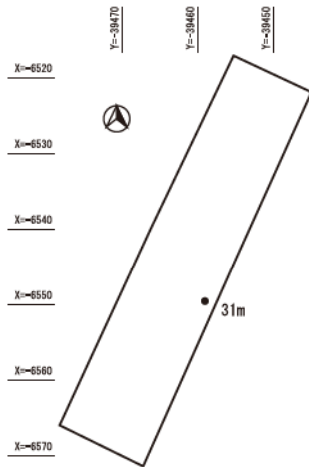


- 1 5YR3/2 暗赤褐色シルト
耕作土
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
砂と粘土が混じる
- 3 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性小 全体に鉄分が入る
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト
しまり中・粘性小 全体に鉄分が入る 砂が混ざる
- 5 5YR4/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性中 φ2mmの隙が混ざる
全体に斑鉄が入り、6aよりも多少粘性がある
下部は5YR4/1褐灰色細砂 しまり中・粘性中
全体に斑鉄が入る
- 6a 5YR4/1 褐灰色細砂
しまり小・粘性小 粗砂が混ざる
- 6b 10YR4/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性小 6cよりも多少粘性が弱い
- 6c 7.5YR4/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性小 鉄分・マンガンが沈着する
- 7a 2.5Y5/3 黄褐色粗砂～シルト
粘質 しまりやや強 中世床土層
- 7b 2.5Y4/1 黄灰色シルト
砂混じり しまり中・粘性小 鉄分沈着
マンガン少量 古墳初頭耕作層
- 8 5Y4/1 灰色シルト
砂混じり しまり中・粘性中
調査区中央部は粘質粗砂になる
南側は後世の掘削により残存悪い 古墳初頭床土層
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄細砂
しまりなし 粘性非常に弱い 05-I-1区23と対応か
弥生終末洪水砂層
- 10a 7.5Y2/ 黒色粘質細砂～シルト
SX-01埋土
- 10b-1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
弥生終末床土 05-I-1区9と対応か
南側は2.5Y3/1黒褐色シルトに変化していく
10b-1と10b-2は同一層(05-I-1区9と対応)
10b-1を耕作時、10b-2の砂を混ぜながら耕作が続けられ、
10b-2は耕作が及ばなかった自然堆積の砂がそのまま
残されている
- 10b-2 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまり中・粘性中 細砂が混ざる。
自然堆積下のシルト層を巻き上げながら砂が
堆積した模様
- 10b-3 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまり大・粘性中 05-I-1区10と対応
弥生後期後半床土カ 有明粘土
- 11 5G3/1 暗緑灰色粘質土
斑鉄多く含む 生根明瞭 しまり非常にあり 無遺物層

S=1/20

第 24 図 基本土層図 7

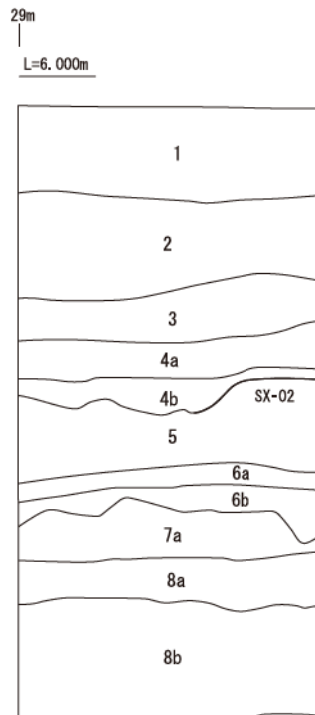
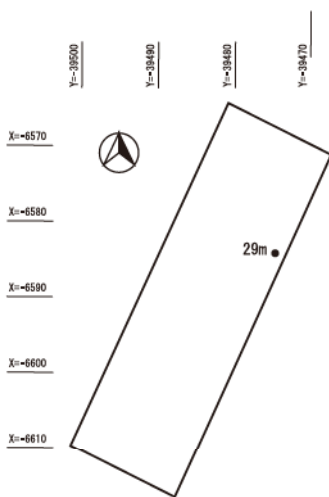
両迫間日綿粗遺跡 05-II-1区



S=1/20

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色
しまりあり Mnを多く含む 耕作土 現代
- 2a 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂
しまりややあり 斑鉄状 Mnを含む 近世
- 2b 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
しまりややあり Mnを含む 近世
- 2c 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂
しまりあり 斑鉄状 マンガンを含む 近世
- 3 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト
しまり非常にあり 斑鉄状を含む 中世
- 4a 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
しまりなし 斑鉄状に多く含む 古代
- 4b 5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト
しまりあり 斑鉄状に多く含む 古代
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色
しまり中・粘性中 (土壌化作用) 細砂が入る
全体的に鉄分がブロック状に入る
マンガンが全体に入る 古墳初頭
- 6 5B4/1 暗青灰色粘土
しまり小・粘性大 土壌化作用を受ける
鉄分は5層の半分の量
マンガンは極小のものがわずかに入る
有明粘土
- 7a 5B3/1 暗青灰色粘土
しまり小・粘性大 斑鉄状に多量に含む
有明粘土
- 7b 5B3/1 暗青灰色粘土
しまり小・粘性大 有明粘土
- 8 N4/ 灰色粘土 しまり中・粘性大
- 9 N2/ 黒色粘土
しまり中・粘性大
流木がみえ、東・西壁に弥生土器あり
緩やかな落ち込みがあり、10層との境目は
でこぼこで自然の落ち込みではないかと
考えられる
- 10 5G6/1 緑灰色粘土 しまり小・粘性大

両迫間日渡遺跡 05-II-2区

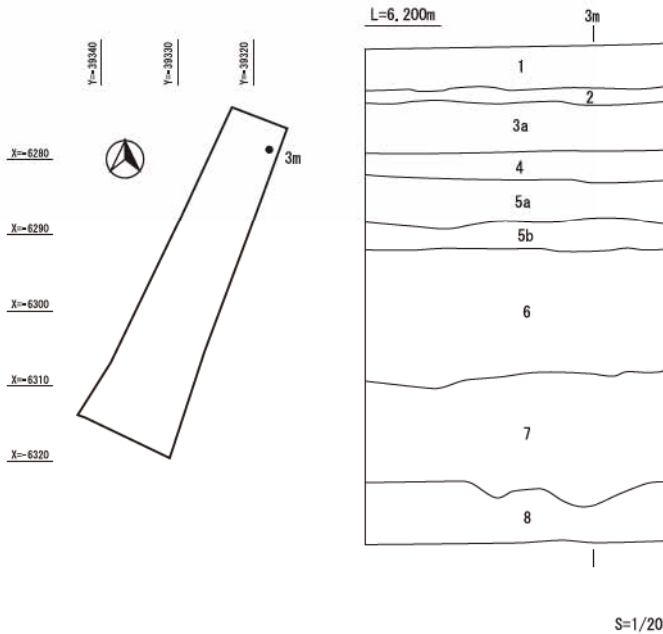


S=1/20

- 1 耕作土
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂
しまり大・粘性小 マンガン・鉄分含む
2層中は部分的に粘性が強いところがある
調査区南側は全体の砂の性質はあまり変わらない
- 3 2.5Y3/2 黒褐色細砂
しまり大・粘性小 マンガンを含む
- 4a 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
しまり大・粘性小 3層より少ないがマンガン含む
鉄分含む
- 4b 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
しまり大・粘性小 マンガン・鉄分が全体に入る
(4a層より多い) 15mより北側は4bはあったりなかったりする
中世水田耕作土と思われる
- 5 5Y4/1 灰色粘土
しまり大・粘性中 砂が混じる
(北側半分は粘土、南側が砂が強く出る)
マンガン含む 鉄分わずかに含む 5層上面で畦畔出土
4b層耕作土に対する床土と思われる 中世
- 6a 10YR6/1 褐色細砂
しまり中・粘性小 マンガン粒を少量含む
酸化鉄の塊を多く含む 灰色粘土を多く含む 古墳
- 6b 10YR6/1 褐色粗砂
しまり中・粘性小 マンガン粒を少量含む
酸化鉄の塊を非常に多く含む 灰色粘土を下層に含む
水田耕作土と思われる 古墳
- 7a 7.5YR6/1 褐色粘土
しまり大・粘性中 マンガン粒を少量含む
酸化鉄を縦筋状に含む
細砂を非常に多く含む、シルト質
7a層上面で畦畔出土
6b層耕作土に対する床土と思われる 古墳
- 7b 7.5YR5/1 褐色粘土
しまり大・粘性中 マンガン粒・酸化鉄を少量含む
細砂を含む 古墳
- 8a 7.5Y5/1 灰色粘土
しまり大・粘性大 5mm程のマンガンの塊を上部に含む
酸化鉄を縦筋状に多く含む わずかに砂を含む
- 8b 10G5/1 緑灰色粘土
しまり大・粘性大 上部に縦筋状に酸化鉄を多く含む
砂をわずかに含む

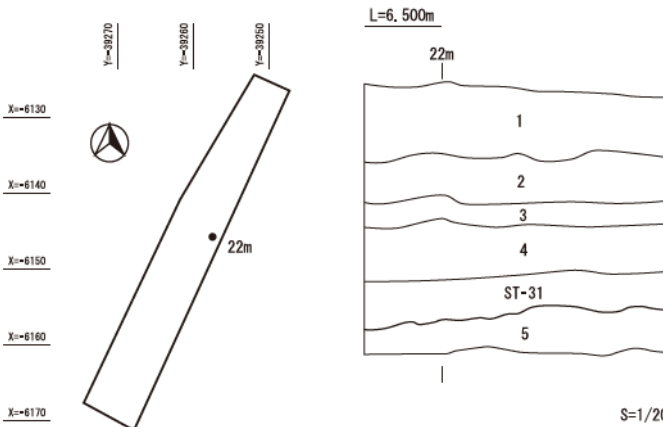
第 25 図 基本土層図 8

玉名平野条里跡 05-III-1区



- 1 耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色細砂
しまり中・粘性小 粗砂を多く含む
マンガン粒をわずかに含む 1層の床土
- 3a 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂
しまり大・粘性小 灰色粘土をブロック状に少し含む
マンガン粒をわずかに含む
酸化鉄をわずかに斑状に含む
下の方が砂粒が多い 近代
- 3b 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
しまり大・粘性小 マンガン粒を多く含む
酸化鉄をわずかに斑状に含む 土師器小片・染付が出土
近世
- 4 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
しまり大・粘性中 マンガン粒を含む
土師器小片・青磁が出土 中世～
- 5a 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
しまり小・粘性中 酸化鉄を多く斑状に含む
マンガン粒をわずかに含む 土師器小片が出土
中世～
- 5b 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂・細砂混じり
しまり中・粘性中 酸化鉄を多く含む
マンガン粒をわずかに含む 土師器小片が出土
下層粘土混じりの部分もある
6層直上でくぼみを検出
(動物の足跡・稲株痕・耕作跡と思われる) 中世～
- 6 5Y5/1 灰色粘土
しまり小・粘性大 縦筋状に貫入する
酸化鉄を少し含む、マンガン粒を少し含む
土師器小片・須恵器小片・青磁・白磁・土錘・
弥生土器片が出土 下位からは石畿が出土
- 7 5Y5/1 灰色粘土
しまり小・粘性大 6層より色がやや暗い
マンガン粒・酸化鉄を多量に含む
7層直上から弥生の層
弥生土器・種子・黒曜石・石畿が出土 弥生
- 8 7.5Y5/1 灰色シルト
しまり小・粘性大 マンガン粒を少量含む
酸化鉄を多量に含む
上層は7層からマンガン粒・酸化鉄が貫入
SD-01・SD-02を検出 弥生～

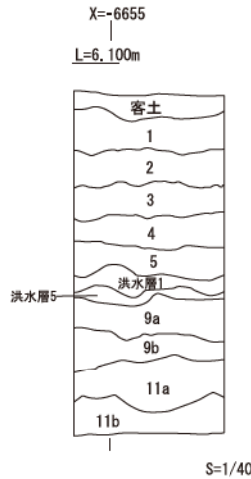
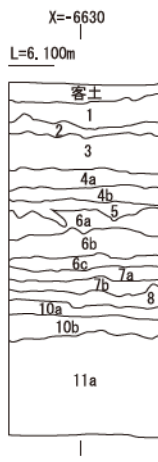
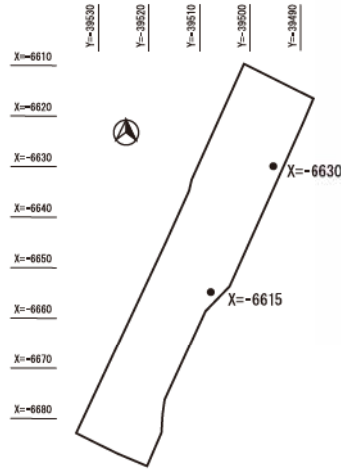
玉名平野条里跡 05-III-2区



- 1 耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂
しまり小・粘性小
2mm程のマンガン粒を多く含む、酸化鉄を薄く含む
1mm程の小礫を含み、灰色粘土をブロック状に僅かに含む
近代
- 3 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
しまり小・粘性小
1mm程のマンガン粒を僅かに含む、酸化鉄を薄く斑状に含む
近世
- 4 5Y6/2 灰オリーブ色粘土
しまり大・粘性中 細砂を全体的に含む
1mm程のマンガン粒をわずかに含む(3層よりは多い)
酸化鉄を薄く斑状に含む
土師器を少量含む、染付等を微量に含む
中世の遺物を含む 中世
- 5 5Y5/1 灰色粘土
しまり大・粘性大
2mm～5mm程のマンガン粒を多く含む
酸化鉄を薄く斑状に含む 土師器小片・青磁も含む
ST-01～ST-43を検出
(中世～古代)SD-01・SD-02を検出
- 6a 10YR5/6 黄褐色粘土
しまり中・粘性大 酸化鉄を全体に多量に含む
灰色粘土をブロック状に部分的に含む
マンガンをブロック状に部分的に含む
上層で土師器片を少量含む
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色粘土
しまり小・粘性小
6a層からの酸化鉄が貫入し、マンガン粒を多量に含む
1cm前後のマンガン小塊を部分的に含む
灰色粘土をブロック状に含む 細砂が多量に混入する
遺物なし。SD-03・SD-04を検出
- 7 5B5/1 青灰色粘土
しまり大・粘性大
酸化鉄を少量含む、細砂粒が少量混入する

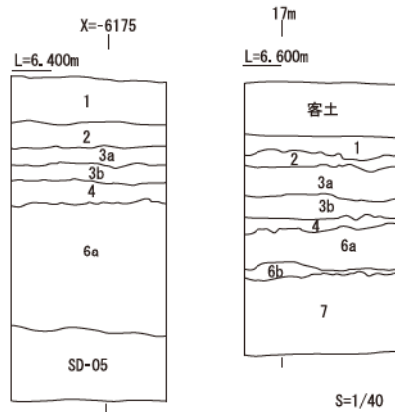
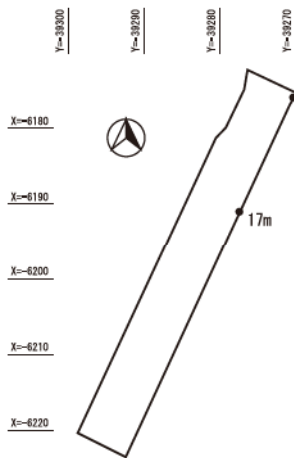
第 26 図 基本土層図 9

両迫間日渡遺跡 06-I 区



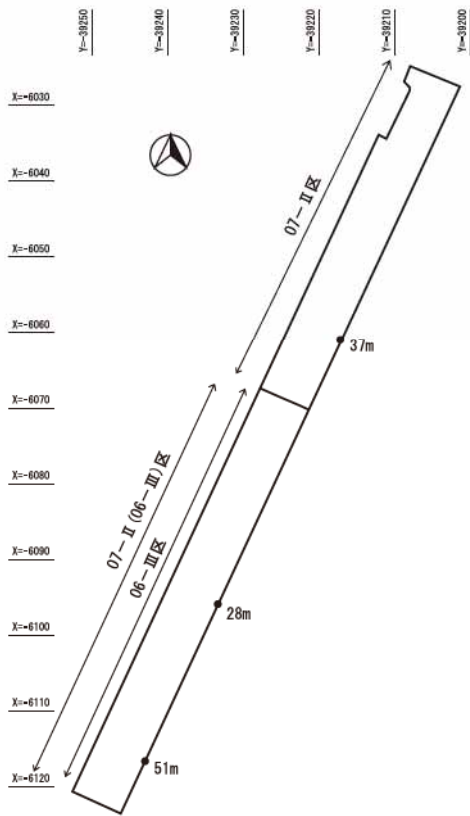
- 1 5YR3/2 暗赤褐色シルト
しまり中・粘性中 現代
- 2 5YR3/1 黒褐色シルト
しまり中・粘性中 砂と粘土混じり 近代
- 3 5YR3/1 黒褐色シルト
しまり中・粘性中 鉄分を少量含む 近世
- 4a 10YR5/1 褐灰色シルト
しまりなし 粗砂混じり マンガン少量 近世
- 4b 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト
しまりややある 斑鉄・マンガン含む 近世
- 5 5YR4/1 褐灰色細砂
しまり中・粘性中 2mm程度の礫混じり
全体に鉄分が入る 近世
- 6a 5YR4/1 褐灰色細砂
しまり小・粘性小 粗砂混じり 中世
- 6b-1 10YR4/1 褐灰色細砂
しまり小・粘性小 粗砂混じり 中世
- 6b-2 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性中 細砂混じりシルト 中世
- 6c-1 7.5YR4/1 褐灰色土
しまり中・粘性小 細砂混じりシルト 中世
- 6c-2 7.5Y4/1 灰色シルト
しまり小・粘性なし 粗砂・細砂を含む 中世
- 7a 2.5Y5/3 黄褐色シルト
しまりやや強い・マンガン少 砂混じり
中世 床土
- 7b 2.5Y4/1 黄灰色シルト
しまり中・粘性小 鉄分の沈着あり マンガン少
砂混じり 古墳 耕作土
- 8 5Y4/1 灰色シルト
しまり中・粘性中 砂混じり 古墳 床土
- 9a 10Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまり中・粘性中 細砂混じりシルト
全体に斑鉄の沈着が見られる
- 9b 10Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまり中・粘性中 全体に鉄分の沈着が見られる
9a層に比べ細砂の混じりが多く、サラサラしている
古墳
- 10a 2.5Y3/1 黒褐色シルト
しまり大・粘性中 全体に鉄やマンガンの沈着あり
径2~3cm程度のブロック(7.5YR4/6)含む
弥生後期耕作土
- 10b 5Y3/1 オリーブ黒シルト
しまり大・粘性大 鉄の沈着が多く見られる
- 11a 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト
しまり大・粘性大 細砂混じりシルト
斑鉄を多く含む
- 11b 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト
細砂混じりシルト 斑鉄や生痕あり

玉名平野条里跡 06-II 区



- 1 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混細砂
現代
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混細砂
近代
- 3a 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂混細砂
- 3b 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
土師器・輸入磁器 中世
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混シルト
須恵器・黒色土器 古代
- 6a 5Y4/1 灰色粘土
しまり非常にあり 柱状Fe(鉄)含む
Mn少量含む
須恵器・黒色土器・古式土師器・弥生土器含む
05-I-1区 6層と同じ 古墳
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
しまりあり Mn多量・Fe(鉄)多量含む
植物痕が集中して広がると見られる
弥生土器含む 弥生
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
斑状Fe(鉄)多量含む ローム層
- 8 N3/ 暗灰色粘土
しまり非常にあり 05-I-1区 7・8層と同じ

第 27 図 基本土層図 10

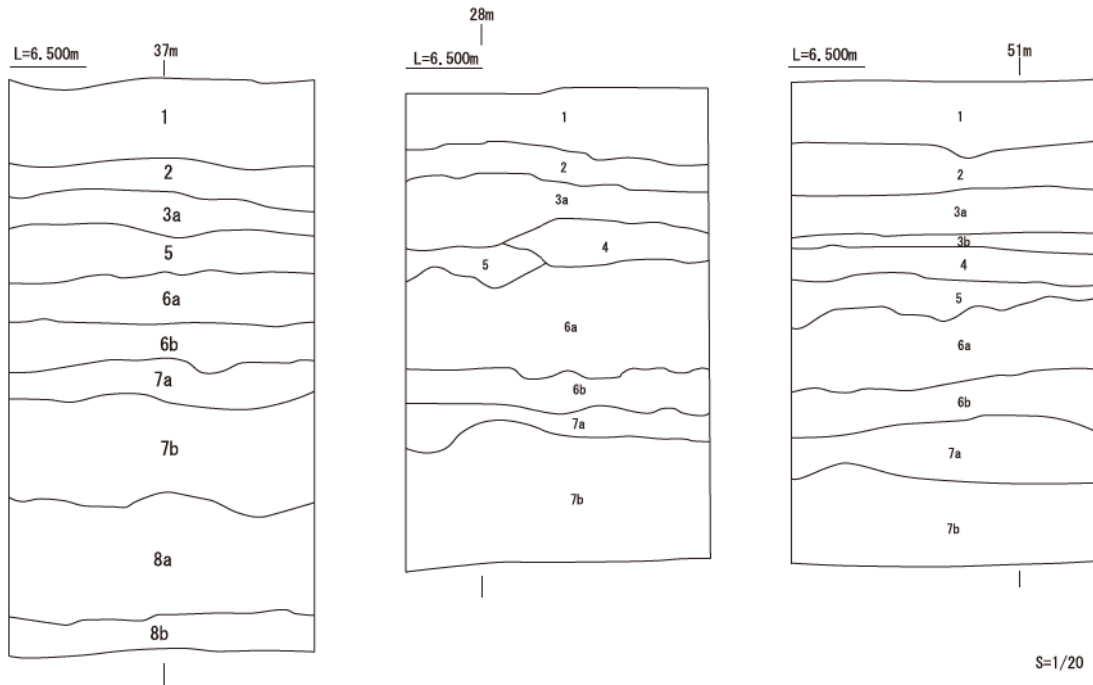


玉名平野条里跡 06-III区

- 1 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混細砂
現代耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混細砂
近代
- 3a 5Y4/3 暗オリーブ色粗砂混細砂
近世
- 3b 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
中世
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混シルト
中世
- 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混シルト
(古代) 中世
- 6a 5Y4/1 灰色粘土
しまり非常にあり
柱状Fe(鉄)多・Mn(小)
(古墳) 中世
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
しまりあり Mn非常多
斑状Fe少 柱状Fe多
古墳。
- 7a 7.5YR2/2 黒褐色シルト
旧表土 弥生(ローム)
- 7b 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
斑状Fe多 ローム
06- II区では分層できなかった
- 8 N3/ 暗灰色土
しまり非常にあり

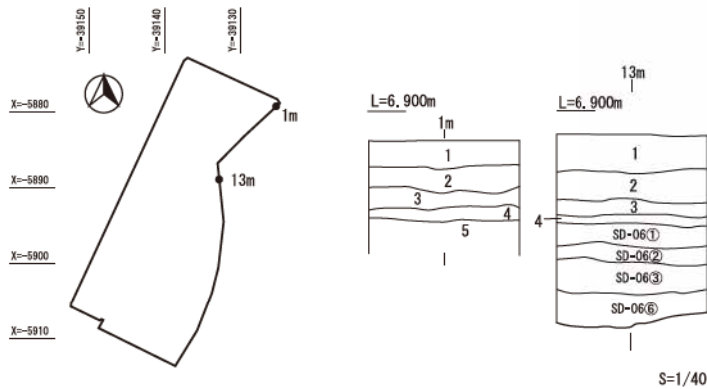
玉名平野条里跡 07- II 区

- 1 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混細砂
現代耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混細砂
マンガン粒を少量に含む 近代
- 3a 5Y4/3 暗オリーブ粗砂混細砂
弱粘性 マンガン粒多量
斑状酸化鉄を少量に含む 近世
- 3b 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
弱粘性 マンガン粒多量
斑状酸化鉄を少量に含む 近世
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混シルト
弱粘性 斑状酸化鉄を多量に含む
中世
- 5 7.5Y3/1 オリーブ黒色細砂混シルト
ややしまりあり マンガン粒少量
柱状酸化鉄を少量に含む
土師器・青磁含む 中世
- 6a 5Y4/1 灰色粘土
強粘性・よくしまる マンガン粒少量
柱状酸化鉄を多量に含む
須恵器含む 古代
- 6b 10YR4/2 灰黄褐色シルト
強粘性・しまりあり マンガン粒多量
斑状酸化鉄を少量に含む
古式土師器含む 古墳
- 7a 7.5YR2/2 黒褐色シルト
強粘性 柱状酸化鉄を多量に含む
無遺物 弥生
- 7b 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
強粘性 斑状酸化鉄を多量に含む
無遺物
- 8a 7.5YR4/2 灰褐色粘土
強粘性・よくしまる マンガン粒少量
柱状酸化鉄を多量に含む 無遺物
- 8b 10YR5/2 灰黄褐色細砂混シルト
しまりあり 柱状酸化鉄を少量に含む
無遺物



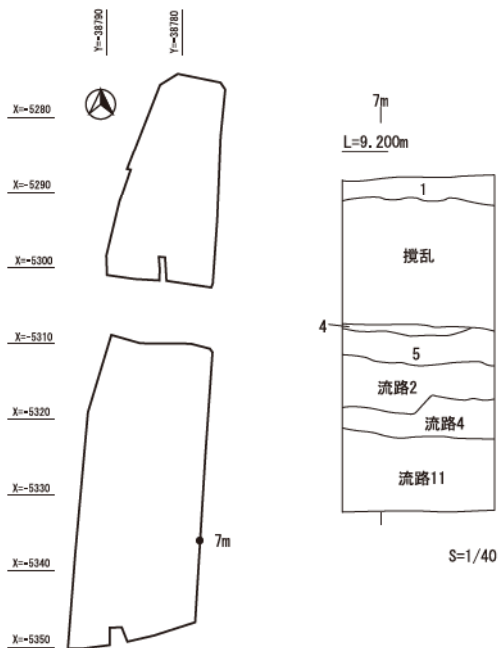
第 28 図 基本土層図 11

五名平野条里跡 07-I 区



- 1 5YR3/1 黒褐色粗砂混じりシルト
しまり中・粘性中
2~3mm程度の礫を含む
現代耕作土
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じりシルト
しまり中・粘性中 マンガンの沈着あり
近世耕作土
- 3 2.5Y5/3 黄褐色粗砂・細砂混じりシルト
しまり中・粘性中
中世段階に大規模な整地が行われ、
その後耕作が行われた 中世耕作土
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト
しまり中・粘性わりと強い
マンガンの沈着が強く、鉄分も少量あり
土層の整地によりカットされ、調査区全面には
広がっておらず、南側のみ 中世床土?
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
しまり中・粘性やや弱い
マンガンの沈着あり 鉄分の沈着非常に強い

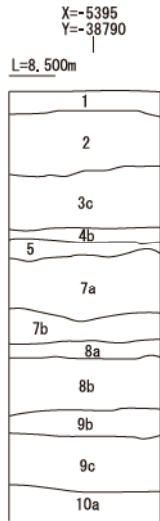
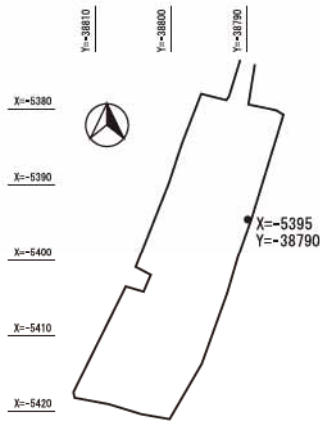
五名平野条里跡 07-III区



- 1 10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト
しまり中・粘性中 マンガン・鉄分沈着あり
現代耕作層
- 2 5Y4/1 灰色粗砂混じりシルト(粘質土)
しまり強い・粘性中 鉄分・マンガンを含む
残存状況が悪く、(東壁のみ)包含層であるが
耕作層との判断は難しい(耕作層か?)
- 3 10YR6/6 明黄褐色粘砂混じりシルト(粘質土)
しまり強い・粘性強い 全体に鉄分沈着あり
マンガ量少 上層で耕作を行っていた可能性あり
自然堆積層1層
- 4 5Y7/2 灰白色細砂混じりシルト
しまり中・粘性小 鉄分が全体的に広がっている
自然堆積層2層
- 5 5Y6/1 灰色→変色→(明黄褐色)粗砂混じりシルト
しまり中・粘性中 粗砂を含む
鉄分を非常に多く含む(斑鉄) 自然堆積層3層
- 6a 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト(粘質土に近い)
しまり中・粘性わりと強い 2~3mm程度の礫含む
鉄分の沈着非常に強い
- 6b 10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性わりと強い
マンガ量少、鉄分沈着強い
- 6c 7.5YR6/4 にぶい橙褐色粗砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性わりと強い
鉄分3b)に比べ少ない 若干ばさばさした土を含む
3b)と同一層でも可

第 29 図 基本土層図 12

玉名平野条里跡 07-V区

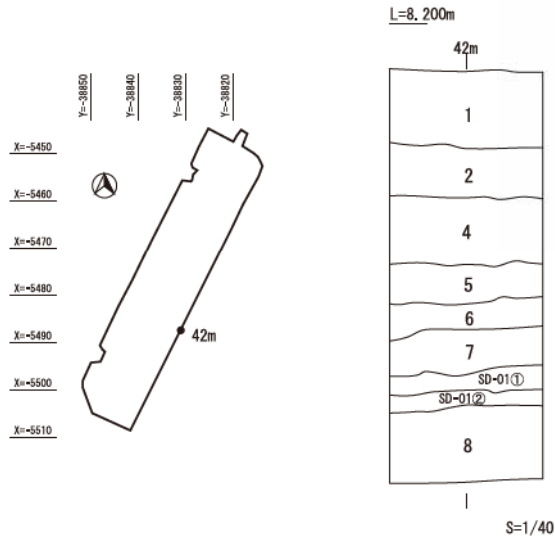


S=1/40

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じりシルト
粘性中 鉄分沈着少 現代耕作層
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色土
しまり1層に比べやや強い・粘性中 攪乱の影響受ける
鉄分・マンガン沈着あり 現代床土
- 3a 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり
しまりやや弱い・粘性中 鉄分・マンガン沈着あり
若干ふわふわした空気を含む 近現代耕作層
- 3b 2.5Y4/3 オリーブ褐色土
しまり中・粘性中 3a層と似ているものの若干しまりあり
2~3mm程度の礫含む 近現代耕作層
- 3c 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じりシルト
しまり・粘性わりと強い・粘性中 2~3mm程度の礫含む
鉄分も多く含む 近世床土?
- 4a 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性中 3~4mm程度の礫含む
鉄分やや強く、マンガン沈着 中世
- 4b 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト
しまりわりと強い・粘性中 2~3mm程度の礫含む
鉄分あり マンガンやや強く沈着 中世
- 5a 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混じりシルト(粘質土)
しまり・粘性やや強 3~5mm程度の礫含む
鉄分・マンガンあり カーボンを多く含む
遺物多量含む
耕作層の可能性もあるが地形がフラットになっておらず、
遺物も多量にあることから判断が難しい 中世
- 5b 2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト(粘質土)
しまり・粘性やや強い 鉄分あり
マンガン5層に比べ多い
当初5層と同一層にしていたが、遺物の出土状況、
マンガンの沈着などから分層した
5層が耕作土とし、6層が床土の可能性があると考えた
中世 東側のみ確認
- 6 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混じりシルト
しまり・粘性中
粗砂が多く、落ち込みに堆積した可能性あり
基本土層だが、5層時にカットされたと考えられる
東壁のみ確認 鉄分・マンガン少量
6層より下層に粗砂が堆積している
- 7a 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土
しまり強い・粘性非常に強い 粗砂混じり
鉄分沈着・マンガン少量 灰色土の粘土が入る
- 7b 5Y6/2 灰オリーブ色粘質土
しまり強い・粘性非常に強い 鉄分沈着
7b層の影響を若干うける
- 8a 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
しまり・粘性強い 鉄分の沈着あり
水がたまっていたため褐色に変色 マンガン含む
8b層と同一のものと思われる 粗砂含む
- 8b 2.5Y6/2 灰黄色土
基本的には8a層と同様の土質 土色が異なる
- 9a 7.5Y6/1 灰色シルト
しまり強い・粘性弱い 鉄分の沈着あり
粘性のある土をブロック状に含む(少量)遺物出土なし
- 9b 2.5Y6/2 灰黄色土
しまりなし・粘性なし 鉄分少量沈着あり
- 9c 2.5Y5/1 黄灰色細砂(粗砂混じり)シルト
しまり中・粘性弱い 鉄分の沈着あり
部分的にはシルトに近い所もあるが、基本細砂
- 10a 5B7/1 明青灰色シルト
しまり強い・粘性中 鉄分の沈着少量
少量粗砂を含む 遺物出土なし 有明粘土か
- 10b 5B7/1 明青灰色粘土
しまり強い・粘性強い 鉄分の沈着少量
シルト質の土を少量含む 有明粘土か

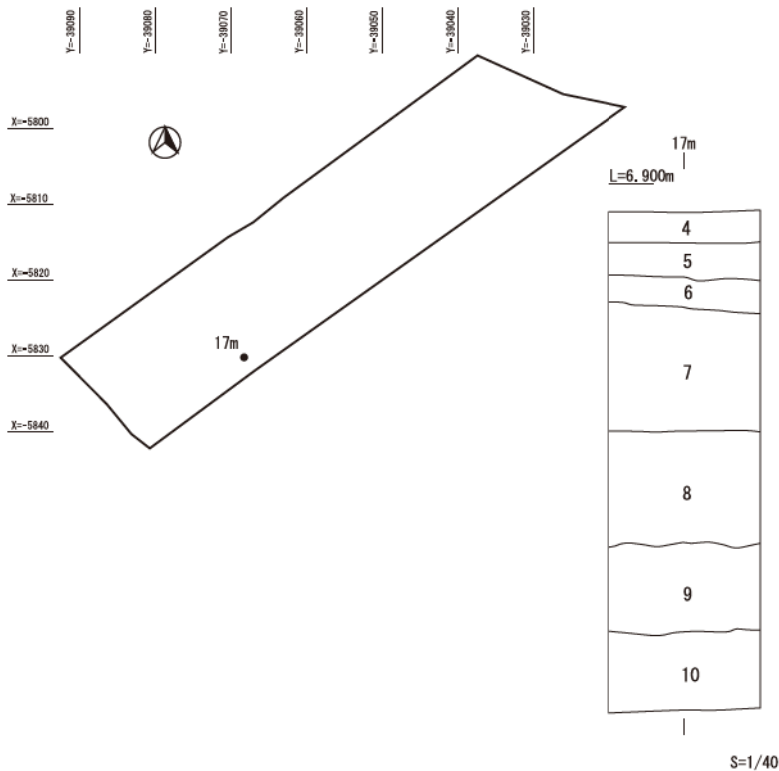
第 30 図 基本土層図 13

玉名平野条里跡 07-IV区



- 1 2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり細砂
しまりなし・弱粘性 現代耕作土
- 2 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂混じり細砂
しまりなし・弱粘性 マンガン粒を少量含む
近代耕作土
- 3a 2.5Y6/2 灰黄色粘土
弱粘性 マンガン粒多量
上部に斑状酸化鉄を少量に含む 近世耕作土
- 3b 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
弱粘性 上部にマンガン粒多量
下部に酸化鉄を多量に含む 近世
- 4 7.5YR6/2 灰褐色細砂混シルト
弱粘性 マンガン粒少量 斑状酸化鉄を含む 中世
- 5 7.5YR4/1 褐灰色シルト混細砂
ややしまりあり・弱粘性 マンガン粒少量
斑状酸化鉄を少量に含む
12c頃の土師器片少量出土 輸入磁器含む
中世耕作土
- 6 10YR6/2 灰黄褐色シルト混細砂
ややしまりあり・弱粘性 斑状酸化鉄を少量含む
洪水の影響あり 9c・10c頃の須恵器片少量出土
古代
- 7 10YR5/2 灰黄褐色シルト
強粘性 マンガン粒少量 酸化鉄を多量に含む
水田の可能性あり
(古式土師器・弥生後期土器)野部田式裏の脚部片出土
(古墳)～弥生
- 8 2.5Y7/2 灰黄色シルト
良くしまる・強粘性 酸化鉄を縦筋状に少量含む
無遺物層
- 9 5Y7/1 灰白色細砂混シルト
弱粘性 酸化鉄を縦筋状に少量含む 無遺物層
- 10 5Y7/2 灰白色土
よくしまる・強粘性 上部9層より細砂少量の介入あり
無遺物層
- 11 5GY6/1 オリーブ灰色粘土
しまりあり・弱粘性 無遺物層 有明粘土

玉名平野条里跡 08- I 区



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混シルト
しまりなし・弱粘性 0.5mm程度の粗砂を含む
現代耕作層
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
ややしまりあり・弱粘性 マンガン粒少量
斑状酸化鉄分を多量に含む 現代床土
- 3 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混シルト
しまりなし・弱粘性 マンガン粒多量
斑状酸化鉄分を多量に含む 近代
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混シルト
しまりなし・弱粘性 マンガン粒多量
斑状酸化鉄分を少量に含む 焼土粒少量
土師・陶磁器の小破片混じる 近世
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
ややしまりあり・弱粘性 マンガン粒少量
斑状酸化鉄分を少量に含む 焼土粒少量
炭化物を少量に含む 5層直上、中世面検出
土師皿・瓦器質土器・龍泉系青磁・陶磁器出土
中世
- 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
しまりなし・弱粘性 マンガン粒多量
斑状酸化鉄分を少量に含む 生息痕跡がみられる
無遺物
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混粗砂
しまりなし・弱粘性 マンガン粒少量
斑状酸化鉄分を多量に含む
0.5mm程度の粗砂を下層に少量含む
5.0~10cm褐灰色(10YR5/1)粘土を小ブロック状に
少量含む
無遺物
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
しまりなし・粘性なし 細砂多量 流水の影響あり
無遺物
- 9 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
しまりあり・強粘性 柱状に酸化鉄分を多量に含む
無遺物
- 10 7.5GY6/1 緑灰色粘土
しまりあり・強粘性
上層に斑状酸化鉄分を少量に含む
無遺物 有明粘土

第 31 図 基本土層図 14

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代

(1) 縄文時代 中期の遺構と遺物 (平成14～20年度・02～08区)

本遺跡では縄文中期遺構は1基のみであった。06-I区 ST-01 (第41図) である。長軸70cm・短軸55cm・検出の深さは約10cmの小規模の不定形土坑であるが、破片ではあったが阿高式土器を伴う時期の廃棄土坑になるであろう。検出層は06-I区 11a層で土色は2.5GY 5/1 オリーブ灰色、細砂混じりのシルト質で斑鉄を多く含む。よく締り粘性も強い。埋土はこの土質とほぼ変化がなく、やや締りがなかったことが検出に繋がった。これを含め、本遺跡では下層にこのオリーブ灰色(青灰色土)が存在し、遺構検出に努めたがこの土層での遺構は06-I区 ST-01 だけであった。

流れ込みであるが縄紋を持つ胴部片が1点(No.5)と02-II区の流路では後期中葉の北久根山式土器が流れ込みの中に存在した。

(2) 縄文時代後晩期の遺構と遺物 (平成12～13年度・01～08区)

概要 標高4mを中心に位置する。北側は谷地形になっており、地形の等高線に併行にSD-07、SD-08の2条の溝を検出しており、縄文時代後晩期の土器がまとまって出土している。

また南側の標高4.2mの高い微高地には大きさは径6.5～7mの円形の掘り方を持つ柱穴が円形に巡る構造の竪穴建物を2軒検出している。

① 竪穴建物

SI-42 (第36図)

01-1区の標高4.2mの一番高い部分に位置する。東側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約7mと推定される。検出の深さは約10cmである。支柱穴は5基以上検出されている。柱穴の掘り方は約30～50cmで深さは20～35cmで平均の深さは約30cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

SI-34 (第45図) を検出した真下に検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。炉はそうした状況のため検出できなかった可能性がある。遺物はSI-42、SI-43を検出する際にSI-41として検出した際に上層には弥生時代終末～古墳時代前期の高杯や甕片等が出土しているが下層には刻目凸帯文土器の破片が数点含まれる。また、胴部の屈曲部が明瞭でない深鉢片も出土している。

掘り方が円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代晩期の刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-43 (第37図)

01-1区の標高4.2mの一番高い部分に位置する。東側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約6.8mと推定される。検出の深さは約10cmである。支柱穴は5基以上検出されている。柱穴の掘り方は約30～50cmで深さは20～35cmで平均の深さは約30cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

SI-34を検出し、掘削して、さらに下層に掘削し検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。

炉はそうした状況のため検出できなかった可能性がある。遺物はほとんど検出できていない。

遺物はSI-42、SI-43を検出する際にSI-41（第85図）として検出した際に上層には弥生時代終末～古墳時代前期の高杯や甕片等が出土しているが下層には刻目凸帯文土器の破片が数点含まれる。また、胴部の屈曲部が明瞭でない深鉢片も出土している。

掘り方が円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。2重に柱穴を検出されていることから、建物が拡張された可能性もある。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代晩期の刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-166 (A) (第38図)

01-3区の標高4.2～4.4mの一番高い部分に位置する。西側が調査区外に伸びている。掘り方は楕円形を呈すると推定される。南北軸が推定約8mと推定され、検出の深さは約10cmである。支柱穴は6基以上検出され、柱穴の掘り方は約20～40cmで深さは20～25cm、柱痕跡は約10～15cmである。掘り方の中央やや北側に軸長55cmの不整形な円形の焼土の範囲を検出している。地床炉と考えられ焼土の深さは3cm程とごく浅い。

炉の北東約1m離れた範囲に黒色磨研土器様式の浅鉢や粗製深鉢片と打製石斧4点が出土している。土師器片も1点混入している。浅鉢は口縁端部に一条の沈線が施され、黒色磨研土器様式古閑式併行期と推定できる。その他の細片は多数出土しているが、黒色磨研土器の浅鉢の破片が数点の他深鉢の胴部片等多い。突帯文土器も3点出土している。

No.2は先端部に擦痕を持つ一部分磨いた石斧と考えられる。先端部及び基部は欠損している。厚さ1.3cmと扁平で土掘り具の用途の可能性がある。No.1は使い込んだ石製穂摘み具と考えられる。孔背距離が1～1.5cmの穿孔を持つもので径も8mmと比較的大きく古い様相を持つが明らかに弥生時代中期以降のものであり、上からの混入品の可能性がある。後述するがSI-34に併行する竪穴建物が存在した可能性を示唆するものと考えたい。

炉があり、円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代晩期古閑式併行期から刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。

SI-166 (B) (SI-162) (第38図)

01-3区の標高4.2～4.4mの一番高い部分に位置する。西側が調査区外に伸びている。SI-166(A)に切られて検出している遺構である。SI-166に大部分が重複している状況である。掘り方は楕円形を呈すると推定され、南北軸が推定約6.5mと推定される。短軸は約6m、検出の深さは約10cmである。支柱穴は6基以上検出され、柱穴の掘り方は約20～40cmで深さは20～25cm、柱痕跡は約10～15cmである。掘り方の中央やや北側に軸長55cmの不整形な円形の焼土の範囲を検出している。地床炉と考えられ、焼土の深さは3cm程とごく浅い。

床面近くに粗製深鉢(条痕が残るもの)、精製深鉢の胴部片・底部。黒色磨研土器様式の鉢の破片等が出土している。弥生後期の長頸壺や甕の脚台も出土しており混入品と考えられる。炉があり、円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から黒色磨研土器の黒色磨研土器様式古閑式以降と考えられる。

SI-163 (第40図)

01-3 区のやや標高の低い部分に位置する。北側が古墳時代の竪穴建物 SI-103 (SX) が建てられたため、十分検出できていない。

掘り方は楕円形を呈すると推定され、軸が推定約 5.3～6m と推定、検出の深さは約 20cm である。主柱穴は 3 基以上検出され、北側は SI-103 により壊されている可能性があり、柱穴の掘り方は約 25～40cm で深さは 22～40 cm である。炉は検出されていないが、東側の調査区外に存在する可能性がある。

粗製の土器の深鉢の破片が 1 点出土し、横方向の条痕が残存する。また弥生土器甕の脚台等が混入している。円形で柱配置も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や床面下位に炉の周辺に流れ込んだ遺物や遺物包含層や隣接する竪穴建物から縄文時代後晩期晩期と考えられる。

② その他の建物 (第33図)

SI-165 と SI-164 は、は SI-163 と SI-166 (A) の間に検出されており、径 6m 程の円形の掘り方と推定しているが、調査区外に伸びているため明確ではない。SI-164 では柱穴を 2 基検出しているが、円形には柱配置を検出できていない。遺物は刻目凸帯文土器片 1 点と黒色磨研系土器 (精製土器) 及び条痕が残る粗製土器を出土しており、黒色磨研土器様式から刻目凸帯文土器様式併行期の時期と考えられる。

SI-167 は SI-166 (A) の南東に位置するもので円形の掘り方とだけしか判明していないが、埋土から刻目凸帯文土器 (口縁部からやや下がって刻目凸帯が付く形式) が出土しており、刻目凸帯文土器様式に併行する時期のものと考えられる。

③ 円形周溝状遺構 (第36図)

01-1 区の標高 4.2m の一番高い部分に位置する。SI-42 の南西側に SI-42 を切って位置する。幅 20～40cm、深さ約 15cm の溝が円形に巡る。溝に囲まれた範囲は長軸 1.2m の楕円形から円形でやや隅丸方形にも見える形状で、少なくとも 4 回及び 6 回の小工程に分けて掘削されているような形状である SI-34 を検出し、掘削して、さらに下層に掘削し検出したため、深さはごく浅くしか検出できなかった。本来は弥生時代の SI-34 とさほど検出面は変わらず、20cm 以上深かった可能性がある。

検出状況から熊本市石の本遺跡や熊本県上益城郡益城町の古閑北遺跡出土の縄文時代後晩期の円形周溝遺構等と同様な性格の遺構と推定できる。

④ 溝

SD-07 (第40図)

01-2 区の東側の低い部分に位置する。

幅 2.6m、断面台形状の深さ 35cm である。埋土は 3 層に分けられる。底面の幅は約 1m である。北から南方向に流れている。

埋土から縄文時代後晩期の粗製土器及び精製土器が出土している。埋土 2 層からの出土が多く、1/3 以上復元できるものも 3 点以上あり、比較的大きな破片が多い。横方向の条痕文が顕著に残存し、波状になる浅鉢や 1 条の沈線を施す黒色磨研土器浅鉢、沈線が施されず横方向の丁寧なミガキを施し上方に広がり、

端部がやや内傾する形式のもの、屈曲部が胴部の下の方で明瞭になった破片も出土している。このことから黒色磨研土器様式古閑式新段階を中心とする時期に埋没したと考えられる。

SD-08 (第40図)

01-2 区の東側の低い部分に位置する。平面で十分確認できていないが、SD-08 に切られている。幅 2m、断面台形状の深さ 35cm である。埋土は 3 層に分けられる。底面の幅は約 1m である。北西から南東に向かい伸びている溝と考えられる。

埋土から縄文時代後晩期の粗製土器及び精製土器が出土している。

⑤ 遺物包含層

01-3 区の溝の重複地域の埋土に粗製の縄文土器深鉢片が入っている。下層に縄文時代後晩期の遺構が存在した可能性がある。

第2節 弥生時代

(1) 後期の遺構・遺物

概要 01-1・2 区の標高 4.6m 微高地に長軸 7.5m の竪穴建物 1 基、やや下がった標高約 4.5m に SX-20 (土坑) が 1 基検出されている。明確に弥生後期と認定できるものはそれだけである。

① 竪穴建物

SI-34 (第47図)

01-1 区の標高 4.6m の一番高い部分に位置する。西側が一部調査区外や排水のためのトレンチ上層からの溝等により壊されており検出できていない。

掘り方は隅丸方形を呈すると推定される。南北軸が推定約 8m と推定される。検出の深さは約 40cm である。支柱穴は十分検出出来ていない。下層の SI-166 を検出した際の柱穴等が支柱穴になる可能性がある。例えば SI-166 の P7 や SI-166 の炉の周りに検出されている柱穴等で 2 本柱の支柱穴構造の竪穴建物の可能性がある。柱穴の掘り方は約 30～50cm で深さは 20～35cm で平均の深さは約 30cm である。柱痕跡は約 10～15cm である。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。

中央より南側に長軸 80cm、短軸 50cm、深さ 40cm の土坑を検出している。埋土 2 層に焼土を、3 層に炭を検出しており炉と考えられる。埋土から径約 2mm の水色のガラス小玉 (No. 7) が出土している。

埋土 1 層には口縁部が大きく外反し、胴部に刻目突帯文が付く内外面ハケ目が残存する壺の上部 1/4 程に接合できる 3 片の口縁部を含む破片が出土している。また、口縁に平坦面を持たない甕の口縁部も出土している。また、埋土 3 層から長頸壺の破片も出土している。

なお、埋土 1 層から庄内式から布留式にかけての口縁部の特徴を持つ破片も出土しているが細片で摩滅が著しい。混入品と考えられる。縄文時代後晩期の浅鉢の破片も 2 点出土している。方形で炉も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺構検出状況等から弥生時代後期前葉から中葉と考えられる。

② 土坑

SX-20 (第47図)

SI-34の北側の掘り方から5m程離れたところに位置する。長軸70cm、短軸65cmの楕円形の平面で、深さ60cmである。東側の谷部に隣接し、深さは浅いが地下水位によっては井戸の用途を果たしていた可能性も考えられる。埋土の最下層は灰色の粘土が堆積していた。最下層に弥生土器の壺が大きく2つに分けられて出土している。復元する口縁部、底部が欠損し、それぞれ1/2から1/3程しか残存していないが、意図的に廃棄された状況である可能性がある。

No.8は弥生土器の壺で頸部が上方に大きく立ち上がることから考えて長頸壺と考えられる。細かい型式は口縁部及び底部が欠損して適用できないが長胴で、肩部があまり張らないが、タタキが残存しなく、縦ハケが明瞭に残存することから考えて弥生時代後期後半と位置づけられる。SI-34と関連する遺構の可能性はある。

(2) 弥生時代終末から古墳時代前期 (平成12・13年度・01-1～8区)

概要 01-1・2区の中央及び3区の東側の標高4.8mの微高地に堅穴建物、その西側に近接するように南北方向の溝及び井戸を検出している。切り合い関係から見て少なくとも3時期、溝等のあり方等から小時期を設定するなら5～6時期の時期差を設定できると考えられる。

時的には庄内式土器から布留式中段階、北部九州久住編年2A～3B期に併行する時期と考えられる。

① 堅穴建物

概要 調査区の高い部分に重複して検出されている。調査区外へ伸びる建物が多く規模等を比較するのは困難であるが、4～5mの規模のものが多い。また比高差20cm程のものであるがベッド状遺構が多く、弥生時代以来の構造が古墳時代前期まで踏襲されていることがわかる。

また焼失した建物とそうでない建物があり、焼失建物も2軒切り合っているものがあり、また位置的に考えて焼失建物も2時期ある。焼失していない建物もSI-103・104・107・141が切り合っており、位置関係から考えて3～4時期あるとすれば、5時期以上の小時期が考えられる。井戸の掘削時期と考え合わせて集落の密度も考える必要がある。さらに、柳町遺跡に隣接する区域であり、土坑等の貯蔵エリアが南東に分布していること北東側に谷が存在する事等から考えて、柳町遺跡で検出した集落部分の南東端に位置する集落と考えている。

SI-02-1 (第78図)

01-1区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-02-2及びSI-02-3と重複して検出されている。3つの建物では一番新しいものと推定できる。構造は隅丸方形を呈する軸長約4mの堅穴と推定される。検出の深さは約15cmである。

位置関係からSP-1・SP-3・SP-6の3本を主柱穴とする堅穴建物と考えている。柱穴の掘り方は30～40cmで深さは約35～40cmである。柱痕跡は約10～15cmである。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。中央より北側に長軸20cm、短軸15cm、深さ3cmの焼土範囲を検出している。炉と考えられる。SK-18はSI-02-1南東隅に位置し、長軸短軸約1m、深さ約20cmで貯蔵穴と考えられる。埋土は3層に分けられる。1層上層に土師器片を含む。

堅穴が方形で炉も確認できることから建物と推定でき、年代の推定は困難であるが SI-02-2 出土遺物や構造や遺構検出状況から古墳時代前期と考えられる。

幅 4.5cm、高さ 2cm、厚さ 3mm の手づくね土器、径 12cm 程で高さ 8cm 程の小形丸底壺、厚さ 2mm で口縁部付近が内傾し、内側を丁寧になでた赤焼きの精製した杯、口縁部を強くなでて外側に外反させた鉢や高杯脚部等特徴的な器種が良好な遺存状況で出土している。口縁部高杯の脚部や内面削りの厚さ 4mm の甕片に混じって脚台も 2 点出土している。検出した深さも浅く、一番標高の高い箇所に位置するため廃棄するにあたり、祭祀を行っていた可能性が考えられる。

推定時期は、流れ込んだ遺物から北部九州久住編年Ⅱ期併行期と考えられ、庄内式中段階から布留式併行期と考えられる。北部九州久住編年のⅡA 期まで上る可能性も考えたい。

SI-02-2 (第 78 図)

01-1 区の標高 4.7m の一番高い部分に位置する。SI-02-1 及び SI-02-3 と重複して検出されている。3 つの建物では時期的には間に位置する時期のものと推定できる。構造は隅丸方形を呈する長軸長約 4.8m、短軸 3.8m の堅穴と推定される。検出の深さは約 10cm である。

位置関係から SP-12・SP-4・SP-9・SP-8 の 4 本を支柱穴とする堅穴建物と考えている。柱穴の掘り方は 30～40cm で深さは約 30～35cm である。柱痕跡は約 10～15cm である。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。炉は検出できていない。遺物はほとんど検出できていない。

堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。炉は SI-02-1 により削平された可能性がある。年代の推定は困難であるが、床面近くに流れ込んだ細片や構造や遺構検出状況から弥生時代終末から古墳時代前期にかけてと考えられる。(SI-02-1 参照)

SI-02-3 (第 78 図)

SI-02-1 及び SI-02-2 と重複して検出されている。3 つの建物では時期的には一番古い時期のものと推定できる。掘り方は隅丸方形を呈する堅穴である。SI-02-1 や SI-02-2 に壊されて明確でないが、長軸長 4.5m 前後の堅穴と推定される。検出の深さは約 10cm である。

位置関係から SP-11・SP-10・SP-7 もしくは SP-3・SP-7・SP-11 等を支柱穴とする 4 本柱構造のものと考えている。柱穴の掘り方は 30～35cm で深さは約 30～35cm である。柱痕跡は約 10～15cm である。実際の柱よりはやや大きく検出されると考えられる。炉も遺物はほとんど検出できていない。

堅穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。炉は SI-02-1 等により削平された可能性がある。年代の推定は困難であるが、SI-02-1 床面に流れ込んだ遺物や構造や遺構検出状況から弥生時代終末から古墳時代前期にかけてと考えられる。(SI-02-1 参照)

SI-103 (第 79 図)

01-3 区の標高 4.6～4.7m の一番高い部分に位置する。SI-104 及び SI-141 を切るように位置する。北側東側南側が調査区外に伸びる。大部分が調査区外のため、規模を推定するのは困難であるがベッド状遺構及びその他の掘り方の形状から考えて 6m 以上の掘り方と考えられ検出の深さは約 40cm である。西側に幅約 15cm、深さ約 8cm の壁溝、西側の高まりは幅約 60～70cm 長さ 3.6m 以上のベッド状遺構と考えられる。支柱穴は不明であり炉も遺物はほとんど検出できていない。

堅穴建物と断定するには要素が足りないと考えられるが、ベッド状遺構を持つこと、壁溝と考えられる

溝があることから竪穴建物と推定したい。時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

埋土から出土した遺物を見るとハケ目の破片が多いが、その中に内面削りのものが5～6点入る。タタキを施し、内面もハケ目のものもある。口縁部は上方につまみ上げた土師器の甕口縁部片やや時期の下りそうな在地系の甕の口縁部片が出土している。

推定時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況や構造から北部九州久住編年ⅠB期～Ⅱ期併行期と考えられ、弥生時代終末期（庄内式中段階併行期）以降と考えられる。ただ、根拠が不足しており、内面削りの5mm程の厚さの破片もあり、北部九州久住編年のⅢA期以降まで下る可能性もないとは言えない。

SI-104（第79図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-107に西側の肩部を東側はSI-103に切られている。SI-141に切られ、南側は調査区外に伸びている。調査区外に伸びたり、SI-103に切られたりして規模を推定するのは困難であるが、4m以上の規模を持つ竪穴と考えられる。SI-103との境界に径35cm、深さ30cmの柱穴を検出している。2本柱もしくは4本柱の支柱穴の建物と考えられ炉は検出できていない。

幅1m、長さ1.4m以上のベッド状遺構を持つ。南側が平面で十分検出できず長さが確認できなかったがA-A'の断面からベッド状遺構を観察できることから、高さ10cmの西側一面にベッド状遺構が存在したと考えられる。遺物は小形丸底壺の口縁部や胴部片3点、甕の口縁部片の他は胴部細片で厚さ2mm程の細片と厚さ6mmの内面削りのものが出土し、竪穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定でき、西側の高まりはベッド状遺構と考えられる。

埋土2層からは口縁部の外側につまんだ土師器甕の破片や埋土1層からは口縁部を内側外側につまんだような口縁の形式のものも出土している。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から考えて幅を持たせて北部九州久住編年ⅡCからⅢA期併行期と考えられ、古墳時代（布留式古段階併行期）を中心とする時期と考えられる。

SI-141（第79図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。東側はSI-103に南側はSI-104に西側の肩部を東側はSI-103に切られ、北側は調査区外に伸びている。調査区外に伸びたり、SI-103に切られたりして規模を推定するのは困難である。掘り方の形状は方形で、径約40cm、深さ約30cmの柱穴を1基検出しているが竪穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。

埋土から厚さ6mmで底部径2.5cmの甕の底部片他が出土している。尖底で径2cmくらいの底部の痕跡を持つ。時期は埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅠBからⅡA期併行期と考えられ、弥生時代終末（庄内式中段階から新段階併行期）と考えられる。ただ年代を推定できる材料が少なく時期が下る可能性も考えられよう。

SI-107（第76・79図）

01-3区の標高約4.7mの一番高い部分の微高地に立地する。SI-107を切っている。SI-52も切っている。西側がSI-51に切られており、東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は4.2mの規模を持つ竪穴である。柱穴炉は検出できていない。また遺物もほとんど検出できていない。小形丸底壺の厚さ2mm程度の口縁部細片2点、胴部片1点、厚さ4mmの内面削りの胴部片等11点他に遺構検出がうまくできなくて他

の遺構番号で取り上げたりしたものも含めても30～40点程の細片が出土しているのみである。タタキを胴部に残す破片や布留式土器系の口縁を持つ甕片も出土している。

竪穴建物と断定するには要素が少ないが、他の竪穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定できる。ベッド状遺構はSI-51に壊されている可能性が高い。時期は、流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

時期は、埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡBからⅢA期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。判断できる材料が少ないので時期は下る可能性もある。

SX-136（第80図）

01-3区の標高約3.6mの部分に立地する。

東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は2.3m・東西軸は2.6mの規模を持つ竪穴である。柱穴は検出できていない。また遺物もほとんど検出できていない。

竪穴建物と断定するには要素が少ないが、他の竪穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定でき、遺構西端にSE-140が所在する。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

SI-51（第81・82・83図）

01-3区の標高4.7mの一番高い部分に位置する。SI-52を切り北側は調査区外に伸びている。

調査区外に伸びているため全体の規模を推定するのは困難であるが、長軸4.2m短軸約3.7mの規模の方形の竪穴である。柱穴は深さ25～30cmで25～40cmの径を持つ楕円形から円形のものを4基検出している。位置関係から4本柱を支柱穴とする構造のものと考えられる。焼失状況が確認でき火災建物と考えられる。焼土は中央付近及び南側に顕著であり、炭は全体に分布するが南側中央及び北東側に特に顕著である。しかしながら、よく見ると中央付近を指して炭が分布しており垂木材が焼失して炭になっている状況と考えられる。ただ壁際に細かな炭が多く、壁材に使われていた木材の焼失状況も混在していることが伺える。下層に南側及び西側に土器片も出土している。竪穴のほぼ中央に推定されているところに焼土が顕著であり、火災の時の焼土と重なって十分検出で出来なかったと考えたい。幅1m、長さ4m、高さ約20cmの高さのベッド状遺構を持つ。A-A'の断面からベッド状遺構を観察できることから、高さ10cm東側一面にベッド状遺構が存在している。焼土と共に土師器の細片が出土している。ほぼ完形になるのは高杯1点である。複合口縁壺や直口壺の口縁等3点が甕や壺等の胴部片と共に床面に流れ込んだ状態で出土していると考えられる。

高杯は杯部の複合部分が明確でなくやや厚みがあり、裾がやや下方に広がる形式である。複合口縁壺の1つは端部の面が明確で複合部の接合部に厚みがあり古い様相はある。他の甕の破片は上方につまみあげる庄内式系甕の影響を受けた破片や外方につまみあげる弥生後期の系譜を持つ破片や外面にタタキを残す破片も存在する。SI-52と似た出土状況である。

竪穴が方形で柱穴も確認できることから建物と推定できる。西側の高まりはベッド状遺構と考えられる。

時期は、1層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況からセット関係が明確でないので幅を見込んで北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段階

併行期) と考えられる。

SI-52 (第 81・82・83 図)

01-3 区の標高約 4.7m の一番高い部分の微高地に立地する。SI-107 を切っている。SI-52 も切っている。西側が SI-51 に切られており、東西の規模を推定するのは困難であるが、南北軸は 4.2m の規模を持つ堅穴である。柱穴は検出できていない。また No. 46 の小形丸底壺以外の遺物は破片である。No. 46 は口径約 9cm で口縁部が外方に広がり、つまみ上げ、胴部は肩が張り、口縁部に比べて小さいものである。長頸壺の口縁部と考えられる頸部付近で中に入り、口縁端部は中に入りながらつまみ上げているものがある。No. 45 は埋土 1 層からの出土である。甕の口縁端部が押さえてやや上方につまみ上げている。器壁は胴部で 6mm、頸部で 15mm と厚い。

No. 44 は鉢で有段鉢に後出する器形である。底部は厚みが 7mm あり、口縁部は上方に広がり、端部は上方につまみ上げている。複合口縁壺の口縁部周辺の破片も出土しているがそれ以外は胴部片である。口縁端部は外側に丸みを持ち器壁は 8mm 程である。他にも細片が多数出土している。甕胴部にタタキ目を残し、内面ハケ目で口縁部は外方につまんでいる弥生後期土器の系譜を引く破片も少なからず見られる。

堅穴建物と断定するには要素が少ないが、他の堅穴遺構の状況から考えて建物の可能性が高いと推定できる。D-D' や G-G' の断面を見ると幅 15 から 20cm の段を持つ。ベッド状遺構は SI-51 に壊されている可能性が高い。時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年 (Ⅱ B ~) Ⅲ A 期併行期と考えられ、古墳時代前期前半 (布留式古段階から中段階併行期) を中心とする時期と考えられる。ただし、遡る土器も見られ、時期が 2 段階以上遡のぼる可能性もある。それら古相の土器群は重複する建物に伴う時期と考えている。

SI-53・SX-102 (第 84 図)

01-3 区の標高 4.6m の一番高い部分に位置する。SI-52 を切っている。南側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難であるが、長軸 4.2m 短軸約 4.4m 以上の規模の方形の堅穴である。柱穴は深さ 30 ~ 40cm で 25 ~ 30cm の径を持つ楕円形から円形のを 4 基検出している。位置関係から 4 本柱を主柱穴とする構造のものと考えられる。

埋土の東側の約 3m の範囲で炭や焼土を検出している。この部分を SX-102 として記録保存し、長さ 30 ~ 50cm の比較的残存状況の良い炭火物が出土している。焼土の範囲は上層が削平されているため、堅穴の全域に広がっていないと推定され、火災建物の可能性が考えられる。炉は中央付近が激しく焼失して特定できない。

SX-102 からの土師器の甕 (No. 48) 及び小形丸底壺 (No. 47) が下層に出土している。焼土と共に他に土師器の細片が出土している。床面に流れ込んだものと考えられる。上層には小形丸底壺の破片等他に 3 点や厚さ 2 ~ 3mm の薄手の破片が多数出土している。

堅穴が方形で柱穴も 4 基確認できることから建物と推定できる。ベッド状遺構の有無は不明とである。

時期は、埋土 3 層や 1 層に廃棄されて流れ込んだ遺物から北部九州久住編年 Ⅱ B から Ⅱ C 期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半 (庄内式新段階から布留式古段階併行期) と考えられる。

SI-15 (第85図)

01-3 区の標高 4.7m の一番高い部分に位置する。SI-41 の上層部分である。北側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難である。一方軸が 3.0m 以上の規模の方形の堅穴としか推測できない。柱穴は検出できていない。

状況は火災建物と考えられる。土器が中央付近に多く、焼土・炭化材は壁際に多い。焼失建物が片付けられてその時に土器を廃棄した(儀礼?)と推定したい。炭化材は中央付近を指向して出土した他壁に併行している小形の炭化材も出土しており、垂木材や壁抑えの杭材等も含まれている可能性がある。

焼土と共に土師器の細片が出土しているが、廃棄された遺物がほとんどである。床面からやや浮いた状況で流れ込んだものと考えられる。

埋土 1 層から小形丸底壺片 7 個体以上、高杯 6 個体以上、複合口縁壺の口縁部片 1 点等が出土している。

小形丸底壺は口縁部が 4cm 程度の高さのもので端部の外側に粘土のつまみ上げた痕跡(丸み)が残存する。高杯は脚部上部内面に横方向にヘラ削りが残存し、脚部の裾が明確に屈曲するものである、脚端部外面はやや下方に下がる。口縁部は屈曲するもので上方に広がるが直線的で口縁端部は外側につまみあげている。複合口縁壺は外方に大きく広がるもので、タテハケが外面に残存する。頸部の高さは 4cm 程で、口縁端部は面を明瞭に持つものでやや外方につまみあげている。

甕は布留式土器の特徴を持つものが存在する。口縁端部を上方につまみ上げるように丸みを持ち、端部内面を内側につまみあげるため、内面に粘土が丸みを帯びて残存する。そうした器形は大きく半分以上接合できるものも 2 点以上出土している。甕の胴部片は厚さ 2mm ~ 1cm のまで様々なものが出土している。また、口縁部が外方に伸び外側につまみ上げただけや端部に面を持ち、凹線状に丁寧になでている在来系のものも存在する。1/3 程接合できた個体は 2 ~ 4mm の厚さである。甕片も 7 個体以上残存度の高いものが出土している。小形丸底壺は精製のものが 3 点、そのうち 1 点は肩部が張り、幅の方が器高より広いものである。また、粗製の精製土器を模倣したものも出土している。器壁は 2mm 程と薄い調整はハケ目が残りに、頸部が明瞭ではないものである。また、SX-35 (第 98 図) の小形丸底壺に類似する器形で、径 13cm、高さ 14cm の完形のものも出土している。ミニチュア土器も 1 点出土している。

堅穴が方形だが、建物と特定するには、要素が足りない。しかしながら、壁が垂直に立ち上がることや下層に SI-40 が検出でき、床面が埋土で検出が困難であることや半分以上が調査区外である事を考えると建物と考えたい。時期は、埋土 1 層に廃棄された遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年 II C 期併行期と考えられ、古墳時代前期前半(布留式古段階併行期)と考えられる。

SI-41 (第85図)

01-3 区の標高 4.7m の一番高い部分に位置する。上層には SI-15 があり、ある程度堅穴が埋没してから、この建物が建てられていることから考えて、SI-15 と関連するものと考えられる。北側は調査区外に伸びているため、全体の規模を推定するのは困難である。一方軸が 4.8m 以上の規模の方形の堅穴としか推測できない。柱穴は検出できていない。焼土と共に土師器の細片が出土しているが、完形になる個体はない。床面に流れ込んだものと考えられる。

堅穴が方形だが建物と特定するには要素が足りない。しかし壁が垂直に立ち上がることや下層に SI-40 が検出でき、床面が埋土で検出が困難であることや半分以上が調査区外である事を考えると建物と考えた

い。時期は、重複する遺物や重複する遺構の状況から古墳時代前期と考えられる。

153-SI (第 105 図)

01-3 区の標高約 4.6m に位置する。01-1 区の標高の高い部分に位置する SI-52 に隣接する。縄文時代の堅穴建物 SI-166 を検出している時に検出できた。掘り方の平面形は長軸約 5m、短軸約 4.7m の長方形である。検出した深さは約 25cm である。北東隅に幅と長さが 1.4m、高さ 15cm 程の規模のベッド状遺構が付属する。掘り方内に 8 基以上の柱穴を検出している。

南西隅がうまく検出できなかったため不明部分が多いため推定によるところが多く、2 本柱構造の可能性もあるが、4 本柱構造の支柱穴の建物が建て替えられていると考えている。柱穴の規模は径 20～35cm の円形で深さ 25～40cm である。炉は不明である。

出土した遺物は細片が多く、量的に少ない。内面ハケ目の甕・壺片 6～7 点、内面削りの甕片 2 点が、出土している他、縄文晩期の堅穴建物 (SI-166 等) を検出する際に弥生後期の長頸壺や弥生土器片が混入している。口縁部端部が一部上方につまみあげている破片も出土している。いずれも流れ込みの遺物である。

方形でベッド状遺構炉も確認できることから建物と推定できる。年代の推定は困難であるが、構造や流れ込みの遺物や遺構検出状況等から弥生時代終末から古墳時代前期前半と考えられる。検出した手順や弥生後期の系譜を引く土器の方が多数を占めている点や赤彩しているものも 1 点含まれるため、弥生時代後期後半以前にさかのぼる可能性も指摘しておきたい。

② 建物の可能性がある遺構

SX-804 (第 111 図)

01-8 区中央付近に位置する。西側は調査区外に伸びている。長軸 5.5m 以上、短軸 4m 以上、深さ 10cm 以上の掘り方を持つ。SX-801 が掘り方内に検出されている。径 1.2m 程度の土坑と推定できるが深さ 40cm だが中層に遺物の細片が出土している。この遺構の上から掘り込んでいるが掘り方の検出面が浅いため、使用時の床面に伴う可能性もあり、作業場の土坑か。径 25～30cm で深さ 25～30cm の柱穴も検出しており、4 本柱の支柱穴構造の可能性もある。掘り方は浅いが、柱穴を 2 基検出しているので、土坑が伴えば、決め手には欠けるが、建物の可能性が高い。そうすると、新たな微高地が 01-1～3 区とは別に広がっている可能性があるが、周辺の調査で土坑を検出しているのでそれに伴う何らかの施設の可能性があるが、01-1～3 区のような長期的な集落とは考えにくい遺物の量や他の明確な遺構が検出されていないことが弱点である。

埋土 1 層からは胴部外面にタタキが残存する破片が 2 点出土している。内面はハケ目のものもある。5cm 以下の細片であり、いずれも流れ込みの遺物である。

SX-803 (第 111 図)

8 区中央付近に位置する。西側は調査区外に伸びている。長軸 3.5m 以上、短軸 3m 程度、深さ 5cm 以上の掘り方を持つ。中央に径 35cm の平面円形の深さ 15cm の土坑を検出している。遺物は細片が北側の底面付近に散らばって出土している。柱穴は検出できていない。

掘り方が浅く、柱穴を検出できていないのが、建物と認定するには厳しいが SX-804 が建物であれば、可能性が高いと考えられる。外面はタタキ目を残す 8cm 以上の甕の破片で器壁は薄く弥生土器終末以降のもの

のと考えられる。

SX-718 (第106図)

01-7区の中央部に位置する。SD-717に切られている。十分に平面形を検出していないが、長軸5.6mで方形に検出している。深さは15cm程である。SX-718の中央やや北よりの上層部に土坑としてSK-716を検出しており、甕が1個体出土している。長胴形でタキを残し丸底である口縁部は外側及び上方にもつまみ上げている形式である。内面は丁寧になで消している。器壁は頸部付近では4mmだが、薄い部分では2mmである。SK-716はSX-718の上層部と考えられる。建物にするには柱穴や炉やベット状遺構等を検出していないので難しいが、可能性として上げておきたい。

時期はSX-718出土遺物から北部九州久住編年I B(～II A)期併行期と考えられ、弥生時代終末(庄内式古段階から中段併行期)と考えられる。

これが建物とすると水田と集落と区画溝の関係が難しくなり、そうした区画以前のSI-34等との関連も考える必要がある。

③ 井戸と関連する土坑

概要 建物が立地する南東側に位置する。建物から2～10mしか離れていないところに位置する。

井戸には最下層に甕等を完形で沈めているものもあり、一方そうした儀礼が見られないものもある。

廃棄の状況も2種類ある。上層に井戸の範囲よりさらに広い範囲に土器が廃棄されている状況が検出できるものと、そうした状況が見られないものがあり井戸に関する儀礼を考える上で貴重な資料と考えられる。

SE-31 (第86図)

01-1・2区・01-6区の間、標高は約4.6mに位置する。大局的な平面形は径約1.4mの円形ではあるが、残存している状況では一辺50～80cm程の緩やかな多角形(六角形)を呈している。深さは約2mである。底面は約50cmの円形で底面から深さ70cmは直に掘削されている。当時の湧水の深さの可能性もある。それ以降は断面が地表面に至るまで広がる。少なくとも6段の工程を経て掘削されていると考えられる。

埋土最下層には遺物は見られない。埋土4層では自然木と共に小形丸底壺(No.52)が廃棄されている。埋土3層では甕(No.50・51)が出土している。埋土1層は土器の破砕された状況である。

No.52は小形丸底壺で底部は意図的に径2～3cm程が穿孔されており、4～6cm程の範囲が穿孔により剥離している状況である。底部は薄く丁寧に工具でなでられていたが、立ち上がる部分から口縁部までは縦ハケが残存しており口縁部はやや内傾しており、古墳時代前期でもやや時期が下るものと考えられる。

最下層に遺物が見られないが、埋土4層等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。小形丸底壺が4層で出土していることから、埋没過程において儀礼が行われていたと考えられる。

埋土1層からも多様な土器が出土している。SK-27と接合する赤褐色の外表面横方向にミガキを施し、内外面を一定方向にミガキを施す底部と胴部に凸帯状の変化点を持ち、台が付くかもしれない精製の鉢がある。中形の直口壺、甕は外側につまんで調整したような口縁端部をもつもの、庄内式～布留式の口縁端部の影響を受けて上方につまみあげる形式をもつもの等がある。高杯については、脚部は緩やかに広がるが、

内面には筒部と裾部が明瞭になっているものや脚部径約 12cm で筒部の下部が 8cm、杯接合部が 3.5cm とすぼまっている形式で裾は平坦に近い形状のもの 2 種が含まれる。小形丸底壺は SK-27 出土の破片と接合するもので、径約 12cm・高さ約 8cm で外面は口縁部と胴部の境は明瞭でないが、内面は稜が明瞭に残り丁寧に作っているものも出土している。また SK-27 と SE-31 を検出する前に SX-04-2 が検出されているが、SK-27 との切り合い関係が問題となるが、この井戸の最終的な廃棄過程における儀礼と考えたい。SX-19 と SE-36 との関係が参考になる。SK-27 が埋没過程の廃棄に伴う土坑の可能性であろうか。

SK-04-2 としては、杯部の屈曲が明瞭でない高杯の破片や布留式系の甕の口縁、小形丸底壺の胴部片等の他多数の土器片が出土している。時期は、埋土 1 層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年Ⅲ A 期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段階併行期）と考えられる。

SK-27 (第 86 図)

02-1・2 区・01-6 区の間、標高は約 4.6m に位置する。

平面形は長軸径約 1.5m、短軸約 1m の楕円形である。程の円形ではある検出した深さは約 60cm である。

埋土は長軸の方から交互に堆積しており双方から意図的に埋められた状況が見られる。遺物は埋土 1 層の肩部付近に土器の破片が出土している。口縁部がやや直立する甕と長頸壺の頸部片である。甕は内面削りで外面にはやや左上がりのハケが残存する。壺の口縁は直立して胴部は張らない器形と推定できる。SE-31 と接合する破片も何点か存在する。(SE-31 参照)

この土坑の用途を特定するのは困難であるが、SX-19 と SE-36 との関係から推定して SE-36 の埋没過程における土坑と考えたい。時期は、埋土 1 層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年Ⅲ A 期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階から中段階併行期）と考えられる。

SE-36 (第 87 図)

02-1・2 区の南側に位置する。標高は 4.55m に位置する。2b 層を除去した段階で検出している。SD-03 を切っている。大局的な平面形は径約 1m の円形ではあるが、残存している状況では一辺 30～50cm 程の緩やかな多角形（8 角形）を呈している。深さは約 2.2m である。底面は約 45cm の円形で底面から深さ約 70cm は直に掘削されている。当時の湧水の深さの可能性がありそれ以降は断面が地表面に至るまで広がる。少なくとも 7 段の工程を経て掘削されていると考えられる。

埋土最下層のやや上の⑩層に甕が 2 点出土している。No. 53 は口縁部が内傾し、布留式土器の系譜を持つが、端部はやや外反し、端部内側に肥厚しない。底部内面に指頭圧痕を顕著に残しプロポーシオンは尖底に近い丸底で最大胴部（肩部）は上方にあり肩は張る。ただ、厚みは胴部上半から中下半上部で 6～8mm もある。口縁部のみ 1/4 程欠損し、意図的に口縁部を打ち欠いているように見える。

No. 54 は庄内式土器の系譜を持つ土器で底部内面に指頭圧痕を顕著に残し、内面の胴部上半を薄い部分で 3mm に削り、細かいハケを胴部外面に残す。プロポーシオンは緩やかな丸底で最大胴部（肩部）は上方にあり、肩は張る。上方口縁部はややつまみあげているものの外反しているように見える。No. 84 の SE-121 出土の甕より型式学的に下るものと考えられる。

最下層出土の甕の口縁部が打ち欠いていることや他にも完形の土器が出土していることから井戸を使用するにあたり、儀礼として行われた行為と推定している。また、後述する SE-19 は断面等の観察からこの井戸（SE-36）を廃棄するにあつての儀礼を行う土坑でさらに上層に土器の廃棄儀礼が行われていたと考え

られる。SK-27 と SE-31 との関係も同様なものと考えられる。

埋土 12 層や SK-27 や SE-36 の上層の出土土器等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。打製石斧 (No. 55) は混入して流れ込んだものか。

SE-19 (第 87 図)

02-1・2 区の南側に位置し、標高は約 4.55m に位置する。SE-36 の北東側の掘り方を切っている。平面形は長軸径約 1.1m、短軸約 0.8m の楕円形であり検出した深さは約 90cm である。

埋土は長軸の方から交互に堆積しており双方から意図的に埋められた状況が見られる。遺物は埋土の最下層に破砕されたように出土している。甕の口縁は内傾しながら端部は上方につまみあげているもので庄内式系甕と布留式系甕の中間形式とも言えるもの、及び径約 20cm の小形丸底壺の口縁及び小形丸底壺胴部片等が検出できている。

この土坑の用途を特定するのは困難であるが、断面等の観察や最下層の破砕された土器の出土状況等を見ると、SE-31 も同様な状況であることも併せて SE-36 の埋没過程における土坑と考えたい。

時期は、埋土 1 層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～ⅡC 期併行期と考えられ、古墳時代前期前半(庄内式古段階から布留式古段階併行期)と考えられる。

SE-114 (第 88 図)

SI-52 から南東へ 5m や SI-53 から西へ約 5m 南側、標高は 4.3m に位置する。2b 層を除去した段階で検出している。SD-103 を切っている。SE-121 に切られている。

井戸の機能としての平面形の上部は長軸約 1.1m、短軸約 0.9m の楕円形ではあるが、残存している状況では一辺 30～60cm 程の緩やかな多角形を呈している。検出面から 40cm 下は径 60cm、底部付近は径 40cm の小形の井戸である。深さは約 1.3m である。

4 層では 1 点精製の口縁部が立ち上がり若干内傾する口縁部外面を顕著にタテ方向に磨く小形丸底壺が出土している。3 層までは形状から井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性がある。埋土 3 層からは径約 13cm、丸底で口縁部を若干つまみ上げた形状の内面にミガキを施す完形の鉢 (No. 61) が出土している。その他は完形に近く図化可能な土器は埋土 1 層である。No. 66 は口縁部が接合しないため、口縁部打ち割られている可能性がある。口縁部付近の器壁が 1cm もある小形丸底壺 (No. 60) の他、器壁が 3mm の典型的な小形丸底壺 (No. 59) が出土している。また口縁部を若干つまみ上げ、肩部が張る甕も出土している。器壁は 3mm 以下で薄いものである。底だけは器壁を削り 2mm 以下の器壁になっている。埋土 5・6 層には完形の遺物は出土していない。流れ込んだりしている土器の可能性が高い。

No. 58 は底部の器壁は 1cm もある鉢であるが、口縁部が内傾し、やや内面が肥厚する様な形式である。No. 62 は小形の有段鉢で底部に顕著なハケ目を残す。

他の井戸 (SE-36) のように廃棄するにあつての儀礼を行う土坑が埋土上層と考えられ、底では土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。典型的な器種としては小形丸底壺や有段鉢等の小形の器種である。

古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。ただ、SE-121 出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するか SE-121 の埋められた時期を考える必要がある。上層の土器の廃棄儀礼がどの井戸のものかと考えるより、井戸群の廃棄とも考えられ、本来の井戸の切り合い関係を追求するのが困難なことも事実であろう。いずれにしても埋土 3 層や 1 層の出土遺物から古墳時代

前期の段階で埋没したものと見られる。

時期は、埋土3層や1層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡBからⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式新段階から布留式古段階併行期)と考えられる。

SE-115 (第90図)

SI-52から南東へ5mやSI-53から西へ約5m南側、標高は4.3mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-03を切っている。

井戸の機能としての平面形は実質的には径約1mの円形ではあるが、残存している状況では一辺30～60cm程の緩やかな多角形を呈している。深さは約2mである。ただ、検出時及び上層部分の大きさは長軸約3m、短軸約2.2mの楕円形である。井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。井戸の底面は約1mの円形で底面から深さ約1mは直に掘削されている。それ以降は断面が地表面に至るまで上述したように大きく広がる。

埋土6層から甕の底部(No.71)及び自然木が出土している。埋土③層から底部の器壁が1cm以上ある鉢(No.69)や埋土1層から緩やかな頸部を持つ鉢(小形丸底壺と鉢の間の形式;No.68)も出土している。No.71は底部が丸底で顕著に指頭圧痕を残す。内面の胴部上半を薄い部分で3mmに削り、細かいハケを胴部外面に残す。プロポーシオンは緩やかな丸底である。最大胴部(肩部)は上方にあるものの内面を削ったあとナデが遺存していることでは古い傾向があり、庄内式土器の系譜を持つ土器であるが底部が尖底でなく、最大胴部径は上方にある形式は布留式土器と考えられる。No.84のSE-121出土の甕より型式学的に下るものと考えられる。

時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期と考えられ、古墳時代前期前半(布留式古段階から中段併行期)と考えられる。

出土遺物のあり方から土器を埋納するような儀礼が行われた形跡はないと推定している。ただ他の井戸(SE-36)のように廃棄するにあつての儀礼を行う土坑でさらに上層に土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。埋土⑥層出土土器(No.71)や切り合うSE-114・121等の遺物から、古墳時代前期に掘削された井戸であり、古墳時代前期の段階で埋没したものと見られる。ただSE-121出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するかSE-121の埋められた時期を考える必要がある。

SE-121 (第91図)

SI-52から南東へ5mやSI-53から西へ約5m南側、標高は4.3mに位置する。2b層を除去した段階で検出している。SD-103を切り、SE-121に切られている。

井戸の機能としての平面形は実質的には径約1.2mの円形ではあるが、残存している状況では一辺30～60cm程の緩やかな多角形を呈している。深さは約3mである。検出時及び上層部分の大きさは長軸約3.4m、短軸約3mの楕円形である。井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。井戸の底面は約1mの円形で底面から深さ約1.5mは直に掘削されている。それ以降は断面が地表面に至るまで上述したように大きく広がる。井戸としての規模は今回検出した中では最大である。

最下層の9層(取り上げ層位8層)にやや器形の異なる直行壺が2点出土している。1点は底部の器壁が5～6mmで口縁部がやや内傾するもの(No.75)でもう1点は口縁部が直行しながらやや外反するもので

胴部下半から底部は1cm以上も器壁のあるもの（No. 74）である。甕2点、壺1点である。甕1点は一部口縁部が欠損しているが、壺は完形である。意図的に沈められた可能性がある。底面からやや浮いた埋土8層では、型的には一番古そうな庄内式系甕及び外側にやはり肥厚する甕（No. 82・84）及び広口壺（No. 88）や小形丸底壺系統の壺の完形（No. 80）である。No. 87の口縁端部付近が薄い底部の器壁が1cmもあり、器形も口縁部が直立するものの短いものや、口縁部の特徴が甕と同じようにややつまみあげられながらも内傾する小形の壺（No. 86）の様なものがある。廃棄儀礼でなく使用に伴う儀礼の可能性が高い。6層までは井戸廃棄儀礼に伴う土坑としての大きさの可能性もある。

埋土6層には在来の長胴形の甕の底部に類似する外面にタタキが残存し、内面はハケで調整した底部に焼成前の穿孔がある甕、庄内式系統の口縁部をつまみあげ器壁が2mmと薄い口縁を持ち細かいハケを施す甕や弥生土器系の頸部に凸帯を施し、ひさご状か脚台を持ちそうな破片等特異な器種が廃棄されている。埋土4層にも径約13cm、高さ約3cmの丸底の精製品の鉢が出土し、（同様な鉢は1層でも出土している。）外面は丁寧にミガキが施され、口縁部は若干つまみ上げられている。また埋土2層では、小形丸底壺の精製品が出土し、器壁は2mmで口径約16cm、高さ約9cmである。外面胴部下半は削りをナゲた後、ヘラ先で丁寧に磨いており、胴部上半はハケをナナメから上部は横方向のミガキで消している。口縁部外面にタテハケは残存するもののヨコ方向のミガキを施して調整している。内面も鉄分が付着しており明確ではない部分があるがミガキによる丁寧な調整である。直口壺で胴部外面にタタキを残す破片も出土している。埋土4・2・1層でも廃棄儀礼を行っていると考えられる。

まとめ ただ他の井戸（SE-36）のようにを廃棄するにあつての儀礼を行う土坑が埋土上層と考えられ、底では土器の廃棄儀礼が行われていたと考えられる。典型的な器種としては小形丸底壺や有段鉢等の小形の器種である。

SE-121出土の土器の型式を見ると切り合い関係を再考するかSE-121の埋められた時期を考える必要がある。上層の土器の廃棄儀礼がどの井戸のものかと考えるより、井戸群の廃棄とも考えられ、本来の井戸の切り合い関係を追求するのが難しかった等の事実もあろう。いずれにしても埋土6層の出土遺物は口縁部をつまみ上げているNo. 82の甕や、口縁部が外側に肥厚する等の特徴から弥生時代終末から、古墳時代前期の庄内式土器段階に井戸掘削されて布留式土器併行期以前に埋没したものと見られる。

時期は埋土6層や9（8）層に廃棄されて流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から、北部九州久住編年ⅡAからⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式中段階から新段階併行期）と考えられる。遺構の切り合いがSE-114及びSE-115よりさかのぼる可能性が高い。

④ 土坑

SX-04-1（第98図）

01-1・2区のSI-02の約2m南、SI-15・SI-41等の約7mに位置する。平面形は径約85cmの円形であるが、深さ約20cmで段を持ち、実質的には平面形径約45cm、深さ約35cmの円形の土坑である。土器が上層に集中して出土し破片である。井戸の埋没の際の土坑と類似した平面形及び遺物の出土状況を示すことから祭祀を行った土坑の可能性もある。

埋土上層から多数の土器片が出土している。タタキを外面に顕著に残し器壁が2mmと薄い甕が出土して

いる。高杯の杯部も丁寧で広がることや小形丸底壺の口縁も薄く丁寧であることも併せて考えると時期は、北部九州久住編年ⅡB～ⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

SX-39（第98図）

SI-02から約5m南、SI-15やSI-41から約12m南に位置する。SD-03に切られている。半分しか検出できなかったが、長軸1m以上、推定1.3m程の楕円形の土坑と考えられる。深さは約25cm残存していて、検出面から考えて約70cmの深さと考えられる。底面の形状は逆台形状である。上層には遺物が出土している。破片である。

上層に土器が廃棄されていることからSX-04-1と同様な性格の土坑の可能性もあるが、全容が不明なため性格は不明である。出土した高杯は底径11.6cmで脚部内面には絞り痕跡を残す。筒状の部分は高さ9cm、径3.5cmである。時期は埋土に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅢA期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（布留式古段階～中段階併行期）と考えられる。

SX-35（第98図）

SI-02から約5m南、SI-15やSI-41から約10m南に位置する。SD-03・SD-28に切られている。径約1.2mの円形と言えるが、実際は緩やかな多角形と言える。深さは約45cmである。上層に小形丸底壺（完形）と有段鉢（1/3残存）が廃棄されていた。（1面）上層に土器が廃棄されていることからSX-04-1と同様な性格の土坑の可能性もある。

埋土上層から出土した土器は、胴部径よりも口径が開く口径12cmの長頸壺（小形丸底壺よりやや大形）、段の部分が明瞭な径約17cm有段鉢である。前者はNo.59を長胴化したような器形、後者はNo.62と類似する器形である。最下層には径約8cm、高さ約4cmの尖底に近い完形の手づくねの鉢が出土している。（2面）時期は埋土1層に流れ込んだ遺物等の状況から北部九州久住編年ⅡC期併行期と考えられ、古墳時代前期前半（布留式古段階）と考えられる。

⑤ その他の土坑

SX-35と同様な規模の土坑が存在する。SK-37やSK-44である。径50～70cmの円形の土坑で深さも50～70cmのものである。遺物は顕著に出土しておらず、性格は不明である。

SK-101・SX-118・SX-126・SX-126-2（SX-137）のように1.5から1.8m、短軸約1mの土坑が存在する。SK-101からは広口壺や布留式系の甕の口縁、厚さ6mmの小形丸底壺の胴部等が出土し、北部九州久住編年ⅡC～ⅢA期併行期（布留式古段階から中段階併行期）と考えられる。径1m前後の楕円形や円形の深さ30cm前後の土坑、SX-124・SX-128・SX-106等である。これらは、いずれも遺物が顕著には出土しておらず、性格は不明である。

⑥ 溝

概要 西側に南東方向から北西方向に走る溝が南北方向に屈曲して作られている。6から7本の溝が重複しながら走っている。溝の数はSI-51～SI-103までの堅穴建物の切り合いや同時期に存在する堅穴建物の時期区分に一致するため、堅穴建物の用途は明確ではないが、集落を囲む溝と考えられる。

01-3 区の SD-131 ～ SD-134 までの溝の最大幅は約 2.2m、最小幅は約 1m、深さは標高 4.4m 付近であり、1 本の溝を除いて逆台形の断面を有する。

U 字形の溝は 01-1・2 区では SD-29、01-3 区では SD-129 は西側の端に位置する溝であり、両方とも切られている溝であり、溝の中では古い時期の可能性があり、1 番幅が広い溝は 01-3 区では SD-133、01-1 区では SD-03 で 2.2m 程の溝が掘削されている。

SD-03 が典型であるが、溝の上層に土器が多量に出土し、ミニチュア土器や小形丸底壺や高杯等の破片が出土しており、埋める際に祭祀を行っている可能性がある。

代表的な溝について詳述する

SD-117 (第 100 図)

3 区に 6 条溝がある中で一番東側に位置する。SI-121 に切られている。SD-129・131 と隣接する。少し抱集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。幅約 1.2m、深さ約 30cm で断面は逆台形状である。北側は約 2m の幅の SD-131 として検出され、この 2m 程で蛇行しながら集落の方へ囲むように伸びている。上層に廃棄された土師器類（高杯・壺）が出土し、内面削りで外面にタタキをナデ消した尖底の甕の他、脚台を持つ甕の底部も出土している。

SD-03 (第 97 図)

01-3 区に 6 条溝がある一方、01-1・2 区では溝は 5 条しか検出できていない。南側から 2 番目の溝である。SX-35・SE-36 等に切られている。SD-129・131 と隣接する。幅約 1.8m、深さ約 45cm で断面は逆台形状である。東側の幅の広い所で約 2m である。SD-25・28 に隣接する。2m 程で蛇行しながら集落の方へ囲むように伸びている。検出する段階で上層に廃棄された土師器類（高杯・壺）が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SE-121 の埋土 9 (8) 層出土の No. 74・75、埋土 1～3 層出土の No. 87 と同一形式（器種）である。埋土 8 層出土土器よりも肩部が下がり、底部は粘土を足して器壁が 2cm あること口縁端部が面を持たず、厚みを持つことから後出する型式と考えたい。

埋土 2 層からほぼ完形の高杯、鉢が出土している。埋土 3 層からは頸部に櫛歯刺突文を持つ複合口縁壺、口縁が広がる鉢が出土している。埋土 2 層の高杯の端部は布留式土器の甕の特徴と共通する。

埋土 3・4 層の土器から北部九州久住編年 II C 期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階～布留式古段階併行期）の溝と考えられる。また、埋土 2 層からは径 4cm 程の平底の底部を持つ肩部が張る小形壺も出土しており、タタキも顕著に残るものであり、やや遡る土器か SD-29 に伴っていた土器の可能性もある。

また埋土 1 層から口縁部径約 5cm と 3cm のミニチュア土器 2 点、内面をタテ方向に丁寧に磨いた口径約 12.5cm、深さ約 2.5cm の杯も出土している。共伴すると考えられる甕も端部に面を持つが内側に少しつまみ上げているもので、庄内式新段階から布留式の古段階併行期に伴うものと考えられる。No. 91 は尖底だが、底部の厚さが 1.5cm で口縁端部も庄内式や布留式の土器の系統の口縁の特徴がない。肩部がやや下がるものである。

SD-28 (第97図)

SD-28はSD-03に切られている。SD-03と同様な構造の同様な規模の溝と考えられる。最大幅90cm以上、深さ約50cmの台形状、重複している溝の中では一番古い溝と考えられる。埋土上層から土器が多数出土している。形式の復元ができる器形が20点以上ある。埋土1層からは弥生土器の系譜を持つ甕、高杯の脚部、庄内式系甕が出土している。弥生土器の系譜を持つ甕は口縁部が外方に広がり端部は面を持ち、内外面左上がりのハケが残る。高杯も筒部の所はヨコ方向に削っているが屈曲部が明瞭でなく袴状に広がる。弥生後期の土器の系譜を持つものである。口縁部だけ遺存するものは大きく外反し端部の厚みは2mmと薄く胎土も密である。庄内式系甕は口縁部がやや外反するがほぼまっすぐで口縁端部をやや上方につまみ上げている。器壁は2mmと薄い。

器壁が2～3mmの精製の鉢、台付の鉢2点、円形透かし(4方向)を持つ脚台、二重口縁壺、小形丸底壺(胴部にハケ目を残し、弥生時代後期の鉢の系譜を引くもの)も出土している。

二重口縁壺は口縁部外面に縦方向のミガキを丁寧に施し、二重口縁の接合部も明瞭なものである。

埋土下層からも庄内式系の甕が出土している。この庄内式系甕は口縁部は外方に広がりながら端部はつまみ上げ、器壁は2mmと薄く典型的なものである。SD-25出土遺物と接合するものでタタキを残し、内面に削りを施すものがある。胴部上半は器壁が4mm程で口縁端部に面を残している。

上層部にも二重口縁壺や径14cmの底径のタテ方向のミガキを施す器台の脚部、外側につまみあげた甕の口縁部片や叩きを胴部に施し、内面削りの長胴形の口縁端部を内外面につまみあげた口縁部から胴部片等残存率の高い大きな破片も出土している。

SD-29の上層出土の破片と接合するものには甕の胴部片しか出土していないが、それは内面にヘラ削りを残し、外面には顕著にタタキが残る。また口縁部が大きく外反し端部には面を持ち、内外面にハケを残すものもある。

土器群の様相から北部九州久住編年I B～II B期併行期と考えられ、弥生時代終末(庄内式中段階併行期)に廃絶した溝と考えられる。

SD-29 (第97図)

同じく01-1・2区の一帯北側の溝である。SD-28に切られている。幅約1m、深さ約40cmで断面はU字状である。溝の幅はほとんど同じである。集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土師器類(高杯・壺)が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SD-28は他の溝の断面と異なりU字状になっていること一番北側に位置することなどから溝の中では古い時期のものと考えられ、SE-121の古相の土器群に対応する時期には溝として機能していたと考えられる。

SD-29は口縁部をつまみ上げた庄内式の甕の口縁の特徴を持ち器壁が2mmの薄い土器が出土している。上層には甕の胴部片しか出土していないが、それは内面にヘラ削りを残し、外面には顕著にタタキが残るものも出土している。他の破片も内面にハケを残すものも多く、北部九州久住編年I B～II A期併行期とも考えられ庄内式併行期と考えられる。

SD-134 (第100図)

01-3区の南側の溝である。一番南側の溝である。SD-133に切られている。幅約70cm、深さ約40cmで断面はU字状～V字状である。溝の幅はほとんど同じである。集落のある方へ蛇行しており囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土師器類(高杯・壺)が出土する。高杯の杯部の屈曲部が出土しており明確に稜が残る形式のものである。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で、遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。

SD-134は他の重複隣接する溝の断面と異なりU字状になっていること一番北側に位置することなどから溝の中では古い時期のものと考えられ、SD-29に続く溝(同一の溝)と考えられる。SE-121の古相の土器群に対応する時期には溝として機能していたと考えられる。

SD-133 (第100図)

01-3区の南側から2番目の溝である。一番南側の溝である。SD-134を切っている。SD-132に切られている。幅約1.1m、深さ約40cmで断面はU字状である。溝の幅はほとんど同じと推定できる。集落のある方へ蛇行しており、囲む溝と考えられる。検出する段階で上層に廃棄された土師器類が出土する。

溝を検出する前段階の遺物包含層を掘削している段階で、遺物が多量に存在している範囲の幅に多量に出土している。遺物の出土状況と断面によりようやく溝を検出した。他の重複及び隣接する溝でも同じような状況であり、溝が廃棄される段階での儀礼の可能性もあろう。SD-28・29等に続く溝の続きと考えられ、SD-134、S-132相前後する時期のものと考えられる。

SD-132 (第100図)

01-3区の重複する溝の1つである。132-SDを切っている溝である。幅1.5m、深さ約50cmである。断面の形状は逆台形状である。

埋土上層から甕の口縁部片、短頸壺が出土している。前者は口縁部がやや外反し、わずかに端部をつまみあげているもので庄内式系甕の影響を受けているものである。後者はSE-121の埋土9(8)層出土のNo.74・75、埋土1～3層出土のNo.87と同一形式(器種)である。埋土8層出土土器よりも肩部が下がっており、SE-121埋土8層より後出する形式と考えられる。

時期は流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～C期併行期前後と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半(庄内式中段階から新段階併行期)と考えられる。

⑦ その他の溝

01-8区で検出されたSD-823は幅約1～1.2m、深さは20cm程でSX-803・804の間に検出している。SD-823からは外面に平行タタキ痕跡を残し、内面がケズリの甕の破片が出土している。

この遺構の性格が建物ならば、集落を区画する溝(特に位置的にSX-804を区画する溝)の可能性もあるが、仮にSX-803・804が水田の区画の水田の区画の溝になる。しかしながら、3層検出の他の遺構がピット等もいくつか存在することから集落域に存在する溝と考えたい。

SD-25の埋土1層からは口縁部の高さが4cm以上で肩部が張る小形丸底壺、口縁に凹線状の丁寧なナゲ

を施している甕、小形器台の脚部、高杯の脚部及び口縁部が出土している。高杯の口縁部は屈曲部でやや丸みを帯び外方に伸びる形状のものである。甕は布留式土器の特徴を持つ口縁端部を持つものと庄内式系甕の系譜を引く上方につまみあげる様な形状のものも存在する。

SD-28 出土遺物と接合するもので、タタキを残し、内面に削りを施すものが含まれる。胴部上半は器壁が4mm程で口縁端部に面を残した古相のものである。小形丸底壺は口縁部が外方に大きく伸び、胴部は肩部が張り口径が小さいもので北部九州久住編年ではⅢA期まで下る可能性があるものである。その他口縁が広がる鉢や弥生後期の甕の系譜を引くがハケ目が無く、接合痕が顕著な口縁部片等が存在する。

SD-25の時期は、埋土1層に流れ込んだ遺物や重複する遺構の状況から北部九州久住編年ⅡB～ⅡC期併行期と考えられ、弥生時代終末から古墳時代前期前半（庄内式新段階から布留式古段階併行期）と考えられる。

⑧ 水田関連遺構 1

概要 01-4・7区では、古墳時代の2面にわたって溝や畦等の水田関連の区画をしている遺構群を検出した。4層（弥生時代終末から古墳時代前期の古段階）と3a～3b層（古墳時代前期中葉から後葉）までの大きく分けて2層の時期の水田遺構である。

(1) 4層検出遺構

概要 集落を区画する溝から40m程離れた位置する。

大別して南北方向のやや東方向に振れているものと、やや西側に振れている方向を表すものがある。

標高は3.3～3.5mで古墳時代の集落の位置する微高地より、1m以上深い谷地形を呈している。

ア 南北から東方向に振れた区画

畦畔 1

集落を区画する溝から40m程離れて立地する。大別して南北方向からやや東方向に振れているものとやや西側に振れている方向を表すものがある。

南北方向から東側にやや振れる方向の区画は大きい畦01-4区（SX-1001）では平坦面幅70cmから1.6mの畦幅と検出した幅が大きい。平均すると1m程の幅の大畦畔の可能性はある。その畦畔の東側に検出したものは幅20～30cmの小畦畔（1-4区 SX-1002）である。また南北の区画が明確でないが01-7区 SX-718が深さ約10cmの方形の落ち込みであると考えれば、5～7mの方形の区画が水田の小区画であった可能性を考えたい。

溝

畦畔1の方向に近いのは、SD-717である。

SD-717（第104・106図）

大きい畦（01-4区 SX-1001）から15mに位置しほぼ平行に位置する。その畦畔の東側に検出したものは

幅 20 ～ 30cm の小畦畔 (01-4 区 SX-1002) から約 10m 東側に位置する。

幅 1 ～ 1.3m で深さ 20 ～ 30cm、長さ 15m 以上検出している、SD-708 に北側 15m で接し、切られている検出状況である。若干西側に振れていて SD-708 に重複しているように伸びている可能性が高い。隣に畦畔が検出できていないが、畦畔の横に検出されるような深さ 20cm のもので水路の役割を果たしていた可能性のあるものと考えたい。

埋土 2 層からは外面タタキ、内面ナデの器壁が 1cm 程の胴部片が出土している。検出する面的には弥生時代終末から古墳時代の面でありその時期の溝と考えられる。

イ 南北から西方向に振れた区画

畦畔等の区画

畦畔とした形では検出できていない。しかしながら、01-4 区 SX-1003・SX-1004 等の方形状の区画 (落ち) や段として検出し、集落を区画する溝から 40m 程離れて立地する。01-4 区 SX-1003 は深さ 10 ～ 15cm で長側辺 5m 以上の方形の落ち込みである。01-4 区 SX-1004 は 4 区の最南端に位置する。10 ～ 15cm の段しか確認できないが平面的に直線的に 7m 以上検出できた。

畦畔は明確に検出できていないが、01-4 区 SX-1004 付近の断面では 20cm の平坦の畦畔状の遺構も確認できないわけではない。01-4 区 SX-1003 も同様の断面を観察できることから十分平面的には検出できなかったが畦畔状の痕跡の一部を検出できたと考えている。

溝

01-4 区 SX-1003 や SX-1004 と方向が類似するのは SD-709 である。

SD-709 (第 106 図)

01-4 区 SX-1003 と約 20m、SX-1004 と約 10m 離れて位置する。幅約 1m、深さ約 40cm で断面形は V 字状である。北東側の高い方から埋没した様な断面である。埋土 3 層には炭が堆積しており U 字状の断面でも機能していたと考えられる。埋土 4 層及び 1 層からは器壁が 5mm の内面削りの 5cm 程の甕の細片が出土している。外面タタキで内面ナデの胴部片も埋土 4 層から出土している。SD-708 はこの溝の南側部分だが、埋土から器壁が 3mm の外面ハケ目の土師器も細片で流れ込みではあるが出土している。

(2) 3a ～ 3b 層検出遺構

概要 集落を区画する溝から 40m 程離れて位置する。

南北方向のやや西方向に振れている方向の区画を検出している。畦畔は平面で検出できなかったが、溝を検出している。標高は 4 ～ 4.1m で古墳時代の集落の位置する微高地より、50cm 以上深い谷地形を呈している。

溝 (第 101・102・103 図)

01-4 区から 01-7 区にかけて SD-701 (SD-203・204)、SD-702 (SD-205・207)、SD-103 がほぼ同じような方向に検出され、集落を区画する溝から 40m 程離れた位置する。また SD-701・702-SD は 60 ～ 100cm 離れ

て位置する。SD-103はSD-702から約5m西側に検出している。

SD-702とSD-103は幅1～1.3mと平面形は共通するが、前者は深さ約40cmの深さでV字状を呈する。後者は緩やかなU字状である。ただ、前者も10cm程埋没した段階ではU字状であることから大きく機能が分かるとは考えにくい。SD-701の構造はSD-702の断面構造と類似する。ただ幅が35～50cmしか検出していない。

SD-701とSD-702は対になって機能したと考えられる。01-4区の南端では大きくSD-702が西側に振れているが大区画の変換点と考えたい。SD-701とSD-702の間は畦畔と考えて西側のSD-702は当初は水路として機能していた可能性を考えたい。

SD-701の埋土4層から器壁が5mmの外面ナデ調整、内面削りの土師器片が出土している。また、SD-702からは埋土3層から器壁が3mmの土師器甕、赤褐色の精製の鉢、小形丸底壺の破片も出土している。

その他の検出遺構

深さ10～15cmの土坑状の遺構を検出しているが、集落に伴う土坑ではなく、耕作に伴うなんらかの痕跡が土坑状に検出された可能性を考えている。SX-206(第102図)は、1辺5m程、深さ10～20cm、検出できており、水田区画の痕跡を反映しているものと考えたい。

水田関連遺構

4層検出の遺構と3a～3b層検出の遺構と分けて検出した分を解説したが、断面・平面的にも十分検出できたとは言いがたい。推測の部分、またもっと細かい時期区分が必要であり、遺構の重複状況から少なくともそれぞれ2時期に細分され、合計4時期以上にわたり水田面の区画が変化していったことが伺える。

溝や堅穴建物等の切り合い関係からも6時期以上の時期の水田面がある可能性も指摘して置きたい。層的には、これらの水田面は弥生時代終末から古墳時代前期の中でおさまると考えたい。

水田関連遺構 2 (01-6・8区)

概要 01-6区の4層上面で検出した方形状の遺構(SX-422・423・424・425)は2mのもあるが、軸が揃っており、当初は堅穴建物の痕跡とも考えたが、遺物もほとんどなく、水田面の区画の痕跡と考えた方が理解できると解釈している。ただ、01-6区の南側で検出したSX-409A・Bは方向を別にする(第114・115図)。

SX-409Aは幅約1m、深さ25cmのV字に近い断面を持つ溝でありSD-702の構造に近い。遺構の振れは異なるが同一の性格の遺構と考えられる。現在のところ、2時期の水田関連遺構と考えたい。

01-6区の3a層上面の検出の遺構群も同様に水田関連遺構と考えたい(第108・109図)。

SX-404・414・401等の4m以上の方形の浅い土坑、SX-402・408等の幅25～30cm、深さ10cmの溝等は水田の区画の痕跡を検出したと考えている。その他の遺構はどれも浅く耕作にともなう痕跡の可能性を考えたい。SX-414からは器壁が2～3mmの土師器片が出土している。

(平成14～20年度・02～08区)

弥生期は4基の住居址が検出された。02-I区SH-01(第48図)の規模は不明であるが、ピットと炉穴、そして焼土面から住居址であろう。SH-02(第49図)は残存から2mの方形を呈していると想定され、

炉とピットも検出された。遺物から弥生終末の住居である。このSH-01・SH-02は重なるような切り合いのためほぼ同時期と考えられる。06-Ⅱ区(第68・69図)では柱穴・炉の存在から2基の住居址が想定されるが出土遺物にも恵まれず詳細は不明であるが、検出土層・前述した遺構に類似するため弥生期と想定し掲載した。06-Ⅲ区のSX-38(第71図)などは縄文期住居の可能性も否定できないが確証が持てない。

本遺跡、最大の遺構は05-Ⅰ-1区にて検出されたSX-3(第55図)であろう。長さ13m・幅1mの遺構である。調査時、まず杭が姿を現した。これまでの調査において杭には遭遇していたが、やがて2列を成し50cm～60cmの規格深度を持つことが判明した。これから注目し、全体を掘り下げたところ夥しい木片が杭列間に出土した。この遺構の性格把握については調査員の能力を超えていたため専門調査員の派遣要求を必要とした。その見解として、

杭列が井桁状に組んだような部分が見られ、杭列の補強を図る畦畔であった。幅1m弱は人の往来が可能で運搬など農道としても機能したのであろう。大量の木片は半湿田の土質にこれらを敷き詰め、通路として沈下を防ぐ機能を果たす敷粗朶技法が確認された。また東西に延びる遺構に杭列が沿うが、これに直行するように2列の杭が存在する箇所があり(C-C')、これは水取り入れ口、水口と推定しその概念図を提示した。その規模は幅30cmを測る(第57図)。これらのことから水田を区画する小畦畔とは異なる大畦畔であった。また敷き詰められた木片中に土器片も存在し、これにより弥生後半の時期と想定できるが、これに埋土①が覆土として土層にあるため2時期に亘り使用されていた可能性がある。刊行されている「両道間日渡遺跡 2010」はこのSX-03の北東を調査した報告書であるが、このSX-03の杭列は緩やかに連続していた。調査主査の見解では3時期が報告されている。このような大畦畔のこれまでの調査事例からその使用期間は15～30年と云われることから、弥生後期に構築を行い盛土などの補強を行いながら弥生終末まで使用と推定し、後の洪水による堆積で放棄したのであろう。

また05-Ⅰ-1区SX-3の北東に位置する05-Ⅰ-2区にて検出されたSX-03 SX-01・02(第62図)は不定形の浅い掘り込みであるが、花粉分析により湿田植生が確認された。SX-01内にはピットが並び杭の検出があることから水源地としての可能性があり、水源地から05-Ⅰ-1区 SX-03の大畦畔への水の路を想定した。出土土器から時期は古墳初頭であろう。

07-Ⅳ区SD-01(第73図)からは土器片と石包丁を得た。遺物は流路であるため確証はできないが、弥生中期の「城の越式」であるため玉名平野において弥生中期の稲作を示唆することになるか。

第3節 古墳

03-Ⅰ区(第122図)からは方形状の遺構が検出された。北東-南西軸は3mを測り、この軸に明確ではないがベッド状遺構が見られる。住居と思われ中央に炉穴を呈する掘り込み・ピットも確認され住居址と推定し提示した。03-Ⅱ区SX-07(第128図)は大型流路である。71本の杭が出土し、これらは流路に沿うことが想定されラインで結んでみた。これによると杭列は流路の水調整を行っていた残存であろう。浅い流路であり、杭も比較的短いことから上位は削平されていた可能性がある。またミニチュア土器(No.98)の出土から水関係の祭祀を行っていたか。

04-Ⅰ区5b層(第131・132図)でも方形状の遺構が検出され住居址であろう。SX-09は杭列で1.3～

1.5mの杭間隔を持つ。04- I区 6層（第134図）SX-01・02・03は土坑に礫が埋め込まれた状態で、特にSX-03の礫は大型である。目的はあろうが廃棄なのか儀礼なのか不明のためSXとした。

04- I区も幾度も洪水を受けているのであろう。第133図で提示した遺物は突帯文（No.101）から土製勾玉（No.102）・弥生中期（No.103）・輸入時期（No.105）まで時代幅がある。

04- II区 5a層上面からは小規模溝が多数検出された（第135・137図）。水路を幾度も構築した痕跡は土層図からも窺える。またこの水路に沿い北側に杭列が認められることから水路に伴うものであろう。（第138図）

04- II区からは土坑が検出された。掘り込み形態は、大別すると凹状・播鉢状・皿状となる。埋土からはレンズ状の自然堆積ではなく人為的に埋められた感がある。ST-04（第140・141図）は最下層に丸底壺（No.116）が出土した。口縁部に打ち欠きがあり廃棄に伴う儀礼と考える。SX-04（第144・145図）は炭・焼土・煤と層を成し燃焼土坑であろう。このSX-04下位から凹状の掘り込みが検出されている。凹状を井戸と仮説としたならば廃棄後、上位を燃焼地に行っていることになる。ST-08（第146図）はオーバーハングを呈している。これは半湿田の壁が崩壊したのであろう。この遺構で注目されたのは下位層から網代（第147図・No.137）の出土であった。完形体ではなかったが部位により編み方に相違があるため、網代の底部と側面部との作成方法によるものか。二本超え・二本潜・一本送が機能的には強固のため網代底部に相当するか。またNo.139・140を伴っていたためこの時期の網代として資料価値が高い。

04- II区は全体に土器片が散乱している状況であり、これを取り除くと土坑が検出された。この散乱土器片は第149・150図に提示した。ジョッキ型土器（No.159）を含む弥生期の遺物もあり、近在に住居の存在を窺わせる。

05- I-2区 8層（第154図）ではV字状の高まりを検出した。これを小畦畔の畝と想定し、この時期の水田区画は直法ではなく自然地形を利用したことが窺えるが、06- I区 9a層（第158図）にはSX-19・20が検出された。これは水田の小畦畔で幅は17mを測る直法で、方位はN-37°～47°-Wである。05- I-2区 8層の小畦畔の畝とは異なるが、このことは古墳期明確な水田区画はまだ成立していなかったということである。

第4節 古代

奈良時代の遺構・遺物（平成12・13年度・01-1～8区）

概要 01-7区の2a層上面で径40cmくらいの円形と推定できる土坑を検出した。深さは約30cmで断面はU字形を呈する。

埋土上層に須恵器高台付き杯が出土している。須恵器は八の字形に広がる高台が付き、体部は立ち上がり、口縁部は内傾した後外反するもので、大宰府編年I B期併行期、7世紀末の年代が与えられよう。奈良時代の他の遺構は検出できていない。奈良時代の遺物がほとんど出土しておらず、集落があれば北側の微高地に存在して末端を検出したと考えられる。また、水田面の一面の祭祀等に伴う土坑等の可能性もある。

(平成 14～20 年度・02～08 区)

02-Ⅲ区は稲株痕を伴い、イネのプラントオパール試料が7,500/gと高い数値が検出された。SD-14は水田に伴う溝であり水を供給したのであろう。またSD-15は小溝であるが直線的で同一幅を持つことから人工的な溝である可能性が高い。これが水田に伴うならばその水田方位はN-55°-Wである。(第174図)

この調査区から出土した遺物は第176・177図に提示した。縄文後晩期から輸入時期まで広範囲であり、これも近在の氾濫によるものであろう。

05-Ⅱ-1区は調査区に溝が検出され、これを短絡的に古代の水田残存と仮定すると、N-58°～68°-Wの範囲に入り、中世水田方位に類似する。ここには足跡が検出され、これより水田に入った農人の間を置かず洪水に見舞われたとのことか。

この古代期は極端に遺構・遺物が希薄である。この課題には総括で述べる。

第5節 中世から近世

(1) 中世の遺構と遺物 (平成 12・13 年度・01-1～8 区)

概要 01-5区の南端の標高4.4m付近で径1.3m、深さ1.6mを測る井戸(SE-56)を検出した。検出面は2a層である。断面の形状はU字状で中世の遺物を含む(第184図)。

(2) (平成 14～20 年度・02～08 区)

調査は中世層から表土を剥いだ。これには中世以後は攪拌が激しく分層が困難であるためであったが、一部の近世層は検出した。02-Ⅰ区層遺構配置図(第185図11層)は近世水田層と思われ、細長い調査区の南端に溝・北端に僅かであるが畦畔を検出した。SD-08にSD-07が存在する(第186図)。溝で判定困難なのは自然流路か人工溝であるかどうかである。この場合SD-07はSD-08切り合い関係でSD-08は水流を意図的に変えたような印象を受ける。自然流路の場合、このようなことは考えにくく少なくともSD-07は人工的溝のようである。この粘性質に人工溝は構築することは水田に大きく関与していることが想定できる。この層に僅かではあったが11層畦畔が検出された。水田に伴う畦畔であろう。方位はN-64°-W。

中世層は残存率がよく、02-Ⅱ・07-Ⅲ区を除く全域で検出された。第182図に調査区の中世層のレベルを表記した。これによると水田に必要なフラットな土地耕作をなされており、北より南に向かいゆるやかに傾斜している。畦畔状高まりの残存がよいのは05-Ⅱ-2区・05-Ⅱ-1区で、特に05-Ⅱ-2区は畦畔から水田区画が想定でき、その規模は南北軸、15m前後を一つの区画として想定できる。05-Ⅱ-2・05-Ⅱ-1区は連続した遺構で水田区画を示唆するものでその方位はN-68°～73°-Wである。また地形図から北東から南西に緩やかに傾斜しており、これから水流と水田の関係が示唆できる。

第203図(04-Ⅰ区SX-02・05)も畦畔状の高まりであり、この遺構間は水路が想定される。方位はN-55°～60°-Wである。第189図02-Ⅰ区13層は稲株痕の状況である。科学分析の結果この13層はイネのプラントオパール試料が3,700/g検出されたことから水田層と考えられ、この稲株痕はイネ痕と想定できる。径が10～20cmほどであるため現在にたとえると収穫前の7～8月頃であろうか。収穫前に大水に遭遇したのであろう。この時期の大水は台風が該当する。砂質層が覆うようにイネは死滅してその痕跡を残した。中

央に僅かであるが畦畔がみられ、ここには稲株痕が存在していなため、これが水田区画の痕跡である。さらに02-Ⅲ区(第191図)7層は稲株痕を提示した。イネのプラントオパール試料が5,000個/gの高い数値を示す。ここにも稲株痕が検出されたが02-Ⅰ区13層と同じ自然災害の痕跡であろう。02-Ⅰ区と条件が類似することは幅5~6mほどの溝(SD-11)を伴うことで、これも水田に関与している遺構であろう。

密集地と空白地が存在している。SD-11(N-62°-W)の方位に平行するように中央部とやや北側、さらにこれに直行するように北東に空白地が見られる。これは畦畔の痕跡か。これからSD-11より水供給を行い、小畦畔を持つ水田が想定される。また南側は稲株痕密集地である。

05-Ⅲ-2区は土坑密集地であるが、遺物に恵まれずその性格は不明である。不定形のプランが多く、耕作されたような掘り込みであった(第216図)。

第229図 06-Ⅰ区は畝状の高まりSX-08・13・11が確認されたが、その方位はN-38°~45°-Wでありこれまでの方位と相違がある。SX-13・11の距離は16mとこれまでの範疇に納まる。東側土層は畦畔状の高まりや水路が入り乱れ、何度も水路を構築したことが窺える。

03-Ⅰ区は杭が出土した。(第193図)中世面と弥生前期~縄文晩期層にて検出。杭12(No.195)は残存70cm強を有し、杭上位は炭化している。このことは杭腐敗を防いだ加工の痕跡であろうか。杭6(No.194)も僅かに炭化痕跡を残す。何れもクリ材である。土層断面図から杭最下層レベルが大別すると杭13・杭12の深度と浅い深度に大別できるが、これは飽くまでも検出面であって耕作層の時期とは異なる。思考のヒントになるのは深度の浅い杭は杭としての機能は不可能で後世の開墾で削平されたのであろう。

03-Ⅲ区は中央に東西に幅広い大型の溝SD-04が位置する。全体が氾濫層で土製勾玉・石剣などが流れ込んできている。上位に中世水田層が僅かに確認され、この地は自然流路を活用した水田形成がなされたか。155の杭が検出され短絡的に杭列だけを図面上に配置(第196・197図)させると水路として大型溝(SD-04)から水を引いていたのか。

04-Ⅰ区(第202図)3層にはSX-02・05の畝状が検出され、この間に小溝が存在していたと想定され、SD-01はその痕跡であろう。ここに一つの水田区画を想起させる素材が存在する。同じく04-Ⅰ区(第204図)4b層はSX-07・08の畦畔に恵まれN-65°-Wを測る。両遺構の幅は15m程で、これを中世期水田幅の一つの目安としたい。

05-Ⅰ-1区(第208図)は断面図に提示したように溝12まで有し、溝に自然堆積する土積を幾度も水流調整のために汗を流したことが窺える。

05-Ⅲ区[05-Ⅰ-2区](第216図)は不定形土坑群で鋤等などでの掘り込まれた感を受ける。不明な部分が多い。

06-Ⅰ区6b層(第223図)からは小畦畔のSX-10が検出され、その方位はN-43°-Wである。その下層6c層からはSX-8・11・13と小畦畔が検出された。その方位はSX-11がN-38°-W、SX-13がN-45°-Wとやや扇状に広がる水田区画であろうか。またSX-14も存在し、これから水田幅はSX-13-14間5.5m・SX-14-11間は10mほどになる。同一層で検出されたSD-5群はN-68°-Wである。東壁断面観察で水路・畦畔と幾度も構築している。この地点は水田にとり重要な箇所であったのであろう。

06-Ⅲ区SX-04(第233図)は小規模遺構であるが、その断面は畝と溝のセット関係を示す良好な遺構である。畝は後世の開発で上位を削平されており、このように玉名平野は形成されていくのである。

06- III区は土坑群であるがSX-30(第236図)はプラン・遺物から土壌墓の可能性が高い。人骨は出土しなかったが意図的に破碎された土師皿(No.213)や瓦碗などその条件がある。

殆どの調査区によっては流れ込みの遺物が存在し、その遺物と層が必ずしも一致しない傾向がある。第195図03- III区の石剣・土製勾玉などは中世水田層下位であるが出土遺物は古墳期の産である。

07- I区SB-01(第238図)は3m強四方の掘立柱建物で住まいとしては小規模のため寺仏堂のような存在であったか。07- I区のSE-01は井戸と思われるが、SD-02の北東側の石堆積もその理由が不明である。想定するならばこの調査区は寺仏堂を中心として井戸が存在し、そしてSD-02の石堆積は寺仏堂に関与した廃棄箇所か。信仰の地と想定した。

第242・243図08-1区は溝が北東—南西・北西—南東に大別される。出土遺物はどれも流れ込みであるが12C～13Cの範疇で推移しそうである。SD-02とSA-02・SD-01とSA-01が対応するならば、全体が掘と柵列が想定され、この内にSK-01(第249図)が存在する。人骨を伴う土壌墓である。北軸で頭蓋は西を向き、右側肘関節は強屈状態であった。頭部横に瓦器片があり、これを取り外すと土師皿(No.225・227)が出土した。供献遺物であろう。これを土圧から保護するためであろうか。以上の条件から屋敷墓の可能性が高く、またSK-03(第252図)は眼の位置に土師皿を被せたような印象を受け出土した。これも屋敷墓であろう。どれも熟年男性であり、その詳細は第V章 自然科学分析 第1節「人骨」を参照とされたい。掘立柱建物も検出され、この調査区は中世の館の存在を窺わせる。

第6節 時期不明

ここで不明としたのは時期・性格等を含めて不明遺構調査区のことである。

02- II区(第274図)は標高が5.00mほどであるが、かなりの深さまで表土を剥ぎ、調査時は随分と潜ったという記憶がある。調査区を南北に縦断するように大型の流路が存在し、多くの木片が伴った。北久根山式など縄文期の遺物が多い自然流路である。調査開始前は県道に沿った畑であったが、地区ではこの近辺を「沼の尻」と呼称していた。

07- V区(第278図)は不定形の土坑群でフラスコ形状のオーバーハングで八つ手状の掘り込みが顕著である。中世下位の層位からで石包丁(No.406)の出土はあるが、この遺構時期に伴うかは不明である。遺構内からは遺物は出土せず時期の特定も困難であった。平成20年3月10日に熊本県装飾古墳館 池田朋生 主任学芸員に調査指導を頂いた。この調査指導以前に本遺跡の最下層 青灰色粘土は装飾古墳館で灰色顔料として活用されている。土色計を用いた調査で結果として装飾古墳の顔料として適さないことから、それを目的としないという結果が判明した。形状から採掘坑の可能性もありここでは「粘土採掘坑」として表記した。

07- II区 7b層検出のSX-43(第283図)について。検出層は弥生期下位、第7b層であるが当初は周囲から出土した土器片から古墳中期と推定された。東から西に約25°傾斜していることから排水機能を備えた木樋で、肉眼観察で材質はクスノキの大木である。

整理段階で課題が生じた。検出層は弥生層下位であり溝状の掘り込みの中に据えられていたこと。「この木樋の内面には数cmの幅の工具痕が内面の湾曲面を平滑にするように連続的に認められており、特に節に相当する部分などではこれを除去するように工具痕が集中していた。」(両迫間日渡遺跡検出木樋の科学分

析より) この工具痕は鋭利な金属器によるものではなく、磨製石斧使用に近く鉄斧以前の工具使用の可能性が挙げられる。川漁で使用した丸木舟の存在も想定したが川漁に例えても吃水線に問題があり、また拡大の解釈であるが本来、丸木舟で使用されたものを再加工・利用したものか。

科学分析の結果、放射性炭素年代測定の結果は2,980 - ±40年と材質はクスノキという結果を得ている。また花粉分析では、この一帯、アカガシ亜科等の落葉広葉樹と部分的にモミ属・ツガ属などの温帯針葉樹も窺えるが、木樋覆土からは好流水性種が多数検出されたがイネ属の含量は微量である。したがって、この木樋の上流に稲作地が存在していたことは想定が困難であるが、木樋としての具体的な使用目的など課題は残したことを、逆に問題提示・類例として提唱したい。補足としてクスノキは大径木に成長する常用広葉樹であり、樟脳を多く含むため保存性・耐久性・防虫性が高く、古代から信仰の対象になる樹木でもある。この詳細は第V章自然科学分析第5節を参照されたい。この木樋は保存処理され熊本県文化財資料室にて保管されている。

第7節 玉名の平城遺跡

平城遺跡は「熊本県の中世城」(第30集 1978)に「玉名の平城」として記載されている。これによると「平城」という小字が存在し、土器片も認められる、とある。平成15年県道6号(玉名立花線)工事に伴う文化財調査で以下の遺構・遺物が検出・出土した。(第284～290図)

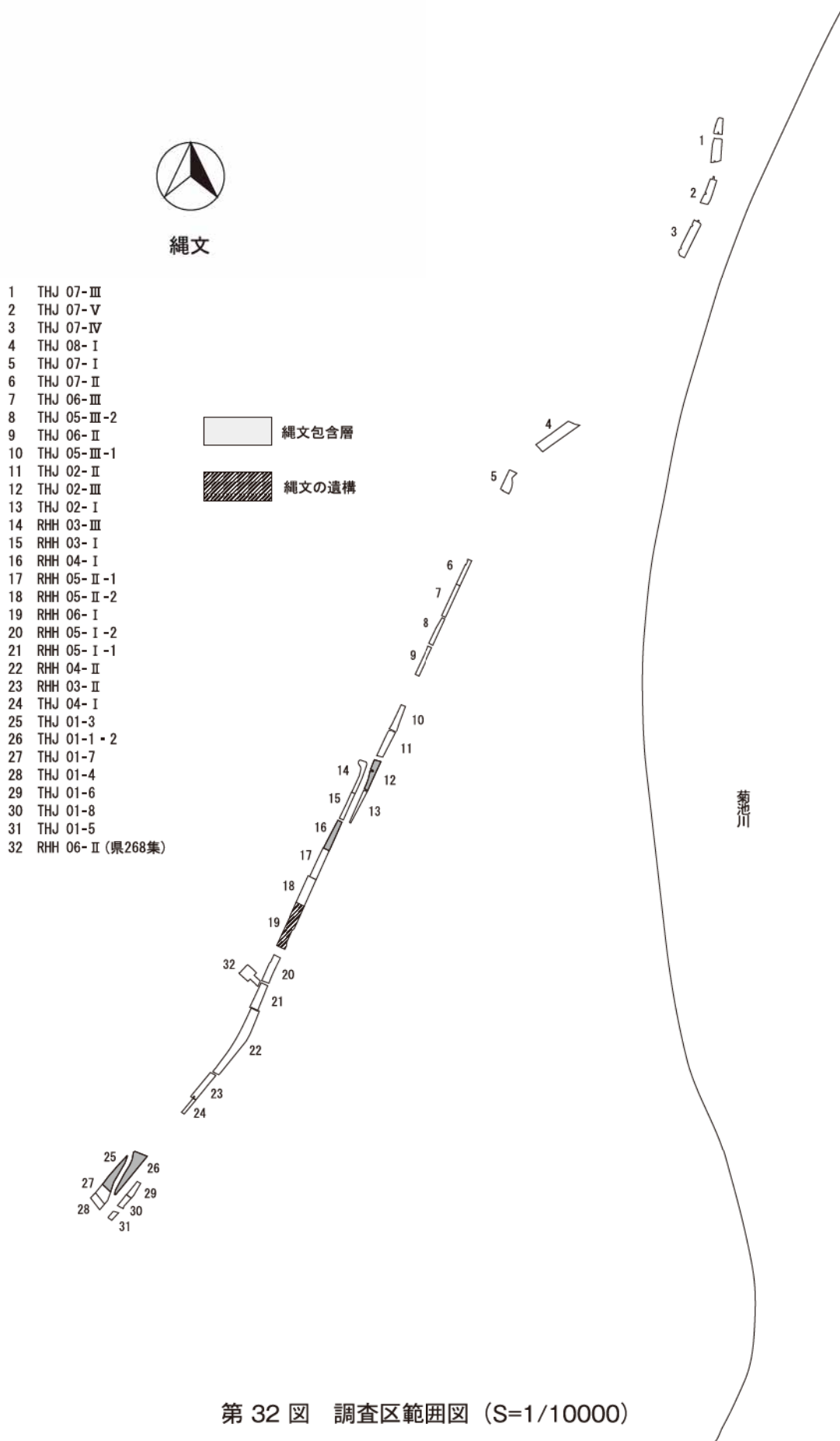
調査の結果から遺構は掘立柱建物3棟・柵7列・土坑1基である。大別すると調査区北西と南に遺構集中区が存在している。北西区は標高20mに位置し本調査区で最高値に位置する。このエリアより柵5列が検出されている。SA-01・02は台地縁に沿い検出された。外敵からの北西区画の防備の柵であろう。SA-03・04・07は北北西軸に約2.5m間隔で存在する。これらは三重の柵であろうか。柱間隔一間も多くみられるからこの三重柵は総柱の掘立柱建物も想定としたい。またこのSA-03・04・07には小ピットが多く存在すことも三重の柵に関係しているか。地形・遺構から平城遺跡の郭が想定される。

この北西区画から下位平坦部南に掘立柱建物が3棟検出されたが何れも調査区外に延びているため詳細は不明であるがSB-03はP5・4・2とP5・6間が床を持つ空間の可能性のある掘立柱建物であるか。SB-01はやや柱間隔の短く、検出された柱穴も小型を呈する。SA-05はこのA-A'ラインに存在する。多くは調査区外に情報が存在しているため柵以外の機能も想定される。新旧は切り合い関係からSB-03・SA-05 < SB-01となる。

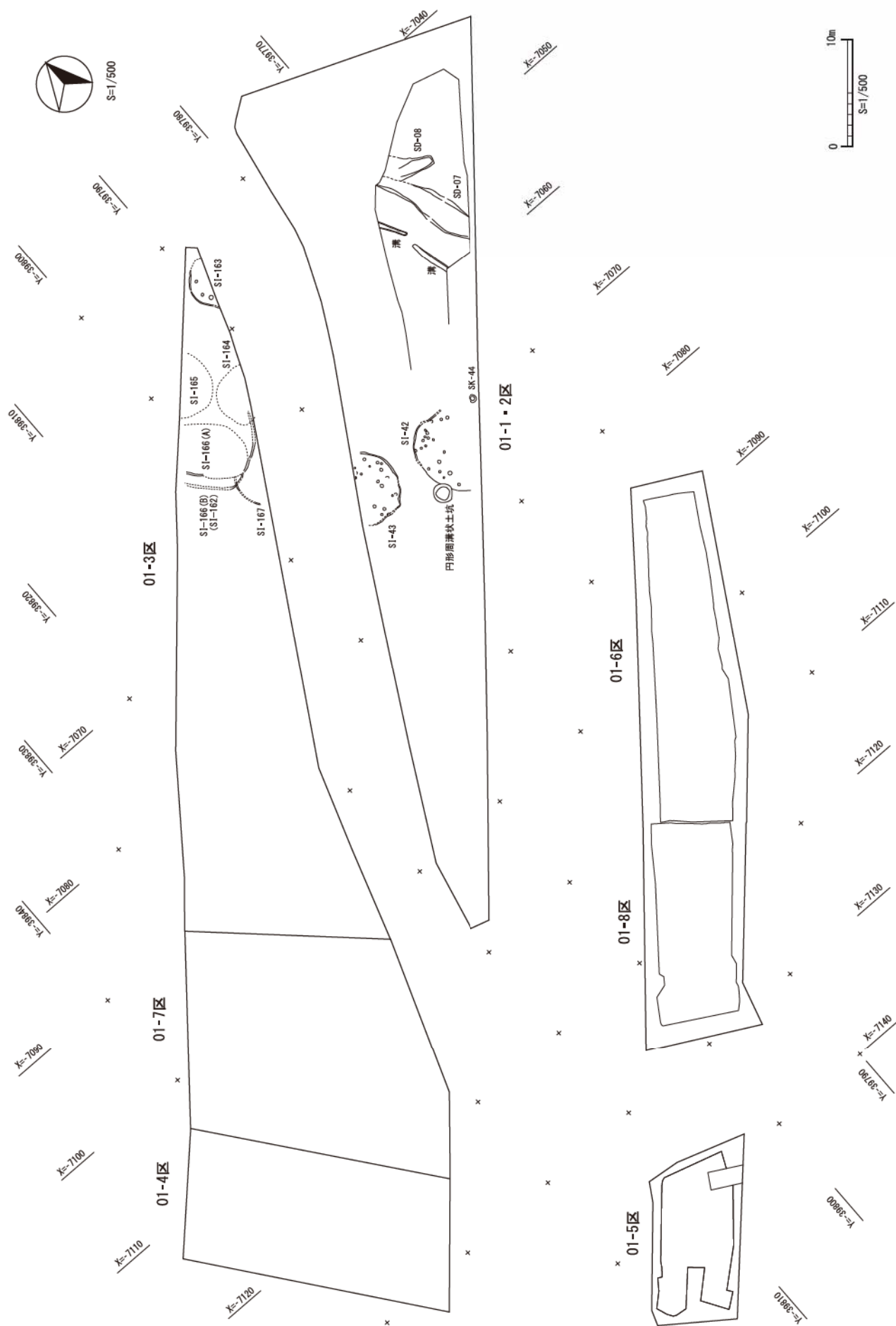
また遺跡東・西区に地形平坦部がみられる。全体は後世の開墾開発(「熊本県の中世城」と報告されているが掘立柱建物・柵列などの遺構、輸入磁器出土から遺跡は中世期の山城であろう。また天目茶碗片は表土剥ぎにて出土したことから、開墾による削平が想定される。

S-19 S-19は調査区南端にて検出された。遺構の大半を後世の開墾にて損失しているようで、ゆるやかな斜面に形成されている。ピットも確認され遺物も伴うことから住居地の可能性もある。埋土3は床平坦面を造成した痕跡か。炉穴状掘り込みから小型手捏ね土器(№.410)が出土している。廃棄に伴うものか。出土遺物から弥生後期末末。この遺跡では中世以前の遺構はこれだけである。

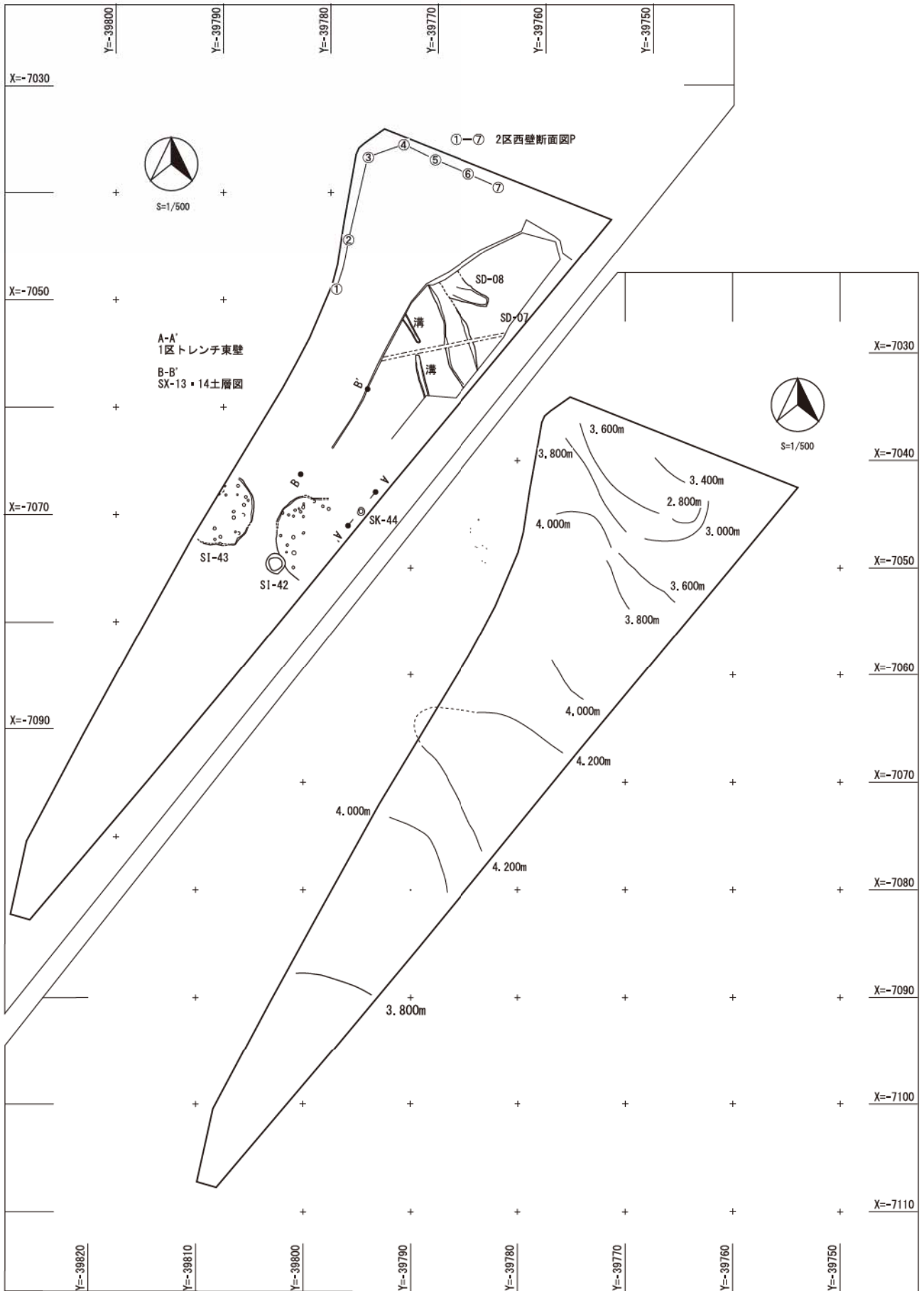
この平城遺跡出土物は弥生中期から近世磁器まで点描しているが、この遺構の位置付けについては弥生期・中世期と大別でき、そのピークは中世期であるが遺物は破片でローリングを受け実測に耐えられない。底部に僅かに糸切り痕が見られることから推測ということになった。



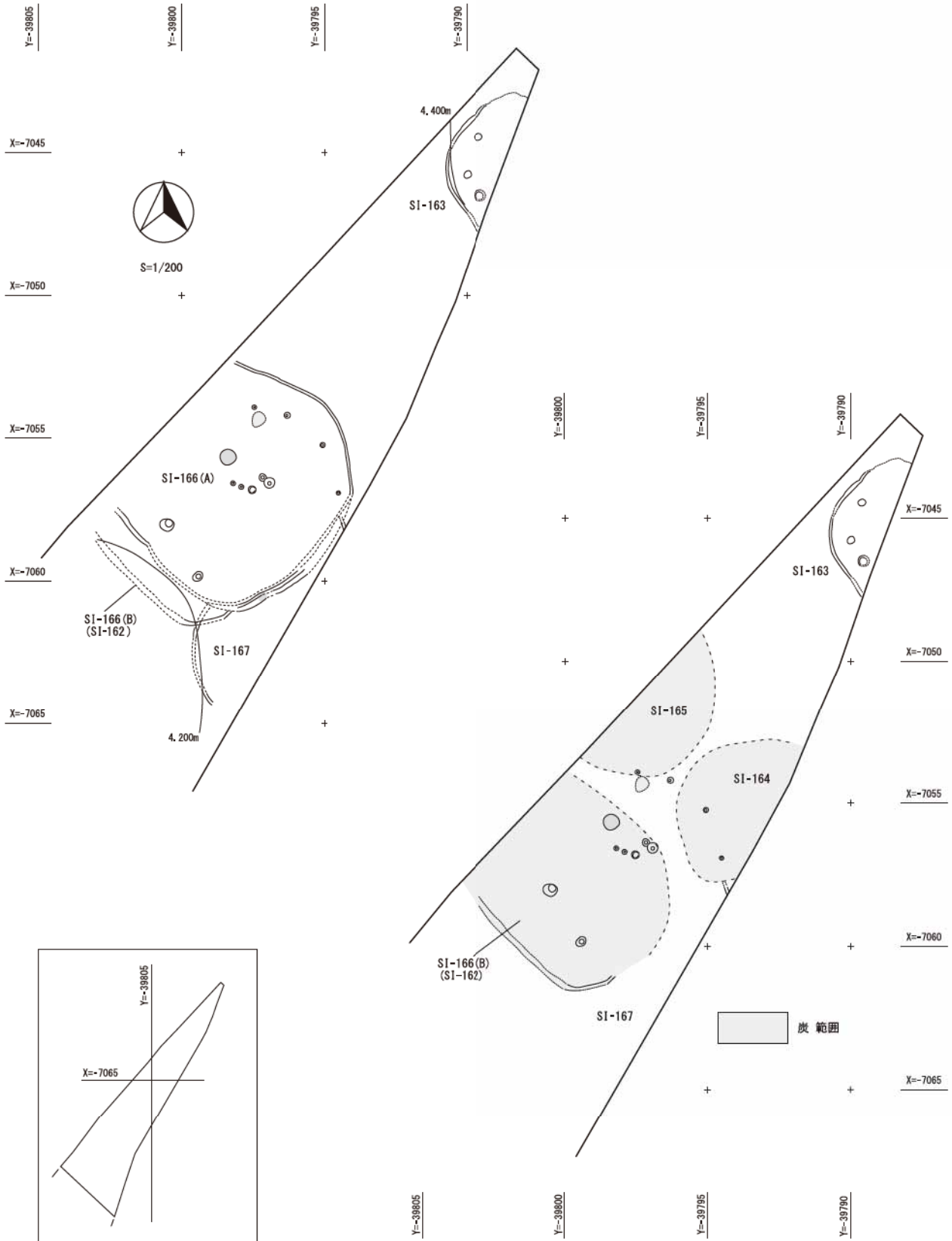
第 32 図 調査区範囲図 (S=1/10000)



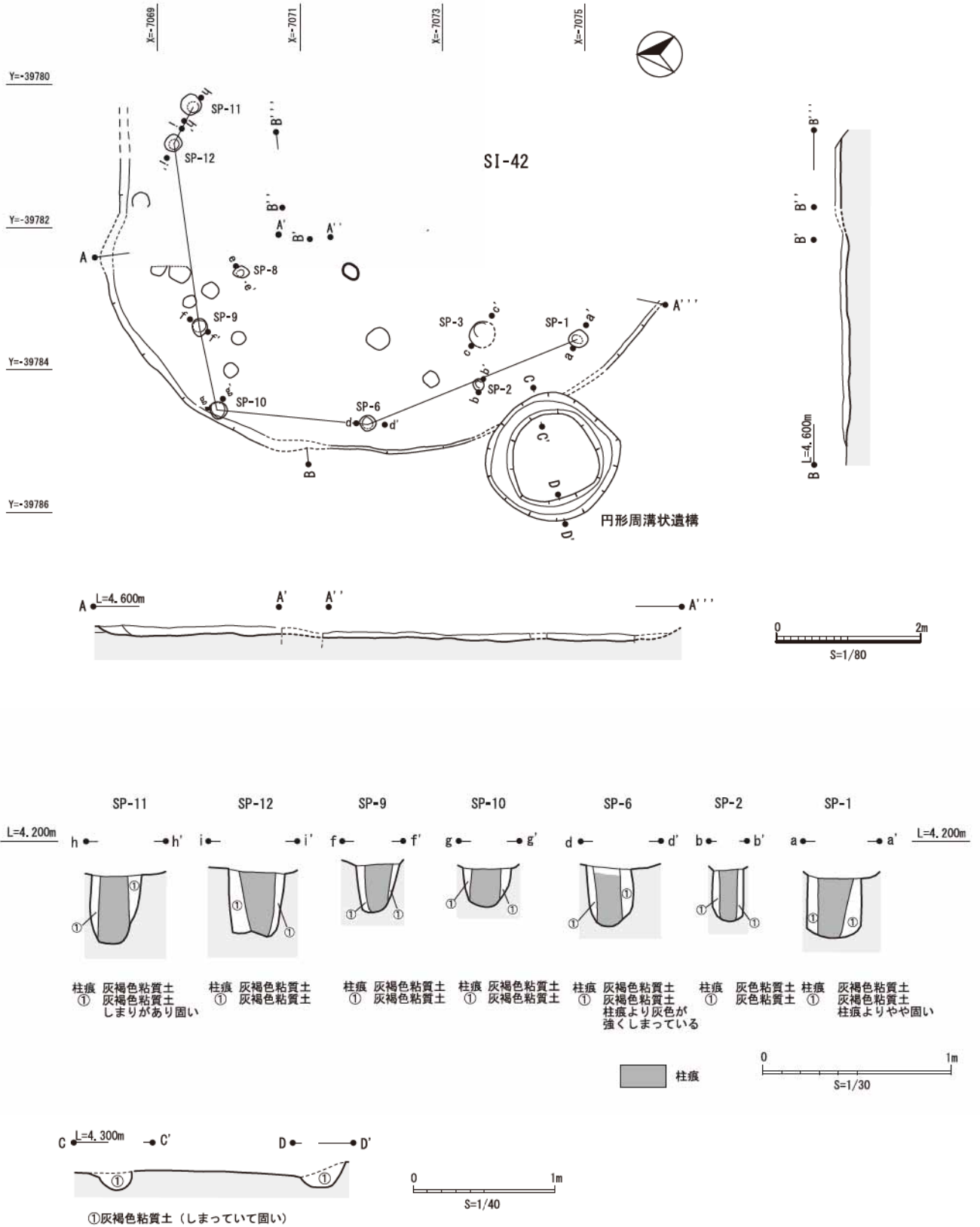
第33図 玉名平野条里跡 01-1～8区 遺構配置図（縄文）



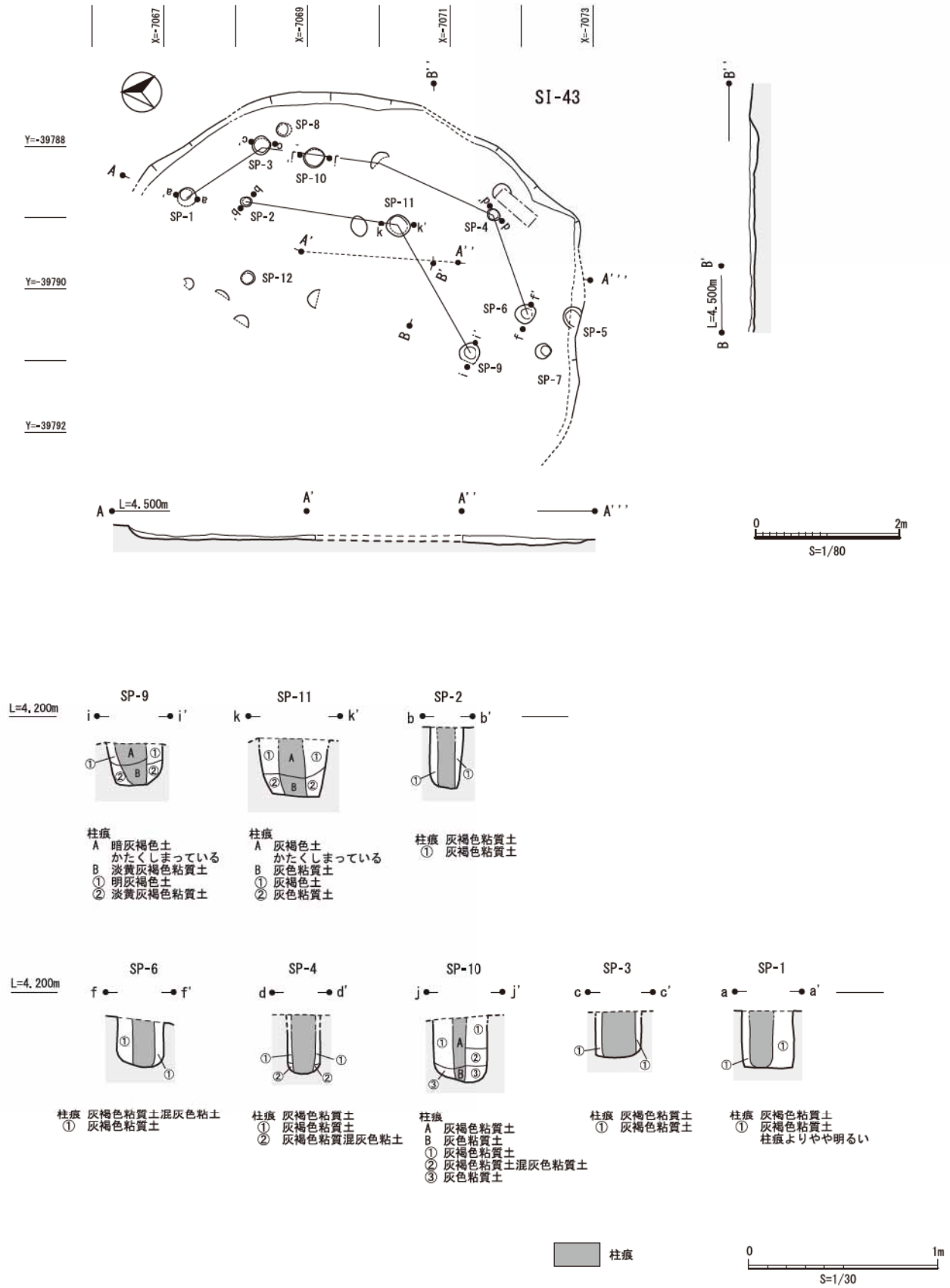
第 34 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図及びコンタ図（縄文）



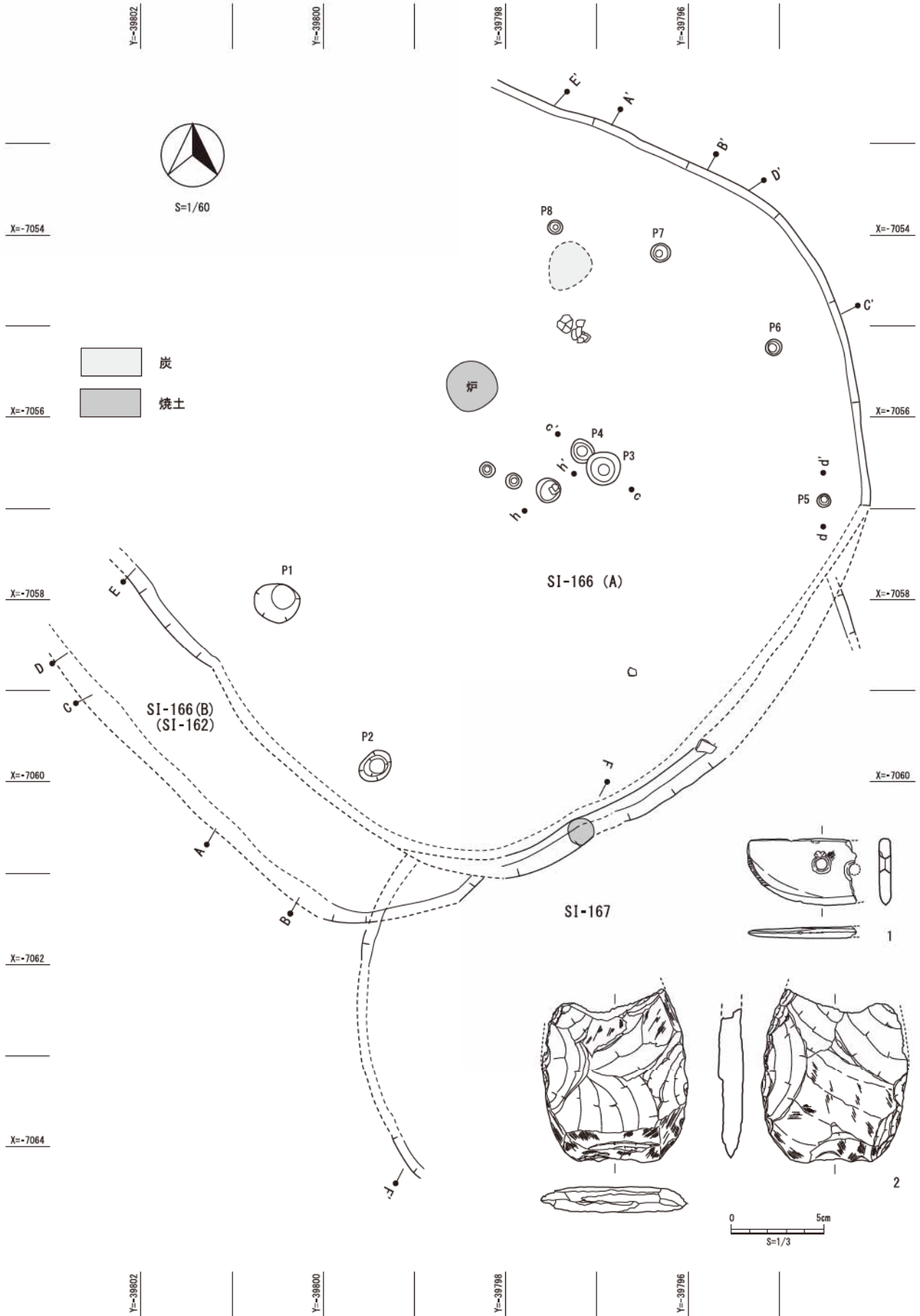
第 35 図 玉名平野条里跡 01-3 区 3b 層遺構配置図 (縄文)



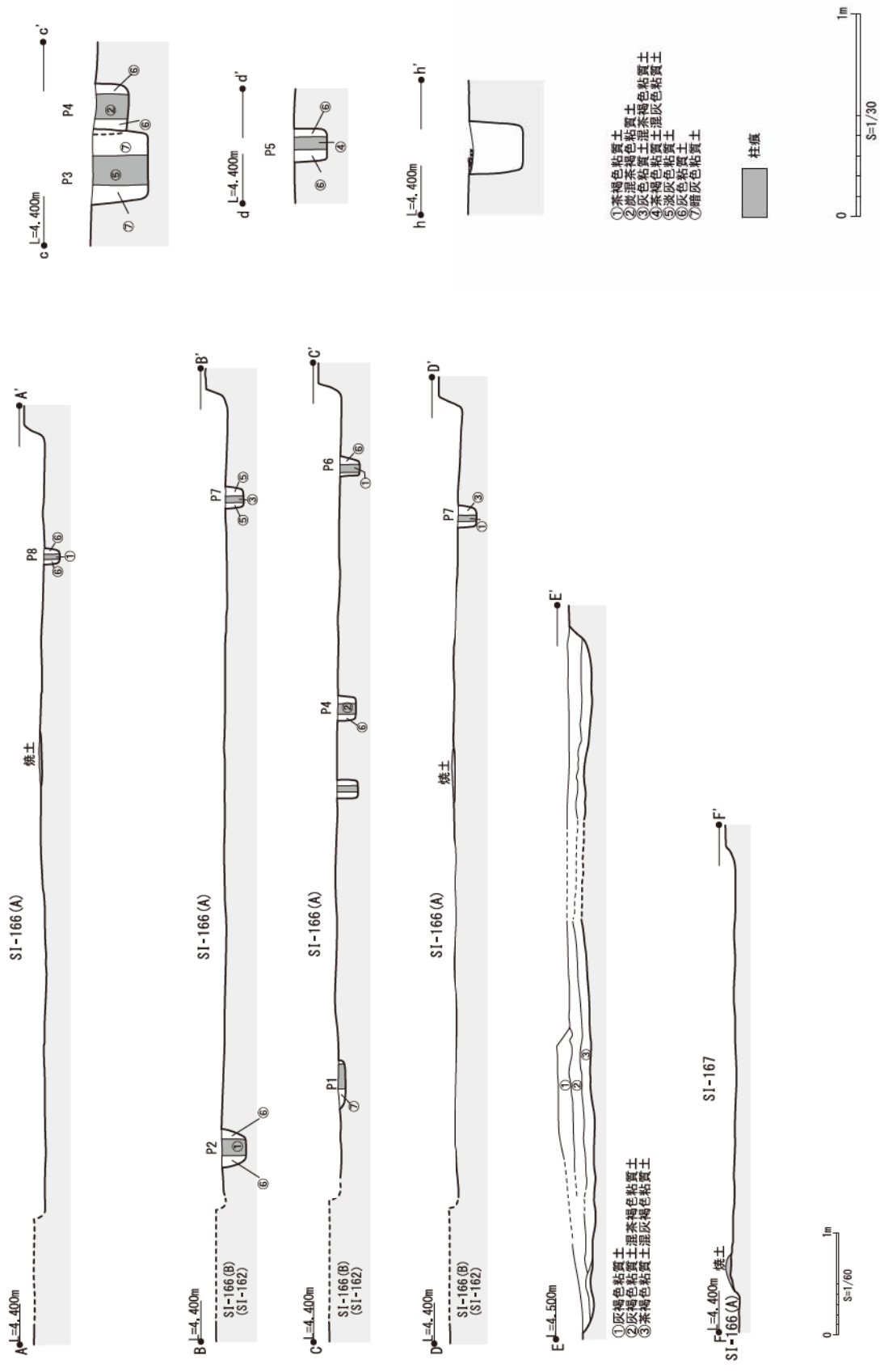
第 36 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-42・円形周溝状遺構実測図



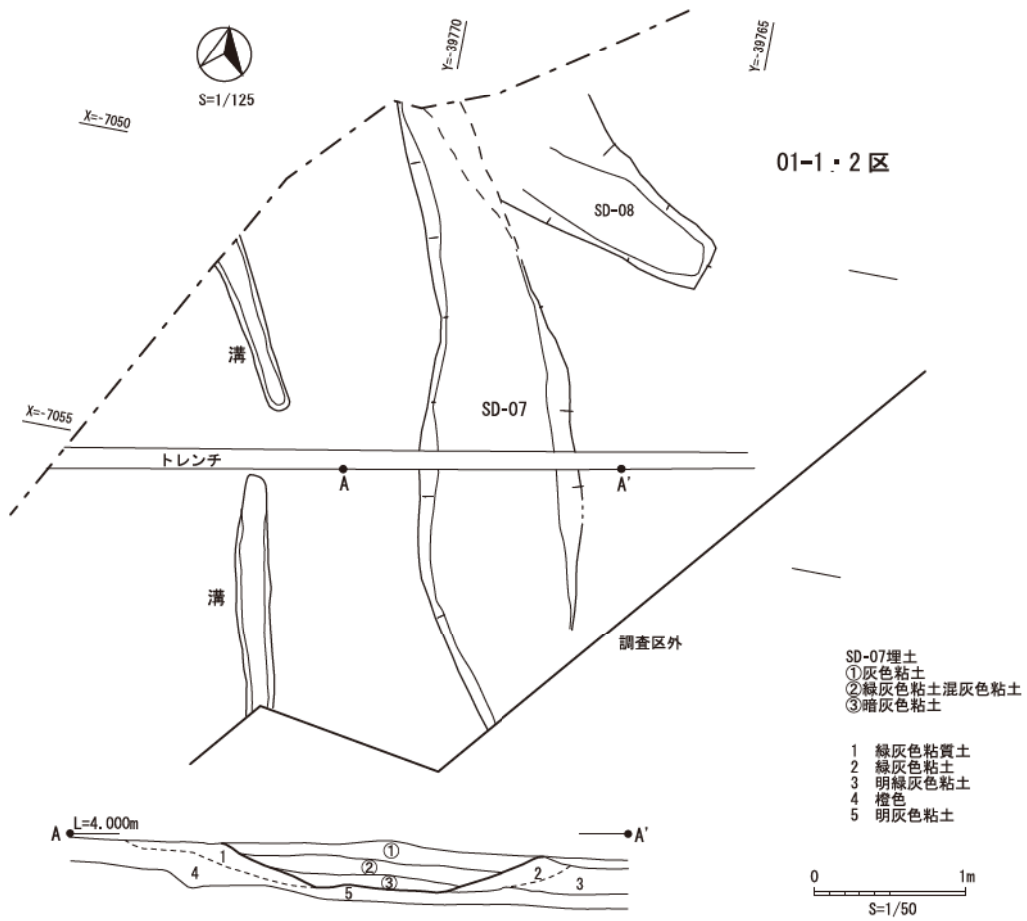
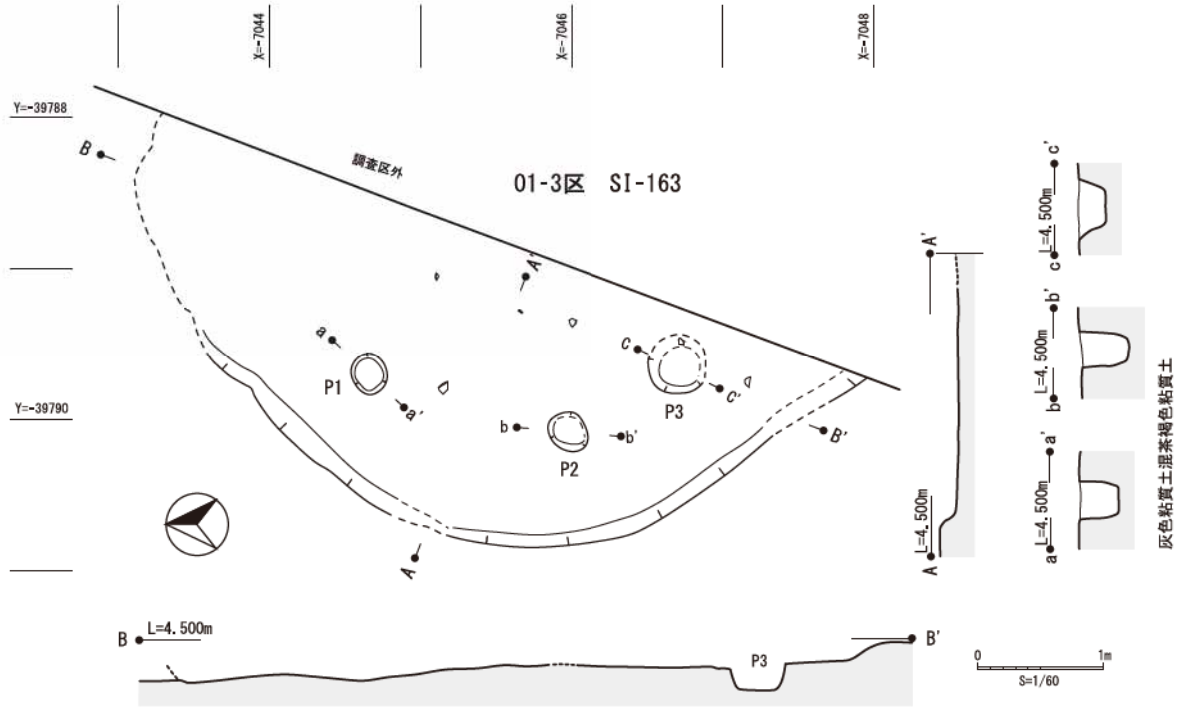
第 37 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-43 実測図



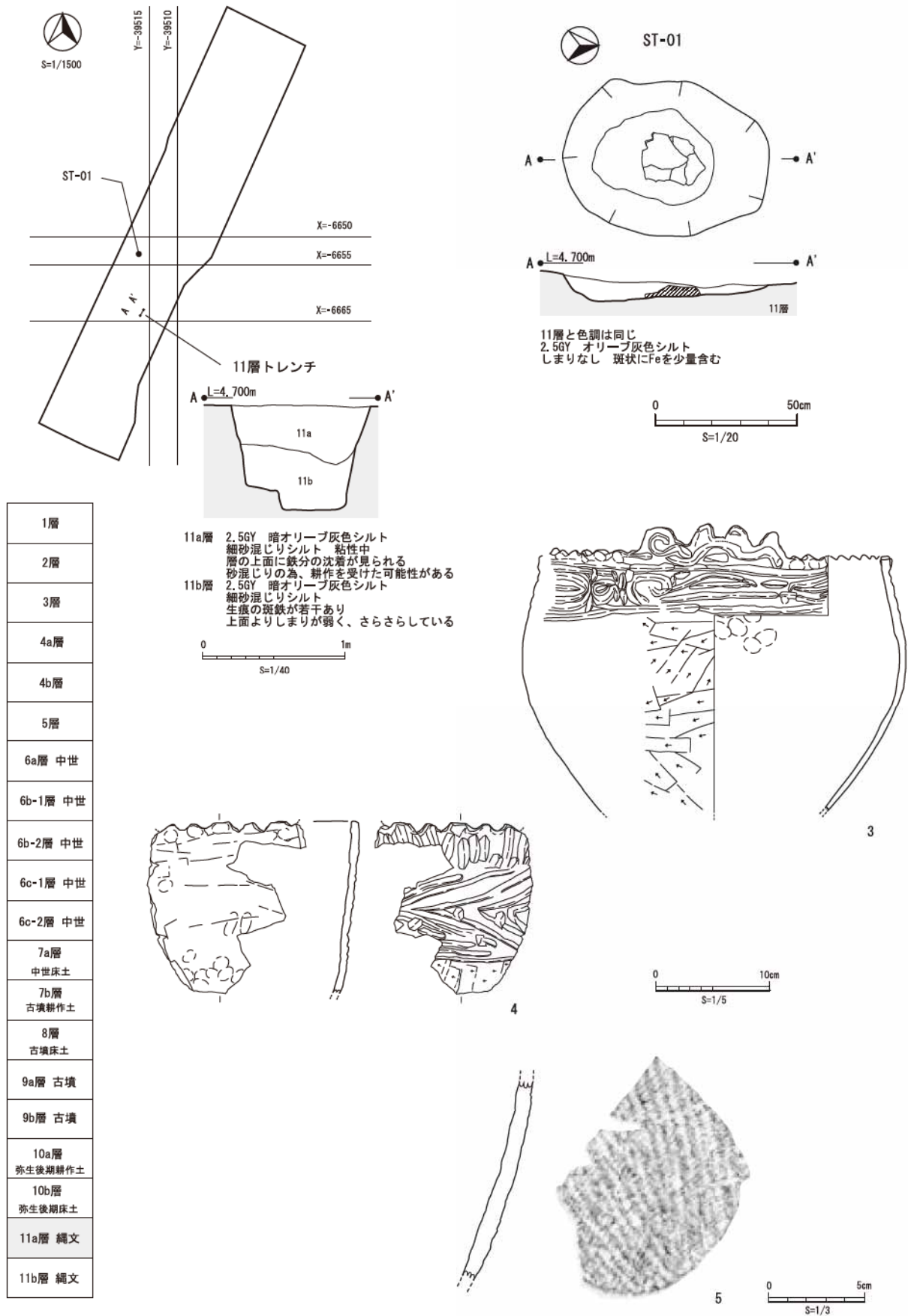
第 38 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 1 及び出土遺物実測図



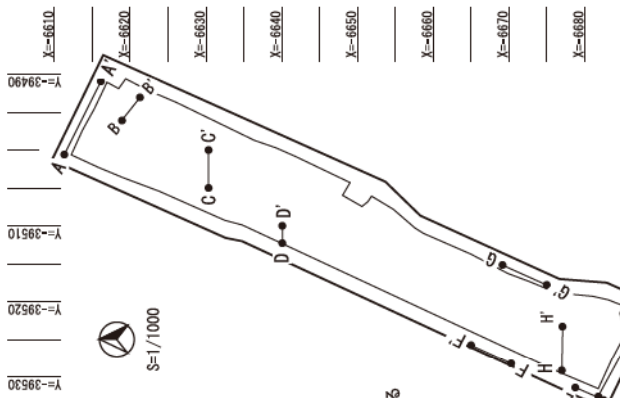
第 39 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-166・167 実測図 2



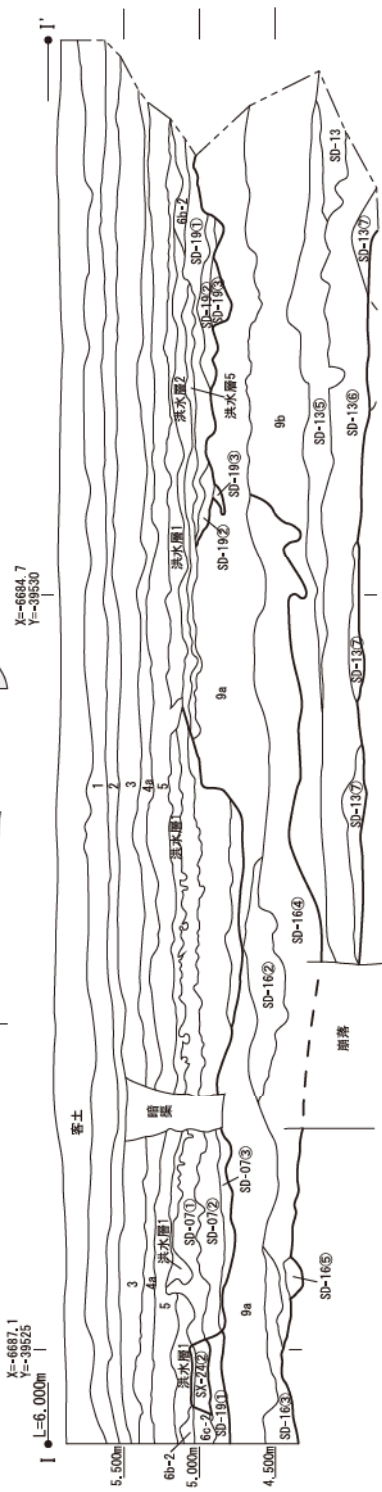
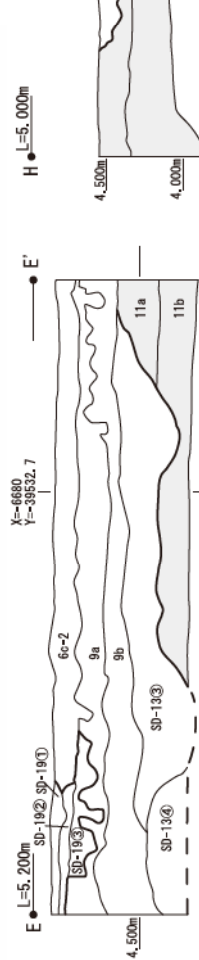
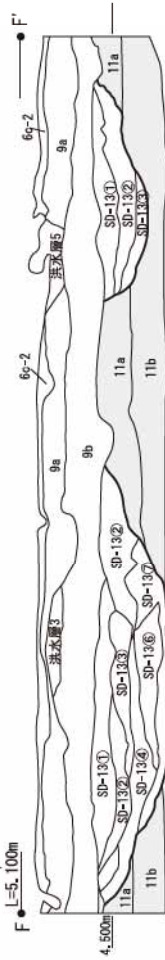
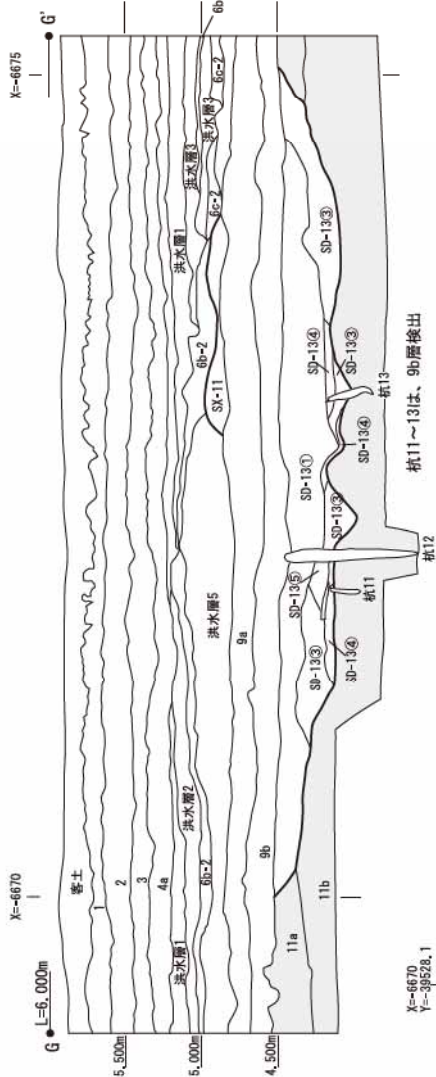
第 40 図 玉名平野条里跡 01-3区 SI-163 01-1・2区 SD-07・08 実測図



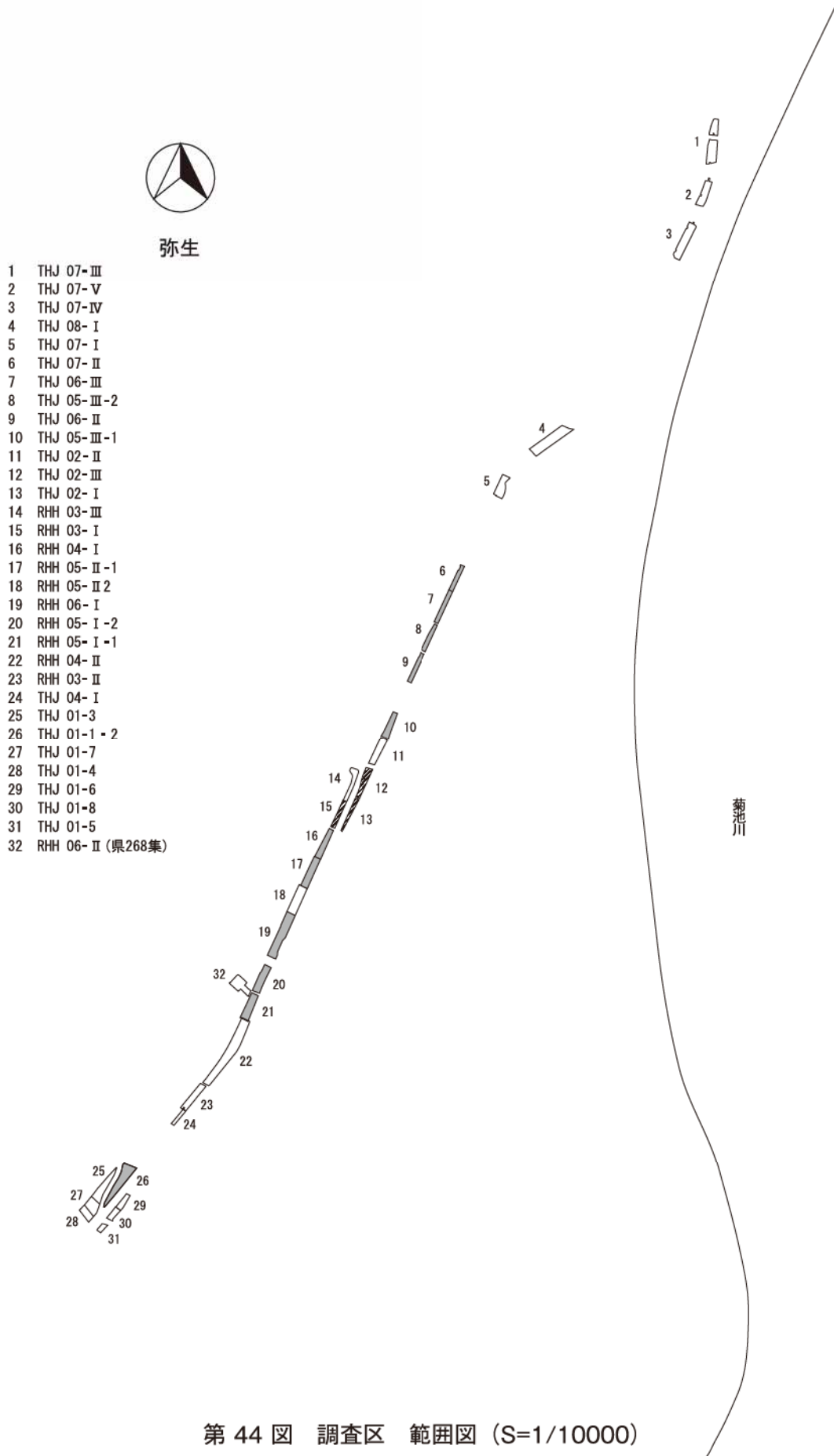
第 41 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図 (No.3・4)
玉名平野条里跡 07-III 区 出土遺物実測図 (No.5)

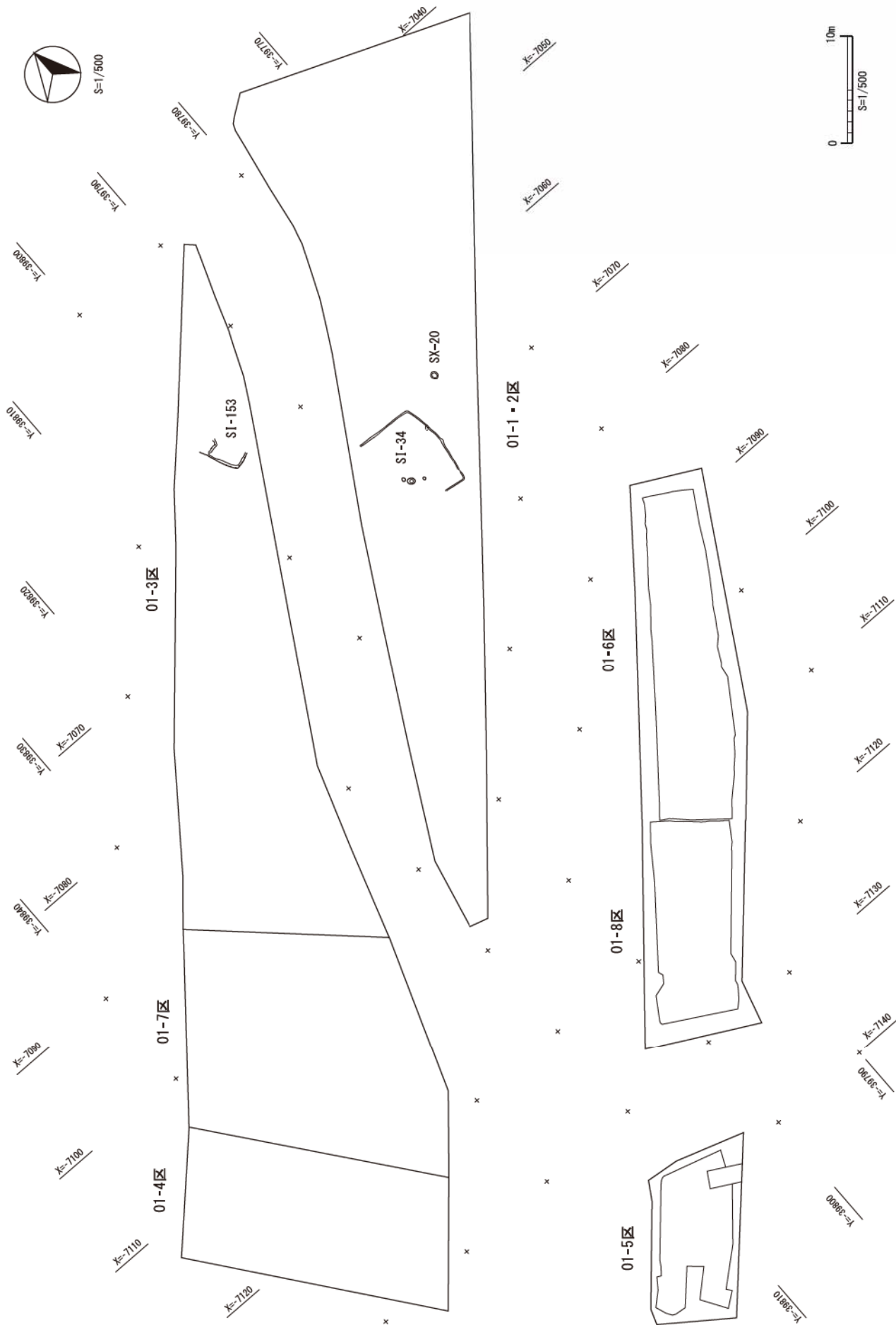


- ① 7.5V3/1 オリーブ黒シルト
細砂混じりシルト
ブロック状の1a層が混ざる
- ② 7.5V3/1 オリーブ黒シルト
粘性小・しまりなし
- ③ 5V6/3 オリーブ黄砂質土
細砂混じりシルト 木片(チップ)が混入
しまり小・粘性小
- ④ 5V4/1 灰色シルト
粗砂質 粘性・しまりなし
- ⑤ 7.5V5/1 灰色砂質土
細砂混じりシルト
部分的に径2mm程度の礫を混
しまりなし・粘性なし
- ⑥ 10V3/1 オリーブ黒シルト
しまりなし 粘性なし
細砂混じりシルト 1mm程度の砂礫含む
しまり小・粘性中
- ⑦ 5V6/3 段々オリーブ砂質土
しまり小・粘性なし
細砂中に粗砂やチップ(木片)が入る



第43図 両泊間日渡遺跡06-I区 11a層SD-13実測図

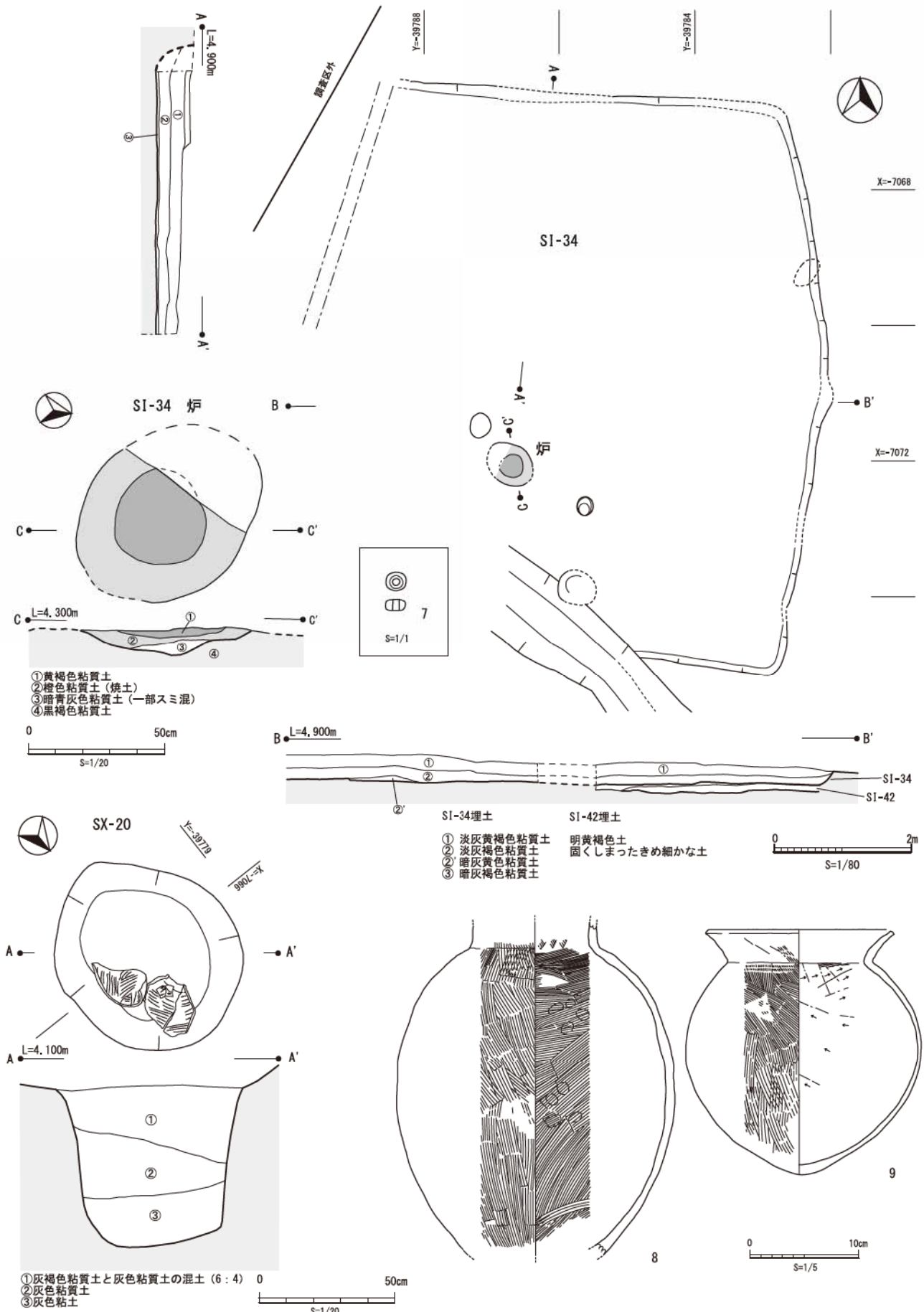


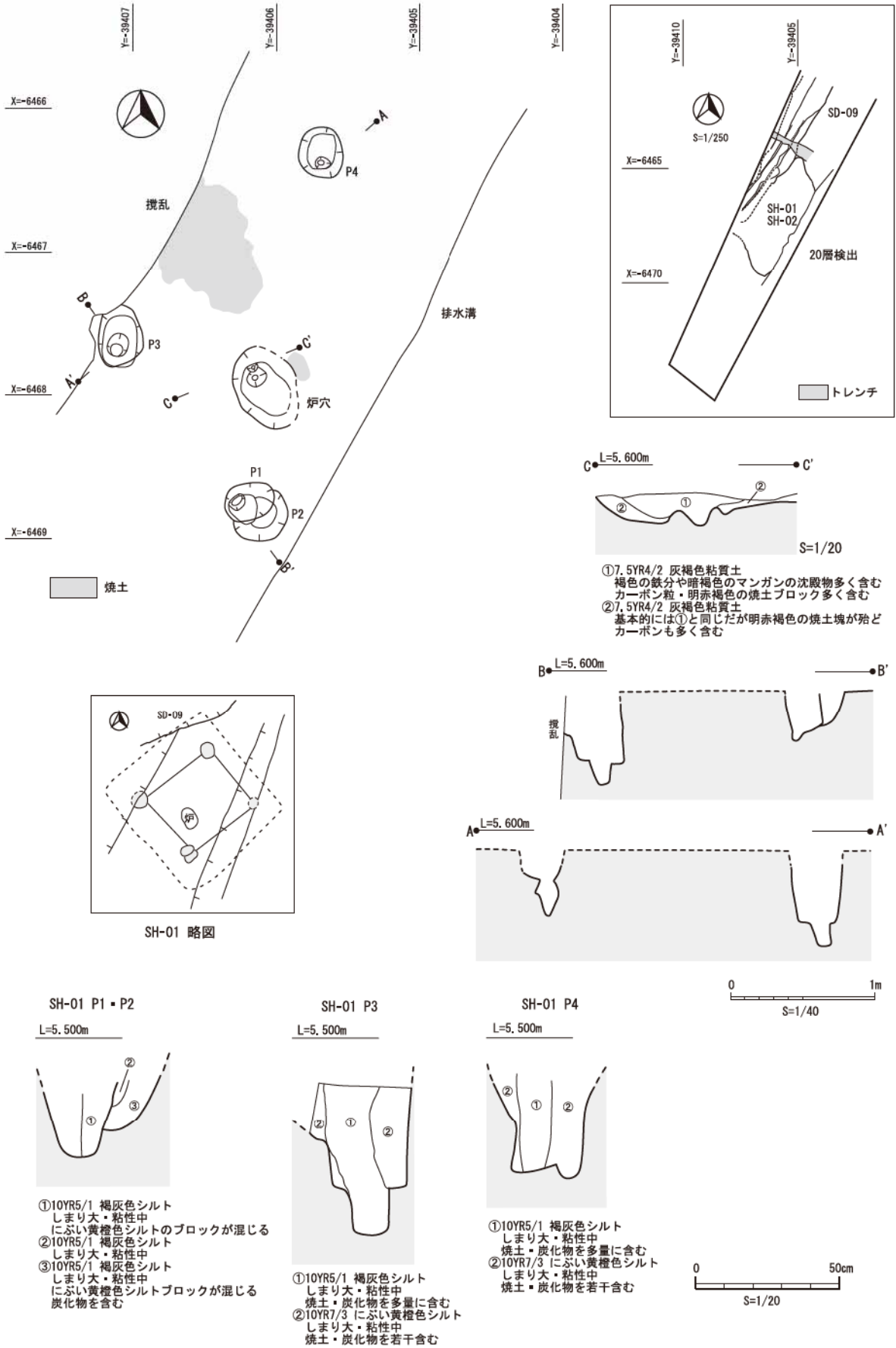


第45図 玉名平野条里跡 01-1～8区 遺構配置図 (弥生)

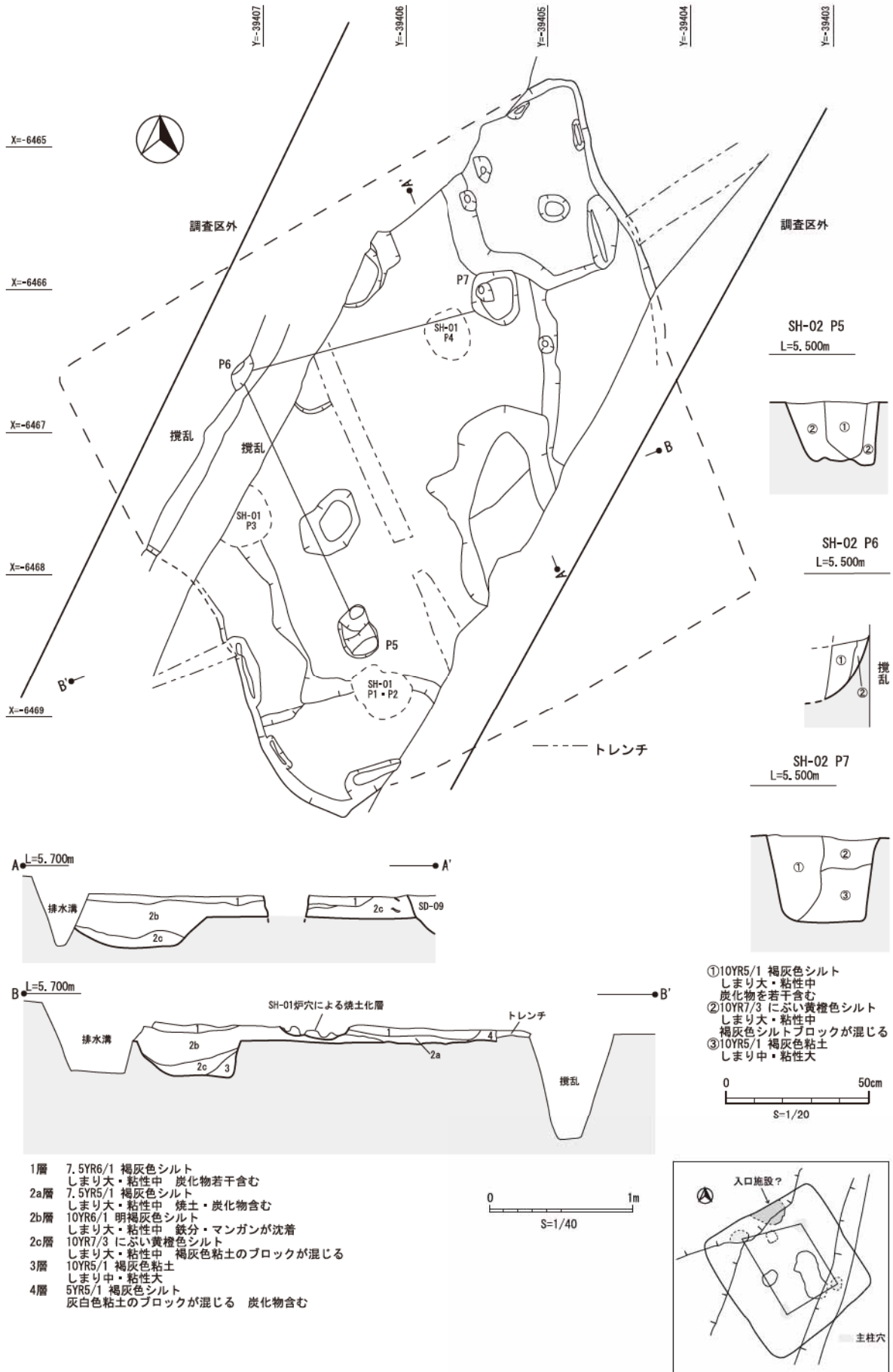


第 46 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (弥生)



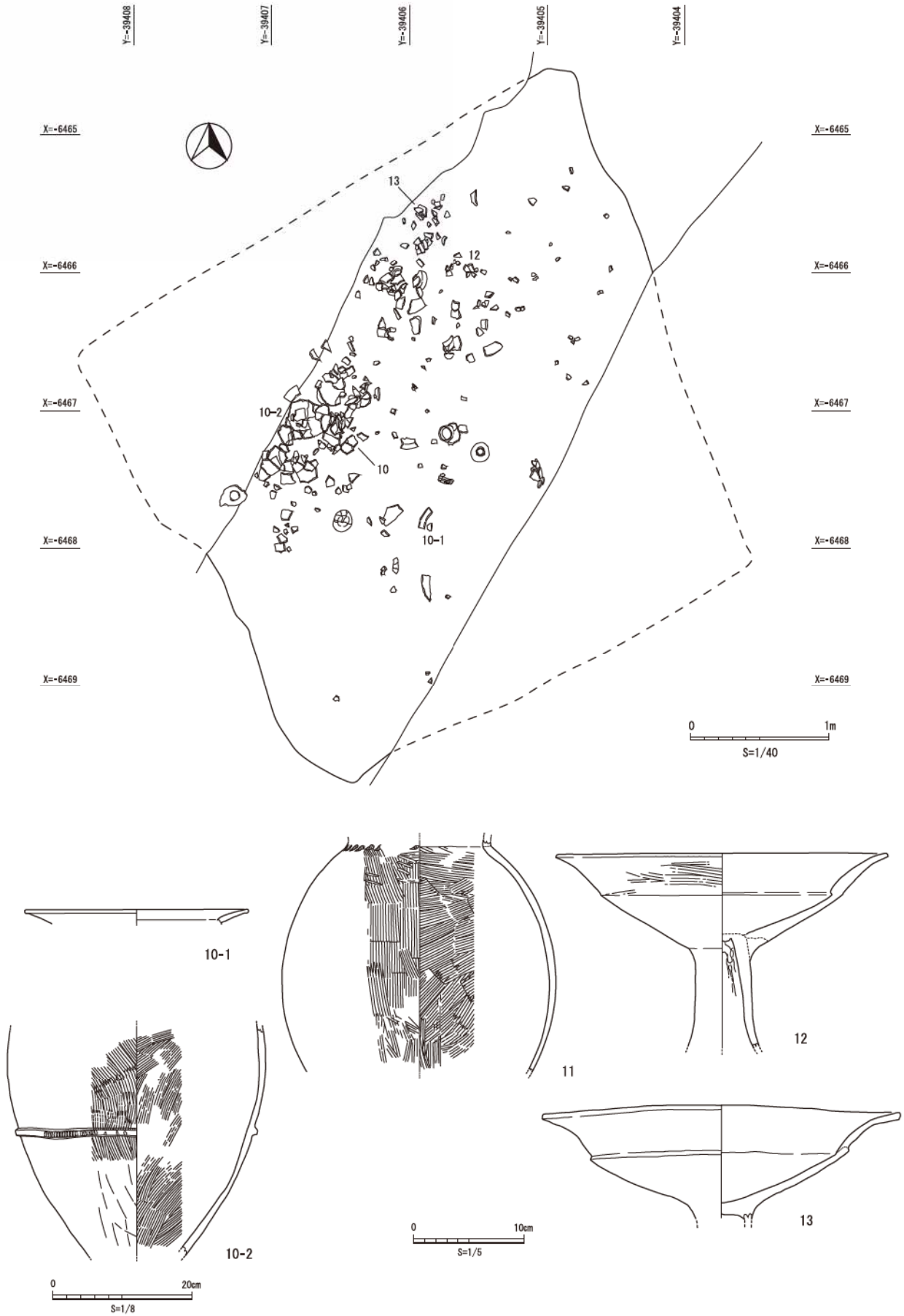


第 48 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SH-01 実測図

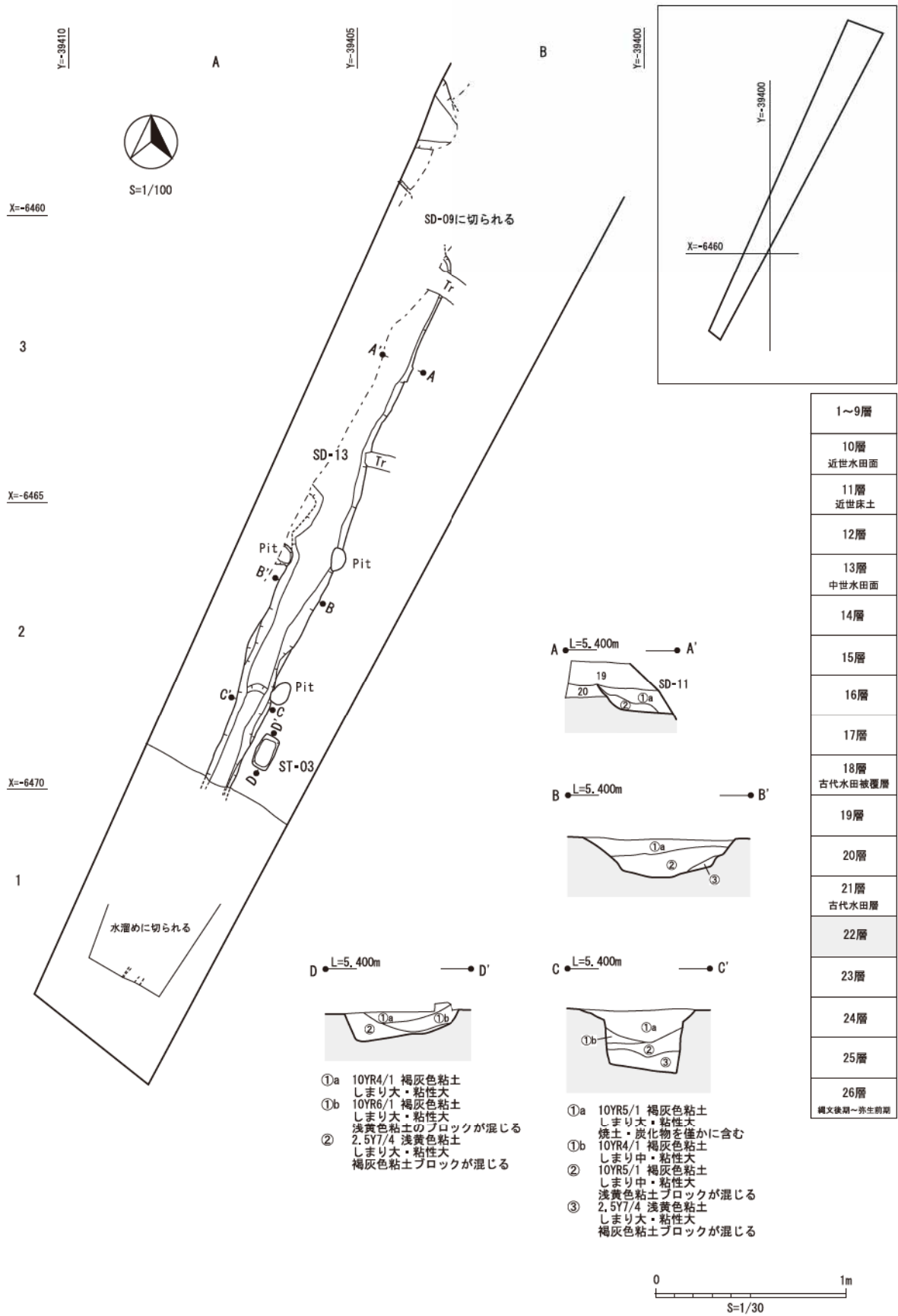


第 49 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SH-02 実測図

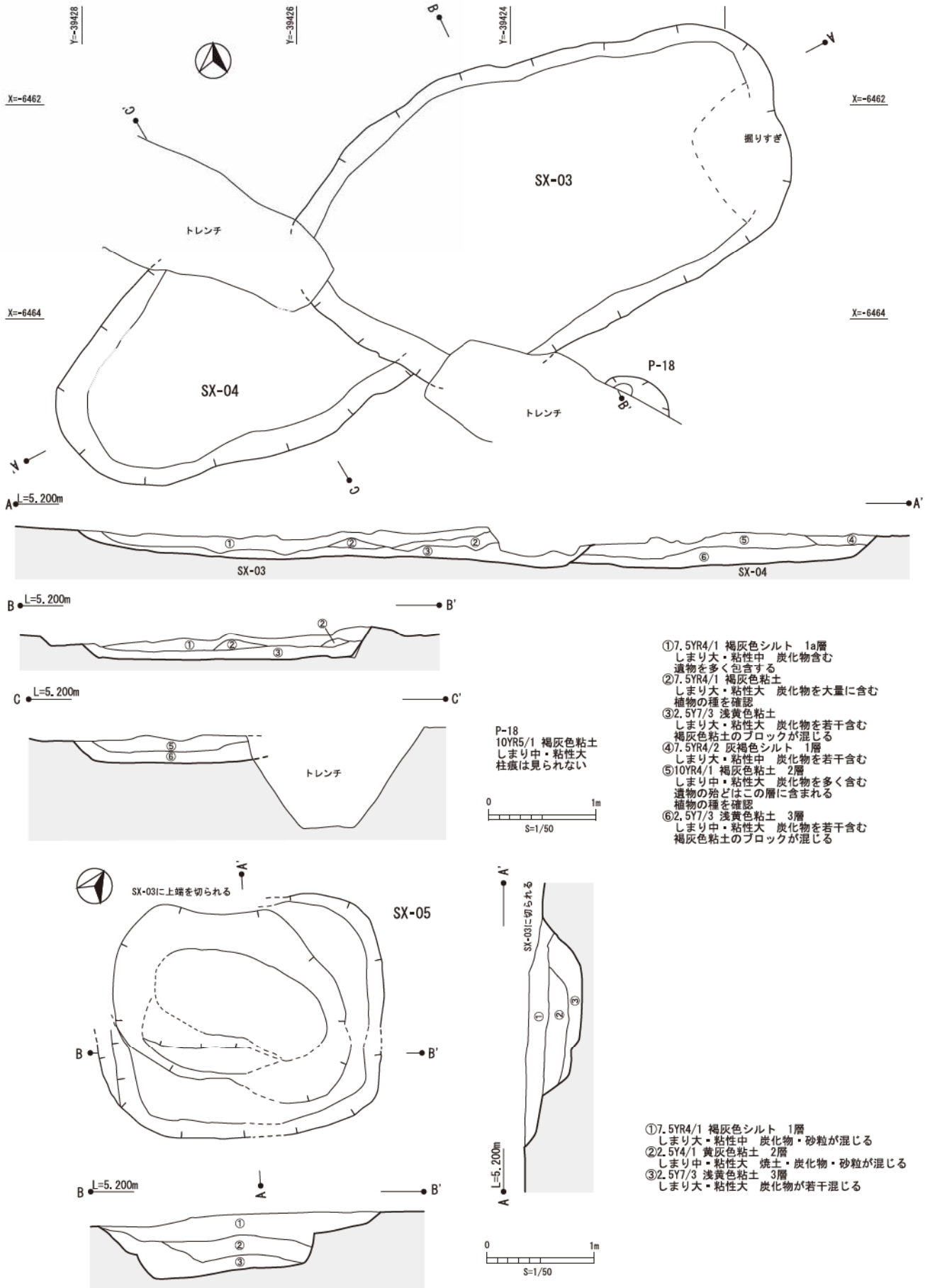
SH-02 略図



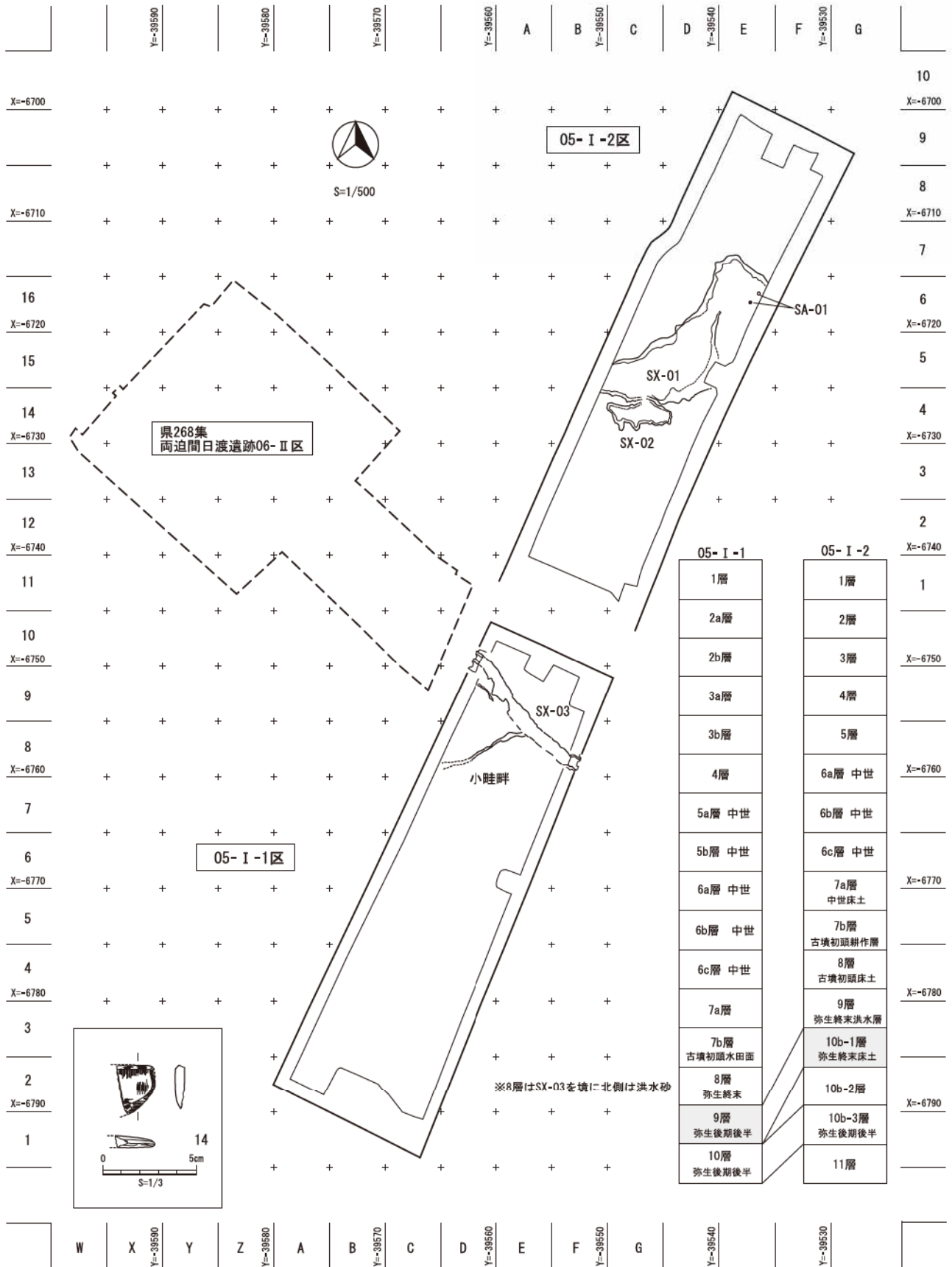
第 50 図 玉名平野条里跡 02- I 区 SH-01・02 遺物出土状況及び出土遺物実測図



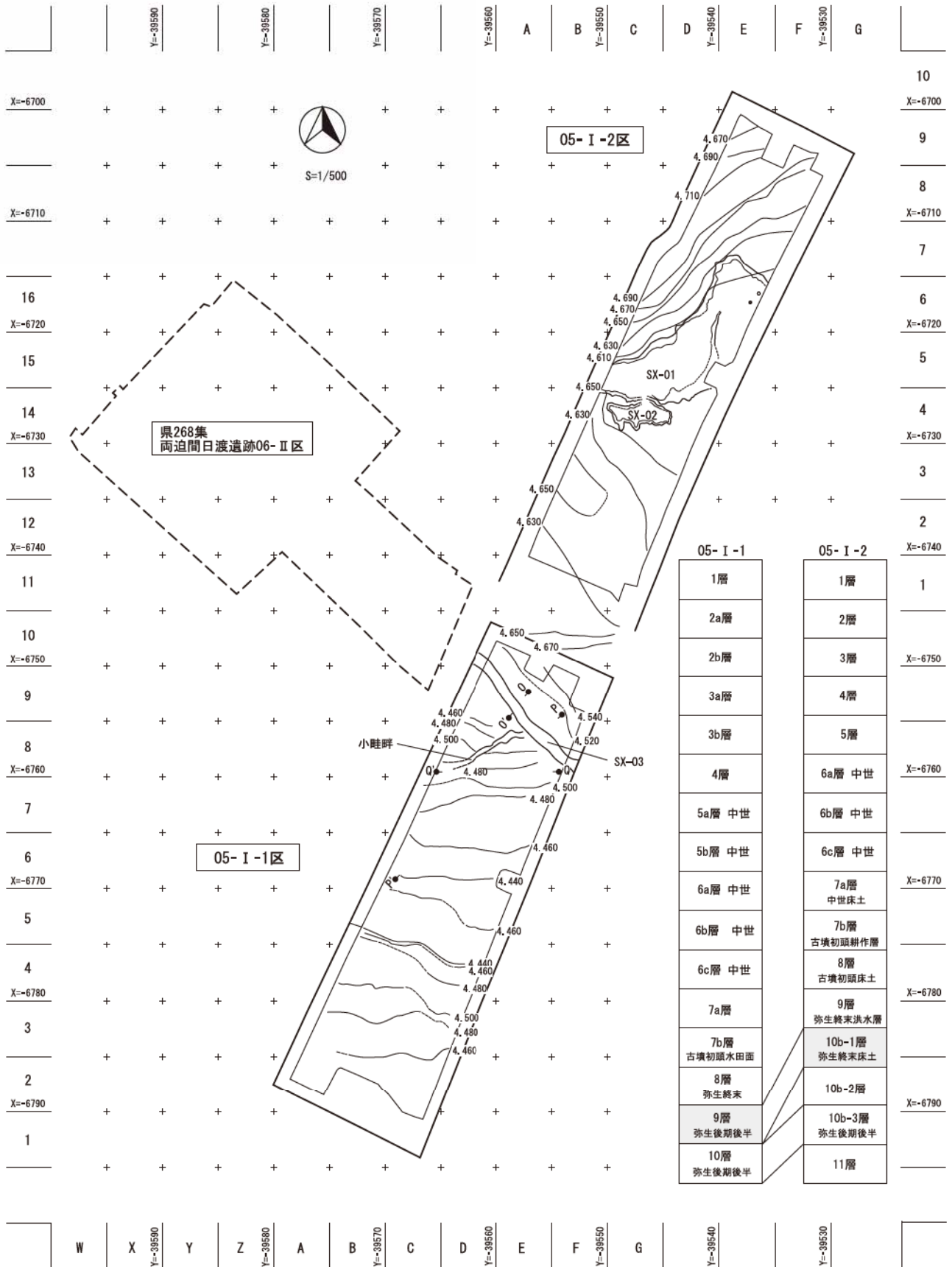
第 51 図 玉名平野条里跡 02-I 区 22 層遺構配置図・SD-13・ST-03 実測図



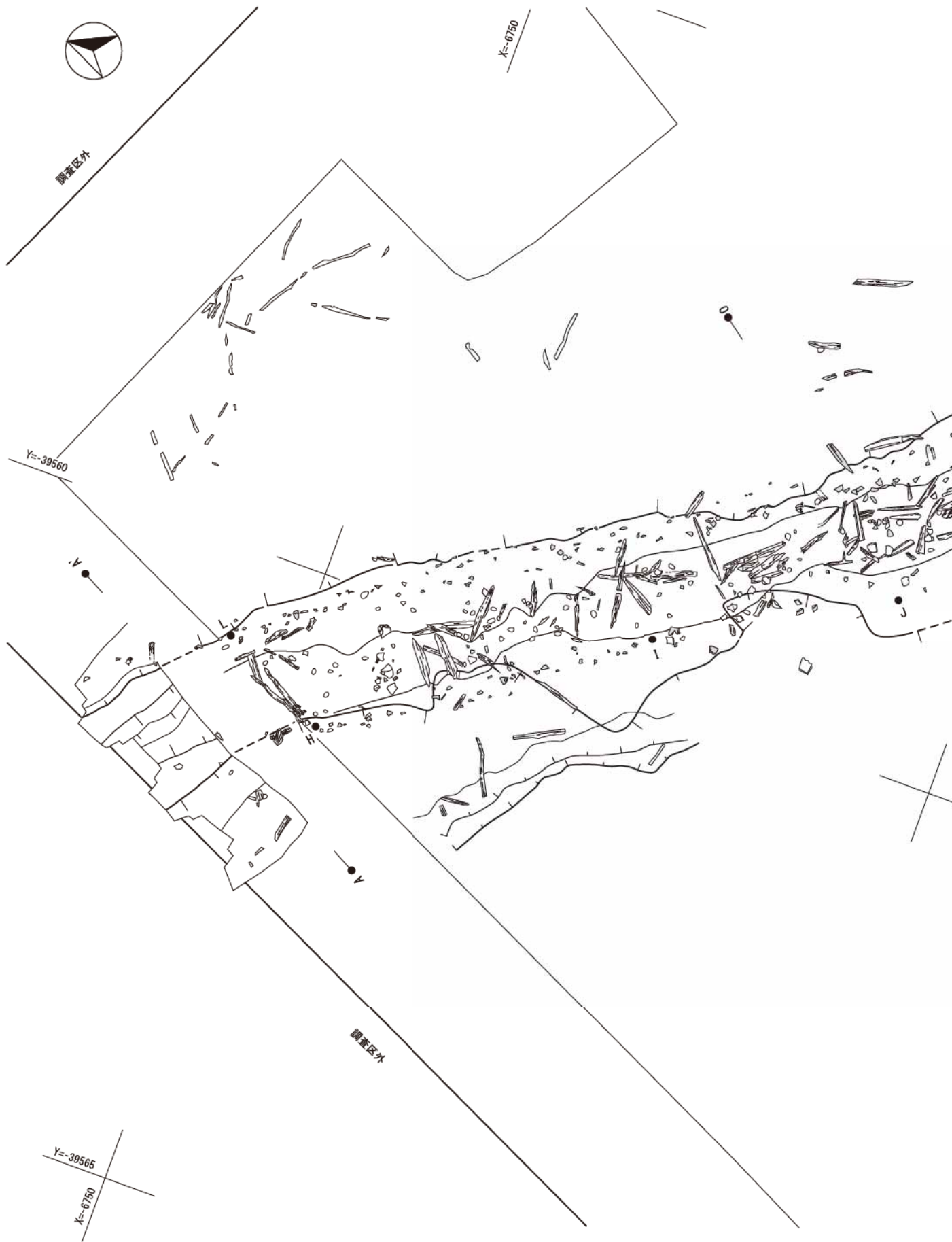
第 52 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SX-03~05 実測図



第 53 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 9 層
05-I-2 区 10b-1 層構配置図及び出土遺物実測図

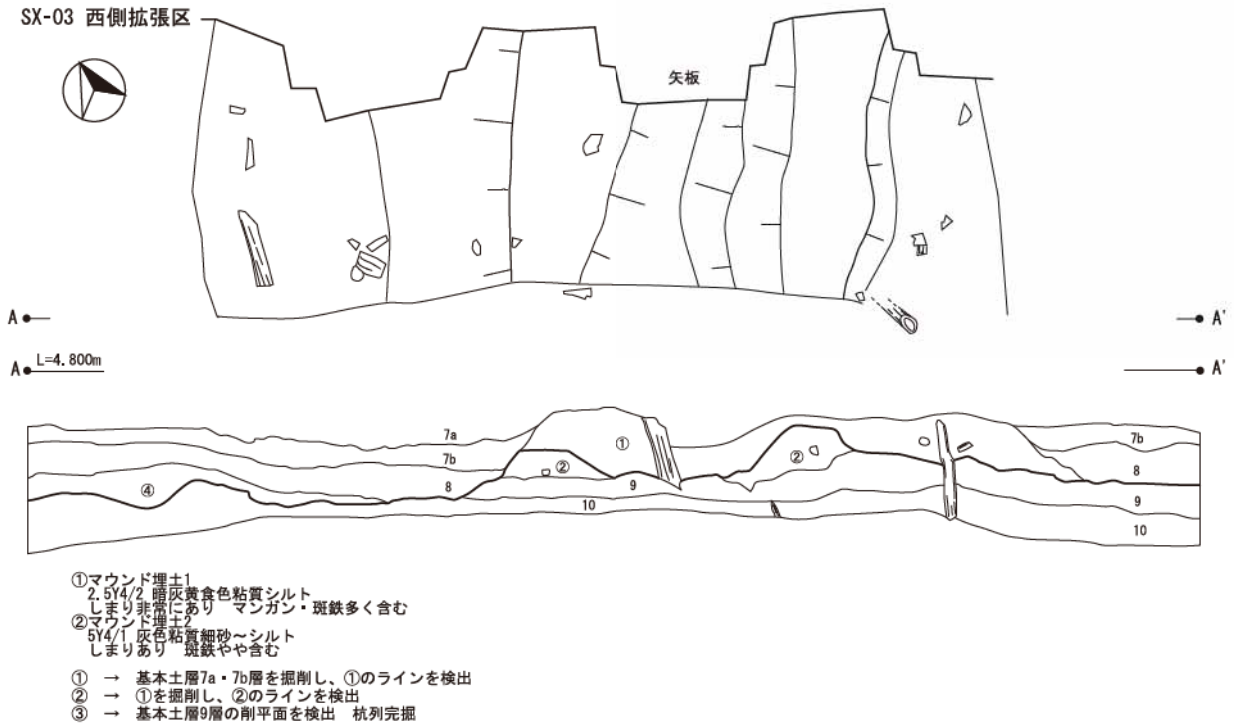


第 54 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 9 層 05-I-2 区 10b 層コンタ図

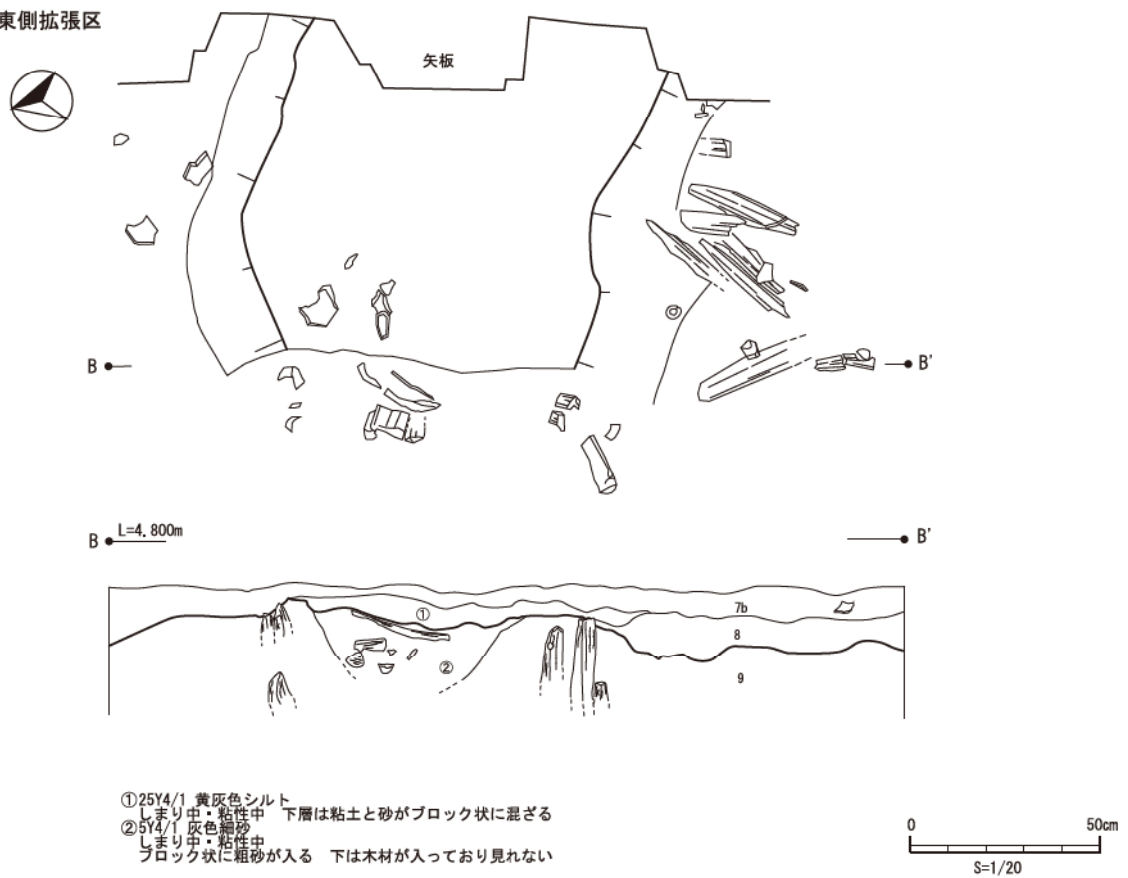


第 55 図 兩迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03・小略

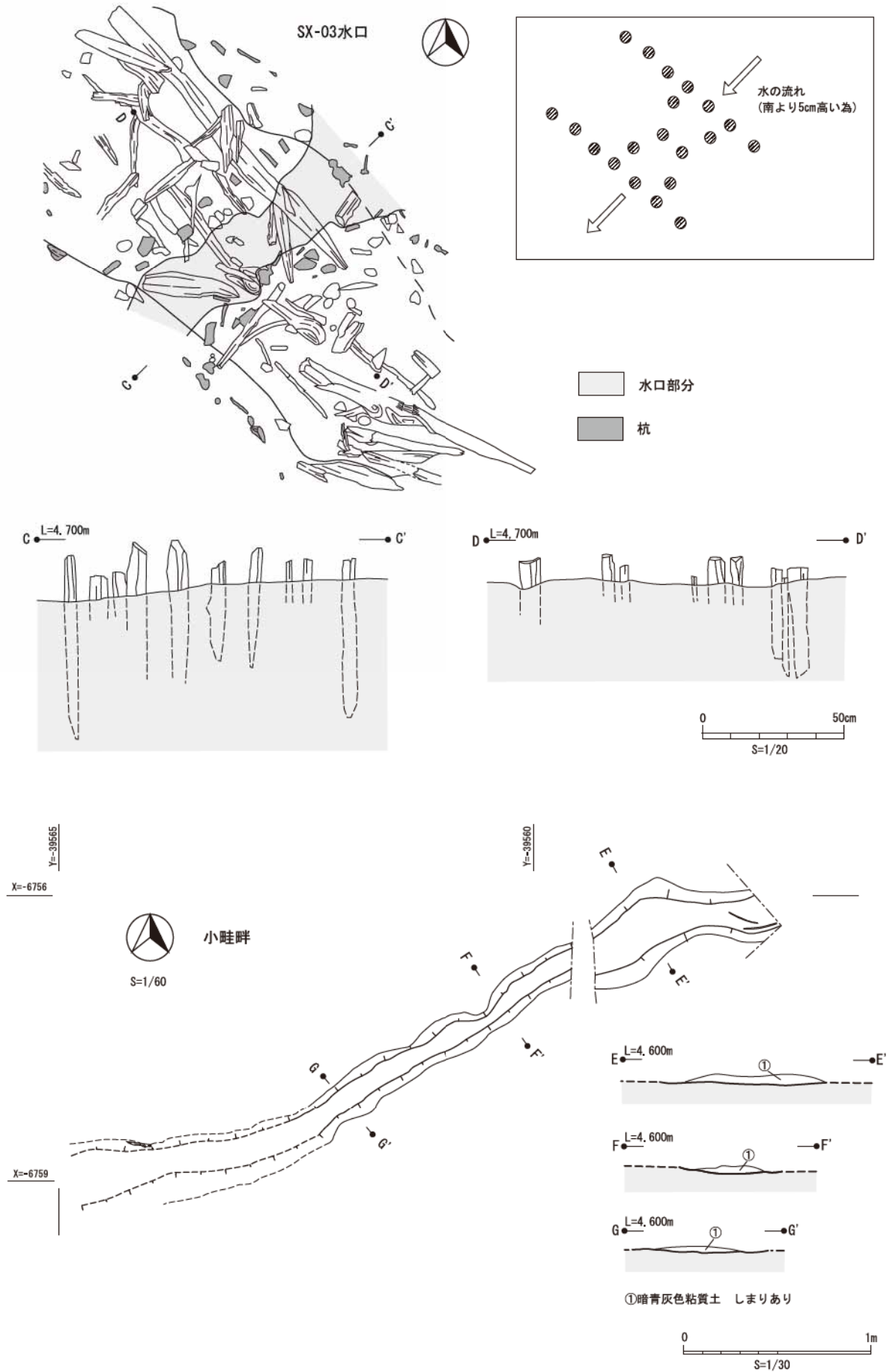
SX-03 西側拡張区



SX-03 東側拡張区



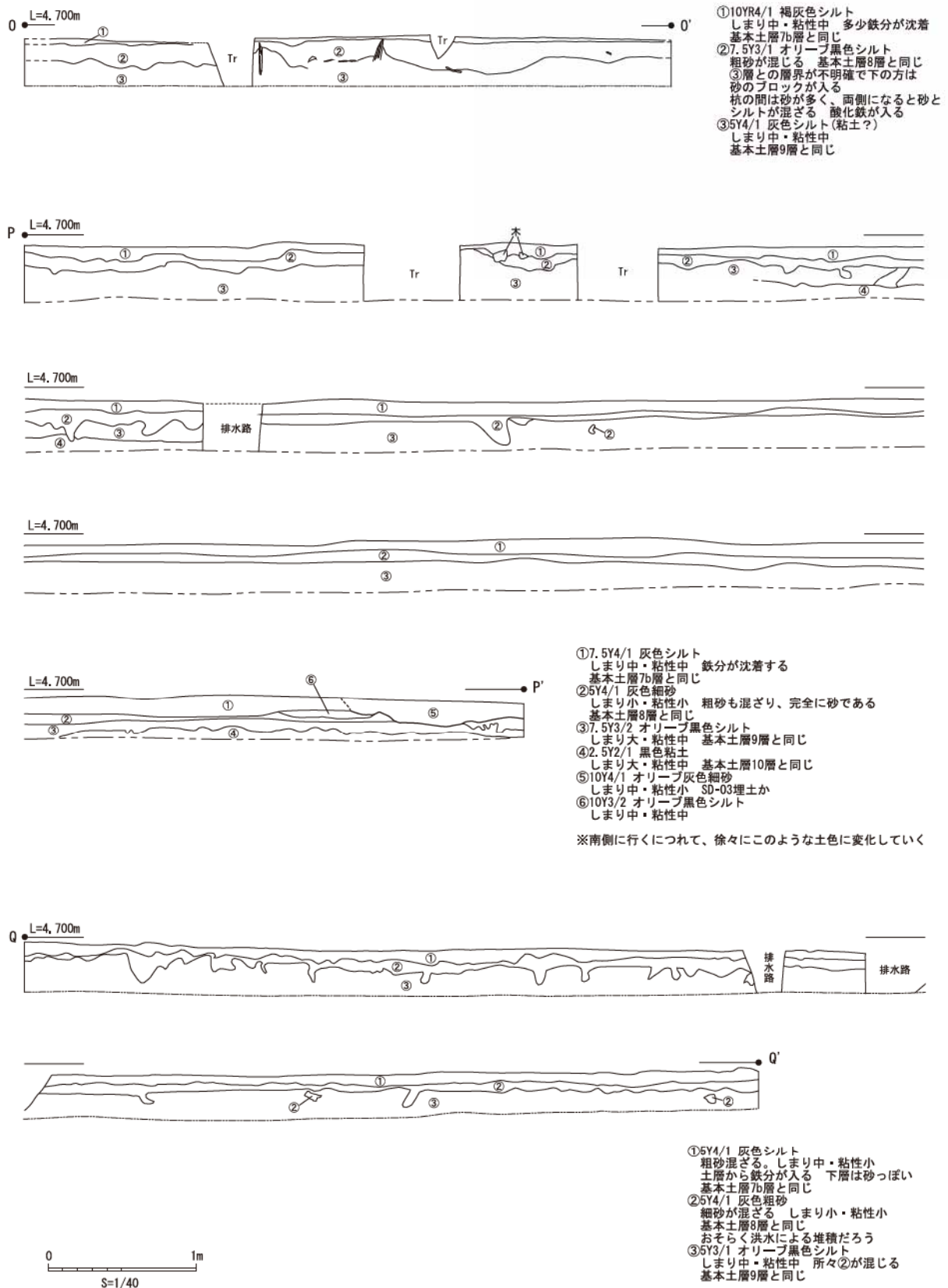
第 56 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 拡張部実測図



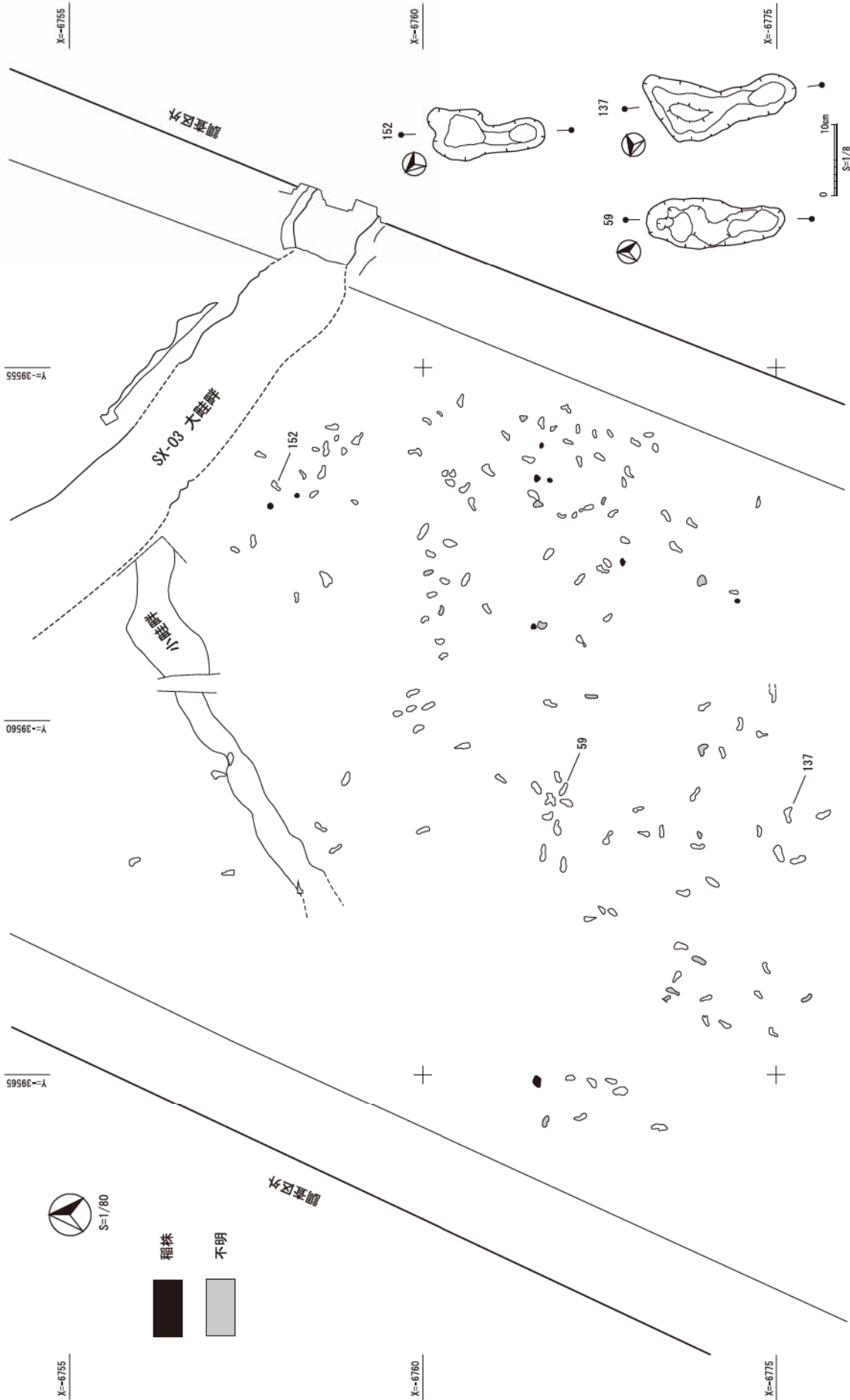
第 57 図 両迫間日渡遺跡 05- I-1 区 SX-03 水口・小畦畔実測図



第 58 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 杭列



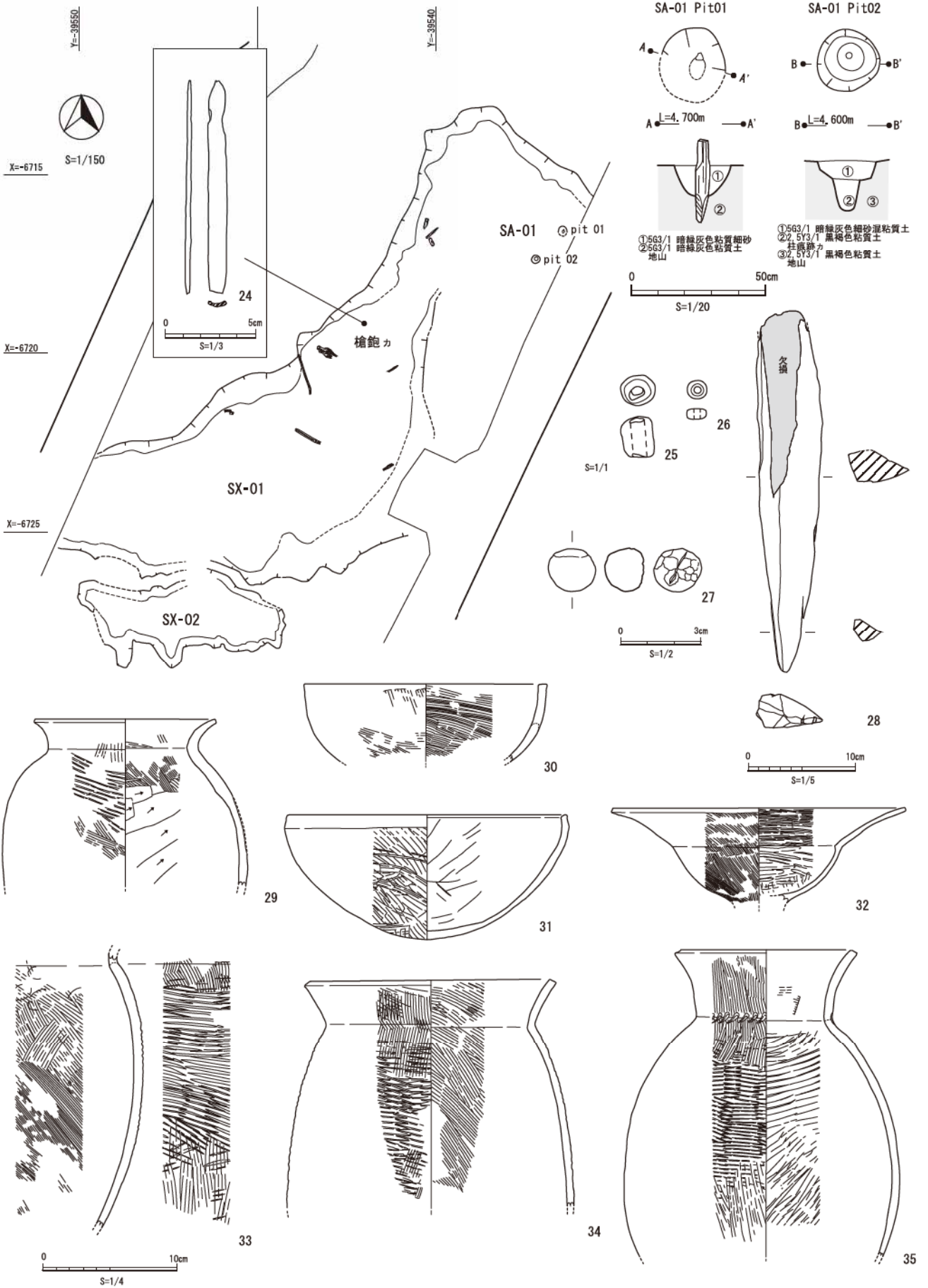
第 59 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 SX-03 トレンチ土層断面図



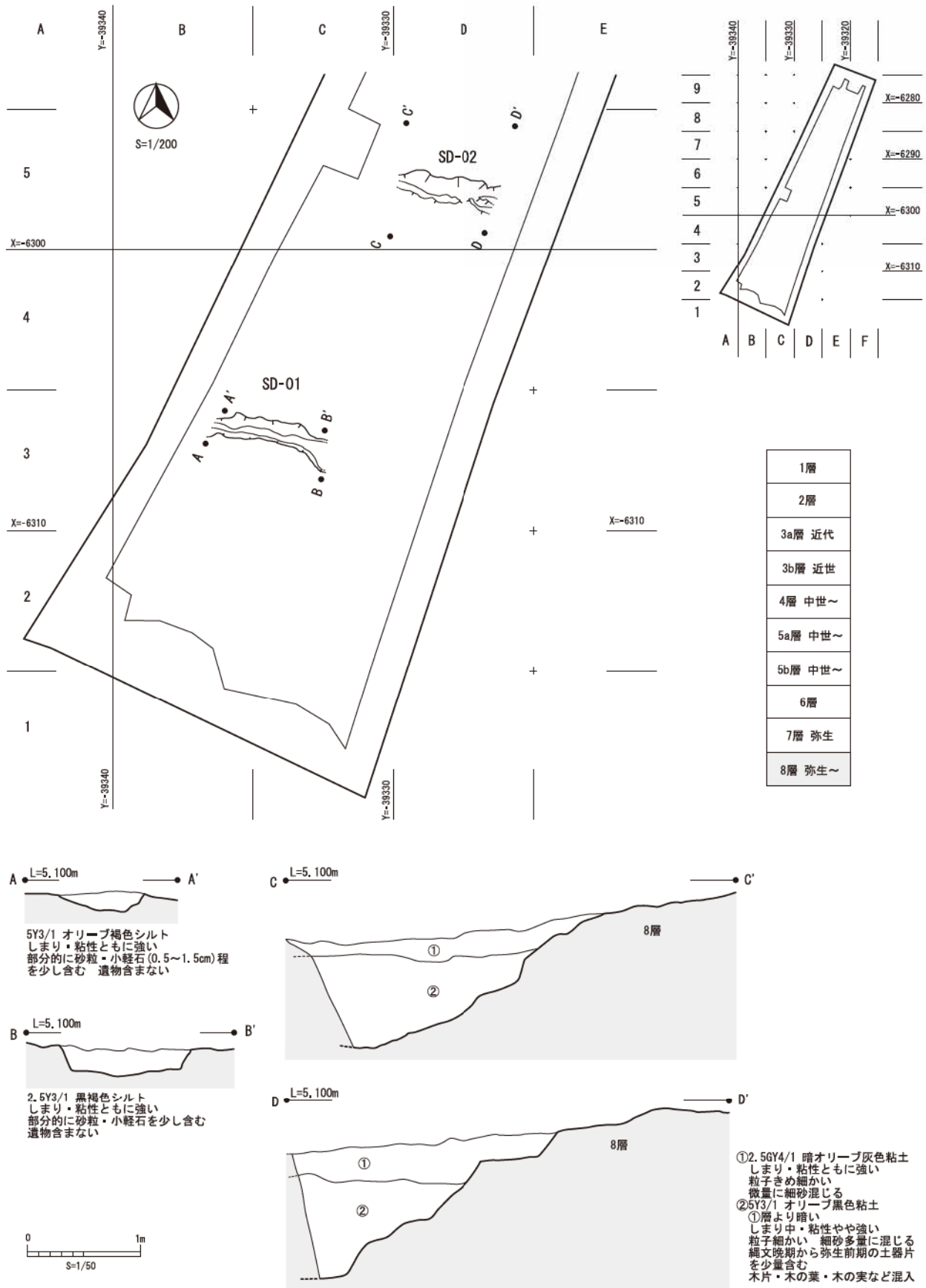
第60図 両迫間日渡遺跡 05-I-1区 足跡位置図及び実測図



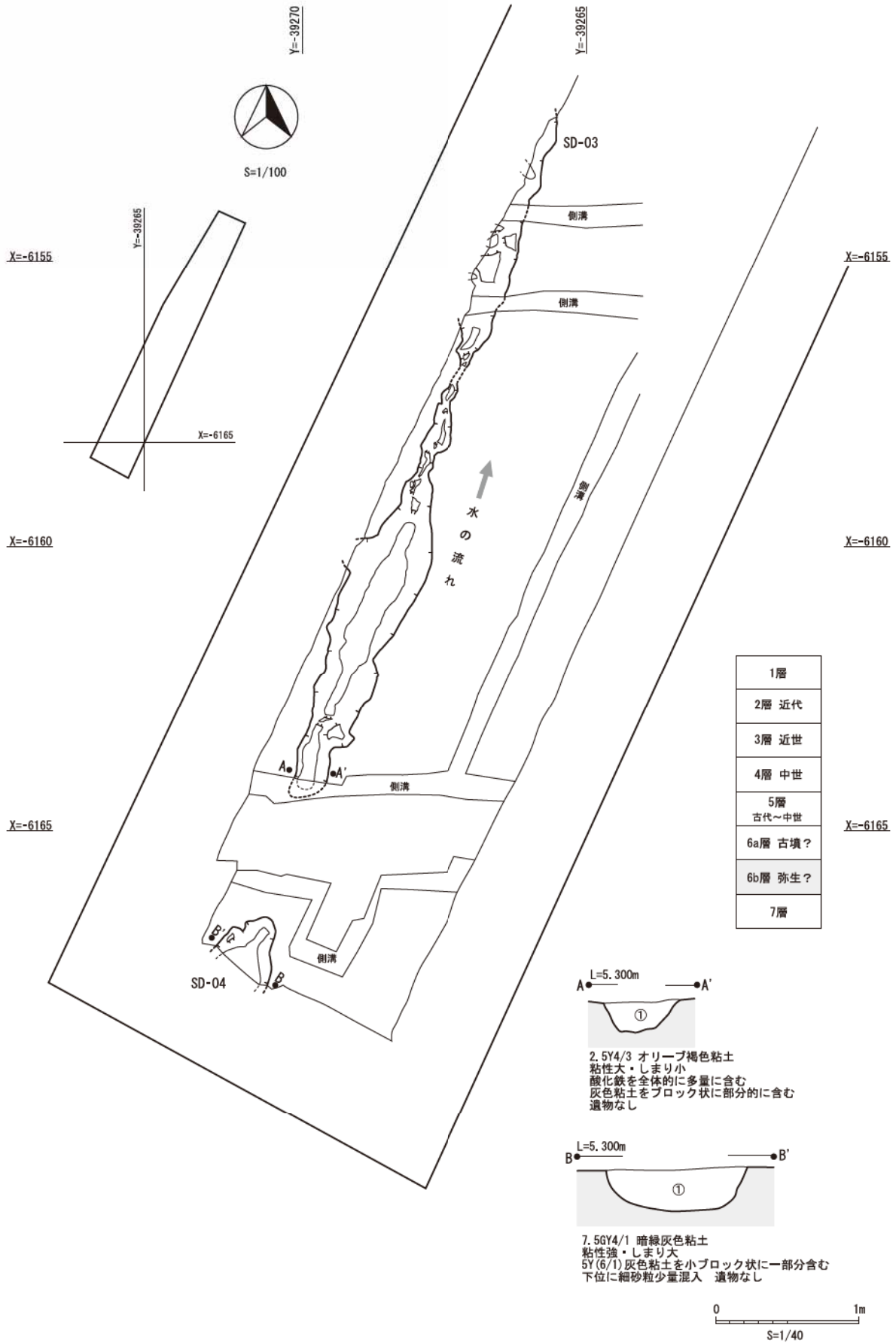
第 61 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1-1 区 足跡グルーピング図



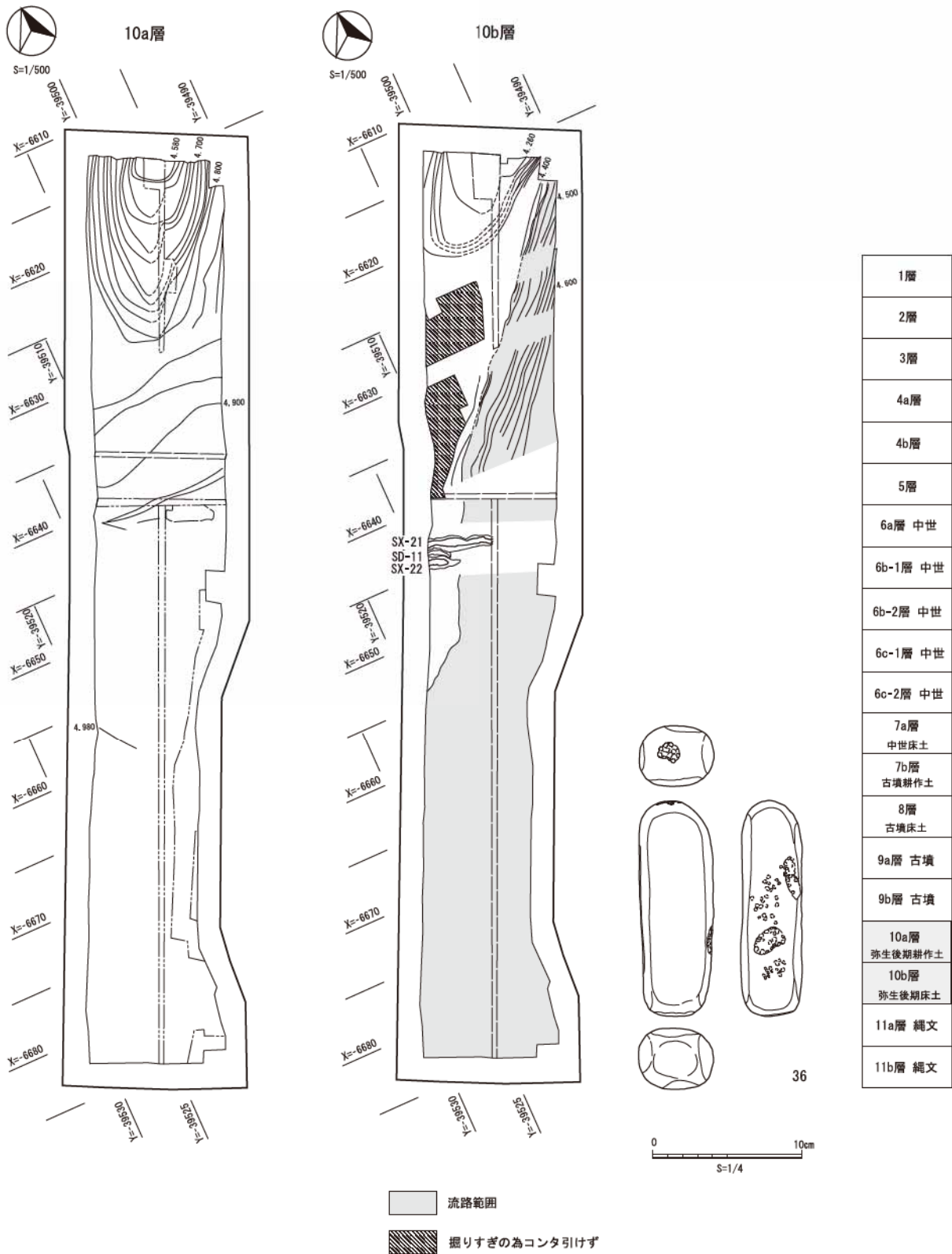
第 62 図 兩迫間日渡遺跡 05-I-2 区 10b 層 SX-01・02・SA-01 実測図及び出土遺物実測図



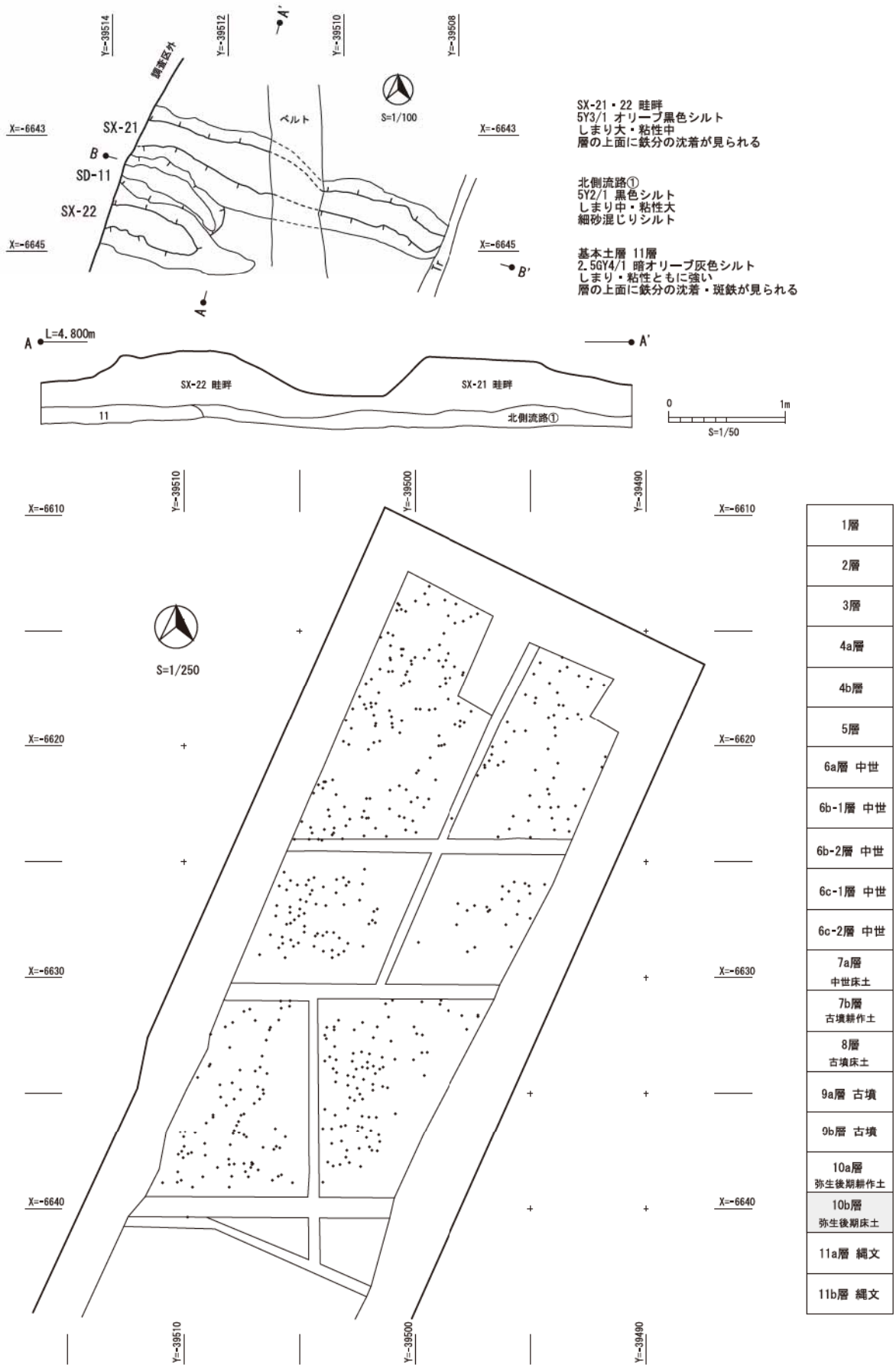
第 63 図 玉名平野条里跡 05-III-1 区 8 層遺構配置図及び SD-01・02 実測図



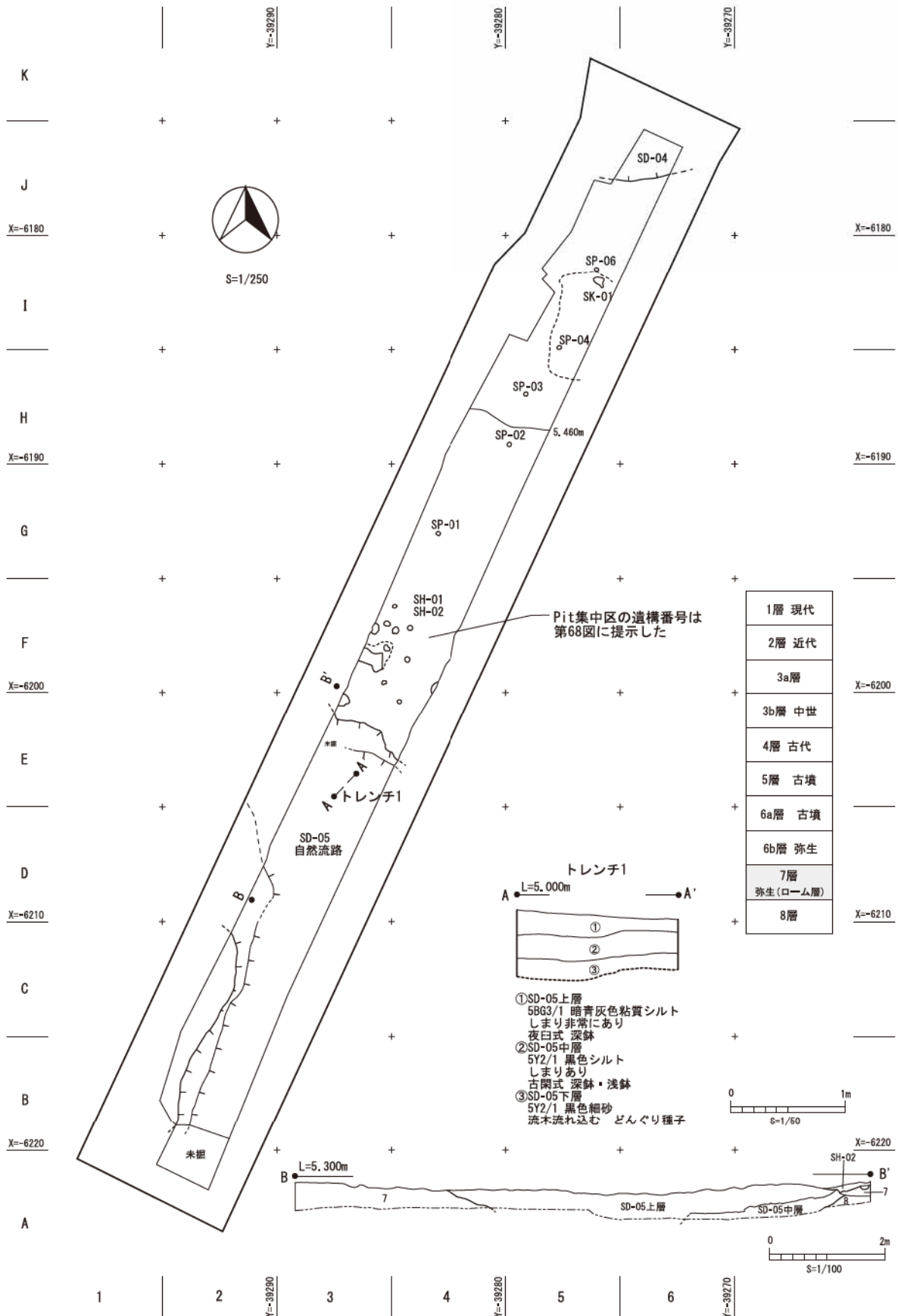
第 64 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 6b 層遺構配置図及び SD-03・04 実測図



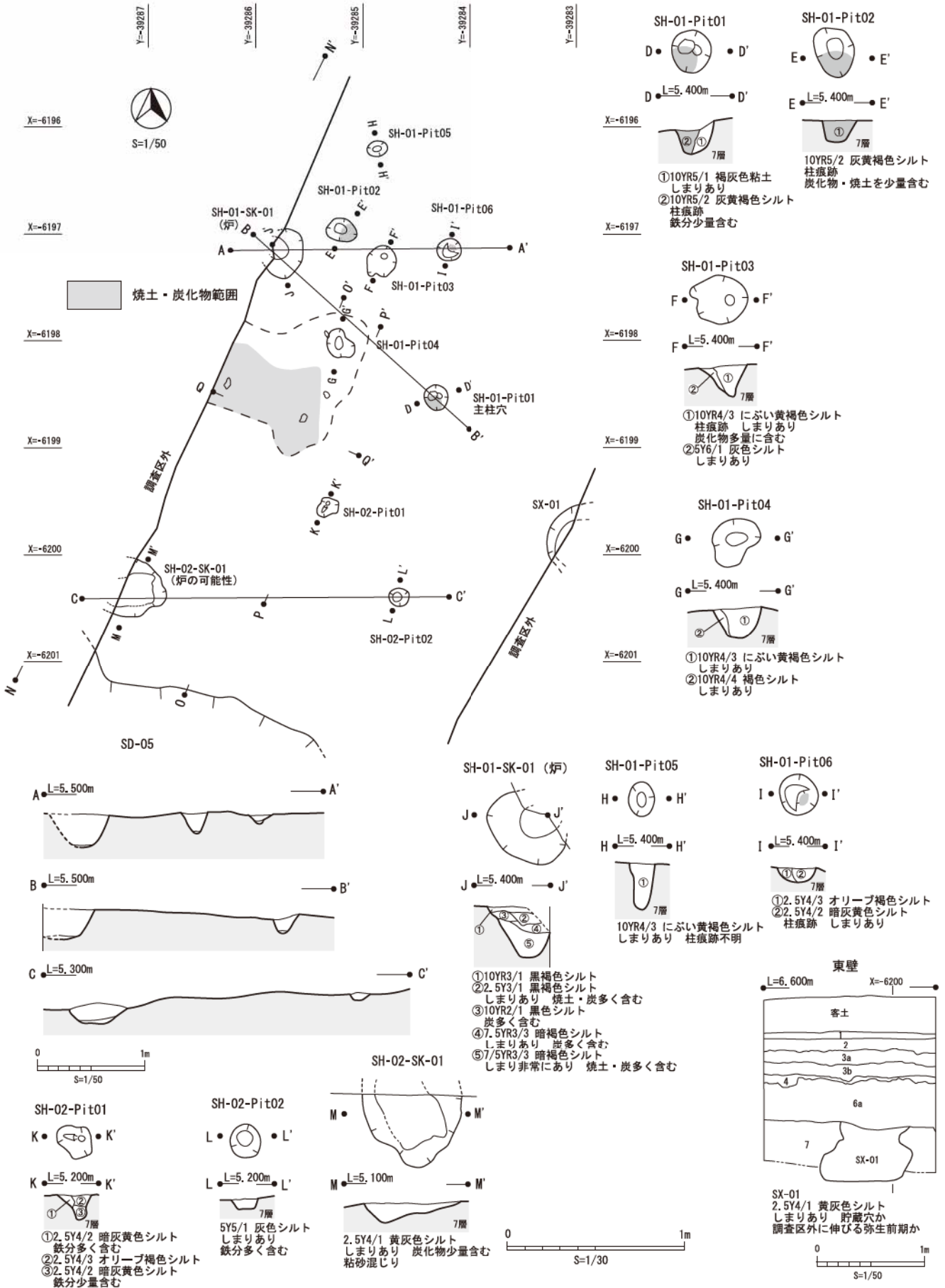
第 65 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 10a層・10b層コンタ図及び出土遺物実測図



第 66 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区
10b 層 SD-11・SX-21・22 実測図及び投石出土位置実測図

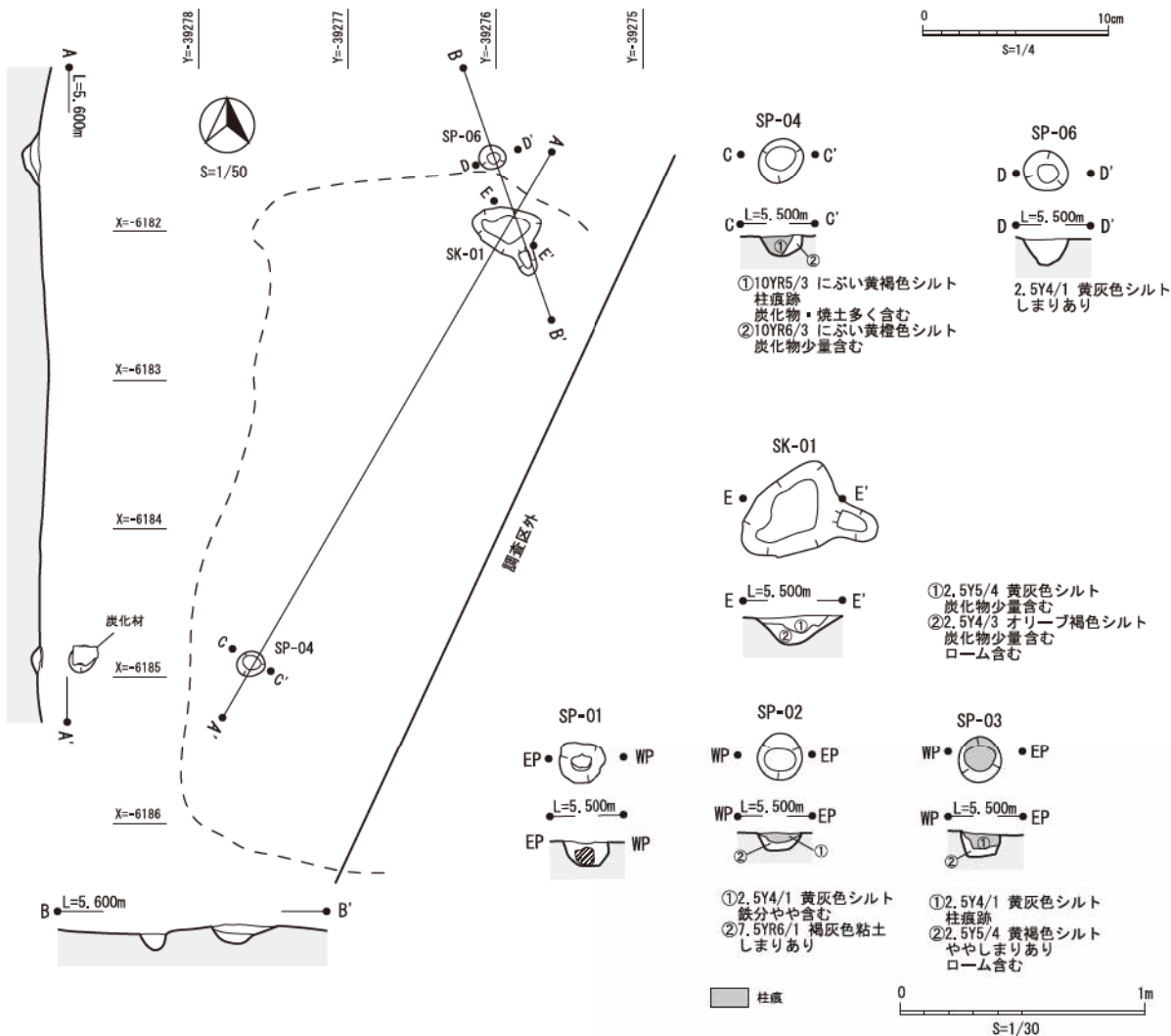
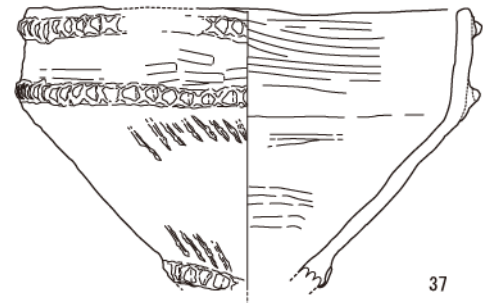
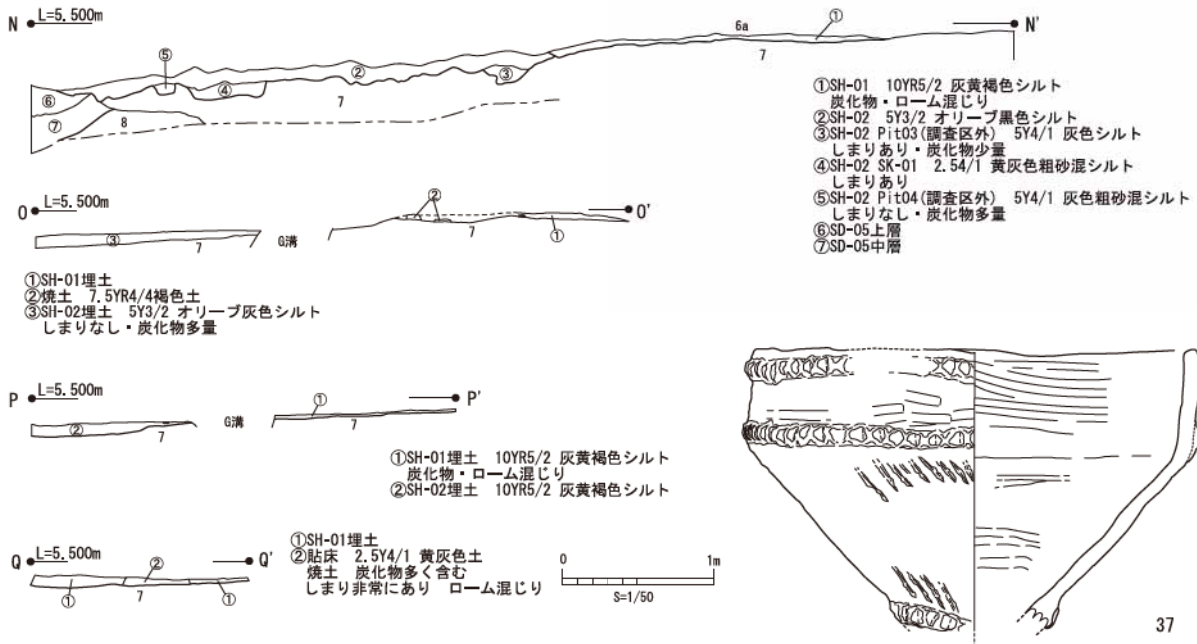


第 67 図 玉名平野条里跡 06-II 区 7 層直上遺構配置図及び SD-05 実測図

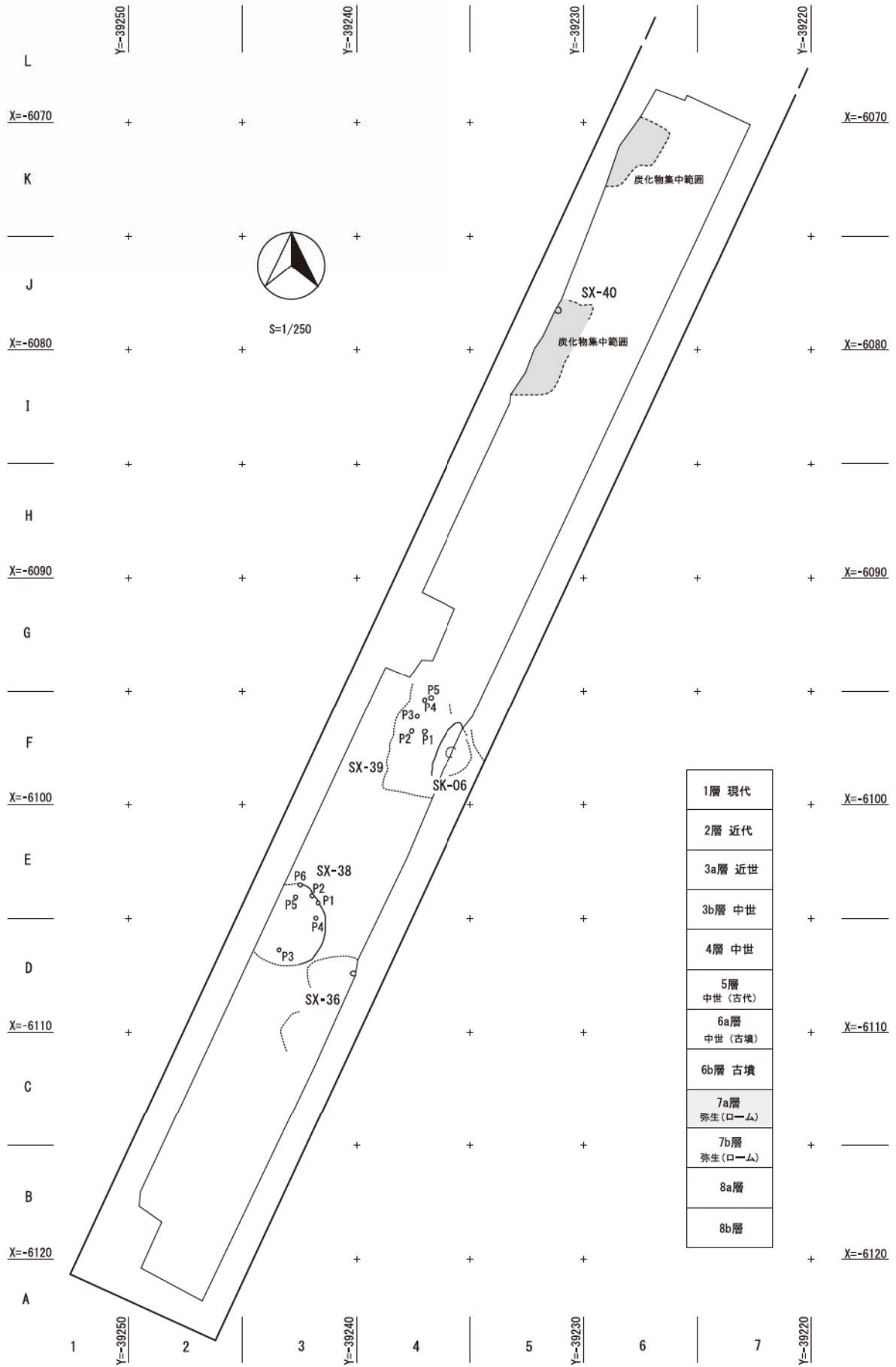


第 68 図 玉名平野条里跡 06-II区 SH-01・02・SX-01 実測図

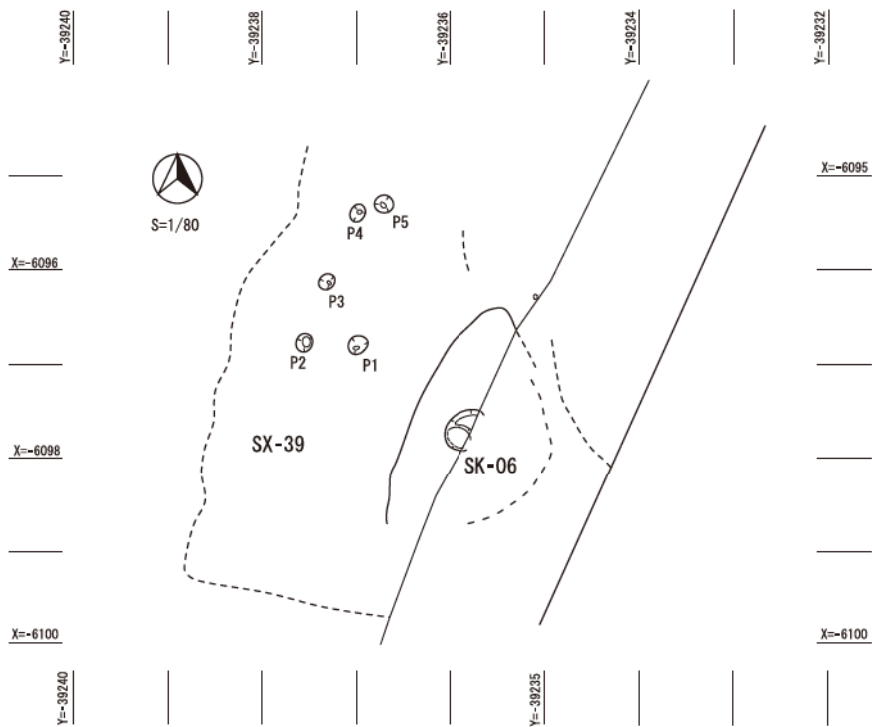
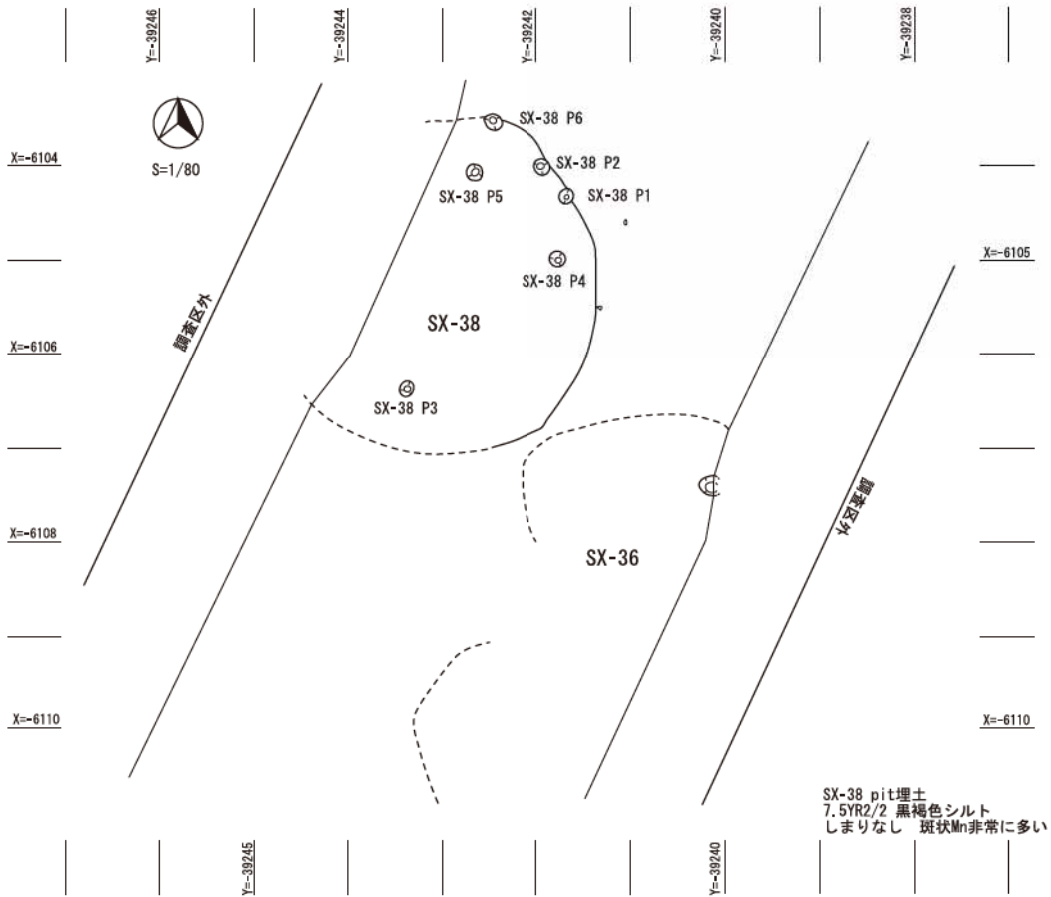
N-N' ~ Q-Q' SH-01・SH-02の土層断面図



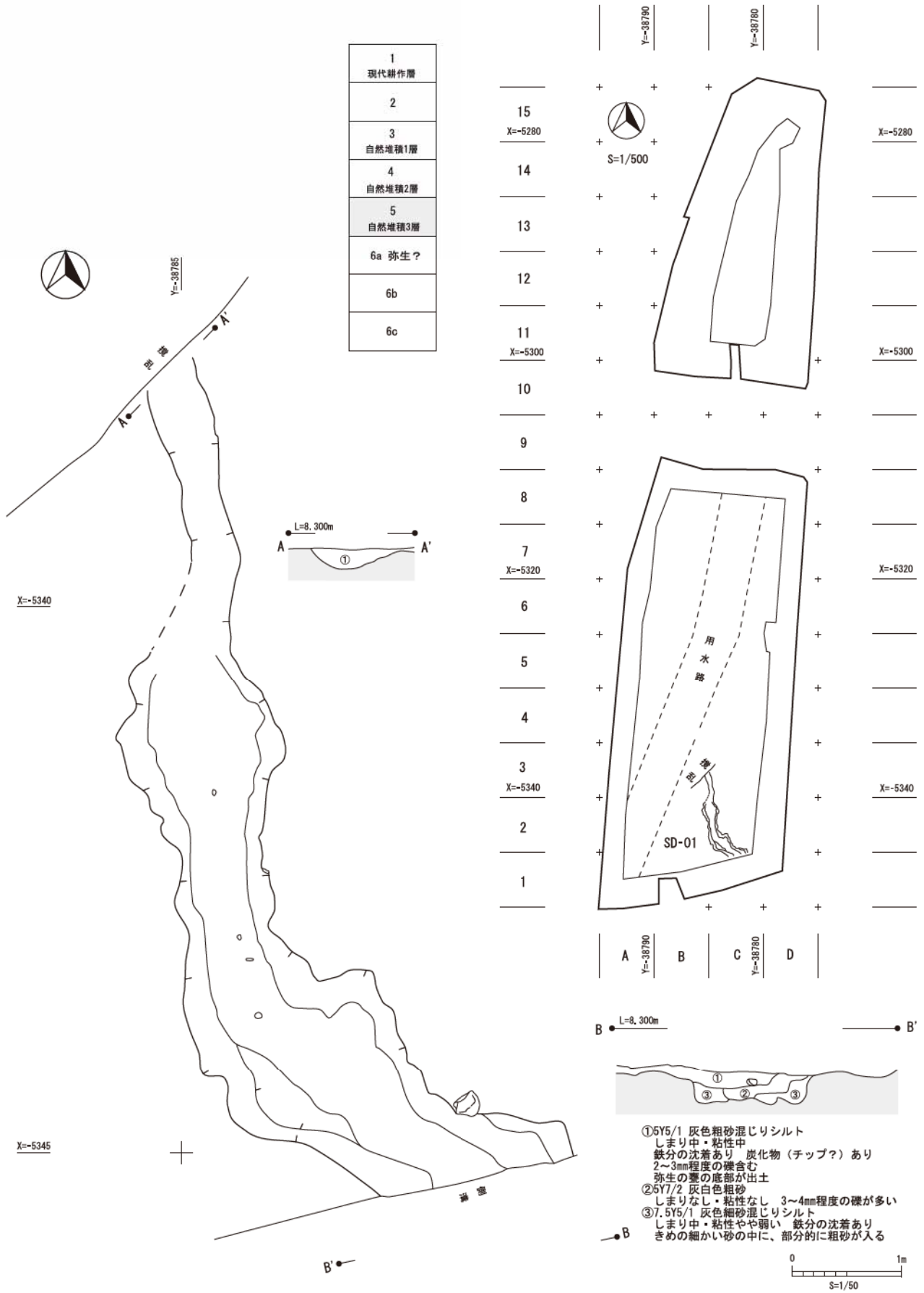
第 69 図 玉名平野条里跡 06-II 区
 SH-01・02・SP-01~04・06・SK-01 実測図及び出土遺物実測図



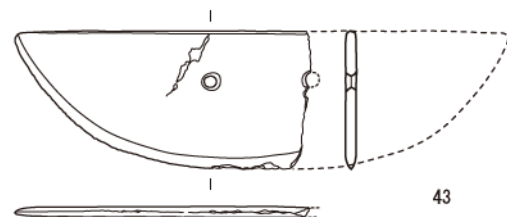
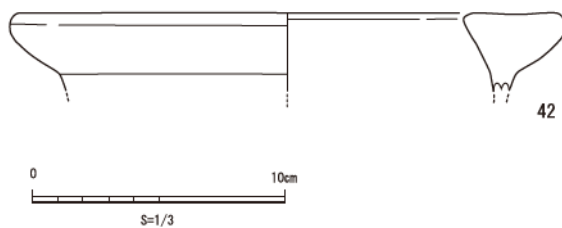
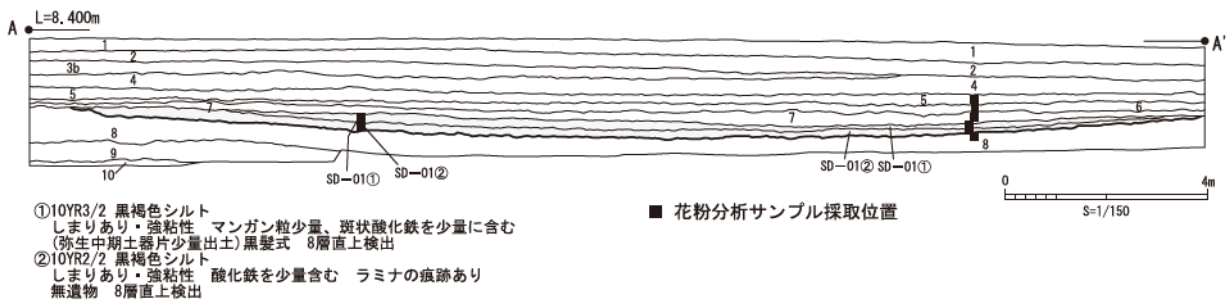
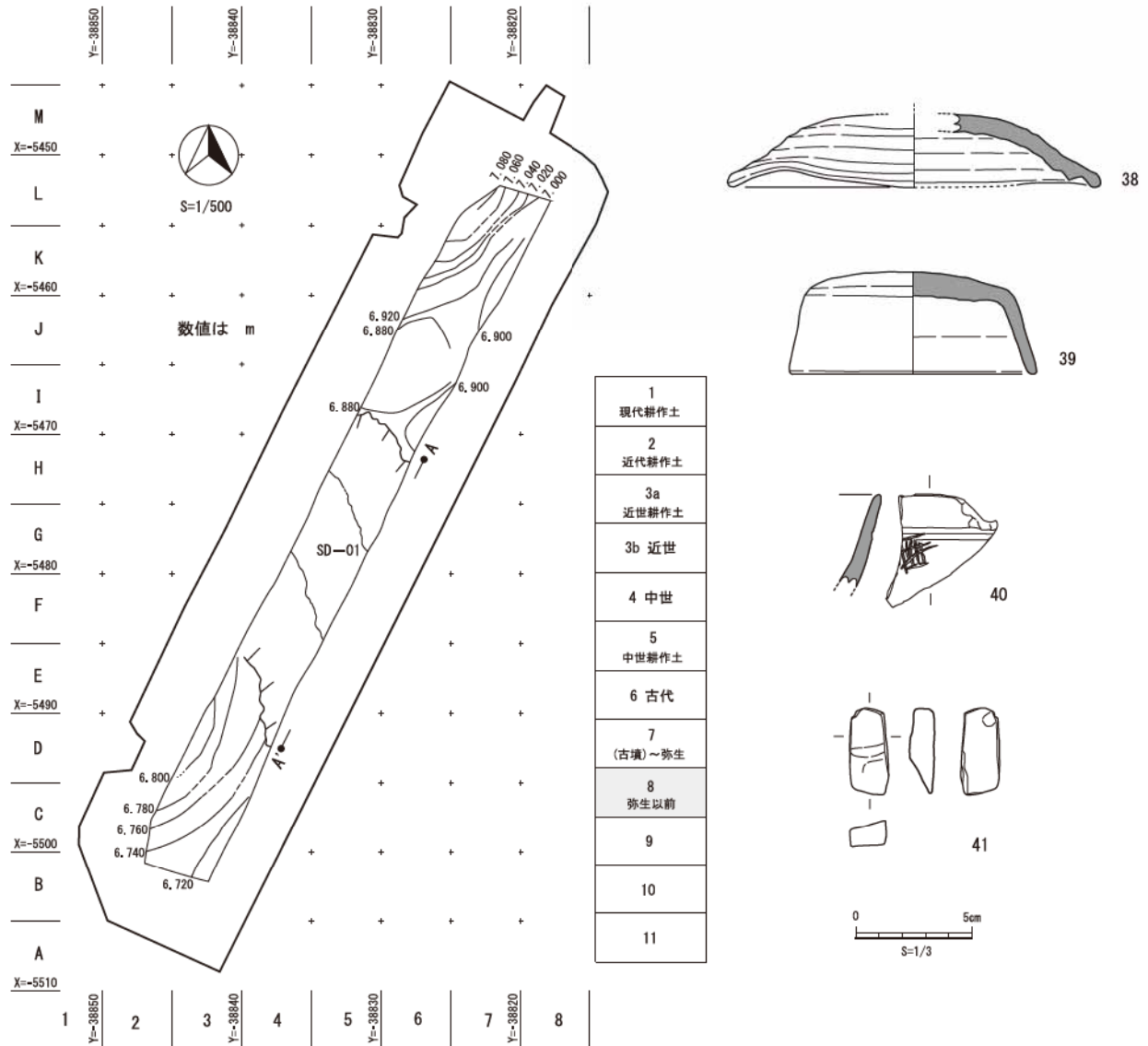
第 70 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 7a層遺構配図



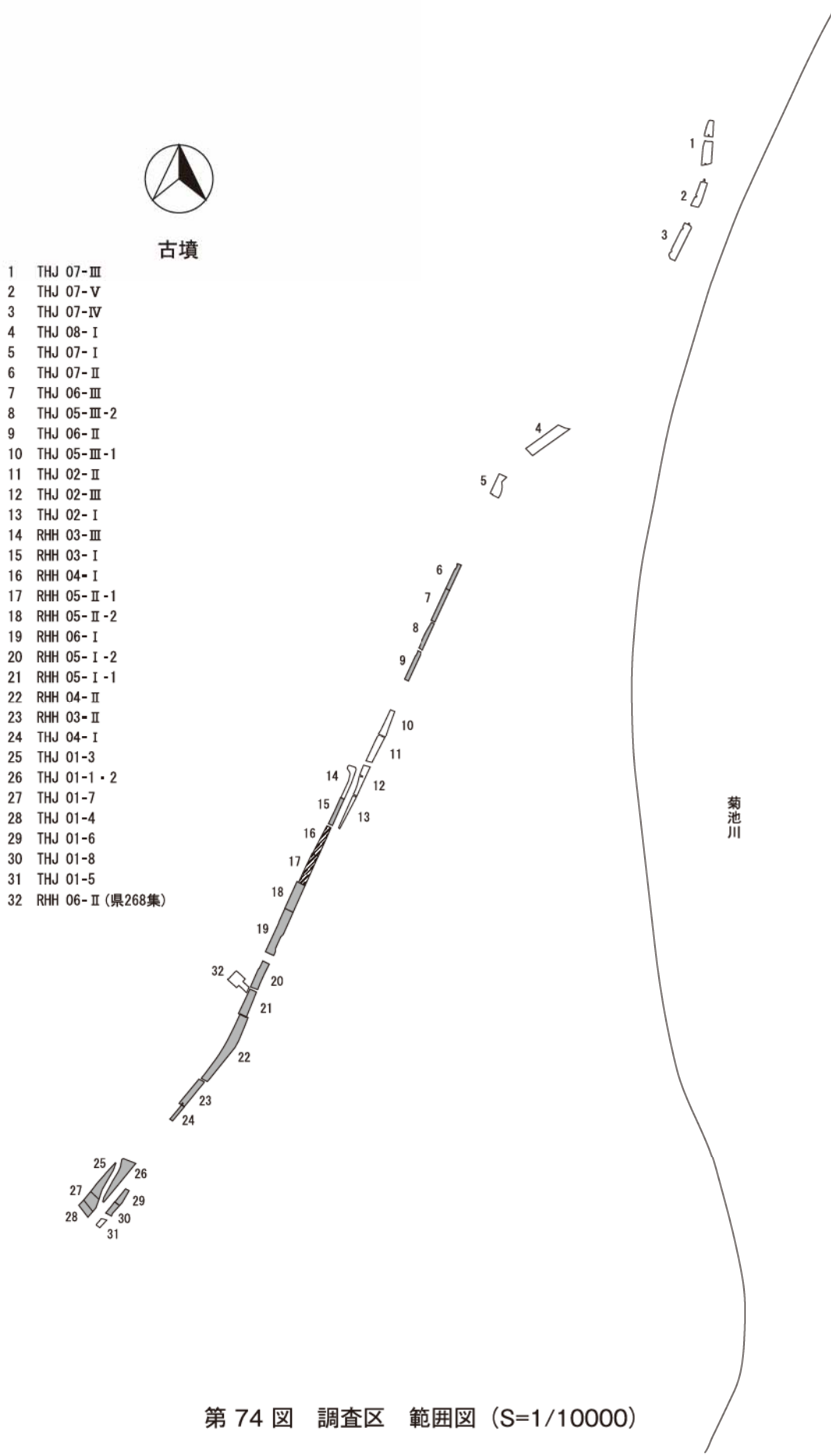
第 71 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 SX-36・38・39・SK-06 実測図



第 72 図 玉名平野条里跡 07-Ⅲ区 遺構配置図及び SD-01 実測図



第 73 図 玉名平野条里跡 07-IV区
8 層コンタ図・SD-01 土層断面図及び出土遺物実測図

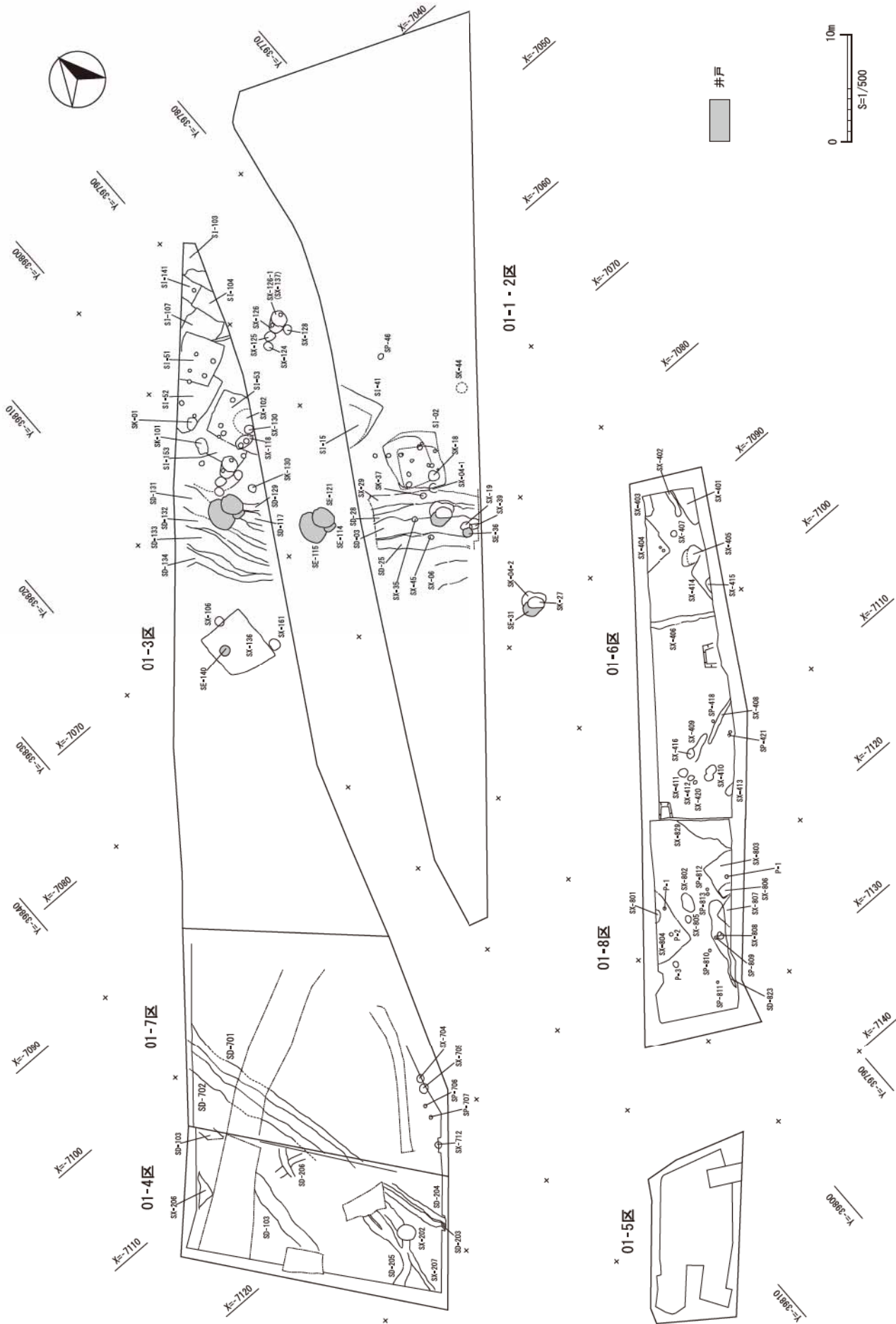


第 74 図 調査区 範囲図 (S=1/10000)

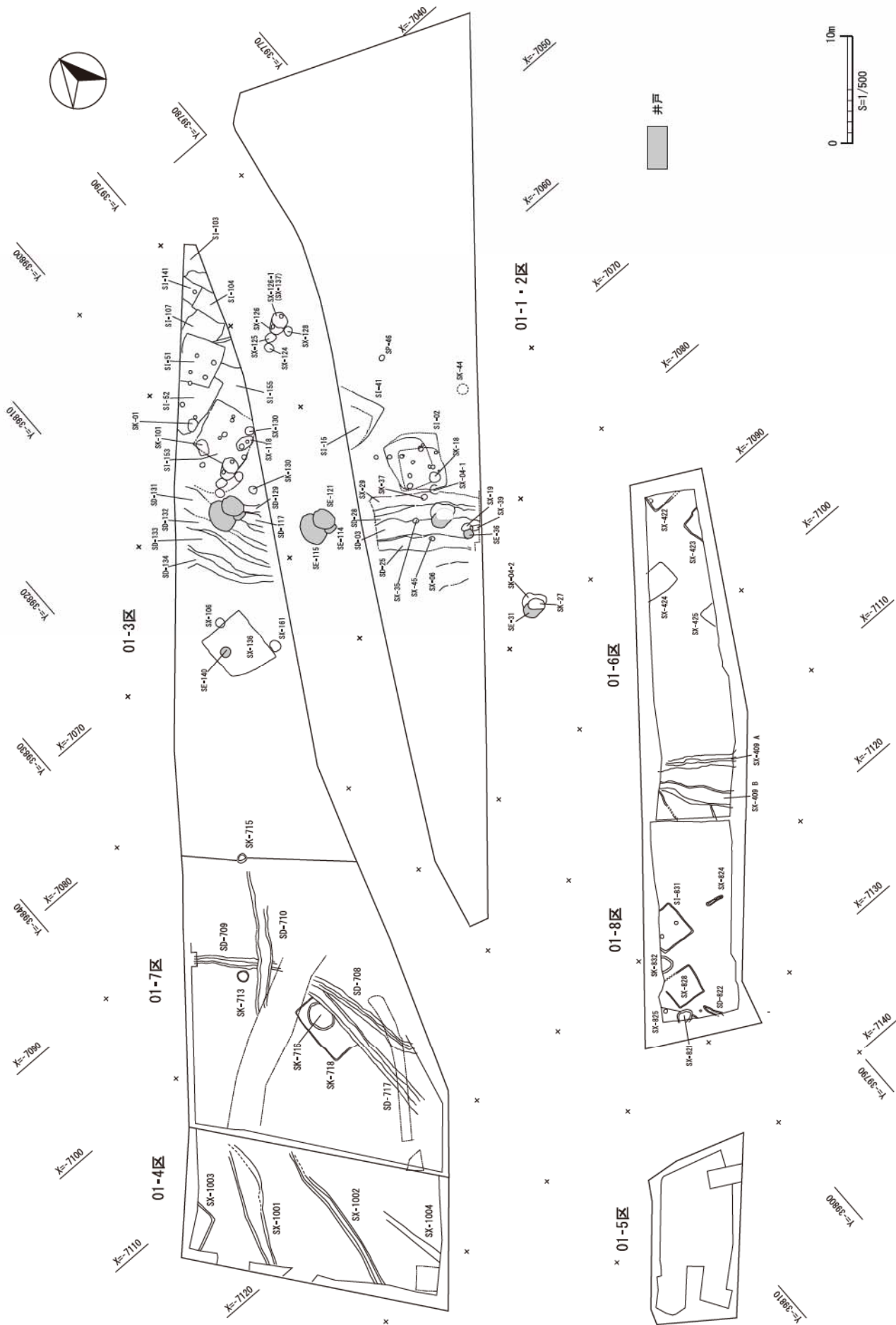
古墳層の最上面の土層レベルを、調査区の南から北の順に並べている



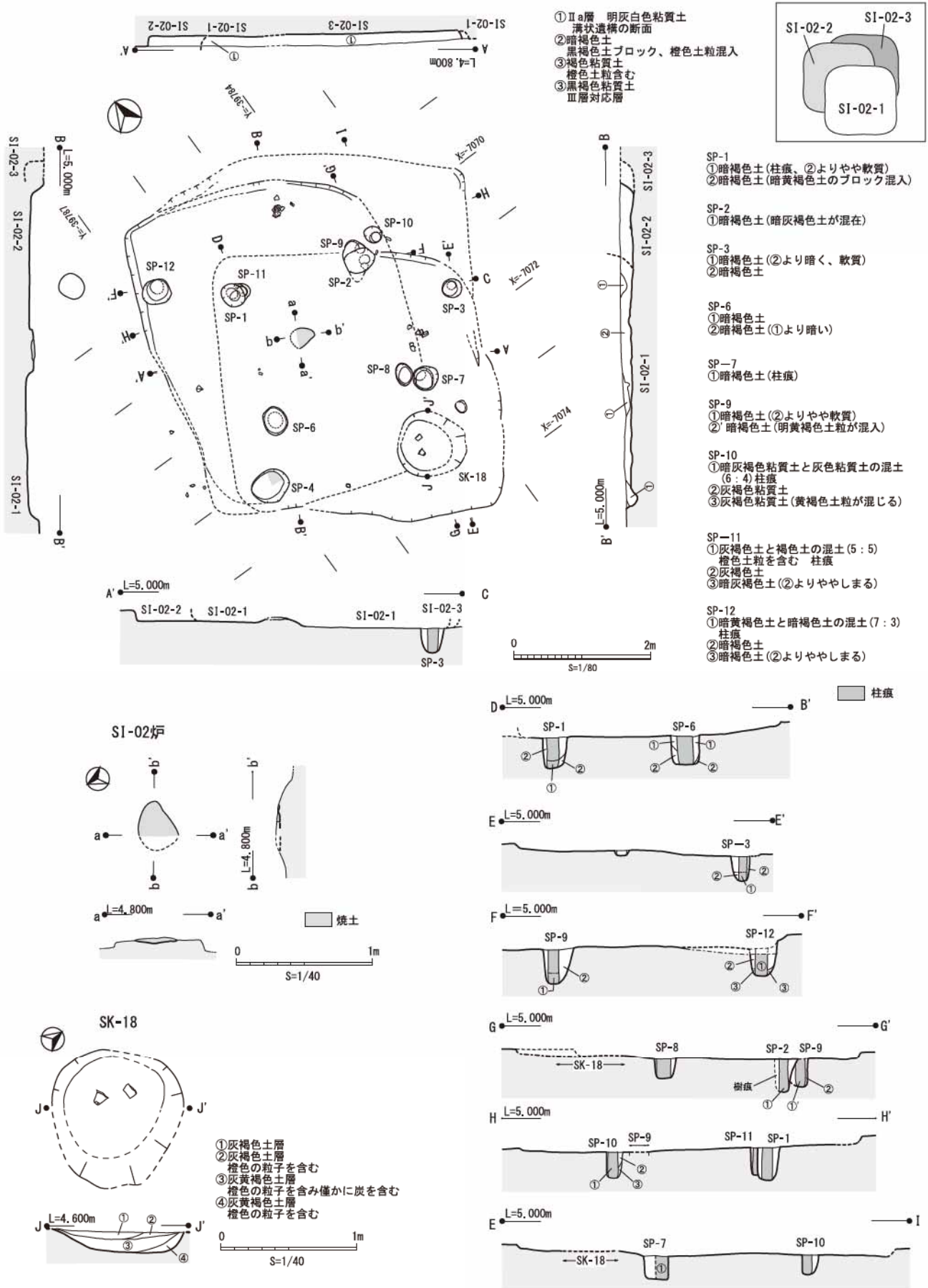
第 75 図 玉名平野条里跡・両迫間日波遺跡 古墳層



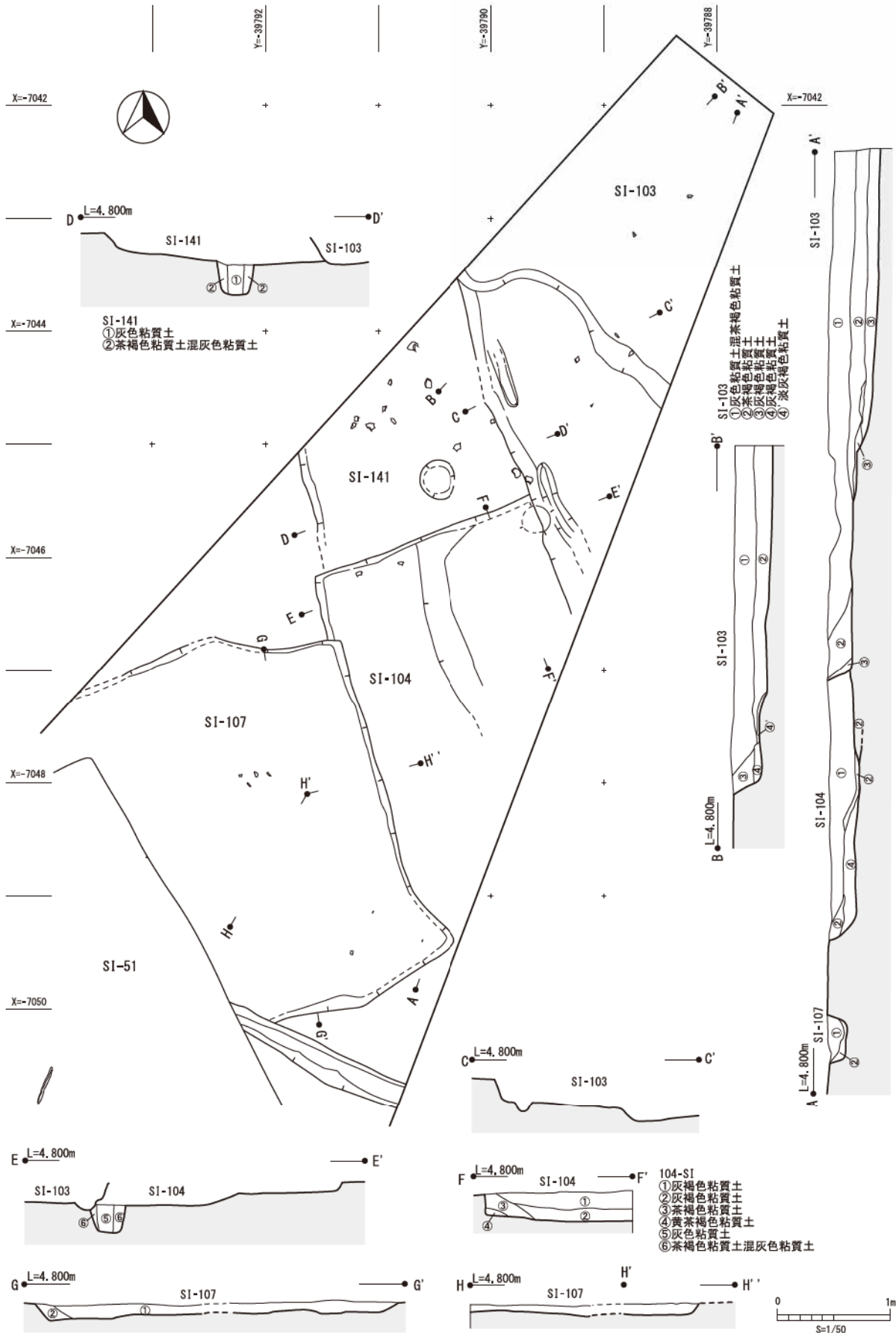
第76図 玉名平野条里跡01-1～8区 遺構配置図(古墳上面)



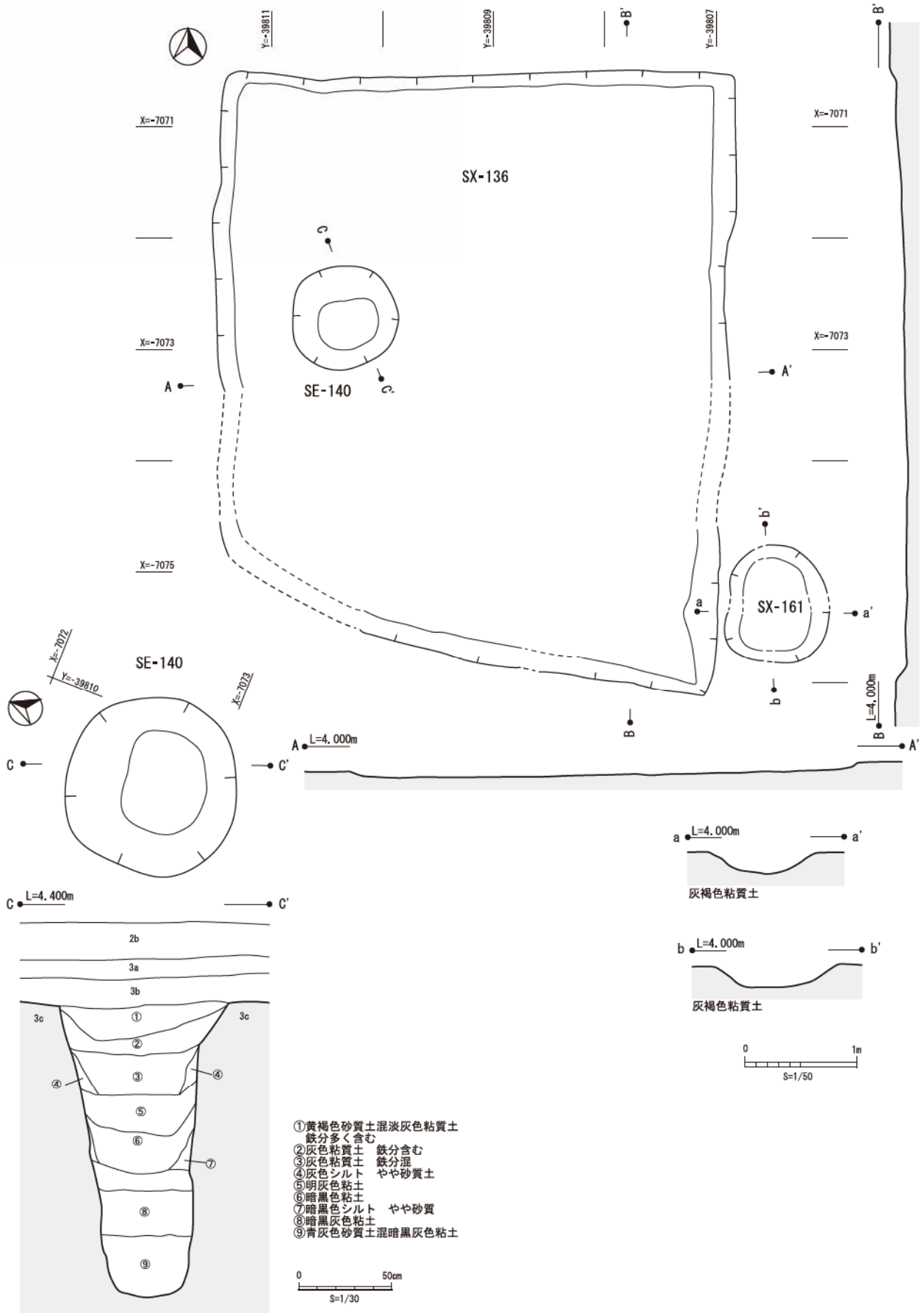
第77図 玉名平野条里跡01-1～8区 遺構配置図(古墳下面)



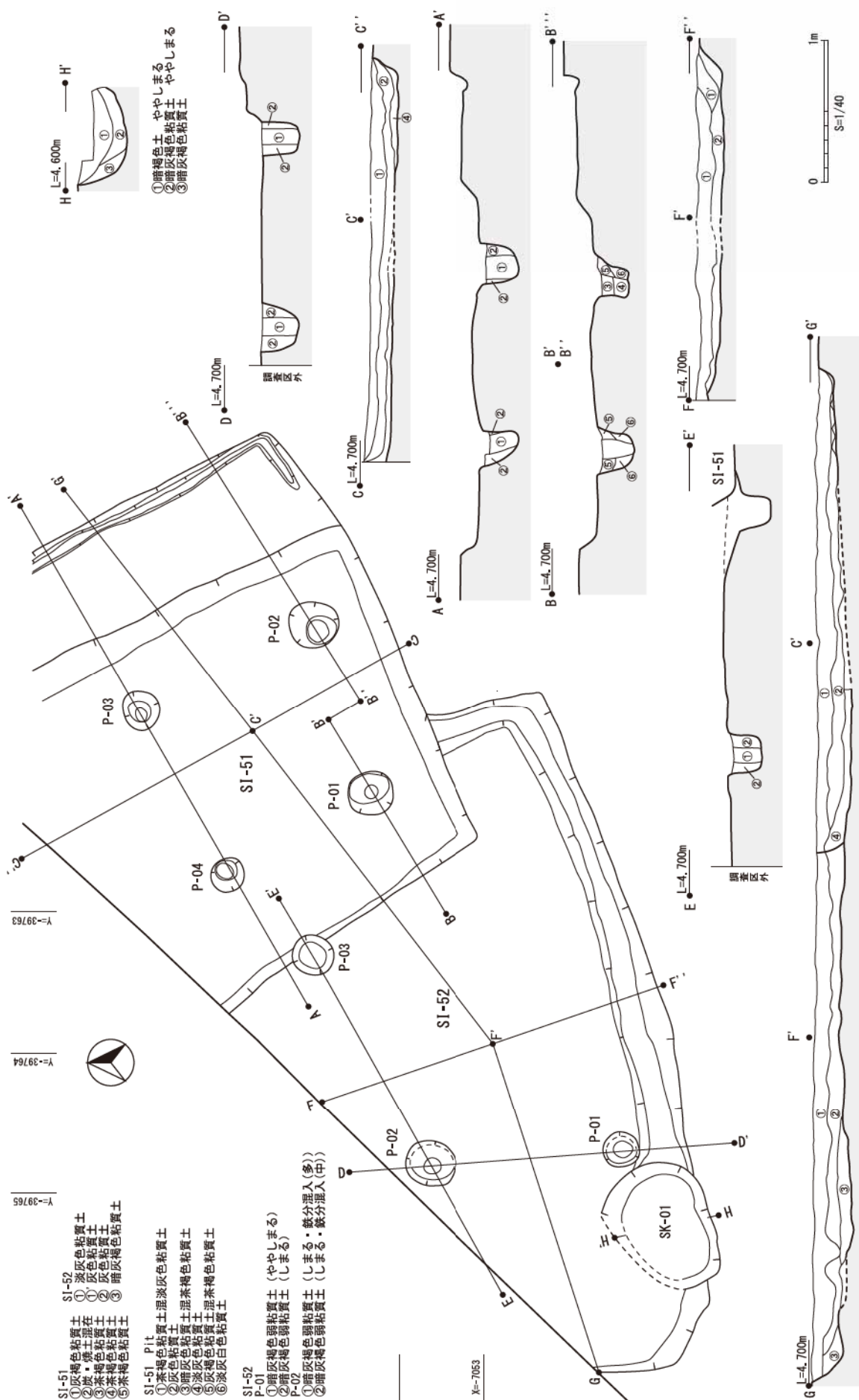
第 78 図 玉名平野条里跡 01-2 区 SI-02・SK-18 実測図



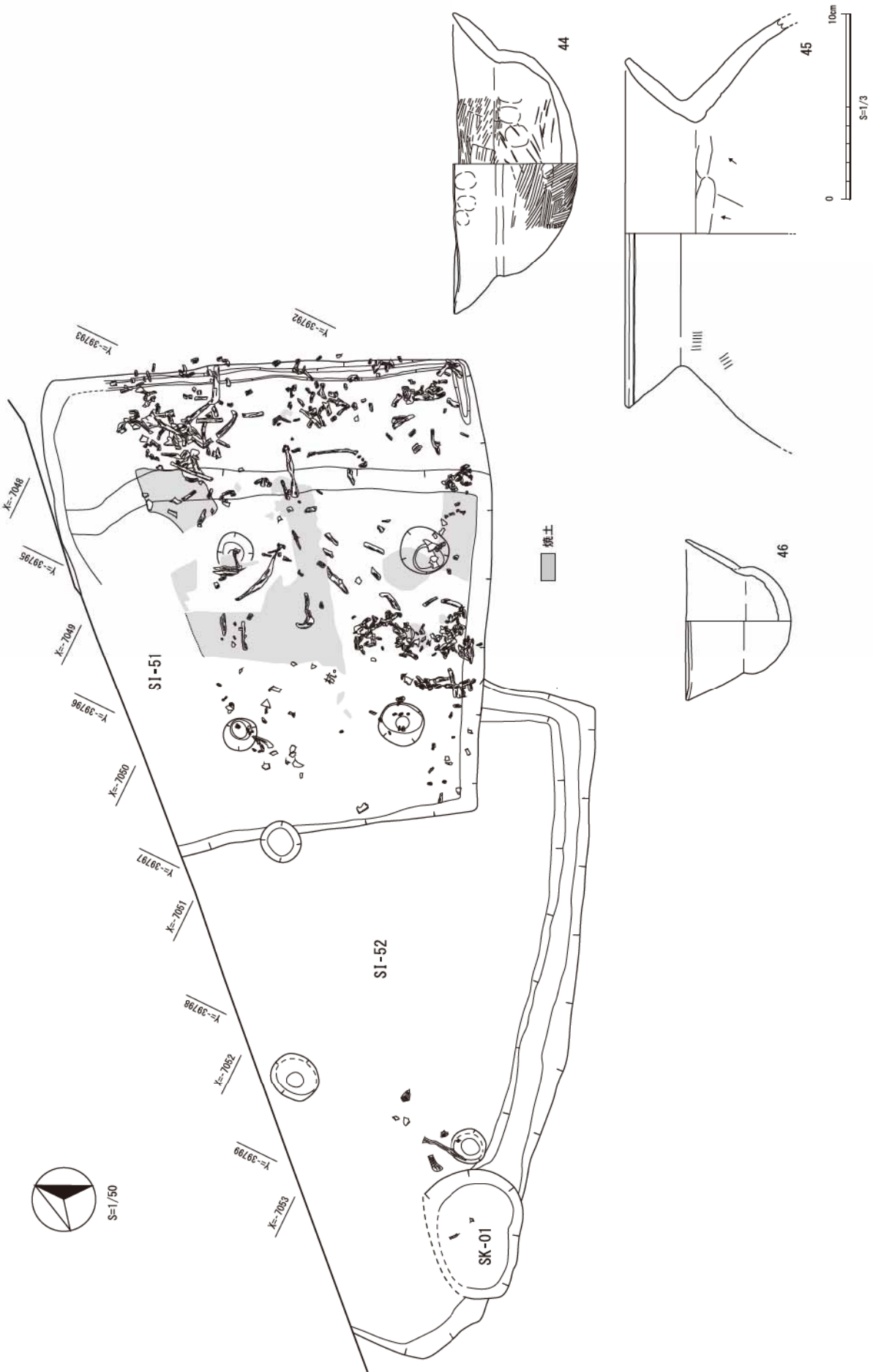
第 79 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-103・104・107・141 実測図



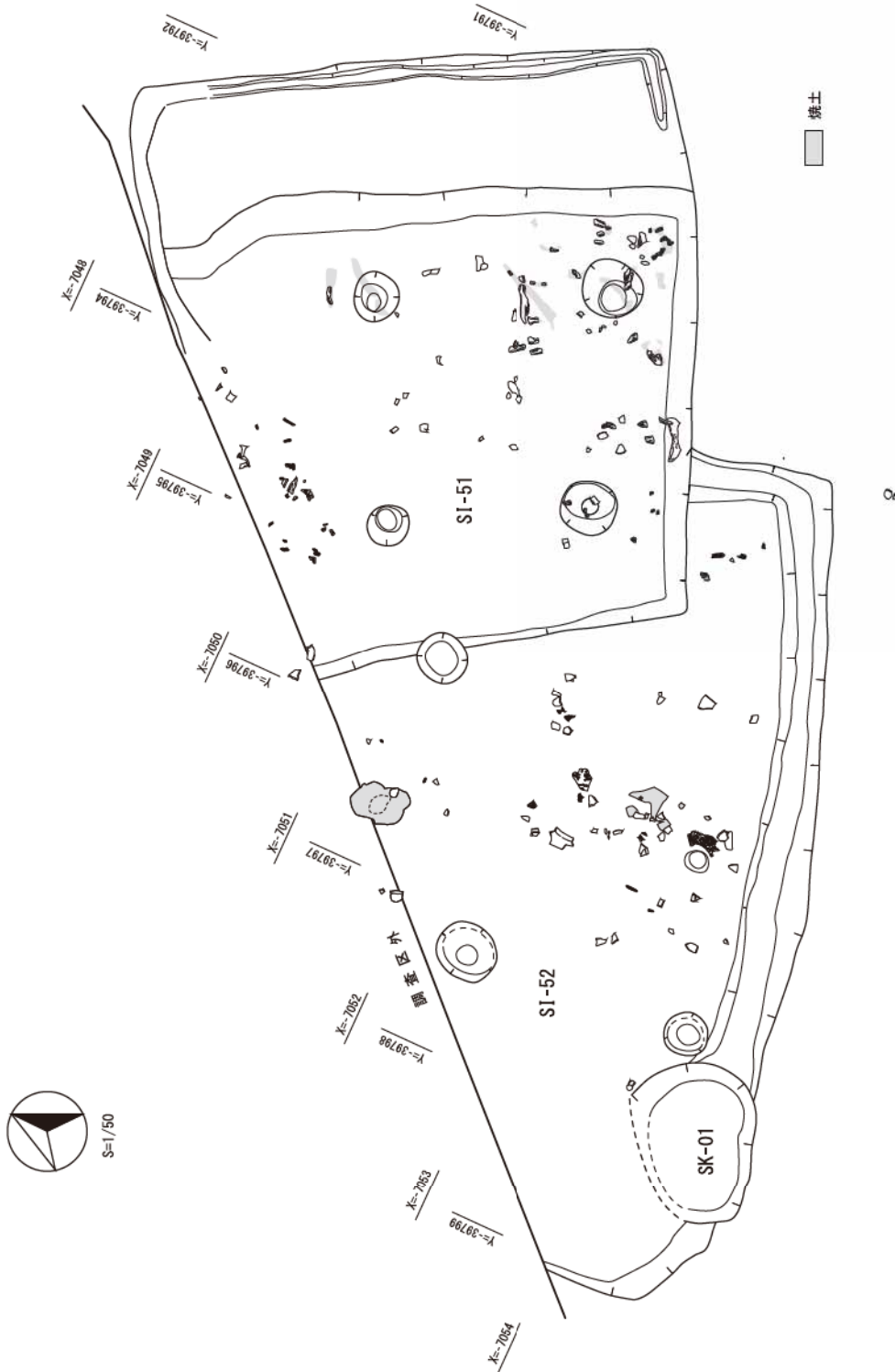
第 80 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SX-136・161・SE-140 実測図



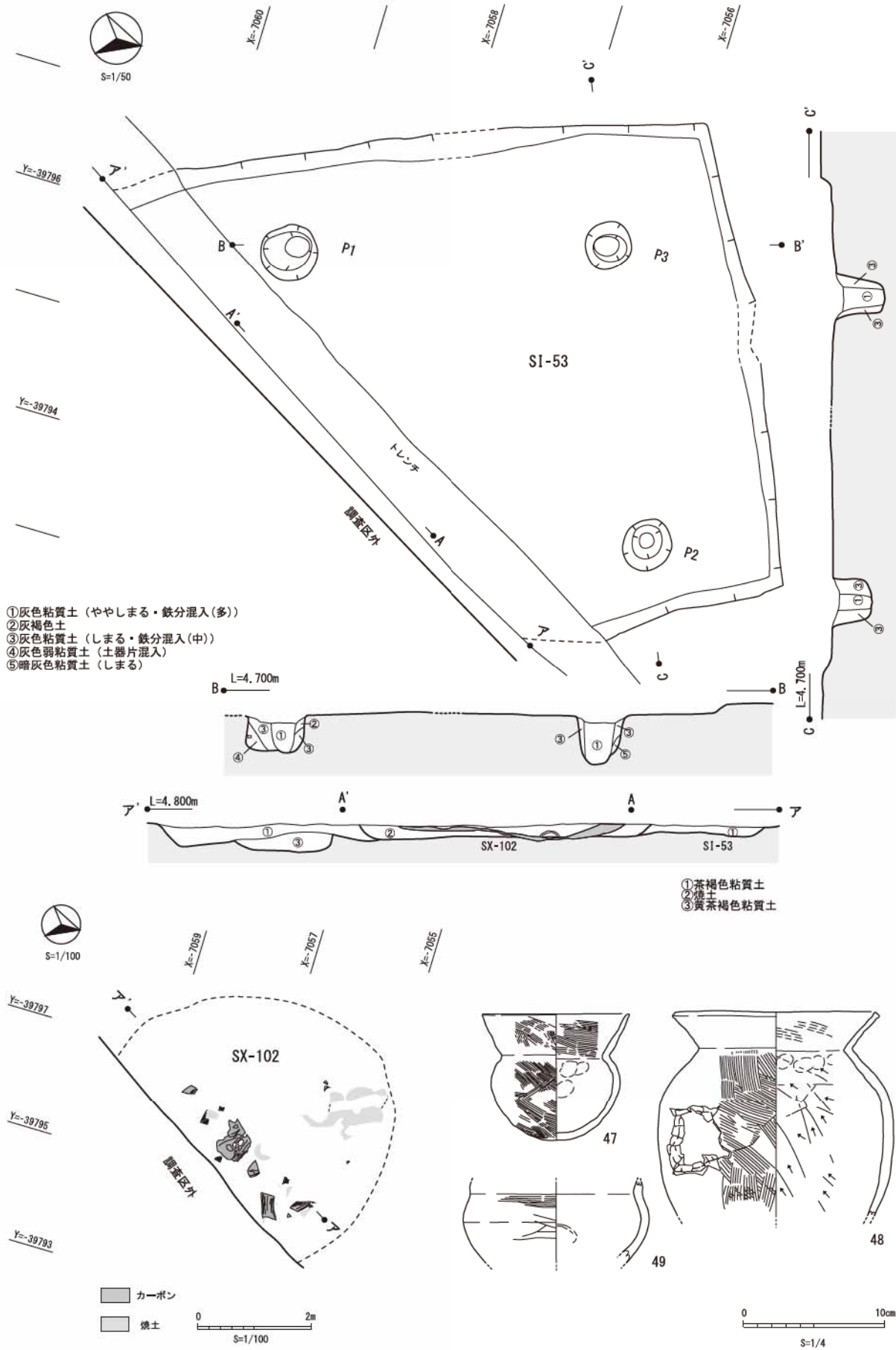
第 81 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 実測図



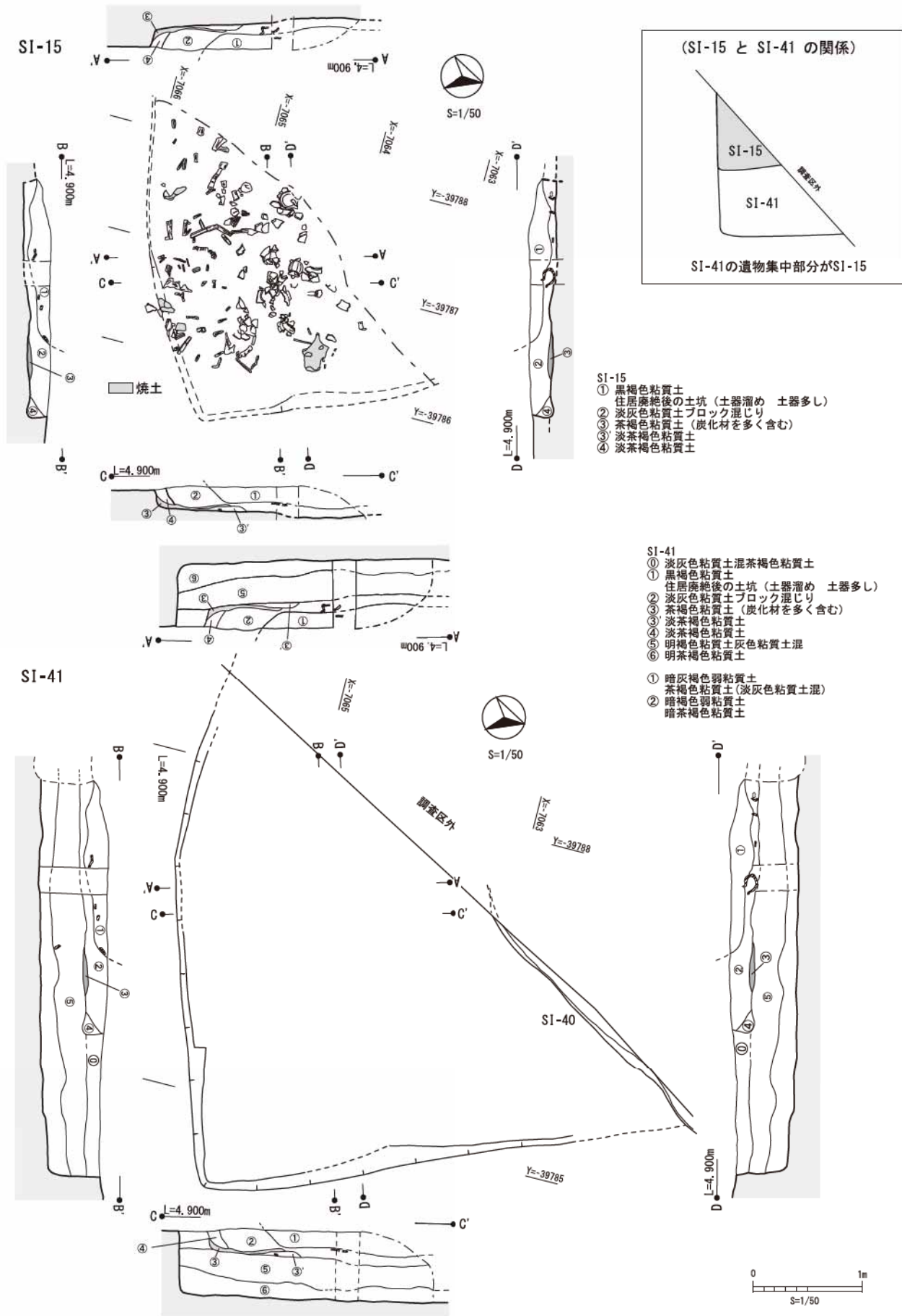
第 82 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 上層遺物出土状況及び出土遺物実測図



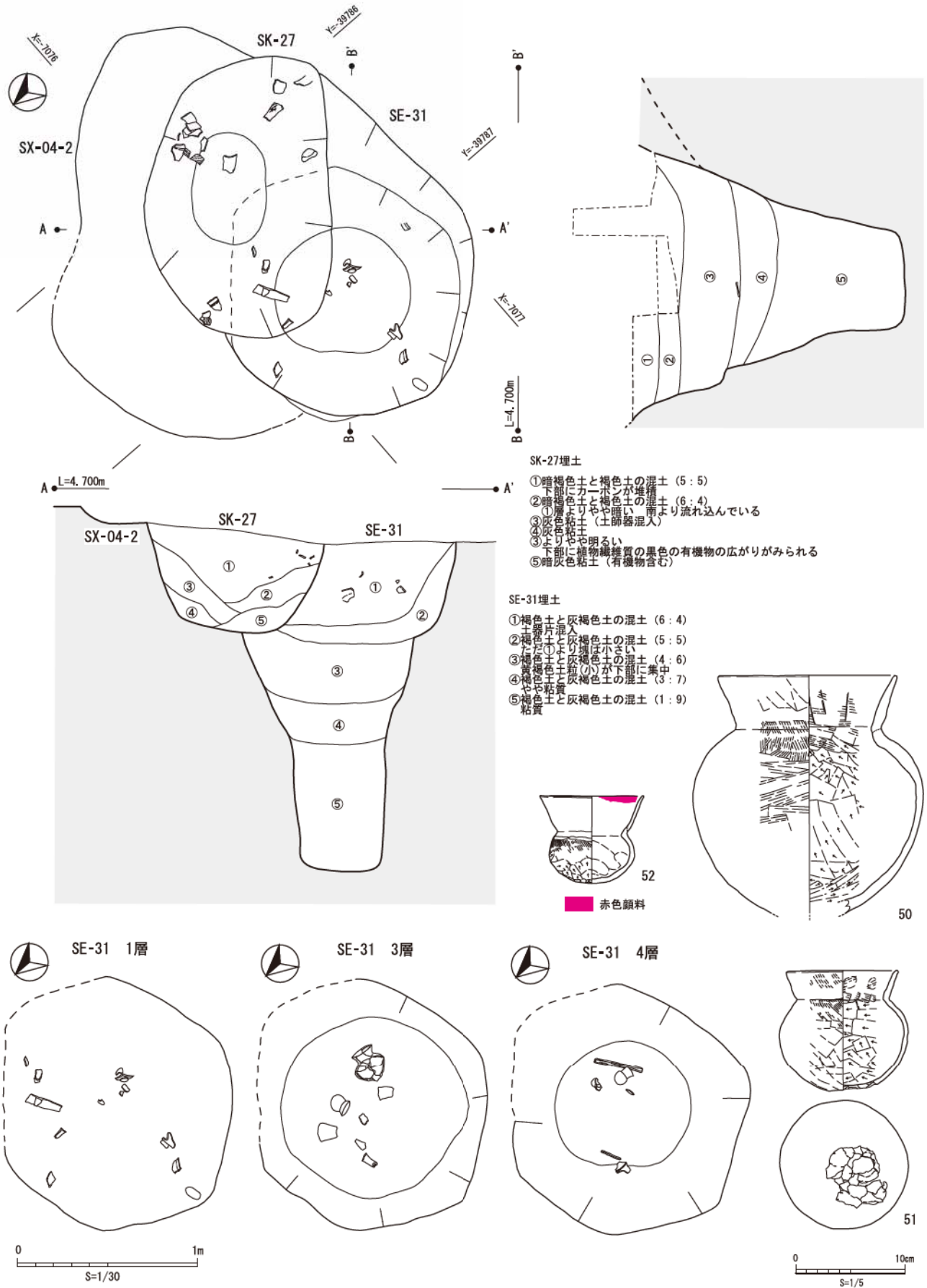
第 83 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-51・52・SK-01 下層遺物出土状況実測図



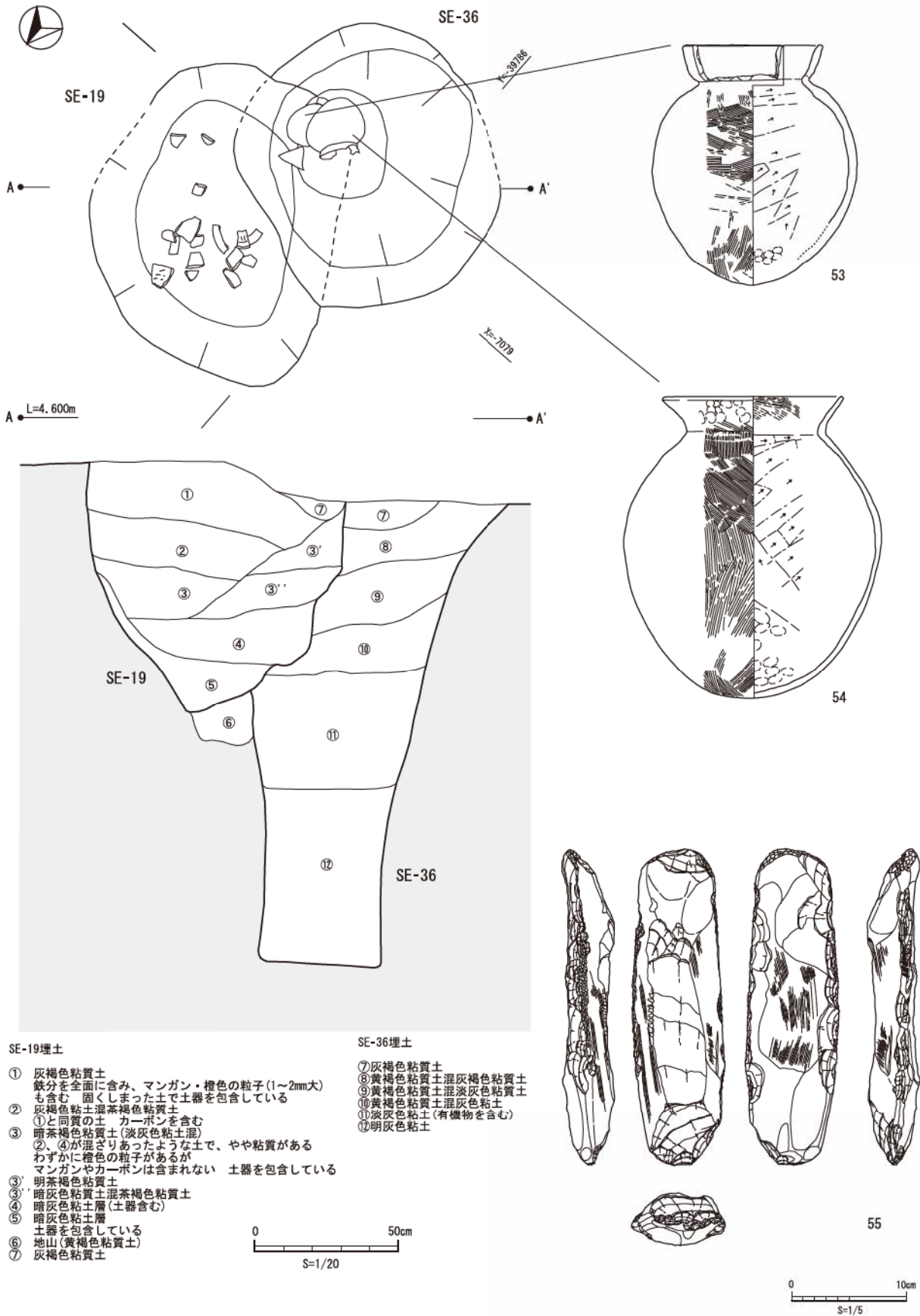
第 84 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-53・SX-102 実測図及び出土遺物実測図



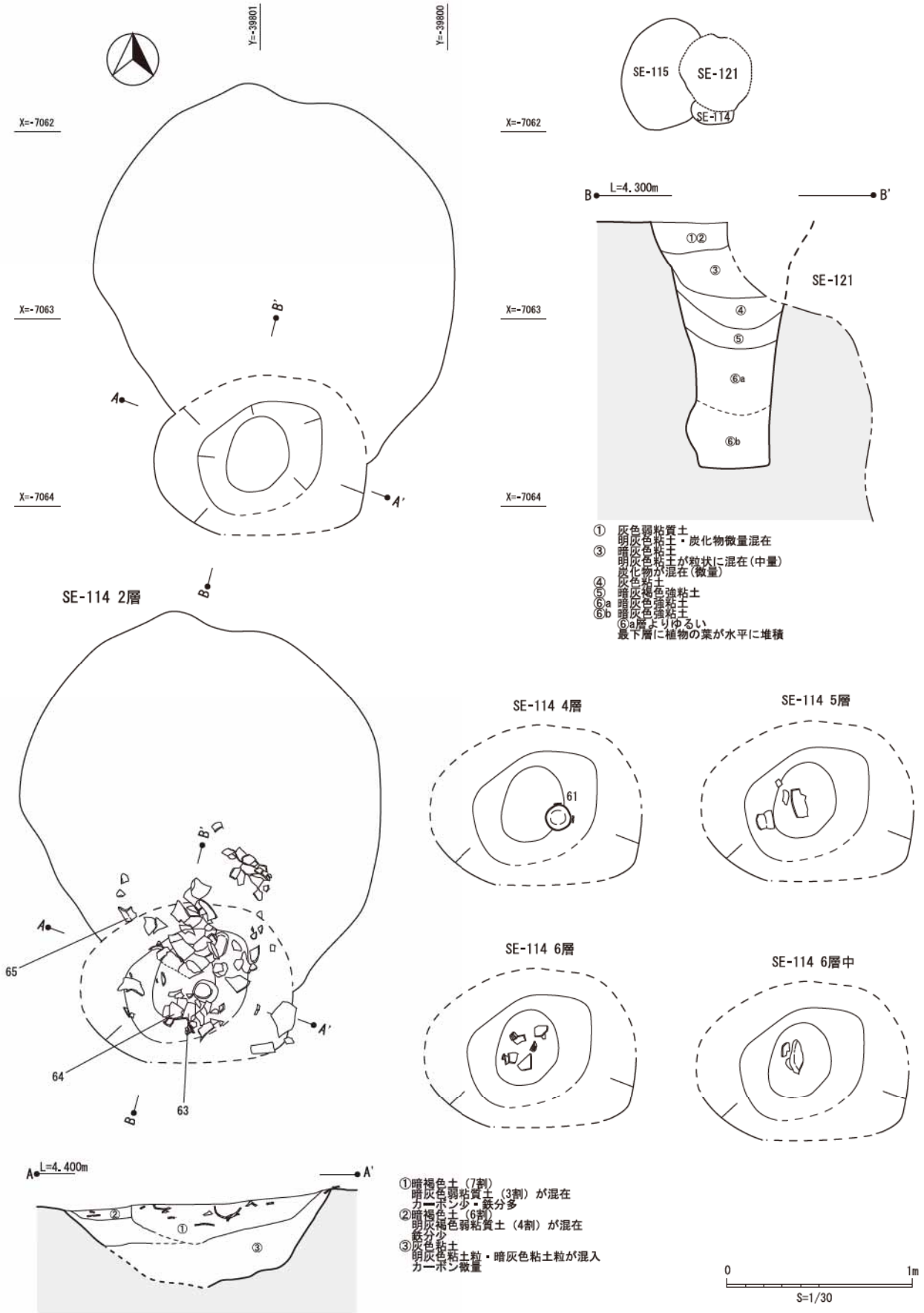
第 85 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SI-15・41 実測図



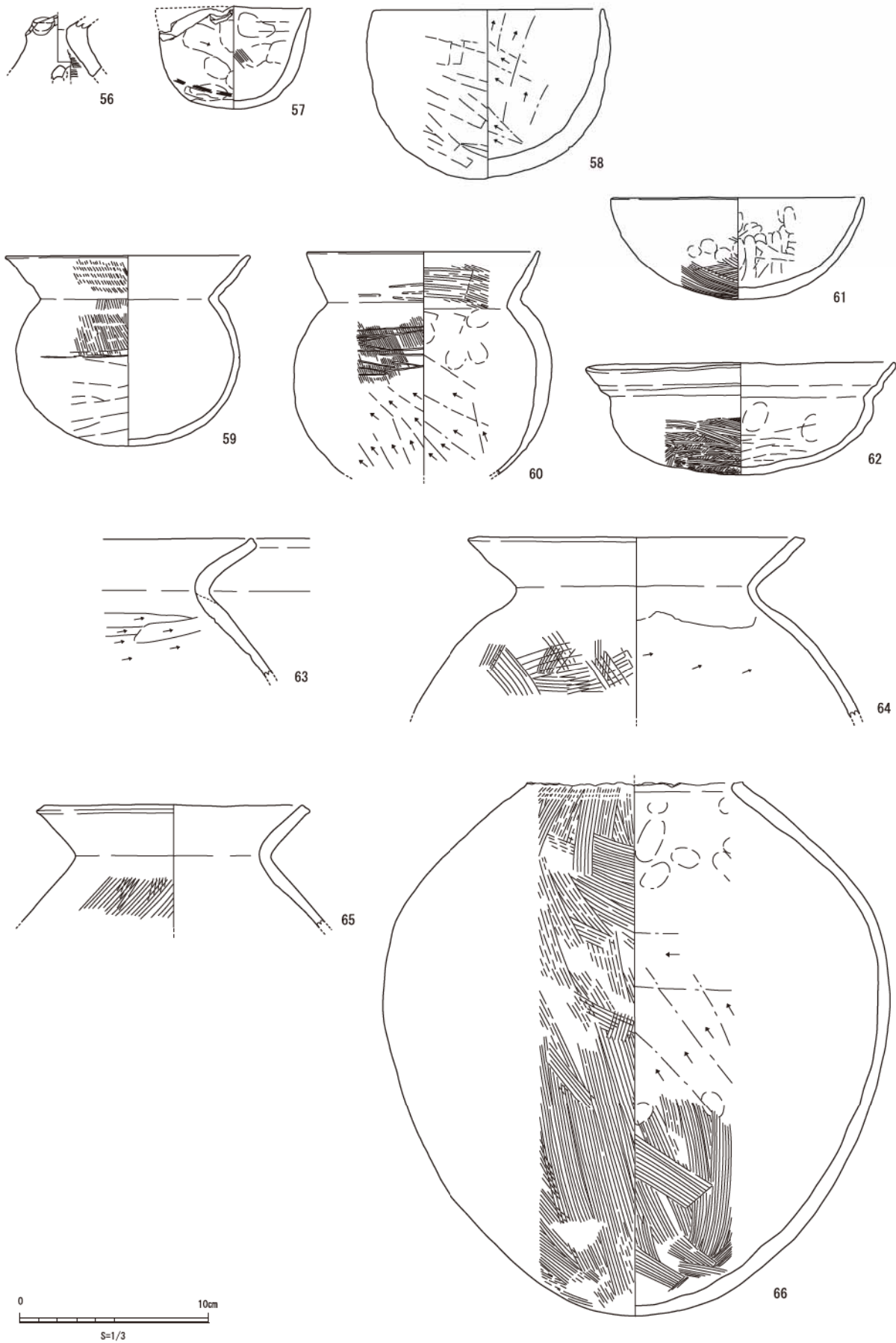
第 86 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区
SE-31・SK-27・SX-04-2 実測図及び出土遺物実測図



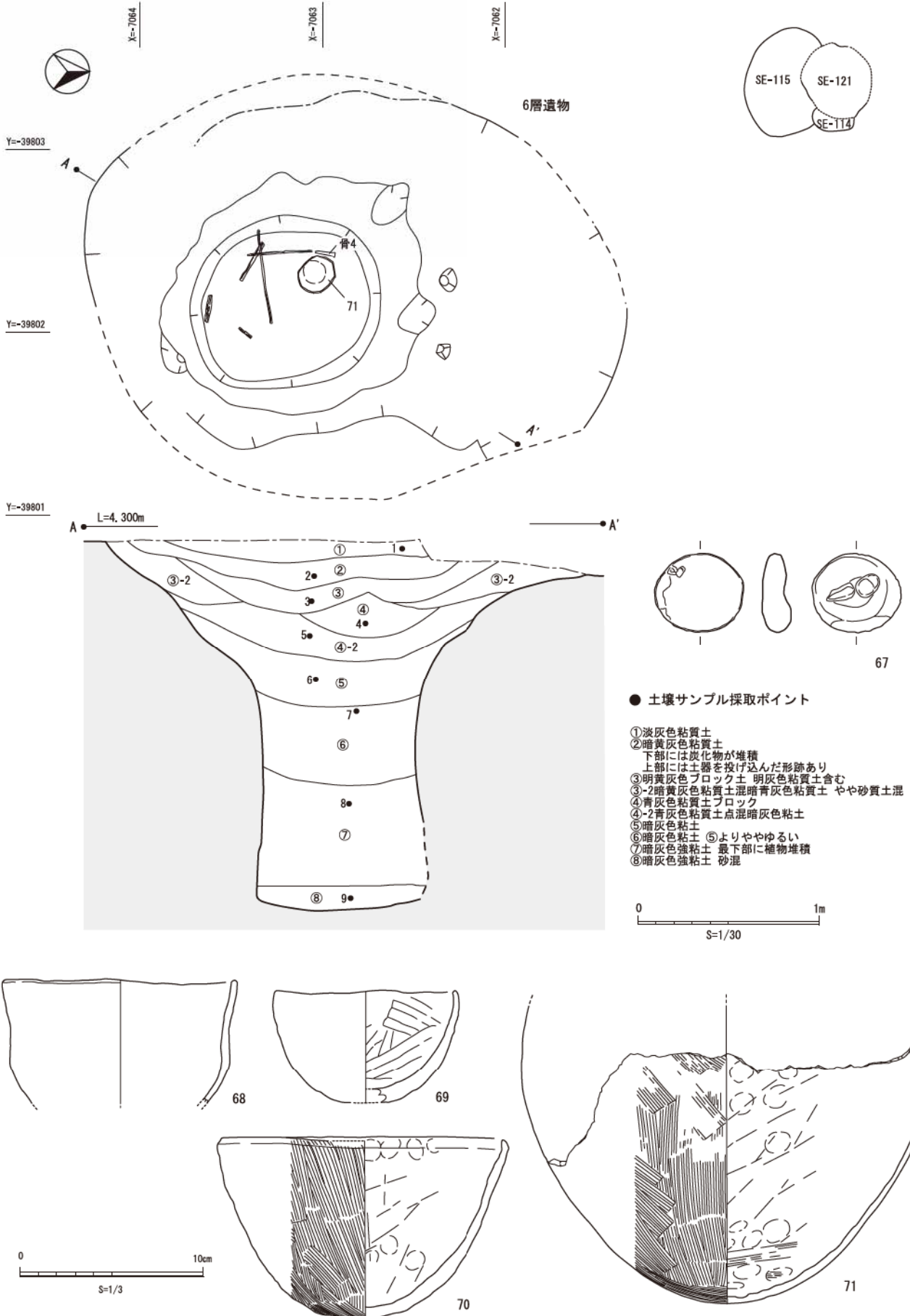
第 87 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 SE-19・36 実測図及び出土遺物実測図



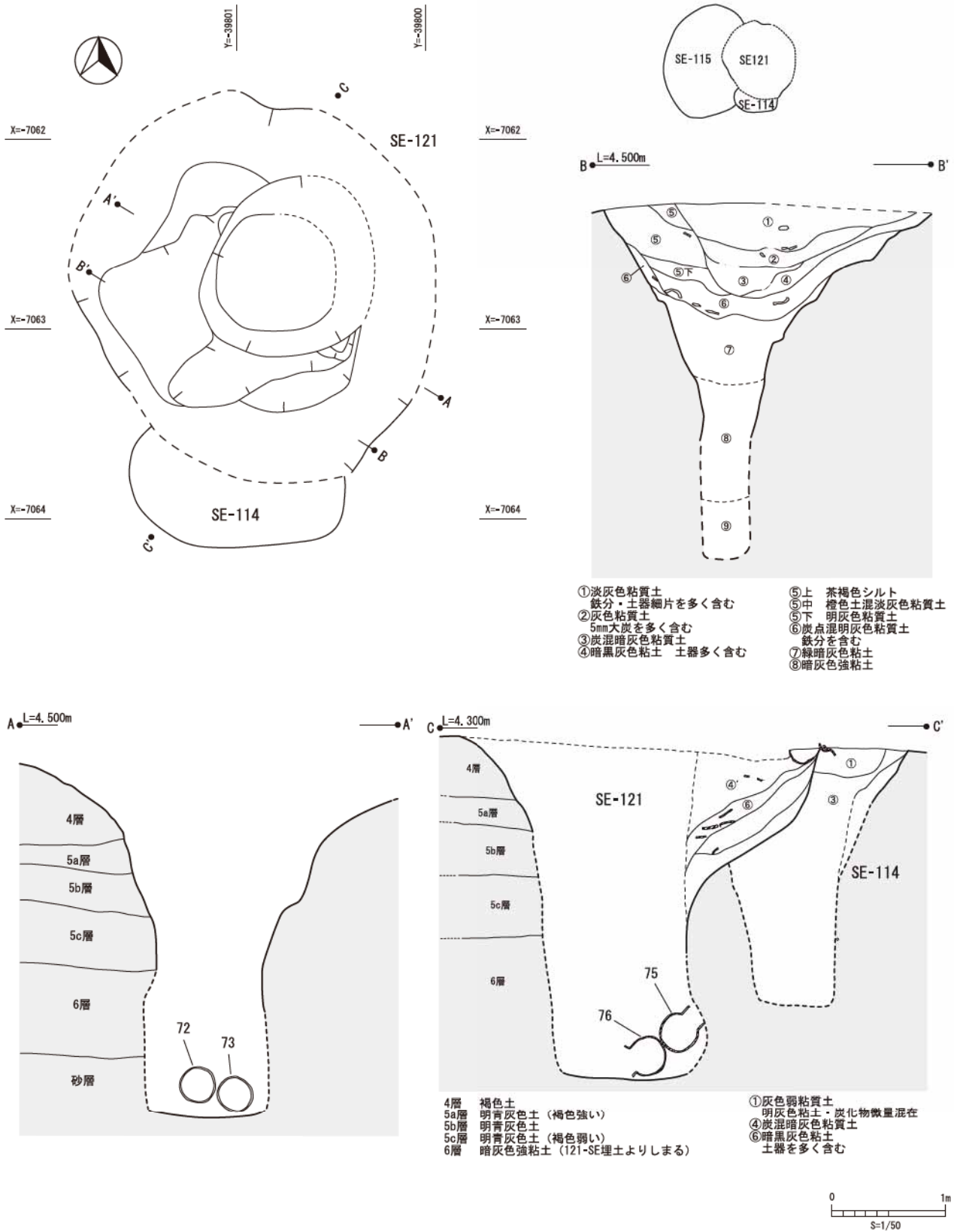
第 88 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 実測図



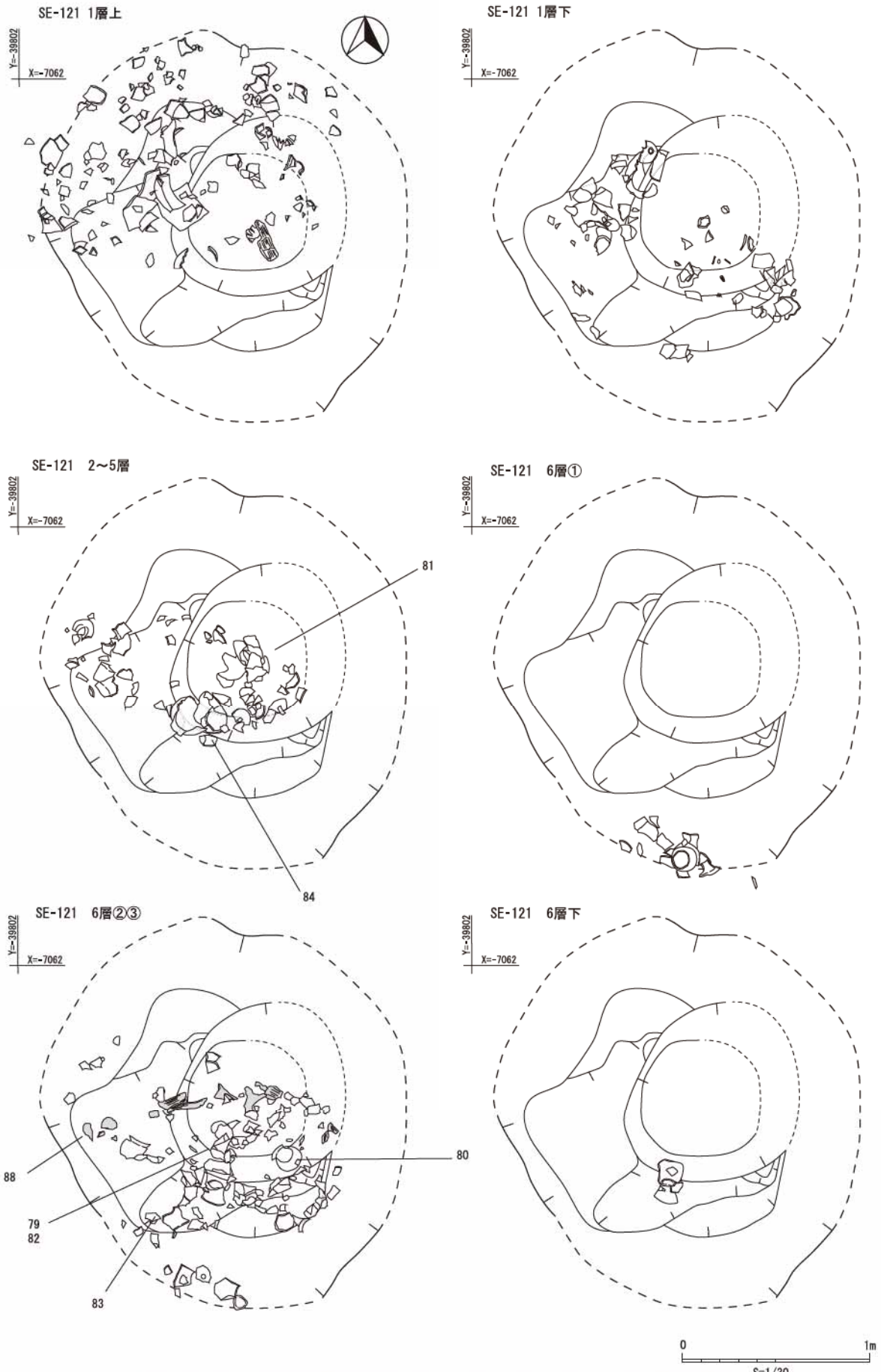
第 89 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-114 出土遺物実測図



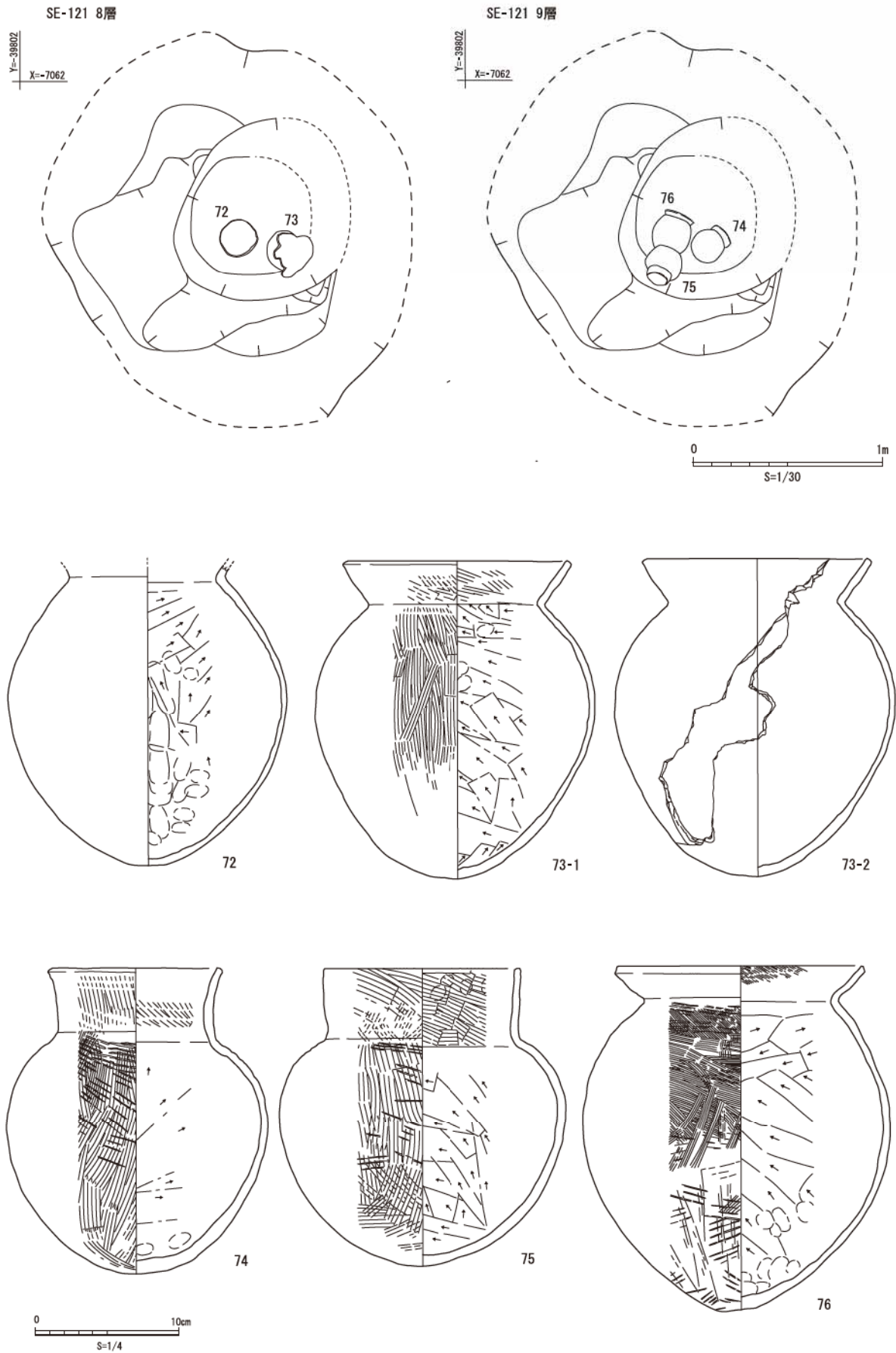
第90図 玉名平野条里跡 01-3区 SE-115 実測図及び出土遺物実測図



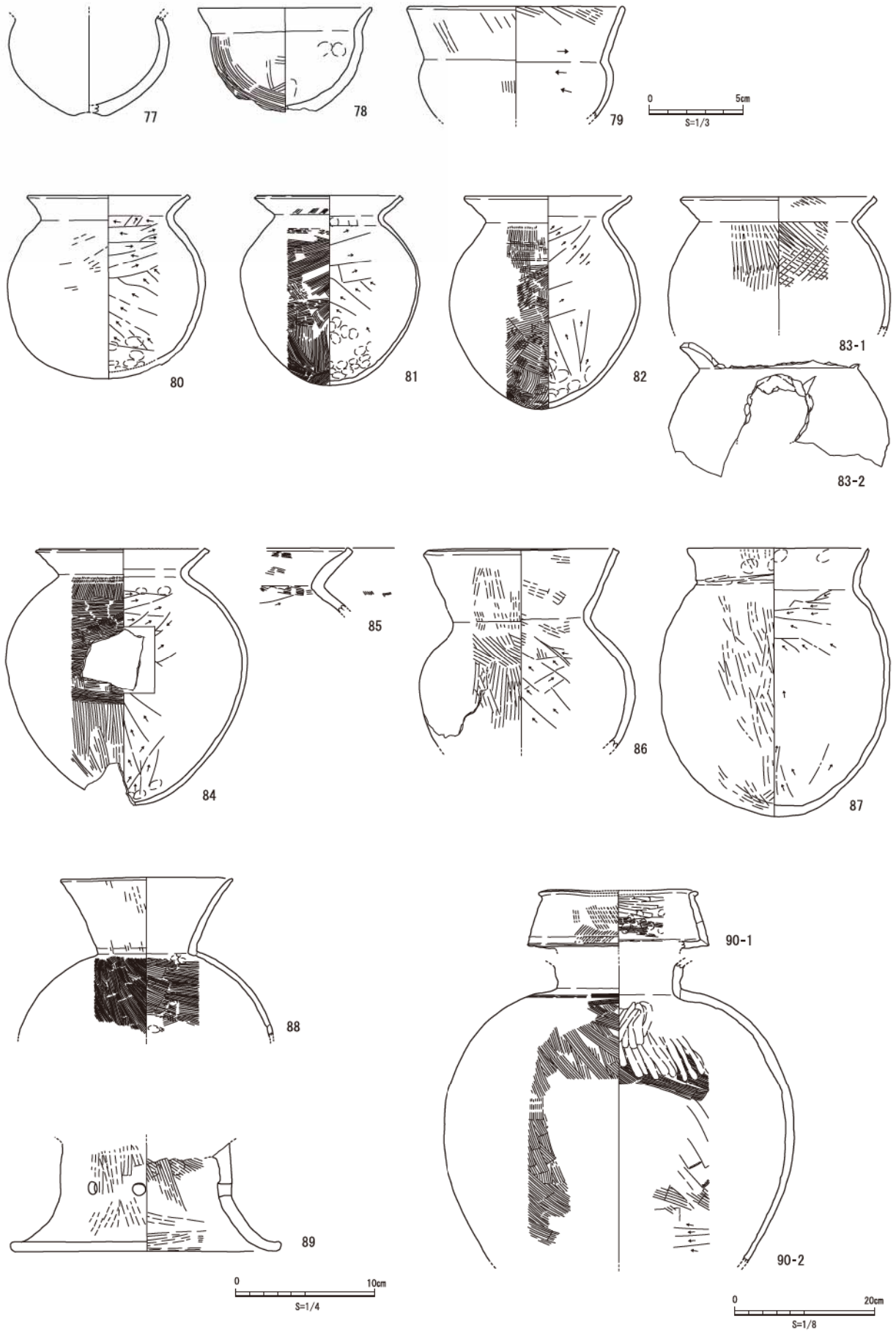
第 91 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 実測図



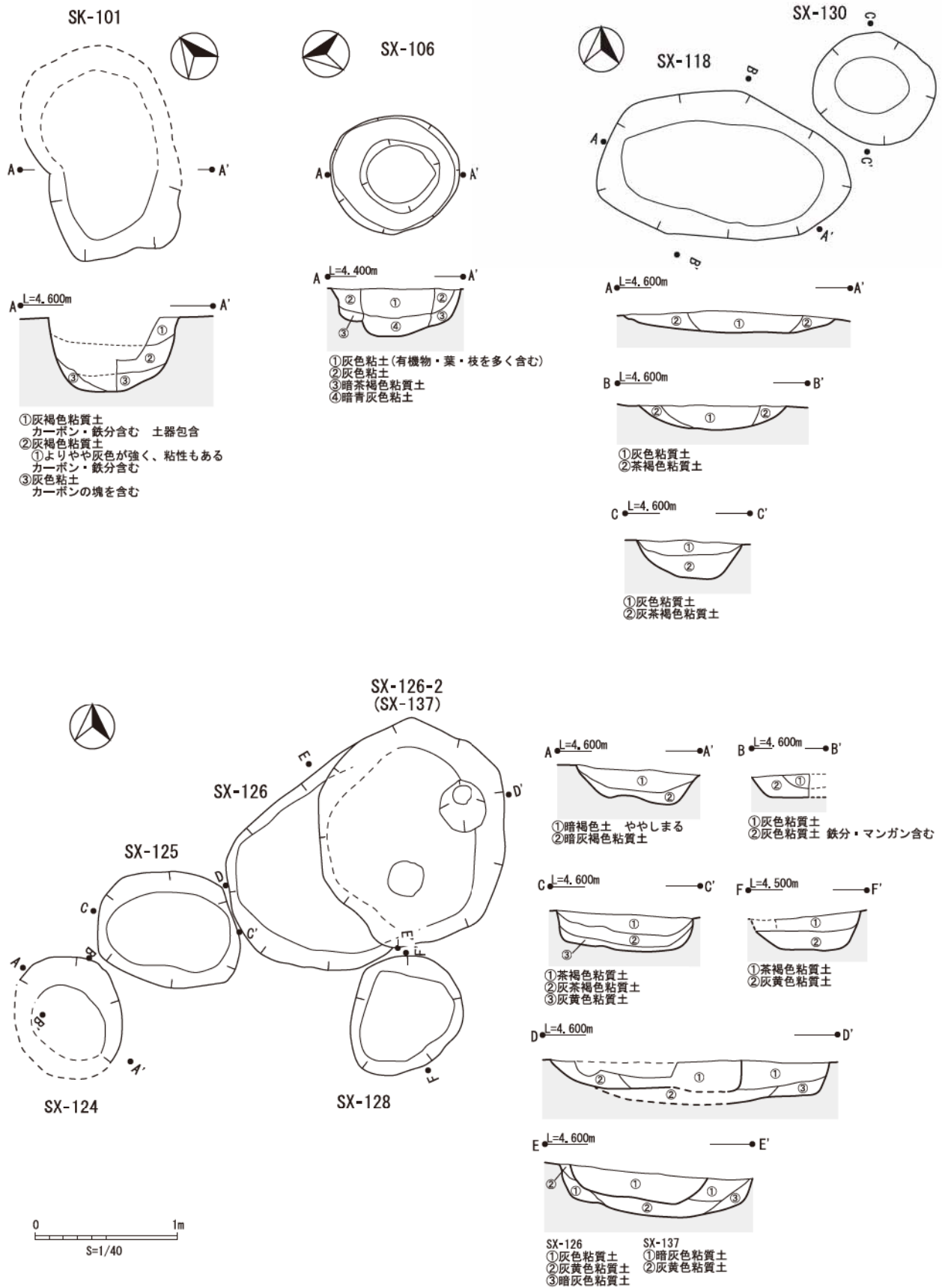
第92図 玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 1~6層実測図



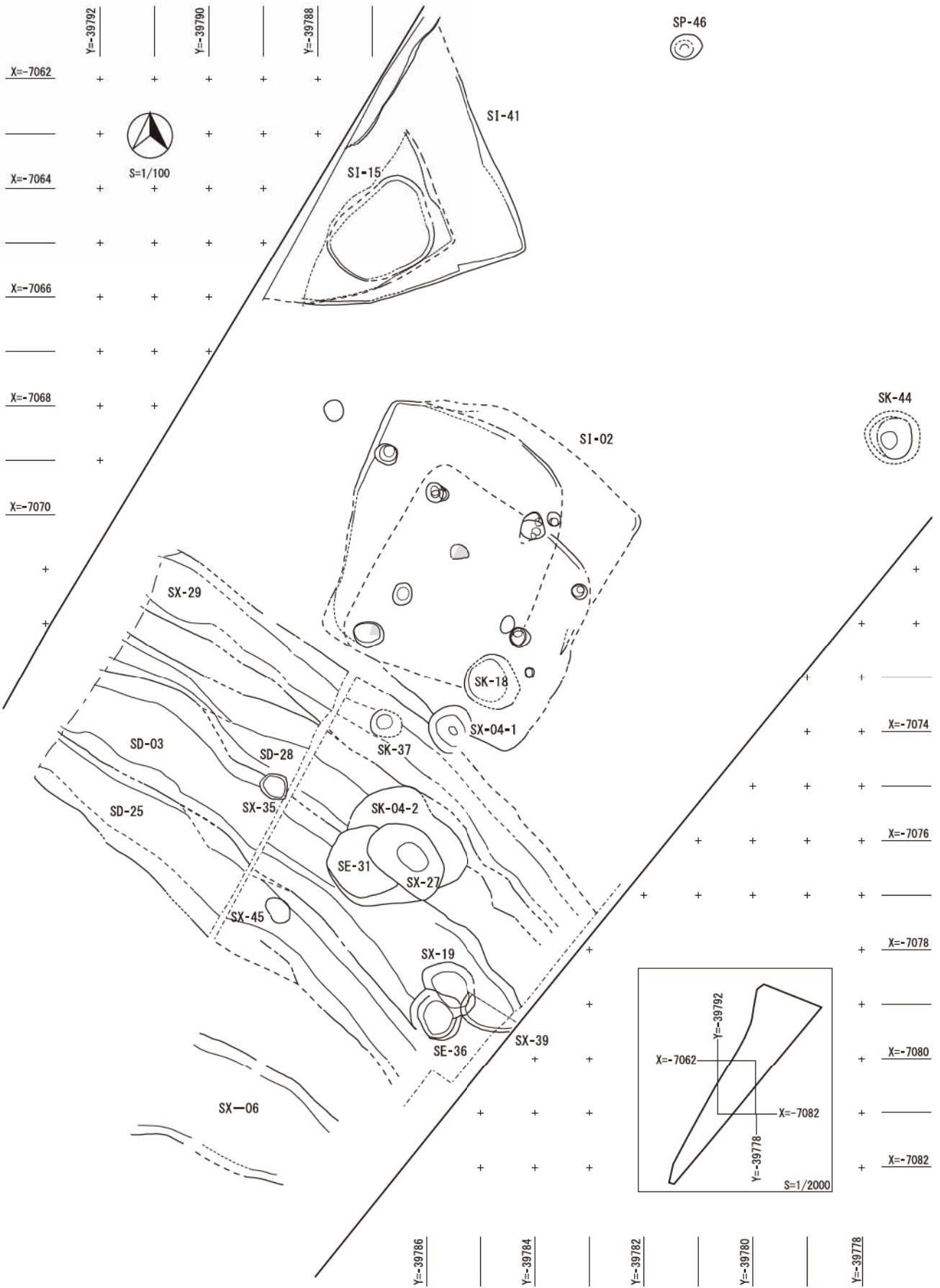
第 93 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121
8・9 層遺物出土状況及び出土遺物実測図



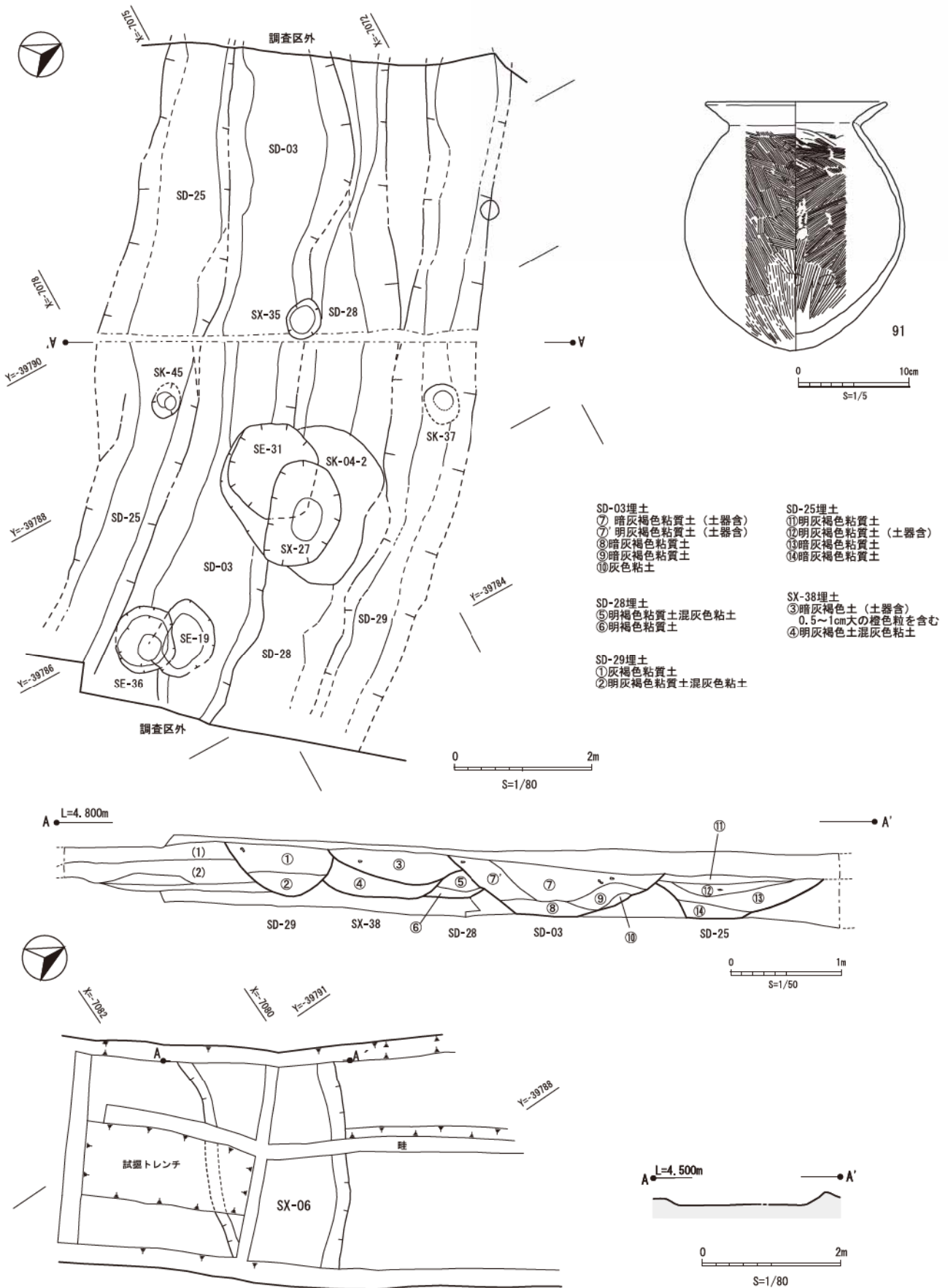
第 94 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SE-121 出土遺物実測図



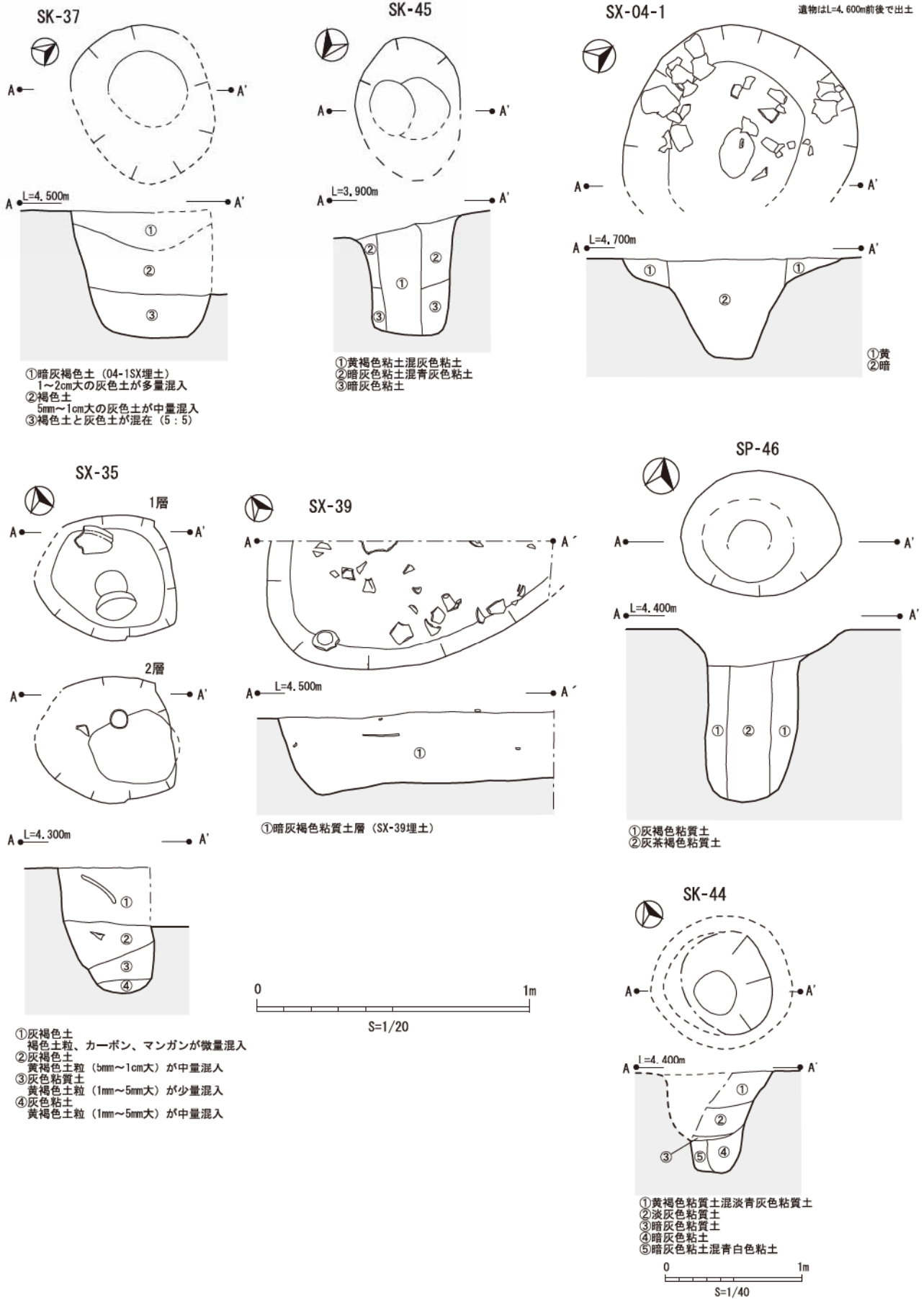
第 95 図 玉名平野条里跡 01-3 区
SK-101・SX-106・118・124~126・128・130・137 実測図



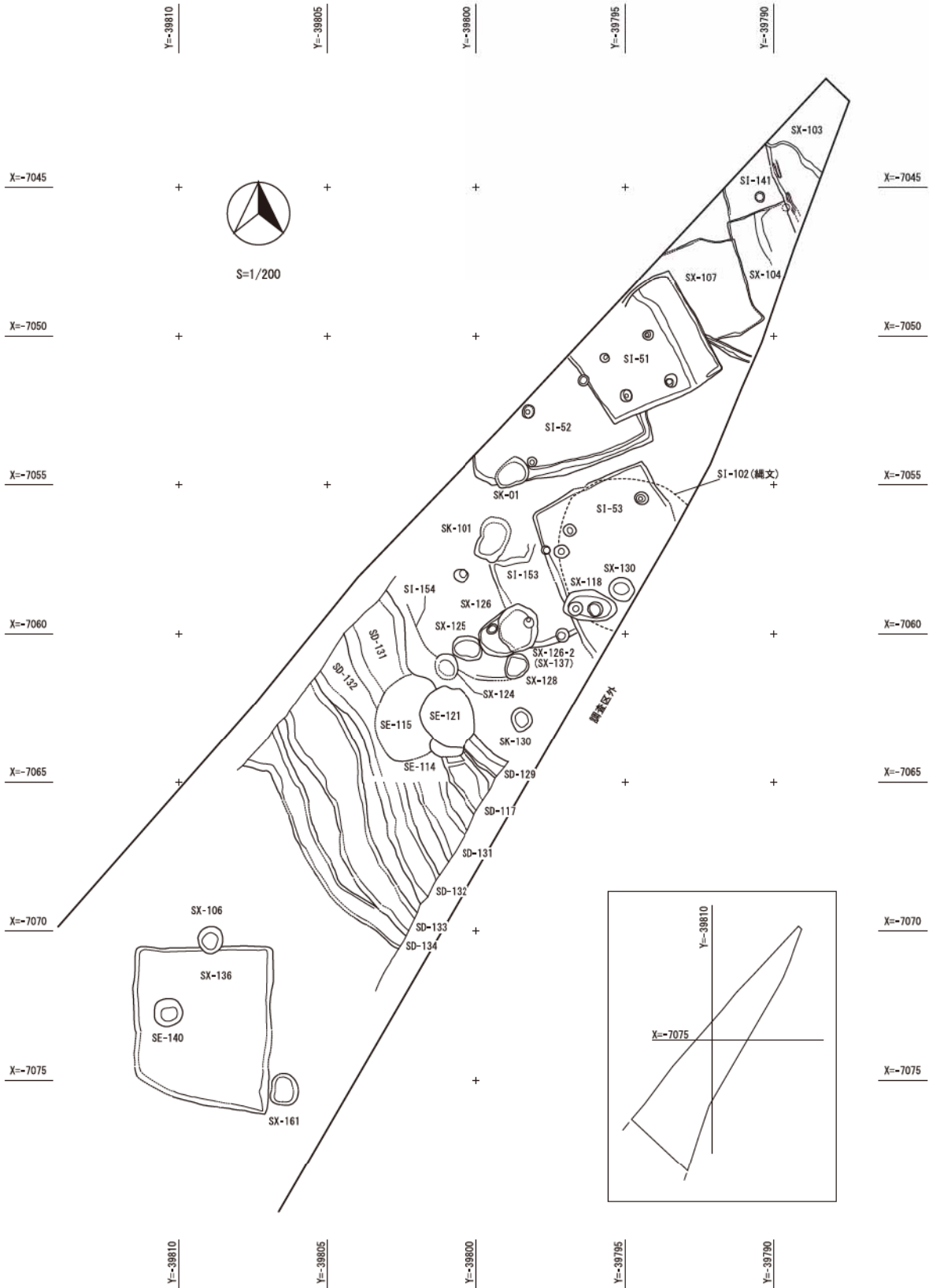
第 96 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区 遺構配置図 (古墳)



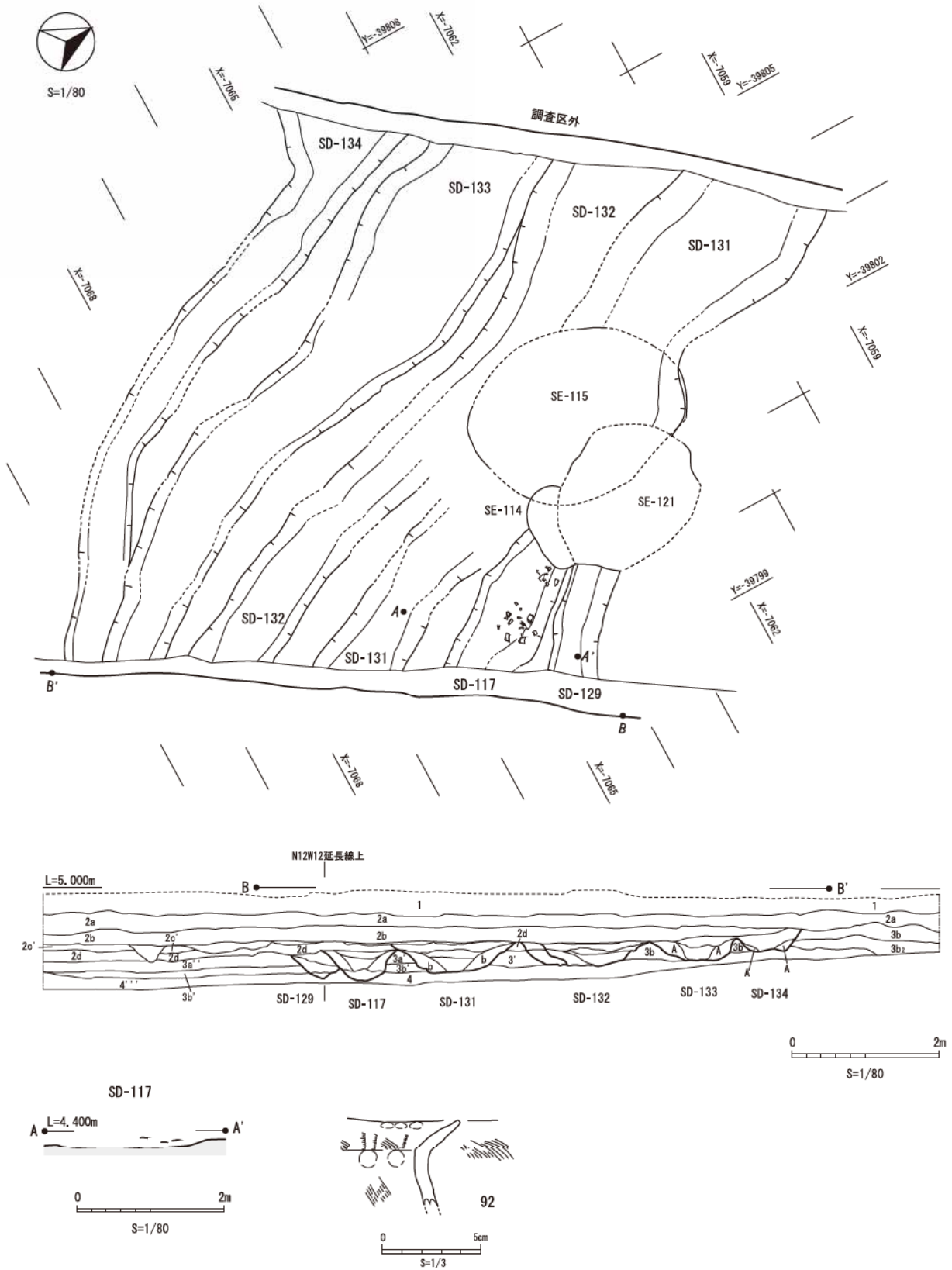
第97図 玉名平野条里跡 01-1・2区
 SD-03・25・28・29・SX-06・38 実測図及び出土遺物実測図



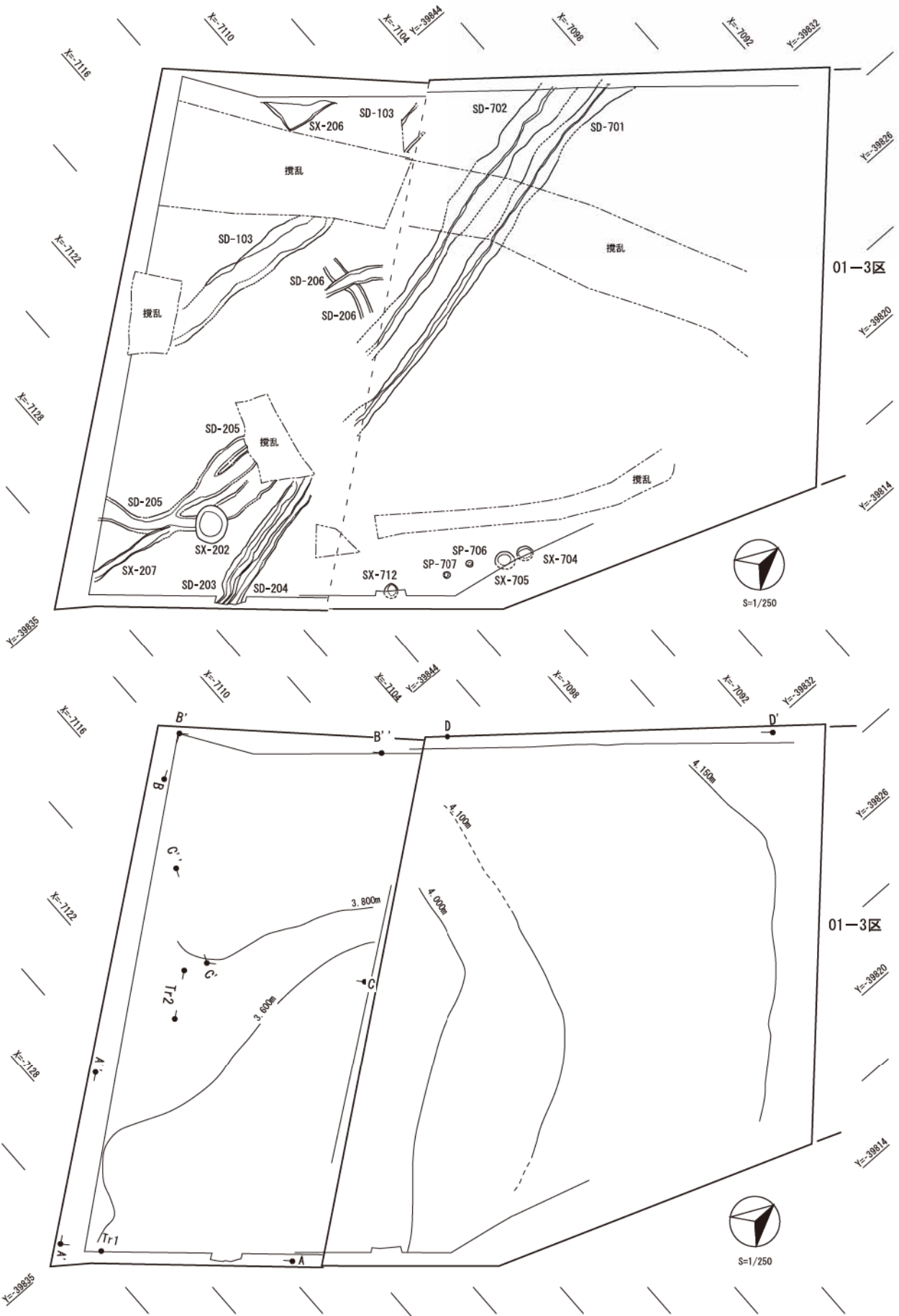
第 98 図 玉名平野条里跡 01-1・2 区
SK-37・44・45・SX-04-1・35・39・SP-46 実測図



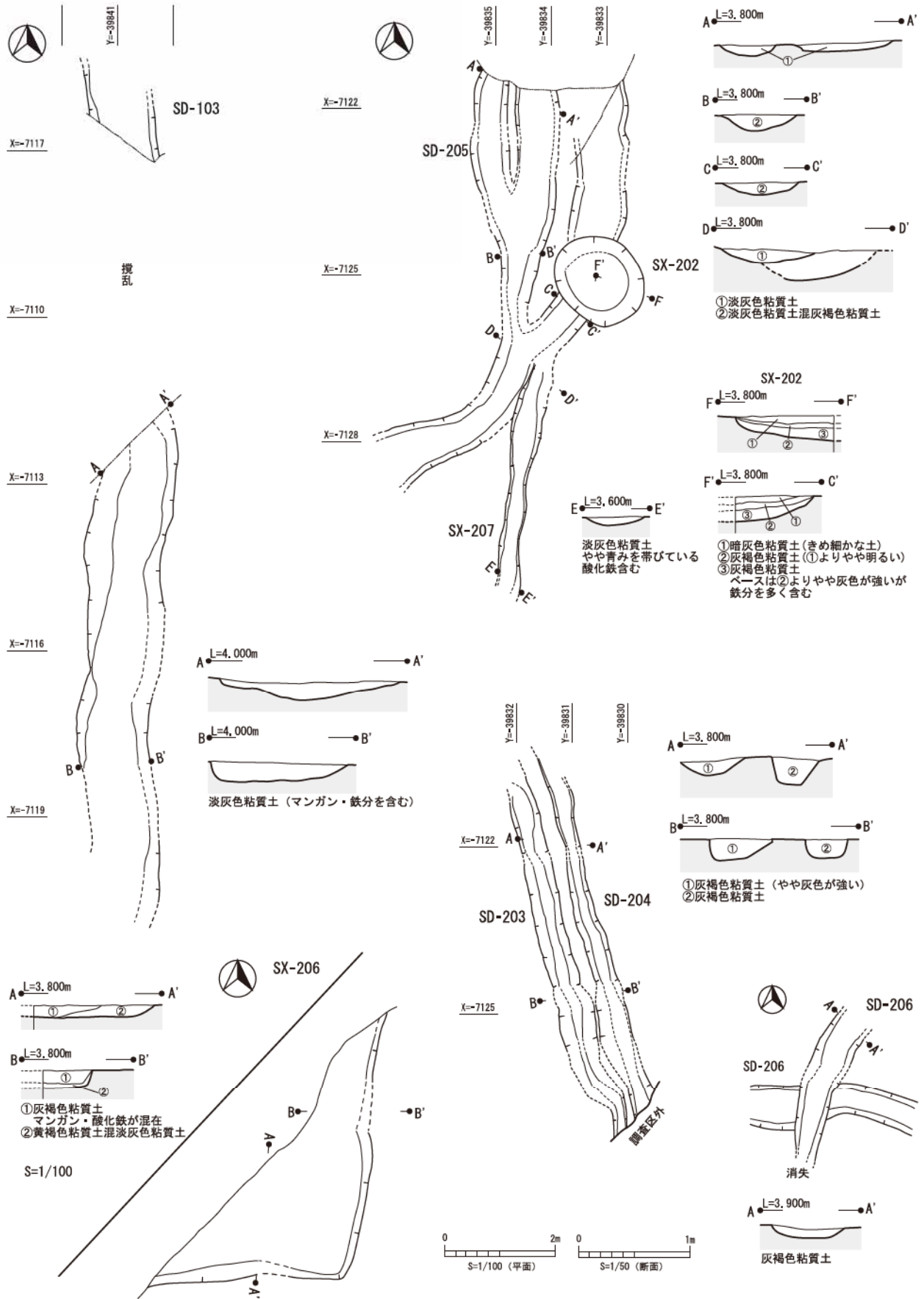
第 99 図 玉名平野条里跡 01-3 区 2b・2c 層遺構配置図 (古墳)



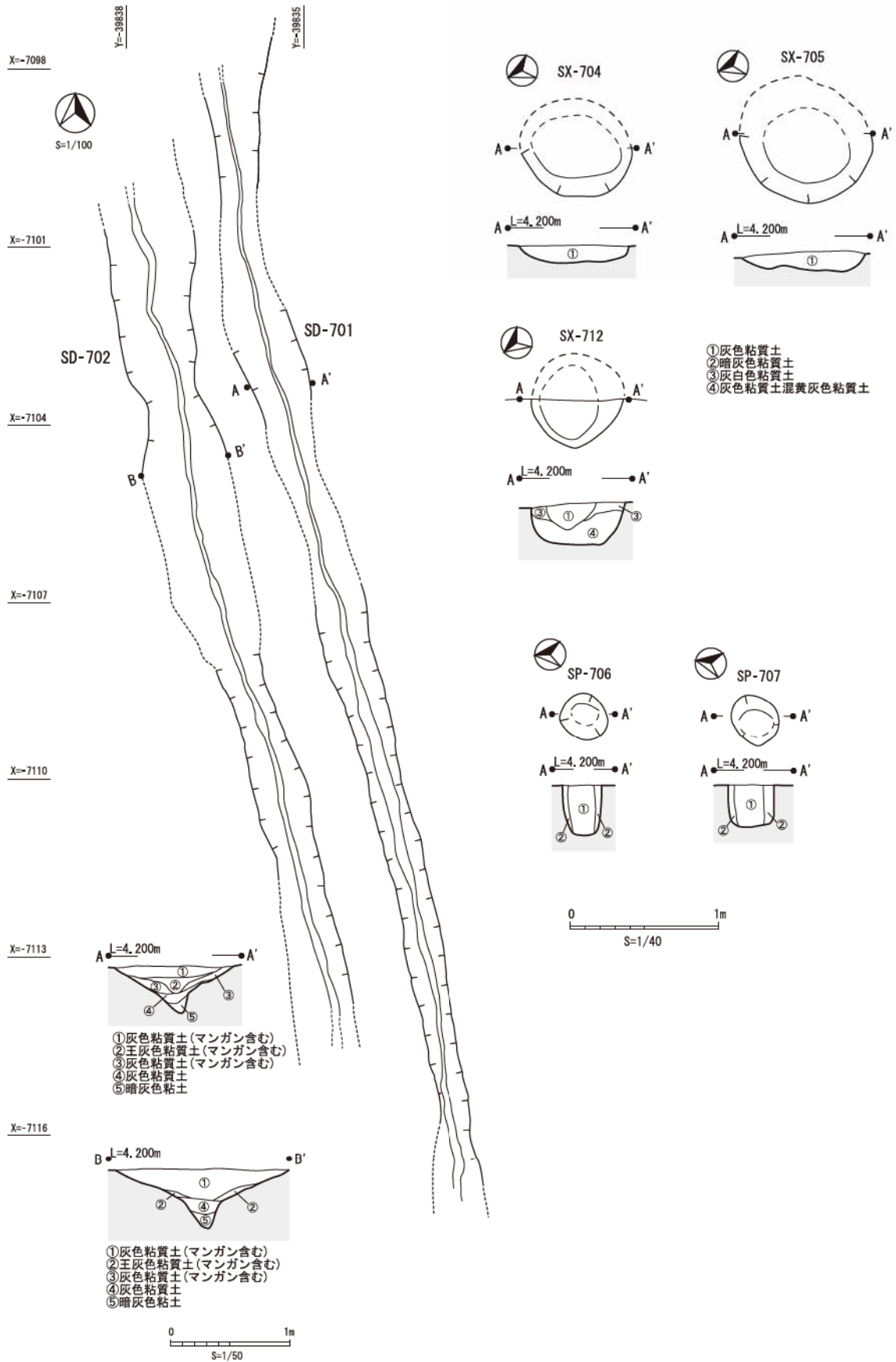
第 100 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SD-117・129・131～134 実測図及び出土遺物実測図



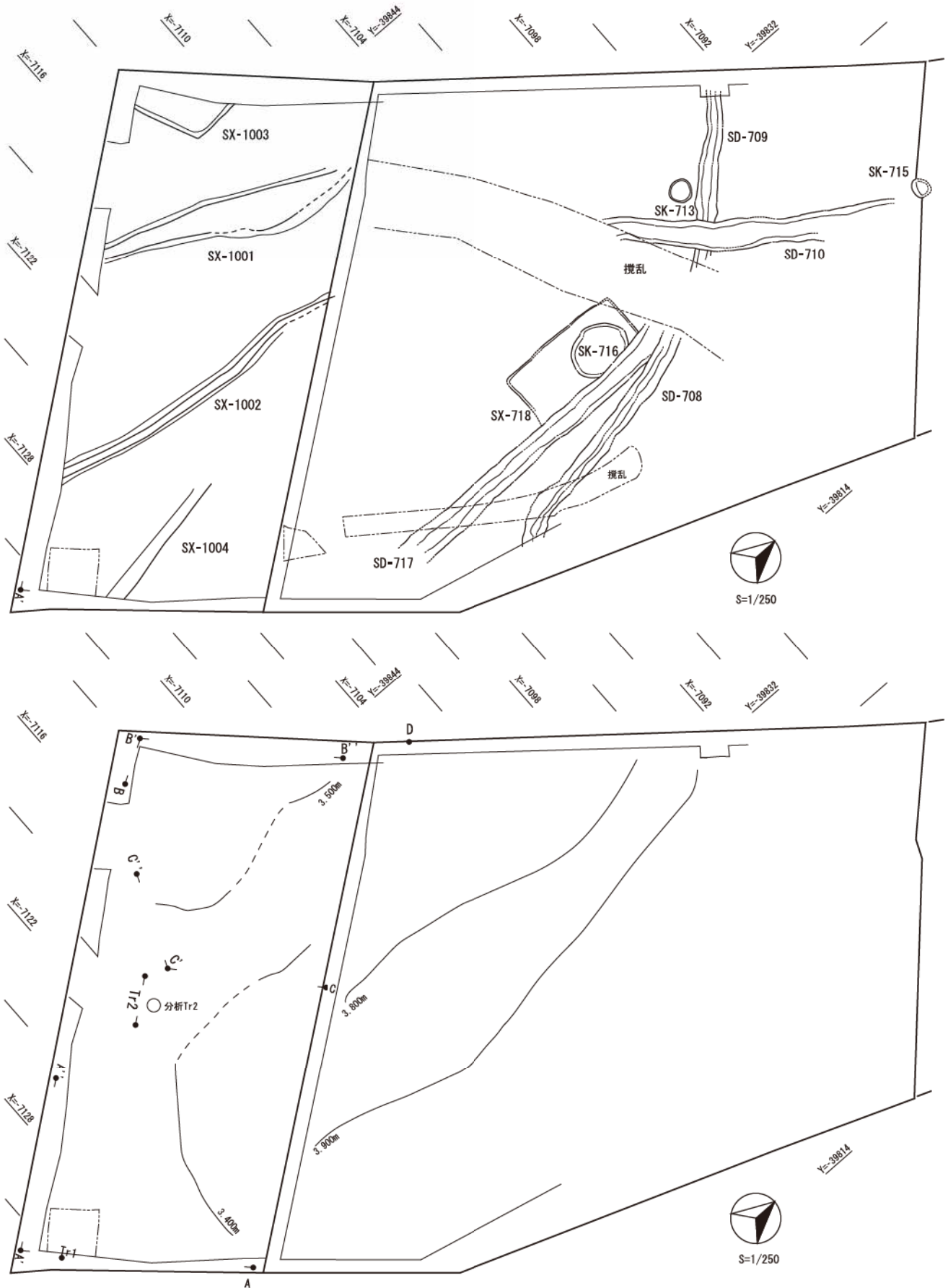
第 101 図 玉名平野条里跡 01-4・7 区 3a 層～3b 層遺構配置図及びコンタ図



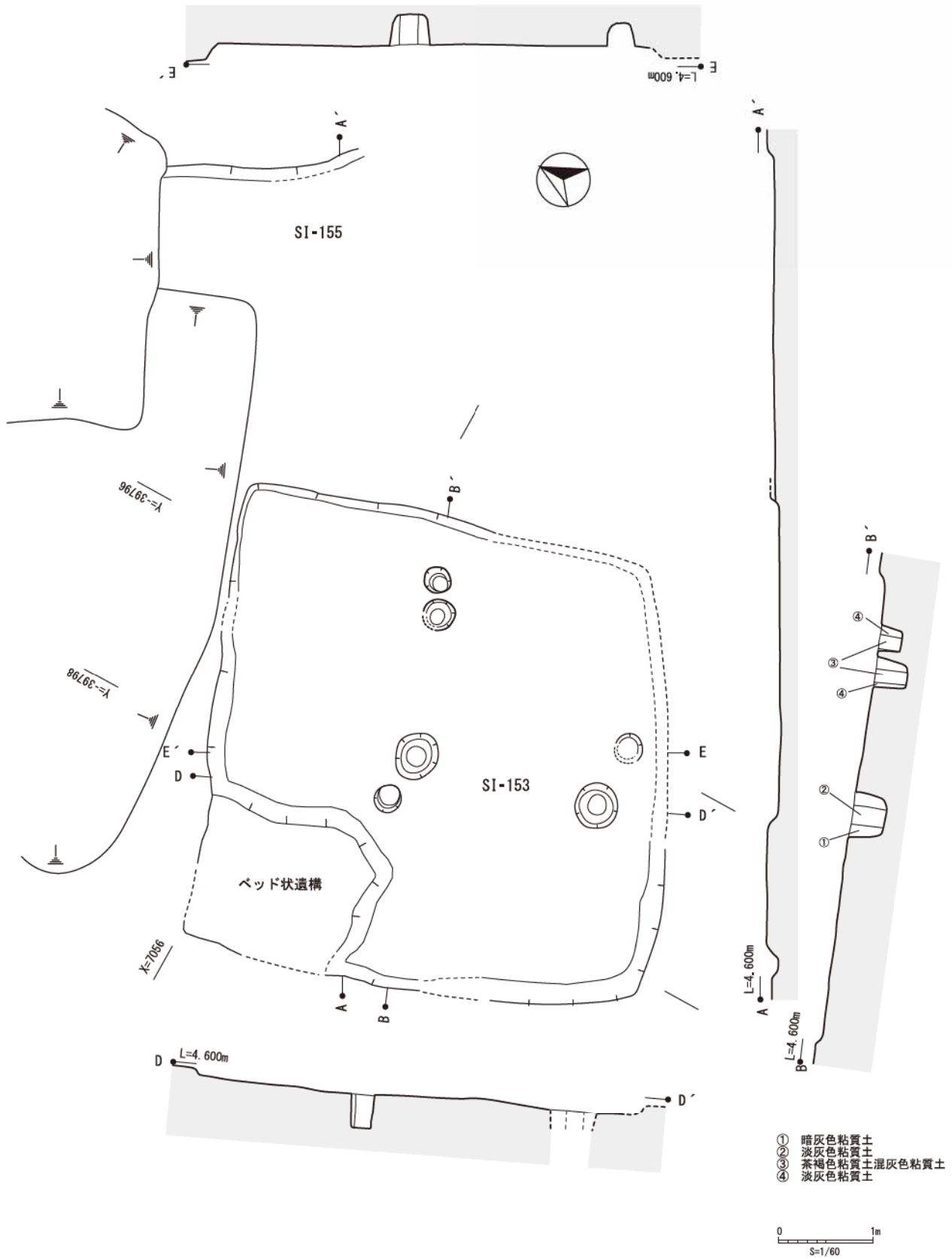
第 102 図 玉名平野条里跡 01-4 区
SD-103・203~206・SX-202・206・207 実測図



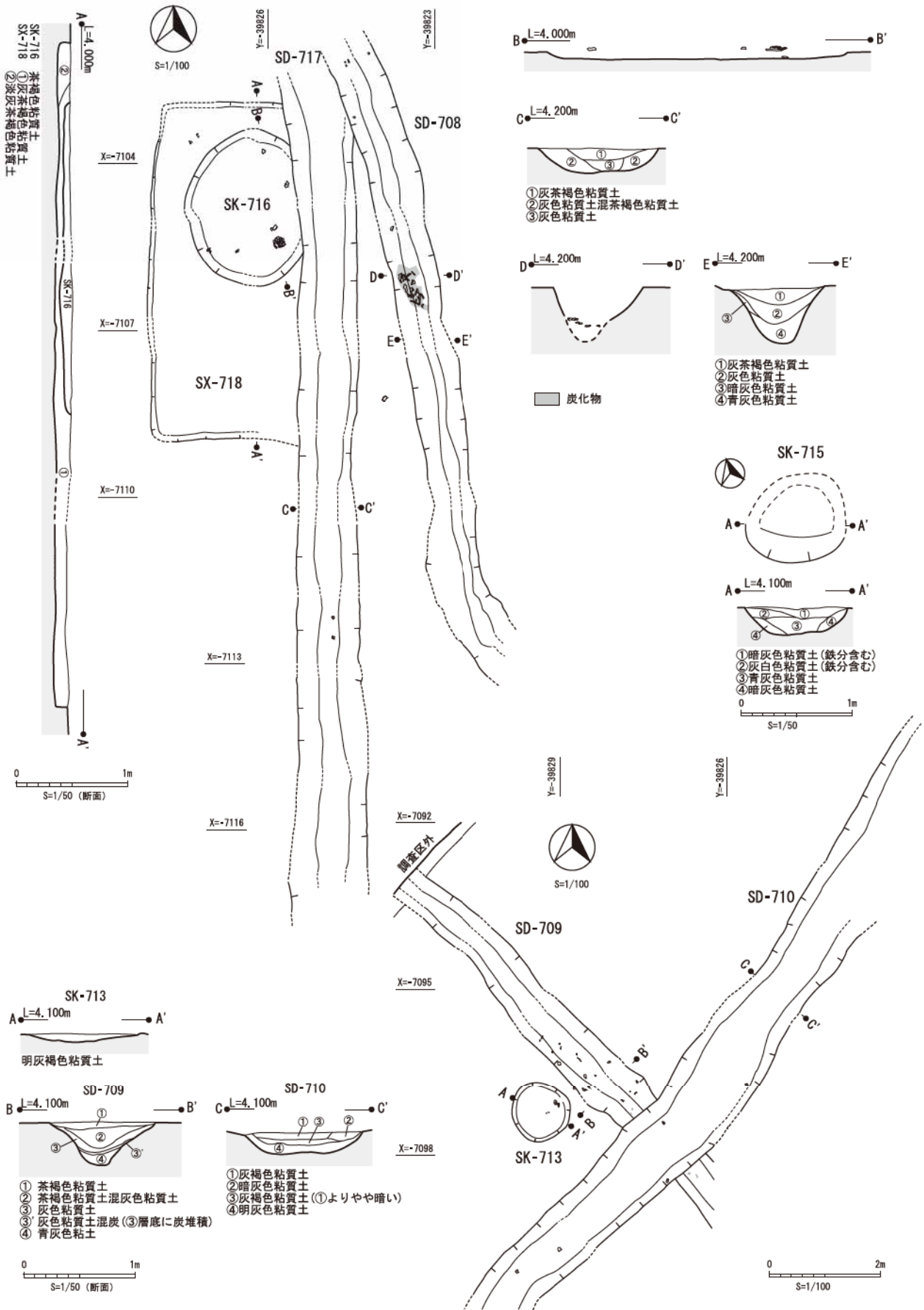
第 103 図 玉名平野条里跡 01-7 区
SD-701・702・SX-704・705・712・SP-706・707 実測図



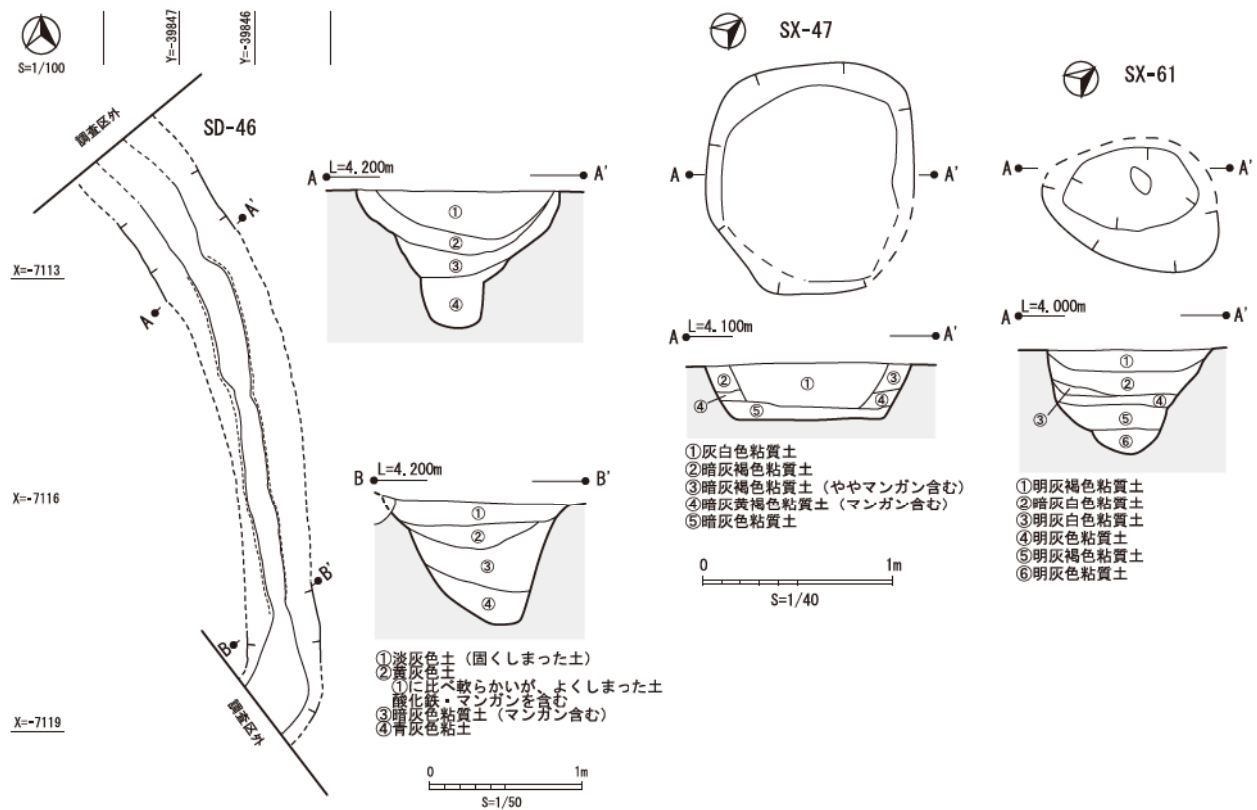
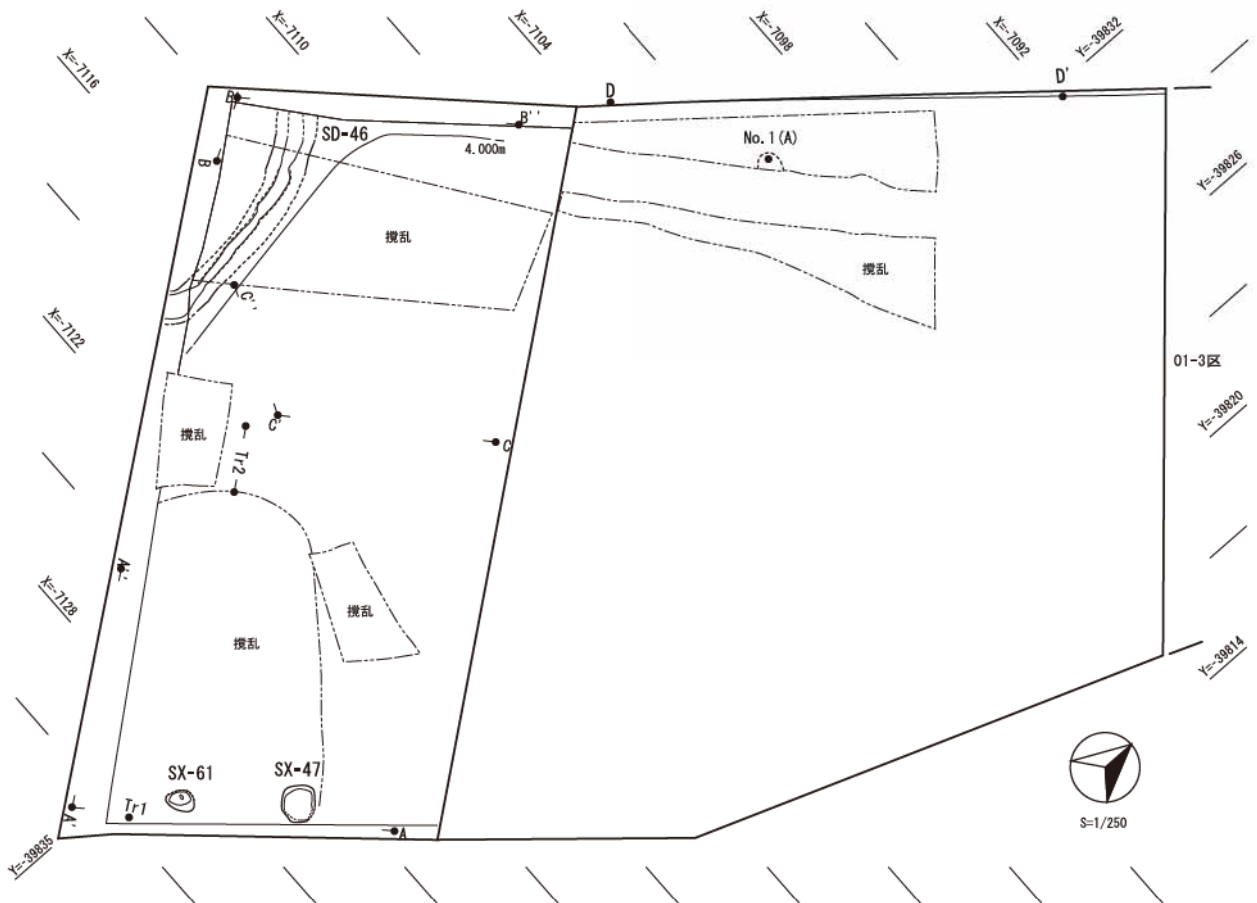
第 104 図 玉名平野条里跡 01-4・7 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図



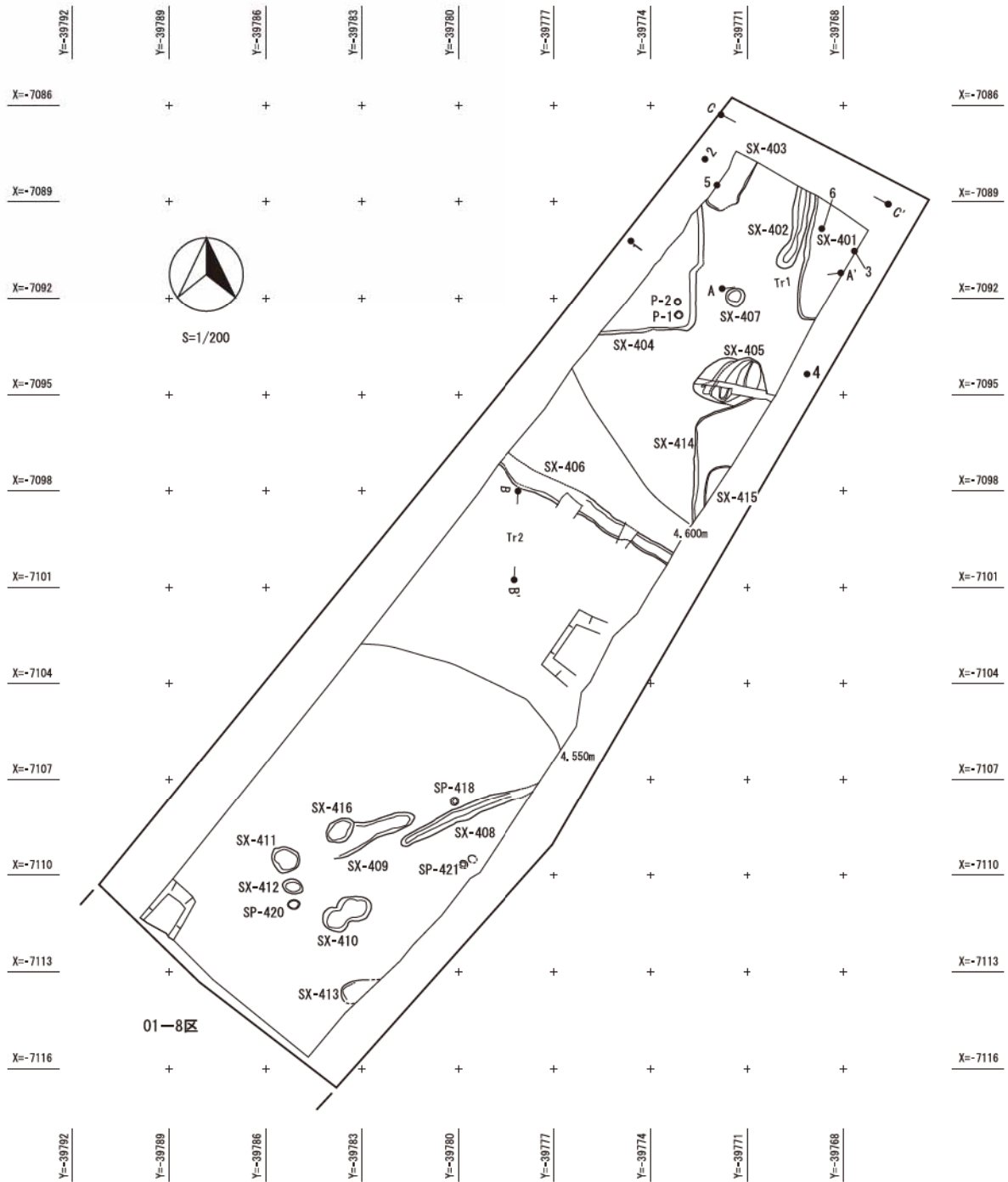
第 105 図 玉名平野条里跡 01-3 区 SI-153 実測図



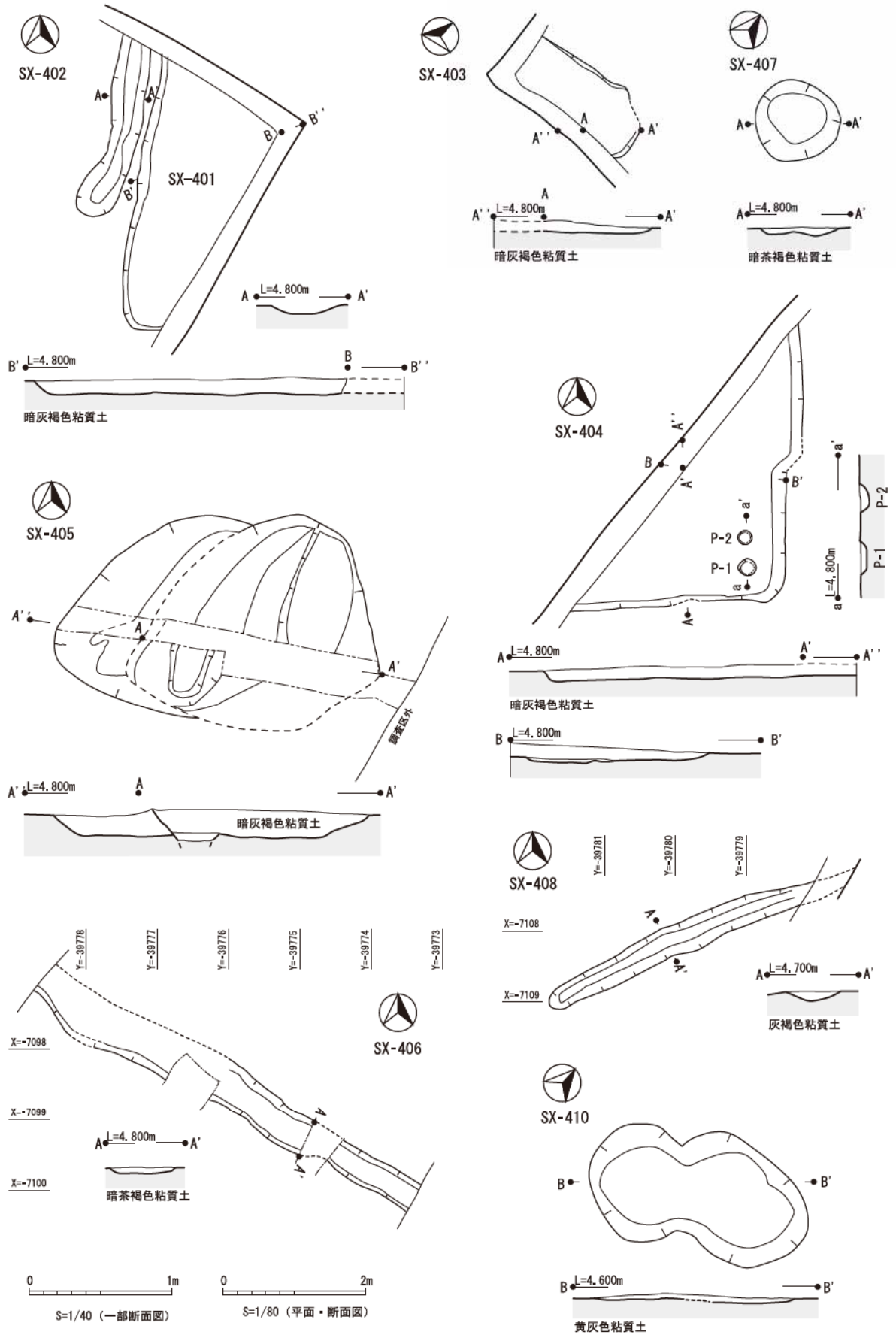
第 106 図 玉名平野条里跡 01-7 区
SD-708~710・717・SK-713・715・716・SX-718 実測図



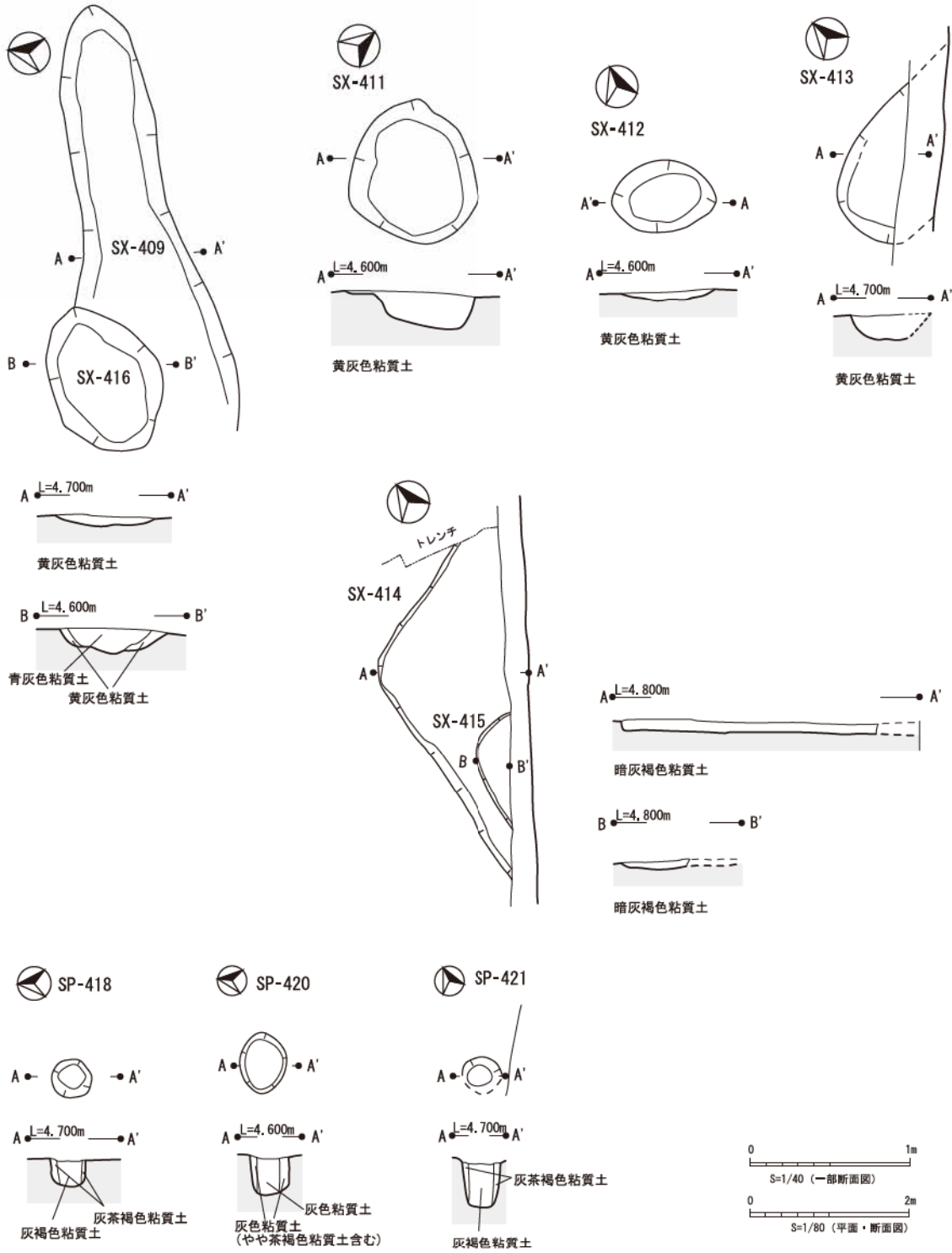
第 107 図 玉名平野条里跡 01-4・7 区 2b 層遺構配置図及び SD-46・SX-47・61 実測図



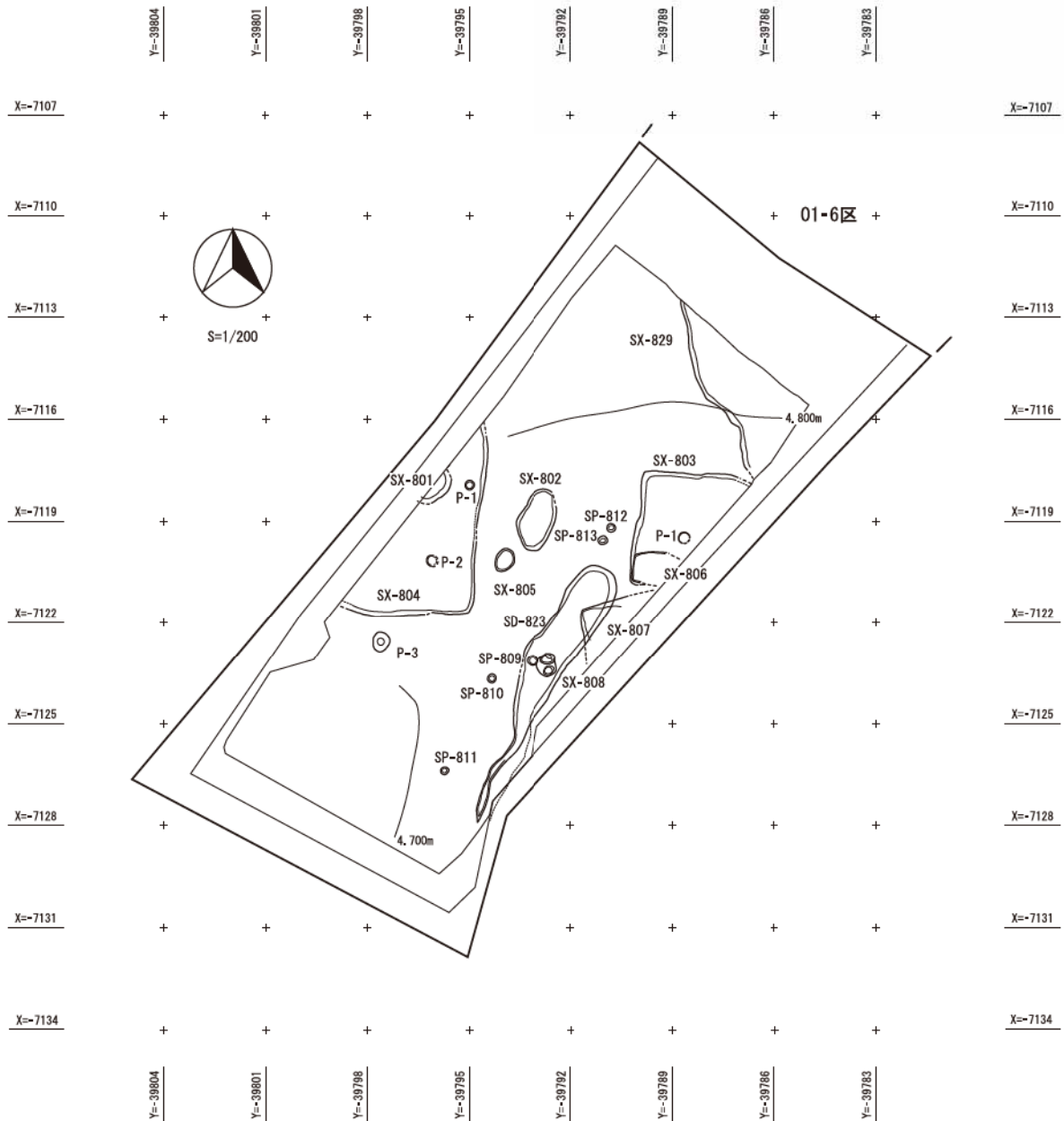
第 108 図 玉名平野条里跡 01-6 区 3a 層上面遺構配置図



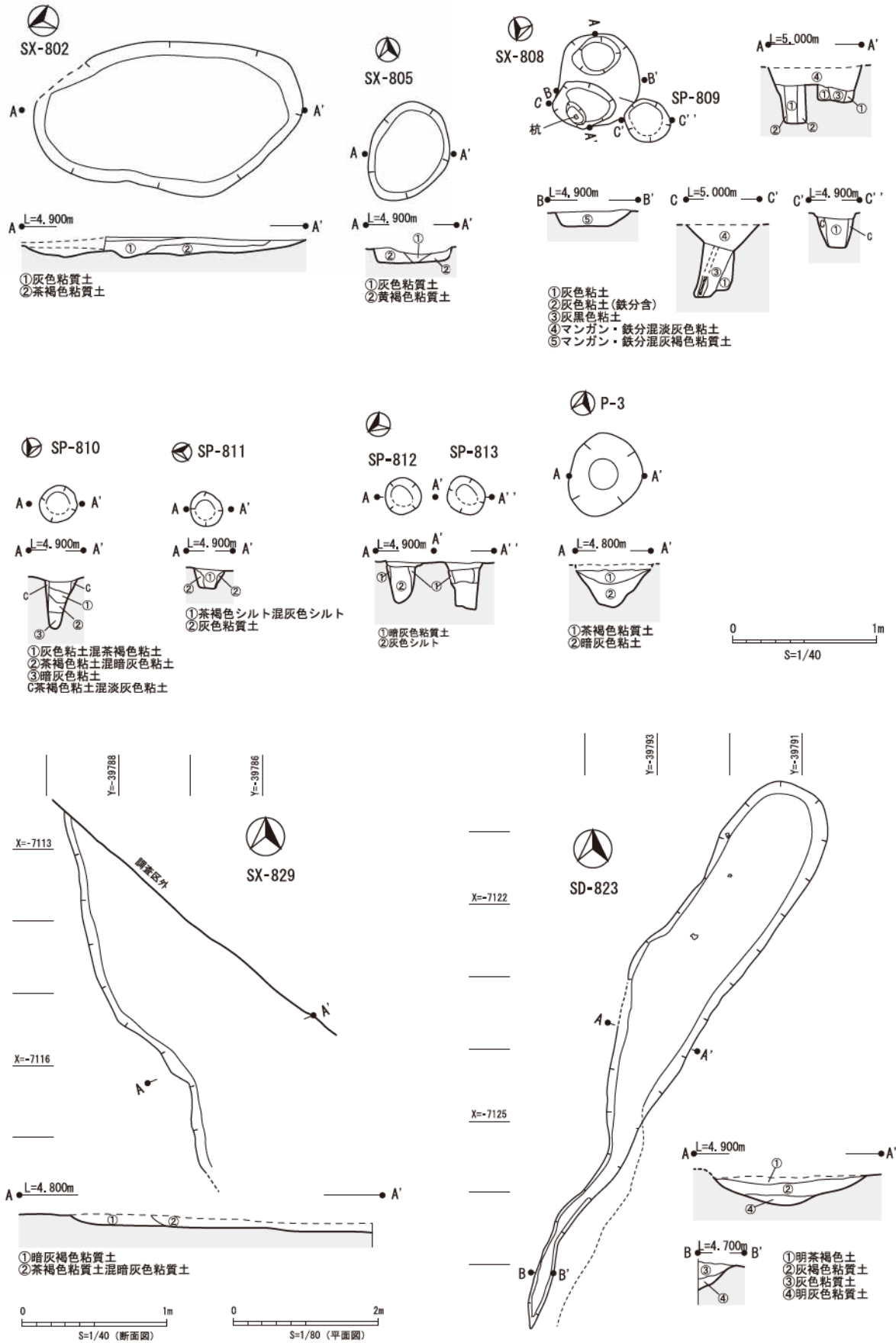
第 109 図 玉名平野条里跡 01-6 区 SX-401~408・410 実測図



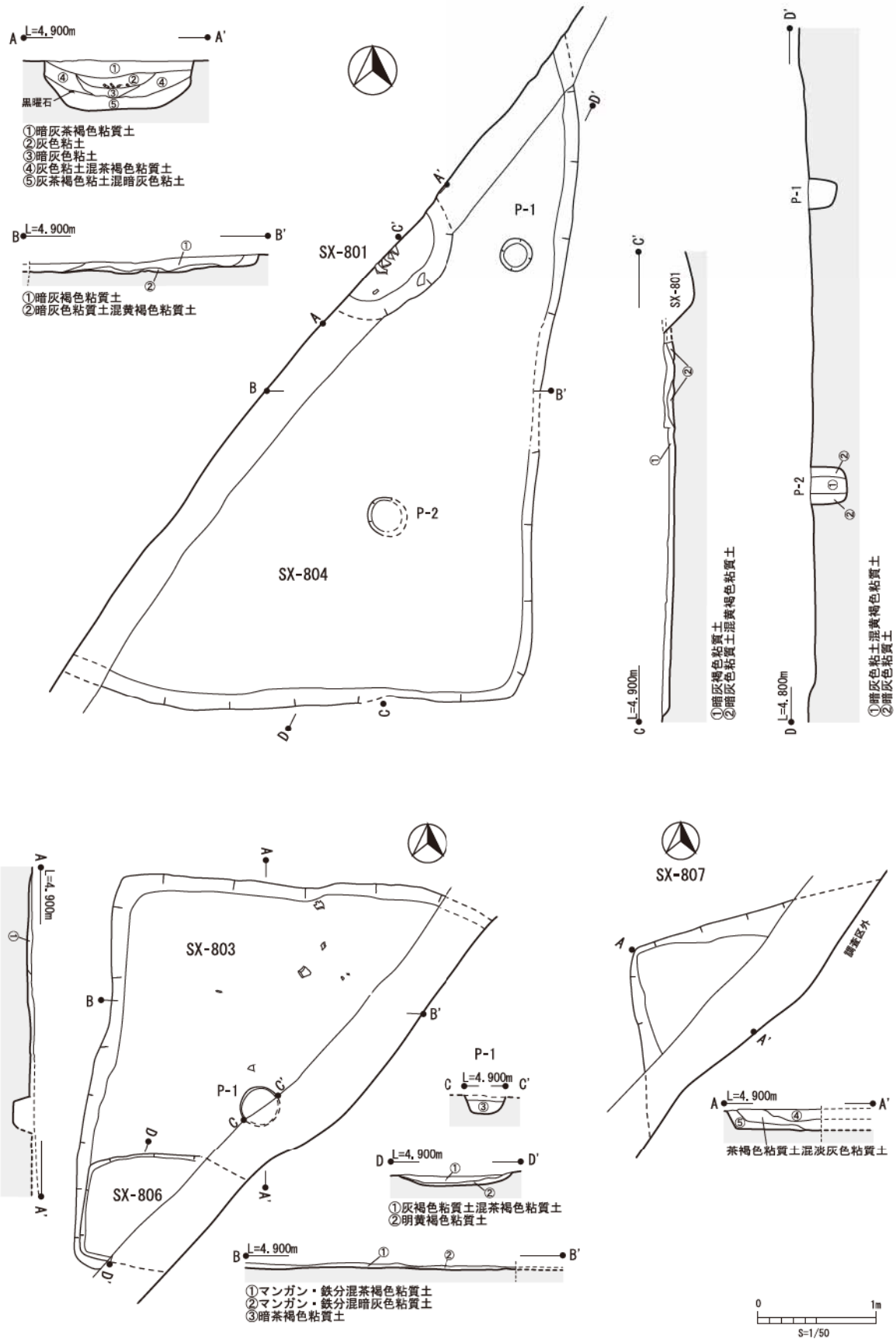
第 110 図 玉名平野条里跡 01-6 区
SX-409・411～416・SP-418・420・421 実測図



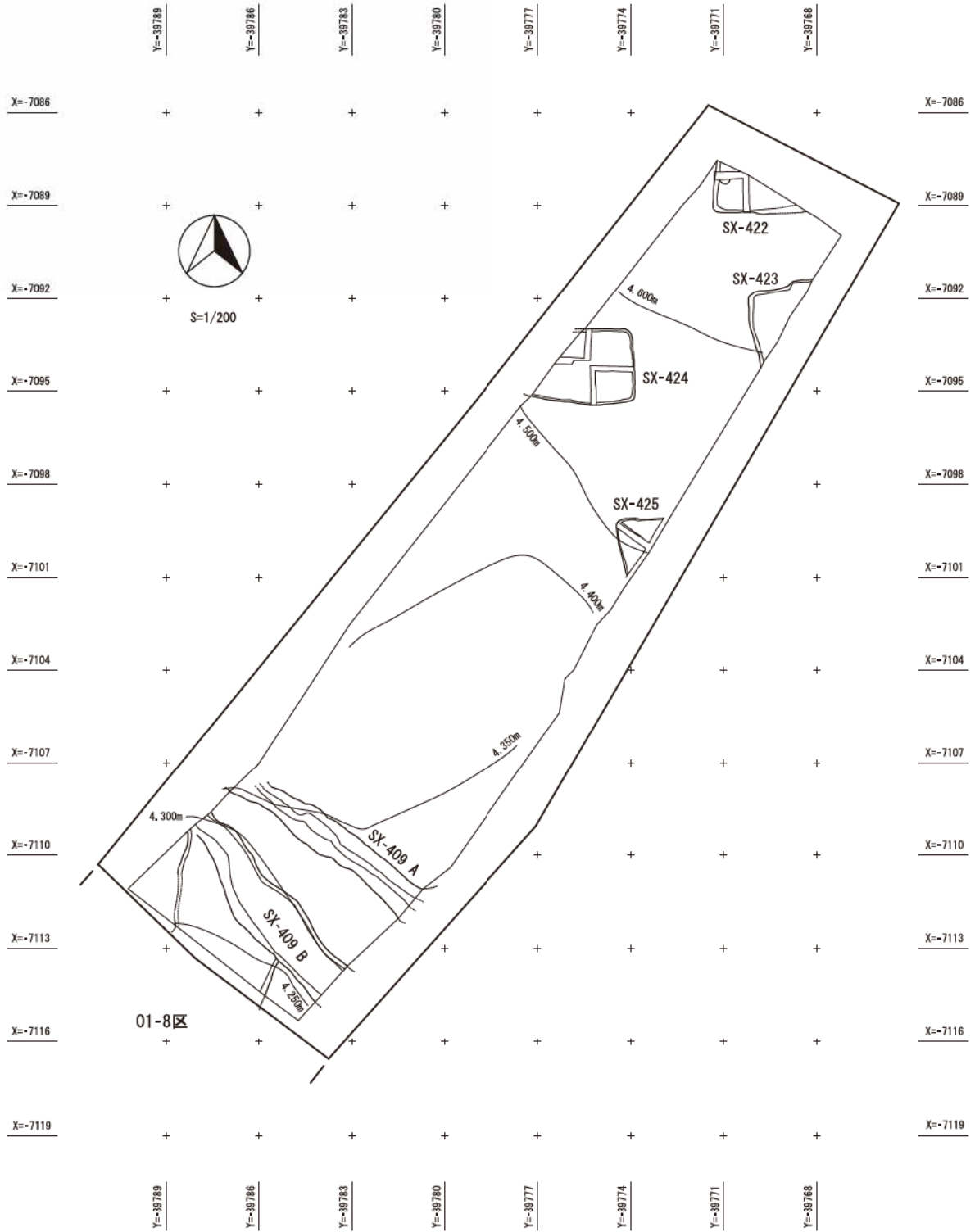
第 111 図 玉名平野条里跡 01-8 区 3層上面遺構配置図



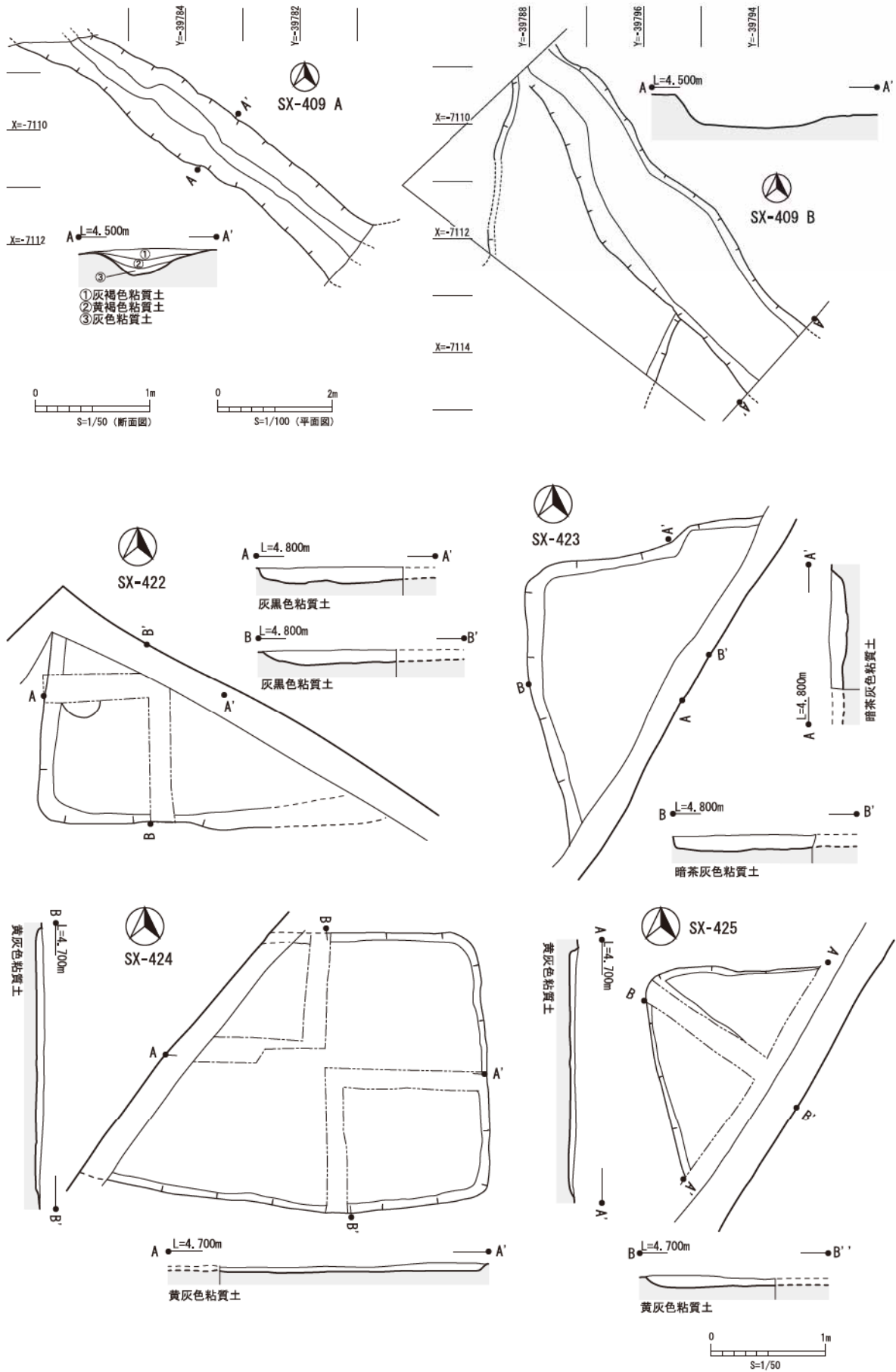
第 112 図 玉名平野条里跡 01-8 区
 SX-802・805・808・829・SD-823・SP-809~813・P-3 実測図



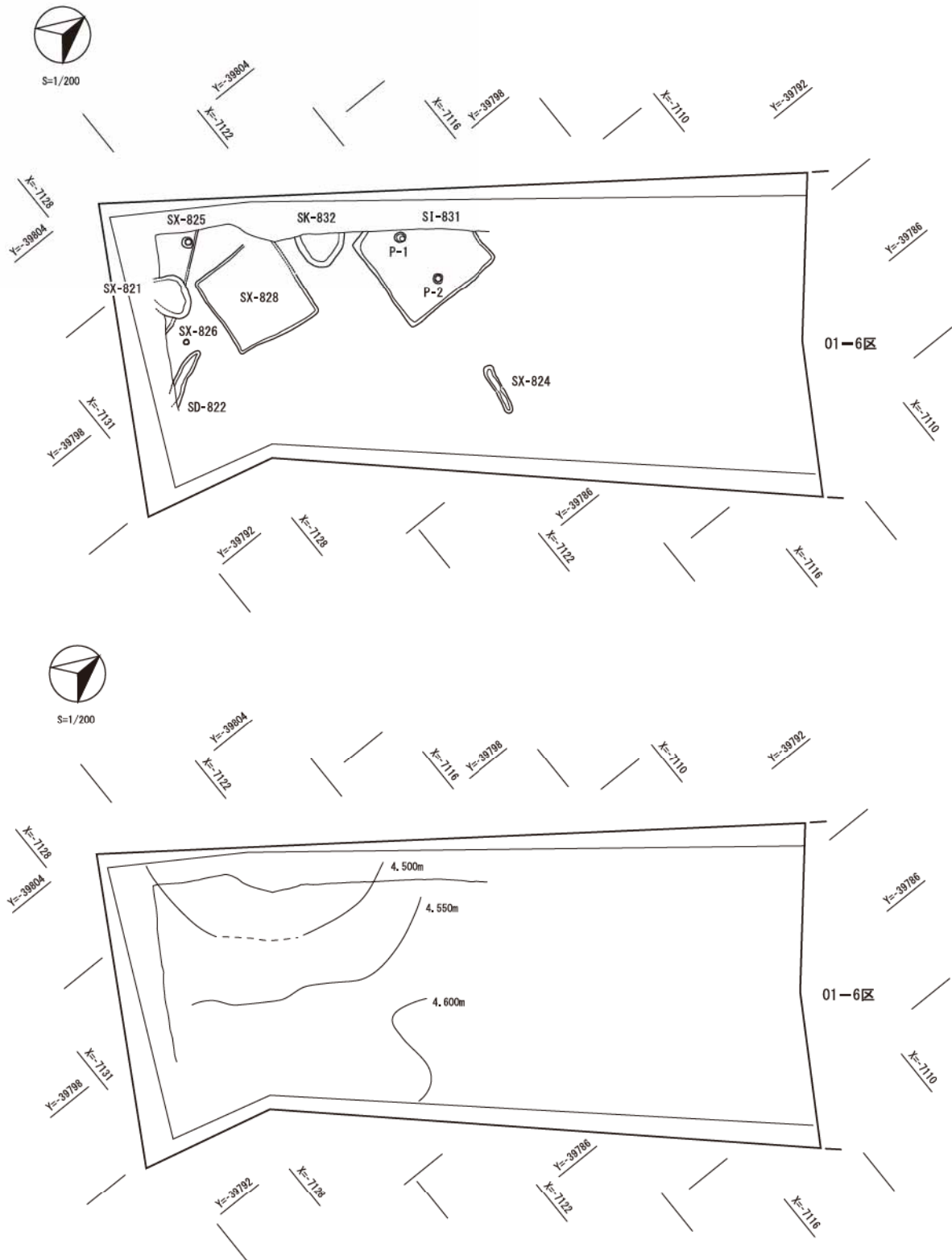
第 113 図 玉名平野条里跡 01-8 区 SX-801・803・804・806・807 実測図



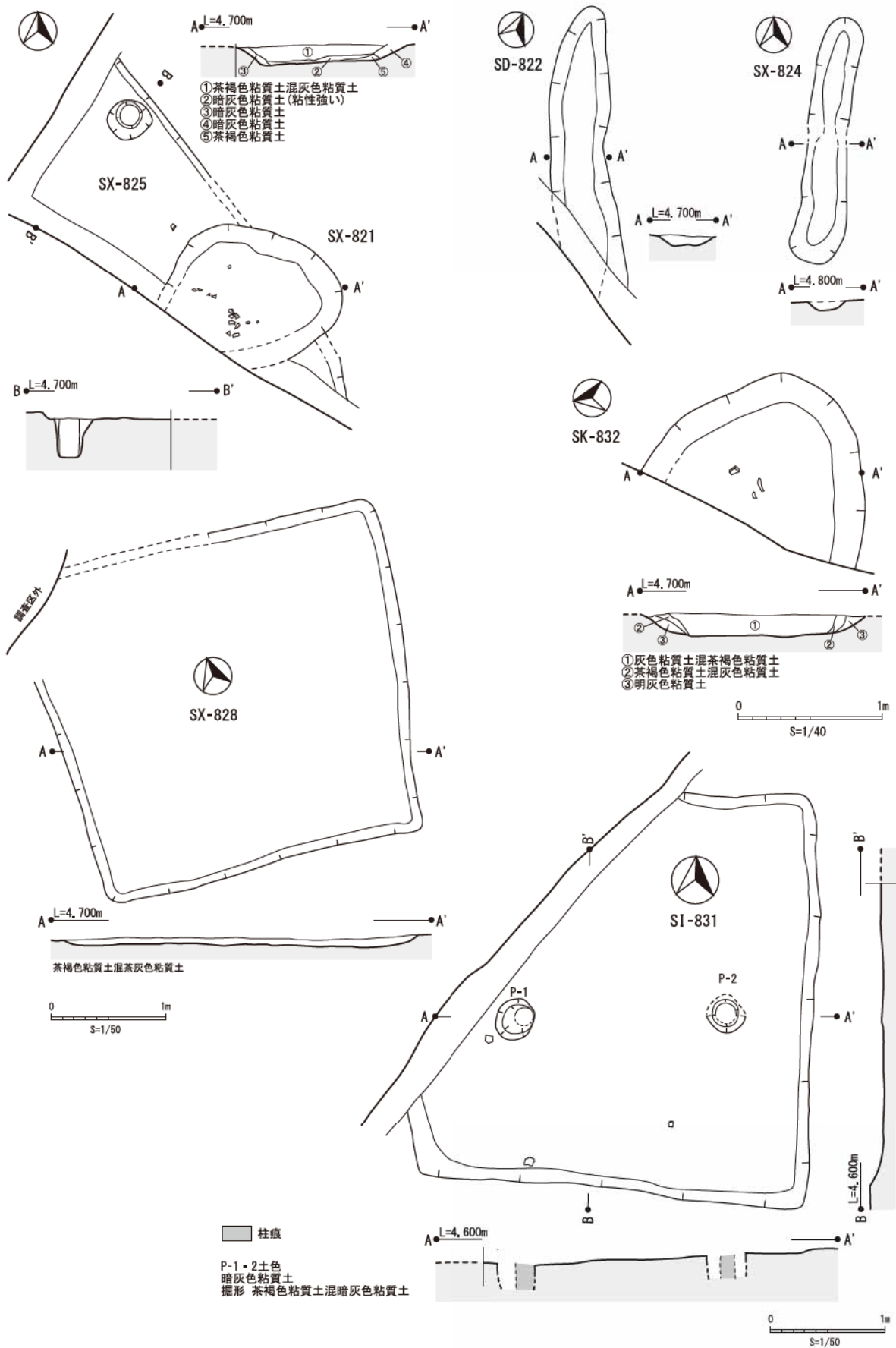
第 114 図 玉名平野条里跡 01-6 区 4 層上面遺構配置図



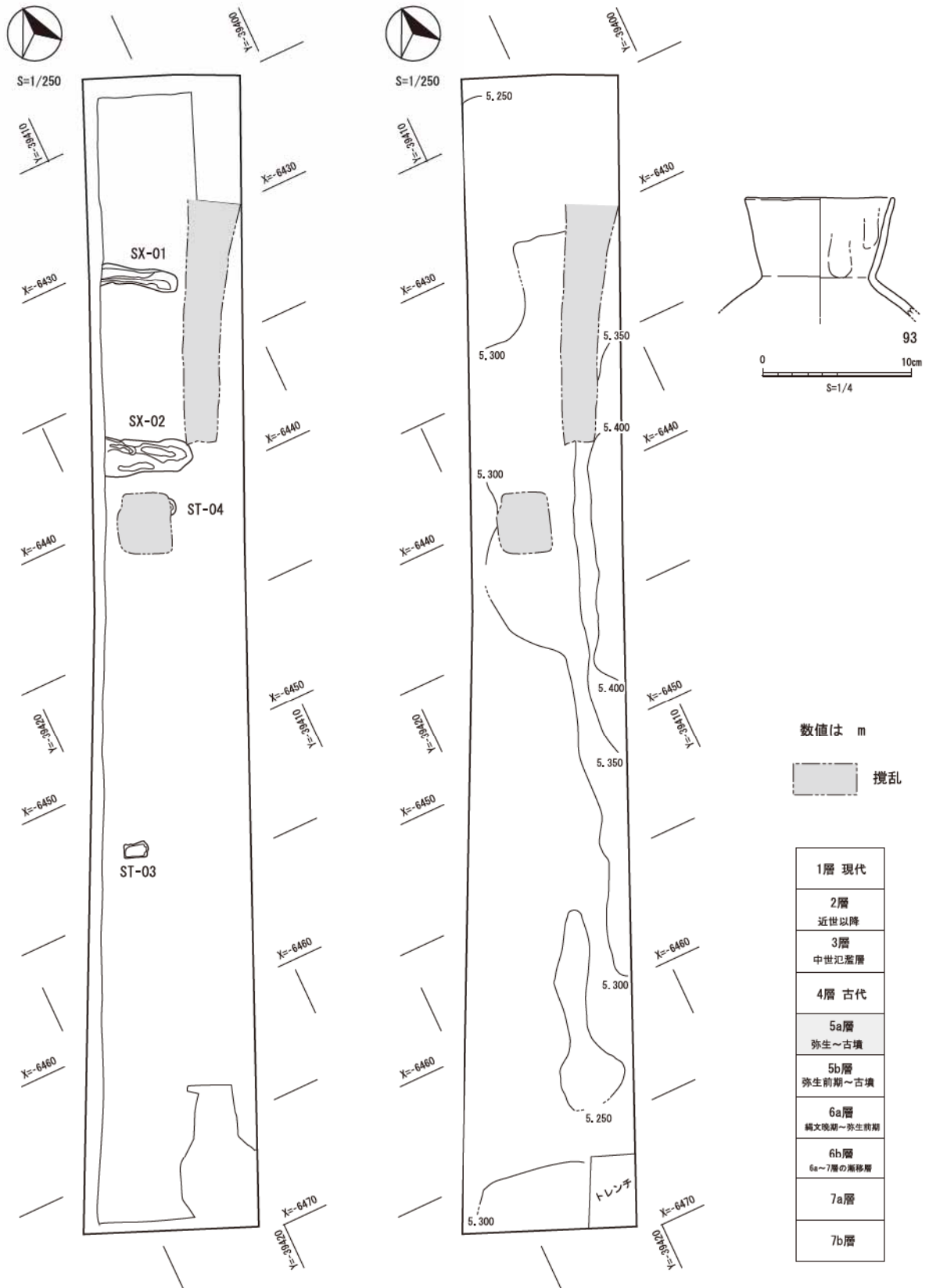
第 115 図 玉名平野条里跡 01-6 区 SX-409A・B・SX-422～425 実測図



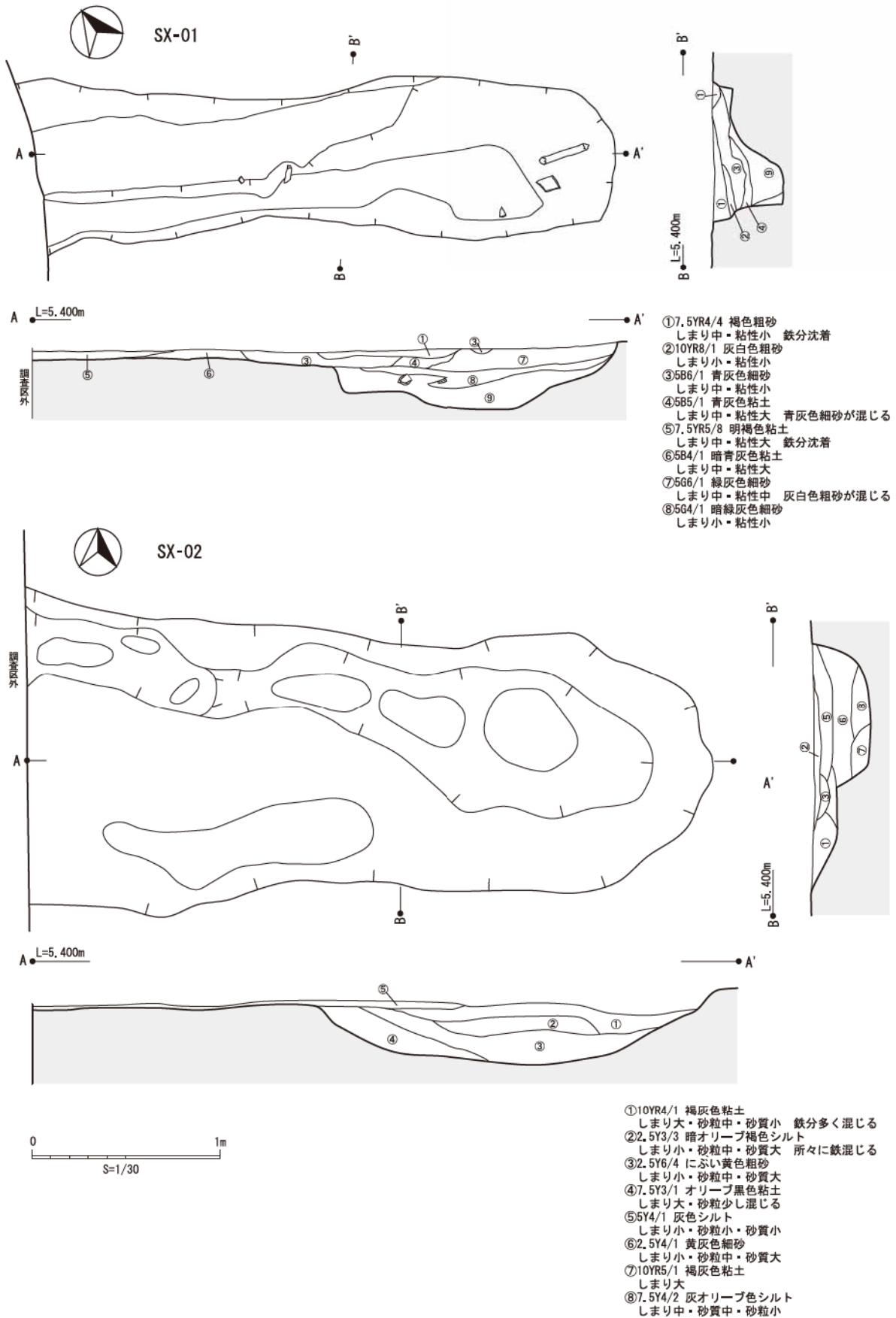
第 116 図 玉名平野条里跡 01-8 区 4 層上面遺構配置図及びコンタ図



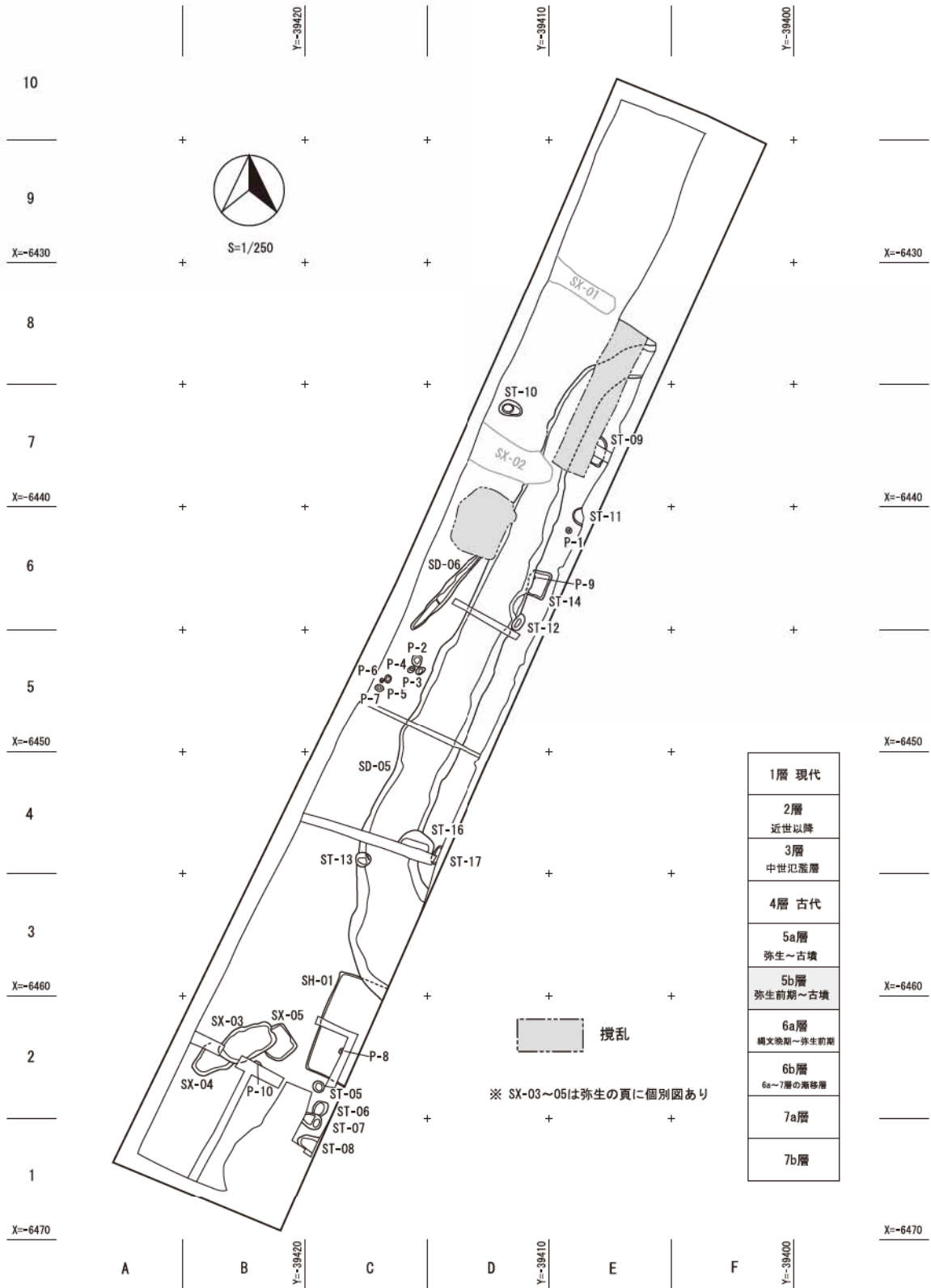
第 117 図 玉名平野条里跡 01-8 区
 SD-822・SK-832・SX-821・824・825・828・SI-831 実側図



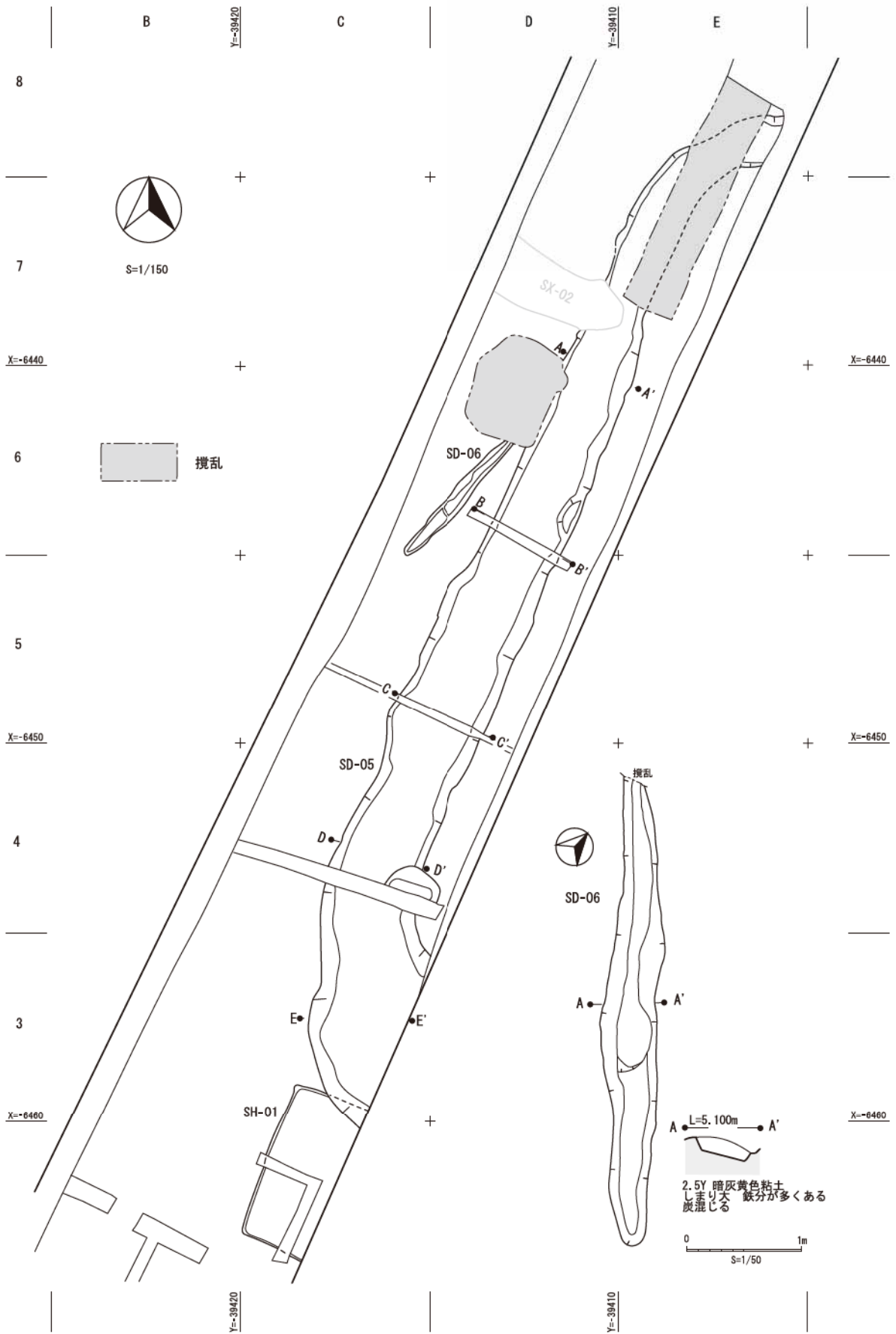
第 118 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区
5a 層上層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図



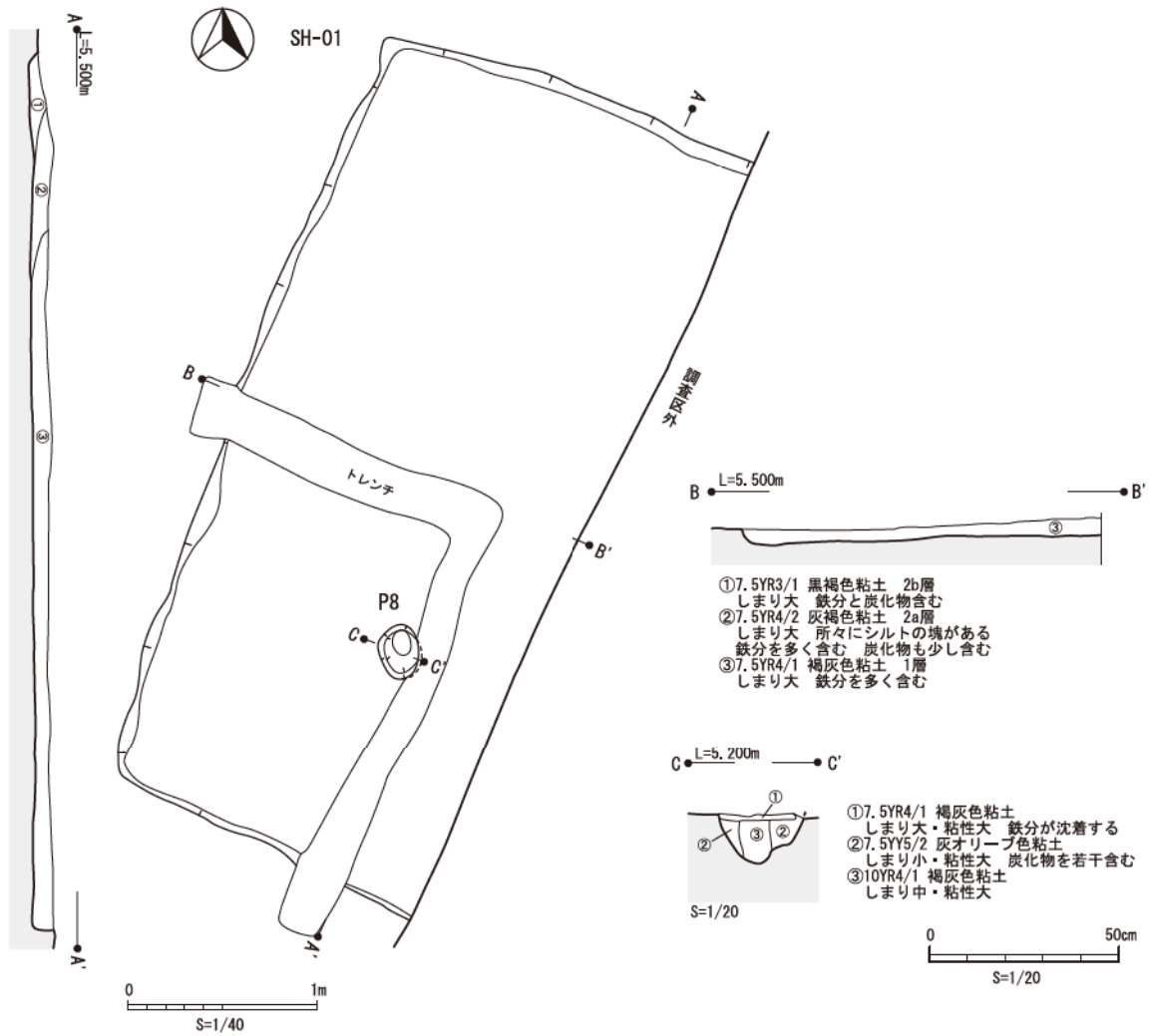
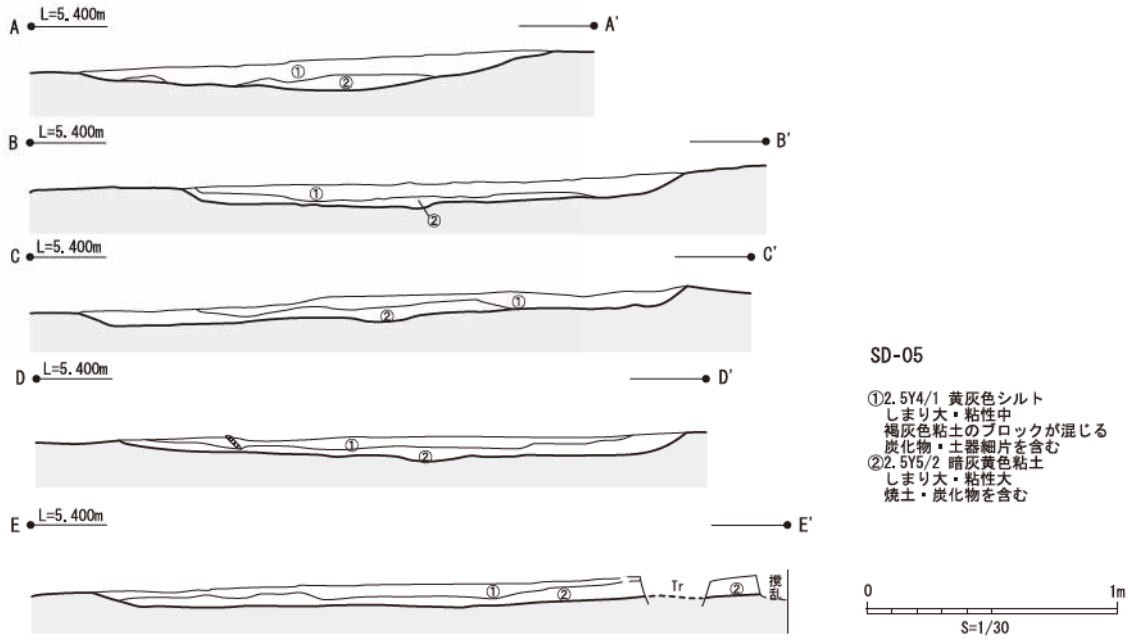
第 119 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SX-01・02 実測図



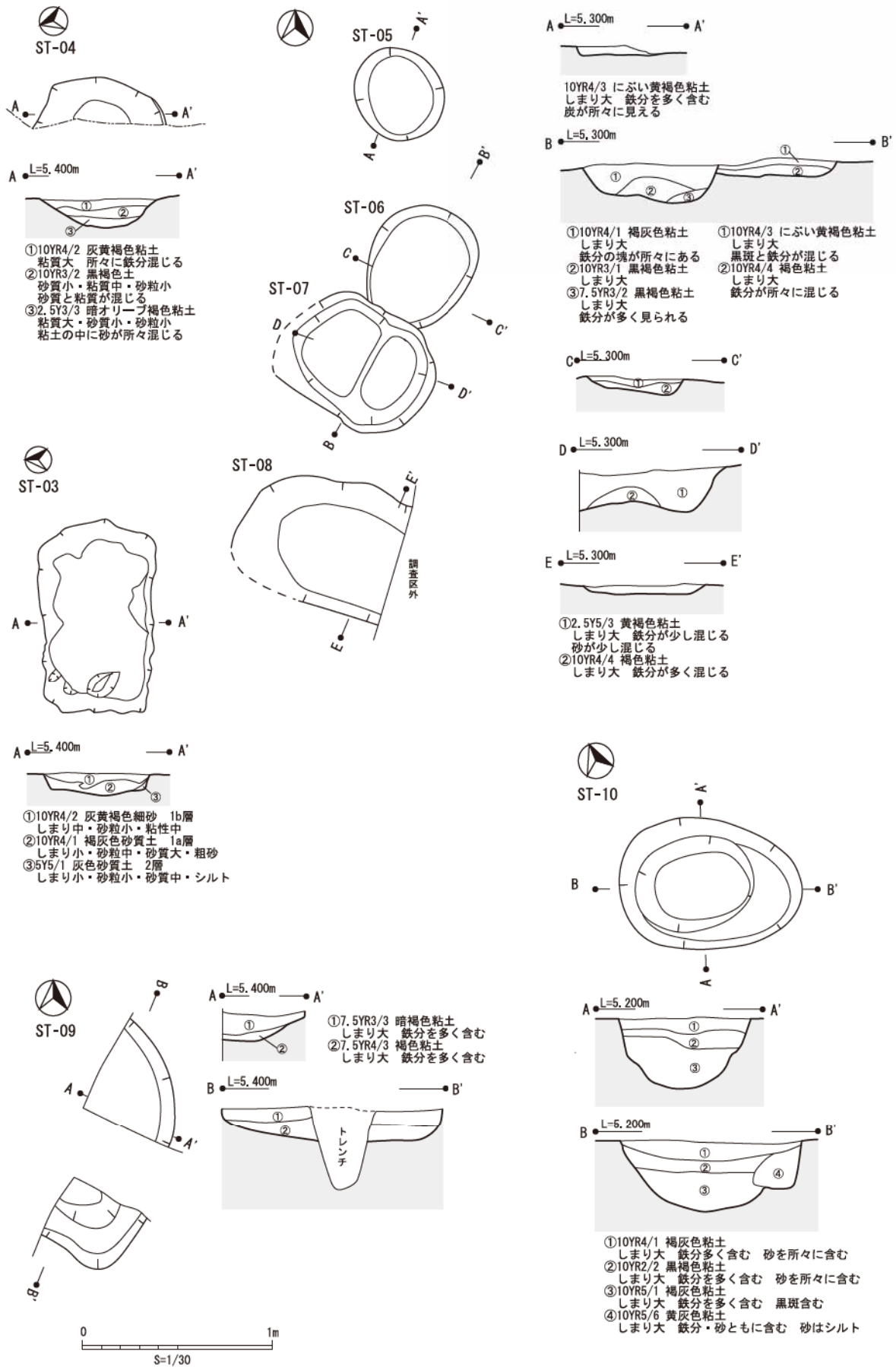
第 120 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 5b 層上層遺構配置図



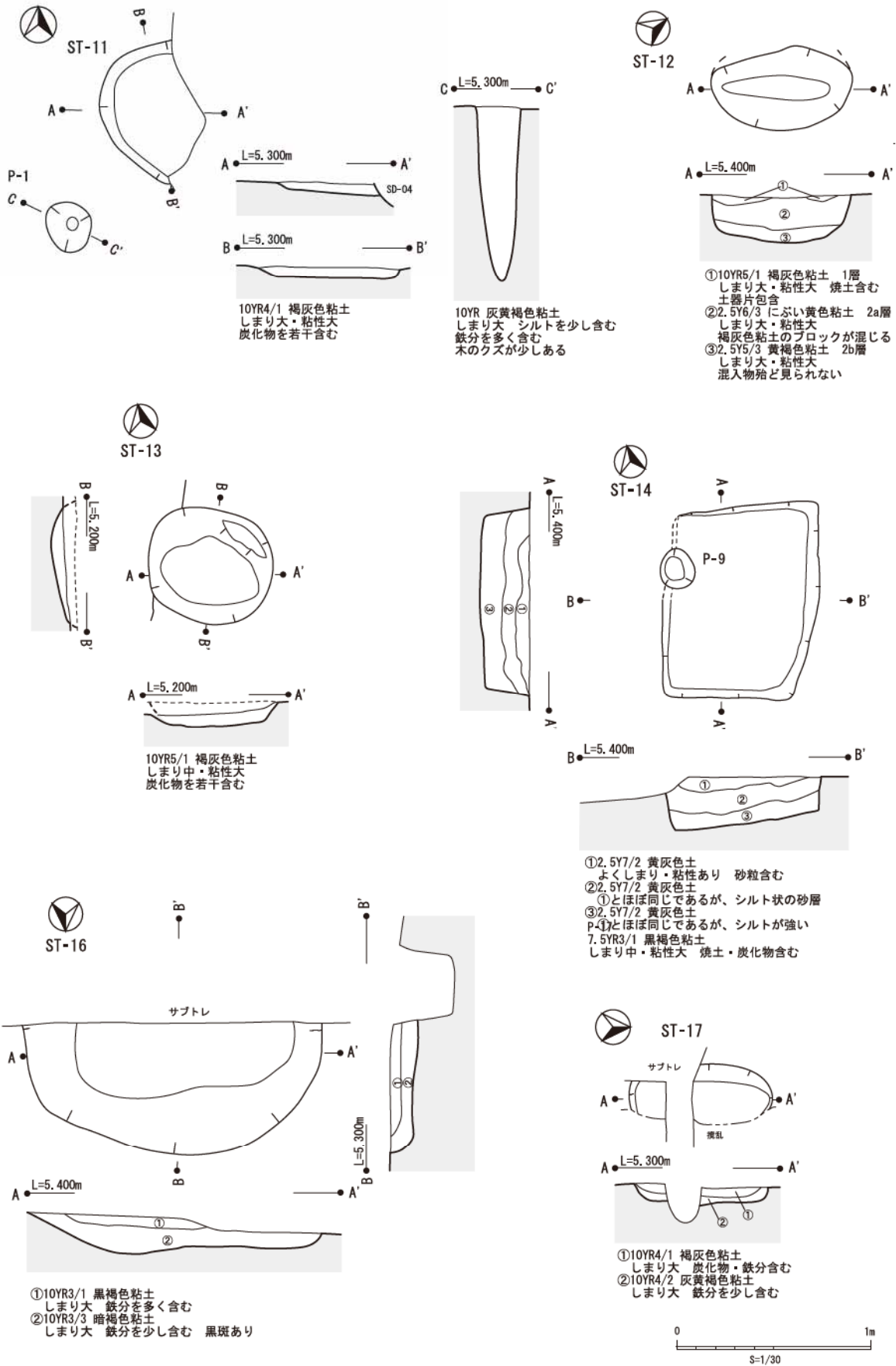
第 121 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SD-05・06 実測図



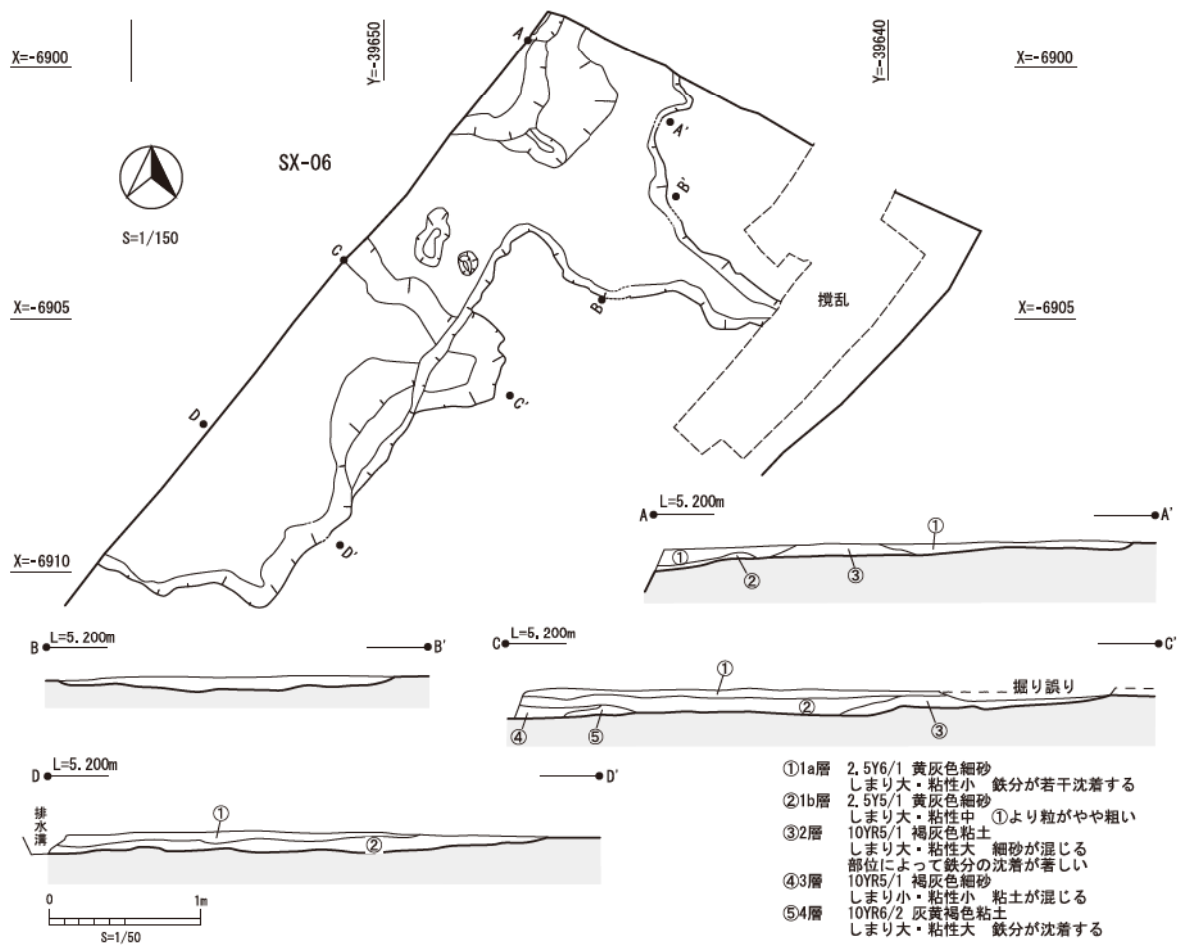
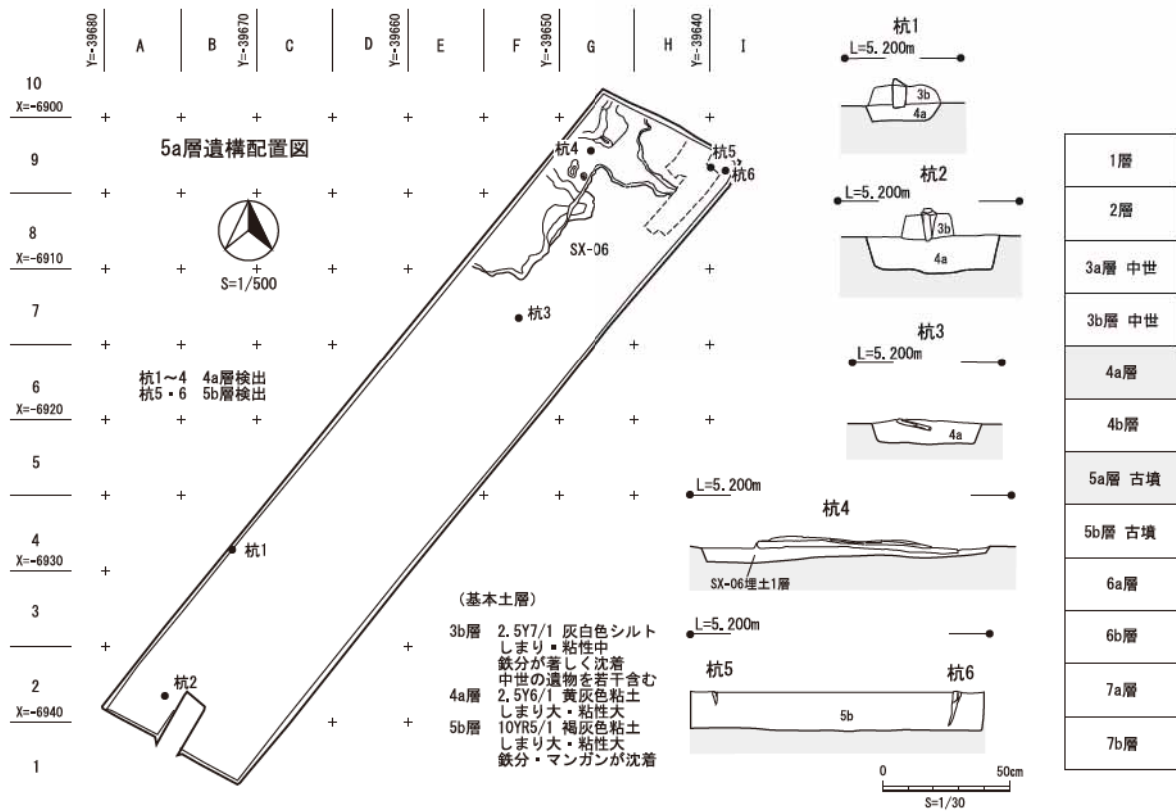
第 122 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 SD-05・SH-01・P8 実測図



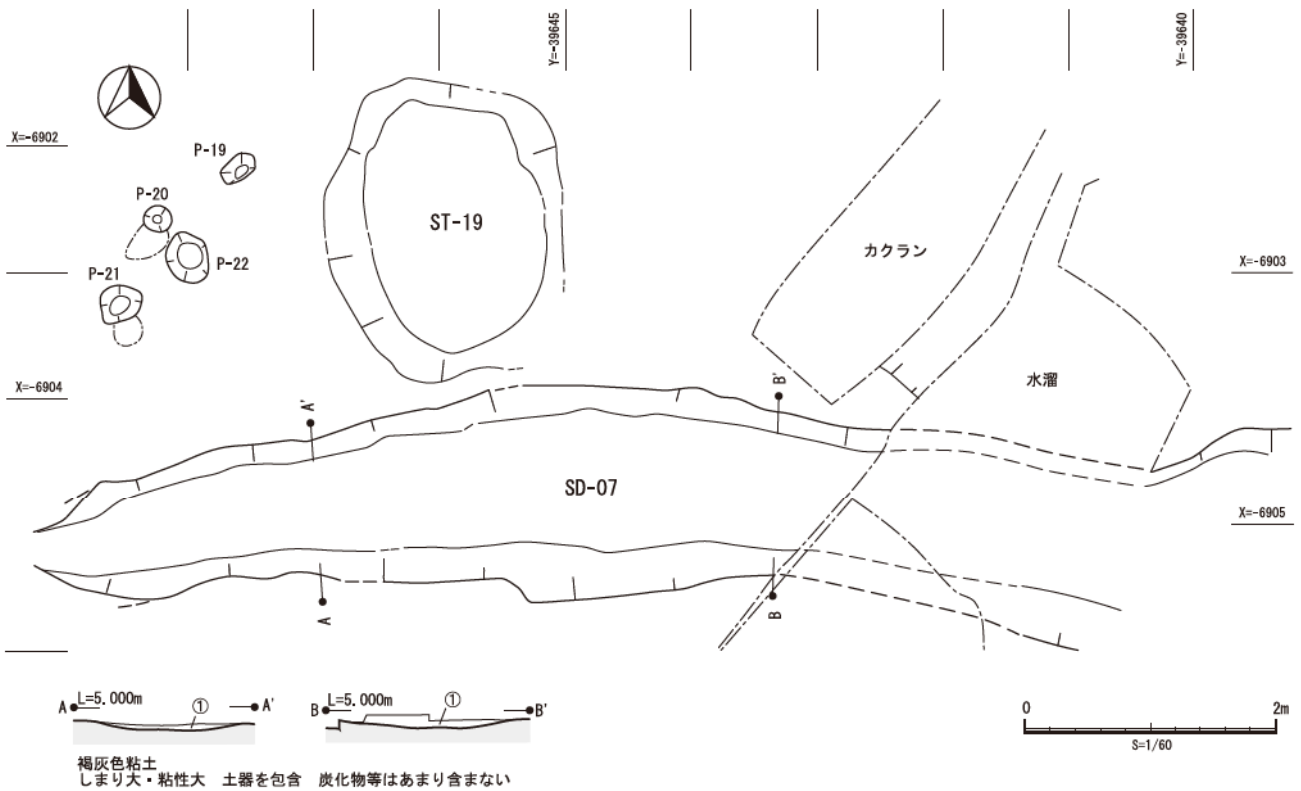
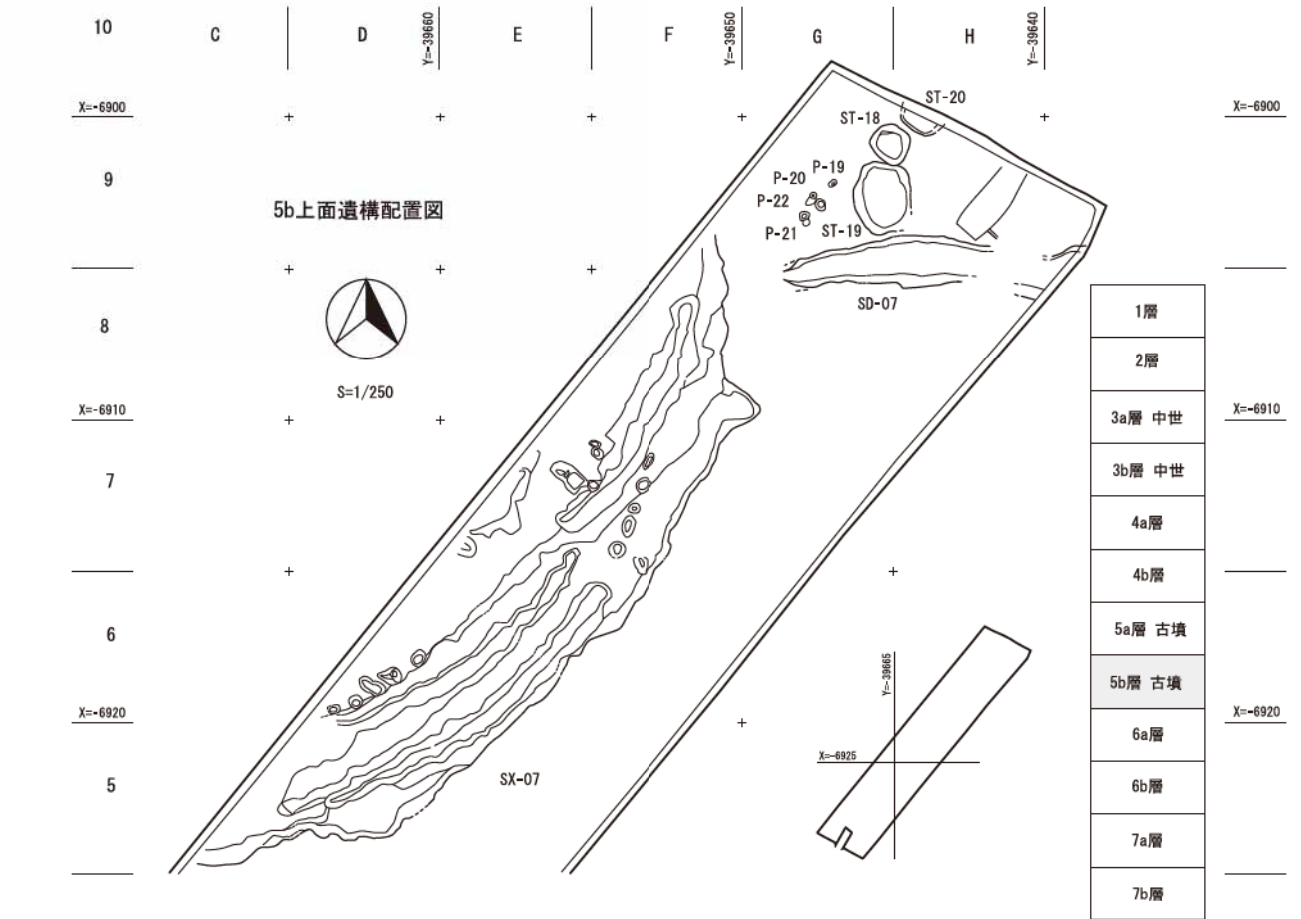
第 123 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 ST-03~10 実測図



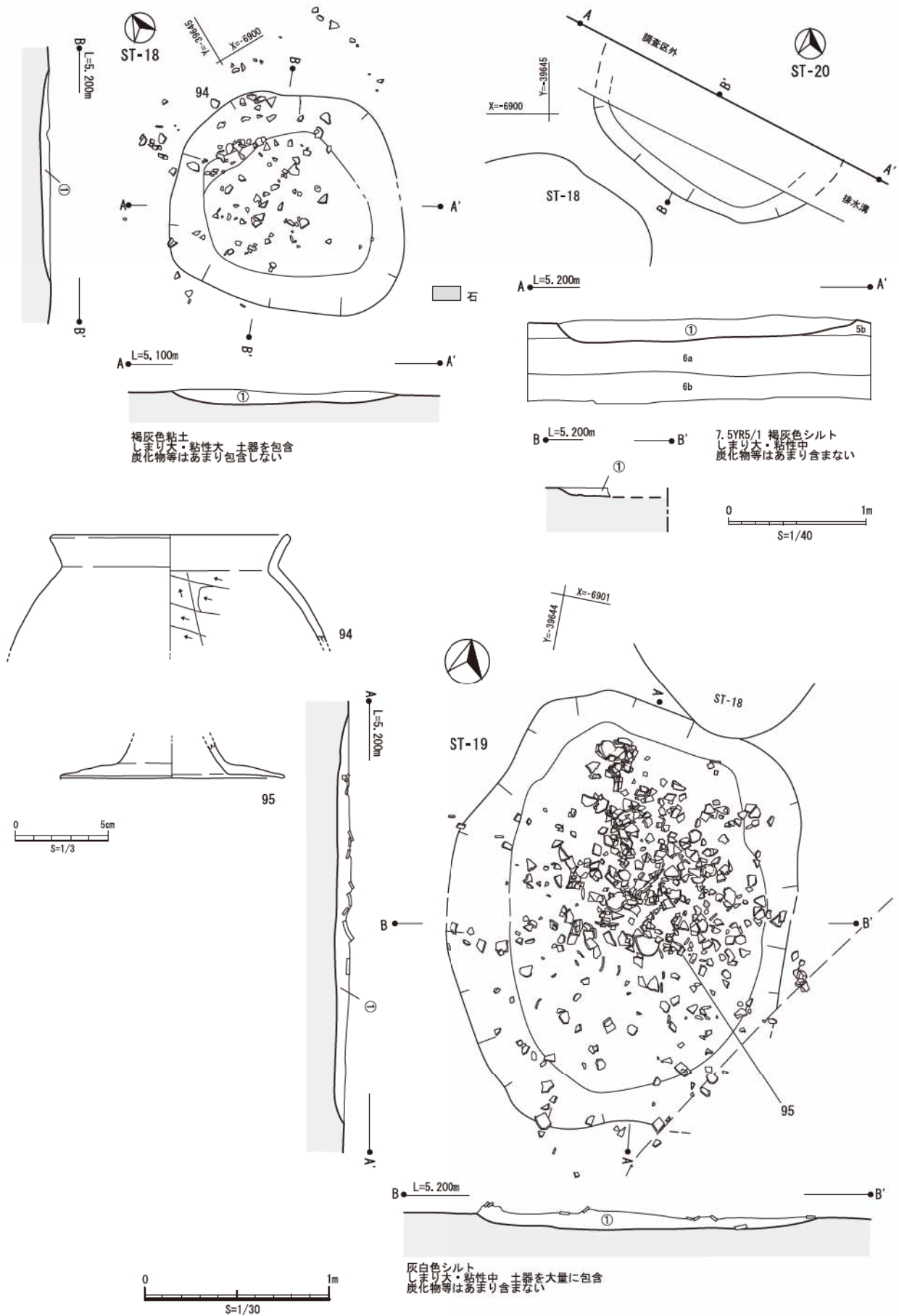
第 124 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 ST-11~14・16・17・P-1・9 実測図



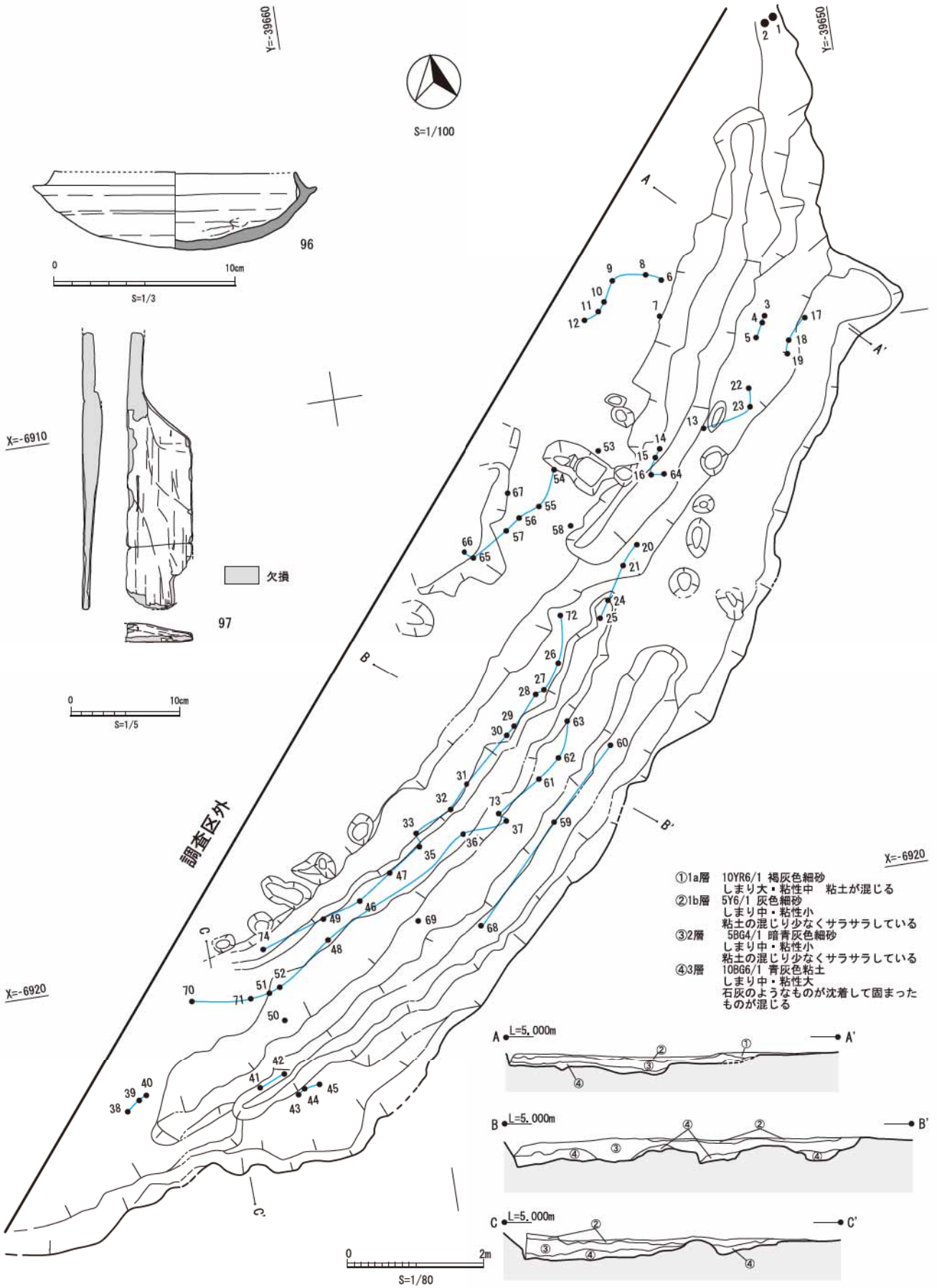
第 125 図 両迫間日渡遺跡 03-II 区
4a 層・5a 層遺構配置図及び杭 1~6・SX-06 実測図



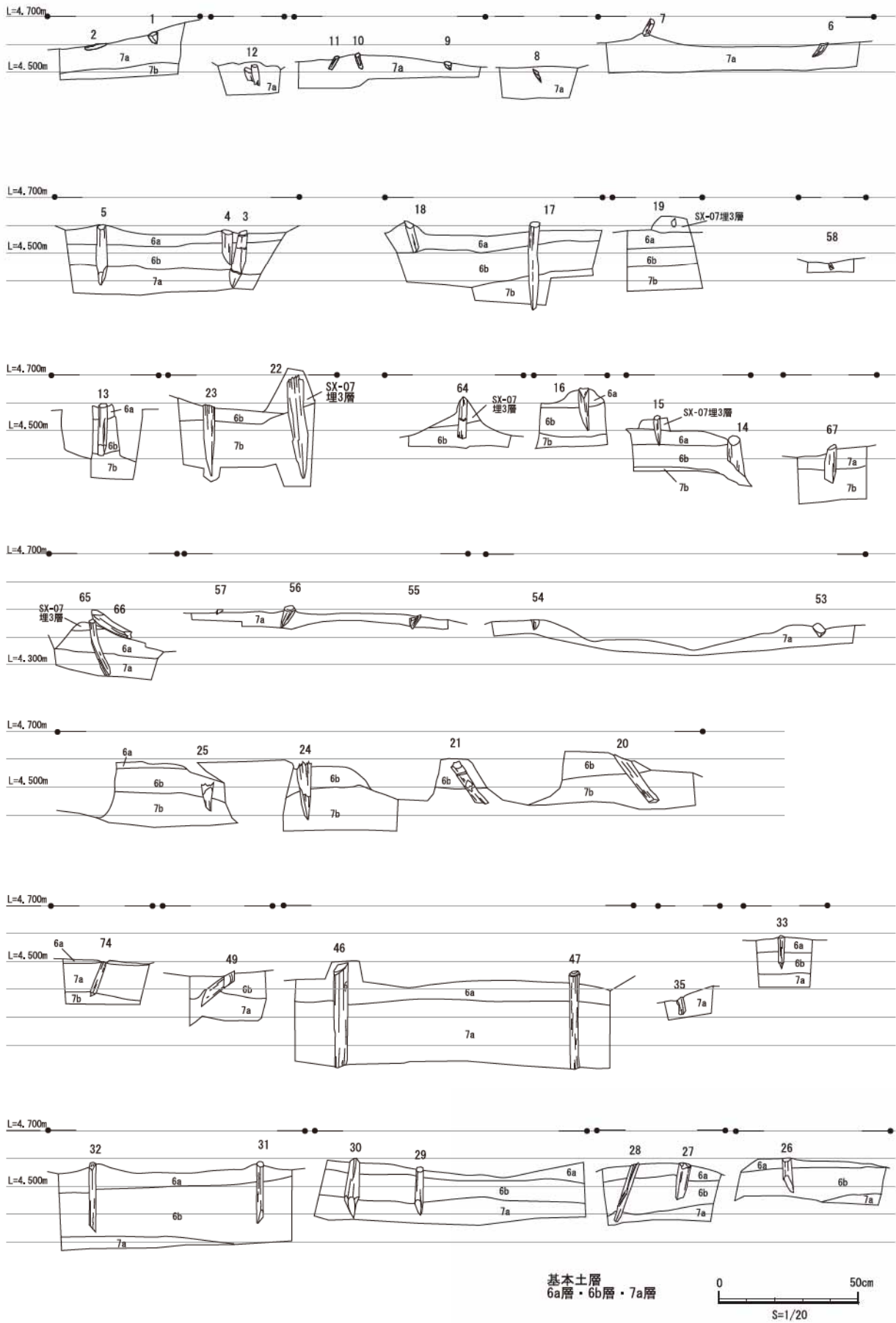
第 126 図 両迫間日渡遺跡 03-II 区 5b 層上面遺構配置図及び SD-07・P-19~22 実測図



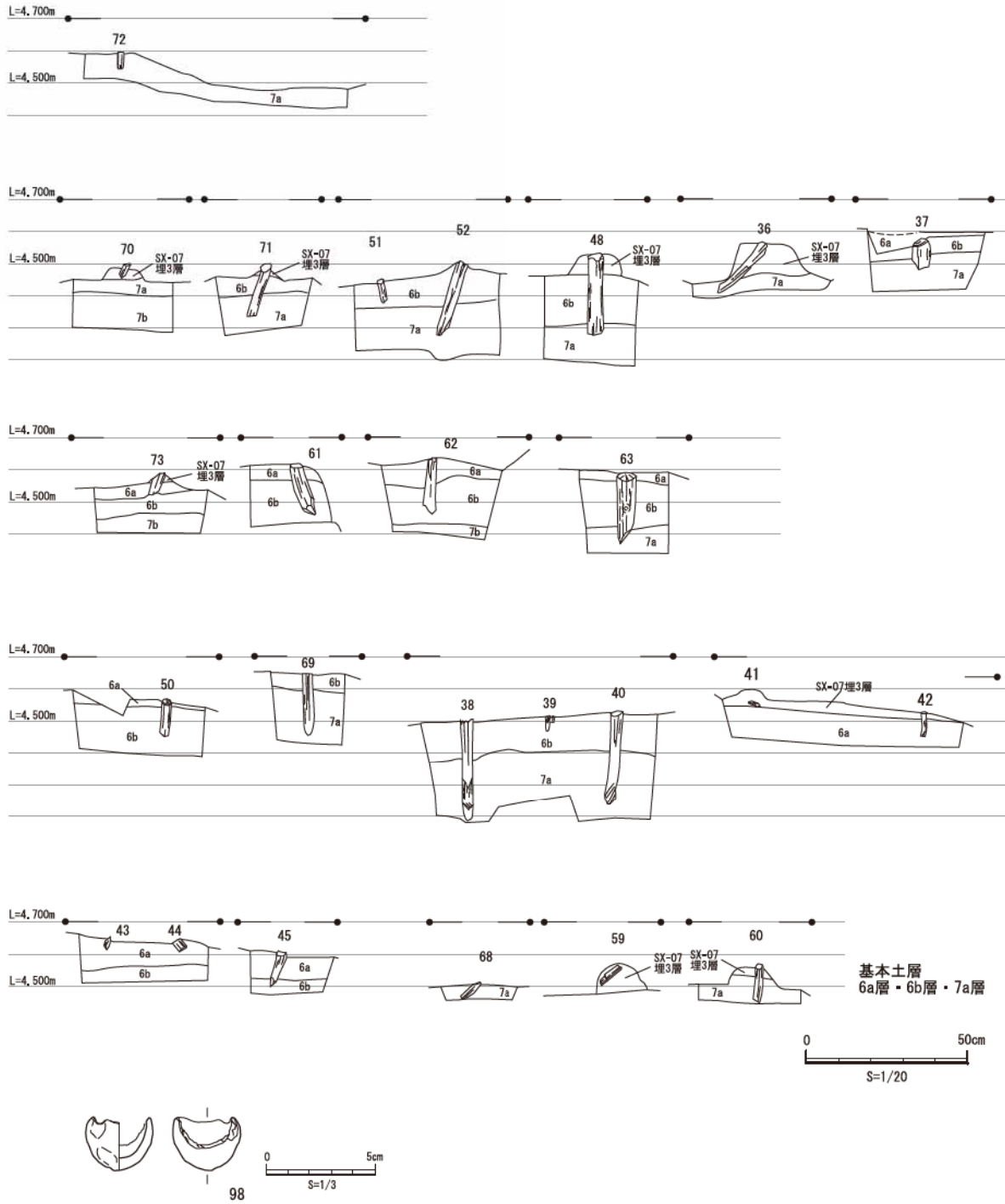
第 127 図 両迫間日渡遺跡 03-II区 ST-18~20 実測図及び出土遺物実測図



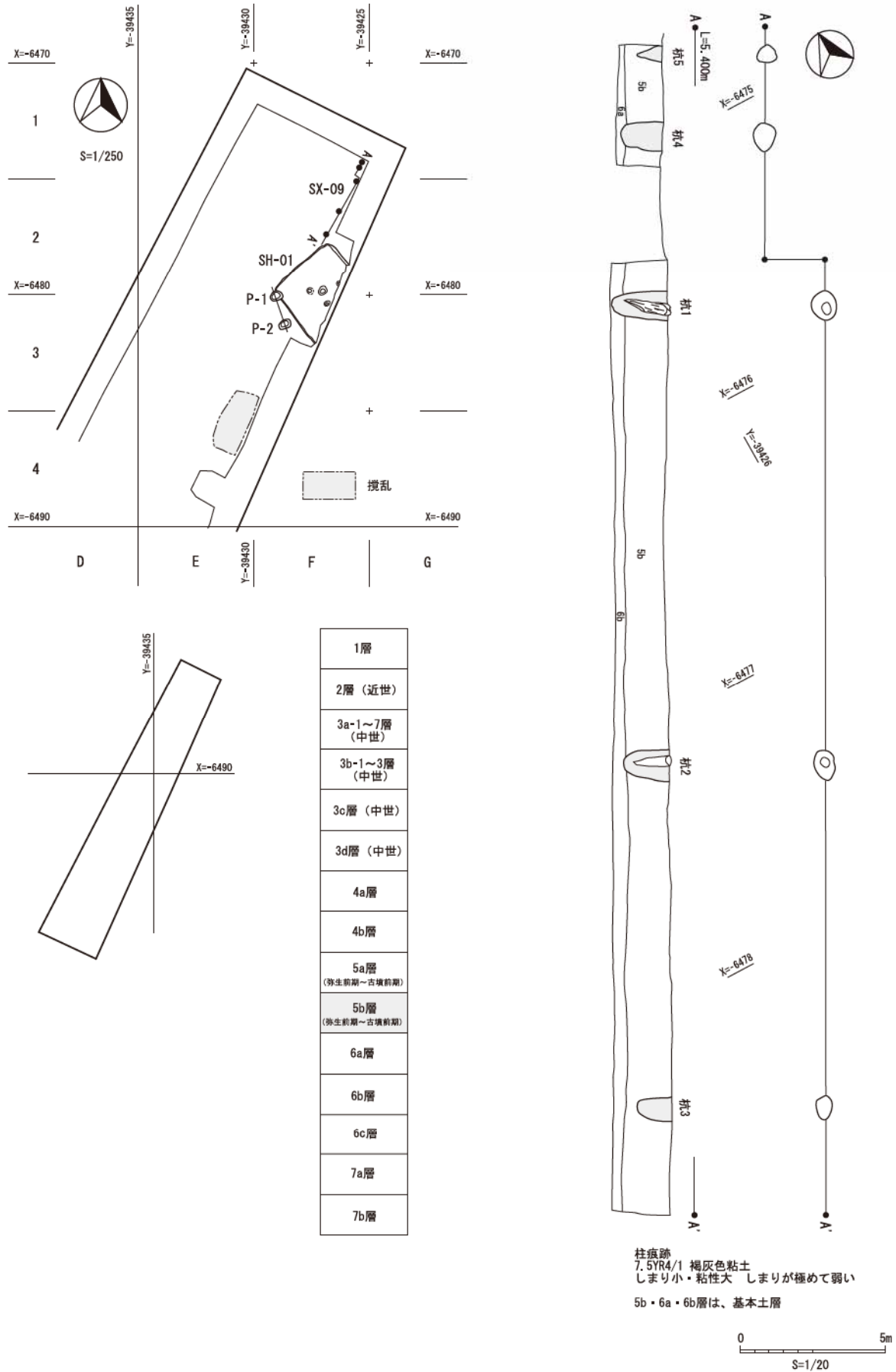
第 128 図 両迫間日渡遺跡 03-II 区 SX-07 実測図及び出土遺物実測図



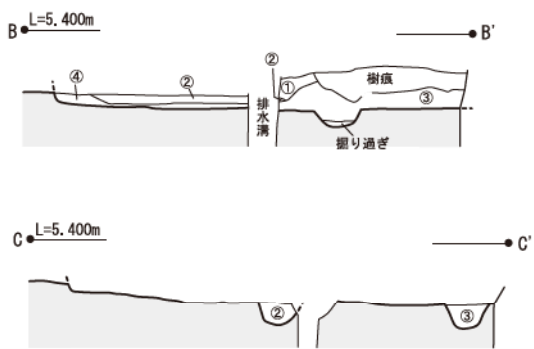
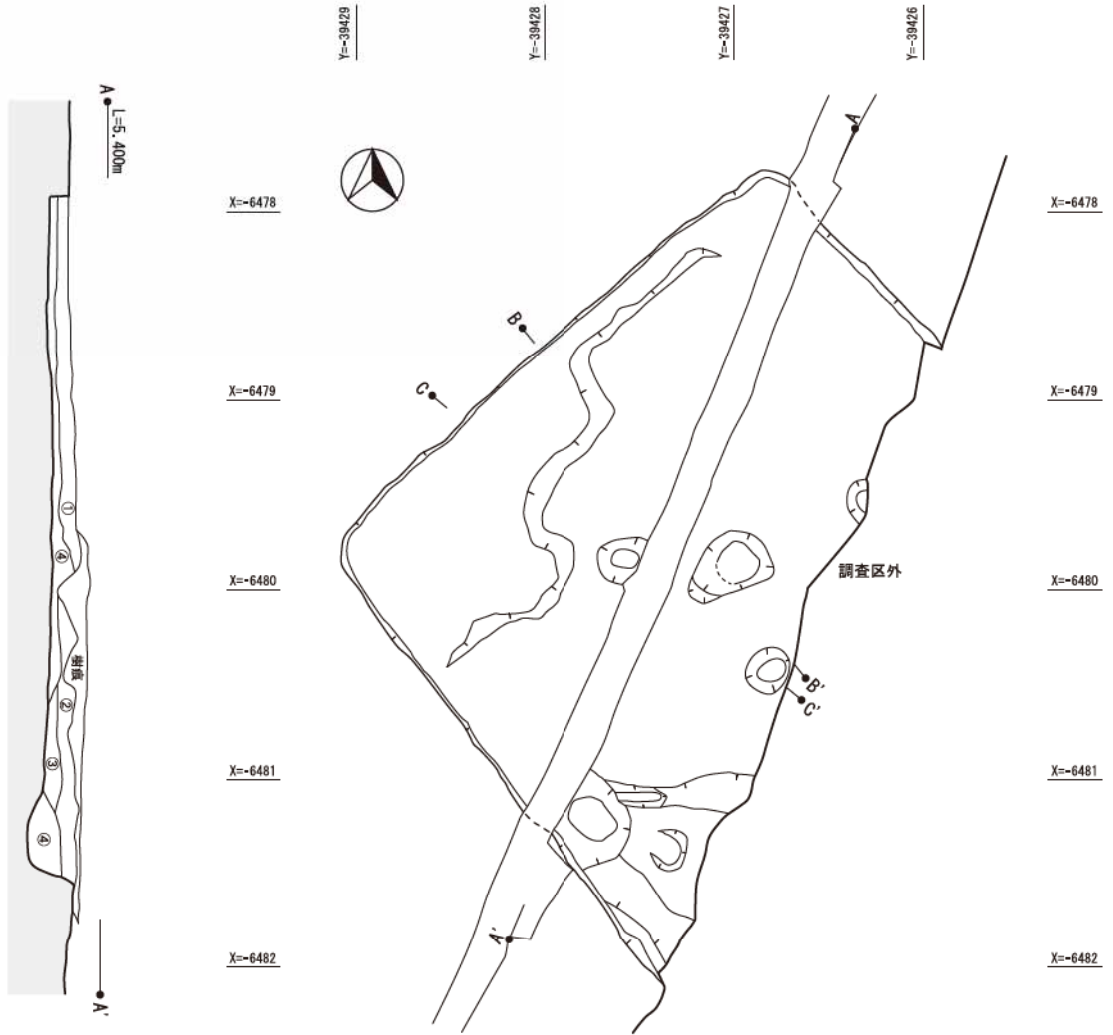
第 129 図 両迫間日渡遺跡 O3-II 区 SX-07 杭群実測図 1



第130図 両迫間日渡遺跡 03-II区
SX-07 杭群実測図2及び包3b層出土遺物実測図



第 131 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 5b 層遺構配置図及び SX-09 実測図

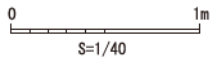


明確なベッド状遺構は確認されなかったが段が見られた

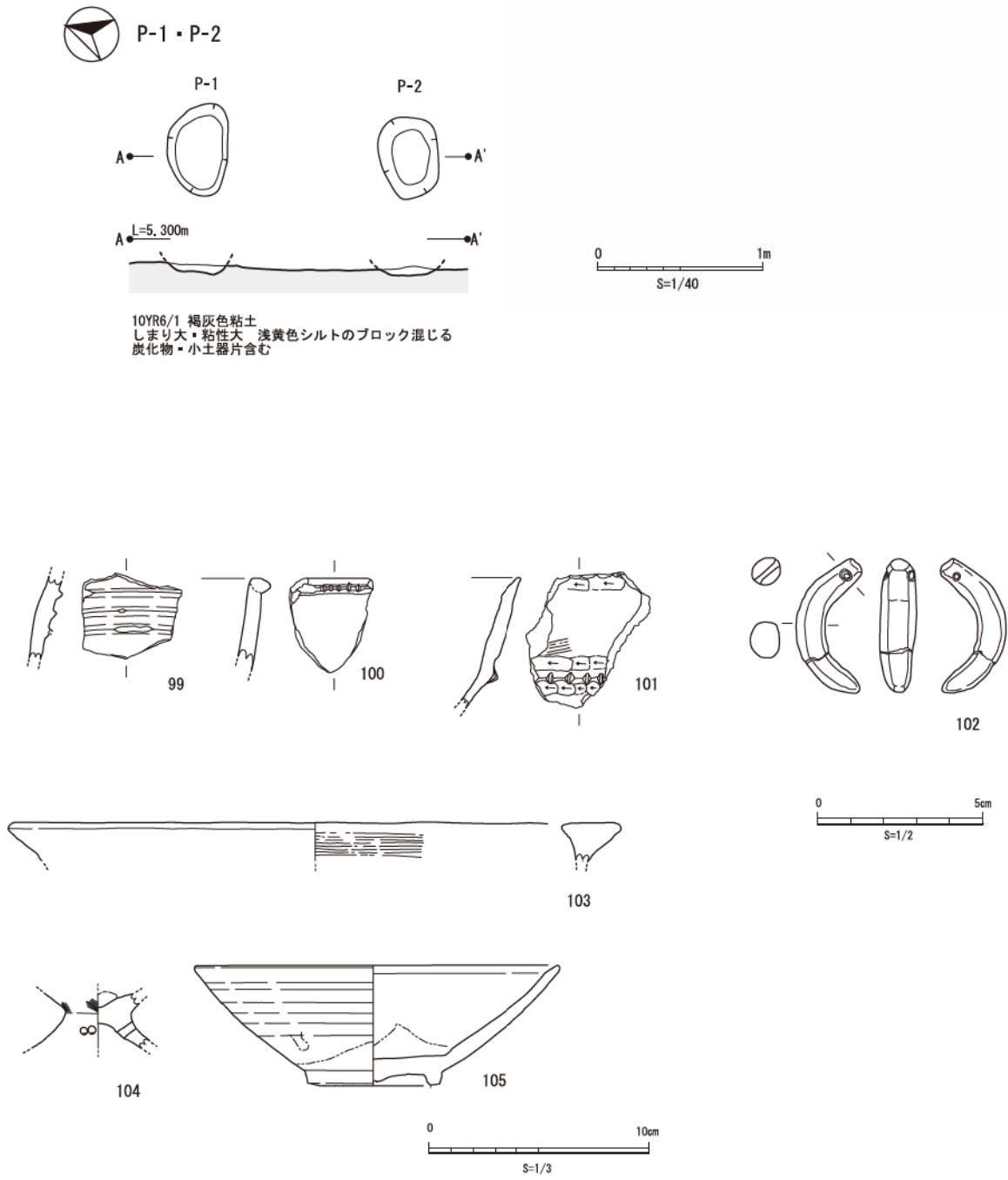
位置関係から伊穴と考えられる穴が検出されたが、炭化物・焼土は全く出土しなかった

出入口施設も考えられるが矢筈と排水溝に両端を切られるため詳細不明

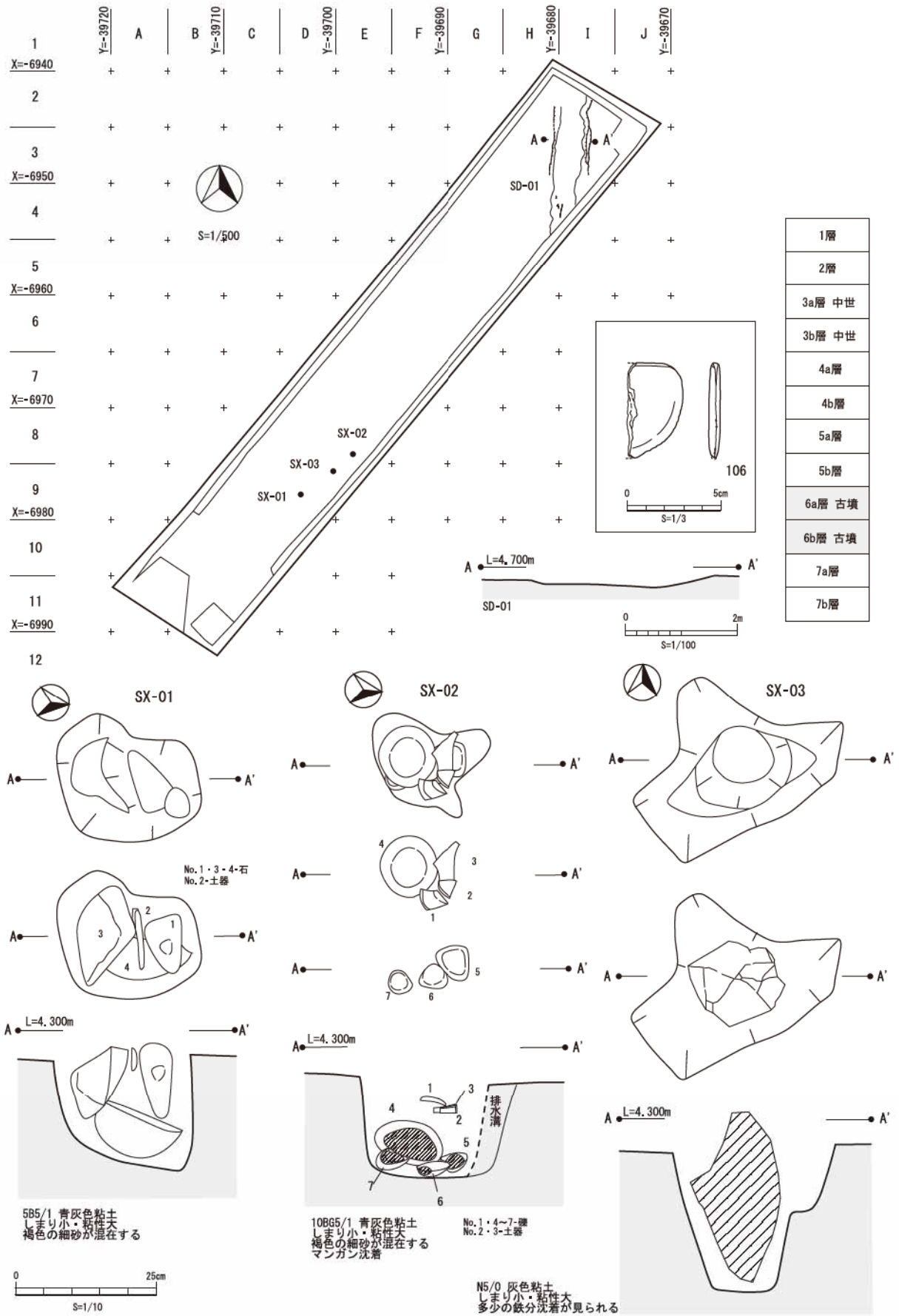
- ①7.5YR5/1 褐灰色粘土 1a層
しまり中・粘性大 鉄分多く沈着 マンガン粒沈着
- ②7.5YR6/1 褐灰色粘土 1b層
しまり中・粘性大 鉄分・マンガン沈着 1a層より少ない
- ③7.5YR4/1 褐灰色粘土 2層
しまり小・粘性大 浅黄色シルトが若干混じる
- ④10YR4/1 褐灰色粘土 3層
しまり中・粘性大 黒褐色粘土・浅黄色シルト混じる
マンガン粒・鉄分を多く含む



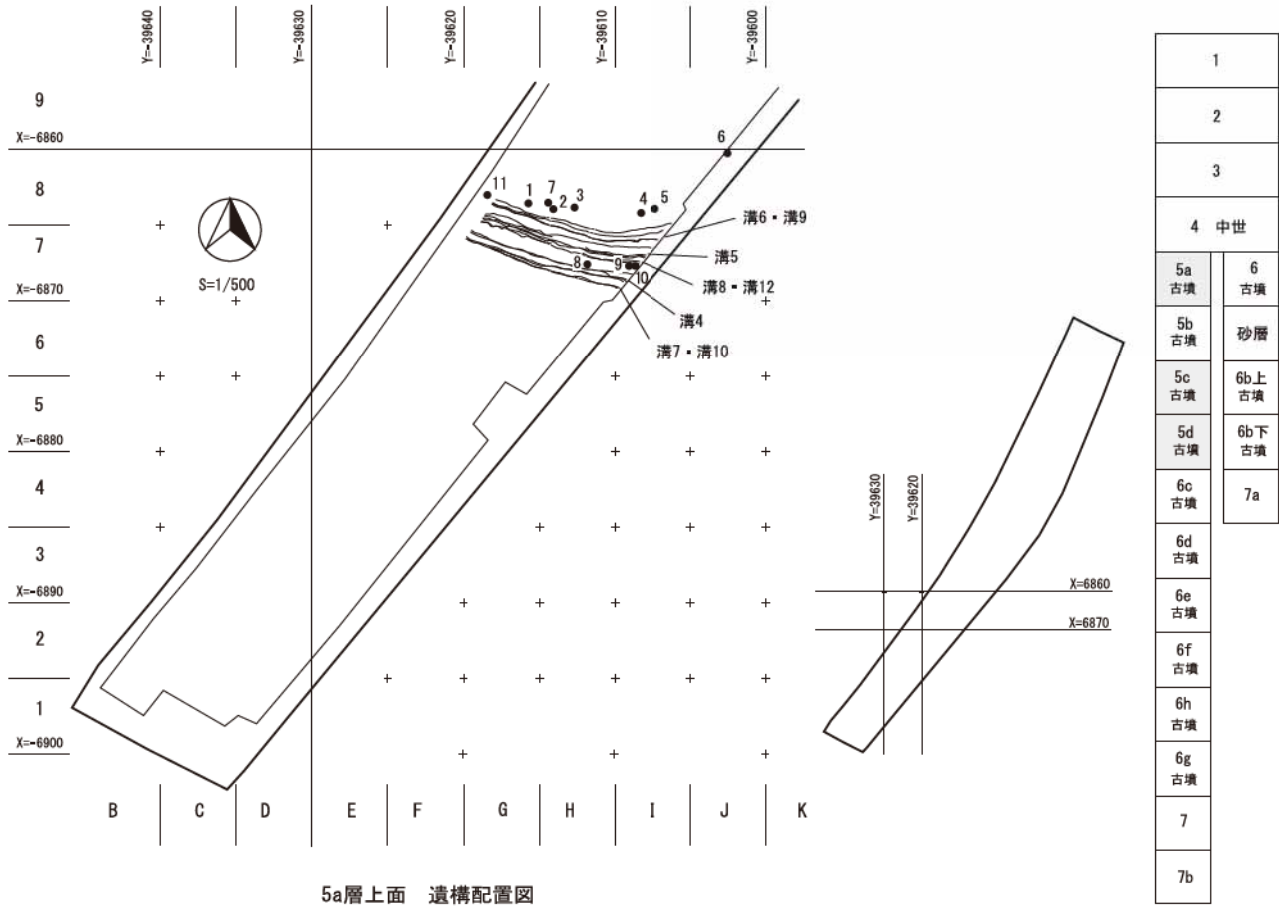
第 132 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SH-01 実測図



第 133 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 P-1・2 実測図及び出土遺物実測図

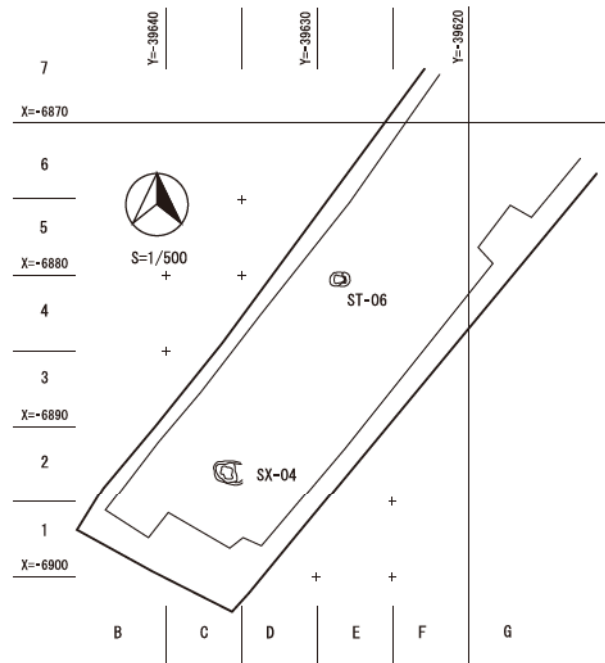
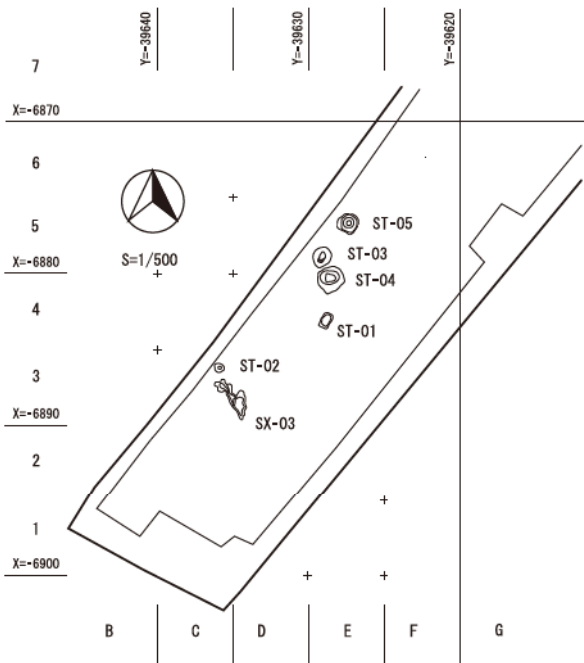


第 134 図 玉名平野条里跡 04- I 区
6 層遺構配置図・SD-01・SX-01~03 実測図及び出土遺物実測図

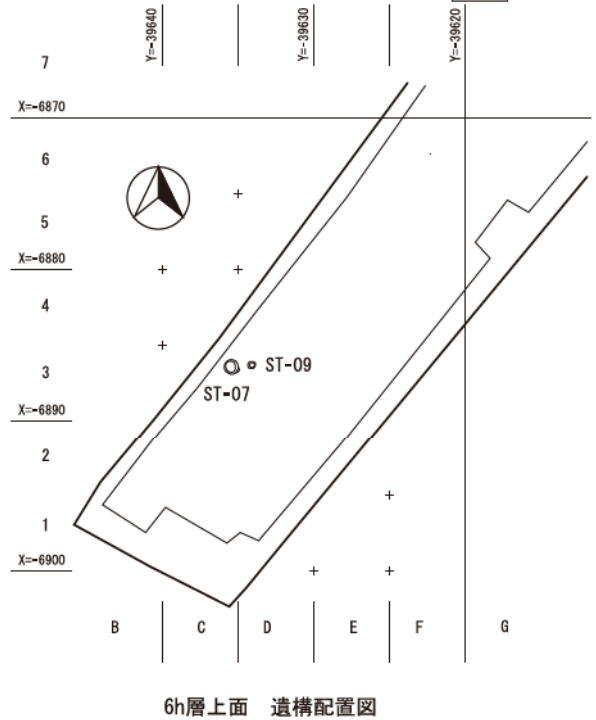
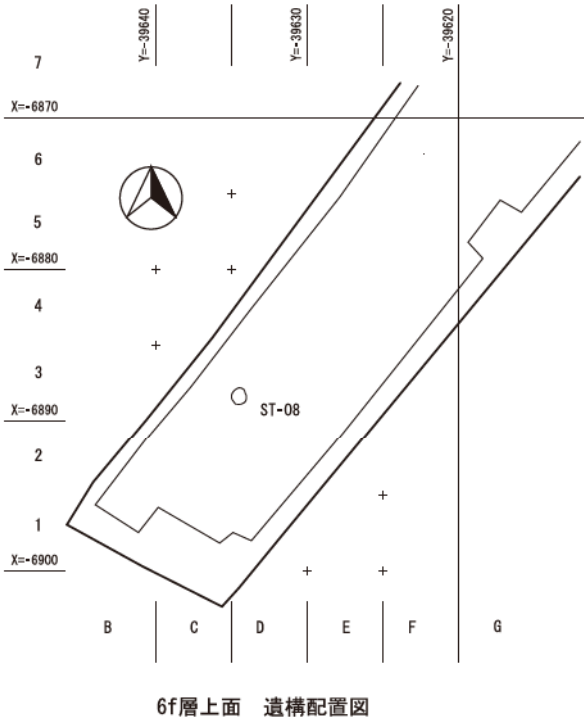
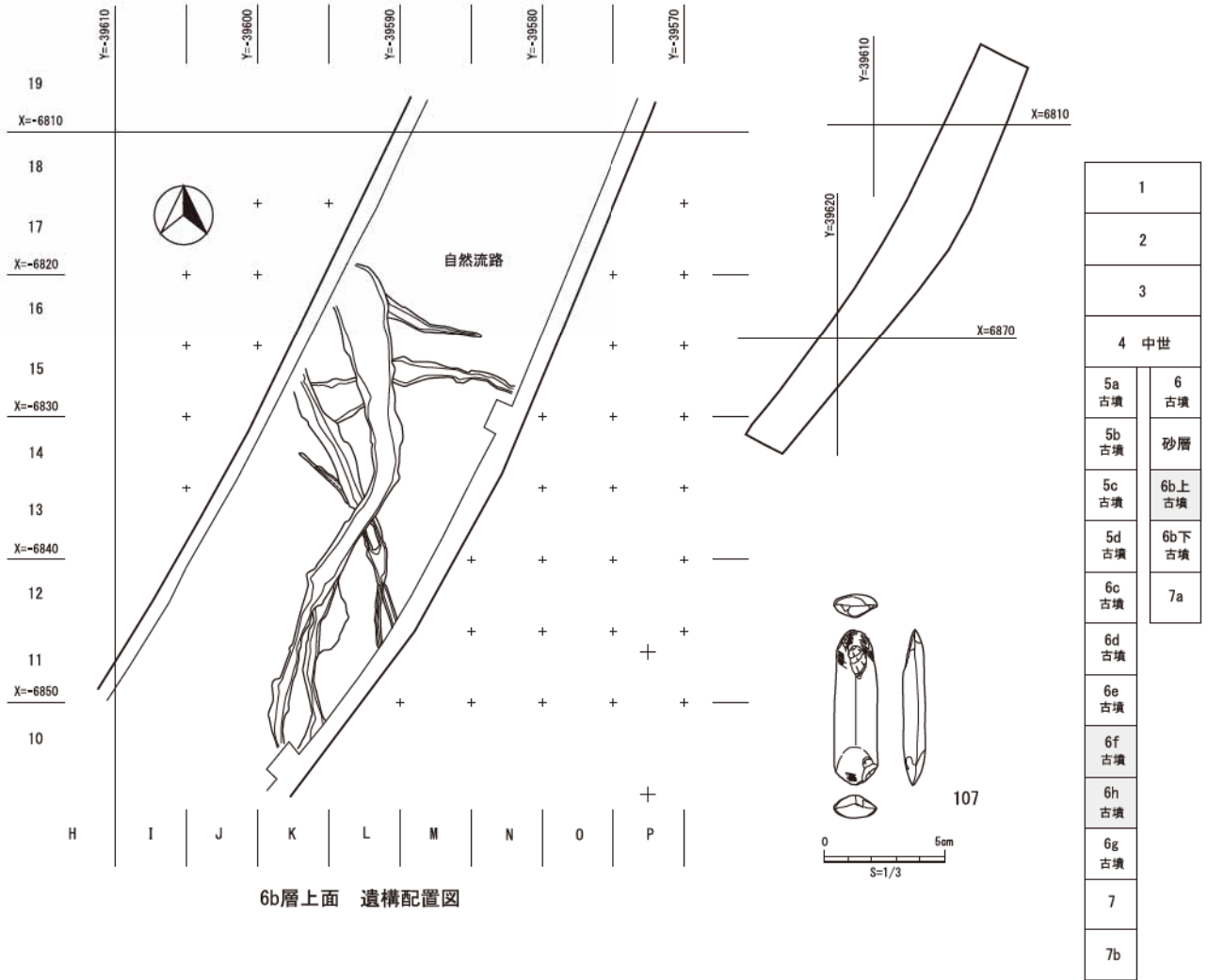


1
2
3
4 中世
5a 古墳
5b 古墳
5c 古墳
5d 古墳
6c 古墳
6d 古墳
6e 古墳
6f 古墳
6h 古墳
6g 古墳
7
7b

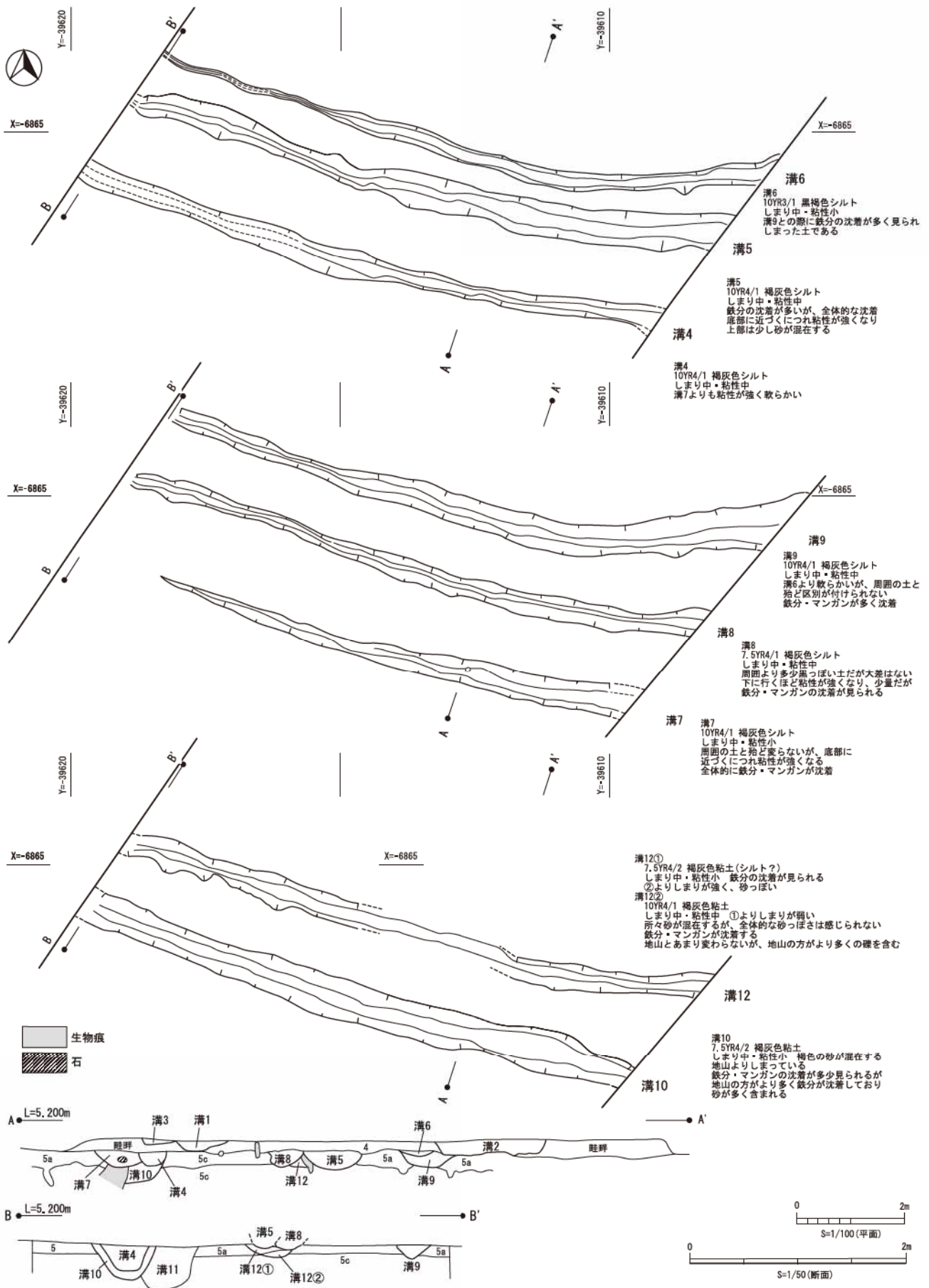
6 古墳
砂層
6b上 古墳
6b下 古墳
7a



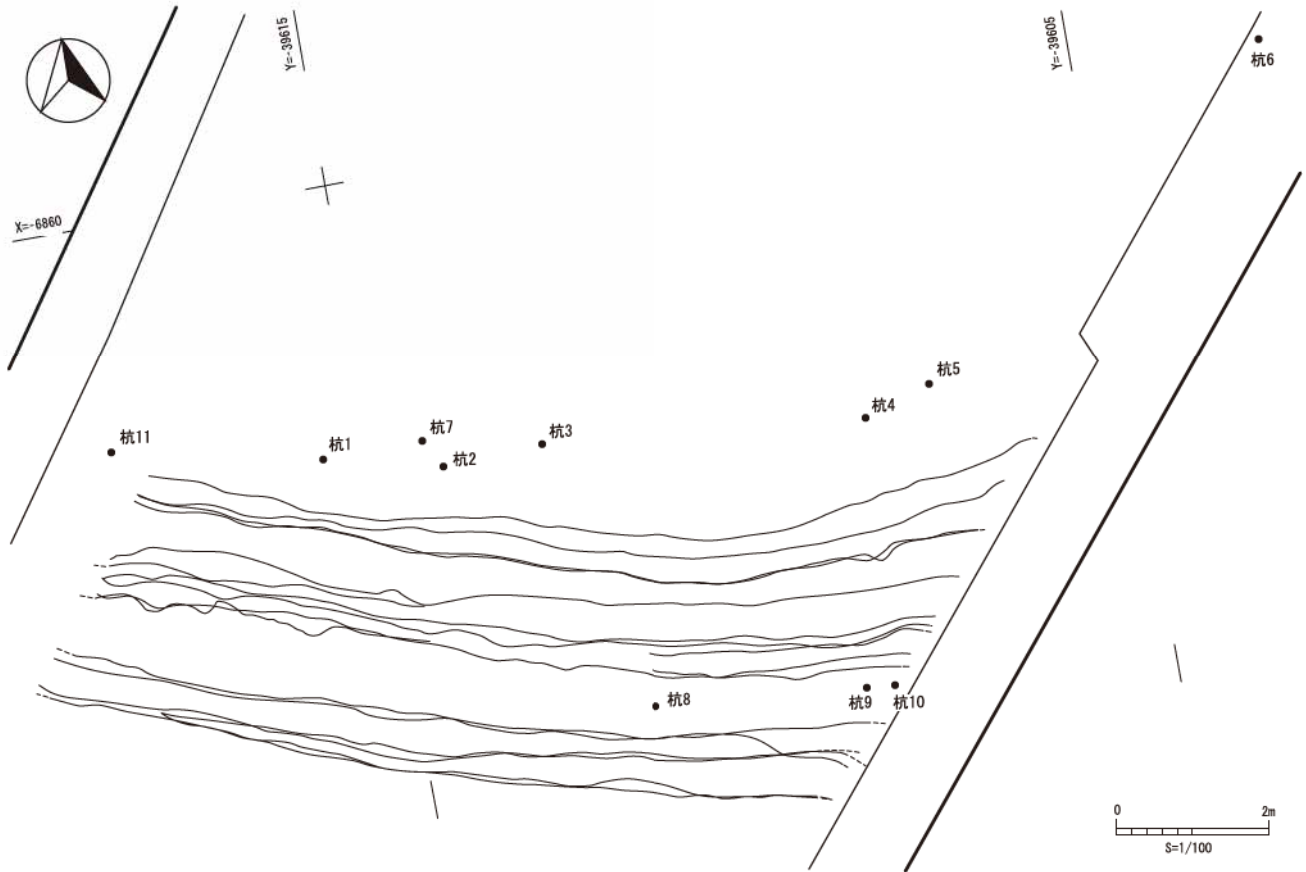
第 135 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 5a層・5c層・5d層上面遺構配置図



第 136 図 両迫間日渡遺跡 04-II区
6b層・6f層・6h層上面遺構配置図及び出土遺物実測図

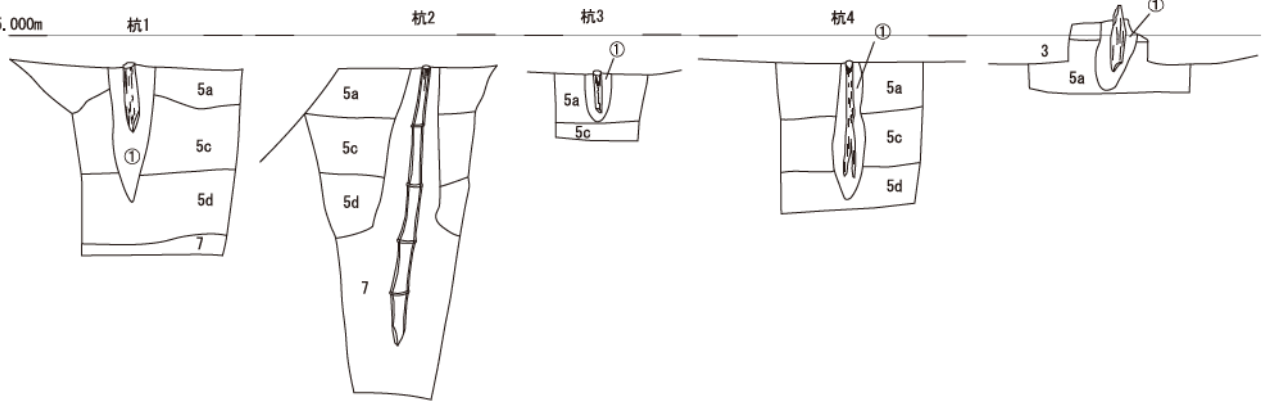


第 137 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 SX-01 (溝 4~10・12) 実測図



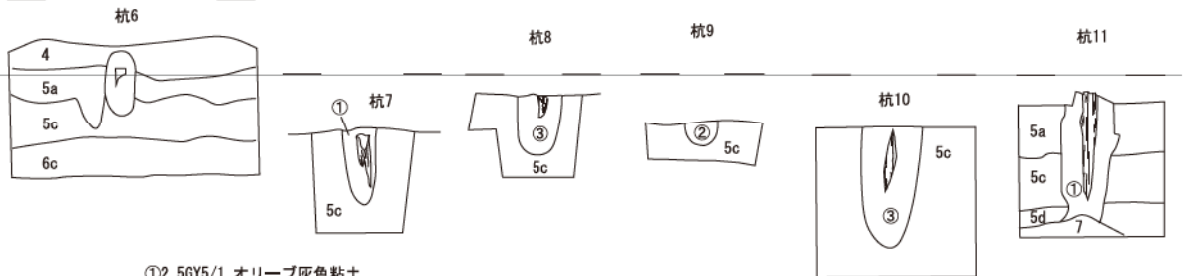
L=5.100m

L=5.000m



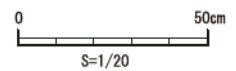
L=5.100m

L=4.900m

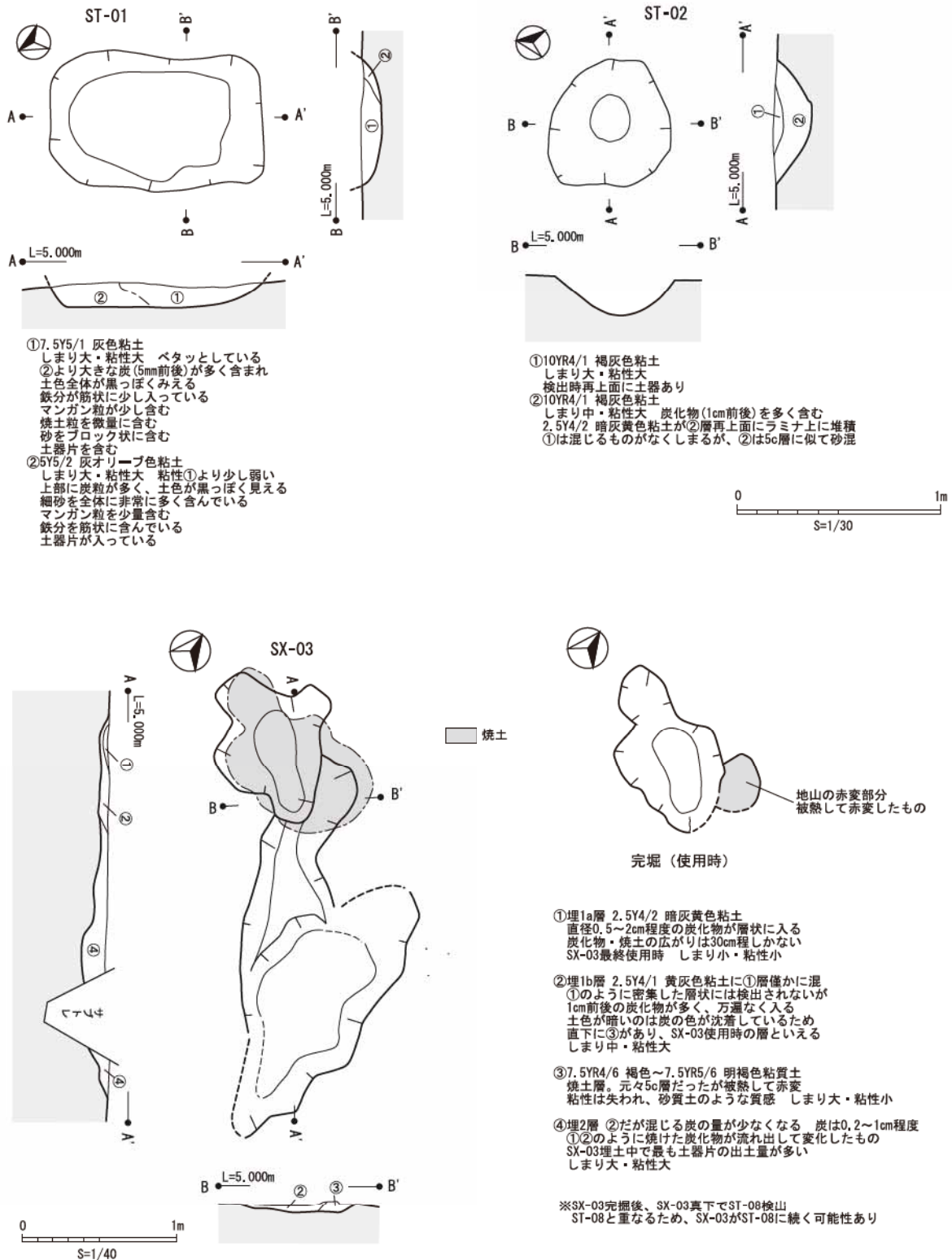


基本土層
5a・5c・5d・6c・7層

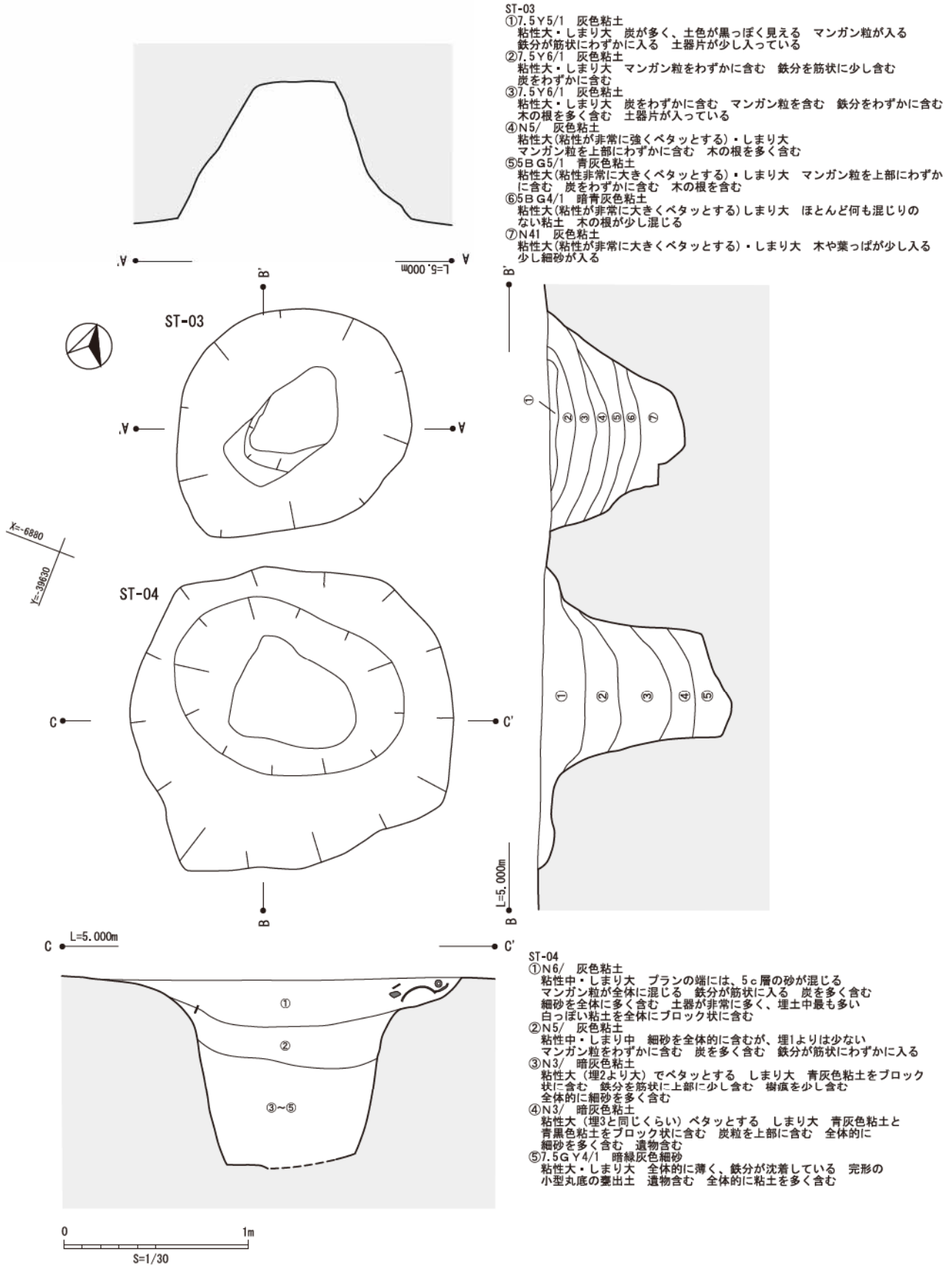
- ①2. 5GY5/1 オリーブ灰色粘土
しまり大・粘性大
5a・5c・5d層に伴って土質が細砂や粘土など違いがある
杭の腐食によって周りの土が変色したようである
- ②7. 5Y5/1 灰色細砂
粘性小・しまり中
周りの砂と同じ質で、
杭が朽ちたときに土色に変化したようである
- ③10Y5/1 灰色粘土
しまり大・粘性中



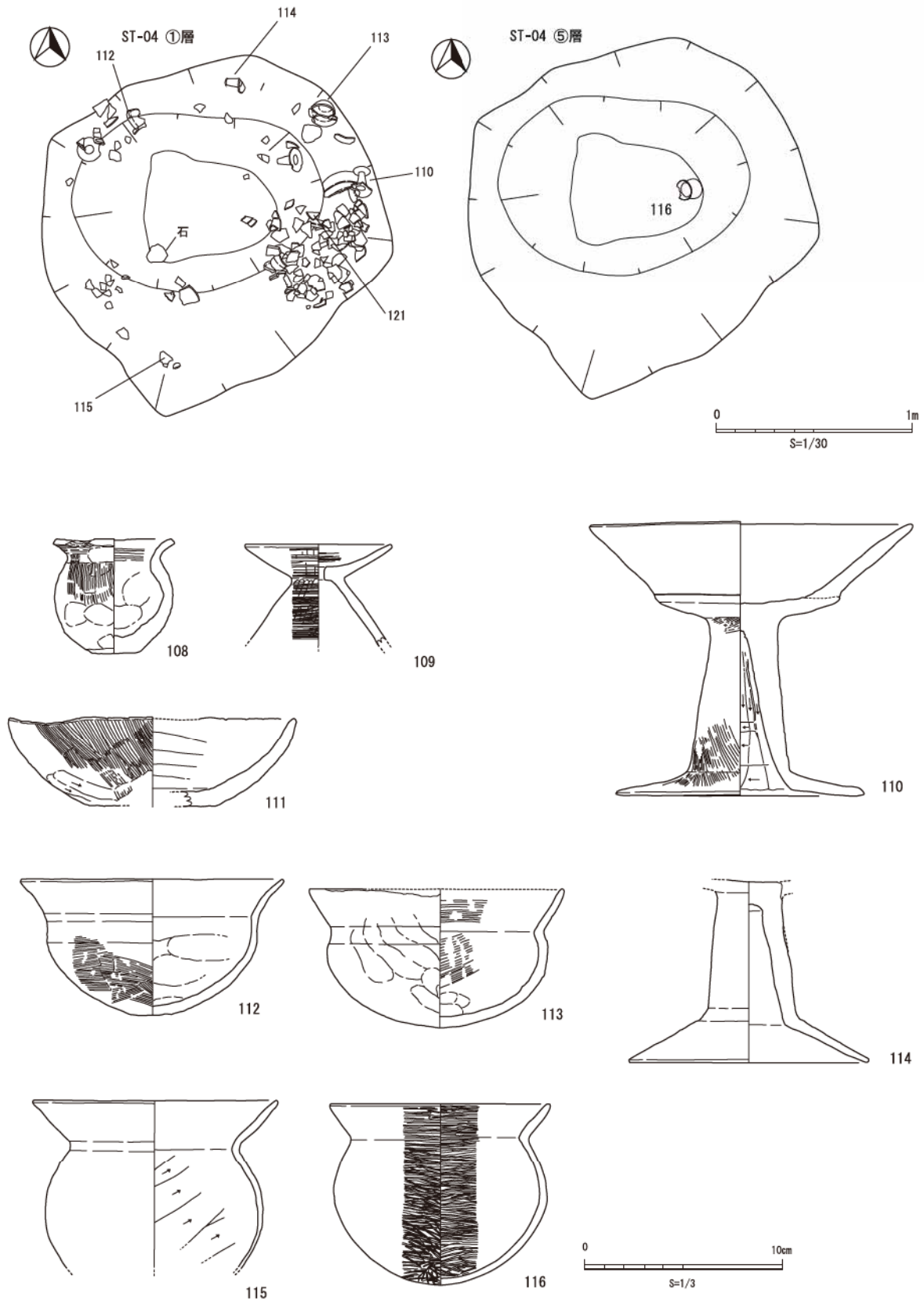
第 138 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 SX-02 (杭 1~11) 実測図



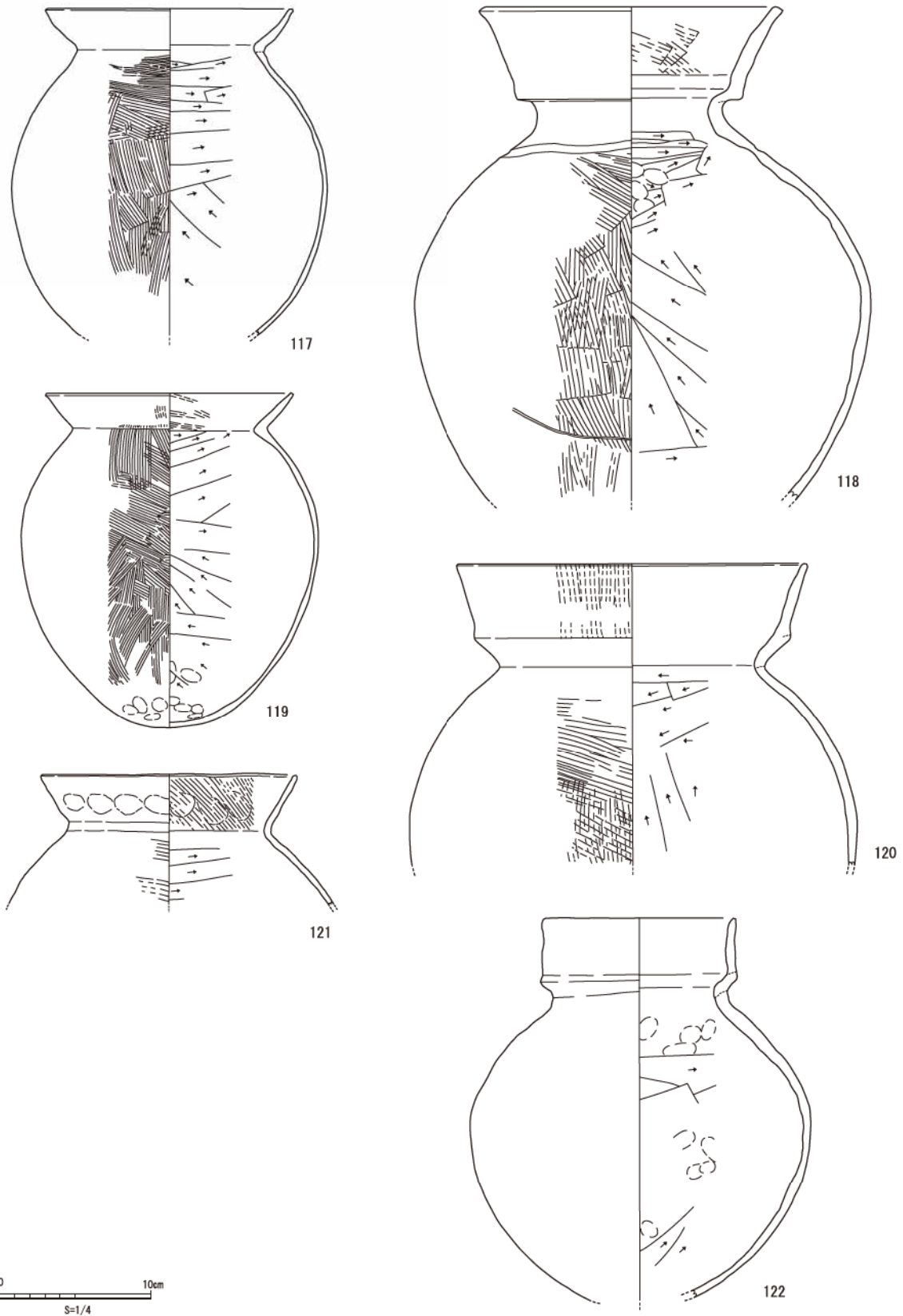
第 139 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 ST-01・02・SX-03 実測図



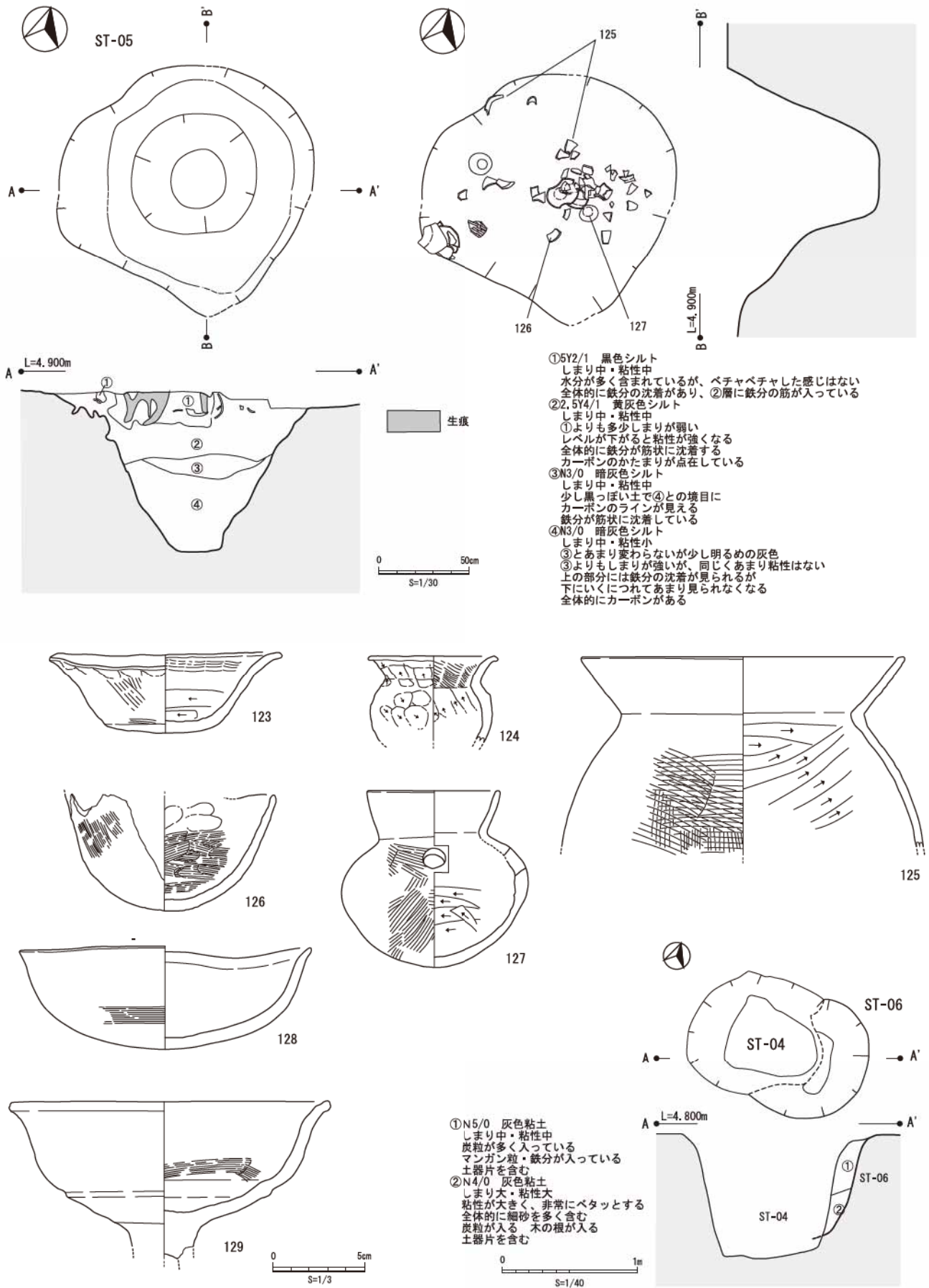
第 140 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 ST-03・04 実測図



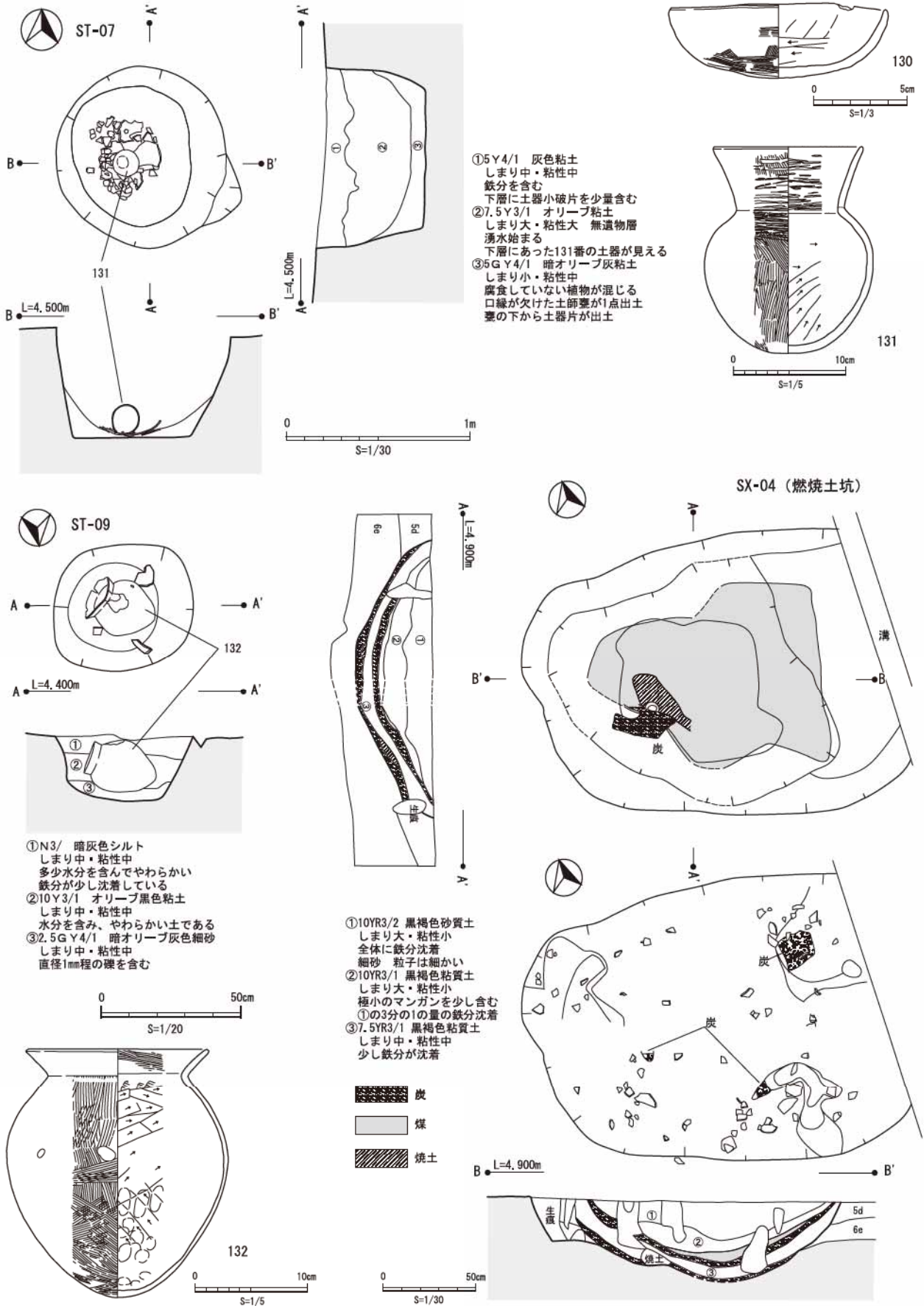
第 141 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 ST-04 遺物出土状況及び出土遺物実測図



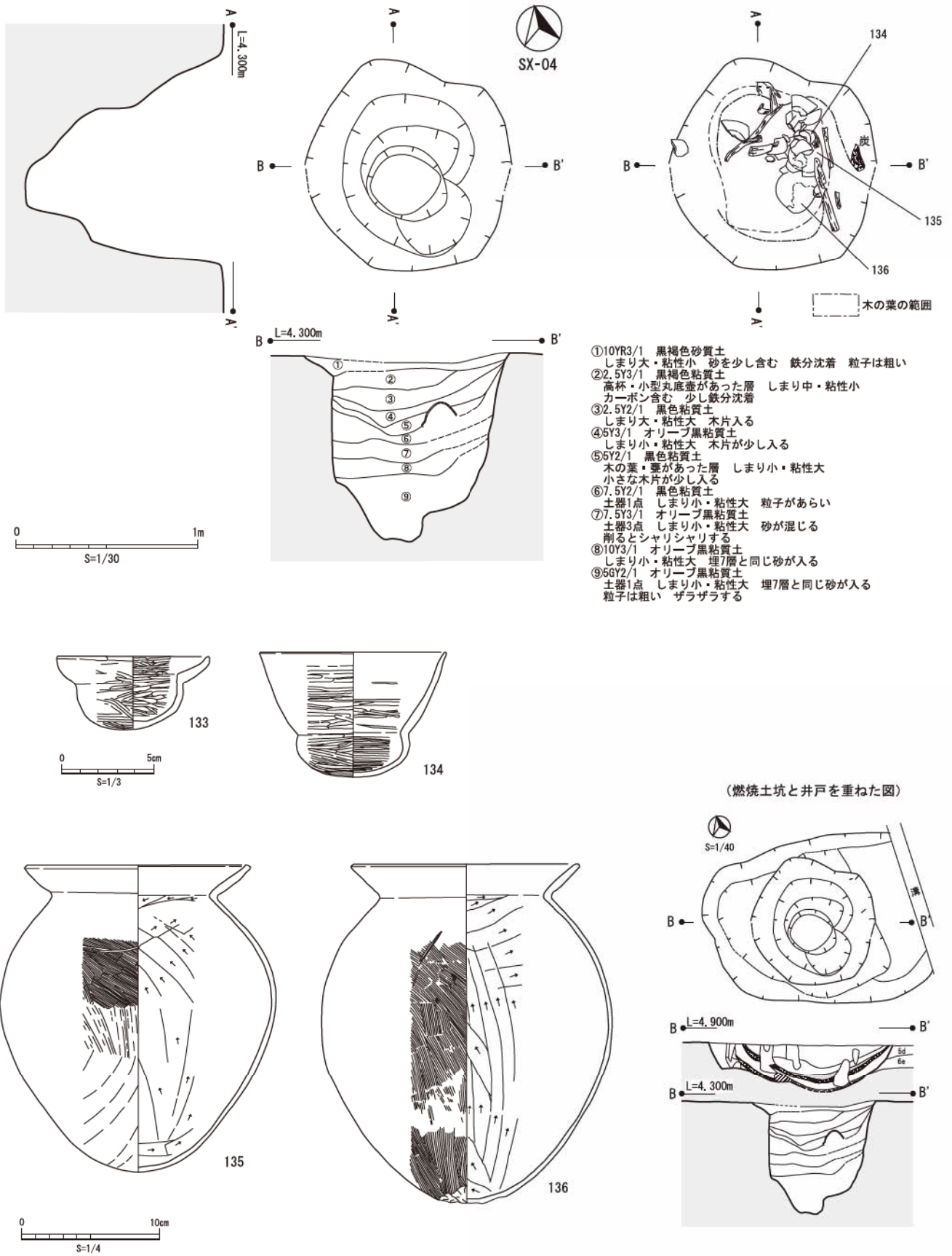
第 142 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 ST-04 出土遺物実測図



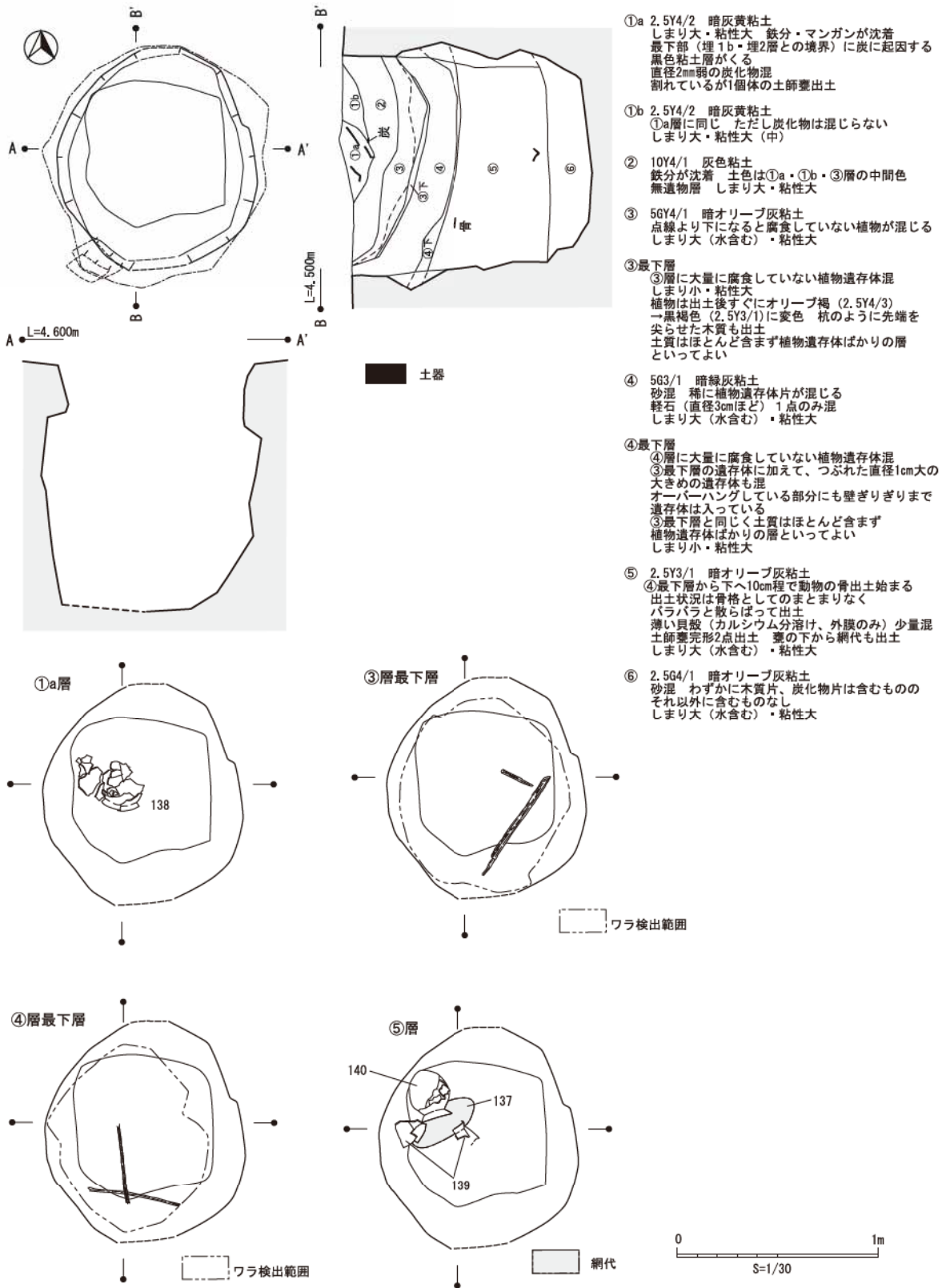
第 143 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 ST-05・06 実測図及び出土遺物実測図



第 144 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区
ST-07・09・SX-04 (燃烧土坑) 実測図及び出土遺物実側図



第 145 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 SX-04 実測図及び出土遺物実測図



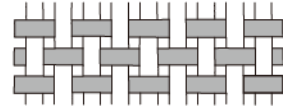
第 146 図 両迫間日渡遺跡 04-II区 ST-08 実測図



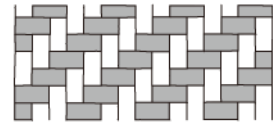
(編み方の模式図)



体部中央部カ
「表面」 一本超、一本潜、一本送



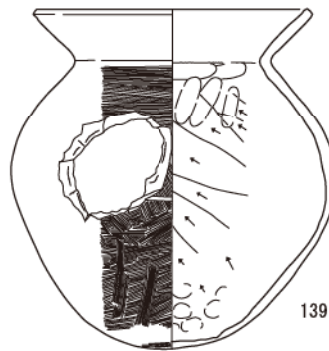
体部下部カ
「表面」 二本超、二本潜、一本送(右上がり)



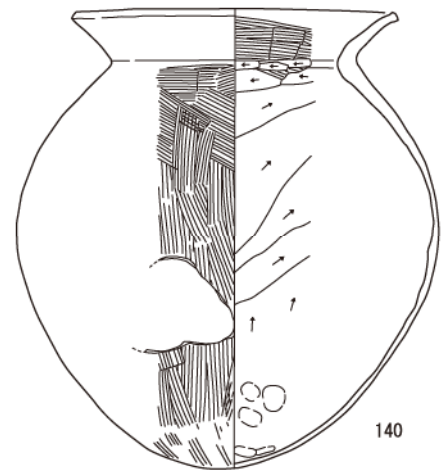
タテ材
ヨコ材



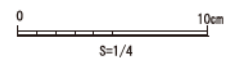
138



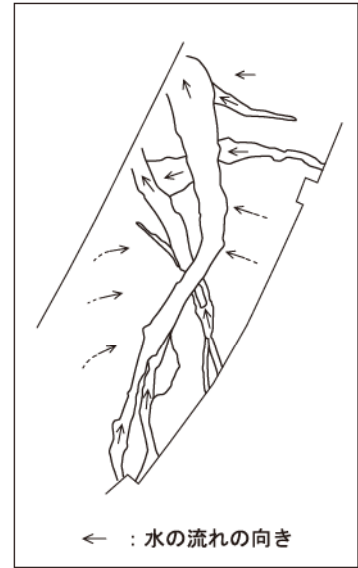
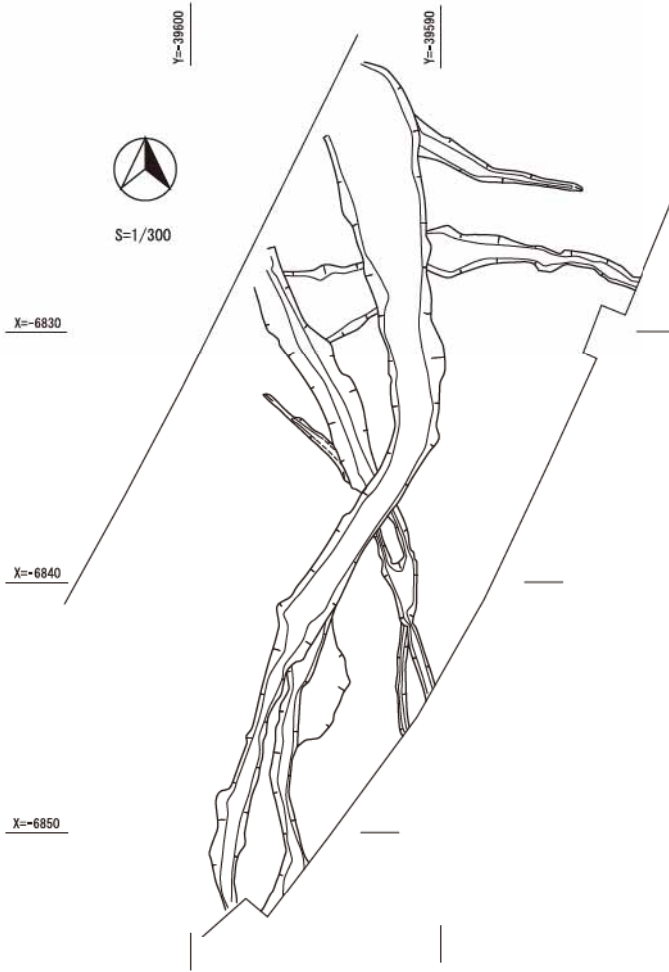
139



140

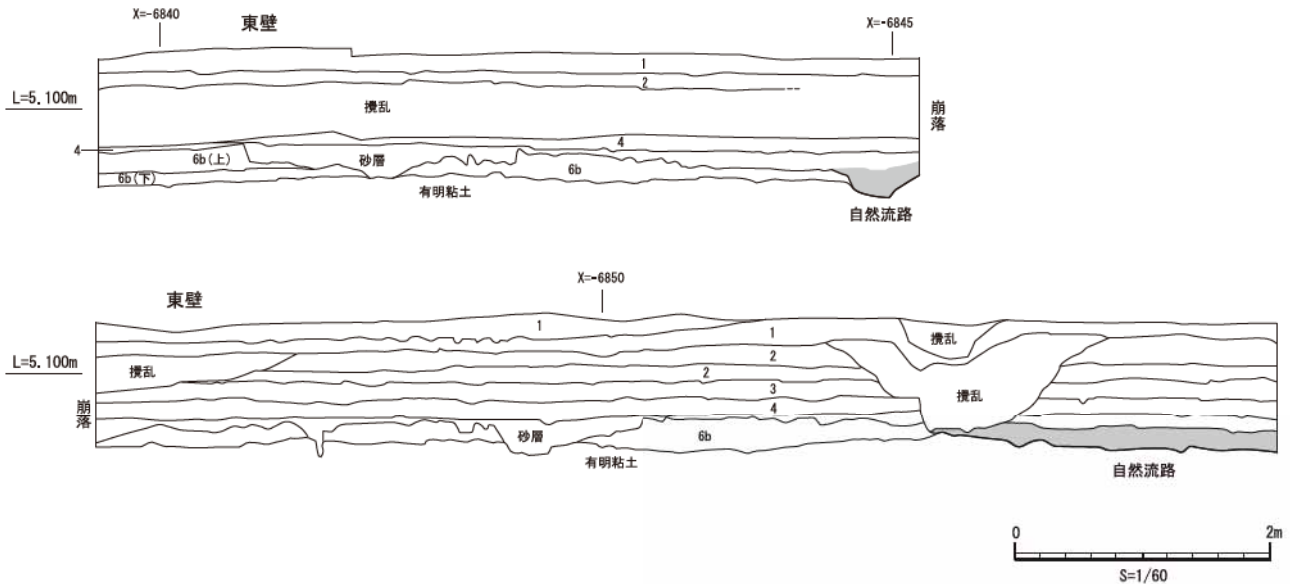


第 147 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 ST-08 出土遺物実測図

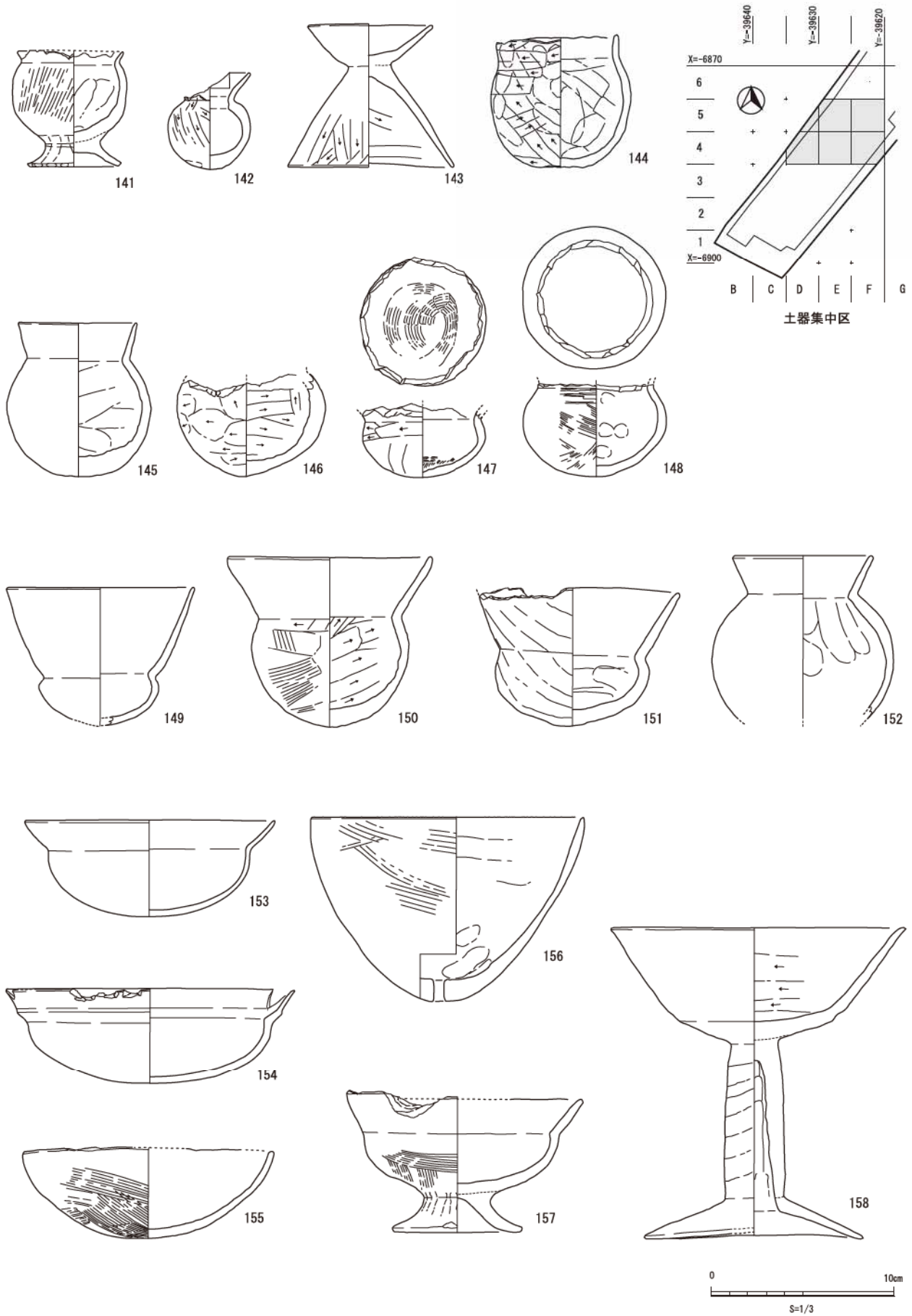


自然流路 埋土

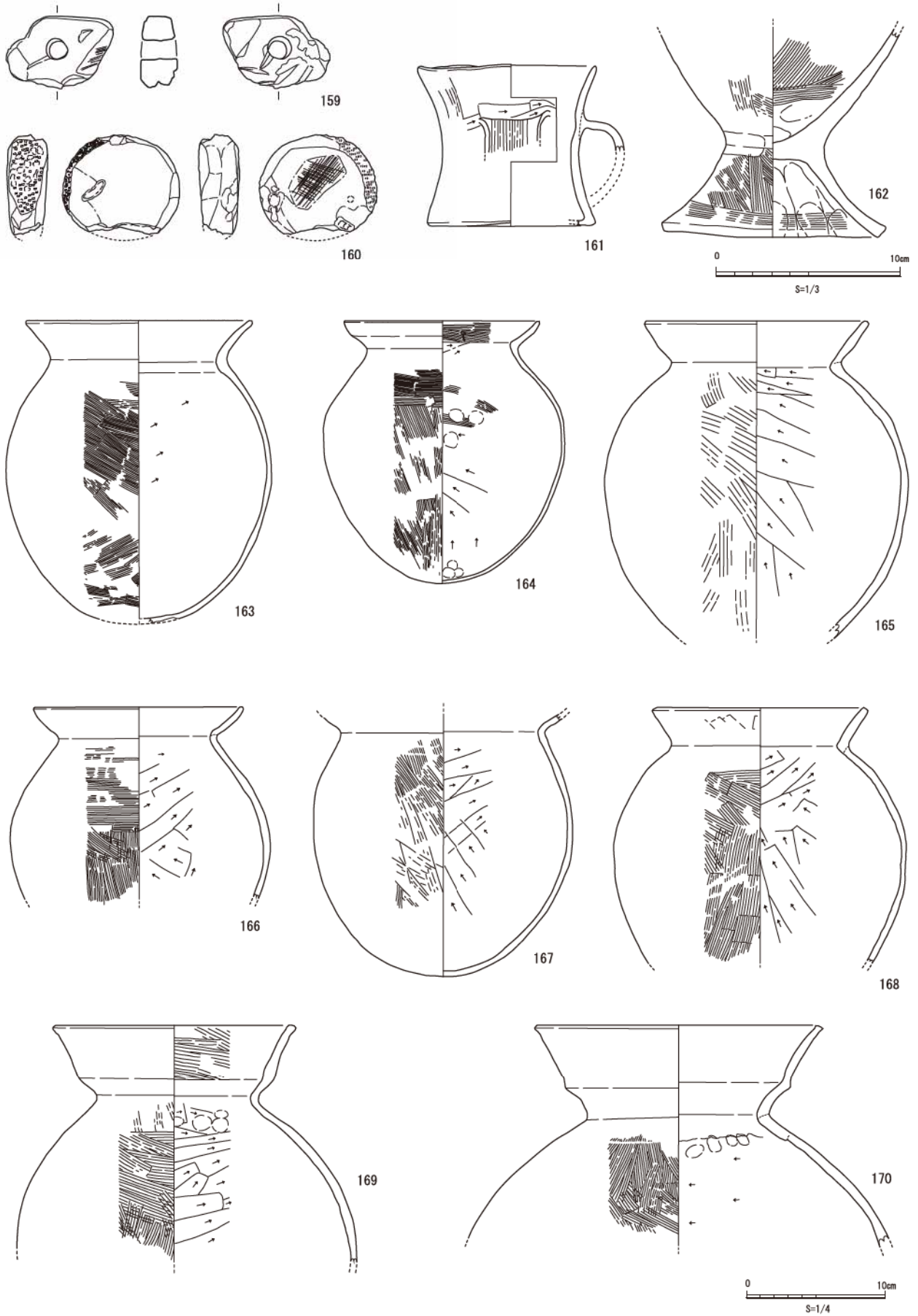
有明粘土と同じ土色の細砂・粗砂層状に白い粗砂なども入り、底部にはマーブル模様に見える粘土が混じる。腐食していない木片・炭化物(1~10cm)混砂層の最下部に同じ土色の砂が入っていることも多く、所によっては砂層と自然流路の区別が出来なかった。遺物砂層・自然流路層では同様のものが出た。



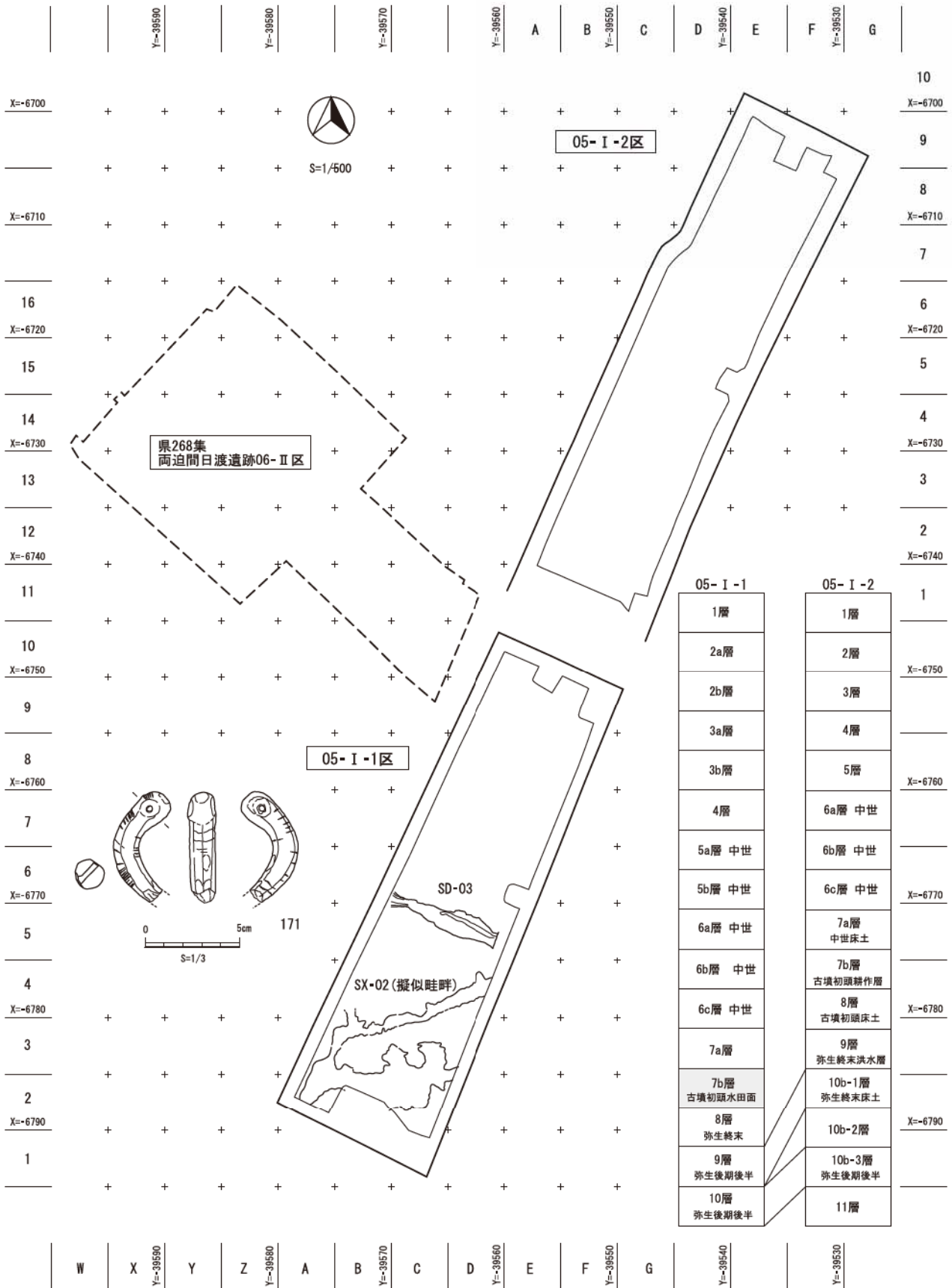
第 148 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 自然流路実測図



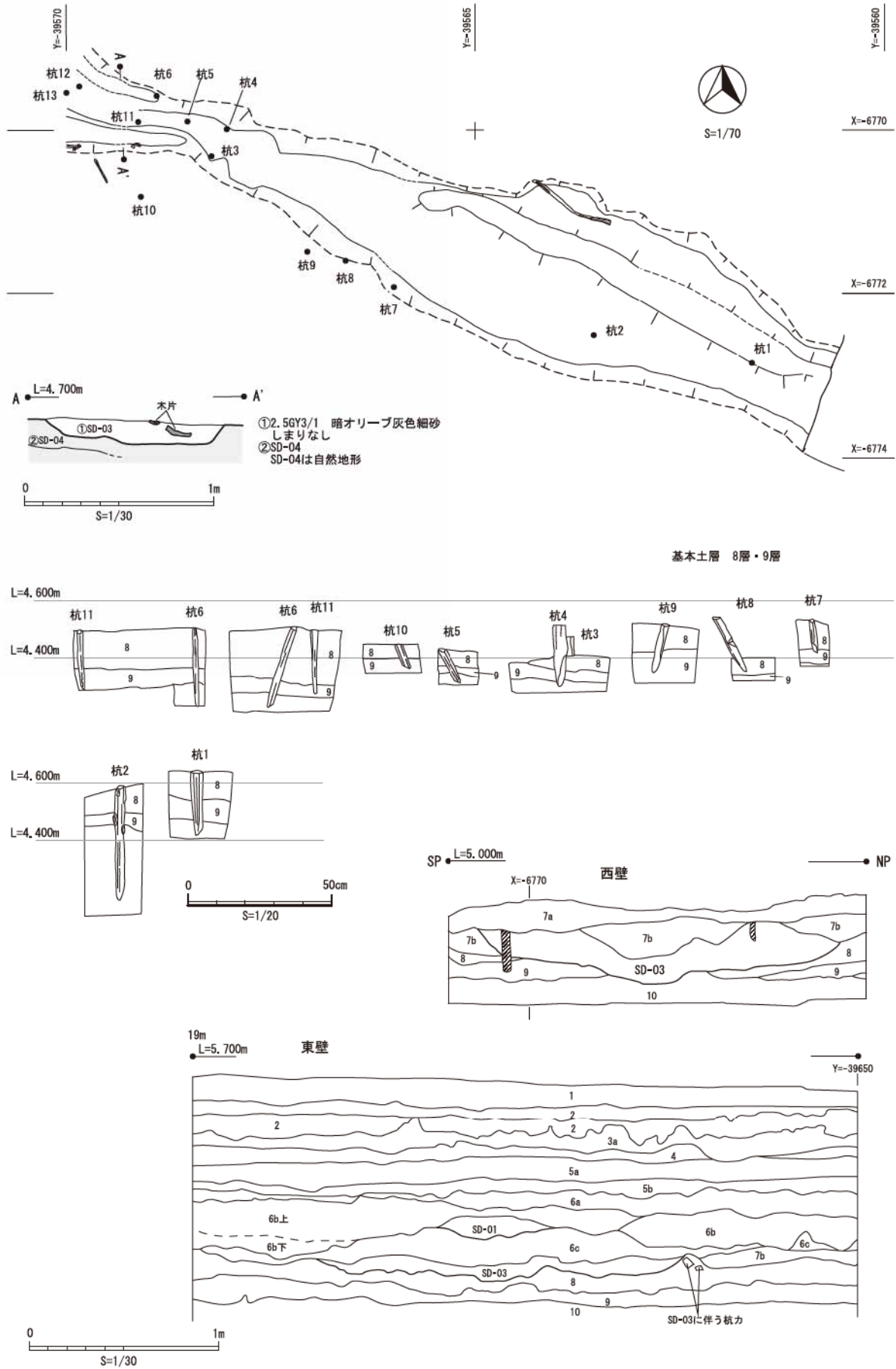
第 149 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 土器集中区出土遺物実測図 1



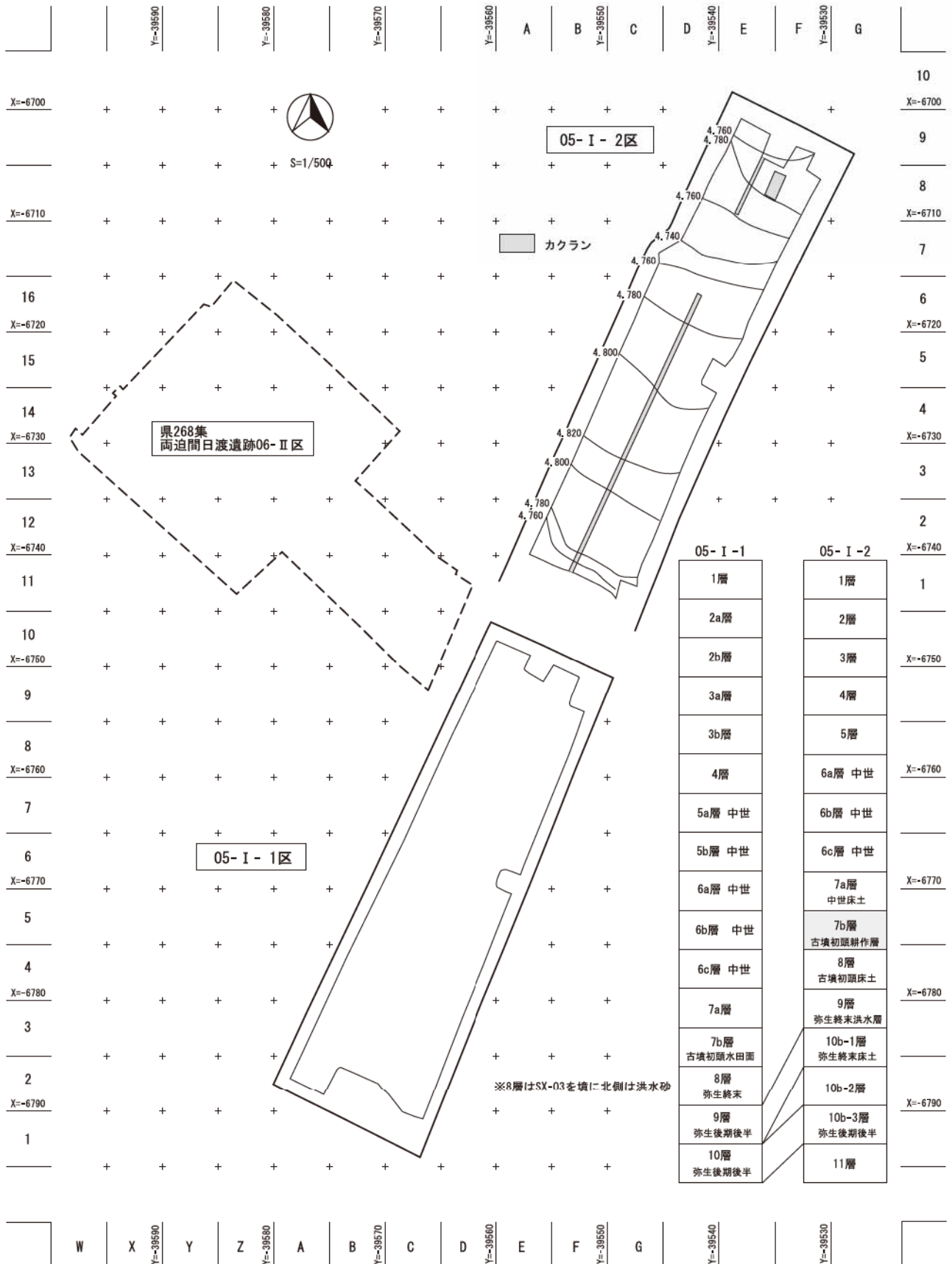
第 150 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 土器集中区出土遺物実測図 2



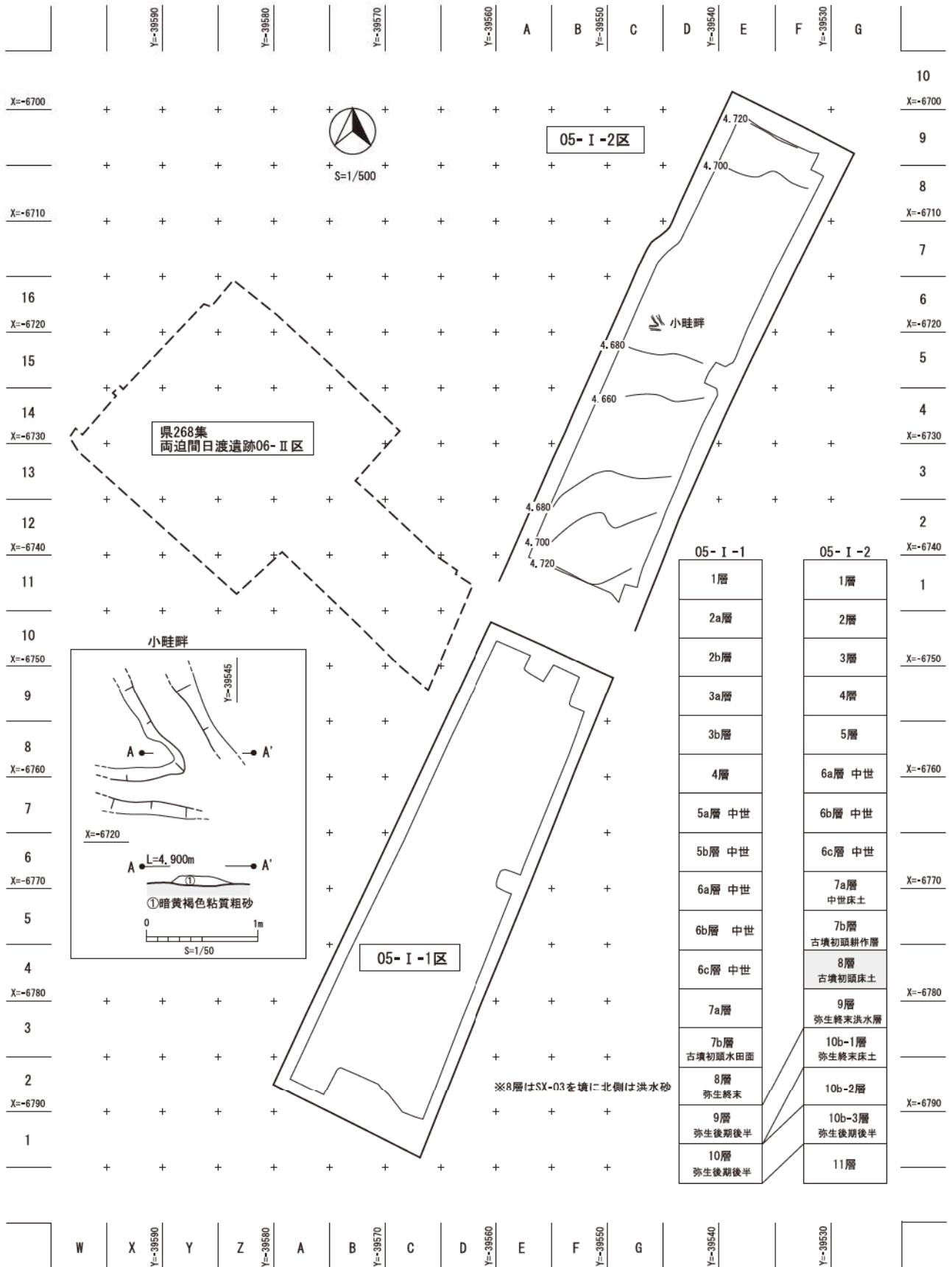
第 151 図 両迫間日渡遺跡 O5-I-1 区 7b 層遺構配置図及び出土遺物実測図



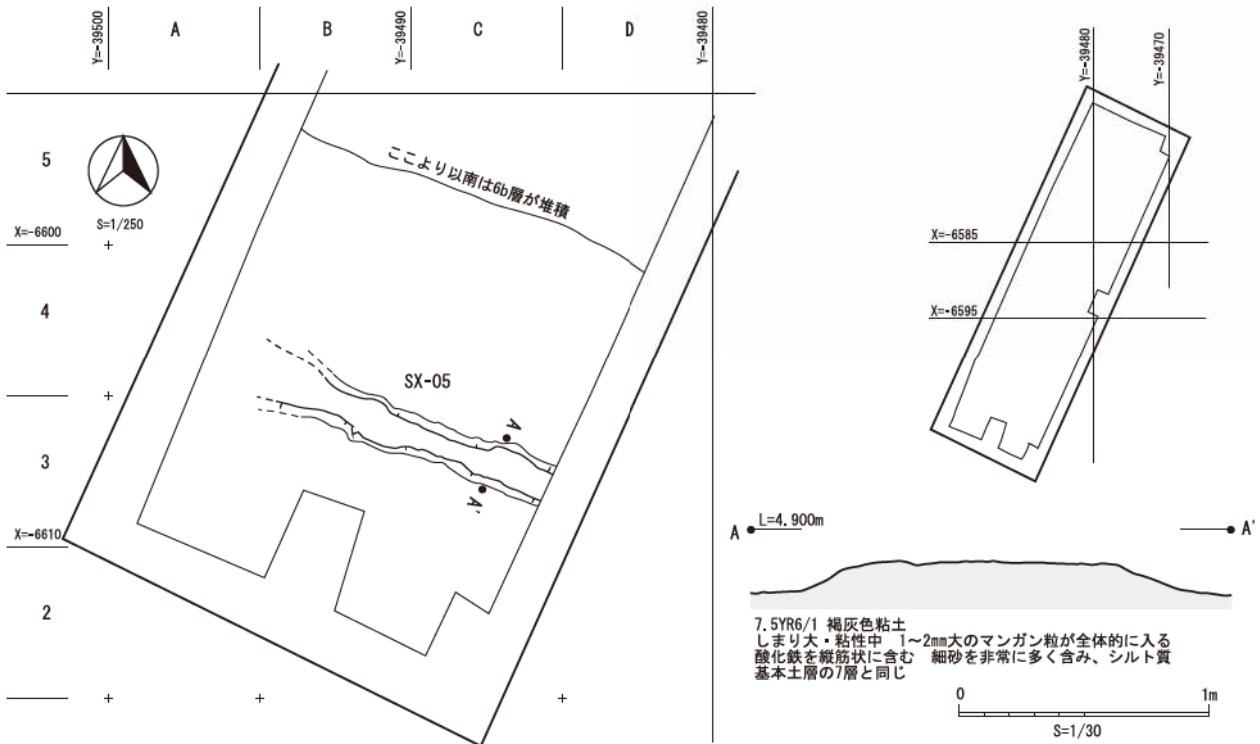
第 152 図 両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SD-03 実測図



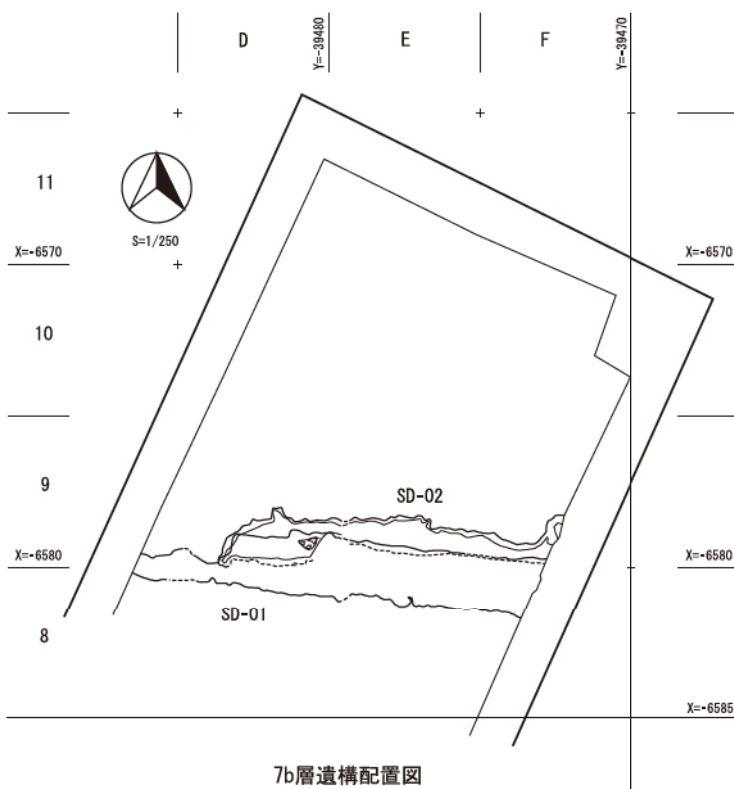
第 153 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区 7b 層直上遺構配置図



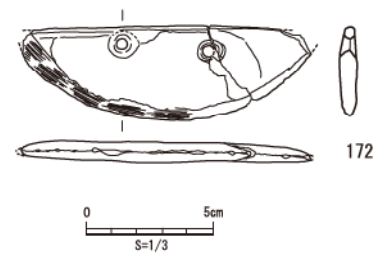
第 154 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区 8 層遺構配置図



7a層上面遺構配置図

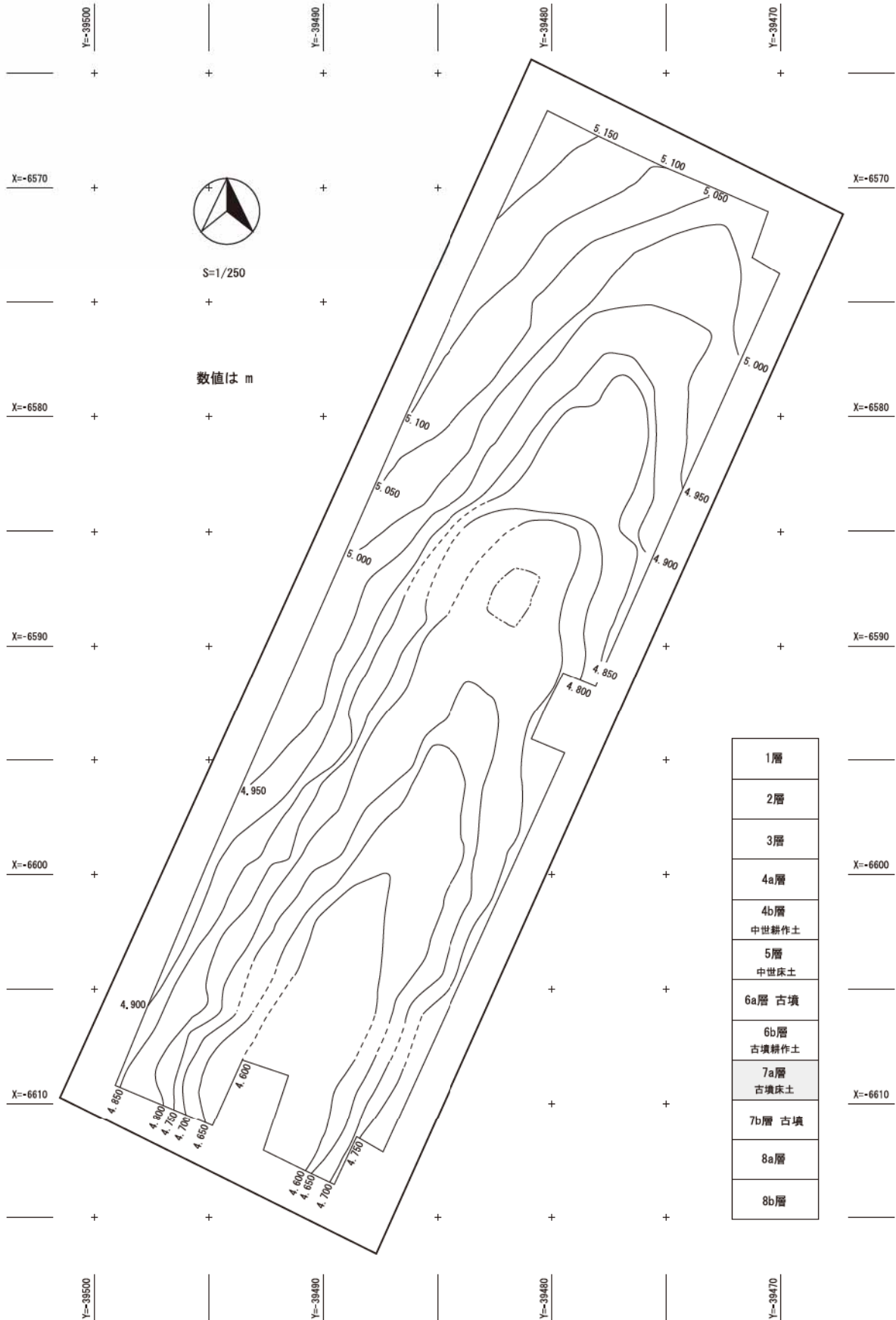


7b層遺構配置図



1層
2層
3層
4a層
4b層 中世耕作土
5層 中世床土
6a層 古墳
6b層 古墳耕作土
7a層 古墳床土
7b層 古墳
8a層
8b層

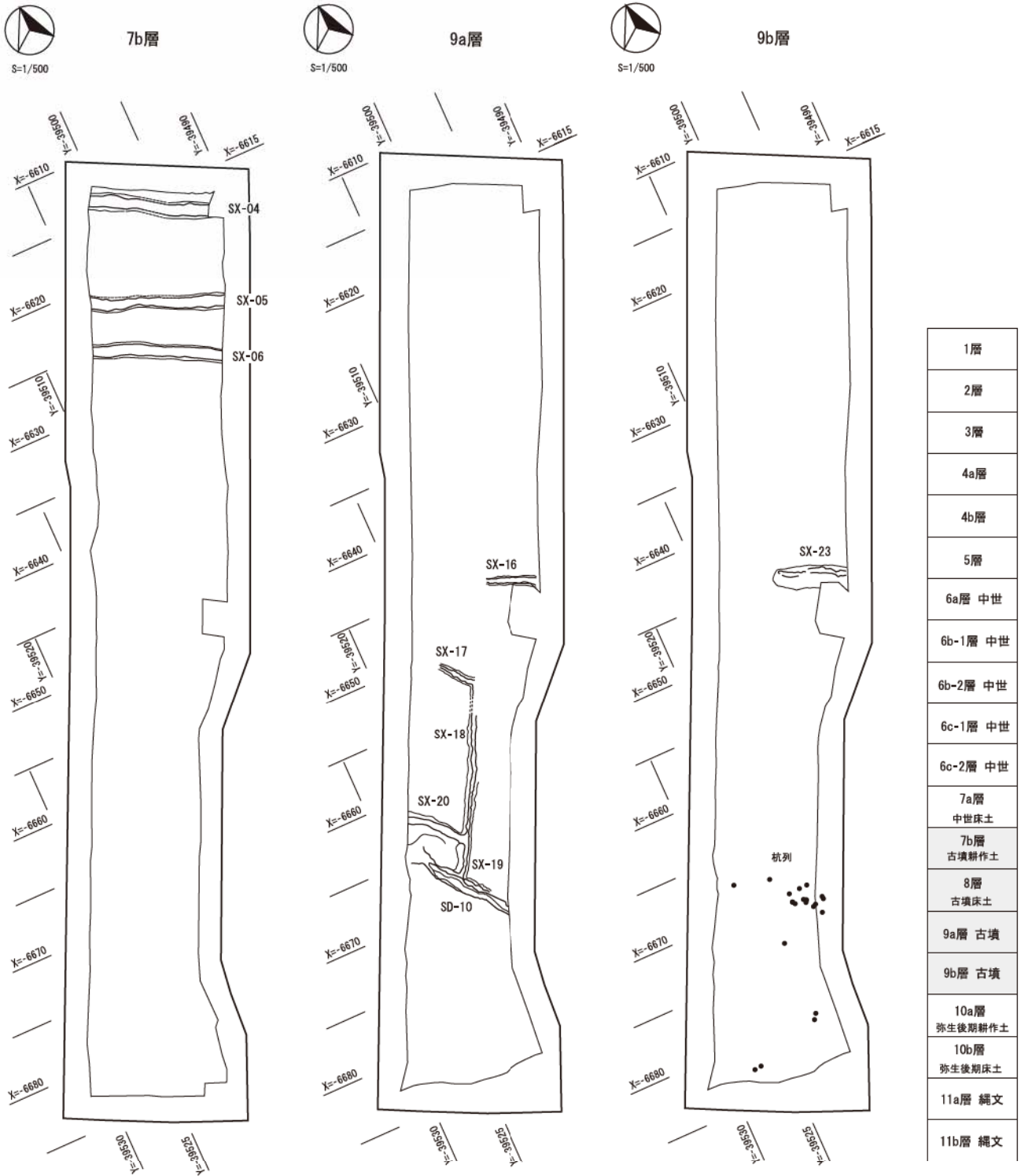
第 155 図 両迫間日渡遺跡 05-II-2 区
7a層上面・7b層遺構配置図及び出土遺物実測図



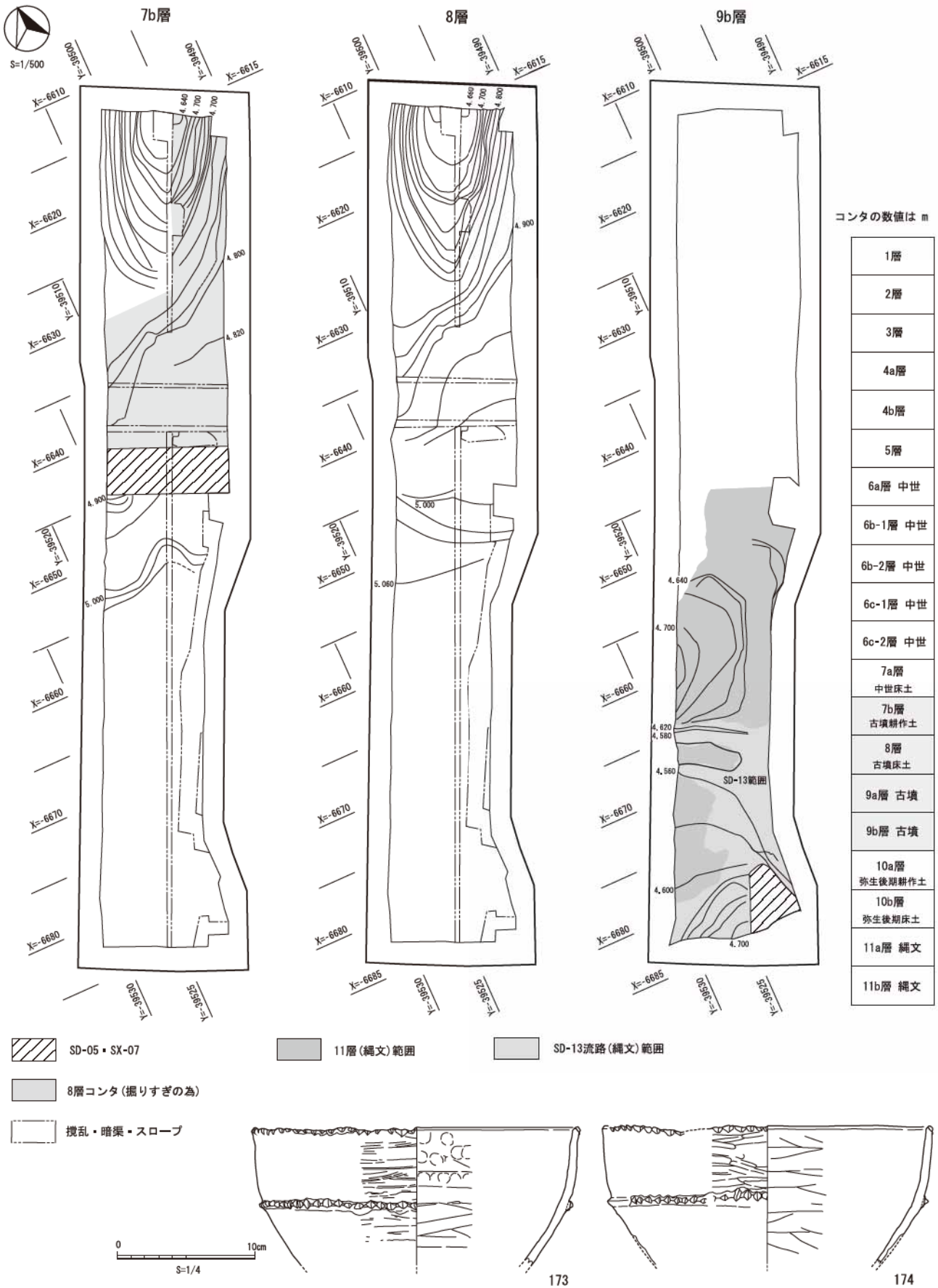
第 156 図 両迫間日渡遺跡 05-II-2 区 7a 層上面コンタ図



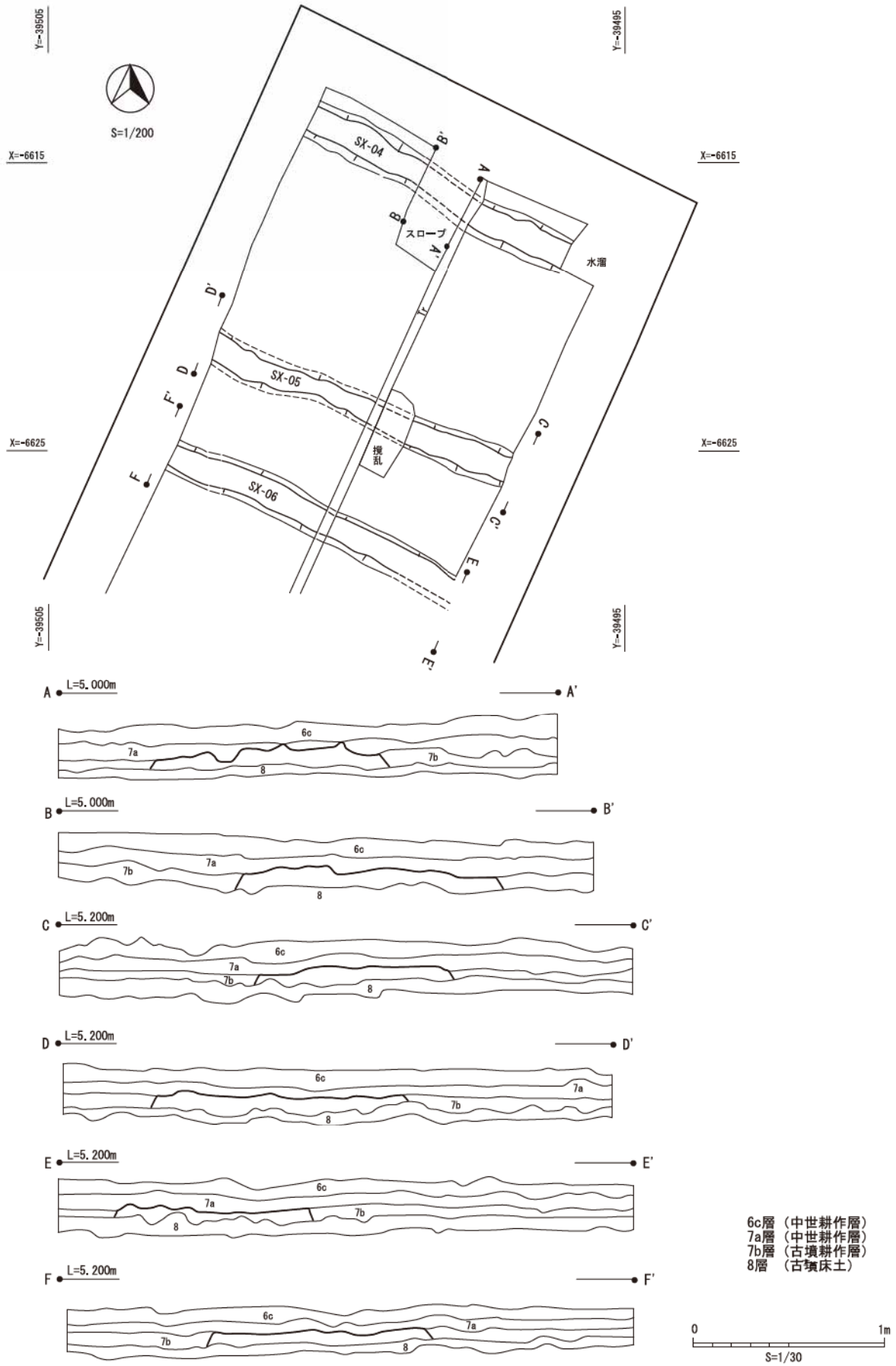
第 157 図 両泊間日渡遺跡 05-II-2 区 SD-01・02 実測図



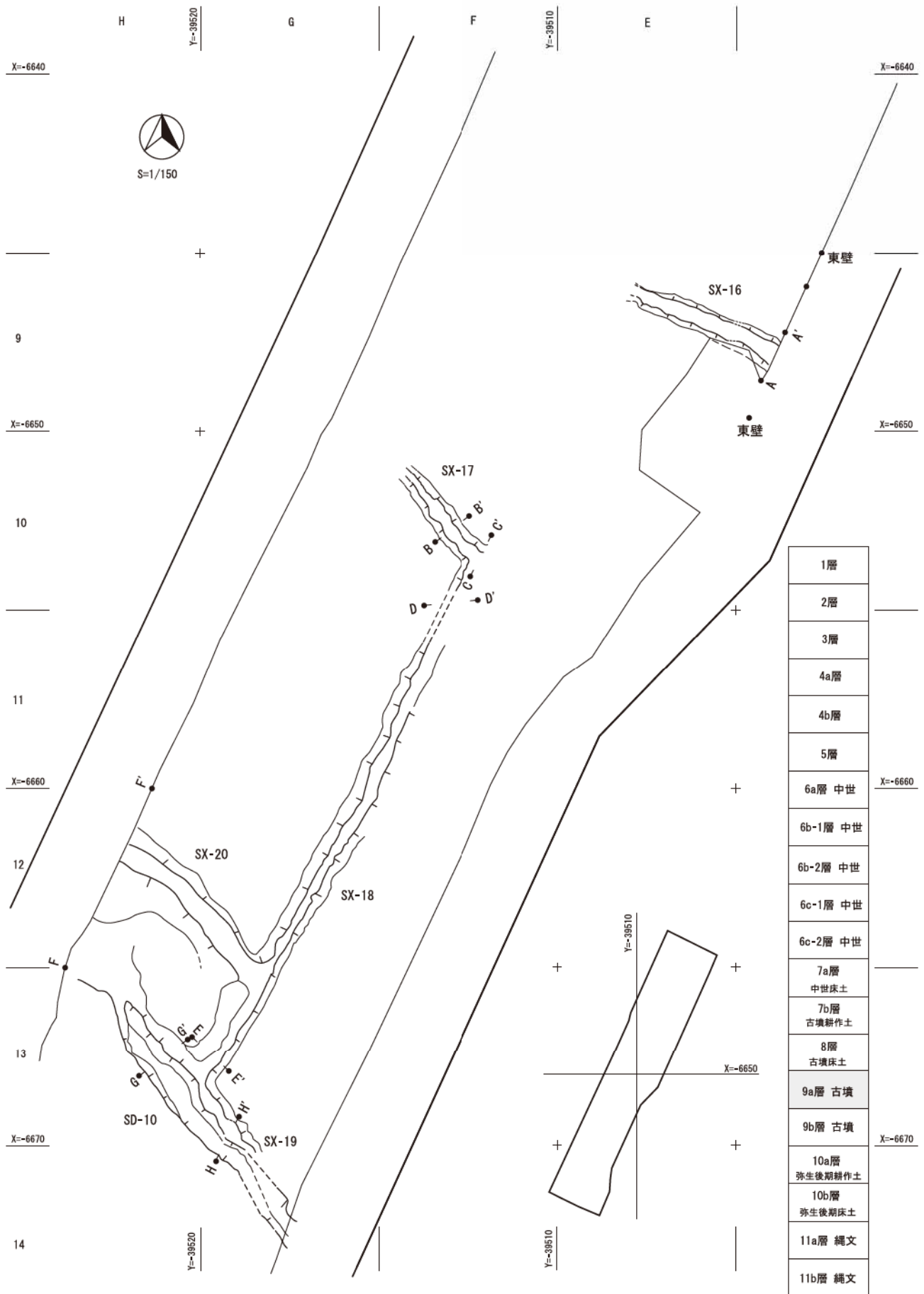
第 158 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b 層・9a 層・9b 層遺構配置図



第 159 図 両迫間日渡遺跡 05-II-1 区 出土遺物実測図
06-I 区 7b層・8層・9b層コンタ図

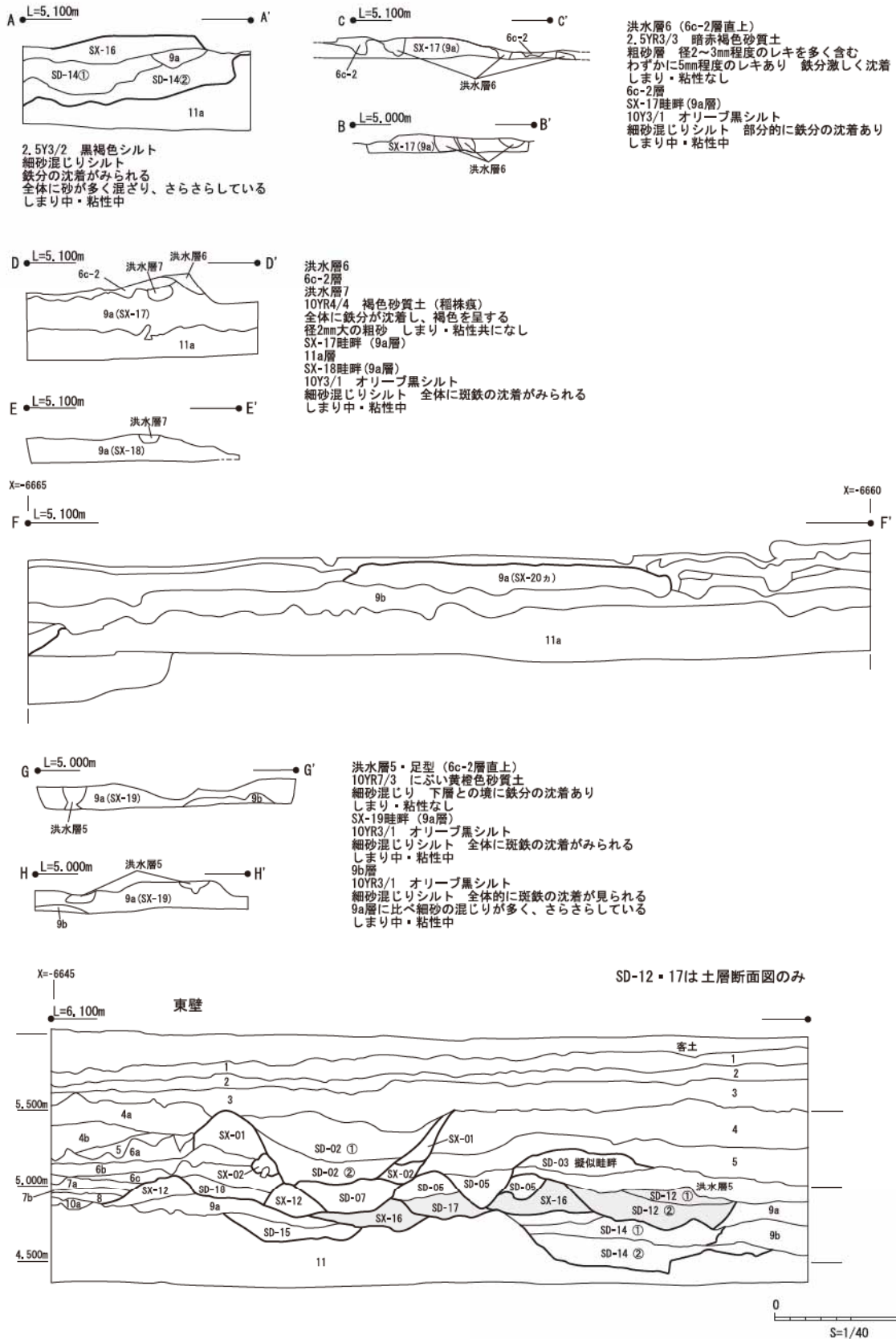


第 160 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 7b 層 SX-04~06 実測図

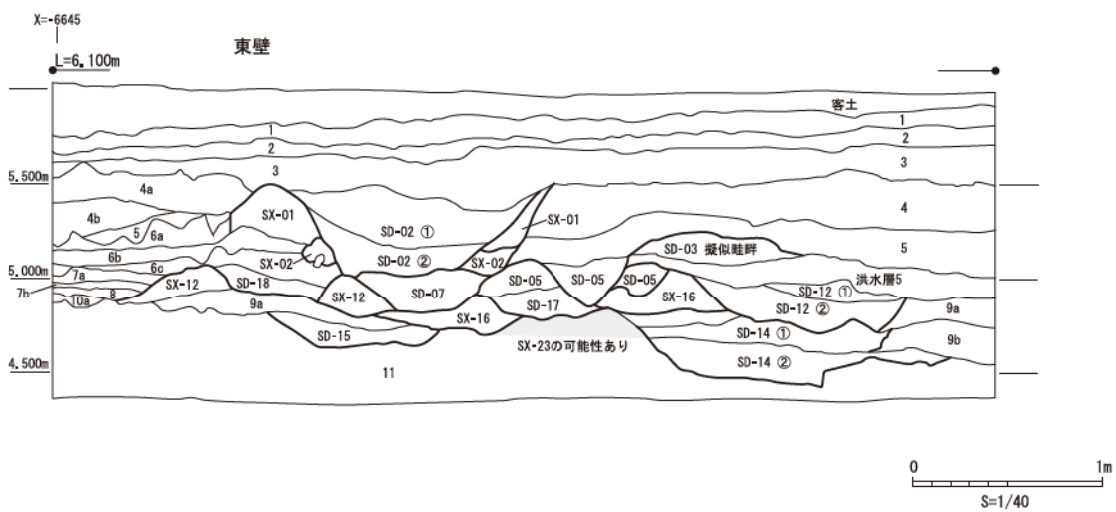
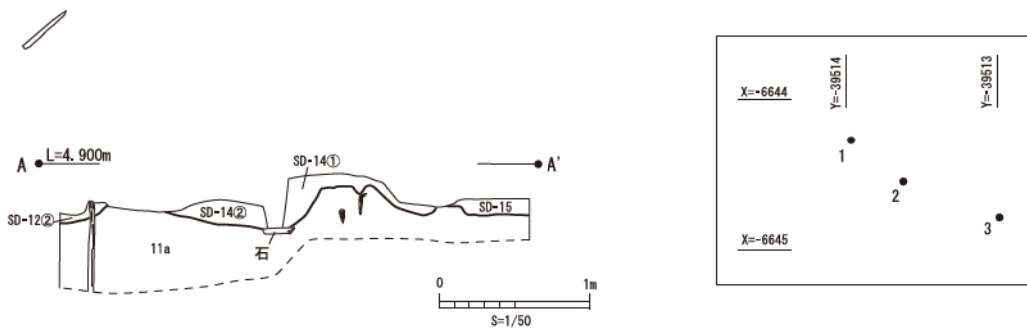
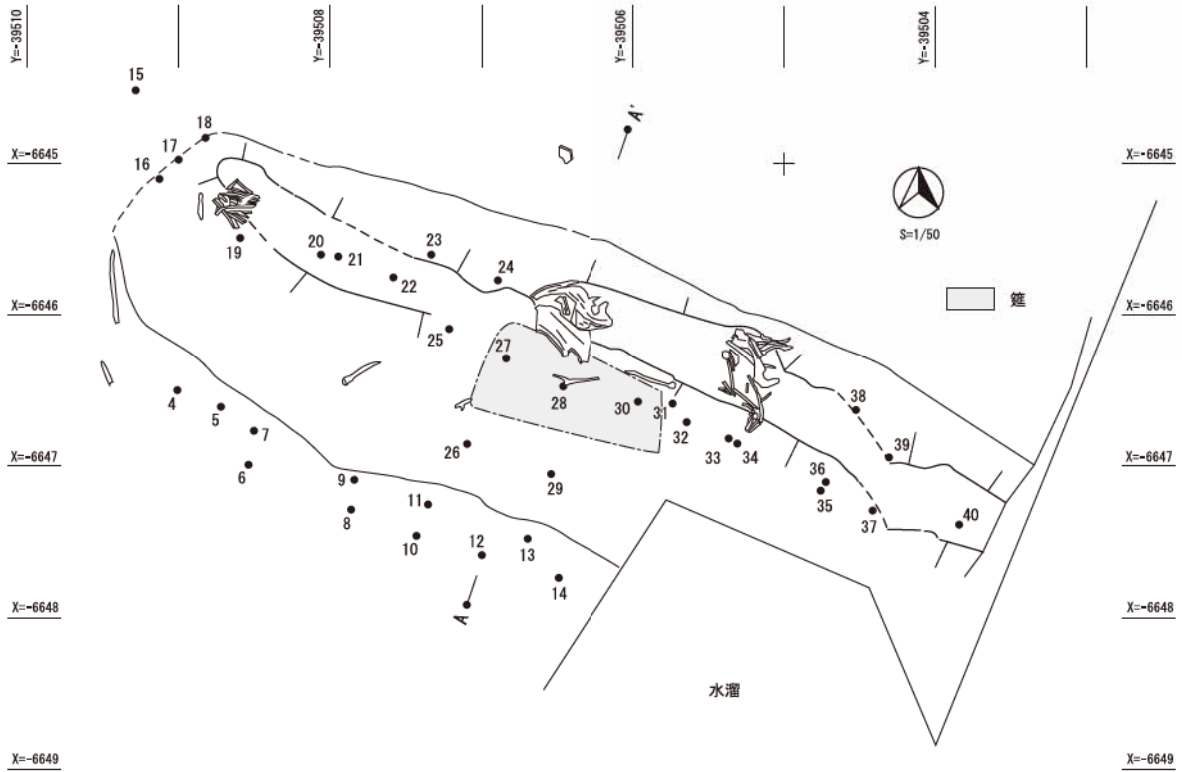


第 161 図 両迫間日渡遺跡 O6- I 区 9a 層遺構配置図

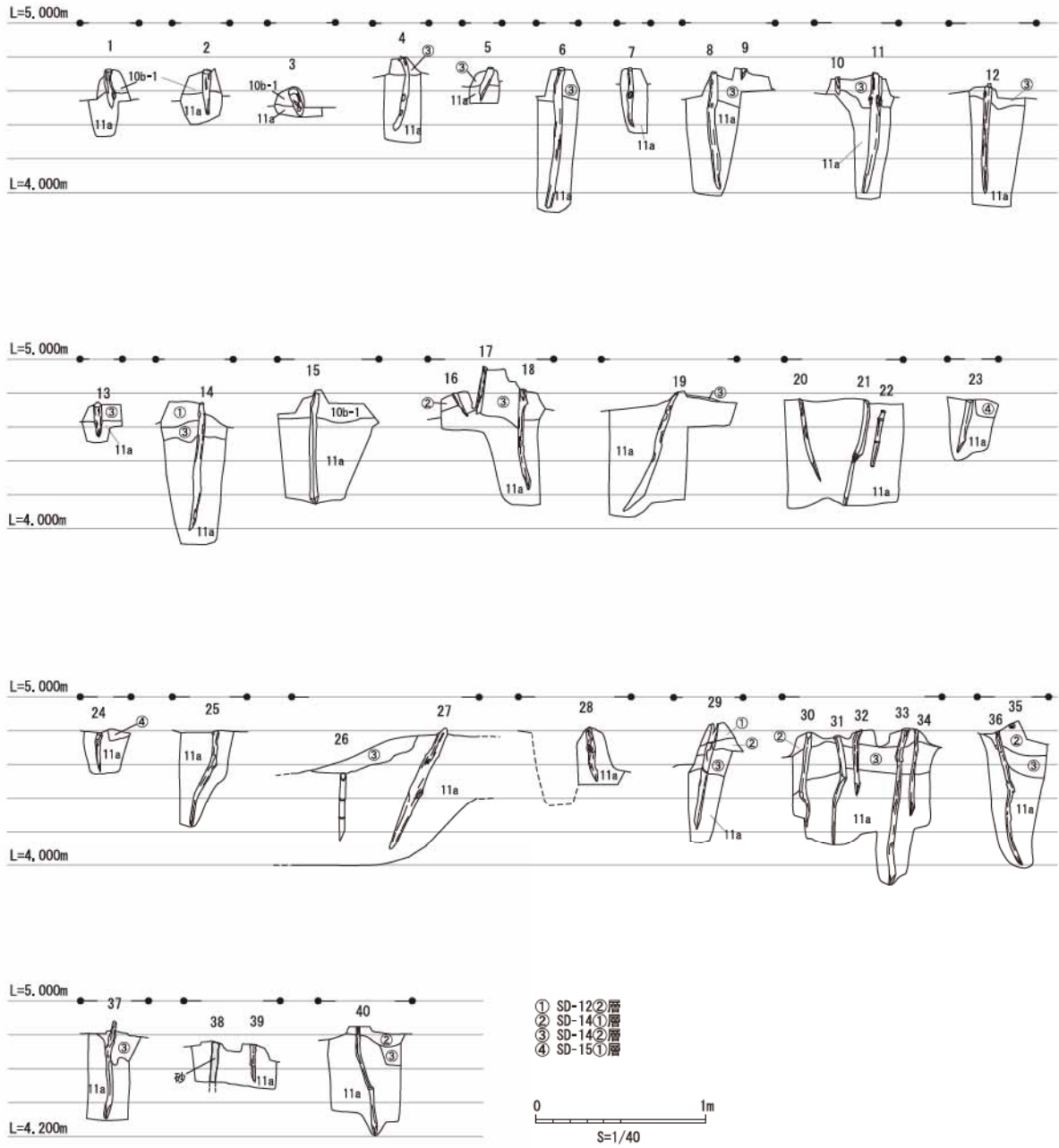
第IV章 調査の成果



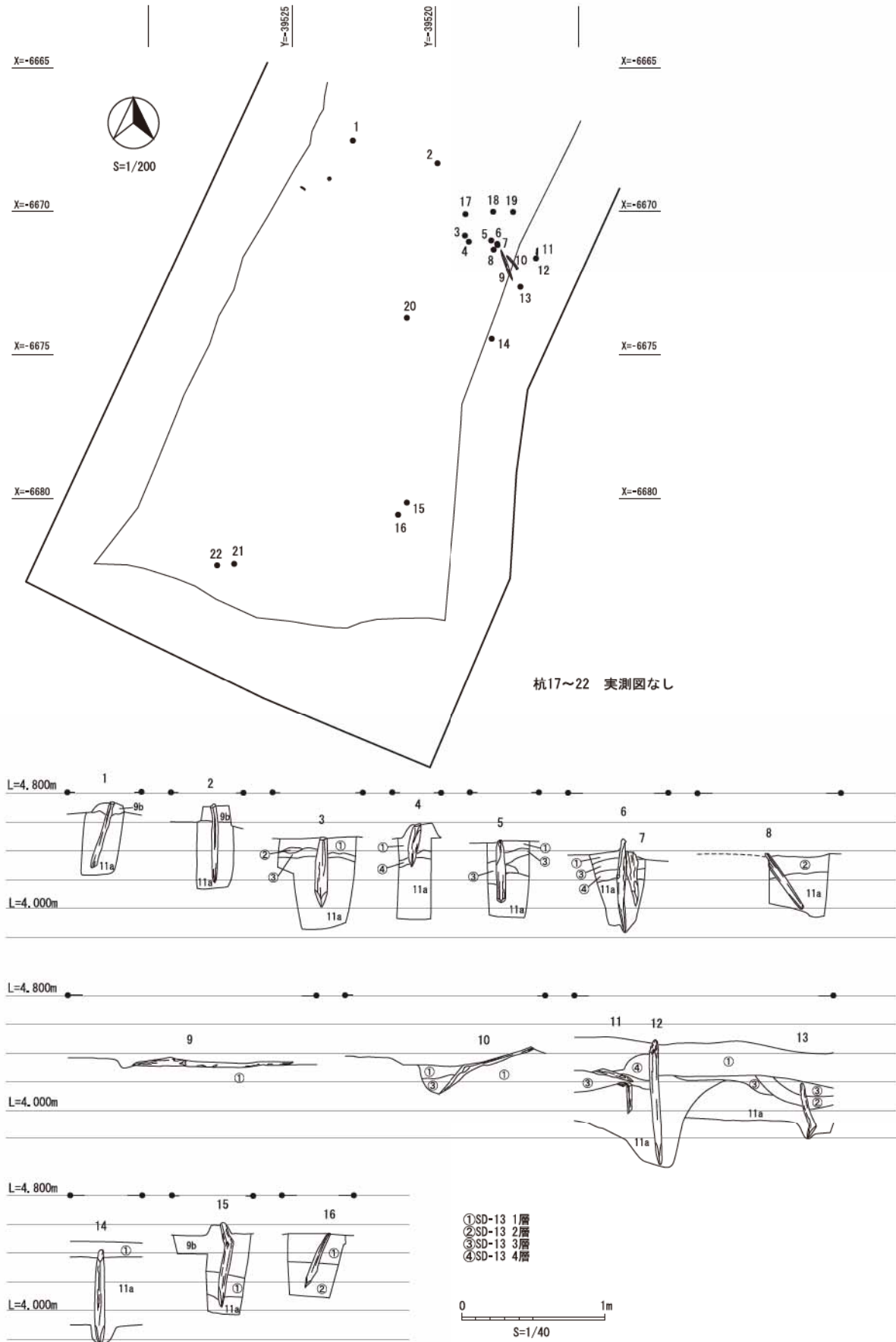
第 162 図 両迫間日渡遺跡 O6-I 区 9a 層 SX-16~20・SD-10・12・17 実測図



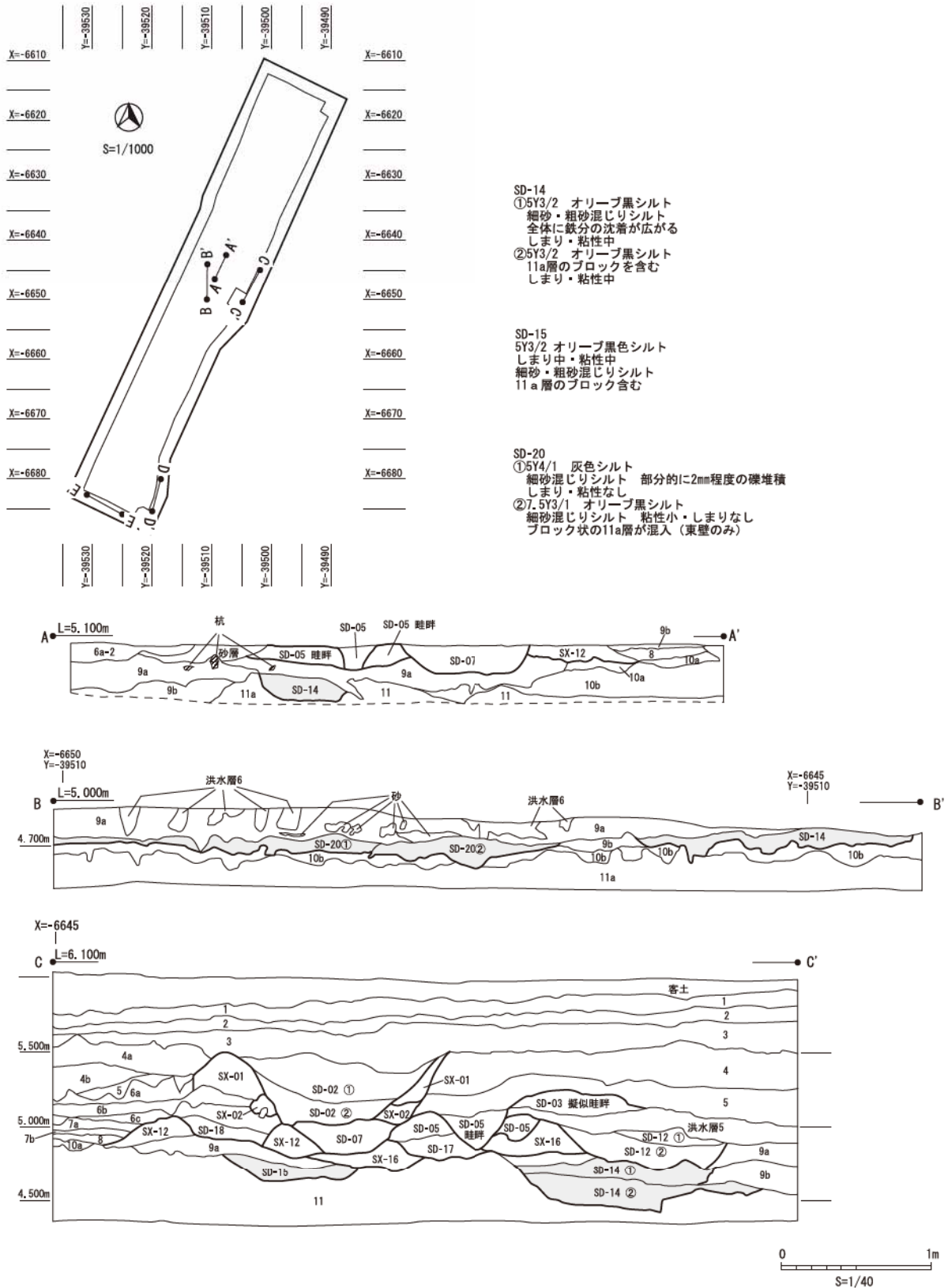
第 163 図 両迫間日渡遺跡 O6-I 区 SX-23 実測図



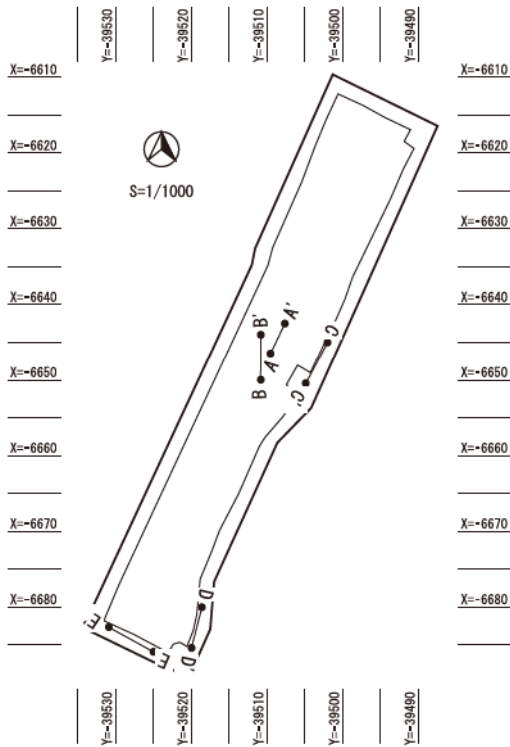
第 164 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SX-23 (杭 1~40) 実測図



第 165 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 9b 層検出杭列実測図

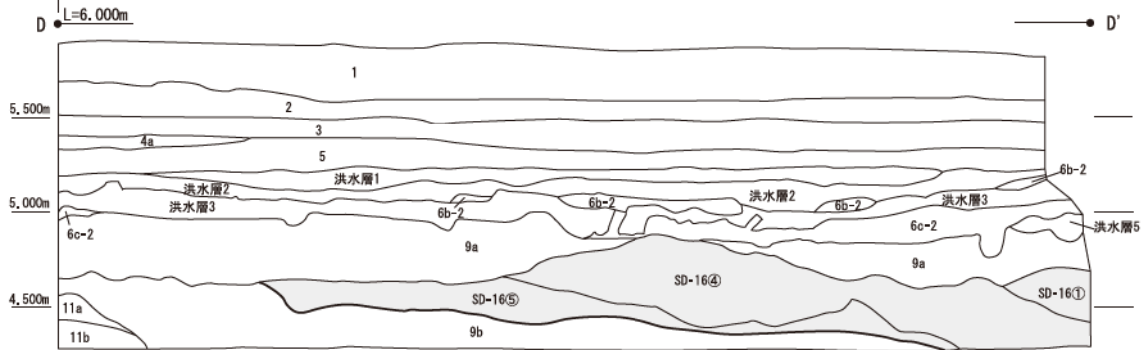


第 166 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SD-14・15・20 実測図



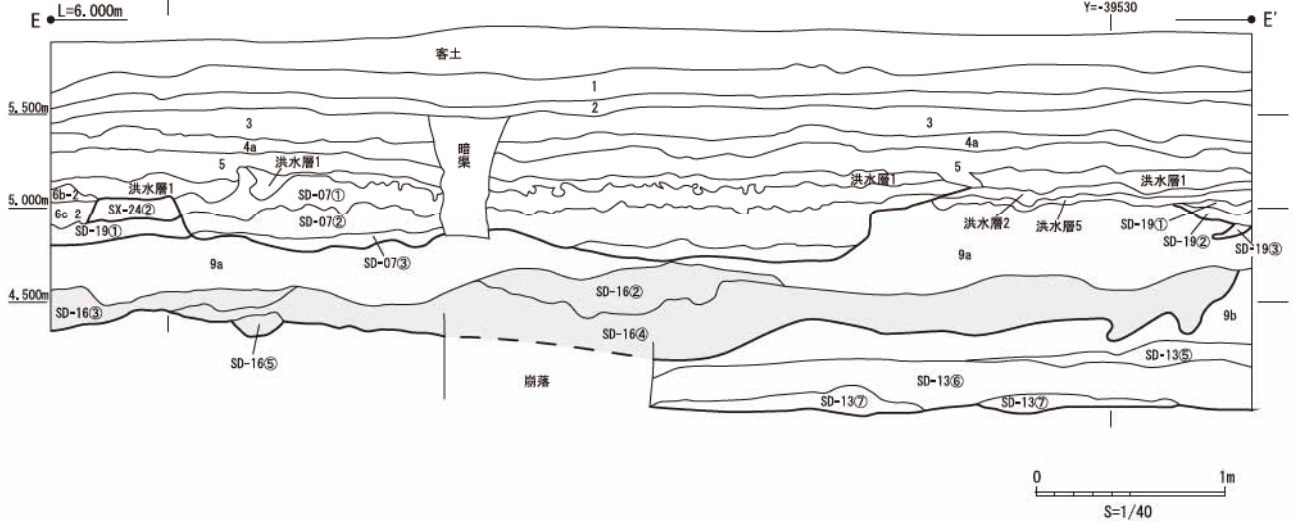
- ①5Y4/1 灰色シルト
しまりなし・粘性なし 細砂混じりシルト
部分的に2mm程度の礫堆積
- ②7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまりなし・粘性少 細砂混じりシルト
ブロック状の11a層が混入
- ③5Y6/2 灰オリーブ色砂質土
しまりなし・粘性なし
きめ細かな細砂中に粗砂・木片を含む
- ④7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
しまり少・粘性少 細砂混じりシルト
木片が混入
- ⑤5Y6/3 オリーブ黄色砂質土
しまりなし・粘性なし 粗砂層

X=-6680
Y=-69517.6

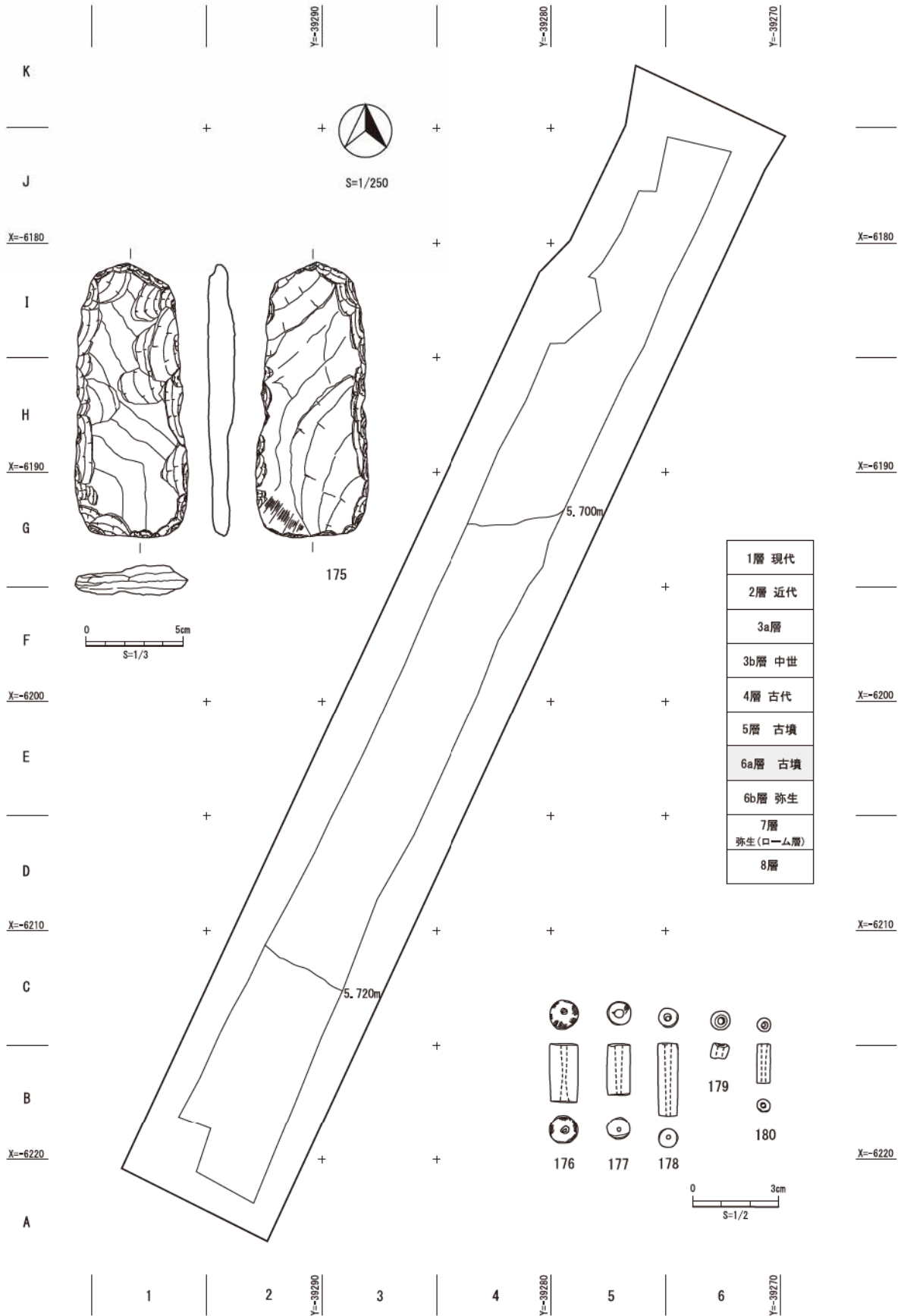


X=-6687.1
Y=-39525

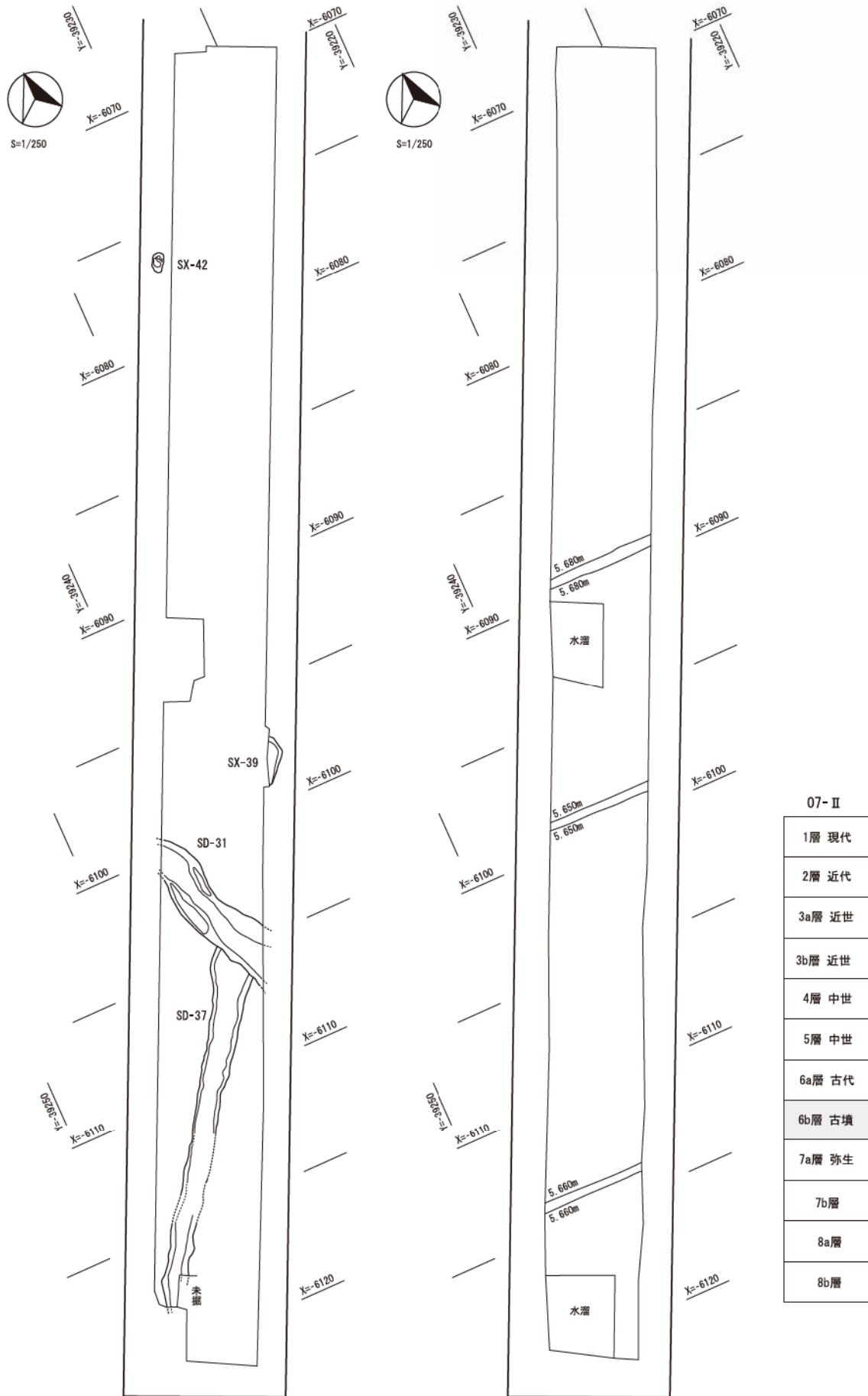
X=-6684.7
Y=-39530



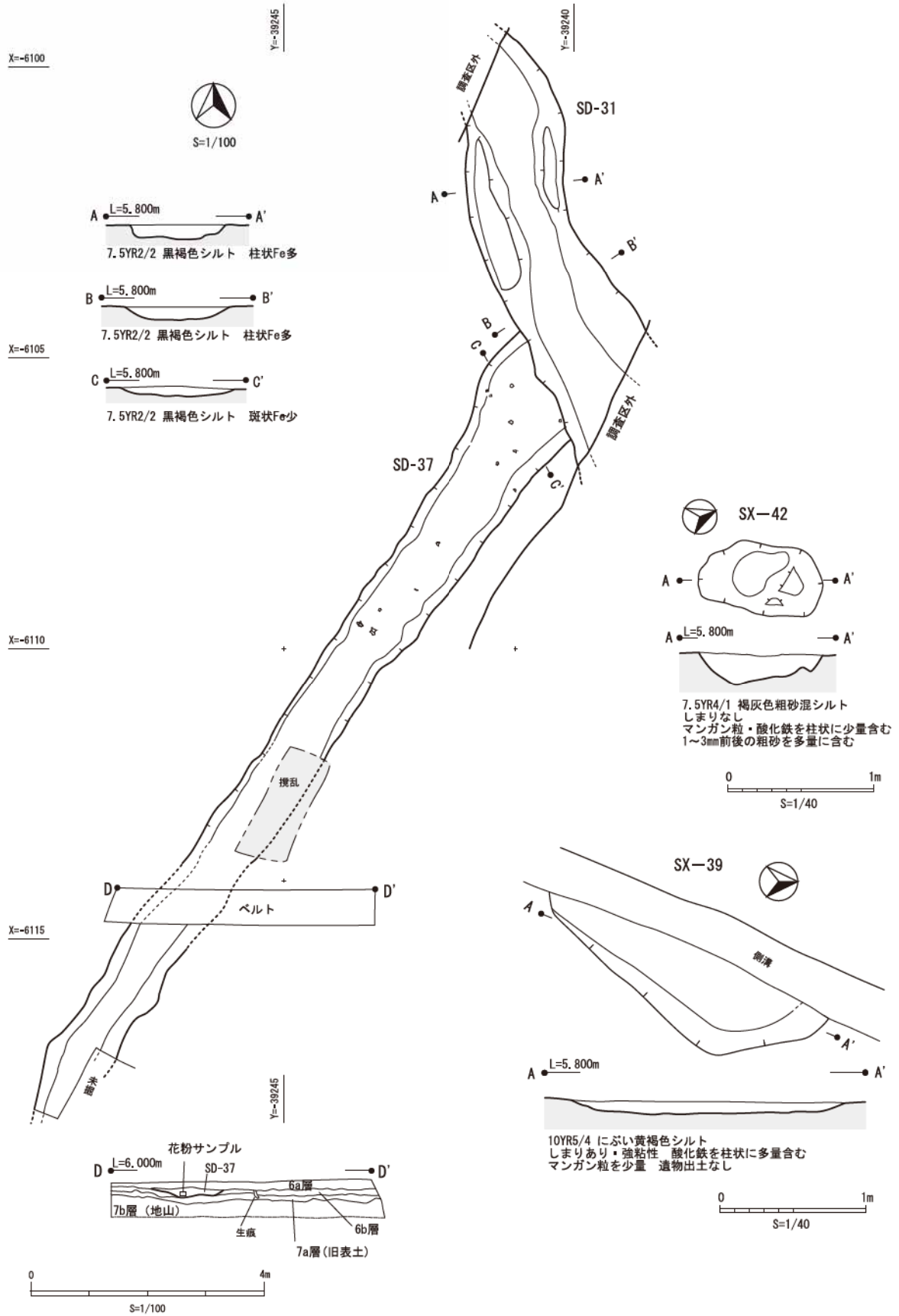
第167図 両迫間日渡遺跡 06-I区 SD-16実測図



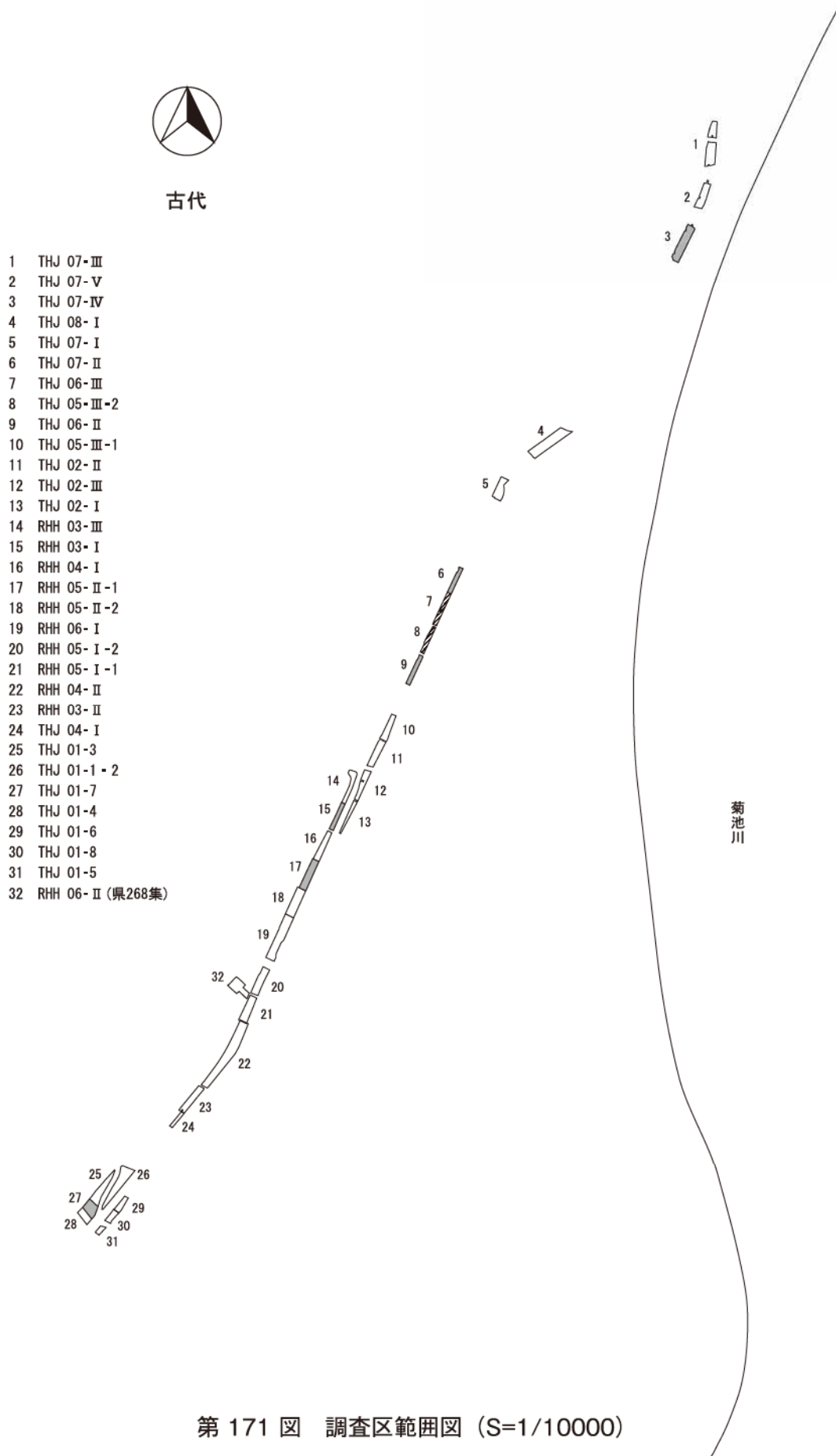
第 168 図 玉名平野条里跡 06-II 区 6a 層コンタ図及び出土遺物実測図



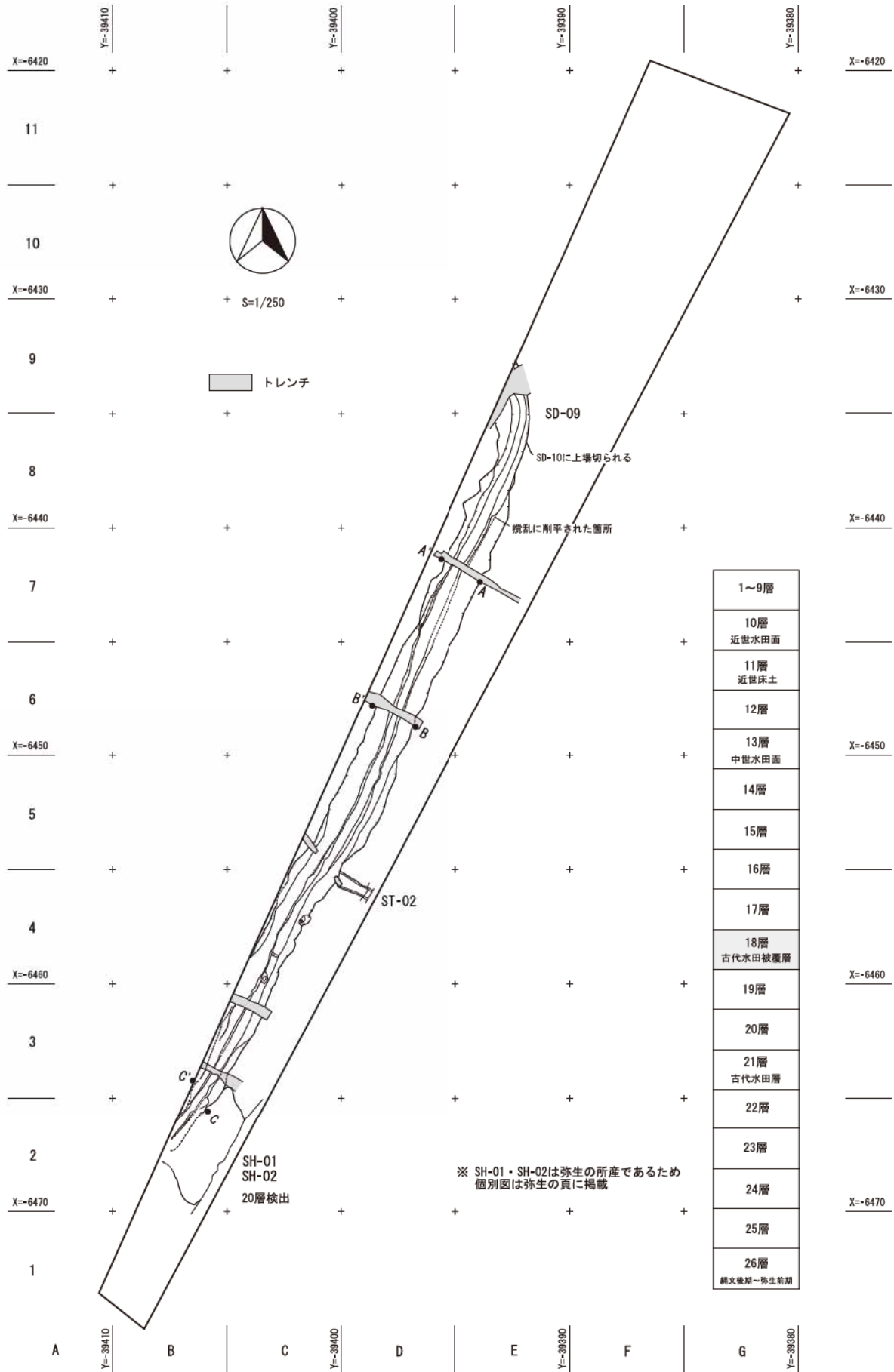
第 169 図 玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 6b 層遺構配置図及びコンタ図



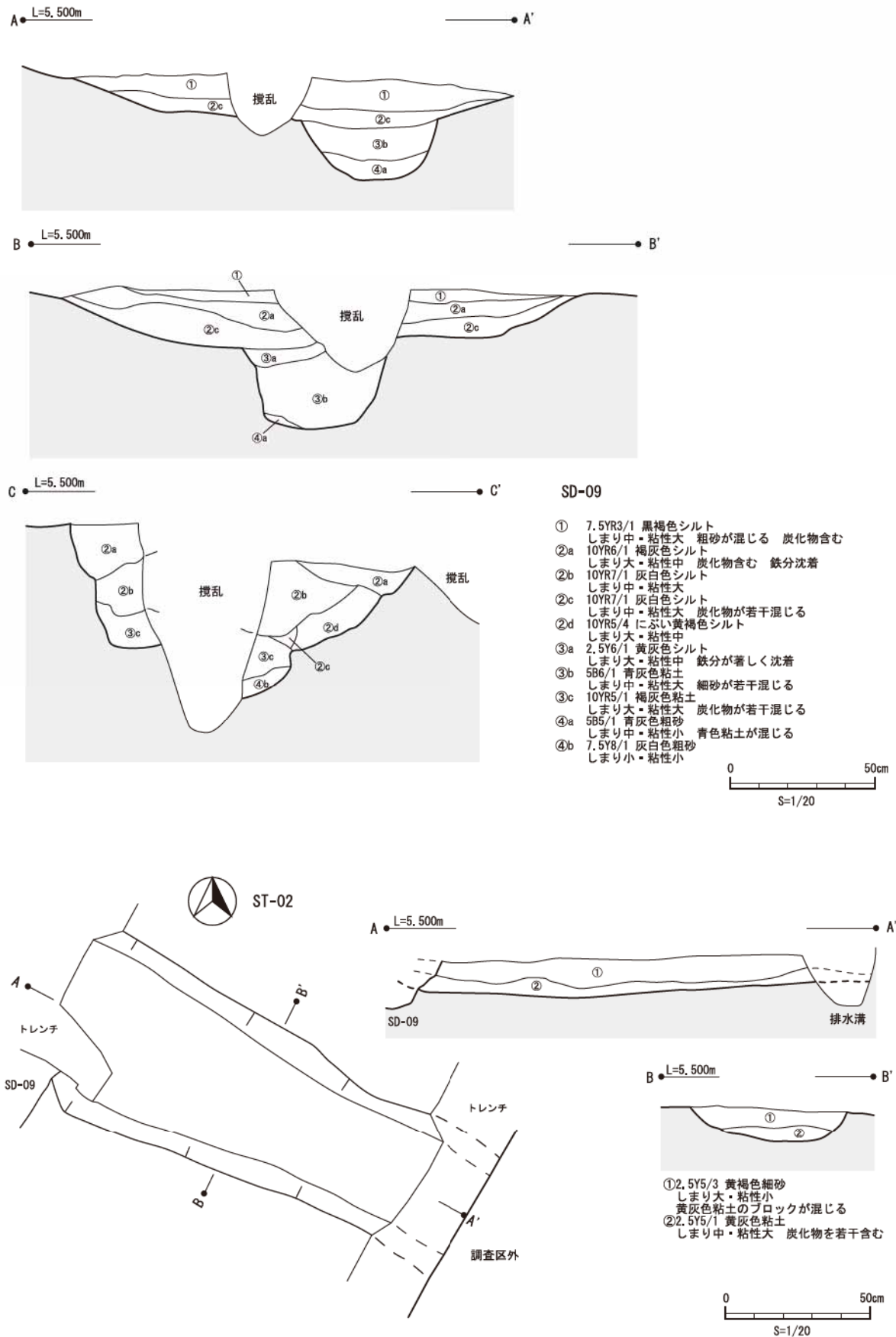
第 170 図 王女野冬甲跡 07-II (06-III) 区 SD-31・37・SX-39・42 宇測図



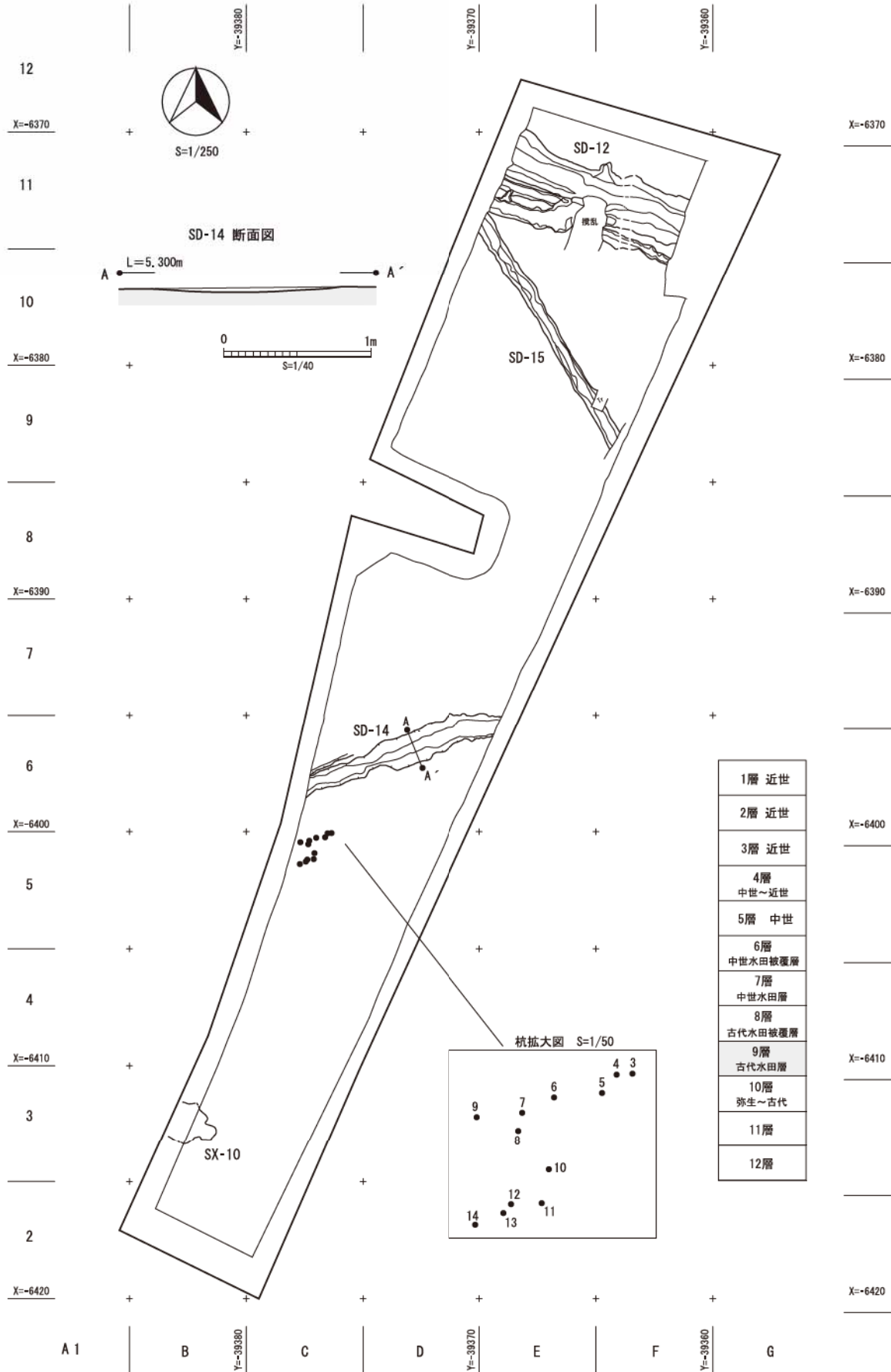
第 171 図 調査区範囲図 (S=1/10000)



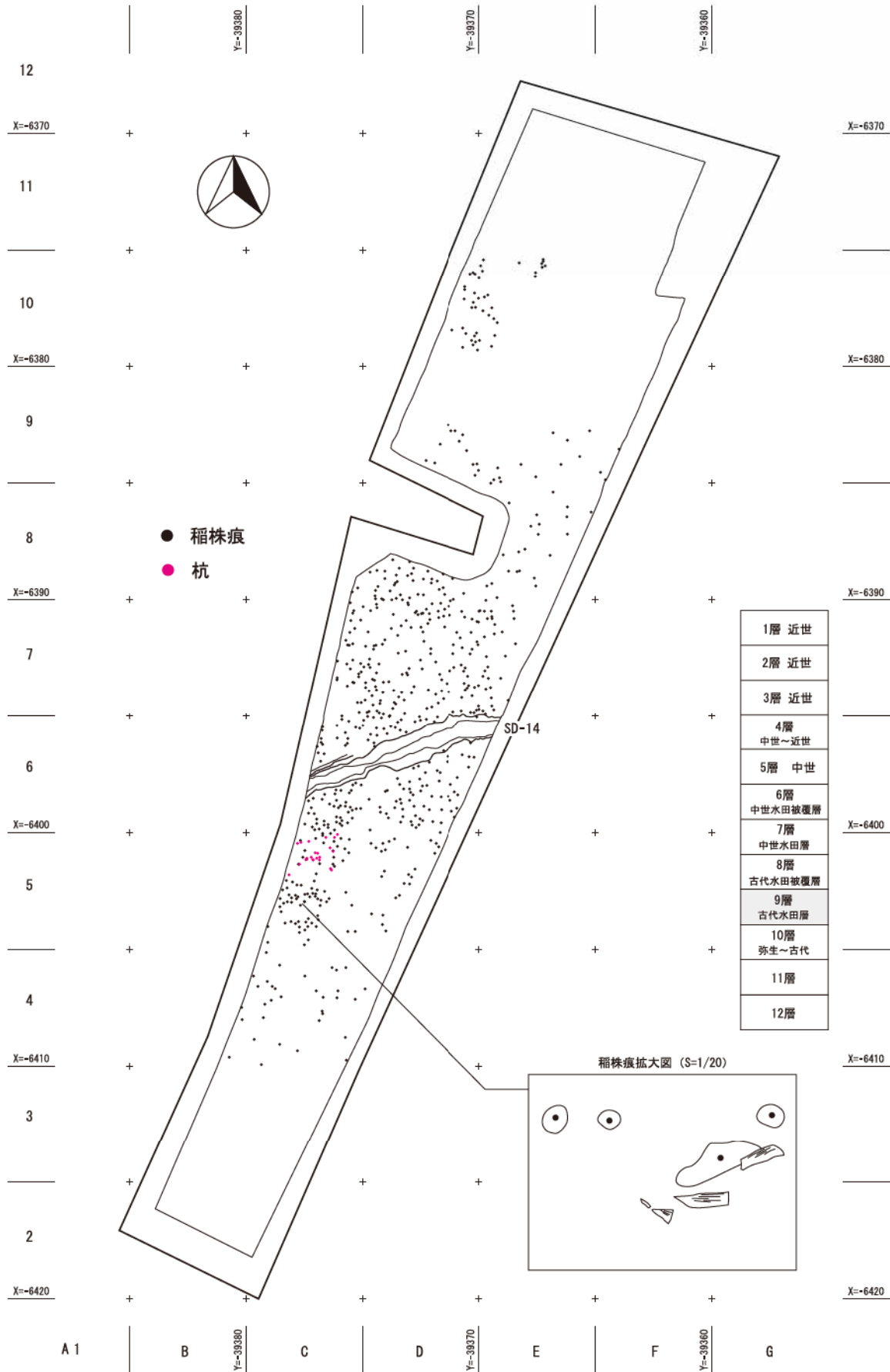
第 172 図 玉名平野条里跡 02-I 区 18 層遺構配置図



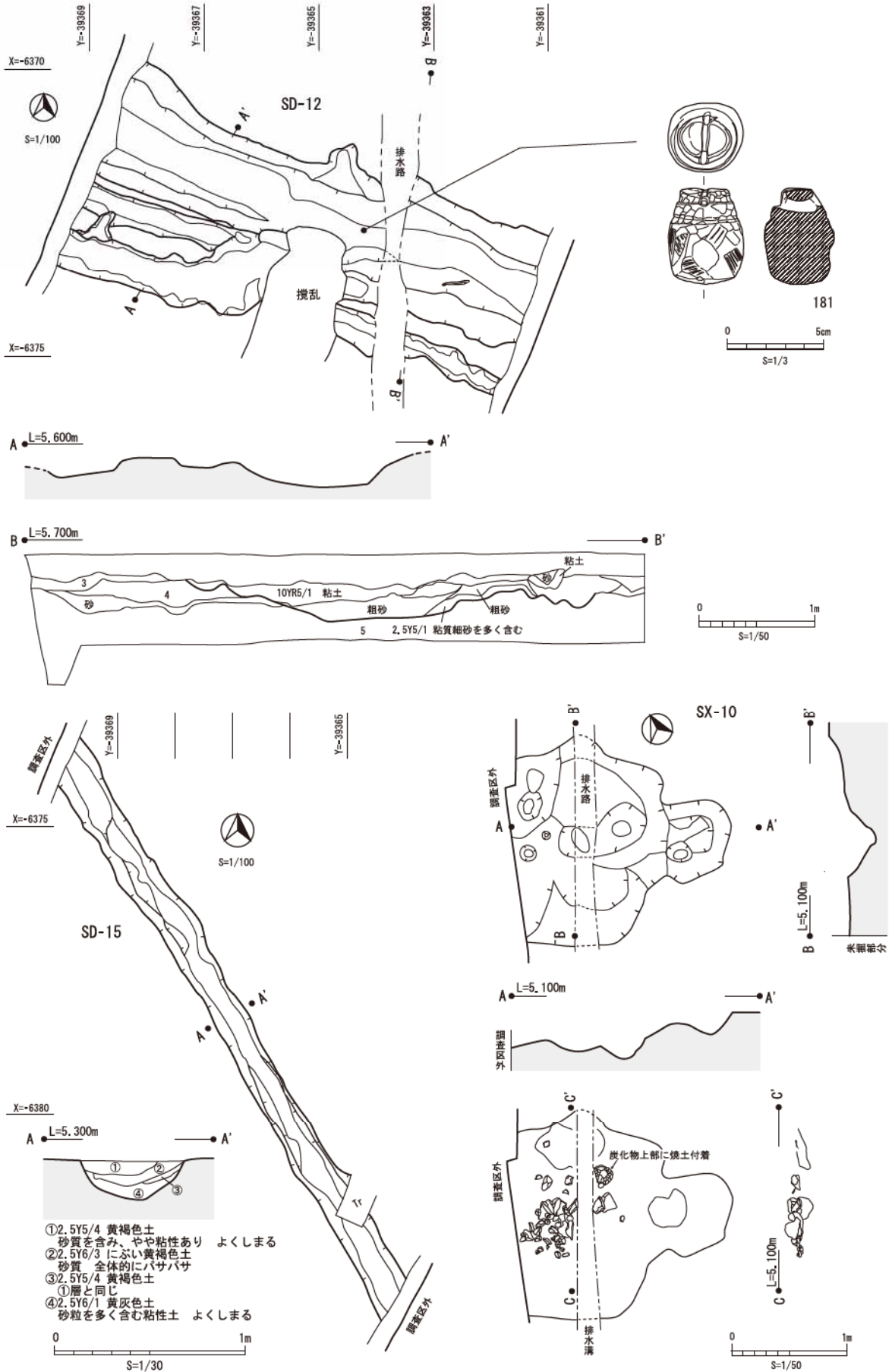
第 173 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SD-09・ST-02 実測図



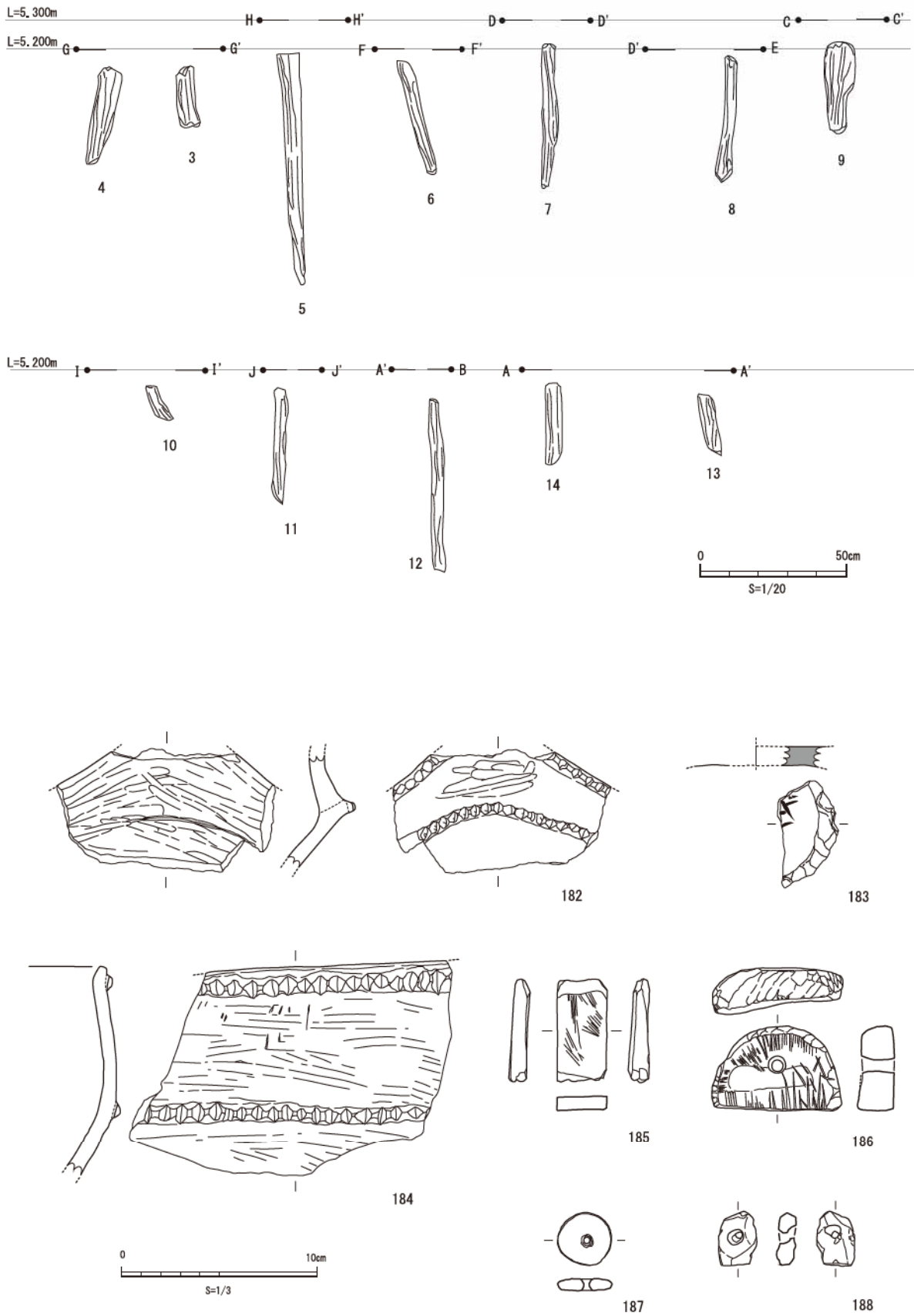
第 174 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 9層遺構配置図



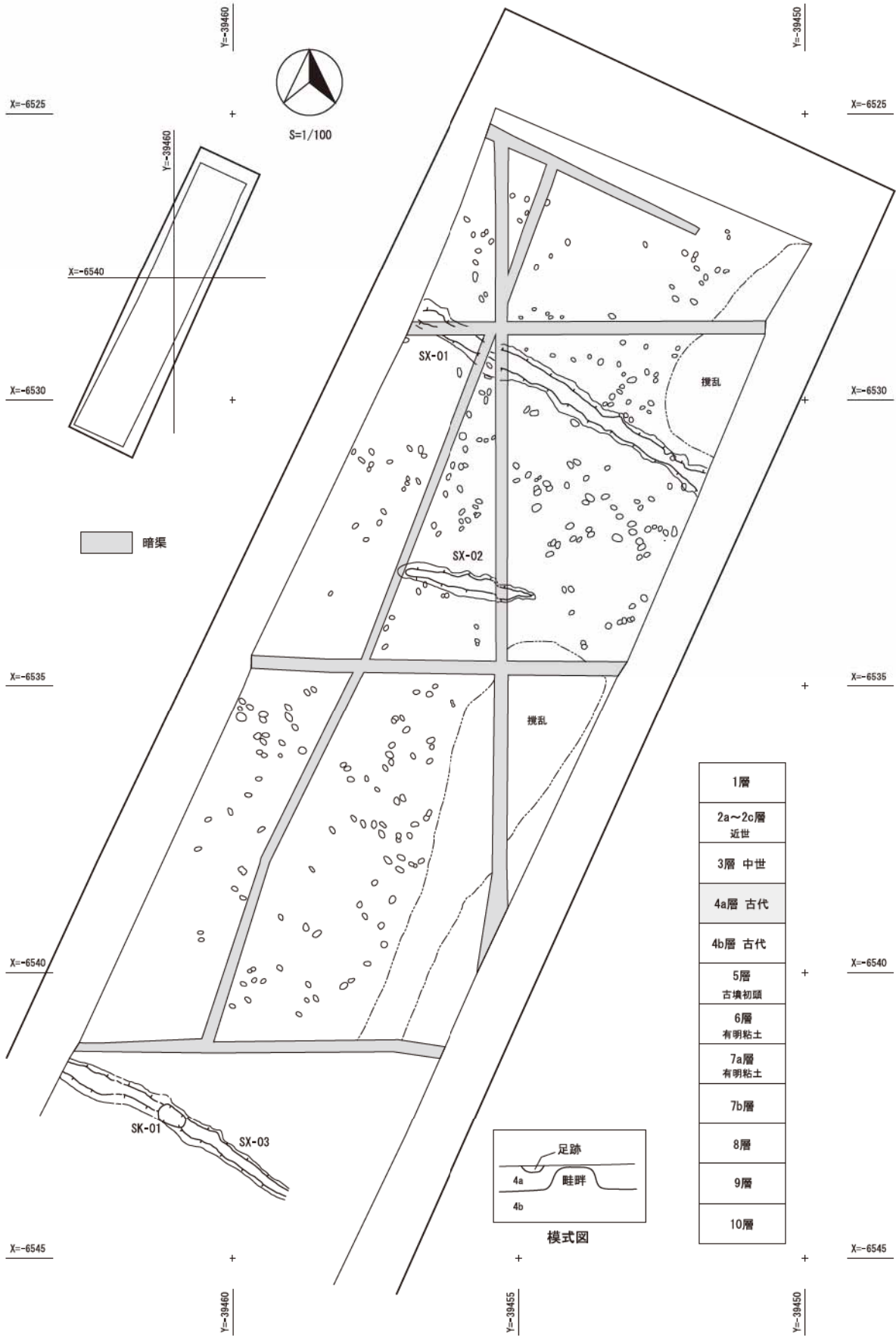
第 175 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 9層水田面稻株痕実測図



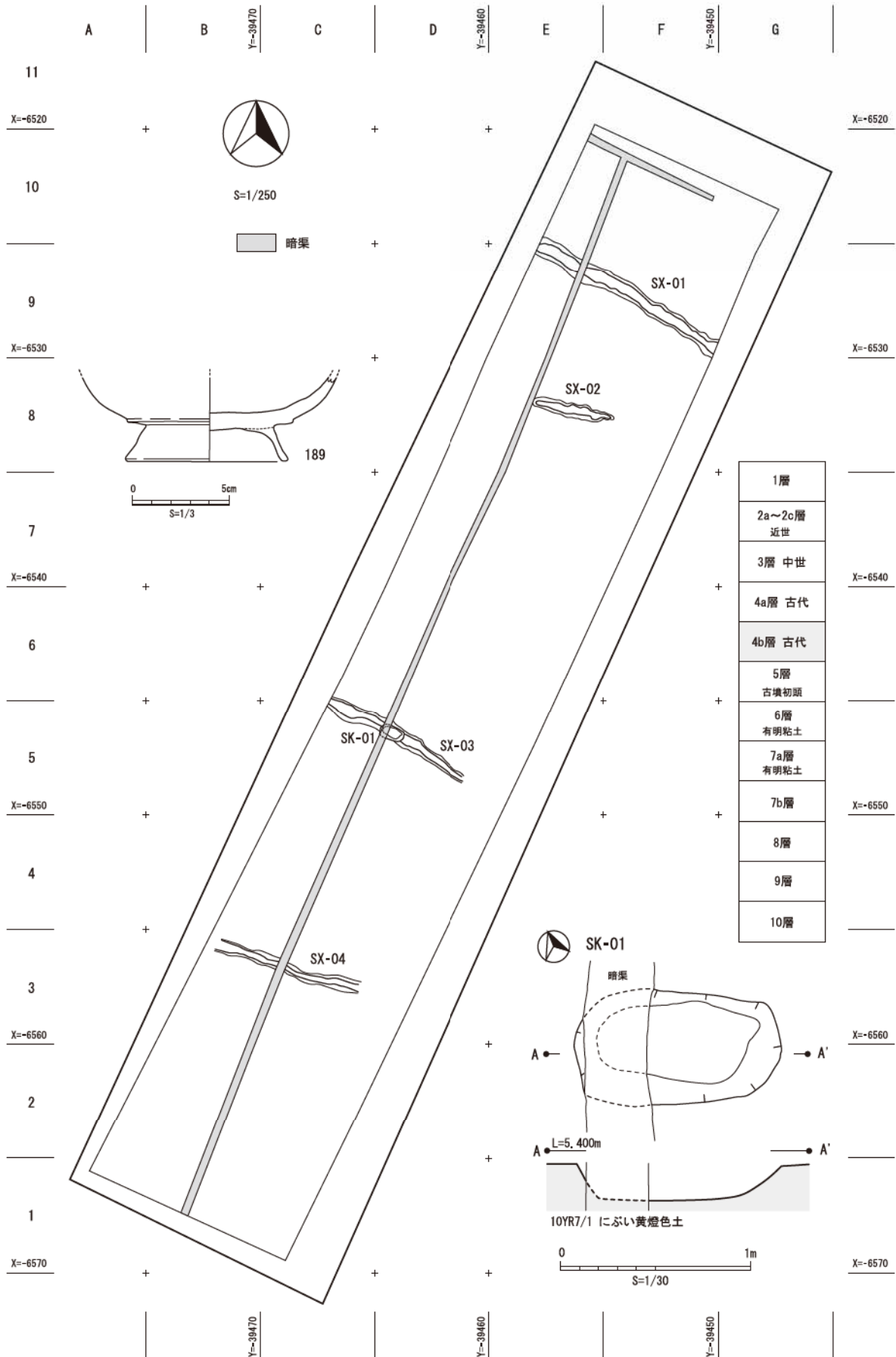
第 176 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 SD-12・15・SX-10 実測図及び出土遺物実測図



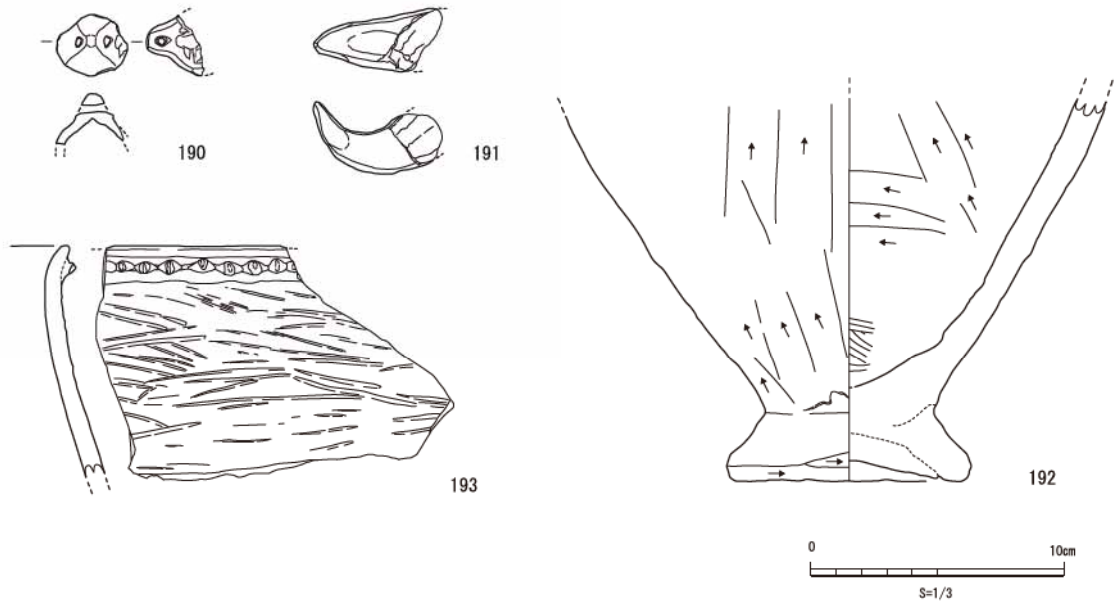
第 177 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 杭 3~14 実測図及び出土遺物実測図



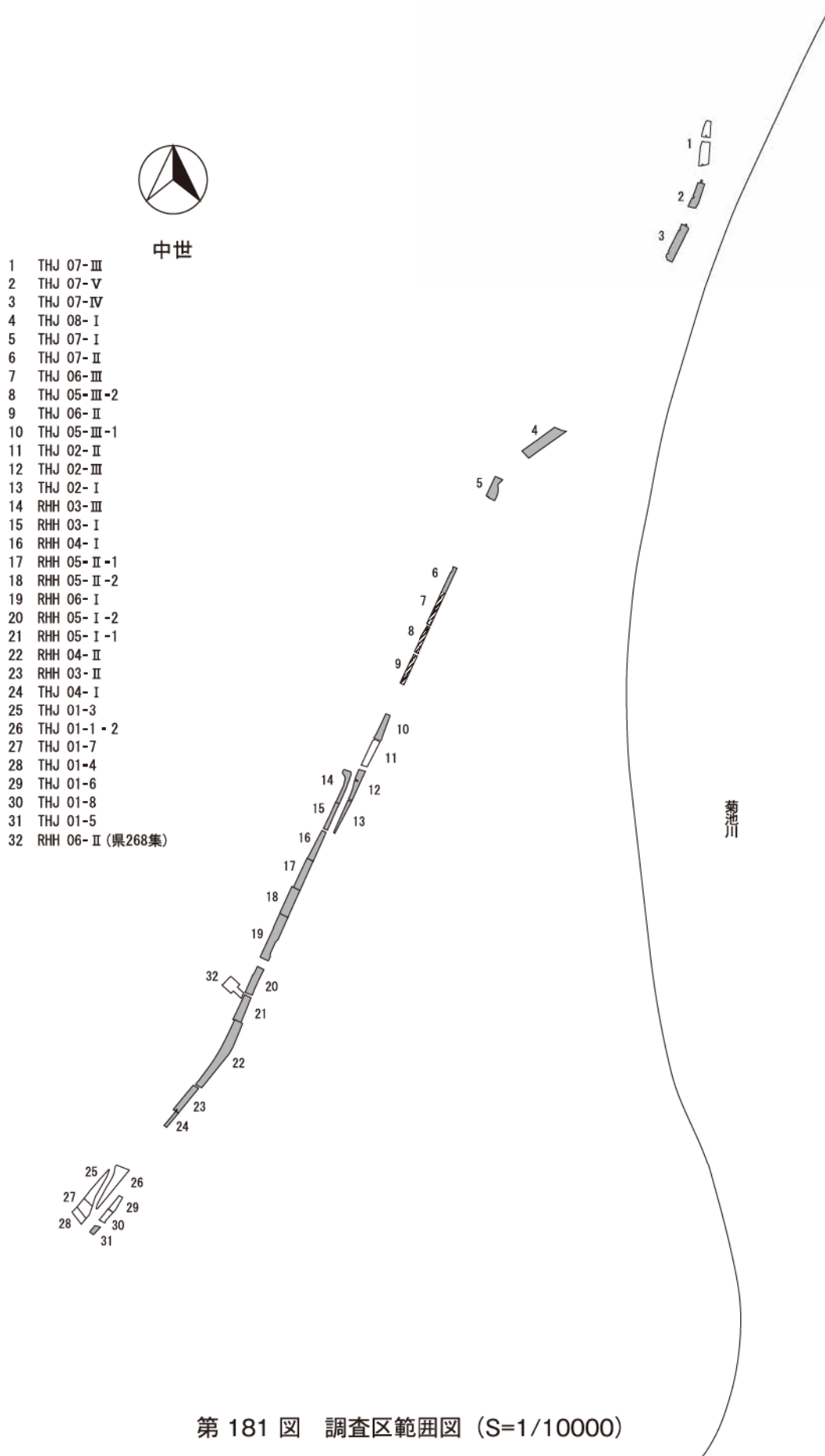
第 178 図 両迫間日渡遺跡 O5-II-1 区 4a 層遺構配置図・足跡配置図



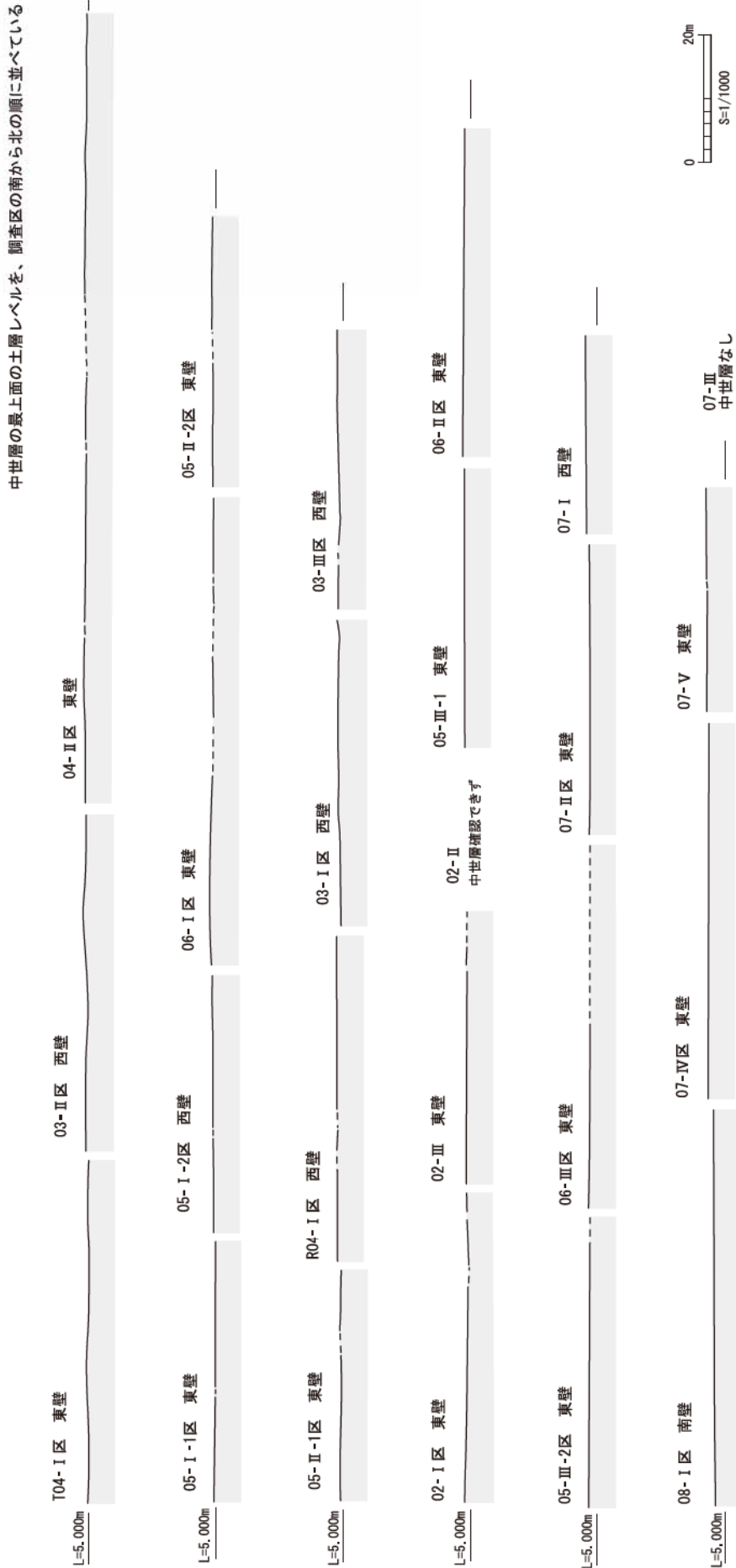
第 179 図 両迫間日渡遺跡 05-II-1 区
4b 層遺構配置図及び出土遺物実測図 SK-01 実測図



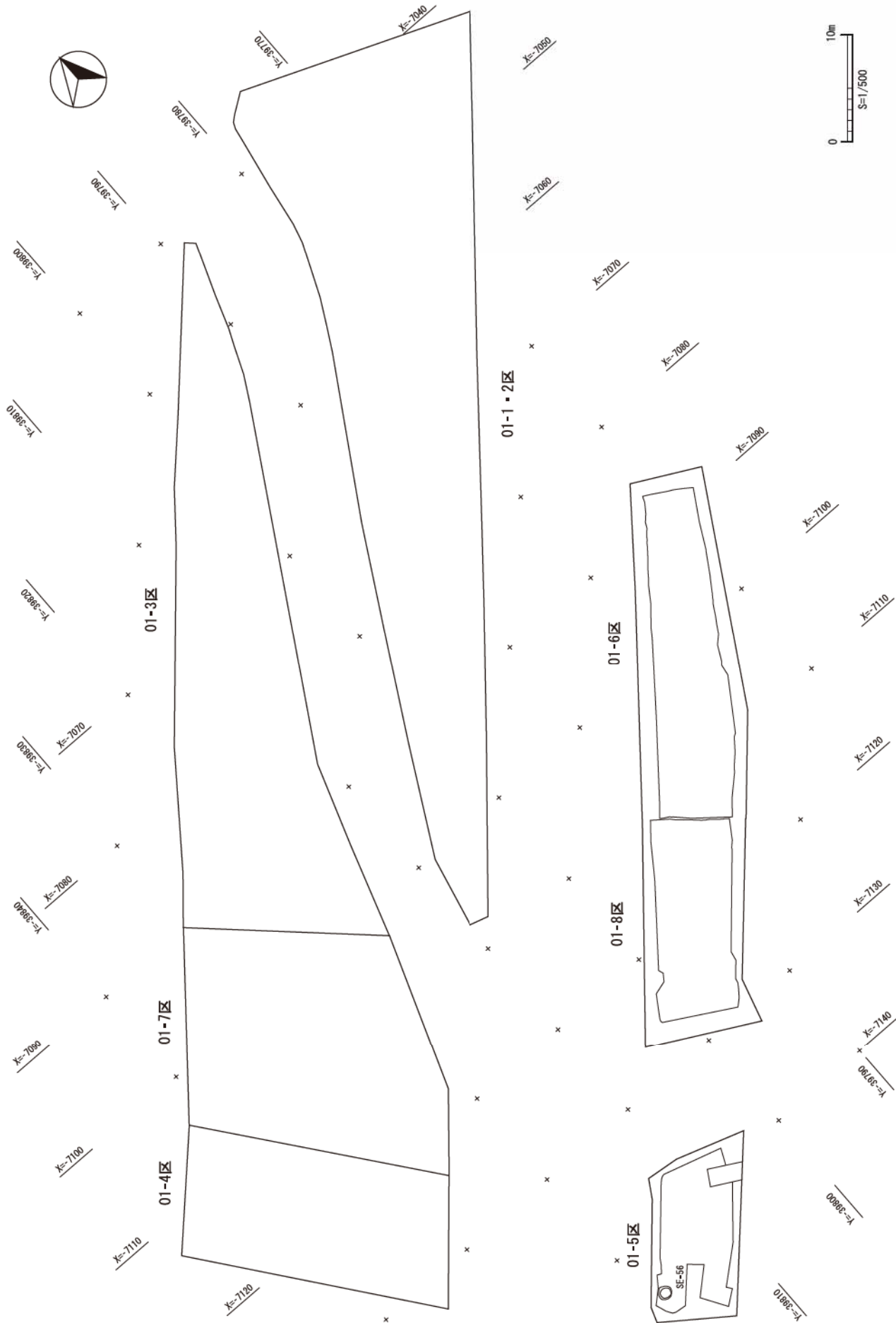
第 180 図 両迫間日渡遺跡 05-II-1 区 出土遺物実測図



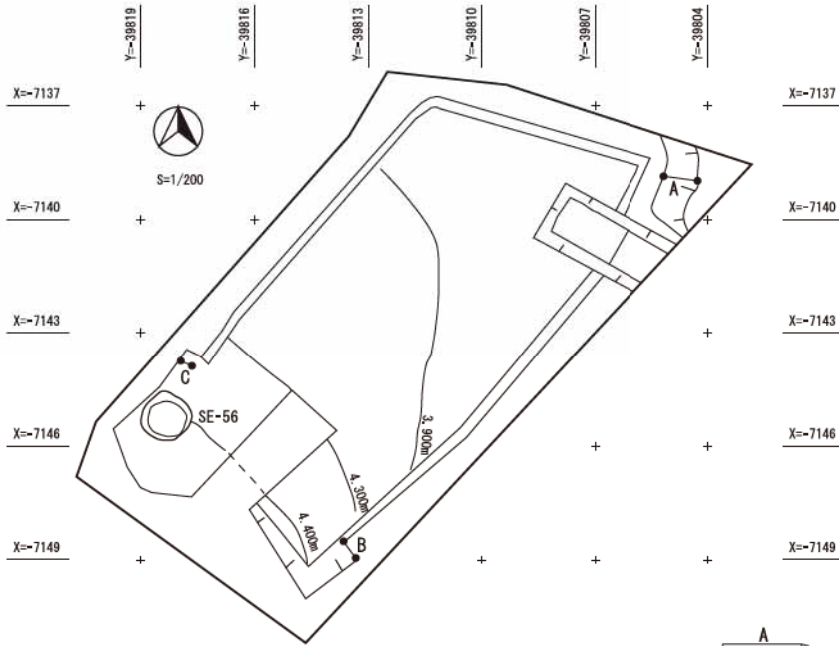
第 181 図 調査区範囲図 (S=1/10000)



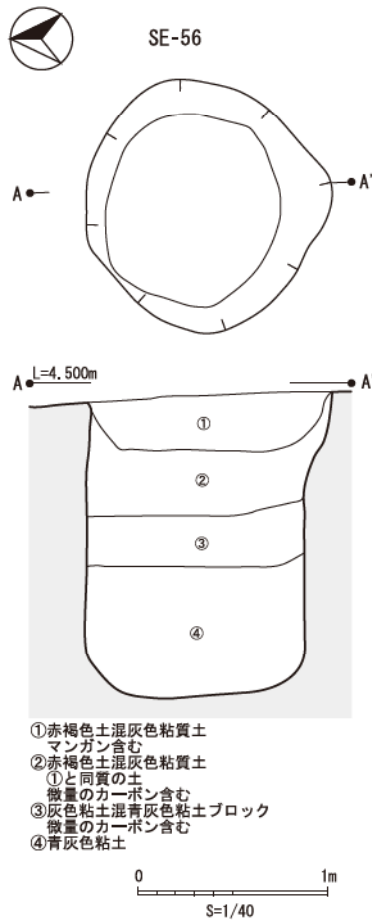
第 182 図 玉名平野条里跡・両迫間日波遺跡 中世層



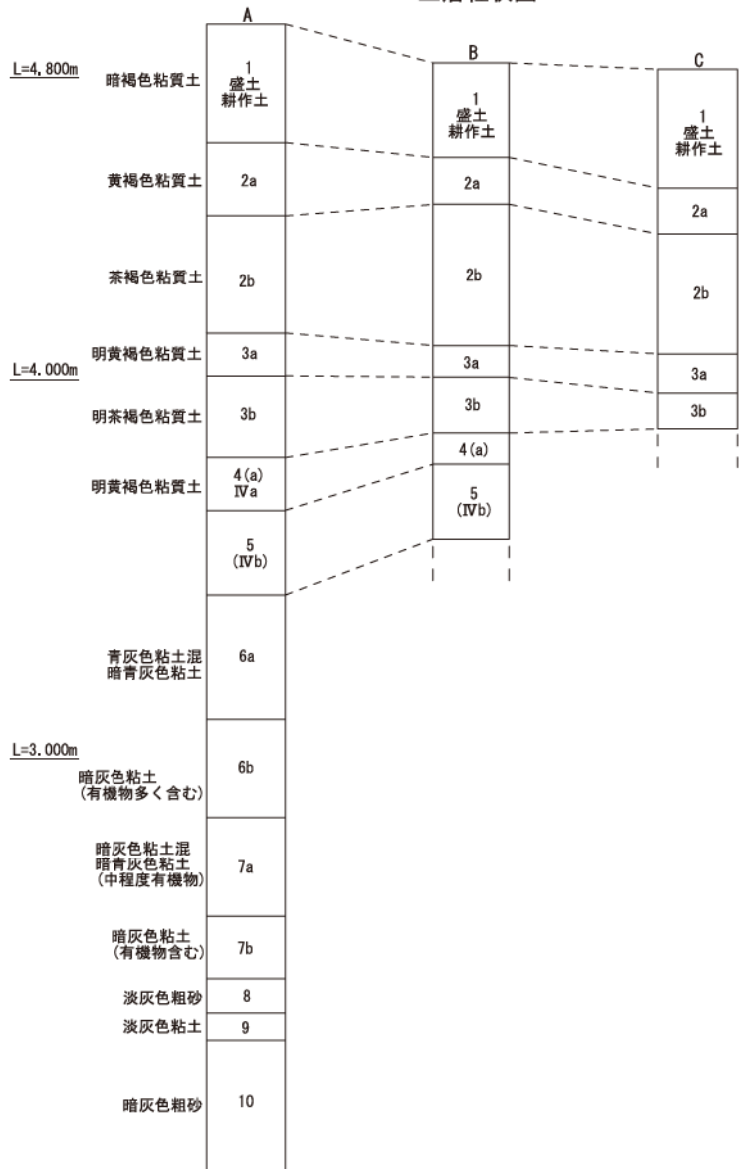
第183図 玉名平野条里跡01-1～8区 遺構配置図(中世)



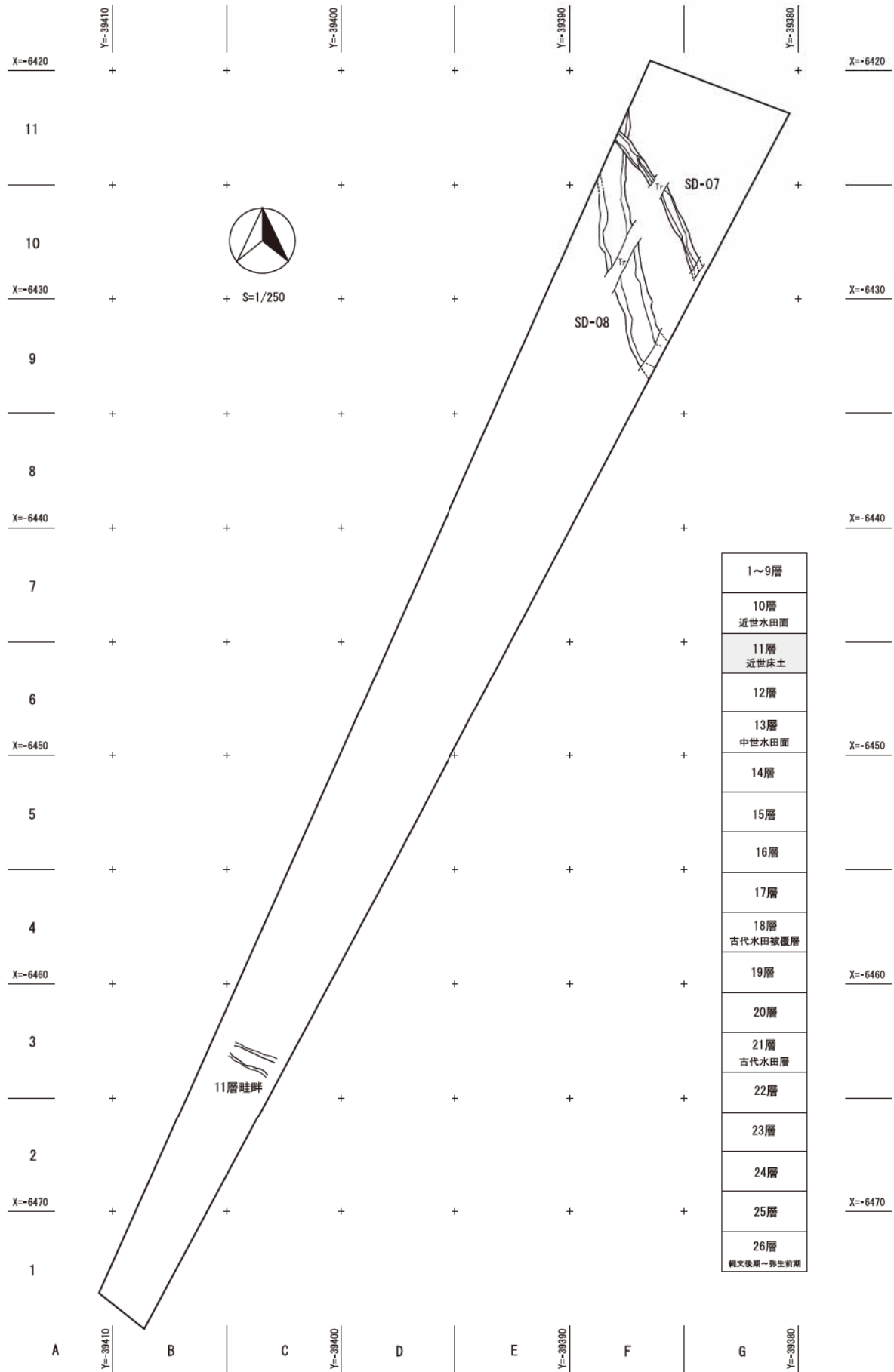
2a層上面遺構配置図



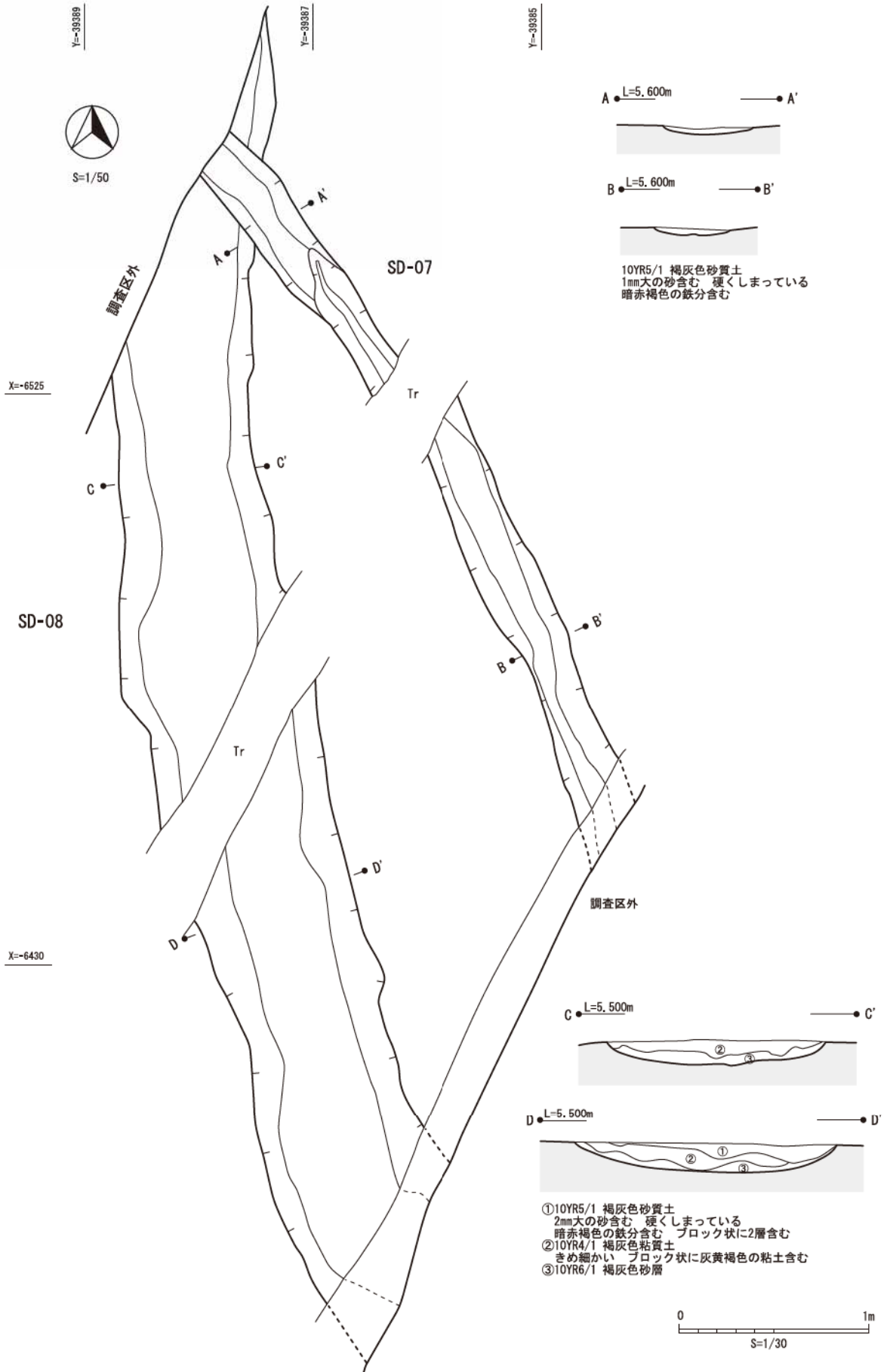
土層柱状図



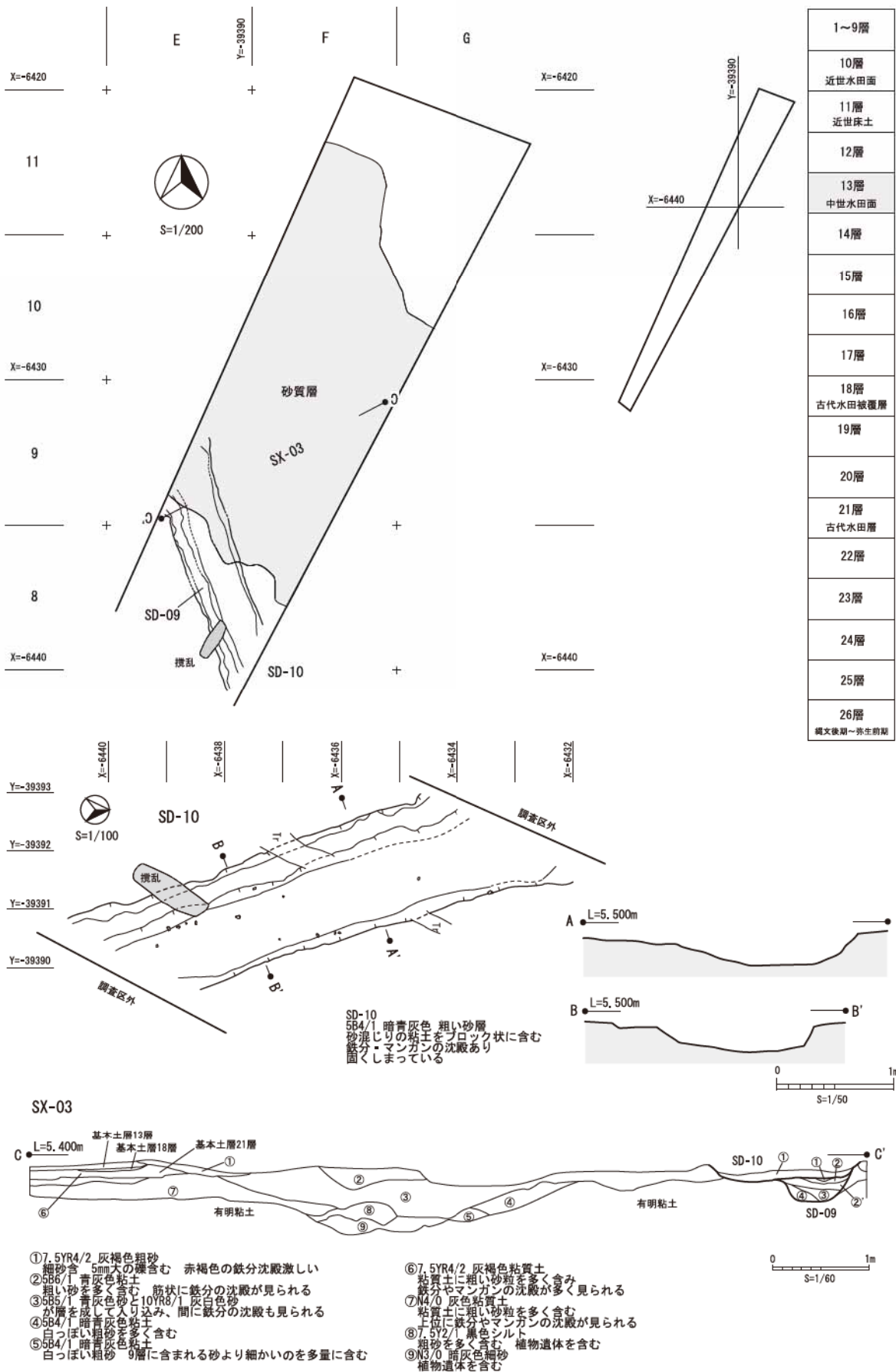
第 184 図 玉名平野条里跡 01-5 区 2a 層上面遺構配置図・土層柱状図・SE-56 実測図



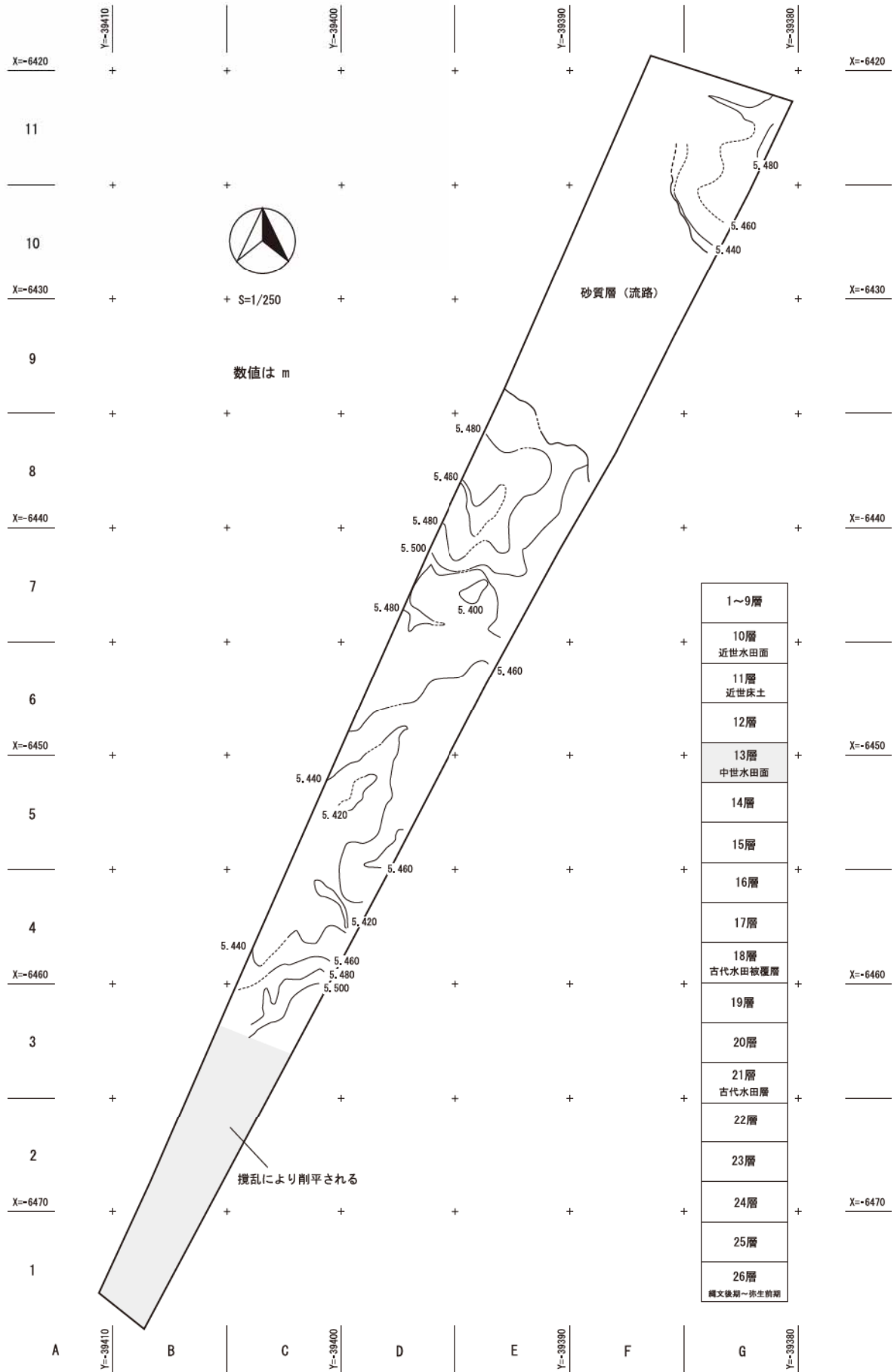
第 185 図 玉名平野条里跡 02-I 区 11 層遺構配置図



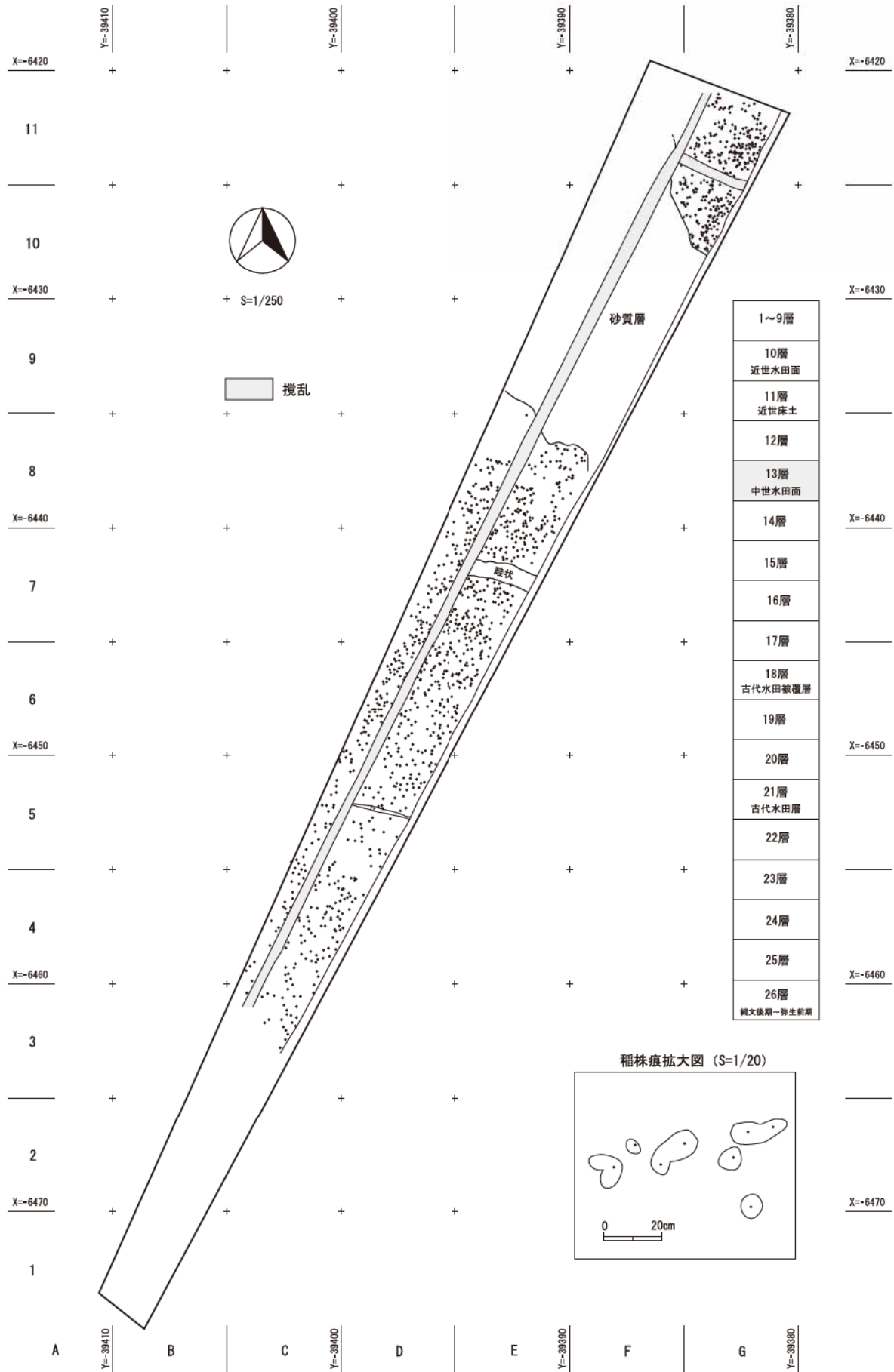
第 186 図 玉名平野条里跡 02-I 区 SD-07・08 実測図



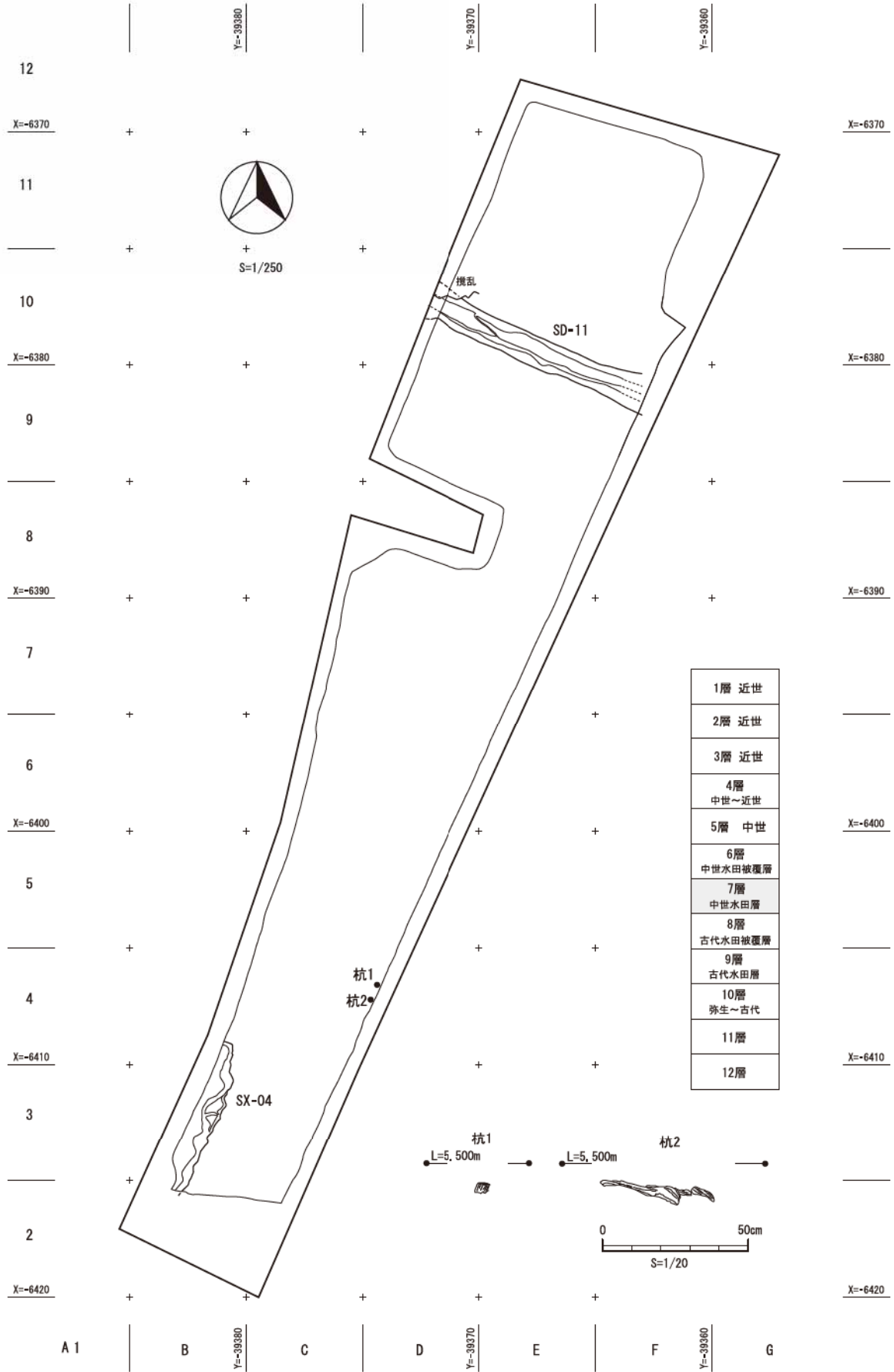
第 187 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層遺構配置図及び SD-10・SX-03 実測図



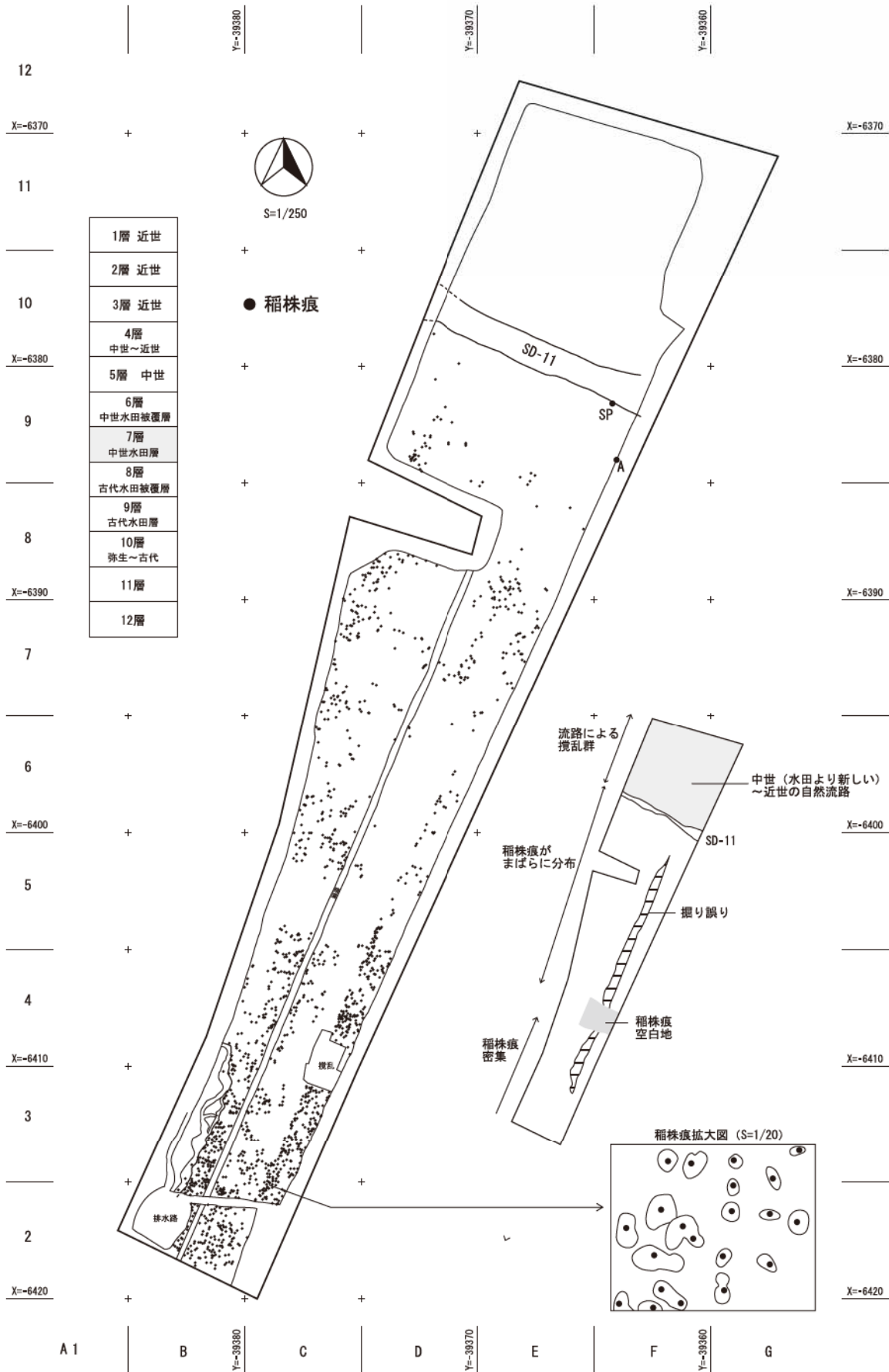
第 188 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層コンタ図



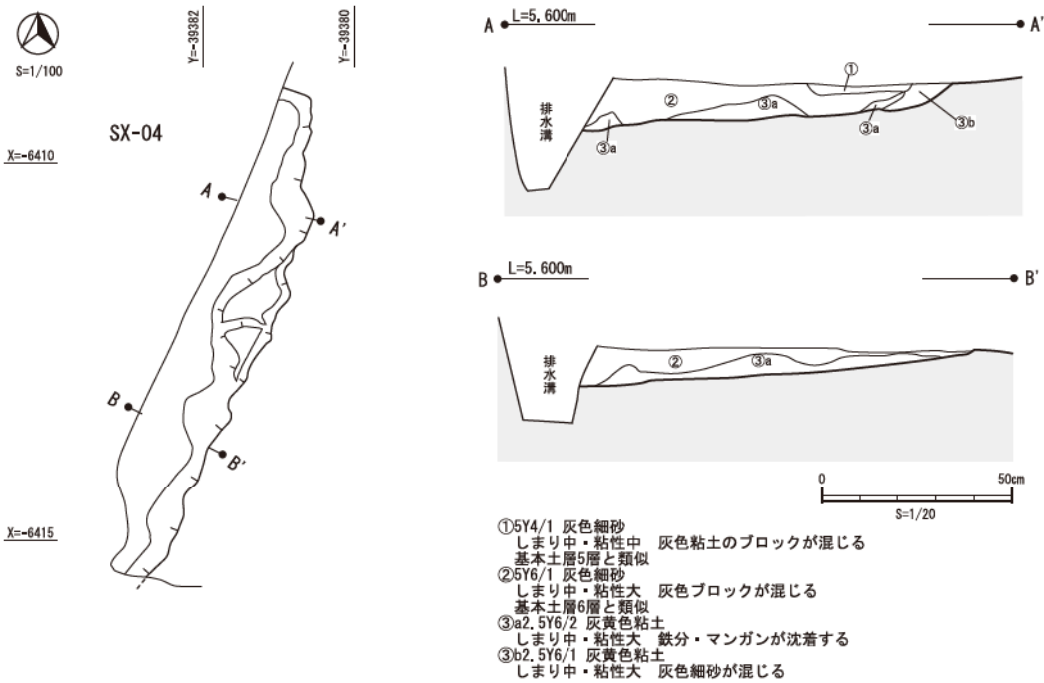
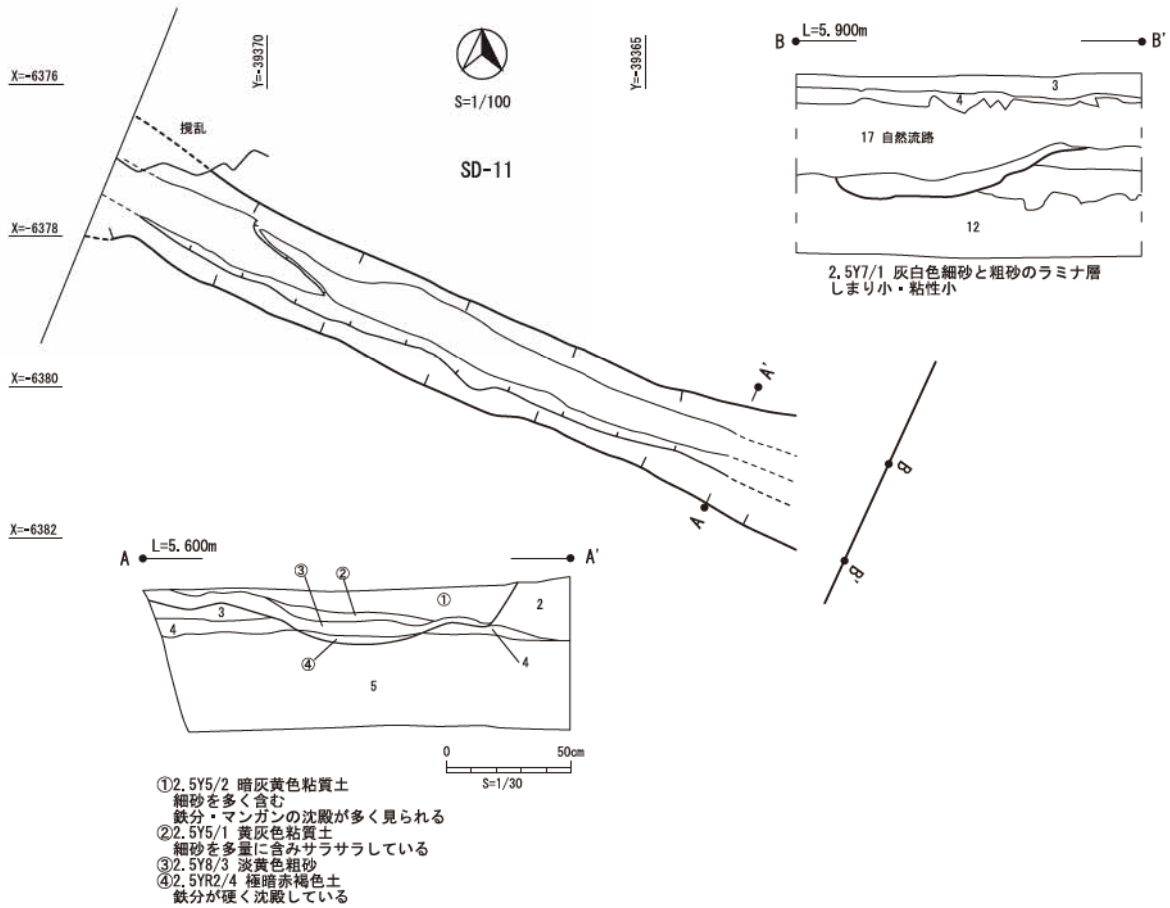
第 189 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層稻株痕実測図



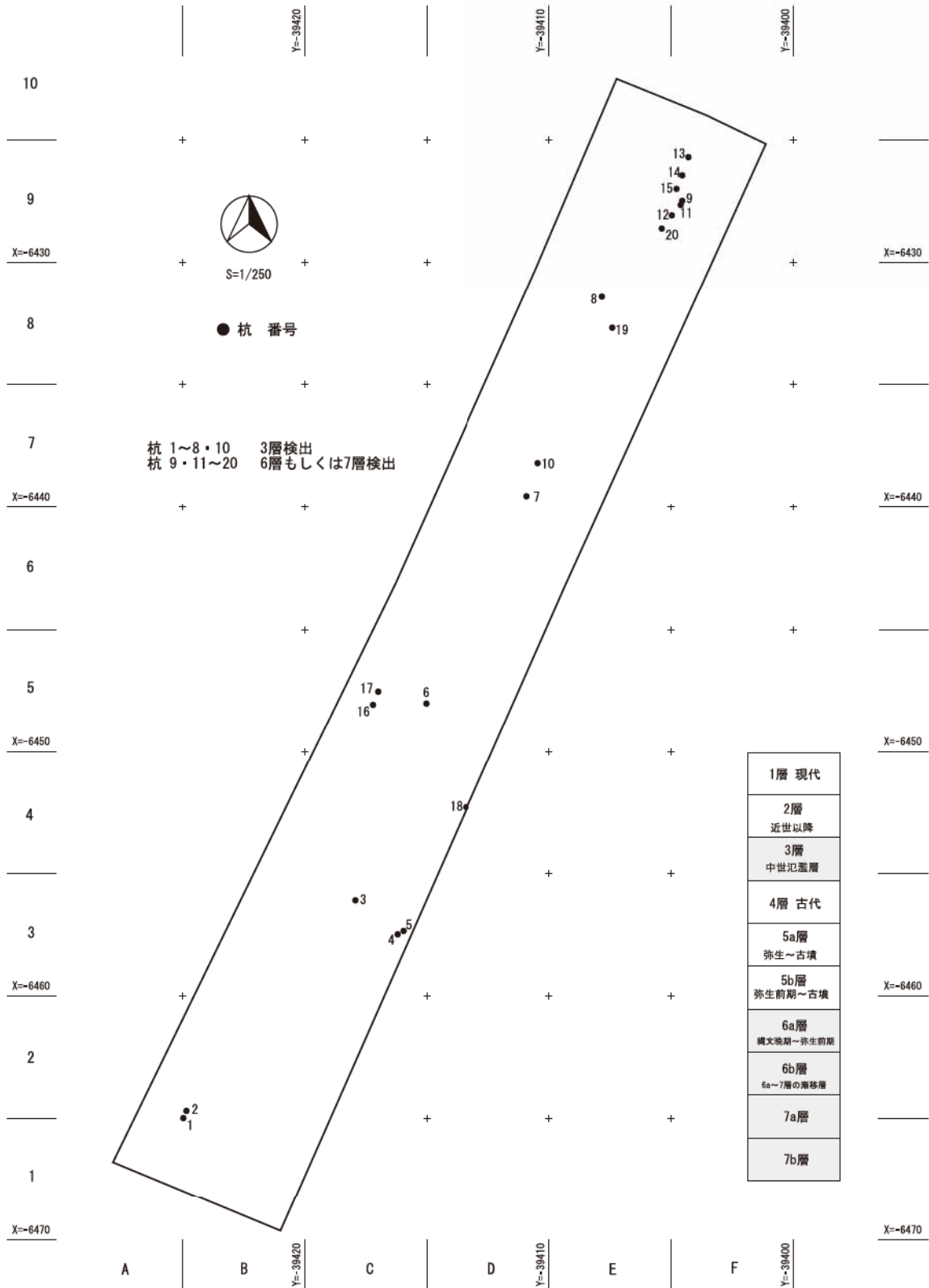
第 190 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 7層遺構配置図



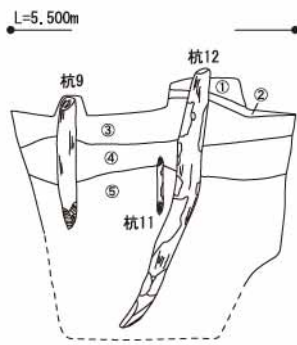
第 191 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 7層水田面実測図



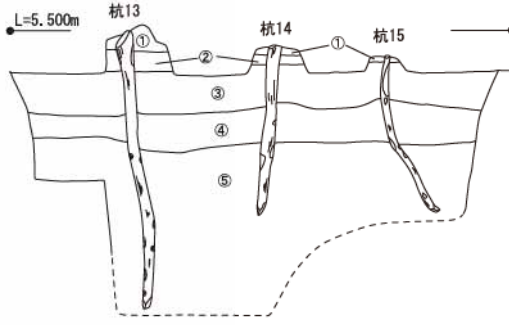
第 192 図 玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 SD-11・SX-04 実測図



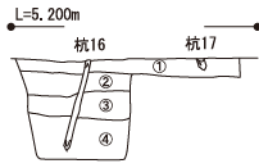
第 193 図 両迫間日渡遺跡 O3- I 区 杭検出配置図



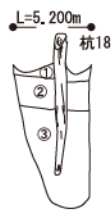
- 杭9・11・12
 ①7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
 しまり小 所々細砂あり 鉄分混じる
 ②7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土
 しまり中 シルト混じる
 ③5G4/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 細砂が混じる
 ④10G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ⑤10G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり中・粘性大 ややボロボロで崩れやすい
 植物の繊維を多く含む



- 杭13・14・15
 ①7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト
 しまり小 所々に細砂あり
 鉄分混じる
 ②7.5Y5/2 灰オリーブ色粘土
 しまり中 シルト混じる
 ③5G4/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 細砂が若干混じる
 ④10G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ⑤10G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり中・粘性大 ややボロボロ、崩れやすい
 植物の繊維を多く含む



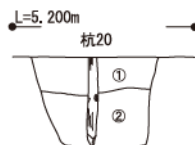
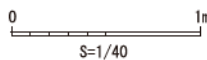
- 杭16・17
 ①10YR4/1 褐灰色粘土
 しまり大 鉄分を多く含む
 暗緑灰色の粘土が所々に混じる
 ②N3/0 暗灰色粘土
 しまり大 鉄分を少し多めに含む
 ③N5/0 灰色粘土
 しまり大 鉄分を少し含む
 ④2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土
 しまり大



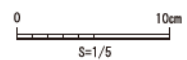
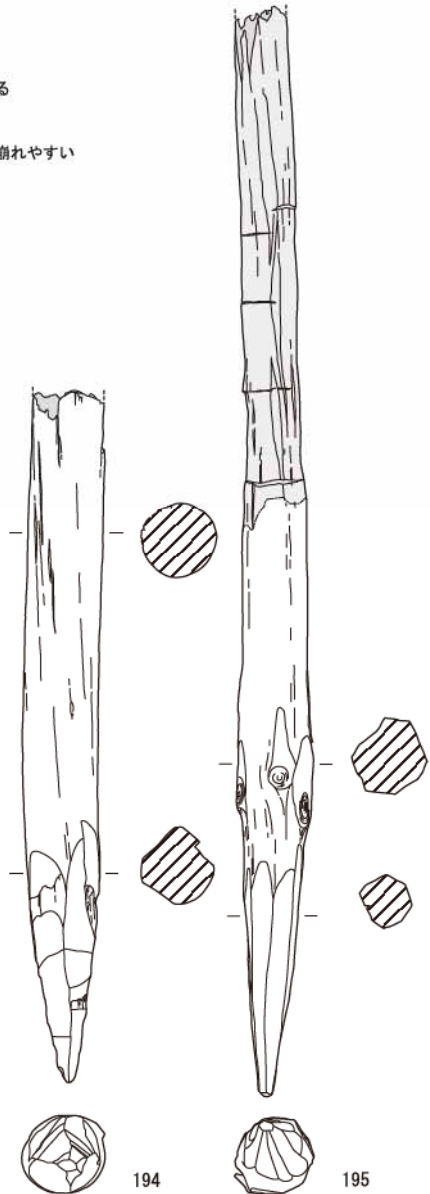
- 杭18
 ①N4/1 暗オリーブ灰色粘土
 しまり中 粗砂を少し含む
 ②2.5GY5/1 オリーブ灰色粘土
 しまり中 シルトを所々含む
 ③N4/0 灰色粘土
 しまり大



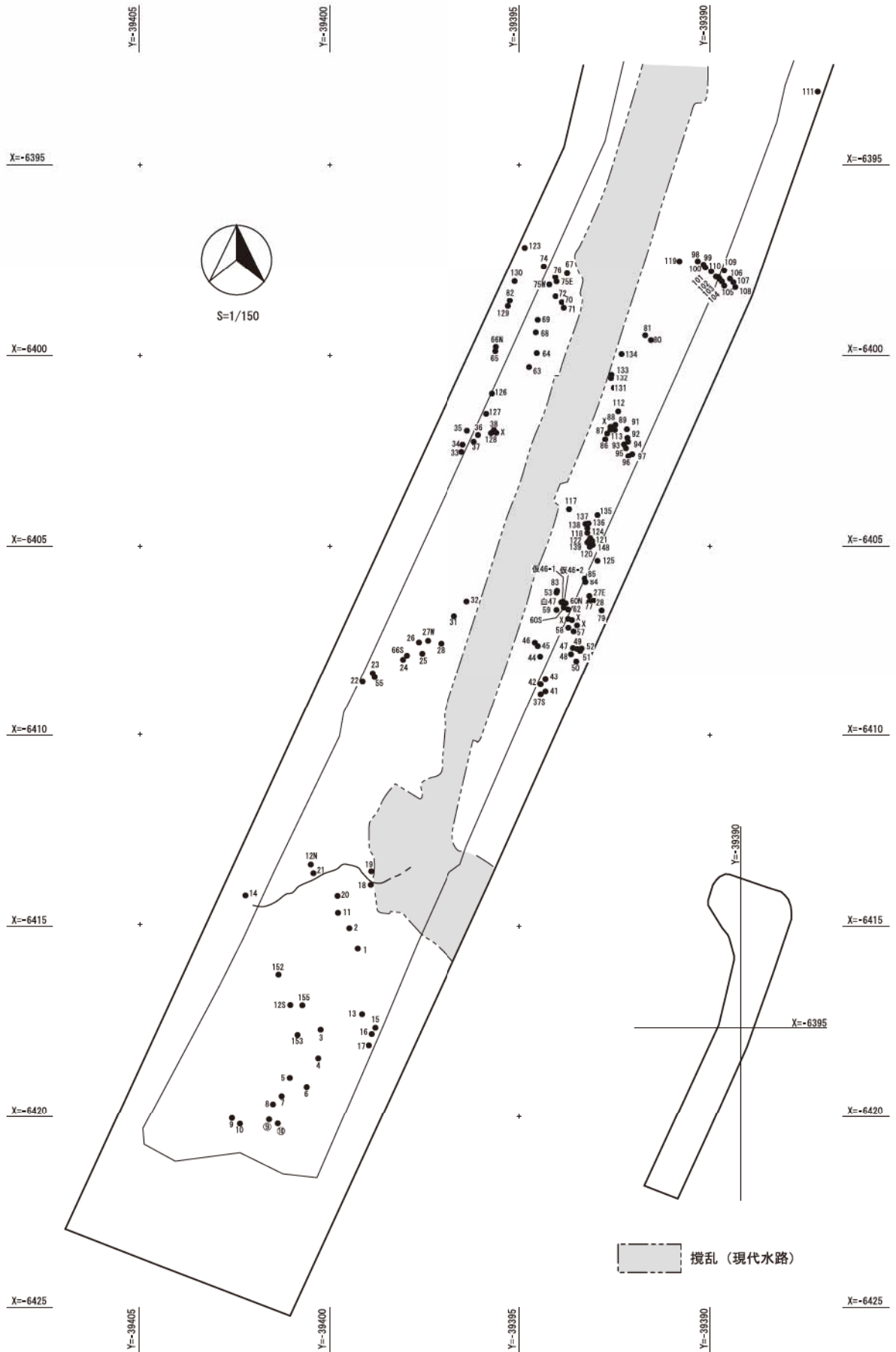
- 杭19
 ①7.5Y7/3 浅黄色粘土
 しまり小・粘性大
 杭周辺は腐植により青変
 基本土層6b層に相当
 ②5G4/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 ③10G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大
 植物の繊維を多く含む



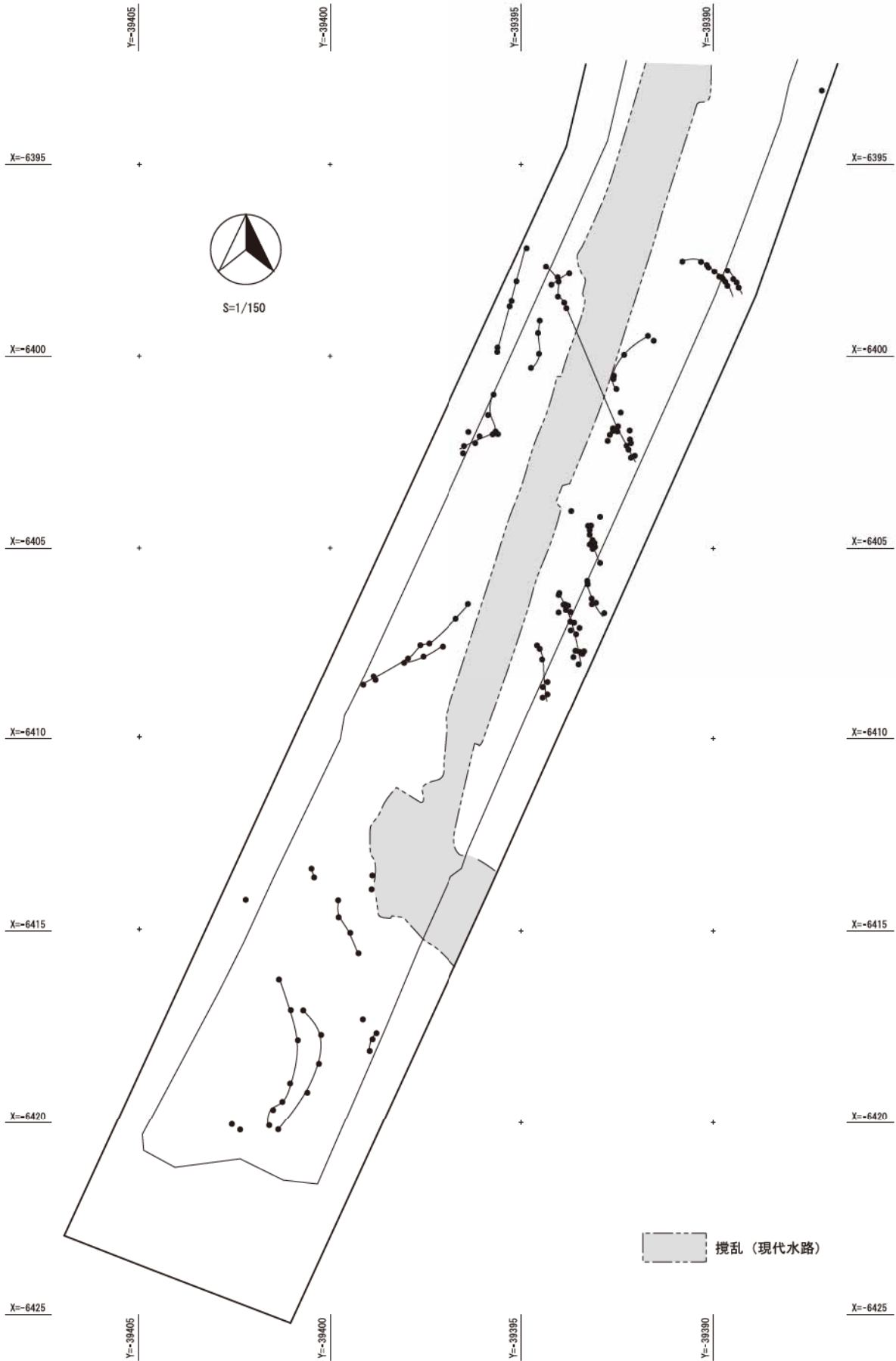
- 杭20
 ①5G4/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大 細砂混じる
 ②5G3/1 暗緑灰色粘土
 しまり小・粘性大



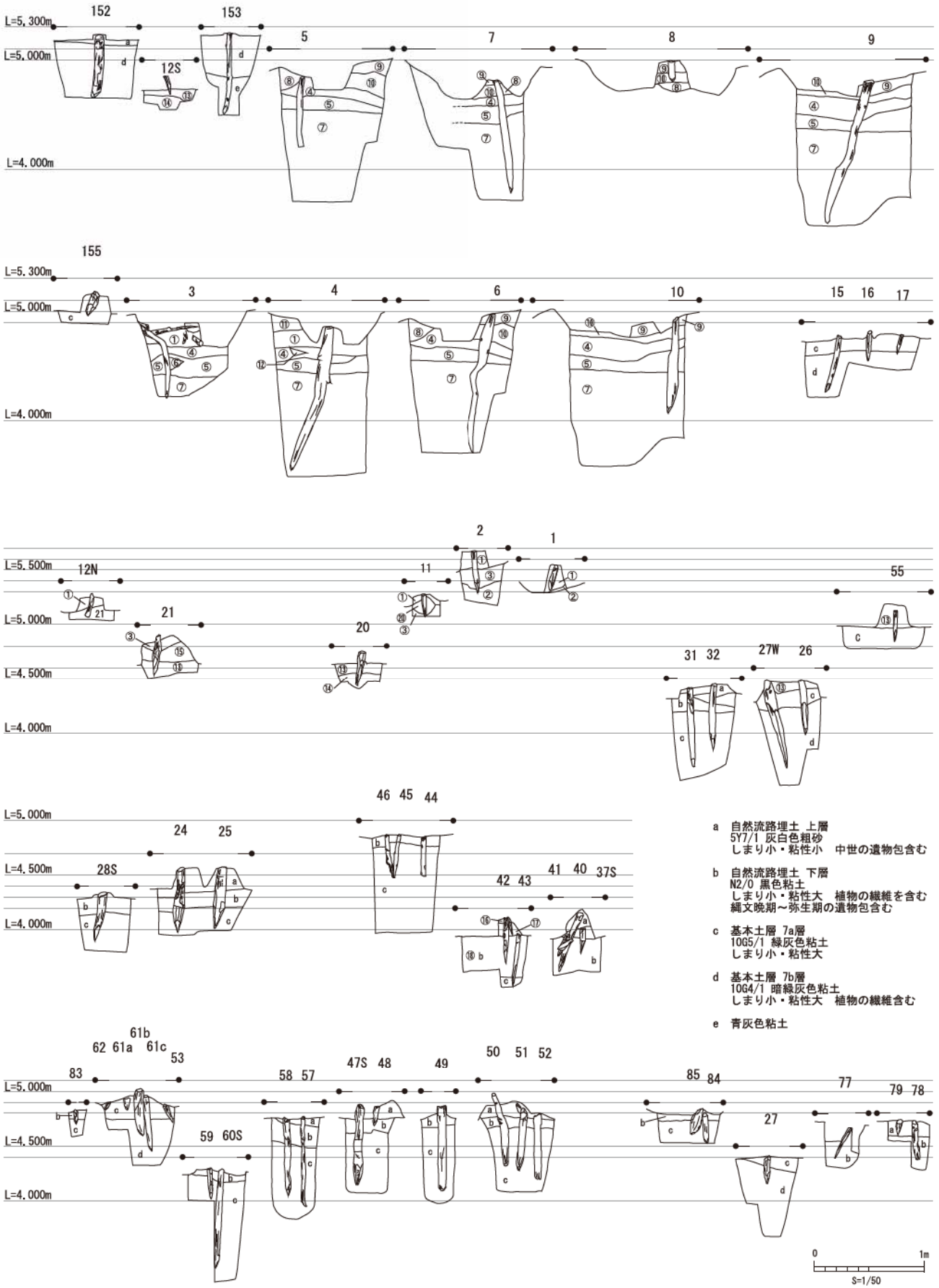
第 194 図 両迫間日渡遺跡 03-I 区 杭9・11~20 実測図及び出土遺物実測図



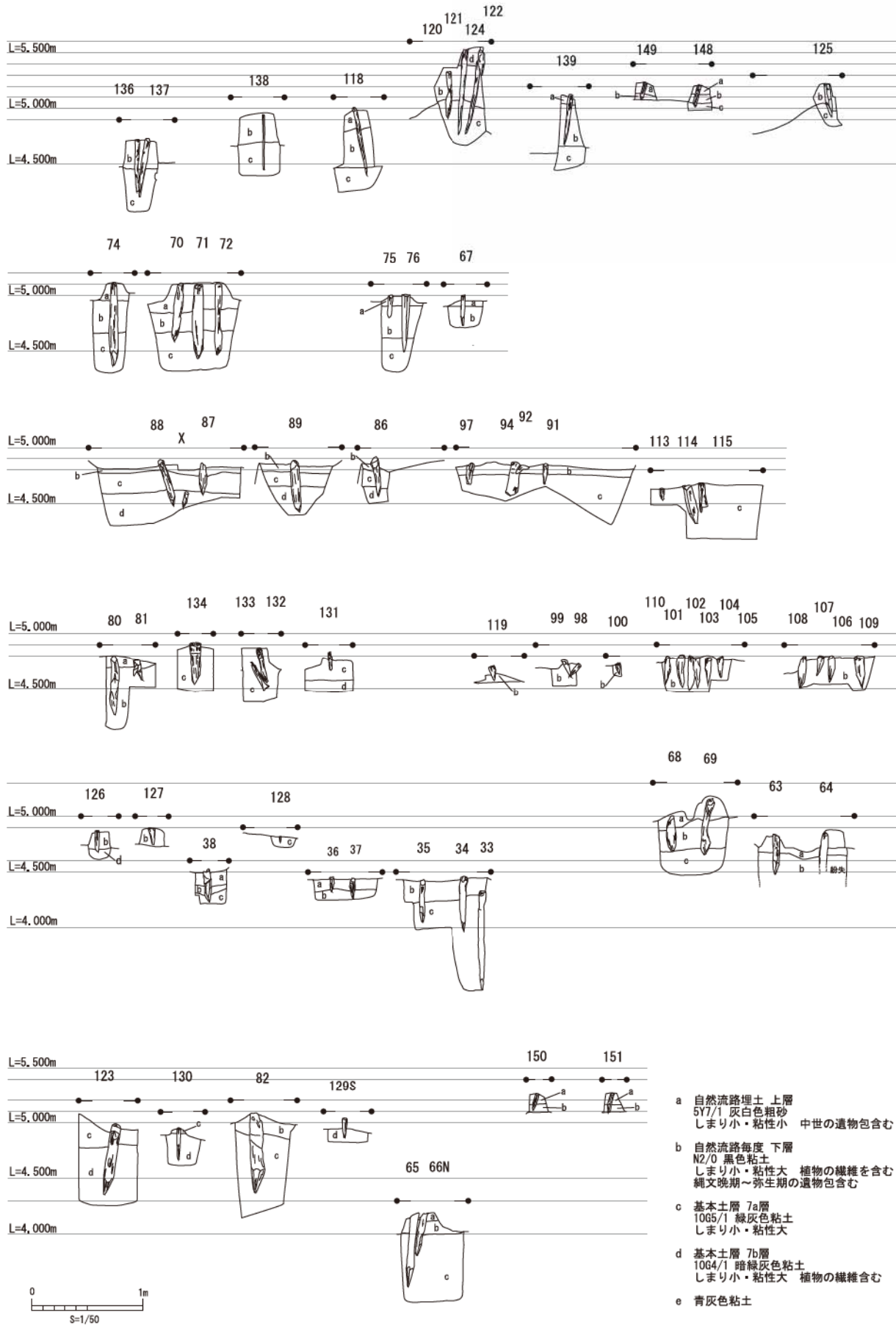
第 196 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭検出位置図



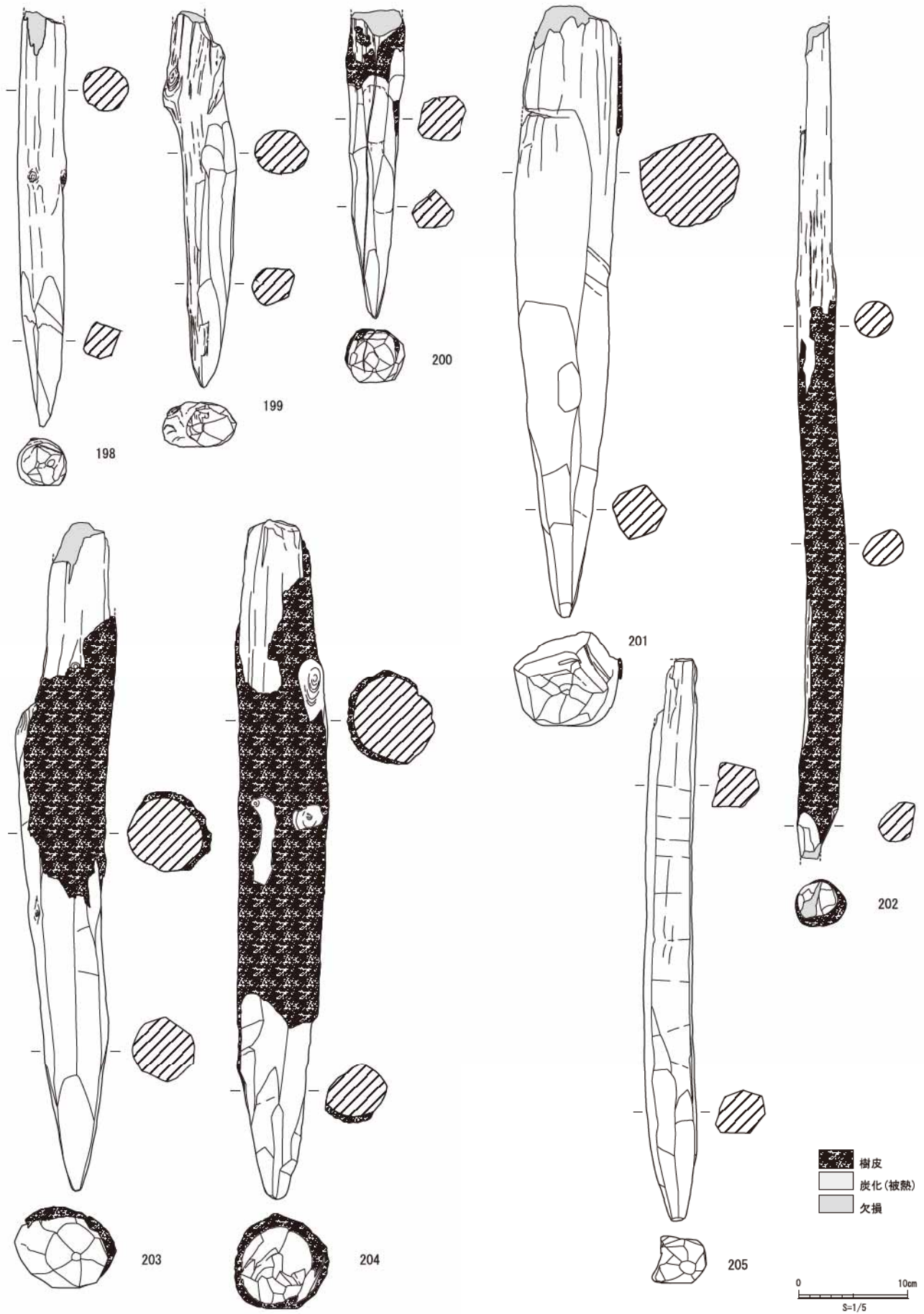
第 197 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭列予想図



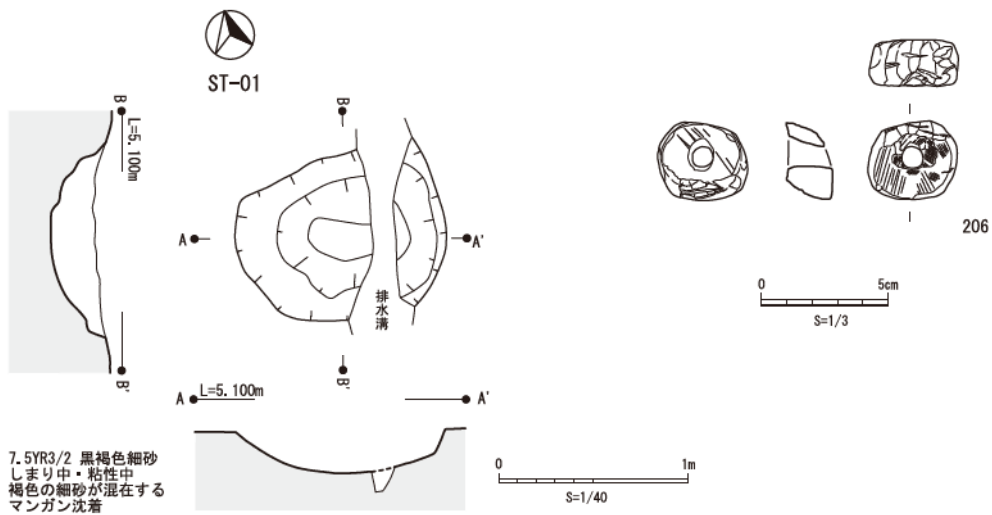
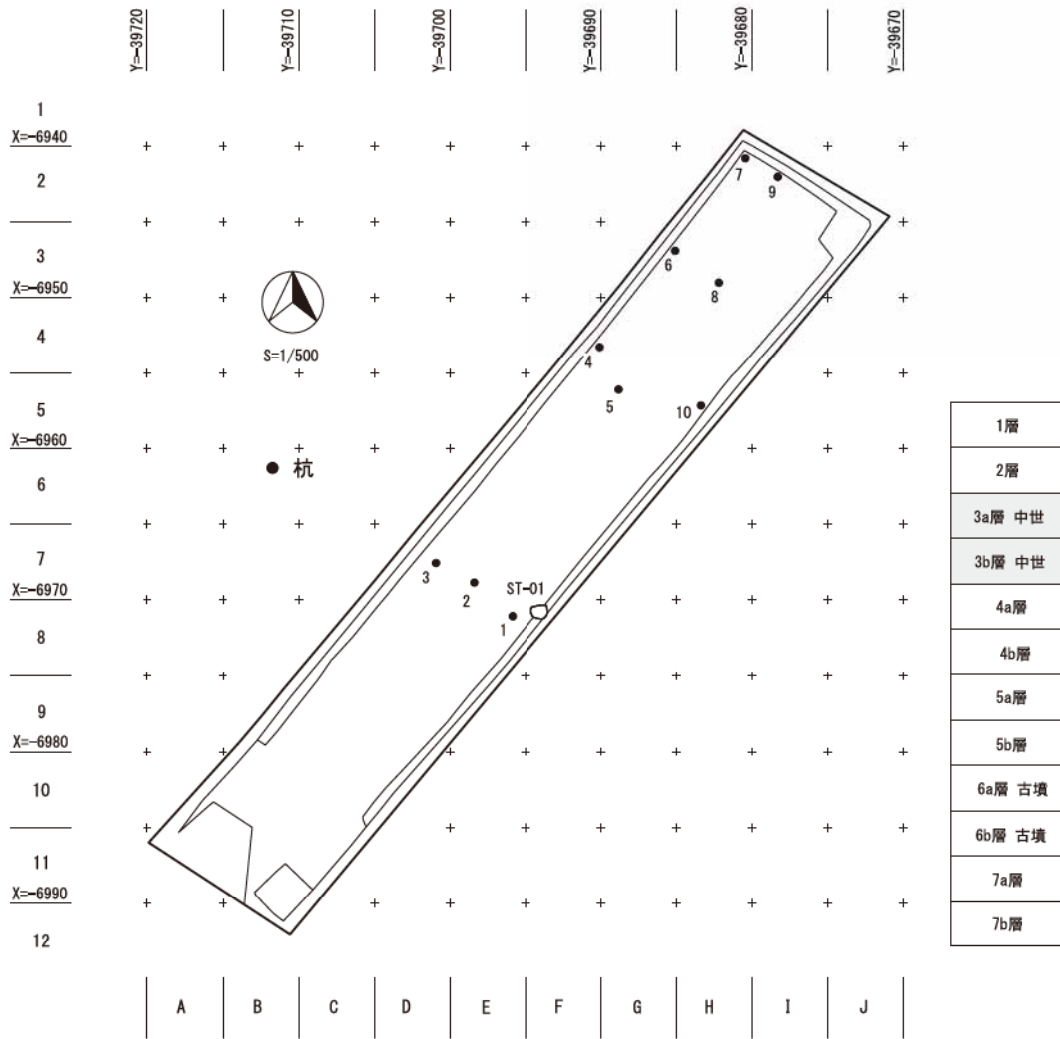
第 198 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭 1～155 実測図 1



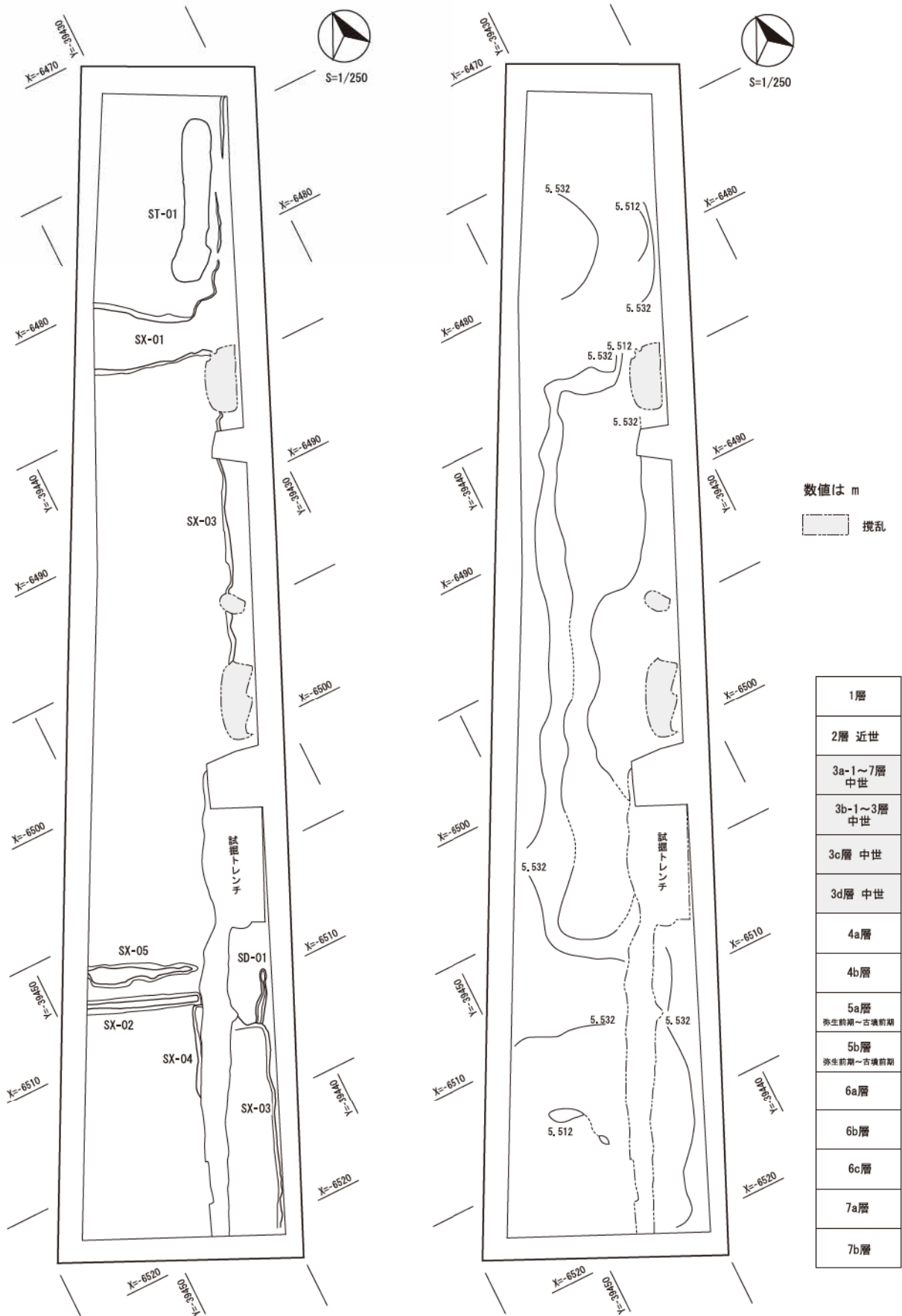
第 199 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 杭 1～155 実測図 2



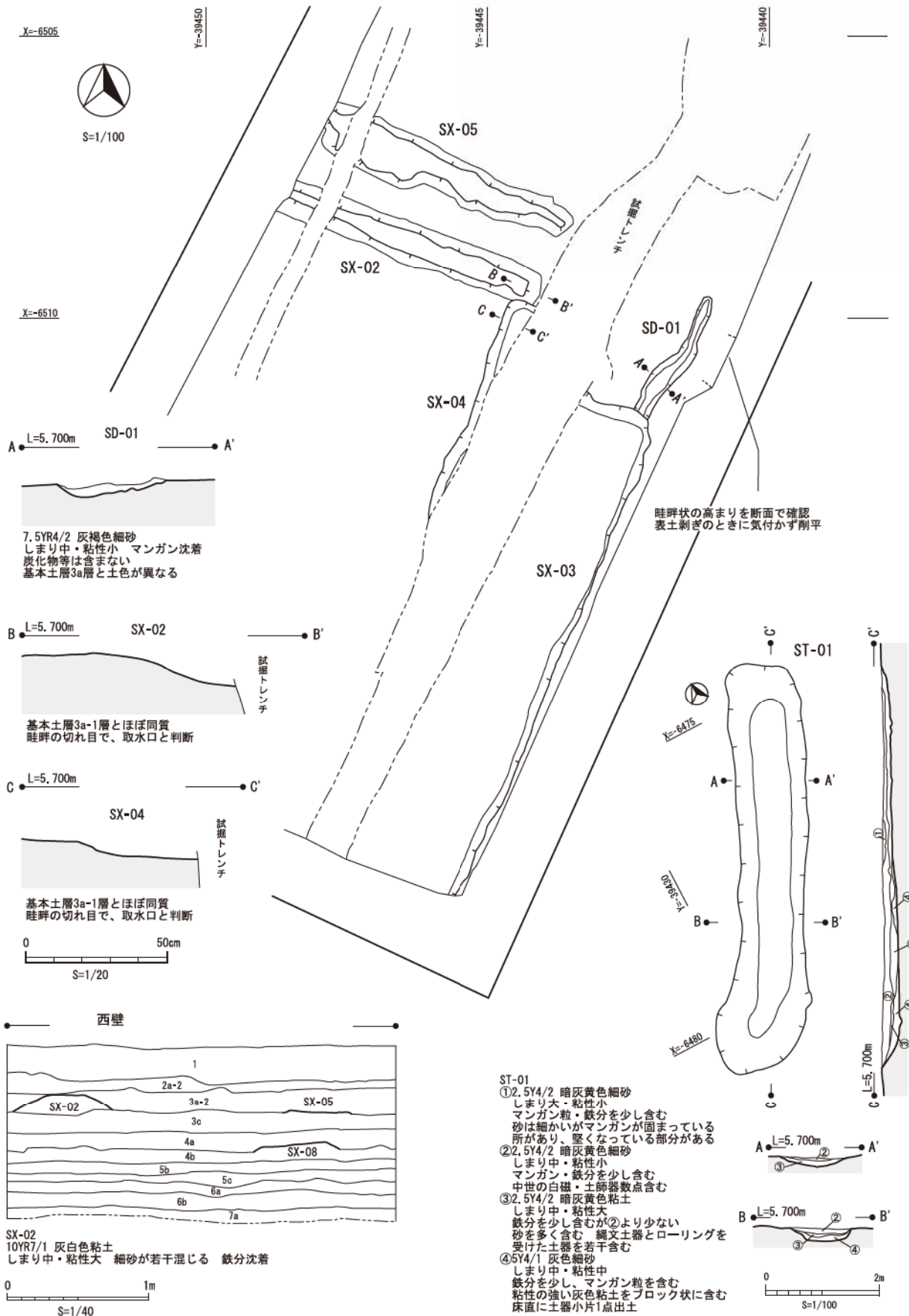
第 200 図 両迫間日渡遺跡 03-Ⅲ区 出土杭実測図



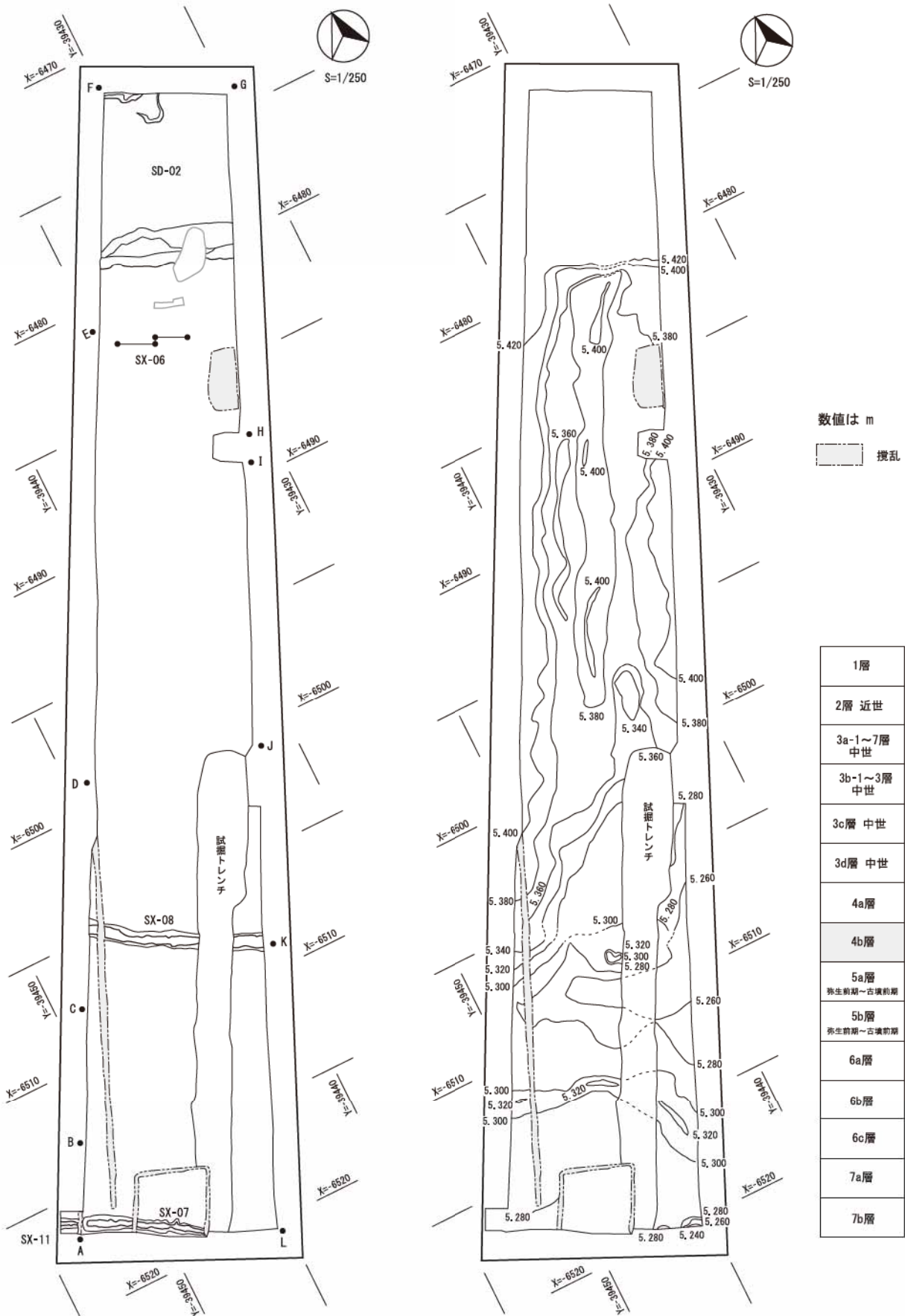
第 201 図 玉名平野条里跡 04-I 区
3 層遺構配置図・ST-01 実測図及び出土遺物実測図



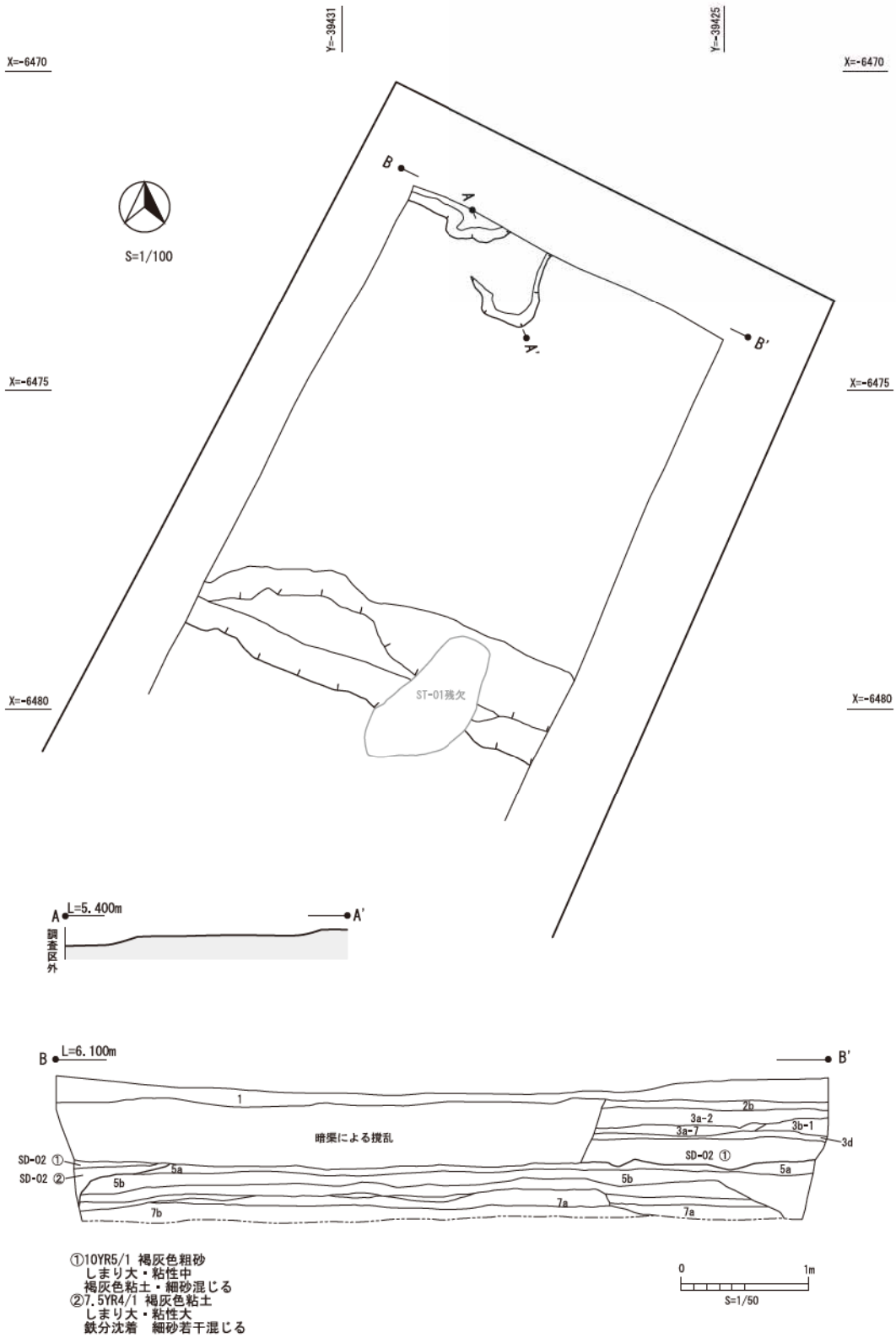
第 202 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 3層遺構配置図



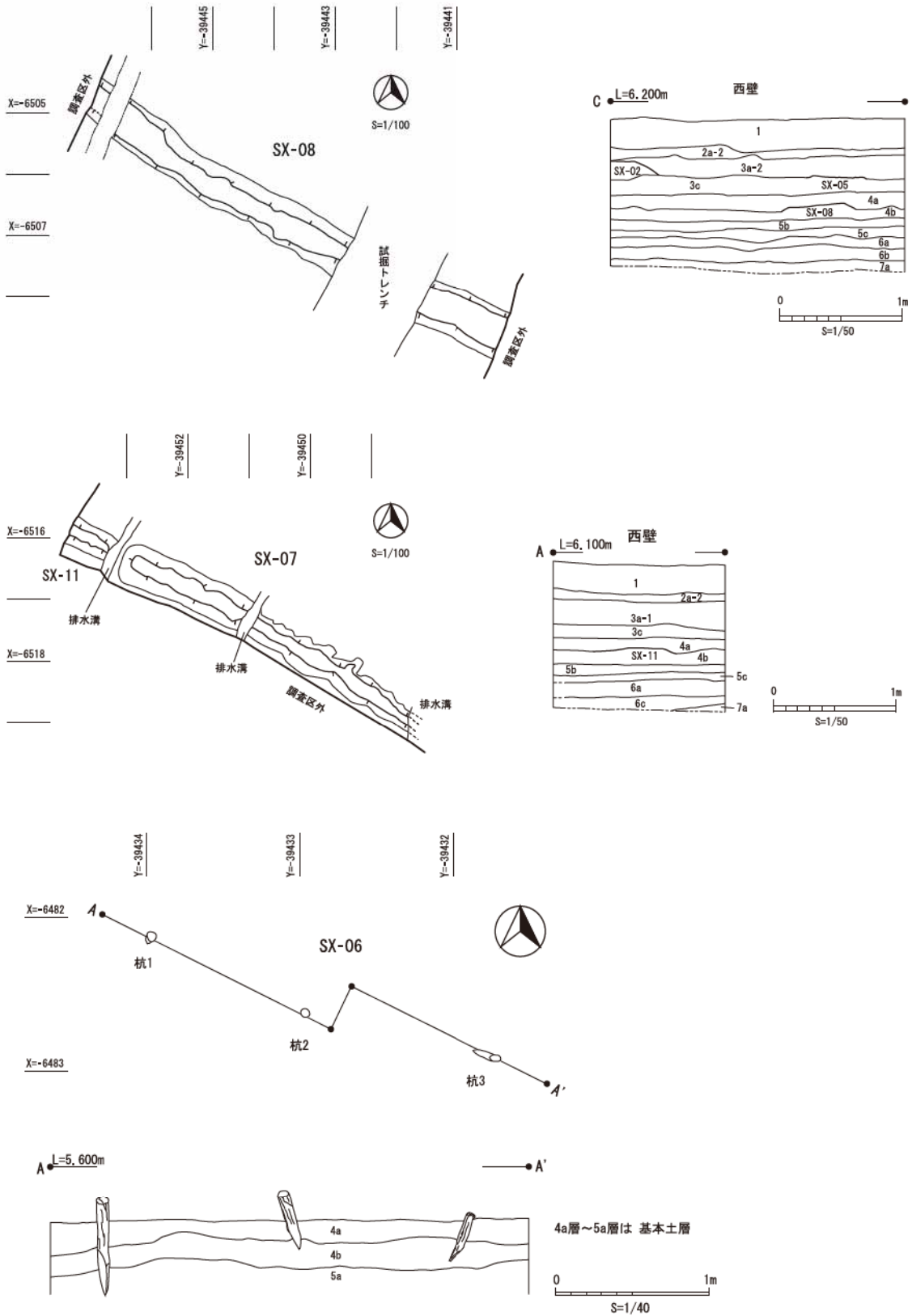
第 203 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SD-01・SX-01~05・ST-01 実測図



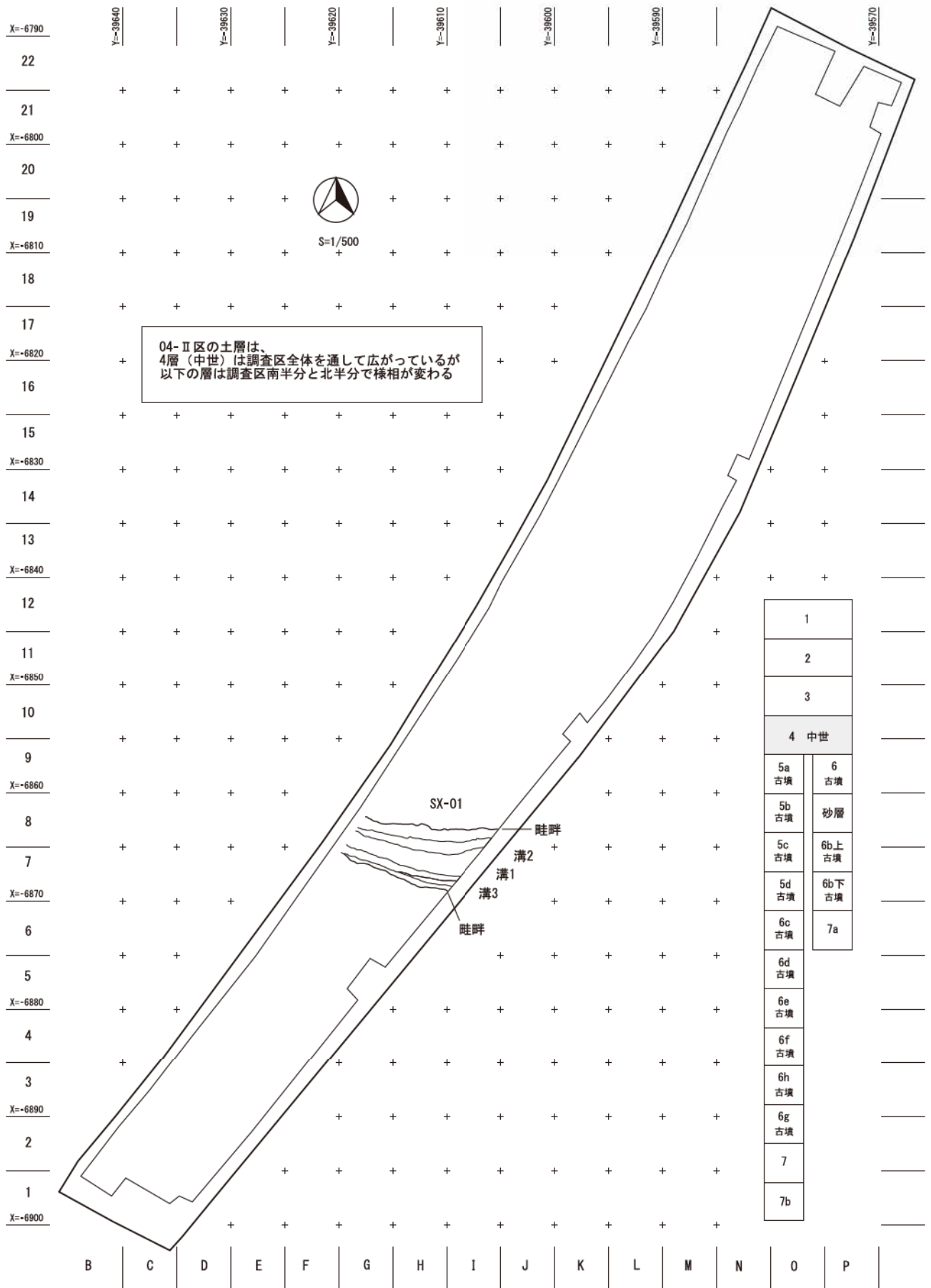
第 204 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 4b 層上面遺構配置図及びコンタ図



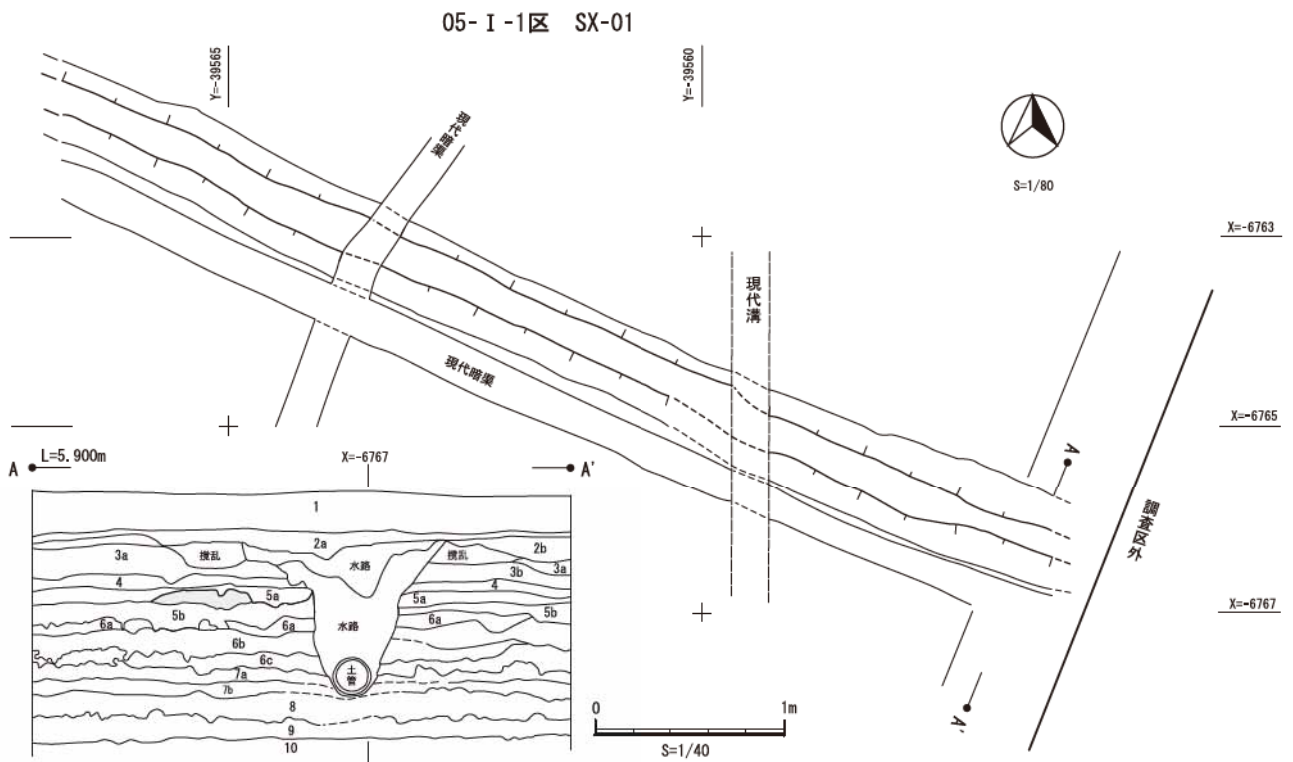
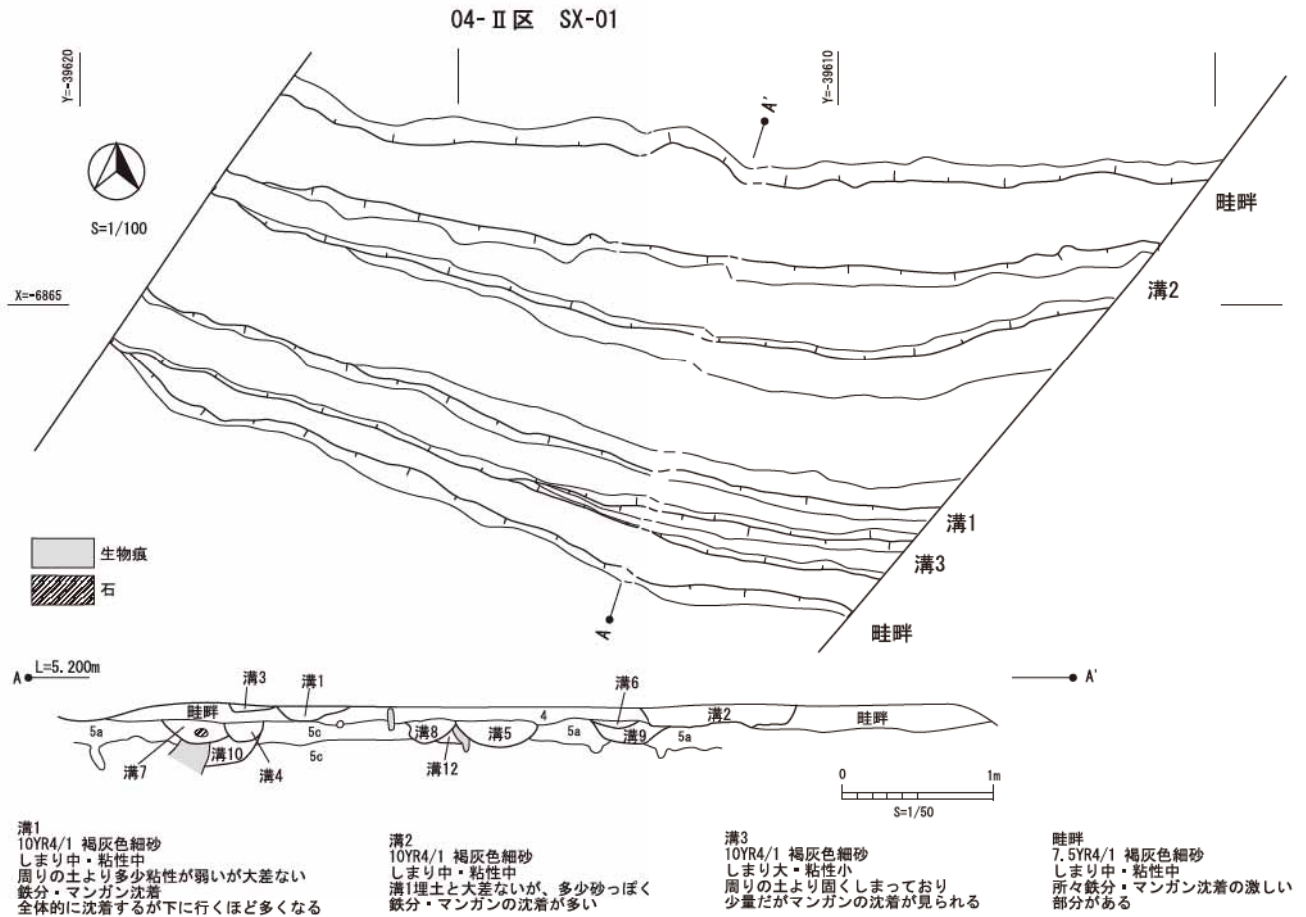
第 205 図 両迫間日渡遺跡 04- I 区 SD-02 実測図



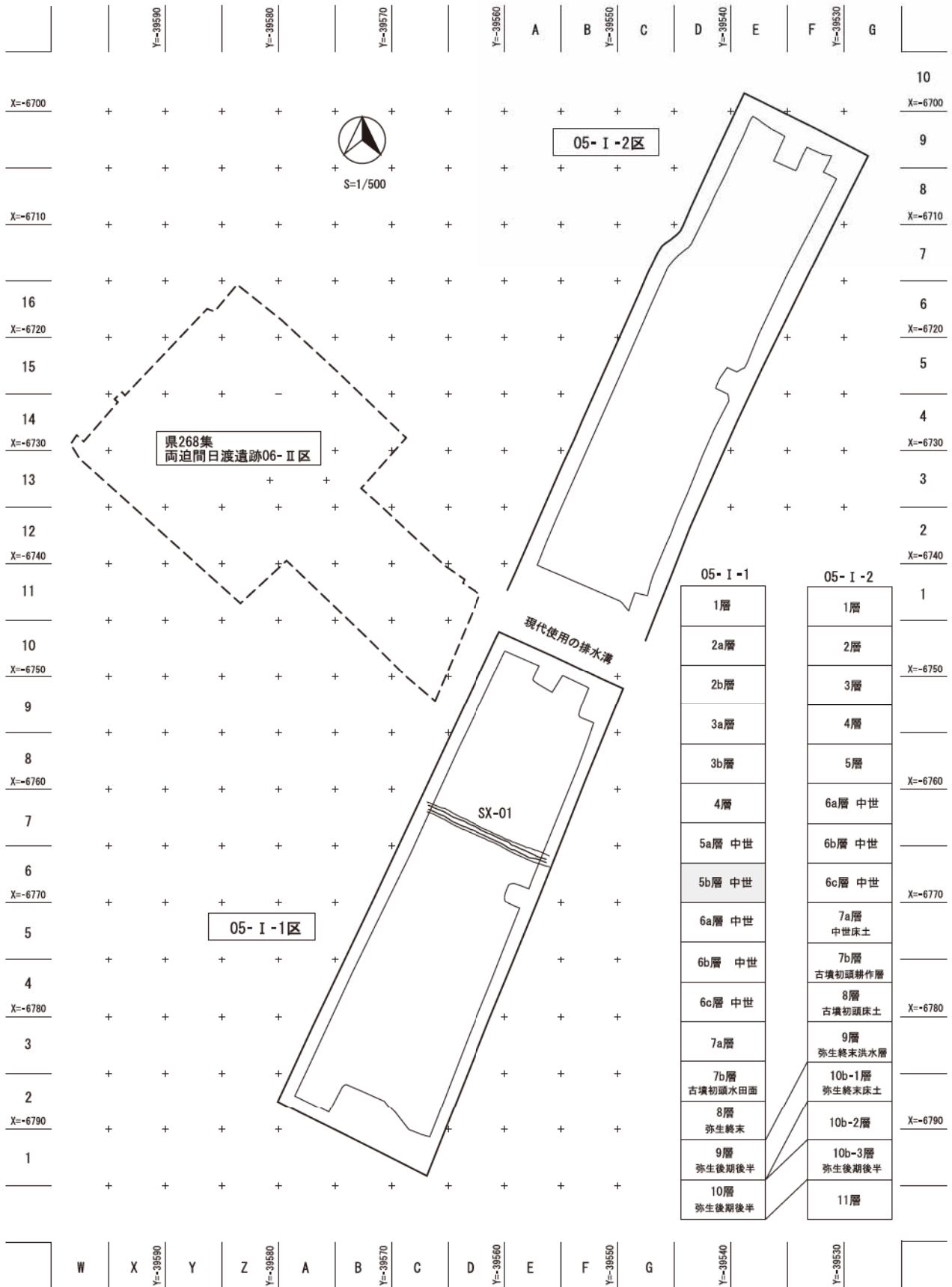
第 206 図 両迫間日渡遺跡 04-I 区 SX-06~08・11 実測図



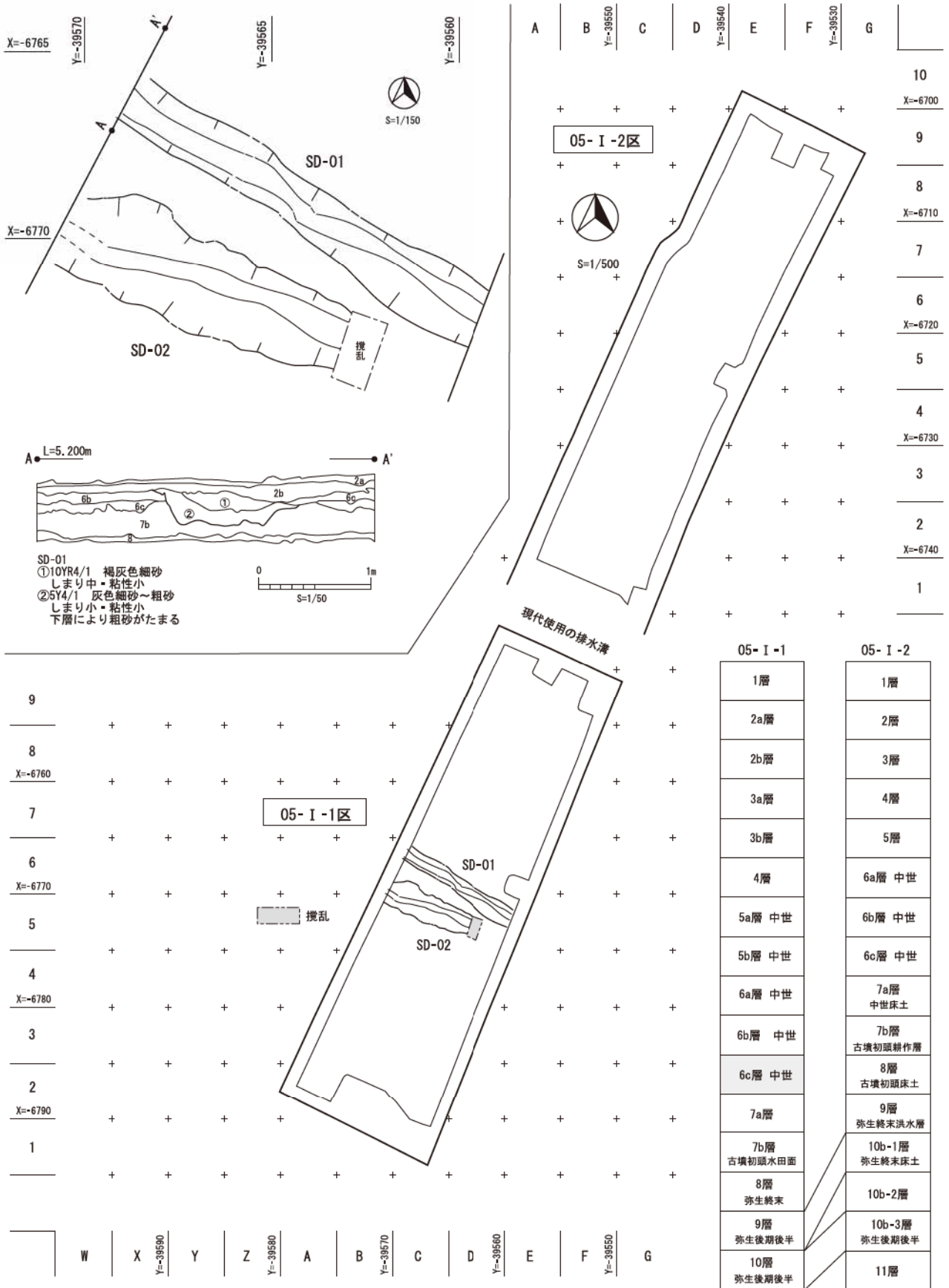
第 207 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 4 層遺構配置図



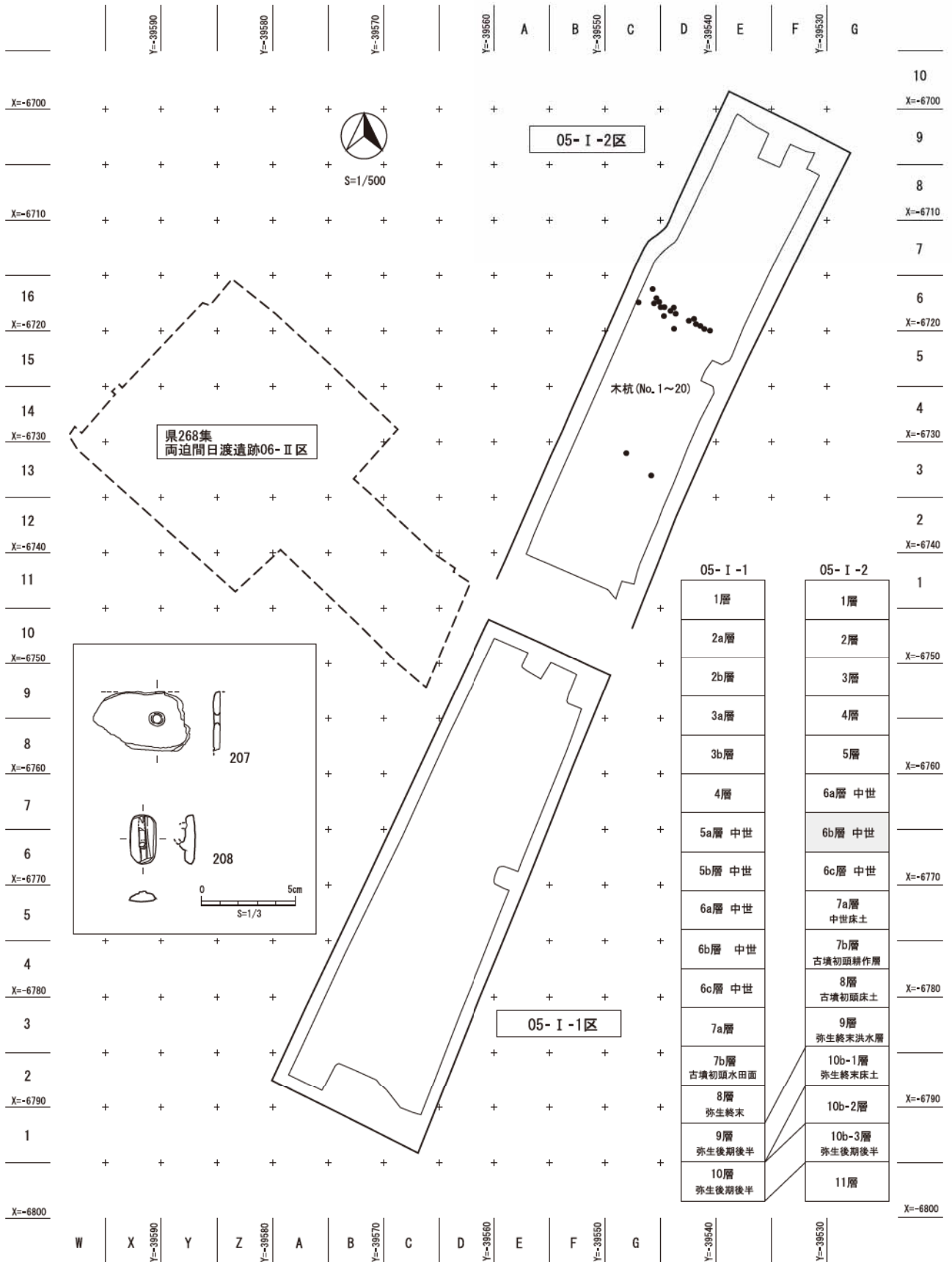
第 208 図 両迫間日渡遺跡 04-II 区 SX-01 (畦畔・溝 1~3) 実測図
05- I -1 区 SX-01 (疑似畦畔) 実測図



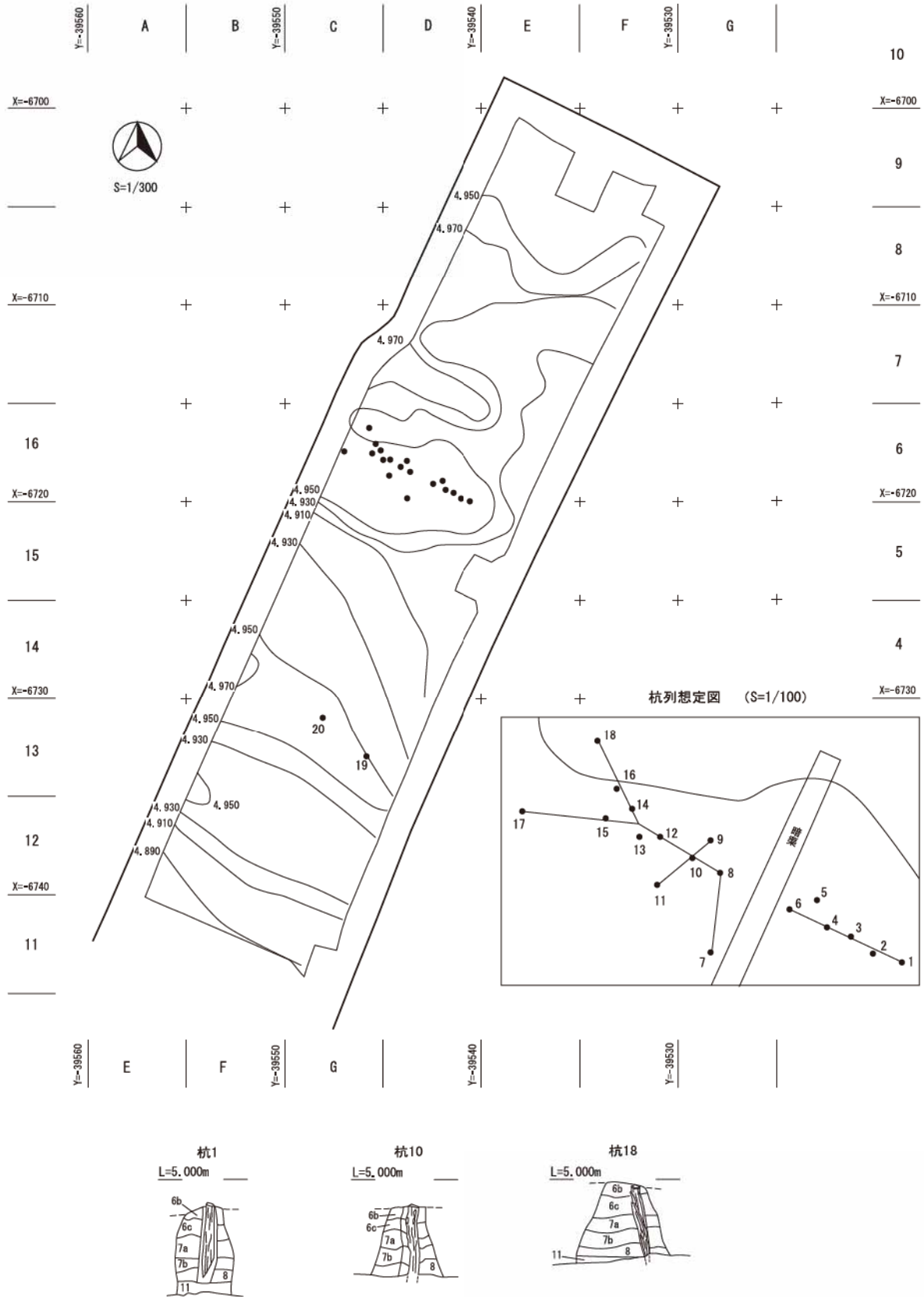
第 209 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 5b 層遺構配置図



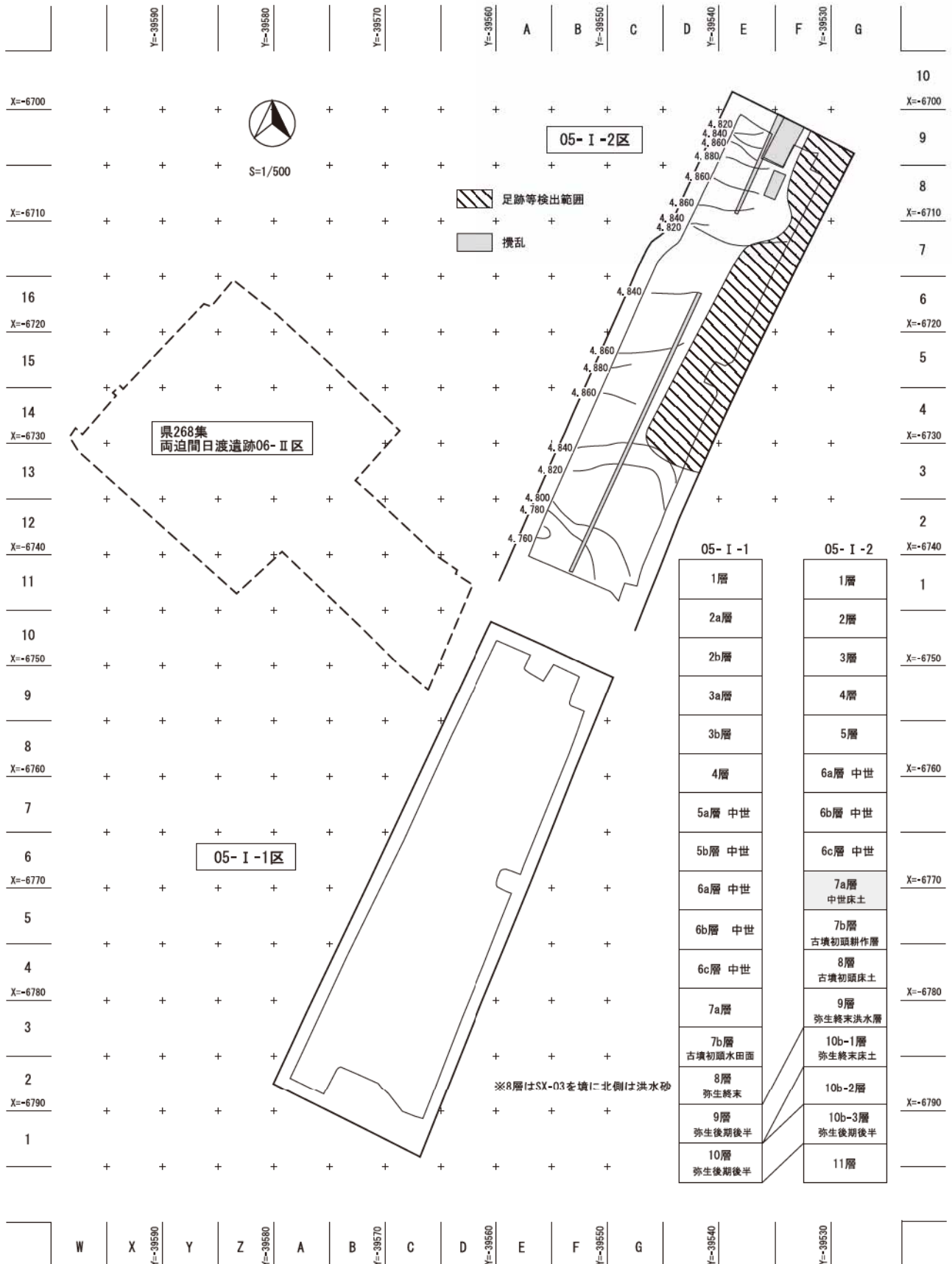
第 210 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区 6c 層遺構配置図・SD-01・02 実測図



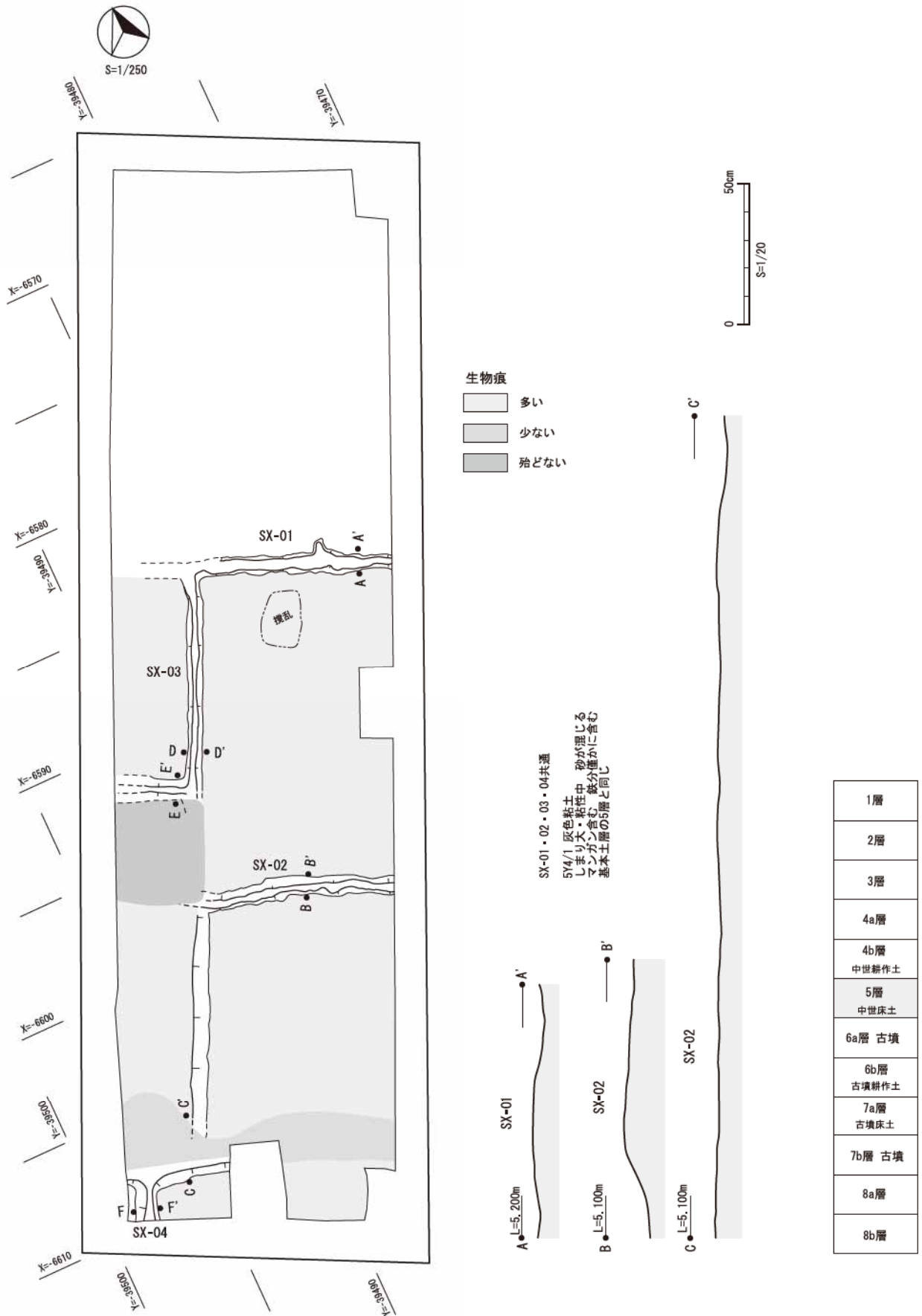
第 211 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区
6b 層木杭 (1~20) 出土状況及び出土遺物実測図



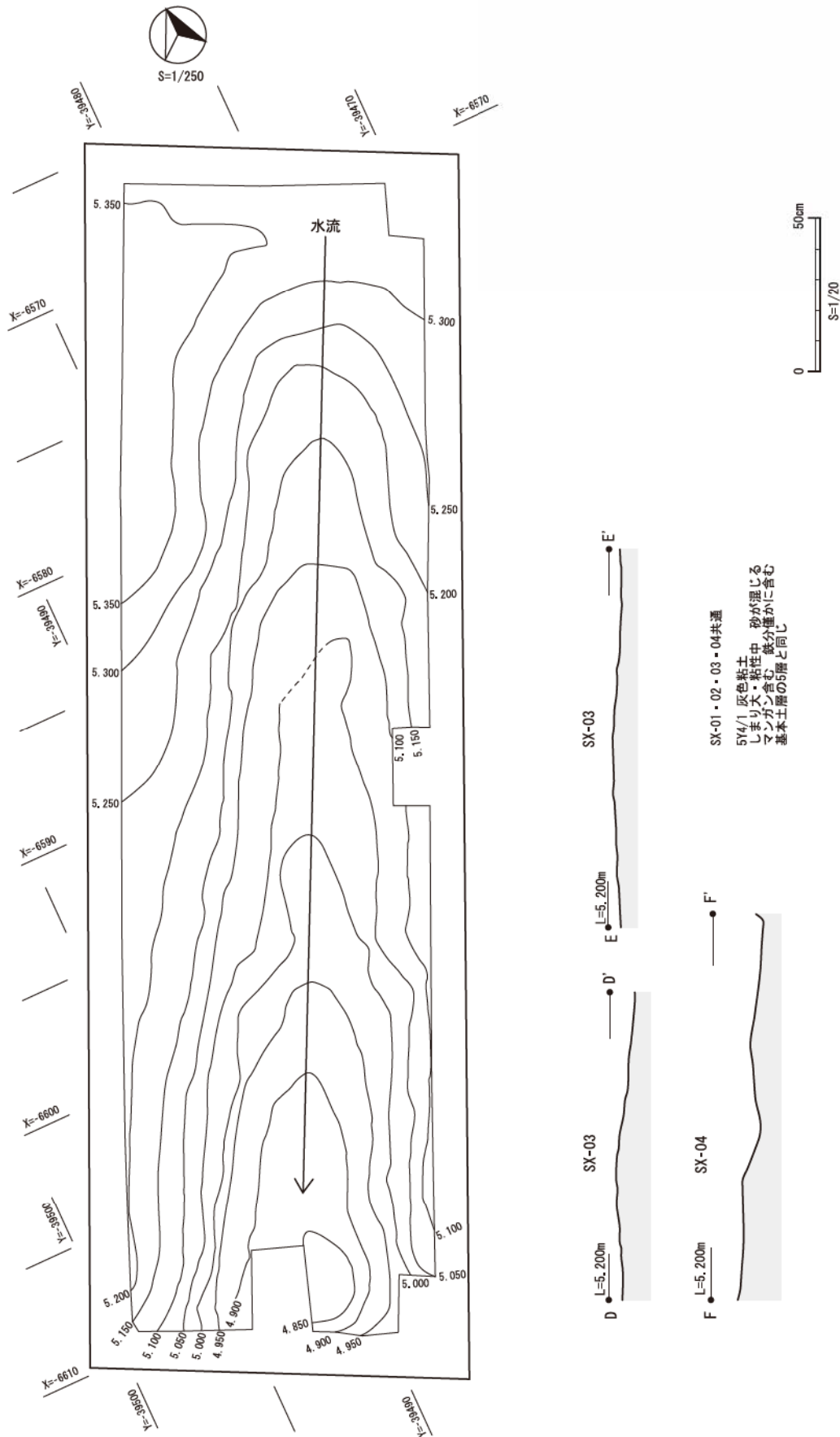
第 212 図 両迫間日渡遺跡 05- I-2 区 6b 層杭出土状況及び実測図



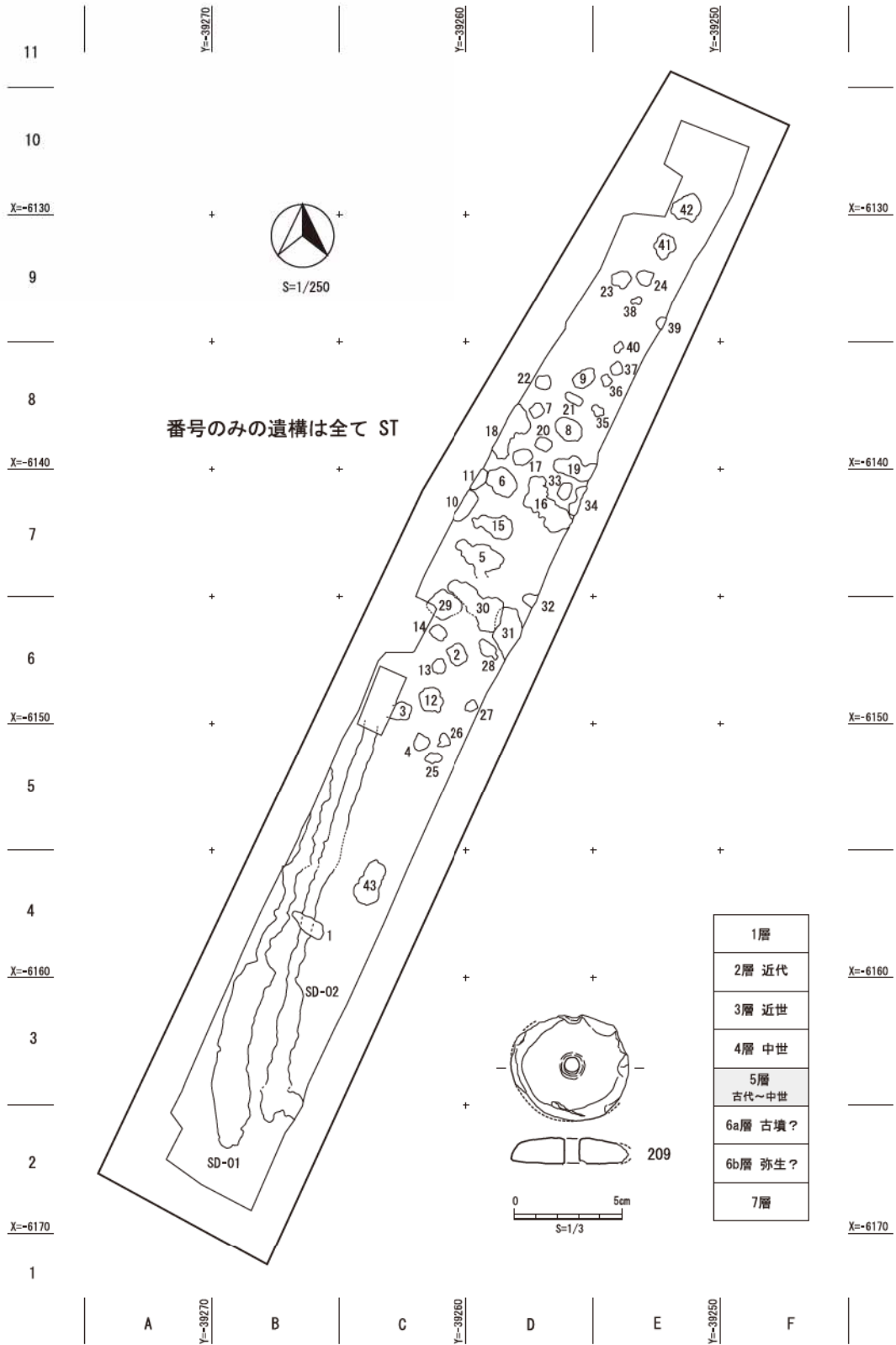
第 213 図 両迫間日渡遺跡 05-I-2 区 7a 層遺構配置図及びコンタ図



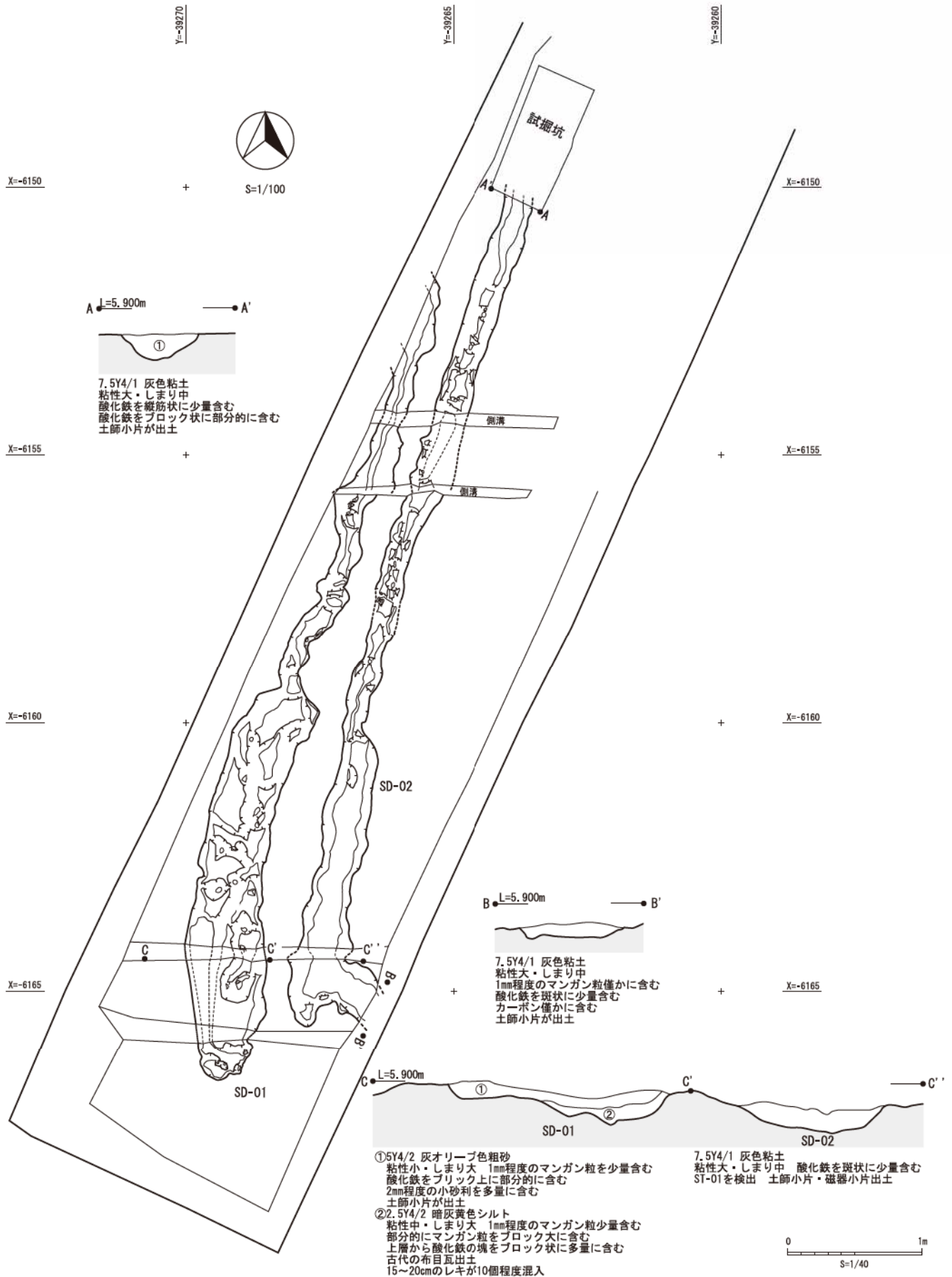
第 214 図 両迫間日渡遺跡 05-II-2 区 5 層遺構配置図及びコンタ図



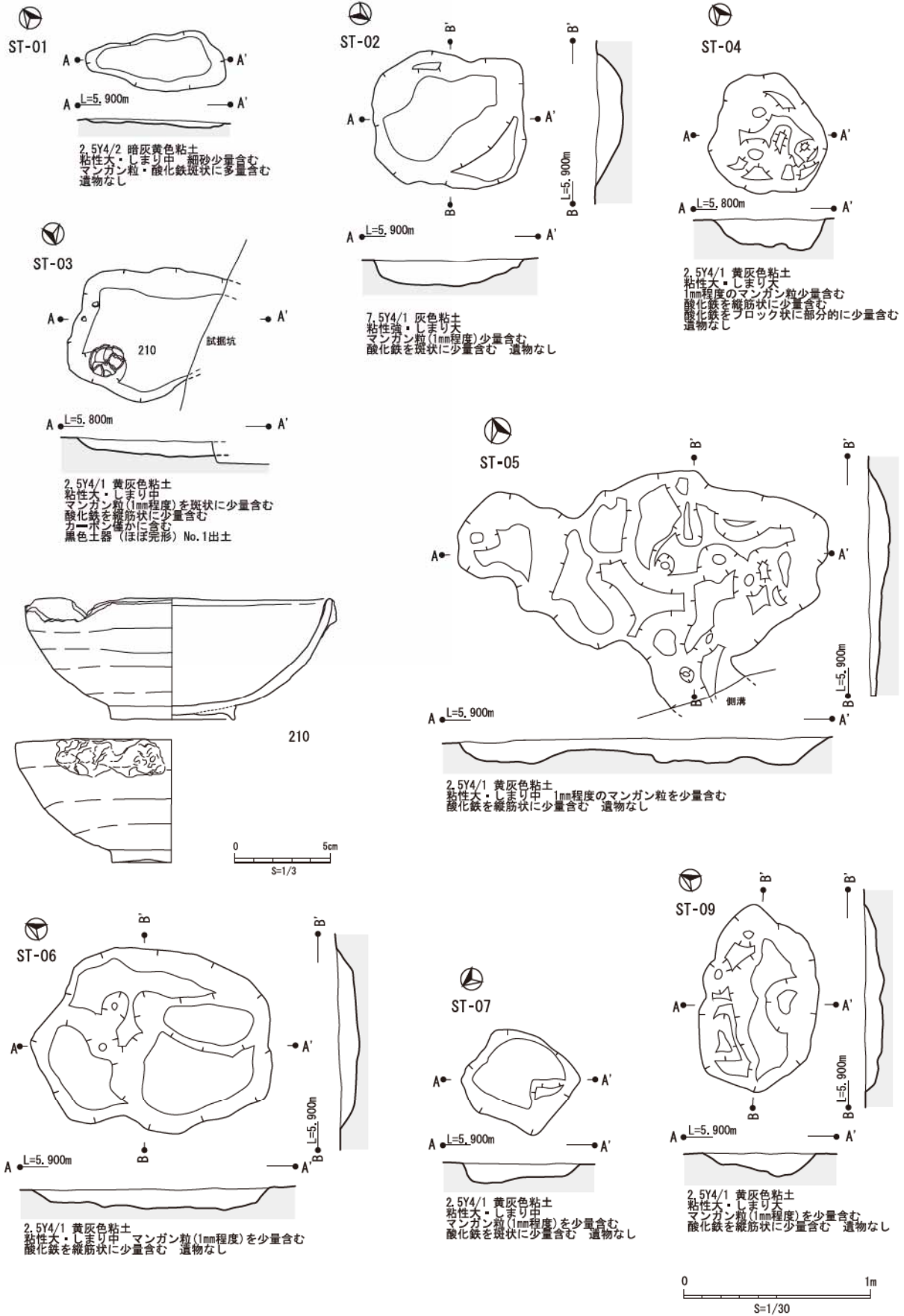
第 215 図 両迫間日渡遺跡 05-II-2 区 5 層コンタ図及び SX-03・04 土層断面図



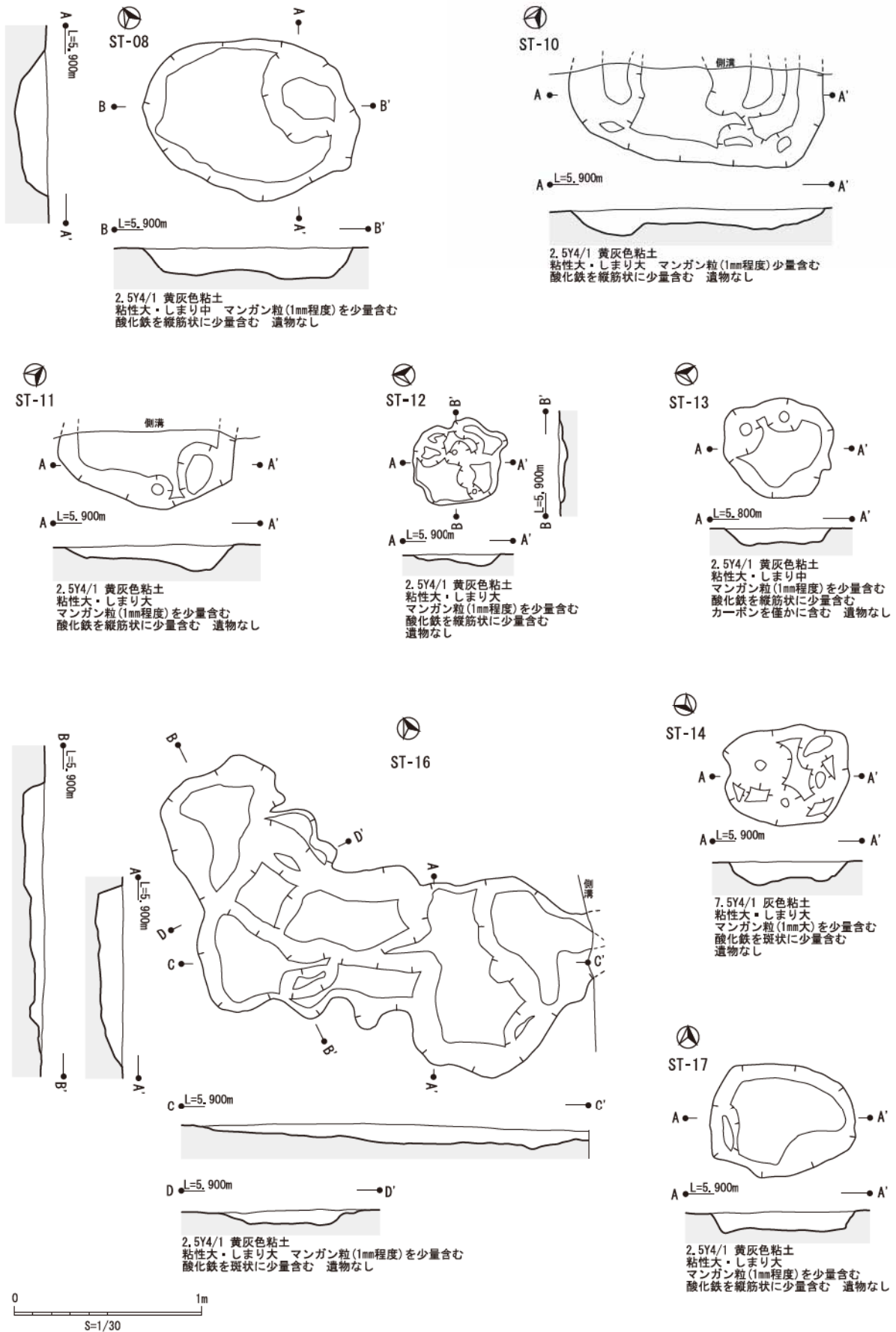
第 216 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 5 層遺構配置図及び出土遺物実測図



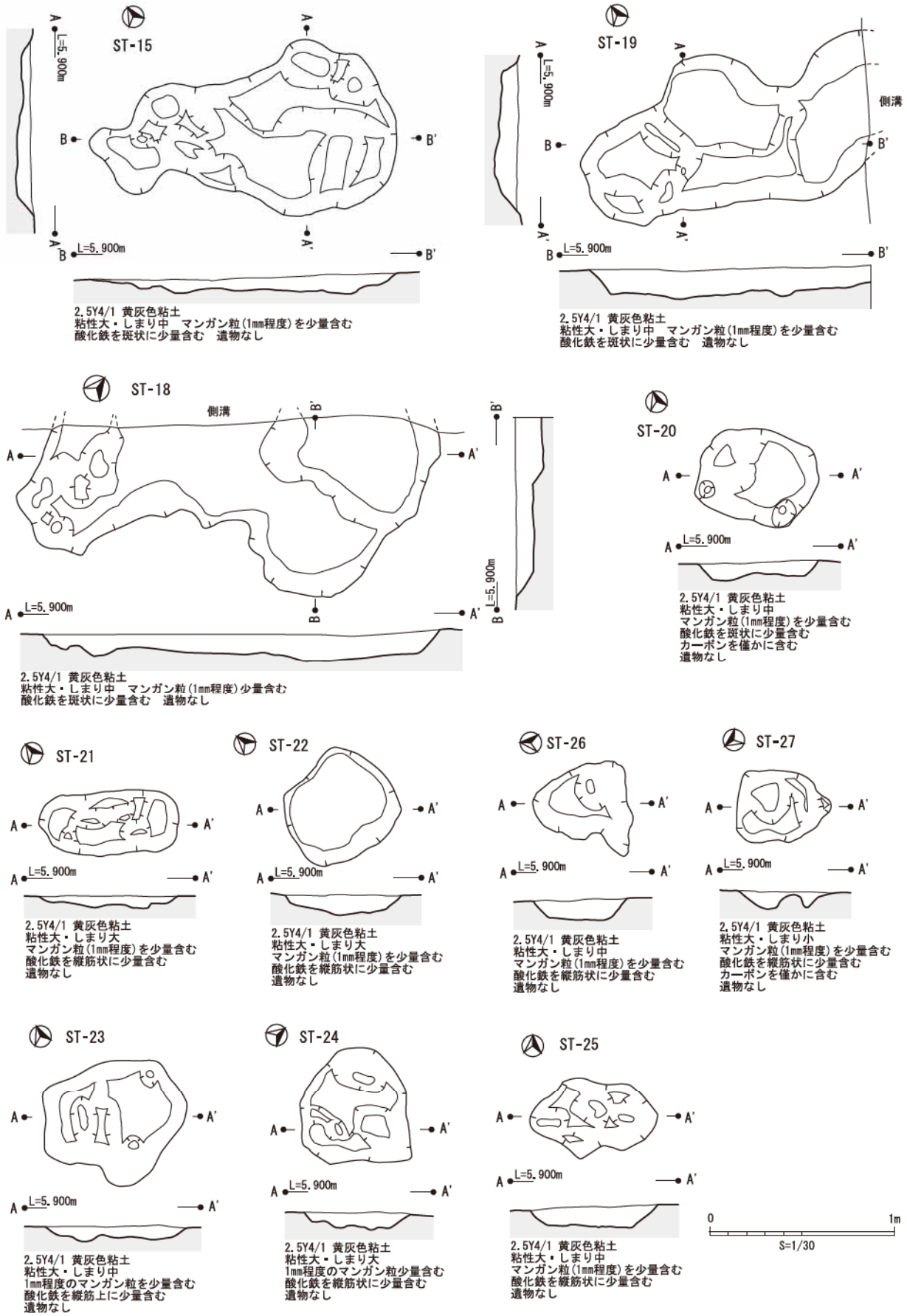
第 217 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 SD-01・02 実測図



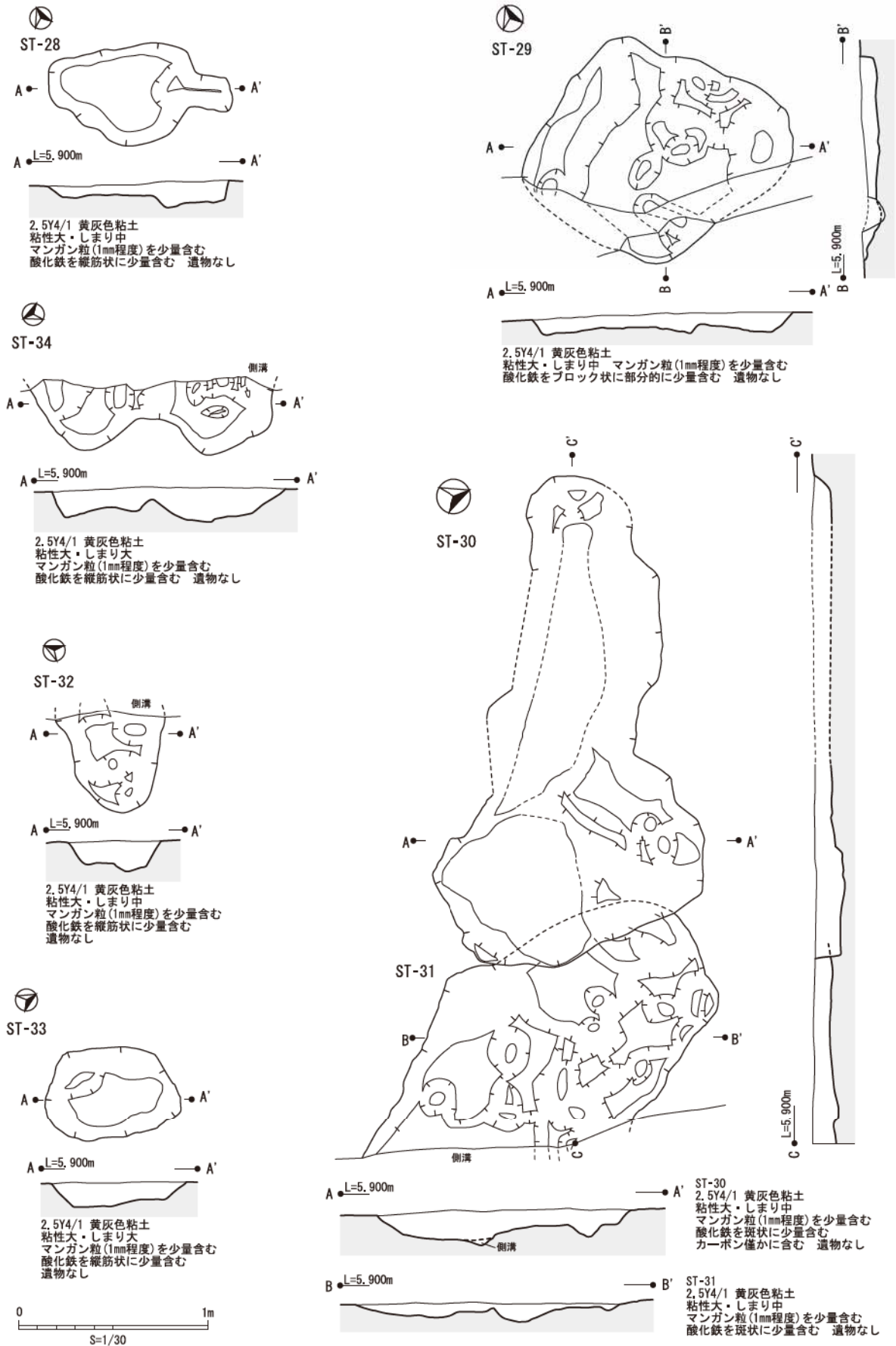
第 218 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区
ST-01～07・09 実測図及び出土遺物実測図



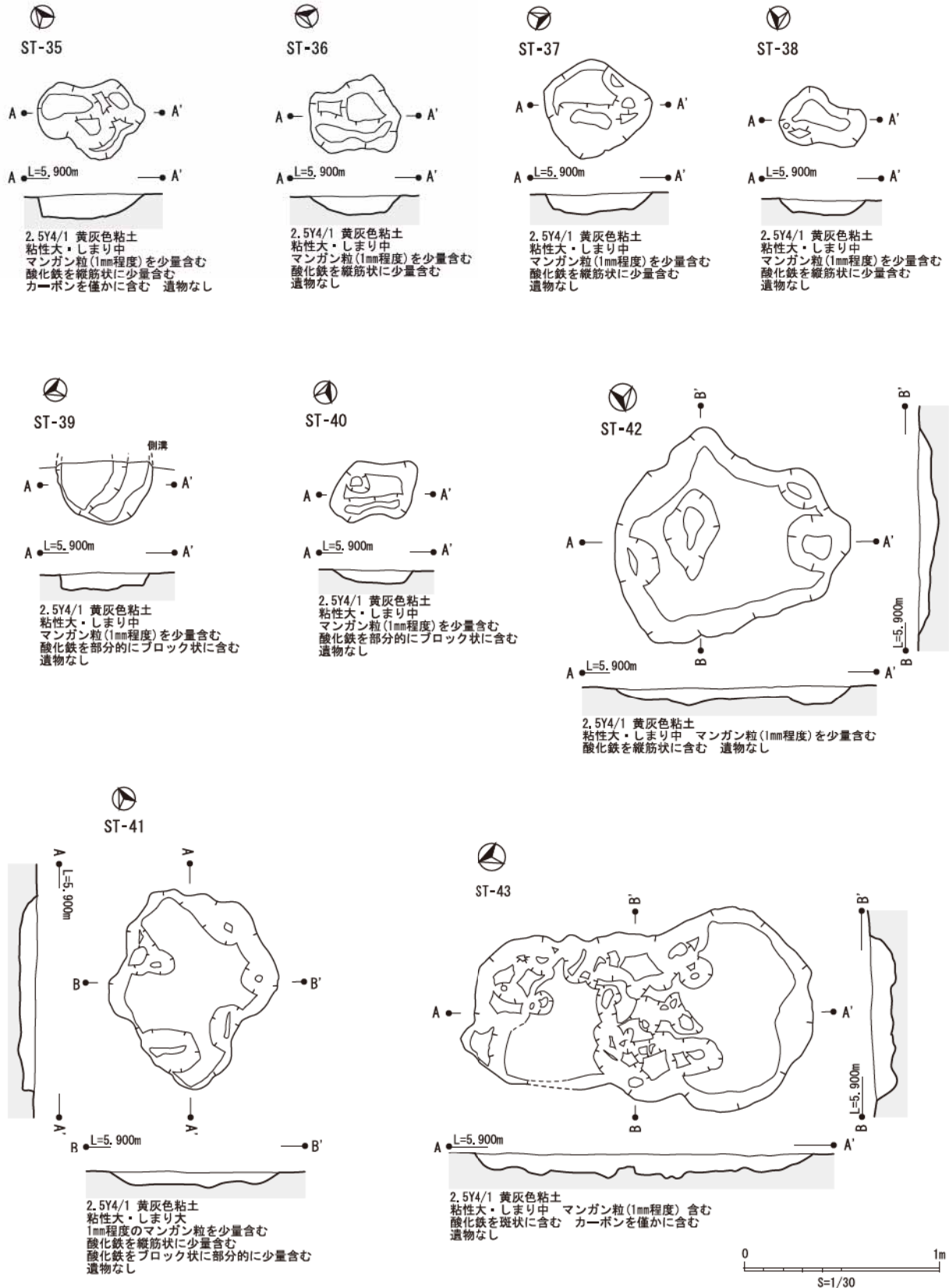
第 219 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 ST-08・10~14・16・17 実測図



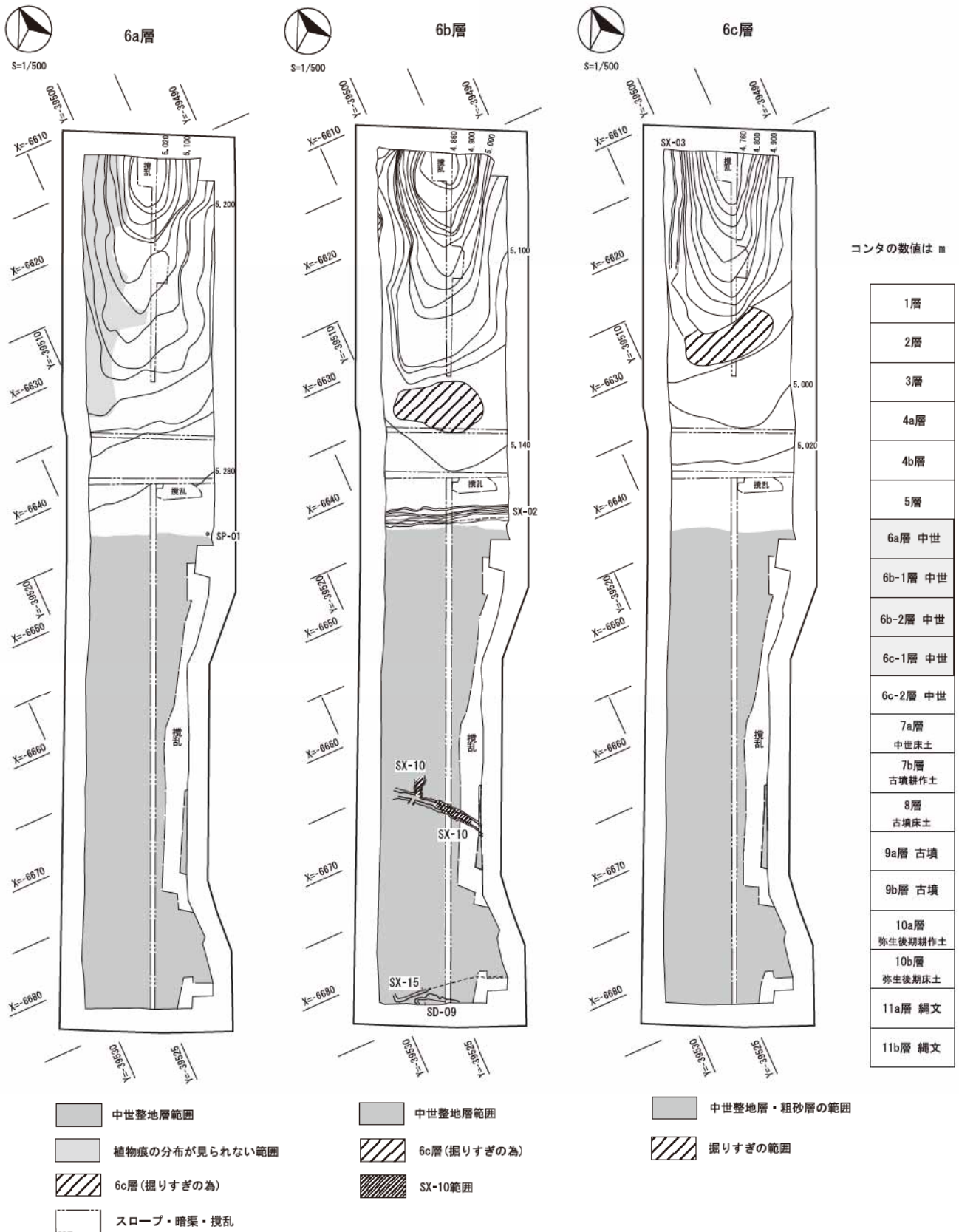
第 220 図 玉名平野条里跡 05-III-2 区 ST-15・18~27 実測図



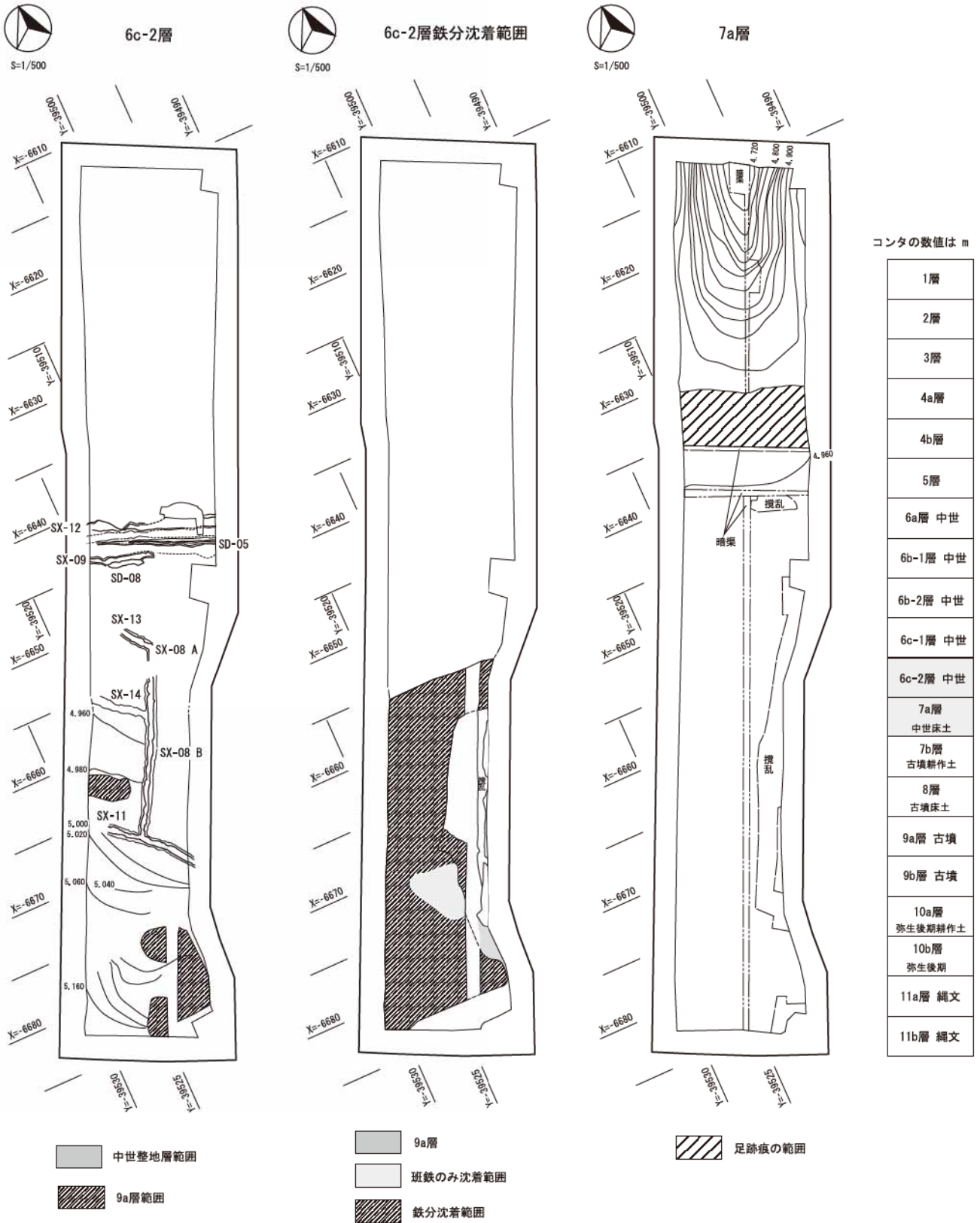
第 221 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-28~34 実測図



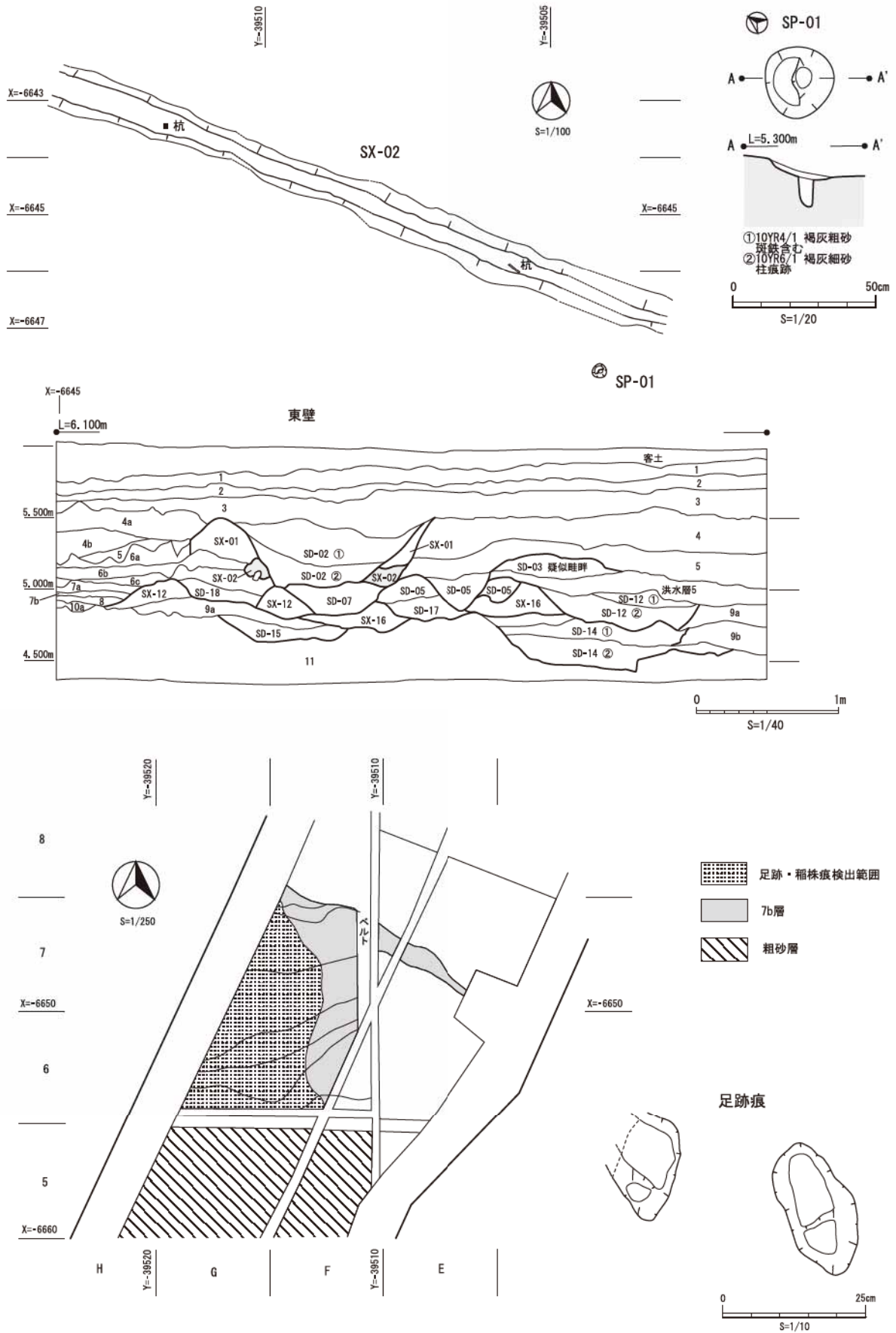
第 222 図 玉名平野条里跡 05-Ⅲ-2 区 ST-35~43 実測図



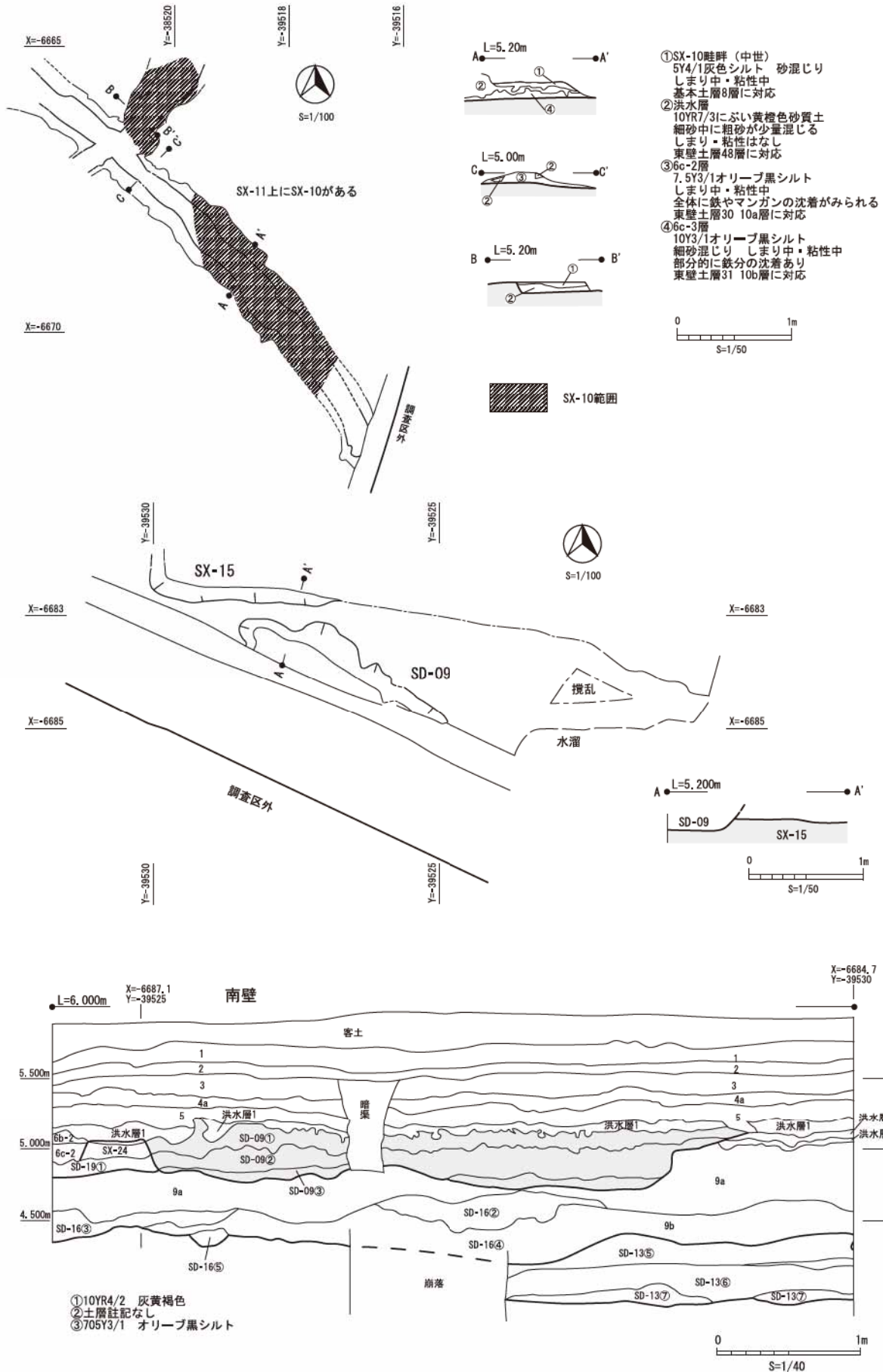
第 223 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6a層・6b層・6c層コンタ図



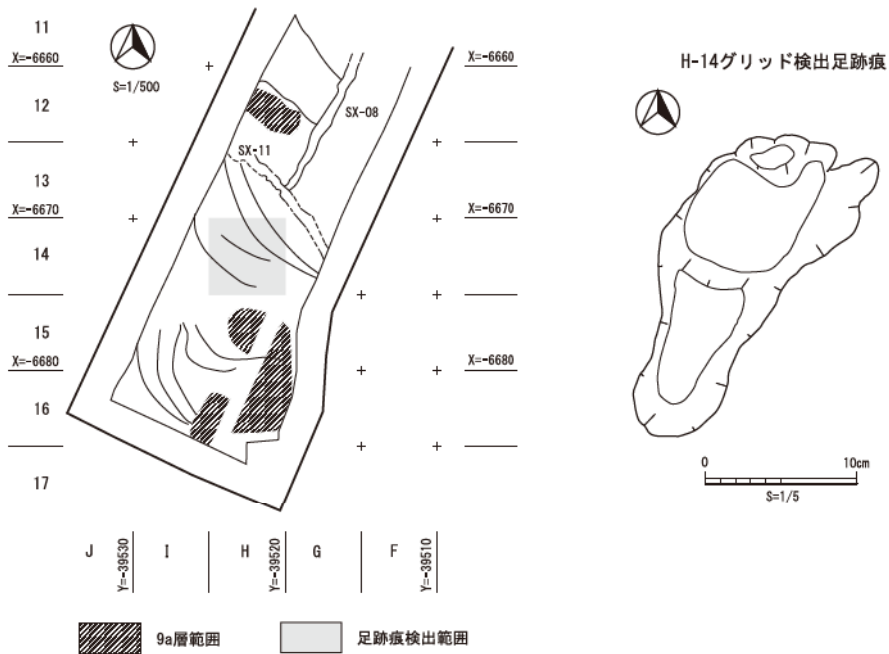
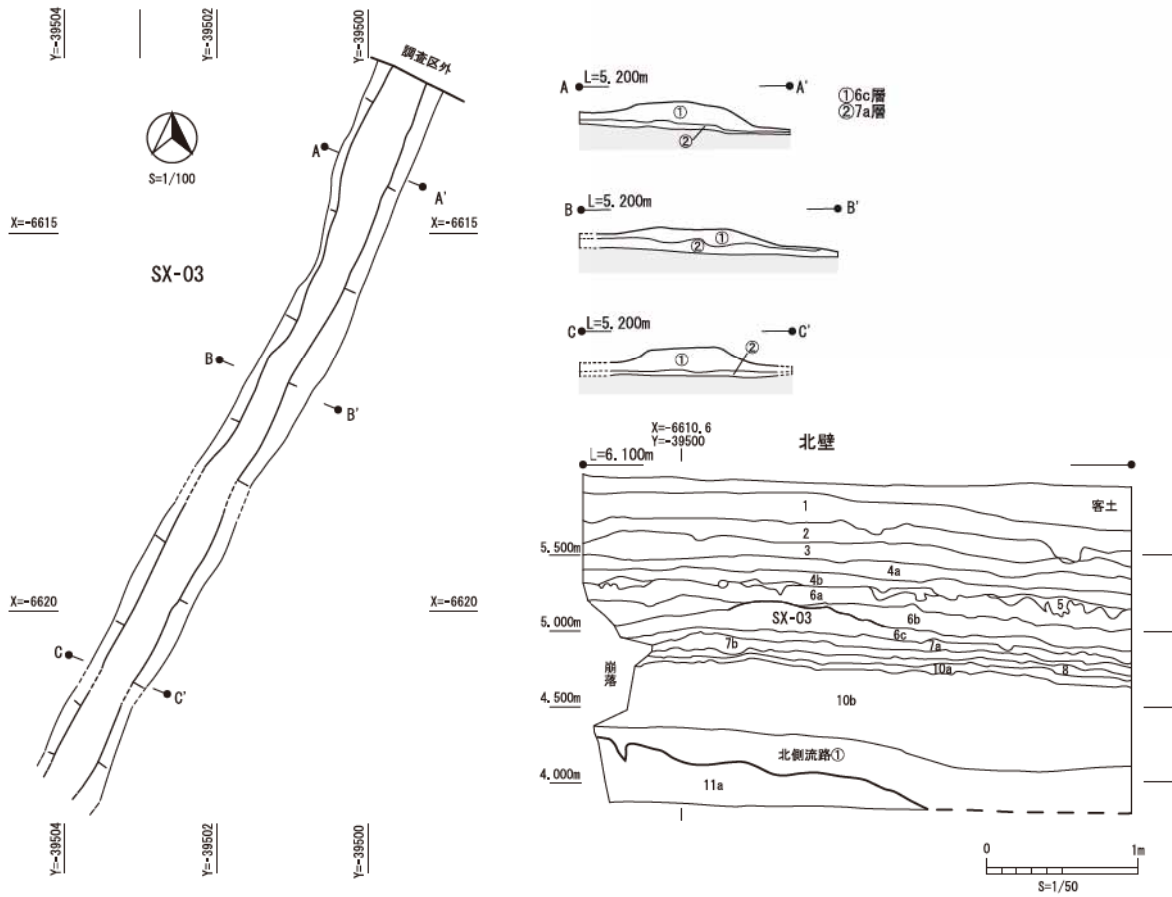
第 224 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 6c-2層・7a層コンタ図・6c-2層鉄分沈着範囲図



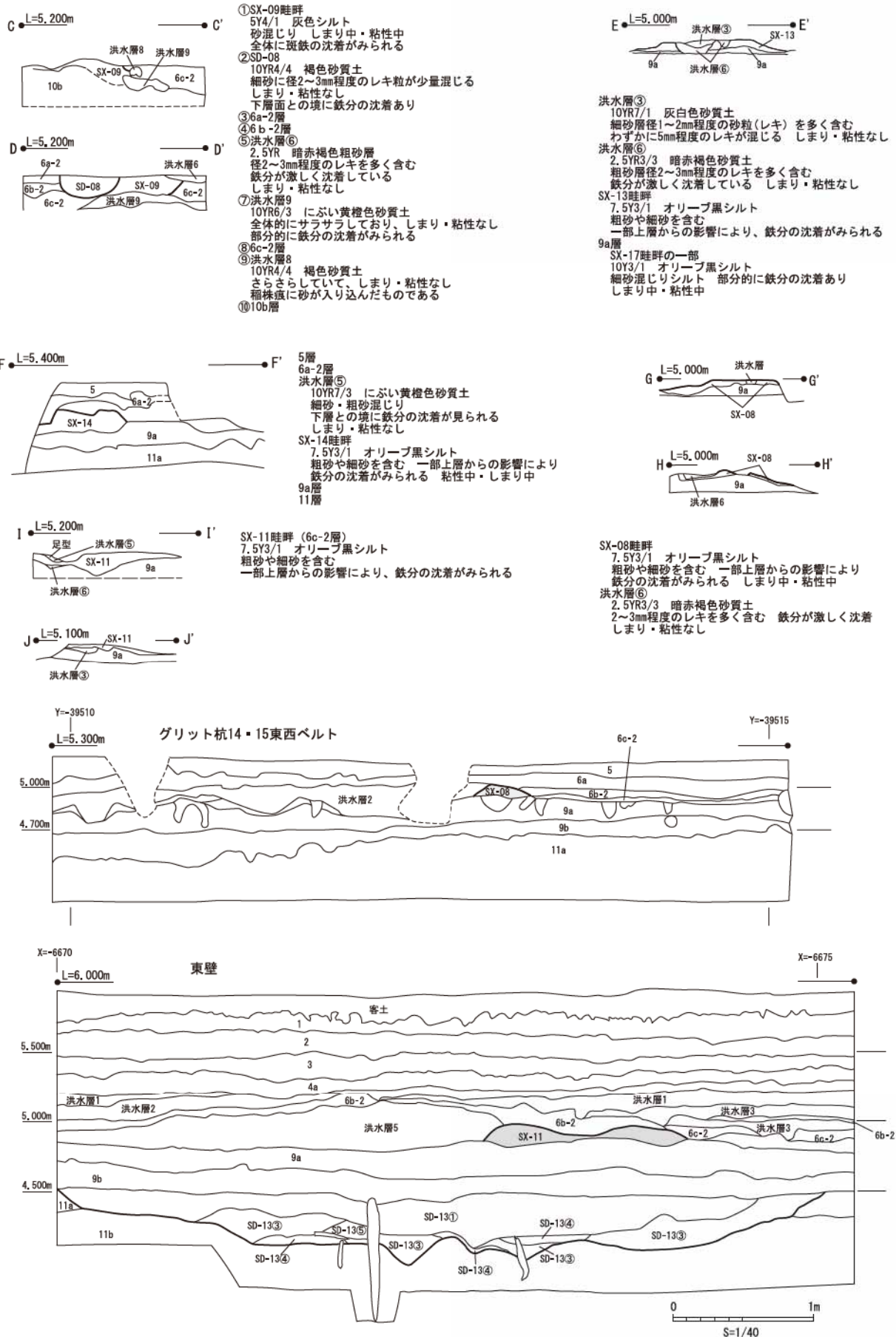
第 225 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区 SX-02・SP-01 実測図・6a 層足跡検出範囲



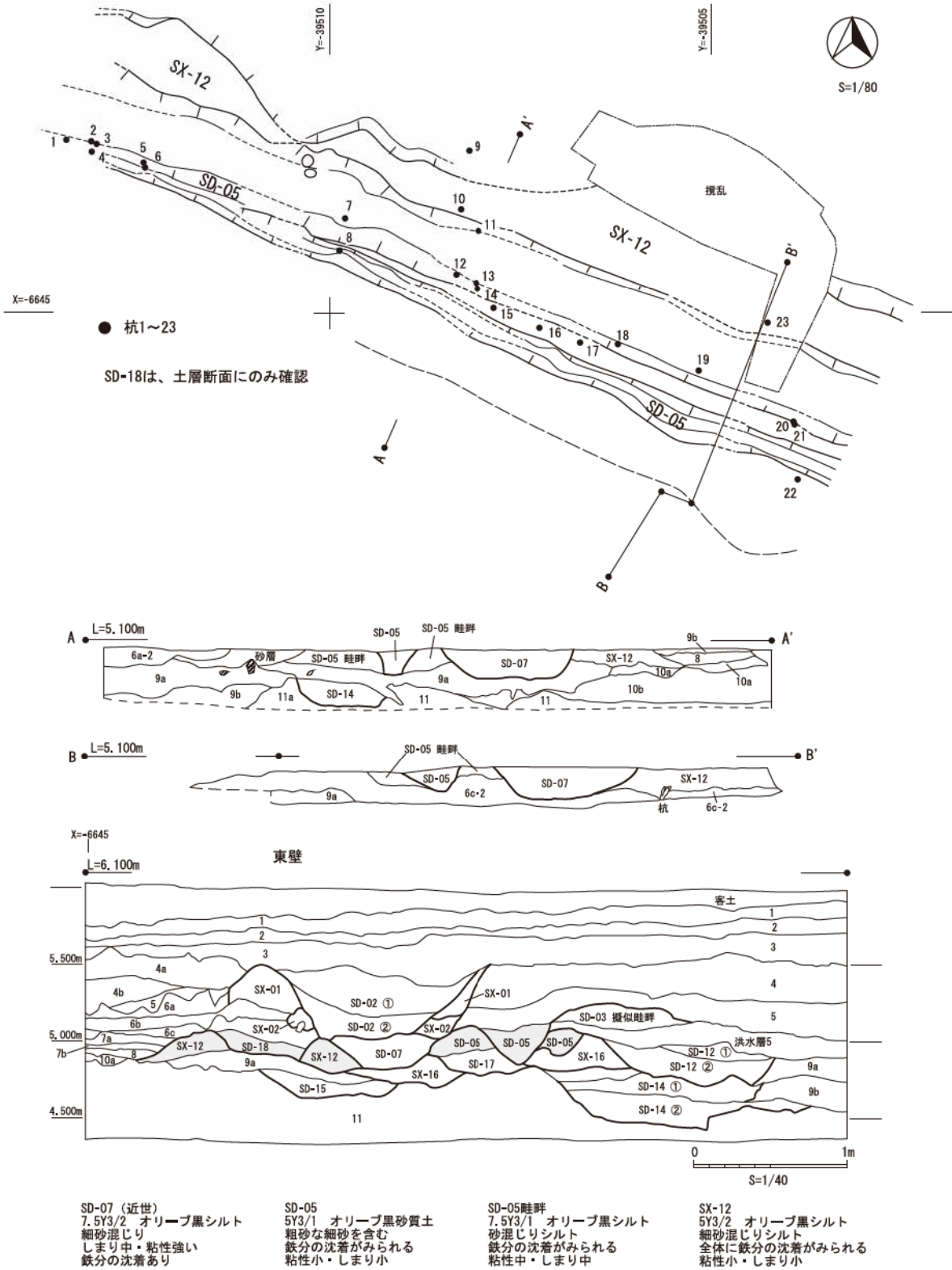
第 226 図 両迫間日渡遺跡 O6-I 区 6b-2 層 SD-09・SX-10・15 実測図



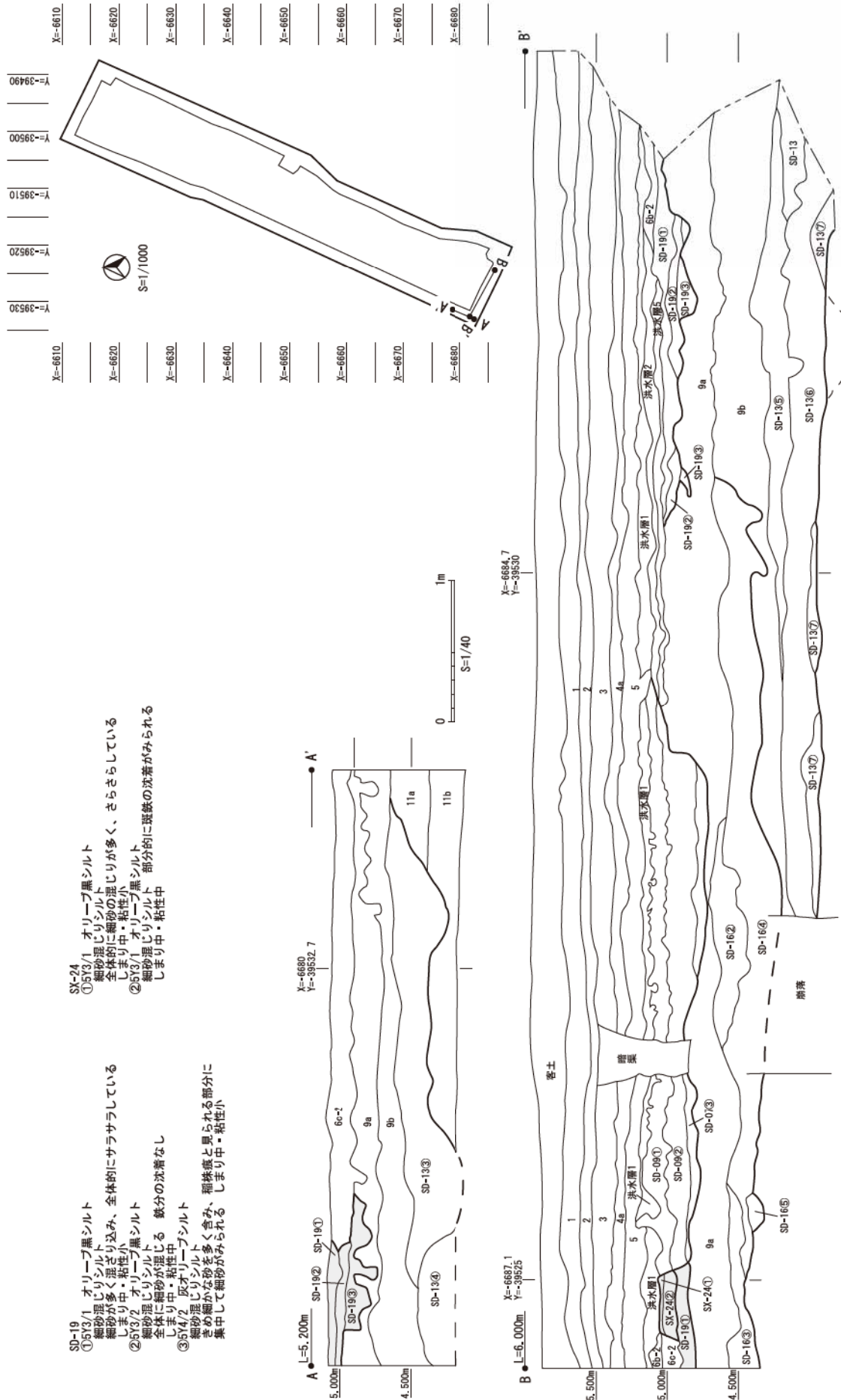
第 227 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-03 実測図・6c-2 層足跡検出範囲



第 229 図 両迫間日渡遺跡 06- I 区 6c-2 層 SX-08・09・11・13~14・SD-08 実測図



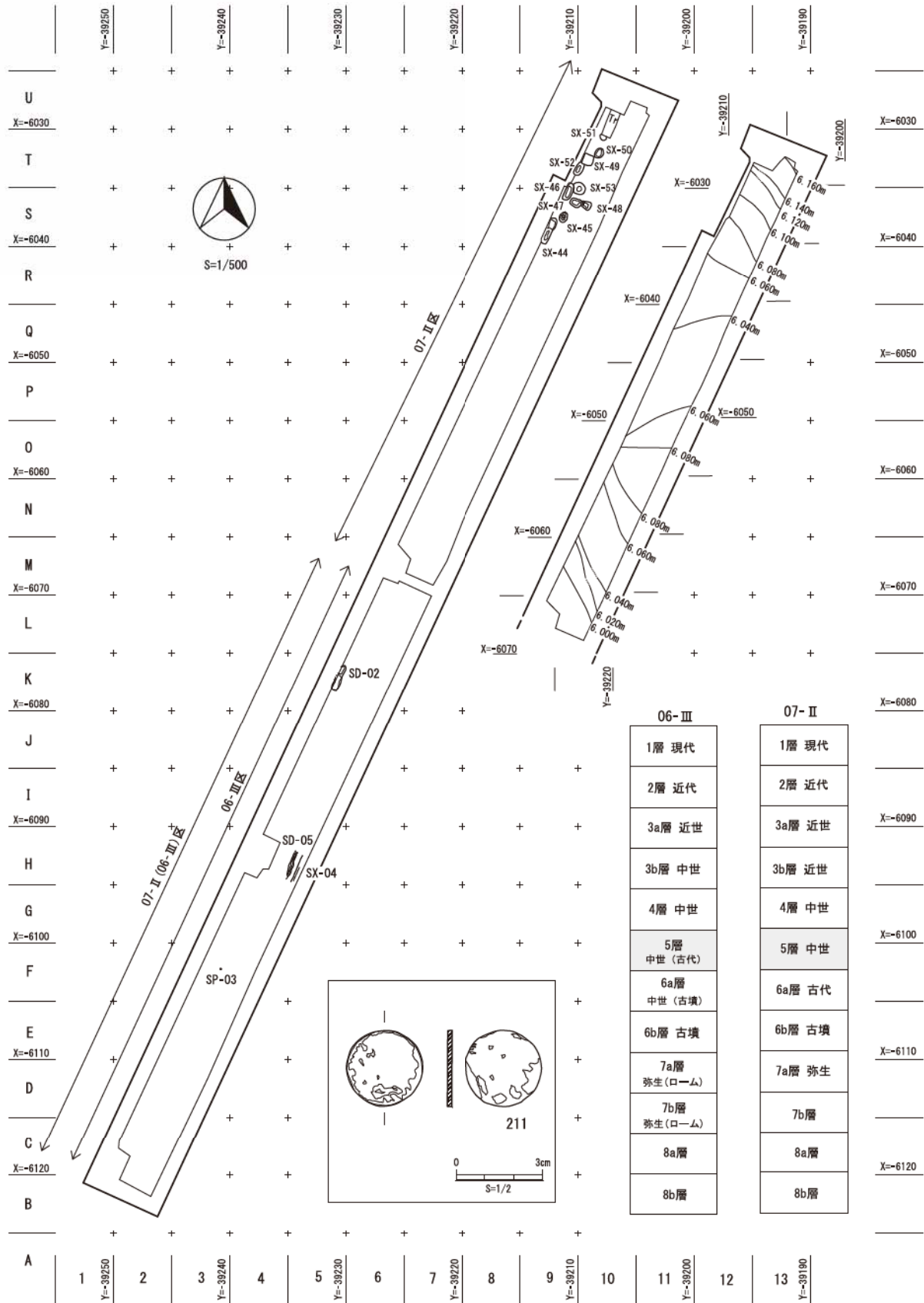
第 230 図 両迫間日渡遺跡 06-I 区
6c-2 層 SD-05・18・SX-12 実測図・杭 1~23 検出位置図



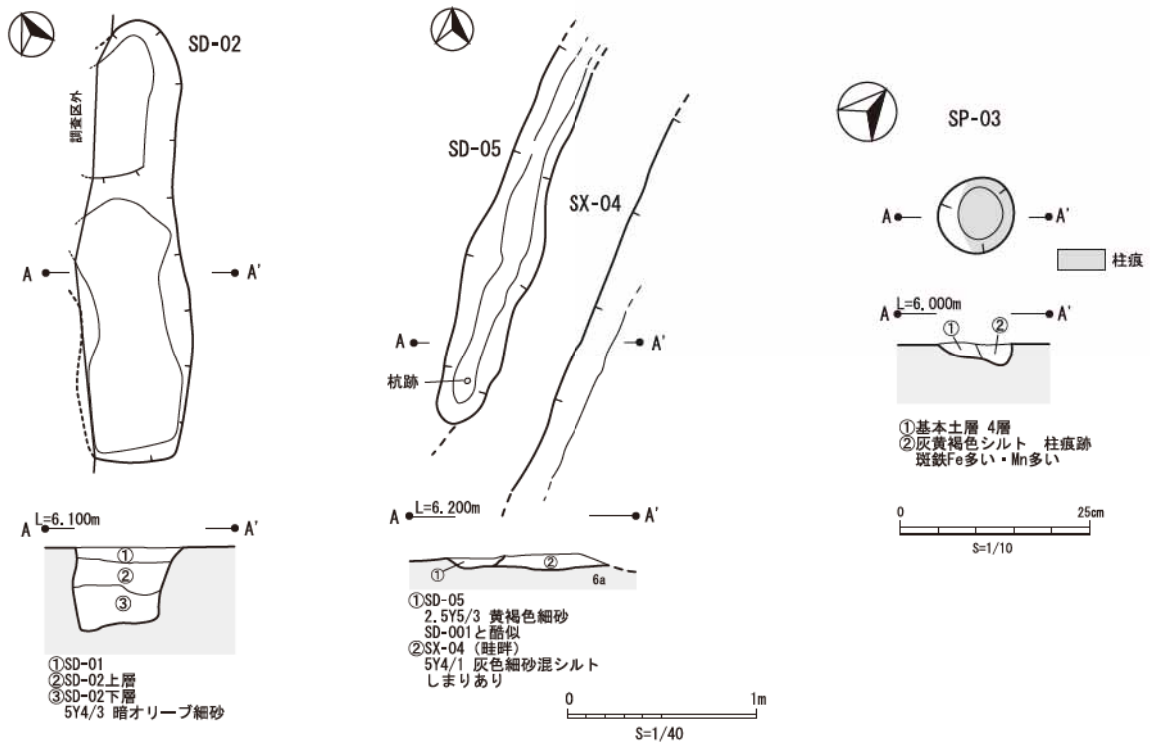
SD-19
 ①513/1 オリーブ黒シルト
 細砂混じりシルト
 細砂が多く混ざり込み、全体的にサラサラしている
 しまり中・粘性小
 ②513/1 オリーブ黒シルト
 細砂混じりシルト
 全体に細砂が混じる 鉄分の沈着なし
 しまり中・粘性中
 ③514/2 灰オリーブシルト
 細砂混じりシルト
 まめ細かな砂を多く含む、種雑草と見られる部分に
 集中して細砂がみられる、しまり中・粘性小

SX-24
 ①513/1 オリーブ黒シルト
 細砂混じりシルト
 細砂の混じりが多く、さらさらしている
 しまり中・粘性小
 ②513/1 オリーブ黒シルト
 細砂混じりシルト
 部分的に環鉄の沈着がみられる
 しまり中・粘性中

第231図 両迫間日波遺跡06-I区 6c-2層SD-19・SX-24実測図



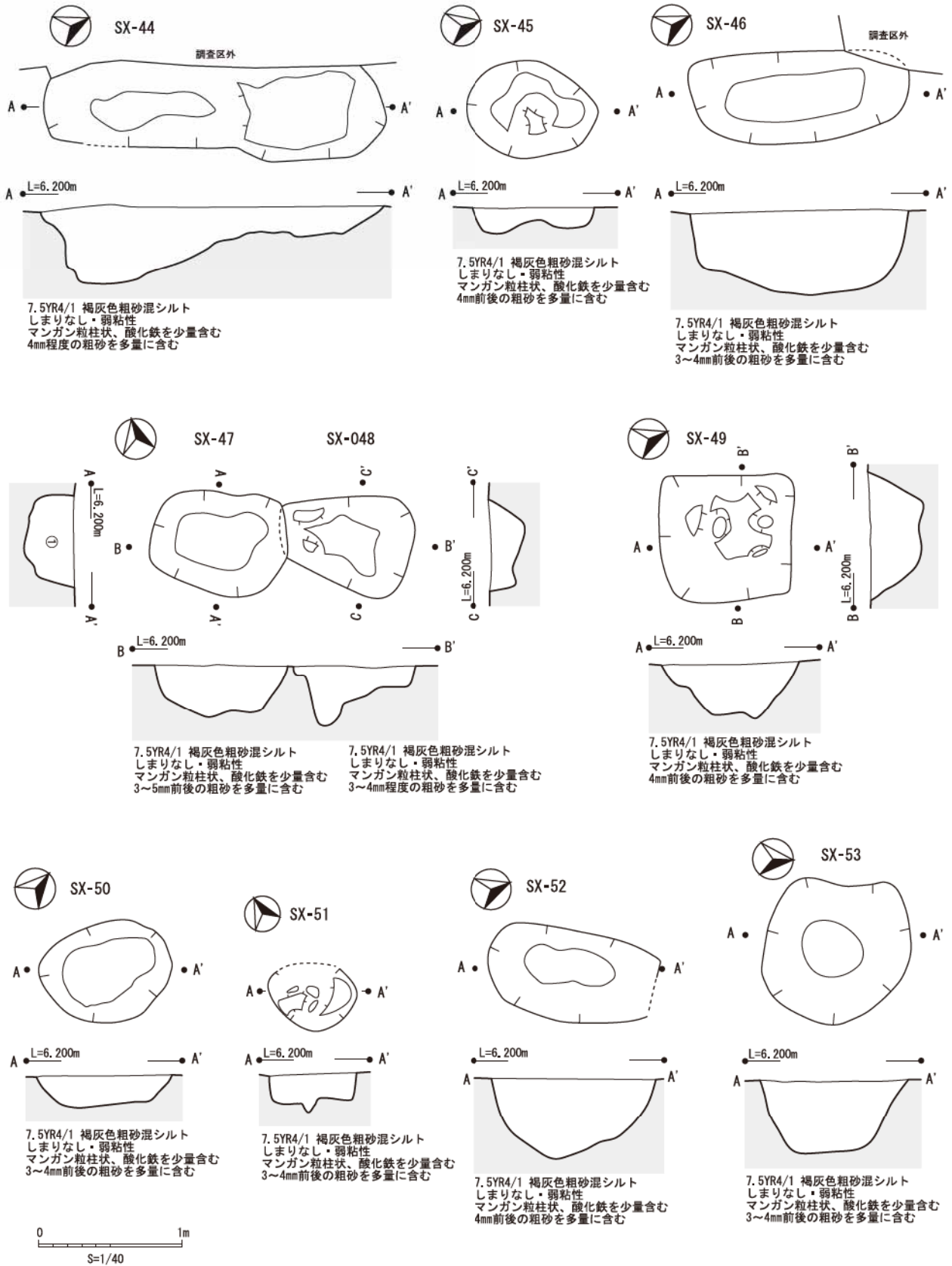
第 232 図 玉名平野条里跡 06-III区・07-II区 5層遺構配置図及び5層直上コンタ図



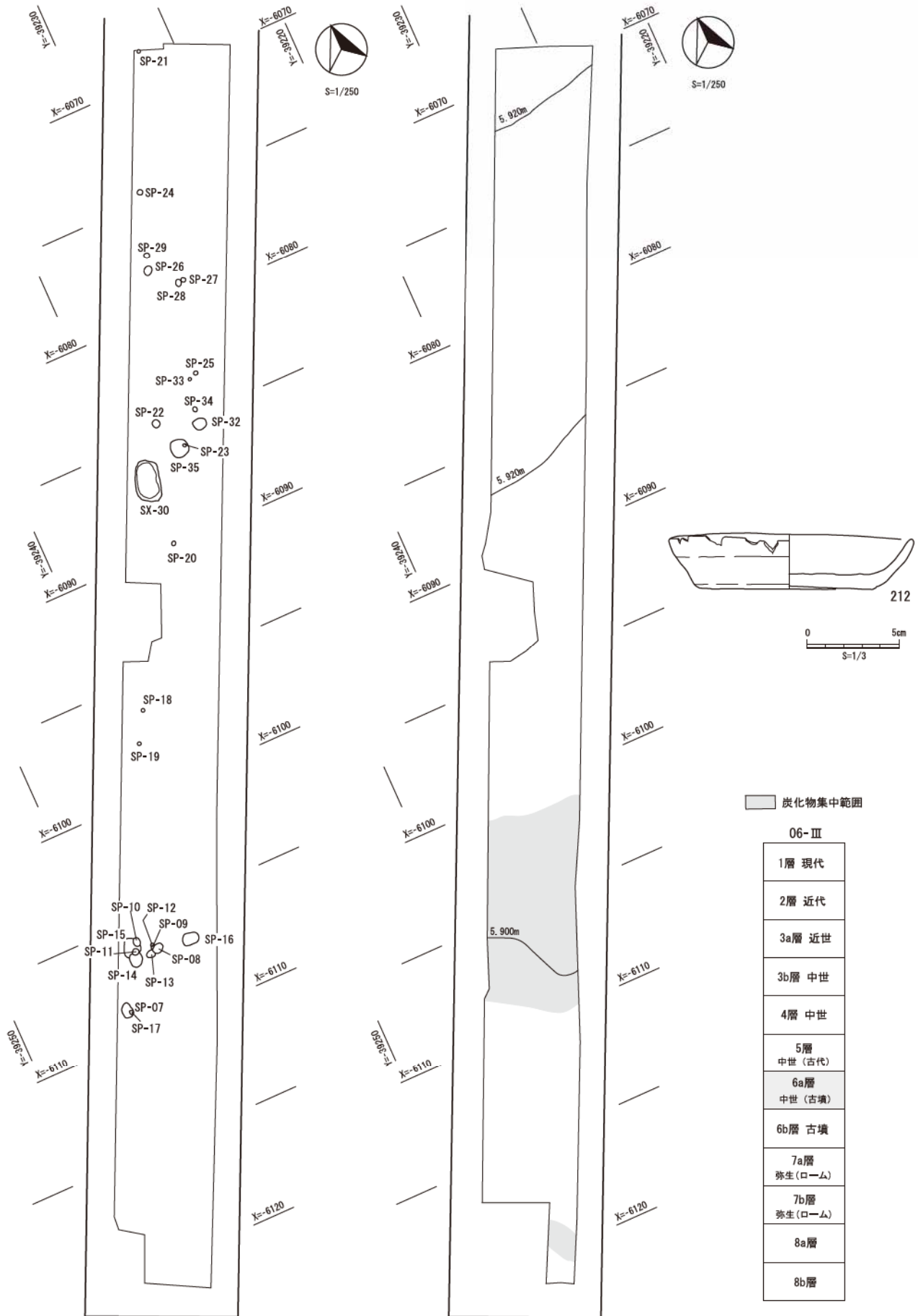
第 233 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区 SD-02・05・SX-04・SP-03 実測図



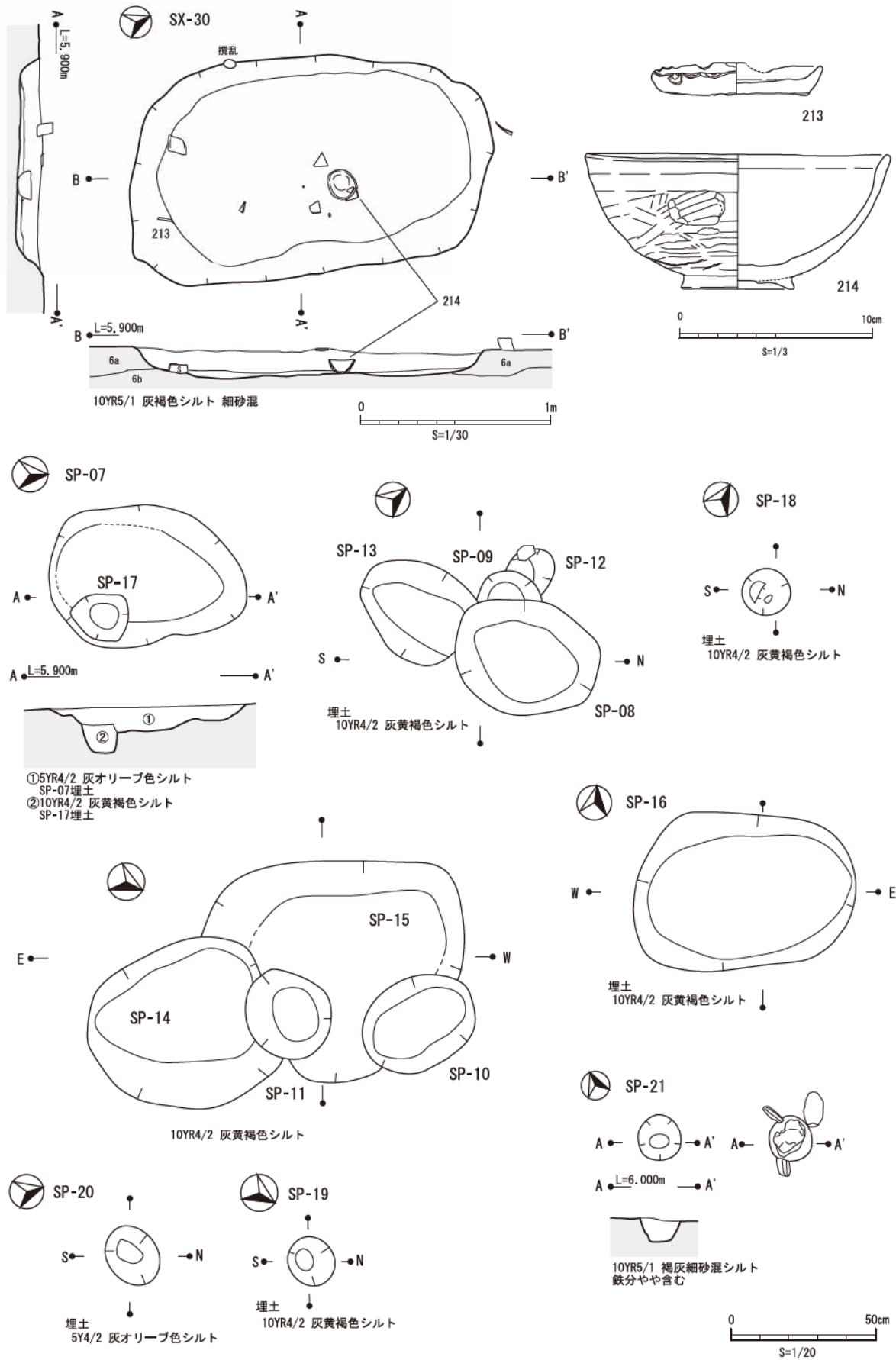
発掘作業風景



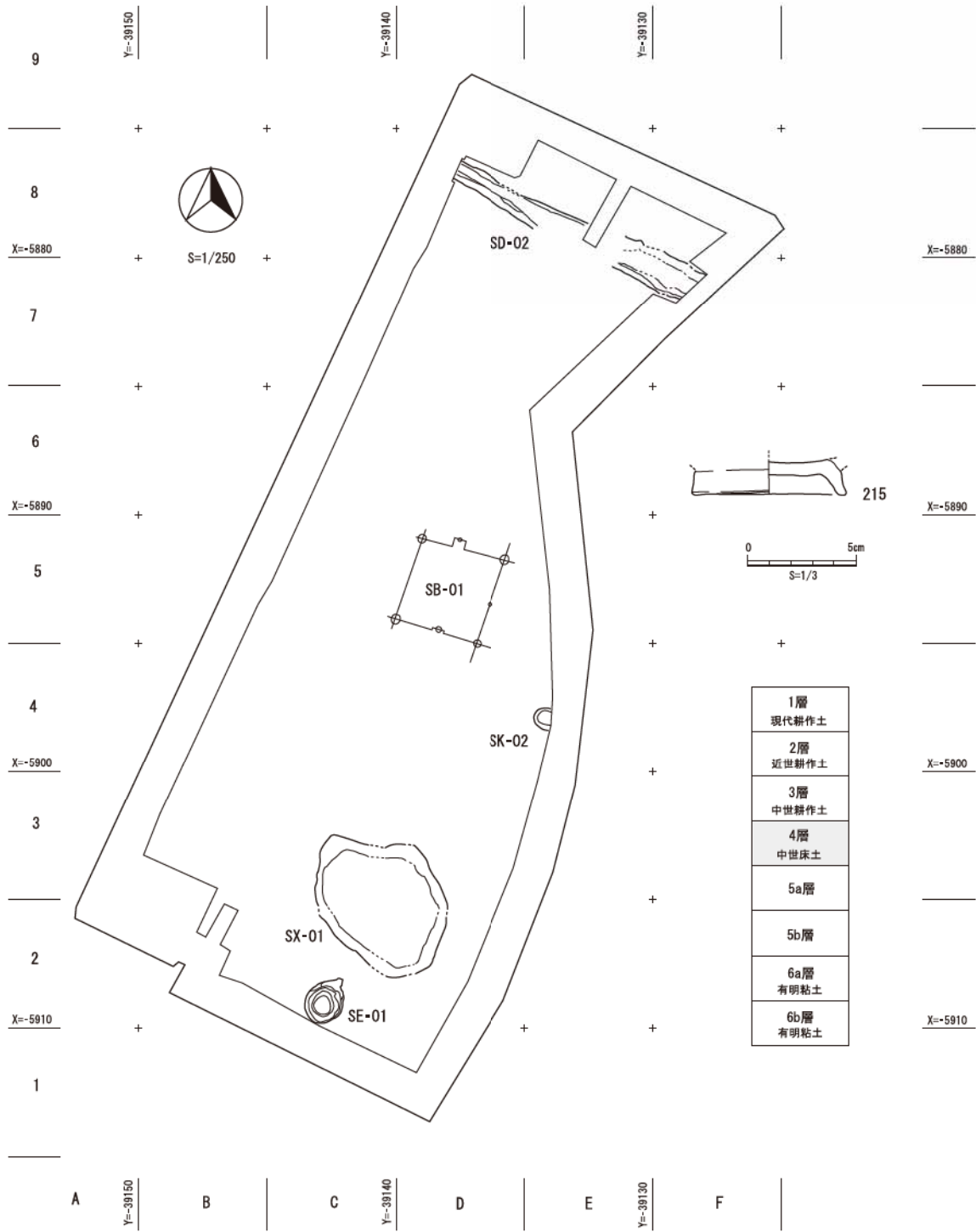
第 234 図 玉名平野条里跡 07-II 区 SX-44~53 実測図



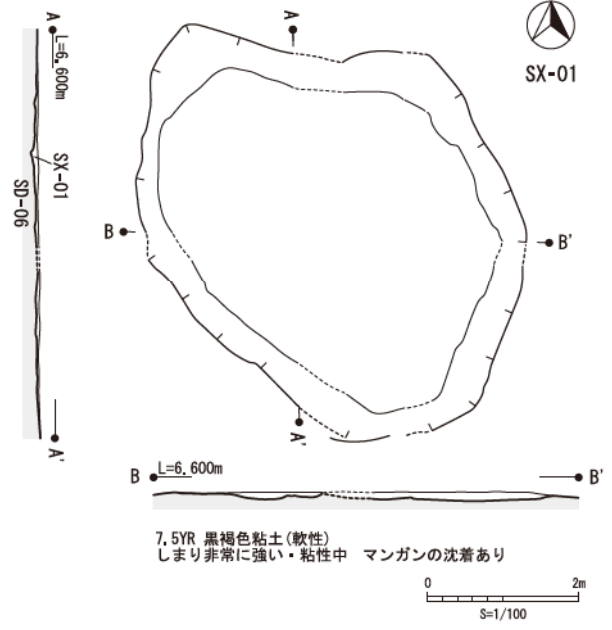
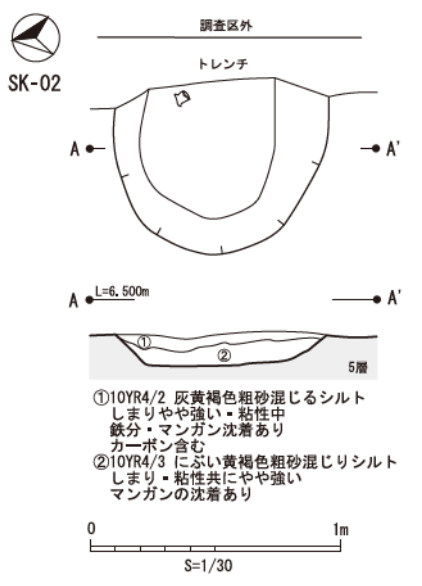
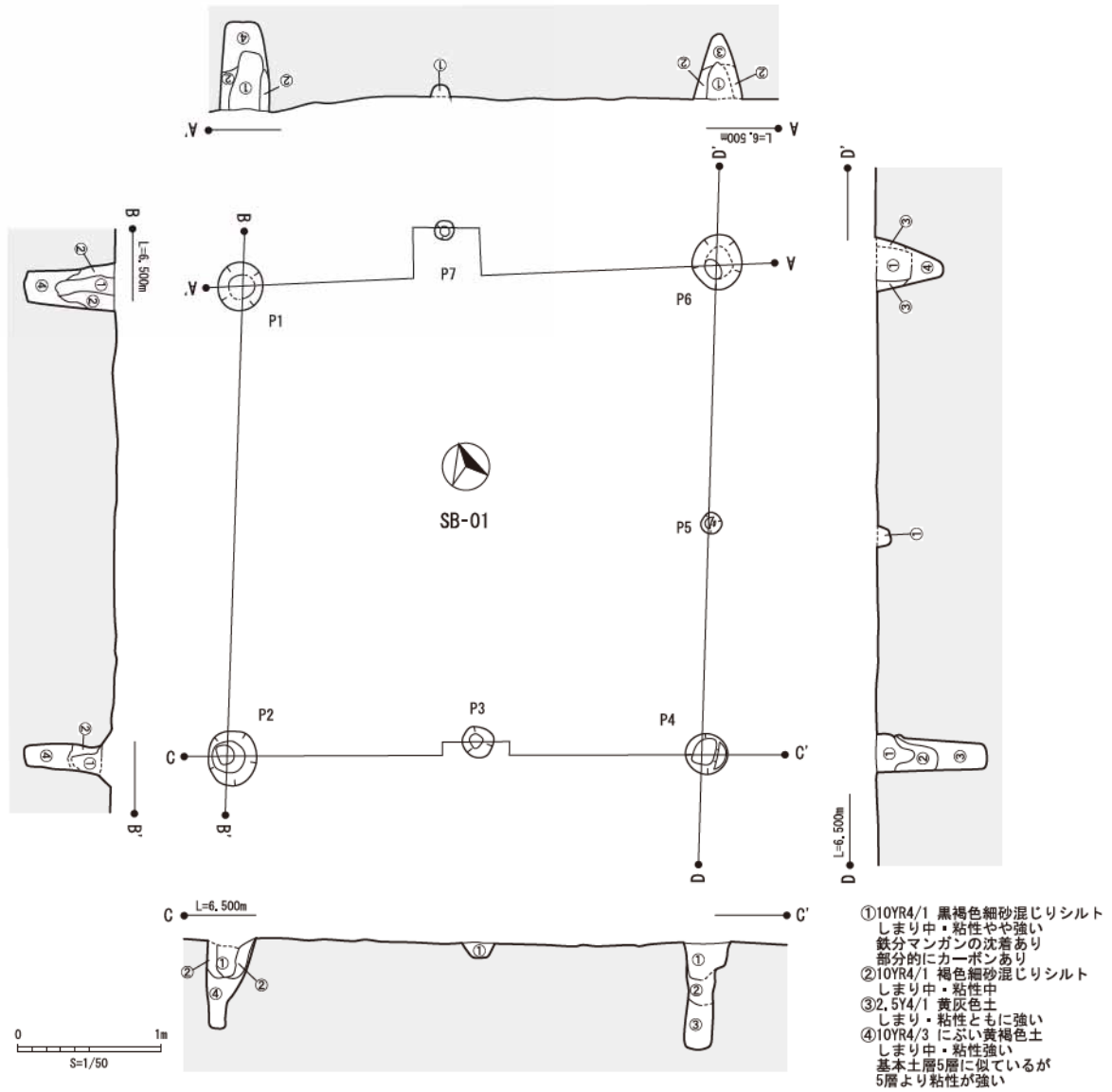
第 235 図 玉名平野条里跡 06-III区 6a層遺構配置図・6a層直上コンタ図及び出土遺物実測図



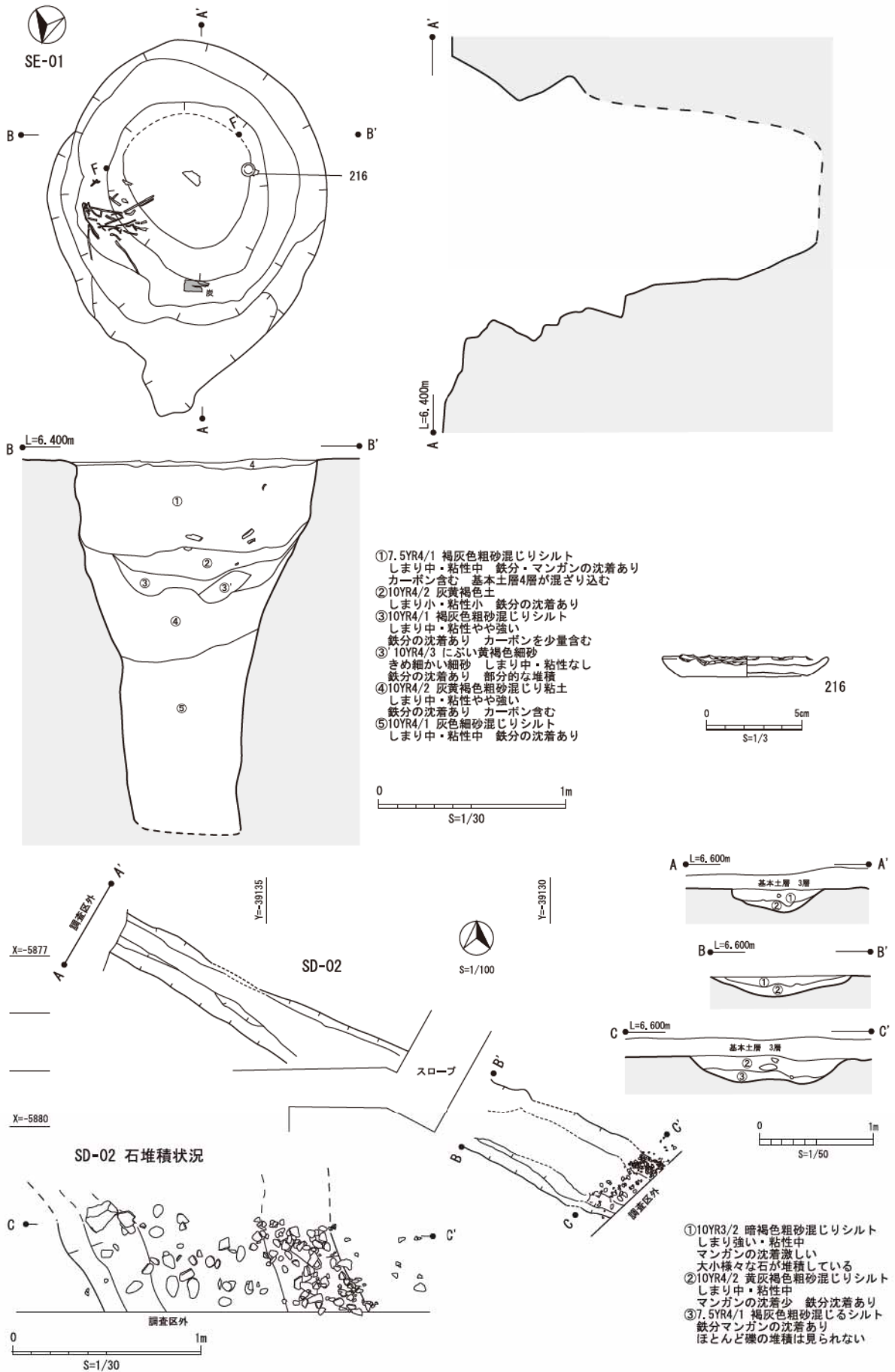
第 236 図 玉名平野条里跡 06-Ⅲ区
SX-30・SP-07～21 実測図及び出土遺物実測図



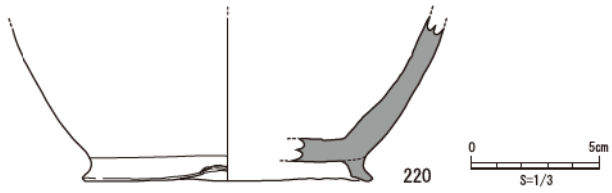
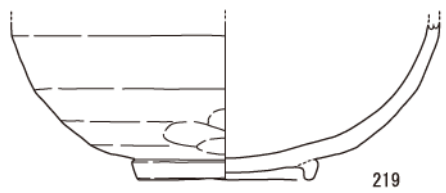
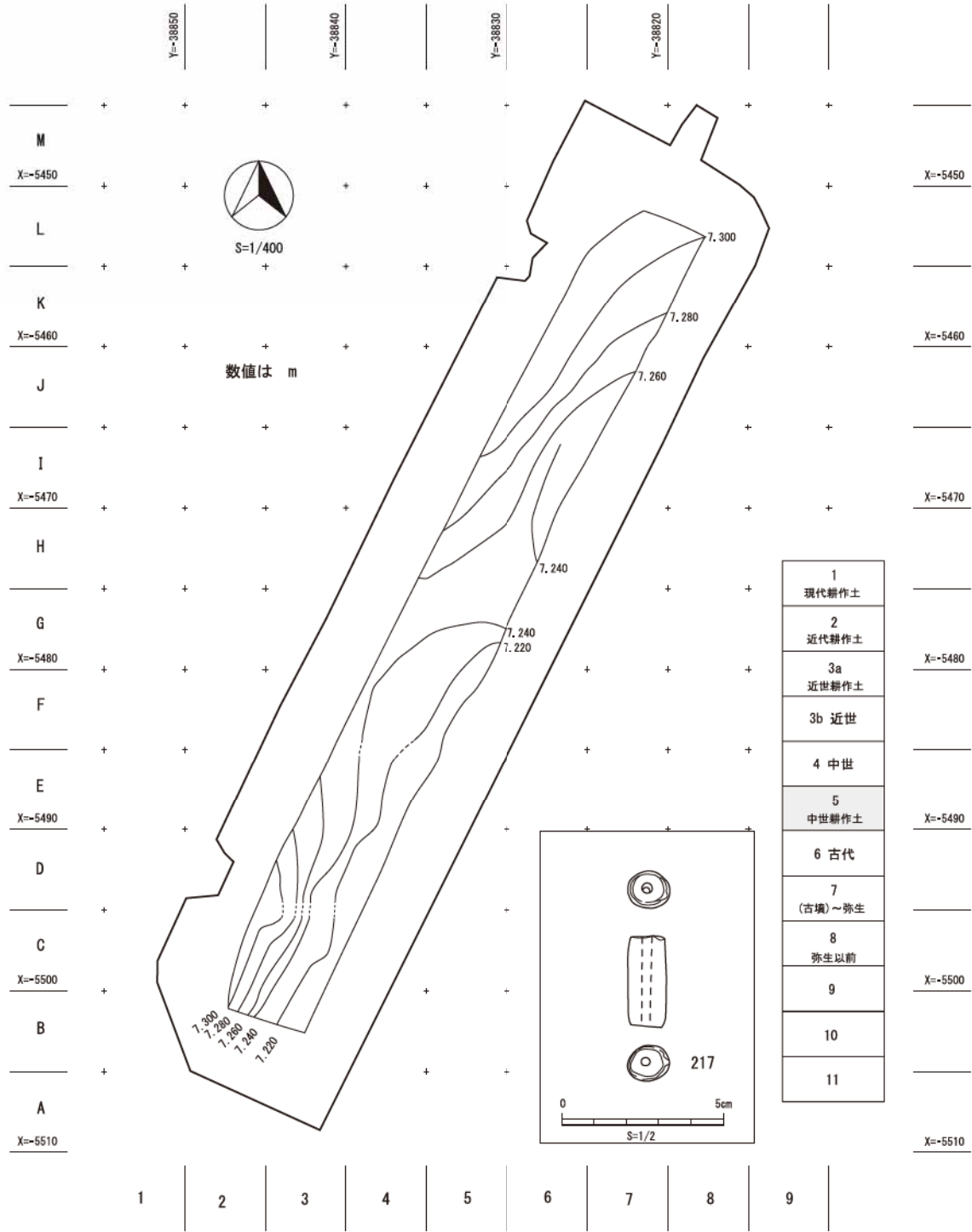
第 237 図 玉名平野条里跡 07-I 区 4 層遺構配置図及び出土遺物実測図



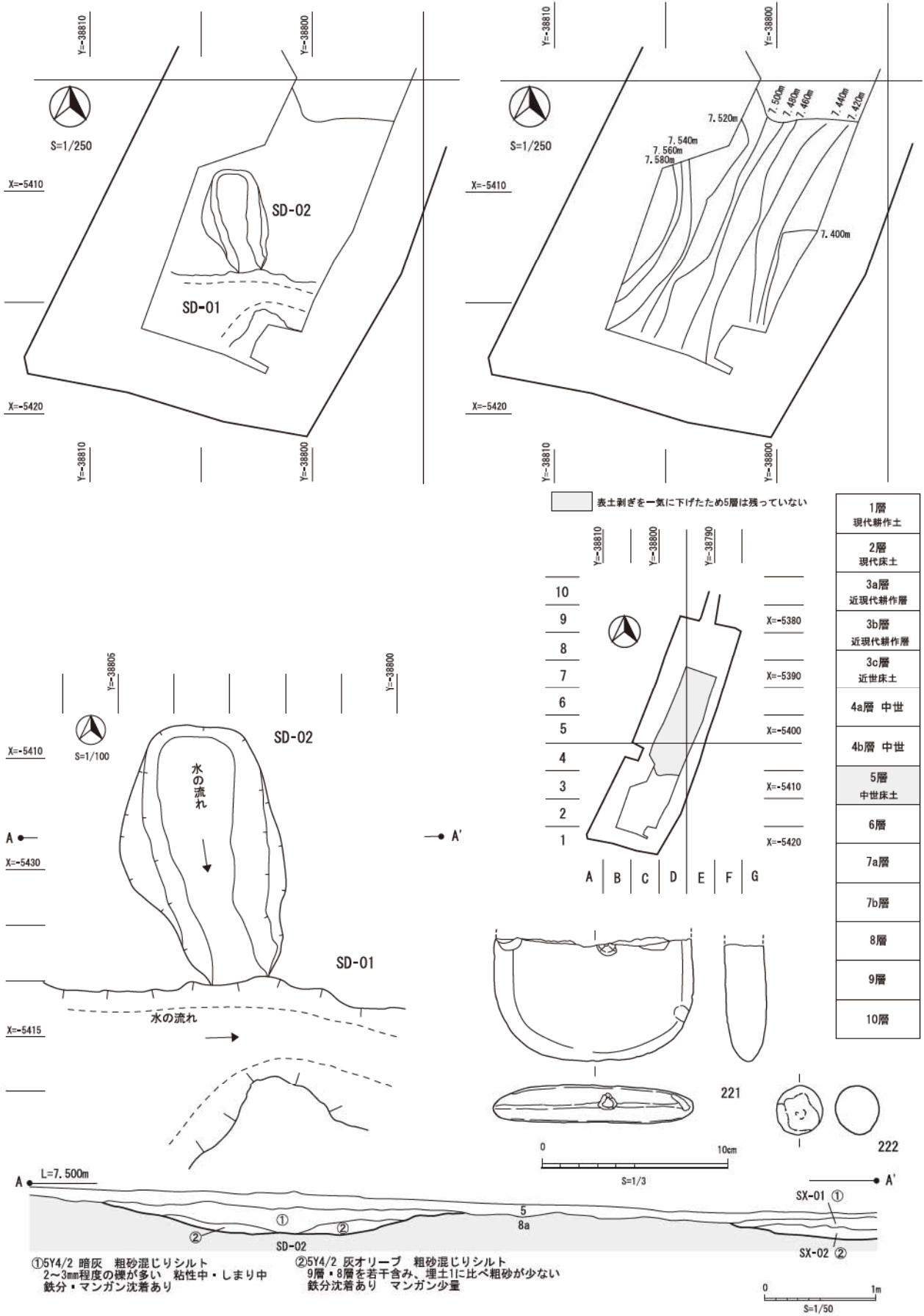
第 238 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SB-01・SK-02・SX-01 実測図



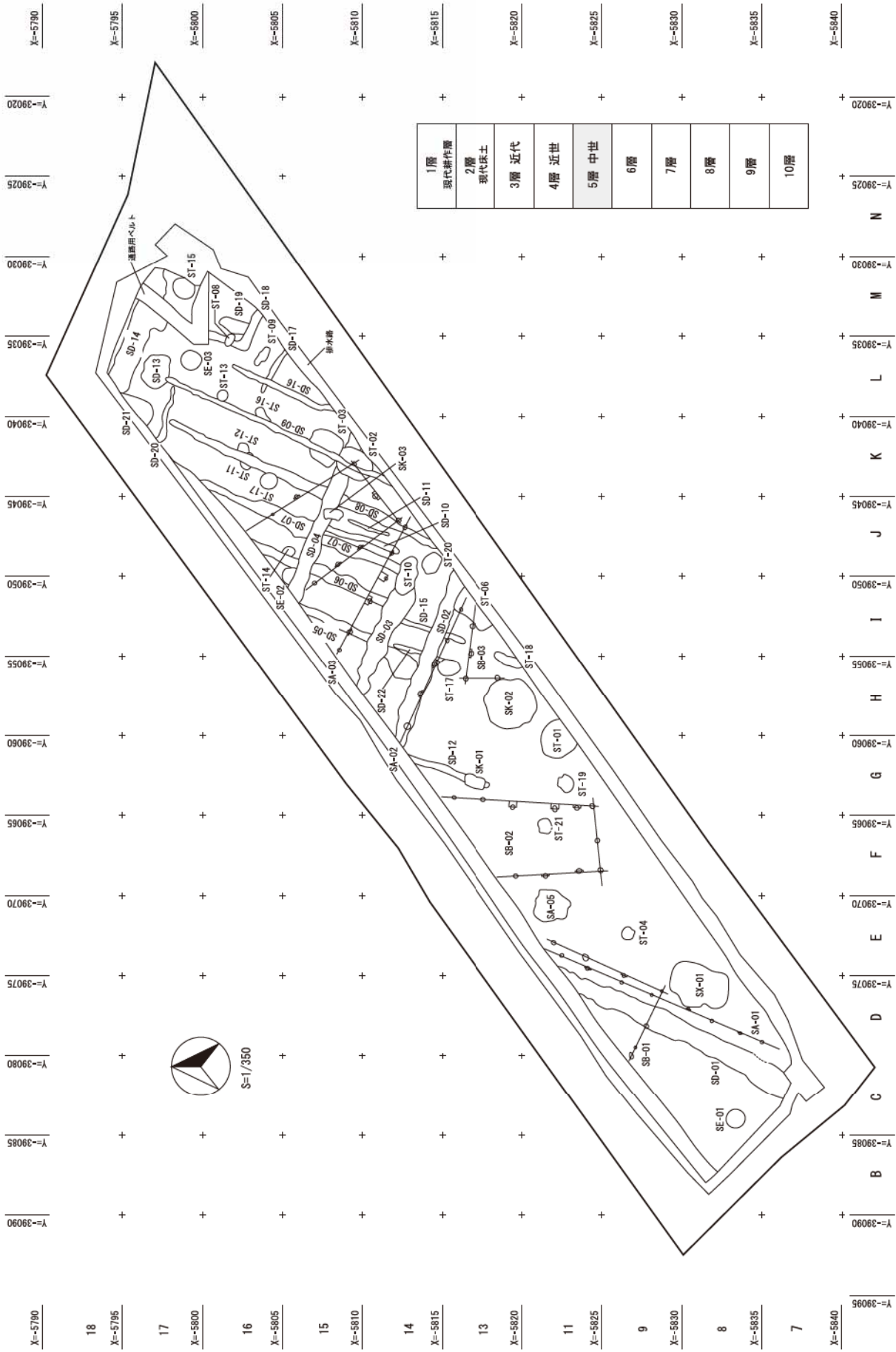
第 239 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SE-01・SD-02 実測図及び出土遺物実測図



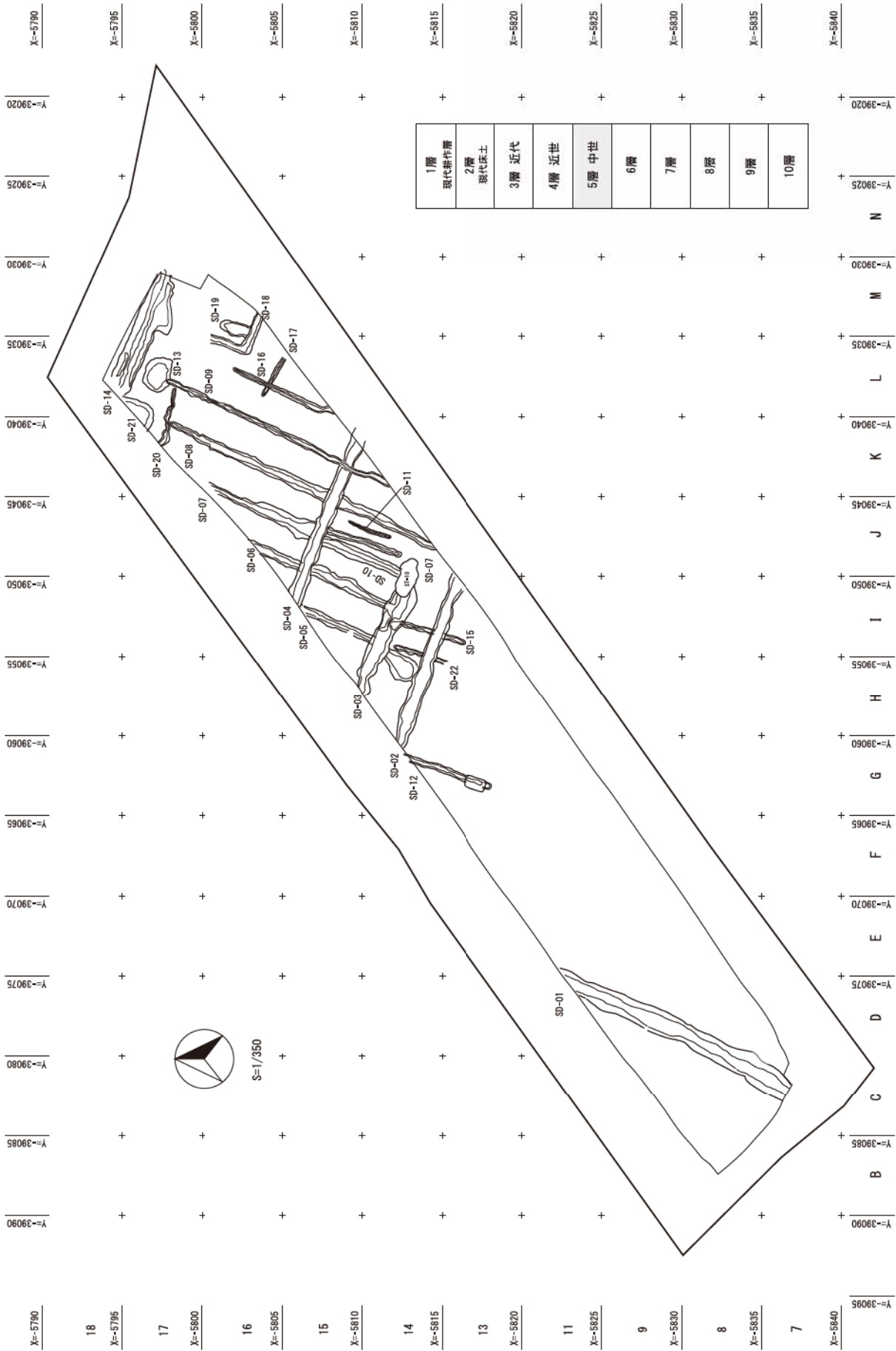
第 240 図 玉名平野条里跡 07-IV区 5層コンタ図及び出土遺物実測図

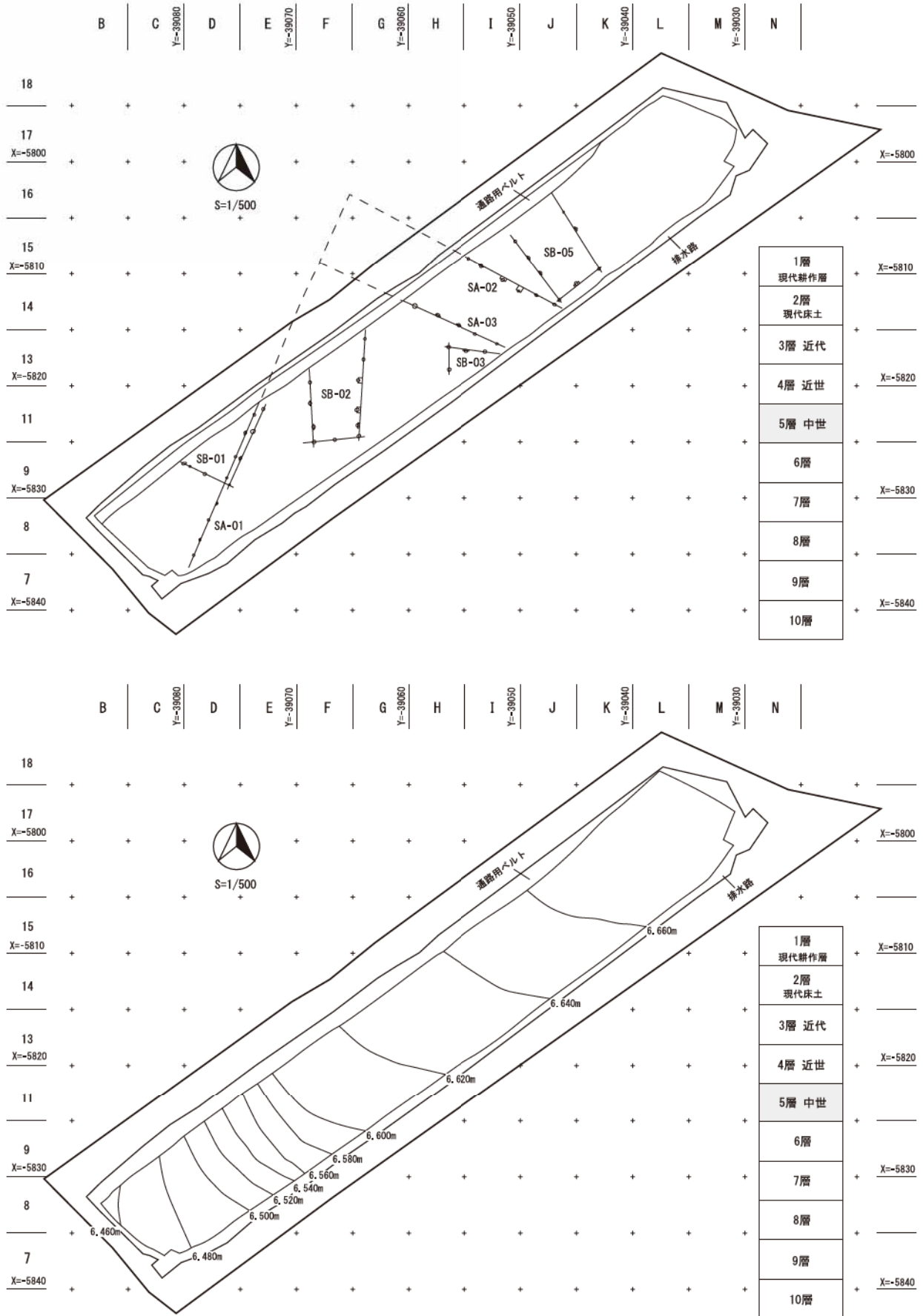


第 241 図 玉名平野条里跡 07-V区
5層遺構配置図・コンタ図・SD-01・02 実測図及び出土遺物実測図

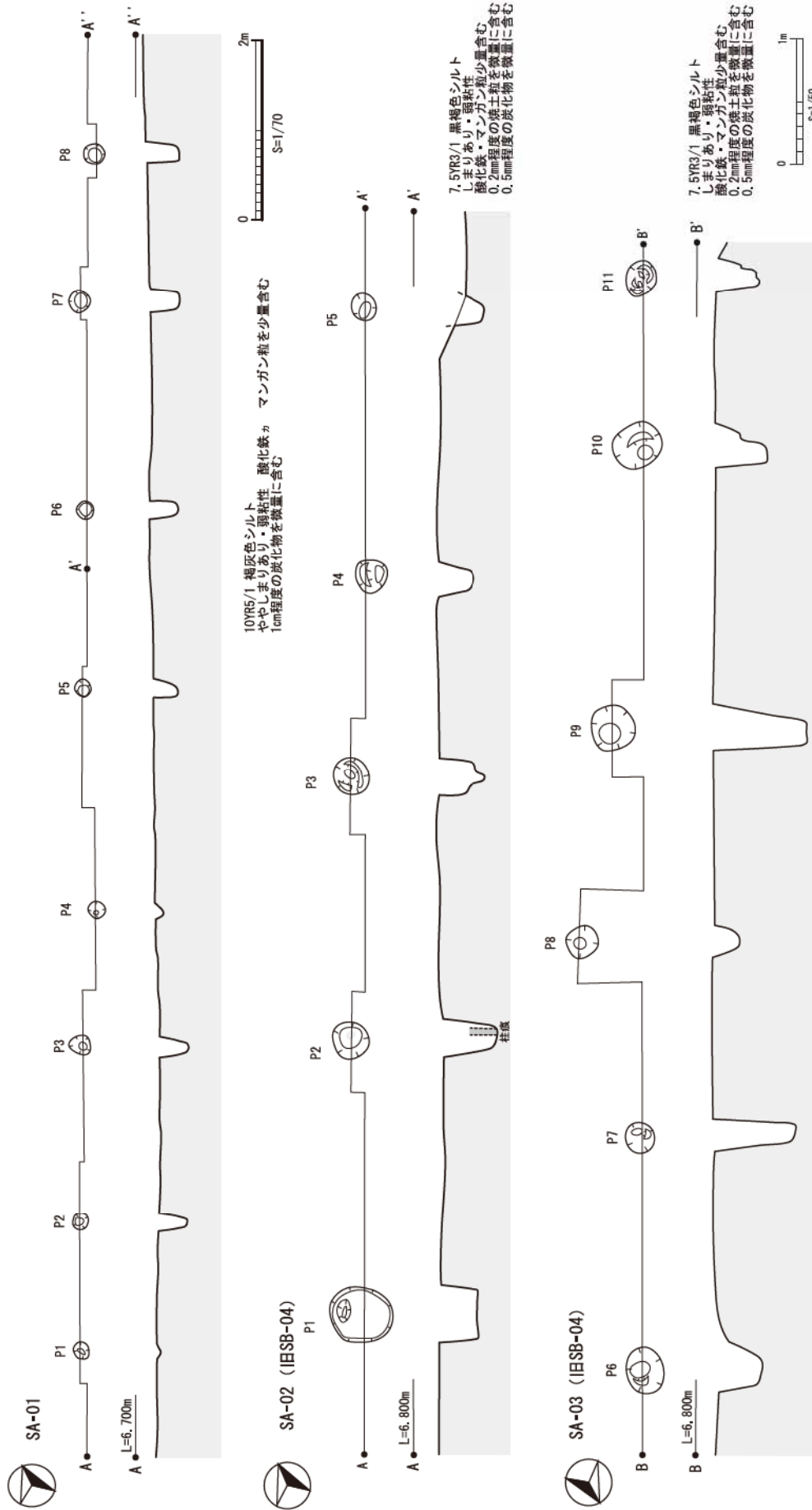


第 242 図 玉名平野条里跡 08-I 区 5 層遺構配置図

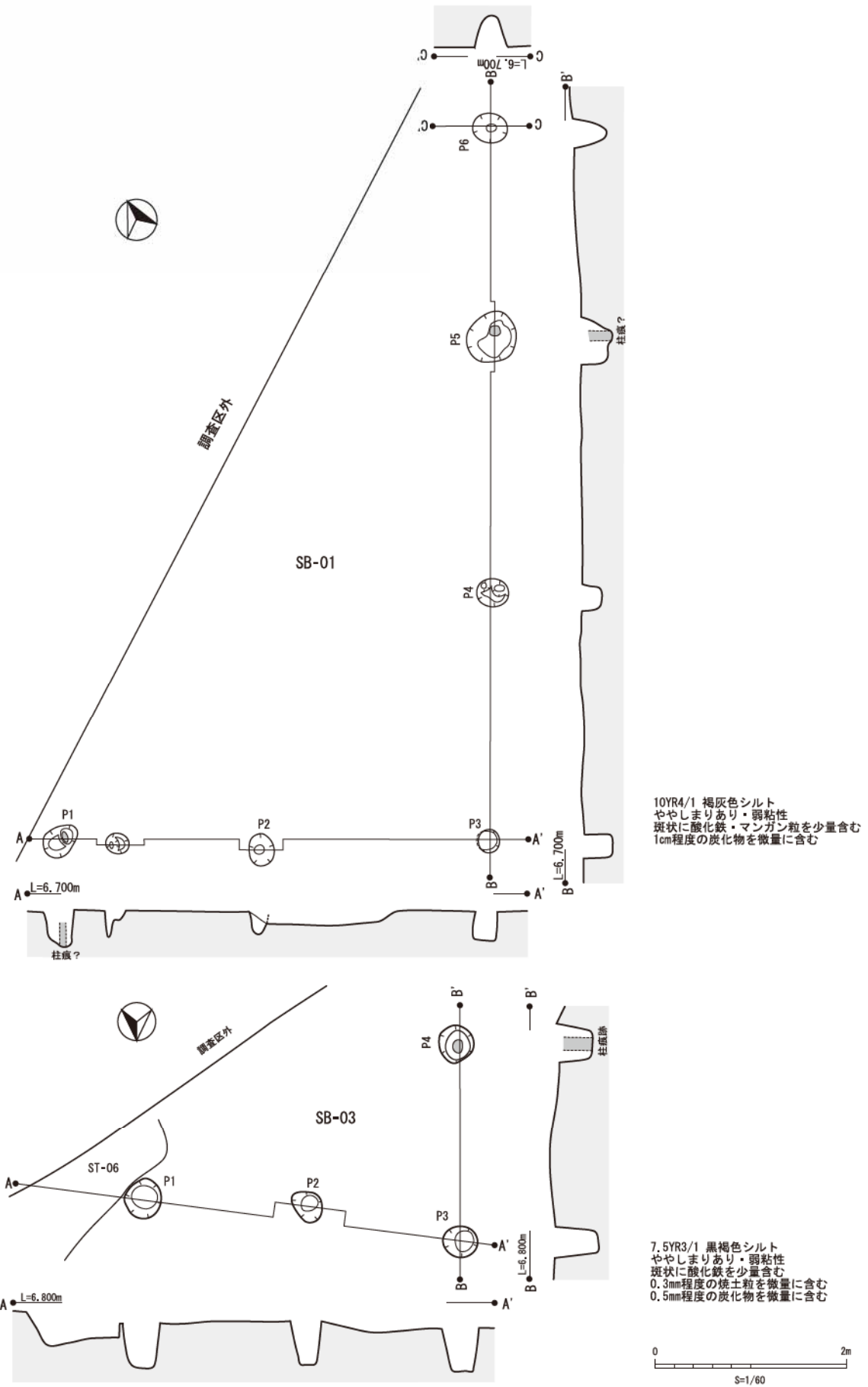




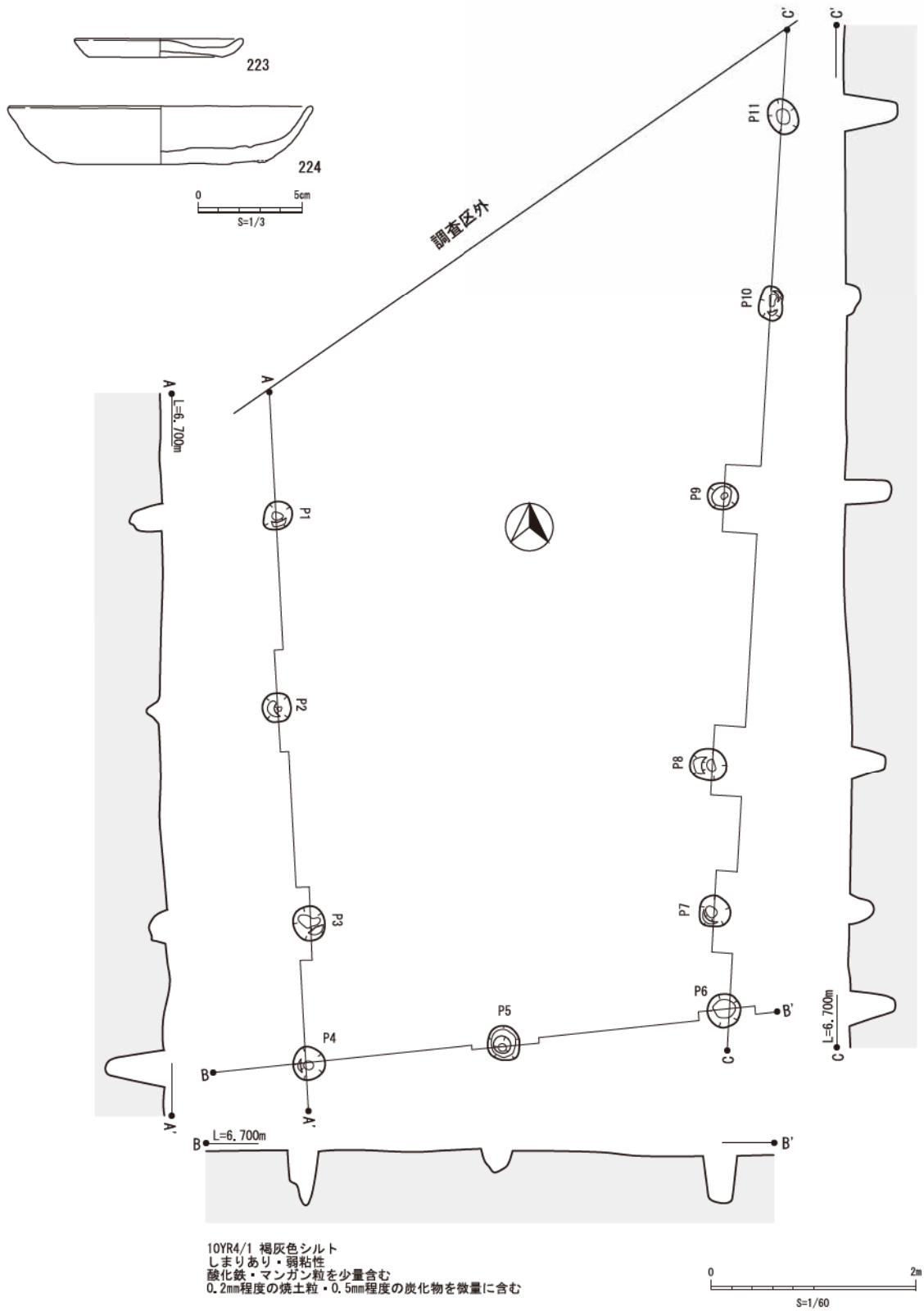
第 244 図 玉名平野条里跡 08-I 区 5 層遺構配置図 (SA・SB のみ) 及びコンタ図



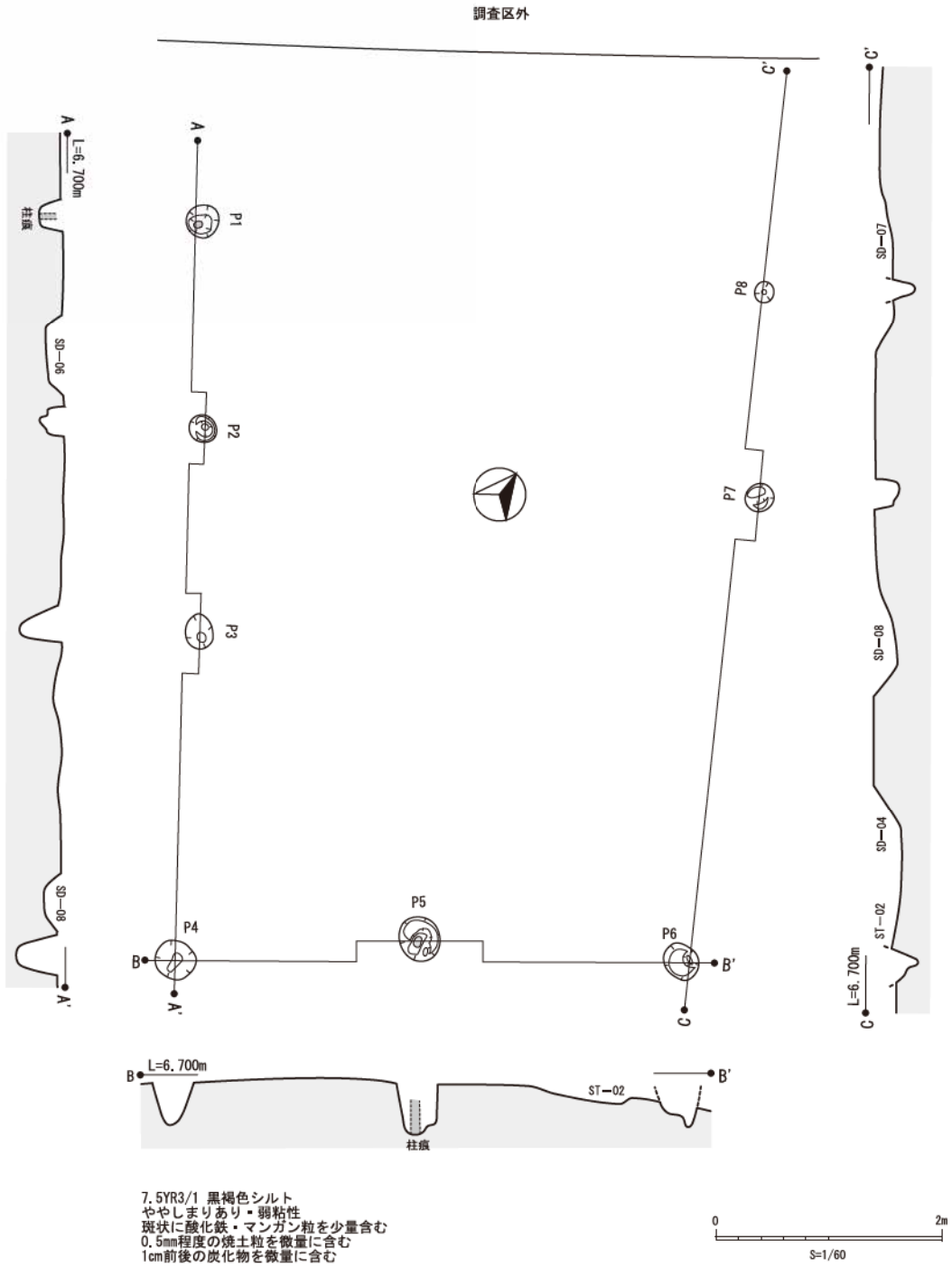
第 245 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SA-01～03 実測図



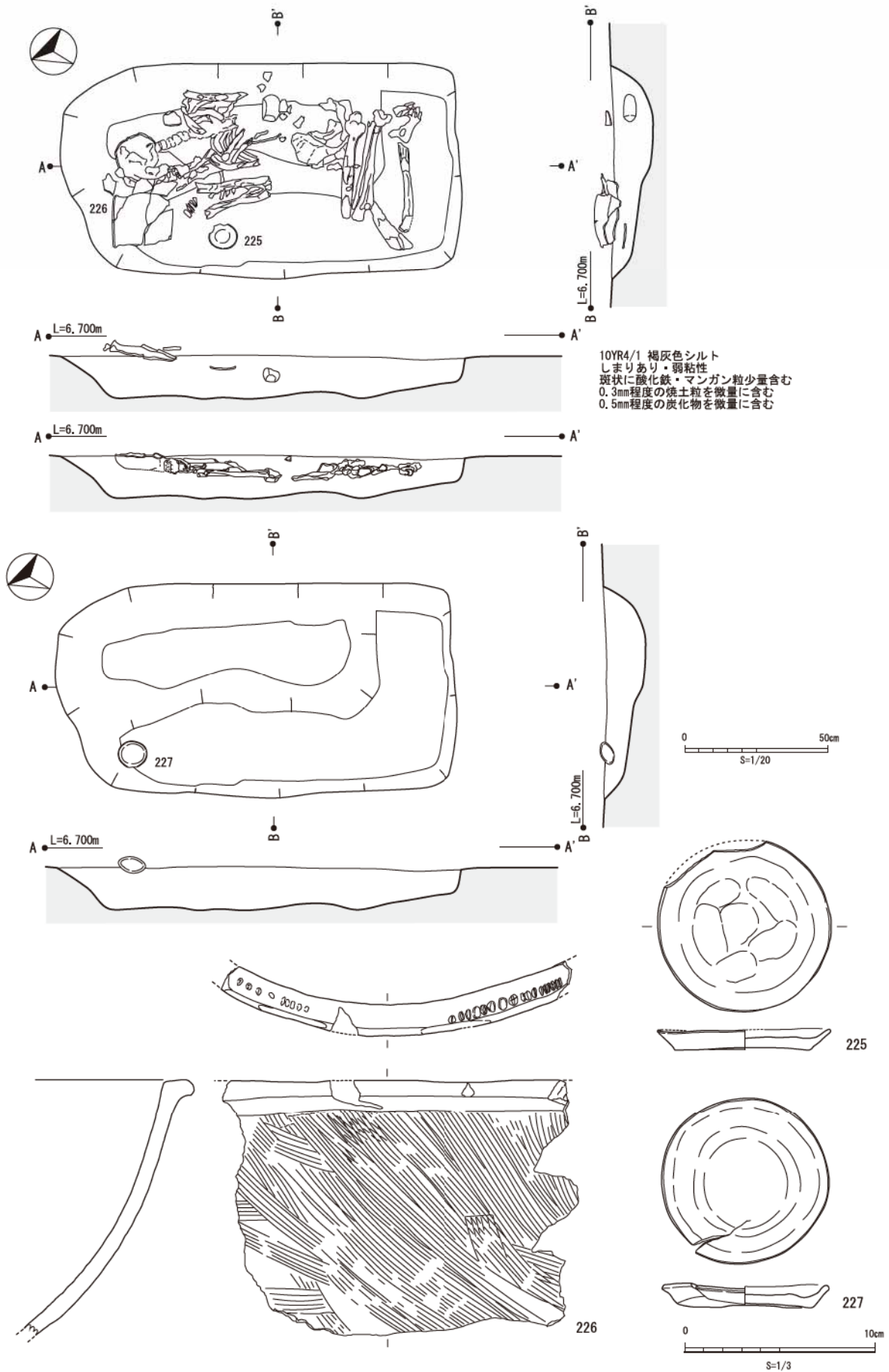
第 246 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-01・03 実測図



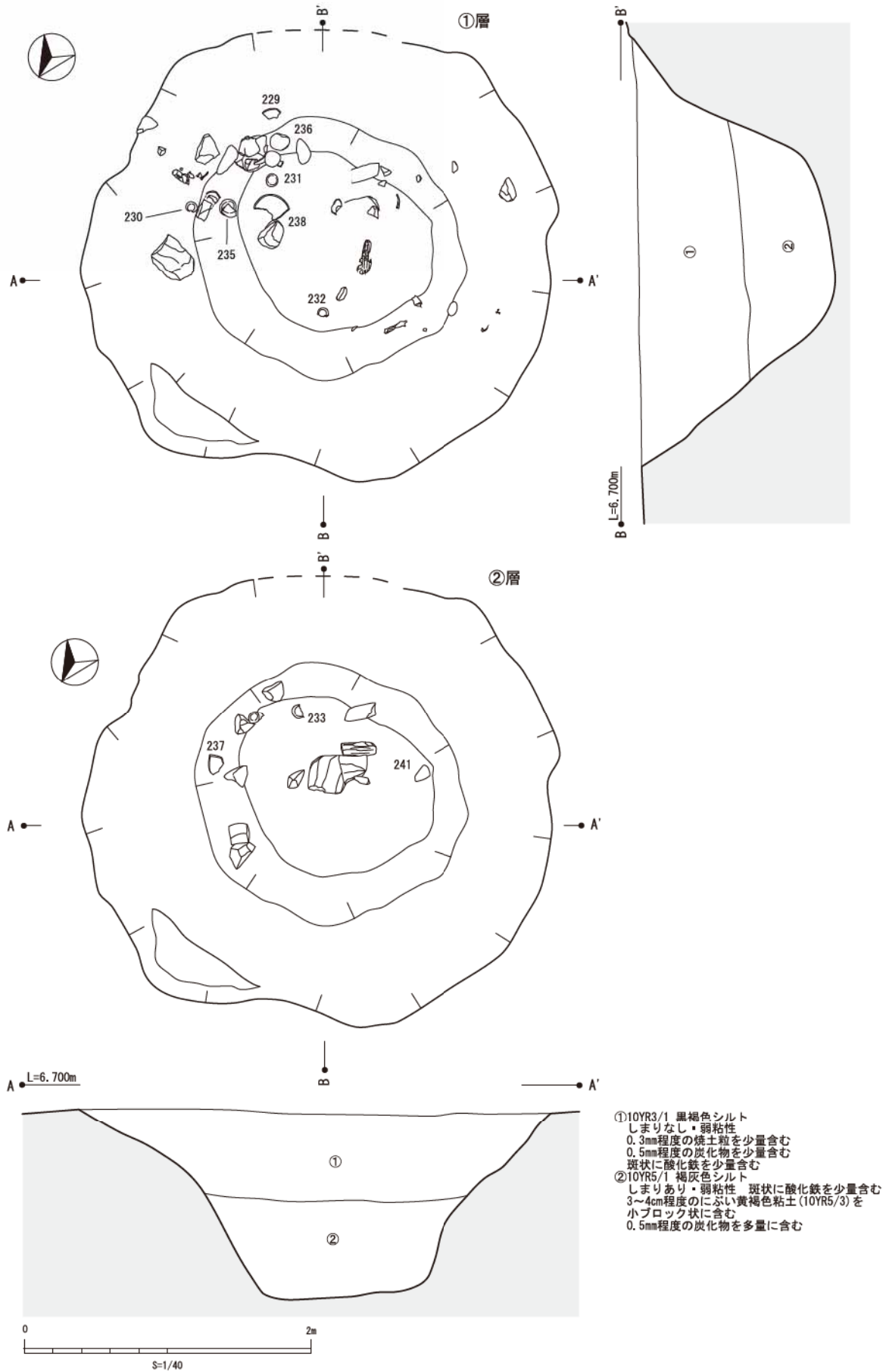
第 247 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-02 実測図及び出土遺物実測図



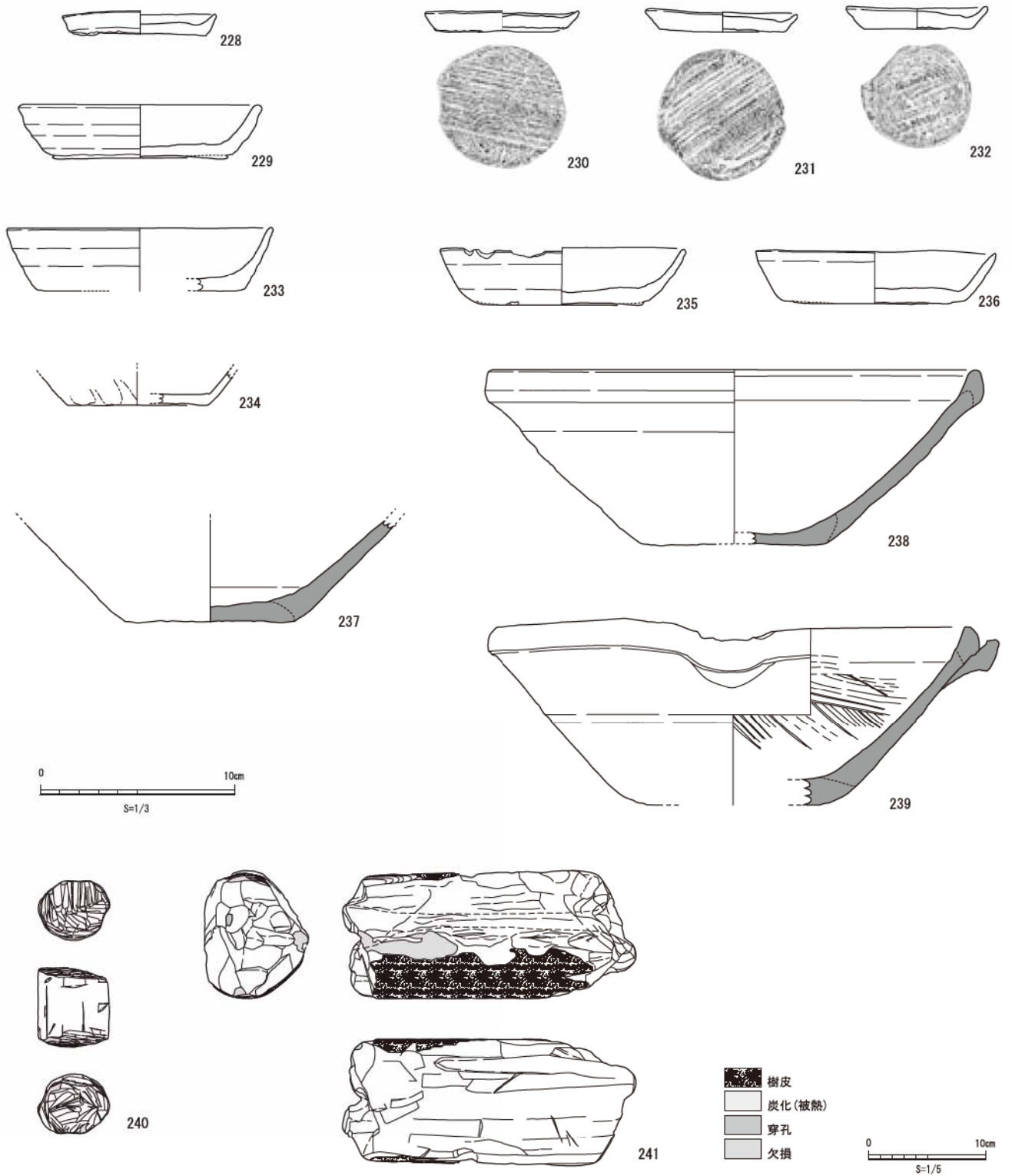
第 248 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SB-05 実測図



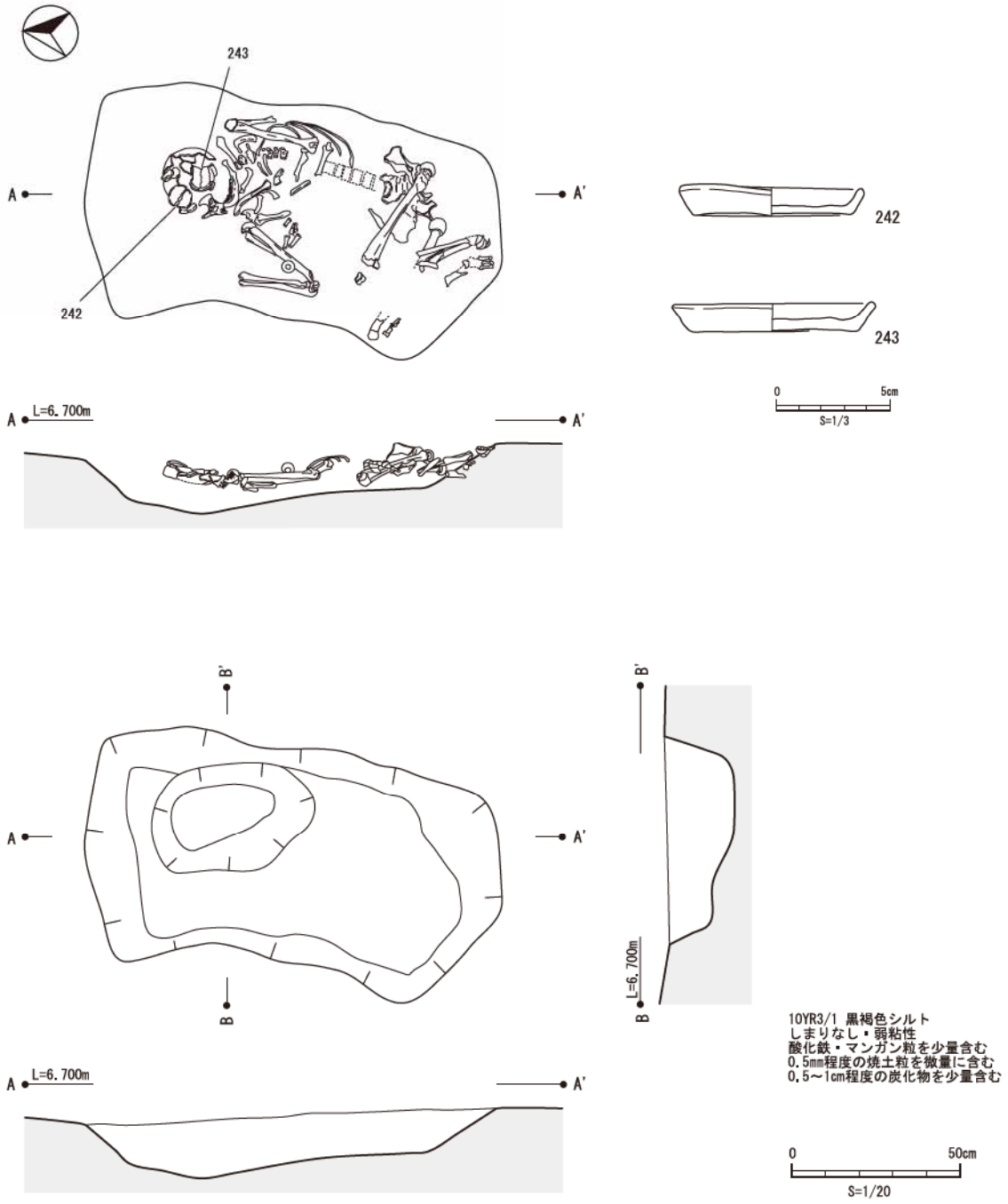
第 249 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-01 実測図及び出土遺物実測図



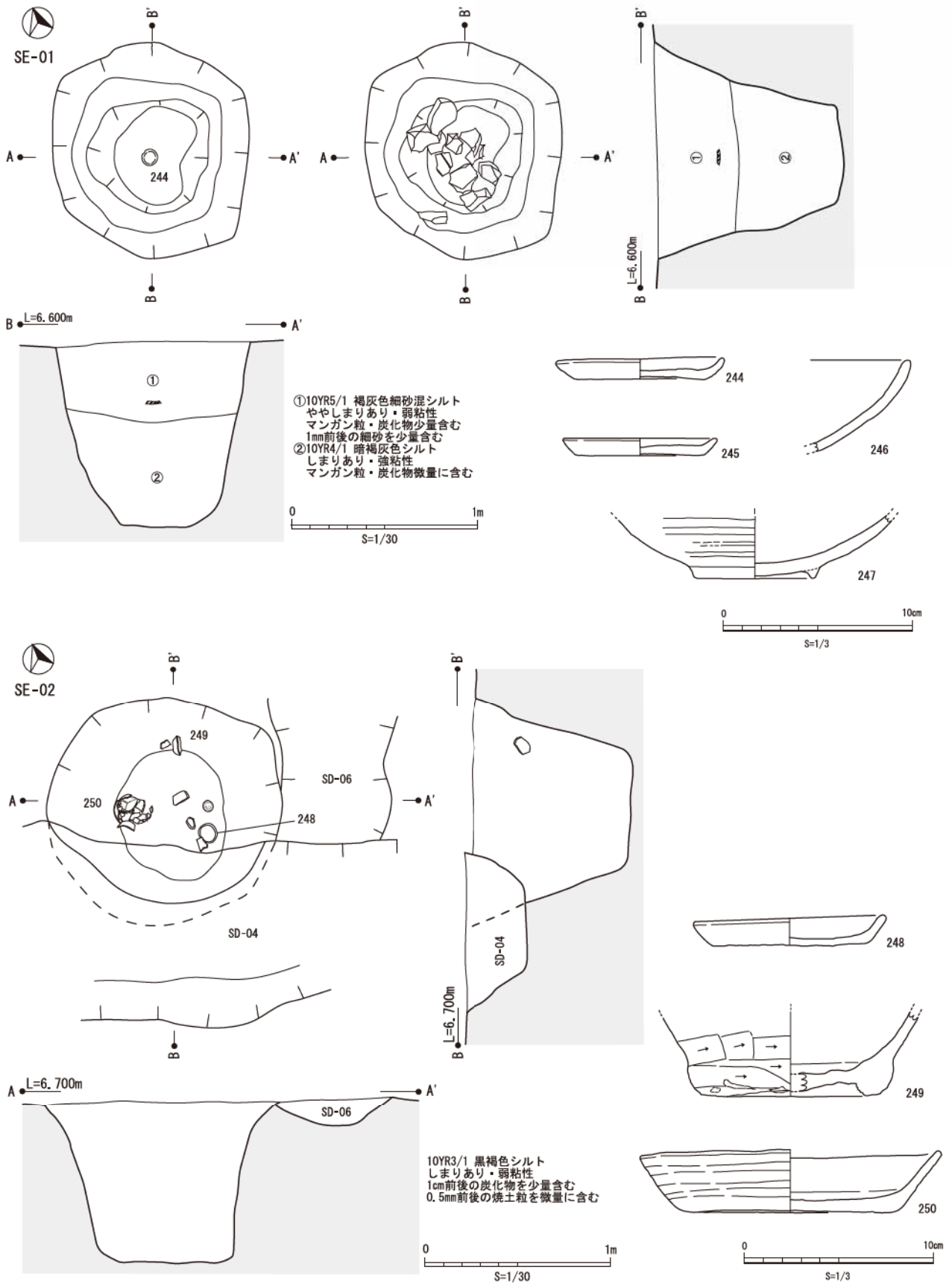
第 250 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-02 実測図



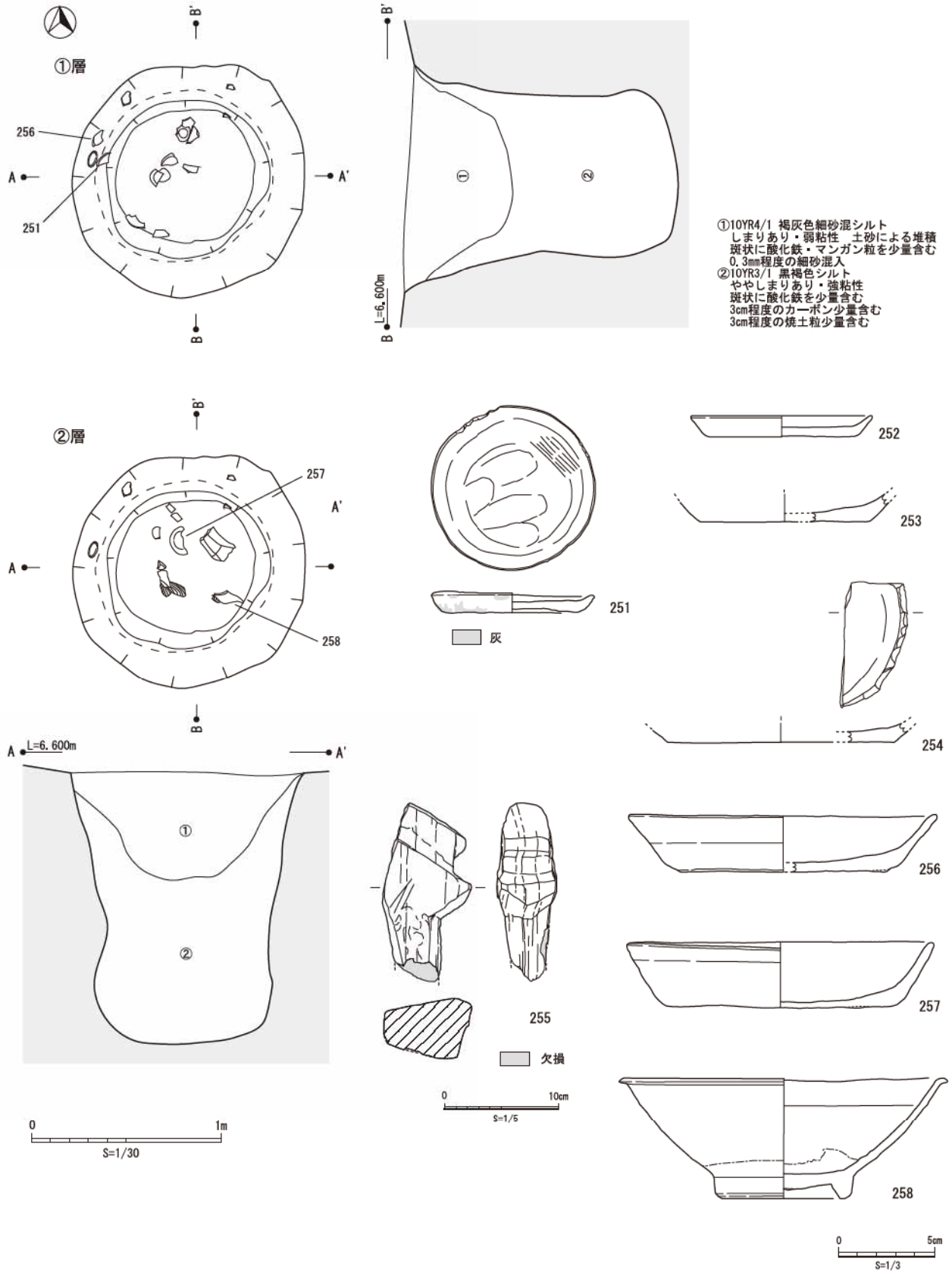
第 251 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SK-02 出土遺物実測図



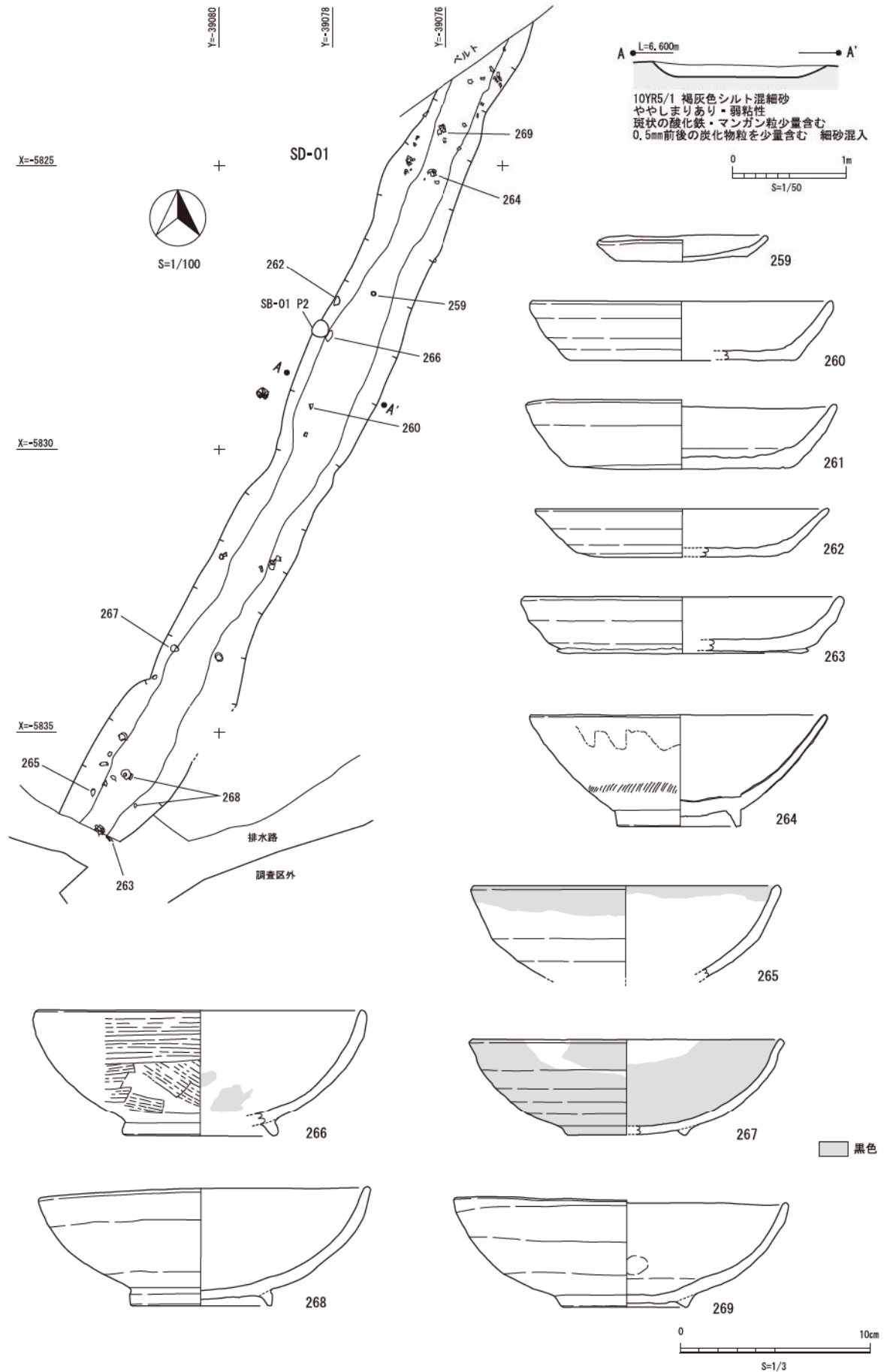
第 252 図 玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 実測図及び出土遺物実測図



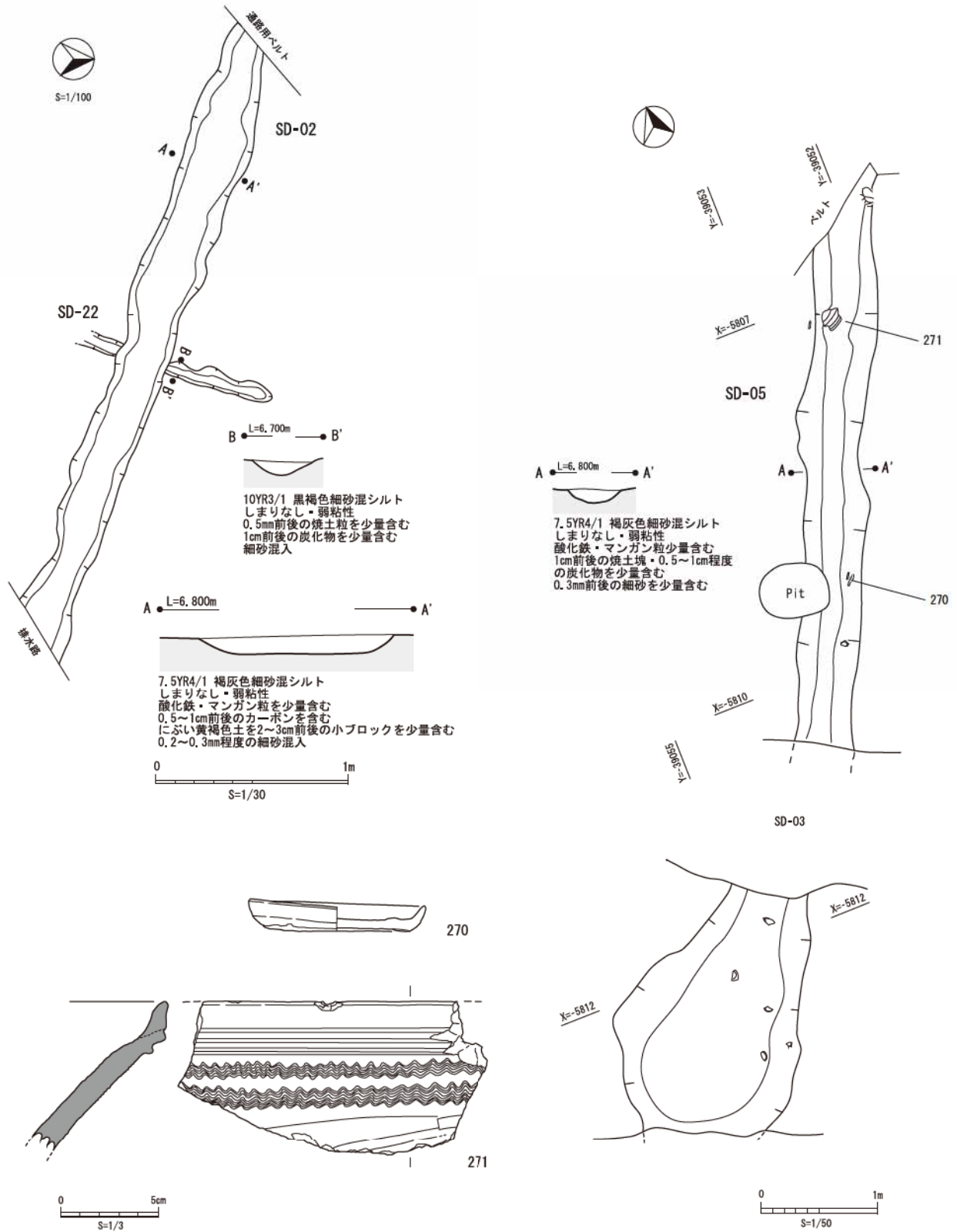
第 253 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SE-01・02 実測図及び出土遺物実測図



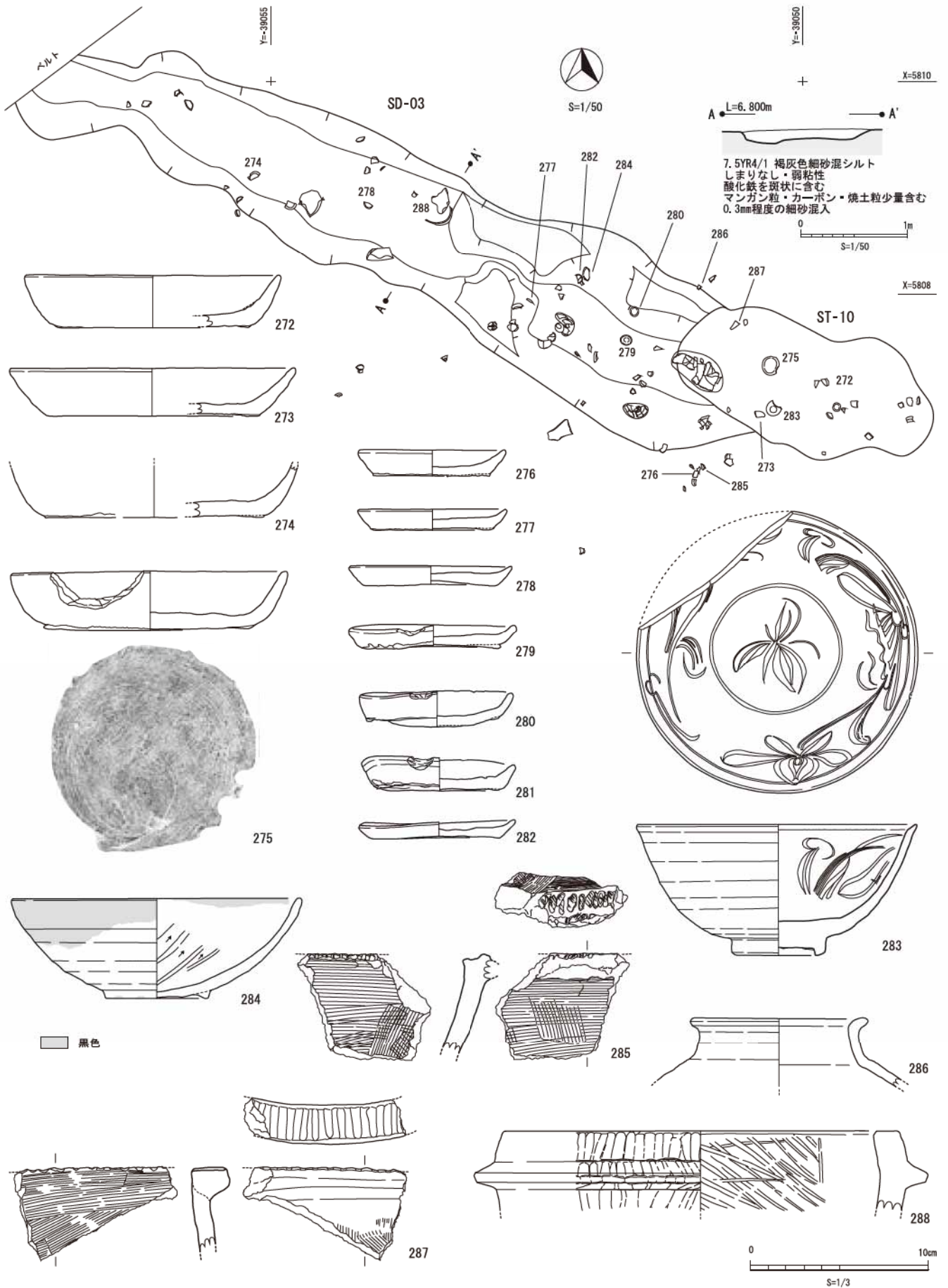
第 254 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SE-03 実測図及び出土遺物実測図



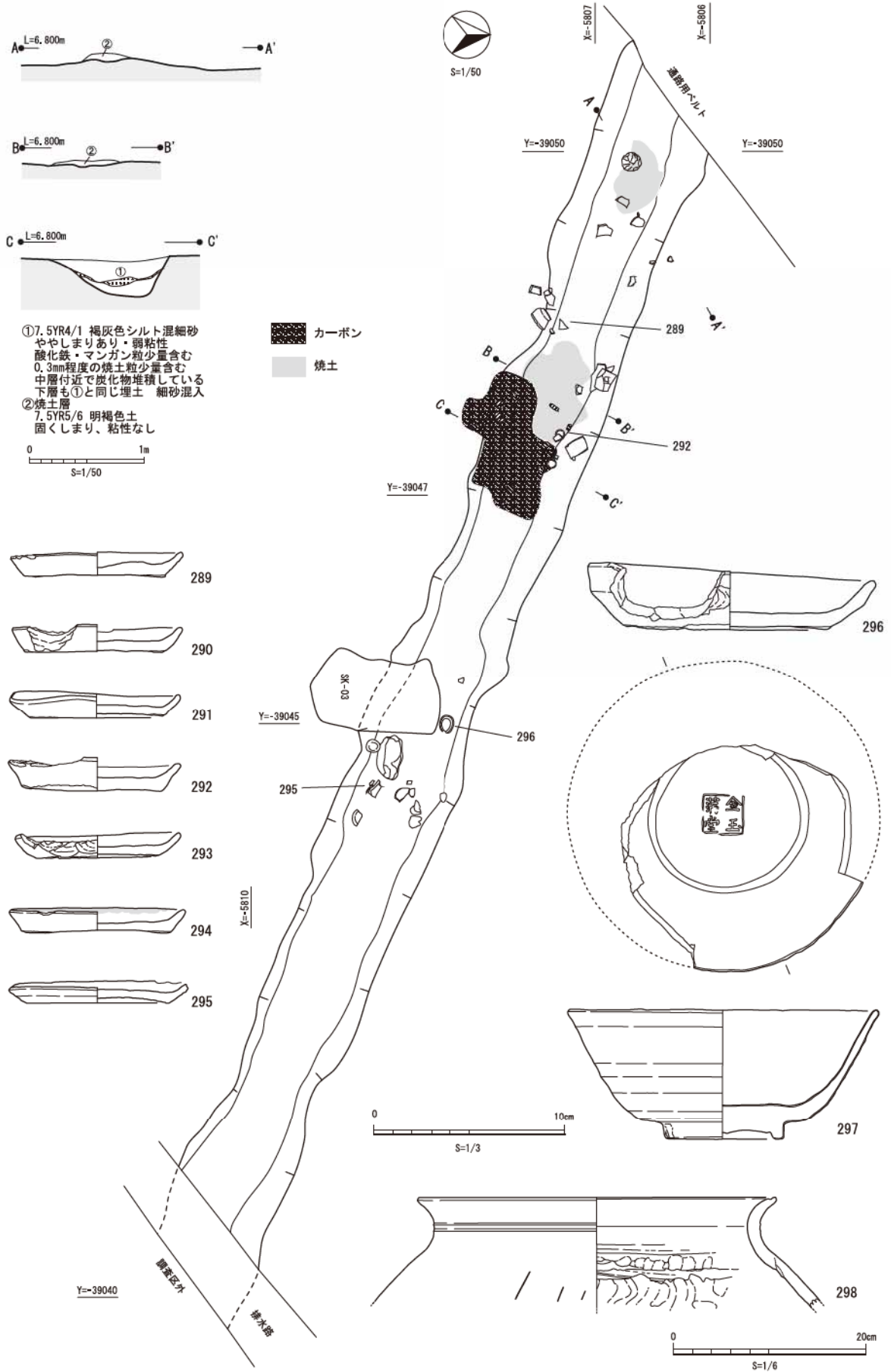
第 255 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-01 実測図及び出土遺物実測図



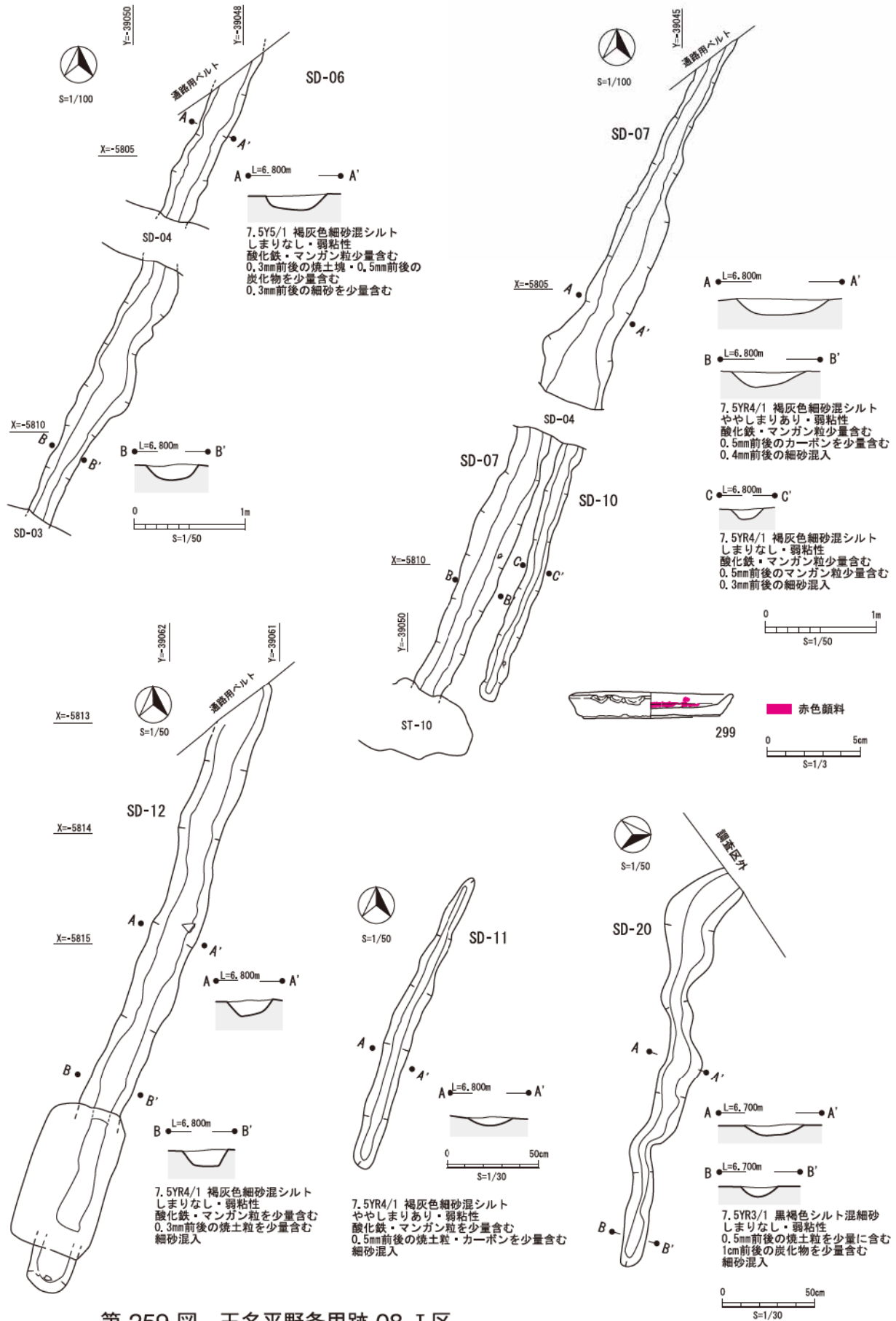
第 256 図 玉名平野条里跡 08- I 区 SD-02・05・22 実測図及び出土遺物実測図



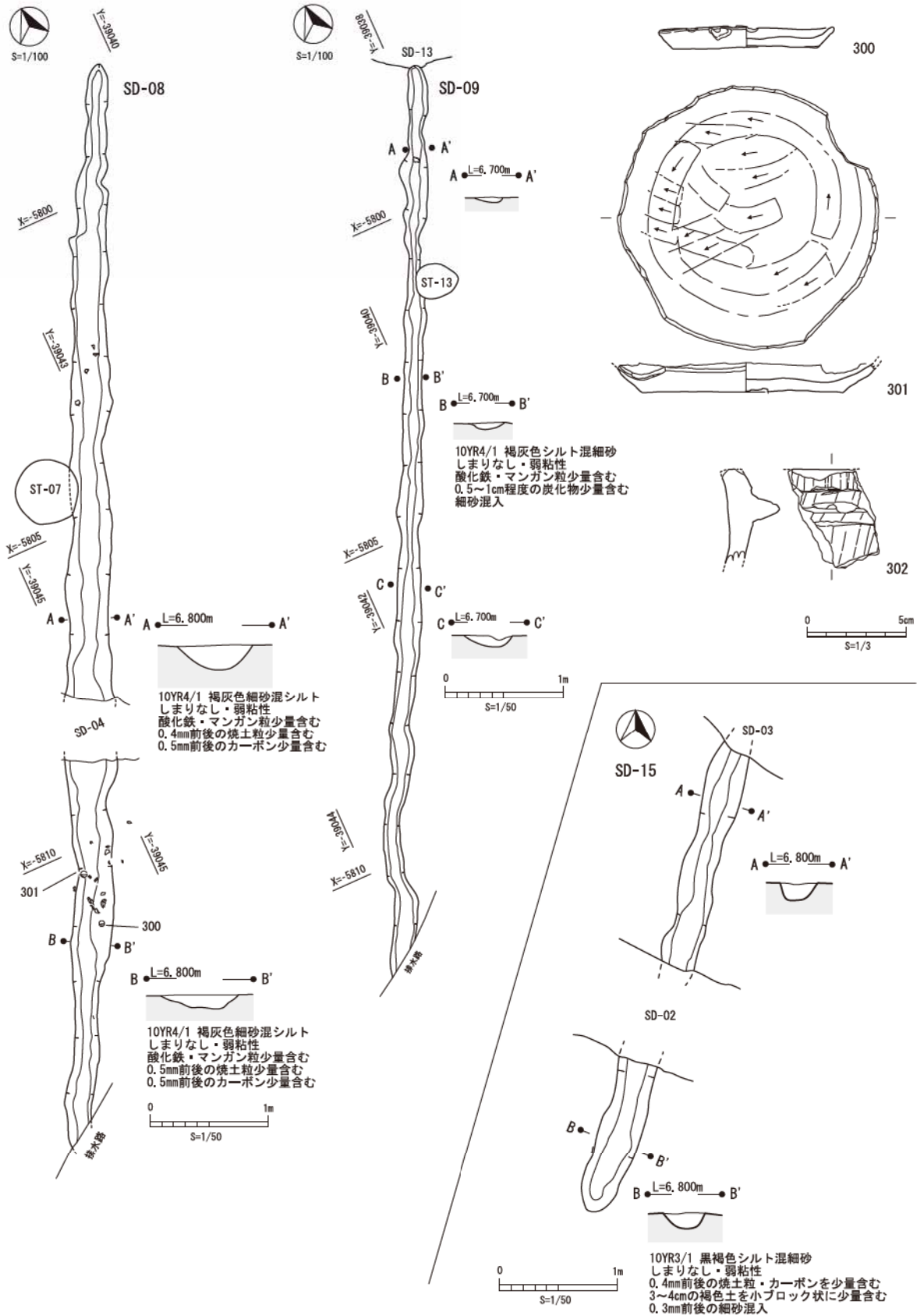
第 257 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-03・ST-10 実測図及び出土遺物実測図



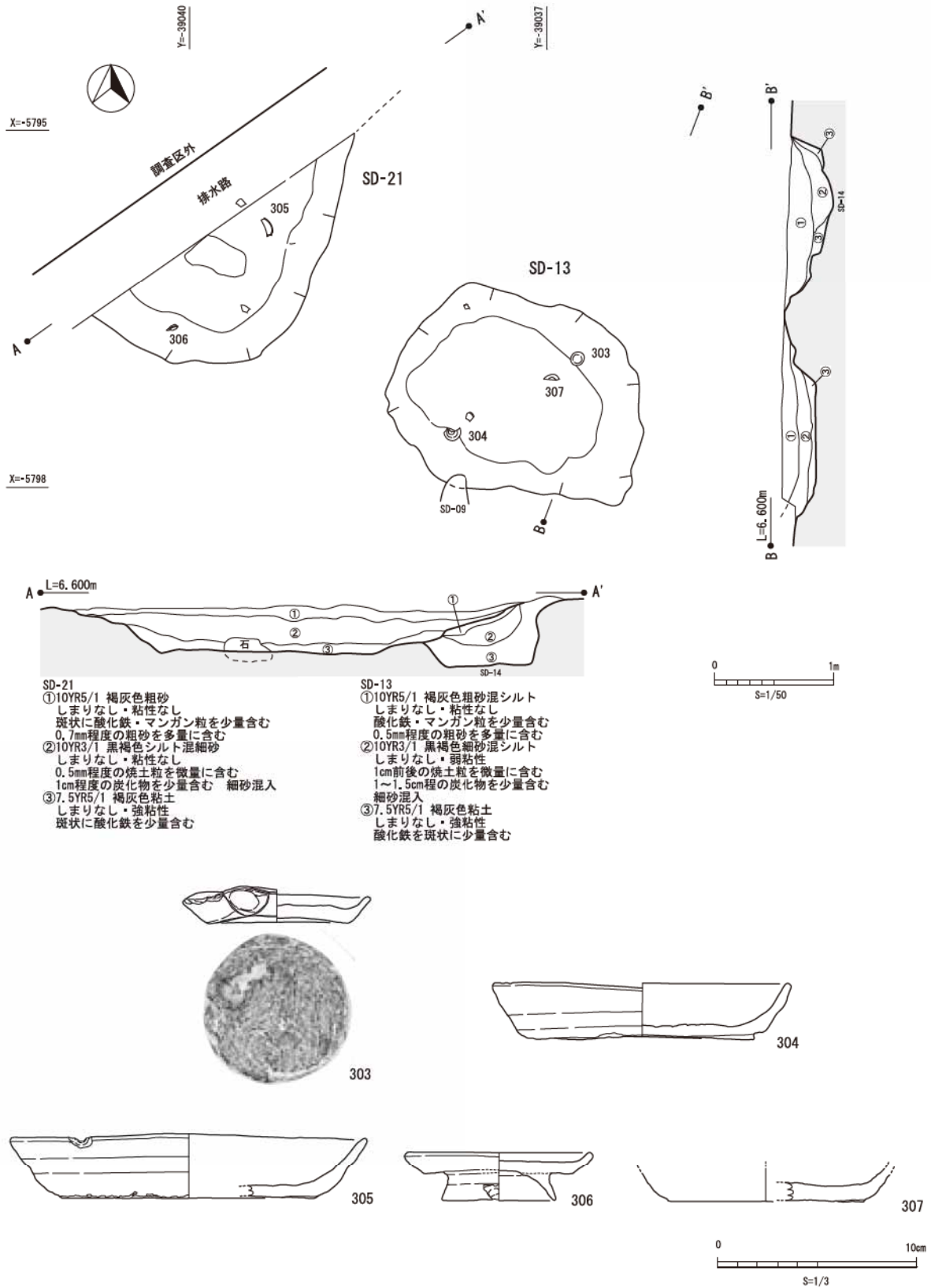
第 258 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-04 実測図及び出土遺物実測図



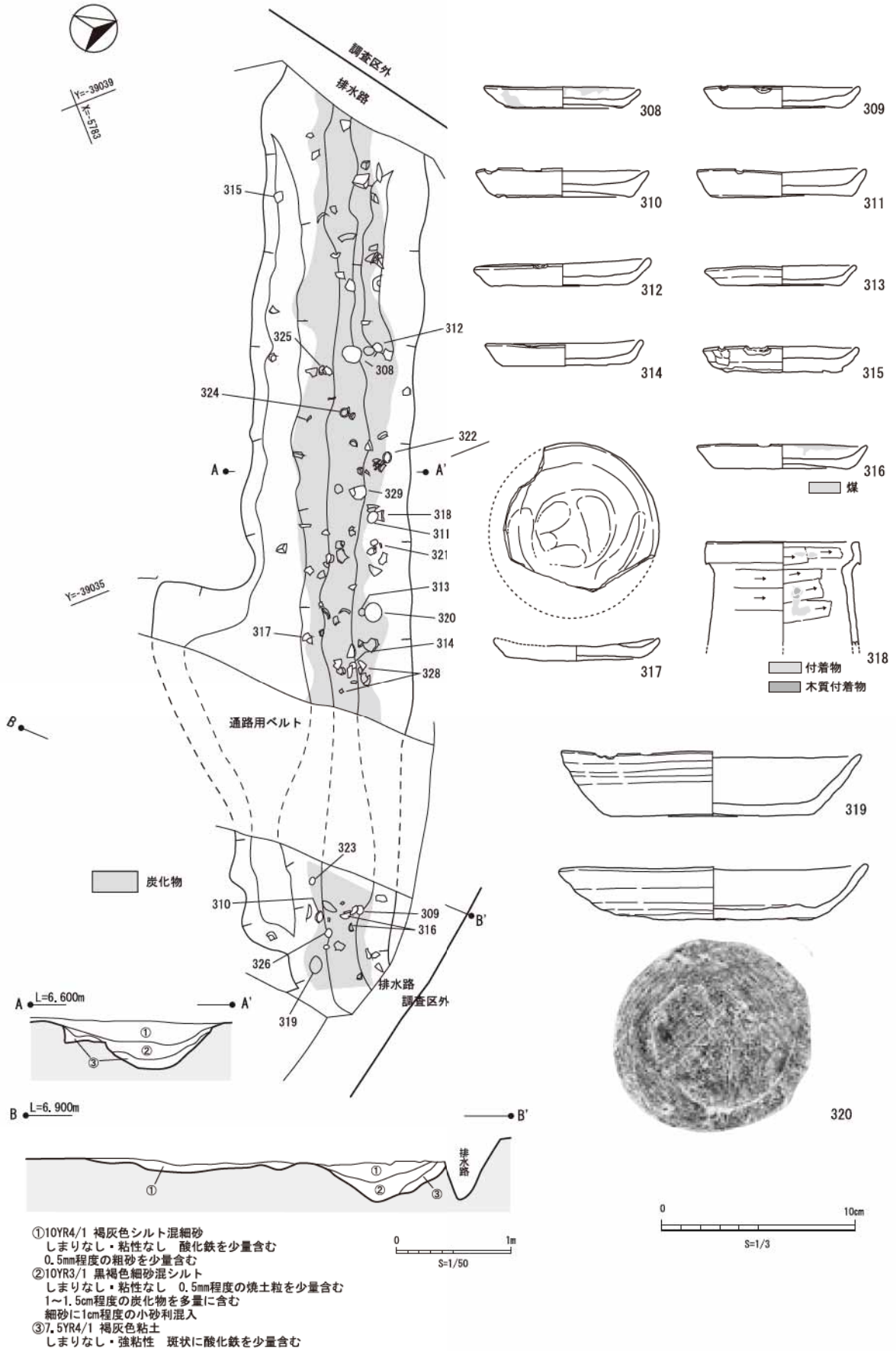
第 259 図 玉名平野条里跡 08-I 区
 SD-06・07・10～12・20 実測図及び出土遺物実測図



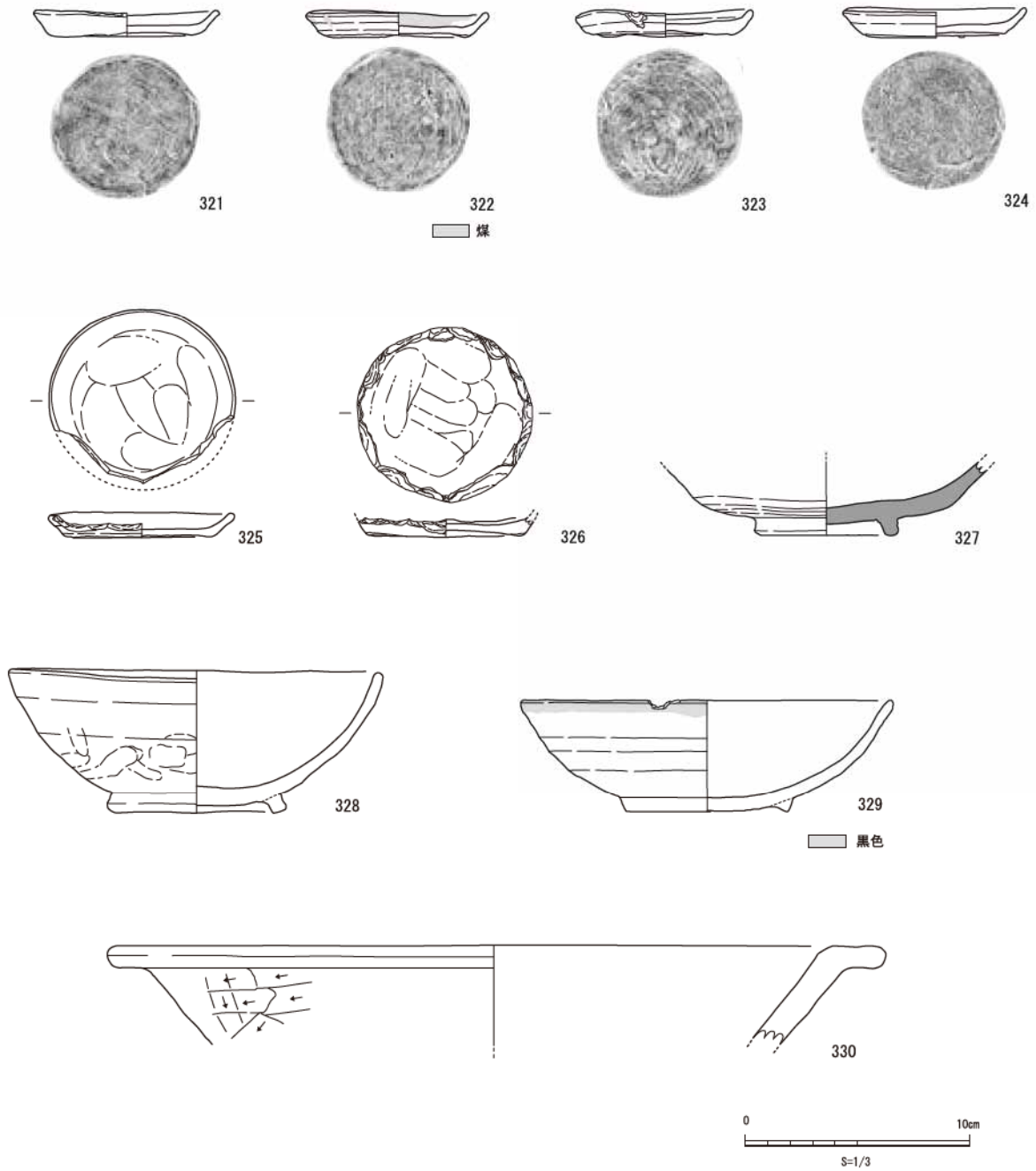
第 260 図 玉名平野条里跡 08- I 区 SD-08・09・15 実測図及び出土遺物実測図



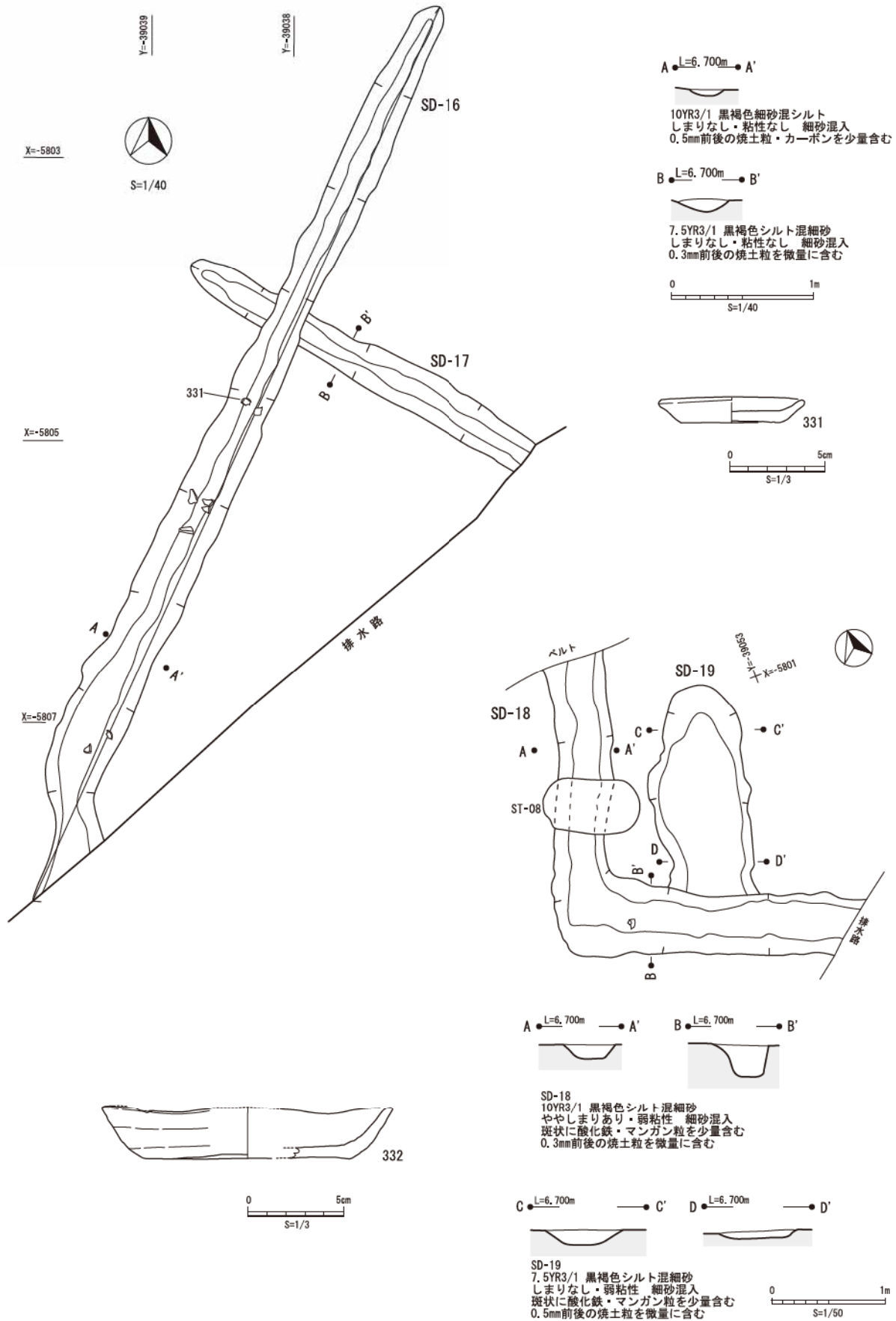
第 261 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-13・21 実測図及び出土遺物実測図



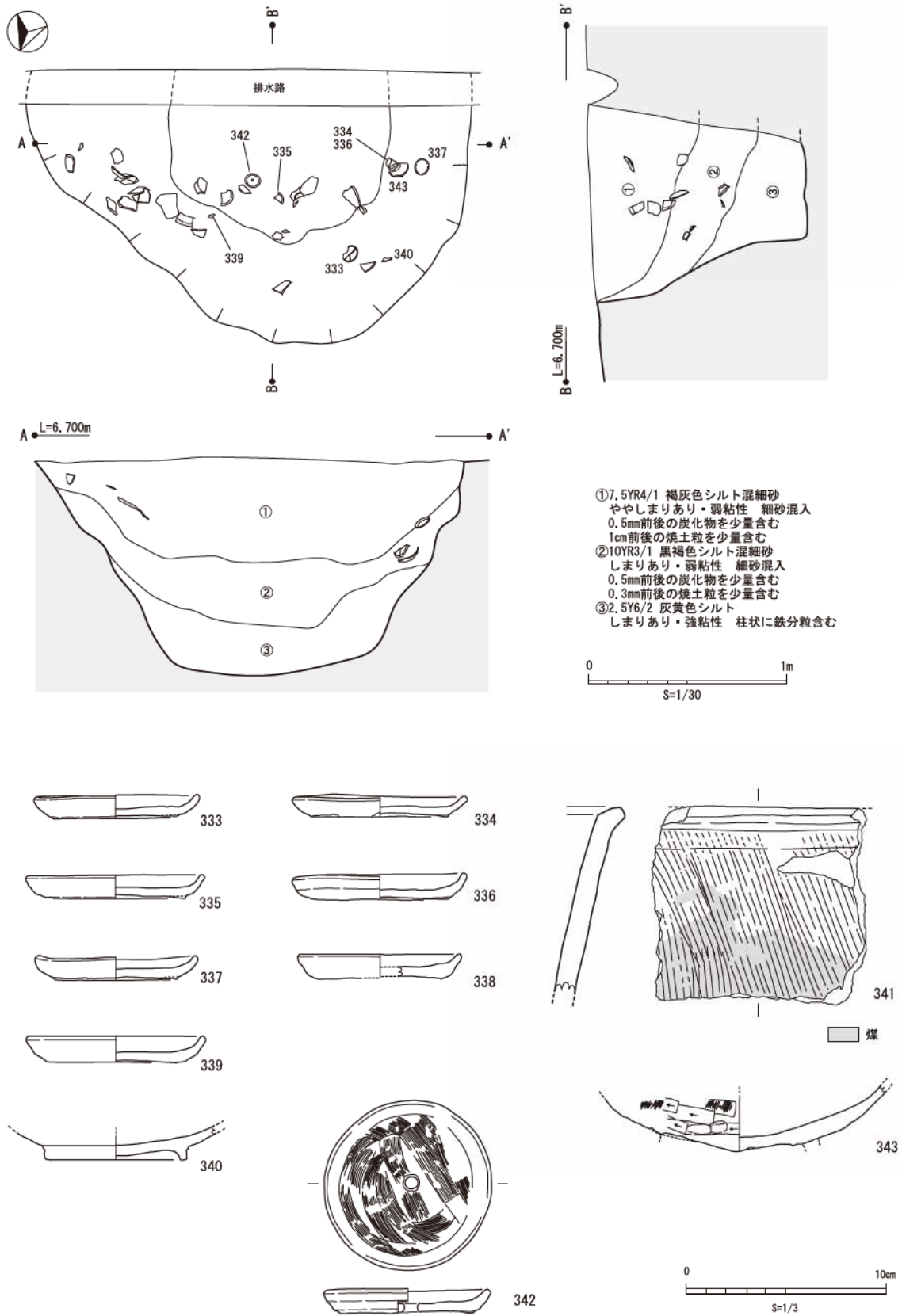
第 262 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-14 実測図及び出土遺物実測図



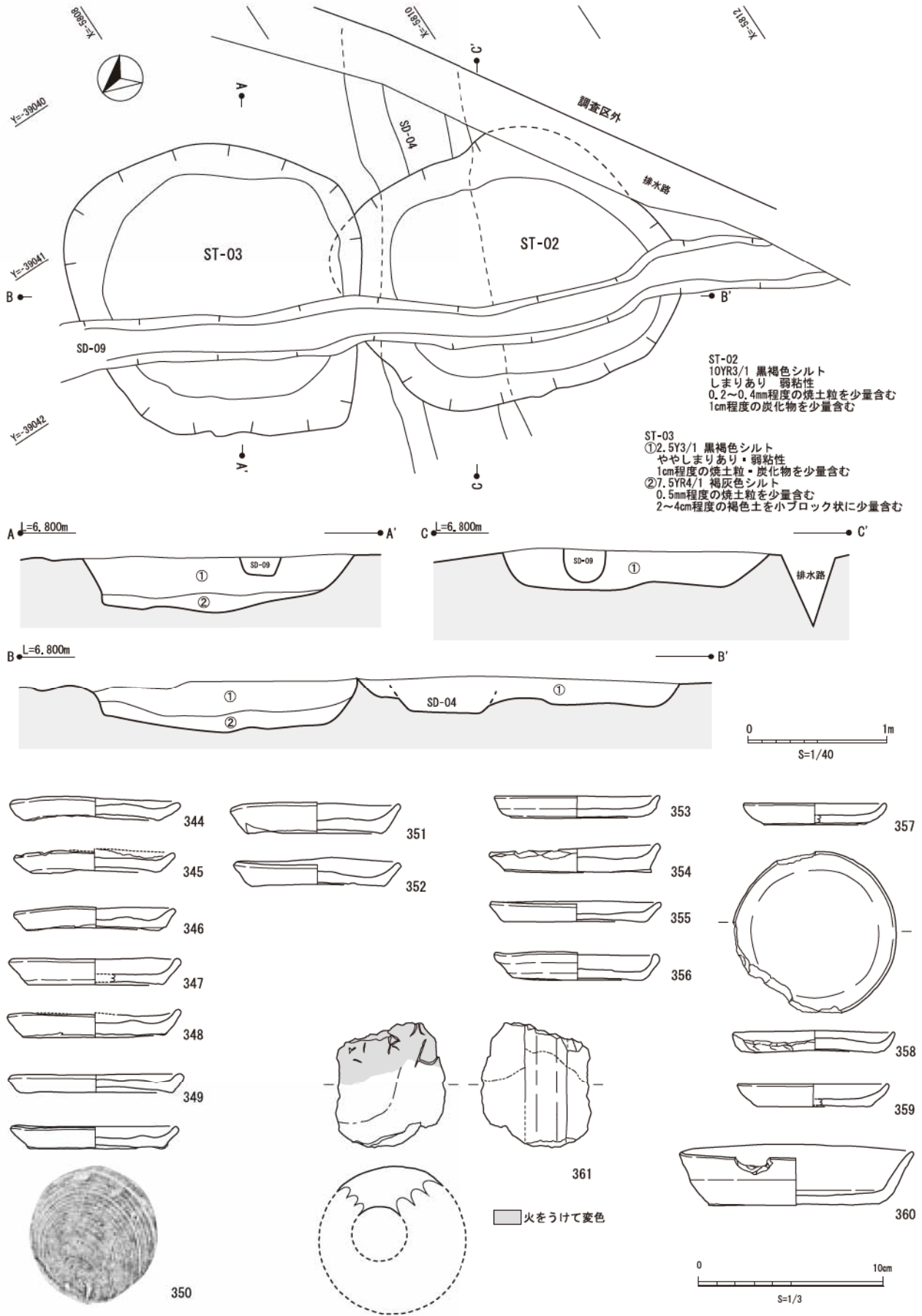
第 263 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-14 出土遺物実測図



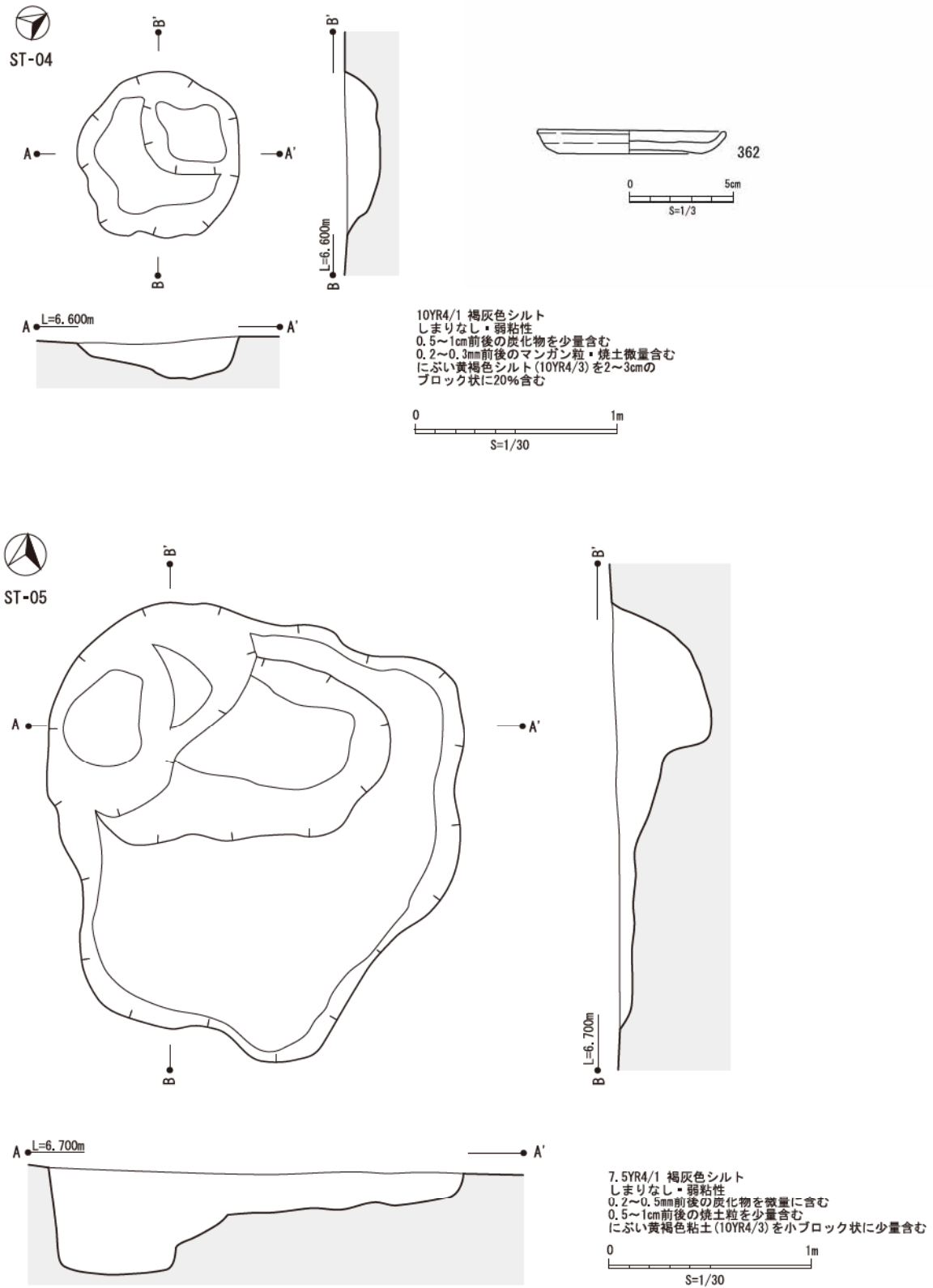
第 264 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SD-16~19 実測図及び出土遺物実測図



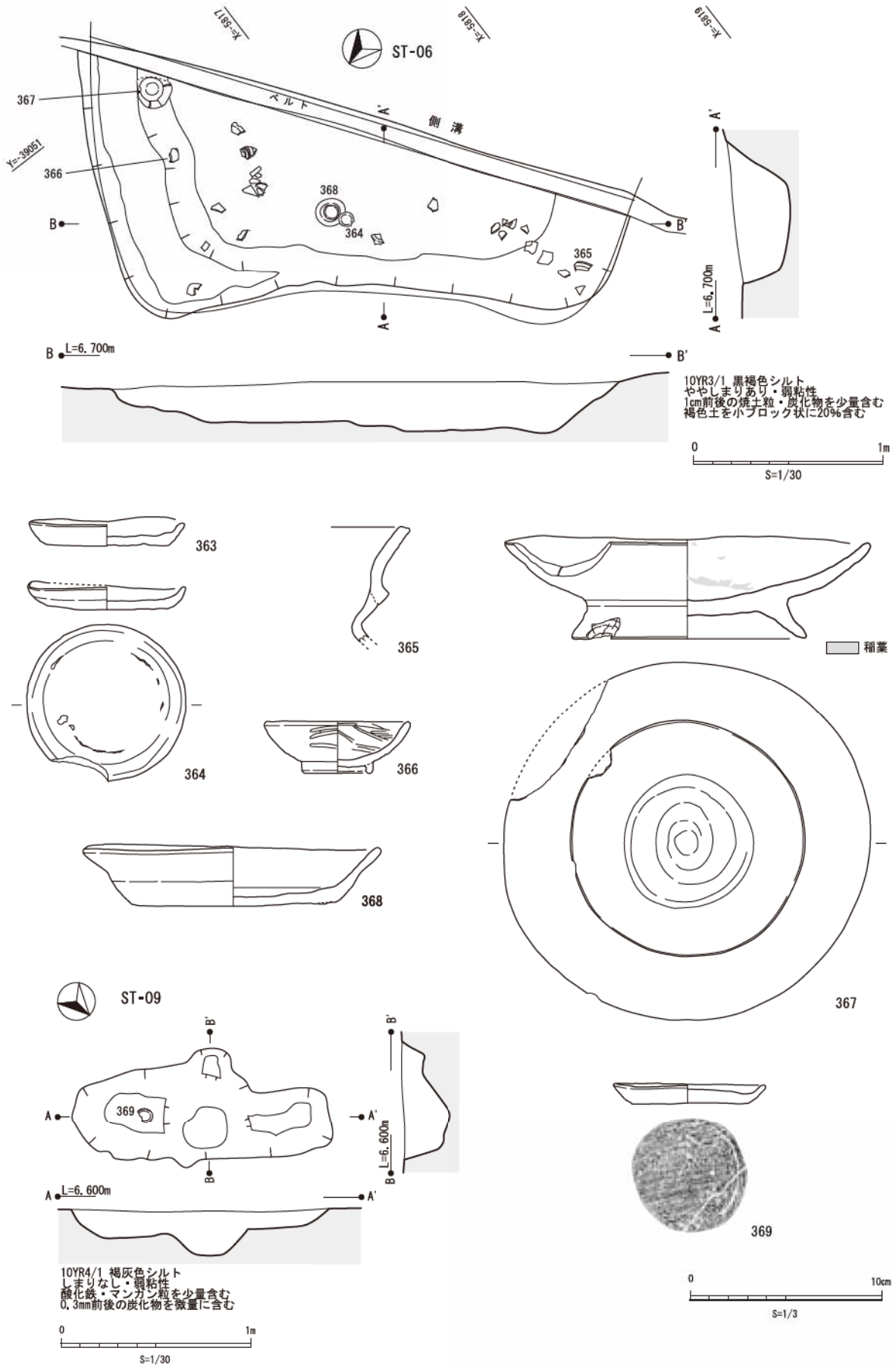
第 265 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-01 実測図及び出土遺物実測図



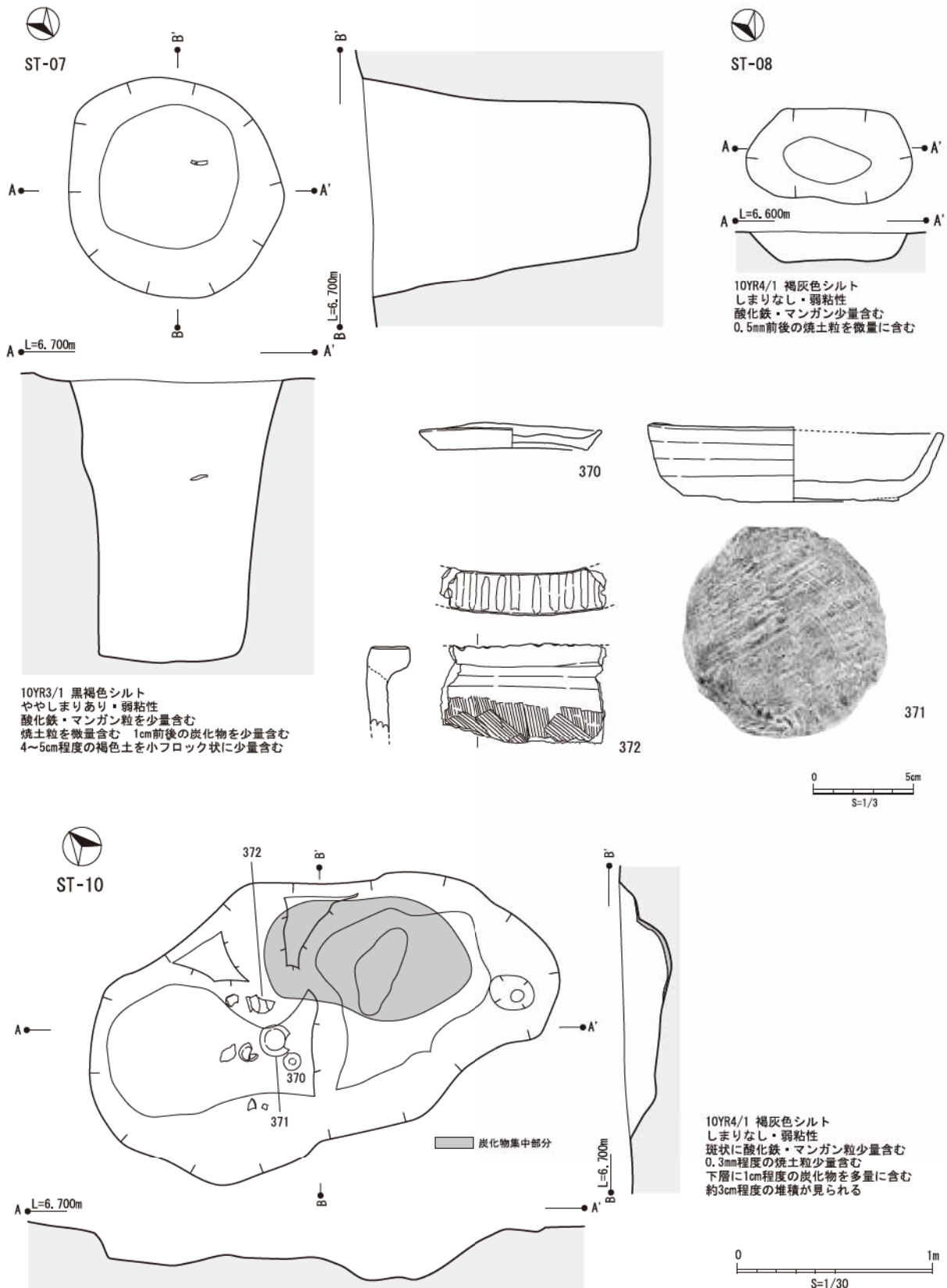
第 266 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-02・03 実測図及び出土遺物実測図



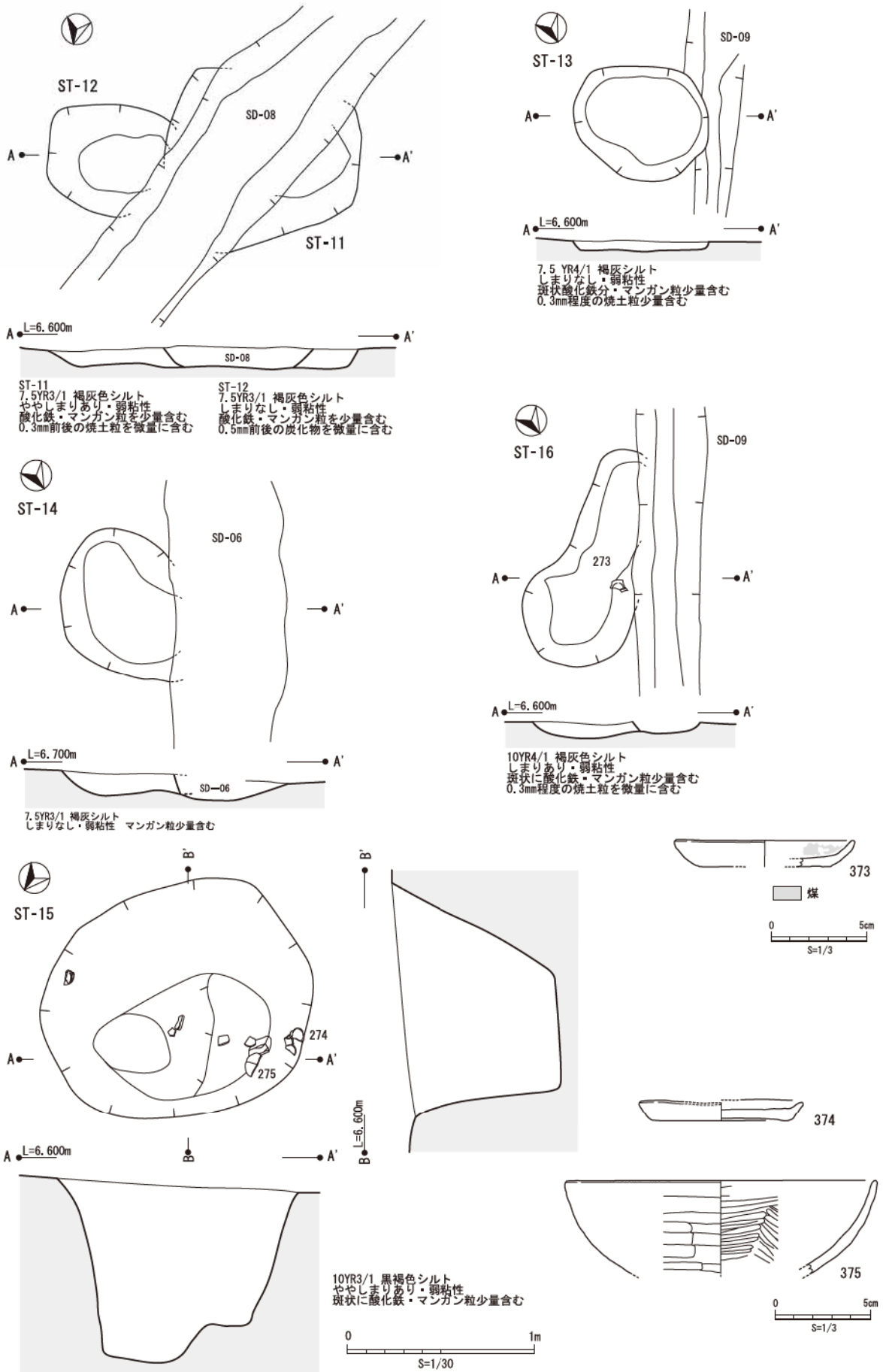
第 267 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-04・05 実測図及び出土遺物実測図



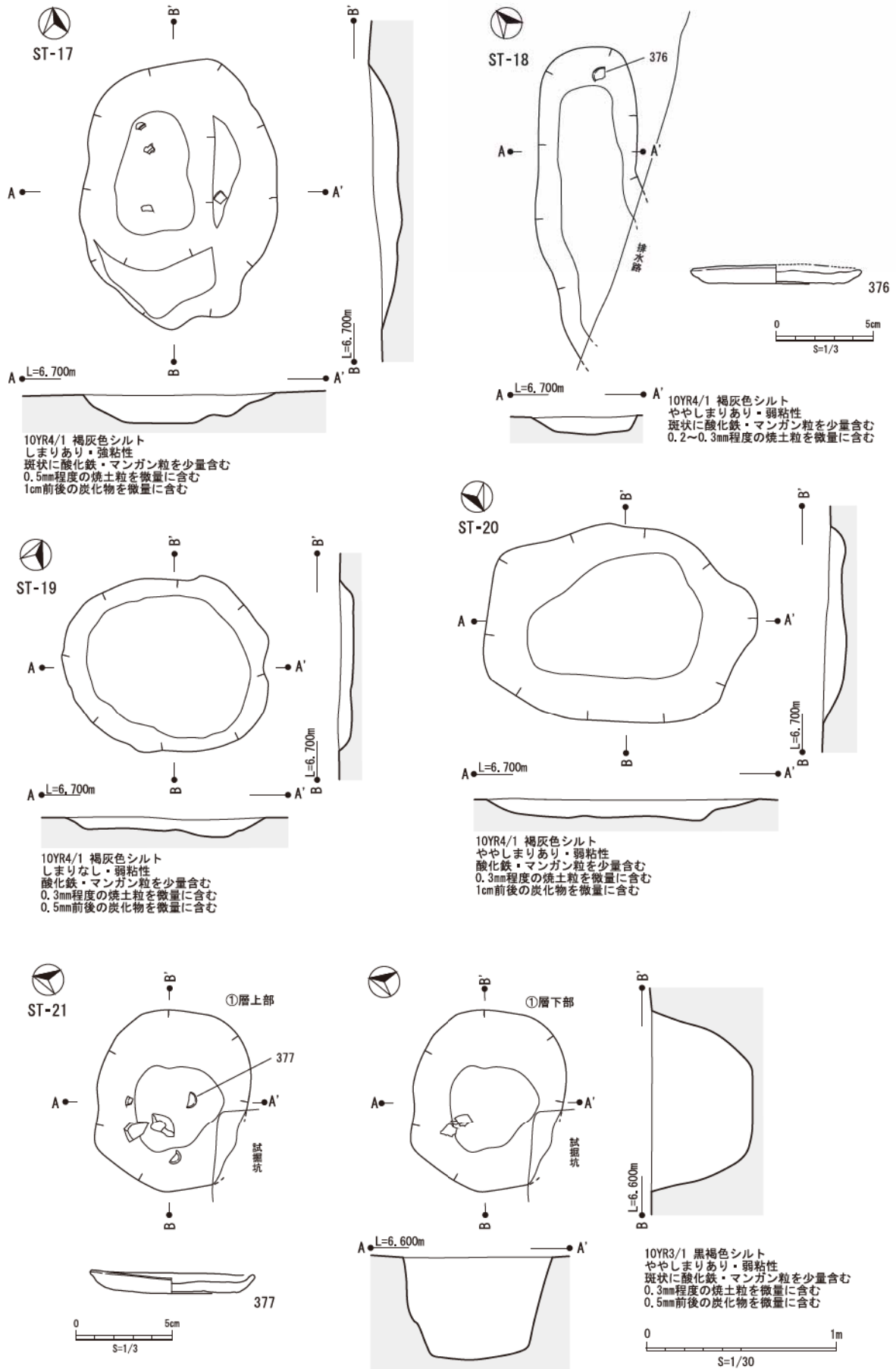
第 268 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-06・09 実測図及び出土遺物実測図



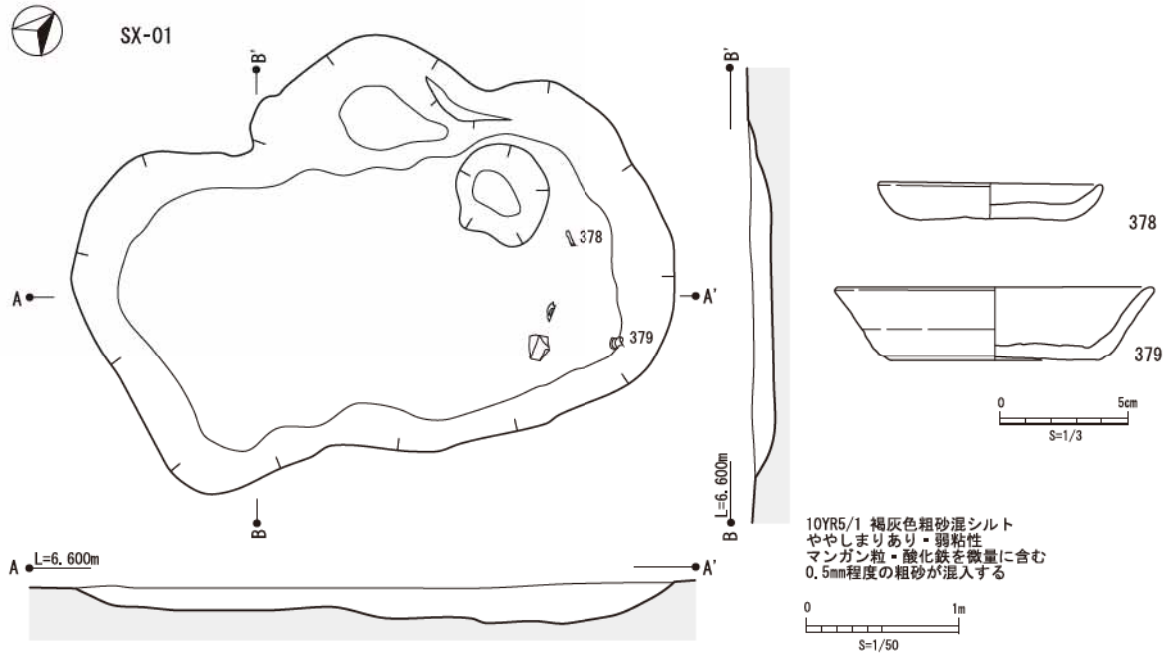
第 269 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-07・08・10 実測図及び出土遺物実測図



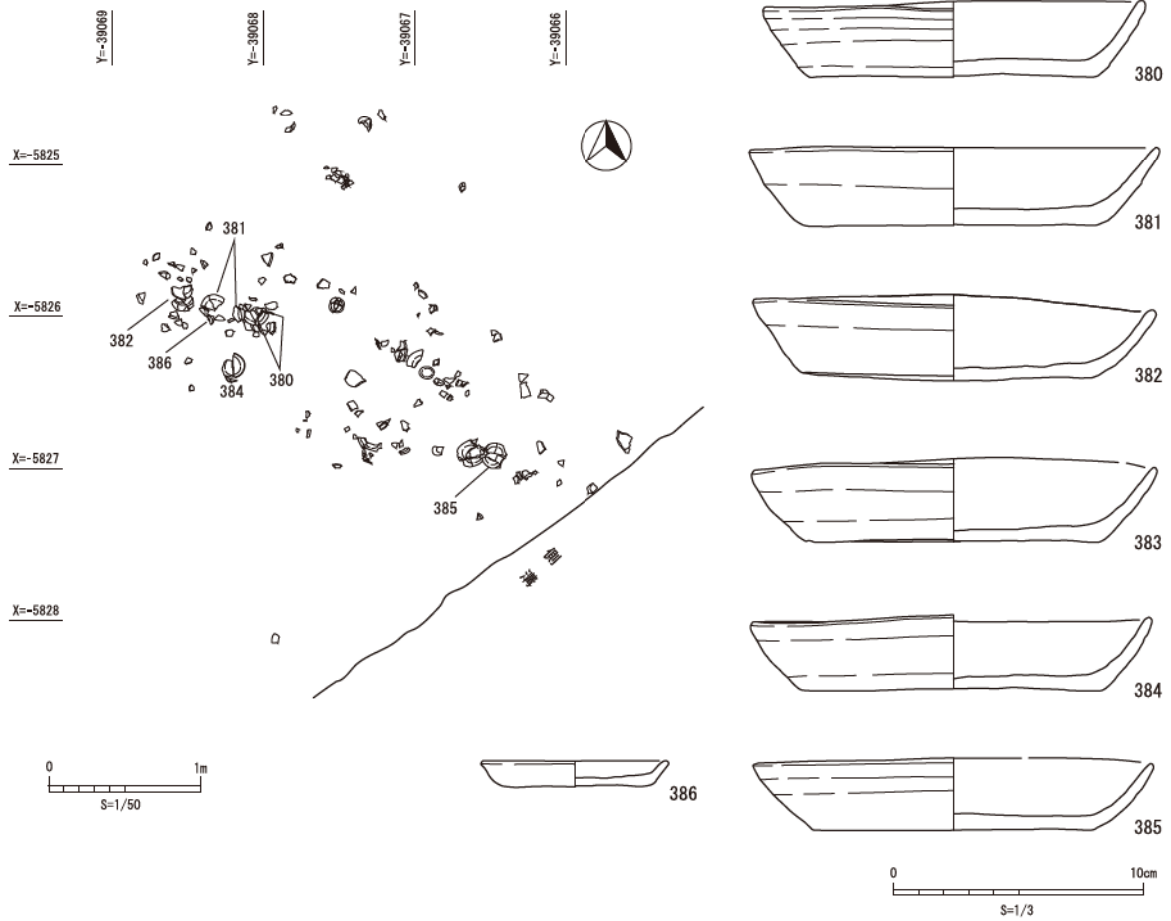
第 270 図 玉名平野条里跡 08-I 区 ST-11~16 実測図及び出土遺物実測図



第 271 図 玉名平野条里跡 08- I 区 ST-17~21 実測図及び出土遺物実測図

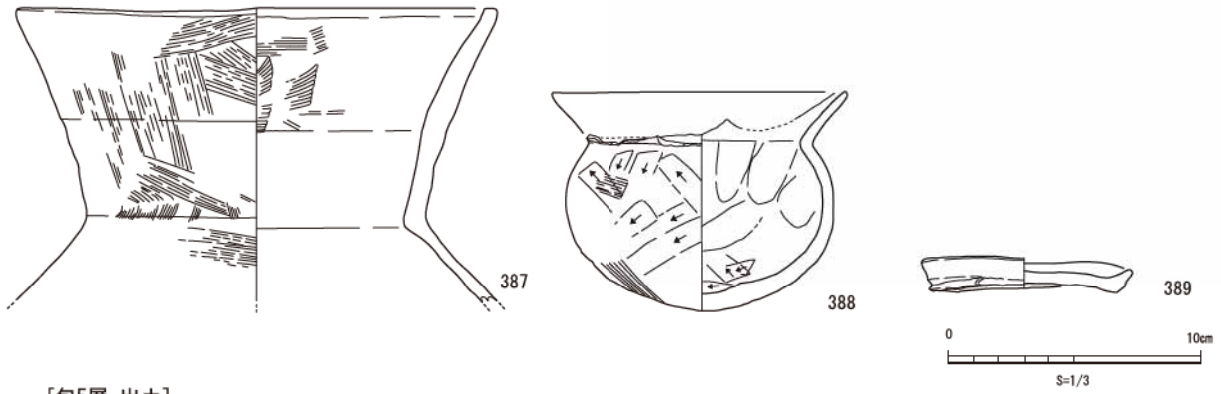


SX-02 F-9グリッド遺物出土状況

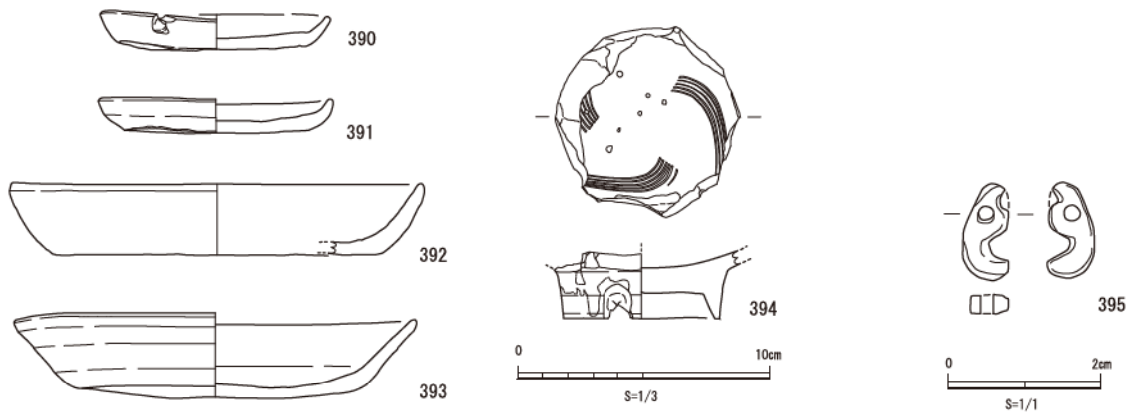


第 272 図 玉名平野条里跡 08-I 区 SX-01・02 実測図及び出土遺物実測図

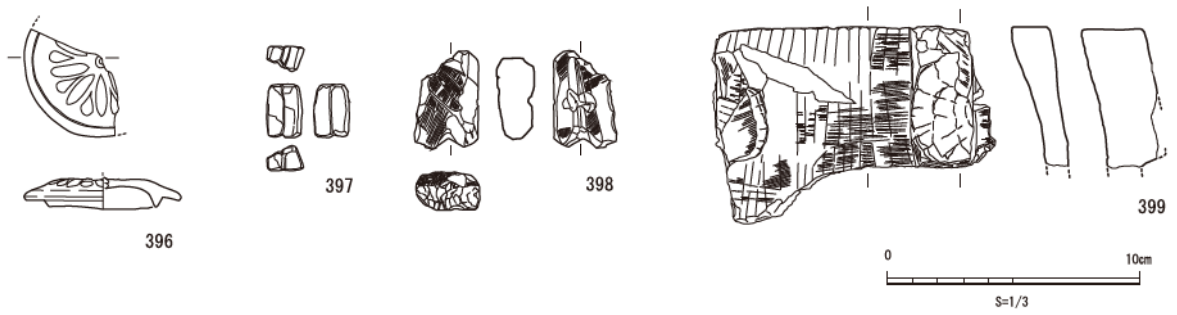
[包4層 出土]



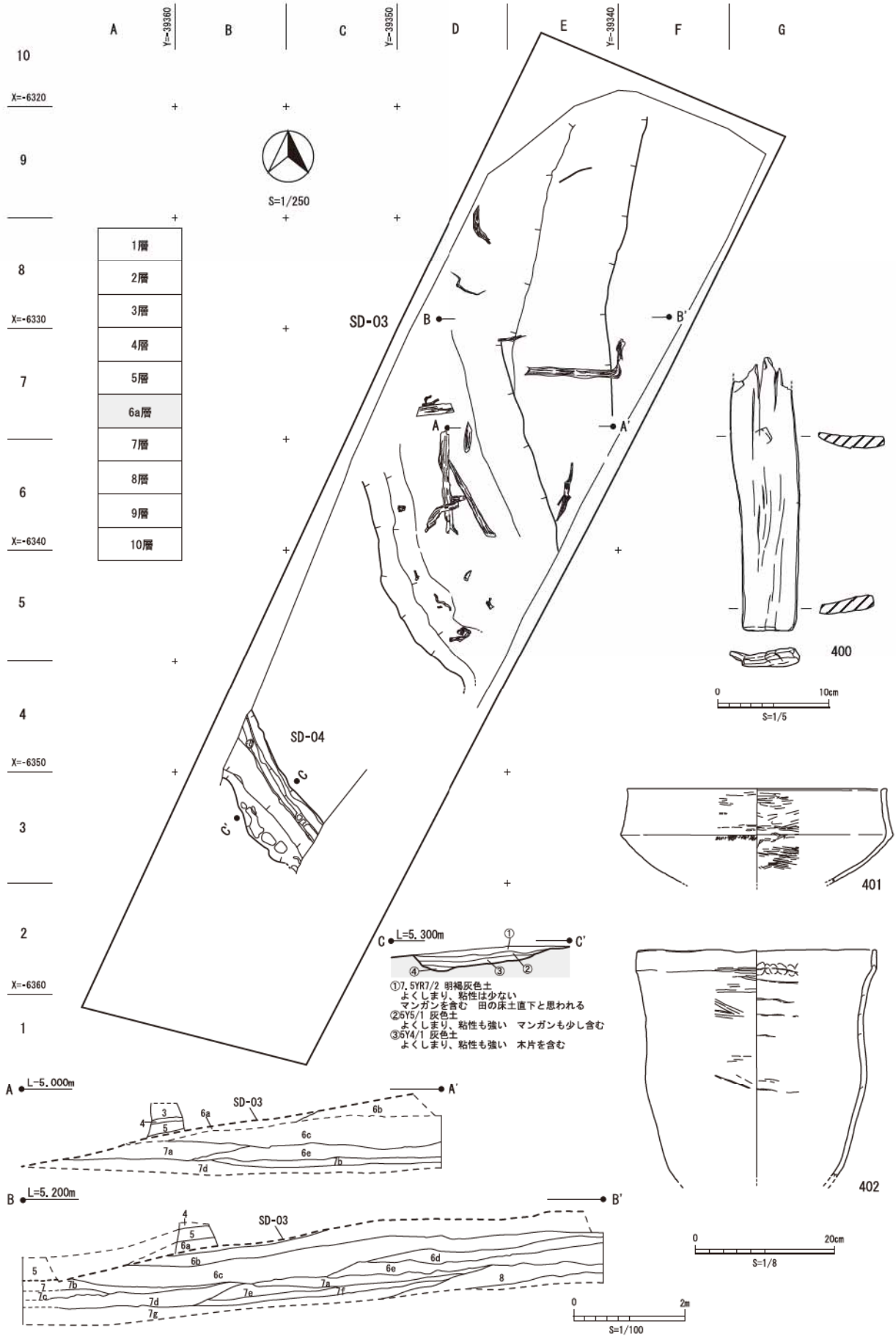
[包5層 出土]



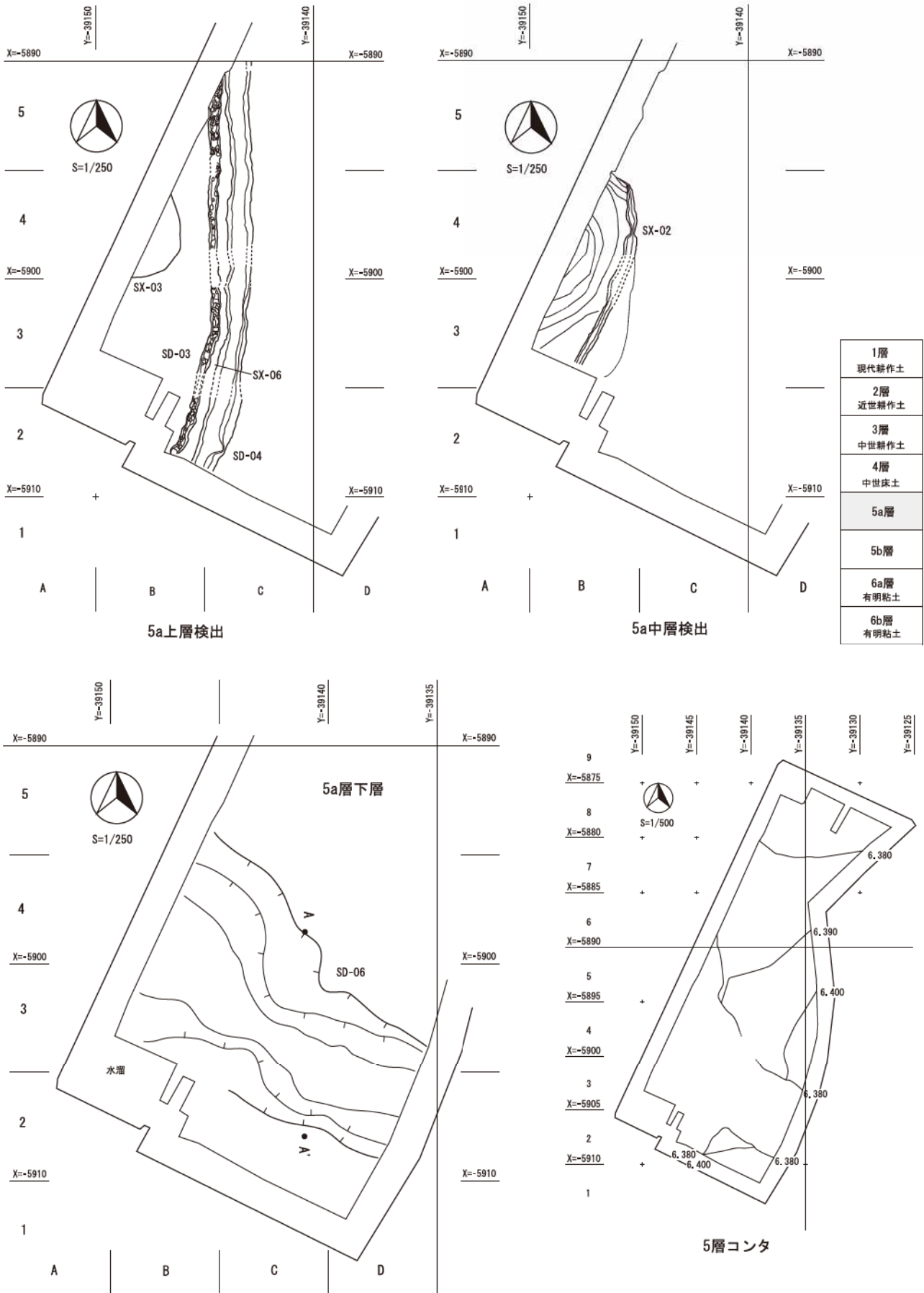
[調査区一活]



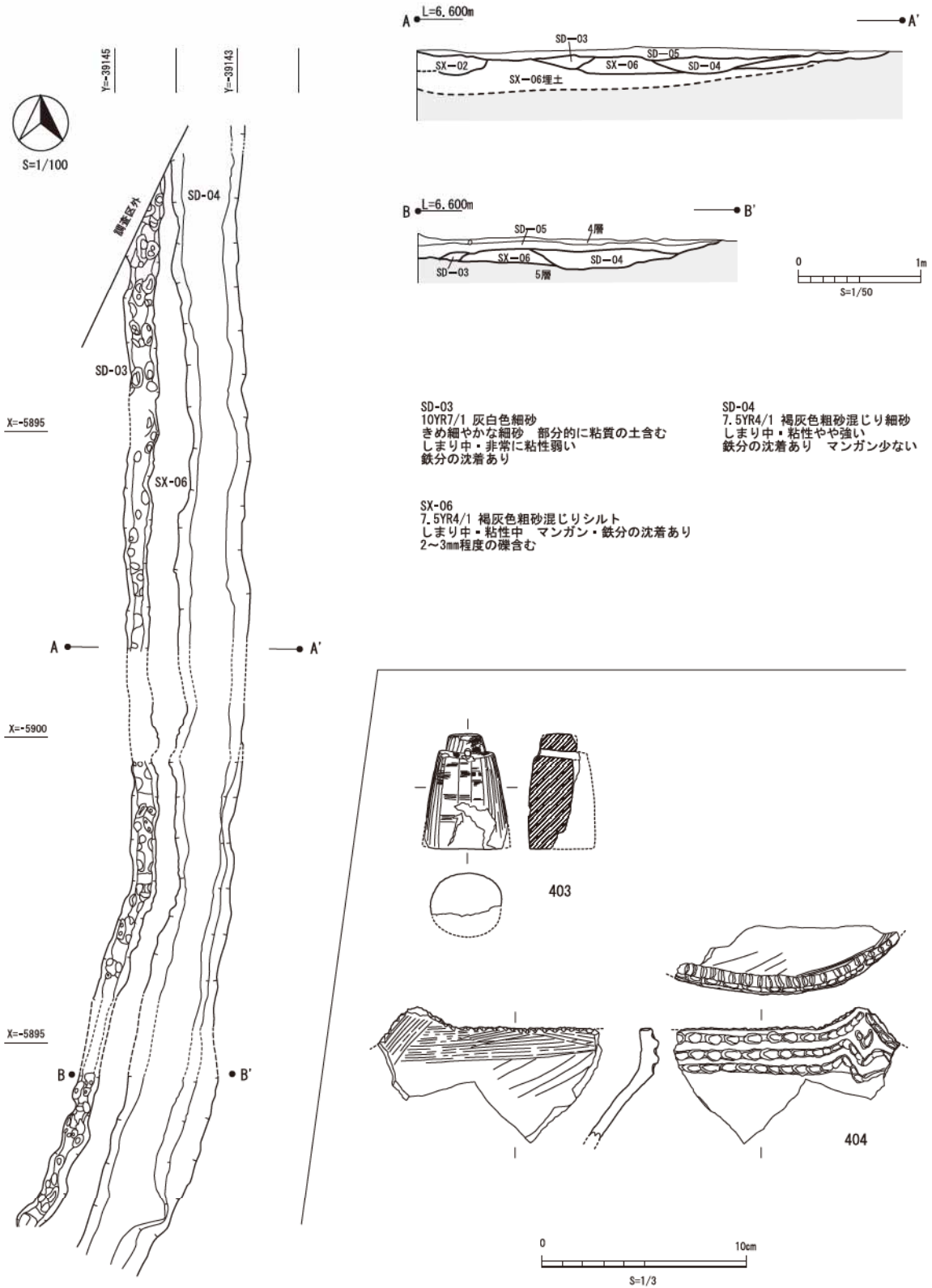
第 273 図 玉名平野条里跡 08-I 区 包 4・5 層・調査区 一括出土遺物実測図



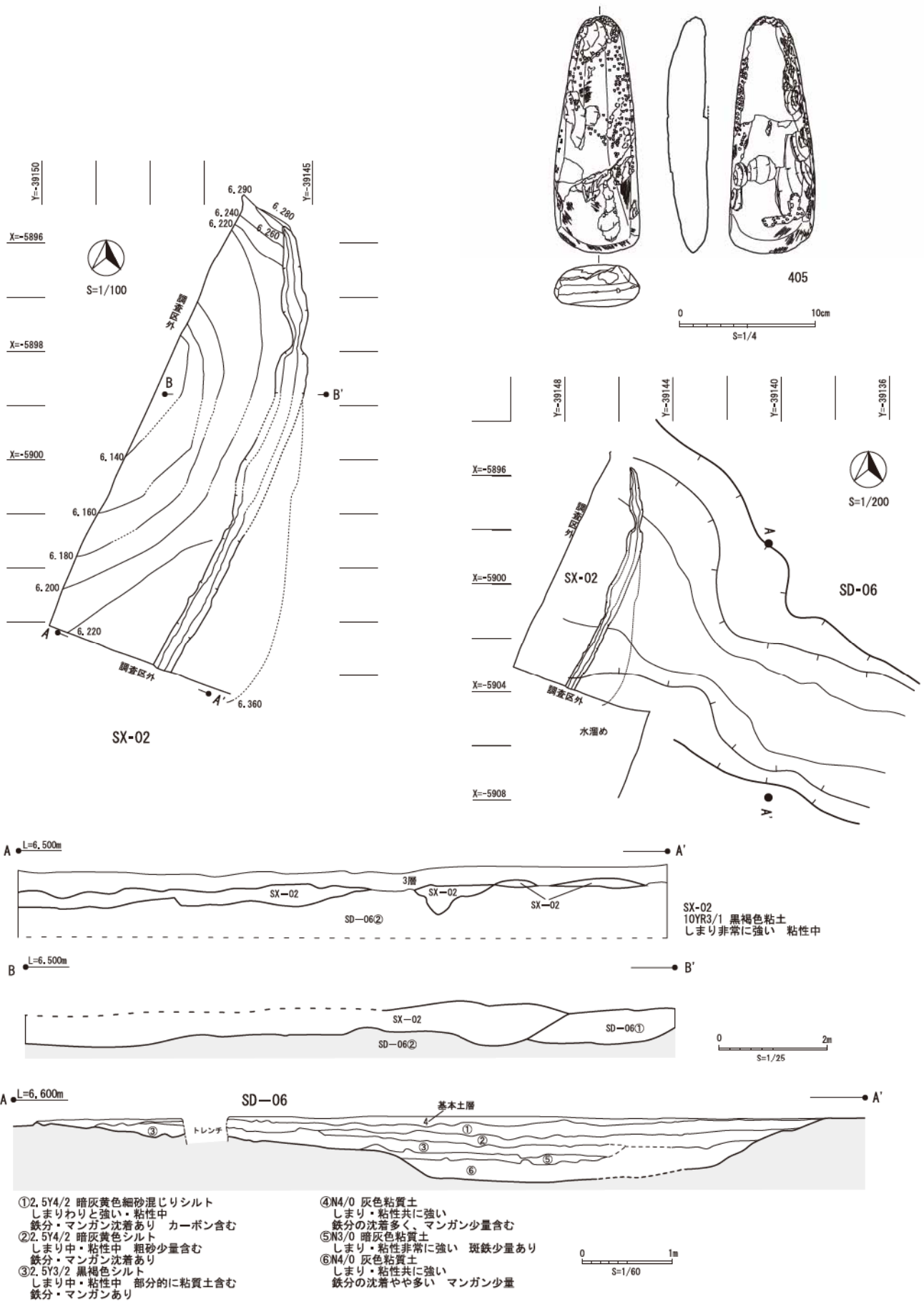
第 274 図 玉名平野条里跡 02-II 区 遺構配置図及び出土遺物実測図



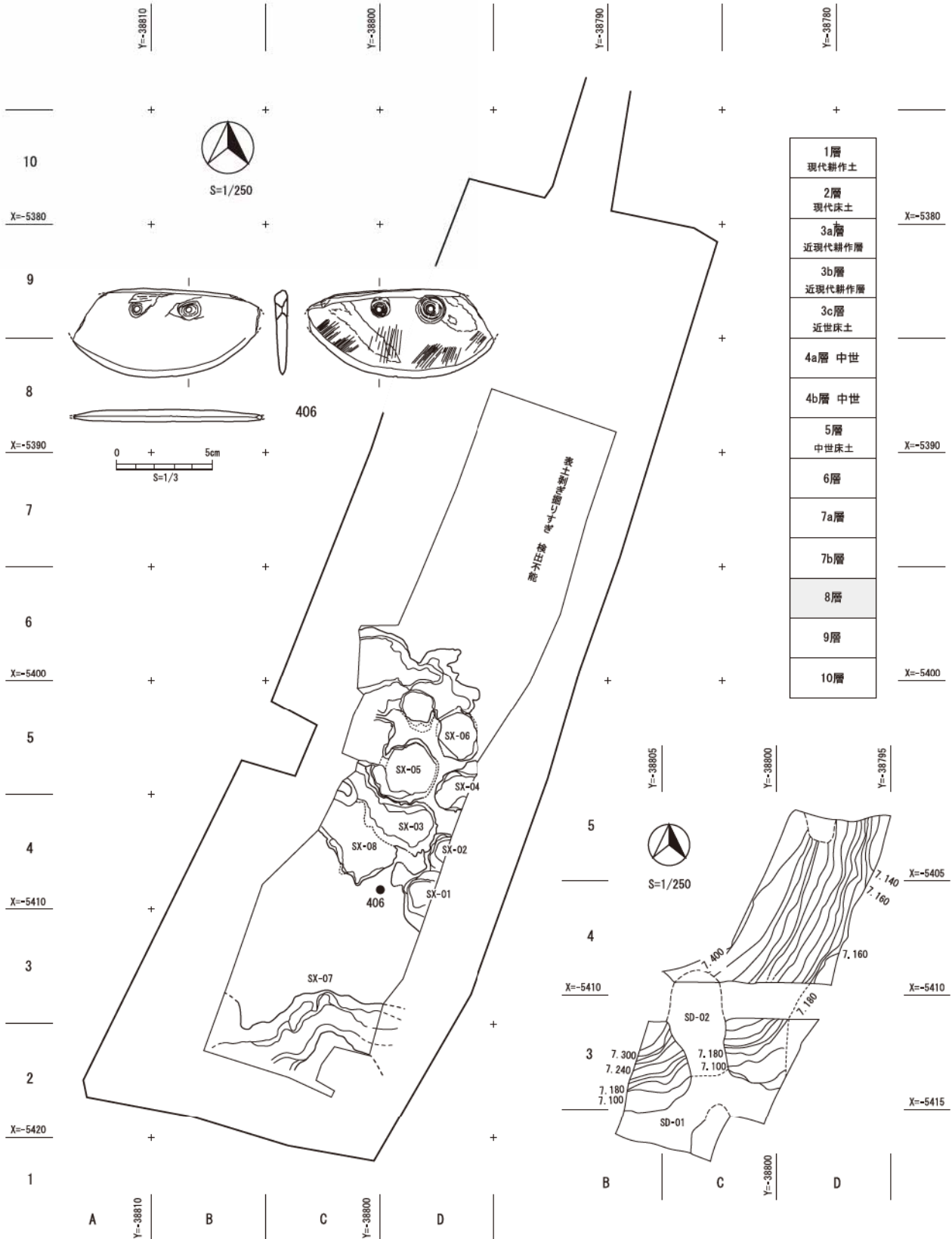
第 275 図 玉名平野条里跡 07-I 区 5a 層遺構配置図及び 5 層コンタ図



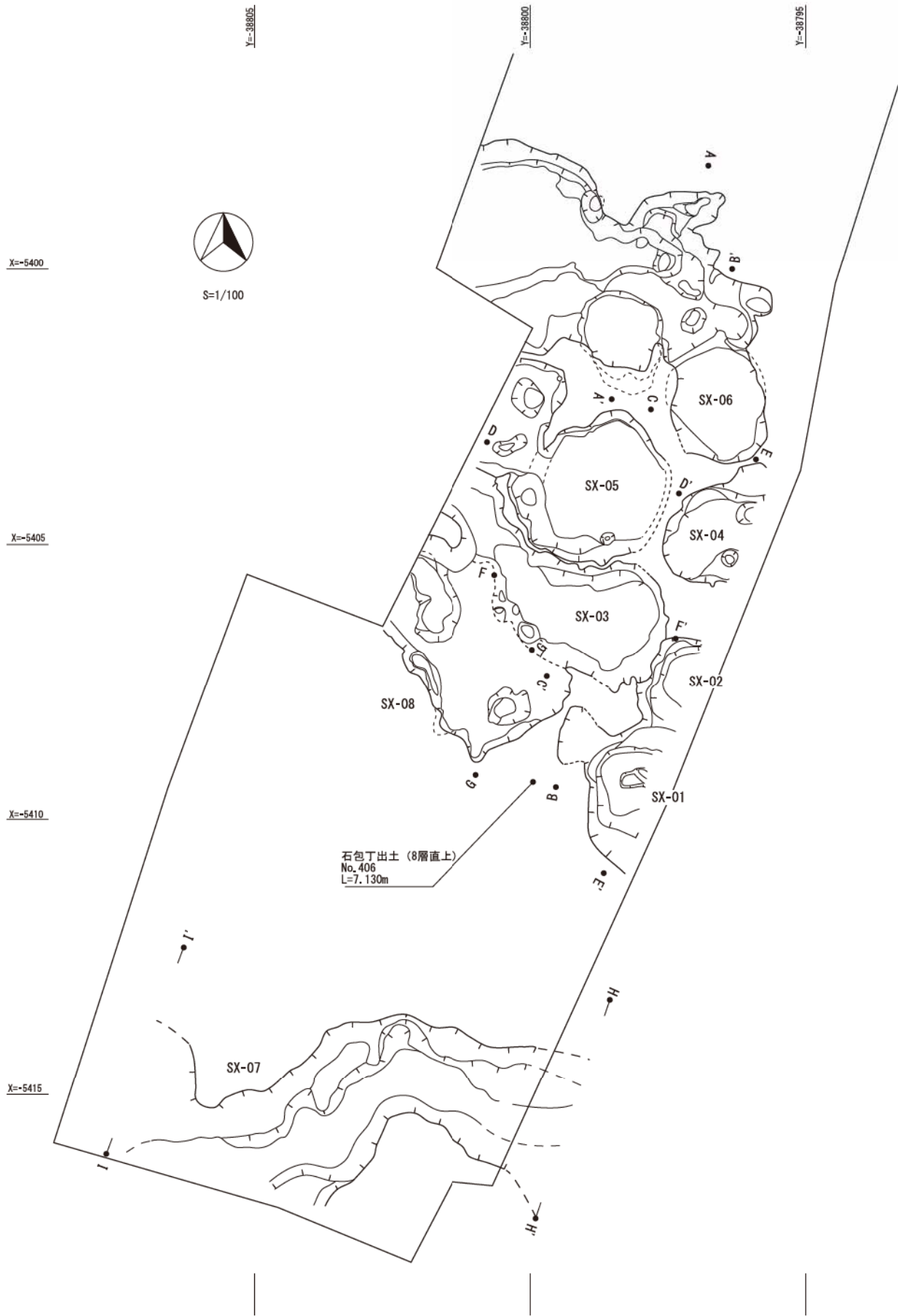
第 276 図 玉名平野条里跡 07-I 区 SD-03・04・SX-06 実測図及び出土遺物実測図



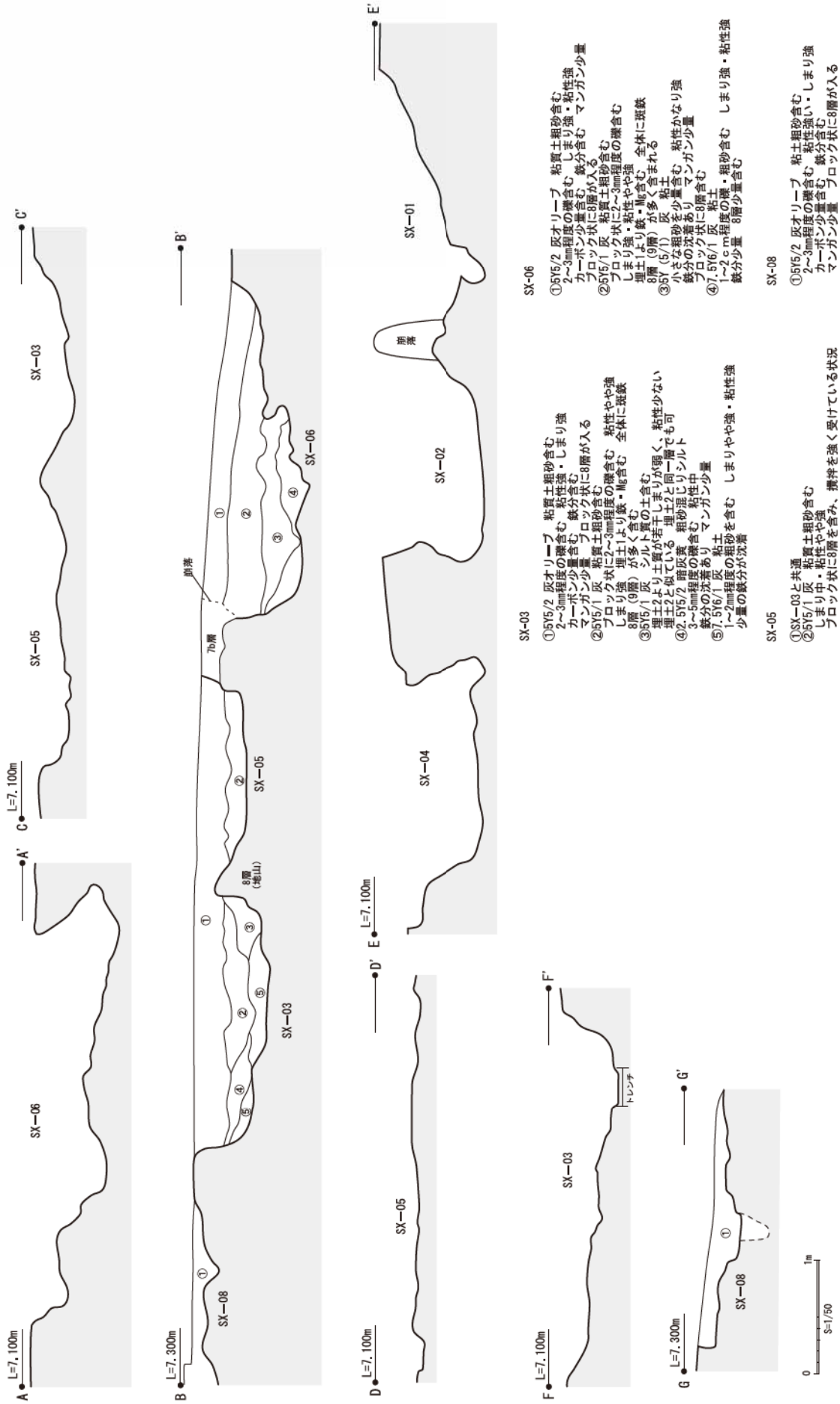
第 277 図 玉名平野条里跡 07- I 区 SX-02・SD-06 実測図及び出土遺物実測図



第 278 図 玉名平野条里跡 07-V区 8層遺構配置図・コンタ図及び出土遺物実測図



第 279 図 玉名平野条里跡 07-V区 SX-01~08 (粘土採掘坑) 実測図 1



SX-06

- ①5/5/2 灰オリーブ 粘質土粗砂含む しまり強・粘性強
2~3mm程度の礫含む 鉄分含む マンガン少量
カーボン少量 プロック状に8層が入る
- ②5/5/1 灰 粘質土粗砂含む
プロック状に2~3mm程度の礫含む
しまり強・粘性やや強 全体に斑鉄
埋土より鉄・珪含む 全体に斑鉄
8層(9層)が多く含まれる
- ③5/1(5/1) 灰 粘質土粗砂含む
小さな粗砂を少量含む 粘性かなり強
鉄分の沈着あり マンガン少量
プロック状に8層含む
- ④7.5/6/1 灰 粘質土粗砂含む しまり強・粘性強
1~2cm程度の礫・粗砂含む
鉄分少量 8層少量含む

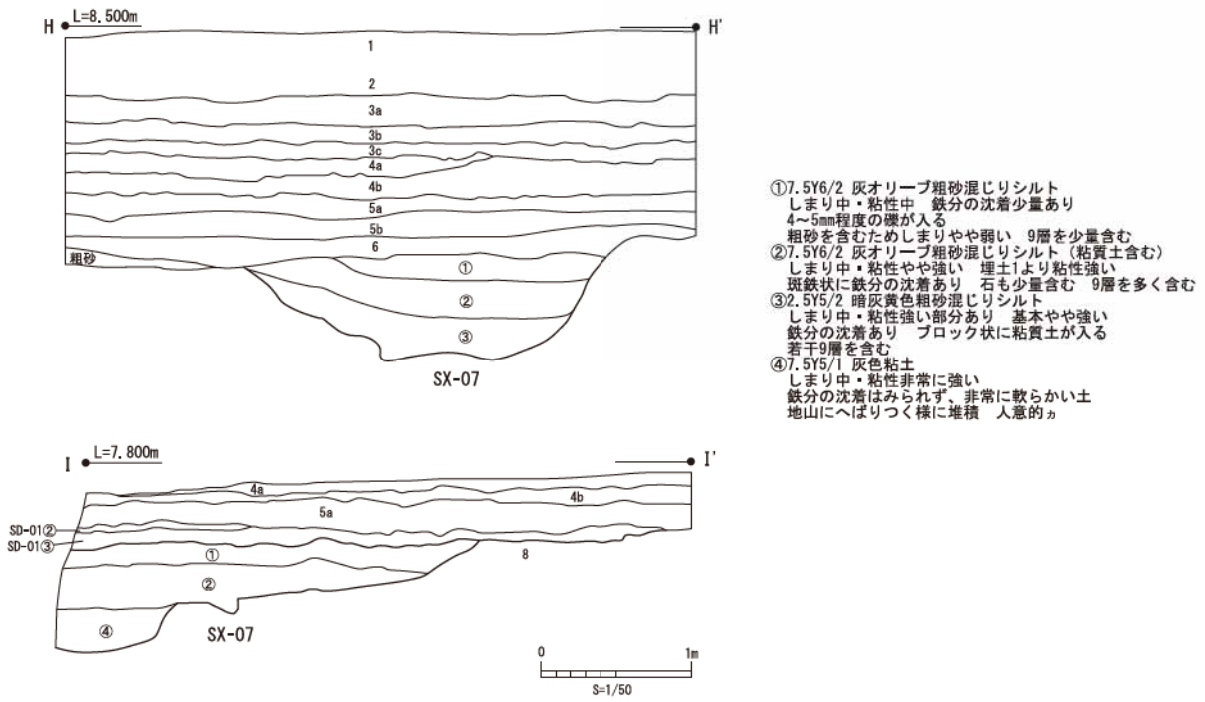
SX-03

- ①5/5/2 灰オリーブ 粘質土粗砂含む
2~3mm程度の礫含む 粘性強・しまり強
カーボン少量 プロック状に8層が入る
- ②5/5/1 灰 粘質土粗砂含む
プロック状に2~3mm程度の礫含む 粘性やや強
しまり強 埋土より鉄・珪含む 全体に斑鉄
8層(9層)が多く含む
- ③5/5/1 灰 シルト質の土含む
埋土より土質が若干しまりが弱く、粘性少ない
埋土2と似ている 埋土2と同一層でも可
- ④2.5/5/2 暗灰質 粗砂混じりシルト
3~5mm程度の礫含む 粘性中
鉄分の沈着あり マンガン少量
- ⑤7.5/6/1 灰 粘質土粗砂を含む しまりやや強・粘性強
1~2mm程度の粗砂を少量含む

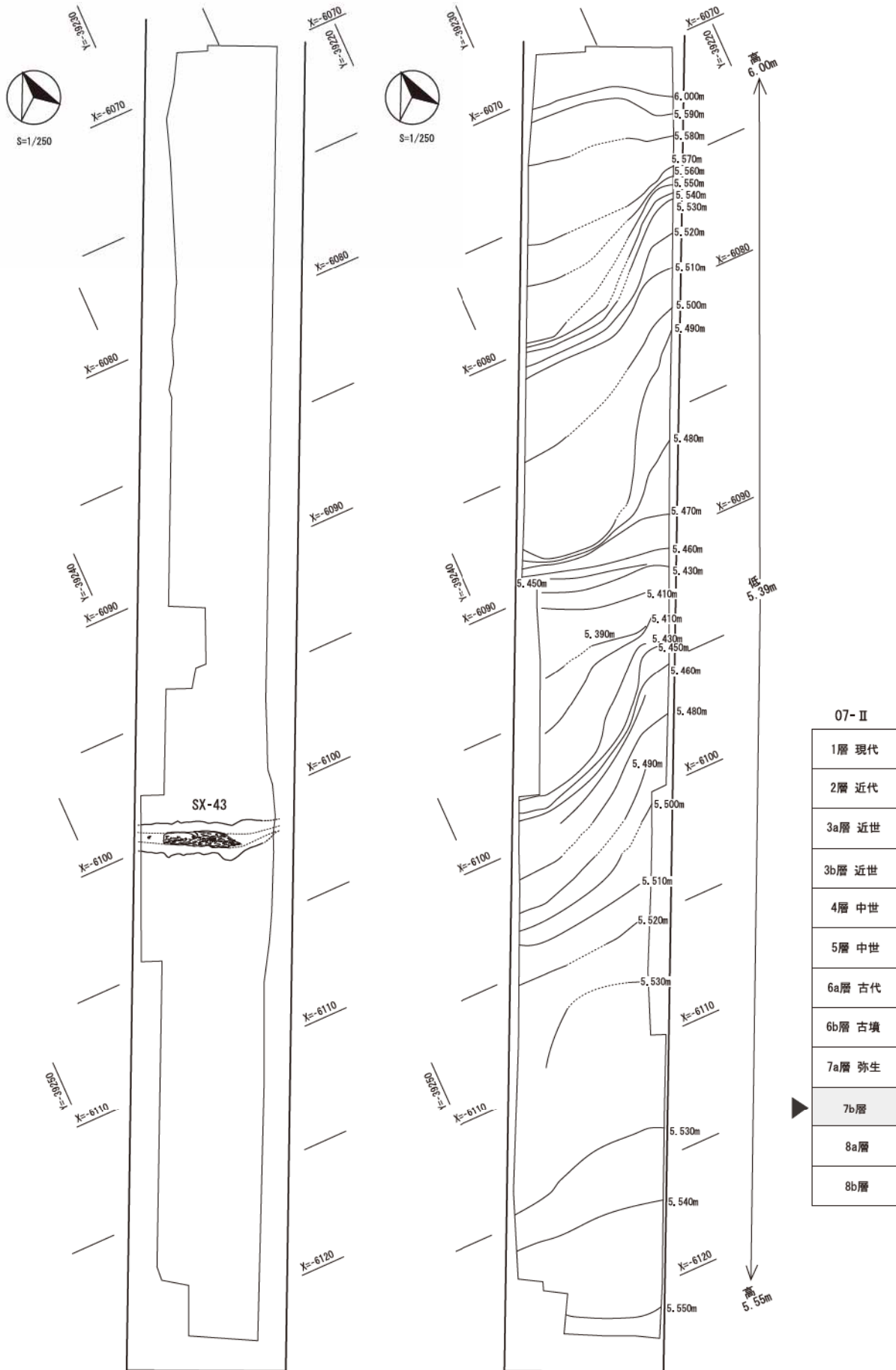
SX-05

- ①SX-03と共通
- ②5/5/1 灰 粘質土粗砂含む
しまり中・粘性やや強
プロック状に8層を含み、礫料を強く受けている状況

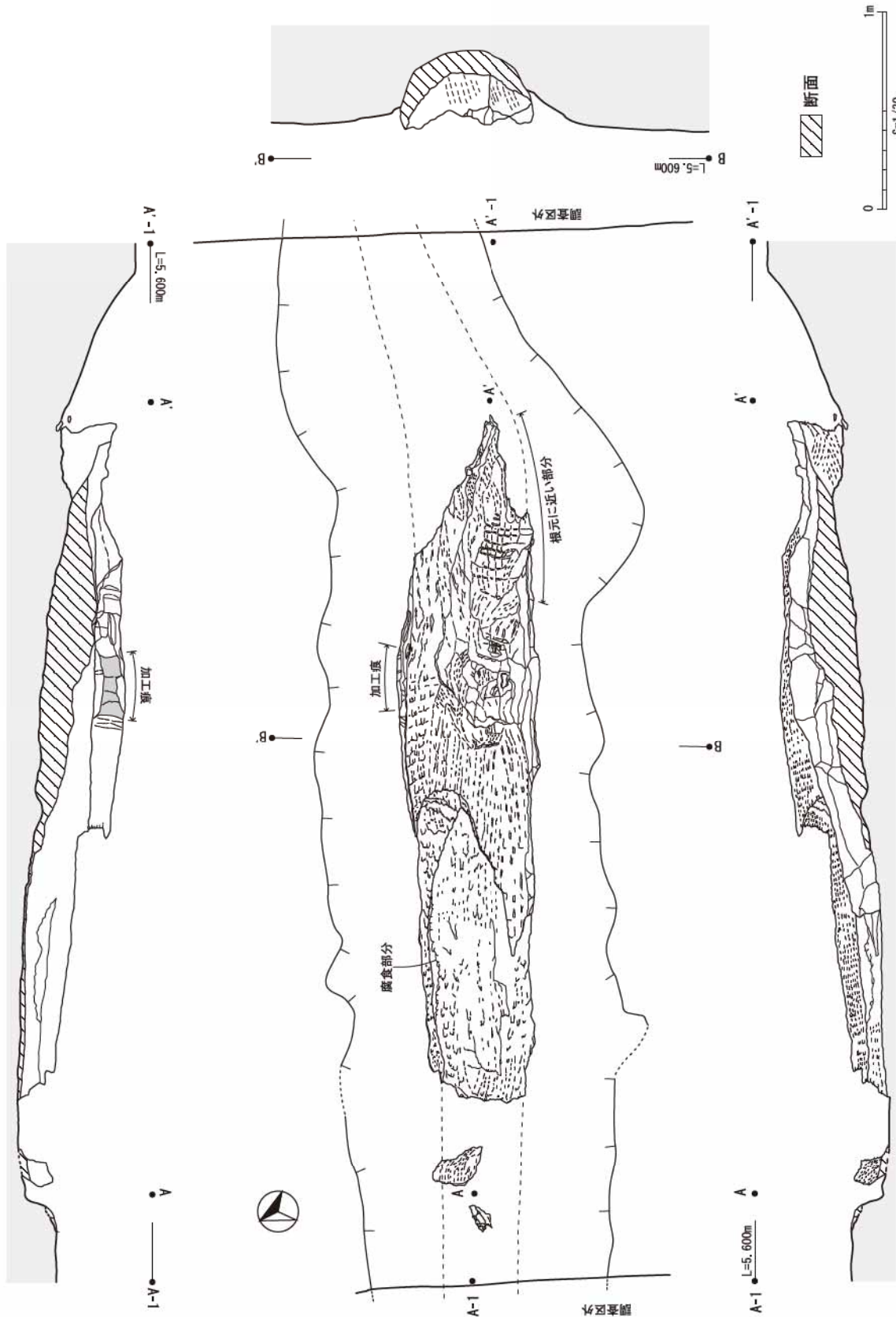
第 280 図 玉名平野条里跡 07-V区 SX-01~08 (粘土探掘坑) 実測図 2



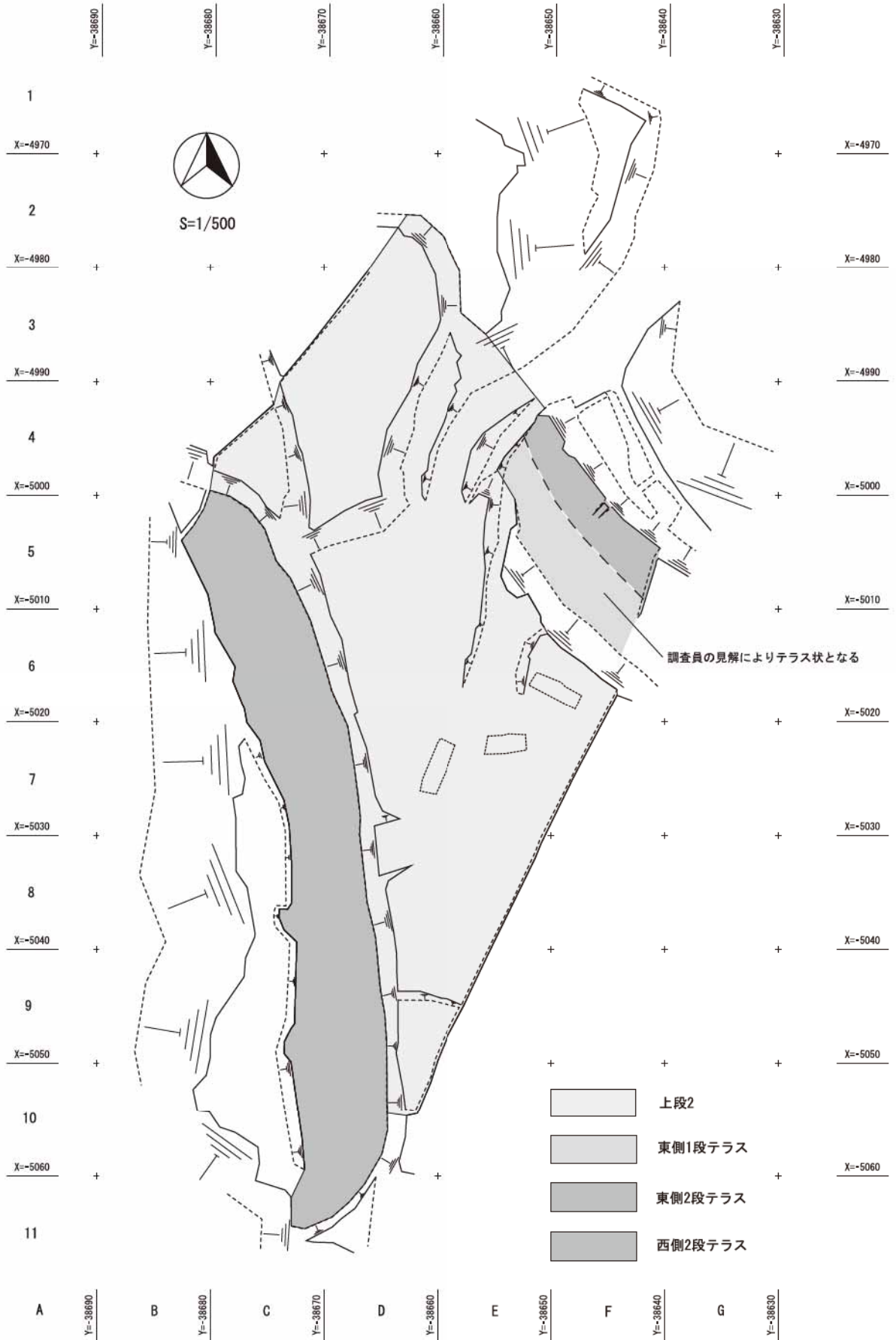
第 281 図 玉名平野条里跡 07-V区 SX-07 土層断面図



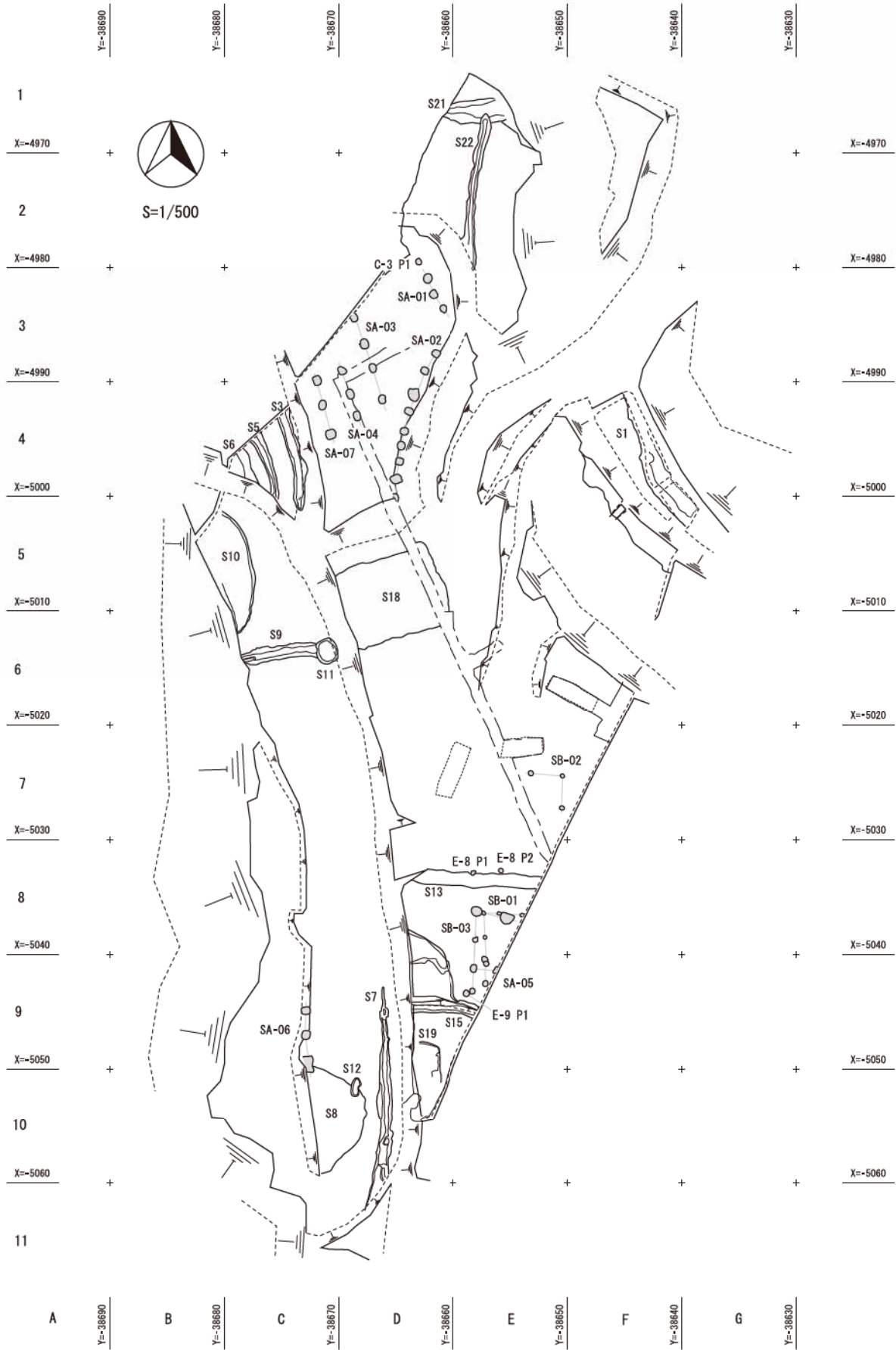
第 282 図 玉名平野条里跡 07-II (06-III) 区 7b層遺構配置図・7b層直上コンタ図



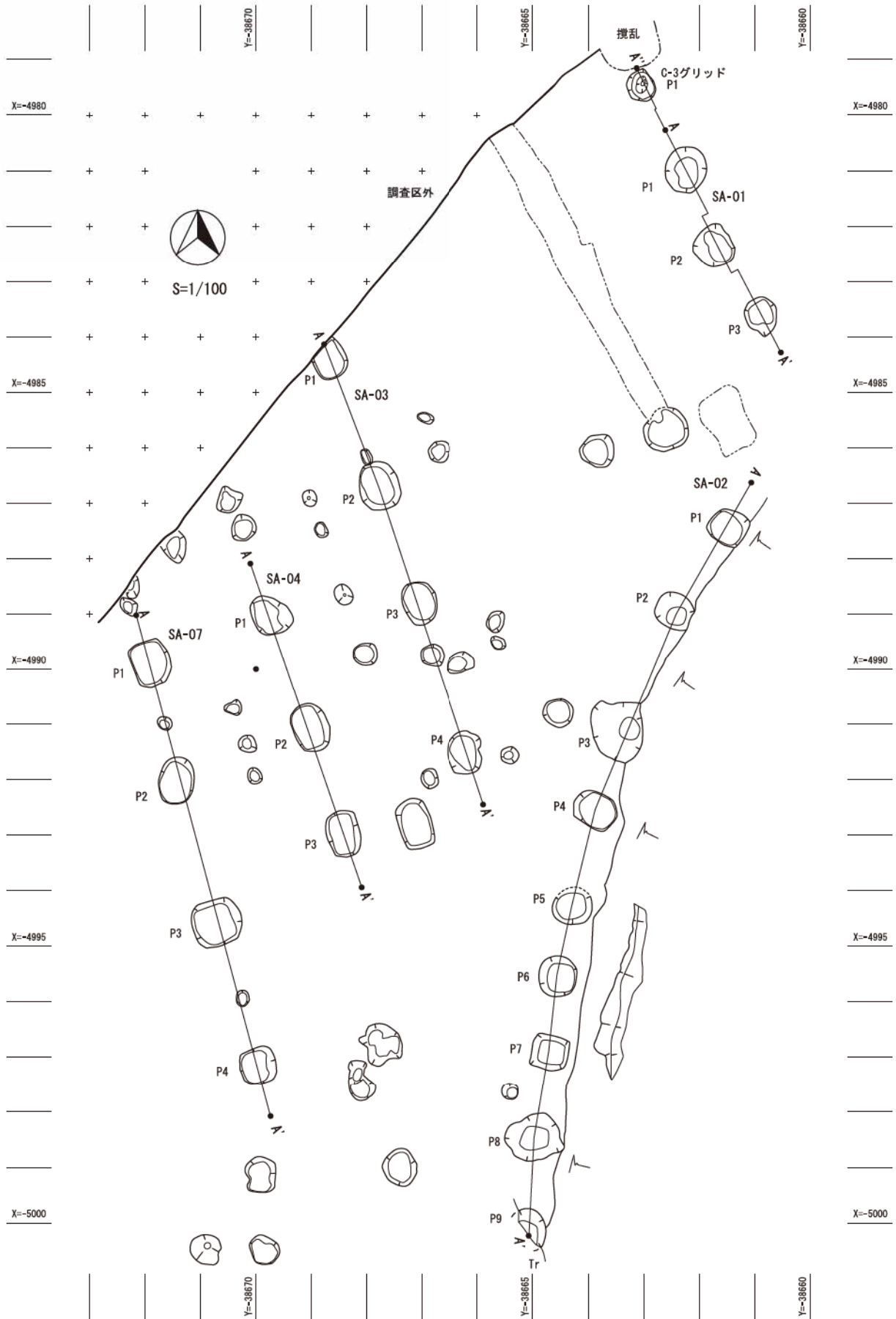
第 283 図 玉名平野条里跡 07-II (06-III) 区 SX-43 (木樋) 実測図



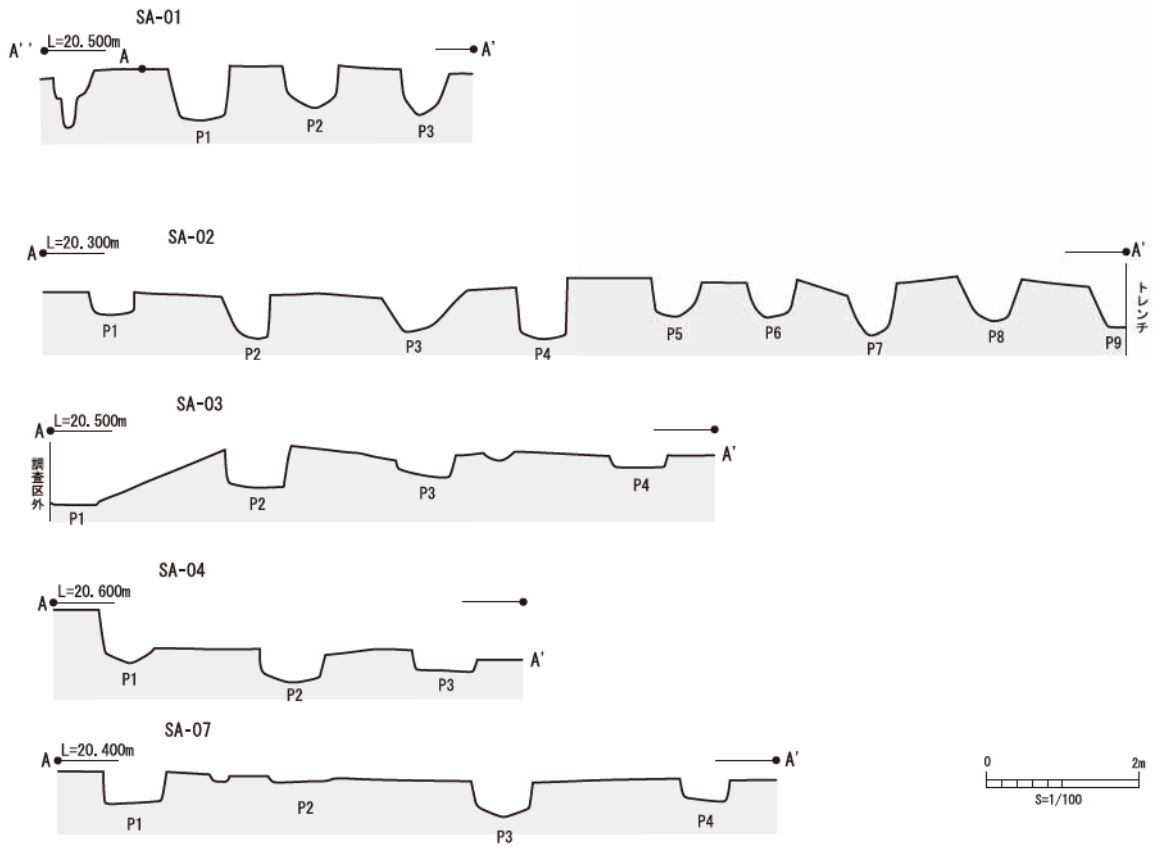
第 284 図 玉名の平城跡区画



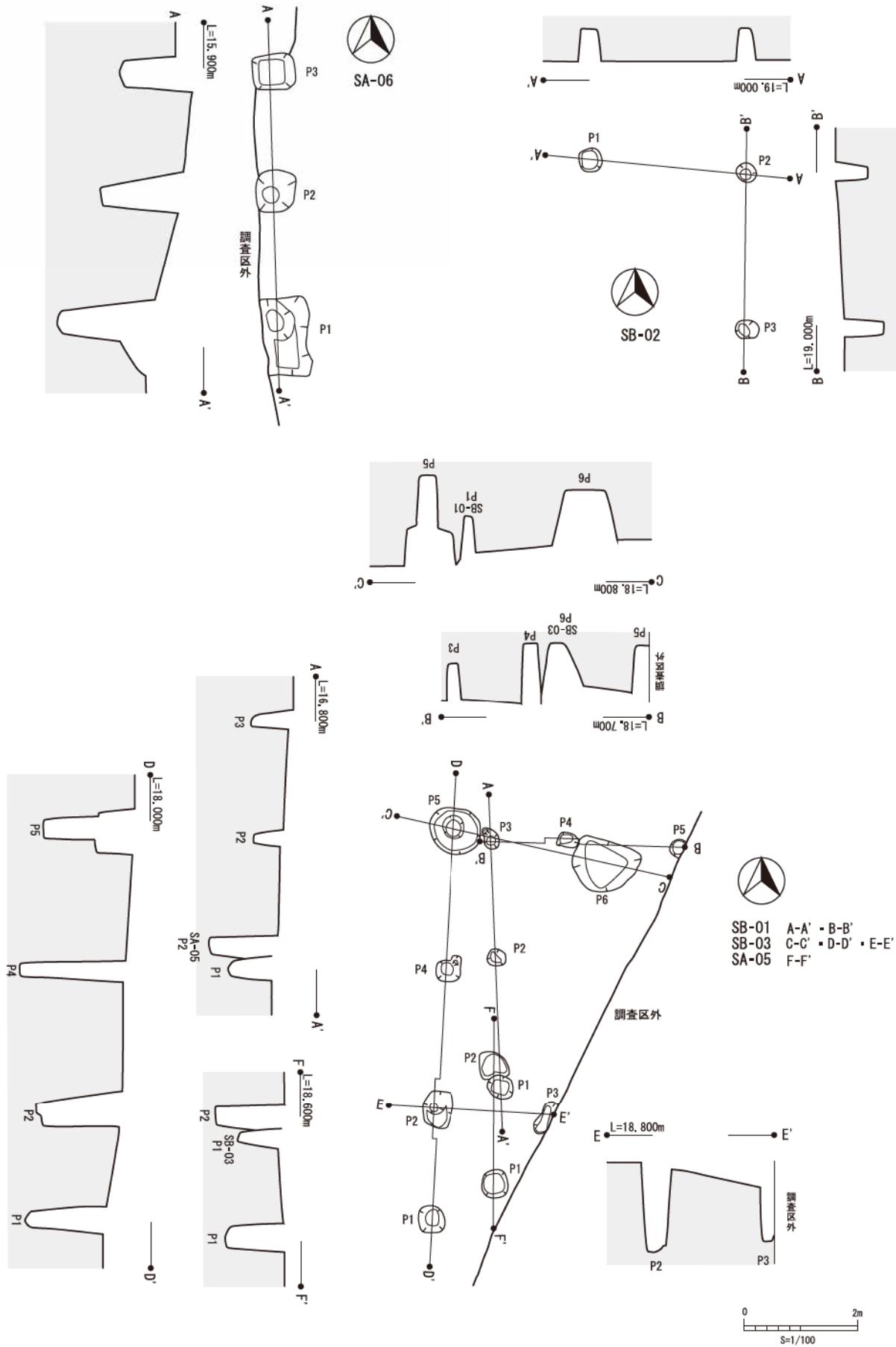
第 285 図 玉名の平城跡 遺構配置図



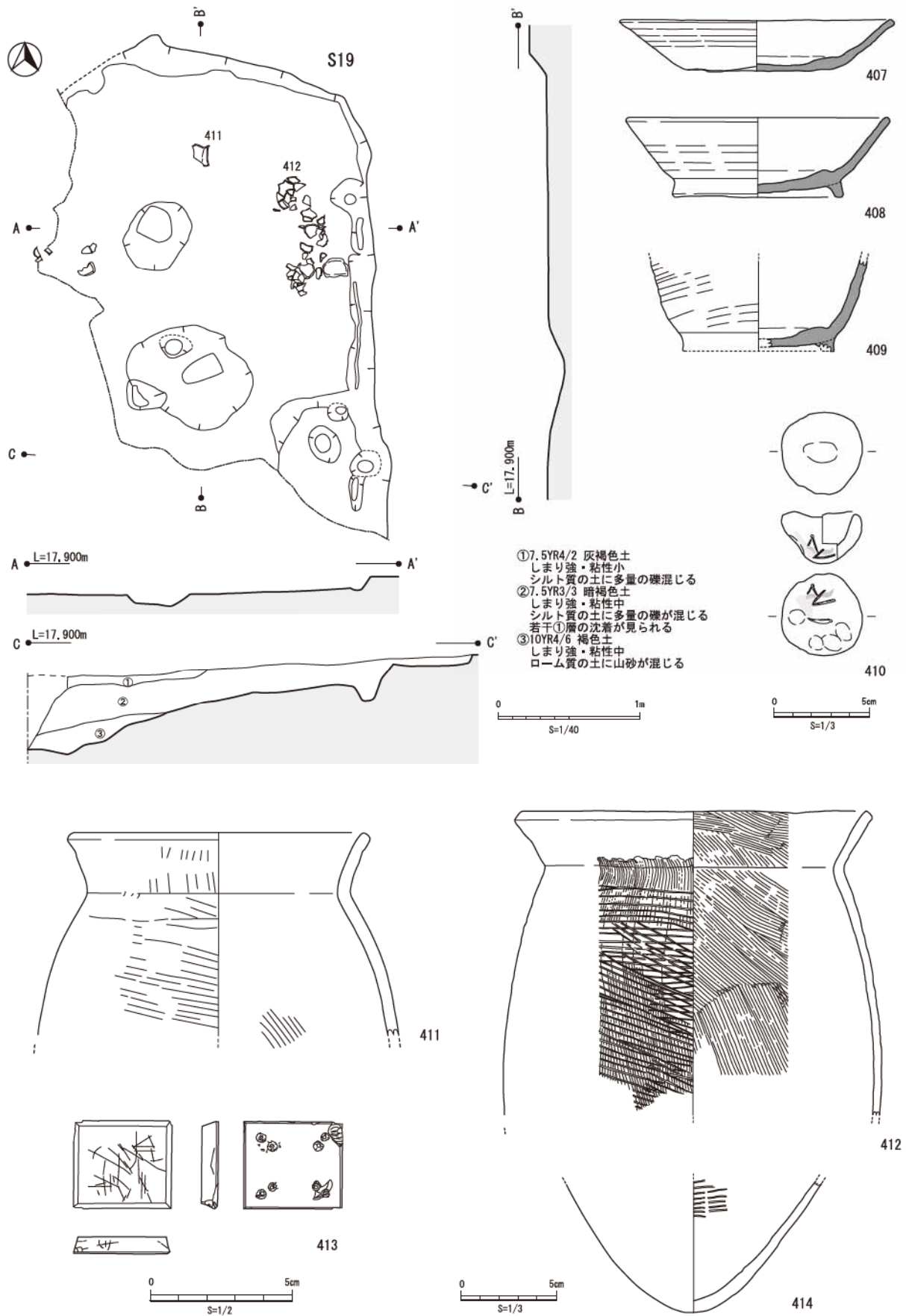
第 286 図 玉名の平城跡 SA-01~04・07 実測図 1



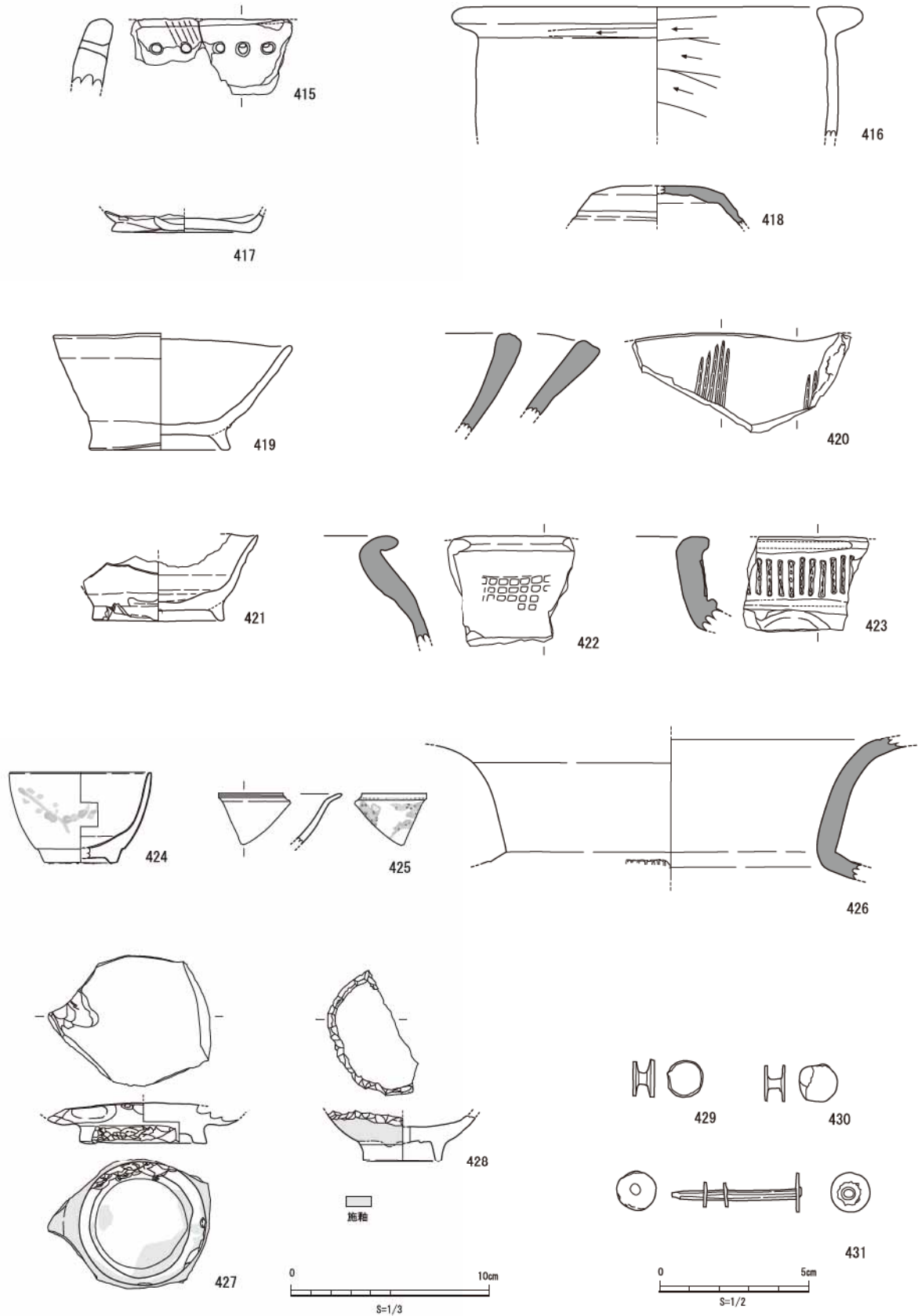
第 287 図 玉名の平城跡 SA-01～04・07 実測図 2



第 288 図 玉名の平城跡 SA-05・06・SB-01～03 実測図



第 289 図 玉名の平城跡 S19 実測図及び出土遺物実測図



第 290 図 玉名の平城跡 出土遺物実測図

第1節 人骨

熊本県玉名市玉名平野条里跡出土の中世人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、中世人骨、土墳墓、男性、仰臥

はじめに

県道の拡幅工事に伴う玉名市大字玉名に所在する玉名平野条里跡の2008年度（平成20年度）の発掘調査によって中世の埋葬人骨が2体出土した。

熊本県での中世人骨の報告例としては、荒尾市浄業寺（永井、1965）、宇土市緑川（故松野・他、1970）、城南町尾窪中世墳墓群（内藤、1973）、塚原中世墳墓（内藤、1975）、荒尾市杉谷遺跡（内藤・他、1978）、興善寺町馬場遺跡（松下、1980）、深田村灰塚遺跡（松下、2001）、西合志町船入遺跡（松下、2004）のほかに、植木町の松山遺跡や芦北町の花岡木崎遺跡、花岡古町遺跡からも中世人骨が出土している。

また、熊本市の二本木遺跡群からはこれまでに、熊本市教育委員会が調査をおこなった第8次調査区、第13次調査区、第14次調査区、第26次調査区、第27次調査区、第35次調査区の1区と2区、第32次調査区R地点、第40次調査区から中世人骨が、第28次調査区では中世以降の人骨が出土している。熊本県教育委員会の調査では、春日地区、合同庁舎区、さつま荘跡からも中世人骨が出土している。熊本市内では、二本木遺跡群のほかに上高橋遺跡、南新宮遺跡からも中世人骨が出土している。

尾窪中世墳墓群から出土した中世人骨は、比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は関東地方だけにみられる地域の特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴であることを示した貴重な例である。

今回出土した人骨の保存状態はけっして良好なものではなかったが、現場でできる限りの観察などをおこない、取り上げが可能であった人骨については、人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料

今回の調査で、2遺構から2体の人骨が出土した。その他に3ヶ所から散乱骨が検出されたが、いずれも獣骨であった。中世墓の埋葬遺構は土墳墓と推測されている。

2体の人骨はともに考古学的所見から、12世紀後半の中世に属する人骨と推測されている。各人骨の性別・年齢などは表1に示すとおりである。なお、年齢区分については表2を参照されたい。

*Masami MATSUSHITA, ** Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

表1 出土人骨一覧 (Table1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	頭位	備考
SK-01	男性	熟年	仰臥屈葬	北頭位	
SK-03	男性	熟年	仰臥屈葬	北頭位	
ST-02	—	—	散乱骨		獣骨?
SK-02-1	—	—	散乱骨		獣骨 (中型ほ乳動物)
SK-02-2	—	—	散乱骨		獣骨 (大型ほ乳動物)

表2 年齢区分 (Table 2. Division of age)

年齢区分		年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所見

SK-01 (男性・熟年)

埋葬遺構は土墳墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。ほぼ全身骨が残存していたが、骨は脆弱で原形を保った状態で取り上げることはできない程度の保存状態であった。頭蓋は右側に倒れた状態で検出された。頭蓋右側部に土師器などが副葬されていた。右側肘関節は強屈状態であったが、左側は約60度に曲げられていた。右側膝関節は約30度の屈曲状態であるが、左側膝関節は強屈状態で検出された。左側上腕骨は中央から折れ、遠位部が土坑底に突き刺さるように傾斜しており、また左側前腕の骨も近位部が欠失していたが、これは後世の遺構構築によって破壊を受けたために生じたものである。

頭蓋は潰れており、頭型は確認できない。鎖骨は長く、上腕骨、大腿骨、脛骨の骨体はいずれも大きい。現場で右側大腿骨の最大長を計測することができた。その長さは4cmあり、大腿骨の長さは長い。大腿骨最大長440mmから算出される推定身長値は164.03cm (Pearson)、164.35cm (藤井) となり、高身長である。右側の大坐骨切痕の観察ができたが、この角度は小さい。

大坐骨切痕の角度が小さいことと四肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は熟年と思われる。

SK-03 (男性・熟年)

埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。ほぼ全身骨が残存していたが、左側の肘の部分と下肢部分は後世の遺構に

よって破壊を受けており、右側大腿骨の大部分と右側の下腿の骨、左側の下腿の骨のうち近位半分を欠失している。顔面部（額）には土師皿が2枚副葬されていた。右側肘関節は約30度に曲げられた状態で、左側肘関節は90度の屈曲状態で検出された。また、左側膝関節は約60度に曲げられた状態であった。右側の下肢骨は残存状態が悪いが、残っていた部分から推測すれば、右側膝関節は強屈状態であったものと思われる。

頭蓋は潰れており、頭型の確認はできない。頭蓋壁は薄い。左側上腕骨の最大長を現場で計測できたが、その長さは約29cmしかなく、上腕骨は短い。上腕骨最大長290mmから算出される推定身長値は154.57cm (Pearson)、154.98cm (藤井) となり、かなり低身長である。また、観察したところ大腿骨も長くないようである。四肢骨の骨体は大きい。寛骨は両側とも残存しており、両側の大坐骨切痕の観察が可能であったが、この角度は狭い。

大坐骨切痕の角度が小さいことと四肢骨の径が大きいことから、性別を男性と推定した。年齢は熟年と思われる。

要 約

玉名市大字玉名に所在する玉名平野条里跡の2008年度（平成20年度）の発掘調査によって中世の埋葬人骨が2体出土した。2体ともほぼ全身骨が残っていたが、骨は脆弱化しており、原形を保った状態で取り上げることができなかつたので、現場で人類学的観察や計測をおこなった。その結果は次のように要約することができる。

1. 今回の調査では埋葬人骨が2体検出された。2体とも12世紀後半の中世に属する人骨と推測されている。
2. 2体とも埋葬姿勢は仰臥屈葬（肘・膝関節を屈曲）である。
3. 2体とも成人の男性骨である。
4. 頭型や顔面の特徴は不明である。四肢骨は2体とも大きく、頑丈であるが、長さは1体(SK-01)は長く、もう1体(SK-03)は短いものであった。
5. 1体は大腿骨から、もう1体は上腕骨から推定身長値を算出することができた。前者は164.03cm (Pearson) で高身長であったが、後者は154.57 (Pearson) となり低身長であった。
6. 本中世人男性の頭型や顔面の形態は明らかにできなかったが、2体とも四肢骨は太く、筋の発達もよかつたことがうかがえる。しかし、この2体には四肢骨の長さに差異が認められ、1体はやや高身長であったが、もう1体はかなりの低身長という顕著な差がみられた。この差の原因究明にはまだ保存良好な資料が不足しているのが現状である。

謝辞

擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様に感謝致します。

《参考文献》

1. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
2. 松下孝幸、1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺 I (熊本県文化財調査報告第 45 集): 145-159
7. 松下孝幸、2001: 熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡 (II) (熊本県文化財調査報告第 197 集): 239-245.
3. 松下孝幸、2004: 熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨。船入遺跡 一般国道 3 号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査 (熊本県文化財発掘調査報告第 217 集): 91-97.
4. 松下孝幸、2007: 熊本市二本木遺跡群第 26 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 III - 二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書 - : 126-129.
5. 松下孝幸、2007: 熊本市二本木遺跡群第 13 次調査区出土の中世人骨。二本木遺跡群 II - 二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書 - : 381-393.
6. 松下孝幸・他、熊本市大江遺跡群第 111 次調査区出土の人骨。(投稿中)
7. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群 (さつま荘跡) 出土の古代・中世人骨。(投稿中)
8. 故松野茂・他、1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌、44: 999-1016.
9. 永井昌文、1965: 荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏 (荒尾市文化財報告第 1 集): 51-53.
10. 内藤芳篤、1973: 人骨。尾窪 - 熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査 (熊本県文化財調査報告 12): 62-78.
11. 内藤芳篤、1975: 塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨について。塚原 (熊本県文化財調査報告第 16 集): 317-322.
12. 内藤芳篤・他、1978: 杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡 (熊本県荒尾市文化財調査報告第 3 集): 116-122.

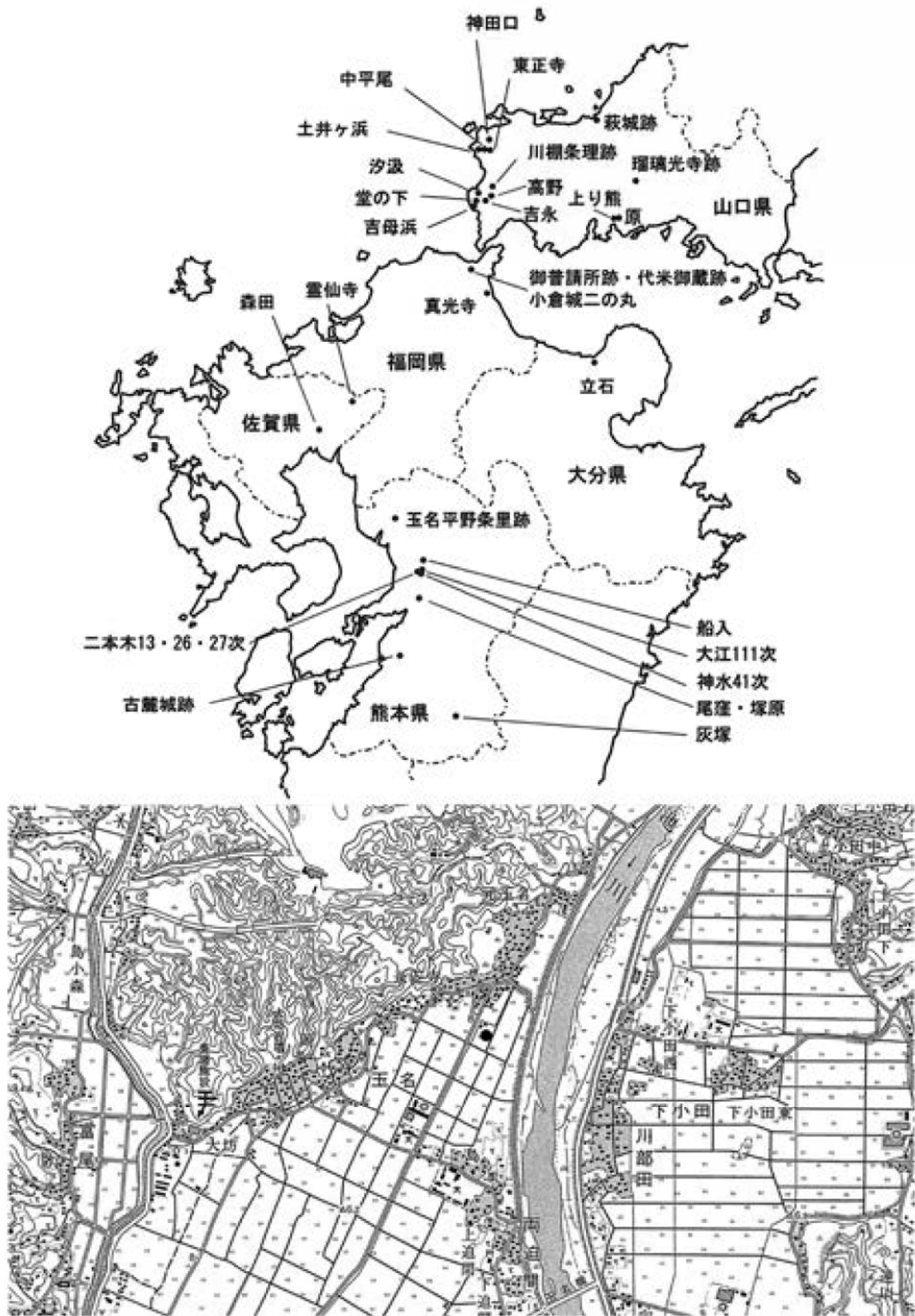


図1. 遺跡の位置 (1/25,000)
 (Fig1. Location of the Tamana-heiya-jori site, Tamana City, Kumamoto Prefecture)

第2節 05- I -1 区 SX-03

両迫間日渡遺跡の自然科学分析

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 花粉分析	p. 1
3. 結果	p. 2
(1) 放射性炭素年代測定	p. 2
(2) 花粉分析	p. 2
4. 考察	p. 2
(1) 周辺植生	p. 2
(2) 稲作の消長と植物利用について	p. 3
引用文献	p. 3

<図表・図版一覧>

表 1. 放射性炭素年代測定結果

表 2. 暦年較正結果

表 3. 花粉分析結果

図 1. 試料採取地点の模式断面図および試料採取位置

図 2. 主要花粉化石群集の層位分布

図版 1 花粉化石

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

両迫間日渡遺跡は熊本県玉名市玉名上徳に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する。本遺跡は縄文時代～奈良時代、および中世の集落跡とされている。以前に分析調査を実施した04-Ⅱ区からは古代や中世の遺物が検出されており、今回の調査区からは、弥生時代後期と想定される畦あるいは水路と推定される溝状遺構が検出されており、溝内から杭が多量に検出されている。そのほかにも、弥生時代後期や古墳時代初頭の水田の可能性が指摘される土層などが検出されている。

今回の分析調査では、これらの杭を対象とし、遺構の年代観に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。また、水田の可能性が指摘される土層を中心に、古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。

1. 試料

試料が採取された土層断面では、近世～現代の水田耕土より下位が5層に分層される。最下位は暗灰色粘土からなり、無層理で遺物を含まない。その上位は暗灰褐色シルトからなり、弥生時代後期の遺物を包含している。その上位は暗灰褐色シルトからなり、古墳時代初頭の遺物を包含する。この2枚の包含層は、その堆積状況から水田の可能性も指摘されている。その上位には下位褐色砂混じりシルトが2層堆積しており、いずれも中世の水田で、下位層が床土、上位層が耕土と推定されている。なお、畦あるいは水路の可能性が指摘される溝状遺構は、弥生時代後期の遺物を包含する層以深を掘り込んでおり、古墳時代初頭の遺物を包含する暗灰褐色シルトに覆われる。溝内からは杭などのほか、弥生時代後期の土器などの遺物も出土する。

土壌試料は、当社技師が現地に赴き、中世の水田耕土とされる褐色砂混じりシルトから最下位層の暗灰色粘土まで各層1点の計5点（上位より試料番号1-5）、溝状遺構内覆土（試料番号6）、溝を覆う古墳時代初頭の暗灰褐色シルト（試料番号7）、溝が掘り込まれる弥生時代後期の暗灰褐色シルト以深2点（試料番号8,9）の、合計9点を採取した。試料採取地点の模式断面図および試料採取位置を図1に示す。

放射性炭素年代測定に用いた試料も、土壌試料採取時に当社技師が採取した。溝状遺構内より出土した杭、計4点（AMS-1～AMS-4）である。また、花粉分析に用いた試料は、試料番号3-9の、計7点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表 1 に、暦年較正結果を表 2 に示す。AMS-1 は $1,895 \pm 25BP$ 、AMS-2 は $1,820 \pm 25BP$ 、AMS-3 は $1,800 \pm 25BP$ 、AMS-4 は $1,800 \pm 25BP$ を示す。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。また、いずれの試料も北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、AMS-1 は calAD74-130、AMS-2 は calAD138-233、AMS-3 は calAD140-253、AMS-4 は calAD139-252 である。

(2) 花粉分析

結果を表 3、図 2 に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

いずれの試料においても花粉化石群集は類似しており、木本花粉と比較して草本花粉の割合がやや高い。群集組成も大きく異なっておらず、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ヒシ属、ミズワラビ属などの、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。

4. 考察

(1) 周辺植生

木本類をみると、全体を通じて群集に大きな変化は認められず、コナラ属アカガシ亜属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。このうち、アカガシ亜属は、シイノキ属、ヤマモモ属、イスノキ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。このことから、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては、アカガシ亜属、シイノキ属などを主体とした照葉樹林が、周囲の丘陵や後背山地に分布しており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯性針葉樹や、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹も生育していたと推測される。

また、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などは、沢沿いや河畔などの適湿地を好む種を含む部類群であることから、丘陵縁辺や菊池川沿いなどに生育していた可能性がある。

草本類をみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科などを伴う。その他に認められるクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、バラ科、ヨモギ属、キク亜科などは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であることから、周囲の乾いた草地などにこれらの種類が生育していたと推測される。また、ガマ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属といった水湿地生植物に由来する花粉・胞子が検出される。イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部にも、同様の水湿地に生育する種を含む。よって、当時の水路、河川あるいは周辺域の湿地にこれらの草本類が生育していたと推測される。

本地域周辺の既存の研究結果を見ると、晩氷期遺構は落葉広葉樹が主体の植生だったものが、約 8,500 年前以降アカガシ亜属やシイノキ属などと照葉樹林が発達するようになり、約 6000 年前頃に照葉樹林の最盛期に達する。その傾向は植生干渉の結果、アカガシ亜属、シイノキ属が衰退し、マツ属、イネ科が急増する約 1,500 年前頃まで続くとされている (Hatanaka, 1985; 畑中ほか, 1998 など)。今回の結果はこれと調和的であり、放射性炭素年代測定結果や遺物などから推測される時代観とも矛盾しない。

(2) 稲作の消長と植物利用について

年代測定を実施した弥生時代後期とされる溝内より検出された杭の樹種をみると、アカガシ亜属、クリであった。花粉分析の結果を見ると、周辺域の植生はアカガシ亜属を主体とした照葉樹林と推定されることから、アカガシ亜属やクリなどは、周辺域で容易に入手が可能な種類であったと考えられる。

また、花粉分析を実施したいずれの試料においても草本花粉の割合が高く、イネ科が多産する傾向が認められる。今回分析した試料では、試料番号 3, 7 採取層準が古墳時代初頭の水田、試料番号 4, 8 採取層準が弥生時代後期の水田の可能性が、試料番号 6 採取層準が弥生時代後期の畦あるいは水路の可能性が指摘されている。しかし、分析結果をみると、試料番号 4 採取層準より下位の無遺物層（試料番号 5, 9 採取層準）においてもイネ科が多産し、草本花粉化石群集に大きな差は認められない。

今回、弥生時代後期の水田の可能性が指摘される試料番号 4, 8 においてイネ属同定を実施したところ、イネ科花粉全体に含まれるイネ属の割合は、試料番号 4 で 37.07%、試料番号 8 で 36.76%であった。中村 (1980) によると、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は 30%以上の比率であることから、イネ属の割合が 30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせ

ると述べている。これに従うと、試料番号4,8の結果は、本層形成当時に稲作が行われていた可能性を支持している。また、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ミズワラビ属などは、水田雑草となりうる種を含む分類群である。よって、これらの水湿地生植物には、水田に生育していたものも含まれる可能性がある。

ただし、上位の古墳時代初頭の遺物包含層や下位の無遺物層の花粉化石群集をみると、弥生時代後期の水田層と群集に差がみられない。今後、植物珪酸体分析やイネ属花粉同定、珪藻分析などを実施し、イネ属の消長や堆積環境などについて情報を収集し、総合的に検討することが課題と思われる。

引用文献

- Hatanaka, K., 1985, Palynological studies on the vegetational succession since the Wurm glacial age in Kyushu and adjacent areas. *Jornal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University*, 18, 29-71.
- 畑中 健一・野井 英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史. 安田 喜憲・三好 教夫(編著), 図説日本列島植生史, 朝倉書店, 151-161.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 ―総括報告書―, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.

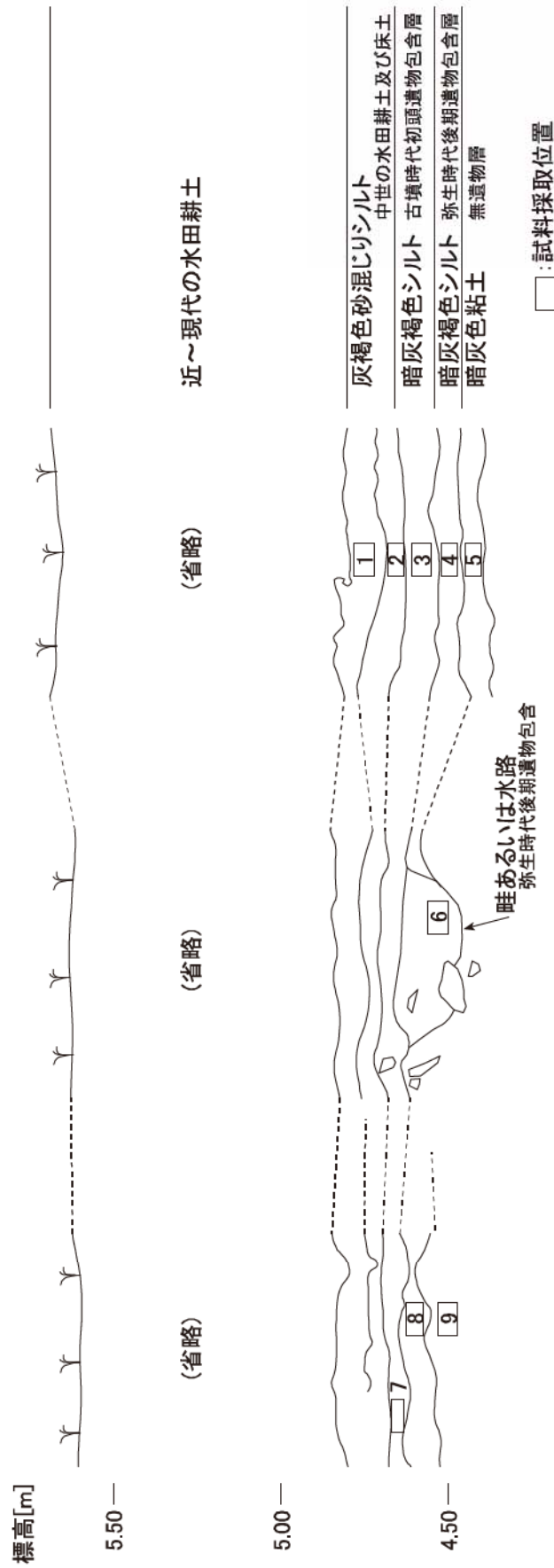


図1. 試料採取地点の模式断面図および試料採取位置

表 1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Code No.	Measurement No.
AMS-1	材	コナラ属アカガシ亜属	1895±30	-30.51±0.13	8938-1	PLD-4622
AMS-2	材	クリ	1820±25	-28.11±0.29	8938-2	PLD-4623
AMS-3	材	クリ	1800±25	-29.18±0.11	8938-3	PLD-4624
AMS-4	材	コナラ属アカガシ亜属	1800±25	-27.96±0.14	8938-4	PLD-4625

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
		σ	cal AD	cal AD	cal BP			
AMS-1	1,894±28	σ	cal AD 74	- cal AD 130	cal BP 1,876	- 1,820	1.000	8938-1
			cal AD 54	- cal AD 182	cal BP 1,896	- 1,768	0.934	
		2σ	cal AD 187	- cal AD 214	cal BP 1,763	- 1,736	0.066	
AMS-2	1,821±24	σ	cal AD 138	- cal AD 159	cal BP 1,812	- 1,791	0.255	8938-2
			cal AD 166	- cal AD 197	cal BP 1,784	- 1,753	0.407	
		2σ	cal AD 207	- cal AD 233	cal BP 1,743	- 1,717	0.338	
AMS-3	1,798±23	σ	cal AD 140	- cal AD 154	cal BP 1,810	- 1,796	0.125	8938-3
			cal AD 167	- cal AD 195	cal BP 1,783	- 1,755	0.254	
		2σ	cal AD 209	- cal AD 253	cal BP 1,741	- 1,697	0.622	
AMS-4	1,799±25	σ	cal AD 133	- cal AD 258	cal BP 1,817	- 1,692	0.909	8938-4
			cal AD 296	- cal AD 321	cal BP 1,654	- 1,629	0.091	
		2σ	cal AD 139	- cal AD 156	cal BP 1,811	- 1,794	0.138	
		σ	cal AD 167	- cal AD 195	cal BP 1,783	- 1,755	0.277	8938-4
			cal AD 209	- cal AD 252	cal BP 1,741	- 1,698	0.585	
		2σ	cal AD 131	- cal AD 259	cal BP 1,819	- 1,691	0.904	
			cal AD 295	- cal AD 322	cal BP 1,655	- 1,628	0.096	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

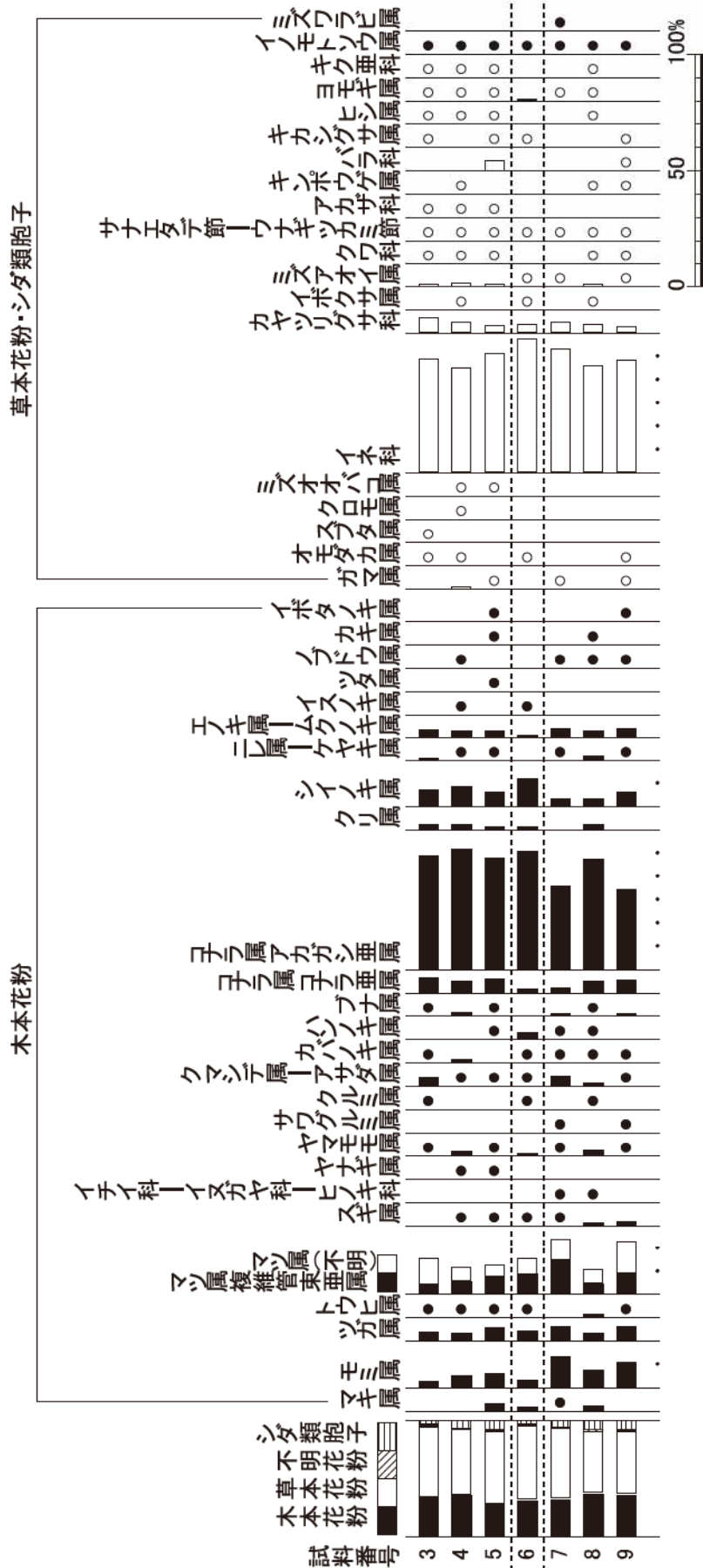
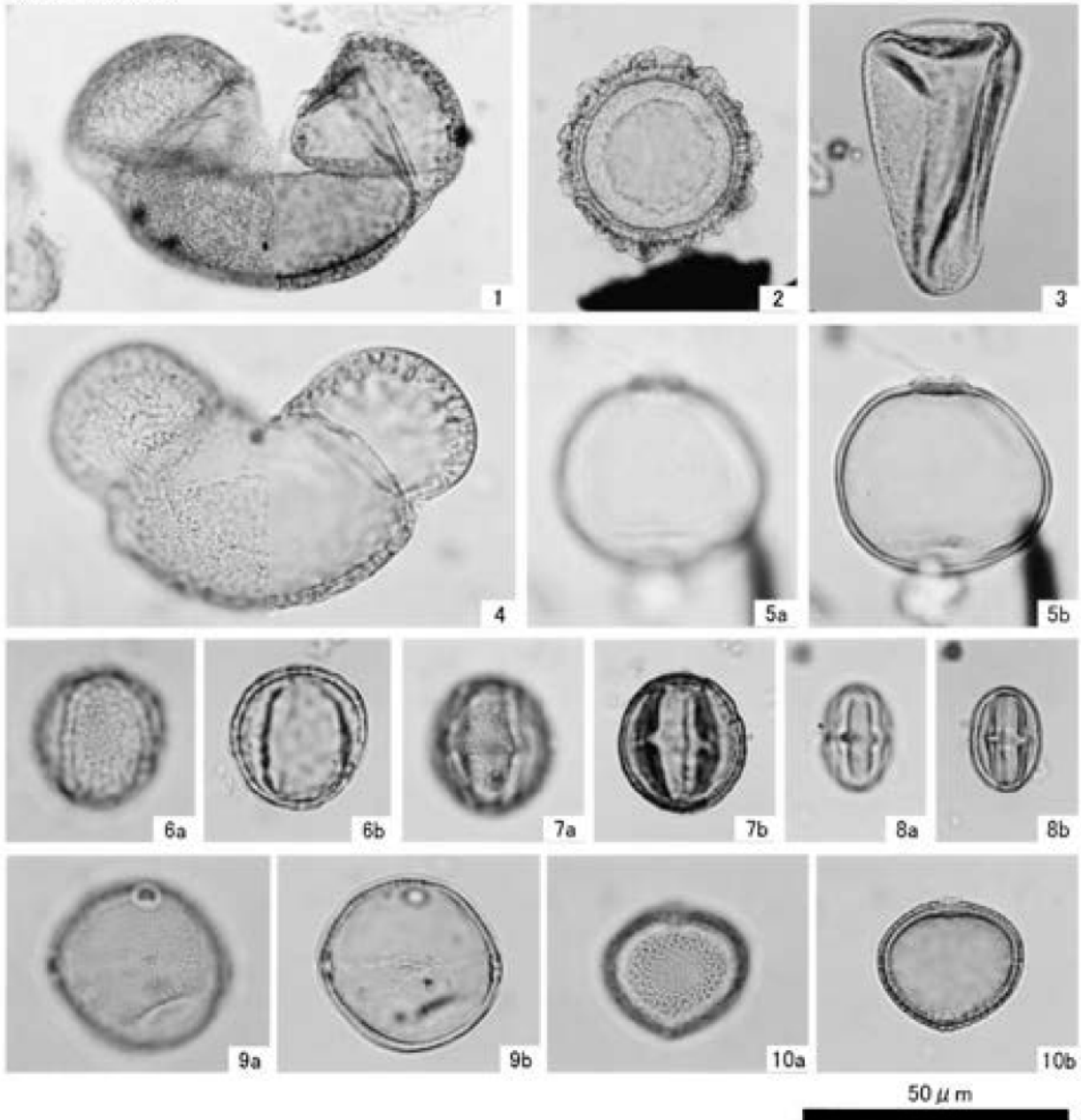


図 2. 主要花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

表3. 花粉分析結果

種類	試料番号	3	4	5	6	7	8	9
木本花粉								
マキ属		-	-	9	4	1	5	-
モミ属		7	12	16	7	28	16	24
ツガ属		10	8	16	10	13	7	14
トウヒ属		2	1	1	1	-	3	2
マツ属複維管束亜属		11	13	21	19	31	10	20
マツ属(不明)		27	14	13	15	20	13	31
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	1	-
スギ属		-	1	2	2	1	3	4
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	1	1	-
ヤナギ属		-	1	1	-	-	-	-
ヤマモモ属		1	5	2	3	1	6	2
サワグルミ属		-	-	-	-	1	-	2
クルミ属		2	-	-	1	-	1	-
クマシデ属-アサダ属		9	1	2	1	9	3	1
カバノキ属		1	3	-	1	1	1	1
ハンノキ属		-	-	2	6	1	1	-
ブナ属		2	4	1	-	3	2	3
コナラ属コナラ亜属		16	12	16	4	5	11	12
コナラ属アカガシ亜属		119	120	129	111	75	100	75
クリ属		5	5	4	3	-	5	-
シイノキ属		17	20	17	26	7	7	13
ニレ属-ケヤキ属		3	1	2	-	2	4	2
エノキ属-ムクノキ属		9	7	8	3	9	7	9
イスノキ属		-	1	-	1	-	-	-
コクサギ属		-	1	-	-	-	-	-
キハダ属		-	-	1	-	-	-	-
センダン属		1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属		-	-	1	-	-	1	-
モチノキ属		-	-	1	-	-	1	-
ツタ属		-	-	1	-	-	-	-
ノブドウ属		-	2	-	-	1	1	1
カキ属		-	-	1	-	-	1	-
イボタノキ属		-	-	1	-	-	-	1
トネリコ属		1	-	-	-	-	-	-
草本花粉								
ガマ属		-	7	1	-	2	-	1
オモダカ属		3	1	-	1	-	-	2
スブタ属		1	-	-	-	-	-	-
クロモ属		-	3	-	-	-	-	-
ミズオオバコ属		-	1	1	-	-	-	-
イネ科		337	287	470	384	340	253	284
カヤツリグサ科		46	30	31	24	29	20	17
イボクサ属		-	1	-	1	-	1	-
ミズアオイ属		9	11	10	6	3	7	5
クワ科		5	3	2	-	-	2	2
ギシギシ属		-	1	1	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		6	1	1	3	5	1	1
アカザ科		1	1	3	-	-	-	-
ナデシコ科		-	-	-	2	-	-	-
キンボウゲ属		-	2	-	-	-	1	1
アブラナ科		1	1	-	-	-	-	-
バラ科		-	-	39	-	-	-	2
キカシグサ属		1	-	1	1	-	-	1
ヒシ属		1	1	1	-	-	1	-
セリ科		1	-	-	-	-	1	1
オミナエシ属		1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属		6	6	5	7	3	3	-
キク亜科		2	1	4	-	-	1	-
タンポポ科		-	-	-	-	1	1	-
不明花粉		16	7	10	8	3	12	3
シダ類孢子								
ヒカゲノカズラ属		1	-	2	-	-	-	1
ゼンマイ属		-	-	-	1	-	-	-
イノモトソウ属		2	2	5	2	2	5	5
ミズワラビ属		-	-	-	-	1	-	-
他のシダ類孢子		21	41	73	19	39	39	45
合計								
木本花粉		243	232	268	218	210	211	217
草本花粉		421	358	570	429	383	292	317
不明花粉		16	7	10	8	3	12	3
シダ類孢子		24	43	80	22	42	44	51
総計(不明を除く)		688	633	918	669	635	547	585

図版1 花粉化石



- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1. モミ属(試料番号4) | 2. ツガ属(試料番号4) |
| 3. カヤツリグサ科(試料番号4) | 4. マツ属(試料番号4) |
| 5. イネ科(試料番号4) | 6. コナラ属コナラ亜属(試料番号4) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(試料番号4) | 8. シイノキ属(試料番号4) |
| 9. エノキ属—ムクノキ属(試料番号4) | 10. ガマ属(試料番号4) |

第3節 05- I -1 区・2 区

両迫間日渡遺跡の稲作の消長について

パリノ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 花粉分析・イネ属同定	p. 1
(2) 植物珪酸体分析	p. 2
3. 結果	p. 2
(1) 花粉分析・イネ属同定	p. 2
(2) 植物珪酸体分析	p. 3
4. 考察	p. 3
(1) 古植生	p. 3
(2) 稲作について	p. 4
引用文献	p. 5

<図表・図版一覧>

表 1. 花粉分析結果

表 2. 植物珪酸体含量

図 1. 各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置

図 2. 各地区における花粉化石群集の層位分布

図 3. 各地区における植物珪酸体含量

図版 1 花粉化石

図版 2 植物珪酸体

はじめに

両迫間遺跡は熊本県玉名市大字玉名字両迫間に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する弥生時代後期以降の遺跡である。本遺跡からは、水田の大畦の一部、小畦などの弥生時代後期の水田遺構や流路遺構などが検出されている。また、畦に伴う木製の杭が多数出土しており、水田内には足跡も確認されている。

当社では、これまでも本遺跡の自然科学分析を実施しており、当時の古植生に関する情報や、水田面の平面的広がりに関する情報を蓄積してきた。

本報告では、流路遺構が検出されたⅠ-2区を中心に、水田遺構の広がりや古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

分析に用いる試料は、Ⅰ-1区平面、Ⅰ-2区平面および断面、Ⅱ-2区断面から、当社技師が採取した。

Ⅰ-1区平面では、大畦の南側水田面より試料番号1-14, 16, 17、小畦上より試料番号15、大畦水口覆土より試料番号18, 19、大畦北側水田面より試料番号20-22を採取した。このうち、試料番号6, 22の2点について、植物珪酸体分析を実施する。

Ⅰ-2区平面では、調査区中央付近に検出された流路遺構とされるSX-01の南側平面より試料番号1-7, 9、畦畔状を呈していたと思われるSX-02より試料番号10、SX-01の北側平面より試料番号14-17を採取した。このうち、試料番号2, 4, 5, 7, 8, 11-14, 16の10点について、花粉分析・イネ属同定を実施する。

同じくⅠ-2区断面、SX-01南壁断面、および東壁断面では、試料番号8, 11-13の4点を採取した。いずれも10層より採取した。この10層の上面が、Ⅰ-1区平面、Ⅰ-2区平面に相当する。この試料番号8, 11-13の4点について、花粉分析・イネ属同定を実施する。

Ⅱ-2区断面では、5層、6a層、6b層、7a層、8a層、8b層からそれぞれ各1点（試料番号1-6）を採取した。発掘調査所見では、6層、7層が古墳時代の水田層、8層が弥生時代水田層とされている。このうち、試料番号3-6の4点について花粉分析・イネ属同定を、試料番号5, 6の2点について植物珪酸体分析を実施する。

各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置を図1に示す。

2. 分析方法

(1) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚

状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、100個体以下は「< 100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後、10の位を丸めている（100単位にする）。また、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析・イネ属同定

結果を表1、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。以下、地点別に述べる。

・ I -2 区

SX-01より南側平面の試料番号2, 4, 5, 7は、いずれも花粉化石群集が類似しており、草本花粉の割合が多い。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、ミズアオイ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、イボクサ属、ヒシ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出される。なお、イネ科花粉におけるイネ属の占める割合は、約43-52%である。

木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、モミ属、ツガ属、クマシデ属-アサダ属、エノキ属-ムクノキ属などを伴う。

SX-01より北側平面の試料番号14, 16では、花粉化石の保存状態が良好とは言えず、試料番号14に至っては、定量解析ができるだけの個体数を得ることができなかった。試料番号16では個体数は認められるものの、種類数は少ない。木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属が多く産出し、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節などを伴う。なお、試料番号16におけるイネ属の割合は、約37%である。

I -2区断面の試料番号8、SX-01の南壁および東壁の試料番号11-13をみると、花粉化石群種は南側平面と類似しており、木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属、シイノキ属などを伴う。試料番号12では、ノブドウ属、スイカズラ属がやや多く認められる。草本花粉ではイネ科が多く認められ、ガマ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属などを伴う。また、オモダカ属、

ミズオオバコ属、ヒシ属、ミズワラビ属なども認められる。なお、イネ属花粉の割合は、約 29-36%である。

・ II -2 区

断面の連続層位より採取された試料番号 3-6 をみると、木本花粉は垂直方向で変化が認められる。下位にあたる試料番号 6, 5 では、I -2 区と同様にアカガシ亜属が最も多く、モミ属、ツガ属、マツ属などを伴うが、上位の試料番号 4, 3 に向かうにつれアカガシ亜属の割合が減少し、マツ属の割合が増加する傾向が認められる。

草本花粉では大きな変化は認められず、イネ科花粉が多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属、タンポポ科などを伴う。また、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水湿地生植物の花粉・胞子も、わずかではあるが検出される。なお、イネ属花粉の割合は、約 31-35%である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表 2、図 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下、地点別に述べる。

・ I -1 区

水田遺構面の試料番号 6 と 22 でもイネ属が検出されるものの、その含量は少ない。短細胞珪酸体はともに 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体は試料番号 6 が 100 個 /g 未満、試料番号 22 が約 240 個 /g である。この他には、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体などが認められる。しかし、その多くは 100 個 /g 未満である。

・ II -2 区

試料番号 5, 6 からは、いずれも栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。ただし、その含量は少なく、短細胞珪酸体が 200-400 個 /g、機動細胞珪酸体が 400-500 個 /g である。この他には、I -2 区と同様にネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。ただし、その多くが 100 個 /g 未満であり、多くても 500 個 /g 未満である。またイネ科起源の他に、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン, 1981）も多い点が共通する。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈する。

4. 考察

(1) 古植生

弥生時代後期の水田面とされる I -2 区平面（試料番号 2, 4, 5, 7）、および同層準である I -2 区断面の 10 層（試料番号 8, 12, 13）のいずれも、同様の花粉化石群集組成を示す。比較的広域の周辺植生を反映する種類についてみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属-ムクノキ属などの広葉樹に由来する花粉を伴う。多産するアカガシ亜属は、シイノキ属、ヤマモモ属などとともに温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、マキ属、スギ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、当時の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹が林分を形成

していたと推測される。また、後背丘陵縁辺部などにはコナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹が、菊池川沿いや周辺の低湿地には、サワグルミ属、ニレ属—ケヤキ属などが生育していた可能性がある。

なお、試料番号 16 はやや群集が異なり、他の試料で多産するアカガシ亜属の割合が少ない。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など）。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている。花粉化石の保存状態が悪いことや、検出される種類数が少ないことなどを考慮すると、試料番号 16 の花粉化石群集は経年変化による分解の影響を受け、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。また、定量解析を行えるだけの個体数を得られなかった試料番号 11, 14 では、その大部分が同様の理由により分解・消失したと推測される。

以上より、流路遺構 SX-01 を挟んだ南側と北側では、花粉化石の保存状態に大きな差が認められた。いずれの試料も同層準であることを考慮すると、SX-01 を挟んだ南側と北側では、堆積環境にある程度の差が存在した可能性がある。この点については、珪素分析や堆積物微細構造分析などを実施し、検討することが望まれる。

一方、II -2 区断面では、下位の 8b 層（試料番号 6）から上位の 6b 層（試料番号 3）に向かって、アカガシ亜属が減少し、マツ属が増加する傾向が認められた。増加するマツ属の多くは複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、九州では 1500-1000 年前頃とされ、その原因は農耕などにより森林が破壊されたことに起因するとされている（たとえば那須, 1980; 波田, 1987 など）。今回の分析では草本群集に大きな変化は認められなかったが、以前に実施した I -2 区断面の分析結果からは、同様にアカガシ亜属、シイノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ亜属などが増加する傾向が認められ、さらにマツ属の増加と共にイネ属の割合も増加している。これらのことを考慮すると、弥生時代から古墳時代にかけて、本遺跡周辺の照葉樹林の伐採が増加しはじめた可能性が指摘できる。

草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科ヨモギ属などを伴う。これらは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、同様の生育環境を示すものではクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ナデシコ科、バラ科、キク亜科、タンポポ亜科などがあげられる。植物珪酸体分析からは、ネザサ節を含むタケ亜科、コブナグサ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されている。よって、当時の本遺跡内および周囲の草地などに、これらの草本類が生育していたと思われる。

また、ガマ属をはじめとしてサジオモダカ属、オモダカ属、スブタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、ヨシ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子・植物珪酸体も検出する。特に SX-01 南壁および東壁からは、ガマ属と比較的水深の深い場所に生育するヒシ属がやや多く検出される。よって、SX-01 内や、周辺河川内・河畔などの湿地部に、これらの水湿地生植物が生育していたと推測される。

(2) 稲作について

前回の報告においては、I -1 区からは大畦、小畦などの水田遺構が検出されていることから、稲作の検

証を目的としてイネ属同定を実施した。その結果、いずれの試料からもイネ属花粉が高い割合で検出されたことから、I-1区において水田耕作を行っていたと想定された。今回、その点を検証することを目的として、植物珪酸体分析を実施した。その結果、大畦の南側水田面の試料番号6、北側水田面の試料番号22ともにイネ属の葉部に形成される植物珪酸体が検出された。これより、各地点でイネ属の植物体が混入した可能性が考えられる。一般に稲作が行われた水田跡の土壌からは、イネ属の機動細胞珪酸体が5,000個/g程度検出されることが知られており、この程度の産出が認められると安定した水田稲作が行われたと推定される(杉山, 2000)。ただし、畦畔などの水田関連の遺構が検出されている場合でも、土壌中に残留する植物珪酸体含量が少ないことがある。その要因には、稲作の様態や耕作期間、堆積環境などが挙げられる。以前に実施した花粉分析結果を考慮すれば、検出されたイネ属の植物珪酸体は水田面での稲作に由来すると考えられる。含量が少なかった点は、収穫後の稲藁を水田の外に持ち出し、耕作土に還元することが少なかったことなどが想定される。

I-2区をみると、SX-01南側平面ではイネ科花粉におけるイネ属花粉の割合が約43-52%、北側平面で約37%、SX-01内で29-36%であった。中村(1980)は、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせるとのべている。この点を考慮すると、今回分析したいずれの試料についても、稲作が実施されていた可能性がある。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属などには、水田雑草となりうる種を含む分類群であることから、SX-01内や周辺湿地だけでなく、水田雑草としても生育していた可能性がある。

II-2区においても、イネ属花粉の割合は31-37%であり、8a層と8b層からは、含量が少ないもののイネ属に由来する植物珪酸体も検出される。前述の研究例やI-1区の分析結果などを考慮すれば、これらの土層でも稲作が行われていた可能性が指摘できる。

引用文献

- 波田 善夫, 1987, 松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 -松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について-。資料集, 日本自然保護協会, 41-49.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 -総括報告書-, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 那須 孝悌, 1980, 花粉分析からみた二次林の出現. 関西自然保護機構会報, 4, 3-9.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

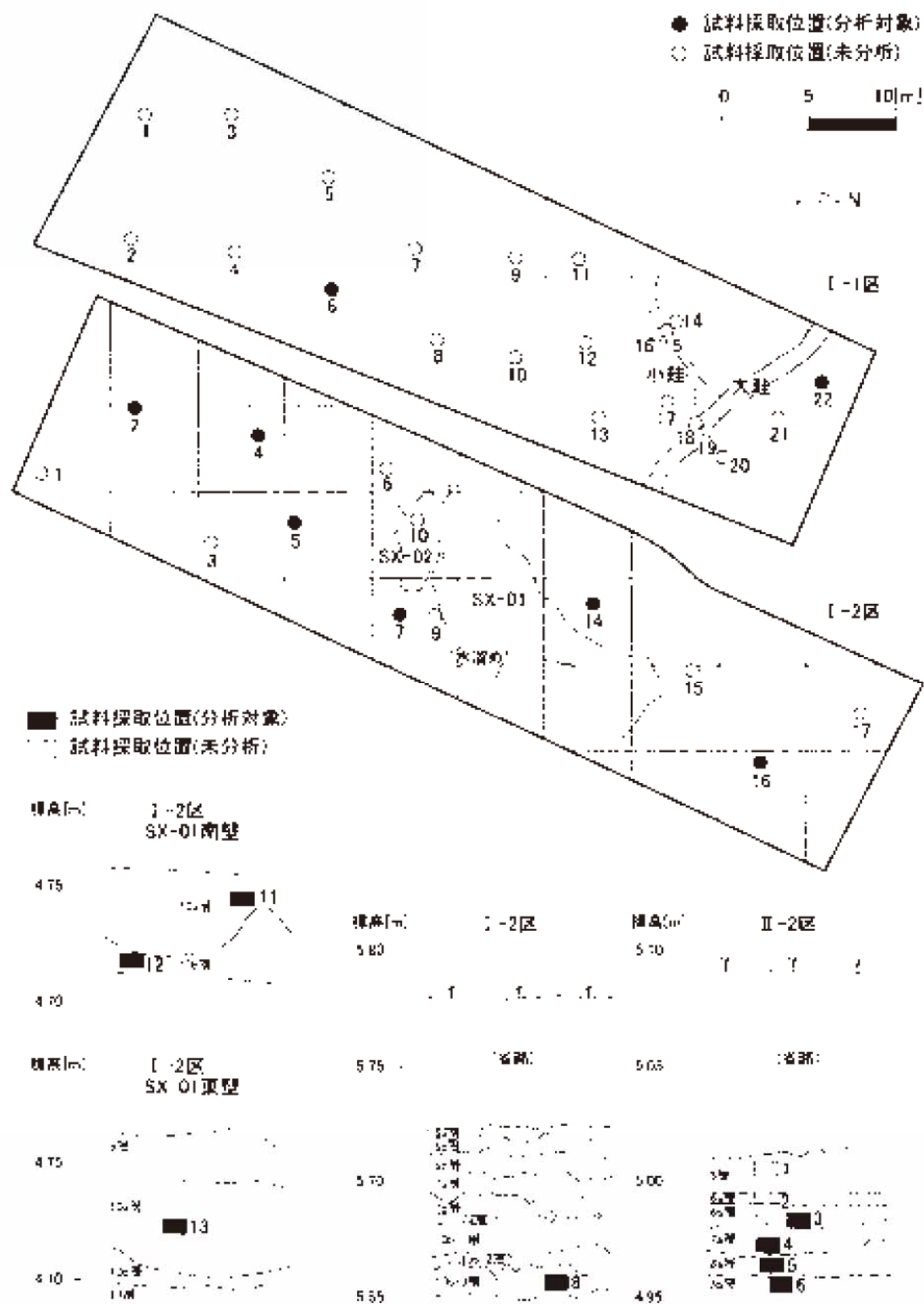


図1 各地区における模式平面図・模式断面図および試料採取位置

表1. 花粉分析結果

種類	試料番号	I-2区										II-2区			
		2	4	5	7	8	11	12	13	14	16	3	4	5	6
木本花粉															
マキ属		2	1	1	-	-	-	-	1	-	7	3	1	2	10
モミ属		12	5	9	12	6	1	9	9	1	57	30	33	26	46
ツガ属		6	2	7	9	10	1	6	3	-	46	61	34	24	23
トウヒ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	1	
マツ属複維管束亜属		27	19	17	21	11	2	11	15	-	56	62	44	43	27
マツ属(不明)		16	11	7	9	11	3	5	5	1	23	23	50	12	9
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-
スギ属		1	4	4	2	-	1	1	3	-	-	1	3	-	1
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		3	-	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属		-	1	2	5	3	-	2	1	-	1	7	3	2	6
ノグルミ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属		3	1	2	1	1	-	3	1	-	-	1	2	3	2
クルミ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1
クマシデ属-アサダ属		5	9	6	9	1	-	-	6	-	2	4	5	2	6
カバノキ属		1	1	3	2	3	-	1	3	-	-	-	4	3	-
ハンノキ属		-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-
ブナ属		2	2	1	2	2	-	1	2	-	1	4	-	-	3
コナラ属コナラ亜属		12	17	13	15	1	1	10	17	-	2	11	14	3	12
コナラ属アカガシ亜属		87	101	105	116	51	10	76	96	-	20	72	95	93	112
クリ属		3	3	3	2	-	-	4	1	-	1	1	-	-	1
シノキ属		14	11	19	20	3	1	19	11	-	1	2	11	6	9
ニレ属-ケヤキ属		1	4	2	2	3	-	-	2	-	1	3	2	1	3
エノキ属-ムクノキ属		3	10	6	5	-	-	3	12	-	-	-	4	3	12
イスノキ属		-	-	2	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
フウ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジャケツイバラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属		-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属		2	-	2	2	-	-	3	1	-	-	2	-	1	-
カエデ属		-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-
ブドウ属		1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
ノブドウ属		-	-	1	1	-	1	23	4	-	-	-	-	-	-
シナノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1
ツツジ科		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
カキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
エゴノキ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属		-	-	-	-	-	-	38	1	-	-	-	1	-	-
草本花粉															
ガマ属		19	4	2	1	-	2	23	78	-	1	-	-	-	-
サジオモダカ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オモダカ属		2	6	5	5	-	-	-	2	-	-	1	3	-	-
スプタ属		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロモ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズオオバコ属		1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ属		146	145	129	186	49	7	43	57	-	50	76	90	68	90
他のイネ科		140	135	173	197	103	22	106	99	-	84	169	168	139	168
カヤツリグサ科		23	24	36	37	18	5	15	36	-	12	48	32	19	11
イボクサ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズアオイ属		10	10	5	8	4	3	2	14	-	-	-	3	7	4
ウウ科		-	1	1	2	1	-	1	7	-	-	-	1	-	-
ギンギン属		1	-	-	2	1	-	2	4	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		3	2	2	2	-	2	-	1	-	8	21	6	5	5
アカザ科		1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科		-	-	-	1	1	2	3	-	-	-	1	-	-	2
キンポウゲ属		-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科		1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
バラ科		-	-	-	-	-	1	14	2	-	-	-	-	-	-
マメ科		-	1	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
ヒシ属		-	1	-	1	-	-	6	5	-	-	-	-	-	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科		1	1	1	1	-	-	1	-	-	-	4	-	1	-
シソ科		-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属		6	4	7	5	3	1	11	3	-	1	8	4	1	2
キク亜科		1	1	1	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	7
タンポポ科		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	4	-	2
不明花粉															
		15	8	11	7	5	1	13	12	1	-	10	5	5	7
シダ類孢子															
ヒカゲノカズラ属		1	-	-	1	-	1	-	-	-	3	4	-	1	2
イノモトソウ属		1	1	1	1	1	1	1	3	-	6	31	5	1	3
ミズウラボシ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウモ		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカウキクサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	22
他のシダ類孢子		24	23	20	30	40	12	30	54	1	70	240	73	48	86
合計															
木本花粉		203	206	215	244	106	21	225	200	2	222	294	312	229	288
草本花粉		356	340	369	453	180	45	231	311	0	156	334	313	241	294
不明花粉		15	8	11	7	5	1	13	12	1	0	10	5	5	7
シダ類孢子		26	24	21	32	41	15	31	57	1	79	276	78	51	113
総計(不明を除く)		585	570	605	729	327	81	487	568	3	457	904	703	521	695

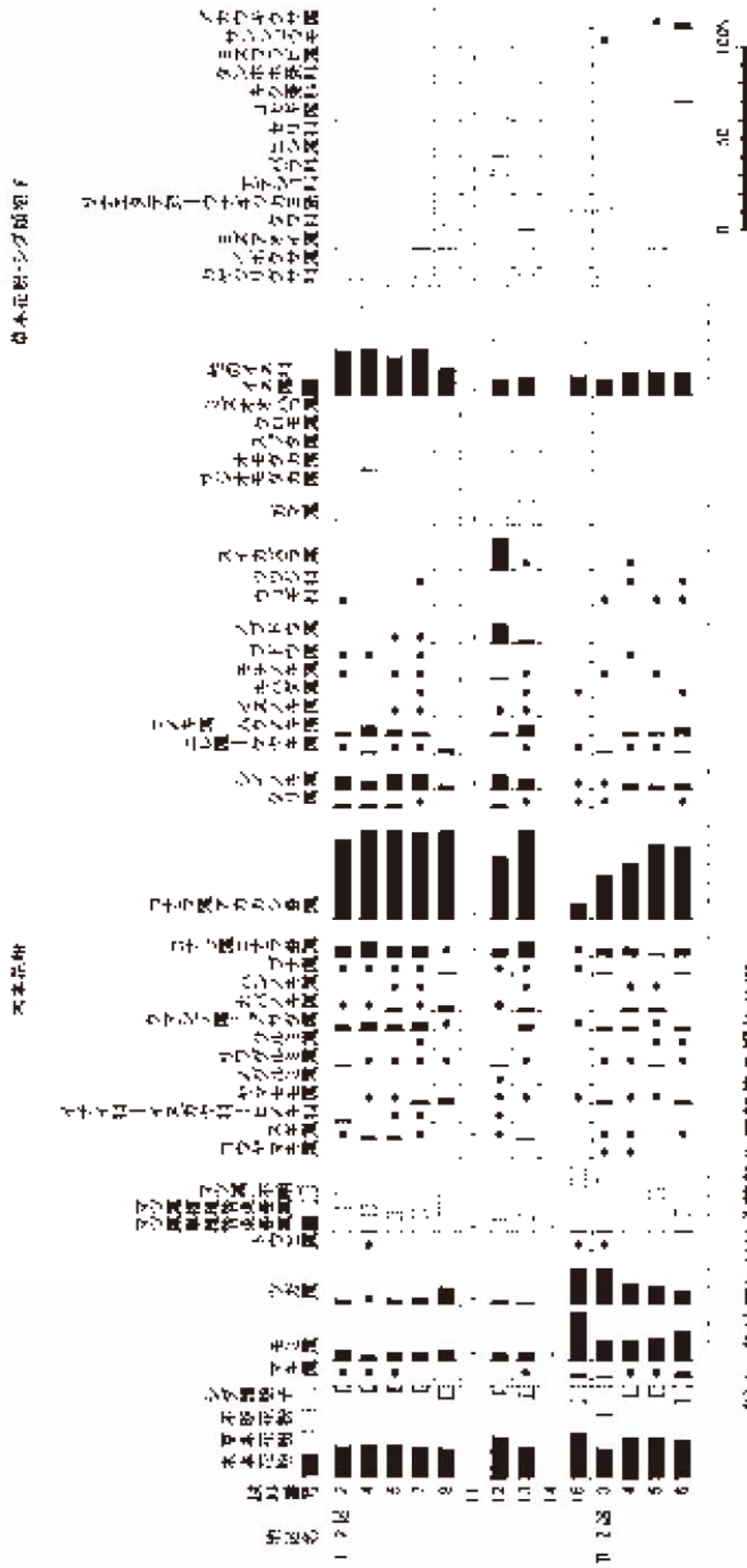


図2 各地区における花粉化石訂集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類は総数は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は1%未満、+は木本花粉100%を基源の試料について検出した層位を示す。

表2. 植物珪酸体含量 (個/g)

種類 試料番号	I -1 区		II -2 区	
	6	22	5	6
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	<100	<100	417	219
タケ亜科ネザサ節	<100	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	216	137
ヨシ属	<100	<100	127	119
ウシクサ族コブナグサ属	-	<100	<100	<100
ウシクサ族ススキ属	-	<100	<100	<100
イチゴツナギ亜科	-	<100	149	<100
不明キビ型	<100	346	491	475
不明ヒゲシバ型	<100	<100	104	<100
不明ダンチク型	<100	113	134	110
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	<100	238	402	512
タケ亜科ネザサ節	<100	<100	<100	<100
タケ亜科	<100	<100	<100	<100
ヨシ属	<100	<100	<100	210
ウシクサ族	-	<100	<100	119
不明	<100	254	104	430
樹木起源				
第Ⅲグループ	-	<100	164	<100
第Ⅳグループ	-	<100	<100	119
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	100	800	1700	1200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	200	700	600	1400
樹木起源	0	100	200	200
総計	300	1600	2500	2800

<100 : 100 個体以下

なお、総計は各分類群の丸めない数字を合計した後に
10 の位を丸めている (100 単位にする)

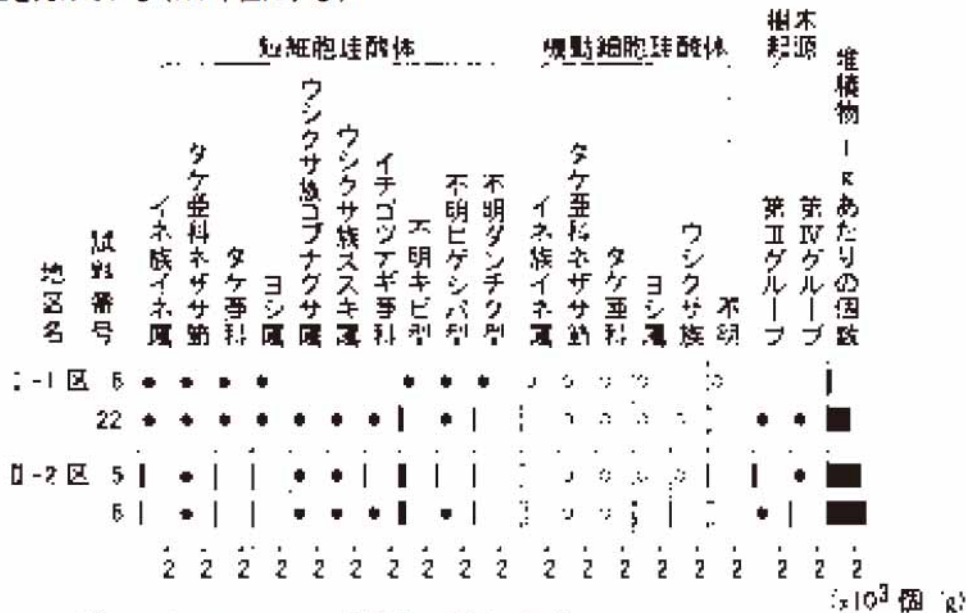
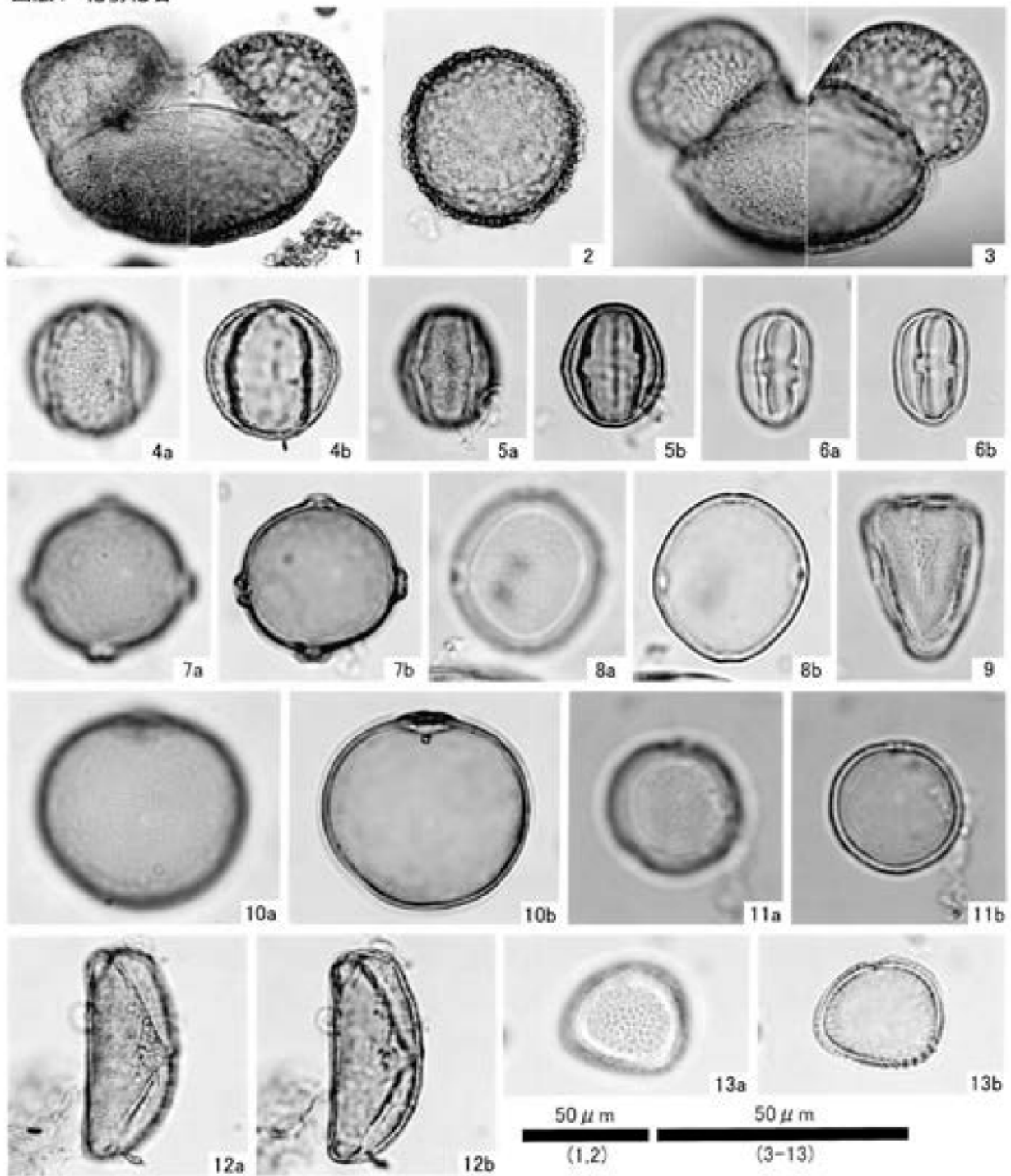


図3. 各地区における植物珪酸体含量

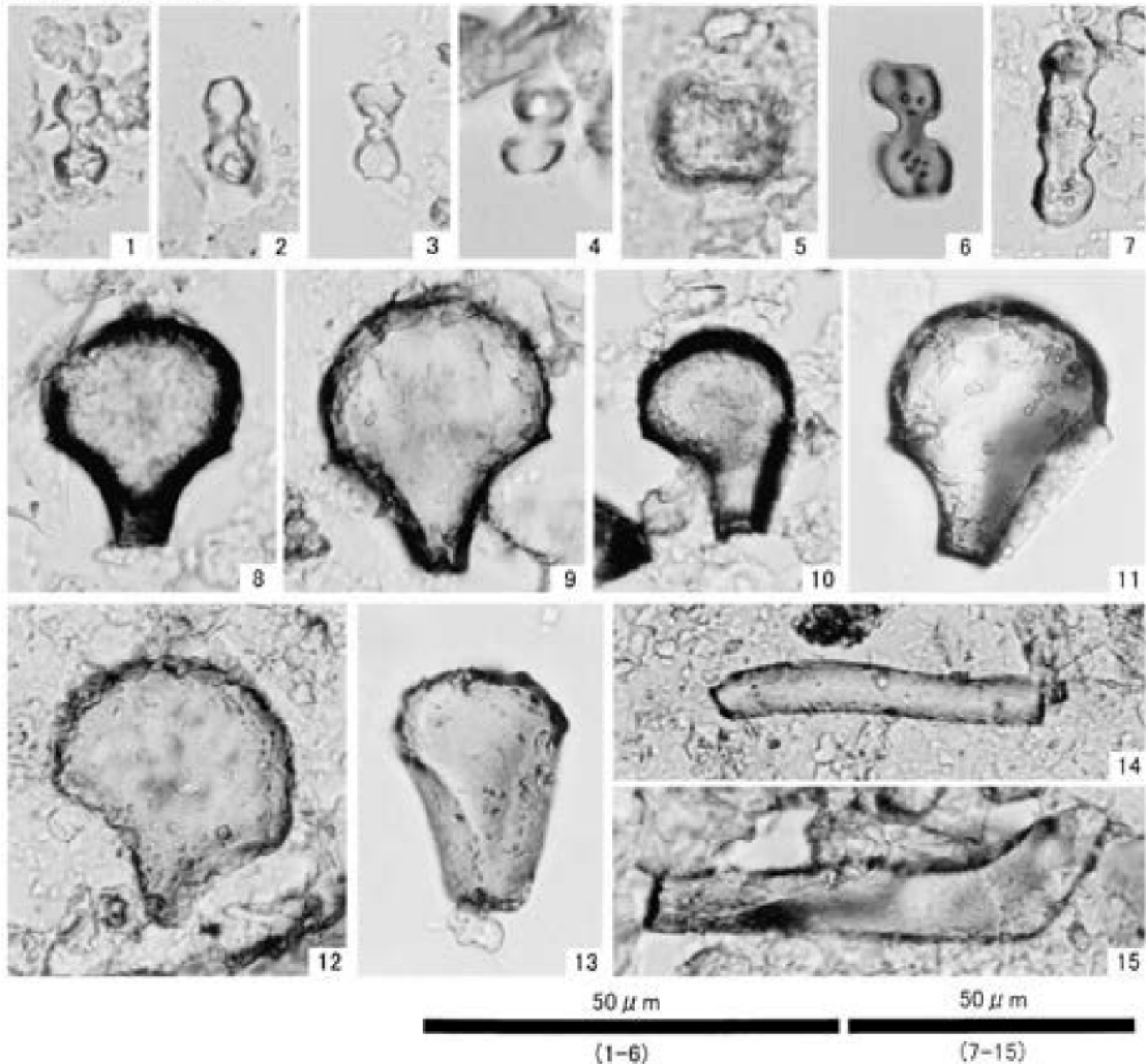
堆積物 1g あたりに換算した個数を示す。●○は 100 個/g 未満の種類を示す。

図版1 花粉化石



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. モミ属(I-2区:4) | 2. ツガ属(I-2区:4) |
| 3. マツ属(I-2区:2) | 4. コナラ属コナラ亜属(I-2区:4) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(I-2区:2) | 6. シノキ属(I-2区:4) |
| 7. クマシデ属-アサダ属(I-2区:4) | 8. エノキ属-ムクノキ属(I-2区:7) |
| 9. カヤツリグサ科(I-2区:4) | 10. イネ属(I-2区:4) |
| 11. イネ科(I-2区:4) | 12. ミズアオイ属(I-2区:4) |
| 13. ガマ属(I-2区:2) | |

図版2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:5)
2. イネ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
3. イネ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:6)
4. イネ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
6. ススキ属短細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
8. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:5)
9. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
10. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:6)
11. イネ属機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
12. ヨシ属機動細胞珪酸体(Ⅱ-2区:6)
13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(Ⅰ-1区:22)
14. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(Ⅱ-2区:5)
15. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(Ⅱ-2区:6)

第4節 05- I -1 区・2 区・05- II -2 区

両迫間遺跡における古植生と稲作の消長について（第2報）

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
3. 結果	p. 1
4. 考察	p. 2
(1) 古植生	p. 2
(2) 稲作の検証	p. 3
引用文献	p. 3

<図表・図版一覧>

表 1. 花粉分析結果

図 1. I -1 区における試料採取位置および分析地点

図 2. 主要花粉化石群集

図版 1 花粉化石

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

両迫間遺跡は熊本県玉名市大字玉名字両迫間に所在し、菊池川右岸の沖積低地に立地する弥生時代後期の遺跡である。今回調査を実施したI-1調査区からは水田の大畦の一部、小畦などの水田遺構が検出されており、それに伴う木製の杭が多数出土している。

本報告では、当時の古植生に関する情報、および水田面の平面的広がりに関する情報を得ることを目的として、花粉分析・イネ属同定を実施する。また、以前に報告したI区東壁の花粉結果のうち、今回の調査区と同じく弥生時代後期とされる層準で実施されたイネ属同定結果についても再録し、総合解析を試みる。

1. 試料

試料はI-1区から平面的に22点（試料番号1-22）、およびI-2区の断面から3点（試料番号1-3）が採取されている。

I-1区では、大畦の南側水田面より試料番号1-14, 16, 17、小畦上より試料番号15、大畦水口覆土より試料番号18, 19、大畦北側水田面より試料番号20-22が採取されている。このうち分析対象とするのは、試料番号1, 2, 5-8, 11, 12, 14-20, 22の、計16点である。

I-2区では、調査断面の7b層、8層、10層からそれぞれ各1点（試料番号1-3）を採取した。このうち、7b層（試料番号1）は砂混じりの黄灰色シルトからなり、酸化鉄、マンガンの沈着が認められる古墳時代の水田層である。8層（試料番号2）は弥生時代水田層で、砂混じりの灰色シルトからなり、10層（試料番号3）も弥生時代水田層とされているオリーブ黒色シルトである。なお、10層がI-1区水田面に相当する。

既報のI区東壁試料が採取された土層断面では、近世～現代の水田耕土より下位が5層に分層される。対象とする7c層は暗灰褐色シルトからなり、弥生時代後期の遺物を包含している。本層準から、試料番号4, 8の2点が採取されている。

各地点における試料採取位置および分析地点を図1に示す。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚

状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて図表に示す。

3. 結果

結果を表1、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。花粉化石の産出状況は良好であり、保存状態も良い。以下、調査区ごとに述べる。

・ I -1 区

花粉化石群集は、いずれの試料においても大きな変化は認められず、草本花粉が多く認められる。木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属などの、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。

なお、イネ科花粉中におけるイネ属の割合は29.2-55.7%で、平均約45.4%である。

・ I -2 区

花粉群集組成は、基本的に I -1 区と類似しており、草本花粉の割合が高い。木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。層位的な変化についてみると、上位に向かうにつれアカガシ亜属、シイノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ亜属などが増加する傾向が認められる。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。層位的には上位に向かってイネ科が増加する傾向がある。また、イネ科花粉におけるイネ属の割合は、試料番号3で53.7%、試料番号2で64.0%、試料番号1で79.4%であり、イネ属の割合も上位に向かって増加する傾向が認められる。その他に水湿地生植物であるガマ属、オモダカ属、ミズオオバコ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属なども検出される。

・ I 区東壁

本地点の花粉化石群集も、 I -1 区、 I -2 区と類似しており、木本花粉と比較して草本花粉の割合がやや高い。群集組成も大きく異なっておらず、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などを伴う。

草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属などの、水湿地生植物に由来する花粉化石も検出される。

4. 考察

(1) 古植生

比較的広域の周辺植生を反映する種類についてみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属、エノキ属—ムクノキ属などの広葉樹に由来する花粉を伴う。多産するアカガシ亜属は、シイノキ属、ヤマモモ属などとともに温帯性常緑

広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、マキ属、スギ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、当時の本遺跡周辺には、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹が林分を形成していたと推測される。また、後背丘陵縁辺部などにはコナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹が、菊池川沿いや周辺の低湿地には、ヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などが生育していた可能性がある。

I-2区でみられた層位的な変化についてみると、下位の9層（試料番号3）から上位の7b層（試料番号1）に向かって、アカガシ亜属、シイノキ属が減少し、マツ属、モミ属、ツガ属、コナラ亜属などが増加する傾向が認められ、増加するマツ属の多くは複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。マツ属の急増は日本各地で知られており、九州では1500-1000年前頃とされ、その原因は農耕などにより森林が破壊されたことに起因するとされている（たとえば那須, 1980; 波田, 1987など）。今回の結果もマツ属などの増加に伴い、イネ属の割合が増加することを考慮すると、弥生時代から古墳時代にかけて、遺跡周辺の照葉樹林の伐採が増加しはじめた可能性がある。その結果、花粉化石群集に、二次林としてのマツ属や後背の針葉樹、広葉樹が強く反映されるようになったと推測される。

既存の研究結果から指摘される九州地方の植生変遷をみると、落葉広葉樹が優占していた植生から、約8500年前以降にアカガシ亜属、シイノキ属などの照葉樹林が発達し始め、約6000年前頃に照葉樹林の最盛期に達する。その後、照葉樹林を主体としつつ針葉樹や温帯性落葉広葉樹を再び伴うようになり、約1500年前以降にアカガシ亜属、シイノキ属の衰退とマツ属、イネ科の急増へと変化するとされている（たとえば畑中ほか, 1998など）。今回の分析結果は、既存の調査結果と調和的であることから、本地域も同様の植生変遷をたどったと考えられる。

草本類についてみると、イネ科が多産し、カヤツリグサ科ヨモギ属などを伴う。これらは、開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、同様の生育環境を示すものではクワ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ナデシコ科、アブラナ科、キク亜科などがあげられる。よって、当時の本遺跡内および遺跡周囲の草地などに、これらの草本類が生育していたと思われる。

また、ガマ属をはじめとしてサジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属など、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出する。よって、本遺跡内の流路や周辺河川内、およびその河畔などの湿地部に、これらが生育していた可能性がある。

(2) 稲作の検証

I-1区からは大畦、小畦などの水田遺構が検出されていることから、稲作の検証を目的としてイネ属同定を実施した。その結果、いずれの試料からもイネ属花粉が検出され、イネ科花粉におけるイネ属の割合は約29-56%と高い値を示した。中村（1980）は、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせると述べている。これを考慮すると、今回の結果は平均約45%を示すことから、調査対象としたI-1区試料採取範囲においては水田耕作を行っていたと想定され、発掘調査所見等と整合する。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イネ科の一部、

カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、ミズワラビ属、アカウキクサ属などは、水田雑草となりうる種を含む分類群であることから、流路や湿地部だけでなく、水田内にも生育していた可能性がある。

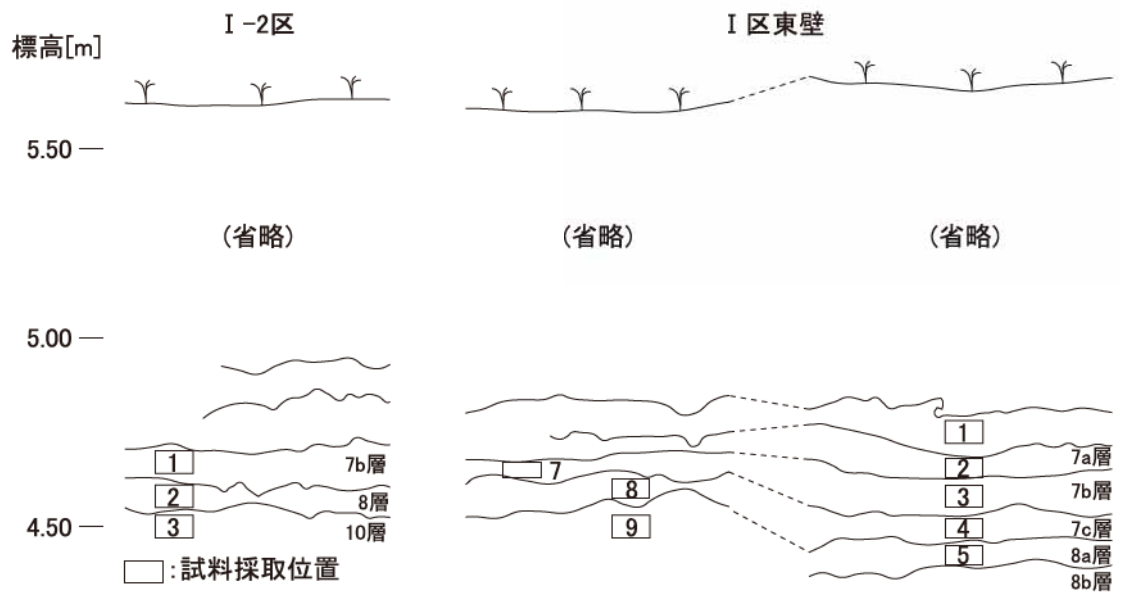
平面的な分布をみると、試料番号6で約30%、試料番号8で約37%、試料番号18,19で約35%と若干低い割合であり、それ以外の試料ではいずれも40%を超える値を示す。試料番号18,19は、発掘調査所見から大畦の水口と考えられていることから、覆土の堆積過程が他の地点と異なっていた可能性がある。試料番号6,8の差については、何を反映しているか現時点で不明であるが、採取地点が近いことから微地形など反映している可能性がある。

垂直的な変化をみると、9層から上位の7b層に向かって、イネ属の割合が増加する傾向が認められる。これは、水田における集約度の違い、あるいは耕作期間の違いなどを反映している可能性がある。

I区東壁において、弥生時代後期の水田の可能性が指摘される7c層（試料番号4,8）についてもイネ属同定を行った結果、イネ属の割合は試料番号4,8ともに約37%程度であり、今回の分析結果と同等の値であるといえる。また、水田雑草となりうるガマ属、オモダカ属、クロモ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属なども検出されることから、I区東壁の7c層においても稲作が行われていた可能性が示唆される。

引用文献

- 波田 善夫, 1987, 松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 —松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の攪乱とその動態について—, 資料集, 日本自然保護協会, 41-49.
- 畑中 健一・野井 英明・岩内 明子, 1998, 九州地方の植生史. 安田 喜憲・三好教夫(編著), 図説日本列島植生史, 朝倉書店, 151-161.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 —総括報告書—, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 那須 孝悌, 1980, 花粉分析からみた二次林の出現. 関西自然保護機構会報, 4, 3-9.



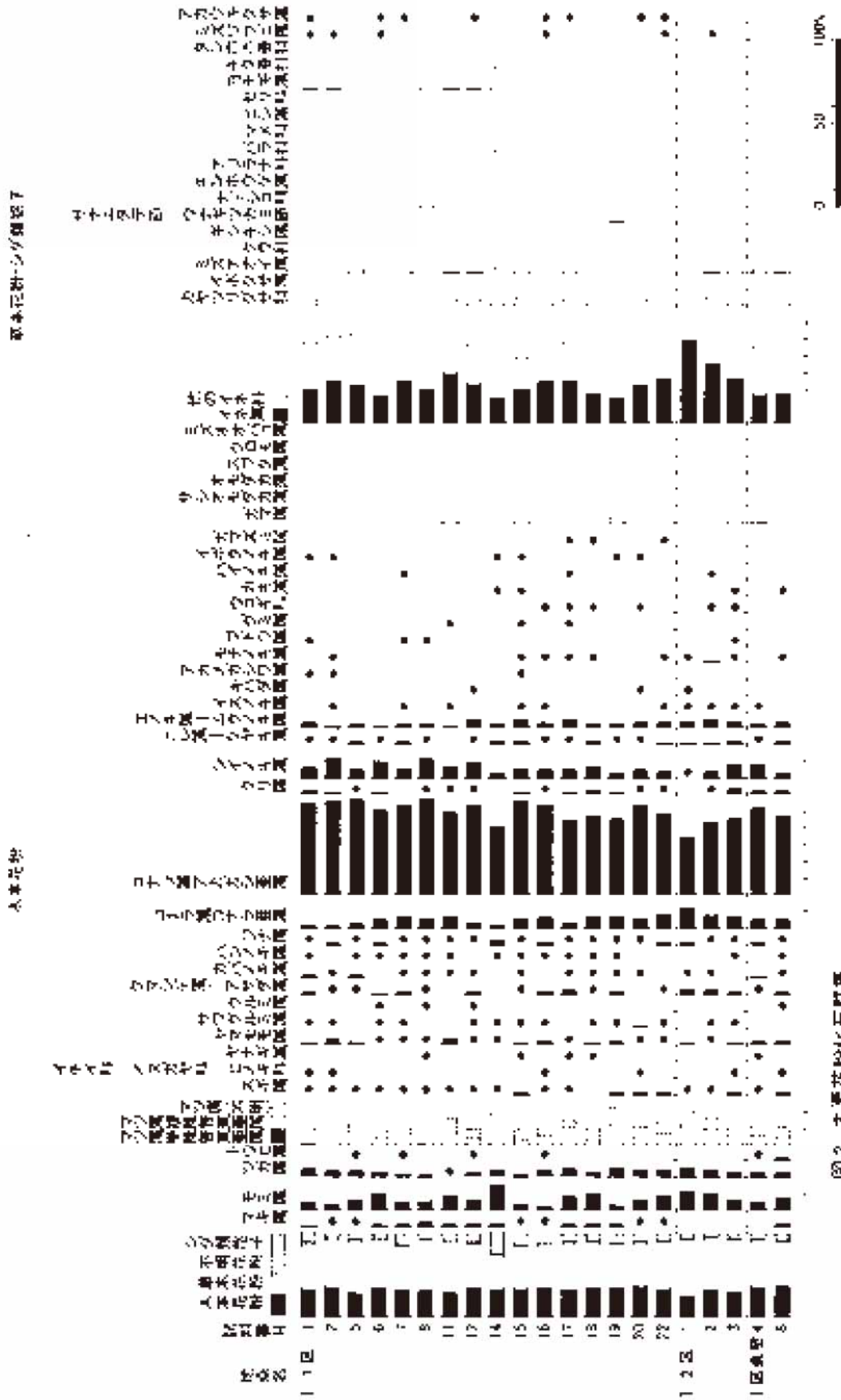
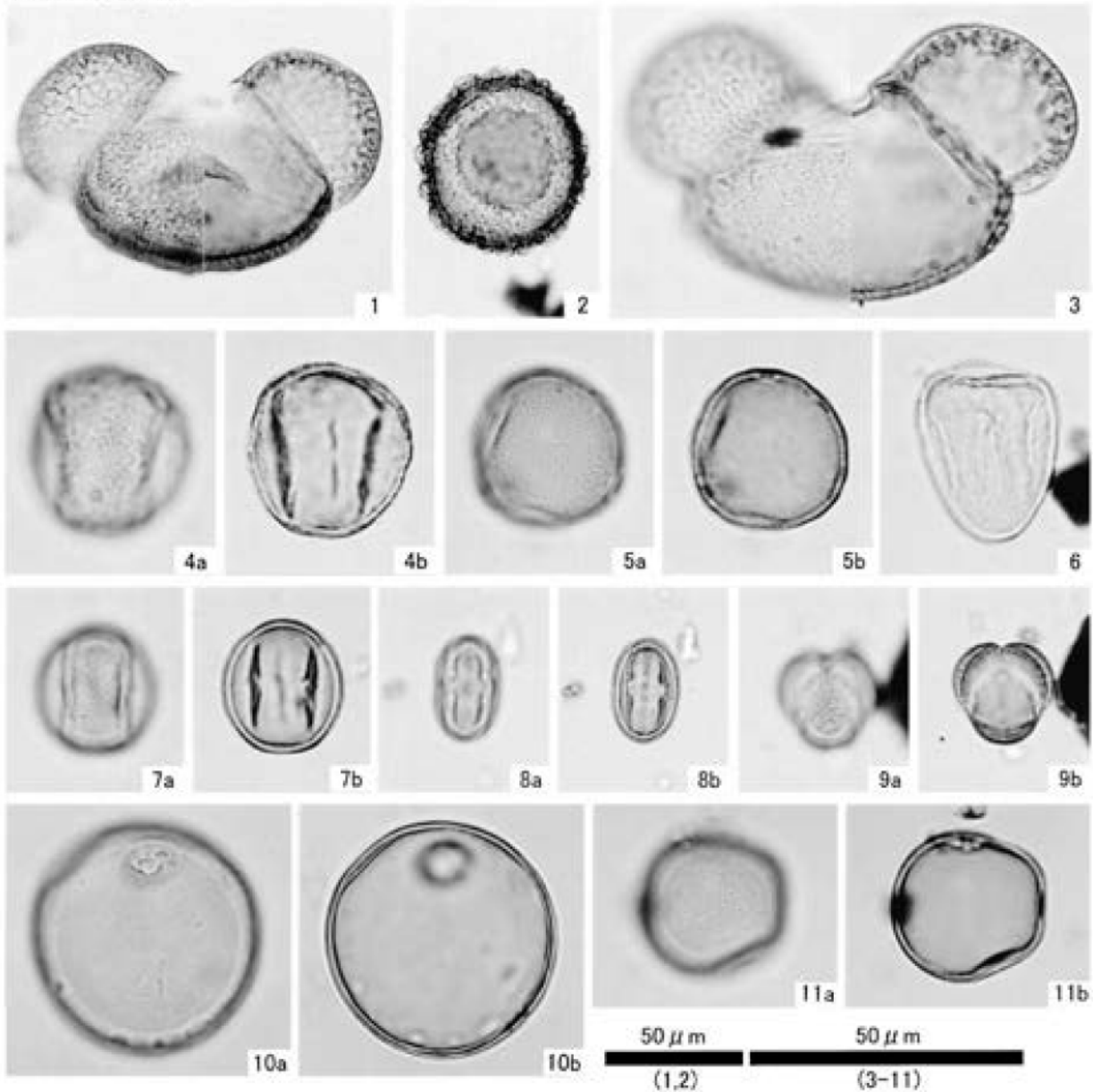


図2 主要花粉化石群集
出現率は、日本花粉は日本花粉化石総数、日本花粉化石総数は総数より不明花粉を除く数を基として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

表1. 花粉分析結果

種 類 試料番号	I-1区																						I-2区			I区東壁	
	1	2	5	6	7	8	11	12	14	15	16	17	18	19	20	22	1	2	3	4	8						
木本花粉																											
マキ属	3	2	1	4	4	7	3	5	2	2	2	4	3	3	1	1	-	-	-	-	5						
モミ属	13	9	15	26	12	12	18	12	15	8	6	18	22	6	13	19	23	23	12	12	16						
ツガ属	13	10	9	9	4	3	1	5	4	3	8	11	7	11	8	9	12	9	5	8	7						
トウヒ属	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	3						
マツ属単維管束亜属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
マツ属複維管束亜属	12	10	18	10	14	2	14	8	10	6	12	23	5	27	10	14	24	20	10	13	10						
マツ属(不明)	15	16	13	14	9	10	20	12	9	16	10	9	17	21	12	15	19	15	11	14	13						
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1						
スギ属	2	1	2	1	2	1	1	1	1	3	1	2	-	3	4	4	2	1	3	1	3						
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1						
ヤナギ属	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-						
ヤマモモ属	3	9	4	1	2	1	7	2	1	3	6	1	4	4	1	1	3	1	3	5	6						
サワグルミ属	1	2	-	2	1	-	-	2	1	1	2	-	1	1	3	1	-	1	1	-	-						
クルミ属	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1						
クマシデ属-アサダ属	5	2	1	3	5	1	-	5	-	2	5	6	2	3	-	2	7	6	3	1	3						
カバノキ属	6	2	4	-	2	2	1	1	-	1	-	2	2	2	2	-	1	1	-	3	1						
ハンノキ属	1	-	1	1	2	2	1	-	1	2	1	1	1	1	-	-	-	-	2	-	1						
フナ属	1	3	2	3	1	1	1	1	3	2	3	2	1	2	1	3	3	1	2	4	2						
コナラ属コナラ亜属	6	3	6	14	16	12	15	7	2	15	14	6	15	16	11	17	25	17	15	12	11						
コナラ属アカガシ亜属	151	148	136	132	121	125	102	113	41	138	120	100	103	96	109	103	72	97	91	120	100						
クリ属	8	4	1	5	-	1	1	2	-	5	2	4	5	3	1	1	-	1	7	5	5						
シノキ属	17	31	12	26	13	25	15	20	3	14	11	11	14	6	10	8	1	8	16	20	7						
ニレ属-ケヤキ属	1	2	5	2	4	1	-	2	2	6	1	2	4	1	1	3	3	3	4	1	4						
エノキ属-ムクノキ属	9	5	7	4	6	5	3	11	3	12	7	11	6	5	7	7	8	12	8	7	7						
イスノキ属	-	1	-	-	1	-	1	-	-	2	1	-	-	-	-	1	2	1	1	1	-						
カラスザンショウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
コクサギ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-						
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-						
アカメガシワ属	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1						
モチノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	1	1	3	1	-	1						
カエデ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ブドウ属	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-						
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	2	1						
グミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	2	-	-	1	2	-	-						
ミズキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-						
ツツジ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
カキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1						
ハイノキ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-						
エゴノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-						
イボタノキ属	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-						
トネリコ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ニワトコ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-						
草本花粉																											
ガマ属	1	1	-	-	7	-	10	-	1	26	-	1	1	21	1	-	-	1	32	7	-						
サジモダカ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
オモダカ属	3	3	3	1	2	1	-	1	-	6	1	1	-	2	-	1	-	1	2	1	-						
スプタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
クロモ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	3	-						
ミズオオバコ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	3	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-						
イネ属	157	181	188	114	179	129	204	138	47	146	160	165	104	88	118	166	431	249	169	106	93						
他のイネ科	227	200	250	276	145	220	162	145	60	141	134	153	190	163	140	152	112	140	146	180	160						
カヤツリグサ科	32	24	51	25	22	18	28	20	5	36	30	26	19	29	19	31	39	34	36	30	20						
イボクサ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1						
ミズアオイ属	3	3	20	4	13	4	9	6	2	15	-	9	5	5	2	3	4	7	21	11	7						
クワ科	3	-	3	-	2	3	-	-	-	1	-	1	1	1	5	-	1	-	3	3	2						
ギンギン属	1	-	2	-	2	-	-	-	-	1	1	1	1	1	2	3	1	1	2	1	-						
サナエタテ節-ウナギツカミ節	1	1	1	2	2	5	2	-	1	1	-	1	2	7	-	4	4	1	3	1	1						
アカザ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-						
ナデシコ科	1	1	1	4	1	7	3	-	-	2	3	1	-	-	-	1	2	2	-	-	-						
カラマツソウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
キンボウゲ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	4	1	-	-	-	-	-	-	2	1						
キンボウゲ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
アブラナ科	-	-	-	1	-	3	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-						
バラ科	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-						
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
キサキグサ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ヒシ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	4	4	-	-	-	-	-	1	-	1	1						
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
セリ科	1	1	-	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1						
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-						
ヨモギ属	9	9	7	6	6	14	9	8	4	7	6	1	5	4	2	4	2	-	3	6	3						
オナモミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
キク亜科	-	1	2	-	1	2	-	2	1	2	-	2	1	2	2	2	-	2	-	1	1						
タンポポ科	-	1	-	-	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1						
不明花粉	23	14	17	5	5	8	11	11	3	8	12	10	12	5	9	9	5	6	11	7	12						
シダ類胞子																											
ヒカゲノカズラ属	-	1	1	1	1	-	-	2	1	-	1	1	1	2	-	-	1	-	1	-	-						
ゼンマイ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
イノモトソウ属	2	1	-	1	1	4	3	1	2	1	2	4	-	2	2	1	5	2	1	2	5						
ミズワラビ属	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-						
アカウキクサ属	1	-	-	1	1	-	-	1	-	-	1	2	-	-	1	1	-	-	-	-	-						
他のシダ類胞子	76	33	52	38	91	35	53	58	76	99	71	57	48	67	46	48	52	28	33	41	39						
合 計																											
木本花粉	272	264	238	259	225	215	207	212	101	247	222	221	217	212	201	212	210	223	200	232	211						
草本花粉	442	429	528	436	388	407	428	323	127	391	343	371	333	326	292	369	597	442	419	357	292						
不明花粉	23	14	17	5	5	8	11	11	3	8	12	10															

図版1 花粉化石



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. モミ属(I-1区:1) | 2. ツガ属(I-1区:1) |
| 3. マツ属(I-1区:2) | 4. コナラ属コナラ亜属(I-1区:2) |
| 5. エノキ属-ムクノキ属(I-1区:1) | 6. カヤツリグサ科(I-1区:2) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属(I-1区:1) | 8. シイノキ属(I-1区:1) |
| 9. ヨモギ属(I-1区:1) | 10. イネ属(I-1区:5) |
| 11. イネ科(I-1区:5) | |

第5節 木樋 (SX-43)

両迫間日渡遺跡検出木樋の自然科学分析調査

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 放射性炭素年代測定	p. 1
(2) 樹種同定	p. 1
(3) 珪藻分析	p. 2
(4) 花粉分析・イネ属同定	p. 2
(5) 植物珪酸体分析	p. 2
3. 結果	p. 3
(1) 放射性炭素年代測定	p. 3
(2) 樹種同定	p. 3
(3) 珪藻分析	p. 3
(4) 花粉分析・イネ属同定	p. 4
(5) 植物珪酸体分析	p. 4
4. 考察	p. 4
(1) 木樋の時代と用材選択	p. 4
(2) 木樋内の堆積環境と水質	p. 4
(3) 古植生	p. 5
引用文献	p. 6

<図表・図版一覧>

- 表 1. 放射性炭素年代測定結果
 表 2. 暦年較正結果
 表 3. 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群
 表 4. 珪藻分析結果
 表 5. 花粉分析結果
 表 6. 植物珪酸体含量

- 図 1. 主要珪藻化石群集
 図 2. 植物珪酸体含量

- 図版 1 木材・花粉化石
 図版 2 珪藻化石
 図版 3 植物珪酸体

はじめに

熊本県玉名市大字玉名字両迫間に所在する両迫間日渡遺跡は、菊池川右岸の沖積低地に立地しており、これまでの発掘調査により縄文時代～奈良時代、および中世を主体とすることが明らかになっている。当社では自然科学分析を継続実施しており、弥生時代以降の古環境の変遷にかかわる資料を作成してきたが、同時に弥生時代後期の水田遺構や水路をはじめとする各種遺構や土層を対象として、主に稲作の時空的な消長に関する情報を蓄積してきた。

今回の分析調査では、07-Ⅱ地区より検出された木樋を対象として、その時代観・用材選択に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、樹種同定を実施する。また、木樋内の水質、周辺植生等に関する情報を得ることを目的として、木樋覆土を対象に珪藻分析、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

07-Ⅱ区木樋は、基本土層の7b層を削んで形成された溝状の凹地に設置されており、その上位の6b層はこれらを覆って堆積している。先に分析調査を行った06-Ⅲ区では、7b層が弥生時代前期、6b層が古墳時代と想定されている。したがって、このような土層対比と周辺の遺物出土状況などから、この木樋は古墳時代中期以前の可能性が指摘されている。なお、当社技師1名による現地調査所見によれば、この木樋の内面には、数cm幅の工具痕が内面の湾曲面を平滑にするように連続的に認められており、特に節に相当する部分などではこれを除去するように工具痕が集中していた。

分析試料は、当社技師1名が現地調査時に木樋から採取した木材1点と、木樋覆土の土壌1点である。このうち木材試料1点は放射性炭素年代測定、樹種同定を実施することとし、観察できる範囲の中で最も樹皮側の外縁に近いと考えられる部分を対象に、年輪界2～3本が入るよう注意して採取を行い、アルミホイルで梱包した上でビニール袋に収納した。覆土土壌1点については珪藻分析、花粉分析・イネ属同定、植物珪酸体分析を実施することとし、調査区内ベルトを利用して木樋底に近い部分を直方体（幅10cm厚さ5cm奥行き5cm）として塊状に採取し、ビニール袋中に収納した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投

入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX- II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール (抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998) を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林 (1991)、伊東 (1995, 1996, 1997, 1998, 1999) や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではないが、1 プレパラートあたり 50 個体以上の試料については 2 枚検鏡する)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺 (2005)、小林ほか (2006) などを参照し、分類体系は Round, Crawford & Mann (1990) に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に分け、貧塩性種については、さらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積

環境の解析は、貧塩性種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種を参考とする。

(4) 花粉分析・イネ属同定

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

イネ属同定はノマルスキー微分干渉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。結果は花粉分析と合わせて表に示す。

(5) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「< 100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表 1 に、暦年較正結果を表 2 に示す。測定の結果、木樋の年代値は $2,980 \pm 40\text{BP}$ であった。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1

とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、木樋は calBC 1,288-1,130 である。

(2) 樹種同定

木樋はクスノキに同定された。以下に主な解剖学的特徴を記す。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高でやや階層状に配列する傾向がある。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

(3) 珪藻分析

珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表3に、結果を表4、図1に示す。珪藻化石の産出頻度は少ないが、堆積環境を検討する上で有意な量が産出する。産出分類群数は、25属30分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が約80%と優占する。これに付随して、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約17%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水性種が優占あるいは多産する。

主な産出種は、好流水性種の *Achnanthes crenulata* が約30%産出し、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*、止水性の *Aulacoseira granulata*、*Stauroneis acuta*、水域にも陸域にも耐性のある陸生珪藻B群の *Eunotia praerupta*、その変種の *Eunotia praerupta* var. *bidens* 等を伴う。なお、陸生珪藻B群の2種は、沼沢湿地付着生種でもある。これらの種の汚濁耐性は、止水性種を除いて、好清水性である。

(4) 花粉分析・イネ属同定

結果を表5に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解しているものが多く認められた。

検出された種類についてみると、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。栽培種であるイネ属花粉は、1個体検出された。なお、本試料からはシダ類孢子が多産する。

(5) 植物珪酸体分析

結果を表6、図2に示す。土壌試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

栽培植物であるイネ属が検出され、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が認められる。ただし、その含量は少なく、短細胞珪酸体が約200個/g、機動細胞珪酸体が約700個/gである。この他には、タケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

またイネ科起源の他に、樹木起源珪酸体の第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン, 1981）も認

められる。

4. 考察

(1) 木樋の時代と用材選択

発掘調査所見より、木樋の時代時期は古墳時代中期以前とされている。今回これを対象に年代測定を実施した結果、約3,200～3,000年前(calBC 1,288～calBC1,130)の値を示した。

木樋に用いられていた樹種は、同定の結果、常緑広葉樹のクスノキであった。クスノキは、大径木になる常緑広葉樹であり、樹幹は比較的まっすぐに立ち、直径は大きいものでは1mを超える。樟脳を多く含むために保存性・耐水性・防虫性が高く、こうした材質から選択された可能性があるが、交錯木理を有するために加工は容易ではない樹種のひとつといえる。

熊本県内では、古墳時代中期以前の木樋について樹種を明らかにした例は知られていない。一方、九州地域全体でみると、福岡県の免(鶴町)遺跡、太宰府史跡、板付遺跡、上清水遺跡Ⅲ区で古墳時代中期以前の木樋について樹種同定を実施した例がある(嶋倉,1976,1977;松本ほか,1980;株式会社吉田生物研究所,1995)。免(鶴町)遺跡では、古墳時代前期とされる木樋本体2点がクリ、木樋を固定する杭にアカガシ亜属、シイノキ、スギが確認されている。太宰府史跡では、弥生時代中期とされる木樋がヒノキに同定されている。板付遺跡では、弥生時代中期後半とされる板組合せの木樋の横板と下板がシイノキ、上板がクリに同定されている。上清水遺跡Ⅲ区では、弥生時代週末～古墳時代初頭の木樋状製品がアカガシ亜属に同定されている。これらの報告例をみると、太宰府史跡で針葉樹が利用されている他は、全て広葉樹材が利用されている。クスノキの利用例は確認できなかったが、広葉樹材を利用している点では既存の報告例とも調和的である。

(2) 木樋内の堆積環境と水質

木樋内覆土からは、好流水性種が多産した。よって、木樋が機能した頃には、木樋には流水あるいは流水を起源とした水が流れていたと考えられる。また、沼沢湿地付着生種を含む流水不定性種や陸生珪藻が産出したことから、沼沢や湿地などに堆積した土壌も流水に運ばれて木樋内に再堆積したと考えられる。なお、優占種の *Achnanthes crenulata* は、熱帯～亜熱帯性種、好清水性種、好アルカリ性種とされ、泉、小川、滝などから主に産出することから、日陰を好む陰性植物とされる(渡辺,2005)。よって、かつて木樋内に存在した流水は、半日陰に所在する泉、小川、滝などに起源する水が導水された可能性がある。なお、本遺跡が立地する熊本県玉名市両迫間付近は、菊池川が山間を流れて低地に出た所の右岸に位置しているところから、この水系の一部が木樋に導水されたことが示唆される。

かつて遺構内に存在した水域の水質を検討するには、現在の水域で使用されている有機汚濁指数値(DA1po値)を求める方法を応用することができる。これは、出現した珪藻化石を汚濁耐性の面から好汚濁性種(結果表のS)、広域適応性種(結果表のU)、好清水性種(結果表のT)の3つに類別して、汚濁の程度を珪藻の種組成に基づく汚濁指数として数量的に表す方法である(Asai & Watanabe,1995)。この方法は、都市遺跡の側溝、溝、堀、上水道の水質においても応用可能なことが判明している(大浦ほか,2007;パリノ・サーヴェイ株式会社,1991a,1991b)。今回の試料は化石の保存が悪いため現地性の面で問題も残るが、希少な木樋の調査例であり、可能な限り水質についての情報を得るべく、算出を試みた。

DAI_{po} 値は、次式で求めることができる（渡辺ほか, 1988）。

$$\text{DAI}_{\text{po}} = 50 + 1/2 (\text{好清水性種の相対頻度の和} - \text{好汚濁性種の相対頻度の和})$$

DAI_{po} 値は、100-85 が極貧腐水性水域 (xenosaprobic)、84-70 が弱貧腐水性水域 (β -oligosaprobic)、69-50 が強貧腐水性水域 (α -oligosaprobic)、49-30 が弱中腐水性水域 (β -mesosaprobic)、29-15 が強中腐水性水域 (α -mesosaprobic)、14-0 が強腐水性水域 (polysaprobic) に区分される（渡辺・浅井, 1992）。

計算の結果、汚濁指数値は 69.7 を示す。この値は強貧腐水性水域の範囲に相当し、水質的には「きれい」という範囲に区分される（福島, 1982）。よって、木樋内の水質は比較的清浄であったと想定される。また、pH は真+好アルカリ性種が多産したことから、弱アルカリ性と考えられる。

(3) 古植生

07- II 区の木樋覆土では、花粉化石の産出状況が悪く、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など）。また、花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている。検出された花粉化石の保存状態や多産するシダ類胞子などを考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残された可能性がある。

わずかながら検出された種類をみると、木本類ではコナラ属アカガシ亜属が多く産出し、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。アカガシ亜属はヤマモモ属、シイノキ属などとともに、温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属などは温帯針葉樹の構成要素である。よって、これらの木本類が、当時の本遺跡周辺に生育していたことが窺える。過去に分析調査を実施した 05 I -2 区、05 II -2 区、06- I 区、06- III 区における弥生時代後期とされる土層の花粉分析結果では、本遺跡周辺にアカガシ亜属を主体とする照葉樹林が広がっており、周辺の丘陵部等にはコナラ亜属等の落葉広葉樹が、部分的にモミ属、ツガ属などの温帯針葉樹も生育していたことを推定したことがある。今回得られた結果も、過去の分析結果と調和的であり、木樋内に水域が存在していた当時も同様の植生が存在した可能性がある。

一方、草本類をみると、栽培種ではイネ属に由来する花粉・植物珪酸体が検出される。この木樋から 10m 前後離れた 06- III 区 1 杭直下壁面では、6b 層堆積当時に稲作が行われたことが示唆されたことから、当初木樋周辺でも稲作が行われていたことが予想された。しかし、今回の両分析結果で見ると、いずれもイネ属の含量が少ないことから、この木樋の上流部に稲作地が存在していたことは想定しにくく、また木樋付近で稲作が行われたとは断定できない。

栽培種以外をみると、花粉ではイネ科が多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等を伴う。植物珪酸体ではタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が認められる。これらの多くは開けた明るい場所を好む「人里植物」を含む分類群であり、先の分析調査でも遺跡内および遺跡周囲にイネ科やカヤツリグサ科などが生育する草地のあったことが指摘されている。よって、古墳時代中期以前の微高地上にも、同様な草本植生が分布したことが示唆される。

引用文献

- 安藤 一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 福島 博, 1982, 6 多摩川の植物. 東京生物史, (株)紀伊国屋書店, 92-104.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 株式会社 吉田生物研究所, 1995, 木製品の樹種同定. 北九州市埋蔵文化財調査報告書第160集 上清水遺跡 III区 -九州縦貫自動車道関係文化財調査報告 35, (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 142-146.
- 小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五, 2006, 小林弘珪藻図鑑. 第1巻, (株)内田老鶴圃, 531p.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 近藤 鍊三・ピアスン 友子, 1981, 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, 217-229.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.

- Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L, 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.
In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松本 勳・堤 寿一・林 弘也・北原 龍士, 1980, 北部九州の遺跡から出土した木材及び木製品. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班, 東京プレス, 241-248.
- 三宅 尚・中越 信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, 187-193.
- 大浦 史雄・金原 正昭・池野 祐季, 2007, 都市遺跡における水利機能の解明に有効な珪藻種の考察, 日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集, 158-159.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1991a, 真砂遺跡第2地点江戸時代上水道に関する検討. 第3節自然科学分析の結果, 真砂遺跡第2地点文教ふるさと歴史館建設工事に伴う発掘調査報告書, 文京区遺跡調査会, 242-246.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1991b, 上水構築時の自然堆積層および上水内堆積物の各種分析調査. 神田上水石垣遺構発掘調査報告書, 文京区神田上水遺跡調査会, 209-230.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 嶋倉 巳三郎, 1976, 福岡市鶴町遺跡出土木質遺物の材質調査報告. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 鶴町遺跡, 福岡市教育委員会, 63-68.
- 嶋倉 巳三郎, 1977, 福岡市板付遺跡H-5地点から出土した木質品の樹種について. 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 板付周辺遺跡調査報告書(4), 福岡市教育委員会, 111-114.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.
- 渡辺 仁治, 2005, 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 内田老鶴圃, 666p.
- 渡辺 仁治・浅井 一視, 1992, 高優占度珪藻による有機汚濁の判定(3) *Navicula* が第1位種となる群集. 日本珪藻学会誌, 7, 29-35.
- 渡辺 仁治・山田 妥恵子・浅井 一視, 1988, 珪藻群集による有機汚濁指数(DAI_{po})の止水域への適用. 水質汚濁研究, 11, 765-773.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

表 1. 放射性炭素年代測定結果

地区名	試料名	試料の質	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
07- II 区	木樋	木材	クスノキ	2,980± 40	-30.90±0.54	3,080± 40	9690-1	IAAA-70343

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1,950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 2. 暦年較正結果

地点名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.	
			σ	2σ				
07- II 区	木樋	2,981± 36	σ	cal BC 1,288 - cal BC 1,283	cal BP 3,238 - 3,233	0.035	9690-1	
				cal BC 1,269 - cal BC 1,188	cal BP 3,219 - 3,138			0.675
				cal BC 1,181 - cal BC 1,155	cal BP 3,131 - 3,105			0.172
				cal BC 1,145 - cal BC 1,130	cal BP 3,095 - 3,080			0.118
			2σ	cal BC 1,374 - cal BC 1,340	cal BP 3,324 - 3,290	0.043		
				cal BC 1,319 - cal BC 1,112	cal BP 3,269 - 3,062	0.938		
				cal BC 1,101 - cal BC 1,084	cal BP 3,051 - 3,034	0.014		
				cal BC 1,064 - cal BC 1,058	cal BP 3,014 - 3,008	0.005		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

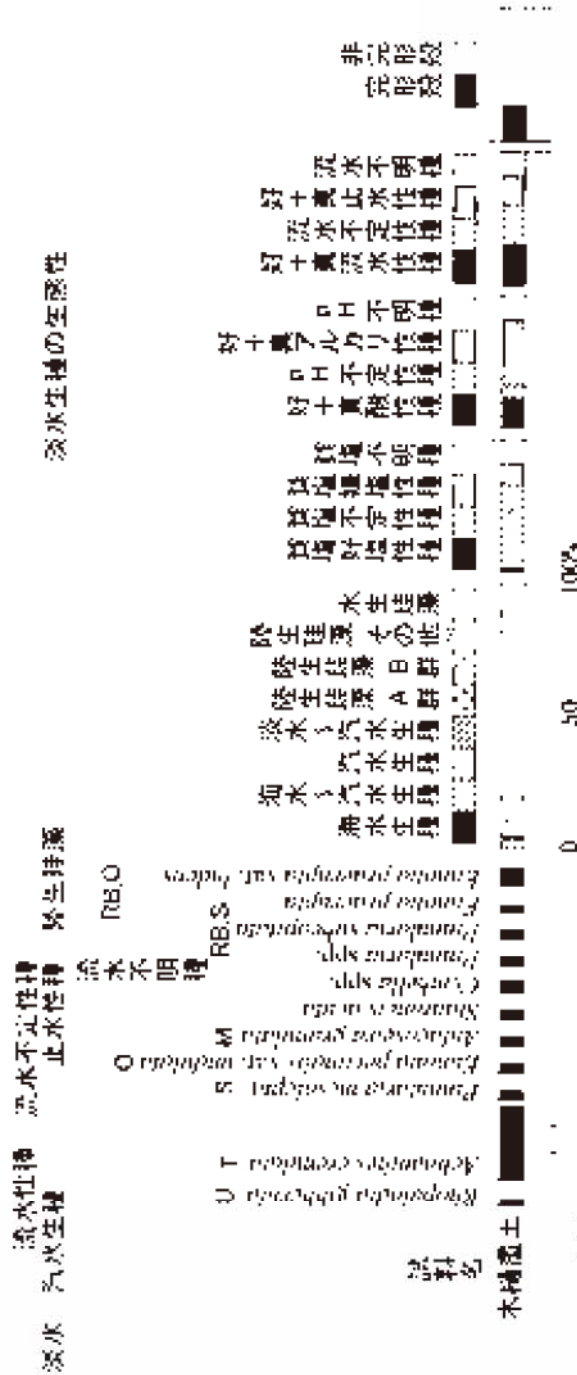


図1 主要陸域化石群集
 海水・汽水-淡水生種割合・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比平は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は2%未満産出を示す。

埋没植物種群

- M 湖沼浮遊性種, O 湖沼埋没植物性種 (安藤, 1990)
- S 好塩性種, U 広域適応性種, T 好流水性種 (Arai and Watanabe, 1995)
- R 陸生陸集 (RA A群, RB B群, RC C区分, 伊藤・荻内, 1991)

表3. 珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974) による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度 40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種 (海水生種)	塩分濃度 40.0 ~ 30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種 (汽水生種)	塩分濃度 30.0 ~ 0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種 (淡水生種)	塩分濃度 0.5‰以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH7.0 以下に生育し、特に pH5.5 以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0 付近に生育し、pH7.0 以下の水域で最も良く生育する種
	pH 不定性種	pH7.0 付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0 付近に生育し、pH7.0 以上の水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937-38) による	真アルカリ性種	pH7.0 以上に生育し、特に pH8.5 以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
Hustedt (1937-38) による	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群 (小杉, 1988 による)	
外洋指標種群 (A)	塩分濃度が約 35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群 (B)	塩分濃度 35 ~ 26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群 (C1)	塩分濃度 35 ~ 12‰の海域で海藻 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群 (C2)	塩分濃度 12 ~ 4‰の汽水域で海藻 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群 (D1)	塩分濃度 35 ~ 26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水砂質干潟指標種群 (D2)	塩分濃度 26 ~ 5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水泥質干潟指標種群 (E1)	30 ~ 12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群 (E2)	塩分濃度 12 ~ 2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群 (F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群 (G)	塩分濃度 2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群 (H)	塩分濃度 20 ~ 2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群 (安藤, 1990 による)	
上流性河川指標種群 (J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群 (K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群 (L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群 (M)	水深が約 1.5 m 以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群 (N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群 (O)	沼よりも浅く水深が 1 m 前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
高層湿原指標種群 (P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群 (Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境 (陸域) に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群 (伊藤・堀内, 1991 による)	
陸生珪藻 A 群 (RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻 B 群 (RB)	陸生珪藻 A 群に伴伴し、陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻 (RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの

表4. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	木樋 覆土
	塩分	pH	流水		
Centric Diatoms (中心型珪藻類)					
<i>Hydrosera whampoensis</i> (A. F. Schwarz) Deby	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M, U	4
<i>Melosira undulata</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-bi		1
Araphid Pennate Diatoms (無縦溝羽状珪藻類)					
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)					
Monoraphid Pennate Diatoms (単縦溝羽状珪藻類)					
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	29
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)					
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R. E. M. Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	1
<i>Amphora</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		5
<i>Cymboplectura naviculiformis</i> (Auerwald) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O, U	1
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch) D. G. Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	2
<i>Gomphoneis heterominuta</i> Mayama & Kawashima	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	2
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	2
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		4
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O, U	1
<i>Stauroneis</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Frustulia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Diadesmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB, S	1
<i>Neidium gracile</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1
<i>Neidium</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Caloneis lauta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> var. <i>undulata</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1
<i>Pinnularia rivularis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	3
<i>Pinnularia subanglica</i> Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	4
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4
管縦溝類					
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	1
<i>Nitzschia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	3
翼管縦溝類					
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1
短縦溝類					
<i>Eunotia biseriatooides</i> H. Kobayasi, K. Ando & T. Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T	1
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	4
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	3
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> (Ehren.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	7
<i>Eunotia</i> sp.	Ogh-unk	unk	unk		1
海水生種					0
海水～汽水生種					0
汽水生種					0
淡水～汽水生種					4
淡水生種					101
珪藻化石総数					105

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C. R. : 流水に対する適応性
 Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
 Ogh-hil : 貧塩好塩性種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
 Ogh-ind : 貧塩不定性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
 Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
 Ogh-unk : 貧塩不明種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種

環境指標種群

M: 湖沼浮遊性種, O: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai and Watanabe, 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

表5. 花粉分析結果

種類	試料番号	木樋覆土
木本花粉		
モミ属		1
ツガ属		4
マツ属		2
ヤマモモ属		1
クマシデ属-アサダ属		1
コナラ属コナラ亜属		4
コナラ属アカガシ亜属		11
シノキ属		1
ウコギ科		1
草本花粉		
イネ属		1
他のイネ科		11
カヤツリグサ科		8
サナエタデ節-ウナギツカミ節		8
ヨモギ属		3
キク亜科		1
不明花粉		6
シダ類孢子		
イノモトソウ属		6
他のシダ類孢子		165
合計		
木本花粉		26
草本花粉		32
不明花粉		6
シダ類孢子		171
総計 (不明を除く)		229

表6. 植物珪酸体含量

(個/g)

種類	試料番号	木樋覆土
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属		200
タケ亜科		1,300
ヨシ属		1,500
ウシクサ族コブナグサ属		200
ウシクサ族ススキ属		1,000
イチゴツナギ亜科		200
不明キビ型		2,800
不明ヒゲシバ型		800
不明ダンチク型		1,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属		700
タケ亜科		800
ヨシ属		1,100
ウシクサ族		400
不明		2,700
樹木起源		
第Ⅲグループ		500
第Ⅳグループ		1,000
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		10,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体		5,600
樹木起源		1,500
総計		17,100

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

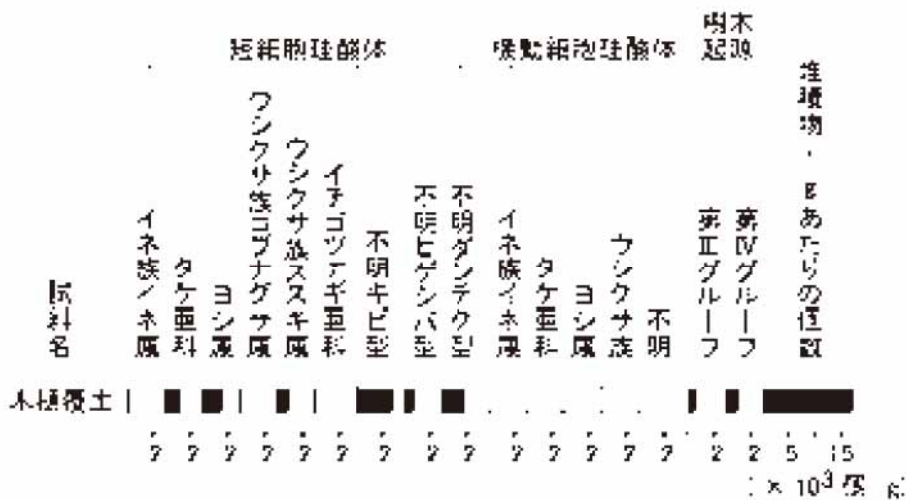
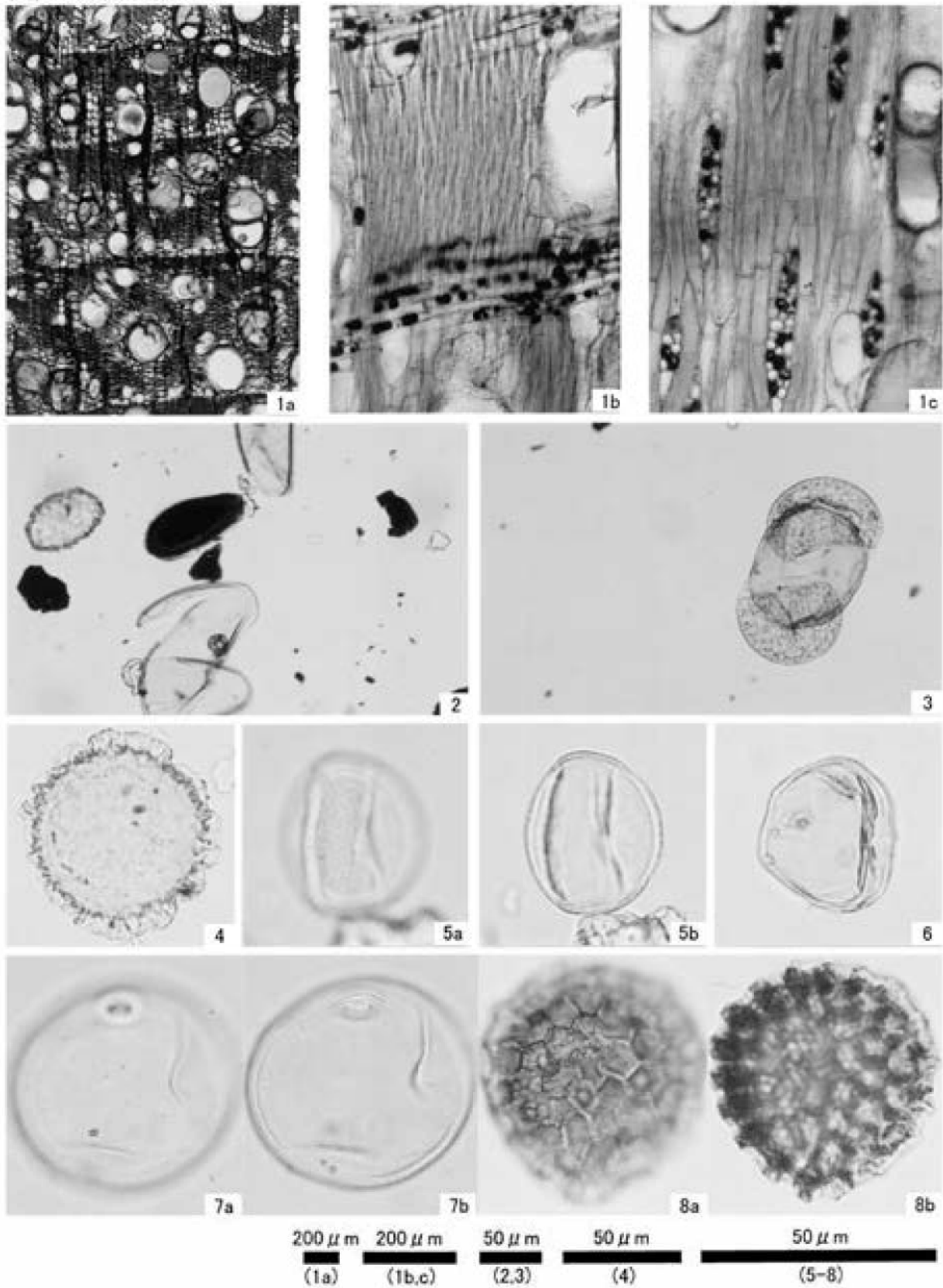


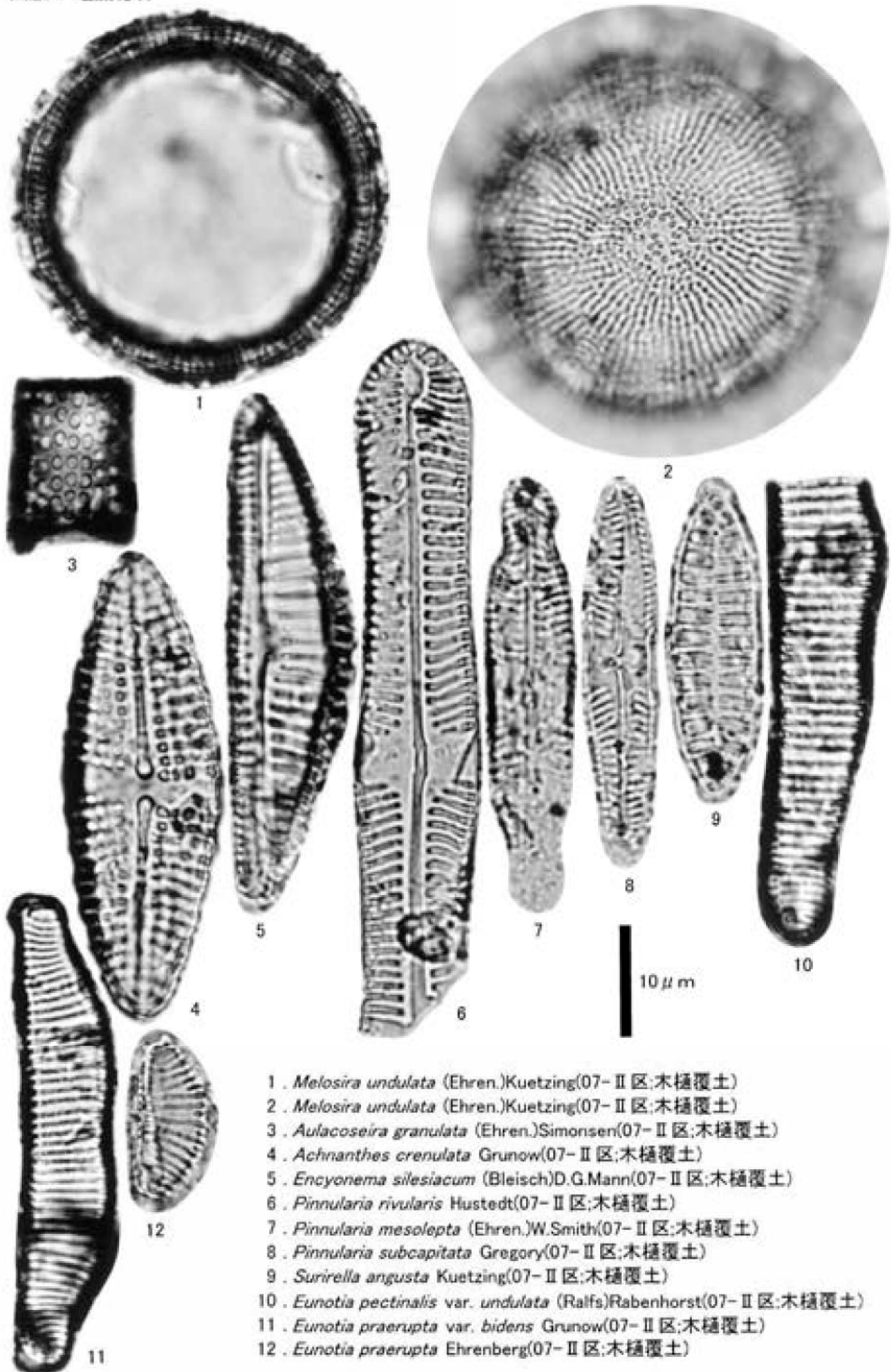
図2. 植物珪酸体含量
堆積物1gあたりに換算した値を示す

図版1 木材・花粉化石



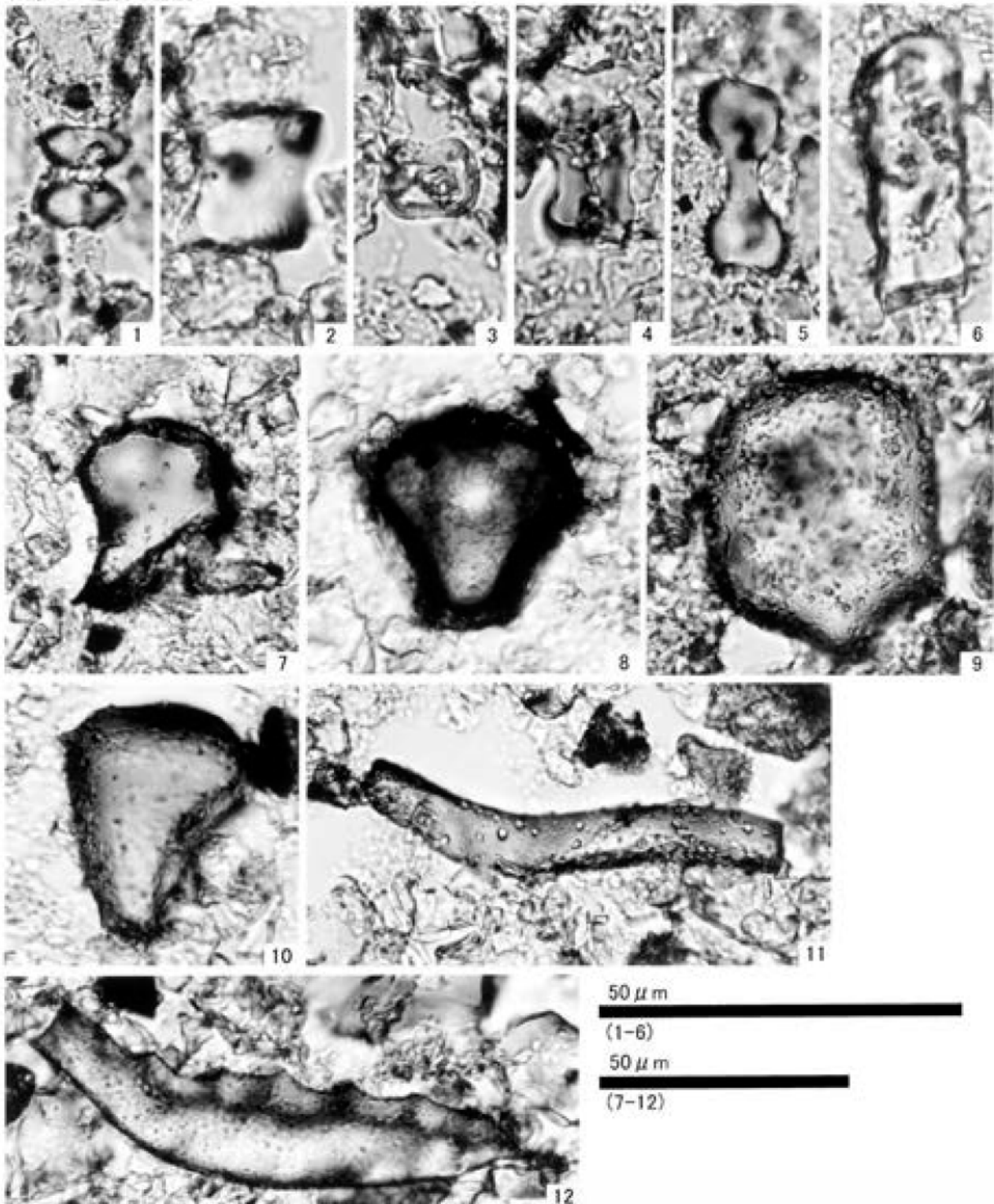
1. クスノキ(07-Ⅱ区:木槿) a: 木口, b: 柁目, c: 板目
 2. プレバート内の状況(07-Ⅱ区:木槿覆土) 3. プレバート内の状況(07-Ⅱ区:木槿覆土)
 4. ツガ属(07-Ⅱ区:木槿覆土) 5. コナラ属アカガシ亜属(07-Ⅱ区:木槿覆土)
 6. イネ科(07-Ⅱ区:木槿覆土) 7. イネ属(07-Ⅱ区:木槿覆土)
 8. サナエタデ節-ウナギツカミ節(07-Ⅱ区:木槿覆土)

图版2 珪藻化石



- 1 . *Melosira undulata* (Ehren.)Kuetzing(07- II 区;木槎覆土)
- 2 . *Melosira undulata* (Ehren.)Kuetzing(07- II 区;木槎覆土)
- 3 . *Aulacoseira granulata* (Ehren.)Simonsen(07- II 区;木槎覆土)
- 4 . *Achnanthes crenulata* Grunow(07- II 区;木槎覆土)
- 5 . *Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann(07- II 区;木槎覆土)
- 6 . *Pinnularia rivularis* Hustedt(07- II 区;木槎覆土)
- 7 . *Pinnularia mesolepta* (Ehren.)W.Smith(07- II 区;木槎覆土)
- 8 . *Pinnularia subcapitata* Gregory(07- II 区;木槎覆土)
- 9 . *Surirella angusta* Kuetzing(07- II 区;木槎覆土)
- 10 . *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst(07- II 区;木槎覆土)
- 11 . *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(07- II 区;木槎覆土)
- 12 . *Eunotia praerupta* Ehrenberg(07- II 区;木槎覆土)

図版3 植物珪酸体



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(07-Ⅱ区:木糖覆土) |
| 11. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(07-Ⅱ区:木糖覆土) | 12. 樹木起源珪酸体第Ⅳグループ(07-Ⅱ区:木糖覆土) |

第6節 種実

両迫間日渡遺跡検出木樋の自然科学分析調査

<目次>

はじめに	p. 1
1. 試料	p. 1
2. 分析方法	p. 1
(1) 植物珪酸体分析	p. 1
(2) 種実同定	p. 1
3. 結果	p. 2
(1) 植物珪酸体分析	p. 2
(2) 種実同定	p. 3
4. 考察	p. 5
(1) 古植生について	p. 5
(2) 栽培植物について	p. 6
引用文献	p. 6

<図表・図版一覧>

表 1 植物珪酸体含量

表 2 種実同定結果

図 1. 植物珪酸体含量の層位分布

図版 1 植物珪酸体

図版 2 種実遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

両迫間日渡遺跡は菊池川右岸の氾濫低地に位置する縄文時代～中世の複合遺跡である。今回の分析調査では、調査区内の土地利用および植生に関する情報を得ることを目的として06-Ⅱ区の基本層序を対象とする植物珪酸体分析を実施する。また、当時の植物利用や植生に関する情報を得ることを目的として、調査時に出土した種実の種類同定を実施する。

1. 試料

植物珪酸体試料は、06-Ⅱ区の6C層～10層から採取された17点である。採取層準の層相は、6層が灰色を呈する砂質シルト～砂混じりシルトからなる。砂の含有量、酸化鉄やマンガン斑の沈着状況などから6A層、6B層、6C層に区分されている。このうち、6C層は砂粒を多く含み、酸化鉄・マンガン斑の分布密度が高い。7層は灰色の粘土からなり、上位の7A層と下位の7B層に細分される。7A層は7B層に比較して砂勝ちで、酸化鉄やマンガン斑の分布密度が高い。8層は灰色を呈する砂混じり粘土からなり、酸化鉄やマンガン斑が沈着する。8層下層はオリーブ黒色泥からなる。8層下層上面では水田が検出されており、8'層が本水田の畦を構成する堆積物とされる。8B層は泥からなる。8B層上面でも水田が検出されており、8B''層・8B'''層が畦を構成する堆積物とされる。9層はオリーブ黒色シルト質粘土～粘土からなる。上面では水田が検出されており、9層上層が畦を構成する堆積物に相当する。10層はオリーブ黒色粘土からなり、縄文時代晩期の遺物が出土する。

種実同定は、発掘調査により抽出された種実であり、層位、調査地点とも多岐にわたる。このため、分析試料の詳細は、結果表に記す。

2. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）の一覧表と植物珪酸体含量の層位分布図として示す。なお、各分類群の含量密度は10の位で丸めた値として示してある。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体表面に付着した泥を、面相筆を用いて丁寧に除去する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種類毎に瓶に入れて保管

する。水に入った種実遺体には、約70%のエタノール溶液を入れて保存する。

3. 結果

(1) 植物珪酸体分析

結果を表1、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量は、10層～9層で増加傾向が見られ、10層の約10,000個/gから9層の約35,000個/g

表1. 植物珪酸体含量

分類群	試料名																
	6C層	7A層	7B層	8層	8層 下層	8'層	8B層 (C-11 東側)	8B層 (C-11 北側)	8B'層	8B''層 (C-11)	8B'''層 (C-12)	8B''''層 (C-11)	8B''''層 (C-12)	9層	9層 上層 (C-11)	9層 上層 (C-11 東側)	10層
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	1400	300	300	400	400	1000	200	700	800	700	-	200	-	-	200	100	-
タケ亜科	1600	400	600	400	800	1200	600	1000	700	1000	<100	400	4400	5400	1900	1500	800
ヨシ属	900	300	100	300	300	900	500	1100	800	500	<100	400	600	300	1100	1100	1200
ウシクサ族ススキ属	300	100	200	300	<100	100	300	500	200	200	100	400	400	800	1300	900	200
イチゴツナギ亜科	200	<100	-	-	200	400	300	300	-	200	100	200	600	300	300	200	200
不明	2500	1600	1200	3500	2600	3600	1400	5000	3300	2400	1000	2000	9600	11000	7300	5700	2700
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	2400	1400	900	2800	2400	2200	1200	2600	1300	1600	500	900	100	-	700	700	200
タケ亜科	1200	400	100	800	900	700	300	800	400	1300	500	600	5700	5000	900	700	800
ヨシ属	1600	300	300	1600	800	1800	900	1300	400	600	400	600	2900	2200	1700	1200	1700
ウシクサ族	200	-	-	400	<100	<100	100	400	200	200	200	<100	700	300	600	400	200
不明	2900	1400	1000	4000	2200	3800	2100	5500	3900	4700	300	3900	8700	9800	3400	4000	2200
合計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	7000	2900	2500	4800	4300	7200	3400	8500	6000	4900	1400	3400	15600	17800	12100	9600	5100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8300	3500	2300	9700	6300	8600	4700	10700	6200	8500	1900	6100	18200	17200	7300	7000	5000
総計	15300	6400	4800	14500	10700	15800	8000	19100	12200	13400	3300	9500	33800	35000	19300	16600	10100
樹木起源珪酸体																	
イスノキ属	**	**	*	**	**	**	*	**	**	**	*	**	*	*	**	**	*
クスノキ科	-	-	-	*	-	*	-	-	*	-	-	-	*	*	-	-	*

数量は、10の位で丸めた含量密度(個/g)を示す。合計は各分類群の丸めない数字を合計後に丸めた値である。<100は100個/g未満、-は未検出を示す。樹木珪酸体の検出状況は*で示し、**は多数の検出を示す。

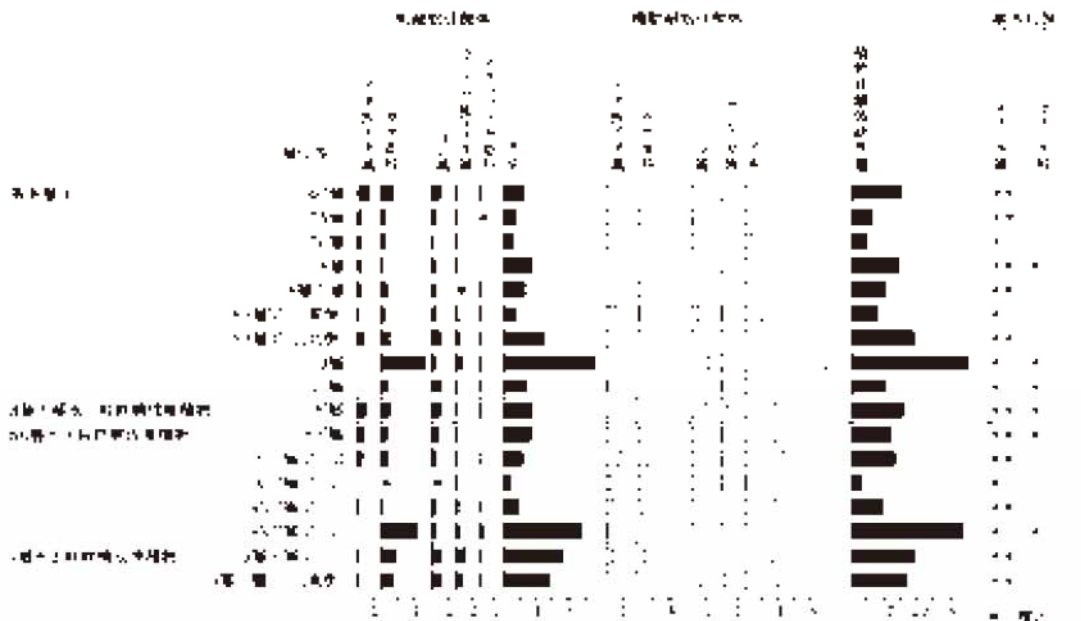


図1. 植物珪酸体含量の組成成分

と増加し、極大となる。8B''層 (C-12) でも多いが、8B'層以降減少し、5,000個/g～15,000個/gの間を変動する。

9層を除き、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体双方のイネ属が連続的に産出する。10層～8B'層 (C-12) にかけては短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも1,000個/g未満である。なお、8B'層 (C-11) では8B'層 (C-12) よりもイネ属の含量が多く、短細胞珪酸体が約700個/g、機動細胞珪酸体が約1,600個/gである。8B'層より上位では機動細胞珪酸体の増加傾向が見られる。その含量は1,000個/g前後～2,800個/gの範囲であり、他の分類群と比較して多い。また、8層は約2,800個/g、8B層 (C-11 北側) は約2,600個/g、8層下層と6C層は約2,400個/g、8'層は約2,200個/gであり、他の層位よりも含量が多い。

この他に、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども見られる。8B''層 (C-12) と9層では、タケ亜科の産出が目立つ。またイネ科起源の他に、イスノキ属やクスノキ科の樹木起源珪酸体も見られ、イスノキ属の産出が目立つ。

(2) 種実同定

結果を表2に示す。全試料を通じて、被子植物9分類群 (広葉樹のヤマモモ、クスノキ、ウメ、スモモ、モモ、センダン、クマノミズキ、エゴノキ属、草本のカラスウリ) 107個の種実が同定された。

栽培種は、ウメの核が2個 (接合し1個)、スモモの核が1個、モモの核が57個、計60個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、常緑高木のヤマモモの核が36個、クスノキの種子が4個、落葉高木のセンダンの核が1個、クマノミズキの核が1個、落葉小高木のエゴノキ属の種子が4個、つる性草本のカラスウリの種子が1個、計47個が確認された。各分類群の写真を図版2に、以下に形態的特徴等を記す。

・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核 (内果皮) は灰褐色、長さ7～8mm、幅6～7mm、厚さ4.5～5mm程度の歪でやや扁平な非対称広楕円体。内果皮は硬く、表面には微細な網目模様があり粗面。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科ニッケイ属

種子は灰黒褐色、長さ5.5～6.5mm、幅5～6mm、厚さ5～5.5mmの偏球体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く表面は粗面、断面は柵状。

・ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、のやや扁平な広楕円体。05-I-2区の番号6と7は接合して1個体となり、長さ19.76mm、幅15.42mm、厚さ11.51mm。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の小凹点が分布する。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、レンズ状広楕円体。出土核は、丸く臍点がある基部を欠損し、残存長14.78mm、残存幅10.14mm、残存厚9.88mm。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みที่ไม่規則にみられる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

表2 種実同定結果

調査区	番号	グリッド	層位	同定結果					計測値(mm)			
				分類群	部位	状態	個数	備考	長さ	幅	厚さ	
05-I区	1	B-4	7層一括	モモ	核	完形	1		18.84	17.72	14.56	
	2		7層一括	モモ	核	完形	1		20.48	18.32	15.04	
	3		7層一括	モモ	核	完形	1		22.01	18.01	14.83	
	4	C-3	7層一括	モモ	核	完形	1		28.06	21.54	16.61	
	5		7層一括	モモ	核	完形	1	頂部欠損	21.81 +	19.22	14.72	
	6		7層一括	モモ	核	完形	1		24.61	18.28	15.13	
	7		7層一括	モモ	核	完形	1		23.42	17.53	12.49	
	8	C-4	7層一括	モモ	核	破片	1	半分未満	23.02 +			
	9		7層一括	モモ	核	破片	1	瓶中のラベルはD-4,半分,縫合線に沿わない	22.85 +	19.62		
	10	C-5	7層一括	モモ	核	完形	1		19.53	15.12	12.59	
	11		7層一括	モモ	核	完形	1		25.74	19.86	14.42	
	12		7層一括	モモ	核	完形	1	縫合線一部欠損	23.49	18.22 +	15.48	
	13	C-6	7層一括	モモ	核	完形	1		21.12	17.16	14.17	
	14	D-4	7層一括	モモ	核	完形	1	頂部わずかに欠損	22.57 +	19.28	15.92	
	15			モモ	核	完形	1	頂部わずかに欠損,縫合線一部摩耗	20.44 +	17.55	14.14	
	16	D-5	7層一括	モモ	核	完形	1		24.82	18.96	15.21	
	17	D-7	7層一括	モモ	核	完形	1	側面欠損	27.68	19.63	14.52	
	18			モモ	核	完形	1	基部~側面に鋭利な切断痕	21.86 +	20.45	16.44	
	19			モモ	核	完形	1		24.12	20.05	16.35	
	20		7層一括	エゴノキ属	種子	完形	1	食痕?(6.5×3mmの楕円形)	11.5	7.07		
	26	B-3	7a層	クスノキ	種子	完形	1					
	28	D-5	7b層	モモ	核	完形	1		22.97	20.46	14.89	
	29			モモ	核	完形	1		21.35	16.21	13.37	
	30	E-7	7b層一括	モモ	核	完形	1	側面一部欠損	24.55	19.77	17.04	
	34	C-5	8層	クマノミズキ	核	完形	1					
	35	C-7	8層	モモ	核	完形	1		25.29	19.96	16.89	
	36	D-4	8層	センダン	核	破片	1					
	37	D-5	8層	モモ	核	完形	1		24.59	19.28	14.83	
	38	D-6	8層	スモモ	核	完形	1	鋭利な切断痕,基部欠損	14.78 +	10.14 +	9.88 +	
	39	E-7	8層	モモ	核	破片	1	縫合線に沿わない	20.12	14.45 +		
	40		8層	モモ	核	破片	5	計1/2個未満				
	05-I-2区	1	A-2	8層	モモ	核	完形	1		24.16	18.74	14.95
		2	B-2	8層	モモ	核	完形	1		24.97	19.92	15.78
		3		8層	モモ	核	完形	1	表面全体摩耗	15.27 +	11.83 +	8.53 +
		4	B-3	8層一括	モモ	核	完形	1	303,乾燥状態	19.25	15.28	12.74
		5	B-4	8層	モモ	核	完形	1		27.59	20.19	15.68
		6	C-2	8層	ウメ	核	完形	1	鋭利な切断痕,頂部欠損,7と接合	19.76	15.42	11.51
		7		8層	ウメ	核	破片	1	鋭利な切断痕,頂部,6と接合			
		8	C-3	8層	エゴノキ属	種子	完形	1		13.94	6.18	
		9		8層	モモ	核	完形	1		20.67	17.95	14.13
37		8層		クスノキ	種子	完形	1					
38		D-7	8層	クスノキ	種子	破片	1	基部確認				
39			8層	クスノキ	種子	破片	1					
51		D-7	10a層一括	モモ	核	完形	1	467~470,乾燥状態,両縫合線上欠損	17.94	15.06	13.71	
54			10a層	エゴノキ属	種子	完形	1		11.5	6.16		
65		C-4	7b層	モモ	核	完形	1		19.84	15.29	13.23	
66		C-5	7b層	モモ	核	完形	1	側面摩耗	24.34	19.38	16.27 +	
67		C-5	7b層一括	モモ	核	破片	1	236,乾燥状態,半分,基部欠損	20.4 +	15.33	6.58 +	
72		D-4	7b層	モモ	核	完形	1	側面一部欠損	20.98	16.44	14.46	
73		D-5	7b層	モモ	核	完形	1	基部欠損	21.63 +	17.39	13.44	
74		D-5	7b層	モモ	核	完形	1		23.26	19.27	16.07	
75	D-6	7b層	モモ	核	完形	1	側面~縫合線一部欠損(食痕?)	25.17	18.61 +	13.12 +		
06-II区	D1-1	Y15	7a層	エゴノキ属	種子	破片	1					
				カラスウリ	種子	破片	1					
	2	Z15	7a層	モモ	核	破片	1	乾燥状態				
	10	X13	7b層	モモ	核	破片	2	乾燥状態,計1個体未満				
	12	Y15	7b層	モモ	核	破片	2	炭化,接合し完形1個,側面~縫合線食痕	17.63 +	13.9 +	9.92	
	13	A13	7b層	モモ	核	完形	1	表面摩耗	22.43	16.68 +	11.37 +	
	14-1	Y15	7b層	モモ	核	完形	1	表面摩耗,側面食痕	22.56 +	16.91 +	9.11 +	
	14-2	Y15	7b層	モモ	核	破片	1		19.61 +			
	16	D11	7b層	モモ	核	破片	1					
	17	B14	7b層	モモ	核	完形	1		19.14	16.23	13.98	
	32	X14	8層	モモ	核	破片	1					
	40-2	C11	8b層	モモ	核	完形	1	頂部欠損	22.22 +	18.08 +	16.24	
	43-1,5	B12	8b層	ヤマモモ	核	完形	2					
	44-1~19	B12	8b層	杭に絡んで出土	ヤマモモ	核	完形	18				
					破片	1						
45-9~23	C13	8層	杭列周辺	ヤマモモ	核	完形	12					
					破片	3						
46	Y15	8b層	モモ	核	完形	1	乾燥状態,表面摩耗,頂部欠損	13.24 +	12.51 +	7.75 +		

核(内果皮)は灰褐色、やや扁平な広楕円体。欠損部位がない完形27個の大きさは、長さは、最大28.1～最小17.9mm(平均22.85±標準偏差2.88)mm、幅は、21.5～15.1(18.23±1.84)mm、厚さは、17.0～12.5(14.73±1.25)mm。核の頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた半分以下の破片がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。半割した内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円状の窪みがみられる。

・センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

核(内果皮)は灰褐色、完形ならば長さ1～1.3cm、径0.7～0.8cmの楕円体。破片は長さ1cm、幅6.5mm程度。背面は浅く広い5～6個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面観は星型。破片は縦隆条に沿って半割している。表面は粗面。内面には、長さ6mm、幅3mm、厚さ1mm程度の非対称長楕円体の種子が入る浅い窪みがあり、窪みの表面には微細な横方向の筋が流れる。

・クマノミズキ (*Swida macrophylla* (Wall.) Sojak) ミズキ科ミズキ属

核(内果皮)は灰褐色、径4mm程度の偏球体。基部に小さく浅い凹みがある。内果皮は硬く、表面には一周する1本のやや幅広く浅い縦溝と細く浅い縦溝数本が走る。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子は灰～黒褐色、長さ1.2～1.3cm、径0.6～0.7cm程度の卵体。頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、淡灰褐色、径3mm程度の粗面の着点がある。種皮は硬く、表面には微細な粒状網目模様がある。大きさはハクウンボク (*S. obassia* Sieb. et Zucc.) と思われるが、表面の状態がやや悪く、エゴノキ (*S. japonica* Sieb. et Zucc.) との明瞭な区別がつかないため、エゴノキ属にとどめている。

・カラスウリ (*Trichosanthes cucumeroides* (Ser.) Maxim.) ウリ科カラスウリ属

種子は灰褐色、長さ8.5mm、幅1cm、厚さ3mm程度のやや扁平な横楕円体。正中線は幅4.5mm程度の帯状に隆起し、基部に臍がある。種皮表面は粗面で低い突起が散在する。

4. 考察

(1) 古植生について

今回の6C層～10層の植物珪酸体含量は、既報の9～10層で検出されている杭材の付着堆積物の植物珪酸体含量密度と同様に全体的に少ない値を示した。植物珪酸体は、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいとされる(江口, 1994・1996)。今回の調査地点の植物珪酸体は保存状態が悪かったことから、風化作用を受け減少している可能性がある。この点については調査地点の堆積環境を踏まえた評価が今後必要である。

植物珪酸体群集から、調査区およびその周辺にはネザサ節、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科草本類が生育していたことが推定される。なお、イネ属を除くこれらの種類の含量密度は層準で異なっているが、これは全体の植物珪酸体量密度の増減に概ね関連していることから、上記したように堆積環境に起因すると考えられる。ただし、相対的变化をみると10層から9層にかけて、ヨシ属機動細胞珪

酸体の割合が減少し、タケ亜科が増加している。この変化は、調査地点周辺の氾濫低地における植生変化を反映している可能性がある。また、8層、6C層でヨシ属の割合がやや増加することから、調査区の水文条件が変化するなどの理由で大型の抽水直物のヨシ属が分布を拡げた可能性もある。これらの点についても、調査区の地形発達過程を踏まえた評価が必要である。

また、草本由来の珪酸体のほかに、クスノキ科やイスノキ属といった木本植物に由来する植物珪酸体が検出されている。これらの常緑広葉樹に由来する珪酸体も周辺に生育していたと思われる。なお、このような木本植物由来の珪酸体の産状は南九州の植物珪酸体分析結果でしばしば認められる傾向である（杉山, 1999 など）。一方、種実遺体をみると、常緑高木のヤマモモ、クスノキ、落葉高木のセンダン、クマノミズキ、落葉小高木のエゴノキ属、つる性草本のカラスウリが確認される。これらは、常緑広葉樹林とその林縁に生育する種類からなる。本遺跡で行われた花粉分析、種実同定、樹種同定の結果では、常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要な構成要素である、アカガシ亜属やシイ属、クスノキ科が検出されている。

以上のことを踏まえると、調査区周辺の植生は、氾濫低地周辺の山地斜面が常緑広葉樹を主体とする暖温帯林、山地周縁部や氾濫低地の高燥な場所に落葉広葉樹やササ類などが植生攪乱の影響の違いによって分布しており、湿地にはヨシ属などが生育していたことが推定される。

(2) 栽培植物について

植物珪酸体分析の結果、10層～6C層から栽培種のイネ属が産出した。発掘調査により、9層、8B層、8層下層では水田遺構が検出されていることから、同調的な結果といえる。層的变化をみると、8B層より上位でイネ属機動細胞珪酸体の相対的割合が増加し、これとは逆にイネ属以外の種類が減少傾向を示している。この変化は、調査区の土地利用状況の変化を反映しているとみられ、耕作地の造成に伴い、ヨシ属などの植物が減少したことを示唆する。

一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いとされている（杉山, 2000）。しかし、今回の8B層より上位層準での機動細胞珪酸体含量は1,000個/g前後～2,800個/gの範囲であり、上記の事例と比較して少ない。先に述べたように、今回の試料中の植物珪酸体の保存状態が悪く、風化による減少が指摘される。そのため、上記の事例をそのまま当てはめることはできず、8B層より上位層準では稲作が行われていた可能性が高いといえる。また、水田遺構が検出されている9層では、栽培植物のイネ属が検出されていないが、畦畔構成堆積物である9層上部からはイネ属が産出していることから、9層形成期にも稲作が行われていたことが示唆される。調査を行った9層からイネ属植物珪酸体が産出しなかった理由については、水田域における植物珪酸体の偏在に起因する可能性があり、今後地点数を増やし検証する必要がある。また、8層より上位の堆積物からも栽培植物のイネ属が産出している。これらは調査区内での栽培を示している可能性もあるが、再堆積したものに由来する可能性もあり、発掘調査成果や調査区の堆積環境を踏まえた慎重な評価が必要である。なお、これまでの植物珪酸体分析結果をみると、古墳時代とされる06-Ⅲ区の堆積層（6b層）や、中世とされる06-Ⅰ区東壁の堆積層ならびに06-Ⅲ区の堆積層（6a層）では今回より多くのイネ属珪酸体が検出されている。これらの試料では、今回の地点と比べ、植物珪酸体の保存状態が良く、そのことが原因で植物珪酸体含量が多くなっている可能性もある。

また、9層・8B層・8層下層の水田遺構の畦畔構成堆積物の植物珪酸体の産状は、必ずしも同層の植物

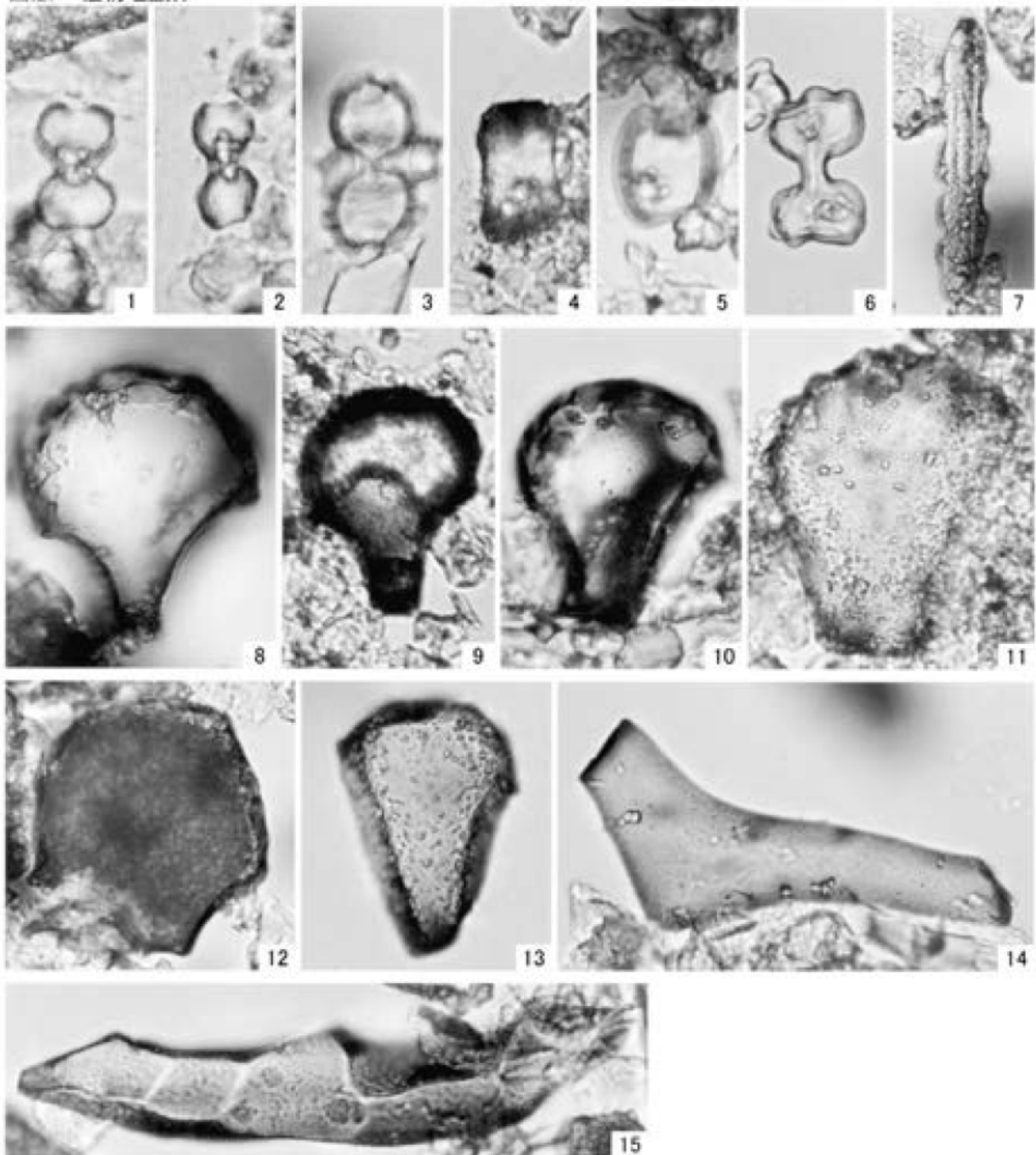
珪酸体の産状と一致していない。8B層の畦畔構成堆積物の植物珪酸体群集には下位の9層の群集に類似するものも認められる。これは畦畔構成堆積物が人為的営力により形成されたもので、下位堆積物などが利用されていることを示している可能性がある。発掘調査時の所見と併せた評価が必要である。

一方、05-I区・05-I-2区、06-II区より出土した種実遺体のうち、栽培種は、モモの核が57個と、ウメの核が2個（接合し1個）、スモモの核が1個確認され、当時の利用が推定される。なお、前報でも、05-I区・05-I-1区・05-I-2区、06-II区より、モモの核が68個、スモモの核が3個、ヒョウタン類の種子が1個確認されている。

引用文献

- 江口誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究, 2, 19-27.
- 江口誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペトロジスト, 40, 81-84.
- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 近藤 鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 杉山 真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた最終氷期の九州南部における照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38, 109-124.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

図版I 植物珪酸体



50 μm

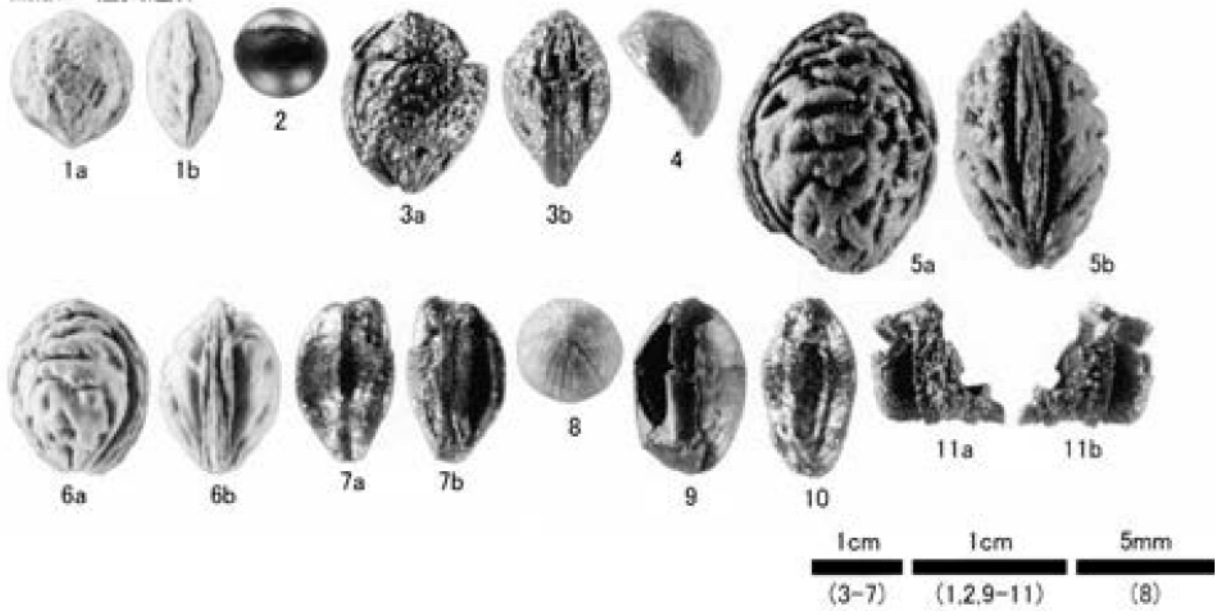
50 μm

(1-6)

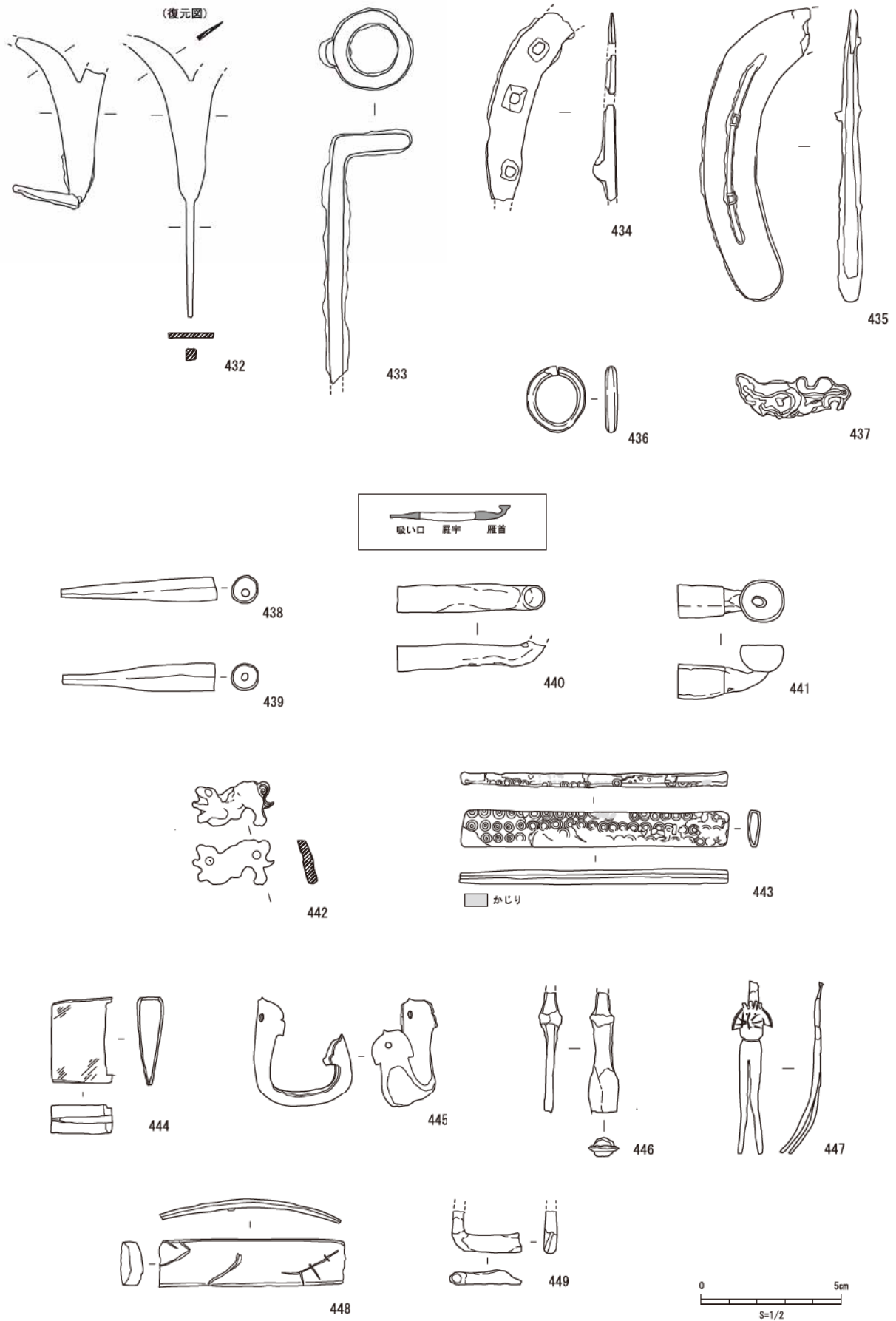
(7-15)

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(6C層) | 2. イネ属短細胞珪酸体(8B'層) |
| 3. イネ属短細胞珪酸体(9層上層(C-11東側)) | 4. タケ亜科短細胞珪酸体(8B''層(C-12)) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体(8'層) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(8B'''層(C-11)) |
| 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(8'層) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(6C層) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(7B層) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(8B''層(C-11)) |
| 11. タケ亜科機動細胞珪酸体(8B'''層(C-12)) | 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(8'層) |
| 13. ウシクサ族機動細胞珪酸体(8B''層(C-12)) | 14. イスノキ属(樹木起源)(6C層) |
| 15. クスノキ科(樹木起源)(8層) | |

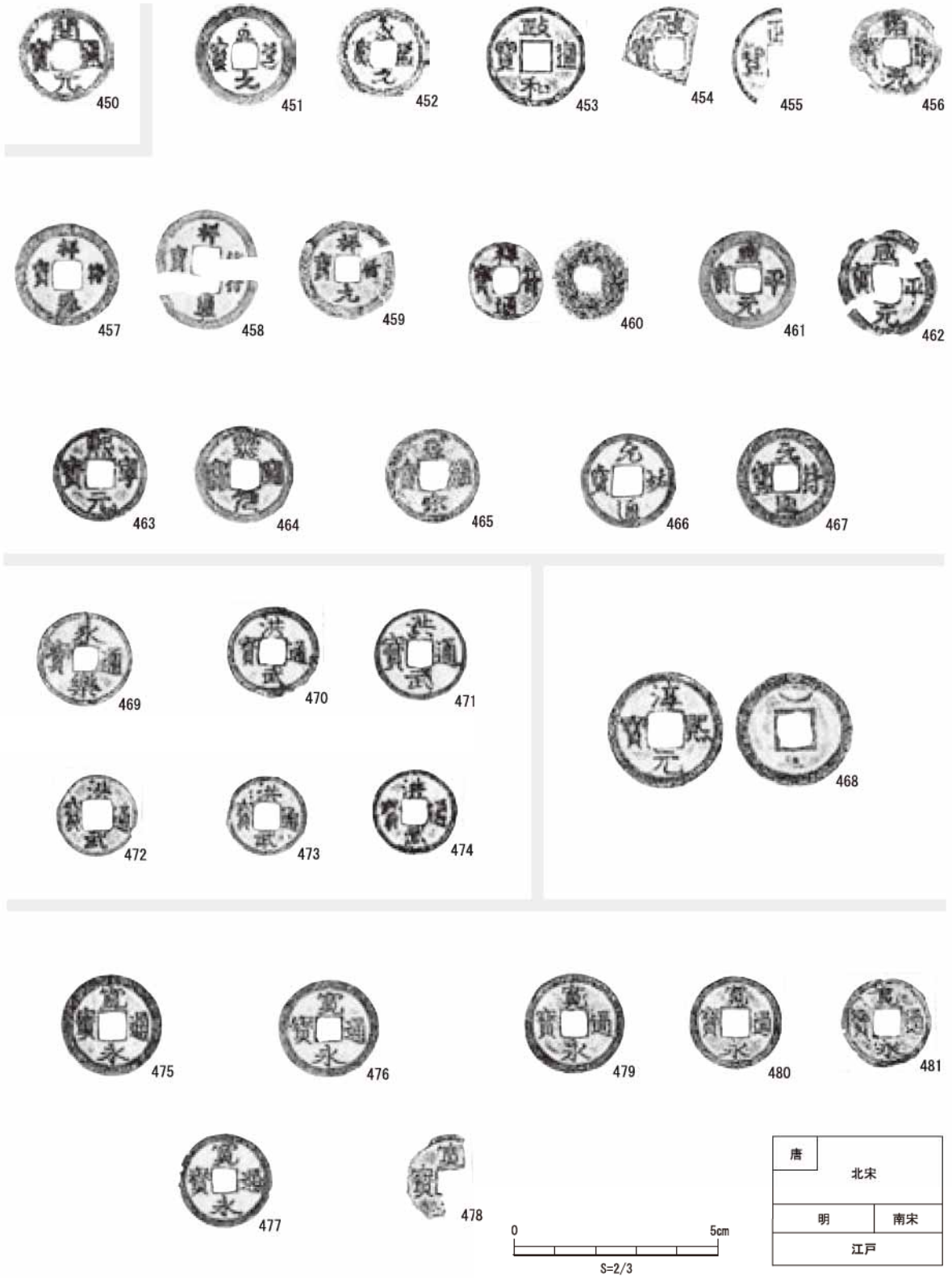
図版2 種実遺体



- | | |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1. ヤマモモ 核(06-Ⅱ区 D44-1~19 B12 8b層) | 2. クスノキ 種子(05-Ⅰ区 26 B-3 7a層) |
| 3. ウメ 核(05-Ⅰ-2区 6・7 C-2 8層) | 4. スモモ 核(05-Ⅰ区 38 D-6 8層) |
| 5. モモ 核(05-Ⅰ区 4 7層一括) | 6. モモ 核(05-Ⅰ-2区 4 B-3 8層一括) |
| 7. センダン 核(05-Ⅰ区 36 D-4 8層) | 8. クマノミズキ 核(05-Ⅰ区 34 C-5 8層) |
| 9. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ区 20 D-7 7層一括) | 10. エゴノキ属 種子(05-Ⅰ-2区 54 10a層) |
| 11. カラスウリ 種子(06-Ⅱ区 D1-1 Y15 7a層) | |



第 291 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 出土金属製品実測図



第 292 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 出土銅銭一覧

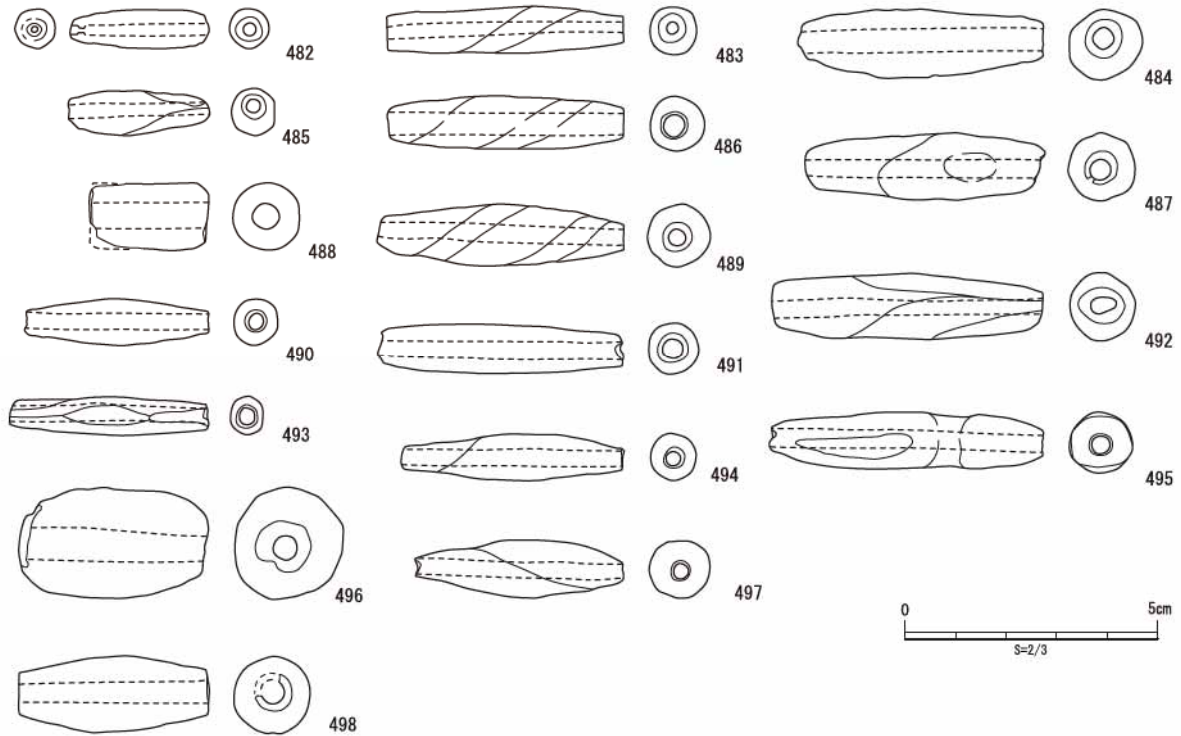
第4表 金属製品観察表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	調査区	遺構	グリッド	出土層	取上げNo.	法量(cm)			種別	備考
						最大長	最大幅	厚み		
24	RHH 05-I-2	SX-01	D-6			11.9	0.9	0.3	槍鉋カ	
432	RHH 05-I-2			8層		10.1	3.2	0.2	雁股鍔	
433	出土地点不明					9.1~	2.9	0.6	引手	馬具
434	RHH 03-III		E-11	4層		7.1~	1.4	0.3	蹄鉄	馬具
435	RHH 06-I		D-9	6b層		10.5~	2.0	0.8	蹄鉄	馬具
436	RHH 05-I		D-5	6c層		2.4	0.35	0.3	耳環	鍍金が剥がれ
437	出土地点不明					4.1	1.5		笄の飾りカ	江戸期
438	RHH 05-I		D-4	3層		5.5	1.0	0.9	キセル(吸い口)	真鍮製
439	RHH 05-I		C-4	3層		5.5	0.9	1.0	キセル(吸い口)	真鍮製
440	RHH 05-I		B-2	4層		5.3~	1.0~	0.9	キセル(雁首)	真鍮製
441	RHH 05-I		D-7	3層		3.7	1.5	1.3	キセル(雁首)	真鍮製 18C 中頃カ
442	RHH 06-I			5層		2.8	1.6	0.3	真鍮製獅子	刀の柄の飾り 江戸期カ 2体1組の可能性
443	RHH 05-I		C-5	5a層		9.5	1.3	0.4	小柄	魚子状
444	THJ 07-IV		G-5	4層		3.0	1.0	0.1	鍔	鍍金 金が残る
445	RHH 06-I		H-15	10b-3層	不明遺物 No.1	4.5	3.6	0.4	頭金	
446	THJ 07-I		B-4	4層		4.7	1.0	0.3	両刃鑿	
447	RHH 05-I		B-2	3層		6.2	1.4		簪	真鍮製 江戸期 女児用カ
448	RHH 04-II		C-3			6.6	1.7	0.3	不明青銅器	鋳物 銅鋼にしては大きい 種・武器の一部カ
449	RHH 06-III		D-3	3a層		1.6~	2.5~	0.6	不明鉄製品	青銅製ではない 鉋具カ

第5表 銅銭一覧表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	調査区	グリッド	出土層	銭貨名	書体	初鑄年	時代	備考
450	RHH 04-II	P-21①	3層	開元通寶	真書	621年	唐カ	穿孔部分を工具で丸く広げた感
451	RHH 04-II	H-9	4層	至道元寶	草書	995年	北宋	
452	RHH 06-I		4b層	至道通寶	草書	995年	北宋	
453	RHH 04-II	P-21	3層	政和通寶	楷書	1111年	北宋	
454	RHH 04-II	D-4	4層	政和通寶カ	分楷	1111年	北宋	意図的に破銭
455	THJ 07-I		3層	政和通寶カ	楷書	1111年	北宋	
456	RHH 06-I	F-12	4a層直下	治平元寶	真書	1064年	北宋	
457	RHH 05-I	B-2	4層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	
458	RHH 05-I-2	E-9	6c層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	2枚に割れ
459	RHH 04-II		4層	祥符元寶	真書	1009年	北宋	
460	THJ 07-II	J-6	5層	祥符通寶	真書	1009年	北宋	縁辺凸部が削られ意図的に楕円形を呈したカ 背面も平偏化
461	RHH 05-II-2	D-6	5層	咸平元寶	真書	998年	北宋	
462	RHH 05-II-2	D-6	5層	咸平元寶	真書	998年	北宋	割れ
463	THJ 08-I	H-13		熙寧元寶	真書	1068年	北宋	
464	RHH 05-I-2	D-6	6c層	熙寧元寶カ	篆書	1068年	北宋	
465	RHH 04-II	P-21	3層	皇宋通寶カ	真書	1038年	北宋	
466	THJ 02-III	D-7	4層	元祐通寶	行書	1086年	北宋	
467	RHH 04-I	D-5	3a層	元符通寶	行書	1098年	北宋	
468	RHH 06-I	E-10	6c層	淳熙元寶	真書	1174年	南宋	背月星
469	RHH 04-II	P-21①	3層	永樂通寶	真書	1408年	明	
470	RHH 04-II	P-21②	4層	洪武通寶	真書	1368年	明	
471	RHH 06-I		4a層	洪武通寶	真書	1368年	明	
472	THJ 02-III	F-10	2層	洪武通寶	真書	中世末期~近世初頭		模鑄銭カ
473	THJ 02-III	F-10	2層	洪武通寶	真書	中世末期~近世初頭		模鑄銭カ
474	THJ 01-3		1~2層	洪武通寶	真書	1368年	明	
475	RHH 05-I-2		6a層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
476	RHH 03-I		攪乱	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
477	RHH 05-I	D-8	4層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
478	THJ 07-I		3層	寛永通寶	真書	1636~1659年	江戸	1期 古寛永
479	RHH 03-III		2層	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永
480	RHH 05-I		表土	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永
481	RHH 05-I	D-6	暗渠	寛永通寶	真書	1697~1747年 1767~1781年	江戸	3期新寛永

※書体・初鑄年・時代は、『日本出土銭総覧』1996年度版 兵庫県埋蔵銭調査会を参考とした



第 293 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 出土土錘実測図

第 6 表 土錘観察表・出土土錘分類表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	出土地点						分類	法 量 (cm)				L	P	判定	備 考
	調査区	遺構	グリッド	層位	取上げ No.	包含層		全長	全幅	孔径	重量 (g)				
482	THJ	07-IV		J-6		4層	A	2.75	0.7	0.25 (0.1)	1.5	0.06	3.92	刺	
483	RHH	04-II		F-6		4層	D	4.75	0.9	0.2	4.6	0.04	5.27	刺	全体に赤色顔料残る装飾品
484	RHH	05-I-2		C-6		8層	E	4.8	1.4	0.45	7.8	0.20	3.42	刺	
485	THJ	07-II		N-7		3a層	A	2.75	0.9	0.3	1.3	0.09	3.05	刺	
486	THJ	07-IV		C-3		4層	D	4.7	1.05	0.45	4.4	0.20	4.47	刺	
487	THJ	08-I		A-2 (I-13)		5層	E	4.75	1.3	0.35	8.0	0.12	3.65	刺	
488	THJ	07-IV		K-7		4層	A	2.35	1.35	0.5	3.4	0.25	1.74	刺	
489	THJ	02-III		E-7		3層	D	4.9	1.2	0.3	5.9	0.09	4.08	刺	
490	THJ	08-I		I-13			B	3.6	0.9	0.3	2.3	0.09	4.0	刺	両端の作りが丁寧
491	THJ	08-I		L-17			D	4.85	1.0	0.4	4.8	0.16	4.85	刺	
492	RHH	04-II		N-22		7a層	F	5.4	1.3	0.35	10.0	0.12	4.15	刺	
493	THJ	07-IV		K-7		4層	B	3.9	0.7	0.35	1.3	0.12	5.57	刺	
494	THJ	08-I		A-1 (I-13)		5層	D	4.4	0.9	0.3	2.7	0.09	4.88	刺	
495	THJ	08-I	SD-05		1層	7	F	5.4	1.1	0.3	6.6	0.09	4.9	刺	
496	THJ	07-III (南)					C	3.75	2.2	0.45	13.5	0.20	1.70	刺	
497	THJ	08-I		H-14			D	4.1	1.15	0.3	4.2	0.09	3.56	刺	
498	THJ	08-I		G-13			C	3.8	1.5	0.5	7.6	0.25	2.53	刺	両端の作りが丁寧

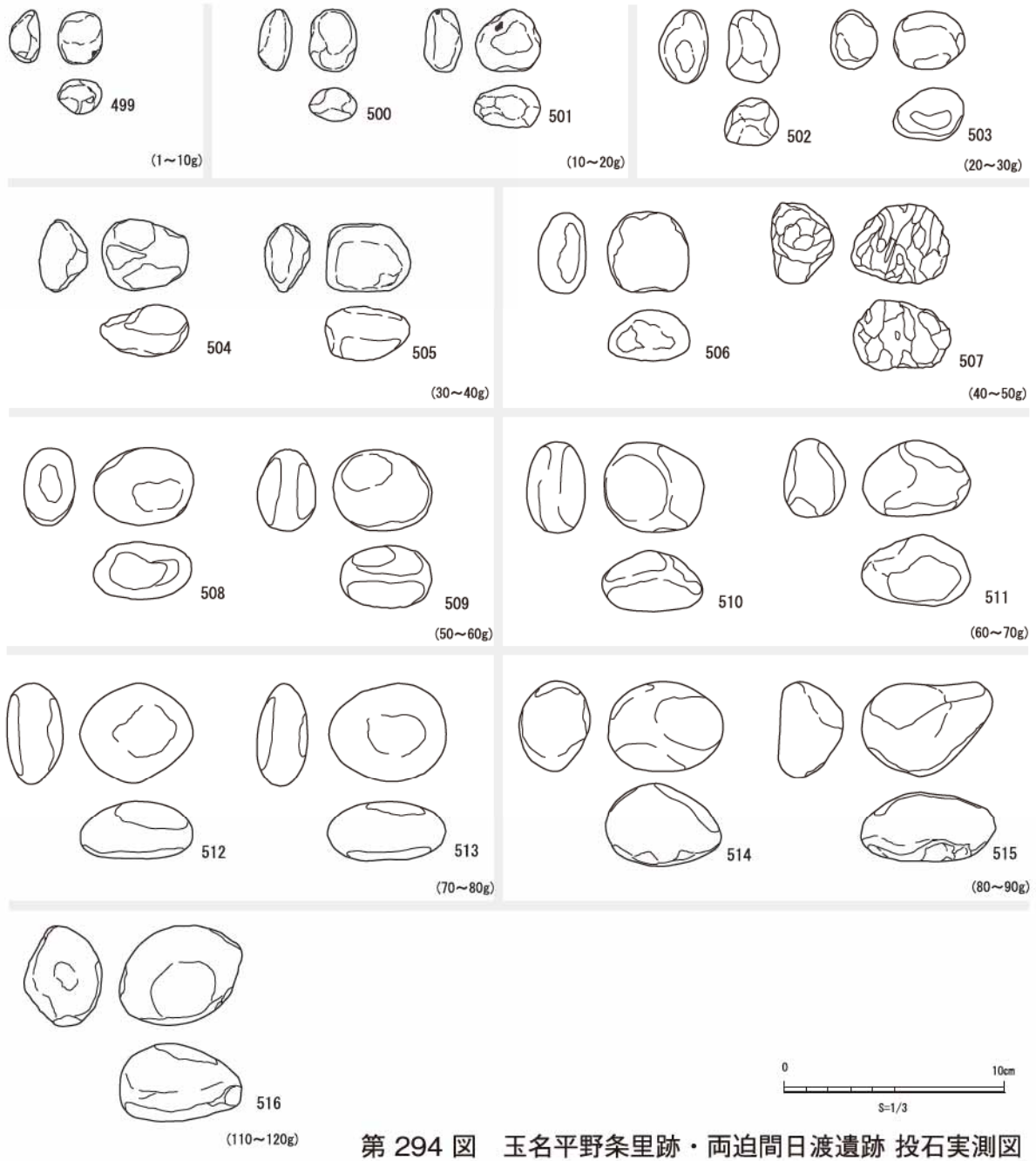
(刺し網系 → 刺、袋網系 → 袋)

出土土錘分類総数

分類	内 容	個数
A	全長2~3cm・幅1cm程度	4
B	全長3~4cm・幅1cm程度	12
C	全長3~4cm・幅2cm程度	3
D	全長4~5cm・幅1cm程度	26
E	全長4~5cm・幅1.5cm程度	7
F	全長5~6cm・幅1cm程度	6

孔径の2乗値 L、土錘の長さを最大幅で除した数値 Pを計測すると $0 \leq L \leq 0.25$ で $1 < P < 7.0$ の刺網のものと $0.25 < L$ で $1 < P < 3.0$ の袋網系(地曳網、底曳網)に大きく分けることができる

(久保禎子 1997年)



第 294 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石実測図

第 7 表 投石サンプル一覧表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	出土地点				石材	重さ(g)	
	調査区		遺構	グリッド			出土層
499	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	9.1
500	RHH	05-I-1		E-6	8層	安山岩	12.3
501	RHH	05-I-1		D-6	8層	安山岩	18.4
502	RHH	05-I-1		D-3	8層	安山岩	20.6
503	RHH	05-I-1		D-6	8層	安山岩	21.3
504	RHH	05-I-1		C-6	8層	安山岩	30.5
505	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	32.6
506	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	42.0
507	RHH	05-I-1		D-4	8層	不明	46.9
508	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	52.5
509	RHH	05-I-1		D-6	8層	安山岩	54.3
510	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	65.8
511	RHH	05-I-1		D-6	8層	安山岩	60.9
512	RHH	05-I-1		D-4	8層	安山岩	72.2
513	RHH	05-I-1	SX-03		8層	安山岩	76.6
514	RHH	05-I-1		D-3	8層	安山岩	85.8
515	RHH	05-I-1		E-6	8層	安山岩	82.8
516	RHH	05-I-1	SX-03		8層	安山岩	110.6

調査区別投石出土数

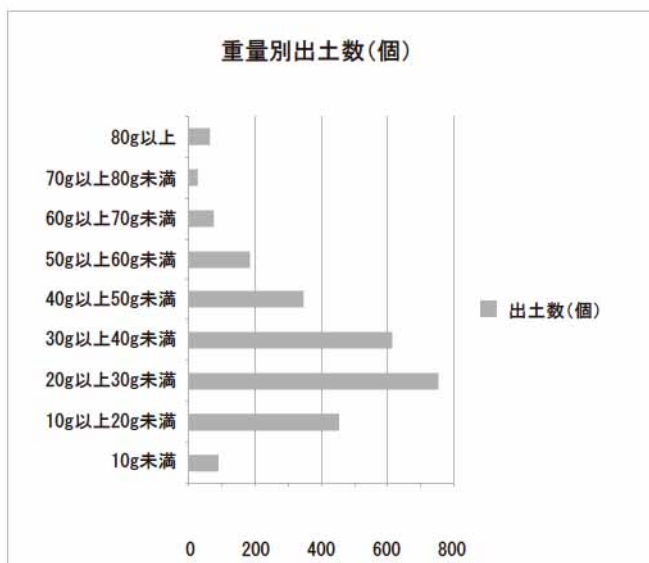
(総出土数2597個)

調査区	出土数(個)
THJ 04-I区	0
RHH 03-II区	5
RHH 04-II区	57
RHH 05-I-1区	423
RHH 05-I-2区	333
RHH 06-I区	293
RHH 05-II-2区	3
RHH 05-II-1区	3
RHH 04-I区	5
RHH 03-I区	15
RHH 03-III区	13
THJ 02-I区	5
THJ 02-III区	0
THJ 02-II区	2
THJ 05-III-1区	0
THJ 06-II区	358
THJ 05-III-2区	0
THJ 06-III区 (07-II区)	739
THJ 07-II区	(0)
THJ 07-I区	278
THJ 08-I区	49
THJ 07-IV区	5
THJ 07-V区	6
THJ 07-III区	5
総出土数	2597

※06-III、06-III(07-II)を含む
※投石として取上げていない

重量別投石出土数

重量(g)	出土数(個)	割合(%)
10g未満	89	3.4
10g以上20g未満	452	17.4
20g以上30g未満	752	28.9
30g以上40g未満	613	23.6
40g以上50g未満	345	13.2
50g以上60g未満	183	7.0
60g以上70g未満	74	2.8
70g以上80g未満	26	1
80g以上	63	2.4
総出土数	2597	



遺構・その他の投石出土数

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
02-II区	不明	2

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
03-I区	SX-03	4
	SX-04	2
	SX-05	6
	包5層	3

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
03-II区	SX-06 埋1a層	3
	SX-06 埋2層	1
	SX-07 埋3層	1

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
06-II区	SH-01	3
	SH-01-02(包6a層)	8
	SD-05	51
	流路埋土	9
	包6a層	22
	包7層	13

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-III区	SD-01	2
	自然堆積層3	1
	北側調査区	1
	西壁清掃	1

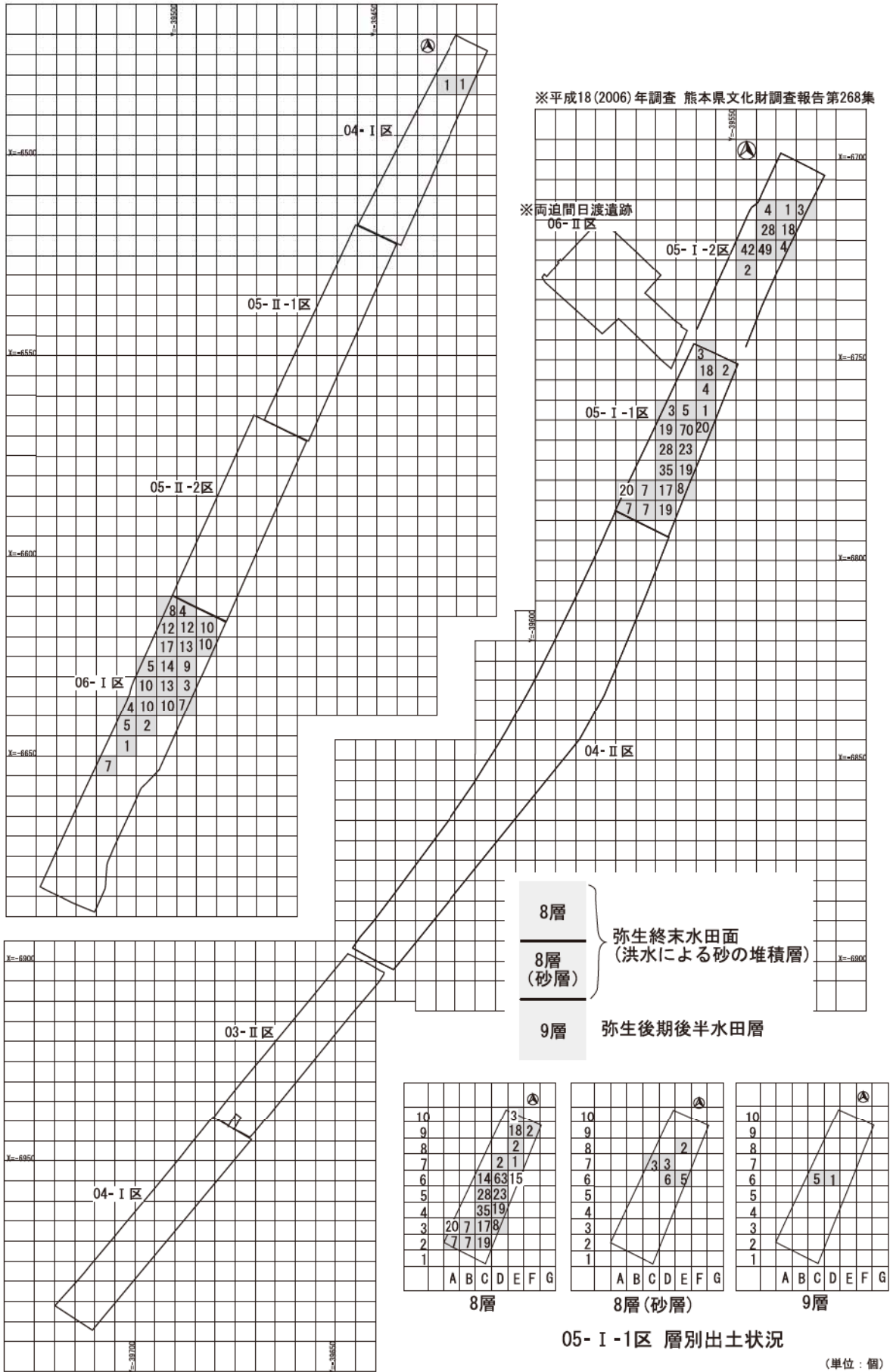
調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-V区	SX-04	1
	包4層・5層	1
	流路(溝)埋土	1
	表土剥ぎ	1

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
08-I区	SD-04	3
	SD-07	1
	SD-14	3
	SD-18	1
	SK-02	3
	ST-03	2
	不明	1

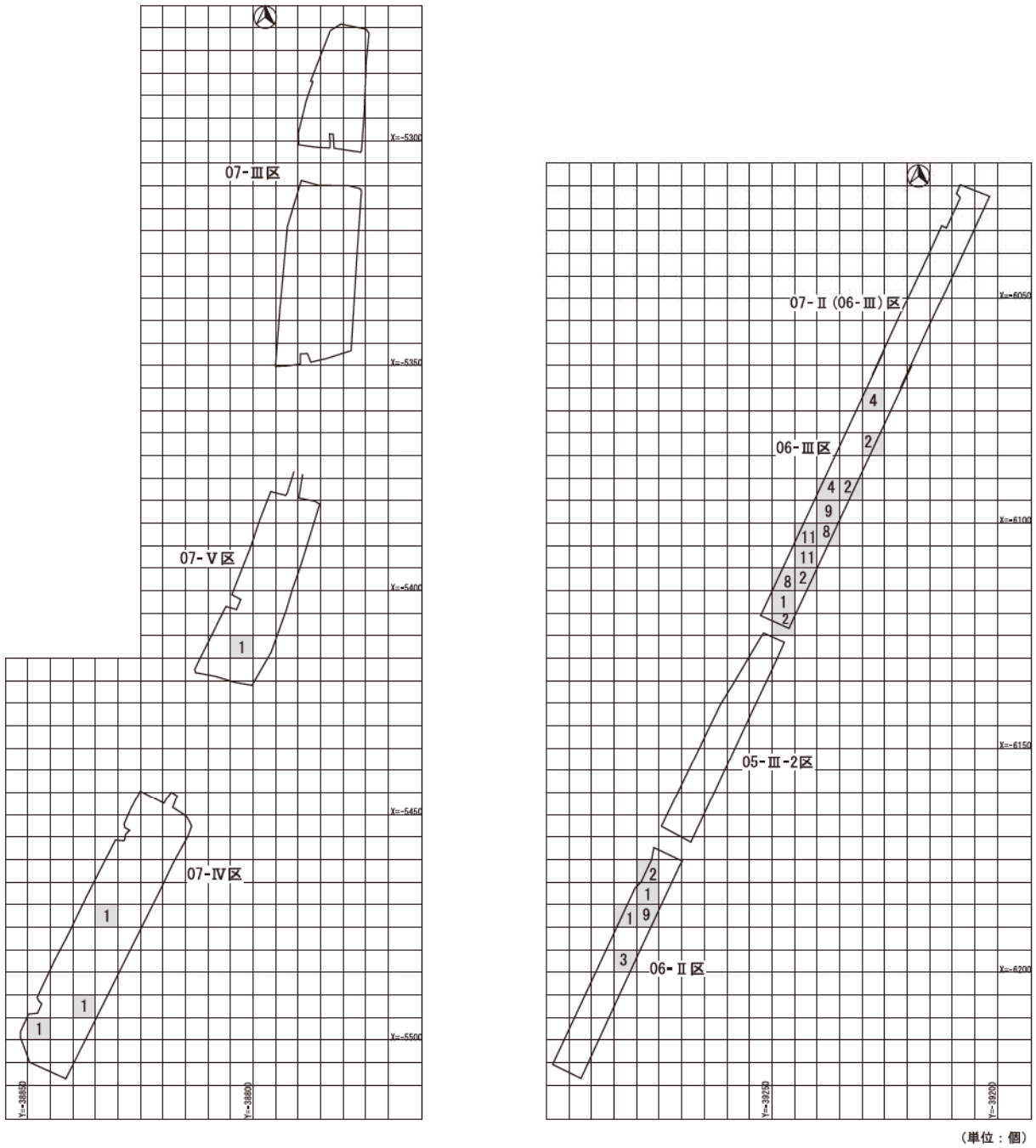
調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
07-I区	SD-02	87
	SD-04	5
	SD-03	5
	SD-06	81
	SX-01	3
	SX-03	2
	SK-03	7
	SX-02	13
	SX-06	17
	SE-01	3

調査区	遺構・出土地点	出土数(個)
06-III区(07-II区)	SD-02	1
	SD-31	47
	SP-35	1
	SX-36	1
※07-II区、06-III区、 06-III区(07-II区) 出土を全て含む	SD-37	10
	5番杭	8
	溝掘り時	3
	攪乱	3

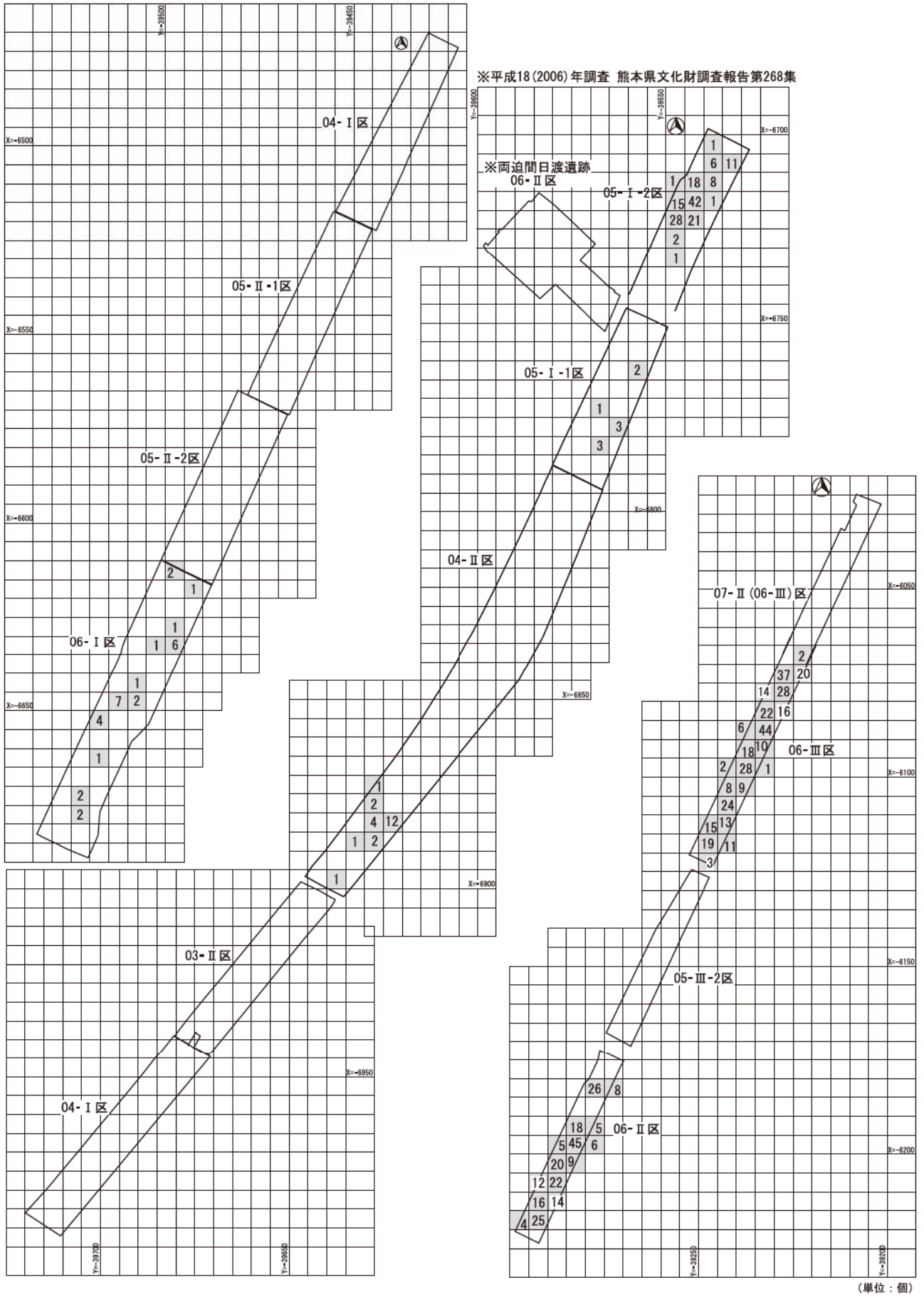
第8表 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡投石出土



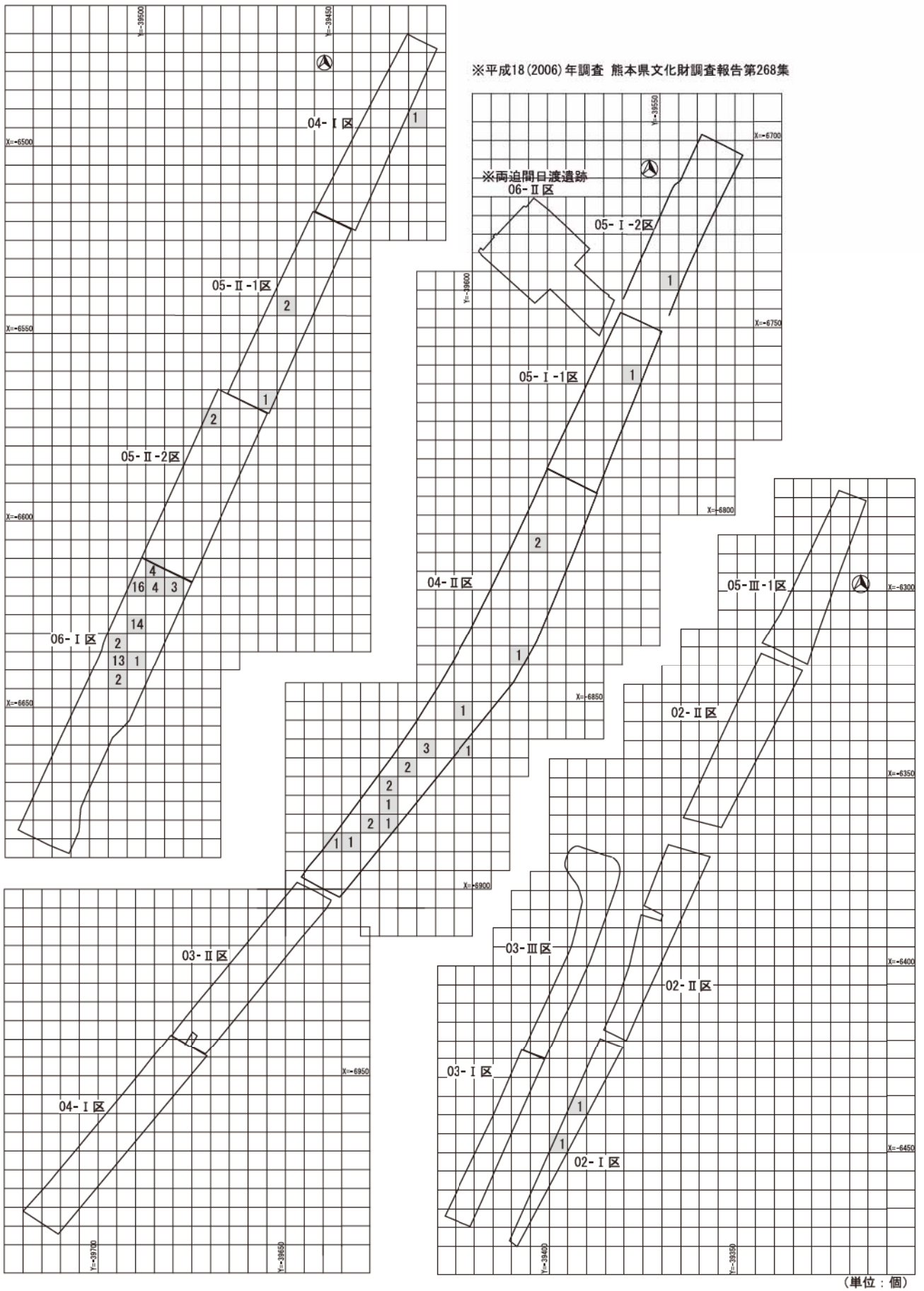
第 295 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 弥生 1



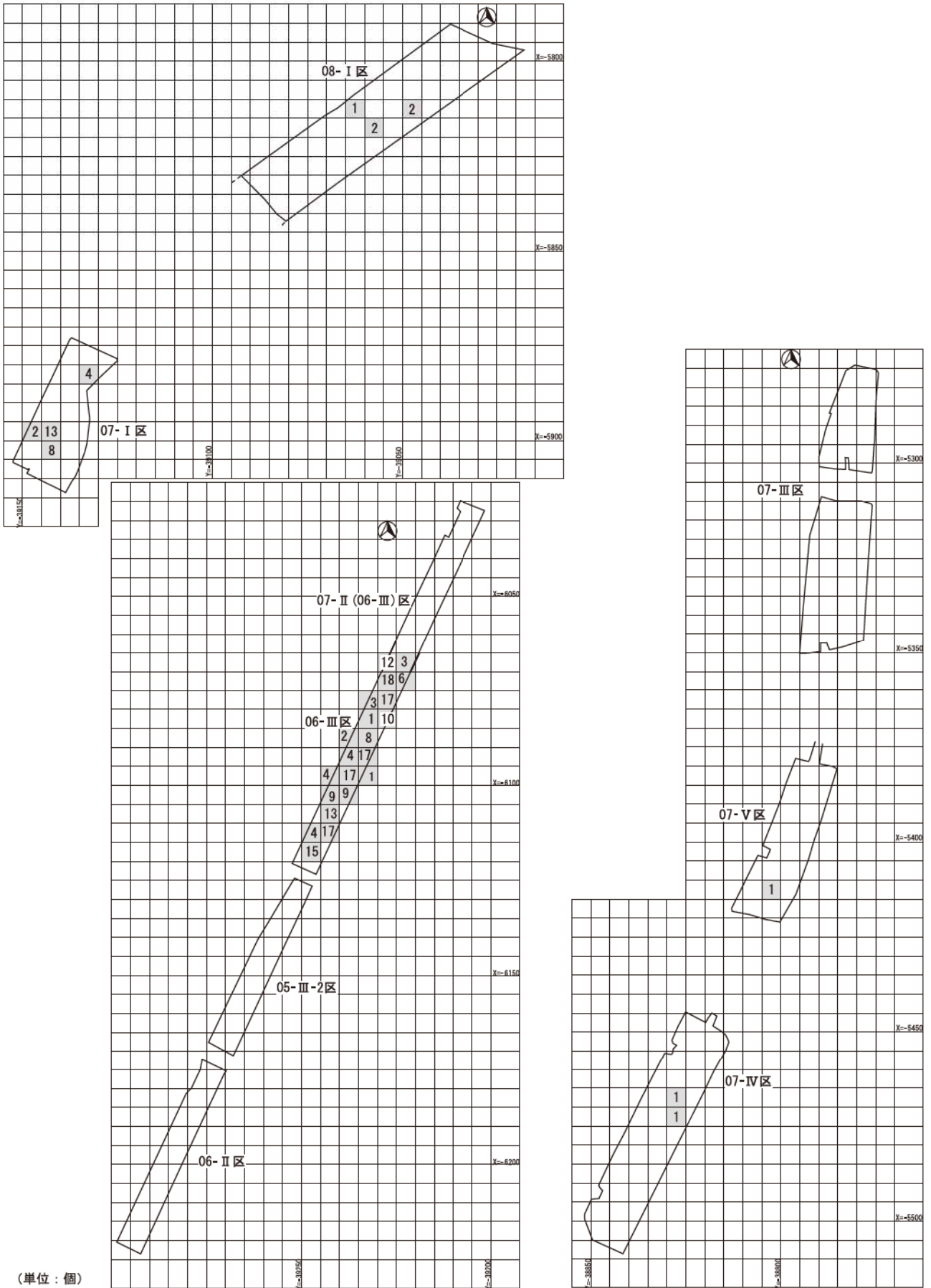
第 296 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 弥生 2



第 297 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 古墳

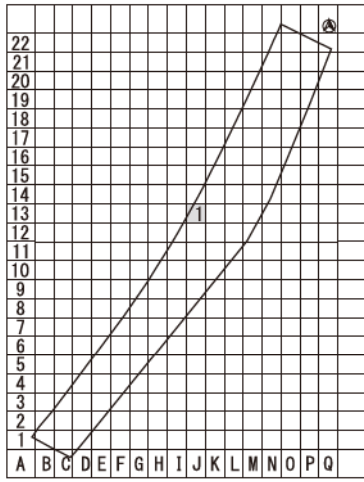


第 298 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 中世 1

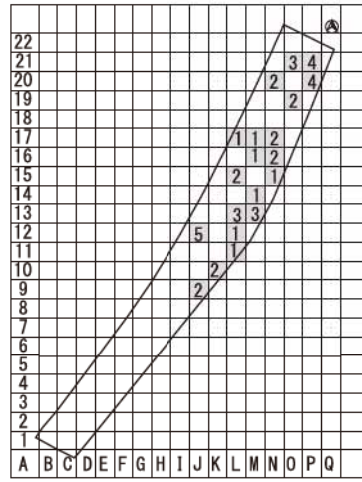


(単位：個)

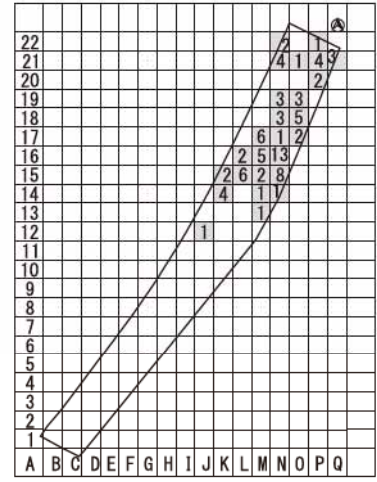
第 299 図 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 投石出土分布図 中世 2



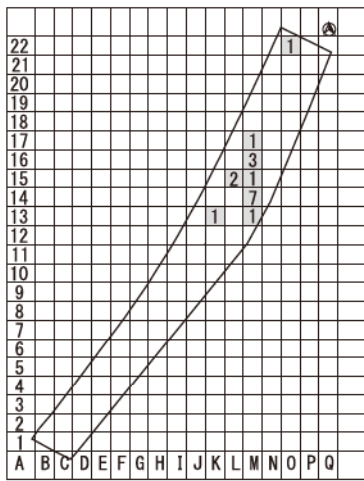
04- II 区3層



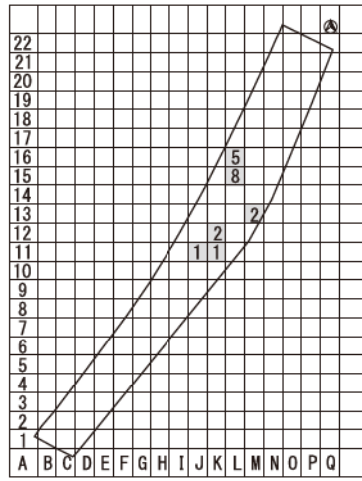
04- II 区4層(中世)



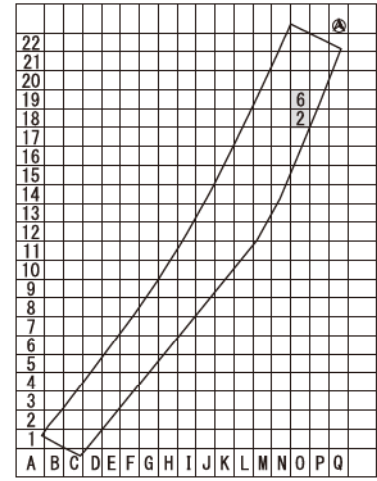
04- II 区6層(古墳)



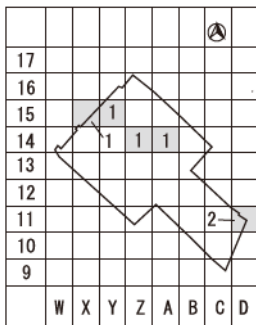
04- II 区6b層(古墳)



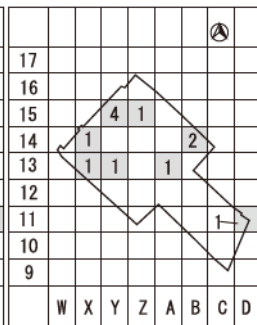
04- II 区砂層(古墳)



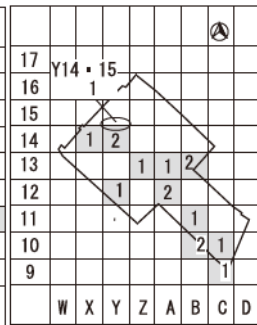
04- II 区7a層



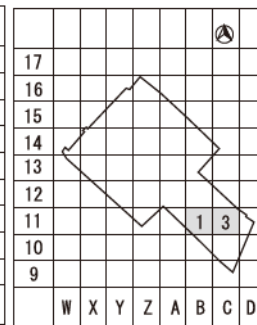
06- II 区7a層



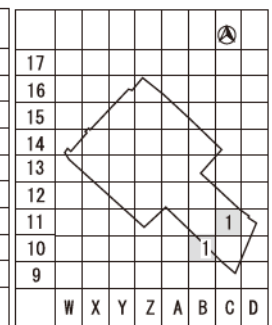
06- II 区7b層



06- II 区8層



06- II 区8b層



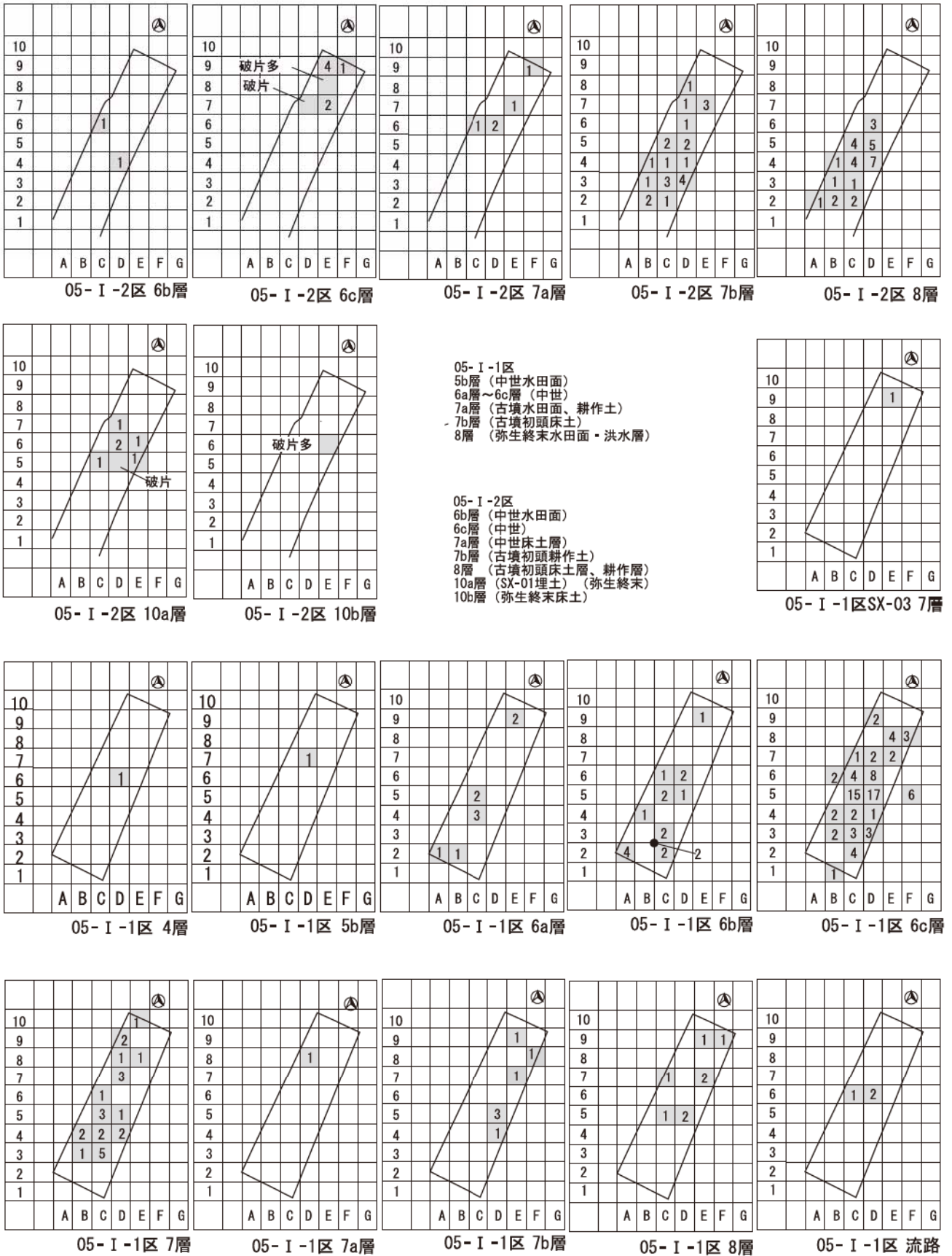
06- II 区9層

※両迫間日渡遺跡06- II 区は、熊本県文化財調査報告 第268集

04- II 区
4層(中世)
6層・6b層・砂層(古墳)
7a層(有明粘土)

06- II 区
7a層(古墳後期耕作面)
7b層(古墳後期床土、耕作土)
8層(古墳初頭耕作面)
8b層(弥生終末水田、耕作面)
9層(弥生後期中葉以前)

第 300 図 両迫間日渡遺跡 04- II 区・玉名平野条里跡 06- II 区 種実(桃)層別出土範囲図



第 301 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区・05-I-2 区 種実（桃）層別出土範囲図

第9表 土器観察表（玉名平野条里跡・面迫間日渡遺跡）

報告	調査区	出土地点			種別	器種	法量 (cm)			調整			色調		胎土	備考
		遺構	グロブ	層位			取上げNo.	口径	底径	最大口径	器高	外面	内面	外面		
3	RH	06-1	SI-01	G-10	10b-3層	縄文土器	深鉢	(30.8)	(33.6)	25.3~	阿高式・凹縁文・ヘラ削り	指押さえ縁ナテ	7.5YR6/4にぶい赤褐色	白色粒・赤褐色粒	内面磨耗著しい	
			SX-01													11層
4	RH	06-1	SK-01	H-11	11層	縄文土器	深鉢		15.1~	ナテ・凹縁文	工具ナテ・ナテ	7.5YR6/3にぶい褐色	角閃石・雲母・赤褐色粒 白色砂粒	阿高式		
															11層	工具ナテ・ナテ
5	THJ	07-3		H-14・15	素土	縄文土器	深鉢		10.9~	縄文	横方向の削り	10YR6/3にぶい黄褐色	長石・石英・角閃石 輝石・雲母 赤褐色粒	石粒を多く含む		
															素土	横方向の削り
8	THJ	01-2	SK-20	1層	1層	弥生土器	壺	25.6	30.7~	ハケ目	ハケ目・ナテ	10YR8/2灰白	長石・角閃石・輝石・雲母 赤褐色粒			
			SX-21												1層	ハケ目
9	THJ	01-2	SI-34	下層	下層	土師器	壺	17.3	(21.6)	ハケ目・後縁ナテ・ハケ目 ナテ	横ナテ・ヘラ削り・ナテ	10YR8/3淡黄褐色	角閃石・雲母・白色砂粒 赤褐色粒	底部受熱痕 内面に黒斑		
			SI-34												下層	土師器
10-1	THJ	02-1	SH-01	90-92	2層	弥生土器	薬椀(口縁)	(32.4)	1.95~	横ナテ	横ナテ	10YR7/3にぶい黄褐色	石英・角閃石	内面下位は赤影々		
			SD-09												2層	弥生土器
10-2	THJ	02-1	SH-01	102-294	2層	弥生土器	薬椀(口縁)		33.3~	ハケ目・ナテ・横ナテ・刻み 目変部文	ハケ目	2.5Y7/3淡黄	長石・石英・角閃石	ズズ付着 頸部・押捺文 黒斑		
			SD-09												2層	弥生土器
11	RH	02-1	SH-01	136・155	2層	弥生土器	壺		20.9~	刻み目・ハケ目・叩き・削り 頸部押捺文	ハケ目	10YR7/2にぶい黄褐色	石英・角閃石・金雲母			
			SD-09												2層	弥生土器
12	THJ	02-1	SH-01	148-50152	2層	弥生土器	脚付蓋	(30.0)	18.5~	ハケ目・後縁ナテ ナテ	回転ナテ 工具による調整後指ナテ	5YR6/6橙 2.5YR6/6橙	長石・角閃石・輝石・金雲母 石英	全体的に磨耗		
			SD-09												2層	弥生土器
13	THJ	02-1	SH-01	1・434448	9層	弥生土器	高杯	32.4	10.2~	調整不明	調整不明	10YR8/4淡黄褐色	長石・石英・角閃石・赤色 粒	表面磨耗 口縁磨滅 口縁歪み		
			SD-09												9層	弥生土器
15	RH	05-1-1	SH-02	73・74・141	2・4層	弥生土器	長胴壺	(18.4)	16.6~	ハケ目・後縁ナテ・ハケ目 叩き	横ナテ・ナテ・ハケ目	10YR7/4にぶい黄褐色	長石・石英・角閃石			
			SH-03												2・4層	弥生土器
16	RH	05-1-1	SH-02	63~69	8層	土師器	壺		8.6~	ハケ目・後縁ナテ	ナテ・指原庄痕	7.5YR6/4にぶい黄褐色	長石・石英・金雲母	外面赤色顔料		
			SH-03												8層	土師器
17	RH	05-1-1	SH-02	72~75	8層	土師器	器台		5.8~	ナテ	ハケ目・後縁ナテ	2.5Y7/3淡黄	長石・輝石・金雲母	外面赤色顔料		
			SH-03												8層	土師器
29	RH	05-1-2	SH-02	77~80・83	10層	土師器	壺	13.6	12.5~	横ナテ・叩き・ハケ目	横ナテ・ハケ目・ヘラ削り	10YR7/2にぶい黄褐色	石英	外面赤色顔料		
			SH-03												10層	土師器
30	RH	05-1-2	SH-02	84・98・100	10層	弥生土器	鉢	(18.2)	5.8~	横ナテ・ハケ目・後縁ナテ	ハケ目・後縁ナテ・ハケ目	2.5Y7/2灰黄 7.5YR7/4にぶい黄褐色	雲母・赤色粒・赤 色	外面に黒斑 外面にス付着		
			SH-03												10層	弥生土器
31	RH	05-1-2	SH-02	181・183	10層	弥生土器	鉢		9.3	横ナテ・ハケ目・工具ナテ	工具ナテ・ナテ	2.5Y7/3淡黄	長石・雲母	黒斑 外面赤色顔料付着		
			SH-03												10層	弥生土器
32	RH	05-1-2	SH-02	185~188	10層	弥生土器	高杯	22.0	7.0~	横ナテ・ハケ目・後縁ナテ 赤影	ハケ目・後縁ナテ・ナテ	10YR7/3にぶい黄褐色	赤褐色粒	黒斑		
			SH-03												10層	弥生土器
33	RH	05-1-2	SH-02	191・193	10層	弥生土器	長胴壺		20.6~	ハケ目・叩き・叩き後ハケ 目	指ナテ・ハケ目・後縁ナテ ハケ目	2.5Y7/2灰黄 2.5Y3/2黒褐色	石英・角閃石・雲母・赤色 粒	外面に黒斑		
			SH-03												10層	弥生土器
34	RH	05-1-2	SH-02	204・207	10層	弥生土器	壺	(18.8)	17.1~	ハケ目・後縁ナテ・叩き	ハケ目	10YR7/3にぶい黄褐色	石英	黒斑		
			SH-03												10層	弥生土器

報告	調査区		出土地点		標列	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	備考
	調査区	グッド	遺構	グッド			口径	底径	最大口径	器高	外面	内面	外面		
35	RH	05-1-2	SX-01	D-6 D-5 E-5	弥生土器	壺	13.6	(19.7)	23.0~	横ナチ・ハケ目・叩きナチ	横ナチ・ハケ目	5Y7/2灰白	5Y4/1灰	石英・細かい長石	黒斑
37	TH	06-II	SH-02	柱3	縄文土器	脚付鉢	23.0		14.8~	別み目筒帯文・条痕文・ハケ目による調整後ナチ	工具による調整後ナチ	5YR7/6緑 5YR3/1黒褐	2.5Y7/2灰黄 2.5Y4/1黄灰	長石・石英・金雲母	全体的に歪み
38	TH	07-IV	SD-05	K-6 J-6	須臾器	蓋	(15.5)		3.2~	回転へう削り後ナチ	回転へう削り後ナチ	7.5Y 7/1灰白	N6/ 灰	長石・輝石	口縁部歪み
39	TH	07-IV		J-6 K-7	須臾器	蓋	(10.4)	(8.5)	4.4	回転へう削り	回転ナチ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	長石・輝石・金雲母	外面へう記号
40	TH	07-IV		L-7	須臾器	鉢	1.1~		4.8~	回転ナチ・条痕線	回転ナチ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	長石・輝石	器面粒子荒く雑状
42	TH	07-IV	SD-01	1層	弥生土器	台付壺	(42)		3.1~	回転ナチ	回転ナチ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	長石・石英・輝石・金雲母	器面彫刻
44	TH	01-3	SH-52	N24W9	土師器	鉢	16.2		6.7	横ナチ・ナチ・ハケ目	ハケ目・ナチ	5YR6/6緑	5YR6/6緑	紫紺~2mmの砂粒・小石粒 角閃石・雲母・白色砂粒	
45	TH	01-3	SH-52	N21W9	土師器	壺	(19.0)	(23.2~)	8.6~	口縁部丸縁・横ナチ ハケ目後ナチ	横ナチ・削り後ナチ	2.5Y7/4淡黄	2.5Y7/3淡黄	石英・金雲母	
46	TH	01-3	SH-52	1層	土師器	小型丸底壺	8.7		5.7	横ナチ	横ナチ	7.5YR8/4淡黄緑	7.5YR7/4淡黄緑 7.5YR7/6緑	雲母・黒色粒・赤色酸化粒	ほぼ球形 外面面に保付着。 内外器面黒珪の剥離不明
47	TH	01-3	SX-102	1	土師器	小型丸底壺	(10.4)	(9.1)	9.0	ハケ目・横ナチ	ハケ目・ナチ	7.5YR7/4にふい黄	10YR7/4にふい黄	長石・石英・輝石	口縁黒斑
48	TH	01-3	SH-102	9	土師器	壺	(14.6)		14.6~	横ナチ・ハケ目	横ナチ・へう削り後ナチ	5YR6/6~7/6緑	10YR7/4にふい黄	紫紺~2mmの砂粒 石英・輝石・雲母	胴部二枚断面の黒斑 口縁部がやや歪む
49	TH	01-3	SH-102		土師器	鉢			4.3~	工具による調整後ナチ	横ナチ・指ナチ	10YR7/3にふい黄 10YR6/3にふい黄	10YR7/3にふい黄 10YR6/3にふい黄	長石・角閃石・輝石・金雲母	
50	TH	01-1	SE-31	3層	土師器	壺	16.4	21.0	21.8~	横ナチ・工具ナチ・ハケ目 後ナチ	ハケ目後横ナチ・へう削り 後ナチ	10YR7/3にふい黄 10YR7/3にふい黄	10YR7/3にふい黄 10YR6/3にふい黄	長石・雲母・赤褐色粒	受熱痕
51	TH	01-1	SE-31	3層	土師器	小型丸底壺	10.2	11.8	11.1	横ナチ・工具ナチ	ハケ目・へう削り	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	長石・石英・角閃石・白色粒	口縁に外面一筋粘土補填部分
52	TH	01-1	SE-31	4層	土師器	小型丸底壺	9.5	7.3	8.05	横ナチ・ハケ目一部ミガ キ削り後ナチ	横ナチ・指ナチ	2.5Y6/3にふい黄	2.5Y6/3にふい黄 7.5YR6/6緑	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	ほぼ球形・口縁内部に彩色 外面面に黒斑
53	TH	01-2	SE-36	N0E3	土師器	壺	12.2	17.8	20.9	ハケ目・ナチ	横ナチ・へう削り	10YR7/2~7/3 にふい黄	10YR7/2~7/3 にふい黄	長石・石英・輝石・雲母	口縁部打ち欠き
54	TH	01-2	SE-36	N0E3	土師器	壺	(15.8)	22.4	21.3	横ナチ・ハケ目	ハケ目・へう削り	10YR7/3にふい黄 10YR7/3にふい黄	5YR6/4にふい黄 10YR6/3にふい黄	長石・金雲母	内面には付着物あり 外面スス付着
56	TH	01-3	SE-114	1層	土師器	器台	8.2	0.5	2.9~	ハケ目後ナチ	ナチ・ハケ目後ナチ	10YR7/3にふい黄 10YR7/3にふい黄	10YR7/4にふい黄	長石・石英・金雲母	2ヶ所円形の透かし
57	TH	01-3	SE-114	1層下層	土師器	小型鉢	12.4		5.45	工具による調整後ナチ・削 り後ナチ	ハケ目後ナチ・指痕圧痕	10YR7/3にふい黄 10YR6/6淡黄緑	7.5YR7/3にふい黄	長石・石英・輝石・雲母	器面全体腐蝕 口縁部打ち欠き
58	TH	01-3	SE-114	1層	土師器	鉢	(12.3)	(11.8)	10.1	工具ナチ後ナチ	へう削り後ナチ	10YR6/6淡黄緑	10YR6/6淡黄緑	長石・石英・輝石・雲母	内面黒斑 口縁打ち欠き
59	TH	01-3	SE-114	N15W12	土師器	小型壺	(13.0)		12.8	横ナチ・ハケ目・へう削り 後ナチ	横ナチ・ハケ目	5YR7/3 7/4にふい黄	5YR6/6緑	長石・石英・雲母・茶褐色粒	口縁・底部打ち欠き 胴部打ち欠き(赤褐色)
60	TH	01-3	SE-114	N12.W12	土師器	小型壺	12.4		11.8~	横ナチ・ハケ目・へう削り 後ナチ	ハケ目・へう削り後ナチ	5YR7/3 7/4にふい黄	5YR6/6緑	長石・石英・雲母・白色砂粒	口縁部に彩色物が若干付着 一部口縁部の破面に彩色物付着 打ち欠き
61	TH	01-3	SE-114	3層	土師器	坏	13.4		5.4	横ナチ・ナチ	へう削り後ナチ	10YR8/3淡黄緑	10YR7/3にふい黄	長石・石英・金雲母	
62	TH	01-3	SE-114	N15W12	土師器	鉢	16.4		5.9	横ナチ・ハケ目	横ナチ・工具ナチ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	石英・雲母	黒斑
63	TH	01-3	SE-114	N15W12	土師器	壺	(17.8)		7.9~	ナチ・へう削り	ナチ・へう削り	10YR6/3にふい黄 10YR7/2にふい黄	10YR6/6明黄褐	長石・角閃石・雲母	口縁部にスス付着
64	TH	01-3	SE-114	N15W12	土師器	壺	(13.6)		6.5~	横ナチ・ハケ目後ナチ	ナチ・へう削り後ナチ	10YR7/2にふい黄 10YR7/2にふい黄	10YR7/2にふい黄	長石・角閃石・金雲母	
65	TH	01-3	SE-114	N15W12	土師器	壺	(13.6)		6.5~	回転ナチ・ハケ目調整後 回転ナチ	ナチ・へう削り	10YR7/2にふい黄 10YR7/2にふい黄	10YR7/3にふい黄	長石・輝石・金雲母	
66	TH	01-3	SE-114	6-7-13-14 25-52-56 58	弥生	壺		(26.9)	28.3~	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ナチ・ハケ目	10YR8/2灰白~ 10YR8/3淡黄緑	10YR7/2にふい黄	長石・雲母・白色砂粒	内面・外面のベルド位置は異なる 口縁部打ち欠き
68	TH	01-3	SE-115	N15W15	土師器	鉢	(12.8)		6.8~	ナチ・削り後ナチ	削り後ナチ	5YR7/4にふい黄 7.5YR6/2灰褐	7.5YR7/4にふい黄	長石・石英・角閃石・金雲母	外面黒斑・細かい 外面スス付着
69	TH	01-3	SE-115	1~3層	土師器	鉢	(9.7)		6.2~	ナチ・削り後ナチ	工具ナチ	10YR6/3にふい黄 7.5YR7/4にふい黄	10YR6/4にふい黄	長石・石英・角閃石・金雲母	底面スス付着
70	TH	01-3	SE-115	1層	弥生	鉢	15.9		9.9	ナチ・ハケ目	ナチ・工具ナチ・ナチ	7.5YR7/4にふい黄	7.5YR7/4にふい黄	長石・角閃石・雲母	口縁の半面形 やや横円形
71	TH	01-3	SE-115	6層	土師器	壺		(22.6)	16.2~	ハケ目	ナチ・ハケ目	10YR6/2淡黄褐	10YR6/3暗黄褐	石英・雲母	外面へう記号 口縁一部削り打ち欠き

番号	調査区			出土地点			種別	器種	法量(cm)			調整			色調			附土	備考
	調査区	遺構	グランド	層位	取上げNo.	口徑			底徑	最大調整	器高	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
72	THU	01-3	SE-121	N15W12	8層	60	土師器	壺		(19.4)	21.0	横ナチ・ナチ	横ナチ・ヘラ削りナチ	N15/黒	10YR4/1褐灰	紫石・石英・雲母	外面全体のノース付着 口縁～胴部打ち欠き		
73-1 73-2	THU	01-3	SE-121	N15W12	8層	61	土師器	壺	(16.6)	(19.5)	22.2	ハケ目・ナチ	ハケ目・ヘラ削りナチ	10YR6/2灰黄褐	7.5YR6/4にぶい黄	長石・雲母・白色砂粒	口縁～胴部打ち欠き(裏面破片) 外面ノース付着		
74	THU	01-3	SE-121		8層		土師器	壺	12.2	18.2	21.4	横ナチ・ハケ目・叩き 真ナチ	横ナチ・ヘラ削りナチ	10YR8/3淡黄褐 10YR6/4にぶい黄	10YR7/2・10YR6/4 にぶい黄	長石・石英・雲母	外面ノースはカール状に剥けた感じ 口縁打ち欠き		
75	THU	01-3	SE-121		8層		土師器	壺	13.8	20.0	20.8	ハケ目・叩き・横ナチ	横ナチ・ヘラ削り	2.5YR8/3淡黄	2.5YR8/3淡黄	長石・石英・雲母			
76	THU	01-3	SE-121		8層		土師器	壺	17.4	21.4	24.1	横ナチ・ハケ目・刷毛状工 真ナチ	ハケ目・ヘラ削りナチ	7.5YR7/4にぶい黄	7.5YR7/6黄	長石・石英・雲母	外面ノース付着		
77	THU	01-3	SE-121	N15W12	4層	32	土師器	ニフェ土器(壺)		(8.6)	5.3～	ナチ	ナチ	10YR7/3にぶい黄	10YR7/2にぶい黄	長石・石英・雲母	内面の一部赤土彩色		
78	THU	01-3	SE-121		2層	22	土師器	小型丸底鉢	9.4		5.6～	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ナチ	7.5YR6/3にぶい黄	7.5YR6/3にぶい黄	長石・石英	底部打ち欠き		
79	THU	01-3	SE-121	N15W12	6層	36	土師器	鉢	(11.8)	(10.2)	6.0～	ハケ目後ナチ・ナチ・ハケ 目後削り	ハケ目後ナチ・削り後ナチ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/3にぶい黄	紫石・雲母			
80	THU	01-3	SE-121		6層	33-35	土師器	小型壺	11.8	14.2	13.2	横ナチ・ハケ目後ナチ	横ナチ・ヘラ削り	7.5YR6/4	7.5YR7/4にぶい黄	石英・角閃石・雲母 赤褐色粒・白色砂粒	受熱により胴下～底部は剥離		
81	THU	01-3	SE-121		4層	28	土師器	壺	12.3	17.1	18.3	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ヘラ削りナチ・指 頭圧痕	7.5YR8/4淡黄褐 7.5YR7/4にぶい黄	7.5YR8/4淡黄褐 7.5YR7/4にぶい黄	金雲母・白色砂粒	部分的に赤化		
82	THU	01-3	SE-121		6層	42-36	土師器	壺	(16.0)	(17.8)	20.5	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ヘラ削り後ナチ	10YR8/2灰白 10YR7/2にぶい黄	7.5YR8/3淡黄	雲母・白色砂粒			
83-1 83-2	THU	01-3	SE-114 SE-114 SE-121		1層 2層 6層	53-54 52	土師器	壺	(14.1)	16.0	10.0～	横ナチ・ハケ目	ハケ目・横ナチ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	長石・石英・雲母	胴部打ち欠き 外面受熱により一部剥離		
84	THU	01-3	SE-121		3-4層 5層 6層	24-28 34	土師器	壺	16.7	22.6	24.7	横ナチ・ハケ目・ナチ	横ナチ・ヘラ削り後ナチ	7.5YR8/3淡黄	10YR7/3にぶい黄	長石・角閃石・白色砂粒	穿孔孔が不明		
85	THU	01-3	SE-121	N15W12	1層	42	土師器	壺	14.1	16.1	14.5～	横ナチ・ハケ目	ハケ目後ナチ・ハケ目後 削り	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	石英・長石・輝石・雲母			
86	THU	01-3	SE-121		1層 6層	42 33-34	土師器	壺	14.1	16.1	14.5～	横ナチ・ハケ目	ハケ目・横ナチ	10YR8/3淡黄	2.5Y7/2灰黄	紫石・雲母・白色砂粒	底部打ち欠き		
87	THU	01-3	SE-121	N15W12	1層	11	弥生土器	壺	13.1	(16.9)	19.4	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ヘラ削り後ナチ	7.5YR7/3にぶい黄	7.5YR7/3にぶい黄	雲母・黒色砂粒	口縁部歪み		
88	THU	01-3	SE-121		6層	52-2	弥生土器	壺	16.6		15.3～	ハケ目・横ナチ	ハケ目・横ナチ・指頭圧痕	5YR6/6黄～7.5YR8/4 淡黄	5YR6/6黄～7.5YR8/4 淡黄	石英・角閃石・雲母 白色砂粒	2ヶ所の穿孔		
89	THU	01-3	SX-113 SE-114 SE-121	N15W12 N15W12 N15W12	1層 1層 5層	88	土師器	器台カ		(18.8)	7.8～	ハケ目後横ナチ・ハケ目	ハケ目	7.5YR8/3淡黄	10YR8/2灰白	小石粒・赤褐色粒・雲母	孔は2個を外で縦溝跡		
90-1	THU	01-3	SX-120 SX-155	N15W12 N15W12	1層 2層	20	土師器	二重口縁壺	23.0		8.5～	横ナチ・ハケ目・工具ナチ	横ナチ・工具ナチ・ハケ目 ナチ	10YR8/4淡黄	10YR8/3淡黄	長石・角閃石・雲母 赤褐色粒	90.2同一個体		
90-2	THU	01-3	SE-110 SE-112 SE-114 SE-115 SX-120 SE-121		1層 1層 1層 1層 1層 3層		土師器	二重口縁壺		50.4	43.2～	横ナチ・ハケ目	横ナチ・工具ナチ・ヘラ削り	10YR8/2灰白 10YR8/3淡黄	10YR8/2灰白 10YR8/3淡黄	石英・角閃石			
91	THU	01-2	SX-28 SD-03	N21W15 N21W15	2層 下層		土師器	壺	(16.4)	19.8	22.5	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ハケ目	7.5YR8/3淡黄	7.5YR8/4淡黄	雲母・白色砂粒・赤褐色粒	胴部黒斑		
92	THU	01-3	SD-131	N18W15	1層		土師器	壺		4.5～	ハケ目後ナチ	ハケ目後横ナチ・指頭圧 痕	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	石英・角閃石	口縁部ノース付着			
93	RHH	03-I			5層		土師器	直口壺	9.9	8.1～	工具による回転ナチ 指頭圧痕	工具による回転ナチ 指頭圧痕	10YR6/4淡黄	10YR6/4淡黄	長石・石英・輝石・雲母	全体の磨耗			
94	RHH	03-II	ST-18			16	土師器	壺	(12.8)		5.8～	横ナチ	横ナチ・削り後ナチ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/1灰白	長石・石英・角閃石・輝石 赤褐色粒	石粒多く含む 焼成不良		

報告	調査区		出土地点		種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	備考
	調査区	遺構	グッド	層位			取上げNo.	口径	底径	最大口径	高さ	外面	内面		
95	RHH	O3-II	ST-18		土師器	高坏	(12.2)	1.9~	ナナ	横ナナ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	長石・石英	石粒多く含む 全体的に摩耗小さい	
96	RHH	O3-II	SX-07	1層 4b層	須臾器	坏身	13.3	8.8	回転へう削り	工具による回転ナナ・指ナナ・指腹圧痕・調整痕	N6/ 灰	N6/ 灰	長石・石英	外面やや摩耗 口縁部打ち欠き	
98	RHH	O3-II		3b層	手づくり	壺	2.5	3.2	指ナナ・指腹圧痕	指ナナ	2.5Y7/3淡黄	2.5Y7/4淡黄	長石・石英・金雲母		
99	RHH	O4-I	SD-02	1層	縄文土器	深鉢		3.8~	三条染文	ナナ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y3/1黒褐	長石・角閃石・金雲母		
100	RHH	O4-I	SD-02	1層	縄文土器	深鉢	2.7~	4.2~	ナナ・口縁部のみ実帯	ナナ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/1褐灰	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
101	RHH	O4-I	SD-02	1層	弥生土器	深鉢	5.6~	6.0~	2条の刻み実帯	ナナ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y4/1黄灰	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
103	RHH	O4-I	SD-02	1層	弥生土器	壺	(27.8)	1.7~	ナナ	横方向のハケ目	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	縦ノ越式 2層1セツで3ヶ所穿孔	
104	RHH	O4-I		E-1	脚付鉢			3.6~	横ナナ・外面から内面に穿 孔	横ナナ	2.5Y6/4にぶい黄	2.5Y7/2灰黄	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
105	RHH	O4-I		D-4.5 D-E-F-3	白磁	椀	(16.4)	6.0	回転ナナ後施釉・削り出し 高台	施釉・見込み輪割ぎ	C-244 ミンクの灰色	C-244 ミンクの灰色	輝石を含む細かい粘土		
108	RHH	O4-II	ST-04	1・2層	土師器	ミニチュア土器 (小型壺)	5.7	2.3	ハケ目・横ナナ・横方向のハ ケ目・指ナナ	横ナナ・ハケ目後ナナ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/1黄灰	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	全体に歪み付着物 口縁部割け所打ち欠き	
109	RHH	O4-II	ST-04	3層	土師器	小型壺	(7.4)	5.2~	ヘラミガキ 工具ナナ後ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナナ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	長石・石英・赤色粒		
110	RHH	O4-II	ST-04	1層 1層 472L	土師器	高坏	16.2	12.5	ハケ目後ナナ	横方向のハケ目後ナナ 縦方向のヘラ削り	5YR7/6橙	5YR7/6橙	長石・石英		
111	RHH	O4-II	ST-04	E-4 E-5 5a層 5b層	土師器	皿	(14.3)	(6.3)	縦方向のヘラ削り	工具によるナナ・ヘラ削り	2.5Y6/2灰黄 N3/ 暗灰	2.5Y6/2灰黄	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	成形やや粗雑 大粒の石粒含む	
112	RHH	O4-II	ST-04	1層 3層 472L	土師器	小型壺	13.2	1.0	横ナナ・多方向のハケ目	横ナナ・多方向のハケ目	2.5Y7/3淡黄	2.5Y7/3淡黄	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
113	RHH	O4-II	ST-04	1層	土師器	小型壺	12.8	0.9	工具による横ナナ・工具に よるナナ	横方向のハケ目後ナナ・ヘ ラミガキ・指腹圧痕	10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/6橙	10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/6橙	長石・石英・輝石	口縁部一部欠損 故意?	
114	RHH	O4-II	ST-04	1層 E-4 5a層	土師器	高坏		12.0	回転ナナ	回転ナナ・指ナナ	10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/4にぶい黄	10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR7/4にぶい黄	長石・石英・角閃石・輝石	大粒の石粒も多く含む 器面摩耗 胴部のみ残存	
115	RHH	O4-II	ST-04	1層 2層 4層	土師器	小型壺 知盛壺	12.2	10.9	横ナナ・ナナ	縦方向の削り(下から上) 横ナナ	7.5YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	全体に器面摩耗 大粒の石粒多く含む 底部は欠損 断面は胴部から底部にかけてかなり深い	
116	RHH	O4-II	ST-04	E-5 5a層	土師器	壺	11.2	10.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	長石・角閃石	特に磨きしまっている 口縁部打ち欠き	
117	RHH	O4-II	ST-04	D-4 5a下層	土師器	壺	16.4	(20.8)	横ナナ・ハケ目	横ナナ・ナナ・ヘラ削り	7.5YR8/4淡黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	長石・石英・輝石・金雲母	黒斑	
118	RHH	O4-II	ST-04	1・2層	土師器	複合口縁壺	20.0	30.1	横ナナ・ハケ目	ハケ目後横ナナ・横ナナ ヘラ削り	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	石英・角閃石	黒斑	
119	RHH	O4-II	ST-04	1・2・3層 サ7Nレ E-4 5a下層 E-5 5b層	土師器	壺	(16.4)	22.1	ハケ目後横ナナ・ハケ目 ハケ目後ナナ	ハケ目後横ナナ・ヘラ削り 指押さえ後ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	石英・白色粒		
120	RHH	O4-II	ST-04	E-4 5a下層	土師器	複合口縁壺	(23.2)	20.0~	ハケ目後横ナナ・横ナナ ハケ目	横ナナ・ヘラ削り	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	長石・石英・輝石・金雲母		
121	RHH	O4-II	ST-04	1層 E-4 5a上層 E-4.5 5a下層	土師器	壺	16.8	8.7~	ナナ・横ナナ・指腹圧痕後 指ナナ・ハケ目後ナナ	指ナナ後下から上方向の ハケ目・横方向の削り	10YR7/2にぶい黄橙 N3/ 暗灰	10YR7/2にぶい黄橙 N3/ 暗灰	長石・石英・輝石	全体器面摩耗 底部不長	
122	RHH	O4-II	ST-04	1層 F-4 E-4 5a下層	土師器	複合口縁壺	12.6	(22.5)	横ナナ	ヘラ削り後ナナ・指腹圧痕	10YR8/1灰白色	10YR8/1灰白色	黒色砂粒・白色砂粒 赤褐色粒	外面に黒斑 摩耗小さい	

報告	出土地点			種別	器種	法量(cm)			調整			色調		胎土	備考		
	調査区	遺構	グランド			層位	取上げNo.	口径	底径	最大口径	器高	外面	内面			外面	内面
123	RHH	04-II	ST-05		土師器	鉢	12.3	6.0	4.5	指ナチ・削り後ナチ	横ナチ・ハケ目・削り後ナチ	5YR7/6緑 10YR8/3淺黄緑	5YR7/6緑 10YR8/3淺黄緑	紫石・石英・燐石・金鱗母	全体に歪み模様 石粒を多く含む。焼成不良		
124	RHH	04-II	ST-05	4層	土師器	壺	6.8	4.7~	4.7~	工具による横ナチ・多方向 ハケ目後横ナチ	工具による横ナチ・ハケ目・指ナチ	2.5Y6/2灰黄 5/1黄灰	2.5Y6/2灰黄 5/1黄灰	紫石・石英・燐石・金鱗母	内面局部調整粗い		
125	RHH	04-II	ST-05	1層	土師器	小型壺	(17.7)	10.5~	10.5~	ハケ目後横ナチ・多方向 ハケ目	横ナチ・削り	N2/黒 10YR7/3にふい黄緑	N3/黒 10YR7/3にふい黄緑	紫石・石英・燐石・金鱗母	外面スス付着		
126	RHH	04-II	ST-05	5a層	弥生土器	鉢	11.5	1.0	6.4	ハケ目後工具による多方向 のナチ	指ナチ・ハケ目と工具による ナチ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	内面ハケ目調整粗の粘土埋り 土質母入小多くの石粒を含む 全体に歪み		
127	RHH	04-II	ST-05	2層	土師器	盃	7.3	10.3	9.7	横ナチ・ハケ目・ナチ	横ナチ・ナチ	10YR7/3にふい黄緑	10YR7/3にふい黄緑	紫石・石英	器面摩耗		
128	RHH	04-II	ST-05	1層	土師器	杯	16	5.8	5.8	ハケ目後ナチ	ナチ	10YR7/3にふい黄緑	10YR8/4淺黄緑	紫石・石英・燐石・金鱗母	形成粗雑		
129	RHH	04-II	ST-05	1層	土師器	高杯	(17.4)	8.6~	8.6~	横ナチ・工具によるナチ	ハケ目後ナチ・工具による ナチ	2.5Y7/3淺黄	2.5Y7/3淺黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	1ヶ所打ち欠き 全体やや歪み 外面調整粗雑		
130	RHH	04-II	ST-07	2層床 2下床	土師器	碗	(11.5)	1.2	4.0	ハケ目後工具によるナチ 多方向の細いハケ目	削り後多方向のナチ	10YR6/2灰黄緑	7.5YR7/4にふい黄	紫石・石英・燐石・金鱗母			
131	RHH	04-II	ST-07	2層床	土師器	直口壺	13.4	15.1	18.5	横ナチ後ヘラミガキ	横ナチ後ヘラミガキ・ナチ ハケ目・ヘラ削り後ナチ	10YR7/3にふい黄緑	10YR7/3にふい黄緑	石英・赤褐色粒	口縁~胴中位全体スス付着 3ヶ所穿孔(内側から)		
132	RHH	04-II	ST-09	3層	土師器	壺	16.4	19.7	22.3	横ナチ・ハケ目	ハケ目後横ナチ・ヘラ削り	10YR7/2にふい黄緑	10YR7/2にふい黄緑	石英・燐石	赤色顔料点描		
133	RHH	04-II	SX-04	6a層	土師器	小型鉢	8.3	4.0	4.0	ナチ後ヘラミガキ・ハケ目 後ナチ	ヘラミガキ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	石英・燐石	赤色顔料点描		
134	RHH	04-II	SX-04	2層	土師器	小型鉢	10.1	6.8	6.8	ヘラミガキ・ハケ目	ヘラミガキ	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	石英・燐石・金鱗母	赤色顔料点描		
135	RHH	04-II	SX-04	1層 5層	土師器	壺	16.4	20.0	22.3	横ナチ・ハケ目・工具ナチ	横ナチ・ヘラ削り	10YR7/2にふい黄緑	10YR7/2にふい黄緑	紫石・石英・燐石・金鱗母	外面全面スス付着		
136	RHH	04-II	SX-04	5層	土師器	壺	16.6	21.1	24.6	横ナチ・ハケ目	横ナチ・ヘラ削り	10YR7/2にふい黄緑	2.5Y7/2灰黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	外面スス付着		
138	RHH	04-II	ST-08 ST-08 SX-03	2~14 1a層 16~17 2層	土師器	壺	(16.4)	20.0~	20.0~	横ナチ・ハケ目	横ナチ・指押さえ後横ナチ ヘラ削り	7.5YR6/4にふい黄	7.5YR6/4にふい黄	石英	外面スス付着 一部調整粗 調整粗雑(縁部から)		
139	RHH	04-II			土師器	壺	14.8	17.1	18.0	カキ目・ハケ目	横ナチ・ナチ・ヘラ削り・指 押さえ後ヘラ削り	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	外面全体にスス付着		
140	RHH	04-II			土師器	壺	17.2	22.2	24.3	横ナチ・ハケ目	ハケ目・ヘラ削り	10YR8/1黒褐	10YR8/1黒褐	石英	外面全体にスス付着		
141	RHH	04-II			土師器	ミニチュア土器 (脚付壺)	(5.7)	4.8	6.3	横ナチ・横ナチ・ハケ目 後ナチ	横ナチ・指ナチ	2.5Y6/3にふい黄	2.5Y6/3にふい黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	石粒多く含む 調整粗雑だが口縁部は一部を焼し打ち 欠き		
142	RHH	04-II			土師器	ミニチュア土器 (小型丸底壺)	(4.3)	0.8	4.0	横ナチ・ハケ目調整後ナチ ナチ・指押さえ	横ナチ・指ナチ	10YR7/2にふい黄緑 YR6/8緑	5YR6/8緑 5YR1.7/1黒	紫石・燐石・金鱗母	調整粗雑		
143	RHH	04-II			土師器	小型壺	(6.6)	(9.0)	7.9	ハケ目調整後ナチ	ナチ・指ナチ	10YR8/2灰白	10YR8/2淺黄緑	紫石・燐石・金鱗母	器面全体摩耗		
144	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	6.5	2.7	7.3	指押さえ後工具による横 ナチ・多方向の削り削り後 のナチ	工具による横ナチ・工具に よるナチ・指ナチ	2.5Y7/3淺黄	2.5Y7/3淺黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	器面多く作粗雑 やや歪み		
145	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	(6.4)	1.5	7.4	横ナチ・工具によるナチ後 ナチ	ナチ・工具によるナチ後 ナチ	10YR7/3にふい黄緑	10YR7/3にふい黄緑	紫石・石英・燐石	少し歪み 外面・口縁部摩耗 石粒多く含む		
146	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	0.5	8.1	5.7~	工具による削り後ナチ・ミガ キ	多方向の削り	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	紫石・石英・燐石	内外面ともに形成歪み 口縁部打ち欠き		
147	RHH	04-II			ミニチュア土器	小型丸底壺	(6.5)	0.8	4.1~	削り後ナチ	ハケ目後ナチ・横ナチ	2.5Y7/4淺黄	2.5Y7/4淺黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	粒子の大きい石粒を多く含む 器面多く摩耗 口縁部打ち欠き		
148	RHH	04-II			土師器	小型壺	7.8	5.05~	7.8	横ナチ・ヘラミガキ・ハケ目 後ナチ	ヘラミガキ	10YR7/4にふい黄緑	10YR7/4にふい黄緑	紫石・石英・燐石・金鱗母	黒斑 口縁部打ち欠き		
149	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	(10.1)	(5.5)	6.5	ヘラ削り後ナチ・横ナチ	削り後ナチ・削り後指ナチ	2.5Y7/3にふい黄	2.5Y7/3にふい黄	紫石・石英・燐石	口縁部は遠端に薄い 器面全体摩耗		
150	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	(11.1)	0.6	(8.2)	横ナチ・多方向のハケ目 後ナチ	横ナチ・ヘラ削り	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	紫石・石英・燐石・金鱗母	器面多く摩耗 石粒多く含む		
151	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	(11.0)	1.6	(8.4)	工具による削り後横ナチ 工具による削り後ナチ	横ナチ・指ナチ	10YR7/3にふい黄緑	7.5YR7/4にふい黄	紫石・石英・燐石	口縁部/打ち欠き		
152	RHH	04-II			土師器	小型丸底壺	(7.5)	10.0	9.0~	横ナチ・ナチ	横ナチ・指ナチ	10YR7/3にふい黄緑	2.5Y6/2暗灰黄	紫石・石英・燐石	外面摩耗		
153	RHH	04-II			土師器	鉢	(13.6)		5.3	横ナチ・ナチ	横ナチ・ナチ	7.5YR7/6緑	7.5YR8/6淺黄緑	紫石・褐色粒	器面全体摩耗		

報告	調査区		出土地点		標別	器種	法量 (cm)			調整			色調			胎土	備考
	調査区	取上げNo.	遺構	層位			口径	底径	最大口径	器高	外面	内面	外面	内面	外面		
164	RH	04-II	E-F-4	5a層	土師器	坏	15.7	0.8	5.3	工具による調整後ナデ・ヘラ削り後ナデ・回転ナデ	工具による調整後ナデ	5YR6/6橙	長石・石英・燐石・金雲母	片断 口縁部打ち欠き			
165	RH	04-II	E-4	5a上層	土師器	坏	13.5	1.6	5.0	横ナデ・ハケ目	横ナデ・多方向のナデ	5YR7/4に少し黄緑 10YR8/3茶黄緑	長石・石英・角閃石・燐石・金雲母	口縁部打ち欠き 全体的に濃く赤み大粒の石粒を多く含む 器面黒く摩耗			
166	RH	04-II	D-4	5a上層	土師器	瓶	(14.8)		10.1	ハケ目調整後ナデ・底部1か所穿孔	ナデ・指環圧痕	10YR7/2に少し黄緑	長石・石英・燐石・金雲母	摩耗			
167	RH	04-II	F-4	5a層	土師器	脚付鉢	12.8	6.9	7.3	多方向のハケ目後ナデ・底付付後ナデ	横方向のナデ・横方向の指ナデ・ハケ目後ナデ	2.5Y7/2灰黄 2.5Y7/2茶黄	長石・石英・燐石・金雲母	口縁部打ち欠き 全体的に器面摩耗 少し赤み			
168	RH	04-II	E-4	5a層 6層	土師器	高坏	(16.0)	(11.9)	17.1	横ナデ・削り後ナデ・縦方向のハケ目	ナデ・回転ナデ	2.5Y7/2茶黄	長石・石英・燐石・金雲母	器面全体摩耗			
161	RH	04-II	E-3	5a0層	弥生土器	シヨウキ型土器	9.2	9.2	8.6	横方向のナデ・縦方向のハケ目	ハケ目後ナデ・指環圧痕ナデ	2.5Y8/1灰白	角閃石・燐石 褐色粒	器面摩耗			
162	RH	04-II	C-2	5b層	弥生土器	脚付壺	10.6	13.0~	11.3~	ハケ目後ナデ・ハケ目調整後ナデ・スズ付層	ハケ目後ナデ・指環圧痕	10YR7/2に少し黄緑	長石・石英・角閃石・燐石	外面・脚部に彩色 やや赤み			
163	RH	04-II	F-4	5a層	土師器	壺	(16.4)		17.5	横ナデ・ハケ目	ヘラ削り後ナデ	2.5Y6/1灰黄	長石・石英・角閃石				
164	RH	04-II	D-4 E-4 5a上層	4層 5a層	土師器	壺	14.2	17.5	19.0	横ナデ・ハケ目・黒斑	ナデ/ハケ目・ヘラ削り	10YR7/2に少し黄緑	長石・石英・角閃石	黒斑			
165	RH	04-II	E-5 5a下層	5a下層	土師器	壺	(16.2)	(22.0)	23.0~	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ヘラ削り	2.5Y7/4浅黄	石英・角閃石・褐色粒	外面一部ハケ目			
166	RH	04-II	E-4	5a層	土師器	壺	15.2	18.7	13.9~	横ナデ・カキ目・ハケ目	横ナデ・ヘラ削り	2.5Y8/3茶黄	長石・角閃石	器面摩耗			
167	RH	04-II	E-4	5a層	土師器	壺	18.8	18.9~	18.8	横ナデ・ハケ目・ナデ	ヘラ削り	2.5Y7/3茶黄	長石・角閃石				
168	RH	04-II	F-5	5a上層	土師器	壺	(15.6)	(20.8)	18.5~	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ヘラ削り	2.5Y5/1灰黄	石・角閃石	黒斑			
169	RH	04-II	E-4 E-4 5a上層 5a層	E-4 E-4 5a上層 5a層	土師器	複合口縁壺	17.6	24.5	17.2~	横ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ・ヘラ削り	5YR4/6赤褐	長石・石英・角閃石				
170	RH	04-II	F-4	5a層	土師器	複合口縁壺	20.8	16.1~	16.1~	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ヘラ削り	7.5YR6/4に少し橙	長石・石英・角閃石				
173	RH	05-II	B-2	9層	弥生土器	深鉢	(24.0)	10.0~	10.0~	ナデ・2条の刻み目家帯・工ナデ・ナデ	指環をえ後ナデ・ナデ	10YR7/3に少し黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	スズ付層			
174	RH	05-II	B-2	9層	弥生土器	深鉢	(24.0)	10.0~	10.0~	2条の刻み目家帯・工ナデ・ナデ	工ナデ・ナデ	10YR7/3に少し黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	外面全体スズ付層			
182	TH	02-III	北野沖水 Tr		縄文土器	漆鉢		5.7~	5.7~	ヘラ削き・ナデ・2条の刻み目家帯	ヘラミガキ	7.5YR3/1黒褐	雲母	波状口縁			
183	TH	02-III	水窪遺跡 環状	D-9	須恵器	碗		1.1~	1.1~	ナデ	ナデ	5Y6/1灰	長石・石英・燐石・金雲母	外面面に黒斑 器面黒く赤しい			
184	RH	02-III			弥生土器	深鉢		10.8~	10.8~	条痕 刻み目家帯	条痕	10YR4/1灰褐	長石・石英・角閃石・燐石	口縁部と皿底部に配り刻み目家帯			
189	RH	05-II	C-1・2	4a層	土師器	脚付皿	8.3	4.4~	4.4~	横ナデ・ナデ・底付付高台	横ナデ	7.5YR7/6橙	長石・燐石・金雲母	口縁部欠損 全体的に赤み			
190	RH	05-II		表土	瓦質土器	土鈴	全長 2.4~	全幅 2.8~	2.3~	指ナデ・穿孔	指ナデ	5Y6/1灰	石英・燐石(細かい粒子)	器面から中心に向けて穴を貫通 穴縁部の1ヶ所に赤みと思われる箇所を 確認			
191	RH	05-II	D-3	5層	土師器	鉢の把手	全長 2.1	全幅 5.1	15.1~	削り後ナデ	削り後ナデ・ハケ目後ナデ	2.5Y7/3茶黄	長石・石英・燐石・金雲母				
192	RH	05-II	D-3	9層	弥生土器	台付鉢	(9.4)		9.2~	ナデ・削り後ナデ	削り後ナデ・ハケ目後ナデ	10YR7/3に少し黄緑 10YR6/1褐灰	長石・石英・燐石・赤色酸化 赤色酸化粒	脚外部面に黒斑			
193	RH	05-II	D-3	9層	弥生土器	深鉢		6.5	6.5	1条の刻み目家帯・条痕後ナデ	条痕後ミガキ	10YR7/3に少し黄緑 N3/階灰	長石・燐石・金雲母	口縁2か所にスズ付層 灯台の為			
210	TH	05-III-2	ST-03	1層	黑色土器	碗	16.0	6.5	6.5	ヘラ削り後ナデ・ナデ・回転ナデ・底付付高台	ナデ・指環圧痕	2.5Y7/3茶黄 N3/階灰	長石・燐石・金雲母	口縁2か所にスズ付層 灯台の為			
212	TH	06-III		6a層	土師器	皿	13.3	9.7	3.1	ナデ・回転系切り	ナデ・回転ナデ	5YR7/4に少し黄緑	長石・石英・角閃石・燐石・金雲母	全体的にやや赤み			
213	TH	06-III	SD-30		土師器	小皿	8.6	7.4	1.7	回転ナデ・口縁部打ち欠き・回転系切痕	回転ナデ	10YR7/3に少し黄緑	長石・石英・角閃石・燐石・金雲母	全体に赤み 口縁一部欠損 内面から外面方向への 打ち欠き多数 外面面に粘土層?			
214	TH	06-III	SD-30		瓦器	椀	15.6	5.7	7.0	ヘラ削り後ナデ・指ナデ・底付付高台	ナデ・指環圧痕	N8/灰白 N4/灰	長石・金雲母				
215	TH	07-I	C-2	4層	土師器	高台付杯		7.0	1.7~	工具による横ナデ・ナデ・工具による多方向の削り	ナデ	7.5YR7/8黄緑	長石・石英・角閃石・燐石	故慮の打ち欠き			
216	TH	07-I	SE-01	1層	土師器	小皿	8.6	6.6	1.2	横ナデ・回転系切り	削り後ナデ	10YR7/4に少し黄緑	長石・石英・角閃石・燐石	口縁部打ち欠き 器面摩耗			

番号	調査区			出土地点			種別	器種	法量(m)			調整			色調		胎土	備考
	調査区	遺構	クワッド	層位	取上げNo.	口径			底径	最大脚径	器高	外面	内面	外面	内面	外面		
218	THJ 07-IV		E-4	5層		19.0	6.8	1.2	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子		7.5YR8/3黄褐色		灰石・石英・角閃石・金雲母	外面面に粘土漚り			
219	THJ 07-IV		M-8	5層		(6.8)	(6.8)	6.7~	回転ヘラ削り付竹筒 回転ヘラ削り付竹筒 台	回転ナナ子		N8/ 灰白 N5/ 灰		燧石				
220	THJ 07-IV		K-6-L-8 L-7-8	6層 5-6層		(11.5)	17.0~	6.5~	回転ヘラ削り付竹筒 ナナ子 回転糸切り後板状圧 痕	工具による回転ナナ子 指ナナ子		7.5Y 7/1灰白		灰石・石英・燧石	口縁部打ち欠き 歪み			
223	THJ 08-I	SB-02	P-8	1層		8.2	6.4	0.9	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子ナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		石英・角閃石・褐色粒	口縁部打ち欠き			
224	THJ 08-I	SB-02	P-8	1層		(14.6)	(10.0)	2.8	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子ナナ子		7.5YR7/4にふい黄褐色		灰石・石英・角閃石 赤褐色粒	口縁部1分所打ち欠き			
225	THJ 08-I	SK-01	SK-01	1層	4	9.2	7.1	1.1	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子ナナ子 指頭圧痕		10YR7/4にふい黄褐色		灰石・石英・燧石・金雲母 褐色粒	口縁部1分所打ち欠き			
226	THJ 08-I	SK-01	A-5 E-11	1層 5層	1	(23.1)		17.9~	口縁部刻み目・上から下 方へのハケ目	横方向ハケ目後ナナ子 縦方向のハケ目後ナナ子		10YR7/2にふい黄褐色		灰石・石英・燧石	内面磨耗気味			
227	THJ 08-I	SK-01	SK-01	1層	7	8.6	7.1	1.2	回転ナナ子 回転糸切り後板 状工具による調整	ナナ子 指頭圧痕		7.5YR7/4にふい黄褐色		灰石・石英・角閃石・金雲母 褐色粒	口縁部 燧石1分所 全体に歪み			
228	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層上層		7.9	6.9	1.1	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子ナナ子		7.5YR6/6褐色		外面に粘土漚り				
229	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層上層	21	(12.1)	(9.1)	2.8	回転ナナ子 回転糸切り後板 状圧痕	回転ナナ子ナナ子 指頭圧痕		7.5YR7/4にふい黄褐色		灰石・石英・金雲母・赤褐色 粒	全体に歪み 打欠き			
230	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層中層	3	7.8	6.7	1.1	ハケ目調整後回転ナナ子 回転糸切り後板状圧痕	ハケ目調整後回転ナナ子 指頭圧痕		7.5YR7/3にふい黄褐色		灰石・金雲母・赤褐色粒	中心部歪み 全体に歪み 打欠き			
231	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層上層	20	7.7	6.4	1.2	回転ナナ子 回転糸切り後板 状圧痕	回転ナナ子ハケ目調整後 ナナ子 指頭圧痕		7.5YR7/4にふい黄褐色		石英・金雲母・赤褐色粒	中心部歪み 口縁部打ち欠き			
232	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層下層	23	(7.2)	(5.6)	1.1	回転ナナ子 回転糸切り後板 状圧痕	回転ナナ子ナナ子 指頭圧痕		7.5YR7/4にふい黄褐色		石英・金雲母・赤褐色粒	中心部歪み			
233	THJ 08-I	SK-02	SK-02	2層上層	38	(13.6)	(10.3)	3.3	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		石英・金雲母・赤褐色粒				
234	THJ 08-I	SK-02	SK-02	上層		(9.3)	(7.1)	1.7~	ナナ子 回転ナナ子 全面磨削	全面磨削		C-211 黄の灰色		内面歪入				
235	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層下層	2	12.6	8.3	3.0	工具による回転ナナ子 回転 糸切り後ナナ子	横ナナ子 指ナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		金雲母 赤褐色粒	口縁部歪み6分所打ち欠き 粘土漚り			
236	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層下層	29-28	12.3	9.3	2.8	回転ナナ子 回転糸切り後ナ ナ子	回転ナナ子 指ナナ子 指頭圧 痕		10YR7/3にふい黄褐色		灰石・石英・金雲母・赤褐色 粒	内面歪みに灰付着			
237	THJ 08-I	SK-02	SK-02	2層上層	40	(8.7)	(8.7)	5.2~	ナナ子 回転糸切り	ナナ子		N6/ 灰		燧石・白色粒				
238	THJ 08-I	SK-02	SK-02	1層下層	32	(25.3)	(9.6)	9.1	横ナナ子後ナナ子 回転糸切り 後ナナ子	横ナナ子		N7/ 灰白 N4/ 灰		石英・雲母	内面磨耗			
239	THJ 08-I	SK-02	SK-02		4	(24.3)	(9.9)	9.7	横ナナ子ナナ子ヘラによるナ ナ子	横ナナ子ハケ目		N6/ 灰		石英・燧石	口縁部自然釉付着			
242	THJ 08-I	SK-03	J-15	5層		8.0	7.1	1.4	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子 工具によるナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		灰石・石英・燧石	焼成時の歪み			
243	THJ 08-I	SK-03	J-15	5層		8.8	7.3	1.3	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子 工具によるナナ子		10YR6/2にふい黄褐色		灰石・石英・角閃石	焼成時の歪み 底部少し磨円			
244	THJ 08-I	SE-01	SE-01	1層	1	8.7	6.9	1.1	回転ナナ子 回転糸切り後ナ ナ子	回転ナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		長石・石英・金雲母	内面灰付着			
245	THJ 08-I	SE-01	SE-01	1層		(8.2)	(6.8)	0.9	ナナ子 回転糸切り後板状圧 痕	指ナナ子		10YR7/2にふい黄褐色		石英・褐色粒				
246	THJ 08-I	SE-01	SE-01	1層				4.9~	磨耗	磨耗		10YR8/2灰白		石英	内面磨耗 外黒			
247	THJ 08-I	SE-01	SE-01	2層		(14.5)	(6.4)	3.3~	回転ヘラ削り 横方向のミ カキ 回転ナナ子 削り付竹 筒	ナナ子		2.5Y8/1灰黄 2.5Y4/1黄灰		長石・石英	内面磨耗 外黒			
248	THJ 08-I	SE-02	SE-02	1層下層	10	10.2	8.1	1.5	横ナナ子 回転糸切り後板状 圧痕	指ナナ子 回転ナナ子		7.5YR7/4にふい黄褐色		石英・雲母・褐色粒	内面焼成時の灰付着 或砂粒着			
249	THJ 08-I	SE-02	SE-02	1層	1		9.5	4.5~	側面磨削 横方向の削り 回転ヘラ 削り出し後ヘラ 削り	横軸 回転ヘラ削り		C-232カキ色		長石・石英				
250	THJ 08-I	SE-02	SE-02	1層	6	15.7	10.6	3.4	工具による回転ナナ子 回転 糸切り後板状圧痕	回転ナナ子ヘラ削り		7.5YR7/4にふい黄褐色		長石・燧石・金雲母				
251	THJ 08-I	SE-03	SE-03	1層	1	8.4	6.9	1.1	回転ナナ子 回転糸切り	回転ナナ子 指ナナ子ハケ目		2.5YR6/6褐色 7.5YR6/4にふい黄褐色		長石・石英・角閃石・金雲母	外面に靱帯に灰付着 口縁部1分所打ち欠き 内面面に赤色土塗			
252	THJ 08-I	SE-03	SE-03	2層		(9.4)	(7.8)	1.1	ナナ子 回転糸切り後板状圧 痕	ナナ子		10YR7/3にふい黄褐色		石英・雲母	口縁部1分所打ち欠き			

報告	出土地点			標別	器種	法量 (cm)			調整			色調			胎土	備考
	調査区	遺構	クワッド			層位	取上げNo.	口径	底径	最大口径	高さ	外面	内面	外面		
253	THJ 08-1	SE-03		1層			(8.8)		1.5~	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	赤石・石英・金雲母		
254	THJ 08-1	SE-03		2層上層			(11.8)		1.0~	ナナ	ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	赤石・石英・金雲母	口縁部打ち欠き	
256	THJ 08-1	SE-03		2層			(16.0)		3.0	回転ナナ	回転ナナ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・金雲母	外面に粘土溜り	
257	THJ 08-1	SE-03		2層下層			(15.8)		3.4	回転ナナ	回転ナナ	2.5Y4/7黄灰	2.5Y5/2暗黄灰	赤石・石英・金雲母	中心部深く彫り 口縁部1か所打ち欠き	
258	THJ 08-1	SE-03		2層下層			(16.7)		6.3	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	外縁部 外面に粘土溜り	
259	THJ 08-1	SD-01		1層			8.8		1.4	回転ナナ	回転ナナ	C-144灰白	C-144灰白	赤石・石英・輝石	外縁部 外面に粘土溜り	
260	THJ 08-1	SD-01		5層			(15.8)		3.2	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/2にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
261	THJ 08-1	SD-01		5層			16.1		3.7	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母		
262	THJ 08-1	SD-01		5層			(15.4)		2.6	回転ナナ	回転ナナ	10YR8/3 淡黄橙	10YR8/3 淡黄橙	赤石・石英・輝石	器面全体摩耗	
263	THJ 08-1	SD-01		5層			(16.6)		3.0	回転ナナ	回転ナナ	2.5Y7/3 淡黄	2.5Y7/3 淡黄	赤石・石英・輝石・金雲母	外面産物に顕著な粘土溜り	
264	THJ 08-1	SD-01		1層			(15.5)		5.9	回転ナナ	回転ナナ	C-144灰白	C-144灰白	赤石・石英・角閃石・輝石	器面部分に気泡 打ち欠き 外面丸れ袖	
265	THJ 08-1	SD-01		5層			(16.0)		4.8~	回転ナナ	回転ナナ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	赤石・石英		
266	THJ 08-1	SD-01		5層			(17.0)		6.7	回転ナナ	回転ナナ	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	赤石・石英・角閃石・輝石	佛部温度不足	
267	THJ 08-1	SD-01		5層			(16.3)		6.2	回転ナナ	回転ナナ	7.5Y6/1灰	7.5Y5/1灰	赤石・石英・角閃石・輝石		
268	THJ 08-1	SD-01		5層			17.3		6.3	回転ナナ	回転ナナ	N8/灰白	N8/灰白	赤石・角閃石・輝石		
269	THJ 08-1	SD-01		5層			17.5		5.6	回転ナナ	回転ナナ	N7/灰白	N7/灰白	赤石・輝石		
270	THJ 08-1	SD-05		1層			(9.0)		1.6	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・金雲母	窪み 作り廻し 内面に産物側の木灰付層 外面に粘土溜り	
271	THJ 08-1	SD-05		1層			(19.9)		8.0~	回転ナナ	回転ナナ	N3/暗灰	N3/暗灰	赤石・石英	内面木灰付層	
272	THJ 08-1	SD-03		1層			(14.3)		3.0	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	外面に粘土溜り	
273	THJ 08-1	SD-03		1層			(15.9)		2.7	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・輝石		
274	THJ 08-1	SD-03		1層			(16.1)		2.9~	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR7/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・角閃石 輝石	外面に粘土溜り	
275	THJ 08-1	SD-03		1層			15.3		3.3	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部打ち欠き 外面に粘土溜り	
276	THJ 08-1	SD-03		1層			(8.2)		1.4	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR5/1 褐灰	7.5YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・角閃石 輝石	外面に粘土溜り	
277	THJ 08-1	SD-03		1層			(8.2)		1.2	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・角閃石 輝石	外面に粘土溜り	
278	THJ 08-1	SD-03		1層			(9.1)		1.1	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	器面摩耗気味	
279	THJ 08-1	SD-03		1層			9.2		1.4	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部欠損は故意か やむを得ず 外面に粘土溜り	
280	THJ 08-1	SD-03		1層			8.5		2.0	回転ナナ	回転ナナ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	赤石・石英・輝石・金雲母	作り廻し 口縁部打ち欠き	
281	THJ 08-1	SD-03		1層			8.1		2.0	回転ナナ	回転ナナ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	金雲母多く含む 石製の粘土大まめ 全体に至り 作り廻し 外面に粘土溜り	
282	THJ 08-1	SD-03		1層			8.7		1.1	回転ナナ	回転ナナ	7.5YR6/5 橙	7.5YR6/5 橙	赤石・石英・角閃石・輝石 金雲母	器面摩耗気味	

報告	調査区		出土地点		種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	備考
	調査区	遺構	クワド	層位			取上げNo.	口径	底径	最大口径	断面	外面	内面		
283	Th	08-1	SD-03	1層	16	青磁	碗	15.7	5.3	7.3	横軸・回転ヘラ削り残ナ テ・輪状高台	外面 C-228 紫茶色	内面 C-229 紫茶色		内面は型彫り蓮花文 粘土粒が底面に残存 焼台部一部残存
284	Th	08-1	SD-03	1層	78	瓦器	碗	(16.2)	(5.7)	5.6	回転ナナ子・工具による回転 ナナ子・回転削り・後ナナ 子	外面 2.5Y 8/1 灰白 N4/ 灰	内面 2.5Y 8/1 灰白 N4/ 灰	紫石・石英	一部外周 粘土は細粒子
285	Th	08-1	SD-03	1層	22	土師器	壺	(44.0)		5.7~	削突速高絞・溝方向のハゲ 目・磨方向のハゲ目	外面 10YR6/3にふい黄橙 5Y4/1 灰	内面 10YR6/3にふい黄橙	長石・石英・金雲母・輝石	大粒の石粒を多く含む
286	Th	08-1	SD-03	1層	32	陶器	茶壺	9.3		4.3~	回転ナナ子・施釉	外面 C-232カーク色	内面 C-233カーク色	長石	型彫りの粘土カキの付着 全体に構成底の木灰付着 瀬戸焼
287	Th	08-1	SD-03	1層	29	土師器	碗	(37.0)		5.2~	横ナナ子・ハゲ目後横ナナ子 口縁部分ナキ	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・金雲母・輝石 角閃石	大粒の石粒を多く含む 口縁の一部が残存
288	Th	08-1	SD-03	1層	75	滑石製	石鍋	18.9~		4.8~	縦方向の削り・横方向に 削り・横方向の削り	外面 7.5YR6/4にふい黄	内面 7.5YR6/4にふい黄	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部多数打ち欠き 口縁基部に粘土層?
289	Th	08-1	SD-04	1層上層	31	土師器	小皿	8.9	7.2	1.3	回転ナナ子・回転糸切り	外面 7.5YR7/4にふい黄橙	内面 7.5YR6/4にふい黄	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部5ヶ所打ち欠き
290	Th	08-1	SD-04	1層	41	土師器	小皿	8.8	7.1	1.4	回転ナナ子・回転糸切り・後 状圧痕	外面 7.5YR7/6橙	内面 5YR6/6橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	中心部に亀裂 全体に歪み
291	Th	08-1	SD-04	1層	1	土師器	小皿	8.7	6.9	1.4	回転ナナ子・回転糸切り	外面 7.5YR7/4にふい黄橙	内面 7.5YR7/4にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部数ヶ所打ち欠き 全体に歪み 大粒の赤褐色粒を多く含む 外面面に粘土層?
292	Th	08-1	SD-04	1層	40	土師器	小皿	8.7	7.3	1.75	回転ナナ子・回転糸切り	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 2.5Y7/2 灰黄	長石・石英・角閃石・金雲母 金雲母	口縁部数ヶ所打ち欠き 全体に歪み 大粒の赤褐色粒を多く含む 外面面に粘土層?
293	Th	08-1	SD-04	1層	6	土師器	小皿	8.4	6.3	1.3	回転ナナ子・回転糸切り	外面 10YR7/4にふい黄橙	内面 10YR7/4にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	数ヶ所打ち欠き
294	Th	08-1	SD-04	1層	43	土師器	灯明皿	9.0	7.8	1.3	回転ナナ子・糸切り	外面 7.5YR7/6橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	1ヶ所打ち欠き
295	Th	08-1	SD-04 SD-08	1層	10	土師器	小皿	9.1	7.4	1.2	工具による回転ナナ子・回転 糸切り	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	打ち欠き 全体に歪み
296	Th	08-1	SD-04	1層	42	土師器	皿	14.8	10.5	3.5	回転ナナ子・回転糸切り・削し 削り	外面 10YR8/3 淡黄橙	内面 10YR8/3 淡黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	1ヶ所打ち欠き 外面面に縦溝を粘土層?
297	Th	08-1	SD-04	1層	7	青磁	碗	(16.0)	6.2	6.8	回転ヘラ削り・工具による 回転ナナ子後施釉・見込み 高台	外面 C-216 わずかなけの緑の色	内面 C-217 わずかなけの緑の色	輝石	内面基部に文字印文 貫入 清泉窯系
298	Th	08-1	SD-04	1層	26	須臾器	壺	(37.3)		11.5~	口縁部自然釉・工具によ る横ナナ子・指頭圧痕・指ナ 子・粘土層残痕	外面 10YR2/1 黒	内面 10YR4/1 褐灰	長石・石英・輝石	自然釉
299	Th	08-1	SD-07	1層	4	土師器	小皿	8.8	7.4	1.5	回転ナナ子・回転糸切り・後 状圧痕	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部打ち欠き 内面一部に赤色原料付着 外面面に粘土層?
300	Th	08-1	SD-08	1層	2	土師器	小皿	8.8	7.2	1.2	回転ナナ子・回転糸切り・後 状圧痕	外面 7.5YR8/4 淡黄橙	内面 7.5YR8/6 淡黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	4ヶ所打ち欠き 全体に歪み
301	Th	08-1	SD-08	1層	10	土師器	皿	12.9	10.1	1.5	回転ナナ子・回転糸切り	外面 10YR7/4にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部全体打ち欠き 内面基部に粘土層?
302	Th	08-1	SD-08	1層		滑石製	石鍋の一部	28~		5.0~	縦方向の工具による削り 工具による横方向の削り				口縁部の欠損は故意に削った?
303	Th	08-1	SD-13	1層	6	土師器	小皿	9.2	7.0	1.8	回転ナナ子・回転糸切り 口縁一部に工具を当てた 痕跡	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	成形びつ 外面1ヶ所縦溝な指頭圧痕 外面面に粘土層?
304	Th	08-1	SD-13	1層 5層	2	土師器	皿	14.7	11.4	2.8	回転ナナ子・回転糸切り	外面 10YR7/4にふい黄橙	内面 7.5YR7/6橙	長石・石英・角閃石	全体に歪み 外面面に粘土層?
305	Th	08-1	SD-21	1層	4	土師器	皿	(17.8)	(12.7)	3.3	回転ナナ子・回転糸切り	外面 10YR6/2 灰茶褐	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石	打ち欠き 外面面に粘土層?
306	Th	08-1	SD-21	1層	1	土師器	脚付皿	(9.2)	(5.8)	2.5	回転ナナ子・指ナナ子 足付付高台	外面 10YR7/3にふい黄橙	内面 10YR7/3にふい黄橙	長石・石英・輝石	口縁部故意に欠いた? 一部欠し欠損
307	Th	08-1	SD-13	1層	5	土師器	小皿		(9.9)	1.6~	工具による回転ナナ子・回転 糸切り	外面 10YR7/4にふい黄橙	内面 10YR7/4にふい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石	打ち欠き 外面面に粘土層?
308	Th	08-1	SD-14	1層	22	土師器	灯明皿	8.0	6.0	1.1	回転ナナ子・回転糸切り	外面 5YR6/6橙	内面 2.5YR6/6橙	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	外面・底面・側面の一部にスチ付着 外面面に粘土層?
309	Th	08-1	SD-14	1層	65	土師器	小皿	8.0	6.2	1.1	回転ナナ子・回転糸切り・後 ナナ子	外面 10YR4/1 褐灰	内面 10YR4/1 褐灰	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	2ヶ所打ち欠き 断面資料臭味
310	Th	08-1	SD-14	1層	62	土師器	小皿	8.8	7.1	1.5	回転ナナ子・回転糸切り・後 ナナ子	外面 7.5YR7/4にふい黄	内面 7.5YR7/4にふい黄	長石・石英・輝石	内面木灰付着 口縁部打ち欠き

報告	出土地点				器種	法量(cm)			調整		色調		胎土	備考	
	調査区	遺構	グランド	取上げNo.		口径	底径	最大口径	高さ	外面	内面	外面			内面
										厚位	厚				
311	THJ	08-1	SD-14	28	小皿	8.7	7.2	1.5	回転ナデ・回転系切り	工具によるナデ・回転ナデ	10YR7/2にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・金雲母	内面に磨滅時の木灰付着や含み	
312	THJ	08-1	SD-14	21	小皿	9.0	7.1	1.5	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ	工具によるナデ・回転ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	含み 器面磨耗	
313	THJ	08-1	SD-14	75	小皿	7.7	6.2	1.1	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ	工具によるナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・金雲母	金雲母を多く含む	
314	THJ	08-1	SD-14	79	灯明皿	8.0	6.6	1.3	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ 状土痕	ハケ後ナデ・回転ナデ	10YR6/3にぶい黄緑 5/2 灰黄褐	10YR6/3にぶい黄緑 4/2 灰黄褐	黒石・燧石・金雲母	1ヶ所打ち欠き 金雲母多い	
315	THJ	08-1	SD-04	3	小皿	7.9	6.1	1.4	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ 状土痕	工具によるナデ	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/4にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	口縁部打ち欠き 作柄弱差(大型の石粒混入) 外底面に粘土層	
316	THJ	08-1	SD-14	53-56	灯明皿	8.7	6.8	1.3	回転ナデ・回転系切り	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石	器面磨耗味 スス付着	
317	THJ	08-1	SD-14	43	小皿	8.5	7.1	1.2	工具による回転ナデ・糸切り	工具による回転ナデ・擦ナデ	10YR6/4にぶい黄緑	10YR6/4にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	全体含み 口縁部2/3は磨滅に打ち欠き	
318	THJ	08-1	SD-14	29	鉢	(8.0)		5.3~	回転ナデ・回転ヘラ削り後 糸切り後ナデ	ヘラ削り後ナデ	N6/灰 7.5YR5/2灰褐	N6/灰	黒石・石英・燧石	口縁・胴部の一部に付着物(木灰の付着)	
319	THJ	08-1	SD-14	60	皿	15.4	10.2	3.4	工具による回転ナデ・回転 糸切り後ナデ	ナデ・工具による回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	口縁部数ヶ所打ち欠き	
320	THJ	08-1	SD-14	42	皿	15.8	10.1	2.9	回転ナデ・回転ヘラ削り 回転系切り	工具による回転ナデ・回転 ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	粒子飛く石粒多く含む 全体に含み 口縁部磨滅に粘土層	
321	THJ	08-1	SD-14	33	小皿	8.1	6.3	1.2	回転ナデ・回転系切り	回転ナデ・ハケによる 回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑 N6/1黄灰	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石・金雲母	含み 外底面に粘土層	
322	THJ	08-1	SD-14	94	灯明皿	8.0	6.3	1.2	回転ナデ・回転系切り	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・金雲母	含み 外底面に粘土層	
323	THJ	08-1	SD-14	51	小皿	7.8	6.3	1.2	回転ナデ・回転系切り	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・金雲母	含み 粗製 外底面に粘土層	
324	THJ	08-1	SD-14	101	小皿	8.0	6.2	1.4	回転ナデ・回転系切り	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・金雲母	金雲母多い 外底面に粘土層	
325	THJ	08-1	SD-14	99	小皿	8.1	6.5	1.1	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・燧石・金雲母	口縁部2/3は磨滅に打ち欠き 外底面に粘土層	
326	THJ	08-1	SD-14	83	小皿	(7.8)	6.9	1.3~	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ	ハケ目後擦ナデ	2.5Y7/3淡黄	2.5Y7/3淡黄	黒石・石英・燧石・金雲母	全体打ち欠き磨滅のみ残存 金雲母多く含む 外底面に粘土層	
327	THJ	08-1	SD-14	47	碗		5.8	3.3~	回転ナデ・ヘラミガキ・削り 付付台	ナデ・回転ナデ 指頭圧 痕・ヘラミガキ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	黒石・石英		
328	THJ	08-1	SD-14	87-88 76-77-78	碗	16.4	8.0	6.5	工具による調整後ナデ・指 ナデ・ヘラミガキ・削り付 高台	ナデ	N6/灰	N6/灰	黒石・燧石・金雲母		
329	THJ	08-1	SD-14	26-48	碗	(16.4)	(7.2)	5.0	回転ナデ・回転ヘラ削り・削り 付付高台・ヘラ削り後ナデ	ナデ・擦ナデ	N6/灰白 N3/黄灰	N6/灰	石英・燧石	打ち欠き 外面一部外黒 内面に構物の付着痕	
330	THJ	08-1	SD-14	95	土師質	(34.6)		4.4~	横ナデ・横方向の削り・擦 方向の削り・口縁1本の沈 磨	多方向の削り後ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	黒石・石英・燧石・角閃石 燧石	大粒の石粒多く含む	
331	THJ	08-1	SD-16	8	小皿	(7.5)	(5.3)	1.3	回転ナデ・工具によるナデ	ナデ・回転ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・角閃石・燧石 金雲母	打ち欠き	
332	THJ	08-1	SD-18		皿	(15.2)	(11.0)	2.8	回転ナデ・工具によるナデ	ナデ・回転ナデ・工具による ナデ・ハケ目	10YR7/4にぶい黄緑	10YR7/4にぶい黄緑	黒石・石英・燧石	打ち欠き 含み	
333	THJ	08-1	ST-01	4	小皿	8.0	6.1	1.2	回転ナデ・回転系切り	ナデ	7.5YR7/4にぶい黄	7.5YR7/4にぶい黄	黒石・金雲母・角閃石	外底面に粘土層	
334	THJ	08-1	ST-01	21	小皿	8.5	6.7	1.1	回転ナデ・回転系切り・擦ナデ 状土痕	回転ナデ	7.5YR6/4にぶい黄	7.5YR7/4にぶい黄	黒石・石英・燧石・角閃石	外底面に粘土層	
335	THJ	08-1	ST-01	23	小皿	8.7	7.0	1.2	回転ナデ・回転系切り	ナデ	10YR7/3にぶい黄緑	10YR7/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・黒色粒	外底面に粘土層	
336	THJ	08-1	ST-01	21	小皿	8.5	6.8	1.4	回転ナデ・回転系切り	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	黒石・燧石・金雲母	内面・口縁の一部に磨滅時の木灰付着 粘土層	
337	THJ	08-1	ST-01	1	小皿	7.8	6.0	1.2	回転ナデ・回転系切り	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4にぶい黄	黒石・石英・燧石・金雲母	外底面に粘土層	
338	THJ	08-1	ST-01		小皿	(8.0)	(6.0)	1.2	回転ナデ・回転系切り	回転ナデ・ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	黒石・石英		
339	THJ	08-1	ST-01	13	小皿	(8.7)	(6.9)	1.3	回転ナデ・回転系切り	ナデ	10YR6/3にぶい黄緑	10YR6/3にぶい黄緑	黒石・石英・燧石・黒色粒		
340	THJ	08-1	ST-01	2	碗		(7.1)	1.7~	回転ナデ・削り出し高台	ナデ・ヘラミガキ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	黒石・石英	焼成不良	

順番	調査区		出土地点		種別	器種	法量(cm)			調整		色調		胎土	備考
	調査区	グリッド	層位	取上げNo.			口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	外面		
341	THJ	08-1	ST-01	2層下層	土師質土器	鉢	(18.6)		9.4~	横方向のナナ・ハケ目後 横方向のナナ・多方向のハ ケ目後ナナ	内面 横方向のナナ・横方向の ナナ目後ナナ・多方向のハ ケ目後ナナ	N3/緑灰 10YR4/1補灰	10YR4/1補灰 10YR6/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石・輝石	断面は焼成時の焼成不足による黒色 外面胎土スズ散存 焼成不良
342	THJ	08-1	ST-01	2層下層	土師器	小皿	8.1	6.7	1.2	回転ナナ・回転糸切り後ナ ナ	回転ナナ・ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	7.5YR7/4 に近い黄緑	長石・石英・金雲母・輝石	中心に内外面周方向からの穿孔あり 外面面に粘土層あり
343	THJ	08-1	ST-01	2層	瓦器	碗			3.4~	回転糸切り後ハケ目調整・指 圧痕	ナナ	2.5YR8/1 灰白 2.5YR7/1 灰白	2.5YR6/1 灰白	紫石・石英	口縁・高台打ち欠き 底・高台にナナ目 底・高台にナナ目 底・高台にナナ目
344	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	9.0	7.2	1.3	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・指ナナ・ヘラ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石	全体にナナ目 1ヶ所打ち欠き
345	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	(8.5)	6.7	1.3	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・ハケ目・ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	紫石・石英・角閃石・輝石	底面中心部は上下少し反り返り全体に ナナ目・底面・高台部 底面・高台部 底面・高台部
346	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	8.1	7.5	1.3	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・指頭圧痕ハケ 目	7.5YR7/4 に近い黄緑	10YR6/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	内面は焼成不足による黒色化 外面は石粒の露が覆散れる 外面面に粘土層あり
347	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	(9.0)	(7.4)	1.5	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・ハケ目・ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/4 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母・赤褐色石粒	
348	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	9.3	8.7	1.5	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・指ナナ・ヘラ	7.5YR6/6 に近い黄緑	7.5YR6/6 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	一部欠損 全体磨耗気味 外面面に粘土層あり
349	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	9.1	8.2	1.1	回転ナナ・回転糸切り	ヘラ・指ナナ・回転ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・輝石・金雲母 赤褐色石粒	全体に少しナナ目 一部欠損
350	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	8.8	7.2	1.3	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・指ナナ・ヘラ	10YR7/4 に近い黄緑	10YR7/4 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石	口縁部1ヶ所打ち欠き 外面面に粘土層あり
351	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	9.0	7.2	1.6	回転ナナ・回転糸切り	ヘラ・ナナ・回転ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	7.5YR6/6 黄	長石・石英・角閃石・輝石	底面中心部は上下少し反り返り 全体にナナ目
352	THJ	08-1	ST-02	1層	土師器	小皿	8.8	7.1	1.5	回転ナナ・回転糸切り後ナ ナ	回転ナナ・指ナナ・ヘラ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	長石・石英・輝石・金雲母	全体にナナ目 1ヶ所打ち欠き
353	THJ	08-1	ST-03	1層	土師器	小皿	(8.8)	(7.2)	1.2	回転ナナ・回転糸切り	ハケ目・ナナ・回転ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・輝石・金雲母	口縁部ナナ目打ち欠き
354	THJ	08-1	ST-03	1層	土師器	小皿	9.0	7.9	1.6	回転ナナ・回転糸切り	ヘラ・ナナ・回転ナナ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	長石・石英・金雲母	口縁部ナナ目打ち欠き
355	THJ	08-1	ST-03	1層	土師器	小皿	9.1	7.7	1.6	回転ナナ・回転糸切り後ナ ナ	ハケ目・ナナ・回転ナナ	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・輝石・金雲母	口縁部ナナ目打ち欠き
356	THJ	08-1	ST-03	1層	土師器	小皿	8.6	6.8	1.5	工具による回転ナナ・回転 糸切り	ナナ・回転ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/4 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石・金雲母	底面中心部は上下少し反り返り 全体にナナ目
357	THJ	08-1	ST-03	2層	土師器	小皿	(7.6)	(5.4)	1.2	回転ナナ・回転糸切り	指ナナ・回転ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	7.5YR7/4 に近い黄緑	石炭・角閃石・金雲母	外面面に粘土層あり
358	THJ	08-1	ST-03	2層	土師器	小皿	8.6	7.1	1.1	回転ナナ・回転糸切り	工具によるナナ・回転ナナ	10YR7/2 に近い黄緑	10YR6/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石・輝石	口縁1/3打ち欠き
359	THJ	08-1	ST-03		土師器	小皿	(8.1)	(6.2)	1.2	回転ナナ・回転糸切り	ハケ目・回転ナナ	10YR6/3 に近い黄緑	10YR6/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	外面に灰付着
360	THJ	08-1	ST-03	1層	土師器	皿	12.5	9.2	3.3	回転ナナ・回転糸切り後磨 状圧痕	工具によるナナ・回転ナナ	7.5YR6/4 に近い黄緑	7.5YR6/4 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石 金雲母	口縁部ナナ目打ち欠き
362	THJ	08-1	ST-04	1層	土師器	小皿	9.2	7.0	1.1	ナナ・回転糸切り後磨状圧 痕	ナナ・指ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	7.5YR7/4 に近い黄緑	石炭・褐色石粒	
363	THJ	08-1	ST-06	1層下層	土師器	小皿	8.0	6.2	1.3	横ナナ・回転糸切り	ナナ・多方向のナナ	10YR6/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	粗製
364	THJ	08-1	ST-06	1層下層	土師器	小皿	8.2	6.4	1.4	横ナナ・回転糸切り	ナナ・多方向のナナ	10YR6/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	全体にややナナ目 口縁1ヶ所打ち欠き
365	THJ	08-1	ST-06	1層	土師器	二重口罎蓋			5.8~	横ナナ	ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	7.5YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・輝石	
366	THJ	08-1	ST-06	1層	瓦器	高台付皿	(7.6)	(3.3)	2.7	ナナ後ヘラミガキナナ	ナナ後ヘラミガキ	N5/灰	N5/灰	紫石	祭祀用 二重高台あり 内外黒色磨き
367	THJ	08-1	ST-06	1層	土師器	脚付皿	19.1	12.2	5.4	回転ナナ・回転ナナ・ナナ	回転ナナ・ナナ	10YR7/2 に近い黄緑 10YR6/1補灰	10YR7/2 に近い黄緑 10YR6/1補灰	長石・石英・角閃石	口縁と脚部1ヶ所ナナ目打ち欠き 内面に粗製付着
368	THJ	08-1	ST-06	1層	土師器	皿	15.3	10.7	3.3	回転ナナ・回転糸切り後ナ ナ	回転ナナ・ナナ	10YR6/3 に近い黄緑	10YR6/3 に近い黄緑	長石・角閃石・金雲母	内面に木灰付着
369	THJ	08-1	ST-09	1層	土師器	小皿	7.9	5.9	1.1	ナナ・回転糸切り後磨状圧 痕	指ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	7.5YR7/4 に近い黄緑	石炭・金雲母・褐色石粒	
370	THJ	08-1	ST-10	1層	土師器	小皿	9.2	7.5	1.4	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・ナナ	7.5YR7/4 に近い黄緑	10YR7/4 に近い黄緑	長石・金雲母	全体にナナ目
371	THJ	08-1	ST-06	1層	土師器	皿	15.0	10.9	4.0	工具による回転ナナ・回転 糸切り後ナナ	工具による回転ナナ・工具 によるナナ	2.5Y6/3に近い黄 2.5Y4/1黄灰	2.5Y6/3に近い黄 2.5Y4/1黄灰	長石・石英・金雲母・赤褐色 石粒	全体にナナ目 外面面に粗製付着 作りやや粗製
372	THJ	08-1	ST-10	1層	土師質土器	罎	(22.0)		5.2~	横ナナ・多方向のハケ目 平行印走	横方向のハケ目	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	粘土の粒子粗い 内面に磨耗
373	THJ	08-1	ST-16	1層	土師器	小皿	(9.3)	(7.0)	1.4	回転ナナ・回転糸切り	回転ナナ・ナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・金雲母	内面にスズ付着
374	THJ	08-1	ST-15	1層上層	土師器	小皿	8.5	7.1	1.1	横ナナ・回転糸切り後磨状 圧痕	横ナナ・工具によるナナ	10YR7/3 に近い黄緑	10YR7/3 に近い黄緑	長石・石英・角閃石・金雲母	

報告	調査区		出土地点		種別	器種	法量 (cm)			調整		色調		胎土	備考
	調査区	取上げNo.	遺構	グッド			層位	口径	底径	最大口径	器高	外面	内面		
375	THJ 08-I	ST-15			瓦器	碗	(16.2)		4.9~	回転ナデ後ミガキ	ミガキ	5Y4/1灰	5Y4/1灰	黒石・石英・雲母 内黒・外黒	外面やや濃褐色 内黒・外黒
376	THJ 08-I	ST-18			土師器	小皿	(8.2)	(7.1)	1.1	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ	2.5Y7/3濃黄	2.5Y7/3濃黄	黒石・石英・雲母 小・歪み	
377	THJ 08-I	ST-21			土師器	小皿	8.45	6.9	1.2	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ・ナデ・指ナデ	10YR7/4に少し黄緑	10YR7/4に少し黄緑	黒石・石英・雲母・黒色粒	
378	THJ 08-I	SX-01			土師器	小皿	8.9	5.8	1.5	回転ナデ・回転糸切り・指頭 圧痕	ナデ	10YR6/3に少し黄緑	10YR6/3に少し黄緑	黒石・雲母	
379	THJ 08-I	SX-01			土師器	皿	12.6	8.15	2.9	ナデ・回転糸切り後軟状圧 痕	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	黒石・石英・雲母・褐色粒	
380	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	(14.8)	(11.4)	3.0	工具による回転ナデ・回転 糸切り	ナデ・工具による回転ナデ	7.5YR8/3濃黄緑	7.5YR8/3濃黄緑	黒石・輝石・金雲母	全体にやや歪み
381	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	16.0	11.8	3.2	工具による回転ナデ・回転 糸切り	ナデ・工具による回転ナデ	10YR7/4に少し黄緑	10YR7/4に少し黄緑	黒石・輝石・金雲母	
382	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	15.8	11.5	3.4	回転ナデ・ハケ目後ナデ	回転ナデ・工具によるナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	黒石・石英・雲母 器面濃褐色	全体に歪み 器面濃褐色
383	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	15.8	11.5	3.4	回転ナデ・ハケ目後ナデ 回転糸切り	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/3に少し黄緑	黒石・石英・角閃石・輝石 金雲母	全体にやや歪み 器面濃褐色
384	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	15.6	11.8	3.4	回転ナデ・工具によるナデ	回転ナデ・工具によるナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	黒石・石英・雲母	器面濃褐色
385	THJ 08-I	SX-02			土師器	皿	15.6	11.2	2.9	工具による回転ナデ・回転 糸切り	工具による回転ナデ	7.5YR7/5橙	7.5YR7/4に少し黄緑	黒石・輝石・金雲母	
386	THJ 08-I	SX-02			土師器	小皿	(7.2)	(6.0)	1.1	ハケ目後ナデ	ナデ・ハケ目後ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/4に少し黄緑	黒石・石英・雲母 金雲母	
387	THJ 08-I				土師器	壺	(18.8)		11.5~	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ・ヘラ削り後 ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/6橙	黒石・石英・角閃石・輝石 金雲母	
388	THJ 08-I				土師器	小型丸底壺	(11.5)	0.7	8.7	削りハケ目	削ナデ・削り後指ナデ	10YR7/2に少し黄緑	10YR7/2に少し黄緑	黒石・石英・角閃石・輝石 金雲母	全体的に器面濃褐色 口縁の一部を削り打ち欠き 粒子粗く石粒多く含む
389	THJ 08-I				土師器	小皿	8.2	7.4	1.4	工具による回転ナデ・回転 糸切り後軟状圧痕	指ナデ	7.5YR6/4に少し黄緑	7.5YR6/4に少し黄緑	黒石・石英・角閃石・輝石 金雲母	全体的に歪み 外器面に粘土層あり
390	THJ 08-I				瓦器	小皿	8.9	7.4	1.3	工具による回転ナデ・回転 糸切り	ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	黒石・輝石	全体的に歪み
391	THJ 08-I				土師器	小皿	9.1	7.3	1.3	工具による回転ナデ・回転 糸切り	工具による回転ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/6橙	黒石・輝石・金雲母	
392	THJ 08-I				土師器	皿	(16.2)	(13.1)	2.8	回転ナデ・ナデ	ナデ・横方向のハケ目・回 転ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/4に少し黄緑	黒石・石英・角閃石・輝石 金雲母	器面やや濃褐色気味
393	THJ 08-I				土師器	皿	15.8	11.0	3.4	工具による回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4に少し黄緑	7.5YR7/4に少し黄緑	黒石・輝石・金雲母	
394	THJ 08-I				青磁	椀		6.25	2.7~	工具による回転ナデ・指 削・削りだし高台	回転ナデ・横溝き文	C-157粘芽色	C-159粘芽色	黒石	内面砂目あり 高面に打ち欠き 同窓縁系
396	THJ 08-I				磁器	合子の塵	(6.2)		1.2~	工具による回転ナデ・指 削・草花文	工具による回転ナデ・指 削・草花文	C-206薄青磁色	C-207薄青磁色		外面スチ付着
399	THJ 08-I				滑石製	石鍋	9.8~		7.8~	工具による削り	工具による削り				
401	THJ 02-II	SD-03			縄文土器	漆鉢	(37.4)		13.5~	条痕・ナデ	条痕後ナデ・ミガキ	10YR2/1黒	10YR5/4に少し黄緑 10YR2/1黒	黒石・石英・角閃石	外器面濃褐色に器面が荒れスチが付 着 外器面器口大半に泥層痕 積り
402	THJ 02-II				縄文土器	深鉢	34.6		32.9~	条痕後ナデ後ミガキ	条痕後ナデ	10YR7/3に少し黄緑 10YR3/1黒褐色	10YR7/3に少し黄緑 10YR3/1黒褐色	黒石・石英・雲母	外面スチ付着
404	THJ 07-I				縄文土器	深鉢	11.0~		6.8~	口縁部刻み目文・刺突文 ナデ	多方向の条痕後ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	黒石・石英・輝石・金雲母	西平式
361	THJ 08-I	ST-03				櫛の羽口	(金長) (cm) 6.9~	(金幅) (cm) 5.7	(厚み) (cm) 2.0			10YR6/1褐色灰	10YR7/2に少し黄緑 10YR6/1に褐色灰	黒石・石英	内面ともにも一部火室受け変色 外面は特にも少し 粘土は粘り多し含む

第10表 石器類観察表(玉名平野条里跡・面迫間日渡遺跡)

報番	出土地点				種別	石材	法量(cm)				備考			
	調査区	遺構	グリッド	層位			取上げNo.	包含層	最大長	最大幅		器厚	刃部幅	孔径(上)
1	THJ	01-3	SI-166		2	石盾丁	砂岩	6.0~	3.7	0.6	0.5		22.1	加工時の擦痕が刃部の一部と穴のまわりに僅かに残存
2	THJ	01-III	SI-166		1	打製石斧		9.5~	(8.0)	1.35			154.5	刃部先端に磨痕
6	RHI	06-I区	北側流路		3層	石斧		13.9	5.4	3.2			323.9	完形 裏表面とも全体に使用痕
14	RHI	05-I-2			D-5	10層 石盾丁		2.7~	2.1~	0.5			4.5	一部残存 表裏に擦痕
36	RHI	06-I			C-3	10層 叩き石	砂岩	14.5	5.0	4.2			543.6	表裏面は磨痕ではない磨痕
41	THJ	07-IV			G-4	7層 砥石		4.7	2.7	1.1			10.9	全面摩耗
43	THJ	07-IV	SD-01		2層直上	1	石盾丁	5.5	11.7~	0.4	0.45		50.0	作りが丁寧 紐をかける穴2ヶ所あり
55	THJ	01-2	SE-36	NOE3	8層	打製石斧	サヌカイト	27.6	8.1	4.5			1310.5	刃部裏面に形成のための磨痕 表裏面に磨痕・敲打痕
67	THJ	01-3	SE-115		7層	浮子	凝灰岩	4.3	4.9	1.6			14.2	
106	THJ	04-I	SI-34		D-8	6層 石盾丁	砂岩	5.1~	3.0~	0.6	0.5		12.9	基部欠損 刃部一部欠損の為二次加工の可能性あり
107	RHI	04-II			G-6	6層 小型丸盤		6.5	1.8	0.95			16.6	石鋸の二次加工品
159	RHI	04-II			H-8	5層 石鏝	滑石	3.9	5.7	2.0			60.6	刃部は摩滅気味 稜線は不鮮明
172	RHI	05-II-2			E-9	7層 石盾丁	粘板岩	11.4~	3.8	0.8	不鮮明		47.4	縁辺部全体は敲いて加工 刃部は一部擦つたとと思われる磨跡
175	THJ	06-II			G-4	6層 打製石斧	粘板岩	14.4	5.9	1.4			186.4	縁辺部全体は敲いて加工 刃部は一部擦つたとと思われる磨跡
181	THJ	02-III	SD-12		床直	石製分銅(楯)	滑石	5.0	3.9		0.5	0.4	109.5	全体に加工磨正した痕跡顕著
185	THJ	02-III			E-6	砥石	天草砥石	5.2	2.5	0.7			17.8	表面に使用痕 裏面磨痕
186	THJ	02-III			D-7	6層 石鏝	滑石	4.3	6.7	2.4			90.7	全体に調整痕
188	THJ	02-III			E-8	4層 石鏝	滑石	2.8	1.95	1.0			8.3	石鋸の転用
196	RHI	03-III	自然流路		D-6	下層 石刺		6.8~	4.2~	0.9~	0.4		27.6	
206	THJ	04-I			C-4	カケラン 石鏝	滑石	3.1	3.5	1.8			30.9	側面に磨痕
207	RHI	05-I-2			C-4	6層 石盾丁	砂岩	5.2~	3.2~	0.3~			10.4	刃部欠損 基部の一部のみ残存 裏面も剥離
208	RHI	05-I-II			F-9	6層 石鋸の補修具	滑石	2.7	1.4	0.9			4.7	中央部分にのみ付いていると思われる欠損
209	THJ	05-II-2	流路		A-3	石製防蝕車		5.0~	5.5~	1.2	0.7	0.75	34.6	2/3残存 外形は摩滅気味
221	THJ	07-V				4層 磨石	安山岩	6.6~	10.7	2.1			274.3	周辺部に磨痕
397	THJ	08-I			J-15	石鏝	滑石	2.1	1.4	1.0			4.7	表裏上下両面に縦に条痕 魚網用ではない
398	THJ	08-I			K-15	石鏝	滑石	3.9	2.5	1.5			223	石鋸の転用
403	THJ	07-I			D-3	3層 石製分銅(楯)	滑石	5.70	4.1~		0.3	0.35	73.9	全体に縦状に削って調整した痕跡
405	THJ	07-I	SD-06		6層	磨製石斧		17.5	6.1	3.1			491.1	全体に顕著な磨痕と敲打痕
406	THI	07-V			C-4	8層直上 石盾丁	頁岩	4.7	9.75	0.6	0.4		43.1	

第11表 土製品観察表(玉名平野条里跡・面迫間日渡遺跡)

報番	出土地点				種別	最大長	最大幅	器厚	刃部幅	孔径(上)	孔径(下)	重量(g)	備考
	調査区	遺構	グリッド	層位									
27	THJ	05-I-2	SX-01	E-6	土玉	1.6	1.8	1.4				3.7	裏面は加工痕
160	THI	04-II		F-5	5層 瓦製円盤型土製品	5.4~	6.4	1.9				74.9	平瓦を転用
187	THJ	02-III		D-9	6層 土製防蝕車	2.2	2.75	0.6		0.5	0.5	5.0	上下両面から穿孔 全体が摩滅気味
222	THJ	07-V			4層 土玉	2.65	2.45	2.35				14.2	ほぼ円形

第 12 表 木製品観察表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	出土地点						種別	木材	法量(cm)			備考
	調査区	遺構	グリッド	層位	取上げNo.	最大長			最大幅	厚み		
18	RHH	05-I-1	SX-03			仮③	杭	クリ	18.1	3.8	1.0	
19	RHH	05-I-1	SX-03				杭	クリ				
20	RHH	05-I-1	SX-03			仮①	杭	クリ	(27.5)	(6.9)	2.3	
21	RHH	05-I-1	SX-03			杭96	杭	クリ	45.5	7.9	3.9	
22	RHH	05-I-1	SX-03			杭75	杭	サイカチ	(48.4)	3.5	1.8	
23	RHH	05-I-1	SX-03			杭31	杭	クリ				
28	RHH	05-I-2	SA-01 Pit01		10a層		杭	クリ	(33.8)	6.2	2.9	
97	RHH	03-II	SX-07		3層	No.6	鋤	アカガシ	(25.5)	6.15	1.8	
137	RHH	04-II	ST-08				網代	タケ	(24.75)	(13.0)		籠カ
194	RHH	03-I				杭6	杭	マツ	(45.75)	5.5	5.0	
195	RHH	03-I				杭12	杭	マツ	(72.1)	5.2	5.0	杭上半分が被熱の為炭化
198	RHH	03-III				杭2	杭	マツ	(38.2)	4.5	4.0	
199	RHH	03-III				杭13	杭	ネジキ	(34.5)	6.75	4.0	
200	RHH	03-III				杭20	杭	モチノキ	(28.4)	5.4	4.1	
201	RHH	03-III				杭22	杭	アカガシ	(56.2)	9.9	8.7	
202	RHH	03-III				杭111	杭	カヤ	(76.85)	4.65	3.6	
203	RHH	03-III				杭23	杭	クスギ	(61.6)	9.3	7.4	
204	RHH	03-III				杭24	杭	クスギ	62.6	8.6	8.7	
205	RHH	03-III				杭139	杭	クリ	51.6	4.95	4.3	
211	THJ	06-III			3a層		小型円形木製品		2.58	2.58	1.65	盤上遊戯カ
240	THJ	08-I	SK-02		2層下層	No.54	杭	サクラ	6.8	6.15	5.1	
241	THJ	08-I	SK-02		2層下層	No.49	浮子	ツバキ	10.95	25.25	8.9	
255	THJ	08-I	SE-03		2層下層	No.22	柄	アカガシ	(15.5)	7.8	5.2	
400	THJ	02-II	SD-02	B-4	5層	板状木片No.2	杭	イスノキ	(24.6)	6.25	1.6	

第 13 表 玉類観察表（玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡）

報番	出土地点					種別	石材	法量(cm)					色調	備考
	調査区	遺構	グリッド	層位	最長			幅	孔径(上)	孔径(下)	重量(g)			
7	THJ	01-II	SI-34		上層	ガラス玉		0.17	0.28	0.9	0.9		C-197 トルコ石の青緑	完形 不純物含む 気泡あり
25	THJ	05-I-2	SX-01	D-6	10a層	ガラス玉		0.77	0.62	0.27	0.25	0.4	C-186 湖の緑	完形 管状のガラスをのばし切断し整形した形状(巻きガラス技法カ) 厚みあり不純物含む 透明度に乏しい 外形は傾斜し孔径は斜目に歪み構円形
26	THJ	05-I-2	SX-01	D-5	10a層	ガラス玉		0.23	0.37	0.1	0.1		C-267 ラピスラズリ	完形 気泡あり 孔径は上下とも平坦
176	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉		2.05	1.0	0.25	0.2	3.7	C-229 茶の緑	完形
177	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉		1.75	0.8	0.3	0.1	2.2	C-229 茶の緑	完形
178	THJ	06-II		E-3	6a層	管玉		2.5	0.7	0.25	0.1	1.8	C-204 あひるの卵の薄青	完形
179	THJ	06-II		F-4	6a層	ガラス玉		0.55	0.63	0.23	0.23	0.3	C-256 北京の青	完形 気泡多数 外形は傾斜
180	THJ	06-II		F-4	6a層	管玉		1.35	0.45	0.2	0.15	0.5	C-229 茶の緑	完形
395	THJ	08-I		H-11	5層	勾玉	クロム白雲母	1.25	0.25	0.15	0.15	0.3	C-199 薄緑	一部欠損

報番	出土地点					種別	法量(cm)					備考
	調査区	遺構	グリッド	層位	最長		幅	孔径(上)	孔径(下)	重量(g)		
102	RHH	04-I		D-5		土製勾玉	4.05	1.1	0.25	0.15	5.1	ほぼ完形
171	RHH	05-I-1		D-4	7b層	土製勾玉	5.9	1.1	0.35	0.3	16.1	一部欠損
197	RHH	03-III	SD-04	D-5		土製勾玉	3.1~	0.9	0.2	0.1	2.9	一部欠損
217	THJ	07-IV		E-4	4層	土製管玉	2.8	1.2	0.3	0.25	5.0	ほぼ完形

第 14 表 玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡 遺構データ表

SHデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m(推定)			面積 ㎡(推定)	平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ				
48	RHH	02-I	SH-01	B・C-2					(方形)	P-1~P-4が所属する 炉検出 SH-02の埋没後、ほぼ同一の東寄りに軸を ずらして構築されたと考えられる	
49	RHH	02-I	SH-02	B・C-2	4.00		0.360	8.0056	(方形)	2基の浅い Pit と楕円形の土垣確認 東西両側にベット状遺構が廻ることから入 口施設の可能性 炉穴確認できず	
122	RHH	03-I	SH-01	C-2・3	4.25	2.00~		9.3732	(方形)	1/2残存 土には炭化物が含まれている	
132	RHH	04-I	SH-01	F-2・3	3.25	2.50~	0.280	6.94	不明		
68	THJ	06-II	SH-01	E・F-3・4	1.14	0.86	0.130		不明	柱穴はあるが、平面プランは不明確	
68	THJ	06-II	SH-02	E・3					不明	柱穴はあるが、平面プランは不明確	

SIデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量m(推定)			面積 ㎡(推定)	平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ				
78	THJ	01-1・2	SI-02-1	E9N6~12 E6N9~12 E3N6~9	4.16	3.84	0.160	15.97	隅丸方形	凹状	SP-03・06・11が所属 焼土(炉カ)あり N-20° -Wカ
	THJ	01-1・2	SI-02-2		4.80	3.84	0.160	18.43	隅丸方形	凹状	SP-08・09・12が所属
	THJ	01-1・2	SI-02-3		4.56	2.88	0.160	13.13	隅丸方形	凹状	SP-01・06・07・10が所属
85	THJ	01-1・2	SI-15	E3N12・15 E6N12・15	2.95	2.15	0.300	3.17	(方形)	凹状	住居第1面と第2面あり、住居址内に住居廃 絶後の土坑(土器溜め)あり
47	THJ	01-1・2	SI-34	E3N12 W0N3・12 E9N3~12	0.84	0.78	0.400	32.76	隅丸方形	凹状	炉あり
85	THJ	01-1・2	SI-41	E3N12・15 E6N12~18	4.75	2.60	0.650	6.17	(方形)	凹状	
36	THJ	01-1・2	SI-42	E6N3~9 E9N3~9 E12N9	8.00	4.00	0.160	25.12	(楕円形)	凹状	SP-1・2・6・9・10・11・12が所属する
	THJ	01-1・2	円形周溝 状遺構	E6N3・6	1.50	1.50	0.120		(楕円形)	凹状	
37	THJ	01-1・2	SI-43	W0N6 E3N6~12	7.00	4.00	0.080	19.23	(楕円形)	凹状	SP-1・2・3・4・6・9・11が所属する
81	THJ	01-3	SI-51	W6N27 W3N27・30 W0N27・30	4.25	4.00	0.280	17.0	(方形)	凹状	P-01~04あり 遺構全体に大量の炭出土
	THJ	01-3	SI-52	W9N24 W6N24・27 W3N24・27	6.15	3.70	0.160	11.37	(方形)	凹状	P-01~03あり SK-01(貯蔵穴カ)あり
84	THJ	01-3	SI-53	W6N18~24 W3N18~24	3.75	3.55	0.450	6.65	(方形)	凹状	P1~3あり
79	THJ	01-3	SI-103	E3N33・364	1.10	0.60	0.540		不明	凹状	ベット状遺構あり
	THJ	01-3	SI-104	W0N30・33 E3N33	8.70	4.14	0.300	18.0	(方形)	凹状	ベット状遺構あり
	THJ	01-3	SI-107	W0N30・33	4.20	2.94	0.180	6.17	(方形)	凹状	
	THJ	01-3	SI-141	E3N33 W0N33	5.88	2.10	0.600	6.17	(方形)	凹状	
105	THJ	01-3	SI-153	W6N18・21 W9N21	5.04	4.86	0.420	24.29	方形	凹状	ベット状遺構あり Pitあり
40	THJ	01-3	SI-163	W0E30 W0N33・36 E3N33・36	5.00	2.00	0.120	6.54	(楕円形)	凹状	P1~3あり
38	THJ	01-3	SI-166(A)	W6N18~24 W9N18~24 W12N18~21	7.00	6.00		19.23	(楕円形)	凹状	P1~8あり 炉あり
	THJ	01-3	SI-167	W9N15・18	7.40	2.40			(円形)	凹状	
109	THJ	01-8	SI-831	W6S42 W3S39・42	3.50	3.50	0.200	12.25	方形	凹状	P-1・2あり

SBデータ

挿図	調査区	遺構	規格 梁×桁	方位	検出レベル m	グリッド	面積 ㎡(推定)	梁		桁		備考
								m[平均値]		P=ピット番号		
238	THJ	07-I	SB-01	2×2	N-21.5° - W	6.375	D-5	10.97	P1-P7-P6 1.4×1.875 [1.64] P2-P4 1.7×1.6 [1.65]	P1-P2 3.275 P4-P6 1.6×1.775 [1.69]		
246	THJ	08-I	SB-01	2×3	N-27° - E	6.590	D-E-9~11	33.21	P1-P3 2.04+2.36 [2.20]	P3-P6 2.60+2.74+2.10 [2.48]		
247	THJ	08-I	SB-02	2×5	N-3° - E	6.600	F-G-11~13	35.496	P4-P6 1.86+2.14 [2.0]	P1-P4 1.86+2.12+1.34 P6-P11 0.92+1.42+2.66+1.84+1.82[1.74]		
246	THJ	08-I	SB-03	1×2	N-97° - E	6.600	H-I-13	6.8544	P3-P4 2.06 [2.06]	P1-P3 1.72+1.60 [1.66]		
248	THJ	08-I	SB-05	2×3	N-37.5° - W	6.600	J-K-14・15	29.16	P4-P6 2.16+2.40 [2.28]	P1-P4 1.80+1.84+2.88 P6-P8 4.10+1.80 [2.484]		

灰塚Ⅱ(2001年) 掘立柱建物(SB)より

土中に柱穴を形成し、これに柱を持って建物を形成する遺構を掘立柱建物としSBで表記した。

この中での柱間隔は真々制で測定し、柱痕跡が存在した場合は痕跡の中心から、また柱穴だけの場合はその中心からとした。

柵状柱列(SA)の柱間隔も同様とした。掘立柱建物は平面形態の短軸と長軸をそれぞれ「梁行×桁行」とし、これを提示し類別とした。位置はグリッドで提示した。

以下この分類に従って提示する。

SAデータ

挿図	調査区	遺構	グリッド	全長 m(推定)	柱間隔		備考
					m[平均値] P=ピット番号		
245	THJ	08-I	SA-01	D-E-7~11	13.65	P1-P8 1.44+1.98+1.54+2.52+2.04+2.36+1.66 [1.934]	SD-01に伴う柵列ヵ
	THJ	08-I	SA-02	I-J-14・15	8.40	P1-P5 2.26+2.04+1.62+2.12+1.50 [1.908]	IBSB-04
	THJ	08-I	SA-03	H-I-13・14	9.10	P6-P11 1.92+1.54+1.68+2.24+1.44 [1.764]	IBSB-04

SEデータ

挿図	調査区	遺構	グリッド	法量 m(推定)			平面形態	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
87	THJ	01-1・2	SE-19	E6N0	1.14	0.96	0.980	不定形	V字状	井戸ヵ
86	THJ	01-1・2	SE-31	E6N3 E3N3	1.92	1.50	1.800	円形	U字状	下層より小型丸底壺出土
87	THJ	01-1・2	SE-36	E6N0	1.00	0.96	1.620	楕円形	U字状	SX-19を切る
88	THJ	01-3	SE-114	W9N15	1.14	0.84	1.320	楕円形	U字状	
90	THJ	01-3	SE-115	W9N15 W12N15・18	3.00	2.31	2.010	楕円形	U字状	
91	THJ	01-3	SE-121	W9N15・18	3.40	3.25	3.100	円形	U字状	SE-121→114→115(時期差は少ない)
80	THJ	01-3	SE-140	W18N6	0.96	0.93	1.560	円形	U字状	
184	THJ	01-5	SE-56	S69W30	1.36	1.32	1.600	円形	U字状	
239	THJ	07-I	SE-01	C-2	(A-A)1.91	(D-D)1.42	1.963	円形	U字状	
253	THJ	08-I	SE-01	C-8	1.24	1.09	1.003	円形	U字状	
	THJ	08-I	SE-02	I-J-15	1.14	1.03	0.875	円形	U字状	
254	THJ	08-I	SE-03	L-16・17	1.21	1.20	1.406	円形	U字状	

SPデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ			
98	THJ	01-1・2	SP-46	E9N18	1.20	0.92	1.000	円形		
111	THJ	01-6	SP-418	E9S30	0.20	0.20	0.320	円形	U字状	
	THJ	01-6	SP-420	E3S33	0.20	0.20	0.400	楕円	U字状	
	THJ	01-6	SP-421	E9S33	0.20	0.20	0.480	円形	U字状	
103	THJ	01-7	SP-706	W36S39	0.25	0.25	0.320	円形	U字状	
	THJ	01-7	SP-707	W36S39	0.25	0.25	0.240	円形	U字状	
113	THJ	01-8	SP-809	W3S45	0.32	0.28	0.520	円形	変形U字状	
	THJ	01-8	SP-810	W6S48	0.25	0.25	0.320	円形	U字状	
	THJ	01-8	SP-811	W3S42	0.25	0.25	0.120	円形	U字状	
	THJ	01-8	SP-812	W3S42	0.25	0.25	0.280	円形	U字状	
	THJ	01-8	SP-813	W3S42	0.25	0.25	0.360	円形	U字状	
62	RHH	05-I-2	SA-01 P1	F-6	0.24		0.249	円形	U字状	
	RHH	05-I-2	SA-01 P2	F-6	0.24		0.194	円形	ビット状	
225	RHH	06-I	SP-01	D-9	0.25	0.24	0.170	楕円	ビット状	
68	THJ	06-II	SH-01-Pit01	F-4	0.29	0.22	0.130	円形	U字状	
	THJ	06-II	SH-01-Pit02	F-3	0.27	0.22	0.120	円形	U字状	
	THJ	06-II	SH-01-Pit03	F-4	0.32	0.21	0.180	円形	V字状	
	THJ	06-II	SH-01-Pit04	F-3	0.27	0.27	0.160	楕円	U字状	
	THJ	06-II	SH-01-Pit05	F-4	0.21	0.14	0.250	円形	U字状	
	THJ	06-II	SH-01-Pit06	F-4	0.23	0.22	0.080	円形	皿状	
	THJ	06-II	SH-01 SK-01	F-4	0.47	0.24	0.280	不明	V字状	
	THJ	06-II	SH-02 Pit-01	F-3	0.19	0.18	0.140	円形	V字状	
67	THJ	06-II	SP-01	G-4	0.19	0.17	0.010	円形	皿状	
	THJ	06-II	SP-02	H-5	0.19	0.18	0.004	円形	皿状	
	THJ	06-II	SP-03	H-5	0.29	0.12	0.006	円形	皿状	
	THJ	06-II	SP-04	H-5	0.18	0.18	0.080	円形	皿状	
69	THJ	06-II	SP-06	I-5	0.18	0.16	0.080	円形	V字状	
	THJ	06-III	SP-03	F-3	0.10	0.09	0.030	円形	不定	
	THJ	06-III	SP-07	D-2・3	0.67	0.51	0.135	楕円	不定	
	THJ	06-III	SP-08	D-3	0.50	0.40	0.147	楕円	皿状	
236	THJ	06-III	SP-09	D-2	0.24	0.10	0.096	不明	皿状	
	THJ	06-III	SP-10	D-2	0.42	0.32	0.051	隅丸方形	皿状	
	THJ	06-III	SP-11	D-2	0.32	0.28	0.056	楕円	皿状	
	THJ	06-III	SP-12	D-2	0.16	0.12	0.105	不明	皿状	
	THJ	06-III	SP-13	D-2	0.40	0.34	0.051	不明	皿状	
	THJ	06-III	SP-14	D-2	0.66	0.58	0.084	楕円	皿状	
	THJ	06-III	SP-15	D-2	0.90	0.76	0.083	不明	皿状	
	THJ	06-III	SP-16	D-2	0.80	0.52	0.088	隅丸方形	皿状	
	THJ	06-III	SP-17	D-2	0.20	0.16		楕円	U字状	
	THJ	06-III	SP-18	F-4	0.16	0.16	0.140	円形	不明	
	THJ	06-III	SP-19	F-4	0.18	0.16	0.080	円形	ビット状	
	THJ	06-III	SP-20	H-5	0.22	0.18	0.080	円形	ビット状	
	THJ	06-III	SP-21	L-6	0.16	0.14	0.080	円形	ビット状	

SDデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ		
97	THJ	01-1・2	SD-03	E6N0・3 E3N0～6 W0N3・6	9.60	1.36	0.600	逆台形状	遺構東側に土器が集中(廃棄 ㉞)
40	THJ	01-1・2	SD-07	E21N21～30 E24N21～30	3.90	0.85	0.500	台形状	SD-08にも一部かかる
	THJ	01-1・2	SD-08	E24N27・30 E27N27・30	1.85	0.40		台形状	SD-07に切られる
97	THJ	01-1・2	SD-25	E6S3 E6N0 E3N0・3 W0E3・6	9.12	0.88	0.400	すり鉢状	
	THJ	01-1・2	SD-28	E9N0 E6N0・3 E3N6 W0N6	0.99	0.96	0.300	台形状	
	THJ	01-1・2	SD-29	E9N3 E6N3・6 E3N6 W0N6・9	1.02	0.88	0.450	U字状	
100	THJ	01-3	SD-117	W9N12・15	1.68	0.96	0.480	逆台形状	
	THJ	01-3	SD-129	W9N12・15	1.52	0.80	0.320	U字状	
	THJ	01-3	SD-131	W9N12・15 W12N15・18	8.40	2.24	0.320	凹形状	
	THJ	01-3	SD-132	W9N12 W12N12～18	8.24	1.28	0.320	逆台形状	
	THJ	01-3	SD-133	W12N9～15 W15N15	8.56	2.00	0.320	U字状	
	THJ	01-3	SD-134	W12N9 W15N12・15	8.16	1.60	0.240	U～V字状	
102	THJ	01-4	SD-103	W42S27～42 W45S27～42	15.50	1.40	0.150	U字状	
	THJ	01-4	SD-203	W39S48～42 W42S42・45	7.20	0.55	0.200	凹状	
	THJ	01-4	SD-204	W39S42～48	6.50	0.50	0.250	凹状	
	THJ	01-4	SD-205	W45S45～51 W42S45	7.40	1.60	0.150	皿状	
	THJ	01-4	SD-206	W48S33・36 W45S33・36	3.00	0.70	0.100	皿状	
103	THJ	01-7	SD-701	W42S27～36 W45S21・24	10.40	0.55	0.400	V字状	北側が浅い
	THJ	01-7	SD-702	W42S33・36 W45S21～33 W48S21・24	7.60	0.75	0.500	V字状	北側が浅い
106	THJ	01-7	SD-708	W30S27～33 W33S24	5.75	0.45	0.500	V字状	SD-709につながる可能性(同一の溝)
	THJ	01-7	SD-709	W36S15・18 W42S15・18	8.00	1.00	0.400	V字状	埋土中に炭堆積
	THJ	01-7	SD-710	W39S21 W36S18・21 W33S15・18	12.00	1.40	0.200	凹形状	
	THJ	01-7	SD-717	W33S24～39	7.50	0.50	0.200	凹形状	
107	THJ	01-4・7	SD-46	W54S33～42 W57S33～36	8.00	1.30	1.800	すり鉢状	
109	THJ	01-8	SD-822	W9S48・51	1.60	0.40	0.060	凹形状	
113	THJ	01-8	SD-823	W3S45・48 W0S42・45	8.40	1.20	0.160	皿状	
186	THJ	02-I	SD-07	F-10・11、G-10	6.90	0.56	0.125	皿状	
	THJ	02-I	SD-08	F-9・10・11	9.20	1.50	0.286	皿状	
173	THJ	02-I	SD-09	E-7・8・9・ D-5・6・7・	38.52	2.68	0.371	不明	SH-01・02を切り、SD-10に切られる SD-13を切る
187	THJ	02-I	SD-10	E-7・8・9	6.28	1.90	0.305	皿状不定	SD-09の北端を切る
274	THJ	02-II	SD-03	C-5・6・7 D-4・5・6・7・8・9 E-5・6・7・8・9 F-9	21.25	10.25	1.365	逆皿状	
	THJ	02-II	SD-04	B・C-3・4	5.68	2.88	0.490	逆皿状	
192	THJ	02-III	SD-11	D-10、E-9・10 F-9	10.30	1.28	0.195	皿状	自然流路 西から東へ流れる
176	THJ	02-III	SD-12	E-11、F-10・11	7.84	3.16	0.459	U字状	古代水田面を切っている
174	THJ	02-III	SD-14	C・D・E-16	8.50	1.30	0.129	U字状	溝としては非常に深く鉄分の沈澱が著しい
176	THJ	02-III	SD-15	E-9～11・F-9	11.06	1.80	0.380	円形	幅に対し深さのある溝で、このタイプは02-I区SD-09で見られた
121	RHH	03-I	SD-05	C-3～5、D-4～7 E-6～8	27.30	2.56	0.293		
	RHH	03-I	SD-06	C・D-6	4.20	(A-A)0.46	0.113	皿状	
126	RHH	03-II	SD-07	G・H-8・9	9.00	1.74	0.343	皿状	西側はSX-06に切られる SX-07方向に水を流す水路的役割を果たしていた可能性はある ㉞
195	RHH	03-III	SD-01	D・E-11	7.00	1.25	0.244	不定	
	RHH	03-III	SD-02	C・D-4・5	4.75	1.75	0.410	皿状	

SDデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ		
195	RHH	03-III	SD-03	B-1・2、C-2・3	7.50	1.80	0.250	皿状	SD-04 の上に乗っている。東の方が少し高めである為、東側から流れ込んできたのではない。
	RHH	03-III	SD-04	B-3、C-3~5 D-4~8、E-6~9	33.00	4.40	0.505	不定	主に砂層で形成 上位層は北から南へと傾向が見られる 下位層は水平
134	THJ	04-I	SD-01	F-8	13.36	3.48	0.263	皿状	
203	RHH	04-I	SD-01	C-8・9	2.40	0.44	0.073	皿状	
205	RHH	04-I	SD-02	E-1・2、F-1~3	7.66		0.315	不明	自然流路カ
210	RHH	05-I-1	SD-01	C-6、D-5・6 E-5	11.30	3.10	0.195	皿状	後に河川の氾濫の影響で埋まったと思われる 水は東から西へ流れていた可能性 水路カ
	RHH	05-I-1	SD-02	B・C-5・6、D-5	8.00	2.90	0.195	すり鉢状	SD-01のすぐ南に位置する 非常に浅く、SD-01に比べると形も整っていない 攪乱より東側は8層の砂がすぐ出てきたのでプラン不明
152	RHH	05-I-1	SD-03	B・C-5・6、D-5	9.81	1.93	0.200	不定	SD-01のすぐ南に位置する 非常に浅く、SD-01に比べると形も整っていない 攪乱より東側は8層の砂がすぐ出てきたのでプラン不明
157	RHH	05-II-2	SD-01	C~F-8・9	12.98	2.08	0.422	不定	西から東に水が流れていた様子が窺える 特にSD-01の底部分は凹凸が激しい
	RHH	05-II-2	SD-02	D・E-8・9	11.16	1.76	0.288	不定	SD-01より浅く、SD-01の途中から流れが始まっている可能性 SD-01に切られている為、SD-02の方が古いと考えれる
63	THJ	05-III-1	SD-01	B・C-3	4.20	0.94	0.210	皿状	西から東へ延びる 断面は比較的緩やかなV字形、東側断面は逆台形を呈す
	THJ	05-III-1	SD-02	D-5	3.34	1.00	0.980	V字状	西から東へ延びる
217	THJ	05-III-2	SD-01	B-2~5	15.58	1.58	0.330	不定	南方向から緩やかに蛇行しながら、北西へと延びる SD-01・02は東西に並列し、時期差はさほどないと考えられる
	THJ	05-III-2	SD-02	B-2~5、C-5	16.02	0.88	0.483	皿状	ST-01に切られる 南東方向から屈曲し、北東へやや蛇行しながら試掘坑に切られる
64	THJ	05-III-2	SD-03	A-3、B-3~5	12.84	1.36	0.436	皿状	南から北に水が流れていた
	THJ	05-III-2	SD-04	A-2	1.18	1.12	0.299	皿状	南西方向の調査区外に延びていくと思われる
67	THJ	06-II	SD-05	B~D-2、C~E-3	20.90		0.730	皿状	自然流路
230	RHH	06-I	SD-05	D~F-8・9	5.13	0.44	0.190	不明	2条の畦畔を伴う水路
229	RHH	06-I	SD-08	E・F-9	3.08	0.52	0.169	U字状	
226	RHH	06-I	SD-09	H・I-16	3.98	0.98	0.218	U字状	SX-15を切り調査区外南側に延びる 溝状落ち込み
162	RHH	06-I	SD-10	G-13・14、H-13	9.08	0.98		逆皿状	SX-19に伴う排水路 SX-11直下より検出 SD-10の南にもう1つの畦畔があったようだが、削平を受けており検出に至らず
66	RHH	06-I	SD-11	F-8	1.95	0.80	0.800	U字状	SX-21・22に伴う水路
162	RHH	06-I	SD-12					皿状	断面のみ
43	RHH	06-I	SD-13					不明	断面のみ
166	RHH	06-I	SD-14					皿状	断面のみ
	RHH	06-I	SD-15					皿状	断面のみ 流路状の遺構
167	RHH	06-I	SD-16					不明	断面のみ
162	RHH	06-I	SD-17					皿状	断面のみ SD-05直下で検出
230	RHH	06-I	SD-18					不明	断面のみ SX-12畦畔に伴う溝カ
231	RHH	06-I	SD-19					不明	断面のみ
166	RHH	06-I	SD-20					不定	断面のみ 9a層は弥生~古墳期の水田の広がりを示し、そこより南側は流路で水田としては利用されていなかったと思われる
67	THJ	06-II	SD-04	J-6				不明	溝
	THJ	06-II	SD-05	B~E-2・3	19.00			不明	自然流路
233	THJ	06-III	SD-02	J-5・6	2.32	0.62	0.530	長方形	土坑墓のプランであった可能性
	THJ	06-III	SD-05	F・G-4	2.26	0.38	0.080	U字状	SD-04・06は畦畔と溝というセット関係にあると判断される
170	THJ	07-II (06-III)	SD-31	D~F-3・4 D・E-4	5.10	1.78	0.250	皿状	SD-37を切る SD-31より北側は水田を主とする水田域カ
	THJ	07-II (06-III)	SD-37	B・C-2、C~E-3	15.50	2.00	0.200	皿状	SD-31に切られる 遺構埋没時期の祭祀土器と思われる土器出土 SD-43と同時期
239	THJ	07-I	SD-02	D・E-8、E・F-7	10.52	1.56	0.260	U字状	水田ではなく、生活に伴う溝 廃棄時に地盤整理のために石を投げ捨てたものと思われる
276	THJ	07-I	SD-03	B-2、C-2~5	13.36	0.48	0.130	皿状	
	THJ	07-I	SD-04	B-2、C-2~6	15.12	1.42	0.190	皿状	
277	THJ	07-I	SD-06	B・C-3・4、C-2 D-2・3	13.50	8.75	0.720	不明	

SDデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ		
72	THJ	07-Ⅲ	SD-01	B・C-1~3	7.93	1.75	0.300	不定	弥生後期の可能性もあり 小川のなもので、菊池川に流れるものだったと考えられる
73	THJ	07-Ⅳ	SD-01	D~G-4, E~I-5 G~I-6	245.00	4.90	0.660	不明	埋没時期は弥生中期頃 8層の凹地にSD-01埋土が堆積
241	THJ	07-V	SD-01	B・C-2・3	6.50	3.20	0.375	不明	自然流路 調査区中央の粘土採掘坑と同じものと判断 西から東へ流れ、流れはあまり急ではなかっただろう
	THJ	07-V	SD-02	C-3	4.65	2.90		皿状	自然流路 北から南へ流れ、SD-01と合流する溝 上流は5層時カットされ残っておらず、わりと流れの急な溝だったのではないカ
255	THJ	08-I	SD-01	C-7・8 D-8・9・11 E-11	14.96	1.70	0.171	皿状	敷地内の区画された素掘りの溝と考えられる SE-01・SK-01と伴う
256	THJ	08-I	SD-02	G~I-14, I-13	10.60	1.15	0.418	皿状	性格はやや不明だが、屋敷に伴う溝の可能性
257	THJ	08-I	SD-03	H・I-14, H-15	7.00	1.62	0.234	皿状	自然流路 SD-05・06・07を切っており、埋没後の13C中頃~後半頃には形成されていたと考えられる
258	THJ	08-I	SD-04	I~K-15	11.38	1.00	0.372	皿状	性格はやや不明だが、区画した溝の可能性 焼土検出
256	THJ	08-I	SD-05	H・I-14	8.10	1.64	0.249	皿状	自然流路
259	THJ	08-I	SD-06	I-14・15 J-15・16	8.80	0.90	0.183	皿状	自然流路
	THJ	08-I	SD-07	J-14~16, K-16	12.62	1.36	0.189	皿状	自然流路 南北方向の1条の溝だが、南方の途中からSD-10との2条に分かれる
260	THJ	08-I	SD-08	J-14・15 K-15~17	18.24	0.92	0.278	皿状	自然流路
	THJ	08-I	SD-09	K-14・16 L-16~17	15.14	0.49	0.205	皿状	自然流路
259	THJ	08-I	SD-10	J-14・15	4.92	0.42	0.236	皿状	自然流路 南北方向の1条の溝 SD-07が南方の途中からSD-10との2条に分かれる
	THJ	08-I	SD-11	J-14・15	2.82	0.26	0.081	皿状	自然流路 SD-08と同時期頃
	THJ	08-I	SD-12	G-13・14	6.64	0.44	0.200	皿状	自然流路
261	THJ	08-I	SD-13	L-17	2.22	1.68	0.213	皿状	自然流路 流水の影響で地形の落ち込みに堆積していったものと考えられる SD-21と同様な埋土を持っている SD-21とほぼ同時期頃
262	THJ	08-I	SD-14	L・M-17 L-18	7.90	2.44	0.437	不定	性格は不明だが、屋敷基(SK-01・02)に伴う可能性
260	THJ	08-I	SD-15	I-13・14	4.18	0.36	0.252	皿状	自然流路
264	THJ	08-I	SD-16	L-15・16	6.62	0.48	0.149	皿状	自然流路 SD-17が埋没し、SD-16が形成されていったと考えられる
	THJ	08-I	SD-17	L-15・16	2.74	0.32	0.069	皿状	自然流路
	THJ	08-I	SD-18	L・M-16	4.50	0.80	0.338	皿状	区画した可能性がある溝状遺構と思われる SD-19→SD-18→ST-08の順で形成
	THJ	08-I	SD-19	M-16	1.88	0.90	0.169	皿状	自然流路
259	THJ	08-I	SD-20	K・L-17	3.64	0.48	0.062	皿状	自然流路
261	THJ	08-I	SD-21	K-17	2.68	1.08	0.348	皿状	自然流路 SD-13とほぼ同時期頃
256	THJ	08-I	SD-22	I-14	3.30	0.36	0.160	皿状	自然流路 SD-02と22も時期差はあまりない SD-22埋没後、SD-02が形成

STデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ			
173	THJ	02-I	ST-02	C・D-4	1.60	0.64	0.215	直線	皿状	
51	THJ	02-I	ST-03	B-2	0.60	0.34	0.138	隅丸方形	皿状	
123	RHH	03-I	ST-03	C-4	0.99	0.61	0.132	隅丸方形	皿状	土坑
	RHH	03-I	ST-04	D-6	0.70		0.158	不明	皿状	攪乱により大部分削平されている
	RHH	03-I	ST-05	C-2	0.50	0.46	0.040	円形	皿状	
	RHH	03-I	ST-06	C-2	0.62	0.56	0.087	楕円	皿状	
	RHH	03-I	ST-07	C-1・2	0.80	0.64	0.592	不明	不明	ST-07はST-06より新しい
	RHH	03-I	ST-08	B・C-1	0.86	0.66	0.495	不明	皿状	
	RHH	03-I	ST-09	E-7	1.16	0.52	0.247	不明	皿状	浅い土坑 ST-09・10は埋土の違いから同時期ではないと思われる
124	RHH	03-I	ST-11	E-6	0.74	0.56	0.074	不明	皿状	
	RHH	03-I	ST-12	D-6	0.72	0.24	0.086	不明	U字状	
	RHH	03-I	ST-13	C-4	0.64	0.62	0.023	楕円	皿状	ST-13は本来SD-05を切っていた
	RHH	03-I	ST-14	D-6	0.98	0.80	0.408	長方形	U字状	
	RHH	03-I	ST-16	C・D-4	1.52	0.68	0.011	不明	皿状	ST-16・17は攪乱により削られており実際の大きさ等は分からない
	RHH	03-I	ST-17	D-4	0.74	0.40	0.186	不明	皿状	
127	RHH	03-II	ST-18	G・H-9	1.28	1.16	0.071	楕円	皿状	
	RHH	03-II	ST-19	G・H-9	2.28	1.88	0.095	楕円	皿状	
	RHH	03-II	ST-20	H-9・10	1.50		0.046	不明	皿状	
201	THJ	04-I	ST-01	F-8	1.12	0.87	0.278	楕円	皿状	遺物出土なし 埋土は基本土層2層と類似 2層が堆積する時に埋まった可能性あり 広義の土坑
203	RHH	04-I	ST-01	E・F-3、F-2	7.15	1.30	0.363	長方形	皿状	用途は不明だが、水が溜ったような跡は見られる 水溜りとも考えられるが浅く、溝が切れて一部残ったとも考えられる
139	RHH	04-II	ST-01	E-4	(A-B)1.03	(C-D)0.63	0.118	隅丸方形	皿状	
	RHH	04-II	ST-02	C-3	(A-A')0.60	(B-B')0.59	0.181	楕円	V字状	埋土堆積から、自然に埋没した土坑
140	RHH	04-II	ST-03	E-5	1.25	1.17	0.745	楕円	U字状	ST-04の北に隣接 水が非常に多く湧く 床の部分に少し段差あり
	RHH	04-II	ST-04	E-4・5	1.74	1.01	0.947	円形	U字状	ST-03の南に隣接、ST-06を切る 床に近くなるにつれ湧水激しい 1番広い段の部分に掘り、次に楕円形に穴を掘る2段掘り構造 南側が広い 廃棄儀礼が行われた可能性
143	RHH	04-II	ST-05	E-5	1.40	1.39	0.860	円形	V字状	ST-03・04・05の中で湧水量が一番多い ST-03・04が先に掘られ、それが機能しなくなり、少し離れた場所にST-05が掘られた
	RHH	04-II	ST-06	E-4・5	1.34	1.01	0.558	円形	U字状	ST-04に切られ、半分以上削平を受けている 元来は円形～楕円形
144	RHH	04-II	ST-07	C・D-3	0.98	1.97	0.585	円形	U字状	
146	RHH	04-II	ST-08	D-3	1.20	1.10	1.354	円形	U字状	自然に埋没していく時期と土器を投げ入れ、火を焚いて、1度に埋め戻してしまう 時期との2時期があり(時期差不明) 一連の廃棄儀礼が行われていた可能性 網代出土
144	RHH	04-II	ST-09	D-3	0.50	0.45	0.197	隅丸方形	U字状	壺(ほぼ完形)を埋める為に作られたか 遺構自体の規格は違うが、SX-04・ST-08と直線で結べる為、意図的にこのような位置で作った可能性あり 層位的にはST-09→ST-08→SX-04の順
218	THJ	05-III-2	ST-01	B-3	1.50	0.60	0.224	不定	皿状	遺物なし ST-01～ST-43の並び方に規則性はない いずれも人工的に掘られたのか、水の作用で自然にできたのか判断できない
	THJ	05-III-2	ST-02	C-6	0.80	0.70	0.154	隅丸方形	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-III-2	ST-03	C-6	0.70	0.69	0.100	不明	不明	ST-01と同様
	THJ	05-III-2	ST-04	C-5	0.63	0.63	0.176	楕円	皿状	ST-01と同様
THJ	05-III-2	ST-05	C・D-7	1.96	1.26	0.136	不定	凹状	ST-01と同様	

STデータ

挿図	調査区	遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形態	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ				
218	THJ	05-Ⅲ-2	ST-06	D-7	1.26	0.95	4.574	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-07	D-8	0.63	0.54	0.095	不定	皿状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅲ-2	ST-08	D-8	1.13	0.85	0.178	楕円	皿状	ST-01と同様
218	THJ	05-Ⅲ-2	ST-09	D・E-8	1.00	0.62	0.118	隅丸方形	凹状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅲ-2	ST-10	C・D-7	1.34	0.59	0.148	不明	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-11	D-7	0.93	0.41	0.105	不明	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-12	C-6	0.98	0.90	0.114	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-13	C-6	0.58	0.57	0.108	楕円	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-14	C-6	0.66	0.53	0.133	楕円	皿状	ST-01と同様
220	THJ	05-Ⅲ-2	ST-15	D-7	1.65	0.93	0.123	不定	凹状	ST-01と同様
219	THJ	05-Ⅲ-2	ST-16	D-7	2.49	1.35	0.136	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-17	D-18	0.76	0.60	0.123	楕円	皿状	ST-01と同様
220	THJ	05-Ⅲ-2	ST-18	D-18	2.17	0.91	0.150	不明	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-19	D・E-7・8	1.76	0.85	0.190	不明	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-20	D-8	0.64	0.52	0.110	楕円	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-21	D-8	0.75	0.34	0.090	隅丸方形	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-22	D-8	0.63	0.62	0.112	楕円	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-23	E-9	0.77	0.68	0.080	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-24	E-9	0.61	0.58	0.084	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-25	C-5	0.67	0.44	0.124	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-26	C-5	0.51	0.48	0.156	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-27	C・D-6	0.50	0.39	0.085	不定	凹状	ST-01と同様
221	THJ	05-Ⅲ-2	ST-28	C-6	0.95	0.51	0.125	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-29	C-6・7	1.37	1.13	0.156	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-30	C・D-6・7	2.56	1.42	0.228	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-31	D-6	2.08	1.12	0.181	不明	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-32	D-6・7	0.54	0.52	0.255	不明	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-33	D-7	0.71	0.43	0.157	楕円	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-34	D-7	1.37	0.39	0.186	不明	凹状	ST-01と同様
222	THJ	05-Ⅲ-2	ST-35	D・E-8	0.55	0.40	0.144	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-36	E-8	0.46	0.38	0.100	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-37	E-8	0.54	0.50	0.110	楕円	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-38	E-9	0.44	0.30	0.081	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-39	E-9	0.49	0.32	0.094	不明	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-40	E-8・9	0.41	0.31	0.073	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-41	E-9	0.98	0.86	0.117	不定	皿状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-42	E-9・10	1.20	1.06	1.072	不定	凹状	ST-01と同様
	THJ	05-Ⅲ-2	ST-43	C-4	1.78	1.04	0.178	不定	凹状	ST-01と同様
41	RHH	06-I	ST-01	G-11	0.72	0.54	0.140	楕円形	皿状	土器を一括して廃棄したと思われる
265	THJ	08-I	ST-01	G・H-11	2.19		1.081	不明	U字状	形状・深さから井戸の可能性高い 埋土は洪水等で埋まり、埋3層下層の木片も流れ込み
266	THJ	08-I	ST-02	K-14・15	2.44	1.94	0.298	楕円	皿状	ST-02・03は埋土に焼土・炭化物が混入 土坑の壁には直接火を受けた状況は観 察できないが、埋土(焼土)が火を受けた 可能性もある 焼土痕跡の土 SD-04埋没後にST-02・03の切り合いが あり埋没後SD-09が切ったと推定される
	THJ	08-I	ST-03	K-15	2.06	2.04	0.406	楕円	皿状	焼土痕跡の土坑
267	THJ	08-I	ST-04	E-9	0.81	0.81	0.198	楕円	皿状	プランはやや不整形 屋敷外ではあるが屋敷に伴う土坑と考え られる
	THJ	08-I	ST-05	E・F-11	2.11	2.05	0.570	不定	凹状	テラス状に掘り込み西側部分がやや深い 井戸の可能性もあるが土坑と判断 ST-04に伴う
268	THJ	08-I	ST-06	I-3	2.74	1.76	0.284	不明	皿状	ST-06はSD-02を切っており、SD-02埋没 後には形成されていたと推定 ST-02・03と近似する埋土に焼土・炭化物 が混入 焼土痕跡の土坑
269	THJ	08-I	ST-07	K-16	1.12	1.09	1.488	円形	U字状	円形に近い隅丸方形と深さから判断 一気に掘り下げ短期間の使用 (SK-01・03)と同時期頃
	THJ	08-I	ST-08	L・M-16	0.84	0.48	0.176	隅丸方形	皿状	性格はやや不明楕円形に近い土坑 遺物なし

STデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ			
268	THJ	08-I	ST-09	L-16	1.36	0.59	0.254	不定	凹状	不整形の長楕円形、両端をテラス状に掘り込み、中央部をややピット状に掘り込むピットを掘る為に広げた。
269	THJ	08-I	ST-10	I-J-14	2.31	1.32	0.329	不定	凹状	炭化物集中部分や焼土が混入、 燃焼痕跡の土坑
270	THJ	08-I	ST-11	K-16	1.04		0.114	不明	皿状	ST-12を切り、SD-08に切られている為、 性格もやや不明であるが人為的に掘削された土坑
	THJ	08-I	ST-12	K-16		0.60	0.142	不明	皿状	ST-11・12が切り合い、埋没した直後にSD-08が形成されたと推定され、 時期差が殆どないと考えられる
	THJ	08-I	ST-13	L-16	0.72	0.61	0.047	楕円	皿状	遺物なし
	THJ	08-I	ST-14	J-15	0.77	0.60	0.137	不明	皿状	性格はやや不明だが円形に近く、 人為的掘削の土坑 SD-06が切っており同時期から少し前の12C後半頃と推定される
	THJ	08-I	ST-15	M-16	1.44	1.16	0.974	楕円	皿状	素掘りの井戸
	THJ	08-I	ST-16	K-L-16	1.06	0.53	0.089	不明	皿状	SD-09に切られており、 性格はやや不明だがST-02・03と伴う土坑の可能性あり
271	THJ	08-I	ST-17	H-13・14	1.40	1.02	0.170	隅丸方形	皿状	性格はやや不明、埋土に焼土・炭化物混入、 燃焼痕跡の土坑 SD-22を切り、楕円形に近く両端をテラス状に掘り込んだ土坑
	THJ	08-I	ST-18	H-11・13 I-13	1.56	0.52	0.396	不明	皿状	排水路で切られているため全容は明確でない、 SK-01に伴う頃の所産。
	THJ	08-I	ST-19	G-11	1.07	0.75	0.079	楕円	皿状	楕円に近い不整形の土坑、 埋土に炭化物・焼土粒が混入するが埋土の壁に火を受けた状態は観察できず
	THJ	08-I	ST-20	J-13・14	1.44	1.04	0.044	隅丸方形	皿状	不整形の土坑、 埋土に炭化物・焼土粒混入、 近くにあるST-10の土色埋土が近似する為、 同時期頃。
	THJ	08-I	ST-21	F-11	0.96	0.80	0.538	楕円	U字状	形状から井戸の可能性もあり、 性格は不明だが、使用後に土器や礫を投げ込み一気に埋めたと考えられる

SKデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m (推定)			平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ			
78	THJ	01-1・2	SK-18	E6N6	1.04	0.96	1.200			SI-02の貯蔵穴の可能性
86	THJ	01-1・2	SK-27	E6N3	1.56	0.87	0.570	円形	凹状	SE-31を切る
98	THJ	01-1・2	SK-37	E3N3	0.58	0.50	0.460	(円形)	U字状	
	THJ	01-1・2	SK-44	E15N9・12	0.76	0.64	0.720	(円形)	U字状	3a層検出
	THJ	01-1・2	SK-45	E3N0・3	0.37	0.38	0.420	(楕円形)	U字状	
82	THJ	01-3	SK-01	W9N21・24 W6N21・24	1.20	0.90		楕円形	凹状	SI-51の貯蔵穴。
95	THJ	01-3	SK-101	W9N21	1.52	0.96	0.520	不定形	凹状	
106	THJ	01-7	SK-713	W42S18 W39S18	1.10	1.00	0.500	円形	皿状	
	THJ	01-7	SK-715	W30S9	2.30	2.80	5.000	(円形)	凹状	
	THJ	01-7	SK-716	W39S24・30 W36S24・30	1.40	1.00	1.500	楕円形	凹状	
109	THJ	01-8	SK-832	W9S45 W6S42・45			0.150	(楕円形)	凹状	
179	RHH	05-II-1	SK-01	D-5	1.09	0.60	0.200	楕円形	皿状	直下のSX-03を切る、 出土遺物は遺構に伴うものではない、 性格不明、耕作に伴うもの。
69	THJ	06-II	SK-01	E-3	0.55	0.35	0.011	不定	不明	炉の可能性
71	THJ	06-III	SK-06	F-4	0.48	0.26	0.250	不明	不明	SX-39内炉
249	THJ	08-I	SK-01	G-13	1.40	0.76	0.194	隅丸長方形	皿状	屋敷基 人骨・土器
250	THJ	08-I	SK-02	H-11・13	3.26	3.08	1.347	円形	U字状	廃棄場
252	THJ	08-I	SK-03	J-15	1.22	0.62	0.233	隅丸長方形	皿状	屋敷基 人骨・土器

SXデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m(推定)			種類	平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ				
98	THJ	01-1・2	SX-04-1	E6N6	1.72	1.32	0.720		円形	すり鉢状	土坑カ
86	THJ	01-1・2	SX-04-2	E6N3	2.25	0.69	0.060		不定形	凹状	
97	THJ	01-1・2	SX-06	E3S3 E3N0 W0S3	2.80	1.60	0.160		不定形	皿状	
47	THJ	01-1・2	SX-20	E12N12	0.70	0.66	0.600		楕円形	U字状	
98	THJ	01-1・2	SX-35	E3N3	0.52	0.46	0.460			U字状	第1面・第2面あり
97	THJ	01-1・2	SX-38							(凹状)	断面のみ 断面ではSD-28を切り、SX-29に切られる
98	THJ	01-1・2	SX-39	E6N0	1.04	0.48	0.280		(楕円形)	逆台形状	
84	THJ	01-3	SX-102	W3N18~24 W6N18~24	5.20	3.60	0.250		不明		炭・焼土あり 円形プランカ
95	THJ	01-3	SX-106	W18N9	0.96	0.80	0.320		円形	凹状	
	THJ	01-3	SX-118	W3N18・21 W6N18・21	1.80	1.00	0.160		楕円形	皿状	
	THJ	01-3	SX-124	W9N18	0.80	0.80	0.240		(楕円形)	(凹状)	
	THJ	01-3	SX-125	W9N18	1.00	0.80	0.240		楕円形	凹状	
		01-3	SX-126	W9N18	1.36	0.68	0.280		不定形	凹状	
	THJ	01-3	SX-128	W6N18・21 W9N18	0.92	0.76	0.240		不定形	凹状	
80	THJ	01-3	SX-136	W12N3~9 W18N3~9 W15N3~9	5.40	4.80	0.050		方形	凹状	
95	THJ	01-3	SX-126-2 (SX-137)	W6N18・21 W9N18	1.60	1.36	0.240		不定形	凹状	
80	THJ	01-3	SX-161	W18N3	1.10	0.95	0.150		楕円形	皿状	
102	THJ	01-4	SX-202	W42S45・48	1.75	1.25	0.400		円形	皿状	
	THJ	01-4	SX-206	W54S30・33	6.50	2.30	0.100		(方形)	凹状	
	THJ	01-4	SX-207	W42S45~51	5.00	0.50	0.050			皿状	
110	THJ	01-6	SX-401	E21S12・15 E24S12	3.44	1.76	0.120		不明	凹状	
	THJ	01-6	SX-402	E21S9・12	2.56	0.56	0.080		不定形	皿状	
	THJ	01-6	SX-403	E18S9・12 E21S9・12	1.84	0.80	0.080		不明	(皿状)	
	THJ	01-6	SX-404	E15S15 E18S12・15	4.80	2.40	0.080		(方形)	(凹状)	P-1・2あり
	THJ	01-6	SX-405	E21S15・18 E18S15・18	4.40	2.80	0.200		不定形	凹状	
	THJ	01-6	SX-406	E18S21 E15S18・21 E12S18	6.08	0.64	0.040		不定形	皿状	
	THJ	01-6	SX-407	E18S12・15	1.20	1.12	0.040		円形	凹状	
111	THJ	01-6	SX-408	E9~15S30	4.00	0.40	0.080				
111	THJ	01-6	SX-409	E9S30	5.60	1.76	0.080		(不定形)	皿状	3層上面検出
116	THJ	01-6	SX-409A	E9S30・33 E6S30	6.40	1.00	0.200		不定形	V字状	4層上面検出
	THJ	01-6	SX-409B	E9S36 E6S33~36 E3S30・33	6.80	3.50	0.200		不定形	不明	4層上面検出
110	THJ	01-6	SX-410	E9S33	3.20	1.60	0.040		不定形	皿状	
111	THJ	01-6	SX-411	E6S30	1.76	1.60	0.200		楕円形	凹状	
	THJ	01-6	SX-412	E6S33	1.36	0.88	0.040		楕円形	皿状	
	THJ	01-6	SX-413	E9S36	2.00	0.64	0.160		不明	(凹状)	
	THJ	01-6	SX-414	E21S18・21 E24S18	4.00	1.60	0.080		不明	(凹状)	
	THJ	01-6	SX-415	E21S18・21 E24S18	1.20	0.40	0.040		不明	(皿状)	
	THJ	01-6	SX-416	E9S30	2.00	1.36	0.160		楕円形	凹状	
116	THJ	01-6	SX-422	E21S9・12 E24S12	6.00	3.00	0.150		(方形)	凹状 (皿状)	
	THJ	01-6	SX-423	E21S15 E24S12・15	6.50	3.00	0.150		(方形)	(凹状)	
	THJ	01-6	SX-424	E15S15・18 E18S15・18	6.50	5.00	0.050		(方形)	凹状	
	THJ	01-6	SX-425	E18S21	4.50	2.30	0.100		(方形)	凹状	
103	THJ	01-7	SX-704	W33S36 W30S36	0.80	0.36	0.120		円形	凹状	
	THJ	01-7	SX-705	W33S36・39 W30S36・49	0.92	0.40	0.120		円形	凹状	
	THJ	01-7	SX-712	W33S42	0.60	0.32	0.280		(円形)	凹状	
106	THJ	01-7	SX-718	W39S24~33 W36S24~33	6.00	2.50	0.100		(長方形)	凹状	
107	THJ	01-4・7	SX-47	W39S45	1.20	1.08	0.280		不定形	凹状	
	THJ	01-4・7	SX-61	W42S48	0.96	0.28	0.320		不定形	すり鉢状	
104	THJ	01-4・7	SX-1001	W54S39 W51S30~39 W48S30~33	12.50	2.00					

SXデータ

挿図	調査区		遺構	グリッド	法量 m(推定)			種類	平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ				
104	THJ	01-4・7	SX-1002	W48S45~48 W45S33~45	15.00	0.50			円形		
	THJ	01-4・7	SX-1003	W57S33・36 W54S33							
	THJ	01-4・7	SX-1004	W42S44~51	605.00	0.50					
114	THJ	01-8	SX-801	W6S39 W3S39	1.25	0.45	0.400		(楕円形)	凹状	
113	THJ	01-8	SX-802	W3S39・42 W0S39・42	1.84	1.04	0.120		楕円形	皿状	
114	THJ	01-8	SX-803	W0S42 E3S39・42 E6S39	3.75	2.50	0.050		(方形)	凹状	P-1が付随すると思われる
	THJ	01-8	SX-804	W6S39・42 W3S39・42	6.50	3.35	0.050		(方形)	凹状	
113	THJ	01-8	SX-805	W3S42	7.20	0.56	0.120		楕円形	凹状	
114	THJ	01-8	SX-806	E3S42	1.25	0.85	0.100		長方形	皿状	
	THJ	01-8	SX-807	W0S42・45 E3S42	1.90	0.75	0.150		不明	不明	
	THJ	01-8	SX-808	W0S45	0.64	0.56	0.400		不定形	U字状	
109	THJ	01-8	SX-821	W9S48	1.20	1.20			(楕円形)	皿状	
	THJ	01-8	SX-824	W0S42	1.60	0.40			隅丸長方形	皿状	
	THJ	01-8	SX-825	W9S48	3.20	1.20			不明	不明	
	THJ	01-8	SX-828	W9S45・48 W6S45・48	3.00	2.80			(方形)	凹状	
113	THJ	01-8	SX-829	E3S33~39 E6S36~39	5.20	2.40			不明		落ち込み
185	THJ	02-I	11層畦畔	C-3	4.50	0.75	0.060	畦畔	直線	皿状	
187	THJ	02-I	SX-03							不明	断面のみ
192	THJ	02-III	SX-04	B-2~4	6.70	1.15	0.120		不定	不明	遺物なし 遺構名をSD-16に変更した可能性 中世水田面が被覆される時に出来た袂れとも考えられる
176	THJ	02-III	SX-10	B-3	1.92	1.82	0.467		不定	不定	焼土・炭化物の集中確認 焼土塊出土
119	RHH	03-I	SX-01	E-8・9	3.05	0.85	0.876	自然流路	不明	凹状	
	RHH	03-I	SX-02	D・E-7	3.60	1.78	0.431	自然流路	不明	皿状	
52	RHH	03-I	SX-03	B-2~4	2.27	1.35	0.207		隅丸方形	皿状	湧水で軟弱だった為、上端が荒れた
	RHH	03-I	SX-04	B-2	1.33	1.30	0.598		不明	凹状	
	RHH	03-I	SX-05	B-2	1.32	1.05	0.920		隅丸方形	皿状	SX-03に切られる 2段構造で隅丸方形の上面に、中央部が楕円形に1段落ちる 炭化物はSX-03・04ほどまとまっていない 遺物はいずれも小破片
125	RHH	03-II	SX-06	F・G-7 F~H-8・9 G-10	14.10	7.34	0.274		不定	皿状	北側の交差部付近の底面から土器片が大量出土 その真下にST-19検出 底面に貫入・密着しているものは別遺構(ST-19?)で、埋土中に出土したものが本来SX-06に属していた遺物ではないか
128	RHH	03-II	SX-07	C-5、D-5・6 E-5~7 F-6~8 G-8・9	26.88	6.00	0.400		湾曲	凹状	木杭74本 SX-06に切られる
134	THJ	04-I	SX-01	D-9	(A-A)0.19	(B-B)0.25	2.000	埋納土坑	不定	U字状	1つ1つの石は大きく重さもある為、流れ込んだとは考えにくい No.1とNo.4のような接合する石が1つの場所から出土しているのこの場に埋めたものと思われる No.2の土器片をNo.1・3の石で挟み込むような形になっているので、人為的にこのように置いた可能性も考えられる
	THJ	04-I	SX-02	E-8	(C-C)0.19		1.800	埋納土坑	不定	U字状	No.1・2・3は流れ込み No.4・5・6・7は明らかにNo.5・6・7を並べ、その上にNo.4を置いたようで、人為的にこのように置いたと考えられる 土坑の底部にマンガン層が広がっているが、全体的に広がっているのこの遺構との関連は考えられない
	THJ	04-I	SX-03	D・E-9	(A-A)0.29		2.500	埋納土坑	不定	U字状	No.1の台石破片は、大きく重さもかなりあるので、流れ込んだとは考え難く、人為的にこの場に置いたものと考えられる 土坑の側面や底部に鉄分・マンガンの沈着が見られる
202	RHH	04-I	SX-01	D・E・F-3	6.14	3.20	0.135	畦畔	やや直線	皿状	
203	RHH	04-I	SX-02	B・C-8	4.78	0.74	0.187	畦畔	直線	皿状	
202	RHH	04-I	SX-03(北側)	D・E-6、E-4・5 F-1~4	25.56	1.20	0.141	畦畔	不明	不明	
	RHH	04-I	SX-03(南側)	B-10 C-9・10	9.40	1.80	0.136	畦畔	不明	不明	
203	RHH	04-I	SX-04	B・C-9 C-8	3.70	0.46	0.139	畦畔	不明	不明	取水口検出
	RHH	04-I	SX-05	B・C-8	4.70	1.00	0.094	畦畔	直線	皿状	

SXデータ

挿図	調査区	遺構	グリッド	法量 m(推定)			種類	平面形態	断面形状	備考	
				長軸	短軸	深さ					
206	RHH	04-I	SX-06	E-3			杭列			杭3本 ほぼ等間隔で1列に並んでいる	
	RHH	04-I	SX-07	A・B-10	5.62	0.70	0.065	畦畔	直線	皿状	
	RHH	04-I	SX-08	B-8、C-8	7.72	0.80	0.137	畦畔	直線	皿状	
131	RHH	04-I	SX-09	F-1・2	0.70	0.40	0.050	杭列			
206	RHH	04-I	SX-11	A-10	0.70	0.40	0.050	畦畔	直線	皿状	
208	RHH	04-II	SX-01(溝1)	G・H-I-7	10.86	0.86	0.121	溝	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(溝2)	G~I-8、 H-7	12.06	1.26	0.120	溝	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(溝3)	H-7・8	5.22	0.50	0.095	溝	不明	不定	
	RHH	04-II	SX-01(畦畔)	G~I-7	10.20	0.74	0.080	畦畔	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(畦畔)	G~I-8	12.32	3.26	0.096	畦畔	直線	皿状	
137	RHH	04-II	SX-01(溝4)	G~I-7	11.02	0.56	0.269	溝	直線	U字状	溝7~溝9より新しい
	RHH	04-II	SX-01(溝5)	G-7・8、E7	11.16	0.72	0.172	溝	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(溝6)	G・H-8、E7	11.44	0.46	0.122	溝	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(溝7)	G~I-7	8.48	0.52	1.268	溝	直線	皿状	溝4~溝6より古い
	RHH	04-II	SX-01(溝8)	G-8 G~I-7	10.88	0.54	0.242	溝	直線	不明	
	RHH	04-II	SX-01(溝9)	G・H-8 H-I-7	11.38	0.84	0.203	溝	直線	皿状	
	RHH	04-II	SX-01(溝10)	G~I-7	10.44	0.86	0.489	溝	直線	不明	溝7~溝9より古い
	RHH	04-II	SX-01(溝12)	G-8 G~I-7	1.94	0.60	0.220	溝	直線	皿状	
	138	RHH	04-II	SX-02	G~I-7・8				杭列		杭1・3・4・6・7・11はSX-01に伴う可能性
139	RHH	04-II	SX-03	C・D-3	2.70	0.54	0.186		不定	皿状	SX-03完備後、真下でST-08検出 SX-03がST-08に続く可能性
144	RHH	04-II	SX-04	C・D-2	1.89	1.45	0.457	焼土坑	不明	皿状	
145	RHH	04-II	SX-04	C-2				井戸状	円形	V字状	祭祀用に用いられたであろう甕出土 廃棄儀礼
208	RHH	05-I-1	SX-01	C~E-6・7	11.80	1.36	0.140	擬似畦畔	直線	皿状	中世水田面(56層) 元々の畦畔の高さは3層あたりまでと思われる 盛土が畦畔に似た状態で出ている事から擬似畦畔か 畦畔は東西方向に延びており、現代の区画に沿うように 現れている
151	RHH	05-I-1	SX-02	A~D-2・3・4				擬似畦畔	不定	不明	不整形ではあるが畦畔の最底部と考えられるラインを検出 7層と8層の層界に古墳前期頃の土器が出土するので、 それ以降の小区画畦畔だと思われる
55	RHH	05-I-1	SX-03	D-10、E・F-8 D~F-9	13.36			大畦畔	直線		敷粗築技法による大畦畔 1係RHH06-II区(県268集) に続く SX-03を境に南北で南が水田、北が沼地(湿地) に分かれる。
57	RHH	05-I-1	小畦畔	D-E-8	7.86	0.75	0.060	畦畔	直線	逆皿状	SX-03に伴う
154	RHH	05-I-2	8層小畦畔	C-6	1.43	1.14	0.075	畦畔	V字状	丸	残存状況は不良 L字状若しくは十字状、突状を呈すると思われ、本来は 東西方向に小畦畔が走っていたと考えられる
62	RHH	05-I-2	SX-01	B~E-E7	17.00	5.75			不定	皿状	弥生終末土器片多量出土
	RHH	05-I-2	SX-02	C・D-4	5.75	2.00		擬似畦畔	不定	皿状	本来はマウンドを有していた SX-02はSX-01の流水により決壊
179	RHH	05-II-1	SX-01	E-9、F-9	8.64	0.96	0.110	畦畔	直線	皿状	
	RHH	05-II-1	SX-02	E・F-8	3.62	0.42	0.100	畦畔	直線	皿状	
	RHH	05-II-1	SX-03	C-5・6、D-5	7.02	0.82	0.030	畦畔	直線	皿状	暗渠とSK-01に切られる
	RHH	05-II-1	SX-04	B・C-3	6.40	0.66	0.100	畦畔	直線	皿状	出土遺物は中世~古代末だが、中世が主体
214	RHH	05-II-2	SX-01	D-7・8、E-8	7.60	(A-B)0.40	0.177		直線	皿状	
	RHH	05-II-2	SX-02	C・D-5、D-4	18.50	(G-H)0.30	0.202		直線	皿状	
	RHH	05-II-2	SX-03	B・C-6 C・D-7	12.20	(C-D)0.20	0.147		直線	皿状	運動SX-01 ~ SX-04は連動して1つの区画をなす可能性あり N-25°-W (SX-03で計測)
	RHH	05-II-2	SX-04	A・B-3	2.30	(K-L)0.30	0.096		直線	皿状	
155	RHH	05-II-2	SX-05	B-3・4、C-3	8.80	1.10	0.323		直線	丸	西側にいくに従って次第に低くなっていき、地山と同化し ていくように畦畔が消えていく
225	RHH	06-I	SX-02	D・E-9、F・G-8	11.25	0.78	0.206		直線	不明	SD-02~04の下より検出 1条の畦畔
227	RHH	06-I	SX-03	C-2・3、D-3・4	10.34	0.66	0.190		直線	丸	南北に走る小畦畔
160	RHH	06-I	SX-04	B・C-3、C・D-2	10.00	1.50	0.050		直線	逆皿状	
	RHH	06-I	SX-05	B~D-4 B・C-5	11.00	1.10	0.050		直線	逆皿状	東西に走る小畦畔 区画を呈していると考えられる 擬似畦畔の可能性
	RHH	06-I	SX-06	C~E-5	10.70	1.30	0.050		直線	逆皿状	
228	RHH	06-I	SX-08	F-11 G-11・12・13	10.16	1.18	0.163		直線	逆皿状	SX-11~14と交わり、水田区画を呈する
	RHH	06-I	SX-09	E・F-9、F・G-8	5.50	0.25	0.120		直線	皿状	
226	RHH	06-I	SX-10	G-13・14 H・G-13	5.00	1.01	0.211		不明	不明	SX-11の直上にわずかに残存 6b-2層に伴う小区画

SXデータ

棟号	調査区		遺構	グリッド	法量 m(推定)			種類	平面形態	断面形状	備考
					長軸	短軸	深さ				
224	RHH	06-I	SX-11	G-14、H・G-13		1.00	0.211		直線	皿状	SX-10直下より検出 SX-08・11・13・14と水田区画を呈する 一部でSX-11の排水路と考えられる溝も検出 排水機能を備えた畦畔
230	RHH	06-I	SX-12	D~F-8・9	10.84	1.12	0.210		直線	皿状	SD-07に伴う畦畔か 2条の畦畔
224	RHH	06-I	SX-13	F-10	3.18	1.24	0.114		直線	皿状	SX-08・11・14と交わり水田区画を呈する
	RHH	06-I	SX-14	G-11	4.26	0.86	0.062		直線	丸	SX-08・11・13と交わり水田区画を呈する
226	RHH	06-I	SX-15	H・I-16・17	3.10	0.30	0.050		不明	不明	SD-09に切られる SX-15とSD-09は時期的に大差はない
161	RHH	06-I	SX-16	D・E-9	4.16	1.24	0.114		直線	逆皿状	SD-05直下より検出
	RHH	06-I	SX-17	F-10	3.46	0.90	0.152		直線	逆皿状	SX-18・19・20と交わり水田区画を呈するSX-13直下より検出
	RHH	06-I	SX-18	G・H-11~13	13.78	1.44	0.154		直線	逆皿状	SX-17・19・20と交わり水田区画を呈するSX-08直下より検出
	RHH	06-I	SX-19	H・G-13・14	8.85	0.75	0.080		直線	逆皿状	SX-17・18・20と交わり水田区画を呈するSX-11直下より検出 排水機能をもった畦畔
	RHH	06-I	SX-20	H・G-12	0.50	1.58	0.095		直線	逆皿状	SX-17・18・19と交わり水田区画を呈する
66	RHH	06-I	SX-21	E・F-8・9	5.50	1.36	0.311		直線	逆皿状	SX-22と2条の畦畔をなす SD-11は排水路
	RHH	06-I	SX-22	F-8・9	2.66	1.06	0.238		直線	逆皿状	SX-21と2条の畦畔をなす SD-11は排水路
163	RHH	06-I	SX-23	D・E-9	9.70	1.80	0.320				杭刺と土止め用に用いた竈を検出
231	RHH	06-I	SX-24						不明	不明	断面のみ SD-19の直上にありSD-09に切られる 南壁を見る限り畦畔状を呈している
68	THJ	06-II	SX-01	F-4	0.56	0.18	0.020		不明	U字状	
232	THJ	06-III	SX-04	G-4	2.40	0.52	0.700		不明	円形	SX-04・05 は畦畔と溝というセット関係にあると判断される
236	THJ	06-III	SX-30	H-5	1.82	1.14	0.210		隅丸長方形	皿状	周辺の土器の散布状況から、本来は複数の墓が存在し、墓地を形成していたと考えられる 周囲は墓域であったとみてよい 13C以降 水田が大々的に展開していく前段階を示すものといえよう
71	THJ	06-III	SX-36	D-3・4					不明	不明	SX-36・38 の周辺からは、弥生土器・土師器がまとまって出土 炭化物の広がりから本来は住居地であったと見られる
	THJ	06-III	SX-38	D・E-3	3.74	2.18	0.090		円形?		プランは不明
170	THJ	06-III	SX-39	F-4					不明	皿状	当初、住居地と考えていたが根拠が見つからず不明遺構と判断 つまり炉・柱穴ではない
70	THJ	06-III	SX-40	J-5	0.28	0.22	0.104		不明	不明	プランは不明であるが、炭化物の集積から住居地であったと見られる
238	THJ	07-I	SX-01	C・D-2・3	5.00	4.70	0.190		楕円	皿状	当初、住居地と考えられていたが不明遺構と判断 SX-04・05と同時期であり伴う 恐らく自然の落ち込み
277	THJ	07-I	SX-02	B-3・4	8.50	0.60	0.350		直線	皿状	SX-02・03は同一遺構の可能性高い
276	THJ	07-I	SX-06	B・C-2~5	14.16	0.56	0.250		直線	逆皿状	SD-03・04に伴う畦畔
170	THJ	07-II	SX-39	F-4・5	2.10	0.70	0.120		不明	皿状	
	THJ	07-II	SX-42	J-5	0.85	0.47	0.240		不定	不定	
283	THJ	07-II	SX-43	E・F-3・4	5.80	1.54	0.584			U字状	木種の樹種はクスノキで、全長 約3.27m、幅 0.73m 北側の側面に加工痕が認められ、約40cm程度の高低差がある 水路の排水部分の土手を保護し、浸食を防ぐ目的で用いられたものであり、水田に伴って掘られた水路に設置された人為的なものと推定される
234	THJ	07-II	SX-44	R-9	2.38	0.66	0.540		不明	不定	
	THJ	07-II	SX-45	R-9	0.92	0.70	0.220		楕円	不定	
	THJ	07-II	SX-46	S・R-9	1.54	0.64	1.390		隅丸長方形	U字状	
	THJ	07-II	SX-47	R-9・10	0.96	0.72	0.350		隅丸長方形	皿状	
	THJ	07-II	SX-48	R-10	0.96	0.70	0.450		隅丸長方形	不定	
	THJ	07-II	SX-49	S-10	(A-A)0.92	(B-B)0.88	0.440		方形	U字状	
	THJ	07-II	SX-50	S-10	(A-A)0.92	0.70	0.240		楕円	皿状	
	THJ	07-II	SX-51	S-10	0.62	0.48	0.360		不明	U字状	
	THJ	07-II	SX-52	S-9・10	1.20	0.64	0.470		不明	V字状	
THJ	07-II	SX-53	S・R-9・10	1.12	1.04	0.530		楕円	U字状		
279	THJ	07-V	SX-01	D-3・4	3.16	2.32	0.940	粘土探掘坑	不明	不定	当初、土器を作る際に使用する土を採取したものと考えていたが、地山の土が土器を精製するには適していない為、古墳等を作る際に採掘に使用される目地として土を採取したのではないかと推定される
	THJ	07-V	SX-02	D-4	1.76	0.98	0.590	粘土探掘坑	不明	U字状	
	THJ	07-V	SX-03	C・D-4・5	4.29	2.40	0.510	粘土探掘坑	不定	凹状	
	THJ	07-V	SX-04	D-4・5	2.42	1.40	0.860	粘土探掘坑	不明	凹状	
	THJ	07-V	SX-05	D-4・5	4.26	2.90	0.340	粘土探掘坑	円形	皿状	
	THJ	07-V	SX-06	C・D-5・6	7.48	4.66	0.930	粘土探掘坑	円形	凹状	
	THJ	07-V	SX-07	B~D-2・3	7.14	2.50	0.900	粘土探掘坑	不定	皿状	
THJ	07-V	SX-08	C・D-4	3.80	2.30	0.540	粘土探掘坑	不定	凹状		
272	THJ	08-I	SX-01	D・E-8・9	3.68	2.80	0.250		不定	皿状	土砂堆積の埋土、人為的な覆削を確認できなかったため不明遺構

第15表 玉名の平城跡 遺物観察表

線番	出土地点		種別	器種	法量(cm)			調整		色調		胎土	備考
	遺構	層位			口径	底径	器高	重量(g)	外面	内面	外面		
407	S16 S20	1・2層	須恵器	杯	14.5	7.2	2.8		ナテ・横ナテ	5Y7/1 灰白	石英・角閃石・白色粒		
408	S16	3層	須恵器	杯	14.0	9.0	4.3	ヘラ切り難し後ナテ・横ナテ 回転ナテ・貼付け高台	ナテ	2.5Y6/1 黄灰	長石・角閃石		
409	S16 S20	2層	須恵器	高台付鉢	(8.0)		4.8~	ナテ・横ナテ・貼付け高台	横ナテ	2.5Y6/1 黄灰	長石・石英・角閃石		
410	S19		手づかね	鉢	4.2		2.8	ナテ・指頭圧痕		7.5YR6/4 にぶい黄橙	雲母・石英・長石		
411	S19	1	土師器	甕	(14.7)		10.8~	縦方向のハケ目・横方向のハケ目	横方向のハケ目	7.5YR7/6 橙 10YR2/1 黒	長石・石英・角閃石・白雲母・黒色粒		
412	S16 S19	2層 18・21・23・24・25・28	弥生土器	壺	18.3		16.2~	縦方向のハケ目後横斜目方向のハケ目ハケ目ハケ目後ナテ・横ナテ	多方向のハケ目ナテ	10YR6/4 にぶい黄橙	長石・石英・角閃石・輝石・金雲母		
413	S16	2層	石帯具	巡方	3.45 (長軸)	3.1 (短軸)	0.6 (厚み)					石材:ホルンフェルス 裏面四隅に穿孔あり	
414	S19		弥生土器	甕			7.0~	縦方向のハケ目後ナテ・ナテ	ハケ目後ナテ	10YR5/3 にぶい黄橙	石英・雲母・角閃石	内外面に主に器面摩耗	
415	S8		縄文土器	鉢			3.4~		ナテ	10YR4/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石	口縁穿孔あり 器面摩耗 縄文中期々	
416	S1		弥生土器	鉢	(19.3)		6.5~	ナテ・横方向の削り	横方向の工具による削り	10YR5/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石・輝石	裾/縄式 器面摩耗	
417	SA-02 P1		土師器	小皿		7.0	1.0~	回転糸切り・ナテ	ナテ・打ち欠き	10YR7/4 にぶい黄橙	長石・輝石・金雲母	全体の歪みあり 器面摩耗 粘土溜まり磨あり	
418	S20	1	須恵器	蓋			2.0~	ヘラ切り難し後ナテ・削り・ナテ	ナテ・回転ナテ	2.5Y6/1 黄灰	黒色粒		
419	S20	4	土師器	高台付杯	(12.0)	7.1	5.8	ナテ	ナテ	7.5YR7/6 橙	角閃石・金雲母・赤褐色粒・石英	歪みが激しい 器面摩耗著しい	
420	構乱 D-8		瓦質土器	槽鉢			5.0~	ナテ	ナテ・槽目	7.5Y7/1 灰白	長石・金雲母		
421	S20	9	土師器	高台付杯	(1.0)	6.4	4.4	回転ナテ・貼付け高台・回転ヘラ削り		7.5YR7/4 にぶい黄橙 2.5YR6/2 灰黄	長石・輝石・金雲母	打ち欠きあり	
422	表土ハギ		須恵器	壺			5.4~	ナテ	格子目印き	7.5YR7/6 橙	石英・茶褐色粒	焼成不良 内外面に共に磨耗が激しい	
423	表土ハギ		瓦質土器	火鉢			4.8	ナテ	横ナテ・連点文	2.5Y5/2 暗灰黄	雲母・角閃石・褐色粒	器面剥離 焼成やや不良	
424	S18	1層	磁器	ぐい飲み	(7.1)	(3.2)	4.7	染付後施釉・釉ハギ取り	回転ヘラ削り	(呉須)C-236 緑の羽色		伊万里 高台に砂目あり	
425	S2		磁器	水注			2.6~	染付後施釉	染付後施釉・一部雲文	(呉須)C-260 薄いコバルト・ブルー		景徳鎮	
426	S21		須恵器	壺			7.2~	回転ナテ・甕型条痕	沈線・回転ナテ	10Y6/1 灰・N2/黒	長石・金雲母		
427	S11		青磁	碗		6.4		施釉・墨付袖ハギ	施釉	C-216 すずかけの樹の色		高台の一部と体部を打ち欠き 墨付袖ハギ 高台部のみ残存 瓦玉	
428	表土ハギ		陶器	天目茶碗			2.3~	施釉・釉ハギ・削出し高台	施釉	C-110 コビー色	黒雲母	縁部全体打ち欠き	
429	S9		青銅製品		1.3 (長軸)	0.7 (短軸)	3.4						使用用途不明
430	S9		青銅製品		1.2 (長軸)	0.7 (短軸)	1.5						使用用途不明
431	S19		青銅製品		4.4 (長軸部)	1.3 (短軸部)	0.4 (厚み)						釘状の製品であるが、軸部に刻みがあり、また左輪状は磨耗が見られるカラクハ細工等の部品が使用用途不明

第 16 表 玉名の平城跡 遺構データ表

棟図	遺構	グリッド	規格		方位	検出しレベル m	身舎面積	庇面積 ㎡(推定)	面積	梁		桁	庇
			梁×桁	梁×桁						m[平均値]	P=ピット番号		
288	SB-01	E-9	2×2	N-2.5° - W	18.400				13.44	P3-P5	1.35×2.0 [1.675]	P1-P3 2.25×2.1 [2.176]	
	SB-02	E-7	1×1	N-1° - E	18.700				7.84	P1-P2	2.7	P2-P3 2.8	
	SB-03	E-9	1×3	N-4° - E	18.300	13.72	3.9		19.32	P5-P6	2.7	P1-P2-P4-P5 2.0×2.5×2.5 [2.33]	P2-P3 2.0

Sデータ

棟図	遺構	グリッド	法量 m(推定)		面積		平面形態	断面形状	備考
			長軸	短軸	長さ	深さ			
289	S19	D-10	2.96~	2.24~	0.3				S16とS19は同一遺構

SAデータ

棟図	遺構	グリッド	全長 m	柱間隔		備考
				m[平均値]	P=ピット番号	
286	SA-01	D-3	3.7	P1-P3 1.5+1.4 [1.45]		
286	SA-02	D-3-4	13.85	P1-P9 1.8+2.25+1.6+1.85+1.25+1.3+1.6+1.7 [1.67]		
286	SA-03	D-3-4	8.2	P1-P4 2.3+2.2+2.8 [2.43]		
286	SA-04	D-4	4.95	P1-P3 2.15+2.0 [2.075]		
288	SA-05	E-9	2.55	P1-P2 2.15		
288	SA-06	C-9-10	5.6	P1-P3 2.3+2.15 [2.225]		
286	SA-07	D-4	8.3	P1-P4 2.25+2.7+2.7 [2.55]		

第 17 表 花粉分析・プラントオパール分析における草木参考

		食用・薬用	その他	備考
木	マキ属			
	モミ属		モミは屋敷内に植えると、揉め事が絶えない	マツ科 モミ
	ツガ属		建築用材に利用される	マツ科 ツガ
	マツ属単維管束亜属			
	マツ属複維管束亜属			
	マツ属(不明)			
	コウヤマキ属		正月に仏様にあげる	コウヤマキ科 コウヤマキ属
	スギ属		サツマイノモリの生える所には杉を植えるジュウモンジシダ、ヤマジオウの生える所はスギの適地である 杉谷峰松とは、杉は谷沿いに、松は峰通りに植えると良いという意味である	スギ科 スギ属
	ヤナギ属	ヤマヤナギに餅を切って刺す(花餅)と言い1月14日につくる 普通12個 13月の年は13個あげる	皮をはいで草履を作る この草履は岩場にも強い	「13月の月」とは旧暦で13カ月の月のこと
	ヤマモモ属	ヤマモモは果実酒にして飲むとうまい	ヤマモモのなる年は、病気が流行する ヤマモモの木には山太郎(山の精)が登っているから声をかけて登らにや悪さされる	ヤマモモ科 ヤマモモ属
	サワグルミ属		軽いので下駄、提灯材、爪楊枝を作る サワグルミで「からい」を作る からいとは荷をからう時の道具	クルミ科 サワグルミ属
	クルミ属			クルミ科 クルミ属
	クマシデ属-アサダ属			カバノキ科 クマシデ属 カバノキ科 アサダ属
	カバノキ属			カバノキ科 カバノキ属
	ハンノキ属			カバノキ科 ハンノキ属
ブナ属			ブナ科 ブナ属	
本	コナラ属コナラ亜属		シイタケ栽培の精木に使う ナラの若芽を切って茎を抜く、すぐった葉を田んぼに入れ肥料にした	ブナ科 コナラ属コナラ亜属
	コナラ属アカガシ亜属		阿蘇神社の火振り神事にはアカガシを使う	ブナ科 コナラ属アカガシ亜属
花	クリ属	旧暦九の日に必ず、クリ飯を炊いて仏様に供える クリ飯には小豆も入れる 団子の中にクリを入れ、クリ団子を作るところもある ウルシかぶれをした時、生グリを煎服する 10月、庭隅に1メートル四方の円形にクリをばら蒔き、その上に土を乗せ、土の上にクリを一面に乗せ、また土を盛る こうしてクリの塚を作り保存し春過ぎまで食べる	クリの出来が悪い年は豊作 クリの夢を見ればお産をする クリの葉が入らない内にとると台風が来る クリの葉の色を見て麦蒔きの時期を知る クリの木を削って菓着にして正月に使う カンゼ(便所)に使った竹べらは風呂焚きにしてその火でクリを焼いて食べた	ブナ科 クリ亜科 クリ属
	シナノキ属		皮を剥いで水中で腐らせて繊維を取る 繊維で牛馬の縄、強力な綱等を作った	アオイ科 シナノキ属
粉	ニレ属-ケヤキ属		建築用床柱、床の間床板、建具等に伐採される 大木の中身をぬいてセイロを作る、又穀物を入れる「カボケ」を作る	ニレ科 ニレ属 ニレ科 ケヤキ属
	エノキ属-ムクノキ属	ムクの実を食べる ムクノキの実を子供たちは食べる モマ(ムササビ)も食べる	正月15日には、はな餅を小枝に刺して、便所、座敷、米俵、所によっては水神様にあげる 初雷が鳴った時、はな餅の枝(エノキ)で茶を沸かして飲めば中風にならないと言われる	ニレ科 エノキ属 ニレ科 ムクノキ属
	シキミ属	果実にハナミノン、イノシン、アニサチン、脂肪油などを含み、これらは発作性のけいれんを起こすと同時に血液凝固促進作用がある	御釈迦さんがこの木を上げなきやいかんと云うた 必ず切り口を合わせてあげる お墓や仏様にあげる 昔、シキミ根の下にモグラが三年隠れていたの で、この木は太らないようになった	シキミ科 シキミ属
	カラスザンショウ属		木炭燻の名札に使った 下駄を作る 木炭材は駄目である	ミカン科 カラスザンショウ属
	キハダ属	腹が悪い時、木皮を馬の下剤薬に使う 木皮を煎服すれば胃痛に良い	キハダの皮を剥いで出荷した	ミカン科 キハダ属
	アカメガシワ属	アカメガシワは薬用として利用される外、団子の包み紙として利用されてきた 盆だごを作る 仏様にあげるときだけこの木の葉で包む 盆にカシワの葉で餅を包んで精霊さんが荷のうて帰るように、アサガラ箸を添えて上げる 皮を剥いで鍋で煮詰めて膏薬にして痛い所にはる	キクラゲの原木に使う タバコの少ない終戦当時タバコの代わりに吸った葉を尻拭きに使った	トウダイグサ科 アカメガシワ属

		食用・薬用	その他	備考
木	ウルシ属	漢方では乾漆を、通経、駆虫、鎮咳薬などに使用する	ウルシ液中に樹脂性毒物のウルシオールを含み、アレルギー性皮膚炎を起こす 触れると水泡ができ、過敏な人は樹の側を通っただけでも症状をあらわすことがある	ウルシ科 ウルシ属
	モチノキ属		皮を剥いでどぶに漬ける 冬になると引き上げて石、木で叩くとヤニを引くようになる 水洗いしてカスを除くとヤンモチ(鳥餅)ができる ヤンモチでメジロ外鳥類を捕った	モチノキ科 モチノキ属
	ブドウ属			ブドウ科 ブドウ属
	ノブドウ属	目を患うと、ノブドウの茎から汁を取って目を洗う 根元の茎を切って眼の中に粘り樹液を吹き込むと眼病が治る ノブドウの実を食べると死ぬ	赤痢が流行ると隔離して、家の周りにウシブドウを張り巡らして謹慎した ノブドウは六月一日に悪病を払うために家の入口、玄関に飾る ノブドウの実を竹鉄砲の実にして鳴らす	ブドウ科 ノブドウ属
	ウコギ科	新芽を摘んで食べる 強壮剤になる	薪にすると鍋が割れるようなバチバチ音がする	ウコギ科
	ミズキ属	鳥が好んで食べる	ミズシは良い木ではないが箸を作る 傘釘に使う ミズシの花時にアワやダイズを蒔き、焼き畑用の木を切り始める	ミズキ科 ミズキ属 ミズキ
	ツツジ科		牧場のあるところに群生している 有毒などで牛などは食べない	ミツバツツジ類 ツツジ科
	カキ属	痔や脱腸、虫刺され、かゆみには、洗柿の実を絞って水で薄めて患部に塗る 高血圧にはカキの若葉を日干しにして煎じて飲むと良い		カキ科 カキ属
	ハイノキ属		ハイノキ(イノコシバ)雪の日に、イノコシバを積み上げると、イノシシの子がシバの中にもぐって寝る シバから湯気が上がる所を鉄砲で撃つ 山で木を倒す時等仕事で休む時はハイノキの束に腰を下ろす	ハイノキ科 ハイノキ属
	イボタノキ属	いぼ、おでき、魚の目には、イボの根に糸を巻き、イボタ蠟を溶かしてかける		モクセイ科 イボタノキ属
トネリコ属		昭和40年代にパット材木として出荷した	モクセイ科 トネリコ属	
花	スイカズラ属	葉を乾燥させてお茶として飲む(忍冬茶) 痔や脱肛には、地下茎を煎茶で座浴し患部を洗う 打撲、捻挫には、乾燥させて煎じた汁を患部に塗る 花を日干しにして煎じて飲むと解毒効果がある	スズメが、夜になるとスイカズラの中で眠ることから、スズメカズラと言われる	スイカズラ科 センダン属
	センダン属	ヒヨドリは熟したセンダンの実を好んで食べる	牛が実を食うと毒になるから牛の運動場には植えない センダンは死者の呻き声を聞いて太るというので庭木には嫌われる 女の子が生まれたら、嫁入りたんすを作る為にセンダンを植える	センダン科 センダン属
	イチノ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		アスナロ、サワラの無い地方ではヒノキを墓にあげる	
	ヤドリギ属		ヤドリギはランプにすがすが付くことをホヤが付いたという ヤドリギは「いらぬものが付いた」という意味である ヤドリギの小さい実を潰すとヤンモチが入っている これをトリモチに混ぜるとよく粘る	ヤドリギ科 ヤドリギ属
	グミ属	山で茶を湧す時グミの葉を火に当てていれる グミの根は扁桃腺炎に良い 熱したものは甘い、多少洗みが残る	グミを屋敷内に植えると親方のたける声を聞いて太る	グミ科 グミ属
	ガマズミ属	鉄鍋のアクを抜く時に、この葉を入れる 実が霜にあうとうまい 実を子供たちは食べる	この木は柔らかく、粘り気があり薪をくくっても腐らない	スイカズラ科 ガマズミ属
	トウヒ属			マツ科 トウヒ属
	イスノキ属	中風の薬になる	木は割れ難いので「もみたたき」に使う 小枝を炭だつの下に(巻きしば)入れる 古木にはサルノコシカケがたつ イスノキは柄物にいい 風に強いのでミカン畑の周りに植えて防風する	マンサク科 イスノキ属
	コクサギ属	怪我をした時、これを揉んで付けると、ばい菌が入らずに治る ブヨ避けに良いので、腰に付けておくとよい 蚊は逃げない	魚をすくうサデ(網)の丸い枠を作る 軽くて良く曲がる	ミカン科 コクサギ属
	カエデ属			カエデ科 カエデ属

		食用・薬用	その他	備考
木	トチノキ属	トチ餅にして食べられる	果実は卵を逆さにしたような形で4センチほど熟すと三つに割れ、中からクリのように丸い、赤褐色で光沢のある実がでる	トチノキ科 トチノキ属
	エゴノキ属		果実には有毒成分がある 実をたたいて川に入れると魚が麻痺し、しばらくすると蘇生する サスという荷を担ぐ時の天秤棒を作る 実を水につけて揉むと泡が出るからセッケンという この木でコマを作った シシ屋のはじきに使う シャボン玉遊びにも使う 材は良質で、床柱、将棋の駒、コケシなどに使われている 石鹸の代用として洗濯に使ったりした	エゴノキ科 エゴノキ属
	ニワトコ属	便秘にはニワトコの新葉を少し食べると良い 普通の人は食べると下痢をする ニワトコの茎葉を煮詰めて紙につけ腫れ物に貼ると良くなる	田植えが終わると、枝を陰干しした物を風呂釜に入れて沸かし、使い終わった塩カマスを風呂につけてあげる この風呂に浸かって体の痛みや疲労を癒した小枝で小鳥籠の止まり木を作ると小鳥が良く鳴る	スイカズラ科 ニワトコ属
	ノグルミ属			クルミ科 ノグルミ属
	フウ属			マンサク科 フウ属
本	ジャケツイバラ属	茎の中にあるテッポウムシはおがくずの所にお湯を入れると頭を出す 頭を握って引き出し、焼いて食う。焼酎の肴によい 茎にいる虫はカンの薬になる	ジャケツイバラは茎の上向き、下向きに刺があるから武者も飛ぶ鳥もこれにかかると逃げれないという	マメ科 ジャケツイバラ亜科 ジャケツイバラ属
	ツタ属	山で水がないときはこのカズラの水を飲んだツタカズラの根は煎服すれば神経痛に良い	ツタカズラは牛の鼻ぐりに良い 樹液が甘い	ブドウ科 ツタ属
	モモ	桃の枝を切って歯に差すと痛みが取れる 桃の葉を煎じた汁を湯に入れると汗疹の薬になる 桃の虫は腹薬 桃の汁を、はやり目に落とすと治る	「陰裏のモモの木も時が来れば花咲く」とは人並みよりも遅れた者も時機到来すれば心身共に発達するものであるということ モモの蒔き時はスイカの蒔き時	バラ科 モモ属 モモ
	クスノキ			クスノキ科 ニッケイ属 クスノキ
	ハクウンボク		花は白 長い花穂から多くの花が房状につり下がって咲く	エゴノキ科 エゴノキ属 ハクウンボク
花	スモモ		スモモが二度咲けば秋になって大霧が降る	バラ科 サクラ属 スモモ
	チャンチンモドキ		下駄を作る 炭焼きは駄目 水分に強いから便所のわたりにはよい	ウルシ科 チャンチンモドキ属 チャンチンモドキ
	オニグルミ		シログルミは実がなって食べる方に使われ、アカグルミはサワグルミのことを言っている	クルミ科 クルミ属 オニグルミ
	ムクロジ	実をヒヨドリが食べる	実を石鹸の代わりにして手洗いをした ムクロジは岩山に多い 小鳥や鴉を殺して料理するときにはムクリウの実を探ってきて殺した 鳥の羽をムクロジの実に刺し、羽子ばねを作った	ムクロジ ムクロジ科
	ツツラフジ		ツツラ籠を作る の籠は山師の必需品を入れて山仕事に行く	ツツラフジ科 ツツラフジ属
粉	キカラスウリーモミジカラス	根を掘ってゆがいてたべるとおいしい 根に灰汁を入れて三日位炊く、そしてそのまま食べる(モミジカラスウリー)	根を集めて潰し、デンプンを取る イノシシが好んで食べる(モミジカラスウリー)	ウリ科 キカラスウリー ウリ科 モミジカラスウリー
	ガマ属	雄花から取れる花粉は蒲黄と呼ばれ、漢方薬として用いられ止血や利尿に効果がある新芽や、根のでん粉は食用にもなる	茎や葉はパルプやむしろの材料に、穂わたは座布団の芯に、穂は生け花の材料にされる	ガマ科 ガマ属
	サジオモダカ属			オモダカ科 サジオモダカ属
	オモダカ属		池のへりや水田などに生える 秋ごろになると地中に茎が伸びて、その先に小さい芋ができ、翌春にこの芋から新芽が出る	オモダカ科 オモダカ属
	クロモ属			トチカガミ科 クロモ属
	イネ属		中田半夏豆田植えは6月20日、豆まきは七月二十日頃が良い 水稻は水田に作り野稲は畑に作る	イネ科 イネ属
	他のイネ科			

		食用・薬用	その他	備考
草 本 花 粉	カヤツリグサ科		この草でマスができると仲良しになる 出来ないと言嘩になる 蚊帳を作って遊ぶ	カヤツリグサ科 カヤツリグサ属 カヤツリグサ
	イボクサ属			ツユクサ科 イボクサ属
	ミズアオイ属		この植物は現在絶滅している	ミズアオイ科 ミズアオイ属 ミズアオイ
	クワ科	桑の木の盃で飲むと中風にかからない	桑の木を炊くと緑が濃い 雪で仕事ができない時、しよいに等を作る 葉を頭に載せると落雷しない 牛馬の鞍を作る クワ材で木魚を作る	クワ科 クワ
	ギンギン属	葉の間からのぞいている新芽をナイフで切り取り、茹でて食べる たむしができたら、ギンギンの根を濡り潰して貼る 健胃剤、豚の腹痛にも良い 根をすり潰して貼ると痛みが良く止まるとい しらくもができたら、これをすり潰してつけると治る	田畑の周辺などの湿った土地に、群生する	タデ科 ギンギン
	サナエタデ節ーウナギツカミ節		トゲがあることからオニと言われる	タデ科 イヌダテ属 タデ科 イヌダテ属 ウナギツカミ節
	ソバ属	ソバの花は蜜蜂の酒である	ソバ蒔く時に水汲みする人や水筒持った人に会 うな ソバは水を嫌う ソバ焼煙切りはミズシの花盛り切る 葉が枯れたら焼き、火の消えるのを待って植え る ダラの白花の時がソバの蒔き時 合歡木の花が咲いたらソバを植える	タデ科 ソバ属
	アカザ科	味噌、醤油で汚して食べる ゆがいて味噌和えて食べる 虫刺されには、生葉をよくもんで付けると効果がある	杖の棒にする アカザの杖をつくると中風に罹らない 道端から畑、荒地などに自生している	アカザ科 アカザ
	ナデシコ科		海岸から高山に至るまで多くの種類が分布して いる	ナデシコ科 ナデシコ属
	キンボウゲ属			
	キンボウゲ科		これらの仲間ほとんどが有毒植物である 植物の液汁は、皮膚につけると赤く腫れ、のち に水泡ができる 毒性があるため、牛馬が食べないように細心の 注意をして草刈った	キンボウゲ目 キンボウゲ科
	アブラナ科	自給自足時代には畑に作って実から油を絞った	昭和20年代には菜の花の栽培が急速に広まり、タバコの吸い殻を投げても地面に落ちないほどに茂った	フウチョウソウ目 アブラナ科
	マメ科			マメ科
	カタバミ属	ウサギの飼料に使う 草を口にくわえてしゃぶった 葉を揉んで、虫歯の痛む時に詰めておくと治る 陰干したものを煎じた汁は痔病等につけると よい しらくもに、カタバミを塩で揉んでつけると良い	色出しに使うと赤色が濃くなる サヤに触れると実がはじけるので子供の恰好の 遊びになる 葉の形から、家紋の「カタバミ紋」がつけられた	カタバミ科 カタバミ属
	ミソハギ属		昔から水神様の所に植えてあった 盆花にあげる ミソハギの花が咲いたら墓掃除が始まる ミソハギの花は二度しおれて三度咲く	ミソハギ科 ミソハギ属
	キカングサ属			ミソハギ科 キカングサ属
	ヒシ属		ヒシは危険だからこの実で遊んではいけない	ヒシ科 ヒシ属
	セリ科	若芽を山菜、食用にする 貧血にも効果がある 葉をすり潰して煮沸させたものを飲むと解熱効 果ある 春の七草の一つである	セリはホトトギスが鳴いてから食べると頭に良く ない	セリ科
	ネナシカズラ属			ヒルガオ科 ネナシカズラ属 ネナシカズラ
	キツネノマゴ属			キツネノマゴ科 キツネノマゴ属
オミナエシ属		秋の七草の一つで、お月見やお彼岸の墓前に 供えられる 昔は盆になると墓場はこの花で黄色一色になっ た	オミナエシ科 オミナエシ属	
ヨモギ属	ヨモギをハチに刺された時につけるとよい 飲用すれば血圧降下になる すり潰した時は葉をもんで付けると血が止まる ヨモギを湯がいて乾燥して飯が炊けた時に入れ て食べる	畑地や空き地、道端など、いたるところに生えて いて、都会地の町中にも見られる	キク科 キク亜科 ヨモギ属	
オナモミ属			キク科 キク亜科 オナモミ属	
キク亜科			キク目 キク科 キク亜科	

		食用	その他	備考
草	タンポポ科	タンポポは開花期に採集して、天日干し、煎じ服用すれば浄血剤となる タンポポの根は乾かして焼き、粉に潰してコーヒー代わりに飲んだ タンポポの根は開花前に採集して骨が痛む時煎じて飲む	タンポポはスズメノテッポウのように花茎を草笛にして吹く	キク科 タンポポ セイヨウタンポポ
	アカバナ属-ミズユキノシタ属			アカバナ科 アカバナ属 アカバナ科 ミズユキノシタ属
	スプタ属			トチカガミ科 スプタ属
	ミスオオハコ属			ミスオオハコ属 ミズオオハコ トチカガミ
	バラ科			バラ科
	シソ科	シソは梅干しの着色剤として使う 歯痛の葉を噛みしめると治る シソは発汗、鎮咳薬として使った 葉を陰干して粉末にして用いた 頭痛薬として 葉葉を煎服する アオジソ葉を焼酎につけて飲むと肝臓に効がある 刺身を食べた後はシソの葉を食べると食あたりしない	アカジソは葉が赤紫色をいい、アオジソ、シロジソは緑色をしたものをいう	シソ科 シソ
	オオハコ属	オオハコの全草を「ねぶいち」の吸出しにする煎服にすれば咳止めに良い	穂で目を突張って目に入ったゴミを捕る	オオハコ科 オオハコ
	カラマツノウ属	新芽がおいしく、山菜として利用される 若芽や生長した茎の先端、つぼみを手で折れるところから摘み取り、軽く茹でておひたしやあえ物にする つぼみは薄い衣で天ぷらにしてもよい	本州中部から北の高山の、やや湿った草原に生えている 全体的に粉白色をしていて、茎はよく枝を出して直立し、高さ80センチほどになる 7~9月頃になると、先端に花弁がなくなり、長い雄しべが目立つ白い花を付ける	マツ科 カラマツ
	ヒョウタン類			ウリ科 ヒョウタン属
	タデ属	虫刺されやかゆみには、生の葉を少量の塩で揉み、患部に塗る	ヤナギタデをカシの棒で叩き水溜りにいれて魚を捕った ヤナギタデを桶にいれてシブガキをいれ、お湯をそそぎ、しぶぬき(アオシガキ)を作る	タデ属
	ジュズダマ属	根の膨らんだ所を滋養強壮剤に使われる	牛が喜んで食べる お手玉に入れる	イネ目 イネ科 ジュズダマ属
	タケ亜属ネザサ節		ササの実をジネの実という ササの実がなるとネズミが増え凶作になる	イネ科 タケ亜属ネザサ節
	ヨシ属	ヨシガラを切って湯き水でモヤシ漬けをした	ヨシグサが茂るときは洪水(大みず)がでる ヨシの葉を取り外して三角麻を作り、ミズナラ葉に包み下げる 雷の鳴るときはヨシを放いてすぼすと落ちない	イネ科 ヨシ属
	ウシクサ族コブナグサ属			ウシクサ族 コブナグサ属
	ウシクサ族ススキ属	トキワの若い穂を食う ススキの根を陰干して月経不順に煎じて飲む ススキの穂を灰汁の中に2~3日入れて取り出して干して、飲用すると寝小便によい	トキワススキは日除けのミノを編む 茅葺屋根の材料にする 戦前は殆どの家が茅葺き家であった そのために、茅を地域ごとに育てて刈る場所(共有地、茅場)があった	ウシクサ族ススキ属
イチゴツナギ亜科			イネ科 イチゴツナギ ミソイチゴツナギ	
ネザサ節型		ササの実がなるとネズミが増え凶作になる	イネ科 ネザサ	
クマザサ属型		正月はこの笹を門松に飾る	イネ科 クマザサ	
サヤヌカグサ属			イネ科 サヤヌカグサ属	
シバ属			イネ科 シバ コウライシバ	
キビ属			イネ科 キビ	
シダ類	ヒカゲノカズラ属		ヒカゲノカズラ(サルノハカマ)は正月しめ縄とともに飾る 焼畑(こば)作りするとき、サルノコシカケのある所は根は入らん ヒカゲノカズラ(キツネノネゴザ)のする所にはヒノキを植える ヒカゲノカズラ(サルノコシカケ)のある所は痩せ地でスギを植えても太らん	ヒカゲノカズラ科 ヒカゲノカズラ
	ゼンマイ属	若葉が開いたオトコゼンマイは食べないが、まだ開かないオナゼンマイを食べる 若芽を食用にする	昔、綿を取って糸で絡めて蓆を作った 昔は綿を集めて布団(ゼンマイブトン)を作った 綿で袖無しを作る	ゼンマイ科 ゼンマイ
	イノモトソウ属	打ち身で腫れ、あるいは痛みが止まらない時、この草を黒焼きにした粉末と黒砂糖を入れ、水を少し加えてどろどろしたのを紙に延べて貼る		イノモトソウ科 イノモトソウ
	ミズワラビ属			ホウライシダ科 ミズワラビ属
	サンショウモ			サンショウモ科 サンショウモ属
	アカウキクサ属			アカウキクサ科 アカウキクサ属

(参考文献)

- 乙益正隆 1998 「熊本県植物方言と民俗」
 斉藤文治 1988 「身近な山野草のすべて」

第Ⅶ章 総括

第1節 遺物

(1) 土器

玉名平野条里跡・両迫間日渡遺跡は一部を除き、生業である水田層である。そもそも水田は生産地であって生活居住区でないため遺物の存在は極端に少ないが、氾濫等による流れ込みも多く、時代の特定は困難を極めた。時代によっては幾度も水田構築を行っており、これを体系的に俯瞰するのは整合性の課題がいつも付きまとった。よって中世・古代・古墳・弥生・縄文と大別せざるを得なかった。以上の条件から時期を特定できる遺物は稀で、井戸・土坑・土壇など条件に恵まれないと出土はなかった。この状況でミニチュア土器の出土は注目すべきことで、これは祭祀使用されたと思われる、民俗例から「川祭り」・「水口祭」等に使用されたものか、また彩色土器片も同様の意味をもつものだろう。最古となるのは(第41図)阿高式土器を伴う土坑(06-1区ST-01)で、これまで無遺物層と考えていた最下層の青灰色層に注目したが、浅い掘り込みであったために本来は検出層上からの可能性も否定できない。

(2) 金属器(第291図)

No. 432の雁又鏃などは武具であり水田とは関係が薄く、流れ込み遺物であるため近在に関与する他の性格を持つ遺跡の存在を窺わせる。No. 433・No. 434・No. 435は馬具で、これらは農耕に馬を使用したのではなく武士団使用のものか。02-II区の東側玉陵中学校付近は「馬場」との微小地名としてある。またこれら武士団所持として小柄(No. 443)・(No. 442)・綱(No. 444)・頭金(No. 445)などが挙げられる。No. 438・No. 439・No. 440・No. 441の喫煙具は近世以降の産物であろう。水田作業の合間に一服といったところであろうか。また小女子と思われる簪(No. 447)は髭の陰刻があることから小動物を模したものであろう。

(3) 銅銭(第292図)

唐から近世まで出土した。何れも遺構には伴わないが地鎮に使用されたか。また意図的に破銭(No. 454)されたものも儀礼等に関するものか。類例を待ちたい。宋銭が大半を占めているため中世期と銅銭の関係が存在しそうである。「近世の銅銭『寛永通宝』は鑄造時期と鑄造地により書風・材質・形状などに微妙な変化があり、江戸と近江坂本に鑄造開始以来、幾度の中断はあるものの幕末まで『寛永通宝』と同じ銭文の銭を全国各地で鑄造した。そのため各地にて多種多様な『寛永通宝』が存在することになった。」(日本出土銭総覧)

近世銅銭の総数は調査面積に対し少数であるが、水田生業作業に貨幣を持参することはないため調査においては拾得物という扱いか、または地鎮などの儀礼に伴うものか。

(4) 種実(第300・301図)

ここでは遺跡から多く出土した桃種を調査区に点描した。04-II区に集中し特に古墳・中世が顕著である。半湿田の土壌に桃の栽培を試みたとは考えにくく、儀礼に伴うものであろうか。「桃には邪気を払う力を持つ霊木とされ、実が多く成り花や葉の旺盛なさまから生命力を持つ根源として魔除けの力がある」と考えられている。また愛知県稲沢市尾張大国霊神社の夜^よ籬^{なおい}追神事では、厄年の神男を追い払うの際に、神職が

参列者に桃と柳の枝のつぶてを投げつけるという（日本民俗大辞典 2000）事例報告がある。この類例から水田の生産を高める願いが存在したか、重量の課題はあるが鳥払いの使用であろうか。今後も注意したい。また 05- I -1・2 区出土は同定を委託した。その結果は裸子植物 1 分類群と被子植物 16 分類と大別され、栽培種はスモモの核 3・モモの核 68・ヒョウタン類の種子が 1 計 72 個である。（第Ⅴ章 自然科学分析 種実）

また本遺跡から検出された花粉については、「科学分析・プラントオパールにおける草木参考」（表 17）に記載した。植物は食糧としての対象でもあるが現在の食ではその機会が少なくなった。本遺跡からの花粉分析と「熊本県植物方言」クリについてもその保存方法など興味深い。また薬草としての使用も多く、この様な事は永年の中で生み出されたのであろう。

以上のことは民俗例であるため、本遺跡との直接的な関係は微妙であるが参考として提示した。年間の調査地で四季を感じ多少疑問に思うのは、本遺跡は水田を主とする生活形態であるが、本来は農閑期等の食糧状況まで考慮しなければ暮らしの概念が想定できなかつたからである。一助として。

(5) 木器

① 網代（第 147 図 No. 137）

本遺跡から 1 点の出土例（04- II 区 ST-08）がある。2 種類の編み方で構成され底部と側部に大別できさうである。廃棄物の断片資料であるが通称「籠」であろう。中身の対象物も存在しなかつたためその用途は不明であるが、二本超え・二本潜・一本送が強固なためこれが底部に相当し、出土状態は反転している状況であろう。底部が緩やかな U 字型を呈しているため背負い籠・手籠等に該当するか。何れにせよ大型の籠ではない。

樹種同定

イネ科タケ亜科 (Subfam. Bambusoideae)

横断面は採取出来なかつた。放射断面、接射断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が桿軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から温暖、一部温帯に分布する。（吉田生物研究所）

② 杭

本遺跡では半湿田という土壌のため、畝形成・水路の確保のため多くの杭が使用され、出土した。材質はクリ材が大半を占め、一部、サイカチ（第 12 表 木製品観察表 No. 22）も存在した。

杭は山林に入り当地にて杭を作製し、水田に運び込むと考えるのが自然であろう。従ってその長さを含めたサイズは一定の規格性を持ち、また腐敗を防ぐため炭化も行われていた。杭にクリ材を多く使用していることは近隣にクリ林が存在していたことを窺わせ、またこれは重要な食生である。クリ果実保存については第Ⅵ章 植生を参照とされたい。

③ 鋤

本遺跡でも破片であるが 3 点の農工具（鋤・第 12 表 木製品観察表 No. 18・19・97）が出土した。05- I -1 区 SX-3・03- II 区 SX-07 での鋤片はこの時期に伴うもので、その規格に明確な規格性は見出せない。

これは時期差の課題ではなく使用目的によるものであろう。民具例の鋤にも多くの種類が存在し、これらはその土地の土壌・使用目的により多種多様である。この弥生期に多種多様なまでの鋤の存在についての肯定は困難であるが、あえて農工具の変遷を行うならば土壌・使用目的・開墾などの諸条件を思慮に入れなければならない。

④ 木槌

07-Ⅱ区 7b層検出のSX-43（第283図）については第Ⅳ章 第7節 不明 で述べた。槌として使用されたことが想定されるが、出土層と科学分析の年代測定科学分析の結果（放射性炭素年代測定の結果は2,980 ± 40年）により検出時より時期が遡る可能性が出てきた。第Ⅳ章 第4章 時期不明 で述べたように時期・使用目的についても今後の課題を残した結果になった。

(6) 投石（第294～299図）

弥生期・古墳期・中世期の調査で出土した。当初はこの丸石の存在に疑問を持ったが、流れ込みの小石としての認識しかなかった。これが顕著であるため取り上げ、保管しておいた。後日、山崎純男専門調査員のご教示より鳥払いの「投石」と判明した次第である。

材質の殆どは安山岩で河原より収集したものであろう。総数2,597点中、20～30gが最も多く、これは人が投げやすい重量である。調査区より採集したこの投石であるが、農事暦からは次の稲作準備に入るためにはこの投石は取り除かなければ田起こし等に不具合が生じるが、調査では原位置を保った状態の出土である。このことは休耕田と放棄地などの課題を提示する。

(7) 土錘（第293図）

断片的に出土した。全長4～5cm・幅1cmのD類が最も多く、また土錘の計算式（久保禎子 1997）に当てはめると、菊池川などの川漁で使用された刺網等の小規模漁業の可能性が高く、また制作は粘土塊を棒状の芯部に絡ませ形成後、焼成の過程となる簡易な制作法で行われる。本遺跡出土土錘は形成時の螺旋状のナゲ痕まで観察できる。この土錘は現代の漁具としても殆ど形態を変えず、熊本県南部では「イワ」と呼称し、市販・使用されている。作成・使用状態からの掲載をした。またこの掲載状態で人の動きも想像できる。

(8) 勾玉（No. 395）

08-Ⅰ区 4・5層調査区出土遺物である。近世から中世層にかけての包含層である。この勾玉については大坪志子専門調査員の見解は以下のとおり。

「やや縦長の勾玉状で頭部に刻みが入り、角（突起）が一本生えたような形態である。厚みがなく薄い板状の石材を加工しており、縄文時代後晩期の玉類に見られる形状。表裏面ともに割合平滑であるが研磨の痕跡が残り、腹部側・背部側部面には粗砥の状痕と陵が残る。仕上げの研磨の直前の段階か。

右図の面の孔周縁は玉ずれしたかのように陵がとれて凹み、右図の孔は陵が残る使用した状態でない。また穿孔は両側から行い回転痕が明瞭に残り、石材は薄緑色から緑色で、キラキラした細かい粒子が入り、

オレンジ色の粒、縞が僅かに入る。クロム白雲母と思われ、その中では青味がやや強い。」

蛍光分析の結果；クロム白雲母（福岡市埋蔵文化財センター）

(9) 足跡・他

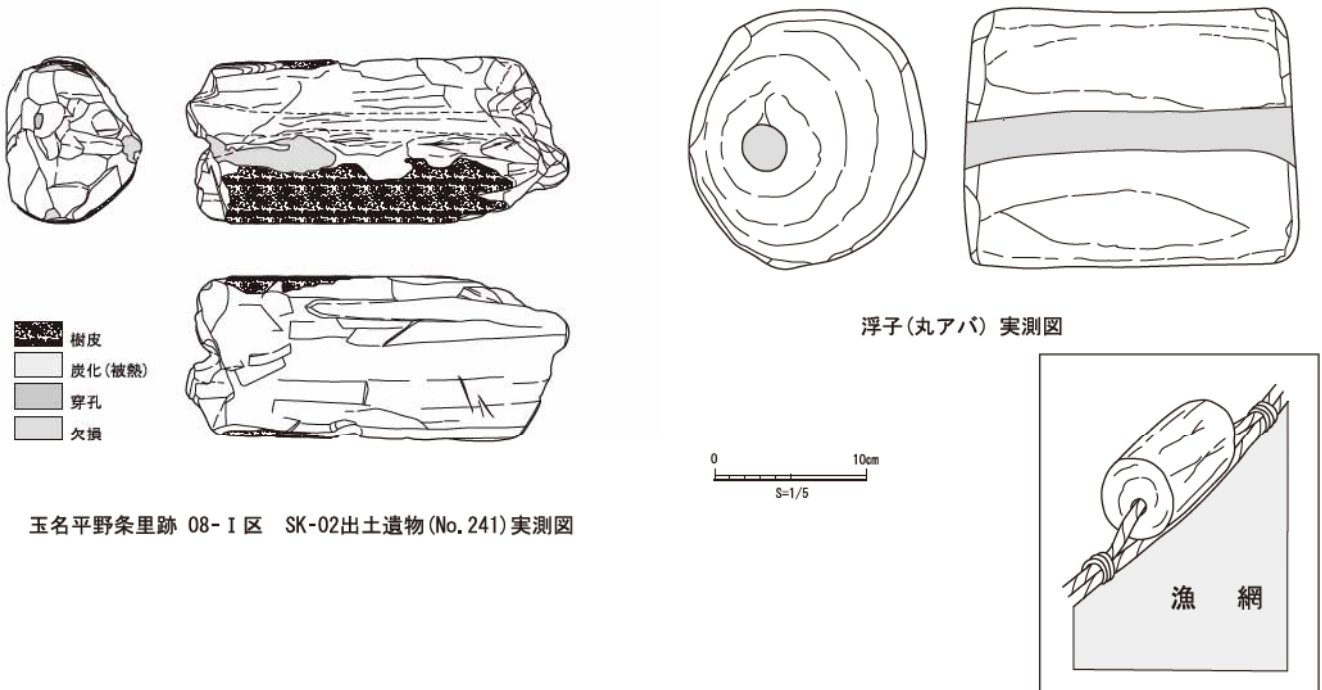
本遺跡では調査区に多くの足跡が検出された。これは遺構であり、また遺物とも言える。05- I 区の足跡は全て実測し、その中の数点は石膏取りも行った。足跡には大小があり明らかに水田には明らかに子どもが存在があった。水田作業の労働形態を窺い知ることも可能であったが、その余力は編集者にはなく、今後の機会を得たい。本来、水田の足跡は耕作深度に影響するため、これにより農耕具・土壌などの関係も考慮できよう。

08-1 区 ST-03 出土の遺物は鞆の羽口 (No. 361) で、これにより製鉄の断片資料であるが、製鉄が行われていたことを示唆する。鎌、金属製穂摘み具などの製作が行われていた可能性があるが、本遺跡から農耕具の出土はなかった。

使用不明木器

08-1 区 SK-03 No. 241 と「丸アバ」(第 302 図)

整理時に SK-03 No. 241 の木製品に孔が穿ってあるのに気付いた。木製品の風化は著しく孔が自然か人為に穿ったが判断が困難であり、またこの材質は椿である。この形態に酷似する民具として漁網の桐材浮子の「丸アバ」を提示した。この「丸アバ」は現在ではプラスチック製に素材変化しペンドルと呼称し市販・使用されている。



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02出土遺物 (No. 241) 実測図

第 302 図 SK-02 出土遺物 (No.241) と丸アバ

使用状況

第2節 結言

本遺跡は主に水田遺構であった。玉名平野の南北に細長くトレンチを設定したような調査であり、各時期の水田の検出に努めた。水田調査については各調査区にトレンチを設定し、分層にて水田層を確認した。

層位によっては数センチ単位で変化した。これは氾濫等による土砂の堆積によるものであり、これに耕作のための攪拌が加わる水田形成における一つの特徴があった（第3図 水田耕作概念図及び疑似畦畔概念図）。水田は灌水・停滞水（地下水）の作用によって、土壌が常に変化し畑地とは異なった特有の土壌状態であり、時代特定にも困難を呈し、洪水等で土積された埋土であるため層の上位・下位に注意を払い埋土中の遺物のピークを判断材料とした。

このような形成と粘質を含むため、水田には関係し薄い粘土採掘坑（07- V区 第278図）と想定されるなど粘性土を利用した痕跡も土壌性質を考える上で興味深い。

1 本遺跡の調査法

本遺跡は生産地である水田が主であったが、これまで述べてきたように幾層にも分層され、この状態で当初は水田層の把握が困難であった。トレンチにて断面観察を行い、床土と酸化土のセット関係が良好な条件で残されていればその可能性が高く、実際の調査時において平面・断面にて稲株痕や畦畔に恵まれると水田判定できるという調査法であった。しかし大半は「第Ⅲ章 第2節 基本土層 4 本遺跡における水田形成概略」で述べたように削平・氾濫などを受け良好な条件での検出は少なかったし、またどの層で水田が行われていたのか明確な確証が得られないまま調査を開始した。調査時に科学分析を依頼し花粉分量で水田耕作層を得られたことから、調査は以下の方法を採用した。

- (1) 調査区の開始時に先行トレンチを設定し分層を行い、これに科学分析を委託する。
- (2) 分析結果を受け、イネ花粉の多量な層を水田として想定し、この調査層のポイントとする。

これまでの調査方法とはやや異なり、自然科学分析を取り入れたことで調査が明確化したことは今後の水田調査の一つの方法としてここに提示しておきたい。

2 水田としての認識

本遺跡における水田としての条件は以下のように設定した。

- (1) 畝の検出
- (2) 酸化土・耕作土がセットであること

これが最大の条件であるが、このような事例は稀であり、特に削平された畝は平面では検出が困難であるため、断面分層にて畝の存在の確認も行った。

水田と湿地との区別は困難で、したがって畝等の水田関連遺構の検出に依るところが多い。

前述した「第3図 水田耕作概念図及び疑似畦畔概念図」の耕作土と酸化土のセット関係を提示したが、これに加筆すると耕作土（床土）は攪拌が顕著に見られる。水田という遺構は堆積と耕作の繰り返しであるため作土・酸化土がセットではなく、それぞれが単体で検出される場合もあった。また「投石」は鳥害対策であり、稲穂の実る頃はスズメ、田植え直後は白鷺が土中の虫を啄むため苗を倒すという。

さらに科学分析がこれを補強した。「1m 四方にイネの花粉が5,000個/g程度存在すると、水田稲作が行

われたと推定される。」(杉山 2000 年)と提示されている。また水田はイネ植生だけでなく、水田雑草の花粉検出を伴うことでさらに補強材料となる。本遺跡で検出された主な水田雑草は以下の通り。

草木類

- ・カヤツリグサ科 水辺に生育し畦畔の際に生えていることが多い。水田に伴って生育
- ・イボクサ属・ミズアオイ属 水生植物
- ・ミズワラビ属 水生植物
- ・ヒシ属・モ属 ある程度の水深のある場所に生育
- ・ガマ属・オモダカ属 水際、岸部に生育
- ・オオバコ 「人里植物」と呼ばれるもので、開けた明るい場所を好む。集落の縁に

植生

本木類

- ・ハンノキ属・クルミ属・サワクルミ属・ヤナギ属

水辺に好んで生育。特にクルミ属・サワクルミ属は台地や山の筋、崖のヘリ等 水のある場所を好む。

などが挙げられる。また、

「05- I -1 区の弥生期の水田は湿地帯であったと考えられるため、もともと水生植物が生育していると思われるが、人の手が入る事によって植生のバランスが崩れるという。耕作をしていない時期に元の状態に戻ろうとし、耕作するとバランスが崩れるという繰り返りで、水田の中に限れば生育に限りが出る。」(パリノ・サーヴェイ 辻本 崇夫 氏)との貴重な教示も頂いた。

また断面観察にて稲株と想定した縦長のシルト性の細長で湾曲ピットの痕跡が調査区によっては見られた。これは蟹などが土中に生育した痕跡で「生痕」と呼ばれるものである。これらも湿地帯での現象であり参考とされたい。

3 弥生後期後半の水田概念 (第 304 図)

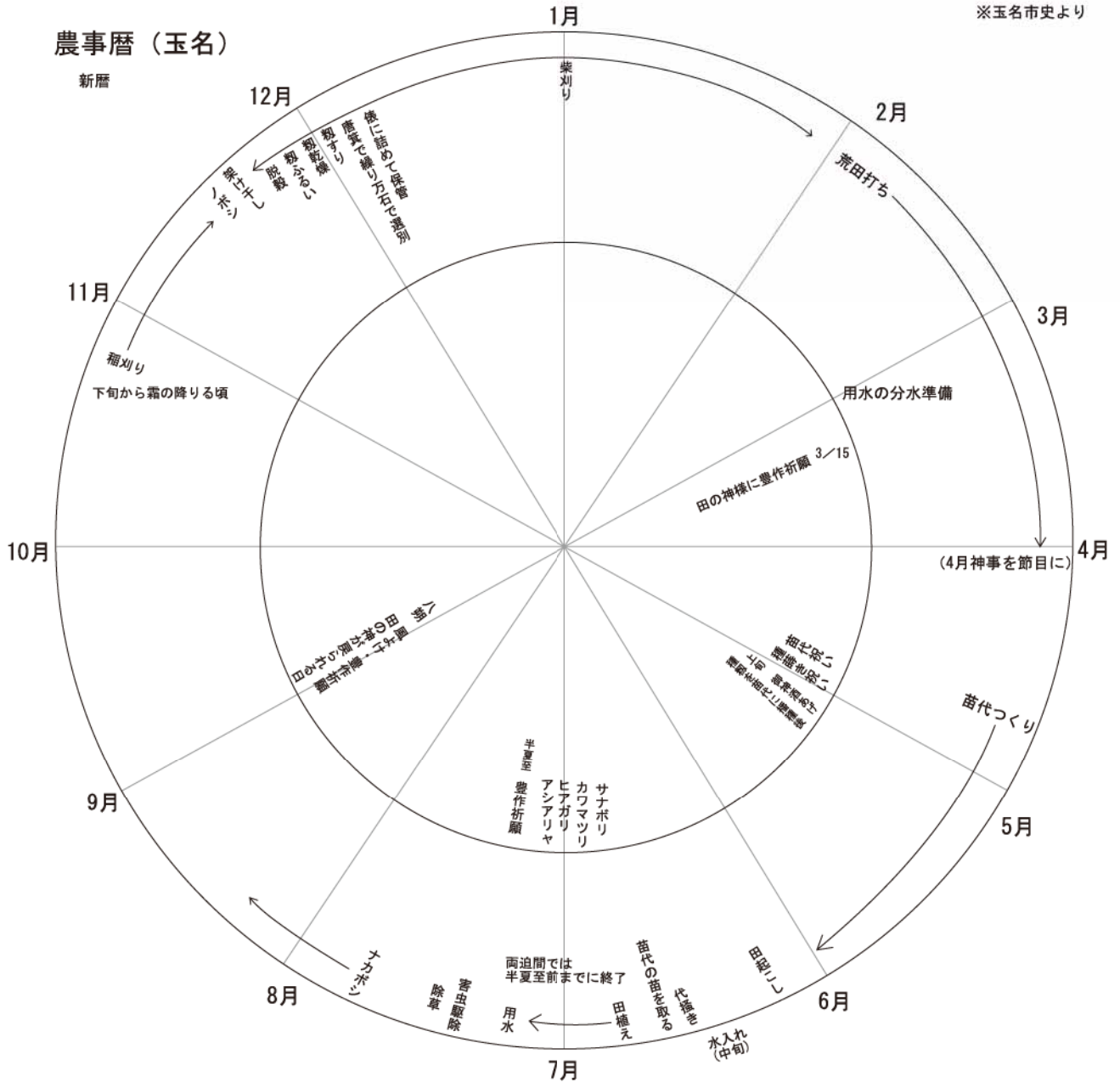
参考として、玉名地域の農事暦を提示した (第 303 図)。これは玉名市史の記述を図化したものである。この民俗事例が弥生期に相当するとは考えてはいないが、水田耕作には様々な作業が伴い、またこれに季節・儀礼が関与してくることを提示した。本遺跡での水田には水口が確認され (第 57 図)、水口は水田で水管理の重要な地点で、参考として天草の水口祭風景を掲載した (Ph. 10)。自然相手の生産には 願い があるため本遺跡での彩色土器などはこれに関与していると思われる。

大畦畔 (05- I -1 区 SX-03) を中心として 05-1-1・2 区を構成してみると、前述した大畦畔 (第 55 図) が水田と水供給地の境の機能を持つならば、北側の 05- I -2 区は花粉分析の結果より、ガマ属・サジオモダカ属・スブタ属・クロモ属等や比較的水深の深い場所に生育するヒシ属の水湿地生植物が検出されていることから沼地等の存在が想定され、それは溜井としての機能を有し、大畦畔の水口を通過し水田に水を潤すのであろう。地形測量からも北方から南方への下方傾斜である。

またこれに両迫間日渡遺跡 1 (亀田 2012) のⅧ層検出面を加えたのが第 306 図である。本遺跡で検出された大畦畔は北西軸に連続しているため、この大畦畔はこの時期の重要な位置を占めよう。大畦畔の存在は水田の存在を意味し、大規模な水田を構築したことが窺える。

※玉名市史より

農事暦（玉名）



種粍
 カマスや俵に入れてニワ（土間）の隅に保管
 選種の方法として、種粍を苗代田に播く前に
 塩水に漬けて浮き上がった粍を除去するやり方がある
 この方法は昭和になって普及

苗代
 水の便のよい、なるべく道端に面した水田の一部を選んで
 設けていた苗代田は固定
 溜田の多いところでは、畑に苗代を作ることもあり

用水
 両迫間あたりは、川に近いにも関わらずその川水を利用
 できなかったそれで石貫から水をもらっていた

稲刈り
 刈り取った後三日程は天日で乾燥

犁で地を整えかえす
 堆肥・緑肥も施す
 水を張って馬糞で掻く
 水は稲種直前に抜く
 代掻きした後、畝を立て、
 ナラシイタで表面を整えた後、播種

半夏至 豊作祈願
 苗をかまどに供える

春秋の彼岸 豊作祈願（北牟田）
 秋の彼岸 豊作祈願・彼岸籠り（石貫）

（大浜）収穫の開始 各家でオハツホ 新米を炊いて神仏に供える
 収穫を開始するとハツホマイリ 初穂と芋、かぼちゃの葉を持って外嶋宮にお参りに行く

水不足で田植えができないとき
 （立願寺）定野神社で太鼓をたたく
 （両迫間）消防団が各家の屋根に水をかけて回っていた
 家々では、甕やタライに水を入れて置いておき、それをかける

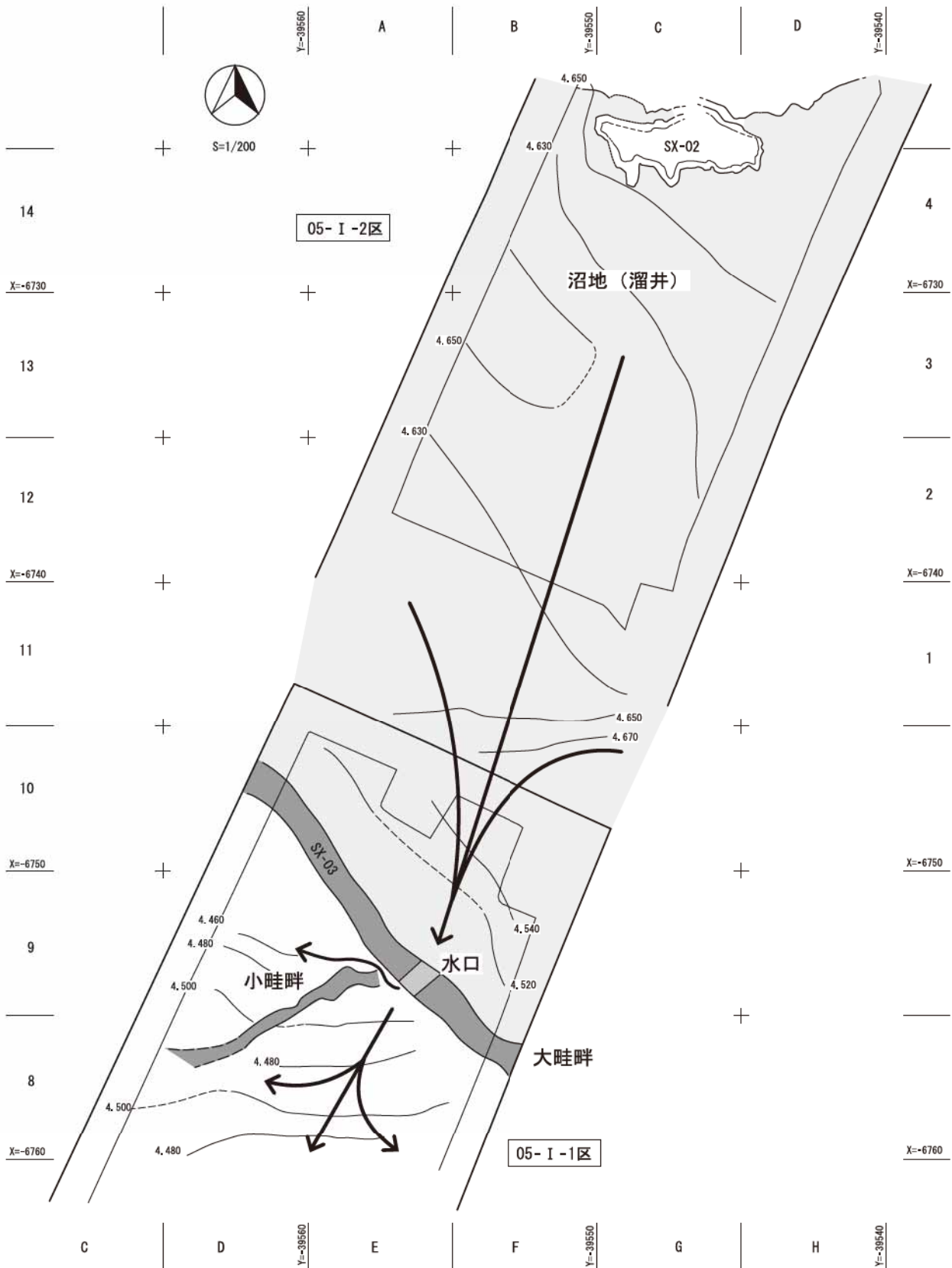
田植え後 サナホリ
 ムラの田植え完了後 カワマツリ
 人を雇った田植終了後 ヒアガリ
 ムラ全体の田植え完了後 アシアリヤ（足洗い）

ナカボシ
 穂が出る直前に発育を良くするために田の水を落とす

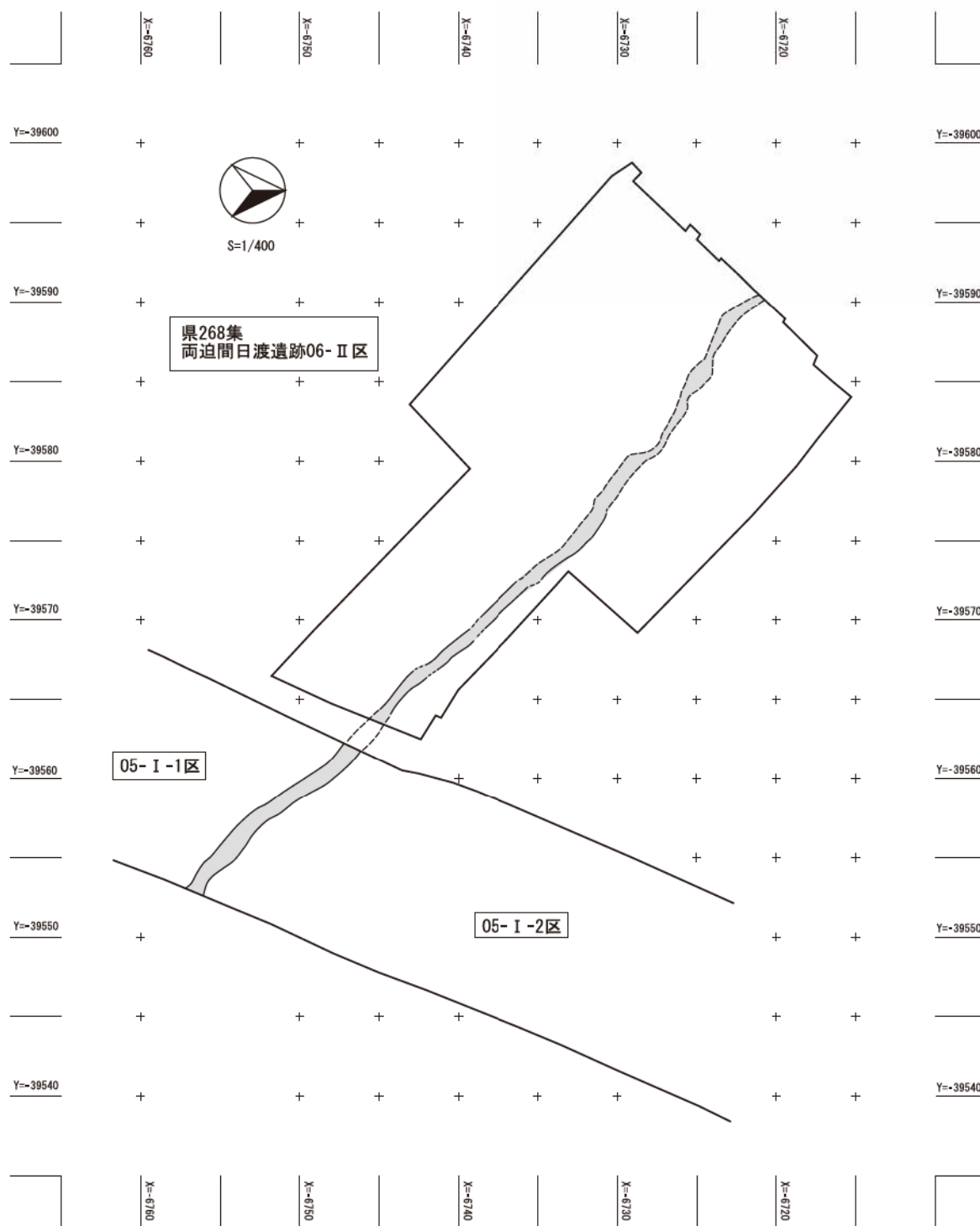
ノボシ
 刈った稲をそのまま田に広げて2~3日天日で干して乾燥させる

カケボシ（架け干し）
 稲を竿に掛けて干す

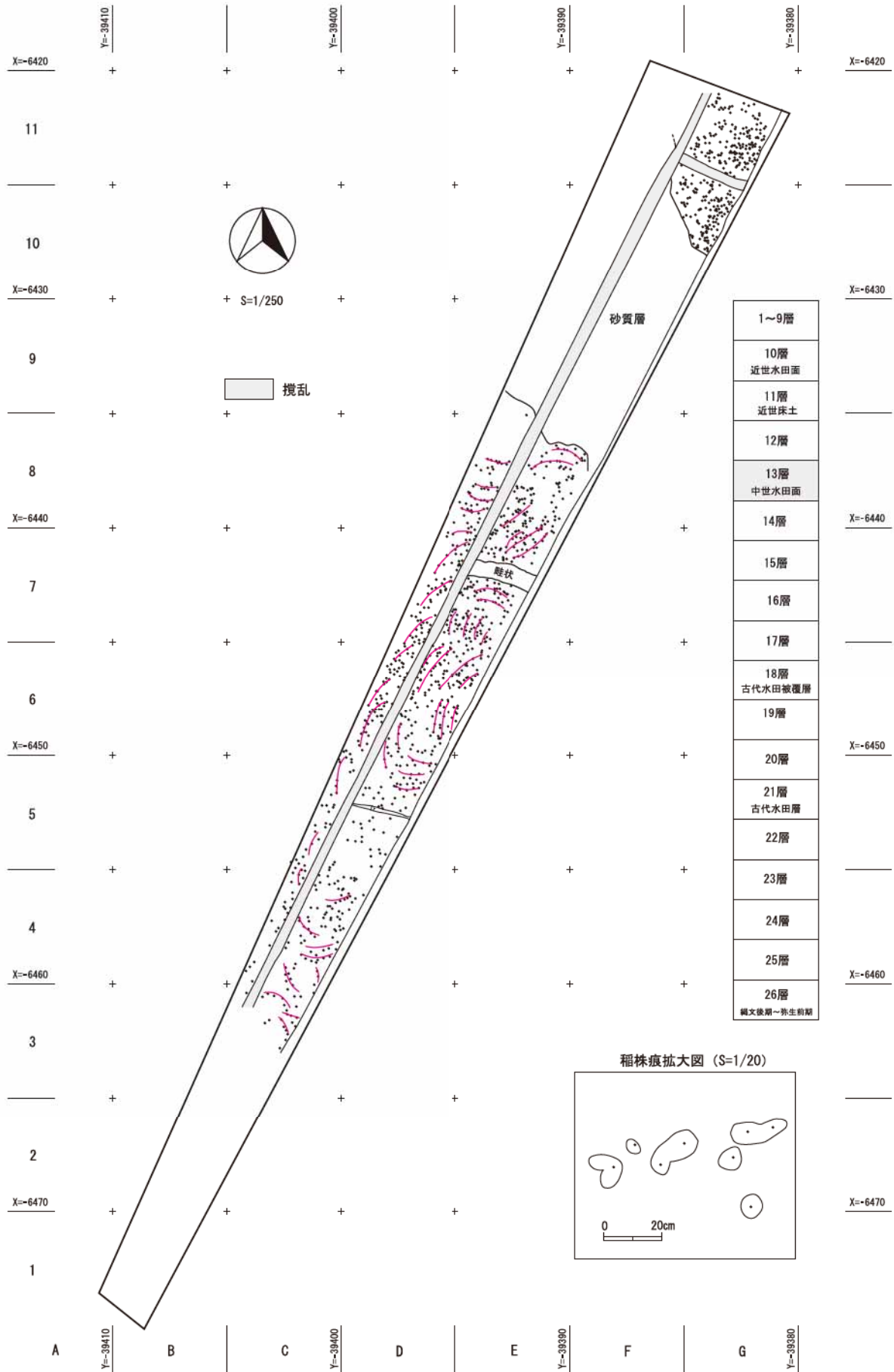
第 303 図 農事暦



第 304 図 両迫間日渡遺跡 05- I-1 区・2 区における水田概念図



第 305 図 両迫間日渡遺跡 05-I-1 区・2 区
及び両迫間日渡遺跡 1 (Ⅷ層) との整合性



第 306 図 玉名平野条里跡 02-I 区 13 層稻株痕実測図

もう一つ、注目したのは足跡群で、これは幾つかのグーピングができる（第 61 図）これに進行方向（足跡の向き）を加えた。この 05- I 区は氾濫により川砂で全体が覆われたため足跡の検出が可能であった。氾濫直前に水田に入り小畦畔を超え移動した光景を想定した。僅かに小規模稲株痕は検出されたが、イネとして判定が困難で、イネの成熟期の台風時期ではなく、この足跡は梅雨時期の出来事か。足跡の「土踏まず」は見事で、足横幅が広くよく歩くことに発達した足跡である（第 60 図）。

また中世期の水田であるが稲株の密集に簡素な線引きを試みた（第 303 図）。これは田植えの状況の想定であり、この結果、近年の升目状の田植え法の規則性は見当たらず、どちらかといえば放射状に近い状態である。これは田植え際、担当役割に関与するものか。何れにせよ稲株痕の検出により得られた事例である。

4 水田の広がり（第 307 図）

今回の調査を終え、報告書で主眼においたことのひとつに玉名平野における水田の広がりがあった。そのため水田の時代ごとに図化し、水田と認識された調査区に彩色し、その広がりを試みた。

これによると中央に巨大な流路が存在している。初期水田期に傾斜を改良し広域の水田区を構築するのは技術的に困難で、連続した小区画の水田であろう。「1 筆内の水深は均一でなければならず、10 cm 以上の差があつては稲は育たないと言われ、田に水を一定の深さで留める。すなわち灌水深を均平に保つことが必須の条件である。」（水田の考古学）従って本遺跡でも地形・水利条件の箇所部分的に水田を行い、古墳期に耕作技術の進歩により広がりをみせる。

古代は極端に少なく中世にほぼ全域に水田が展開する結果になった。時代ごとに技術が高度となり水田が広がるのが窺えるが古代に極端に少なることについて、以下の理由を挙げた。

水田耕作を放棄するという事は、古代に人々がこれまでの生産を大きく変えることであり、このことは考えにくく、耕作面が消失したと想定した。これには後述するが条里制を示唆する中世水田を広域に構築する大規模工事時に、かなりの労働力を投入して古代水田面を利用・改築したのであろう。この玉名平野の北方には弥生時代中期の永安寺遺跡・古墳時代初頭の柳町遺跡が立地することから、初期水田は谷水などを利用した山裾の湿地地帯の小規模水田から発生し、やがて菊池川護岸まで広がってゆくことになる。「現在も水田が作り続けられているような低地を発掘する場合には、地下に必ず過去の水田が何層か埋没していることを考慮に入れて調査にかからなければならない。」（水田の考古学）

これは水田調査の機会を与えられた調査員の結言でもある。

これまでの調査報告例から水田を営む人々の住居をふくめた生活域は古墳初頭の柳町遺跡が存在し、06- I 区付近までが連続した一つの稲作範囲であろうか。本調査では住居地群の検出がされなかったが各時代の生活空間・墓域など存在は可能性として当然であり、この玉名平野は農耕考古調査の宝庫であろう。

5 条里制について

「条里」というのは「条」と「里」とのことで「条」を横・「里」を縦との呼称と云われる古代の制であるが、玉名平野条里跡については、熊本県の条里（1977 隈 昭志 島津義昭 熊本県調査報告書 第 25 集）に N-22° -E の土地割が提示されている。これは置き換えると N-68° -W と同意である。

本遺跡の畝状遺構（第 214・228 図）の中世水田土地割は N-60° ~ 70-W の範疇で、熊本県の条里報告の

土地割とほぼ一致し、また水田区画も同様である。このことは中世期に大規模水田構築が行われたが、中世下層の06-Ⅰ区SX-11・13では方位は多少異なるが、その素地が存在していたことが窺え、時間を経てN-68°-Wの水田区画へと整備していったのであろう。

それは02-Ⅰ区(第185図)の畦畔に現わされるように近世まで継承され、ごく近年までその区画が存在したということになる。

この条里の成立をどこに求めるかについては、それを示唆する遺構として08-Ⅰ区にて検出されたSK-01・03(第249・252図)を提示する。何れも土壇墓で熟年男性の白骨が出土し、それぞれの遺構には供献遺物が存在し、「屋敷墓」の可能性が想定され、この「屋敷墓」と館に伴う領主級の遺構であることから、この玉名平野の条里に深く関与した人物との仮説を持つと、供献遺物から12C後半から13C前半に玉名平野は条里としての成立が想定できる。

6 地域の中での本遺跡

本遺跡の成果は本県初の弥生期水田の検出である。これまで各遺跡で弥生期の遺構、住居・墓域等の報告はなされているが、その生業跡については皆無であった。人々の生活の根底にある生業の発見の意義は大きい。また広義での玉名平野条里跡では古墳時代を中心とした「柳町遺跡Ⅰ・Ⅱ」の報告がありこの地点での生活基盤は本遺跡の古墳期水田地域に該当するのであろう。このことから玉名平野には弥生・古墳・古代・中世の各時代に住まいがあり埋葬地があり、そして生業地があったことのセット関係を今後、主眼視しなければ、考古学としての本質が問われないだろうか。

また玉名地域での水田開始期時期は「両迫間日渡遺跡 2009 玉名市教育委員会」にて弥生中期が指摘されている。本遺跡では縄文中期の遺構が検出され、流れ込み資料であるが縄文後晩期土器片が出土したことにより、本調査結果の広義に亘る「玉名平野条里跡」は現在の水田形成は中世期と想定し、それ以前は流路・微高地・谷部などの起伏のある地形であり、微高地には生活空間が存在し湿地帯は水田の生産地へと変化していくのであろう。

この玉名平野は有明海に近接しているため、海上ルートの一つを想定でき古閑前地区の天草式製塩土器の出土からでも当時の交易を窺い知る。水田に関しては現在において北部九州からの導入から、広義に捉えると初期水田技術は朝鮮半島経由から九州の海岸の良好な条件の湿地帯から展開していくことを想定し、このことから玉名平野は今後、水田開始時期をさらに遡る可能性を示唆し、また本県に於ける水田調査のさらなる成果に期待し、本報告書の結言として閉じたい。

参考文献

- 熊本県の条里 1977年 隈昭志・島津義昭 熊本県調査報告 第25集 熊本県教育委員会
- 両迫間日渡遺跡Ⅰ 2012年 亀田 学 熊本県文化財調査報告 第268集 熊本県教育委員会
- 両迫間日渡遺跡 2009年 荒木隆宏 玉名市文化財調査報告 第19集 玉名市教育委員会
- 柳町遺跡Ⅰ 2001年 高谷和生 熊本県文化財調査報告 第200集 熊本県教育委員会
- 柳町遺跡Ⅱ 2004年 坂田和弘 熊本県文化財調査報告 第218集 熊本県教育委員会
- 水田の考古学 1991年 工楽善通
- 条里制 1967年 落合重信
- 日本民俗大辞典 1999年 福田アジオ 他
- 木製品・かご 2005年 野田真弓 他 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 鳥取県埋蔵文化財センター
- 玉名市史・資料編3(自然・民俗) 1993年 玉名市役所
- 熊本県植物方言と民俗 1998年 乙益正隆
- 身近な山野草のすべて 1988年 斎藤文治
- 熊本県における中世前期の土師器について 1994年 美濃口雅朗 中近世土器の基礎研究 X
- 中世の出土銭 1994年 永井久美男 兵庫埋蔵銭調査会
- 日本出土銭総覧 1996年 永井久美男 兵庫埋蔵銭調査会
- 楠 ものと人間の文化史 151 2010年 矢野憲一・矢野高揚 財団法人法政大学出版局
- 木の実 ものと人間の文化史 47 1982年 松山利夫 財団法人法政大学出版局
- 日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究 2011年 国立歴史民俗博物館研究報告 第162集
- 菜畑内田遺跡(3) 2000年 三浦雄二 唐津市文化財調査報告書 第93集 唐津市教育委員会
- 安国寺遺跡 1989年 国東町文化財調査報告書 第4集 国東町教育委員会
- 板付 1976年 後藤直 他 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 上巻 本編 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(3) 1976年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第36集 福岡市教育委員会
- 板付遺跡調査概報 1979年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(6) 1980年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第57集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(8) 1982年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第83集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(15) 1989年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第210集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書(19) 1998年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第576集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書第20集 1999年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第601集 福岡市教育委員会
- 板付周辺遺跡調査報告書第22集 2001年 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第680集 福岡市教育委員会
- 曲金北遺跡(遺構編) 1996年 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第68集(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 日高遺跡 1882年(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 池ヶ谷遺跡Ⅰ(遺構編) 1992年 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第38集(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 研究紀要Ⅳ 水田調査の方法と研究 1993年(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 梅白遺跡 2003年 佐賀県文化財調査報告書 第154集 佐賀県教育委員会
- 水田跡の構造と理解 2005年 斎野裕彦 古代文化 57号
- 坂元A遺跡 坂元B遺跡 2006年 都城市文化財調査報告書第71集 都城市教育委員会



玉名平野条里跡 01-1・2区
SI-42と円形周溝状遺構



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43



玉名平野条里跡 01-1・2区 円形周溝状遺構



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-43



玉名平野条里跡 01- I -2区 縄文時代 (SI-42・43 円形周溝状遺構ほか) 遺構検出



玉名平野条里跡 01-3区 SI-164 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SI-162 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SI-166 竪穴建物



玉名平野条里跡 01-3区 SI-166 石器出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 東側遺構検出



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-02



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 3層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 NE → SW



玉名平野条里跡 01-1・2区 SE-31 4層 S → N



玉名平野条里跡 01-1・2区 SX-35 遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SI-52・153・全景



玉名平野条里跡 01-3区 SI-51 炭化物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SI-51 下層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-114・121 3層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況全景



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況全景



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 5層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 6層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 7層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 8層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 9層遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-1・2区 SI-15 埋土1層中央部遺物出土状況



玉名平野条里跡 01-4区 溝検出状況SD-203・204(701)ほか



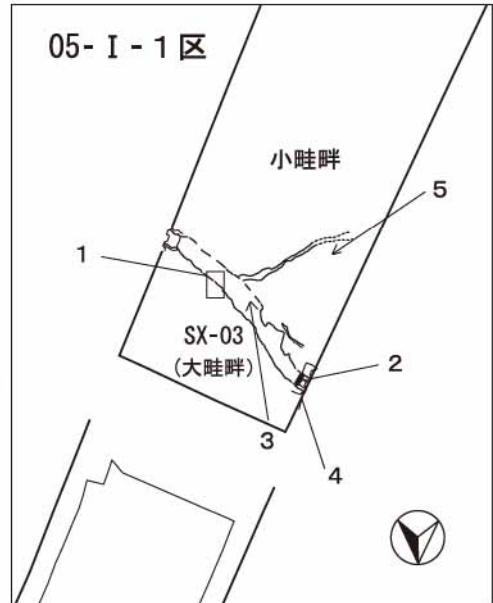
玉名平野条里跡 01-1・2区 SD-03・25・28・SI-02
 竪穴建物・溝・遺物出土状況



兩迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) 東側壁



兩迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔)



1



2



3



4



5

両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) 検出状況



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 人骨出土状況 (NW → SE)



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 人骨出土状況 (S → N)



玉名平野条里跡 04- I 区 SX-01 石埋納出土状況



両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-07 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 06- I 区 ST-01 縄文土器出土状況



玉名平野条里跡 07- II 区 木桶出土状況 (SE → NW)



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-02 遺物出土状況



玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 遺物出土状況



両迫間日渡遺跡 04- II 区 ST-08 検出状況時

みなくち
水口まつり (天草市河浦町今田)

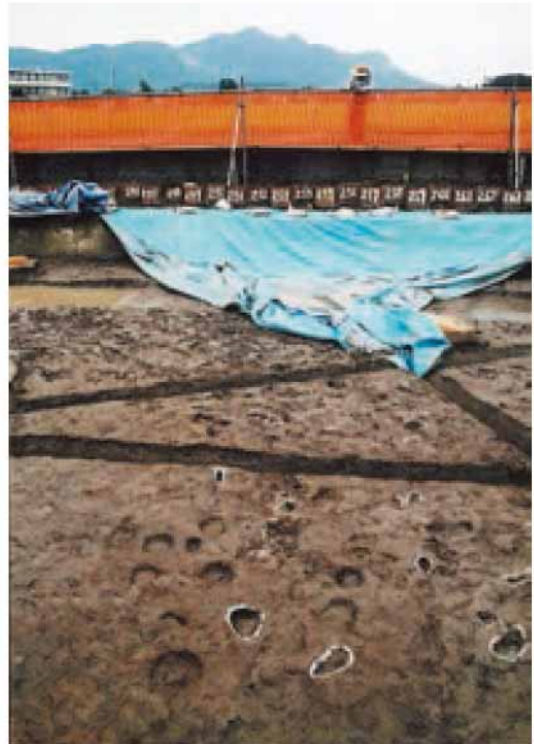
初田植えの日、苗を水口（水の取口）近くに仮植し、丈夫な稲に見たてた男茅三本に、それぞれ、米、塩、干魚を紙に包み田んぼに立てる。御神酒を注ぎ今年の豊作を田の神に祈願した後、田植えを始める。



参考 水口まつり (松本 教夫 1990 写真集 天草・人と暮らし)
撮影場所 天草市河浦町今田



両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 8 層 小蛙群検出状況



両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 中世水田足跡痕 (NW → SE)



両迫間日渡遺跡 06- I 区 SX-10 検出状況



玉名平野条里跡 07- V 区 粘土採掘坑検出状況



玉名の平城跡 (W → E)



玉名の平城跡 S19 遺物出土状況 (SE → NW)



両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔) (NE → SW)



両迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔)



兩迫間日渡遺跡 05- I -1 区 SX-03 (大畦畔)



兩迫間日渡遺跡 05- I -2 区 10b 層



玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 7層稲株痕検出状況



玉名平野条里跡 02-Ⅲ区 9層稲株痕検出状況



玉名平野条里跡 02- I 区 13 層稻株検出状況 (N → S)



両迫間日渡遺跡 05- II -1 区 4a 層足跡



玉名平野条里跡 02- II 区 溝 (大型溝)



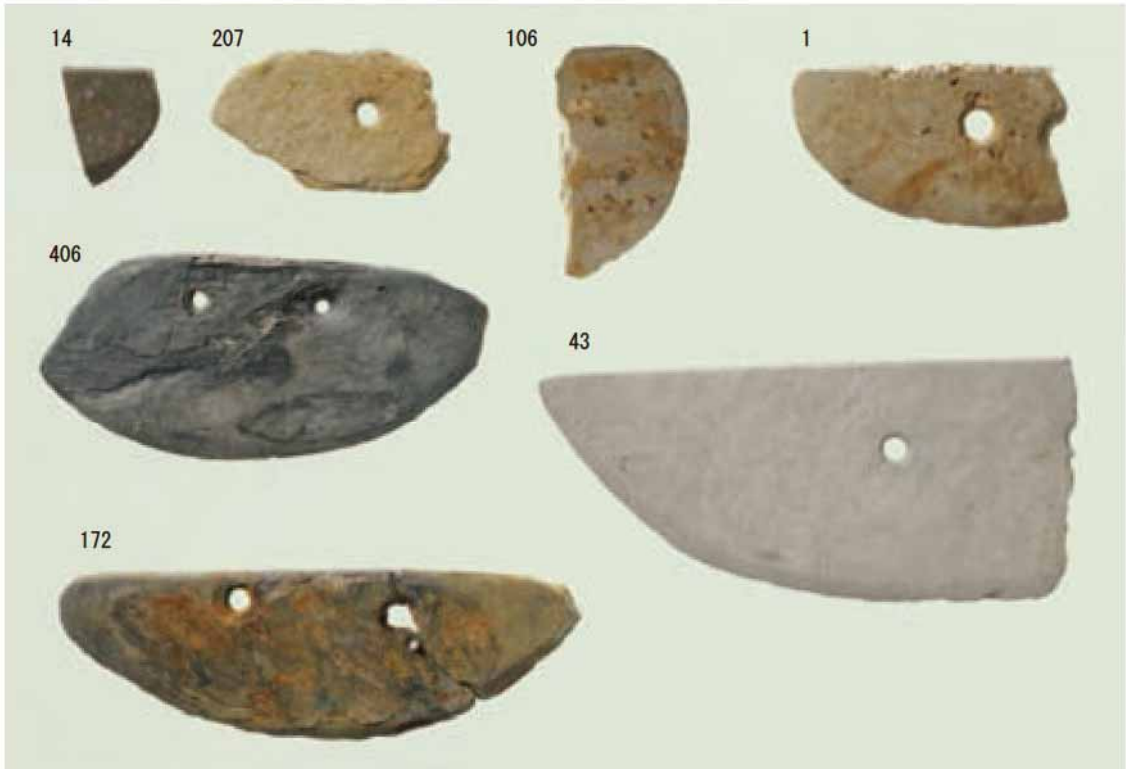
両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (NW → SE)



両迫間日渡遺跡 05- I -2 区 (SE → NW)



木 杭



石包丁



投石サンプル一覧



出土投石



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 出土土器



玉名平野条里跡 01-3区 SE-121 出土土器



玉名平野条里跡 01-3区 SE-115 出土土器



玉名平野条里跡 01-3区 SE-114 出土土器



両迫間日渡遺跡 04- II区 ST-08 出土土器



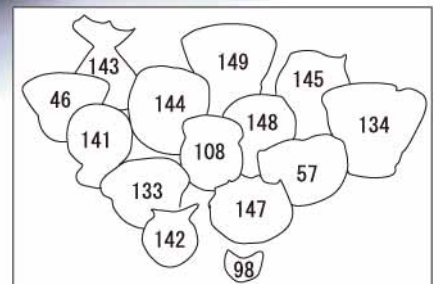
両迫間日渡遺跡 04- II区 ST-08 網代



小型丸底土器



ミニチュア土器



Ph. 21



両迫間日渡遺跡 04- II 区 SX-04 出土土器



玉名平野条里跡 01-2 区 SE-36 出土土器



両迫間日渡遺跡 05- I 区 金属製品 (小柄)



両迫間日渡遺跡 04- II 区 被熱塊



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-01 出土土器



玉名平野条里跡 08- I 区 SE-01 出土土器



玉名平野条里跡 08- I 区 SE-02・SD-03 出土土器



玉名平野条里跡 08- I 区 SE-03 出土土器



玉名平野条里跡 08- I 区 SK-03 出土土器



土錘・浮子



生活用具・石碓・權



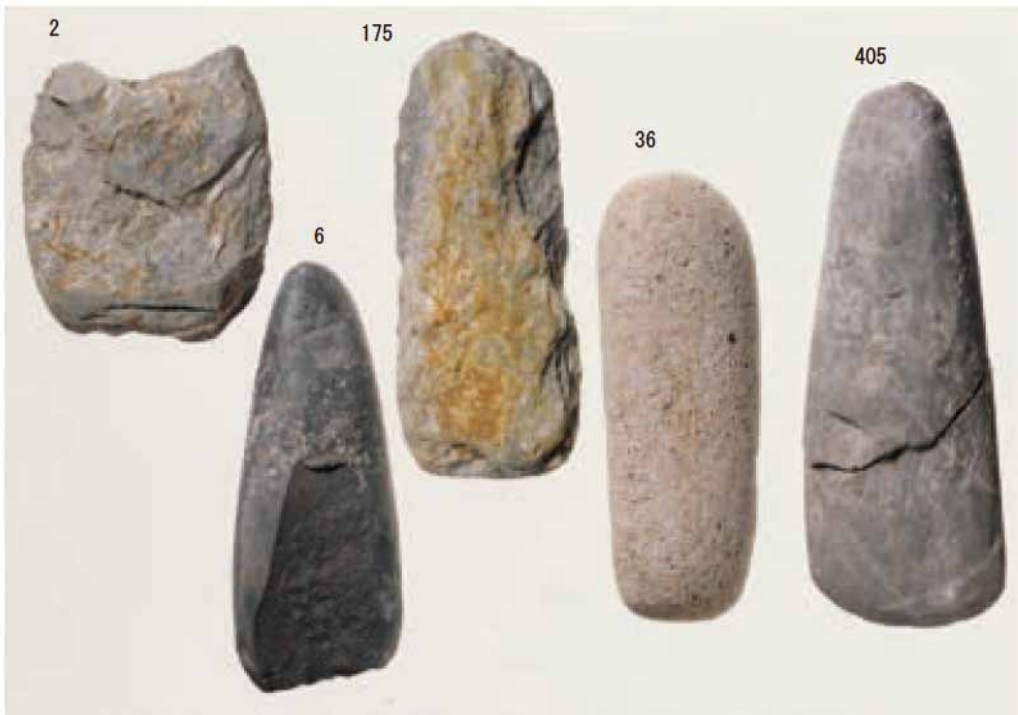
107

小型丸ノミ



55

磨製石斧



2

175

405

36

6

打製・磨製石斧・敲石



玉名平野条里跡 08- I 区
出土勾玉 (クロム白雲母)



装飾品 (勾玉・ガラス玉・管玉)



円形装飾品・土製勾玉・石剣・土製管玉・土玉

玉名の平城跡出土遺物



巡方（表）



巡方（裏）



ミニチュア土器



玉名平野条里跡 07- II (06- III) 区 SX-43 木樋（処理後）

編集後記

永い調査期間を要した遺跡であった。調査員も変動した。一度、現場を視察した時に、遺跡・調査について熱く語る亀田調査主査であったが、失礼ながら半分も理解出来なかった。そこを引き継ぐとは思ってもいなかったからであろう。

漁村育ちの私の水田調査は「陸に上がった河童」状態で、ことある毎に作業員さんに「田んぼ」について聞いていた。足跡検出の際は、耕す深度に足が入り込む事など初歩的なことから教示頂いた。鉄板矢板に囲まれ、調査深度が増すたびに夏期調査時の体感温度は凄まじく、現場作業員の方々は無口となり調査員は帰宅しても暫くは降車できないほど疲労した。今では「思い入れ」という形に昇華している。

整理作業では水田流れ込みの土器小片を粘り強く整理をされた。有り難いことで、調査・整理とも環境には恵まれたことに心から感謝の意を表したい。主査の能力不足は認めざるを得ないが、今では水田に出会うとこれを見つめ、食事を有り難くいただくようになったことは、私の財産になった。

表紙に足跡を掲載した。現場で石膏取りをしたその一つである。汗を流し生活をする光景が私には映る。それは私も含めて、精神的な何かを失ったとを感じるからである。この足跡は考古学上の足跡であるが、これを「未来への足跡」として、これからの指針としたい。

(山下 記)

現場作業員

荒木富士子 伊予和来子 宇野信子 坂崎和仁 坂田ツル子 嶋田千恵子 礮守タネ子 寺田トミ子 西村テルヨ 藤井晴美 藤井メイ子 藤村良一 三嶋邦子 雪野弘行 大西ミツ子 志水静喜 寺田智子 西川弘子 西嶋ヨシエ 西村ミヨ子 平川英二 前村国博 村上勇二 井上厚 宮本善治 星子一美 樫木祐人 中川克徳 植田富代 植田夏代 植田美知男 木本行正 境エミ子 高野美智代 田中スミヨ 田中良一 宮尾孝子 山田恵子 米岡小雪 古城明憲 坂本 緑 友田とをる 中村初美 西田京子 藤岡吉博 宗村正孝 本山千代子 笹木秀利 高村洋美 木村節子 村上直子 村上久美子 川本暁美 林 新子 小山恵子 池田雅世 徳永智実 大森ツヤ子 岡田道子 五郎丸美智子 境 昭一 西由紀子 西嶋重子 西村清美 古川佐和子 堀内一正 松嶋克也 三次佳代子 宮本知恵子 荒木義武 北田テイ子 国武勝代 永松サヤカ 島田トヨミ 濱田勝也 濱地和代 松山美穂子 坪井義武 澤田弘行 荒木康利 高崎ハルコ 道口真由美 吉川ゆかり 吉田ムツ子 田上俊子 堀田祐子 北嶋百合子 高津千尋 新町加代子 村上勝也 倉田 昇 三森敏子 東信子 岡本博子 石元孝行 石原紀久代 村上常雄 尾浦公治 飯塚千恵美 村上美枝子 今村東亜子 三嶋賀代子 野田尋美 吉田祐子 権藤 功 佐々木功 坂崎征子 福田ツヨ子 白木直子 澤田智子 紫尾小百合 田上由美子 野添ゆかり 村上美香 増田正隆 梅林将旨 北崎 純 戸上 司 荒木武俊 松村健治 古川るみ子 立野和彦 武田昭男 木下洋一 谷口敬一 谷口洋介 廣田親男 松村鈴子 伊藤友美子 飯塚早子 浦田好子 大森 久 柏木愛矢乃 杉本美智子 鈴木洋子 竹熊健志 中林静代 中村孝光 西川ミツ子 藤田恭平 星野哲也 松本 崇 松本千夏子 三島文子 宮本優子 村上倉子 麻里山千恵子 毛利真吾 田中美子 西村由美子 明石由紀美 赤松みき 石川貴保 石元寿美子 井芹和美 伊藤幸子 内田祐子 有働静香 浦島ゆみこ 榎本ミチヨ 岡本喜代子 新町夏海 高本留美子 竹志田美奈子 雪野ミチ子

整理作業員

境美恵子 青木美代子 藤田繁子 井上裕美 古閑満代 富田知子 柴田クミ子 一野幸枝 清田幸恵 紫垣
博子 野口理絵 青山玲子 村田昭恵 颯々野ふみ 甲斐啓子 濱崎清子 園田智子 田中洋子 丸山 勉 畑
島明美 内村尚美



報告書抄録

ふりがな	たまなへいやじょうりあと3・りょうはざまひわたいせき2・たまなのひらじょうあと							
書名	玉名平野条里跡3・両迫間日渡遺跡2・玉名の平城跡							
副書名	県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	山下義満							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たまなへいやじょうりあと 玉名平野条里跡 りょうはざまひわたいせき 両迫間日渡遺跡	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 たまな りょうきはざ 玉名・両迫間	43 206	483 138	32° 56'	130° 34'	2001年 5月1日～ 2009年 3月30日	約18,106㎡	県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査
たまな ひらじょうあと 玉名の平城跡	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 たまなあざひらじょう 玉名字平城		048	32° 57'	130° 35'	2003年 10月7日～ 2004年 2月4日	約2,200㎡	県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
玉名平野条里跡 両迫間日渡遺跡 玉名の平城跡	生産	弥生 古墳 古代 中世	水田 住居 堀立柱建物	弥生土器 土師器 金属器				
要約	<p>玉名平野条里跡という広範囲の遺跡に両迫間日渡遺跡は包まれたように位置し、調査の結果、両遺跡は同一の性格を持つ遺跡である。これらの遺跡は生産遺跡で水田遺構であった。調査時点で本県初の弥生期敷粗朶技法を用いた大畦畔を伴う水田が見つかったことである。またこれに伴う足跡の検出もあり当時の水田状況に恵まれた。また本遺跡における水田は弥生期から現代まで継続している。この遺跡は「条里」として周知の遺跡であり、この条里制の成立を中世期に想定した。</p> <p>玉名の平城跡は周知の中世城であるが本調査の結果、全体は後世の削平を受け、明確な廓などの検出は困難であったが堀立柱建物・柵列、中世輸入磁器などから中世期の山城であろうが、本調査は開発工事の部分的な範囲であり詳細調査を今後、求められる。</p>							

熊本県文化財調査報告 第299集

玉名平野条里跡3・両迫間日渡遺跡2
玉名の平城跡

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
県道6号(玉名立花線)拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査

平成26年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 株式会社 大和印刷所

〒861-8031 熊本市東区戸島町920-11

発 行 者：熊本県教育委員会
所 属：教育総務局文化課
発行年度：平成 25 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 299 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 玉名平野条里跡 両迫間日渡遺跡 玉名の平城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>